にわか巫女さん異世界道中記

如月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
にわか巫女さん異世界道中記

【Ｎコード】
Ｎ５４１６Ｏ

【作者名】
如月

【あらすじ】
この話は、ちょっとオタなバイト巫女さんが、修行と称してチートな先輩にあちこちの異世界へ放り込まれる、クロスオーバー風味のオカルトコメディです。いわゆるひとつのオリ主もの。マイペースな自称「一般人」の、異世界トリップ道中記、まずはリリなの世界から。なお、彼女のオトモとして、どっかのプレ闇の帝王（蛇寮の万年主席）と、固有結界持ちの赤い弓兵を混入。
基本はゆるゆるですが、ネタバレ、ご都合主義や原作改変、ところによっては捏造設定や微グロ、微エロな描写も出てくる予定。つい

でにオリ主至上だったり。あとエミヤシロウはチート待遇。お嫌な方は、ブラウザバックぷりーず。かるく読み流すくらいのノリでどうぞ。聖杯戦争編、始まりました。ただしカオス。

※アンチルイズ傾向があります。

※注意書きと簡単な説明（ネタバレ含む）

＜＜はじめに

この話は、二次創作を読むのが好きな書き手が、かるい気持ちで書き綴ったネタ的な物語です。

誤字脱字などのツッコミは謹んでお受けしますが、文章の拙さや、ネタや設定のいい加減さ、捏造っぷりなどについての批判は、基本的にスルーさせていただきますので、ご了承ください。

ときどきご指摘を頂く、番外編の唐突さについても同様です。

書き手が本編に詰まったりしたときの気分転換や、ストックしていたものから思いつくままに番外編を突っ込んでいます。

物語の整合性も、わりと投げっぱなしジャーマンです。

書き手は、あくまで楽しみのために書いています。

読み手さまにも、暇つぶし程度に楽しんでいただければ幸いです。

感想をいただくと、更新ペースに変化がみられるかもしれません。

また、このページの情報は、不定期に更新されます。

＜＜ストーリーについて

ジャンルとしては、いちおう異世界トリップものです。

のんきなオリ主が、霊能者であるチートな先輩に「修行」と称して、さまざまな世界へ放り込まれます。

オトモは、Ｆａｔｅのアーチャーと、ハリポタのリドル。主人公無双ではなく、むしろ従者無双の方向です。

特にエミヤシロウはチート待遇。のちのちハーレム色やオリ主の愛され傾向もプラスされます。
総じて、オリ主一行至上主義と思っていただければ。

初めはリリなの世界に放り込まれます。
その後、別の世界に行ったり、場合によっては、同設定で、別シリーズが展開する可能性もあります。
たまに企画ものや思いつきでＩＦネタを仕込んだりすることもあります。

無造作に、色々なジャンルのクロスネタが混入されることがあります。生温かい目で見守ってやってください。

＜＜取り扱いジャンル（ネタ含む）

リリなの／Ｆａｔｅ／ハリポタ／最遊記／ＧＳ美神　極楽大作戦！！／ＢＬＥＡＣＨ／ネギま／ゼロの使い魔／ＨｘＨ／うしおととら／ぬらりひょんの孫／絶対可憐チルドレン／八雲立つ／ＫＡＴＡＮＡ／武装錬金／魔界医師メフィスト／南国少年パプワくん（ＰＡＰＵＷＡ）／ポヨポヨ観察日記／スレイヤーズ
（２０１１／１１／１２／現在）

また、よそさまの二次創作とのコラボ要素もあります（作者さまの許可済み）。

▼

「Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ・Ｕｎｄｅｒｓｅａ　Ｔｓｕｋｉｎｏｗａ」（雷雨さま）

＜＜現在メイン

リリなの／ゼロ魔／Ｆａｔｅ

（２０１１／１１／１２／更新）

◆一部アンチ色を含むもの（必読）

この話には、原作のキャラや勢力について、アンチ色の含まれる表現・文章が存在します。

▼

ネギま：ネギ・立派な魔法使い　アンチ
リリなの：時空管理局　ややアンチ
ゼロ魔：ルイズ　アンチ

（２０１０／１１／２７／更新）

ここから先は、ネタバレを含んだ補足になります。
字数制限の問題がありましたので、もう少しだけ付け足すことにしたものです。

▼

＊ネギまのアンチ色について（一部、独自設定によるものです）
オリ主は、関東魔法教会に対して、好意的に見ることのできない

立場を持っています。
　理由としては、
・アルバイトの取引先や友人・知人の職業が、一部の魔法使いの行動によって被害・迷惑を受けている。
・麻帆良の魔法使いと出会う前に、バイト先の上司のツテから、「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」たちの問題行動をまとめた書類を資料として読んでいる。
　などが挙げられます。
　感情的なものではなく、職業意識からくる忌避感です。やっかいごとあつかいですね。

＊リリなののアンチ色について（一部、独自設定によるものです）
　オリ主は、時空管理局に対して、不信感を抱いています。
　理由としては、
・居候先である、プレシアたちともども、命を狙われた。
・管理局の上層部が企業と癒着して、プレシアに冤罪をかけようとした。
・事故の原因となった魔力炉の、稼動許可を出した責任をうやむやにごまかした。
　などが挙げられます。
　個人的な事情と、感情からくる不信感が原因です。

＊ゼロ魔のアンチ色について
　オリ主は、ルイズに対する憤りと、トリステインの魔法使い（メイジ）に対しての隔意を抱いています。
　理由としては、
・初対面で、ルイズにリドル（黒猫バージョン）を攫われそうになった。
・リドルがオリ主の使い魔だと知った後も、主人であるオリ主に謝罪がない。

・そのことについて、見ていたコルベールから、ルイズに対しての注意も、オリ主に対する謝罪もない。
・コルベールから事情を聞いた、オールド・オスマンも、コルベールと同様に、謝罪も何もない。
などが挙げられます。
こちらは、ほぼ感情からくる嫌悪と忌避感になります。

なるべく、無理のない程度のアンチ色と理由も描くつもりですが、ご覧になっている途中で不愉快になられた場合は、読むのをお止めになってください。
なお、原作に対する悪意はありません。

＃０１　だっていつものことだもの－主人公のアルバイト－

「ここ、どこだと思います？」
「さてな」
「とりあえず、その人間に訊いてみればいいんじゃないかな」
答えてくれたのは、まっかなコートの英霊さんと、まっくろ毛皮のルビーアイにゃんこ。
七地七季、きょうもきょうとて、スーダラ修行ぶらり旅、始まります。

＃０１　だっていつものことだもの－主人公のアルバイト－

七地七季、探偵さ！
ごめんなさい、嘘です。巫女さんです。
といっても、私はバイトのにわか巫女。霊感ないです。視えません。出てきてもらわないと（顕在化ってやつね）。
話はちょっとさかのぼり、数時間前のことを振り返りませう。
「おはようございます～」
ざりざりと玉砂利を踏みしめて、社務所の窓からごあいさつ。いつもの出勤風景です。
ふだんと違うことといえば、たいてい放課後の夕暮れが背景のところ、きょうは休日なので朝の爽やかな青空をしょってるあたり。
「おはよぉ、ナナちゃん～」
眠たげなアニメ声とともに顔を出したのは、ふわふわ栗毛の美少女さん。夏でもきっちり着込んだ白い上着に、ここからじゃ見えな

いけれど、紅い袴を着こなしている、ひとつ年上の先輩です。
「まだ眠いですか？」
「ん～」
目元をぐしぐしこすりながら、先輩は、なんともいえない返事をくれます。
まあ、ただいま朝の八時。早朝から叩き起こされてのお勤めは、なかなか大変なことでしょう。幸いにも参拝者はいませんし、先輩の起床時間は、たしか五時のはず。宵っ張りの彼女には辛いでしょう。
私と違って、彼女はこの神社の住み込みもいいところ。やらねばならないことが多い、本物の巫女さんは大変ですね。
もっとも、先輩も私と同じく、学生の身ではありますが。
同じ夜行性の身の上としては、大いに同情を誘われるわけです。
「着替えたら交代しますから。そしたら本殿で寝てていいですよ」
「わかった～」
うにゃうにゃと寝ぼけた猫のような声でお見送りを受けつつ、私は社務所の裏手にゴー。そちらから建物に入って、いつもの巫女服に着替えるのです。
……言っておきますが、本殿はお昼寝（朝寝？）するための場所ではありませんので、あしからず。
この神社は、よそさまとはちょっと違っているのです。主にさっきの先輩の扱いとか。
さてさて。ちょっと巷（ちまた）では見ない、まっくろな巫女服に袖を通して、ほとんど、このバイトのためといっても過言ではない、長く伸ばした髪をひとくくり。
ぱちりと手を打ち合わせて、社務所の神棚にもご挨拶。
「せんぱーい、もういいですよー」
お守りやお札などを授与する窓口に、ちょこんと座ってスタンバイ。
と、うっつらうっつらしていた先輩が、とろんとした琥珀の目で

こちらを見てきた。
「ん……？
あ、そーだ。ナナちゃん来たら、呼ぶよーにって、ミカちゃんに言われてたんだった」
「はい？」

#01　だっていつものことだもの－主人公のアルバイト－（後書き）

あとがき

＞携帯でも読みやすいように、短めに区切ることにしました。

リリなのキャラが登場するまでに、数話かかると思います。

#02　だっていつものことだもの－主人公の第一歩－

ところ変わって、神門神社の本殿。

ただいま正面に座っているのは、この神門（みかど）神社の跡取り――そして神主代理――神門汐（みかどうしお）さんであります。

付け加えると、先輩のイトコでお世話役でもある、執事スキル持ちの方だったり。神主さんだけど。

いやまあ一ケタ台の年齢から、ずっと幼なじみの世話してれば、そうなりますよね。私の周囲にも、似たような世話焼きさんがいます。過保護ともいいますが。

「はよ。七地（後輩）」

この人が私を「七地（後輩）」と呼ぶのは仕様です。この神社にはもうひとり、私のイトコがバイトしているので、区別をつけるためにこんな呼び方をしています。

ちなみにあちらは「七地（兄）」です。兄妹ではないし、そもそも同い年なんだけれど、どちらかといえば、あちらが保護者ポジションなもんで。

「おはようございます、神門さん」

若白髪の神主さんに軽く頭を下げる私も、板の間に正座。夏だからいいですけど、これ冬だと厳しいんですよね。ちょっとしたお仕置きになってしまいます。

さておき。

「修行ですか」

「修行だな」

「修行だねー」

三者三様。けれども、意味合い的には同じ言葉が飛び出しました。

神門さんの、端正なお顔の隣で、まだ眠たげな先輩の美少女顔が、

ほえほえ笑っています。
　可愛いんだけどなぁ。中身は時々、猛獣ですからねぇ。私の中では、怒らせてはいけないひと、ナンバーワンです。怒らせると、もれなく祟りもついてきます。さすが龍神の嫁（認定）。
「今回は神様系ですか？」
「ううん。異世界系」
　はたから聞くと電波ちっくな会話も、いつものことです。
　神様系ってのは、ようするに、神様のお手伝いをして、徳（ポイント）を稼ぐこと。
　異世界系ってのは、よその世界にお邪魔して、これまた徳（ポイント）を稼ぐこと。
　神使（しんし）である私は、そうやって徳を積んで、霊格を地道に上げていく必要があるのです。それがいわゆる「修行」というわけで。
　仙人でいうところの「クンフーを積む」っていうのと、ほとんど同義ですね。蛇足ですけど。
「まあ、最低限の装備は整えてやったから」
　小首をかしげる私と、ふるふるかぶりを振る先輩の横から、神門さんが、どん、と小山ほどの荷物を押し出します。
　そのレパートリーは幅広く、わら束から飲料水のペットボトル、夏服はおろか冬服やコスプレ衣装までと、多岐にわたっています。どさくさにまぎれて、わら人形まであるんですけど。
　使えということですか。そうですか。
「うい。らじゃりました」
　私は、そちらへにじり寄ると、ちゃっちゃとその荷物たちを、巫女服の袖口に押し込んだ。
　ツッコんじゃいけないのです。これは、「そういうもの」なので。
「終わったか？」
「終わりました」
　腕組みしたまま端座する美青年神主さんに、ふてぶてしくも親しみのある笑顔で問いかけられ、こっくりうなずくこと一回。

じじじじ、とジッパーを下ろす音がします。
そちらへ顔を向ければ、栗毛の美少女巫女さんが、虚空にできたジッパー（二メートルくらい）を開けていて。
「んじゃあ、ナナちゃん」
にっこり。がっしり。
まっくろ巫女服の襟首を、私は猫の子よろしくひっつかまれ。
「いってこーい！」
そぉい！
そんなかけごえともども、先輩に、虚空のジッパーが開いた暗黒めがけて、ちからいっぱいポイ投げされたのでした。
毎度思うんですけど、先輩って力持ちですよね。
気のせいか、私の影と、右肩の後ろあたりから、声にならない悲鳴が聞こえてきたような気もしますが……まあ、大事ないでしょう。
だっていつものことだもの。

#０２　だっていつものことだもの－主人公の第一歩－（後書き）

あとがき

＞そんなわけで、女子高生＆巫女さんな主人公です。

ボケ＆ツッコミ＆スルーの三種の神器と、チートっぽい使い魔を相棒に、異世界トリップ。

かっとび過ぎる知り合いに囲まれているため、あくまで自分を「一般人」というカテゴリに置いています。

……本当かどうかは、さて置いて。

＃０３　黒猫の回想ー闇の記憶ー

僕は黒猫である。名前はリドル。異論は認めない。
現在、ナナキの使い魔として、彼女に従う僕だが、こうなるまでには紆余曲折……は、あまりないな。
かわりに、けっこうな理不尽に遭遇して、いまに至る。
どういう理不尽かって？
思い出すのも疲れるけれど……。

ホグワーツの地下深くにある、秘密の部屋。
バジリスクをハリー＝ポッターにけしかけて見物しているところへ、それは訪れた。
否、襲いかかったといっていい。
「撲滅！　性悪幽霊――！」
意識を刈り取るドロップキック。
それが終わりであり、始まりだった。
気がつくと僕は、見知らぬ東洋人――マコト＝サザナミと名乗った――の使い魔として、契約下に甘んじる状態となっていた。
古びた木の香り漂う、大きな木造建築。極東の、神を祀（まつ）る神殿で、僕は――黒髪に紅い目の人間の姿で――縛り上げられていた。
シメナワ、という、わら製のロープは、魔法でもかかっているのか、やたらと丈夫で、いくら暴れても外せそうにもない。
「先輩、おかえりなさ――？」
ぱたぱたと足音をたてて現れた、黒衣の少女は、仁王立ちするマコトと、その足元に転がる僕を見比べて、ふうと嘆息した。

年のころはジュニアハイ（中学）かハイスクール（高校）くらいだろうか。幅広のボトムと、ボタンを使わないトップスのどちらもが、まっくろないでたちをしている。

「また新しい式神つかまえてきたんですか？」

「また」ってなんだ。こんなことがしょっちゅうあるのか。

同じ黒髪でも、僕よりも深い色合いの、長い夜色の髪をした少女が、子猫さながら小首をかしげる。拍子に、結い上げたポニーテールが、しっぽみたいにひょこりと揺れた。

「ん。式神にするつもりはなかったんだけど、あのまま残しとくと、ろくなことになりそーになかったからさー」

いっぽう、「先輩」と呼ばれた栗毛の美少女は、ころころ笑って黒衣の少女に指し示す。

「だからコレ、ナナちゃんの使い魔にしようと思って」

『はい？』

指差された僕と、「ナナちゃん」と呼ばれた黒髪の少女とが、異口同音に目を丸くする。パードン？

誰が、なんだって？

「えーと、先輩？」

「心配ないない。ちゃんと、反抗できないように、しっかりガッチリ縛っておくから無問題（モウマンタイ）！」

そろそろ本格的に、ナナちゃんのガードも固めたかったしねー、と言い放つ少女は、ごそごそと白い上着の懐からなにかを取り出している。あれは東洋呪術に使う「符」だろうか。

どうでもいいけど、マコトともう一人の衣装は、そっくりな作りだ。色こそ、マコトは緋色のボトム。もういっぽうは、上下まっくろ、とずいぶん対照的だけれど。

後で聞いたところによると、巫女服、という伝統衣装らしい。

「ちなみに、そちらの使い魔さんの同意は？」

黒髪にふちどられた、あどけない顔の少女は、くりっと黒い瞳を瞬かせて、心配そうにこちらをうかがってくる。

マグル（非魔法族）に情けをかけられるなんて、と憤るよりも、人の優しさが身に染みるってこういうことかな、と思ってしまうあたり、僕もだいぶ参っているようだ。

なにしろ、ドロップキック→金縛り→強制服従のコンボをかまされた後だ。

魔法界を恐怖のどん底に追い込んだ闇の帝王・ヴォルデモート卿の前身――その若かりし頃の記憶とはいえ、僕を力づくで従えさせるなんて、どんな化け物なんだ、この東洋人。

「悪霊に人権はない！ってね。

いちおー訊いてあげてもいいけど、ナナちゃんの守護するのと、私にコキ使われるのと、どっちがイイ？」

琥珀の目が、いたずらっぽく僕を見下ろしてくる。

とりあえず、ドロップキックで無理やり使い魔にする主はゴメンだ。

僕の無言の返答（ジト目ともいう）を読み取ったのか、マコトは「ほら、ナナちゃんがイイって」と笑顔でのたまった。僕もやるけど、悪魔の笑顔ってやつ。

うん、これよりかはマシだろう。

いかにものんきそうな、このポニーテール娘の方が、あつかいやすそうだ。

こくり、とひとつ黒衣の少女へうなずいてみせる。

「……いいんですかね。じゃあ、まあ。よろしくお願いします」

ちょこんと僕にかがみこんであいさつした少女は、ナナキ＝ナナチと名乗った。

＃０３　黒猫の回想ー闇の記憶ー（後書き）

あとがき

＞というわけで、チートな先輩のご乱行そのいち。

霊能者なので幽霊ちっくな記憶のリドルんにも容赦なくブチかます猛者。

蛇足ですが、言語の壁はオートで通訳されてます。

＃０４　黒猫の回想ー使い魔の記憶ー

で、だ。

それからの僕の生活はというと。

「窮屈じゃない？」

「別に」

小首をかしげる少女に見つめられつつ、バスケットにタオルを敷き詰めた寝床で丸くなる。オーバル型の籐バスケットは、なかなかの寝心地だ。

一般家庭に少年一人を連れ込むのは無理だということで、僕は黒猫の姿で、ナナキに飼われることになった。

姿？　僕は魔法使いだよ。変身魔法に決まっている。

といっても、ペットとして家庭に居座るのではない。ふだん猫の姿をとるというだけで、基本的には、彼女の影に潜んでいることの方が多い。キャットフードなんて食べないし。

そもそも「記憶」なのだから、ジャンルとしては幽霊に近い。いまはナナキという楔によって、現世に縫いとめられている形になる。

ナナキの家では、彼女の膝に乗ったり、ベッドで寝たり、蔵書を読んだりと、けっこう悠々自適な使い魔ライフを堪能中。

日本のアニメやマンガは、なかなか面白い。暇つぶしにはもってこいだったりする。

「美味しい？」

「……悪くはないね」

たまに、使い魔として、ナナキの血をもらったり。

霊視などの能力は未覚醒だが、それでも彼女は、なかなかの力を秘めている。そこらの悪霊レベルなら、オートで弾いてしまう霊的防御の高さからいっても、一般人からはかけ離れたポテンシャルだ。

ここだけの話だが、僕の服従呪文が効かないなんて、どんだけチートなんだ。さすが人外（マコト）の後輩、というべきか。

「さ～。お仕事、お仕事ｖ」

「リドルもよろしくなー」

「ま、ナナキに死なれると、僕も存在できなくなるしね」

「あれ？　それナナの使い魔？」

「そー。先輩がつけてくれたの」

「……オス、なんだ？」

アルバイトで、マコトの退魔行の手伝いをする、ナナキのアシストをすることもあったり。ナナキのイトコとやらが、こちらを微妙な目で見ていたのは、瑣末事だけどね。

「ふふふふふ……滅（コロ）ス！」

「はい先輩せんぱい、落ち着いて。

霜夏、神門さん回収。伯言は前衛で防御よろしく。リドルは一緒に防いでね。私は先輩押さえて増援呼ぶから。

こちら七地。神門さん負傷で、先輩ブチキレ寸前です。応援出してください。ちゃっちゃと来ないと、私も一緒に暴れますよ？」

マグル（非魔法族）のくせして、マコトの手綱を取るナナキの強（したた）かさに目を丸くしたり。いやあの威圧（プレッシャー）の中で動けるのは一般人の域を越えてるよ？

「そうなんですか。それで反乱をねぇ……」

「……疲れたのだよ。悪であることに。私は長く生き過ぎた」

拉致された先で、ナチュラルに魔族とお茶するナナキに頭を抱えたり。なんでそんなに馴染んでるかな！

「なーリドル。こっちとこっち、混ぜてみない？」
「なに作る気なのさ、ナナキ」
「踊るジャガイモ」
魔法界の植物を品種改良して、ちょっと妖しげな新種の植物を作ってみたり。なかなか才能がありそうで、魔法薬学や薬草学についても話が弾んだことは喜ばしい。

「材料足りなくなったから、補給がてら、久しぶりにあっちに行くんだって」
「……いいけど、僕が案内役って……」
「先輩、方向音痴だからさぁ」
バイト中に逃亡する、マコトのお供として（お目付け役ともいう）、半ば拉致される形のナナキと一緒に、魔法界に出かけるはめになったり。いいんだけど、闇の陣営にやたら知り合いが多いのはなんでかな？

「ふにゃ……」
「君が鳴いてどうするの。朝だよ、ナナキ」
ぺむぺむと肉球パンチで起こしたら、えらくナナキに好評だったりとか。ときどきマコトやソウカ相手に「にゃーにゃー」鳴いてるのを見かけるんだけど、あれでどうして話が通じるんだろう……猫語でもないよ？
まあ色々あって、それなりにナナキの使い魔として馴染んだわけだけれど。

「ナナキ」
黒猫姿の僕の、紅い目に映るのは、白い髪を後ろに流した長身の

男。
「そいつ、なに？」
したん、と不機嫌そのままにしっぽを打ち付ければ、しゃべる猫に目を丸くする、赤い外套の男と、困ったように苦笑する黒髪の少女。
「ん。先輩が新しく引っこ抜いてきた、使い魔さん」
「……は？」
どうやら英霊の「座」という異空間なんだか異世界なんだかわからない場所から、またしてもマコトが捕獲してきた人外が、一人増えたらしい。
それはいいけど、どうしてそれが、ナナキのとこに来るかな？
いつもなら、そんな連中はマコトの使い魔になるはずだ。
魔力や霊力のキャパシティが高いマコトは、既に二十を越える使い魔を持っている。それぞれが強い力を持つものだから、その半数以上が、ふだんは同僚――帝都心霊庁の――に貸し出し中らしいけれど。
「連れて帰って来たはいいんだけど、世話焼きすぎて「小姑はふたりもいらーん！」て、先輩がぶちキレちゃったらしいんだ」
先輩、このテのタイプと相性よくないからなぁ。
ナナキいわく、マコトの従者兼幼なじみ、ミカドに比肩する、執事スキルの持ち主だとか。
昔から付き合いのある幼なじみならまだしも、新参者のでかい態度が腹に据えかねたらしい。
「んで、放り出して野良にするのもアレだからって、私につけてくれることになったっぽい？」
「それは押し付けられたっていうんだよ！」
「本人を前に、好き放題言ってくれるな、君たち」
やれやれと肩をすくめて嘆息する白髪の男に、なるほどこれはカチンとくる、となないしんマコトに同意する。僕もふだん、マコトとは気が合わないんだけど、これはさすがに。

「あ、ちゃんと大事にしますから」
男を振り返り、へにょりと眉尻を下げて、申し訳なさそうに見上げるナナキ。彼女は身内以外にはドライだけど、懐に入れると決めた相手には情が深いし、それを護るためなら戦うことだって選ぶだけの執着も見せる。
基本的に優しいのだ。
怖いところもあるけれど。
いっぽう「エミヤさん」と呼ばれた英霊は、「それではせいぜい努めるとしよう」とシニカルに笑う。
「ナナキはホントに甘すぎるよ！」
特に人外に好かれまくる、その体質と性格をなんとかしてほしい。
切実に！

＃０４　黒猫の回想－使い魔の記憶－（後書き）

あとがき

＞主人公の使い魔そのいちは、そんなわけで、某ハリポタのリドルでした。

ちなみにオリ主がお茶しばいていた魔族は、ＧＳ美神のアシュタロスを想定。

某Ｙ君といっしょくたに拉致られた先で、ちゃっかり馴染んでおりましたという。

なにげにクロスネタでした。

＃０５　赤い弓兵の困惑－迷子の烏衣（つばめ）－

それは血のような。
もしくは、暮れ行く日の、残照のような。
あかい、赤い、紅（あか）い、赫（あか）い。
錆色の世界。
天蓋には歯車。きしみながら動き続ける鋼の細工。
荒れ果てた大地に突き立つのは、無数の剣。
それは道標（しるべ）のように。
もしくは失われたものの墓標のように。
ひそやかに、それでも静かな光を湛えて。
見渡す限りの剣の群れと赤い荒野は、錬鉄の英霊が据えられし「座」。
いつもと変わらぬはずの、その中に、見慣れぬ夜色を見つけた彼の目は、磨かれた刃さながら、少しだけ光を取り戻していた。

＃０５　赤い弓兵の困惑－迷子の烏衣（つばめ）－

「あ」
ぱちり、と目が合った。
その髪と同じ、深い夜色の瞳が、こちらを映してちかりと瞬く。
気づくなり、とたとたと軽い足取りで駆け寄ってくる少女は、ずいぶん変わった格好をしていた。
「こんにちは」
ぺこり、と頭を下げる拍子に揺れる、ポニーテールの黒髪。

まっくろな上下の形態は、どうみても巫女服だ。ふつうなら白い上着に緋色の袴のところが、隅から隅まで黒一色。ところどころを飾る紐だけが、紅くアクセントを添えている。

足袋はともかくとして、草履まで黒いあたりが徹底している。

全身が黒ずくめでありながら、その面（おもて）は白く、胸元に紅い勾玉の首飾りが揺れている。黒と、白と、赤。その三色の取り合わせが、春の渡り鳥を連想させた。

「……こんにちは」

半ば反射的にあいさつを返していた。

彼女は異物だ。

ここは英霊の「座」。

人の信仰によって形作られた世界は、据えられるべき英霊だけの居場所であり、また牢獄でもある。

故に、この場に、自分――英霊エミヤ以外の存在がいるというのは、おかしいのだ。

なのに、この世界の主たる自分は、かけらも違和感を感じなかった。否、いまもって、違和感は感じられない。

「君は、どうやってここに？　何者かね？」

当然の疑問だ。

見る限り、害があるようには見えないが、主である自分にも気づかれないうちに、この「座」に現れたというだけで脅威に値する。

問いかけると、あどけない面差しの少女は、まっくろな瞳でこちらを見上げながら素直に答えてくる。

「ええと、私の身分をお尋ねでしたよね。七地七季といいます。神使（しんし）やってます。まだ人間なんで、経験を積みながらの修行中ですけど。

ところで、ここは貴方の神域か領地とかですか？

お使いの途中だったんですけど、どうも、目的地とは違うところに放り込まれちゃったみたいで……」

少女の背丈は、せいぜい私の胸元までしかない。おおよそ四十セ

ンチの身長差。ことんと首をかしげて、けげんな声色を洩らしている。その言葉じたいは日本語だが、内容が耳慣れないうえに、よく考えなくてもおかしい。

「修行中」はいいとしても、「まだ人間」「神域」という単語に、思わず眉をひそめる。

平然とした口調からして、それが彼女にとっての親しみ深いものであることは明らかだが。

「しんし？……いや、神使（しんし）、か。珍しいこともあるものだ。ここは神域ではないが、たしかに私の領地といえる。英霊の「座」だからな。

私は、この「座」の主で、エミヤという。しかしここは、生身の人間が入り込めるような場所ではないのだが……」

とりあえず、向こうが答えたのだからと、こちらも問われたことに返してみる。

あちらに攻撃的な意図はないようで、素直にこちらの言葉を繰り返す。

本人の言葉が正しければ、なるほど、まっくろではあるが、巫女服を着ているのも頷ける。

しかし自らが口にしたように、この「座」にいることの謎は、いまもって解けない。いや待て、放り込まれた、と言ったか？

「えいれいの、ざ……？」

こてん、と小首をかしげる黒巫女ひとり。丸みを帯びたシルエットに小柄なせいもあって、しぐさのひとつひとつが、いちいち小動物のようだ。

やがて彼女は思い当たる単語を脳裏から検索したのか、小さな白い手をぽむりと合わせた。

そのまま目を閉じて、なむなむ、と拝み始める。

「？……なにをやっているのかねっ？」

ぎょっとして、思わず声を上げる。

関係ないが、神使なのに読経とはいいのだろうか。いや、信仰的

に。
「え？
英霊さんですよね？　戦死して、護国神社とかに祀られてる方じゃないんですか？」
そう来たか。
マイペースというか、独特の感性を持っている子だな。この年頃で、異様なまでにピッタリと巫女服を着こなしているのも、珍しいといえば珍しい。
「いや、この格好でそれはないだろう」
少女のいでたちは、名乗った通り、神使にふさわしい――まっくろな色はともかくとして――巫女服だが、自分は違う。
赤い聖骸布で仕立てた外套は、上下に分かれたデザインだし、その下には黒い革鎧を着込んでいる。どう考えても、西洋風の――いうなれば、ファンタジーっぽい衣装だ。言葉にすると、いささかアレだが。
たぶん七季と名乗った少女は、顔立ちといい、荒れていない手指といい、現代日本人だろう。見知らぬ男を相手に、えらくのんきだし、荒んだ空気や、怯えたところがない。
ふっくらした頬や、小柄な割に、とても女性らしいラインの――その、なんだ。ともかく、豊かな食生活をしていたに違いない、肉付きの良さだ。
「あー……神道では、英霊といえばそちらかもしれないが。私は世界大戦での戦没者ではない」
ぱたぱた手を振って否定を示す。
しかし物怖じしない子だな。
目つきの鋭さや、身についた雰囲気の剣呑さで、自分でも人好きしない――好青年とはかけ離れた――見た目だという、自覚くらいはあるのだが。
いっぽう、黒髪の少女は、こきりと首をかしげて訪ね返した。じっとこちらを見つめてくる目は大きく、濡れた黒瑪瑙のように光を

湛えている。
　顔つきはいまだ幼かったが、瞳には聡明なかがやきが見て取れる。年のころなら十代半ば。若くて中学生、上でも高校生といったところだろうか。どことなく品があるというか、落ち着いた雰囲気をまとっている。
　あどけないのに大人っぽい、という、いささか矛盾した印象の少女だった。
「でも英『霊』ってことは、もうお亡くなりなんですよね？」
「うむ」
　それはそうだ。
　英霊とは、生前偉大な功績を上げた英雄が、死後において信仰の対象となったものを指す。
　もっとも「抑止の守護者（カウンターガーディアン）」としてコキ使われる自分は、レベルの低い「反英雄」の部類だ。自分から英雄と名乗るのは憚られる。
　そのあたりを説明すべきだろうかと、微妙な思いに駆られていると、七季はこちらの思案をよそに、さくっとツッコんできた。
「じゃあ拝んでも、問題はないんじゃないかなと。ところで成仏とか、そういうのはされないんですか？」
　成仏は仏教用語なんだが。
　それはそうと、なかなかストレートな物言いをしてくれる。その思い切りのよさは、しかしながら、不思議なことに無礼と感じさせない。
　これも人徳というものだろうか。この七季という少女のまとう空気は、いうなれば「丸い」のだ。相手に対する、棘がない。
　何かに似ていると思ったら、水晶玉だ。
　宝石の系譜である遠坂に関わった自分は、さまざまな鉱物を目にする機会があった。
　その中でも手に取りやすく、透き通って、こちらが臆するほどではない程度に神秘的。
「純粋」の象徴で、均衡を保ち、浄化と増幅を司る。

余談だが、クォーツ系の石は、色の幅が多く、石材としても重宝される。また、採掘量が多いことから、比較的安価だ。このあたりは、師匠が宝石魔術をあつかっていたから、当然、叩き込まれた知識である。

いちおう魔術的な知識（もの）だから、まだ磨耗はしていなかったらしいな。

さておき。

「……そのあたりは、お互いの認識がずいぶん違うようだが……それを説明する前に、ひとつ、いいかね？」

「どうぞ？」

きょとん、とまっくろな瞳が、こちらを見上げる。

「君は、どういう方法でここに来たんだ？」

「ジッパーで来ました」

間髪入れずに切り返された答えに、今度こそオーバーフローを起こした思考が、脊髄反射でツッコミ返した。

「なんでさ」

＃０５　赤い弓兵の困惑－迷子の烏衣（つばめ）－（後書き）

あとがき

＞弓兵が、えらいほのぼのしててすみません。

もっと彼は殺伐としてるはずだっ！格好いい弓兵はどこ行った！という方には申し訳ありませんが、書き手はこういうノリですので、スルーしたってください。

副題の「烏衣」は「つばめ」の別名である「うい」と読みますが、今回はわかりやすく当て字として使いました。

#06　赤い弓兵の困惑ー主の烏衣（つばめ）ー

それが始まり。
あの後、七季の迎えが来て――本当にジッパーから人が出てきたのには仰天したが――同じようなことが、何度か繰り返され。
彼女の「先輩」であるという真言に、七季ごと「座」から拉致されて、私は世界の奴隷という立場から、解き放たれることとなる。

「ナナキ」
黒髪の少女の私室。
新しい主を呼ぶのは、ルビー色の目をした黒猫。
「そいつ、なに？」
したん、と机を打つ、長いしっぽ。対する自分の傍らには、困ったように苦笑する黒髪の少女。
「ん。先輩が新しく引っこ抜いてきた、使い魔さん」
「……は？」
かぽん、と口を開けて呆ける黒猫は、七季の使い魔なのだろう。
彼女は、しゃべる獣へ、当たり前のように答えを返した。
「……それはいいけど、どうしてそれが、ナナキのとこに来るかな？」
しばらくの沈黙の後、どうにか気を取り直したらしい黒猫は、ちょこんと机の上に陣取ったまま、人間さながら右の前脚で狭い額を押さえてうめいた。
猫又の類（たぐい）だろうか？
見たところ、しっぽは一本のようだが。

ベルベットのような毛並みは、光の当たり具合で淡い銀色にも見え、和猫ではなく、ロシアンブルーの血が混じっている洋猫のように思えた。

「連れて帰って来たはいいんだけど、世話焼きすぎて「小姑はふたりもいらーん！」て、先輩がぶちキレちゃったらしいんだ」

先輩、このテのタイプと相性よくないからなぁ。

ぽやぽやとした声音で、のんきに説明する七季の声を聞きながら、お節介をしすぎたか、と少しだけ反省する。

じつのところ、久しく「座」で一人きりだったものだから、他者との触れ合いというか、やりとりが楽しくて、若干テンションが高めだったことは、ここだけの話である。これでも自重した方なのだが。

「んで、放り出して野良にするのもアレだからって、私につけてくれることになったっぽい？」

「それは押し付けられたっていうんだよ！」

わかっていても、じっさい他人に言われるとヘコむんだがな。

「本人を前に、好き放題言ってくれるな、君たち」

やれやれと肩をすくめて嘆息する。

「あ、ちゃんと大事にしますから」

こちらを振り返り、へにょりと眉尻を下げる少女に、悪気は見受けられない。

黒めがちな大きな瞳で、しょげたような、申し訳なさそうな面持ちをされると、正直こたえる。子犬だのウサギだのといった、小動物に「怒った？」と、うかがわれている気持ちになるからだ。

怒ってなどいないさ。本当のことだからな。

「それでは、せいぜい努めるとしよう」

しょせん行く当てもない身だ。居場所をくれるのなら、是非もない。

苦笑気味に、これから従者たることを端的に告げる。

かつては、あれほど自由の身になることを望んでいたというのに

――滅ぶことを望んだのは、それが間接的に自由になる方法だったからだ――いざ、解き放たれてみると、なにをしていいのかわからない、という自分の正体のなさに、いささか呆れたくもなるが。

――間違ってなんか、いない。

いつかの自分が得た答えが、胸の奥で、鉄を鍛つ。我が身を熱する、炎は消えない。

ああそうだ。まだ自分にも、できることはあるだろう。

この体が動くのだから。

この腕が届くものを、護ることはできるだろう。

ついと目を細めて、小柄でたよりなく見える、新たな主を眺める。やわらかな――たやすく傷つけられてしまいそうな彼女から、笑顔を奪わないための、剣となることを己に誓う。

「座」から解き放った真言にも感謝はしているが、この身を救いたいと、願ってくれたのは七季だったのだから。

「ナナキはホントに甘すぎるよ！」

言葉の端々に嫉妬か見え隠れする、黒猫姿の使い魔は、ふしゃーっ！と毛を逆立てていたが、それをさらりと受け流し、私はこう付け加えたのだった。

「ふだんは『アーチャー』と呼んでくれ、マスター。真名はマスターだけが知っていれば十分だ」

これは戒め。

何故ならば――ふとした拍子に七季から漏れ聞いた私の真名を使って、問答無用で真言の使い魔にくくられてしまった前科があるからな！

あのチート巫女、もとい真言は、よりにもよって名前ひとつで、世界に縛られたはずの英霊を横取りするという荒業をかましやがったのだ。正直、どんだけだ、とツッコミたい。心の底からツッコミたい。

あんなムチャをやらかす存在が、そうホイホイ落ちているとは思えないが……二度あることは、三度あるというからな。

たまたま今回は、いい結果になったが、万が一、敵対する相手にやられたら、目も当てられん。

ちなみに、真言いわく「ナナちゃんにおねだりされたから」だそうだ。

彼女にうっかり口が滑って、身の上話とグチをこぼしたのがまずかったらしい。こちらに同情した七季が、にゃーにゃー真言にグチってごねて、そのうえ泣かれたのだとか。

正直、自分のことで泣かせたのかと思うと、非常に申し訳ない気はするのだが……鳴いたのか？　「にゃー」って。

――想像すると、違和感ゼロだな。うん、それは彼女によく似合っている。

それはさておき、もしかしなくてもアレか。真言を手玉に取れる、七季の方が手に負えない相手なのか？

のんきで大人しい、気遣いもできる、いい子なのだが……。

いささか遠い目をしながら、固有結界（偽）に入りこんで考え込んだ私は、後にその懸念が正しかったことを思い知る羽目になるのだが――それはまた、別の話である。

#０６　赤い弓兵の困惑－主の烏衣（つばめ）－（後書き）

あとがき

＞というわけで、主人公の使い魔そのには、錬鉄の英霊エミヤんでした。

チートな先輩が、「座」から引っこ抜いてきたので、本体です。

そのうち彼にもチートな性能を発揮してもらう予定。

エミヤ無双でいいじゃないか（本気）。

◆登場人物（かるいネタばれを含みます）

◆七地七季　：　基本方針「黒幕的やらずぶったくり」

主人公。放課後や休日にアルバイトで巫女さんをしている女子高生。

チートな先輩に巻き込まれ、しょっちゅうトラブルに出くわすものの、持ち前の強運で乗り切っている。

比較的、症状が軽めのオタク。マイペースな性格で、基本ぐーたら。

長い黒髪に黒い瞳。身長は１５４センチと小柄で巨乳。

【イメージ&カラー】

黒／烏衣（うい＝つばめの意）／風と水／とらえどころのない／水は方円の器に随う（したが）／鈴蘭（花言葉「幸福の訪れ」「純潔」）／可愛く見えても毒があります／

「美味しいは正義！」「神様は祟るものでしょう？」「鳴いて？」

◆アーチャー　：　基本方針「いのちをだいじに」

主人公の使い魔その１。七季のチートな先輩に捕獲された、不運な「執事スキルＡ＋」の英霊。

たぶん女難は生前から引き継いでいるっぽい。世話焼き根性と、苦労性もあいかわらず。

1級フラグ建築士。シニカルな態度とは裏腹に、根が真面目。口うるさいのが玉に瑕。
後ろに流した白い短髪に鋼色の瞳。長身で鍛え抜かれた体躯。

【イメージ&カラー】
赤／剣／炎と鉄／熱く、硬く、鋭い／諸刃の剣（もろはのつるぎ）／
／椿（花言葉「高潔な理性」）／死ぬなら一思いにバッサリ希望、
しかし1%でも可能性があるなら生き残るために手段は選ばない。
プライド？知ったことじゃない／

「I am the bone of my sword.――――体は剣で出来ている」
「別に、アレを倒してしまってもかまわんのだろう？」「……なんでさ」

◆リドル：基本方針「自重しない」

主人公の使い魔その2。こちらもチートな先輩に、ドロップキックで捕獲された、闇の帝王の記憶（プレ）。
マグル（非魔法族）嫌いはあいかわらずだが、自称「一般人」の主人公のことは、とっくにマグルあつかいしていない。自称「一般人」なんて嘘だろ？
猫かぶり闇の帝王。ドSで毒舌なスリザリン気質はそのままに、過保護スキルが加わった模様。ツンデレを自認するが、わりとデレデレ。
ふだんは紅い瞳の黒猫。人間形態だと、黒髪に紅い瞳。均整の取れた長身の少年。

【イメージ&カラー】

深緑／黒猫／闇と三日月／恐るべき神秘／ｃｒｙ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｍｏｏｎ（途方もない野心を抱く）／／ベラドンナ（花言葉「沈黙」）／毒？ありますよもちろん。薬にもなりますが／

「大丈夫、証拠なんて残さない」「君たちに選択肢があるとでも？」「……悪くはないね」

◆先輩：基本方針「君臨すれども統治せず」

主人公の先輩。勝手に神社の龍神に「嫁」認定された、チートな美少女霊能者。

神社で巫女さんをする傍ら、国の「柱」を支える役目を担う巫女姫としての一面を持つ。

……が、しんどいので、ときどき役目を丸投げして、異世界に逃亡したり、しなかったり。

七季とは、オタク仲間。天然ボケかつ暴走癖があり、もっぱらストッパーは七季。可愛いもの、女の子が大好き。七季を猫かわいがりしているが、修行はスパルタ風味。これも愛ゆえ。

ふわふわ栗毛に琥珀色の瞳。身長は小柄で、七季より少し高めの１５９センチ。巨乳。

【イメージ＆カラー】

桜色／桜／花と光／華麗にして苛烈／綺麗な花には棘がある／／桜（花言葉「純潔」「優れた美人」）／神は依（よ）るもの祟るもの。ケンカ売る覚悟はＯＫ？／

「悪霊に人権はない！」「……滅（ころ）ス」「いざ行かん！新たな（逃亡の）旅路へ！」

（2010／10／30／更新）

＃０７　のっけからクライマックス－神降ろしの娘－

「ここ、どこだと思います？」
つるりとした素材の壁は、どことなく近未来的で、近くに窓もないことから、なんとなく息苦しい。
「さてな」
「とりあえず、その人間に訊いてみればいいんじゃないかな」
先輩のジッパーから放り出されて、無事着地。
とたんに背後を振り返った、七季に答えてくれたのは、赤い外套の男・アーチャーと、紅い瞳の黒猫・リドルである。
「ありしあああぁアアァァ！！」

＃０７　のっけからクライマックス－神降ろしの娘－

耳を劈く声は、慟哭だった。
天までも貫くように、強く、高く、尾を引いて立ちのぼるそれは、七季もよく知る類のものだ。
子を失った親、親を失った子。弟を、妹を、兄を、姉をうしなった、きょうだいの放つ悲嘆の音色。
それは、死者を相手取る退魔行に、アルバイトとはいえ携わる少女にとっては、慣れてはいけないとわかっていても、珍しくないもの。
肉体から離れ、理性さえも飛ばした怨念たちは、ひたすらに呪詛と嘆きを繰り返すこともしばしばで――なおかつ、先輩の「仕事」として七季が関わるようなものは、十中八、九が、生者という他者

を巻き込んで害するタチの悪い連中ばかりだ。
本来の道を踏み外し、現世にしがみつかせるほどの心残りが、霊たちを迷わせる。
同時に、生者の狂気も、ときとして死者を縛りつけることを、烏衣の巫女は知っていた。
そういう実例は、しばしば「仕事中」にお目にかかったからだ。
日ごろのんびりとマイペースで、危機感の薄いように思われている少女は――だから存外、こういった修羅場にも、冷静だった。
あたりの大気に満ちる、陰鬱な気配は、決して快いものではないが、だからといって七季の心を乱すこともない。
いつのまにか、彼女の思考は「仕事用」になっているのだった。
幸いにも――そう言ってはなんだが――ここに悪霊の気配らしいものはなく、目の前にいるのは、子供を失ったばかりの女性。
やけにつるんとした壁にも、エアコンの空気にも頓着せず、七季はポニーテールの黒髪を揺らして近寄った。
「すみません、その子のお母さんですか？」
丁寧に声をかけるものの、半狂乱の女性を正気に戻すには足りなかった。ここまで我を失っていると、腕力のない七季では、暴れられたりすると困ってしまう。
けっきょく何度か呼びかけて、しょうがなく、彼女はアーチャーに頼んでみる。
「あの子と話せるかもしれないって、教えてあげて」
「了解した、マスター」
ちょっと眉を上げた男は、赤い外套を翻し、生死を隔てた親子の下へ歩いていく。
「助けるの？」
リドルが「なんで」という顔をしながら、それでも、子供を失った母親の嘆きに、ペタリと三角の耳を伏せて顔を逸らした。
彼はかつて、マグル（非魔法族）の父親に捨てられた、魔法使いの母親が、心を壊していき、ついには孤児になった経歴を持ってい

る。それだけに、この光景はいたたまれないものを感じるのだろう。
そんな黒猫姿のリドルを、七季は抱き上げて、なだめるように背中を撫でる。ふんわり滑らかな毛並みが、少女の手のひらをくすぐった。
「さあ？……でも、私にできることは、してあげたいと思うよ」
私、ひとでなしだからね。
「……？」
けげんそうに振り返ったリドルに、七季は優しく微笑んでみせる。あくまでも、これは打算なのだとうそぶいて。
「恩を売る代わりに、私たちを助けてもらう。弱みに付け込むんだから、悪いやつでしょ？」
「ふ……ん。この状況なら、あの母親には悪魔だって天使に見えると思うけどね」
「あッ……アリシアをッ、本当に、話すことが、できるのッ！？」
平素であれば相当な美人だろうに、ダークヘアの女性は、顔をぐしゃぐしゃにして、七季の足にすがりついた。
自分が放っておいたから、自分がこんな仕事をしていたから、こんなところに連れてきたから――そんな自責の念でいっぱいだった女性は、最愛の娘が取り戻せるかもしれない、という一縷の希望に、ようやく話を聞く気になったらしい。
七季はこくりと頷くと、母親らしき女性が抱きしめている女の子に、目を走らせた。そっと彼女の胸に手を当てる。
まるで眠っているような表情の、金髪の女の子。年のころは、五、六歳くらいだろうか。顔立ちが女性に似ているところからして、おそらく母娘か、それに近しい血縁だろう。
いっぽう、七季の腕に抱かれたリドルは一瞥して「死んでるね、あれ」と呟いた。
なるほど、あれだけの声を耳元でわめかれて目覚めないとは、よっぽど深く昏睡しているか、さもなくば、とうに五感を放棄しているかだろう。

しかし、まだ死臭も死斑も出ていないことを鑑(かんが)みて、七季はその死体――魂の気配がない器――を、死後まもないと判断した。

それにまだ、温かい。

――これなら、なんとかできるかもしれない。

「神使(しんし)」であるにも関わらず、ふだんは霊視すらできない七季の、いまのところ唯一といってもいい特技が「神降ろし」だ。

もっとも「神」というのは、あくまで便宜上のこと。

七季は、神霊だけでなく悪魔や精霊、妖怪などの高次存在を呼び込み、自分の肉体に「降ろす」ことができる。いわんや、ただの人間霊をや。

言ってはなんだが、「死にたて」で、体と魂の「縁」がさほど離れていないだろう霊を引っ張り「降ろす」ことなど、七季にとっては朝飯前である。

もっとも、魂を戻す「器」――この場合は、子供の肉体――が、腐ってしまっては、魂が戻っても、のちのち悲惨なことになってしまうので、早いに越したことはない。

最初は、あまりに嘆きの深い女性の、心残りをいくらかでも緩和するために、最後の別れを助けるつもりだったのだが――七季は予定を切り替えた。

「私は七季。まず、お名前を教えてください。あなたと、この子の。それから、死因も。病死ですか？」

こくりと頷く黒髪の少女は、簡潔な言葉で女性に質(ただ)した。

「わたしはプレシア。プレシア＝テスタロッサ。この子は、私の娘で、アリシアですっ。

し、死因は……魔力炉に使われていた、反応魔力素を大量に吸い込んでしまって……ショック性の心停止を……」

でもＡＥＤも効果がなくて。

なるほど、と七季は頷き、かるく母親を押しのけてから、自分も跪いた。腕に抱いていたリドルをそっと下ろして、改めてアリシアを観察する。

まるで眠ったように目を閉じているから、目の色はわからない。けれども、愛らしい顔立ちをした、金髪の女の子だった。

「顔に苦悶の後がない。毒性というよりも、本当にショック死なんでしょう。……ちなみに、その反応魔力素とやらは、まだ体内に？」

まるで患者を診断する医者のように、真剣な顔つきの七季から問われて、プレシアと名乗った女性は、かぶりを振った。

「ざ、残留してはいると思うけど……もうあらかた抜けているはず」

――心停止のショックで、魂が抜けちゃったんだな。だからＡＥＤを使っても、効果がなかった。

七季が暮らしている世界なら、頓死――いわゆる「ぽっくり」というやつだ――したものが、翌日や、土葬されて数日後などに蘇生することは、ままある。

おそらく、なにかの拍子に魂が抜けてしまい、それがどうにか肉体に戻った、というのが真相だろう。そういう記録は、日本だけでなく、外国にも残っている。

だが、ここは異世界なのだ。

「魂」と言う概念があるかどうかすら、怪しいし、もしもその概念がなかった場合、「器」である肉体に戻ることを考えつかない魂が、にっちもさっちもいかなくて、蘇生できない可能性は十分ある。

さらにいうと、ここからは七季の推測になるが、蘇生に数日かかったパターンは、魂と器が再接続するのに、手間取った場合ではないかと考えられる。

仮にそうだとすると、愛娘を失って嘆きにくれる母親に、「数日くらい待ってください」と安易に頼むわけにもいかない。

ここは、七季が、運悪くぽっくりお亡くなりになった娘さんの魂を捕獲して、目の前の肉体に押し込むのが、いちばん平和的だろうと、まっくろ異邦人娘は結論付けた。

――蘇生はできる。

病死であれば、まずリドルと作った魔法薬で、肉体を治療をしなければならないが、これなら十分に七季だけでどうにかできる。手

間がはぶけたというものだ。
リドルたち魔法使いの薬は、いささか反則的なほどに強力だ。それも、死者を甦らせることまではできないが、それは薬品では、いったん体から離れた魂をどうこうする力まではないからだ。
しかし、「神降ろし」のできる七季ならば、話は別。
死亡して、酸素の回らなくなった脳に、障害が残る可能性もないではないが。
それも、数日後に蘇生した前例を鑑(かんが)みれば、案外とリスクは低めだろう。
「お聞きしますが……プレシアさん。もし、なんらかの障害が娘さんに残ったとしても、この子の蘇生を望まれますか？」
そして。
このタイミングで放り込まれたことにも意味があるのだろうと、七季はひそかに考えをめぐらせた。

いつも「修行」は、放り出された場所や時間に意味があったのだと、後でわかる。
そんなとんでもないタイミングで、戦場や田舎や、時にはゴミ捨て場――これは流星街のことだが――に、七季は放り込まれてきた。
だから、偶然とはいえ、この時間、この人物との出会いで、七季がなにを選択するのかを、彼女は任されている。
見捨てるのか、助けるのか。
死者を、理(ことわり)のままに眠らせるのか、それとも新たな生を与えるのか。
その選択は、「神使」として、この先も七季が直面する、数え切れない選択のうちの一つになる。
だからこその出会いを、少女は何度も何度も経験を重ねなければならない。それを与えられなければならない。

できることと、できないことを理解しなければならない。
恨まれることも、感謝されることも。
「あッ……アリシアをッ、本当に、たす、けて……くれるのッ！？」
いうまでもなく、プレシアは暗色の髪を振り乱し、黒衣の少女に詰め寄った。
「蘇生は可能です。でも、障害が残る可能性もあります。子供さんは、それに苦しむかもしれないし、恨むかもしれない。あなたも苦労するかもしれない。それでも？」
「アリシアが生きていられるならなんだってするわ！　私はこの子の母親なの！」
懸命な訴えは、じっと見つめる、黒瑪瑙の瞳にも怯まなかった。
「どんな代償を払っても？」
「もちろんよ！」
たとえ悪魔に魂を売り渡しても！
間髪入れずに即答した女性に、七季はふんわりと微笑んだ。
本当に、プレシアの愛情深さを感じたのと――これは取引なのだと、割り切る自分のあくどさに、ちょっと自分でもタチが悪いな、と思ったからだ。そんな自分を、七季は本当には悪いと思っていないから。
「では、ちゃんとお代はいただきますよ、プレシアさん。
七地七季、これより契約により、アリシア＝テスタロッサの『招魂』および『神降ろし』を執り行い、これを蘇生いたします」
宣誓は、金鈴のごとく凛と響いて始まりを告げた。

#07　のっけからクライマックス！神降ろしの娘！（後書き）

あとがき

＞ＡＥＤとは、「Ａｕｔｏｍａｔｅｄ　Ｅｘｔｅｒｎａｌ　Ｄｅｆｉｂｒｉｌｌａｔｏｒ」の略で、自動体外式除細動器のこと。

空港や飛行機内、ホテルなどの公共施設に広く設置されているアレですね。スポーツジムなんかでも見かけます。

まあ、リリなの世界でも、似たようなものが同じ名前で流通しているものだと思ってください。

#０８　のっけからクライマックス――またはちゃぶ台返し――

＜大丈夫なのかね、マスター？＞

使い魔と主を結ぶラインから、アーチャーにそっと声なき声で話しかけられて、七季は「ん」と唇を結んだ。

＜できないことはやらないし、やれないことは、人に頼むよ、私は＞

他力本願と言うなかれ。己の限度を知ることは重要なことだ。

――世の中には適材適所という言葉があるんだしね。物は言いよう、っと。

同じように声ならぬ声で応答しつつ、黒髪の少女は「さて」と思いをめぐらせた。

――そう。魔力素……「魔力」、「素」、ねぇ……。

ようするにそれは、肉体の動きを阻害する「穢れ」なわけだ、と七季は、耳慣れないその単語を、呟きつつ認識した。

魔力という言葉がつく時点で、魔法っぽいものがあるのかな、と思わないこともないが、いまは必要なこと以外スルーである。

とにもかくにも、それが「余計なもの」であるという事実さえわかればいいのだ。

――いらないものなら洗い流せばいい。

魂を呼び戻すなら、体は万全の方がいい。そこに異物は必要ない。

七季の考えは、いたってシンプルである。

だから彼女は、目の前の幼子を、あるべき状態に戻すべく、その権能をただふるう。

＜承知した。こちらはこちらの仕事をしよう。お手並み拝見といこうか、マスター＞

煽るような、はっぱをかけるような、紅衣をまとう従者の言葉に、応じる少女は、気を張るでもなく、ただ自然体で頷いた。

＜ん。私は私の仕事をするよ。任せなさい＞

丸い紫水晶（アメジスト）を連ねたブレスレットのはまる、白く小さな手。ふっくらしたそれが、ひたり、とアリシアの体に当てられた。

魔除けや、悪酔いを防ぐ効果のある石は、浄化の力が強い。いままで彼女を助けてきたそれは、今回も持ち主を補佐し、この儀式を助けてくれるに違いない。

手の甲側の中央にある、紫色の勾玉が、わずかにじんわり熱を持った。

黒く、しかし自ら強い光を放つ大きな目をかるく眇めて、黒ずくめの巫女は意識を集中する。

戦（おのの）きを覚えるほどに高まる力と集中。それは近くにいるものの肌身を、しぜんに粟立てる。

すでに彼女の意識は外界から逸れている。いま感じるのは、眼前の母娘と、目には見えないパスで繋がる使い魔たちのみ。

主人の精神状態を、ふたりの従者もあたりを警戒しながら感じ取った。

アーチャーは、初めて目にする七季の異能を見逃すまいとするように。リドルは、久しぶりに――彼もこれを見るのは二回目だが――見るそれを、どこまでも興味深そうに。

――イメージは水。

七季という器に満たされた水が、触れた手のひらから注がれる感覚。

霊的な力を動かそうとするとき、または瞑想による修行を課せられるとき、彼女は自分が水である、と強く意識する。

定まった形のない、そのイメージは、黒髪の少女にとって、とてもあつかいやすいのだ。

いまのところ、七季の「特技」は「神降ろし」一つきり――だが、

「神使」としての基礎能力は、きちんと身にそなわっている。
その中にはもちろん「穢れを祓う」ことも含まれていた。
神の多くは「穢れ」を厭う。仕える神が鎮座する聖域を、清浄に保つことは「神使」として当然なのだから。
「神使」となる前でも、真似事くらいはできた七季のこと。ましてや「神使」となってからの「お祓い」は、真言に褒められるほどの適性を誇っている。
七季の属性――その性は、風と水。吹き払い、洗い流すことに長けるそれは、「禊」に役立ち、巫女としても都合のいいものなのだ。
それは物理的には、なんの変化もない――はずの、異能。
ただ、魔力や霊力といった、目に見えない力を感じ取るものからすれば、それは「淀み」もしくは「歪み」を払底するもの。
これまでは、霊的な障りを引き起こす「穢れ」の除去にのみ行使されてきた力はしかし、異世界の「魔力素」というものを、七季が「物理的ではない異物」と認識したことで、無意識に制限されていた干渉力の戒めを解かれる。
いまだ若き――幼いといってもいい――神使は、そうして、自分自身にかけていた枷をひとつ、取り除いた。
すう、と黒衣の少女を取り巻く空気が、静まり返る。間近で見ているプレシアも息を呑んだ。
これより執り行われるのは、神秘の御業。
楽の音も祭具も、なにひとつないけれど――それでも彼女は、修行中とはいえ、神と呼ばれるものの眷属であり、たしかに「巫女」であった。

歌うように。祈るように。
とうとうと紡ぎだされる文言は祝詞。

「高天原に神留り坐す　皇親神漏岐　神漏美の命以て
八百萬神等を神集へに集へ賜ひ　神議りに議り賜ひて――」

それも、罪や穢れを祓うための「大祓」という儀式に使われる「大祓詞」だ。

リドルは七季と共に暮らすようになって、彼女のバイト先である神社との付き合いもあるため、何度か似たようなものを耳にしている。

「――荒潮の潮の八百道の八潮道の潮の八百會に坐す　速開都比賣と言ふ神
持ち加加呑みてむ　此く加加呑みてば　気吹戸に坐す気吹戸主と言ふ神
根底國に気吹き放ちてむ　此く気吹き放ちてば　根國　底國に坐す速佐須良比賣と言ふ神　持ち佐須良ひ失ひてむ」

その儀式見守るアーチャーも、詳しくはないものの、日本人としての生まれから、それが祝詞であることくらいはわかる。

低く、絶え間なく、落ち着いた響きのそれは、ともすれば眠気を誘うように、しぜんなリズムで、人間の耳に馴染む。

先ほどまで、あれだけ高ぶっていたプレシアが、じっと動かずに、祝詞を紡ぐ七季を見つめていた。

小柄な少女の体が、淡い月色の光を帯びている。それは、身にまとう巫女服が黒いため、いっそう明らかに映り、やわらかに、それでいて神々しく感じられてならないのだ。

それは、陰鬱な部屋の影を払うように、清らかな光で。

「此く佐須良ひ失ひてば　罪と言ふ罪は在らじと　祓へ給ひ清め給ふ事を
天つ神　國つ神　八百萬神等共に　聞こし食せと白す――」

さあっ、と。

屋内にもかかわらず、一陣の風が吹き抜けた。

それはエアコンから吐き出されるものではなく、かすかに緑の匂いを含んだかに思える、風。

いうなれば神秘を感じる現象に、プレシアは、ますます目の前の少女を凝視した。

なんの変哲もないように見えるのに、いきなり虚空から現れた娘。それは、いまやプレシアの望む奇跡を叶えることを、可能とすら感じるほどの、清冽な威風を放っている。

じつのところ、七季が巻き起こした浄化の風は、プレシアに絡みつくタチの悪い「穢れ」さえも押し流してしまった。それはちょうど「禊（みそぎ）」のごとく。

彼女のやったことは、アーチャーの知る「魔術的」観念からすれば、「穢れ」をより高い次元の「神秘」で押し流した、ということになるだろうか。

七季に言わせると、「このへん清めるから神様に力を貸してくれって祝詞（のりと）で頼んで、水の代わりに霊力流して洗った」ということになる。

ざっくばらんでわかりやすいが、それにしては、ありがたみに欠ける説明を、幸か不幸か、聞くものはこの場にいないが。

さておき。

まっくろな袖からのぞく、白い癒しの御手が、ゆっくりとアリシアの胸から離れた。次いで、あどけない顔を上げた七季が、今度はアリシアの額に触れる。

「穢れは祓ったんで、たぶん魔力素とやらも抜けたでしょう。変な感じもしないんで、改めて蘇生に入ります。

お母さんは、そのままで。この子を抱いていてください。アーチャー、リドル。邪魔が入らないように、お願いな」

「了解した」

「任せて」

黒衣の少女の言葉に、白い髪の偉丈夫と、黒い毛並みの使い魔は、そろって頼もしい返事をよこした。

同時に、種類の違う結界が、侵入者や襲撃者を警戒して、二重に張られる。

この世界での、七季がふるう力が、どれほどの「異能」としてあつかわれるかわからないためだ。

しかしプレシアは「蘇生に入る」と言われた我が子を、ひたすらに想っていた。

彼女にとって、見知らぬ少女も異常な状況も、失ってしまったアリシアが生き返ることに比べれば、瑣末なことだ。叶うなら、さいぜんリドルの口にした通り、彼女は悪魔にだって魂を売っただろう。

そして、七季の声が呪を紡ぐ。

「器に水を満たしましょう。水にかけらを溶かしましょう。私は容れる。私は肯う。この身は揺れる。この身は満ちる。海を抱える宮殿と、血潮を棄てる径を持つ」

今度は祝詞ではなかった。

それはふつうの言葉のようで――けれど、不思議と聞き入ってしまう力を秘めていた。

たゆたうようなリズムで、七季のソプラノが淡々と詠じる。

「御統を綴れ。しろしめす担い手。盟約もなく、制約も告げず、私は呼び願う。名を持つ君よ。私は此処に。牙なき夜の散歩者が誘う」

優しく、強く、あたたかく。慈しみを込めた声が、招魂となって、器を離れてしまった魂を引き寄せる。

――鈴が鳴る。

それは現実のものではない。

閉じた目の奥。幻想の、彼女の内側でうち振られる、イメージの祭具だ。

五色の紐をひらめかせ、葡萄のごとく纏め上げられた黄金色の鈴

たちが、しゃん、しゃん、と脳裏に響く。
金属の内側、空洞の壁にぶつかる玉が（魂が）、黒衣をまとう神降ろしの巫女の中で震えている。
――そう、魂（たま）が震えている。
七季の黒い瞳が、虚空を仰いだ。裡（うち）を見つめる意識とは裏腹に。
――私の中で。
からんからん、からん。
からからん、かからん、からん、りりん。
しゃりんしゃりん、しゃらららら……。
音が振る。
音が降る。
清らかな響きは、頭の先から下りていき、首を伝って背筋を滑り、肩を超えて指先へと走る。

「来たれ。来たれ。来たれ。絆はここに。器はここに。
婚星（よばいぼし）を導（しるべ）に。縁（えにし）の糸は、我が指に。春告げの鳥は烏衣（ういい）を翻（ひるがえ）す」

古来、鳥は、死者の魂に例えられた。
烏衣（ういい）とは燕。
まっくろな衣を意味する言葉。
そして黒衣をまとう巫女は、運び手となるべく、魂をさし招く。
引き寄せ、我が身に迎え入れる。
それが、神降ろしを可能とする、贄（にえ）の巫女の役目。
他者の魂を、おのが器に降ろし――そして七季は、母を恋しがる、その幼い魂を、本来の器に流し込んだ。
今度は、兆しもなにもない。けれども黒衣の少女は、きっぱりと宣告した。
ふう、と少女の唇から嘆息が洩れる。
「反魂（はんごん）は成りました。
ですが、しばらくは安静にさせてください。肉体から一度離れた

魂は、抜けやすくなっていますから、きちんと定着するまで様子を見た方がいいです」

呆然と――プレシアは、腕の中の娘を、幼いわが子をかき抱いた。

アリシアが、目を開けていたのだ。さっきまでピクリとも動かなかった子供が、たどたどしいながらも言葉を紡ぐ。小さな体は、温かかった。プレシアの腕の中で、冷え始めていた娘は、温度を取り戻していた。

ルビー色の双眸は、まっすぐに黒髪の少女を――初めて見るはずの七季を見つめて、話しかけた。

「お姉さんが、私を『戻して』くれたんだよね？」

金髪の女の子は、その小さな手で、きゅっと彼女の手を握り締めていた。まるで逃がさないというかのように。

「そうだね。それから、初めまして、こんにちは。私は七地七季……うんと、ナナキっていいます」

にぱっと笑って話しかける。もともと七季は子供好きなのだ。

いっぽう金髪の子供は、恩人である黒衣の少女に、好奇心いっぱいのルビーアイを向けて、名乗りを上げる。

「わたしはアリシア……アリシア、テスタロッサ。

初めまして、こんにちは。それから、私とママを助けてくれて、ありがとう。お姉ちゃんは、どこから来たの？　もしかして、次元漂流者？」

さっき見てたけど、いきなり現れたよね。

どうやらアリシアは、魂が体から抜けてしまった後も、この場に留まって、一部始終を見ていたらしい。

今度は、ぱちぱちと七季が黒瑪瑙の瞳を瞬く番だった。

「じげんひょうりゅうしゃってなに？」

――「次元」「漂流者」って変換で合ってるのかな。

国語が得意教科の黒巫女は、どんぴしゃりの答えを脳内ではじき出しつつ、ちらりと仮説を立てた。

つまり、この世界は異次元からの旅人、もしくは異邦人が、そこ

まで珍しくないということ。
膝をついたまま、こてん、と首をかしげる黒髪の少女の言葉を聞いて、アリシアも同じように首をかしげた。
「次元漂流者を知らないの？
でも、後ろのおじさんと、猫さんは、お姉さんの『使い魔』だよね？」
幼い女の子は、自分と同じ目の色をしたリドルが気になるようで、いつのまにか戻ってきて、七季の足元に控える黒猫へ、ちらちら視線を飛ばしている。
しかし、それどころではなかった。彼女たちの後ろでは、「おじさん」呼ばわりされた錬鉄の英霊が、顔には出さないまでも、地味にショックを受けていたりする。
いっぽうで、アリシアの口から飛び出した単語に、七季とアーチャーが妙な顔をした。
従者と主は、その鋼色の瞳と、夜色のそれを見合わせる。
おそらくこの世界は、彼らがいた世界よりも科学技術が進んだ世界だろう。
「次元漂流者」が、こんな小さな子供でも知っているくらい、ふつうの単語としてまかり通っていることからして、多分にＳＦ寄りの――近未来的な文化のはずだ。
なのに、過去へ向かって疾走する「魔術」的な単語が飛び出してくるとは、どういうことか。
眉根を寄せるふたりをよそに、黒い毛並みの猫は、ルビー色の瞳でためいきをついていた。
――ああ、やっぱここ、「リリカルなのは」なわけね。

#08　のっけからクライマックス－またはちゃぶ台返し－（後書き）

あとがき

＞というわけで、アリシア蘇生。

ちょっと冗長な上に読みにくいかもしれません。申し訳ない。

オリ主はＰＴ事件を解決したことになり、「神使」としての徳は積めたのですが、本人は自覚ナッシンです。

「リリなの」原作を知ってるリドルは理解してますが。アーチャーとオリ主は「リリなの」を知りません。

あ、フェイトはちゃんと後で登場します。それも相当なファザ……ブラコン？＆シスコンになって。誰とは言いませんが、ええ。

ちなみに「大祓詞」は、かなり省略しました。長いもんで（ルビふるのがしんどかったともいう）。

＃０９　とある巫女さんの日常ー お仕事です ー（前書き）

まえがき

＞今回は、オリ主とオリキャラ中心の番外編的な話です。
　リリなのキャラは登場しません。

#09　とある巫女さんの日常ー お仕事です ー

朝は眠い。
授業はダルい。
教師はうざい。
ごはんは美味しい。
それが、彼女の日常。

友人と共に昼食を済ませた少女――漣真言（さざなみまこと）は、顔を出した図書室のカウンターに、見慣れた存在を認めて、とことこそちらへ寄って行った。
ふわり、と風を孕んで翻る、紺色のプリーツスカートが学生らしい。
「やほー、ナナちゃん」
「あ。こんにちは、先輩」
大きな黒い瞳が目立つあどけない面差しに、夜色のロングヘアをポニーテールに結い上げた彼女は、七地七季という。
セーラー服の胸元を押し上げる、大変けしからん山嶺は、しかし真言自身にも共通する点である。制服って凶器。
さておき。
ぱ、と顔を上げた黒髪の少女は、童顔に似合わず、表情の薄い仏頂面だった面輪に、にじむような笑みを浮かべてあいさつする。インドア派のため、ふっくらした頬は白く、マシュマロというよりは、しっとりとした羽二重餅を連想させる。
ありていにいえば、ほのかに甘くて美味しそう。

いかんせん、そのやわらかな甘さを知る者は少ないけれど。
カウンターの向こうに座る彼女は、物怖じしない性格ではあるものの、打ち解けない相手には、解りやすいほどの線引きをする傾向があるのだから。
いうまでもないが、真言は、年の差こそあれ、七季にとって数少ない「身内」認識の友人である。
「きょう、当番なんだ？」
問うというよりは、話を振るための言葉。
ここで、蔵書の返却や貸し出し作業を受け持つカウンター当番は、図書委員の仕事である。
しかしそれは二人一組で請け負うはずで、真言はことりと首をかしげた。三つ編みでまとめた、長い栗色の髪が揺れる。
「もうひとりは？」
「それが……霜夏と知り合いだったみたいで。用があるから、ちょっと席を外すって」
連れて行かれた、と。
ふむ。
一瞬だけ、真言はその大きな双眸を細めた。
――ははあ。ナナちゃんにつく「悪いムシ」退治か。
すぐさま彼女は、この後輩と同い年の少年の行動に思い当たって、ないしん「ごしゅーしょーサマ」とひとりごちた。
霜夏という名の彼は、ほとんど生まれたときからいままでに渡って付き合いのある、七季の幼なじみだ。成績優秀、スポーツ万能、とテンプレ風味な爽やか少年である。
のだが。
ふだん気のいい、親切な彼は、たったひとりが絡むと豹変する。
イトコであり、幼なじみである少女――ただいま真言の前で、ほわほわ笑っている七季こそが、霜夏の地雷、もとい逆鱗である。
七季ほどではないにしろ、そこそこ長い付き合いのある真言の知る限り、若白髪の少年は、さりげなく、それでいて周到に、周りへ

と牽制かけまくっていたはずだが、それに物怖じ、もしくは引っからなかった男がいたらしい。

おそらくは今頃、絶賛「O・HA・NA・SHI★」タイムなのだろうが、珍しく七季の目の前で連行するほど、とは、よっぽどお怒り、かつ見過ごせない状況だったのだろう。

――ん～。デートにでも誘うところだったとか？

どんぴしゃりであるが、残念ながら、ここに同意してくれる人間はいない。そもそも当事者である七季は、気づいてもいない。

鈍いにも程があるだろうが、いかんせん、霜夏や真言による純粋培養に近い囲い込みで、大事にされている少女は、ある意味ツワモノである。

自分の好意を伝えるのも悪気なくストレートだが、いっぽうで、彼女自身もストレートに言われなければ伝わらないという、一概に悪癖とも言いがたい習性を持っていたりする。

そもそも、件（くだん）の霜夏からして、体当たり気味なスキンシップや「大好き」呼ばわりの役得に預かっているのだから。

――おっぱいはいいよ、おっぱいは。

そして、真言もまた、この可愛がっている後輩の、Gカップを枕にしたり顔を埋めたり、手もみできる特権を持っているため、ちゃっかり口をつぐんでいる。

女の子でも、気持ちイイものは気持ちイイのである。

たゆんたゆんの、ぽよんぽよんの、もにゅもにゅである。

たまらんのである。

――自分のは触っても面白くないけど、他人のおっぱいは別だもんね！

内なる主張を滾らせながらも、真言は、その可愛らしい美貌に、これでもかと惜しげもない笑顔を浮かべた。外見（そとみ）は桜花（おはな）で、中身は漢（おとこ）、それが真言クオリティ。

「そっかー。んじゃ、また後で霜夏も来るだろうし、伝言お願いできる？」

――頑張れ霜夏。ナナちゃんは私の嫁だが、さもなくば君の嫁だ！
そして、似たもの同士の先輩後輩は、やっぱり真言も身内に甘かったりするので、他の有象無象よりも霜夏びいきだったりする。
ちなみに真言いわく「アレはうちのペット」だそうな。
……がんばれ、霜夏少年。
「放課後は『お仕事』だって」
にやん、と口端を吊り上げた、栗毛の巨乳セーラー美少女に、対する七季は、ほやんと笑って返事をした。
「はーい」

さて、放課後である。
ところ変わって神門（みかど）神社。
「準備できましたー」
「第二種装備、積み込み終わりました」
「きょうはどこなんです？」
神社の敷地内にある、神門家の屋敷。その玄関に、三人の少年と少女が勢ぞろいしていた。
上下まっくろな巫女服をまとった、黒髪の少女、七季。
白い上着に浅葱彩の袴をはいた、若白髪の少年、霜夏。
赤と黒のカンフー服を着こなした、栗毛の少年、伯言。
神門神社の、通称「バイトーズ」である。
全員が同い年の、幼なじみトリオで、なおかつ神門神社でアルバイトをしているという面々だった。
ふだんは社務所で、お札の授与をしていたり、境内の掃除をするのが主な仕事で、参拝者にもファンがいたりする。
が、彼らには――というより、神門神社には――もう一つの顔があった。
「よし。きょうの任務は四丁目の村田ビルだ」

伯言の問いに答えたのは、神門神社の神主代理である、神門汐そのひと。ようするに、神社の跡取り息子だ。

「あー、それってこの前ビル火災のあったとこだよねー」

そんな青年の背後から、ひっつくようにして、ひょこりと栗毛の美少女が顔を出す。こちらも、緋色の袴に白い上着と、おなじみの巫女さんスタイル。

ただし、いつもと違うのは、その手に刀袋を持っていることか。

「タチの悪いやつが居座ってるらしくてな。工事関係者に、何人も怪我人が出てる。燃えたフロアのリフォームをしようにも、手が出せんそうだ」

そこまで告げて、青年はニヤリ、とあくどい笑みを浮かべる。

「つーわけで、俺たちの出番、ってな」

ぱん、と手を打ち鳴らす神門に、バイトーズからの声が返る。

「あいさー」

「一等地ですもんねえ」

「ま、仕事ですから」

七季と霜夏、そして伯言の順番で、それぞれが玄関を出て行く。目指すのは、まっくろなファミリーワゴンだ。

その後ろを真言と青年が追いかけ、助手席に緋色の袴、運転席に神主姿の神門が乗り込む。

「一八〇〇（ヒトハチマルマル）、帝都心霊庁第一課、チーム『斗花（とうか）』、任務開始だ」

車載の無線に向かって、男の声がそう宣言した。

＃０９　とある巫女さんの日常ー お仕事です ー（後書き）

あとがき
＞戦闘シーンはさっくり省略。

＃１０　とある巫女さんの日常ー お仲間です ー（前書き）

まえがき

＞前回に引き続き、オリ主とオリキャラ中心の番外編的な話です。

今回は最遊記とのクロスネタが混入しています。

#１０　とある巫女さんの日常ー お仲間です ー

無事に悪霊退治をこなした五人組は、その足で次の現場へと向かう――前に、腹ごしらえをしていた。

「はむ、んぐ、うぐうぐ……さんぞー、それ取って」

「ん。でだ、こっちは河童と八戒がテストで来れないっつーんで、そっちと合同任務になったわけだが」

「あー。なるなる。大学はテスト期間なわけね」

「真言。ついてる、こっち向け」

「んむー」

「神門さん、あいかわらず過保護ですね」

「それ、伯言と霜夏は人のこと言えないと思うぞ？」

『ははははは、なんのことかな？　悟空ー』

「ひててて、頬ひっはんらー！」

とある監獄風居酒屋の個室にて、にぎやかな食卓風景が繰り広げられている。

小動物ちっくに、ひたすら料理をむぐむぐし続ける、あどけない面差しをした黒髪黒目の巨乳少女。

卓に乗った大皿の大半を空にした、こちらも童顔の、大きな金睛眼に栗毛の少年。

ヘビースモーカーな、モデルも顔負けの美貌に仏頂面がもったいない、紫タレ目パツキン青年。

日本酒の一升瓶を手放さない、愛らしくも秀麗な容貌と、琥珀の目が特徴的な、栗毛の美少女巫女。

鋭い目つきと濡れ羽色の黒髪で、その巫女さんの世話を焼く美青年神主。

そんな主従を生温い目で見守りつつ、料理を盛った取り皿を、隣

に座る七季へと渡す、端正な顔立ちの若白髪が目立つ少年。
思わずツッコミ入れた栗毛の少年に、若白髪の少年ともども、その頬を引っ張る、ジャニーズ顔な栗毛かつ紅茶色の目をした美少年。
なかなかのカオスである。
このメンバーが、悪霊退治ご一行だと、どこの誰が気づくだろうか。
コスパ帰りの芸能人と、その連れ、と言ったら納得するだろうが。
もちろん入店の際に、店員が目を丸くしたのは、いうまでもない。
主にメンツの美形率で。
「……そろそろ出るか」
けっきょく、任務の打ち合わせそっちのけで、グチと雑談に終始した一同だったのだが、それでも神門と三蔵が酒に手を出さないあたり、仕事の区別はついている――はずである。
巫女さん（紅）飲んでたけど。

「ナナちゃん、そっち行った！」
退魔行の最中、霊団から分離した悪霊――なかなかの強さの――が、黒ずくめの巫女めがけて飛んでいったことに、緊張が走り抜ける。
が。
「んお？」
ぱちんっ。
きょとんとした七季のまとう、目に見えない壁に弾かれて、黒いもやのような悪霊は、とり憑くつもりだった少女に、びたんと顔面を張られたような（イメージの）衝撃を受けていた。
ぼんやり暗黒色の人魂は、打ち上げられた魚のように、空中でびちびち戸惑った動きを見せる。
いわずもがな、隙だらけであり。

ばしゅっ！
そこにすかさず破魔札が叩きつけられ、悪霊は問答無用で調伏された。
ちなみに七季は無傷である。
「ああびっくりしたぁ」
「うわー。あいかわらず、悪霊もビックリの防御力」
のんききわまりない少女の反応に呆れながらも、ポルターガイスト現象によって飛んでくるカウンターを、がこりと素手で砕く悟空。木製のそれは、あっけなく木っ端微塵に砕け散った。
可愛らしい外見に似合わない破壊力を誇る栗毛の少年は、それまで加わっていた前線から離れ、一同のサポートに徹する、黒髪の少女の護りにつく。
いくら霊的防御力が高いとはいえ、物理的な衝撃は、この黒衣の巫女をたやすく傷つけるからだ。
「こっちは任せろ！」
「それ僕の役目！」
「こっちの台詞です！」
男前に言い放った悟空へ背中を向けたまま、霜夏と伯言が悪霊を武器で打ち払う。
ガゥンガゥンガゥン。
今回の現場はホストクラブ。照明を効果的に使って演出するための、まっくろな部屋に轟く銃声。それに負けじと、三者三様の少年の声が響いた。
すかさず凛とした叱咤の声が飛ぶ。
「霜夏と伯言は先輩の援護に集中っ。時間稼いで！
先輩は突出しすぎです！
神門（みかど）さんも抑えて！
数が多すぎます。このまま触媒の探索が上手くいかない場合は、大技で一掃するべきですっ……三蔵、準備を」
凛としたソプラノが、聞くものの耳を打ったとたん、飛ばされた

指示に、それぞれが動く。
　前線から一歩飛び出していた、神刀を振り回して悪霊をなで斬りにする真言――その両脇に並んで、霊的な加護を施された棍をふるう霜夏と、双剣をはらう伯言。そのたびに悪霊たちが悲鳴を上げて吹き散らされる。
　この部屋に霊を集め続ける原因である、触媒を探査する神門（みかど）は、幼なじみを案ずるあまり、散らしていた集中をふたたび術式へと集める。
　霊的処理を施された弾頭を、リボルバーで撃ち続けて、前線の援護に回っていた三蔵は、その手を止めて、低い声で真言（タントラ）を唱え始めた。
「オン　マニ　ハツ　メイ　ウン」
　瞳の彩と同じ、紫暗の燐光が、金髪の青年から湧き上がっている。
「――見つけた！」
「どこですかっ？」
　神門の声に七季が問う。
「そこの通風孔の奥だっ」
「ぅえええ！？」
　青年神主が指摘したのは、ただいま彼らが築いている前線の向こう――ありていに言えば、霊団の背後にある壁。その上にある、天井の金網あたりだった。
　七季が悲鳴を上げるのも無理はない。
　日ごろ、退魔行で司令塔を務める少女の判断は迅速だった。
　結論。無理。
　すかさず指示を飛ばす七季。
「三蔵、ゴー！」
『魔戒、天浄――！！』
　宣言と共に、三蔵の受け継ぐ、魔天経文の力が解放される。
　カッ！
　生ける蛇さながら、はためく経典。あふれる霊光。

「うぶっ！？」
「おわ」
青年を中心に放たれた浄化の光が、漆黒の壁に鎖された空間にたむろする悪霊たちを根こそぎ滅していく。
神々しい光から目を庇う人間たちが、ようやく視界を取り戻した後には、まっくろな壁の割りに、白けたような印象を与える部屋が残されていた。
しかし、仕事は終わらない。
「いまのうちに、触媒を確保してくださいっ。時間が経つと、また霊が集まってきます！」
きりきり追い立てる黒髪の少女の言葉に、はっと緊張を取り戻す一同。
だが、大技を繰り出したばかりの金髪の青年は、悠然と煙草に火をつけて動かない。
もめた挙句に、いちばん身体能力の高い悟空が埃だらけになって、触媒である木彫りのヒトガタを通風孔から確保すると。
「……そういえば、先輩の式神さんに、取ってきてもらえばよかったのでは？」
ぽん、と思い出したように放った七季の言葉に、「あああああっ！」と悟空が抗議の声を上げたとか、上げないとか。

＃１０　とある巫女さんの日常ー お仲間です ー（後書き）

あとがき

＞そんなわけで、オリ主の能力を少しだけ登場させてみました。

「＃０４　黒猫の回想ー使い魔の記憶ー」でも、ちょろっと記述があったように、オリ主はリドルの服従呪文を無効化するほどの対魔・対霊防御力が高かったりします。

退魔行においては、攻撃力はありませんが、主に全体を見渡しながら情報を分析する司令塔、およびサポート的な役目を担当。

ちなみに同業者として登場した、三蔵、悟空は「最遊記」から引っ張ってます。

#１１　とある巫女さんの日常ー お泊まりです ー（前書き）

まえがき

＞前回に引き続き、オリ主とオリキャラ中心の番外編的な話です。

#11　とある巫女さんの日常ー お泊まりですー

そして午後十時。

退魔行を、都合三件さっくり片付けた五人組は、仲良く神門（みかど）神社にたどり着いていた。

「んにゃあ～……ぬっくい～……」

旅館でもないのに、お湯がたっぷり張られた総檜（そうひのき）の湯船で、くったりくつろぎまくっている黒髪の少女が一人と。

「ざーんーこーくーな♪」

どことなく聞き覚えのあるアニソンを歌いつつ、洗い場で泡まみれになっている栗毛の美少女が一人。どちらも、けしからんレベルのふくらみを胸部に装備している。

いっぽうは、湯船の中にたぷるんと浮かぶ、双子の小島と化し。

もういっぽうは、まっしろな泡の雲をまとった雄大な山嶺の態（てい）をなしている。じつにみごとな光景である。

幸か不幸か、この桃源郷は、真言の使役する式神や、彼女を妻と認識する龍神の防衛ラインに守られて、のぞくことは不可能だったりするのだが。

そして脱衣所では。

「着替え、ここに置いとくからなー」

ナチュラルに着替え一式を持ってきている、黒髪の青年神主がいたりする。

「本気で違和感も覚えないところに、あいつの悲哀がにじみ出ているな」

ところ変わって、神門（みかど）家の居間では、そんなことを口にしながら、金髪タレ目の青年がくわえ煙草スタイルで、報告書をタイプしていた。ちなみにノートパソコンは持ち込みである。

『帝都心霊庁第一課　課長補佐　チーム「桃源」責任者　玄奘三蔵』
きょうの日付の下には、そんな活字が読み取れる。おそらくテンプレートなのだろう。隣に置かれた、もう一台のノートパソコンの画面には、同じ書式で
『帝都心霊庁第一課　課長　チーム「斗花」責任者　神門汐』
とある。こちらは神門（みかど）の報告書らしい。
しかしながら、それをタイプしているのは、どういうわけか、若白髪の少年――霜夏だったりする。
「先輩の世話は、神門（みかど）さんの生き甲斐ですからね……」
ためいきつきつつ、打ち込みの手は止めない霜夏。その端正な横顔には、哀愁の影がにじむ。
限定一名で、けなげに奉仕する、あの青年神主の恋が、どうやっても叶わないことを知っているので、同じ男としては同情しきりなのだ。幼なじみに片想い、という境遇が、自分とかぶっているせいもある。
「いつものことですしね。男と認識されてないんでしょう、たぶん。それはいいんですけど、そこの三行目、誤字です」
「うわ、マジ？」
横から入った伯言のツッコミに、あわててカーソルを動かす霜夏。その隣では、三蔵とに挟まれながら、悟空がむぐむぐ夜食の肉まんを詰め込んでいる。
埃だらけになった少年は、一足先に済ませた風呂でさっぱりと汚れを流し、その痕跡は、もはやない。
「きょう泊まんの？」
「いまから帰るのも面倒だしな」
つややかな天使のわっかがかかる栗毛に、がしがしタオルを絡ませて水気を切っている悟空。
そんな養い子の問いかけに、三蔵が、くわえた煙草のまま答える。いまは眼鏡をかけているため、秀麗な美貌がいっそう知的に見える――はずなのだが、眉間のしわとすがめた紫眼で、仏頂面がいっそ

う機嫌悪く見える。
もっとも彼の場合は、書類仕事にうんざりしているだけなのだが。
居合わせている面々は、いずれもそれを理解しているので、さして気にした様子はない。
「それはかまわんがな、布団は自分で敷くように」
と、そこに、脱衣所から戻ってきた、真言専属執事――もとい、神門がきっちり釘を刺した。
「後、お前ら。女部屋に侵入したら殺スぞ」
バイトーズの残り二人、霜夏と伯言に向けて、ハイライトのない目で宣言した青年に、異口同音の叫びが飛んでくる。
『やりませんよ！』
ちなみに女部屋とは、七季が泊まるとき、真言も一緒に眠る客間のことである。
少年ふたりは、長いこと幼なじみである黒髪の少女に片思い中で、そのことを神門も知っている。
が、真言大事の彼は、たとえよく知る彼らといえど、真言の寝姿を拝ませる気はないのである。たいがい神門の幼なじみは、あられもない姿になっているので。
真言を起こすのは、神門の特権なのだ。
ここだけの話、七季が泊まった翌朝は、そのたわわな乳を、真言がわしづかんだまま寝ていたり、少女同士でキスもかくやとぴったりくっついていたり、毎回それ何のご褒美？な光景が展開しているのだが、神門の秘密というやつである。
さておき。
「やりっ。モンハンやろうぜ、モンハン！」
友人宅へのお泊りにはしゃぐ、お子様ひとりと。
「あーうー。この報告書終わったらなー。三蔵、ここどう書けばいいんだっけ？」
悟空をあしらいながら、上司の書類作成を代行する少年と。
「『索敵の結果、障害を困難と判断し』ってとこだな」

霜夏にアドバイスしつつ、人手不足な職場に、青田買いできそうな人材の育成に、こっそりほくそ笑む金髪青年と。

「あれ？　悟空モンハン持ってましたっけ？」

三蔵の意図を、それとなく把握しつつも、同じような進路に進むんだろうなー、と達観しつつある栗毛の少年と。

「悟浄が改造してくれたんだ」

伯言の問いに、嬉々として、赤毛の友人の名前を出す、金目の少年が話しているところに。

「あがったよー」

しっとりつややかな濡れ髪の少女が、無防備なTシャツ&短パン姿で現れて。

「あ、七季。モンハンやろーぜ！」

「おっけー。あれ先輩？」

七季が朗らかに応じているところへ、ぷるぷる震える栗毛の美少女が上げた、悲痛な（後半は怨念のこもった）叫びが響き渡る。

「あたしのぴぃえすぴぃぃ！　おにょれクロロっ、いまからシバきに行っちゃるっ！」

「クロロって？」

すとんと腰を下ろした隣から、伯言に問われて答える七季。

「この前行った、異世界の団長さん。あ、そか。先輩のハード踏んだの、あのひとか」

「ちょ、先輩ダメですって！　ナナも止めてっ！」

いっぽう、暴走するエヴァもかくやという勢いの真言を、必死に羽交い絞めにして止めている霜夏。やわらかいとか、いい匂いだとか、堪能する余裕もなく、少年は、ひたすら栗毛の美少女を引き止めることに腐心している。

このまま彼女に家出されると、十割の確率で、神門（みかど）が暴走する。というか、連鎖反応で、帝都心霊庁の一課が機能停止するハメになる。

それをわかっているものだから、既に三蔵などは、彼らの背後で、

不動縛の術を準備している。霊力で勝る真言を、どれほど止められるかはわからないが、動きを止めた隙に、全員で押さえ込むしかないだろう。

「はいはい。せんぱーい、ダメですよー。せっかくお風呂入ったのに、また汗かいちゃうでしょー？」

「そういう問題か？」

のんきな口調でツッコミがてら、先輩を制止する黒髪の少女に、思わず、横からさらなるツッコミを入れる三蔵。

「うー」

あっさり七季に丸め込まれて、動きを止める浴衣姿の真言。

「しかもそれで止まるし」

七季すげぇ、と感嘆するのは、悟空の声だ。ちなみに真言が異世界に逃亡した場合、いちばんとばっちりを食うのは、彼の保護者である三蔵だと知っているため、胸を撫で下ろしている。

「私の貸しますから、ご機嫌直してください。今度行ったときに、クロロさんには、きっちり付き合ってもらえばいいですしね？」

「うん。わかった」

「さりげなくお仕置き決定！？」

霜夏も幼なじみの言動にツッコミを入れるが、それ自体を止めたりはしない。とりあえず、被害がこちらに来なければいいのである。

少年としても、真言の逃亡が防げたのは幸いだ。

何故ならば、彼女が異世界へトンズラする場合、五割の確率で、七季をオトモに連れて行ってしまうからだ。

ちなみに、その半分――四分の一の確率で、そこに霜夏も拉致られる。

霜夏も連れて行ってくれれば――その先での心労はともかくとして――いいのだが、元の世界に残されてしまった場合、いつ幼なじみが帰ってくるかどうかもわからないから、心配なことこの上ないのである。

ともあれ、「クロロ」なる人物の、成仏は祈っておこうと心に決

めた霜夏である。どこかで聞いたことがある気もする名前からして、仏教徒ではなさげだが。

「三蔵もやる？」

仕事着と同じ、まっくろなゲーム機を取り出して、先輩へと渡す七季が問えば、金髪の青年は、短くなったマルボロを灰皿に押し付けて嘆息した。

ないしんは、いつものようにチーム「斗花」の――神門（みかど）や真言たちの――書類を押し付けられなくて、いささかホッとしていたりするのだが。

「……書類（これ）終わったらな。先にやっとけ」

「あいさー」

「って、三蔵も持ってたんだ！？」

そんなこんなで、神門（みかど）神社における、週末の夜はふけていく。

スリル混じりの、あわただしい毎日。これが彼女たちの日常なのである。

#11　とある巫女さんの日常ー お泊まりです ー（後書き）

あとがき

＞クロロは「ＨｘＨ」から。

「先輩」はジッパーで異世界に出かけては、何かしら収穫してくるのが趣味。トリップ先でドンパチやりつつ事件解決。

後輩であるオリ主は、よくオトモとして連行されます。学業には支障ない程度のスケジュールで確信犯。

◆オリ主世界の登場人物

◆玄奘三蔵（原典：最遊記シリーズ）
真言の同僚。見ため西洋人なのに坊主。帝都心霊庁に勤務している公務員な霊能者。
酒は飲む、麻雀を打つ、ヘビースモーカー、そのうえ拳銃をぶっ放す、典型的な破戒僧。通称は「ナマグサ坊主」「物騒な仏僧」。
プライドが高く、傍若無人。基本ものぐさで人使いが荒いが、意外と面倒見のいい性格。
金髪に紫暗の瞳。身長は１７６センチ。細身で秀麗な容貌。「美人」呼ばわりされると機嫌を損ねる。

◆孫悟空（原典：最遊記シリーズ）
真言の同僚かつ七季の友人。帝都心霊庁でバイトする勤労学生。
保護者の三蔵に、銃を乱射されたり足蹴にされつつも、元気に懐く天然少年。
幼い外見に反して、中身はかなり男前。まっすぐな性格で、ストレートな言動は相手の度肝を抜くこともしばしば。
栗色の髪に金の瞳。身長は１６２センチと小柄だが、大人を凌駕する怪力を誇る。

#１２　妹ー朝の風景ー

ぺむぺむ、ぺむり。
ぺちぺち、ぺちり。
「んー」
「おはよう、ナナキ」
「おはよう、お姉ちゃん！」
まっくろにゃんこと、らぶりー幼女が朝を告げる。
にわか巫女さんの異世界道中記、始まるよ！

「起きたのかね、マスター」
「おはよぉ、あーちゃー」
とってことってこキッチンに現れた黒髪の少女に、赤いエプロンが異様に似合う男が声をかける。ちょうどサラダを盛り付け終わったところのようだ。
すっかりキッチンの支配者と化した白い髪の偉丈夫は、鋼色の双眸をちらりと流して肩をすくめる。
少女の大きな瞳は、とろんとして眠たげだが、洗顔は済ませてきたらしい。前髪のはしっこが少しだけ濡れている。黒髪じたいは、うっとうしいのか、既に高く結われて、おなじみのポニーテールとなっていた。
いまだパジャマ姿ではあるが、七季の寝起きは悪くない。どこぞのあかいあくまとの違いに、ふとアーチャーは薄い笑みを浮かべた。
「おはよう。そこの皿を運んでくれ」
「あいさー」

口調は間延びしているものの、少女の足取り自体はしっかりしているのを確認して、弓兵の二つ名を自称する従僕は、主へと指示を飛ばす。

いっぽうの七季も、さして気にした様子もなく、あっさり盛り付け済みの皿をプラスチックのトレイに載せる。

「アーチャー！

お姉ちゃん起こしてきたよっ」

すると、そこに新たな影が飛び込んでくる。元気いっぱいの声を上げる金色は、いわずもがな、テスタロッサ家の娘、アリシアだ。

アイランド式のキッチンから、リビングへと朝食を運ぶ七季と入れ違いにやってきたものだから、すんでのところで衝突しそうになった少女が「おわ！」と声を上げる。

「よっと」

かろやかなテノールとともに、ぐい、と七季のウェストを支える手が横合いから出てくる。

「ちょっとアリシア。もうちょっと気をつけなよ。レディーにあるまじきふるまいだよ」

いきなり現れたのは、西洋系の顔立ちをした、白い肌と黒髪の美少年。いでたちは、シャツにネクタイ、セーターというホグワーツの制服である。

切れ長のルビーアイは、同じ目の色をしたアリシアと並べば、「兄妹かな」と思われるかもしれない。

しかしながら、その正体はというと、七季の使い魔であるリドルだ。アリシアとともに宵っ張りの少女を起こした後、主を追いかけてきた彼は、タイミングよく黒猫から人型になって七季を支えたのだった。

「ごめんなさい、お姉ちゃん……」

やんわりと叱られた金髪の幼女は、しゅんとうなだれて七季に謝る。よくも悪くも素直なのだ。

「ああびっくりした。ありがとな、リドル。

謝ってくれたし、許すよアリシア。でも、今度からは、もうちょっと周りを見るように気をつけてな。

ぶつかったら、アリシアが怪我をするかもしれないし、アーチャーがせっかく作ってくれた朝ごはんも、台無しになるところだったんだから」

食い意地の張った――もとい、「美味しいは正義！」と言って憚らない少女は、眉尻を下げて、彼女を「姉」と呼ぶ女の子を撫でくりながらたしなめる。

その言葉に、ぱっと顔を上げたアリシアは、今度はぷるぷる震えながら、七季の太股にしがみついた。

「ご、ごめんねアーチャーっ」

ふだんはエプロンの似合う――似合い過ぎる――優しい男だが、ちょっと偏食気味なプレシアを叱ったときには、背後の鬼神が見えたアーチャーの、その恐ろしさは、きっちりバッチリ覚えていたらしい。

その他にも、通りすがりの騒動に巻き込まれたせいで食材が無駄になり、静かに冷ややかに怒っていたこととか。

「……いや。怒ってはいないから、落ち着きたまえ、アリシア。そこまで脅えられると、いささか不本意だ。料理は美味しく食べてもらいたいからな」

「だ、だいじょうぶっ。アーチャーのごはんはいつも美味しいよっ」

にぎりこぶしを作りつつ、ちょっと見当違いな方向に切り返す、テスタロッサ家の長女に困って、アーチャーは視線を流し、コンロからケトルを下ろした。

「ありがとう、アリシア。さてリドル。いつまでマスターとそうしているつもりかね？」

「いや、ナナキのお腹が気持ちよくて」

パジャマの隙間から差し入れた手で、黒髪の少女の腹部を撫でさすり、ついには、むにむにと揉み始めた少年に、今度はしんそこせっぱつまった悲鳴が上がる。

「ぎにゃー！　なにしやがりますか馬鹿リドルっ！」
美味しいものは大好きだが、体重は気になるという、ごくふつうの乙女心を持ち合わせた七季の声は、いっそ悲痛だった。断末魔にも近い。
ちなみに抵抗できない理由は、少女が両手に持っているアーチャー謹製の朝ごはんを載せたトレイである。美味しいものが大好きな七季にとって、それは朝の至福を約束してくれる宝物に等しい。
セクハラに対する羞恥よりも、食欲を優先するあたり、筋金入りの食い意地である。
どこぞの騎士王がその場にいたならば、ちからいっぱい同意してくれるだろう。あと乙女の味方として、エクスカリバーを抜いたかもしれない。
仮定はさておき。
そんな主の姿を見て、この男が黙っているはずもなかった。
じゅっ、ごん。
どこぞの海洋生物じみた擬音とともに、沸騰したお湯がたっぷりのケトルの底が、容赦なくリドルの後頭部に押し付けられた。殴打する勢いで。
それでもお湯をこぼさないのが、執事クオリティである。さすがはアーチャー。
「――！？」
いくら人外とはいっても、ふつうに五感を与えられているリドルは、言葉もなく転がり、身悶えた。
さりげなくその体を足蹴にしながら、アーチャーはにこやかに――あくまでも穏やかな声で――この家のお嬢様方に朝食を取ろうと促す。
涙目だった黒髪の少女の目尻から、そっと無骨な指が涙をぬぐっていった。
ちなみにその横では、容赦ないアーチャーの制裁っぷりに、アリシアがますます「アーチャー最強説」を固めてぷるぷるしている。

自分を「姉」と慕う、そんな幼女が可愛らしくて、パジャマ姿の七季は、無言でアリシアを撫でくった。

そこに、ちょうど七季の悲鳴を聞いて飛び起きてきたプレシアも――こちらはまた徹夜明けらしい部屋着姿で――キッチンの惨状（一部限定）を見て、あっというまに事態を把握したらしい。

「おはよう、アリシア、ナナキ……リドル。それからアーチャー。私にはコーヒーもらえる？」

「おはよう、プレシア、リニス。カフェオレにしたまえ。徹夜明けなのだろう？

それに昨夜はコーヒーを飲み続けていたのではないのかね。胃に悪いぞ。食べてからすぐ寝るのも良くないが、せめてミルクは多めにすることをお勧めする。

マスターはディンブラとアールグレイ、どちらにするかね？」

すっかりおなじみの小言をプレシアに進呈しつつ、なめし革のような、褐色の肌の偉丈夫が口にしたのは、紅茶の銘柄だ。コーヒー派のプレシアをのぞき、テスタロッサ家の朝は、紅茶で始まる。

問われた七季は、少し首をかしげて悩んだ後で、「ん。アールグレイで」と答えた。

「了解した。リニス。君にはスープを冷やしてある。少々待ちたまえ」

そう声をかけられたのは、プレシアの足元にいる山猫である。頷く彼女は、アーチャーから足蹴にされてのたうつリドルを器用によけて、ちょこんとキッチンの一角にお座りした。こちらも慣れたものである。

「はい、アーチャー。いつもありがとうございます」

かつてアリシアと共に息を引き取った、テスタロッサ家のペットは、いまやプレシアの使い魔だが、まだまだ動物の習性が抜けず、食事は人間のものより猫に近い。

やがて飲み物の支度も整った食卓で、低い声が音頭を取る。

「それでは」

『いただきます』

テスタロッサ家の朝は、こうして始まる。

#１２　妹ー朝の風景ー（後書き）

あとがき

＞オリ主ご一行、テスタロッサ家に居つきました。

　前回からどれだけ時間がたったのかというと、じつはそれほどでもないんですが。

＃１３　戦友ー午後の風景ー（前書き）

まえがき
＞今回は少しだけ管理局アンチな描写があります。

#13　戦友ー午後の風景ー

ヒュードラ事件――後にそう呼ばれた、アレクトロ社による、新型の大型魔力駆動炉開発の暴走、それに伴うエネルギー漏れが引き起こした事故は、多くの人々の人生を変えた。

その事件のさなか、たまたま事件現場近くに現れた次元漂流者の運命も――。

「訴えるよ！　そして勝つよ！」

アリシアを蘇生した七季は、その母・プレシアから事情を聞いた後、開口一番にのたまったセリフが、それだった。

一方的な言い分だけを鵜呑みにするのは良くない、というアーチャーの助言もあって、とりあえずプレシア親子の家に落ち着いた七季一行は、すぐさま事件についての詳細を調べたのだが――真相は、さらに悪いものだった。

問題の多い前任者からの引き継ぎ、上層部の勝手な都合で厳しくなるスケジュール、上層部に嫌気が差しやめていくチームスタッフたちの事後処理。

すべてがプレシアの言葉通り、否、それが控えめに思えるほどの内情。

おまけに、事故の原因となった、駆動炉を作ったアレクトロ社の上層部は、時空管理局と癒着。事故の責任を、すべてプレシアに押し付けようとしていた。

それらの調査は、もちろんアーチャーやリドルが立ち回り、詳細に調べ上げたもの。

いっぽう、管理世界には珍しい――先輩に持たされた――術式や護符を用いる七季は、従者の帰りを待ちながら、プレシア親子を狙

う侵入者たちを片っ端から締め出し、跳ね除けたのだった。
結果。
ミッドチルダにおける常識や法律を身につけた七季の主導の下、プレシアはアレクトロ社を告訴および告発。
ぐうの音も出ないほどに証人や証拠を揃えられたアレクトロ社と、癒着までもが暴かれた時空管理局は、多数の逮捕者を出すことになった。
また、プレシア親子を狙った刺客を明らかにされたアレクトロ社は、彼女たちに謝罪。
そのうえ七季たち次元漂流者が、この次元世界に引っ張り込まれた原因が、駆動炉の暴走事故かもしれないという可能性まで訴えられ、プレシア親子および、駆動炉事故の被害者に、賠償金を支払うことで和解するという結果を望んだ。
七季がマスコミに情報をリークしたことで、企業イメージがさらに悪化することを懸念したことも大きいだろう。
司法機関が証拠の捏造や隠蔽（いんぺい）工作をする可能性も考えて、世論を味方につけておいた、彼女の勝利とも言える。
いっぽう、往生際の悪い時空管理局はといえば、癒着が明らかになったものを切り捨てることで、いっそうクリーンになったのだと、再三のアピール。それによって内部の腐敗をごまかすに留まった。
駆動炉実験の許可を出したことに関して、当時の担当者（解雇済み）の責任だという一点張りである。
このことから、テスタロッサ家と七季たちは、時空管理局に対して深い猜疑心を抱くことになった。

「しかし……よくもまあ、次元漂流の原因が、駆動炉の暴走などと言ったものだな、マスター」
概念武装を解き、戦闘服のかわりに黒いシャツと赤いエプロンを

身につけたアーチャーは、おのが主のふてぶてしさに、呆れと感心の入り混じったためいきをこぼしていた。

白い髪の偉丈夫は、彼女がここにいる理由と経緯を――どこぞの巫女さんにジッパーからポイ投げされたというミもフタもない事情ではあるが――知っていたのだから。

言いつつも、男は洗練されたしぐさで、主と家主に紅茶のおかわりを注ぐ。

「なーに言ってるかなぁ。

私たち、文なし。自力でどうにかしなきゃいけないし、悪いことしてるのはあっちだもの。それに私は、あくまで可能性を指摘しただけだよ？」

こちらも仕事着だった、まっくろな巫女服を脱いで、黒いパンツに黒いキャミソール。その上から、薄手のアラベスク柄のチュニックをまとった黒髪の少女は、にっこり笑って膝上の黒猫を撫でた。

「ねえリドル？」

「当然。労働の対価には報酬が欲しいよね」

ちろん、と片方だけ、ルビー色の目を開けた使い魔は、長いしっぽをするりと七季の腕に絡ませて、ごろごろと機嫌良さそうに喉を鳴らした。

「プレシアだって、アリシアが犯罪者の子供、なんて呼ばれたくはないだろ？」

闇の魔法使い――いわば、魔法社会の「悪」であった、ヴォルデモート卿。リドルはその前身であり、彼もまた異能を隠してマグルの元で育ったからこそ、迫害には人一倍、敏感だった。

話を振られたプレシアは、リドルの言葉に深く頷く。

「ええ。そうよね。私はともかく、アリシアが迫害されるのは我慢ならないわ」

母親だからこその言葉。

膝の上に抱かれて、穏やかに眠る金髪の少女に、レンズ越しの優しいまなざしを向けながら、プレシアは「それにしても」と苦笑し

た。

「私が教えたのは最低限の知識と常識だったのに……ここまでやった七季には、感心するばかりだわ。私たち親子のいまがあるのは、貴方たちのおかげよ」

アリシア蘇生の対価として、七季が望んだのは、この世界での最低限の常識と基本的な法律。それから文化に対する知識。あとは七季たちの身元保証人になることくらいだった。

けっきょく、それだけでは不十分だと、プレシアとアリシアは、自分たちの家に七季たち主従を招き、衣食住を世話することにしたのだが。

「どういたしまして。

でも、ここまで上手く事態が好転したのは、いままで真面目にやってきたプレシアの努力と、私の使い魔さんたちの献身のおかげ。みんなには、感謝してるよ」

ふんわりと笑う七季の黒い瞳には、あふれんばかりの好意と慈しみと、感謝の色。

それは大人のプレシアさえも赤くなるほどに、真摯でまっすぐな、てらいのない思いを伝える声音とともに、聞くものの胸を打った。

見れば、七季の膝で丸くなるリドルはそれとなく顔を逸らし、給仕するアーチャーは、そ知らぬふりで目を伏せる。

――感謝してるのは、私の方なのだけれど……。

愛娘の蘇生には、身も世もなく理性を吹っ飛ばしていたこともあって、お礼が言えたのだが、こうして真面目に相対していると、どうにも気恥ずかしいものである。

プレシアは、いまだ自分の頬が熱いことを自覚しながら、腕に抱いた家族の重みに、たしかな幸せを感じて、自らも優しい笑みを浮かべていた。

「そうね。でも七季。貴方だって私の戦友よ。だから一緒に行きましょう」

第９７管理外世界へ。

＃１３　戦友ー午後の風景ー（後書き）

あとがき

＞手っ取り早く、オリ主の資産を作る方法として、アレクトロ社を出してみました。設定は適当に混ぜてます。

裁判は時間がかかるので、和解という方向で早期決着させてみたり。

あと、早々に地球へお引越し。ぶっちゃけミッドチルダ書きにくい……げふんげふん。

いちおうマスコミや管理局の目から逃げるため、という理由があります。

「ちょ、こっち来んなｗ」的な。

#14　プレゼントを作ろう

「プレシアと――」
「アリシアの――」
『簡単☆デバイス教室ー！』

「というわけで、アシスタントのリニスと」
「アーチャーだ。
どういうわけなのかはわからんが、この世界の魔法に必要な、デバイスとやらにも興味があるので、おとなしく参加してみるとしよう。ちなみにマスターは、リドルと昼寝中だ」
「素体が山猫の私が言うのもなんですけど、ナナキは行動が猫っぽいですね。寝るのが大好きで、マイペースですし」
「ふむ。どこかの名探偵いわく、女性はすべからく猫に近い要素をそなえているというが。
まあイメージと言うのはあくまで主観だからな。
たとえ七季が、とある先輩に遊ばれて、つけられたネコミミやしっぽが似合っていようが、ときどきふざけて、にゃーにゃー鳴いていようが、あくまで主観は主観だと言っておこう」
「……それ、遠まわしに、アーチャーも、ナナキが猫っぽいって思っているってことじゃあ……」
「さて、話を元に戻そう」
「ここにきてスルー！？」

「まあ、こんなことをするのにも、ちゃんと理由があるのよ」
ぴっと人差し指を立てながら説明するのは、眼鏡をかけたプレシア。
「アーチャーの知っている魔導技術――『魔術』と、私たちの「魔法」は違うって言ってたでしょう？
その認識の溝を埋めて、お互いの情報交換をできればと思ったのよ」
「まあ、少なくとも、私が知る『魔術』は、機械の類とは、ほとんど縁がないからな。基本的には。
学術的な知的好奇心を満たすための、勉強会のつもりかね？」
「うーん……たしかに、それがないとは言わないけど。ちゃんと、目的は別にあるのよ」
「いったい何だね？」
「あのね、ナナキにデバイスをプレゼントしようと思うの！」
ひょこり、と二人の間に、下から顔を出したのは金髪の少女、アリシアだ。
彼女の言葉に、アーチャーは鋼色の眼をけげんそうに瞬いた。
「もしかして、七季の誕生日が近いからかね？」
「うん。だから、私とママとリニスと、できたらアーチャーとで、手作りのデバイスをあげたいなって」
「なるほど。アリシアのアイデアというわけか」
ならば、娘を愛することにかけて、そろそろ病膏肓（やまいこうこう）に至るプレシアと、その使い魔であるリニスが全面協力するのは、むべなるかな。
リドルが除外されたのは、多分に「魔法使い」に偏（かたよ）っているのと、年代的に、あまり精密な機械をあつかう機会がなかったからだろう。
いっぽうアーチャーは「解析」の魔眼を持っているうえ、テスタロッサ家の家電も、仕様書を見ながら修理できる程度の腕前はあることから、助手に抜擢されたのだと思われる。
もともと彼は手先が器用で、「作る」ことに向いているせいもあ

る。
「それでですね。私たちの住んでいた管理世界と、七季の世界では、文化や魔法が大きく違うと聞きまして。
アーチャーには、七季の世界を知るアドバイザーとして、助言をいただきたいと、こういうわけです」
リニスも、プレシアの横から口を挟む。
「ふむ……しかしな。厳密に言えば、七季と私の知る『魔導技術』も、違うといえば違うのだがね」
そもそも彼女は、『魔法』を使ったことがない。
神道の巫女であるのだから、当然といえば当然なのだが。
「そのあたりも踏まえて、情報が欲しいのよ」

「ところで、アーチャーはナナキに何をプレゼントするか、もう考えてたの？」
「いちおうホールケーキを二つほど焼こうかと」
「ホールで二つって……え、みんなで食べるぶん、ですよね……？」
「否（いや）、マスターの分だけだが。個人的なプレゼントと、みんなで食べる分は、また別だろう？」
「当然のように不思議そうな顔！？」
「みんなで食べる分は生ケーキ。プレゼント分のひとつは、紙型で焼き込んだシフォンケーキで、もうひとつの方は、それよりも日持ちするようにドライフルーツ入りのブランデーケーキのつもりだったぞ」
「間違いなく、一人で食べきるための配慮だわね……」
「アーチャーの作るお菓子、美味しいもんね。きっとナナキ、大喜びすると思う」
「いくらナナキでも、ケーキをホール二つ分とか無理……じゃない、気がしてきました。ああッ、笑顔でワンホール一日で消費しそうな

想像が消えませんっ！」
「一日ワンホール程度、どこかの騎士王に比べれば可愛いものだが」
『本気！？』

#１４　プレゼントを作ろう（後書き）

あとがき

＞デバイスネタまで行き着きませんでした。

まあ、ホールケーキでも、５号、６号あたりなら一日ワンホールでも食べれる気がします。

体重計は恐ろしくて近寄れないでしょうが。

#15　デバイスってなあに？

「まあ、ナナキの胃袋に関する神秘は置いておきましょうか。女性の体には神秘が多いものだしね」
「含蓄のあるコメントをありがとう、プレシア。
さて、まず最初の疑問だ。『デバイス』とは何かね？」
「いい質問ね」
プレシアは、挙手とともに発言するアーチャーに対して頷くと、リニスがどこからか引っ張ってきたホワイトボードに、マジックペンで「デバイスとは？」と書き込んだ。
ちなみに、いま一同のいる場所はどこかというと、テスタロッサ家にあるプレシアの研究室だったりする。
「広義の意味では、『比較的単純な特定の機能を持った機器、装置、道具』を指す言葉ね。
ＩＴの世界では、何らかの特定の機能を持った電子部品という意味と、コンピュータ内部の装置や周辺機器などの意味で用いられることが多いかしら」
ちゃり、とプレシアは長い指で眼鏡のブリッジを押し上げる。
「パソコンで言うなら、ＣＰＵやメモリ、ハードディスク。それからキーボードやマウス、プリンターなんかの周辺機器も、デバイスと呼ばれるわね。
キーボードは入力装置、プリンターは出力装置。こういう風に、専門の機能を持ったもの、と理解してくれればいいわ。
少し先走った説明になるけど、デバイスを動作させるには、制御するソフトウェアが必要よ。
これはデバイスドライバといって、たいていはＯＳ……パソコンの標準的な中身に同梱されてることが多いんだけど。たとえば、中

古のスキャナやプリンターを買ったとするでしょう？
　すると、パソコンのＯＳにドライバが入っていない場合があって、そういう時は、そのデバイス用のドライバを、付属のディスクでパソコンにインストールするか、もしくはメーカーのホームページでドライバをダウンロードする必要があるわね」
　キュキュッ。
　ホワイトボードに、「ＰＣ」。その周りを、ぐるりと囲むように、「プリンター」、「キーボード」、「マウス」などと書き加えられた。その横に「デバイス」とカッコでくくられる。
　また、「プリンター」と「ＰＣ」を繋ぐ、線から伸びた先に「デバイスドライバが必要」と板書される。
「なるほど。デバイスとは、作業を手助けする種類別に特化した、道具なのだな？」
「そういうことね」
　アーチャーの言葉を肯定するプレシア。その横から、母親の真似なのか、眼鏡をかけたアリシアが、元気な声で付け足してくる。
「でも、ふつう管理世界で『デバイス』っていうのは、魔法を使うためのものなんだよ！」
　淡いピンク色のワンピースを着た幼女は、ツインテールに結った金髪を揺らし、「ね？」とプレシアを見上げている。
「ええ、アリシアの言う通り」
　よくできました。
　愛娘にルビー色の眼で見つめられたプレシアは、先ほどまでの学者然とした横顔はどこへやら。いっきに相好を崩して、目尻を下げた。
　かいぐりかいぐりアリシアを撫でやるさまは、本当に幸せそうだ。
「簡単に言うなら『デバイス』は、『魔法使いの杖』かしら」
　ホワイトボードに書かれた「ＰＣ」の横とは別の、少し離れた場所に、「デバイス＝魔法の杖」と板書が増える。
「その役割は、魔法のプログラムを溜めこんでおくストレージ（コ

ンピュータ内でデータやプログラムを記憶する装置）だったり、魔法を制御するための演算をしてくれたり、直接的な武器となったり……色々ね」

「魔導士や騎士は、みんなデバイスを持ってるの。私は、魔力が低くて魔導士には向かないんだけど……」

母の言葉に補足しながら、少ししょげた面持ちのアリシアを、プレシアが慰めるように、手のひらで優しく背中を抱き寄せる。

「魔法だけが、人間の価値ではないわ、アリシア。管理世界では、どうしても魔導士が優先される傾向にあるけれど……」

魔導師ランクでは「条件付ＳＳ」と分類されるほど、魔力の高いプレシアは、職場環境こそ過酷ではあったが、その分の報酬は、一般人とは比較にもならないほど高額だった。

それは、魔法が使えないものと、魔法を使えるものとでは、できることに差がある、といえばそれまでの話なのだが。

それでも、高い魔力資質を持つものが優遇される格差社会は、じっさい管理世界での深刻な問題の一つではあった。

「そうですよ、アリシア。プレシアも私も、もちろんナナキたちだって、魔力に関係なく、アリシアのことが大好きなんですよ」

ホワイトボードを引っ張ってきてからこちら、その脇で大人しくイスに座っていたはずのリニスが、アリシアをひょいと抱き上げて、主であるプレシアと眼を合わせた。

「ねえ？」

「もちろん。大好きよ、アリシア」

プレシアは笑顔で娘にキスを贈った。ぱっと向日葵のように、幼い顔が笑みほころぶ。

「私も大好き！」

きゅう。

腕を伸ばして抱きつくアリシアを、使い魔から受け取り、娘を抱えたまま続けようとするプレシア。

微笑ましい光景に、アーチャーが苦笑を浮かべて立ち上がった。

「さて。板書なら私がしよう。アシスタントなのだろう？」
座っていたまえ、といままで自分が腰かけていたイスを差し示す男に、むむ、と眉根を寄せるママさん魔導士。
「講師役が座っていたら、格好がつかないじゃないの」
「何、しゃべってくれればいいのさ。せっかくの親子のふれあいを邪魔するのも無粋だ。なあリニス？」
「ええ。アーチャーの言う通りです、マスター。いままでアリシアは我慢していたのですから、思い切り甘やかしてあげてくださいな」
肩をすくめる、お節介好きの英霊と、これでもかと娘にデレデレの母親に作られた使い魔は、やっぱりテスタロッサ親子にとびきり甘く。
結果、使い魔ふたりに押されたプレシアは、娘を膝に乗せての講義とあいなった。

#１５　デバイスってなあに？（後書き）

あとがき

＞原作では、アリシアとフェイトの魔力の差も浮き彫りにされていたので、ちょっと挟んでみました。

アリシアも魔法を使ってみたかったんじゃないかなあ、と。

しばらくデバイスネタで引っ張りながら、テスタロッサ親子をきゃっきゃウフフさせまする。

幸せテスタロッサ家が書きたいもので。誰得、というか俺得なのはわかってる！

なお今回は、ＩＴ用語辞典「ｅ－ｗｏｒｄ」を参考にさせていただきました。

「Ｎａｎｏｈａｗｉｋｉ」も参考にしています。

#16　おしゃべりなデバイス？

いつのまにか、研究室の簡素なテーブルにはティーセットが並び、つるりとしたシンプルなデザインの茶器からは、芳ばしい湯気が上がっていた。

アーチャーの入れた紅茶が、その正体である。

膝の上にアリシアを抱えたプレシアと、その隣に座るリニス。そして褐色の肌の偉丈夫だけが、ホワイトボードの側に控える部屋には、まったりとした空気が流れていた。

「あー……この紅茶、美味しいわー……」

キャラメルの香りが甘いフレーバーティーに舌鼓を打つ女性の顔は、至福の一言。

いっぽう、母の膝に抱かれた幼女も、安心しきった表情で、ぴったりプレシアにくっついていた。

もしもアリシアが猫だったなら、ごろごろ喉を鳴らして長く伸びていたことだろう。

いっぽう、正真正銘、山猫が素体のリニスはといえば、こちらもミルクたっぷりの紅茶を飲んだかと思えば、とろんと目を細めた顔で、ためいきをついている。さりげなく、ネコミミが満足そうにぱたぱたしていた。

すべては執事スキルＡ＋のなせる業だった。恐るべし、アーチャー。

その間に、白い髪の偉丈夫は板書をメモり、ホワイトボードを掃除している。

「さて。それでは、そろそろ講義を再開してもらってもいいかね、教授（プロフェッサー）？」

はた。

美味しい紅茶と愛娘のコンボで和みまくっていたプレシアは、からかいを含んだ低い声をかけられて、ようやく我に返った。
「え、ええそうね。それじゃあ、次はデバイスの種類を説明しましょうか」
そう言うと、彼女は手近にあった、いくつかの機材――見ためは白く細長い何かだったり、パーツっぽい金属の塊だったり、さまざまである――を引き寄せて、テーブルの上に並べてみせた。
「これは、どれもデバイスよ」

四つの機械。
それは、プレシアが、職場から廃棄される、型落ちの中古品や、実験機のデバイスを引き取ってきたものだった。
魔法を使うためのデバイスは、基本的に家電並みか、それ以上に値の張るもの。いったん自分のものになったデバイスを、携帯電話のようにしょっちゅう買い換えることなど、ふつうはしない。
が、改造は別である。
心得のあるものは自分で、そうでないものも、購入した店や、懇意のデバイスマスターに頼んで、使いやすくしてもらうのが常なのだ。
デバイスをまるごと買い換えるよりも、その方がずっと安く済むというのが、世間一般の理由だった。
そして研究者畑のプレシアは、自分のデバイスも手作り派である。
ようするに、自分のデバイスに流用するパーツ取りのために、彼女は職場からデバイスを払い下げてもらっていたのだ。
そういうわけだから、プレシアの研究室には、常時、複数のデバイスや、パーツが転がっている（整頓されてはいるが）のが現状である。
いま並べられたのは、その中の一部に過ぎない。

それにプレシアは、魔法に憧れる娘のために、魔力が低くても魔法が使えるようなデバイスを作る思案をしていた。

――アリシアは、まだ幼い。

大気中の魔力を体内に取り込んで蓄積する、リンカーコアは、持ち主の年齢とともに成長する。つまりアリシアにも、まだ伸びしろはあるのだ。

必ずしも、魔法を使うことが幸せとは限らない。

けれど将来、アリシアがミッドチルダに戻って暮らしたいと願い、そのうえで魔法を使いたいというのであれば、プレシアは娘のために、できる限りの手を尽くすつもりだった。

やはり魔法を使えるか使えないかでは――ことに、管理世界では――その生活と、将来の展望に、大きな差がついてしまう。

プレシアは母親として、アリシアの可能性を少しでも広げてやりたいと考えていたのだ。

閑話休題。

「デバイスには、大まかに分けて、三つの種類があるわ。

1）インテリジェントデバイス。

2）ストレージデバイス。

3）アームドデバイス」

きゅきゅ。

アーチャーがホワイトボードに、プレシアの言葉を書き込んだ。

「まず、インテリジェントデバイス。

これはミッドチルダ式魔導士の一部が使うもので、意志を持ったデバイスね。

ラベンダー、セットアップ」

『イエス・サー。セットアップ。ご無沙汰しております、マスター』

プレシアの呼びかけに応じたのは、並べられた機体のうち、錫杖

に近いタイプの、白い杖。先端についた紫色の宝玉が、ぼんやりと明滅する。

「意志を？……ＡＩが搭載されている、ということか？」

神秘と関わってきた魔術師であるアーチャーは、無機物が意志を持つことに、それほど抵抗はないが、「魔法の杖」に意志がある、となると、どうしてもよろしくない連想になってしまう。

そう、魔法使いであるゼルレッチ謹製、愉快型魔術礼装（カレイドステッキ）のせいである。

「間違ってはいないわ。そうね、人格型、といえばわかりやすいかしら。

インテリジェントデバイスは、魔法を発動する際の、手助けとなる処理装置、状況判断を行える人工知能を有しているの。

意志を持つから、その場の状況判断をして魔法を自動起動させたり、マスターの性質によって、自分を調整したりできるし。

そのうえ、人工知能を有しているから、インテリジェントデバイスは会話や質疑応答もこなせるわ。

いうなれば、『おしゃべり機能がついてる』ってことね」

『恐れ入ります。サー。ラベンダーと申します』

意思疎通ができれば、魔法の威力や、到達距離の強化、また同時発動数の増加、詠唱なしでの発動、魔導師との同時魔法行使など、実用性を超えた高いパフォーマンスが期待できる。

どういうことかというと、１＋１を５にも、１０にもする可能性を秘めている。

一人より二人、と言い換えることもできるだろう。

ただし、必ずしもメリットばかりではない。

『こちらの男性はどなたでしょうか、マスター。

もしや新しい旦那さまですか？　それはおめでとうございます。これで男日照りも解決ですね』

「ラベンダー。いますぐ情報を修正しなさい。彼はアーチャー。私とアリシアの友人であり、恩人である、ナナキの使い魔よ。

それから誰が男日照りよ！　記憶回路ごと取り替えるわよ、このゴシップ好きデバイス！」

眉を吊り上げたプレシアは、白い杖をわしづかむと、がこん！とテーブルにそれを打ち付けた。

『それは失礼を。ではナナキ殿と言う方が、マスターの新しい愛人なのですね。さっそくご挨拶しなくては』

「わかってて言っているでしょう、あなた！

ああもう、これだから起動しなかったのに……ッ」

ギリギリギリ、と歯軋りしつつ、プレシアは手の中の杖を睨みつける。

このラベンダー、丁寧な言葉遣いの割に、ふざけた調子のデバイスではあるが、その中身はハイスペックで、会社から払い下げられた機体の中ではダントツの性能だ。

プレシアは、ラベンダーではない、自分専用のデバイスをちゃんと持っているのだが、性能だけ考えれば、ラベンダーはみすみす捨てるには惜しい高級品。

デバイスは、一人につき一機、というわけではない。状況が許すのであれば、もちろん複数あった方が便利だし、デバイス同士の連携で、さらに効率はアップする。

それゆえ、いざというときの予備のためにも、ラベンダーは分解されることなく保管、メンテナンスされているのであるが……。

見てわかるように、意志があるということは、好き嫌いや相性の有無がある、ということである。それは、いくら機体が高性能でも、場合によっては引き算や割り算になる可能性があることを意味する。

まあ、仲が悪いように見えて、きっちりプレシアのフォローをできるだけの仕事ぶりを見せるのがラベンダーであった。これはラベンダーのＡＩを作った人間に問題があるのかもしれない。

「……インテリジェントデバイスが一般的なものではない理由の一つに、機体が高価という点が挙げられるわね。高機能だから、やっぱりコストもそれなりにかかるのよ。

それに、主の力が弱かったり、デバイスをあつかう能力自体がなかったりすると、デバイスの意志に振り回されてしまうの。

もちろん相性の良し悪しだって関係してくるわ。お互いの性格が合わない、とかね。高い機体を使いこなせない、というのは宝の持ち腐れでしょう。だから一般的でない、ともいえるわ」

ラベンダーへ、待機するように命じて沈黙させたプレシアは、頭痛を堪えるようにこめかみを押さえた。

いっぽう、プレシアの説明に、板書も忘れて、深く、切実に頷いてしまうアーチャーの姿がある。

「ああ……そうだとも。魔法の杖に振り回されるなど、使い手にとってろくでもない。ああ、まったくろくでもないとも！」

どうやらトラウマが刺激されたらしい。

「あ、アーチャー？」

ふだんは落ち着いた物腰の、しっかりした男性が、錯乱気味に苦悩の色を浮かべているさまを見て、アリシアがおろおろしている。

「落ち着いたかしら？」

「……失敬、続けてくれ」

ちょっぴりヘコみながら、プレシアに頷いて見せたアーチャーは、ホワイトボードに「インテリジェントデバイス＝高価。高機能。人格型」と書き込んでいる。

ラベンダーを待機状態にしたプレシアも、調子を取り戻したようだ。

「次に、ストレージデバイス。これは、文字通り、魔法のプログラムを溜めこんでおく機能や、演算機能などに特化しているわ。

これが魔導士の使う、一般的なデバイスね。通常は、意志を持たない非人格型よ。ただし、単純な応答くらいならするものもあるわ。

こっちの二つはストレージよ。ユーカリ、フェンネル、セットア

ップ」
『フェンネル、起動。おはようございます、マム』
今度は金属の塊っぽい作りかけの機械、といった態のそれが返事をした。フレームを外された形のデバイスだ。修理中なのかもしれない。
もういっぽう――腕時計そっくりの見た目をしたデバイスが、ちかちかと文字盤の石を光らせることで反応した。こちらはしゃべる機能がついていないらしい。
「なるほど。外付けハードのようなものだな」
「フェンネル、スリープ。
……基本的にはそうね。例外として、ストレージデバイスのうち、融合型デバイスというものがあるのだけれど……」
プレシアが、ちらりとアリシアに視線を落としてから、ふたたび顔を上げた。
「ユニゾンデバイス、とも呼ばれるそれは、一般的なミッドチルダ式ではなくて、古代ベルカ式特有のデバイスよ。
これは珍しいものだから、手元にサンプルがないの。
私も、他人の研究書を読んだ知識でしか知らないのだけれど、使用者と融合することで、いわば内部から術者を補佐するデバイスなんだそうよ。
双方独立しての魔法行使も可能とするらしく、同一の魔法や、魔力運用を行うことで威力や精度の倍加も可能。
ただし、非常に高性能な反面、融合者には適性が必要で、おいそれと誰でも使えるわけではないとか。さらに、事故が起きる可能性も高くて、使用者はほとんどいないのだと聞くわ。
私も、じっさいに使っているところを見たことはないわね……」
「ふむ。都市伝説みたいなものかね」
「そんなところね」
ホワイトボードに、「ストレージデバイス－安価？汎用。非人格型」「ユニゾンデバイス－魔王の杖」と追記された。

「……うちのマスターなら、ひょっとすると、そのユニゾンデバイスとかいうものを、手懐けてしまいそうな気がするな」

魔物とか妖怪とかに、やたらめったら好かれる七季の性質を思い出し、ふるふるアーチャーは白い頭を振った。

――きっと、この書き方が悪かったのだろう。

アーチャーは「魔王の杖」という記述を消し、「伝説の杖」に書き直した。馬鹿馬鹿しいような行動だが、錬鉄の英霊の、心の平安には繋がったようだ。

これでよし。

男の精悍な面差しには、心なしか、やり遂げた観がうかがえる。

『リインは妖怪じゃありませーん！』

「……む？」

「……空耳かしら？」

「いま誰か、しゃべりました？」

「ヨーカイって何？」

姿も気配もない電波に、おのおの首をかしげつつ、テスタロッサ家のデバイス教室は、まだまだ続くのだった。

#16　おしゃべりなデバイス？（後書き）

あとがき

＞「しゃべる魔法の杖」といったら、やっぱりカレイドルビーですよねー。

教材にされたデバイスの名前は、ハーブから取りました。安直で失礼。

ラベンダーは、プレシアと同年代くらいの女性人格を想定してます。からかうのが好きな女友達、というイメージ。

＃17　デバイス教室・裏ー その頃の主人公ー（前書き）

まえがき

＞今回は、リリなのキャラが登場しません。オリ主・オリキャラ中心です。

#17　デバイス教室・裏ー その頃の主人公ー

くすー。くすー。くすー。

「ん～」

テスタロッサ家のリビング。そこに置かれたソファには、横たわる黒髪の少女と、丸くなって、頭だけを彼女の腹に乗せた黒猫が仲良くいっしょに昼寝をしていた。

最初リドルは、仰向けになった七季の、真上に陣取っていたのだが、重さが寝苦しかったのか、少女が寝返りを打った拍子に転がり落ち、危うく無様に頭を打ちそうになったのだ。

そんなわけで、妥協したリドルは、頭だけを乗せることにしたのだった。

女性の体は、基本的にやわらかいものである。こと、子供を育む子宮を守るため、下腹部には脂肪がつきやすく、大抵の場合、そこはふわふわしている。

それは、あちこちの肉付きがいい七季も例外ではない。

やわらかく、それでいて弾力のある少女の腹部は、猫の姿をしたリドルにとって絶好のクッションであり、枕であった。

あどけない寝顔の少女と、そこにぴったり寄り添い、丸くなっている黒猫との主従。

見ためは平和そのものの光景に違いない。

が、そのころ七季の「中身」は、はるか世界を隔てた、年上の友人と交信をしていたのである。

夢の中。

緑に囲まれた清らかな泉のほとりは、そのまま七季の内面世界だ。
さわやかな風が梢を揺らし、葉ずれの音もしゃらしゃらと。木洩れ日として降る陽射しは初夏か、それとも秋半ばか。南のそれを思わせる明るさは、けれども焦がすほどの激しさを持ってはいない。
ただし、透き通る水をたっぷりと湛えた泉は、その透明度に反し、底が見通せないほどに深い。きらきらと陽光を照り返す水面は、奥底に秘めたものの影すら見せず、ただ静かに凪(な)いでいるばかりだった。
「やっほー、ナナちゃん。元気ー？」
「あ、先輩。こんにちはー」
ふわり、と紅白の布が翻る。
晴れ渡る蒼い空から、巫女服をはためかせて降りてきたのは、七季の先輩である真言だった。つややかな栗毛を風になびかせる美少女は、青々とした若草の上へ、かろやかに着地を果たす。
異世界へと後輩を送り出した巫女姫は、遠く離れた少女の下へ、神通力をもってして通信を――霊体の一部を飛ばしてきたのだった。
英霊でいうところの分霊体、というところだろうか。
違うのは、用が済んだ後のコピーは、きっちり本体に回収される一点くらいのものである。
そんなわけで、再会を果たした少女二人は、ちょこんと水辺に座りこむと、近況報告を兼ねた雑談に突入した。
自分の世界なので、七季がテキトーに取り出した茶器でお茶を淹れ、ついでにお茶菓子として干し芋なんぞも添えていた。雰囲気ってやつである。
「というわけで、出先で一人、『死返(まかるがえ)し』をやっちゃいました」
七季も、まっくろ巫女服といういでたちだったが、ここは彼女の内面世界なので、服もあくまでイメージの産物に過ぎない。まあ、それだけ巫女服が馴染んでいるということだろう。
余談だが、退魔行に同行することもある七季の、この巫女服は、織姫の手による布で作られた、特別製。アーチャーの概念武装とま

ではいかないが、それなりに対魔力の高い、丈夫な逸品であった。
「んー。いーんでない？
なかなか順調みたいだし……あ、そうそう、今回のでナナちゃんのスタンプ貯まったから、霊格が一段階アップするよ。
神使（しんし）の基礎能力は、いままでの倍。降ろせる神様も増えてるよ。まあ片っ端から呼んでみそ？
霊力はもちろん、対魔力・対霊力なんかの抵抗値（レジスト）も倍になるから、まっとうな幽霊や悪霊は、もうナナちゃんに手出しできないね。気分ひとつで浄化・浄霊・昇天する勢い？
ををっ、吸引符（おふだ）いらずがさらにグレードアップ！
令子ちゃんが欲しがりそー」
「それ何て斬魄刀（ざんぱくとう）！？」
吸引符（おふだ）あつかいされて、思わずツッコむ黒髪の少女。
ちなみに斬魄刀（ざんぱくとう）とは、死神が持つ特殊な刀で、詳細は省くが、現世を彷徨（さまよ）う死者の魂を昇華させる際に使われる。
七季の友人である黒崎一護も、死神代行として一振り持っているが、所持者自身の魂を元として形作られているため、その形状や能力は死神ごとにすべて異なるという。
平常時は、ふつうの日本刀の形をしており、霊界のひとつ、尸魂界（ソウル・ソサエティ）に所属する死神の持ち物である。
余談ではあるが、七季の生まれ育った世界では、霊的社会の発展が著しく、死後の魂をあつかう霊界は、いくつもの階層に分かれている。
そのため、帝都心霊庁の関係者として、また「神使」として、霊的事件に関わることが多い七季が知り合うものの中に、そちら方面の関係者がわりあい多いことは、むしろ当たり前かもしれない。
さておき。
「魔力は霊力に比例するから、もちろん倍ねｖ
めざせドラまた！」
勝利は君のためにある！

親指ぐっと立てて、ネタゼリフに走る栗毛の美少女は、オタ仲間の（霊的な）魔改造が楽しくて仕方ないようだ。

もっとも、近々プレシアたちによって、自重しないデバイスを渡され、さらにスペックが底上げされるとまでは知らないのだが。

「いえスレイヤーズ世界は、まだ行ったことありませんし。ドラスレ（※）は、さすがにどうかと。

それに龍神の嫁さんがそれ言っちゃまずいんじゃないですかね？……個人的にドラゴン料理は気になりますけど」

ずびし。

裏手でツッコミつつも、その龍神つきの真言の前で、食欲がダダ洩れている黒巫女がひとり。勇者である。

気のせいか、真言の背後の気配が、ちょっとだけびくりと揺れたような。

「そうそう、今度から自力で霊視ができるようになったから（いままでは霊符を貼るか、真言に術をかけてもらっていた）。オンオフも自由自在だよー。

あと何か特典あったかな……？」

ちなみに「スタンプ」とは、七季が徳を積むたびに押されるもの。これが一定以上貯まると、真言の言ったように霊格が上がる仕組みとなっている。それによって、七季が神使として使える権能が増えるのだ。

専門用語で「レベルが上がる」ともいう。

小難しく言うと、神使として七季が仕える相手――ようするに上司にあたる真言――が、スタンプを押すことによって、彼女の修行と、積まれた徳を承認する、というシステムである。

おおよそ、霊格が一段階上がるごとに、その基礎能力は、倍になっていくらしい。

「後はそう、ナナちゃんが自力で眷族を増やせるようになりました！

私がいなくても、とっ捕まえた妖怪でも魔物でも動物でも、お互いの同意さえあれば、キスして眷属にできちゃうから」

「それ何て仮契約（パクティオー）！？」

#17　デバイス教室・裏－その頃の主人公－（後書き）

あとがき

＞ネタとして「GS美神　極楽大作戦!!」と「BLEACH」を混ぜてみました。「ネギま」もちょこっと。

斬魄刀が好きです。ぜひアーチャーの手に取らせてみたい（そっちか）。

いや、どんな反応するのかと。だって「無限の剣製」の担い手ですし。

ただ、斬魄刀は「所持者自身の魂を元として形作られている」ものなので、剣の丘には……刺さらないですかね、さすがに。意志がありますし、再現は不可かな。

「卍解＝真名解放」と考えると、投影できたら、えらいことですが。

▲このへんは戯言なんで、スルーしたってください。

※ドラスレ

：スレイヤーズに登場する呪文。「竜破斬（ドラグスレイブ）」。竜をも倒す強力な威力を誇る黒魔法。

＃１８　デバイス教室・裏ー やっかいごとの予兆ー（前書き）

まえがき

＞今回は、リリなのキャラが登場しません。おまけに説明色が濃いです。

また、ネギまの学園側および「立派な魔法使い」アンチの傾向があります。

お嫌な方はブラウザバックでお願いします。

#18　デバイス教室・裏ー やっかいごとの予兆 ー

ふたたびツッコむ七季は、はたと我に返ったように、ふるふる黒髪の頭を振った。

――仮契約（パクティオー）。

それは、七季たちの世界において、ある魔法使いの一派で使われる契約術式のことだ。

麻帆良（まほら）という土地に根を張る彼らは、近年、民間ＧＳ（ゴーストスイーパー）――退魔・除霊を生業（なりわい）にするものたち――との軋轢が問題になりつつある。

「立派な魔法使い」「正義の味方」を自称する、彼ら魔法使いに、除霊の最中に割り込まれたり、邪魔されたりするＧＳ（ゴーストスイーパー）の被害報告が相次ぎ、帝都心霊庁では、近々監査を派遣する運びとなっていた。

古くは陰陽寮から発したとされる「帝都心霊庁」は、日本において霊的・魔的な活動を統括する役所である。このごろは魔族と神族の緊張緩和（デタント）もあり、高次存在との定期的な交流も始まった。

役目としては、ＧＳ（ゴーストスイーパー）など、霊能者の犯罪を取り締まる、オカルトＧメンを擁し、霊的犯罪の防止、霊的災害（オカルトハザード）の対処が大半を占める。

しかしいっぽうでは、宗派や流派の違う霊能者がひしめく日本において、活動する霊能者たちのとりまとめをするのも重要な任務であった。

異能をあつかうものたちには、それぞれに矜持や、歴史に裏打ちされたルールが存在する。

それは明文化されることこそないが、暗黙の了解であり、古参は新参にそのしきたりを伝えつつ、連綿と伝統を繋いでいく。それがないものは、いわばモグリだ。

GS（ゴーストスイーパー）も同じである。

名前こそ横文字にされ、新しいようにも思えるが、彼らの多くは徒弟制度であり、師の下で研修を積んだうえで厳しい国家試験をクリアし、その資格を与えられる。GS（ゴーストスイーパー）資格は国家資格なのだ。

もちろん、師に教えを受ける際には、彼らのしきたり、いわば霊能者の仁義を叩き込まれる。

だが、外――外国から流れ込んできた「魔法使い」たちは、そのしきたりなど知るわけがない。

ことに日本のオカルト分野は、秘されているために因習じみた傾向もあり、西洋の流れを汲むものは、それを一方的に「古臭い」「保守的」と断じて、斬って捨ててしまうことが多いのだ。

もちろん、すべての西洋術者が、そういう反応と言うわけではない。西洋の流れを汲むものでも、おのが秘奥（ひおう）を守るための秘匿に余念がないものもいるし、理解があるものもいる。

あくまで一部――とりわけ「関東魔法協会」の傘下にあるものたちに見られる傾向である。

しかしながら、これでは摩擦が生まれるのは当たり前であり、たとえ人種が同じだとしても、霊能者としての宗派、流儀がまったく違う「魔法使い」たちは、日本において異物となる一歩手前の存在だった。

麻帆良は、そんな自称「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」たちの根城であり、日本における「異国」もいいところの土地になっていたのだ。

さて。

そこに派遣される監査メンバーには、帝都心霊庁の切り札と言っても過言ではない真言が含まれていた。畢竟（ひっきょう）、彼女のストッパーとして、七季も付き添いに加えられていたのだ。

詳しい経緯は割愛するが、しばしば七季は、帝都心霊庁の臨時職員として、その任務に参加することがある。

そして、今回の任務――派遣先である麻帆良の、事前に渡された資料に載っていたのが、その仮契約（パクティオー）である。

他者と契約し、自分の守り手――ようするに使い魔関係のような――とする魔法だという。

キスは呪的な要素を含む、最も単純な儀式だが、それにしても七季は、自分がそれで使い魔を作れるなど予想外もいいところだった。ツッコんでしまうのも当然である。

「そういえば、麻帆良への監査派遣、どうなってるんですか？」

「ん？　ナナちゃんも連れて行くよ。そのために使い魔も増やしたんだし。あっちは物騒みたいだしね」

麻帆良では、認識阻害の結界を張っているのをいいことに、魔法使いたちは、わりと気軽に魔法を使ってくるらしいと報告が上がっていた。

ちなみにＧＳ（ゴーストスイーパー）たちは、除霊の際に結界を張って、ターゲットである霊を逃がさないよう、邪魔が入らないよう（これによって関係者以外の目撃者が出ない）にしているのだが、対魔力のある魔法使いは、しばしばこの結界を突破して乱入してしまうのだという。

そのため高額なお札は無駄になるし、巻き込まれるものの被害は多くなるしで、ろくなことがないらしい。

七季もその報告書（レポート）を読んでいるので、真言の台詞に納得した。

「あ、そうなんですか。じゃあ、やっぱりこっちの魔法も勉強した方がいいのかなぁ。プレシアさんは、魔導士の素質あるっていってくれたし」

「むしろやっちゃいなＹＯ☆

ナナちゃんパワーアップ計画はじゅんちょーじゅんちょー♪」

どうも真言は確信犯のようだ。

ちなみに余談だが、真言と七季は、異世界で学んだホグワーツ流の魔法が使えたりする。

ただ、悪霊退治に使うのは、もっぱら霊力であるし、特に魔法は必要ないので、ふだん使うことはない。そういうわけで、まだ七季と付き合いの浅いアーチャーが知らないのは、無理からぬことである。

そのうえ彼女は、基本的に攻撃手段を持たない。
ホグワーツで一通りの成績は修められるだけの、知識や技術は身につけている。
ただ、ホグワーツ流の魔法も、得意なのは、魔法薬学や薬草学、変身魔法や箒乗り、あとは武装解除ができるくらいだろうか。
幻獣の世話や知識にも長けてはいるものの、そちらは完全に魔法からは逸れている。どうも適性として、守勢が向いているタチらしい。
ホグワーツ流の魔法に関していうならば、攻撃力の高い「闇の魔術」をアレンジして使えるほどに規格外な真言やリドルが側にいるせいだろう。凄まじい遣い手である彼らが、七季にとっての「魔法使い」としての基準となっているため、しぜん自分を「一般人」と認識している。何とも凄まじいズレっぷりである。
もちろん七季は、自分が知る「魔法」がれっきとした異能であり、人前で使うようなものでないことも理解している。ふつうに暮らしていれば、現代社会で学生として日々を生きる少女に、魔法を使う必要はない。
そういうわけだから、じっさいの話、わざとアーチャーに隠しているわけではなく、たんに使う機会も見せる機会もない、というのが真相だったりする。
そもそも七季自身、自分が魔法を使えることをド忘れしていた節はある。
何といっても、アーチャーが使い魔となってから日が浅く、彼を伴っての退魔行の仕事が回ってこなかったこともあって、七季はアーチャーの「魔法」――否、「魔術」を知らない。ゆえに、それを意識することもない。
その類稀なる直感から、彼が強いことだけはわかっているのだけれど。
そんなわけで、プレシアたちがデバイスを贈るために、いろいろ試行錯誤していることを知らない少女は「まぁいっか訊かれてない

し」と流して終わった。同じ魔法を使うことを知っているリドルが、その相談から除外されたことも、誤解が正されることのない一因だろう。

まあ、ホグワーツ流の魔法に、管理世界のような砲撃魔法はないので、戦力の増強にはなるに違いない。砲撃魔法を覚えるならの話だが。

ちょっぴりアレなフラグを立てつつ、まっくろ巫女と、緋袴巫女さんは、もしもしおやつを食べながら、楽しげに夢の中で談笑を続けたのだった。

#１８　デバイス教室・裏ー やっかいごとの予兆ー（後書き）

あとがき

＞というわけで、ちょっと短めではありますが、ネギまクロスのフラグを立ててみました。

うん、アンチ色が強いうえに冗長ですまんです。注意書きはつけておきましたが。

オリ主は「一般人？オオォォイ！」というような感じになってきましたが、周りが気分ひとつで豪雨降らすような先輩だったり、「死の呪い」とかフツーにかける使い魔だったりするので、自分が使えるのは手品程度、という認識です。

ちょっと物浮かしたり、お祓いができるくらいだと、そんなもんです。地味な能力なので、バトルには向かんのです。ある意味、反則技は持ってますが。

死者蘇生って、それなんてドラゴンボー（ｒｙ

#19　デバイスという武器

「さて、話を続けましょうか。
デバイスが、大まかに分けて、三つの種類があることは説明したわね？
1）インテリジェントデバイス。
2）ストレージデバイス。
3）アームドデバイス
このうち、インテリジェントと、ストレージの説明が終わったから、残りはアームドデバイス、ということになるわね」
アームドとは「武装」を意味する単語だ。
プレシアの言葉に頷くアーチャーは、ホワイトボードの前に立って、ふたたび板書の準備をした。
「アームドデバイスは、名前の通り、何らかの武器の形状であることが多いの。
これは、さっきちょっと話した、ユニゾンデバイスと同じで、古代ベルカ式、もしくは近代ベルカ式に適しているわ。
ようするに一対一、近接戦闘をすることが多い魔導師、騎士が扱うデバイスなの。
これは人格型、非人格型の両方が存在しているわ。ただし……」
「何か問題があるのか」
言葉を濁すプレシアへ、アーチャーが低く疑問を投げかける。
そこに、デバイスに関する参考書を読みながら講義を聴いていたリニスが口を挟んだ。
「問題がないわけではないんですよ。
古代・近代のベルカ式デバイスは、ほとんどがカートリッジシステムを採用しています。

魔力の籠もった弾薬（カートリッジ）を消費することで、一時的に多大な能力を発揮する……それが、カートリッジシステムです。

魔法サポート能力は、ミッドチルダ式のデバイスに比較して劣りますが、そのぶん、複数のカートリッジをロードして使えるベルカ式は、一撃の威力でミッドチルダ式に勝ります。

ただし、カートリッジである以上、銃器のように弾詰まり現象――いわゆる「ジャム」――が発生したり、カートリッジの魔力がすべて炸裂しなかった場合、きちんと魔力がデバイスや術者に回りません。

そうすると、もちろんカートリッジの魔力が使えないことになります。

そのうえ、魔力がストックされているカートリッジを、複数あるからといって過剰にロードすると、制御不能になったり、暴発を招いたりすることもあるんです」

「えっとね。だからカートリッジシステムをあつかうのが難しくって、ベルカ式魔法が衰退したんだろうって言われてるんだって！」

隣に座る、リニスの本を一緒に見ていたアリシアも、横からそう付け足した。

そんな愛娘の頭を、「よくできました」と撫でやる黒髪の女性。

アリシアは、母親に褒められて嬉しそうにニコニコしている。

リニスも、テスタロッサ親子を見つめて笑顔を――若干、うっとりしているようが気がしないでもないが――浮かべている。

「一長一短、というわけだな」

ふむ、と顎を撫でるアーチャーは、ホワイトボードに「アームドデバイス＝ベルカ式。武器型。魔力をストックしたカートリッジ使用。暴発の危険あり。人格の有無あり」と書き加えた。

続いて、プレシアがふたたび説明を引き受ける。

「『騎士』というのは、ベルカ式魔法の、優れた術者を指す言葉よ。魔力付与攻撃……武器や徒手を用いて、接触した対象に直接魔力を叩き込むのが、ベルカ式の戦い方。

遠距離戦・複数戦闘をある程度切り捨てて、近接系による個人戦闘に特化しているのが、その特徴といえるわ。

もっとも、あつかいやすいミッドチルダ式に比べて、ベルカの使い手はうんと少ないの。

ミッド式は汎用性が高いし、危険性も低い。遠距離からの射撃魔法や弾幕で攻めるが主流だしね。これなら、大して体術の心得がなくても、人海戦術で戦えるもの。

救助活動なんかには、それほど攻撃力は要らないわけだしね」

「射撃魔法か……」

その単語に、アーチャーは精悍な面差しを少しばかり引きつらせる。

弾幕、という言葉で、彼が最初に思い出すのは、遠坂凛が使っていたガンドだ。

人を指差して呪う、というその魔術は、優れた遣い手があつかえば、物理破壊力すら伴う威力を発揮する。

あの、アベレージ・ワンの天才は、それこそ指鉄砲から、マシンガンのような勢いで、黒い呪いの弾丸を叩き込んだものだが。

灰藤の双眸が思わず虚空をさまよい、虚ろになる。

「いくら非殺傷設定の魔法を使ったところで、術式を載せる前の魔力が暴発したんじゃ、どうしようもないもの。

だから、わざわざ暴発の危険があるかもしれない、ベルカ式を使う人は少ないってわけ。まあベルカ式でも、カートリッジを使わないのも、あるにはあるんだけど」

「……『非殺傷設定』？」

そこで聞きなれない単語――デバイスにまつわる話は、大部分が馴染みの薄いものではあったのだが――に、褐色の肌の偉丈夫は動きを止めた。

「何だね、その非殺傷設定とは」
「主に魔力弾に用いられる設定ね。犯罪者を取り押さえるのに都合がいいから、時空管理局が使っているの。
私たちの魔法は、端的に言えば、魔力を使ったプログラムよ。言い方を変えると、『魔法』という、自然摂理や物理作用をプログラム化し、それを任意に書き換え、書き加えたり消去したりすることで、作用に変える技法。
魔力素を特定の技法で操作し、作用を発生させる技術体系、と言った方がわかりやすいかしら？
だから、そのプログラムの設定をいじることで、干渉力を限定するのよ。
ひとつは、物理破壊を伴う、物理破壊設定。これは本来の魔法の使い方ね。素のまま、と言ってもいい。
そしてもうひとつが、『非殺傷設定』と呼ばれるもの――生体にショックのみを与えて、傷をつけない非殺傷・スタン設定。
相手を捕縛するのには、うってつけでしょう？」
プレシアの言葉に、アーチャーは驚きを隠せない。そんな便利な……ふざけた魔法があるのだとは。
――ああ、進みすぎた科学は、魔法と変わらないとは、よく言ったものだ。
とん、とホワイトボードに背中をぶつけた男の耳に、しかし魔法のことをよく知る、魔導師の言葉が苦く響いた。
「でも。魔法は万能なんかじゃないわ」
ダークヘアの魔導師は、かつて失うはずだった――七季たちとの出会いがなければ叶わなかった――愛娘を抱きしめて呟いた。
腕の中の、あたたかく小さな体を確かめるように、何度も、何度も撫でている。
あの日、死んでしまったアリシアを助けてくれたのは、プレシアの使う魔法なんかではなかった。
異邦の――プレシアが見たことも聞いたこともない――神に仕え

るという、黒ずくめの巫女だけが、プレシアを、彼女の大切な娘を救ってくれた。

どんなに技術が進もうとも、人の手が及ばないものがあることを、そのときプレシアは心に刻んだ。

――識っていたはずなのに、知らなかった。

そのことを恥じるからこそ、忘れない。

「たとえ非殺傷設定であっても、魔力弾の生成技能が低かったり、命中箇所が脆かったりすると、相手は大怪我をすることだってあるのよ。いくら『非殺傷設定』といっても、その程度。

力は、やっぱり力でしかない。油断をすれば、いつだって私たちに牙を向く――私は、もう二度と忘れたりしない」

だから彼女は、魔法がないという、第９７管理外世界へ移住しようと決めたのだった。

#19　デバイスという武器（後書き）

あとがき

＞お、おや……？

ほのぼのだったはずが、途中からガコンとシリアスになってしまいました。

まあプレシアとしては、マスコミのことどうこう以前に、アリシアを殺した魔法文明から、少しでも遠ざかりたいという気持ちはあってもおかしくないかと。

愛娘の未来と意志は尊重しても、実際問題、そう簡単に忌避感はぬぐえない、ということで。

さて、いい加減オリ主と従者、プレシアたちを合流させましょうか。

#２０　力の使い道

「まあ、はなはだ簡単ではあるけれど、さわり程度には、デバイスについてわかったかしら？」

沈んだ空気を払拭するように、あえて明るい口調で締めくくるプレシアの言葉に、講義を受ける立場であったアーチャーとリニスは頷いた。

「しかし……思った以上に奥深いものなのだな。これでは、どんなデバイスにするのか、方向性を決めるだけでも難しそうだ。

『魔法の杖』と聞いたときは、あくまで魔力行使の媒体で、すべて同じような機能かと思っていたのだが。これは、使い手となる七季に、細かく要望を尋ねた方がいいのではないかね？」

「ええ。元からそのつもりよ」

「えー！？」

声が上がったのは、アーチャーに同意を示すママさん魔導師の、膝の上から。

金髪をツインテールに結ったアリシアが、しごく残念そうに唇を尖らせているところだった。

「せっかくナナキをビックリさせようと思ってたのに……」

サプライズ計画を却下されて拗ねる愛娘に、プレシアは、苦笑を含んだ声で言い聞かせる。

「残念だけどね。デバイスはできるだけ使う人に合わせて作った方がいいのよ。

後からでも調整できないことはないけど……やっぱり、最初からどんなものが欲しいか、そのひとの意見を聞いた方が、使いやすいものをプレゼントできるわ」

「うーん」

「アリシア。ナナキをビックリさせたいのなら、デバイスとは別に、手作りのお菓子など作ってみてはいかがですか？」

むーむー考え込んでいたテスタロッサ家の長女へ、やんわりと助け舟を出したのは、ネコミミ姿の女性――もとい、リニス。

「お菓子？」

ぱっとアリシアが顔を上げる。新しいアイデアを差し出されて、悪くないと思ったらしい。

何しろ、次元漂流者と思しき、あの黒髪の少女は、小さなアリシアから見ても、食べること、とりわけ甘いものが大好きで、そのうえ舌も肥えているのだから。

「ええ。アーチャーはケーキを作るつもりだったようですし。私も手伝いますから、教えてもらったらいかがでしょうか。クッキーなら、初心者でも簡単にできますよ」

「そっか……そうだね。ナナキ、甘いもの好きだし、喜んでくれるよねっ」

ルビー色の瞳を、きらきらかがやかせたアリシアは、リニスに力強く頷くと、今度は一転、プレシアの膝から降りて、七季の従者に突撃をかけた。

もちろんアーチャーに、クッキーの作り方を教えてもらう約束を取り付けるためである。

「アーチャー！」

どすごちんっ。

「あらあら。元気なこと」

いきおいよく英霊のみぞおちにぶつかって、鍛え上げられた鋼の肉体にぶつかったアリシアの方が、頭を押さえて痛がっている。

いっぽう、しゃがみこんだ幼い子供を心配して、膝をついた褐色の肌の偉丈夫が、無骨ながら懸命に慰めている――そんな光景を、プレシアは頬を緩めて眺めていた。

子供を、家族を見守るプレシアの、穏やかな表情に、使い魔のリニスも微笑んで主の横顔を見つめている。

まるで絵のように幸せな一幕。
それをもたらした異世界の巫女と従者たちに、リニスとプレシアは、改めて深い感謝を抱いたのだった。

「というわけで、あなたに贈るデバイスの要望を聞きたいのだけれど」
「ははぁ」
夢の中での電波会談を終えた七季は、リドルごとアリシアに乗っかられ、強制覚醒とあいなった。
そして、（昼寝から）起き抜けの頭で、アーチャーの入れたココアをすすりながらテスタロッサファミリーの話を聞いているところである。
ちなみにリドルはというと、潰されかけた恨みから、ただいまアリシアに説教中だ。もちろん正座で。
初めて知る正座という文化に、アリシア涙目。
閑話休題。
「要望といっても……デバイス講座は聞いてないですしねぇ」
「何。要は、どんな魔法が使いたいのか、ということさえわかればいいらしい」
隣に座る褐色の肌の偉丈夫――こちらはコーヒーを飲んでいるアーチャー――が、横からさりげなくアドバイスを挟む。
「よろしければ、こちらをどうぞ、ナナキ」
さらに、はす向かいに座るリニスが、「三歳からの魔法」というタイトルの本を差し出してくる。
ぱらぱらと七季がめくれば、簡単に、魔法の種類が説明されている内容だった。
文字の問題？
「神使（しんし）」の加護のおかげか、オートで翻訳されるようです。本当

にありがとうございました。
それによると。

1）攻撃魔法
▼ミッドチルダ式
■射撃
■砲撃
■打撃／斬撃
■魔力斬撃
■遠隔発生
■広域攻撃

▼ベルカ式
■魔力付与攻撃
■射撃

2）防御魔法
■バリアタイプ
■シールドタイプ
■フィールドタイプ

3）捕獲系魔法
■バインドタイプ
■ケージタイプ

4）結界魔法
■サークルタイプ
■エリアタイプ

5）補助魔法

■インクリースタイプ
■デクラインタイプ

「んー……補助系と、できれば治癒魔法が使いたいな」
「あら。どうして？」
ふつうは、真っ先に攻撃魔法か防御魔法を選ぶのではないだろうか。
それを、見たにも地味な補助魔法をまっさきに挙げた七季へ、プレシアは当然のように疑問を投げた。
「私にはアーチャーとリドルがいるし、それなら攻撃魔法はいらないでしょ。
同じ理由で、防御魔法も、あまり必要性を感じない」
きっぱりと言い切った黒髪の少女に、プレシアもアーチャーも、その切れ長の眼を丸くする。
リニスも興味深そうに、そのネコミミをぴくぴく動かした。
そこに透けて見えるのは、使い魔たちへの信頼。
七季の黒い瞳は、人外たる従者の実力を、その頼もしさを、露とも疑っていないように、強く澄んだかがやきを宿している。
「物理的な防御力を持つ魔法なら、火事や災害なんかの、いざというときのために、ひとつくらいは欲しいけど。
捕獲系はなぁ……たしかリドル、石化呪文が使えたはずだし。
そうなると、私が使うべきなのは、偵察とか、相手に幻覚を見せたり、相手の術を妨害するとかの、相手の力を削いで、アーチャーたちをサポートできる魔法。
あと、薬が足りないときや、緊急時にそなえての治癒や、状態異常の回復が最優先。
私は主人として、仲間として、この子たちを守りたいし、守る権利と義務があると思ってるから」
あどけない外見に似合わず、七季のソプラノは、どこまでも真摯な響きをもって、聞くものの耳を、胸を打った。

それは、守ることこそを当然とした心根。
――なるほど。彼女に刃は、似合わない。
癒すこと、援(たす)けることに力を使いたいと選んだ彼女を見つめるプレシアたちは、そんな風に納得した。
そのたたずまいは、命を育(はぐく)む水のよう。たゆたい、潤(うるお)す、その恩恵の形に似ていると。
「あと、先輩もよくケガするんで」
しかしプレシアは知らない。
彼女いうところの「先輩」が、どういう人物なのか。
そして、その「先輩」よりも、ときにタチが悪いと目される七季の、秘められた恐ろしさを。
高圧で打ち出される水は、ダイヤモンドをも切り裂き、深海の水圧は、鋼(はがね)すらもひしゃげるほどだということを――。

＃２０　力の使い道（後書き）

あとがき

＞まあ、ちょっぴり怪しげなフラグがありますが、オリ主、プレシアたちと合流しました。

いや合流といっても、同じ家にいるんですけど。話の気分的に。

風邪を引いたので投稿が遅くなりまして。

これ上げたら大人しく寝ます（笑）。

#21　自重しない人々

「ところでプレシア。デバイスってどれくらいの値段？」
「え？
そうね……安い市販品ならパソコン程度。
専門家（デバイスマイスター）に注文して組んでもらうなら、モノにもよるけどクルマ並ってところかしら」
少し考え込んだプレシアが、ソファの上でマグカップを片手に思案すること、およそ五秒。
ちなみに彼女の愛娘は、まだ向こうで七季の使い魔にゃんこ（ただし中身は闇の帝王プレ）から説教中。
そろそろ足の感覚がなくなってきたようで、挙動不審なアリシアである。
「上を見ればキリがないけど。お金かけようと思えば、戦艦と同じ値段、なんてデバイスもあるわけだし。
ただし、あなたのは私が作るから、材料費だけで済むわよ。それにパーツなら、うちに山ほどあるものね」
ＡＩを入れる場合は新品を買うけど。
「そっか。じゃあさ、アーチャーとリドルのデバイス、作ってもらえるかな。材料費は私が出すから」
ちなみに彼女の財布は、アレクトロ社からの賠償金と、その後たまたま衝動買いしたロトくじの賞金で膨らんでいる。具体的に言うと、ミッドのクルマ二、三台買ってもおつりがくるレベルで。
七季の言葉に、一瞬リビングが静まり返り――。
「乗ったわ！」
「わあっ。そうだね、アーチャーたちにもプレゼントしたいよね！」
リドルの説教をよそに、しっかりこちらに聞き耳を立てていたら

しい金髪幼女も声を上げ。
「私、頑張ってデバイスマイスターの資格とりますっ！」
「面白そうだから、僕も手伝ってあげてもいいよ」
眼鏡の奥のルビーアイをかがやかせるプレシアと、諸手を上げて賛成するアリシア。そして主人同様にテンションの高いリニスと、説教を中断、好奇心に駆られて便乗するリドル。
もうカオスである。
「ちょ、待ちたまえマスター」
ひとりアーチャーだけが、おたおたしている。
根が庶民派の英雄は、他人のためならともかくも、金額的にわりと大きなプレゼントを自分がもらうとなると、あわてて話を止めようとするのだが、いかんせん、肝心の作り手たちが止まらない。
「そうなると突貫工事かしら」
ぶつぶつ修羅場プランを立て始めるプレシアに、「うん、もちつけ？」と七季からのツッコミが入る。
「私の分は後回しでも……いや、いっそ、私のは実験的な試作品（プロトタイプ）にしてもいいからさ。
アーチャーのデバイスは、一年くらいかけて、ゆっくり作ってくれるかな。素材を吟味したり、構想を練る時間だって、作り手（プレシア）としては欲しいだろ？
それに、こっちの世界に来た私たちが、三人と会って一年、っていうのも、記念日的でいいと思うし」
『賛成！！』
テスタロッサ家の女性陣三人は、もうノリノリである。
特にプレシアは、自分も費用を負担する気まんまんだったり。
なにしろ使う機会もないほど忙しかった半面、やたらな高給取りだったのだ。それを、趣味とお礼を兼ねてつぎ込めるのだから、調子に乗らないはずがない。
そのうえデバイス作りに興味を示したアリシアの教材にもなるときては、自重しろと言う方が無理である。

「リドルもなぁ。こっちの魔法を使うんなら、調べて勉強するつもりだろ？」
「そうだね」
「それならやっぱり、ある程度、理解が進んでから、『魔法の杖（デバイス）』の構想を練った方がいいと思うんだ」
「でも、そんなに時間あるの？」
アリシアの説教を済ませた黒猫は、七季の膝に乗り上げつつ、こそり、と小声で訊いてくる。
いっぽう、ちょっと離れた場所で、ようやく正座を崩した金髪幼女（アリシア）は、今度は襲い来る痺れに、猫のような悲鳴を上げていた。合掌。
「ん。さっき寝てるときに、先輩と話したから。
先輩いわく、私のパワーアップ計画らしいから、やっぱり魔法を覚えるのが一番かなーって」
膝の上に陣取って、肩に前足をかけては首筋に擦り寄るリドルの、滑らかな毛並みに手を滑らせながら、七季はささやくような声で続ける。
「最低でも、結界くらいは自力で張れるようになりたいし。とーぶんはこっちで暮らすことになるよ。戻るときは、前もって連絡くれるってさ」
「へえ……そうすると、けっこう長いんだね？」
光の加減で銀がかって見える、まっくろなしっぽが、ゆらゆら揺れた。リドルの声が耳に近いので、七季はくすぐったそうな声で笑う。。
「そーでもないよ？
前、ハンター世界に行ったときは、三年くらいだったけど、ホグワーツ（ルんとこ）は卒業した後もいたし」
つまりハリポタ世界には七年間以上とな。
「要するにナナキ（リド）は、見ためと中身の年齢が」
「よその世界に行くとねー。肉体の時間軸は、元の世界にあわせてあるから、基本的に年食わないんだなー、これが」

戻るときは、先輩が時間軸の調整やって、ほとんど往復のタイミングがずれないようにしてるし。

「何という合法ロリ」

「この乳でロリはないだろー？」

「ロリ巨乳ですね、わかります」

「リドルもすっかり馴染んだよなー」

もはや、ネタに走った会話もお手の物である。たぶんハリポタ世界の現・闇の帝王が、いまのリドルを目にしたら呆然とするだろう。

精神的には、本家（あちら）よりもたくましくなっていたりするリドルである。

「まあ、そういうわけだから、アーチャー。ご主人様からのプレゼントということで、問答無用で受け取るよーに」

「……まったく。君たちときたら。もう好きにしてくれ」

ためいきつきつつも、褐色の肌の偉丈夫は、どこか嬉しさをにじませた苦笑を浮かべている。

好意を向けられることに慣れていないだけで、それを受け止められない男ではないのだ。もっとも「スキル：鈍感A」のせいで、七季くらいストレートにぶつけなければ、なかなか伝わらないのだが。

英霊の聴力で、しっかり七季たちの会話を聞き取っていたであろう——自分に関すること限っては、慎み深いにも程がある——従者に向かって、黒髪の少女は、笑顔でゴリ押しすることに成功したのだった。

#21　自重しない人々（後書き）

あとがき

＞まだ付き合いは浅くても、従者の性格の方向性はガッツリ把握しているオリ主です。

さーて、がんばってスペック考えねば。

#22　それいけプレシア（前書き）

まえがき

＞しばらくグダグダというか、ほのぼの全開で続きますので、短めにカットしてお送りします。

#22　それいけプレシア

「じゃあ、まずは総魔力量を調べましょうか」
プレシアが研究室から持ってきたのは、ハンディスキャナのような機械だった。
「総魔力量って？」
「体内に蓄積できる、魔力の容量（キャパシティ）のことよ」
「よーするにＭＰって感じ？」
アリシアも、七季たちの魔力に興味があるのか、機械を握るプレシアの手元をのぞき込んでいる。
「しかし、君たちのいう魔力と、我々の魔力が同じとは限るまい」
マスターである黒髪の少女の隣に控えるアーチャーもまた、見たことのない機器に興味を示しながら、やんわりと危惧を指摘する。
「それはそうね。だから……ッ！？」
やおら、機器を確認したプレシアは、紅い双眸を見開くや、「うわあ」と両手をカーペットについた。
いわゆるＯＲＴの体勢である。
「ど、どうかした？
やっぱこっちの素質はなかった？」
――あれおかしいな。先輩は魔力も霊力と同じで倍になるって言ってたのに。
ないしん首をかしげながら、七季は、眷族の絆という名のパスを通じた電波会議を振り返る。
「……逆」
「は？」
「あ、凄いこれ。数値が最大値で止まっちゃってる。故障かな？」
母親から機器を取り上げたアリシアが、無邪気な声で結果を明か

す。
「あれ？　でもリセットしたらちゃんと動くよ？」
しばし、ゆるやかな沈黙が、テスタロッサ家のリビングを支配した。
「逆よ。ええそう。測定機器をぶっちぎるほどのキャパなのよ。ふふふふ……」
「ちょ、恐（こわ）！　プレシア壊れた！？」
「腕が鳴るわっ！　この魔力量なら、どんなハイスペックのデバイスだろうとイケる！」
まぎれもないマッドサイエンティストの気配（オーラ）を燃え上がらせた暗髪紅眼の美女は、うなぎのぼりに上がったテンションで、どこぞの白蛇（ナーガ）ばりに高笑いしている。
マンションの部屋は防音なので心配はいらない。
「ママ、嬉しそー」
いっぽう、娘だけあって、こんなプレシアのご乱心っぷりにも慣れているのか、きゃっきゃと笑っているアリシア。大物である。
「ああ、マスター。そんなに楽しそうに……」
テスタロッサファミリーの、ちょっぴりズレた親子（＋１）劇場は、アーチャーがツッコミを入れるまで続いたという。

#22　それいけプレシア（後書き）

あとがき

＞ご乱心プレシア。

どんなにハイスペックのデバイスだろうと、使いこなせる魔力がないと、デバイスとしては欠陥あつかいになってしまうでしょうし。

手近にテストユーザーが見つかったので、「ヒャッハー」状態のプレシアでした。

魔法どうこうは別にして、基本的に機械いじりが好きな技術者・プレシアにしてみました。マッドの気は十分あると思うんで。

「白蛇（ナーガ）」はスレイヤーズすぺしゃるに登場する彼女です。

＃２３　がんばれアーチャー（前書き）

引き続きぐだぐだな内容です。
若干ではありますが、２ｃｈ語があります。お嫌いな方はご遠慮ください。

#２３　がんばれアーチャー

「そろそろ落ち着きたまえプレシア」
すぱーん。
「はっ！？」
褐色の肌の偉丈夫が、どこからともなく取り出した（いうまでもなく投影品）ハリセンで、音もかろやかにマッドサイエンティストの後頭部をヒットすると、ようやくダークヘアのママさん魔導師は我に返った。
「パーフェクトだ、アーチャー」
「感謝の極み」
ズパッ。
礼と同時に投影品のハリセンが男の手元からかき消える。
「それにしてもこの執事、ノリノリである」
思わずネタに走った七季に、つい合わせてしまった英霊（執事スキル持ち）と、すかさずネタで追撃を入れたリドル（猫バージョン）という異世界主従に、アリシアが「仲良しだねー」と母親に乗っかっている。
今度はリドルのツッコミでＯＲＺ状態になったアーチャーに、「てい」と七季がおんぶよろしく乗っかりながら、こちらは正気を取り戻した――が、愛娘にでれでれの――プレシアへと声をかけた。
「んでプレシア。こっちの魔力の定義って？　よければ教えてくれる？」
「え、ええ。
魔力の定義ね。魔力とは、魔法を使う際の源となる力。
魔法を使う者の体内にあって、使用することで減少する。いわば、体力と同種のものよ。

周囲に普遍的に存在する魔力素を、リンカーコアによって体内に取り込むことで魔力とする――魚にとってのエラと同じね。酸素を取り込み、二酸化炭素を排出する。魔導師の場合は、それが魔力素というわけ。

だから、私たち魔導師は、体内にあるリンカーコアが魔力の源なの。

この器官の役目は、大きく分けて二つ。

1）大気中の魔力を体内に取り込んで蓄積すること。

2）体内の魔力を外部に放出すること。

もちろんリンカーコアがなければ、魔法は使えないし、逆に、リンカーコアがあれば、動物でも魔法は使えるわ。

リンカーコアは肉体と共に成長するもので、魔力資質にも影響が大きいの。

ふつうは生まれたときからあるものなんだけど、ごく稀に、後天的に生じることもあるみたいね」

ソファに腰かけたプレシアは、そのまま背中にアリシアを引っ付けて好きにさせている。

リニスが、まだＯＲＺ状態のアーチャーに代わって、ポットに残ったコーヒーをプレシアのマグへ注いだ。

「ありがとう、リニス」

「どういたしまして」

「魔力とか、そういうのって遺伝するの？」

いまだアーチャーの背中におんぶ状態の七季がひょいと尋ねる。あどけない面差しは、自分よりも体の大きな従者に甘えることができて楽しいらしく、ふにゃりと笑っている様子が愛らしい。

バランス感覚がいいのか、その状態で男の首に腕を回して懐いているさまに、プレシアは「大丈夫かしら」と思いつつも頷いた。

――まあナナキが落ちかけたら、アーチャーが助けるでしょう。大した怪我はしないとしても。

「そうね。魔力に関する資質は、遺伝することが多いわね」

「……そのあたりは、我々の魔術資質と変わらないのか。
それはそうとマスター。そろそろ降りて欲しいのだが」
英霊であるアーチャーにとって、少女ひとりが重いわけもないのだが、いかんせん他の問題が存在する。
具体的には、乳とか、バストとか、おっぱいとか。
――当たってるんだが。
「やー」
いっぽう、アーチャーの広い背中がお気に召した七季は、おんぶ状態でぴったりくっついたまま、彼の首に回した腕に力を込める。
ブラジャーにキャミソール、ブラウスという、布三枚の軽装備では、大した防御力があるわけでもない。
さらにアーチャーの方も、いまの武装は素肌に黒シャツとズボンというういでたちで。
とどのつまり。
ふにょふにょというか、むにょむにょというか。
規格外のバストを支えるために丈夫に作られている、下着の生硬さが、かえって鍛え上げられた男の筋肉にぶつかることで、余計に中身のみっちり詰まった肉感が伝わるというか何というか。
もちろん、アーチャーの膂力であれば、振りほどけないはずがない。
が。
「アーチャーの背中、きもちいーもん。しばらくダメー」
それはそれは嬉しそうな声で、無邪気に言われてしまっては、力ずくで引き剥がすのも、気が咎めるというものである。
「やましい気持ちがないんなら、いいんじゃない？」
おまけにリドルにまで言われてしまっては、もはや彼の逃げ場がない。
アリシアなどは不思議そうに「アーチャー、ナナキのこと嫌なの？」と訊いてくるし。
ひとり大人のプレシアは、眼鏡の奥のルビーアイを細めて、くす

くす笑っているばかり。
ちなみに、わりとこの中では常識を持っていると思われたリニスは、アリシアに悪気なく話を振られて、
「私がプレシアに抱きつかれるなら、望むところです！」
と、力いっぱい愛にあふれたマスター至上主義を、胸張って主張してくれた。
――本当に逃げ場がない。
「それじゃあリドルの総魔力量を調べましょうか」
困りきった白髪の男を横目に、プレシアは先ほどの機械を手にして、ニヤニヤしている黒猫へと足を向けたのだった。
がんばれ、アーチャー。

＜＜ボツにしたオチ

七季に乗っかられたアーチャーに対して、リドルが一言。
「リア充もげろ」
「何だそれはっ！？」

＃２３　がんばれアーチャー（後書き）

あとがき

＞ヘルシングネタ。さりげに染められているエミヤんです。

いやウォルター老は格好いいと思うので。

リドルほど重症ではありませんが、オリ主の蔵書のうち、暇つぶしに結構な量を読破してしまっている模様。

注意書きをつけた２ｃｈ語は、ＯＲＺと「リア充もげろ」くらいですが。

幸い前回ＯＲＺ使ったときにツッコミこなかったので、いまのうちにコソコソ注意書きをつけてみるチキンです。

あとエミヤんがヘルシング読んだときの反応は、そのうちネタとして小話にでもしようかと。

（２０１０／１１／１８）

魔力についての記述を、一部変更しました。

＃２４　ある日のアーチャー（前書き）

まえがき

＞前回つながりの（ネタ的に）番外編です。例によってリリなのキャラが登場しません。

#24　ある日のアーチャー

「ところでマスター」
休日の七地家。その長女の私室にて、白く褪せた髪の偉丈夫は、赤い表紙の単行本（コミックス）を手に、背後のベッドで寝転んでいる少女を振り返った。
「ん、どした？」
こちらは図書館から借りたハードカバーを読んでいたらしい。すぐさまページから顔を上げたところを見るに、ちょうどキリのいいところだったようだ。
もう一人の使い魔・リドルはというと、日当たりのいいバスケットの中で昼寝中だ。オーバル型の籐籠からはみ出した黒いしっぽが、時折ぴくぴく揺れている。
「この世界にも吸血鬼はいるのかね？」
アーチャーが手にしていた本のタイトルは「ＨＥＬＬＳＩＮＧ」。吸血鬼を題材にしたマンガである。
「いっぱいいるけど。知り合いにも一人いるし」
「！？」
「うわ！」
ぎょっとした錬鉄の英霊は、思わずがばりと七季につかみかかり――その首筋に、それらしい噛み痕がないとわかると、ほっと嘆息した。
「アーチャー？」
「すまない、少し取り乱した……」
いつにない従者の動揺ぶりに、少女はそっと手を伸ばす。なめし革のように手触りのいい、アーチャーの褐色をした頬を、小さくやわらかな手が撫でた。

「どした？」
慈しみを込めたソプラノが、穏やかに男の鼓膜をくすぐる。彼がのぞきこんでしまった黒瑪瑙の瞳は、急かすでもなく、ただ少女の従者を映していた。
「……できれば、この世界の吸血鬼について、知識が欲しいのだが」
可能だろうか、とためいきじみた低い声が七季の上に降る。
藤色を混ぜたような、灰色の瞳。
そこに宿る懸念と、わずかに感じる熱っぽさが心配で、主たる少女は男を撫でる手は止めずに頷いた。
「おいで。その手の本があるから。いっしょに読もう」
読みかけのミステリを閉じた七季は、それまで横たわっていたベッドに腰かけると、自分の隣をかるく叩いて、アーチャーを誘った。

「赤と黒の系譜ー世界の吸血種／傾向と対策ー」――そう題された、百科事典サイズの書物は、革張りの表紙のハードカバーだった。
重いそれを膝上に乗せ、アーチャーはふと、隣で本をのぞきこんでいる少女に問いかける。
「マスター。先ほどは知り合いに吸血鬼がいると言っていたが」
半ばまで読み進めた本によると、この世界の吸血鬼は、アーチャーの知るガイアの守護者――世界の意思によって生み出された超越種――ではないらしい。
どちらかというと、魔物の一種、場合によっては人工的な術式によって造（つく）られることすらあるようだ。
「ん？
ああ、ピートのことな。友達だよ。厳密には、ヴァンパイア・ハーフだけど。
本名は、ピエトロ・ド・ブラドー。オカルトGメンを目指してるGS（ゴーストスイーパー）で、この本の著者」

「……は？」

鋭い灰藤の双眸を、ぱちりと瞬いた長身の偉丈夫は、促されるままに、巻末の著者欄を確認して、唖然とした。

そこには確かに、こう印されていた。

『ピエトロ・ド・ブラドー

経歴：１９ＸＸ仲間たちのカンパで来日し、旧知の唐巣神父に師事。現在は唐巣教会に所属。

オカルトＧメンを目指しながら、ＧＳ（ゴーストスイーパー）として第一線で戦う７ＸＸ歳の吸血鬼。』

＃２４　ある日のアーチャー（後書き）

あとがき

＞今回は短くてすみません。ちょっとストックぶんの順番的に、まだ上げられないものとかで……急遽、ネタ的な小話を。

まあＧＳ（ゴーストスイーパー）が登場するんで、吸血鬼も、必然、そちら寄りの方向になりました。

ネギまとＧＳ美神なら、それほど吸血鬼の能力についてギャップもないんですよね。

ピートＶＳエヴァなら、年齢的にも近いし、けっこうガチでいけるんではないかと思ったり。

オリ主の世界には、さまざまな吸血種がいるということで。

#25　相手に合ったプレゼントを―ちょっと待て―

「魔力測定の結果だけど。
けっきょく、リドルとナナキが計器の限界値オーバー。アーチャーがその一歩手前といったところかしら」
うきうきとした声音で結果発表するプレシアに、リニスがぱむりと両手を合わせて相槌を入れる。
「つまり、遠慮する必要はないということですね？」
「その通りよ！」
にぎりこぶしを固めてガッツポーズする、黒髪のママさん魔導師――もとい、マッドサンエンティスト。
その横で、アーチャーにおんぶ状態の七季とリドルは、アリシアが目の前に広げてくれた本を眺めている。
必然、アーチャーの目にも入る、その本のタイトルは。
『デバイス待機モードの種類―その変容とメリット―』
「んー……」
「アクセサリー型が多いな」
「カード型も色々あるんだね」
ＯＲＴ体勢から、カーペットに座りなおしたアーチャーと、その首周りを抱いて、背中に張りついている七季は、デバイスの待機モードについて、気づいたことを口にする。
魔導師からすれば、武器でもあり、相棒でもあるデバイス。
それを身につけておくためには、なるべく小型で携帯しやすい形が選ばれるのは当たり前だろう。
「私は、こういう装飾品をつけるのはな……作るのは、得意なのだが」
「そうなんだ？

ああでも、アーチャーの場合、戦うのに邪魔にならないものがいいかな。イヤーカフとかどう？」

七季の指が、イヤリングのように耳朶ではなく、耳殻を挟む形の、筒に似たアクセサリーの絵を示す。

「これか。ふむ、ピアスよりはましだな」

「私もピアスはちょっとなー。校則違反だし」

「すると七季には、チョーカーやネックレス、ペンダントあたりが無難か」

「ブレスレットでもいいよ。ポケットに入れておけばいいんだし。ピアスくらいちっちゃいと、どうしても失くしそうでさー。あ、変わったのだと、ミュージックプレーヤーとかある。いいなぁ、これ」

「どれ」

魔法を使わないとき、いわばオフ状態のデバイスの形状が待機モードである。

その形をどうするかで、異世界の主従は仲良く本を見ていたのだが。

「これ見ると、デバイスって、待機モードと通常モードがあるみたいだけど……」

いっぽう、七季の肩口からひょっこり顔を出している黒猫姿のリドルが、眉間にしわを寄せて、とあることを呟いた。

「僕もアーチャーも、霊体化するじゃない？　その場合はどうするのさ？」

『あ』

しごくまっとうなツッコミに、デバイス作成組だけでなく、七季までもが固まる。

が、すぐにプレシアから改善案がもたらされた。

「それなら、収納用のストレージをひとつ用意すればいいわ。収納だけに特化すれば、いまある余剰パーツでも十分組めるし、荷物入れにもなるから便利よ？」

「おお。プレシア凄い」
ぱちぱちと黒髪の少女からの拍手を受けて、プレシアはふふんと胸を張る。
「どういたしまして♪
で、そのストレージをナナキにつけてもらえば解決ね。それでいいかしら？」
「問題ない」
「僕もそれでいいよ。じゃあ、改めてデバイスの待機モードのデザインでも選ぶかな」
「私も一緒にえらぶー！」
よいしょっ。
それまで本を広げていたアリシアが。胡坐をかいていたアーチャーの片膝に乗り込んでくる。
そして、空いたもう一方の膝を、ぺむぺむ叩いて、男の肩口を見上げた。
「ナナキはここ！」
一緒に見るの！
にっこり無邪気１００パーセントの笑顔でのたまう、テスタロッサ家のお姫様である。
アリシアの天真爛漫っぷりに頭を抱えるべきか、それとも、ここまで懐かれてしまったことが珍しいと驚くべきか、しばし悩むアーチャー。
かたや、ないしんぐるぐるしている従者をよそに、可愛らしい金髪ツインテールの妹分からのお達しで、「はいはい」と男の膝上に滑り込む、黒髪の少女が一人。
「あ、リドルはこっちな」
「ん」
そしてまっくろにゃんこはというと、ひょいと抱き上げられたかと思いきや、そのまま七季の膝にちょこんと収まった。
幼女と少女が二人、男の膝に陣取る形で、大きめの本を広げて、

あーでもない、こーでもないと話しているさまは、本当の姉妹のよう。

「両手に花ですねえ、アーチャー」

ふふふ、と笑うのは、カフェオレ色の猫耳を、楽しげにぴくぴく動かしているリニス。

「カメラどこだったかしら、リニス」

そして真顔で使い魔に尋ねるプレシアは「何あれ可愛い」とハァハァしている。

すかさずノータイムでマスターにカメラを手渡す山猫娘。

対するダークヘアのママさん魔導師は、力強くサムズアップで使い魔の機転を讃え、愛娘と恩人主従のスリー（＋一匹）ショットを、ばしばし激写するのだった。

#25　相手に合ったプレゼントを―ちょっと待て―（後書き）

あとがき

＞あれおかしい。オリ主たちのデバイスをどんなのにするか決める予定だったのに。

もうこれタイトルを「愉快なテスタロッサ家」にした方がいいんじゃないだろうか。

ちなみに魔力量ですが、アーチャーとリドルは、オリ主の魔力量に準じていますので、Ｆａｔｅ風ステータスだと、

オリ主：魔力Ａ

リドル：魔力Ａ

アーチャー：魔力Ｂ

となります。オリ主の先輩あたりが「魔力：ＥＸ」。

#２６　相手に合ったプレゼントを―色と形と心配り―

「じゃあ結果発表――」
「ナナキの希望：：
指輪、もしくはチョーカー。デザインはシンプルで、石は青か紫系。金属は金よりも銀色。
アーチャーの希望：：
バングル、もしくはイヤーカフ。あまりゴテゴテしたデザインは嫌で、しいていうなら赤を差し色に。
リドルの希望：：
イヤーカフ、もしくはチョーカー。銀や緑を取り入れたもの。猫でも邪魔にならないデザイン」
一貫して、派手なものを好まないあたり、似たもの主従なのか。
「つまんなーい！
もっと可愛いのにしようよナナキっ」
アリシアが、異邦の少女の腕を抱きしめ、ねえねえと駄々をこねている。
「でもなぁ。ふだんから目立たずに、つけっぱでいられるとなると、どうしても……」
ねぇ？
と、七季が長身の従者を振り向けば。
「洗い物の邪魔になるのはな……」
と、えらく庶民的な――というか、家庭的な――理由を引っ張り出している錬鉄の英霊がいたりする。
「昼寝の邪魔になるのは嫌だしね」
にゃんこ姿のリドルはリドルで、怠惰まっしぐらのセリフをしれっと吐く始末。

駄目だこいつら、早く何とかしないと。
そのとき、アリシアの瞳に炎が燃えた（え）。
「ママ！　待機モードのデザイン、私がやるからっ！」
「え？　わ、わかったわ」
勢い込んで宣言する愛娘に、圧される形でこくこく頷くプレシア。
「リニス……は、ママの手伝いがあるよね。うう、私も使い魔さんが欲しいっ！」
魔法こそ使えないものの、頭脳は既に天才級のアリシアは、ぶつぶつ言いながら構想を練り始める。
ここらへん、間違いなくプレシアと親子である。
「ええと……私ら、何かマズいこと言った……？」
いまだにアーチャーの膝上に座ったまま、首をかしげて、背後の男を見上げる七季。
「さて。だが、どうも洒落っ気のなさに、アリシアは呆れているようだ」
いっぽう、母親の方へ飛び出していった金髪幼女を見送りつつ、経験則から推測を立てる朴念仁のアーチャー。
「ああわかる。ナナキは機能と使いやすさ優先で、色気とかないし。アーチャーは何とかの一つ覚えだもんね」
「悪かったな」
「失礼な」
黒猫にツッコミを入れられる主従という、非常にシュールな光景が展開しているテスタロッサ家のリビング。
しかし既に違和感がないあたり、プレシアもリニスも、馴染みきっている。
「まあまあ。アリシアの好きにさせてあげてちょうだいな。後で調整はきくんだし、ちゃんとユーザーの意見も聞くように言っておくから」
楽しげなのはいいことだ、と可愛い娘の、くるくる変わる表情に、相好を崩しているダークヘアの美女ママさん。

「興味を持って挑戦するということは、あの子の教育にもいいことですしね。
ではマスター。こちらはこちらで、デバイスの機能自体を考えませんか？
ナナキだけでなく、アーチャーやリドルからの希望を聞いて、話を詰める必要もありますし」
「ええ、リニス。でも、そろそろ夕食の買出しに行く時間じゃないかしら？」
カフェオレ色のネコミミ使い魔もにこにこと、テスタロッサ家の時間は、穏やかに流れていくのだった――。

#２６　相手に合ったプレゼントを―色と形と心配り―（後書き）

あとがき

＞しまった、またしてもオチがない。

今回、短かったので二話まとめての更新にしました。

#27　一度はやりたい魔改造ー彼女の場合ー

それは、古今和歌集の前文にあたる「仮名序」の一説から始まった。

「やまとうたは、人のこころをたねとして、万の言の葉とぞなれりける」

言葉をあつかうものにとっては、魔法の呪文。

脳裏に浮かべるイメージは種。

自分と言う器。肉体の壌。そこに落ちた種は、注がれる力によって、水を吸うように芽生え育つ――そんなイメージ。

「言葉は呪」

殻を砕き。

裡から外へ。

光を目指して、天に伸びる、大樹のように。

強く、太く、早く！

広がる力は怒涛のように。

「我は呪い行いたる、汝の主にして贄」

少女の中で、注がれた力が、色を変える。

無色から有色へ。

白銀く、真紅く、蒼闇く、漆黒く。

染まり、紡がれる糸は、天を覆う網のごとく、巨大に、精緻に、広がりゆく。

「起て！

昏き夜に終わりを告げよ。黎明、セットアップ！」

『イエス、ユアハイネス』

夜色の燕が奔る。少女のまとう衣服が替わる。

巫女服の小袖から、肩先を落としたようなデザインのトップは、

体の線が出るほどに薄く、黒に近い紺色。差し色なのか、襟部分だけが白く、そこに青で植物を模した文様が描かれている。

ウェスト部分は、太極図を模した、中華風の帯と防具。ギュッと締められているために、ことさらバストが強調されて。さらには帯上と帯下サイドからのぞく、竜胆色の布地が、花びらのよう。

そして、肘から先を覆う、たっぷりとした袖の羽織りは、白い龍が舞う闇色で。極端に短い、腿丈の裾からのぞく、むっちりと白い脚を隠すように、裾が燕尾に割れて足首まで伸びていた。

ちなみに、ミニスカートばりの裾からのぞく、少女のまっしろな脚は、小袖と同じ、紺色のストッキングによって、太股の半ばからぴっちりと包まれている。

もちろんストッキングを留めているのは、髪の色と同じ、黒レースのガーターベルト。

足元は、動きやすさを重視したのか、サンダルに近い靴とレガース（脛当て）で固められている。いずれも黒を基調としながらも、ポイントには銀の留め具があしらわれて、品のいい華やかさを添えていた。

つまりどういうことかというと――

「エロいね。パーフェクトだ、アリシア」

「感謝の極み」

ズパッ。

どうもテスタロッサ家の長女は、いつからか闇の帝王（プレ）に洗脳……もとい、ネタを仕込まれていたようだ。

「何やってるかな！」

黒い弓を握った手を、ぷるぷる震わせながらツッコむ七季は、羞恥に頬を焼いている。

ほぼ胴体部分だけを、ミニ丈の小袖でまとめ、太股までのストッ

キングと大きめの上着をまとった姿の巨乳少女は、それはそれはえっちく見えた。
肩や太股の一部だけを見せるファッションは、チラリズムとしても美味しい。
紅潮しているせいで、ふっくらした桜色の肌が、よけいに色っぽく見えるせいもあるだろう。
全体的な印象としては、和服よりも、三国志の文官に近いイメージである。長さはミニ丈で、やけにマニアックで色っぽい改造だが。
「これぞ中華風魔女っ娘(こ)！
和風メイドと迷ったけど、ふだん巫女服だから違いがビミョーだし、こっちにしてよかった。
うん、イイ仕事したね、アリシア☆（キラッ）」
久しぶりの人間形態で、かがやかんばかりの笑顔を浮かべるリドルは「わが生涯に一片の悔いなし！」といわんばかりの清々しい空気をまとっている。
美少年なのにオタ全開な発言が、何とも残念なありさまだが、それでも騙されそうな女性が多数いそうなかがやきっぷりだ。
いっぽうのアリシアも、つやつやした顔でサムズアップし、「おれはやったぜ！」とばかり、胸を張っている。
こちらはこちらで、かけらの悪気もない、やり遂げた感をにじませ、いましがた運動会で走ってきましたと言われたら信じそうな勢いだ。
「コンセプトは『凛々しく、エロ可愛(かわ)いく』だよ！
だってナナキ。勿体ないんだもん。可愛いし、素材は悪くないのに。ふだんは飾り気のない、男物みたいなのばっかり着てるし」
――あーうん。男物の方が楽だからさ。ときどきアーチャーの服着てるって言ったら、怒られるかな、やっぱ。
こっそり胸のうちで呟いている七季のセリフをアリシアが聞いたら、それはそれで萌えるかもしれない。
「お姉ちゃんの魅力を最大限に引き出せるよう、がんばってみたよ

！」

具体的には、おっぱいとか、フトモモとか、お尻とか。

確かに、七季の体のライン自体は、これでもかと女性らしいし、正直な話、いつもきっちり留めているブラウスの、ボタンひとつ外すだけでも色気が加わるレベルだったりする。

Gカップという名の凶器はダテではない。

もっとも、ムシ避けのためにそれを隠していたのは、どっちかというと七季の幼なじみの方だったりしたのだが。

はるか遠い場所にいる、純情野郎たちはさておき。

アリシアに任されていたバリアジャケットのデザインは、前もって彼女に魔改造されていたというわけだ。

バンザイしながらのたまう娘の主張に、自重しないママさん魔導師、ご満悦の態（てい）。

「あら、可愛いわよ、ナナキｖ」

「似合ってます。さすがはアリシアですね」

うふふふ、と微笑んでいるのは、プレシア主従。というか、この妖しげな笑みは、おそらくこの二人もデザインに関与していたのだろう。

第二の娘とも目している異邦人娘は、残念ながら、あれこれ着せようとしても、あまり値の張らないシンプルなものばかりを選ぶ傾向にあって、保護者二人はないしん非常に悔しがっていたのだから。

さりげに、握りこぶしを作って「おっしゃあ！」とガッツポーズしているのが見える。

いいのかそれで、テスタロッサ家。最近ますますカオスっぷりに磨きがかかっているような。

さて、残るアーチャーはというと。

「……その、何だ」

灰藤の目が、ちらりと少女の胸元を滑る。

丈夫な襟に対して、レオタードに近い薄さを見せる紺色の生地には、つんと浮いた影がふたつ。

「ブラジャー（したぎ）はつけた方がいいと――おぶっ」

セクハラ同然の善意の忠告を口にした男は、短い裾から伸びる脚によって、それはみごとなカカト落としを食らったとか。

その際、かすかに、バリアジャケットにはなかった、淡いブルーの布地が見えたというのは――また別の話である。

#27　一度はやりたい魔改造ー彼女の場合ー（後書き）

あとがき

＞とりあえず、一足飛びにオリ主のバリアジャケットをお披露目。

オチにアーチャーを使ったのは申し訳ないと思ってます。

#２８　はじめてのデバイス―誰かさんといっしょ？―

「ま、バリアジャケットのお披露目も済んだことだし」
「改めまして」
『ハッピーバースデー、ナナキ――！』
ぱぁん。
祝辞と共に響く、にぎにぎしいクラッカーの音。
ここは、とある管理外世界のひとつ。
碧い湖水が美しい水辺に陣取って、テスタロッサ家と七季主従は、アウトドアちっくなバースデーパーティーの真っ最中だった。
サンドイッチを始めとした軽食は、スコーンやチーズ、どうやって持ち込んだのか、生クリームで飾られたホールケーキと、豪華なアフタヌーンティーさながらのメニューである。
「ありがとう、みんな。
しかし、いい眺めだねー。無人世界なのに自然豊かだから、騒がしくはないし」
紅いライダージャケットに黒いインナーを着込んだアーチャーから、サンドイッチを乗せた皿を受け取って、しみじみと七季は感嘆の声を洩らした。
風光明媚、とはこのことだろう。
山並みは青く緑に覆われてそびえ、排ガスとは縁もゆかりもなさそうな空は、高く蒼く。
流れる風には、鳥の声と、ときおり混じる花びらの色。清々しい大気は、少し肌寒いくらいだが、かえって爽やかで、明るい日差しと合わせれば、体に障るほどではない。
いつものポニーテールに結われた七季の黒髪が、ふわりと揺れて背中をくすぐった。

「ええ。こういう、人がいない管理外世界には、めったに管理局が来ることはないから。
……材料を調達するのにも便利だしね。ある程度、調べておいたのよ」
きょうは眼鏡をかけていないプレシアが、ちょっぴりルビー色の目を逸らしながら答える。
というのは、他の無人世界――いわゆる、不法投棄場所（ごみすてば）となっている管理外世界から、しばしば彼女は、デバイスの材料として色々なものをお持ち帰りしていたりする。
まあ、捨てられているものだから、誰に文句を言われるものでもないのだが、中には、プレシアにとってもオーバーテクノロジーっぽい、ロストロギアじみたシロモノもあったりするので、後ろ暗いといえば後ろ暗い。
ルビー色の目が、お空を遊泳中の天才ママさん魔導師の、横から絶妙のタイミングで助け舟を出したのは、使い魔たるリニス。
「仕事が忙しくなってからは、こうやって親子でピクニックに行くことも難しかったですから。
人目がないところなら、マスコミに邪魔される心配もないですし、心置きなくアリシアやナナキたちと一緒に過ごせるでしょう？」
「ああ。そだねー」
あっさり納得する七季は、アーチャーから受け取ったマグの紅茶をすすって、ほにゃんと表情をほころばせる。
「はい、アリシア。あーん」
「あーん」
いっぽう、矛先が逸れて安心したのか、ダークヘアのママさん魔導師は、オフホワイトのニットを羽織り、膝の上に座る愛娘の口元へ、親鳥よろしくサンドイッチを運んでいる。
その光景に、仲良しだなぁ、と七季もほのぼのと胸のうちを温かくする。
――まあ、他に見る人もいないからいっか。

ある意味、開き直った彼女は、いまだあのバリアジャケット姿である。

が、バリアジャケットは、魔法攻撃や衝撃だけでなく、温度変化などからも身を守ってくれるもの。

戦闘においての防御力ばかりが重視されるが、じっさい、こうしていると、快適なエアコンさながらで、七季の周囲を温度調節してくれる優れものなのだ。

よって、基本的に合理主義の少女は、足回りのレガース部分だけをいじり、紺のストッキングと黒い羽織、そして袖のないミニ丈バリアジャケット姿のまま、膝を崩して座っていた。

と、今度は色黒の使い魔から、七季の方へとブランケットが差し出される。

「マスター。これを膝に」

もっとも、男にとっては、ミニ丈の裾と、そこから伸びる足のコントラストが目を引いてしょうがないので、是非とも隠して欲しいという心情も含まれていたりいなかったり。

「ああうん。ありがと、アーチャー」

バリアジャケット効果で適温なのだが、彼の心遣いを無碍にするのもあれなので、黒髪の少女は素直に赤いブランケットを膝にかけた。

すかさずその上に、黒猫姿のリドルが丸くなって陣取る。

で。

「この子、どういう機能つけたの？」

七季が指し示したのは、彼女の傍らに置かれた漆黒の弓だった。

黎明（れいめい）――夜明けの名を与えられたデバイスは、形としては、アーチャーの使っているものによく似ている。

ただし、まっくろなボディには菫青石（アイオライト）によく似た青紫の石と、紫（アメジスト）

水晶に似た紫色の石がはめ込まれ、つや消しの銀で品よくふちどられている。
いまは弦を張られていないそれは、見た目だけなら、儀礼用の杖に見えなくもない。
はめ込まれた石が、ふわりと光って、穏やかなテノールを紡ぎあげた。
『初めまして、マスター。先ほど名前をいただいた「黎明」と申します。お目にかかれて光栄です』
「ん、これからよろしくな、黎明。私は七季。ファミリーネームは七地で、こことは違う世界から来た『神使』なんだけど……そのへんの事情は聞いてる？」
『もちろんです。僭越ながら、開発者の皆さんから、マスターについてのお話を詳しく教えていただきました。
しかし、情報とは受け取り手によって変容するもの。そのうえ私が把握しているのは、あくまで過去のものに過ぎない。
いうまでもなく、現在のマスターには遠く及びません。私は、マスターからお話を聞いて、離れていた間の空白を是非とも埋めたいです。
もちろん私のことも知っていただきたい。
つきましては、スペックについての説明を、開発者である四人からお聞きなさった後に、私からも補足をしたいと思います』
「ん、りょーかい。
しかしまた……えらい丁寧な性格になったもんだねぇ……。
プレシアー、は、アリシアといちゃついてるから、リニス、お願いできる？」
ダークヘアと金髪の、らぶらぶ親子を幸せそうに眺めていた、カフェオレ色の髪のネコミミ娘は、くるりと振り向いて快諾する。
こちらもテスタロッサ親子の邪魔をする気は毛頭ないらしく、二つ返事で口火を切った。
「はい、ナナキ。

まず『黎明』の種類としては、ＡＩ搭載のインテリジェントデバイスにしました。
いまだこちらの魔法に不慣れなあなたをサポートすべく、『気遣いのできる』人格を選んだつもりです。
忠誠心が高く、そのぶんちょっと……いえ、かなり……マスター至上主義な機体になった観はありますが、全力でナナキを助けてくれるでしょう」
のっけからツッコミどころがあった気がしないでもない。
「……リニス（つくりて）に似たのかな？」
プレシア（マスター）とアリシア（むすめ）大好きだし。
「アーチャーに似たのかもしれませんよ？」
彼もナナキ（マスター）が大好きですからｖ
ごふぅっ！
にっこり笑う使い魔ネコミミ娘の言葉に、男の咳き込む音がする。
隣でげふごふ言ってるアーチャーの、広い背中をさすりながら、七季は苦笑を浮かべてリニスをたしなめる。
「あんまりアーチャーをいじめないであげてな？　私の大事な使い魔なんだから」
「うふふ、わかってます。でもナナキの台詞で、ますますアーチャーは照れてるみたいですけどｖ」
まだ咳き込んでいる錬鉄の英霊を横目に、少女の膝上で丸くなっていたリドルが、伸び上がって七季の唇をぺろりと舐める。
「僕のこと忘れたら酷いよ？」
「もちろん。リドルだって、私の大事な使い魔（かぞく）だよ」
きゅう、と抱きしめられた黒猫は、少女のたわわな胸に埋まると、ルビー色の目をちろんと細めてほくそえんでいる。
「……マスター。そろそろ彼を離したまえ」
もちろん鷹の目がそれを見逃すはずがない。
朴念仁（アーチャー）よりも、ずっと女慣れしたリドルが、しっかり少女のおっぱいを堪能している邪（よこしま）な気配を感じ取って「この野郎」と鋼色のま

なざしが、ちょっぴり不穏な色を帯びている。
が。
アーチャーが手を伸ばすよりも先に。
びーむっ、ばしゅっ。
「うえええっ!?」
驚く七季のソプラノに重なるのは、穏やかなテノールの音声。アーチャーよりもやわらかく、少しかろやかな響きのそれは、無機物から放たれている。
『悪い虫（エネミー）の無力化、完了しました』
転がっていた漆黒の弓――黎明から放たれたビームとバインドによって、哀れリドルはがっつり気絶&ぐるぐる巻き、という状態に。
たしかに、ある程度の自己判断で、魔法を使ってくれるのがインテリジェントデバイスの持ち味なのだが。
怨霊（リドル）レベルが目を回すほどの出力。しかも消滅はしない程度の力加減。
それを、ほぼゼロ距離で周囲に被害も出ないくらいに限定して実行できるだけの処理能力は、褒めるべきところなのだろうが。
「リニス……これ、どうなの?」
マスターの使い魔にまで容赦なく攻撃って。
「やっぱり、過保護なところはアーチャーに似たのかもしれませんね」
頬に手を当てて、のほほんとコメントする山猫娘の言葉に、そっぽを向く褐色の肌の偉丈夫と、心なしか、誇らしげに紫色の石を光らせる黒い弓。
そんな自分のデバイスと使い魔を見比べる、黒髪の少女の姿があったとか。

#２８　はじめてのデバイス―誰かさんといっしょ？―（後書き）

あとがき

＞そんなわけで、オリ主のインテリジェントデバイス「黎明」登場です。

　開発者は、プレシア、アリシア、リニス、アーチャー。リドルは横からちょっと口を出した程度ということもあって、わりと対処という名のツッコミがきっついです。

#２９　一度はやりたい魔改造ー彼らの場合ー

引き続き、何事もなかったかのように説明をするリニス。ツワモノである。

山猫娘は、群青色の目を楽しげにきらめかせつつ、親指、人差し指、中指そろえてピッと立てた。

「デバイス『黎明』の形態変化は、待機モードを除いて三つ。

弓形態の『ストリング』。

籠形態の『スワロウテイル』。

翼形態の『ハルピュイア』。

とりあえず、ナナキの要望だった補助魔法を使うために特化しました。

治癒魔法の方は、どうせだから高度医療まで可能にするため、別にデバイスを組んでいる最中です」

「え！？」

前半はともかく、後半の思いがけない内容に、七季は大きな目をぱちぱち瞬いて、プレシアとアリシア、そしてアーチャーたちを交互に見た。

いまだリドルはバインドぐるぐる巻きで気絶中だが。言ってはなんだが、かぱんと開いた大口がちょっぴり間抜けである。

――あ、何かネズミっぽい小動物が、リドルの口にもぐりこんだ。

おーい、それは巣じゃないぞー。

「いざというときの切り札は多いほうが良いわ、ナナキ。

とっさの対応で、大切なものを助けられるかもしれないから」

そうアドバイスを挟むのは、いとおしそうに金髪の愛娘を撫でるプレシアだ。

腕の中の家族を見つめる、ルビー色の目は、限りない安堵と慈し

みの色に染まっている。
かつてアリシアを事故で失った――七季がいなければ喪っていた――母親の言葉は、重く、力がこもっていた。
「我々もプレシアと同じ意見だ。それに、治癒魔法のレベルが高いデバイスは、他者のみならず――何より、君の生存率を上げる」
次いで低い声を紡ぐのは、ありとあらゆる死の地獄を這いずり回ってきた英霊の、「生きて欲しい」という願い。
どちらも、生半可な遠慮では押し返せない、苦悩の影がにじんでいた。
「……うん。ありがたく、もらっとく」
頷く七季は、ふんわり目を細めて、隣に座る男の肩へ、ことりと頭を預ける。
少女の黒瑪瑙のまなざしが、泣きたくなるような慈(いつく)しみと、深い想いを受け止めるために、常より水気を含んでいた。

明るく蒼い空の下、ぴちゅちゅ、ぴちゅちゅと鳥が鳴く。
「さて。ここから先の説明は、私たちが担当するわ。リニス、給仕してくれるのは嬉しいけど、あなたも食べなきゃ駄目よ？」
「お気遣いありがとうございます、マスター」
うきうきと、自分の「作品」について語ろうとするマッドサイエンティストな美人ママさん魔導師に、カフェオレ色したネコミミ娘は、苦笑を浮かべて引き下がる。
「じゃあ、まずは基本フォームの『ストリング』から説明するねっ」
アリシアがルビー色の目をかがやかせて、こちらも高く澄んだ声を弾ませる。
やはり親子、というか。このぶんだとアリシアにもマッドなサイエンティストの素質がありそうである。

「ちょうどいま、まっくろな弓の形になってるの。それが『ストリング』フォームだよ。

いまは張られてないけど、魔力弦を用いた音波による索敵、魔力波からなる範囲魔法――ＡＭＦ（アンチマギリングフィールド）（指定範囲の魔力収束の妨害）なんかがメイン。

もちろん他の補助魔法も使えるし、魔力で生み出した矢での射撃もできるようになってるよ」

アーチャーの使う、黒い洋弓に似たのは、弓のモデルとして参考にしたからだという。

「あと、アーチャーいわく、魔力の収束を妨害するのに……何だっけ？

つるうちの、ぎ、とかって概念を利用したって言ってたような。そのへんは、アーチャーが知ってる魔術の要素も取り入れたの」

金色のツインテールを、ウサミミよろしく揺らしながら、小首をかしげる幼いアリシアに、七季は「ああ」と相槌を打って補足した。

「弦打の儀（つるうちのぎ）、だね。鳴弦の儀（めいげんのぎ）（※）ともいうけど。

弓に矢をつがえずに弦を引いて、音を鳴らす事によって気を祓う退魔儀礼のことだよ。

『魔』を退（しりぞ）けるって概念を利用したってわけか。魔術っていうよりも、神道の概念だなぁ」

そのぶん七季には親しみ深い話だが。

神社で授与される破魔矢を見ればわかるように、祭礼や神事において、弓は縁の深い武器なのだ。

「次が――といっても、順番にあまり意味はないんだけれどね。

偵察フォームの『スワロウテイル』。これは、情報収集の機能が欲しいって要望に応える形態よ。

本体は籠を模した形で、燕、または蝶型の子機を繰り出して、ステルスを張りながら現場の情報を収集。親機である籠に集めて、マスターに伝えるの。

あと、複数の子機を基点に使った、ジャミングや結界魔法なんか

も可能よ。フィールド魔法の展開にも便利な形態ね。
ただし『ストリング』に比べると、カバーする範囲が広くなればなるだけ、魔力も食うことになるけど。そのあたりは、おいおい慣れて、使い分ければ良いわ」
プレシアの言葉に頷いて、七季は試しに傍らのデバイスへと声をかける。
「黎明、フォーム『スワロウテイル』」
『イエス、ユアハイネス』
――てゆーか、ネタ仕込んだのもリドルだろ。
コードギアスですね、わかります。
漆黒の弓がゆらりと輪郭を失い、あっというまに銀で装飾された漆黒の籠になる。
サイズは、直径七十センチほどだろうか。ちょうどスライスしたバームクーヘンを立てたような円形型で、中心に同心円の扉がついている。
弓と同じ、紫と青紫の石がはめ込まれたそこから、放射状に伸びた黒い柵と、そこに這う銀色の蔦が、アンティークっぽい。
中には、黒と白の双剣が一組、交差する形で据えられており、その周りを、ひらひらと数羽のまっくろな蝶が飛び交っていた。
「えと……この双剣、つーか夫婦剣？　アーチャーの魔力を感じるんだけど……」
刀剣マニアでなくとも、思わず見とれてしまいそうな、中華風の剣は、サイズこそ違えど、錬鉄の英霊が愛用する武器の一つ。
若干、たらりと額に汗を浮かべる七季は、おずおずと彼女の従者を仰ぎ見て、「あ、自分でもやらかしたと思ったんだな」と納得した。
「あー……それはだな。揃いで持つと、物理的・魔術的な防御力を高める効果がある双剣だ。私が作った複製品ではあるが、効果のほどは保障しよう」
ちょっぴりサイズはいじってあるものの、投影品とはいえ、宝具

をデバイスに仕込んでしまうあたり、どうやらアーチャーもプレシアのテンションに釣られて、かなり悪ノリしたらしい。
ほのかに紫がかった鋼色の目が、うろうろお空を泳いでいる。
――可愛いんだけど、アーチャー。言ったら怒るよな。
「うんわかった。私もアーチャーのデバイス、とびっきり愛情こめておくからな？」
部分的にはドにぶいが、空気が読めないわけでもない少女は、にっこり笑ってのたまった。

思いがけず、羞恥に溺れて溺死している弓兵はさておき（そっとしておくのも優しさである）。
「で、いわば最終フォームが、翼形態の『ハルピュイア』ねっ」
わくわくした声音で告げるアリシアは、「早くフォームチェンジしてっ！」と、七季の黒い袖をくいくい引っ張っている。
「作っておいて何だけど、我ながら物凄くタチの悪い――敵に回すと、って意味でね――仕上がりになったと思うの」
いっぽう、アリシアを抱いているプレシアも、自信満々な笑顔で、遠まわしに急かしてくる。
「はいはい。じゃあ黎明、フォーム『ハルピュイア』」
『イエス、ユアハイネス』
すると、またしても黒銀の籠はかき消え――入れ替わりに、少女の背中から翼が展開した。
背後に何もないからこそのフォームチェンジだろうが……それにしても、七季の背なに生じたそれは、異形であり、凶悪かつ、人目を惹くだけの美しさを兼ね備えていた。
水晶の翼。
それは、干将・莫耶の双剣を芯に広がる、黒白の双翼だった。それぞれの左右で色の違う水晶のかけらが、折り重なって翼の様相を

呈している。
　ただし鳥のそれと違って、横ではなく縦に広がる様は、ともすれば芸術品のように見えるだろう。ところどころ、植物の枝のように走る黒いフレームが、ことさらそれを助長していた。
　付け根の部分――ちょうど少女の肩甲骨のあたりに、紫と青紫の宝石が、バリアジャケットとの連結部分を担っている。
「背中に展開した、結晶の羽を細かく振動させることで、人間には聞こえない周波数を生み出して、脳の一部を支配。
　範囲内の敵を、酩酊や睡眠、混乱、一時的な暗示に叩き込んで無力化できる――現時点で、ナナキの要望をできる限り叶えたつもりよ。
　翼の結晶部分は、魔力で形成したものだから、基本的にいくらでも増やせるわ。いうまでもなく、分離して散布することも可能よ」
　ようするに、結晶だけ前もってどこかに仕込んでおいて、魔力の隠蔽（いんぺい）さえしておけば、後で起動とかもできるわけで。
「うん――見ためは厨二装備だけど、これは良いね」
　にまり、と口端を引き上げる童顔娘は、テスタロッサ親子とリニスに向かって、力強くサムズアップした。
「翼だから飛ぶと見せかけて、目には見えない効果を生む――ブラフとしても目立つし、気を逸らせる。ほんとプレシア、天才！」
　ちなみに七季は、制御の面倒なミッド式の飛行魔法でなくとも、箒（ほうき）さえあれば、ハリポタ世界式でちゃんと飛べたりする。
「ほほほほほ♪」
「ママてんさーいっｖ」
　七季と一緒になってプレシアを褒めるアリシアに、ダークヘアのママさん魔導師、絶好調。
　けっきょく愛娘たちの賛辞を受けるプレシアの高笑いは、リドルが目を覚ますまで続いたのだった。

#２９　一度はやりたい魔改造ー彼らの場合ー（後書き）

あとがき

＞下手な攻撃よりも、確実にライフを削るのがオリ主流。破壊力よりも効率重視。

地味に静かにえげつなく、味方を支え、敵を削ぐ、がモットーです。

ぶっちゃけ、最後のあたりは書き手も悪ノリしたと反省。でもテーマが魔改造だったんで、どうせだから、やらかした。

出力的には、ストリング＜スワロウテイル＜ハルピュイア。

※）鳴弦の儀

別名を「弦打（つるうち）の儀（ぎ）」

弓に矢をつがえずに弦を引き、音を鳴らす事により気を祓う退魔儀礼。魔気・邪気を祓う事を目的とする。

後世には高い音の出る鏑矢を用いて射る儀礼に発展した。鏑矢を用いた儀礼は「蟇目（ひきめ）の儀（ぎ）」と呼ばれる。

元々は誕生儀礼。のちに病気祓い、不吉な出来事が起こった際など幅広く行われるようになった。

#３０　二つ目のデバイス

「そうそう、忘れるところでした。こちらも渡しておきますね」
そう言って、リニスから七季に渡されたのは、柘榴石（ガーネット）と思しき、深紅の石がついたチョーカーだった。
洋梨型（ペアシェイプ）カットで、金色の台座にはめ込まれたトップは、幅広の黒いリボンに通されている。光沢のある、それでいて肌触りのいい布地で作られたリボンだ。
ただし、留め具部分は、しっかりとした作りの差込式が採用されている。花を模した金具は、中央に小さな石をあしらった手の込みよう。
一見、ふつうに見えるリボンにも、何がしかの細工が施されているのだろう。七季は、そこからかすかにアーチャーの魔力を感じ取った。
「アーチャーたちのデバイスを収納するためのストレージデバイスです。
まだ、ふたりのデバイスができていませんが、こちらが先に組みあがったので、先に認証を済ませてもらおうと思って」
リニスの言葉を受けて、ぼんやりと深紅の宝石が淡い光を孕む。
待機モードのそれを受け取った七季は、まじまじと手の中のチョーカーを見つめて、「プレシア、仕事早いなぁ」と微笑んだ。
「見た通り、待機モードはチョーカーです。起動モードの方は、杖になります」
「杖？　何でまた」
「リドルいわく、魔法使いは杖を使うものだからって」
お揃いにしたかったんじゃないですか？
いまは意識を吹っ飛ばして転がっている、黒猫姿の使い魔へと、

リニスの群青色の瞳が優しいまなざしを投げる。
くすりと笑みをこぼした山猫娘は、カフェオレ色の髪からのぞく、同色のネコミミをぴるぴる動かして、黒髪の少女を急かした。
「さ、ナナキ。その子も起動してあげてください」
促されて顔を上げれば、アリシアもプレシアも、そろってルビー色の瞳で七季をうかがっていた。
アーチャーまでもが、鋭い鷹の目をかがやかせ、わくわくしたまなざしを向けている。
「んと。じゃあ、いったん黎明を引っ込めたほうがいいのかな？」
「いえ、そのままで大丈夫ですよ。ストレージの方にもバリアジャケットの設定は入ってますけど、使わなければいいだけの話ですし」
首をかしげる少女に、親切なリニスのアドバイスが返ってくる。
「らじゃ」
では、と手を振って立ち上がると、七季は黎明に「靴お願い」と指示を出した。
そのまま漆黒の弓を引っさげて、ピクニックシートから青い下草の上に踏み出し、二メートルばかり距離をとる。
――名前、何にしよう？
むう、と唇を引き結び、考え込む七季。
リニスたちは、前もって名づけることなく、マスターである彼女がつけるのが一番いいと、デバイスを手渡してきた。黎明がそうだったから、こちらのストレージもそうなのだろう。
首にはつけたばかりのチョーカー。
そこにかるく意識を集中して、己の裡から言葉を練り上げる。
金の台座に据わる、紅い石。
――たぶん、柘榴石。
その宝石が象徴するのは、「秘めた情熱」、「貞操」、「友愛」、「真実」、「忠実」、「勝利」、「優雅」、「権力」、「真実の愛」。
「種子」を語源とする石は、古くから護符――とりわけ戦士の―

―として用いられてきた歴史を持つ。
そして、中でも有名な、柘榴石（ガーネット）が持つ伝説が、一つ。
やがて、注ぐ力に、言葉が絡まる。呪（しゅ）として、鍵として、少女の内側から滑り出るために。
「暗きより――暗き道にぞ入りにける。遥（はる）かに照らせ山の端（は）の」
ささやく言葉は、世阿弥の謡曲「鵺（ぬえ）」からの一節。
和泉式部（いずみしきぶ）の有名な歌「暗きより暗き道にぞ入りぬべき遥かに照らせ山の端の月」に基（もと）づいていて、うつほ舟に押し込められ、冥途の闇へ墜ちていく鵺（ぬえ）の霊の最後の詞（ことば）である。
救いを求めた、人ならぬものの――求めた光。
少女の裡（うち）で、言葉が弾ける。
「月より眩（くら）く。夜より深く。溶ける鉄よりなお赫（あか）く」
そしてかがやく深紅の色に、七季は、おのが従者を思い起こす。
赤い天蓋の世界を抱く男と。血のような瞳を持つ少年と。
「燎（かがりび）を灯（とも）せ。
歩みは共に。汝、箱舟の担（にな）い手」
長い道を歩くと決めた、あの日の決意は変わらない。
「発（た）て！
ノア、セットアップ！」
『イエス、キャプテン』

チョーカーから姿を変えた、「ノア」の姿。それは――
「どう見ても打神鞭（だしんべん）です。本当にありがとうございました」
そう。
七季の手の中に納まっていたのは、ちょっと太めの、教師が使う指示棒。マンガ版「封神演義」の主人公・太公望が使う宝貝（ぱおぺえ）・打神鞭そっくりのデバイスだった。
そりゃあ思わず頭を下げたくもなろうというものだ。

「リドルーっ！」
そりゃあもちろん犯人は決まっている。が、その犯人（犯猫？いや怨霊か）は、いまだ絶賛気絶中。
――黎明、どんだけの威力で撃ったんだ？
さすがにちょっと心配になってきた七季の、心を読んだかのように。
『ご心配なく、マスター。彼が起きないのは、魔力性のショックが原因ではなく、いっしょに仕込んでおいた催眠薬の効果です』
「恐っ！」
ビームとバインドに飽き足らず、薬まで仕込むなんて、どんだけ念が入った性格かと。
「つーか、催眠薬とかどっから持ってきた！？」
『装備の一つとして格納領域に常備しています』
打てば響く速度で返ってくる「黎明」のセリフ。もう本当にどこからツッコミを入れていいものやら。
「うあ。私も持ってるけどさ……デバイス（このこ）に仕込んだの誰だよ……」
ぼやく少女の正面から、とってもイイ笑顔のママさん魔導師がネタばらし。
「薬を用立てたのは私で、じっさい仕込んだのはアーチャーよv」
「いや、何があるかわからないからな。魔力を使えないという緊急時のために、ちょっと物理的な手段も模索を……」
冷静に答えているようで、灰藤色の目が泳いでらっしゃる錬鉄の英霊。
「ホントにアーチャーに似たのか黎明……」
――過保護というか、慎重というか。でも手段が意外と過激だったりとか。
呆れのにじむソプラノをこぼした七季に、反論してきたのは、意外なことに、その「黎明」だった。
『それは違います、マスター。私は、私の意志で行動を起こしたのです』

落ち着きのある、それでいて強い口調は、気のせいか憤慨ぎみと感じられる。
「どゆこと？」
『はい。先ほど申し上げたかったこととというのは、まさしくそれです。
この「黎明」、プロフェッサー・プレシアの仕込まれたロストロギア的なパーツや、アーチャー氏の仕込まれた魔術の神秘など、皆様に丹精されたおかげで、擬似的ながら魂を持つにいたりました』
――はい？
「魂が宿ったとな？」
思わず口調がおかしくなった七季にもかまわず、生まれたて――もとい、名づけられたばかりの弓形デバイスは、誇らしげに青紫の宝石をかがやかせる。
『はい、マスター！』
「それどんな付喪神（つくもがみ）！？」
しかも機械に付喪神（つくもがみ）が憑（つ）くってアリなのか？
そもそも付喪神（つくもがみ）じたい、長い年月を過ごさないと、意志など持つにはいたらないはず。
『私はそもそも「ＡＩ」によって意志を持っていることが前提の器物ですから。
そうですね。どうせなら、これからは「神使（しんし）」であるマスターに末永くついていけるよう、付喪神（つくもがみ）めざして頑張りたいと思います』
妖怪を目指すトンデモデバイス、ここに爆誕。
新たな非常識存在が加わったことに、ちょっと頭を抱える七季だったが、その後、目を覚ましたリドルに「そんなのいまさらじゃない？」とかるく流され。
さらには、手渡されたアーチャーのケーキで、完全に気を取り直したため、けっきょく大ざっぱ過ぎる度量でスルーし、なしくずしに黎明のことを受け入れたのだった。
――たぶん帰ったら、先輩と神門（みかど）さんに指差して笑われる気がす

る……。

#３０　二つ目のデバイス（後書き）

あとがき

＞そんなわけで、魔改造とネタに走った、オリ主のデバイスでした。

打神鞭そっくりなら、ふつうに持ってるぶんには目立たないので是非やりたかった。

ノアは、まんまノアの箱舟からです。

◆デバイス設定－オリ主の場合－

第一デバイス：黎明

＞インテリジェントデバイス。人格は男性型で穏やかな口調とテノールが特徴的。

プレシアとリニス、おまけにアリシアまで加わって、恩人である七季のために魔改造しまくった逸品。

そのうえ、モノ作り心を刺激されたアーチャーの、魔術的発想や、投影品の神秘が、遊び心とともに追加されたおかげで、擬似的な魂が宿った。

本人（？）は、「神使」である七季についていけるよう、付喪神めざして日々精進しているらしい。

オリ主いわく、妖怪化をめざすデバイス。待機状態は、アイオライトのついた銀の指輪。

【基本フォーム：ストリング】

＞弓形態。コンセプトは破魔矢と鳴弦（※1後述）。撃墜を目的とした形態。

矢による狙撃と、魔力弦を用いた音波による索敵、魔力波からなる範囲攻撃（指定範囲の魔力収束の妨害など）がメイン。

形としてはアーチャーの弓に似ている。

【偵察フォーム：スワロウテイル】

＞籠形態。コンセプトは鳥籠。情報収集を目的とした形態。

燕、または蝶型の子機を繰り出し、ステルスを張りながら戦場の情報を遣い手に送信する。複数の子機を基点とした、ジャミングや結界魔法も可能。

フェイトの子守に使ったため、追いかけていたフェイトの機動力がえらいことになる（予定）。

【最終フォーム：ハルピュイア】
＞翼形態。コンセプトはセイレーン。敵のかく乱、自滅、同士討ちを目的とした形態。サイレンやセイレーンだとバレバレなので、少しひねってみた。
背中に展開した結晶の羽を細かく振動させることで、人間には聞こえない周波数を生み出し、脳の一部を支配。範囲内の敵を、酩酊や狂乱、一時的な暗示に叩き込む。
機能は凶悪だが、見た目が綺麗なのでアリシアのお気に入り。
ちなみに可聴域の音も出せるため、子守に使われたり、七季のＭＰ３プレーヤー代わりにされたりしている。

※１）鳴弦の儀
別名を「弦打の儀」
弓に矢をつがえずに弦を引き、音を鳴らす事により気を祓う退魔儀礼。魔気・邪気を祓う事を目的とする。
後世には高い音の出る鏑矢を用いて射る儀礼に発展した。鏑矢を用いた儀礼は「蟇目の儀」と呼ばれる。
元々は誕生儀礼。のちに病気祓い、不吉な出来事が起こった際など幅広く行われるようになった。

第二デバイス：ノア（※２）
＞ストレージデバイス。非人格。
アーチャーとリドルのデバイス収納用。のちに、魔法をストックしておく「魔法の本」としての機能を追加。
管理外世界で見つけた鉱物と隕鉄を素材に、アーチャーが魔力を流し込んで鍛造したフレームを使っているので、アームドデバイス並に頑丈。
ユニゾンデバイスではないが、あつかい的には「夜天の書」に近

い。記録した魔法プログラムをデータとして溜め込むことができる。
七季が暇なときは、読書用の本代わりとしても活用。なにげに料理のレシピとかも入っている（アーチャーやリドルとも共用）。
待機状態は、柘榴石（ガーネット）のついた、黒いリボンのチョーカー。

【基本フォーム：ロッド】
＞杖形態。コンセプトは「魔法使いの杖」。
見た目は封神演技の主人公・太公望の打神鞭。というか、先生の使う指示棒。銀色のやつ。見ためはアレだが、ふつうに打突武器としても使える。
戦闘時は「黎明」とリンクすることで、ＡＩを載せていないにもかかわらず、オートで攻撃や防御が可能。

※２）ノア
ノアの方舟の伝説から。箱舟の中、ガーネットを明かりの代わりに吊したという。

#３１　ある日の一課ー彼女のいない世界ー（前書き）

まえがき
＞今回は、オリキャラ中心の番外編的な話です。
リリなのキャラは登場しません。

#31　ある日の一課一彼女のいない世界一

ここは帝都心霊庁。

東の都の地下深く、異能者たちの集う場所。

「おい。漣はどうした」

霊的な事件の最前線で戦う、一課のフロアでは、金髪タレ目の美青年が座ったまま、その紫暗の瞳からガン飛ばしつつ、一課長の――こちらも青年、神門に尋ねたところだった。

「あん？　真言ならさっきまで書類と格闘して……」

ふだんは狩衣姿がデフォルトの、黒髪の青年は珍しくワイシャツ姿で書類に判を押していた。服装の方は、官公庁のお約束とやらで推奨されている、クールビズの影響だ。

近年、ＩＴ化が進んでいるとはいえ、書類仕事がなくなるわけでもない。とりわけ上層部のお偉方にとっては、やはり印刷された媒体の方が安心感があるらしい。

「……あれ？」

神門の席に程近い、とあるデスクの上。散らばる書類の一番上には、こう書き殴られた一枚が乗っていた。

『探さないでください』

「――」

その紙を両手でつかんだ黒髪の青年が、呆然と立ち尽くす。

いっぽう金髪紫眼の青年――三蔵は、その白く秀麗な美貌に、これでもかと険しい形相を浮かべて吐き捨てた。

「ヤロウ、逃げやがったな……！」

というのも、退魔能力にかけては超一流の美少女巫女・真言は、書類仕事が大っ嫌いなのである。

これには単純ではあるが、根深い理由がある。

人三倍、どころか、標準以上の霊能者が、十人束になってもかなわない霊力を持つ真言は、当然ながら片付ける霊的事件の数が多い。比例して、その報告書――書類仕事も、他の霊能者の三倍以上。真面目に仕事をしたぶんだけ、わさわさ書類が増えるのである。いくら給料が高くとも、事件を解決するペースと、書類仕事に向き合う時間が折り合わないのだから、嫌気も差そうというものだ。しかも彼女自身に、逃走を手助けする能力があるものだから、タチが悪い。

通称「ジッパー」。

通称どころか、そのまんまである。

虚空に出現させたジッパーを開いて、違う場所や異世界に移動するそれは、方向音痴である真言の十八番（おはこ）。

けっきょく、残された三蔵や、真言に甘い幼なじみである神門（みかど）が、彼女の書類を処理することになる。

そこまでは日常茶飯事なのだが――

ずんっ。

やおら、三蔵といわず神門（みかど）といわず――いうなれば、帝都心霊庁にいる、一課の職員ほぼ全員に、とんでもない重圧がのしかかった。

「ぐッ……！」

「がはっ」

フロアのあちこちから、どうにか空気を吐き出したような、低いうめきばかりが聞こえてくる。

ごづん。どさっ。ばむち。

鈍い衝突音のオンパレードと共に。

「ひ、久しぶりだとキくな、おい……」

たまたま一課のフロアに居合わせた、三蔵の叔母・観音（かんのん）が、こちらもしかめっつらで甥っ子に声をかける。

部長クラスに相当する彼女は、この現象にも心当たりがあった。

――「柱」の肩代わりだ。

かつて日本では、「白面の者」と呼ばれる大妖との戦いがあった。

外つ国から渡ってきた、九つの尾を持つ巨大な異形の白狐は、紆余曲折を経て、国を支える「要」の岩に逃げ込み――その後、八百年の長きに渡って封じられてきた。

しかし近年、様々な策謀を巡らせた挙句、ついに復活を遂げたのである。

けっきょく、人間の少年・潮と、齢二千年を越える妖・とら、そして潮の持つ「獣の槍」の縁に結ばれた、人間や妖怪たちが団結。激闘の末に、白面の者は斃された。

それが、めでたしめでたし――で終わればいいのだが、現実はそうもいかない。

問題は、白面の者が封じられていた、国の「要」にあった。

それは、いわば国土を支える「根」であり、「柱」である。

そこに埋まっていた形の、白面の巨体が消えうせたのだ。空いた質量は、何かで埋めなければ、日本という国が傾いてしまう。場合によっては、沈むことすらありえた。

その空白を埋め、国の柱を支えたのが、人間と共に力を合わせて戦った妖怪たちだ。

海の深い場所にある柱へと、妖怪たちはその体を次々と埋め込み、姿を消した。

このまま、日本からは妖怪たちが姿を消すのかと思われた。

そこに手を差し伸べたのが、いずれ神妻となるべく龍神の加護を受けた真言である。

彼女自身は、とらや潮とも親交があり、のちに「白面大戦」と謳われる戦いにも加わっていたのだが、修行の末に神格が上がり、ようやく「柱」を支えるだけの力をつけたということで、その負担の肩代わりを申し出たのだった。

それが三年前――真言が十五歳のときの話である。

以来、彼女は「柱の巫女」として、この国の「要」を支え続けている。

しかし、数多（あまた）の妖怪が支えてきた負担を、ひとりで肩代わりするのは、いくら図抜けた霊力を持つ神妻といえども、非常に重い。

例えるなら、十キロの米袋を担いで生活しているようなものらしい。あくまでも霊的な負担の話だが。

で。

しばしば疲れた真言は、その負担をよそにポイ投げして逃亡する。いわばリフレッシュとでもいうか。

その際、犠牲に選ばれるのが、腕利きの霊能者ばかりが集まった、帝都心霊庁の面々である。

真言ひとりで背負っていたものを、一課全員で分散するのだから、その負担はしれたもの――と思うなかれ。

ぶっちゃけた話、歩けない。

というより、身動きするのもしんどいのである。

まったくもって、霊格の差の凄まじさよ。

余談ではあるが、優秀な霊能者とはいえども、たんなる人間が大多数を占める一課の面々は、「神使（しんし）」である七季よりも霊格が低い。

まして、そんな彼女の上位者であり、さらに霊格が上の真言と比べるのは酷というものである。

座ってデスクワークをしていたものは、まだ突っ伏すだけで済んでいるが、運悪く立っていたものは、硬いリノリウムの床に転がっている。

神門などはその筆頭で、幼なじみ直筆の置手紙をつかんだまま、死体のごとくうつ伏せていた。ついでに額を強打するオマケつき。

不憫なこと、このうえない。

たまたま出かけていた幸運なものも、フロアに戻り次第、この屍の山一（死んでない）に加わるだろう。

いちおう犠牲者がフロア内だけなのは、命を懸けることもある除霊中の同僚が、うっかり死にかけないようにとの心遣いなのだと思

われる。
　程度はしっかりわきまえているだけに、タチが悪いといえば、タチが悪い。
　とはいえ、その「配慮」すらも、初回の「柱」肩代わり時に、見ていた七季が横から真言にツッコミを入れた成果だったりするのだが。
「ッチ。覚えてやがれ……」
　日ごろ、どれだけ真言に負担をかけているかという自覚を伴うので、舌打ちしながらも三蔵は悪態をつくだけで終わる。
　だが、ちょうど紫暗の目に映る男――根性で顔を上げた、神門（みかど）青年は、がっつりばっちり青ざめていた。

「やば……ッ」
「あん？」
「真言のやつ、一人で行きたがった……！」
　そのセリフに、金髪の青年もぎょっと紫水晶の瞳を見開く。
「おい待て。七季（ストッパー）はどうした」
「七地（後輩）、いま修行に出してんだよ」
　真言の眷属であり、「神使（しんし）」である少女は、その霊格を上げるため、定期的に異世界やら神の神域やらへお使いに出されるのだ。
　だが今回は、タイミングが悪かった。
　ふだんであれば、オトモとして真言と一緒に異世界トリップすることの多い七季は、三蔵の言う通り、ストッパーの役目がある。
　キリのいいところで、戻るよう、真言をなだめたり。そうでなくとも、一課の人間に肩代わりさせている負担を解除するように進言したり。
　何かと暴走ぎみな真言自身を丸め込んで大人しくさせたりと、ある意味、猛獣使いよりも高度なスキルの持ち主だからだ。

天然と確信犯とを併せ持つ七季のそれは、気まぐれなハイパー巫女さんをも手玉に取る上手っぷり。

それを「あくまのささやき」と人は言う。

だからこそ、一課の人間は、こぞって彼女の就職先に、この帝都心霊庁を薦めているのだし、むしろ七季がいなくなった場合の惨状は、考えたくもない。

というか、現在進行形で、その惨状が進みつつある。

猫どころか、虎の首に鈴。

七季は、その貴重な、金の鈴なのである。

ちなみに、ついて行かずに、こちらへ居残った場合は、「柱」を肩代わり中で身動き取れない、帝都心霊庁の職員の世話に走り回ることになる。

どっちにしろ、あの黒髪の少女は、彼らの命綱に等しい。

「残りの野郎（ツッコミ）はどうした」

三蔵が指しているのは、神門（みかど）神社のバイトーズ、霜夏と伯言のことに違いない。

というのも、七季と霜夏、ついでに伯言は、いちおう真言から「眷属」あつかいされているため、この「柱」の肩代わりは免除される形となっている。

「あいつら美神さんのとこに貸し出し中なんだよ。くそ、しくった……！」

几帳面で計算にも強く、家事に長けた少年ふたりは、いまごろGS（ゴースト・スイーパー）美神令子の事務所で、伝票整理や掃除に負われていることだろう。

優秀なアシスタント、おキヌちゃんの不在で、カオスになっているのを知った神門（みかど）は、有料で霜夏と伯言をレンタルしたのだ。

七季との付き合いで、世話焼き属性が旺盛な彼らのこと、いまごろ文句を言いながらも、きっちり仕事をこなしているはずだ。

神門の守銭奴っぷりが仇になったといえよう。

それだけに、バイトーズがこぞって帝都心霊庁から離れているのは不味かった。

救援が来ない。
仮に、一課に踏み込んだものは、その時点でアウトである。
既に一人、たまたま顔を出した二課の職員が、入り口で行き倒れていた。
「使えねぇ……しんそこ使えねぇ……！」
課長補佐に当たる三蔵は、ここぞとばかり上司の無能を罵った。
何せ命の関わることである。
三蔵は、気力を振り絞って、胸ポケットの携帯から連絡を取った。
相手は、義弟であり養い子である少年・悟空だ。
「おい馬鹿猿。いつもの緊急事態だ。真言が逃げた。お前は絶対に職場に近づくな」
保護者の鑑である。しかし不幸なことに、警告が終わると同時に、携帯の電源が終了のお知らせを吐いた。
ぴー、ぴー、ぴー……。
うんともすんとも言わなくなった無機物を握り締め、ごづ、と三蔵の額がデスクにぶつかる。
「クソッタレ……！」
「いや、マジすまん」
神門の携帯は、少し離れたデスクの上。他のメンバーは、電話をかけられるだけの気力もない。課長と課長補佐の肩書きはダテではなかったのだ。
いっぽう、部長の観音はというと、こちらはもう開き直った態で、極力、体力を消耗しないように、寝る体勢に入っている。順応力が高すぎである。
けっきょく。
帝都心霊庁の一課メンバーは、干からびる寸前で、戻ってきた真言と、修行先から連れ戻された七季たちによって救助されたとか。

#３１　ある日の一課ー彼女のいない世界ー（後書き）

あとがき

＞ネギま!編への伏線というか。

オリ主がいない間の、元の世界における日常の一幕ということで。

ジャンケンでいうならば、

グー　：先輩

チョキ：帝都心霊庁

パー　：オリ主

オリ主と先輩、そして帝都心霊庁の関係はこんなんです。わかりにくかったらごめんなさい。

チートな先輩は、一課全員が行動不能になるような負担をしょって、退魔行やったり日常生活を送ったりしてます。

じつはこのひとといなくなると、程なく日本が沈む仕組み（待て）。どえらい地雷です。

あと「うしおととら」をクロスネタで混入してみました。うしとらコンビ大好（ｒｙ

オカルト方面だと、オリ主の世界は、わりとドンパチやってたり。ただし「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」は参戦していません。

現実でも、自称「霊能者」はいても、自称「魔法使い」（ファンタジーな意味で）は（日本には）いないので、ＧＳと魔法使いの立ち位置も違うことにしています。

蛇足なあとがきでした。

#３２　妹ー英霊の災難？ー

「ねえアーチャー。ちょっとあなたのＤＮＡくれない？」
「は？」
午後のリビング。
テスタロッサ家の大黒柱（ははおや）に声をかけられた錬鉄の主夫、もとい錬鉄の英霊は、エプロンをはずしながら、けげんな面持ちで振り返った。
「具体的にいうとせいえ」
「はいアウトオォ！」
すぱーん。
横からハリセンふるいつつ乱入したのは、カフェオレ色のネコミミ娘。
「あいたたた……何をするの、リニス！」
「プレシア。いくら何でも率直過ぎます。こういうことは、もっと時間をかけてですね」
マスターである黒髪の美人に、こんこんとお説教を始める使い魔と、むうっとふくれるママさん魔導士。
日に日に逞しくなるリニスである。
「だってアリシアが妹欲しいって言うんですもの」
もうすぐ誕生日だし、お願い叶えてあげたいじゃない。
「いやそれはどうかと。
計算的にも間に合わないだろうし、それ以前に、私では無理だぞ」
ようやく再起動した白髪の偉丈夫は、こめかみを揉みながらジト目を向ける。
「どうして？　無精子症？」
きょとんと不思議そうにルビー色の目で見上げてくる、ダークへ

アの美女に、ますますアーチャーは頭痛を覚えながら、かぶりを振って不名誉な疑いを否定する。
「そうではない。私という存在は、英霊――既に死者だ。幽霊のようなものなのだよ。いくら人間らしく見えてもな。
いわば存在自体が違う。鳥と魚のようなものだ。新たな命を作ることなど、不可能なのだよ」
「そう……残念」
未練たっぷりなまなざしを向けるプレシアは、ただたんに「アリシアの妹」を作るためだけでもなかったようだ。

「……ということがあったんですよ」
本当にごめんなさい。
たまたま二人でお茶を飲んでいたところ、そう謝ってきたリニスに、七季は「あらら」と苦笑を浮かべた。
「まあ、アーチャーは好い男だしね。
強くて男前で優しくて家事が得意って、世間様が放っておかないわなー」
ふふふ、買い物から帰ってきたらかまい倒してあげよう。
「けっきょく、遺伝子バンクから購入したものを、自分の卵子と掛け合わせることにしたようです。
プレシアの前の夫の遺伝子も、そこに登録されていますしね。しばらく結婚はしないそうですよ。男は面倒くさいって」
やれやれと肩をすくめる山猫娘に、はたと七季が、何かに思い当たった顔をする。
「どうしました？」
「いや……私のいた世界では、神様の子供を産んだとか、竜と交わって子を成したとかって伝説があったのを思い出して」
高次存在ってくくりなら、英霊との子作りもできるのか？

「……うん。聞かなかったことにして。主にアーチャーの平穏のために」

「わかりました。絶対に言いません」

お口にチャック、のしぐさをして、ネコミミ娘とトリップ娘は、真面目な顔で頷き合ったという。

#３２　妹ー英霊の災難？ー（後書き）

あとがき

＞エミヤシロウは一級フラグ建築士ですから！（何）

状況だけ考えたら、十分に逆ハーですな。

アーチャーとリドル以外、同居人は全員女。それなんて衛宮邸。

リドルはふだん猫姿ですしね。

フェイトの登場まで、あと少しです。フラグは立てておいたよ！

まあ、フェイトに英霊の遺伝子を入れるわけにもいかないので、自重しました。

家庭環境は、別の意味でえらいことになりそうですが。

#３３　始まらない物語ー彼女の使い魔ー

「じゃあ、準備は良いわね？」
プレシアの手には、白い杖。デバイスの先端にある、紫色の宝玉が淡く光り、彼女たちの足元に、紫色の魔方陣を展開する。
ピクニック装備のテスタロッサファミリーと、七季主従は、そうして異世界――第９７管理外世界から、異なる世界めざして転移した。

見通しのいい平原。
そこには現在、似たような年頃の少年少女たちが、人垣を作る形で集まっていた。
大陸の名前はハルケギニア。トリステイン王国のトリステイン魔法学院に通う生徒たちである。
その中央。円形に空いたスペースには、いまだ青く光る鏡のようなものと、その前に座り込み、キョロキョロあたりを見回す、一人の少年の姿があった。
それは新たな物語の始まり。
――の、はずだった。
うぉん……
低い獣のうなりに似た音とともに、少年の側に紫の燐光を帯びた魔方陣が広がる。そして、ぱあっとかがやきが強まった一瞬後には、五人の男女と、一匹の黒猫が姿を現していた。
一人は、紫色の宝石がついた白い杖を携える、ダークヘアの女性。品のいい藤色のロングスカートに、同系色の外套とオフホワイトの

ハイネックをまとい、知的な美貌は母性のやわらかさとあいまって艶やかに。

もう一人は、カフェオレ色の髪に、すっぽり大きめの帽子をかぶった女性。ダークヘアの女性に比べて若く、白いスリーブレスの裾長チュニックに、茶色の長袖と黒いタイツを合わせている。ボブカットの髪と穏やかな空気が家庭的な雰囲気だが、胸元がくりぬかれ、谷間が見えることもあってセクシーだ。

三人目は、黒髪をポニーテールに結った少女。こちらは年齢だけでなく、その面輪が前者の二人よりも、さらにあどけない。服の作りは帽子の女性に似ている。ただし、タイツの変わりに紺のロングパンツを履き、チュニックの上から黒い外套を羽織っている。紐ボタン式のそれは、たっぷりとした袖口と長い裾に、紅い刺繍の小鳥が舞い、金糸のふちどりが華やかである。外套の襟が高いことと、パンツルックであることから、どこか男装の麗人さながらの凛々しさをにじませていた。

四人目は、ツインテールの金髪で、猫のぬいぐるみを抱えた幼女。こちらはひたすらに可愛らしい。将来が美人になること間違いなしの顔立ちは、ダークヘアの女性に似た面影と、おそろいのルビーアイが無垢な光を湛えている。その小さな手は、杖を持った女性の、空いた手を握り締めていた。

そして五人目は、鍛え上げられた長身痩躯に、赤い外套をまとった白髪の男性。鋭い鷹の瞳に、なめし革のような褐色の肌が、このうえない男らしさを醸し出している。

最後のメンバーは、ルビー色の眼をした黒猫。そっと黒髪の少女の足元に寄り添うさまは、礼儀正しい従者のように品がよかった。

「あら……？」

ダークヘアの、いちばん年齢が上であろう美女が「やっちゃった」という面持ちで、口元に手を当てる。

「プレシア。人気のない場所を選んだはずじゃ？」

ちろんと黒瑪瑙の瞳で女性を見上げるのは、小柄な少女である七

季。小声でささやく彼女の言葉に、プレシアもあわてた口調で自分の無実を主張した。

「ちゃ、ちゃんと選んだのよ！？　転移先の座標は、いつも通り一週間も定点観測のデータを取って、三十分前にも人がいないのを確認したんだから！」

こそこそと小声で交わされる会話も、英霊の耳にはしっかり聞こえる大きさで。

「起こったことをあれこれ言っても始まるまい。さて、そこの杖を構えている貴殿が責任者かね？　我々に敵意はないので、そう警戒しないで欲しいのだが」

白髪の偉丈夫――アーチャーの呼びかけに、コルベールは油断なく相手を見据えたまま、じりじりと近づく。

「あなたたちは？　いったい何者だね」

と、その緊張感をぶち壊しにしたものがいた。

桃色の髪を翻した小さな少女が、七季の足元にいる黒猫めがけて、さっと飛び出したのだ。

だが、リドルはかろやかな身のこなしで、桃色髪の少女をかわし、あっというまに主の胸へと飛び込んだ。

「私の使い魔！」

杖と思しき、短いタクトのような棒を握る少女は、七季めがけて食ってかかろうとするが、アーチャーは不審さを隠しもしない眼でジロリと一瞥しながら割り込んだ。

解析の魔眼を秘めた鷹の眼は、ルイズが握る杖が、魔法使いの使う媒体であると見抜いていたからだ。

「我がマスターに何か用かね」

立ちふさがるだけでわかる、圧倒的な存在感。

その覇気が、いまや闘気に変わりかけていた。七季が命じれば、すぐにでも剣を投影しそうな気配である。

それをしないのは、ひとえに彼女からの念話ゆえ。

（いざというときまでは武器を見せないで。まだ交渉の余地はある

！）

念のため、初撃を受けたときの備えに、七季からは護符が渡されている。真言お手製の札は、霊能者たちの間で数百万はくだらないシロモノだ。

「ミス・ヴァリエール！　止めなさい！」

白髪の男が歴戦の戦士であると察したコルベールは、あわててルイズを引き戻した。

「だって私の使い魔が！」

なおもわめく桃色髪の少女は、七季の胸に収まる黒猫を、あきらめきれないらしく、未練がましげに睨んでいる。

いっぽう魔法学院の生徒たちは、いきなり現れた見慣れない格好の男女に、興味はあれども、あくまで遠巻きにしていた。

それは、見たことのない作りの杖を手にしているプレシアの存在もあったし、覇気を衣のようにまとう男に、自分たちとは違う威圧感を感じたからだ。ルイズは頭に血が上っているため、その判断すらもできていない。

そこに、呆れを多分に含んだ少年のテノールが割って入る。

「誰が君の使い魔だって？

身の程を知らないやつは、これだから。僕が主と認めているのは、彼女だけだよ」

アーチャーの後ろ――従者の背に庇われている、少女の腕に抱かれた黒猫は、さも馬鹿馬鹿しい、と言いたげな声音で「はっ」と笑い飛ばすと、首を伸ばし、七季の頬へペロリと舌を這わせた。

リドルのセリフに、ルイズが「何ですって！」と憤慨の声を上げる。

周りの生徒から、猫にすら馬鹿にされたルイズへの嘲笑と、獣の姿でありながらリドルがしゃべったことに対する驚きのざわめきが、あちこちから湧いた。

「ん……彼の言う通り、この黒猫は、私の使い魔です。

見たところ、何かの儀式の最中……ひょっとすると、使い魔を召

喚する儀式の最中だったのですか？」

七季が黒瑪瑙の瞳で、あたりを一瞥する。既に召喚と契約を済ませた幻獣たちが、そのまなざしに撫でられると、いっせいに身動きを止めて大人しくなった。頭を下げるものすらいる。

「お邪魔したことは謝罪しますけれど、私たちがここに現れたのは、いわば事故。あなた方に害意や、敵意はありません。

私は七季と申します。こちらのアーチャーとリドルが私の従者で、こちらのプレシアとアリシアが、我々の友人。そして、こちらのリニスが、プレシアの従者です。

きょうは、みんなで行楽に出かける途中だったんです。どうか責任者の方と、お話しする場を設けてはいただけませんか？」

黒猫を抱いた少女は、あくまで落ち着いた物腰で話を持ちかけている。

コルベールは、アーチャーと呼ばれる男を、チラチラ警戒しつつ、しばし考えた。

――もしも彼がメイジだとしたら、私に勝機は薄いだろう。

それだけの気迫と、技量を感じさせる物腰だった。彼の、猛禽を思わせる鋭いまなざしは、いまもコルベールを警戒して見逃すことがない。

加えて、見るだけでわかる、その鍛え上げられた体躯は、彼がいまだ現役の戦士であることを、何より雄弁に物語っている。

――だというのに、この場には、守るべき生徒が多すぎる。しかも、仲間と思しき五人の他に――おそらくはこちらがミス・ヴァリエールの召喚した――少年が一人。

いっぽう、話を切り出した黒髪の少女は、口調といい態度といい、教育を受けたもののそれだった。

大きな黒い瞳には知性の光。身につけている服は見慣れないデザ

インだが、シンプルさとは裏腹に、高い技術がうかがえた。
白く胸元を飾るチョーカーも、みごとな深紅の宝石があしらわれており、それなりの財力があるとわかる。女生徒の中には、あからさまにチラチラとチョーカーを値踏みしているものもいるほどだ。
何より、人品卑しからぬその空気。
貴族のみで構成された、コルベールの教え子たちと比べても、決して劣るものではない。
――否、むしろ彼女の方が、ずっと高貴にすら感じる。
それが霊格の高さからくる直感だとは、いかな「炎蛇」のコルベールでも気づけない。
七季は、じっとしているだけで品があるのだ。ちなみに、どこぞの友人には「黙っていればねえ」と中身とのギャップを笑われたこともあるのだが。
――あの屈強な白髪の戦士を護衛につけているところを見ても、良家の子女に違いない。
白い杖を持っている女性の親子も、同格だろう、とコルベールは見当をつけた。
「わかりました。ではこちらへ着いて来てください。私はトリステイン魔法学院の教師で、コルベールと言います」
フライを使うコルベールに続くため、プレシアが魔法を使い、七季はアーチャーに抱えられ、トリステイン魔法学院へと赴いたのだった。

＃３３　始まらない物語ー彼女の使い魔ー（後書き）

あとがき

＞ネギまの前にゼロ魔をクロスしてみた（待て）。

＃３４　始まらない物語ー主の名前ー

「納得できません！　こんな平民が私の使い魔なんて！」
場所は、トリステイン魔法学院の、学院長室。
声を張り上げた、桃色髪の少女――ルイズの声は、聞くもののの耳はおろか、神経にまでもヒステリックに響いた。
「しかしだね、ミス・ヴァリエール。彼らよりも先に現れたのは、そこの黒い髪の少年だよ。
サモン・サーヴァントの儀式によって生じる、青い鏡だって、彼の前にあった。君の使い魔は、彼だろう。だから契約を」
「違います！
それに人間の使い魔なんて聞いたこともないじゃないですかっ。だからきっと、そこの黒猫が私の――」
ぶしつけにも指差されたリドルは、うんざりした声でルイズの言葉を遮った。
「しつこいな。君、ちゃんと耳は聞こえてる？　それとも頭が可哀想な子なの？
僕のマスターはナナキだ。君じゃない。そもそも契約を交わした覚えもない相手が使い魔だなんて、寝言は寝てから言ってくれる？」
嘲笑と侮蔑がこれでもかと込められた言葉に、プライドの高い少女が、ますますいきり立つ。
「何ですって、たかが猫の分際で――！」
ぱんっ。
やおら、打ち鳴らされた拍手に、部屋の空気が沈黙した。
それぞれの目が、ひとりの少女に集まった。
膝の上に猫を抱き、背後に長身の従者を控えさせた、黒髪の少女。
その隣には、寄り添うテスタロッサ親子と、ネコミミを帽子で隠し

ているリニスが座っている。
七季の膝に陣取っていたリドルは、その音に少しだけ三角の耳を伏せて、彼女へと拗ねたようなまなざしを送った。
＜わかってるよ。ちゃんとこちらの権利は主張する。間違ってもリドルに触らせるなんてしないから＞
念話で従者をなだめた異邦人娘は、そっと手を滑らせて、リドルの黒い毛皮を撫でる。
「まずは落ち着いていただけますか？」
凛と響くソプラノ。その出所は、あどけない少女の桜色の唇だ。
「そちらのミス？……呼びにくいですから、レディとお呼びしましょうか。
失礼ですが、声を落としていただけませんか。さっきからアリシアが脅えてしまって」
ちらり、と夜色の目が視線を流す先には、母親にしがみつく、金髪の幼女。ソファに座っているとはいえ、ほとんど子猫のように、プレシアの懐にもぐりこんでいる。
「あ……」
年下の女の子を脅えさせたと自覚し、ようやくルイズがテンションを下げた。
そこに七季が追い討ちをかける。
「それに、あなたの態度はいただけませんね。交渉相手へ、頭ごなしに命じるだけで、自分の思い通りになるなんて、まさか本気で思ってらっしゃる？
もしそれが本気なら、さぞかしレディは地位の高い方なのでしょう。
けれど、そんなやり口では、いずれその地位から転がり落ちるだけですよ。いつだって、上に立つものの足元をすくうのは、その下にいるものなのだから」
「なっ……！」
ずけずけとした、けれど内容が正論だとわかるだけに、少女は返

す言葉を捜しあぐねて絶句する。
「そんなわけないでしょ」といえば、さすがに自分が傲慢にしか思われないことを理解できるがゆえに。
まるで金魚よろしく、ルイズがぱくぱくと口を開閉させるさまが滑稽で、「こんな平民」呼ばわりされて、ぶすくれていた少年がくすりと笑った。
とっさにルイズは、「格下っぽい」とみなした才人へ矛先を逸らした。
ピンクブロンドの少女は、落ち着き払った七季を前にすると、そのまっすぐなまなざしに射すくめられてしまうのだ。
それは静かに凪いだ泉の神聖さに似ている。
触れれば揺らいで反応を返すけれども、うかつに踏み込んでしまえば、飲み込まれそうな恐さがあった。
じっさい、ルイズと七季では、精神的な年齢に開きがある。
直感的に、敵わない相手だと回避したルイズは、生物的にも正しい。
おまけに平原からこっち――ルイズが七季につかみかかってから――アーチャーの双眸は、コルベールのみならず、ルイズにも睨みをきかせている。
ルイズが魔法を使えないと知らないアーチャーは、いまだ杖を携帯したままの少女を、武装した相手として警戒しているのだ。当然といえば、当然だった。
「何がおかしいのよっ！　平民の癖に貴族をバカにするなんてっ！」
仁王立ちしていた桃色髪の少女は、その美貌も台無しになるような般若面で、めざとく見つけた少年――才人にふたたび食ってかかる。
かんしゃく持ちとしか思えない噛みつきっぷりに、さすがの才人もカチンときた。
いくら可愛くたって、こんな右も左もわからない状況で、見知らぬ少女に八つ当たりされるいわれはない。

それも話を拾い聞く限り、才人をこんなところに呼び出した――召喚したのは、ルイズらしいではないか。

――確かに俺は一般人だけど、それが何だっていうんだ。

「何だよ、平民平民って――」

ぱん！とまたもや手が打ち鳴らされる。

「あ……」

ルイズが、ばつ悪そうに七季を振り返った。いっぽう才人は、同い年くらいに見える黒髪の少女の、仕切りっぷりに感心のまなざしを送っている。

――すげー。委員長タイプってやつ？

「レディに落ち着いていただいたところで、そろそろ、お話の優先順位を決めてもいいですか？」

笑顔ではない。むしろ、どこか石のように硬質な――毅然とした面持ちで提案する七季に、苦い表情を浮かべたルイズは、いまさらながら名乗りを上げた。

「私はルイズ。ルイズ＝フランソワーズ＝ル＝ブラン＝ド＝ラ＝ヴァリエールよ」

「では、ミスター・コルベールにならって、ミス・ヴァリエールと。私は、こちら風に名乗れば、ナナキ＝ナナチといいます。ミスターには簡単な自己紹介をしておいたのですが、もう一度お聞きになりますか？」

＃３４　始まらない物語ー主の名前ー（後書き）

あとがき

＞アーチャーは表立った警戒役。プレシアは娘を庇いつつ、罠がないかこっそりサーチ中。

リニスはテスタロッサ親子の護衛で、やっぱりしゃべってません。

オリ主とリドルが、交渉役を兼ねて学院側の気を引く役。

#35　始まらない物語ー見えないところー（前書き）

まえがき

＞微エロ表現があります。アンチルイズ的な表現があります。

あとオールド・オスマンがカッコいいと思う方も、見ない方がいいです。今回エロジジイ化してますので。

お嫌な方はブラウザバックぷりーず。

#35　始まらない物語―見えないところ―

オールド・オスマンは、いきなり現れたという異邦人たちを、注意深く観察していた。

幸いにも、ヒートアップしたルイズが、適当な試金石になってくれる。

いまのところ、警戒はしていても攻撃する気はないようだ。言いがかりじみたルイズのヒステリーも、我関せずといった態で、うまくいなしている。

それでも、白い髪の偉丈夫から向けられる視線は鋭く、オスマンたちから注意を逸らさない。牽制の目的もあるのだろう。

コルベールの報告によれば、彼らは紫色に光る魔法陣から現れたという。

杖を持っていたのは、ダークヘアの女性で、いま金髪の女の子を抱いているところから見ても、母親らしい。

オスマン的には、みごとなおっぱいの持ち主としてプレシアが登録された。

一行の中では年長者だろうに、交渉を、七季と名乗った少女に任せているあたり、信頼関係があるのだとわかる。

年齢は離れているようだが、これまたコルベールいわく、友人関係らしいのだ。

――ふむ……もしかすると、あの少女の護衛が、母娘（おやこ）の家族、ひょっとすると母親の恋人なのかもしれんのう。

老魔法使（メイジ）いの脳裏に、推測が浮かんでは消える。

――それとも、あの少女が、母娘（おやこ）と親戚で、年の差がある護衛が恋人ということも……。

いまだ十代の域を出ない、七季のバストが、みごとな谷間を作っ

て、たゆんたゆんに揺れるのを見ていると、オスマンのエロス脳がぐんぐん妄想を活性化させる。

幼い娘がいながらも、夫と別れた（ピンポイントで正解）女ざかりの美女が、熟れた体をもてあまし、逞しい戦士に夜這いをかける妄想。

あどけない、けれど物堅そうな初々しい少女を、護衛である屈強な戦士が、恋われて一から手ほどきし、そのみずみずしい肢体を花開かせ、乙女から女にしていく妄想。

――いやいや、まさかの３Ｐ……若いのと熟れたのを同時食い……！

マルチタスクでも身につけているんじゃなかろうか。

思考の一部で、七季一行と才人を観察しながらも、オスマン脳内の一部では、黒髪の人妻と少女を重ねてにゃんにゃんしている妄想が止まらない。

――ふおぉ！

オスマン、いまだ絶好調。

いっぽうのルイズは、さっきからずっと苛立っていた。

コルベールは、とうてい貴族には見えない少年を、ルイズが召喚した使い魔だと言う。

――平民が使い魔なんて、冗談じゃない！　また馬鹿にされるじゃないの！

魔法が使えない魔法使い（メイジ）――「ゼロ」の二つ名を、屈辱と共に背負ってきた少女は、自分の名誉を回復するために必死だった。

貴族は、なべて魔法使（メイジ）いだ。

貴族ではない魔法使（メイジ）いはいるが、魔法使（メイジ）いでない貴族はいない。

そして使い魔は、魔法使（メイジ）いにはつきものの存在。

使い魔を見れば、その主である魔法使（メイジ）いがわかる、といわれるほどの関係。

――なのに、あんな平民が、私の使い魔なんて、ありえない！

ルイズの中では、自分が平民レベルと言われたも同然だった。

魔法が使えない「ゼロ」の魔法使い（メイジ）。平民と変わらない――

公爵家の令嬢として、何不自由なく育ってきたはずの、ルイズ。

彼女のたったひとつの――とルイズは思っている――欠点が、魔法が使えないことだったのだ。

――だから、この進級がかかった「春の使い魔召喚の儀」は、何としてでも成功したかったのに！

それだけに、呼び出す使い魔に寄せる期待は大きかった。そのぶん裏切られたショックは深く、傷つけられたぶんだけ、少女は凶暴になっていた。

いきなり現れたもののうち、とっさに目に留まった黒猫は、美しいルビーのような瞳と、つややかな毛並みを持っていた。

幻獣でもなんでもない、ただの猫だけれど、見るなりため息をつきたくなるような美猫だった。

まだ若い体と、見るからに優美なたたずまいは、人間であれば貴公子のようだろうと、ルイズは思った。

――こんな使い魔こそが、私にふさわしい！

品のある顔つき。賢そうなまなざし。

そのうえ人間の言葉を操ることができる使い魔。

けれど、リドルと呼ばれた黒猫は、平凡そうな――そのわりに威圧感みたいなものがあるけれど――黒髪の少女がマスターだと言い切った。

あまつさえルイズを「可哀想な子」呼ばわりしたのだ。

あまりにも、あまりにも屈辱だった。

――たかが猫に馬鹿にされるなんて！

使い魔にしようと求めた相手を「たかが」呼ばわりしてしまう、その性格。幼稚な傲慢さを諫（いさ）めてくれる相手はおらず。

魔法が使いたいと思うあまり、頑張って、頑張って、いつしか「何のために」魔法が使いたかったのか、という理由を忘れてしまっ

た少女。
　目的がすり替わり、いまや「魔法を使うこと」だけを目指すようになってしまったルイズの、盲目を照らす光は、いまだない。

#35　始まらない物語ー見えないところー（後書き）

あとがき

＞学院側のキャラがアイタタなことになりました。正直すまん。

でも、あの場に才人以外の、適当そうな動物が居合わせたら、ぶっちゃけルイズはそっちを取るんじゃないかと思います。

#３６　始まらない物語ー そのころの彼女たち ー（前書き）

まえがき

＞アンチルイズ的な表現があります。

お嫌な方はブラウザバックぷりーず。

#36　始まらない物語ー そのころの彼女たちー

冷や汗を流したり、七季たちを観察したり、妄想したり（これはオスマンに限るが）と忙しい学院側をよそに、テスタロッサファミリーご一行は、ちゃっかり念話で密談を進めていた。

秘匿性を強化した、志向性の念話で、ミッドチルダなど管理世界の魔導師でも、おいそれと盗聴できない仕様になっている。

――つーか、帰っちゃ駄目かな……。

黒髪の少女は、ないしんためいきをついていた。

――あれからしばらく経つけど、けっきょく、あの女の子も教師も、謝罪ひとつないし。教師に事情を聞いた学院長も、わびるでなし。

そもそも固まっている七季たちとは違い、ひとり浮いている才人に配慮する様子もないあたり、大人にあるまじき対応だろうと、異邦の少女はうんざりする。

――お茶くらい出しやがれってんだ。ああでもお茶がない可能性もあるのか。異世界だし。

トリステイン側の人間は、着ている物の質からいって、おそらく上流階級――貴族か、資産家あたりだろうから、そういう地位の人間が、こんな対応をすることに、七季は既に見切りをつけ始めていた。

＜プレシアー。説明おわったら帰ろうよー。私、もう帰りたい＞

＜どうしたのナナキ？＞

＜ええー？　まだ来たばっかりだよ！＞

地球に住んでから、久しぶりに「外」に出かけたテスタロッサ親子は、けげんそうに問いかけてくる。

とりわけプレシアは、未知の魔法文化にテンション上がっていた

クチだから、意見的にもアリシア寄りだ。
＜私の直感が告げている。面倒なことになる。もしくはロクなことにならないと＞
＜私も同感だ。プレシア、リニス。彼らは上流階級の人間だぞ。その常からいって、自分たちが優位に立っているのが当然。あまり愉快なことにはならないと忠告しておく＞
＜アーチャーもナナキと同意見ですか……＞
帰還を促す、七季主従の言葉に、プレシアの使い魔であるリニスが考え込む。
彼女としては、アリシアやプレシアの希望を優先したいが、危険や厄介ごとに対しては、非常に嗅覚が鋭いアーチャーと、災難を回避する幸運（ラック）と直感がハンパない七季が、声を揃えていうのである。
ちなみに五人と一匹は、念話のラインをフローチャートのように、指定した先に複数つなぐことで、プチ会議を開催している。脳内会議といえないこともない。
＜僕もナナキに賛成だね。ここに来るまでの廊下、メイドや下働きなんかを見かけたけど、全員マグル（＝非魔法族）だ。この世界は、魔法使いが高い地位を占めているっぽい。プレシアは絶対、アリシアを手放すんじゃないよ。アリシアが魔法を使えないと知れたら、何をされるかわかったもんじゃない。変態はどこにだっているからね。僕が言うのもなんだけど、人にはない力に権威をつけたやつは、自分が神に選ばれたとか勘違いした阿呆や、踏みにじられる存在を歯牙（げす）にもかけない下種が多いからね＞
＜わかったわ！＞
かつては、自分を異端視したマグルに恨みを抱き、魔法使いによる世界支配をもくろんだ闇の帝王――その前身であるリドルは、選民意識に凝り固まったものが、どれだけ悪質なのかも知り抜いていた。
＜こうなったら、ナナキも魔法が使えると見せておいた方がいい＞

＜らじゃ。つーわけでプレシア、私のデバイスも使っていい？　説明に便利だから＞
＜そうねえ。向こうはもう、私とアーチャーを警戒しているし、隠すのもいまさらね。何より、牽制になるでしょうし。アーチャーも良いかしら？＞
＜ふむ。必要ならば仕方あるまい。それに、ここで明かすのならば、これから先はデバイスを使うという選択肢（カード）が増えるな。
ただし、リドルも魔法が使えるということは、隠しておいた方が良い＞
生前トラブルに巻き込まれまくったことから、用心深さがデフォルトになってしまったアーチャーは、切り札を隠し持つことを忘れない。それも一枚では足りない。複数が当たり前だ。
コルベールと相対した時点で、投影（けん）はスタンバイ済み。いつでも射出できるよう、臨戦態勢だったりする。
＜りょーかい。そういうわけだから、リドル＞
＜はいはい。ようするに、緊急時以外には人型になるなってことだね？＞
＜そゆこと。リニスとアリシアもオーケー？＞
＜わかったー＞
＜はいナナキ。あなたにお任せします＞
マルチタスクのおかげもあって、表面上はひとしきり自己紹介が終わったので、七季は、胸元の柘榴石（ガーネット）をそっと撫ぜた。

＃３６　始まらない物語－そのころの彼女たち－（後書き）

あとがき

＞「＃３５」が、内容的にあんまりなので、二話まとめて上げてみた。

これからはアンチルイズの傾向で進みますので、ご了承ください。

#37　始まらない物語ー そのころの彼女たち、と彼らー

＜あ、プレシア。場合によっては私、ぶちキレるから＞

＜え？＞

ちょっぴり物騒な宣言に、ダークヘアのママさん魔導師は「どうしたのかしら」と首をかしげる。

基本的にスーダラのんべんだらりな黒髪の少女は、プレシアとリニスが研究室にこもっている間、母親がわり、姉がわりのごとく、日がなアリシアと遊んでいたり、アーチャーにおやつをねだっていたり、リドルと昼寝している印象が強い。

それこそ、まさしく猫のようだ。

ときどきは山猫フォームのリニスとにゃーにゃー言って、こっそり見ているアーチャーを和ませたり、リドルに頭をひねらせたりとユカイな行動もしているのだが、基本的に温厚である。

七季の真剣な顔というのは、プレシアたちを狙う暗殺者を撃退していたときと、デバイスをいじっているとき、読書タイムくらいのものなのだから。

そうでないときは、じつは仏頂面や無表情がデフォルトだったりする。このへん「アーチャーのマスターなんだねー」とテスタロッサ親子は、似たもの主従あつかいしている。

ただし、基本的に子供好きな七季のこと。アリシアとじゃれているときは笑顔だし、親しいものに対しては、ころころ表情が変わるのが常。だからプレシアたちは、七季を無愛想などとは思わない。

逆に表情豊かだな、と感じているクチだ。親しいものと、そうでないものとの反応が百八十度違うので、しぜん、評価もそれにならう形となる。

非常に余談だが、食事のときは、見ているものが幸せになりそう

なほどの顔でほにゃほにゃ笑っており、ちょっと餌付けしたくなる気持ちを湧かせる小動物っぽい。これは初対面の人間でも変わらない評価といえる。

つまりどういうことかというと――プレシアは、まだ臨界突破（ぶちキレ）したときの七季（た）を知らないのだ。

ヒュードラ事件の際は、敵にキレるよりもプレシアやアリシアを力づけたり励ましたり、慰めたりすることに心を配っていたこともある。

＜あいつら、リドルに手出ししといて、謝罪ひとつしやがらない。主犯の女の子はもちろん、見ていた教師もスルーだし＞

＜あ＞

＜ですね……＞

＜ナナキ、お目めがちょっと恐いよ？＞

プレシア、リニス、アリシアは、ちょぴっと額に汗を浮かべているが、七季の膝上になつくリドルは、ご機嫌そうにしっぽをぴこぴこ揺らしている。

＜あの学院長も、コルベールって人から事情聞いといて無言だしね……まずいと思ってるっつーより、たんにこっちの出方をうかがってるみたい。物凄く、気に食わない＞

＜あー……マスター？

こちらに流れ込んでくる魔力の量が増えている気がするのだが＞

＜ナナキ、暴れていい？　暴れていい？

あ、魔法は隠しておかなきゃ駄目なんだっけ。引っかくくらいはOKだよね？＞

不穏な気配は洩らさずに、表面上クールに話を進めておきながらも、念話のラインから伝わるチリチリした感情の波――静電気のそれに似た――に、アーチャーが遠まわしなツッコミを入れる（が止めない）。

いっぽうリドルは、自分のために感情を波立てている少女を嬉しそうに眺め、うずうずワクワクした心持ちで報復の許可をおねだり

する。
　――まあ、もともと物騒な気質だし。
＜リドルは止めたんさい。変なウィルスとかうつったら困るから。もっと上等な爪とぎ板買ったげるし。
　でもなー。ぶっちゃけ私、あっちが馬鹿なこと言い出したら、止める自信も、その気もないよ？　これでも怒ってるんだから＞
　話している体は毅然とした落ち着きっぷりでも、心情はふつふつ煮えたぎっている、自称「一般人」の「神使」の対応や、いかに。

＜マスター＞
＜ん、黎明？＞
　待機状態のデバイス、「黎明」は、菫青石がはまったリング姿で七季に話しかけてきた。
＜いざというときは、お使いください。「ノア」の格納領域には、催眠薬や痺れ薬、自白剤や痛み止め各種を揃えております＞
＜あーちゃあああぁぁ！？＞
　前科もちの過保護英霊に、すかさず念話でツッコむ七季。
＜あ、あくまで万が一の保険だ！
　あと「黎明」よりも「ノア」の方が目立たないし無口だから使いやすくてバレにくいとかは――ちょっと思ってるが＞
　念話って、わりと本音がダダ洩れるよね。
＜てゆーか薬の出所はっ？　またプレシアかっ？＞
＜あ、それ今回は僕も協力してる＞
＜リドルのってことは……魔法界の薬かいっ！＞
　前回よりもヤバさがグレードアップしている模様です。
＜大丈夫よ、私も研究して改良してるから＞
＜プレシアまでっ……って、それなら安心か……？＞
＜痕跡なんかいっさい残らないようにしたわｖ＞

＜完全犯罪ねらいいぃぃ！？＞
＜大丈夫です、ナナキ。臨床実験済みですからっ＞
＜リニスまで共犯！？＞
どうも保護者チームは、日を追うごとに、過保護に磨きがかかってきたようです。

＜そうは言うけど、ナナキも過保護だよね？　使い魔（リドル）とかに＞
＜アリシアにもね＞
＜ふだんアーチャーは強いから目立たないけど、ナナキ、アーチャーのことも大好きだよ？
この前、膝枕してたもん。ふだん、いっぱい頑張ってるから、ちゃんと労（ねぎら）ってあげたいんだって＞
＜聞こえてるから、そこ！＞

＃３７　始まらない物語―そのころの彼女たち、と彼ら―（後書き）

あとがき

＞「＃３６」のおまけとして書いたんですが、ちょっと長くなったので分割して一話分にしました。

タチの悪い保護者組を書くのが楽しいきょうこのごろ（待て）。

#３８　始まらない物語ー彼女たちの自己紹介ー

時間軸は、ちょっとばかり前後して。
七季たちとテスタロッサファミリーが脳内会議（違）を開いているころ。
「では、失礼して、僭越ながら私・七季が、話の進行を務めさせていただきます」
座ったままぺこりと一礼すると、黒髪の少女は、そう口火を切った。しゃんと背筋を伸ばして話す姿は、アルバイトといえども巫女を務めるにふさわしい、清冽な品格をにじませている。
「まず最初に、話し合う議題についての順番を、こちらから提案しますね。
１）私たちについての簡単な説明と、自己紹介。
２）そちらの、ミス・ヴァリエールが呼び出したとされる少年の自己紹介と、簡単な説明。
３）こちらの世界と、このトリステイン魔法学院についての説明。
４）お互いの希望する立ち位置、もしくは待遇について。
あとは……そうですね、使い魔の召喚?でよろしいのかわかりませんが、その召喚の儀式についての説明。
大きくわけて、こんなところでしょうか。まずは、お互いの言い分を把握することが第一だと思います。
それぞれに、事情や利害や、思惑もあることでしょうが、情報を交換しないことには始まりません。
幸いにも我々は、言葉が通じますし、意識の疎通を可能にする、という最低限の条件はそなえています。
ですので、表立った、公的な事情というものを、お互いに理解することが先決だと、愚見を申し上げる次第です」

すると、向かいのソファに座る老人が、白いひげをしごきつつ名乗りを上げた。
「ふむ……よかろ。お前さんの言うことはもっともじゃ。
では、先にわしらの自己紹介をしておこうかの。
わしは、このトリステイン魔法学院の学院長を務めておるメイジでな。オスマンという。皆からはオールド・オスマンとも呼ばれておるな」
「私はジャン＝コルベール。火のメイジで、この学院の教師をしています」
続いて、頭部がちょっと寂しい感じの男性が自己紹介する。ついでにコルベールは、さっきまで仁王立ちしていたルイズに、座るよう促した。
才人と向かい合う位置の、一人がけソファだが、立場を示す形としては、非常にわかりやすい。

【七季一行】
【ルイズ】　【才人】
【学院教師】

図にすると、こんな感じだ。
「ありがとうございます。では、先達にならって、オールド・オスマン、ミスター・コルベールと呼ばせていただきますね。
それでは、こちらの自己紹介も、あらためていたしましょうか。
まずは……アーチャーからお願い」
七季の言葉に、ずっと後ろに控えていた偉丈夫が一歩、前へ出る。
「彼女、七季の従者で、アーチャーという。
好きに呼んでくれればいいが、マスターに異変があれば、我々にはすぐ伝わる。危害を加えるならば覚悟してもらおう」
なめし革のような肌に白く褪せた髪をいただく偉丈夫の、灰藤色に光る鋭い目が、最後にチラリとルイズを一瞥した。

老練なオールド・オスマンや、状況判断に長けたコルベールよりも、考えの浅くかんしゃく持ちな、「魔法使い」らしい少女の方が、アーチャーにとっては引っかかる存在らしかった。

何より、魔力を感知できる魔術師にとっては、この世界の魔法使いの魔力は、かなりダダ洩れの観がある。魔力を隠すようなアミュレットの類もつけていない。

そこから判断すると、この場にいる魔法使いの中で、ルイズは危険視するに十分な魔力量の持ち主だったのだ。

「プレシア」

次に呼ばれたダークヘアの美女が、アリシアを抱いたままで、しゃらりと一礼する。

「娘を抱いたままで失礼しますわ。プレシア＝テスタロッサです。これでも、魔導師の端くれなので、私の家族と友人に、よからぬことをなさらないでね。全力で報復しますから。

ああ、それと魔法学院の教師さんには、後ほど、是非お話をうかがいたいわ。いちおう研究者でもありますの。きっと、お互いにとって有意義な交流になると思います」

薄く笑んだプレシアは、こちらもルビーアイを細めて、がっつり牽制をかけに走った。

既に相手がフライという魔法を使っているところも見ている。こちらにはこちらで、対抗手段があるとカードを切らねば、何をされるかわからない、と大人である彼女は考えたのだ。

先ほど、わざと魔法を使って追いかけたのも、自分がそれを使ってみせることで、牽制をかけるためだ。

「下手に手を出すなよ」という脅しである。

それに、仮にも魔法学院と名前がついているのだから、ここには魔法の技術を体系的に教授するための知識があるのだろう。

――さっきの「フライ」という術式。ラベンダーに記録させておいたけれど、私の知らないものだったわ。

未知のものに対する探究心は、研究者であるプレシアの中に、人

一倍多く眠っているもの。
マッドな気のある美人ママさんは、学術的な好奇心を刺激されて、ないしん「オラわくわくしてきたぞ！」状態だった。
どうも新しい同居人が増えて以来、プレシアには少女っぽい茶目っ気が復活したようだ。
「アリシアも。自己紹介お願いな？」
やわらかさを増した七季のソプラノが、脅えて母親にしがみついていた幼女を、優しく促す。
「アリシア……テスタロッサです。
私たち、ママと、リニスと、お姉ちゃんと、アーチャー、リドルも。みんなで、お出かけするところだったんです。悪いこととか、してません」
うるうると、ただでさえ紅くウサギみたいなルビーアイを、涙目にして訴えられ、オールド・オスマンとコルベール、ついでにルイズと才人までもが「うっ」と罪悪感を刺激された。
およそまっとうな神経を持っているものなら、純真な幼女にけなげな声で泣かれて、動揺しないはずがない。
じつのところ、その「お出かけ」の目的はというと、人気のない管理外世界で、できあがった、アーチャーのデバイスの性能を見るためだったりしたのだが。
悪いことはしていないが、かなり物騒な目的だったりする。
ちなみに、プレシアが選定した世界の基準というのは、魔法でドンパチやっても不自然ではない場所、である。
もちろん七季の誕生パーティーを開いた、無人世界も候補だったのだが、あちらは現在、冬まっただなか。いくらなんでも、吹雪の中でテストプレイ、というのはいただけない。
そんなわけで、次元犯罪者がいなさそうな、それでいて人気のない土地が確保できる、行動可能世界として、ラベンダーがサーチ＆ピックアップしたのが、この世界だったのだ。
誰かさんが、アリシアのおねだりで「ピクニック可能そうな世界」

をセレクトしたかどうかは、永遠に闇の中である。
「アリシア、大丈夫ですよ。この方たちは、きっと悪い人ではありません。
それに、万が一、アリシアたちを苛められたりしたら、私も黙っていませんからね。ええもう、アーチャーたちと一緒に、力の限り暴れてあげます」
「リニスりにす、本音ダダ洩れてるから。しかもナチュラルに素だよお姉さん！」
「あら」
勢い良く七季にツッコまれて、のんきに首をかしげる、カフェオレ色の髪を持った山猫娘。
ほんわか家庭的な雰囲気の美人が、思いがけない過激なセリフを吐いたせいで、学院側と才人はぴきりと凍りついた。
しかも「力の限り」ときたか。
とっても可憐な印象の女性。だがしかし、彼女のオーラが言っていた。
『うちのプレシア（マスター）とアリシア（むすめ）に手を出したらわかってんだろうなゴルアァ！
ふたり（ナナキ）のお友達にちょっかいかけるのも同罪とみなすぞオンドルアァ！！』
「ぢゅっ！？」
いましがた、プレシアのスカートの中身をのぞこうとしていたネズミ――オールド・オスマンの使い魔、モートソグニルも、本能で察知したのか、一目散に部屋の隅へと撤退した。
猫こわい。山猫こわい。
「リニスと申します。プレシアの従者で、使い魔です。よろしくお願いします」
にっこり笑うその表情は、春の陽だまりさながら。とっても癒し系だったが、その裏にある、子供を守る母猫のごとき強さと威圧感（プレッシャー）に、相対する学院側は、背中に冷たい汗を感じたという。

#３８　始まらない物語ー彼女たちの自己紹介ー（後書き）

あとがき

＞アリシアとプレシアのためなら、野生の血がたぎるよ！なリニス。

オリ主も家族とみなしてます。リニスにとっては「うちの娘（こ）」認識。

虎（タイガー）の代わりに、背景は山猫でお願いします。

アーチャーがルイズに過剰警戒しているわけは、もちろん「虚無」の精神力の大きさです。

初期ルイズの性格で、ミサイル以上の武器持ってれば、そりゃ警戒するのは当たり前という。

ちなみにプレシアは、アリシアのために魔法研究をする気まんまんだったり。

管理局が手出ししてきたときの切り札にとか、いざというときの備えも兼ねてます。

＃３９　始まらない物語ー常識のありかー（前書き）

まえがき

＞今回はルイズアンチ的な傾向があります。お嫌な方はブラウザバックぷりーず。

#39　始まらない物語ー常識のありかー

「では、私たちの事情を説明しますね。んー……ノア、セットアップ」

　すると黒髪の少女の手に、銀色の指示棒が現れる。何度か改良を施されたそれは、握りの部分に小さな紅い宝石が光っていた。

「おお！？」

「ど、どこから出したのよ！」

「お嬢さんもメイジだったのかね？」

「何で指示棒？！」

　驚くコルベールや、眼を丸くするルイズ、問いかけるオールド・オスマン、ツッコミを入れる才人を、やんわりと制止し、七季は手にしたデバイスへと指示を出す。

「ノア、ウィンドウ出して。説明に使うから」

『イエス、キャプテン』

　その返答と共に、虚空へ藍色のウィンドウが浮かび上がった。七季の魔力光は、藍色に金色の粒子が混ざって見える、ちょっと珍しい色合いで、リドルやアーチャーから「ラピスラズリみたいだな」と言われたものだ。

「誰！？」

「いま杖から声が！」

「落ち着いてください。説明が進みませんから。

　私の杖は、返事ができるくらいの機能はついているんです」

　簡単に種明かしをして、七季は先を続ける。

「まず、私たちがどこから来たか、ということを説明します。

　異論はあるかもしれませんが、どうか最後まで聞いてください」

「うむ。騒いですまんの」

「いえ。文化が違えば、新しい刺激に驚くのも当然ですから。それでは」

「世界――私たちが、いま、ここにいる世界。空があり、大地があるここを、仮に『世界』と呼びましょう」

七季が指示棒――「ノア」で、空中に四角を描いた。

＜ノア、ウィンドウに海。それから海の中に柱を立てた映像を出して＞

＜イエス・キャプテン＞

ぱっと藍色のウィンドウに写る映像が切り替わる。

「この『世界』は、混沌の海、そこに立てた杖の上にあるのです。そうですね、フォークで刺した目玉焼きを、逆さにしたような感じが、一番近いでしょうか」

波打つ水面。そこに並ぶ細い柱、さらに、その上に円形の大地が映し出される。

＜スレイヤーズですね、わかります＞

念話で横からリドルのツッコミが入った。

＜こっちの方が、平行世界うんぬんよりもわかりやすいと思って。なんとなく文化も中世ヨーロッパっぽい感じだし＞

＜だね＞

「混沌の海に立っている杖は、無数にあります。もちろん、その上にある『世界』も。

私たちは、例えるなら、隣か、その隣の隣くらいの場所に立っている、ここは別の杖の『世界』からやってきた人間、という風に捉えてください」

「嘘!?」

「これ、ミス・ヴァリエール。最後までちゃんと聞きなさい」

「し、失礼しました、オールド・オスマン……」

学院長にたしなめられて、さすがのルイズも小さくなる。
「異世界トリップ？　それとも平行世界か？」
黙っていられずに口を挟んだ才人へ、七季は苦笑を浮かべて「その話はまた後でね」と、こちらもたしなめる。
「まあ、あくまで『例え』です。とりあえず、我々が、ここは違う環境で暮らしてきたこと。つまりは常識や文化が違う人間であることを、理解してくだされればいいのです。
それを簡単にいうと『世界』が違う。ということになりますね」
「ふむ……その論でいくと、お前さん方は、違う『杖』と『杖』を移動できる方法を持っていることになるが……」
「それは勿論。ただし、その方法をお教えすることはできません」
「ほ。何故じゃな？　そちらもこちらに来ておるのじゃし、交流するのも悪くはなかろ？」
飄々と、それでいて抜け目ないまなざしで訊き返す老魔法使（メイジ）いに、七季はあっさりと答えを打ち返した。
「メリットがありませんから」

ぽかん。
あまりに堂々としたセリフに、トリステインの人々と、ついでに才人があっけに取られる。
七季のセリフを意訳すれば「何でそんなことしなくちゃいけないの？」だ。
かたや、プレシア親子はこっくり頷き、リニスはニコニコ笑顔。アーチャーとリドルらは「当然」といった面持ちをしている。
「私はただ、我々の立場を説明する前提知識として、最低限の情報を明かしているだけですし。
儀式らしいものを邪魔したようですから、それについての落としどころを模索するためにも、礼儀として、我々について説明してい

るに過ぎません。
いわば、善意による情報の提供です。
プレシアは、こちらの魔法にも興味があるみたいですけど……別に、私たちの世界に、戻れないわけではありませんしね」
黒髪の少女は、わざと冷ややかなまなざしをルイズに向けた。
「それに、そちらのミス・ヴァリエールは、私の使い魔であるリドルを攫(さら)おうと――奪おうとしました。いまだ、そのことに対する謝罪もないままです」
「なっ！
ちょっと、攫(さら)うだなんて、人聞きの悪いこと言わないでよっ。私は自分の使い魔だと思って」
七季の指摘を受けた、ピンクブロンドの見習い魔法使(メイジ)いは、むっとした顔つきで反論するも、歯牙にもかけられず話が続く。
「ミスター・コルベールは、それを目撃していながら、いまだ何もおっしゃらないままですし……どうもこちらの世界では、身分さえ高ければ、他人のものを奪っても、のうのうとしていられるのが常識のようですね。
私のいた世界では、そういったことは通常『犯罪』として裁かれるに足る理由なんですが」
「っ、それは、ミス・ヴァリエールも悪気があったわけでは」
コルベールも、いたたまれない面持ちでルイズを庇うが、七季の冷ややかなソプラノを留めることはできず。
「まして、そういった『常識』を持つ方々に、世界を移動する方法を教えるなどと」
思わしげにためいきをつく七季のセリフは、これでもかと痛烈きわまりない。
ようするに彼女は、
『人の使い魔ぶんどろうとして、謝りもしないわけ？
へーそう。それがそっちの常識ってこと。分厚い面(つら)の皮してるのね。さすがお貴族サマ。

おまけに教師が見てて、それを咎めないってことは、そもそも私たちとは常識が違うんだ。うわビックリ。

そのうえ、そんな非常識どもに「世界を移動する方法」を教えろとか、アタマ沸いてるの？　馬鹿なの？　死ぬの？』

と言ってるわけで。

さらに通訳するなら

『舐めとんのかワレ』

である。

もちろん、そんな言葉の裏は、オールド・オスマンを始め、トリステイン側の人間はもちろん、地球人である才人にもしっかりバッチリ伝わった。

とりわけ、教師であるコルベールと学院長などは、あからさまに顔が引きつってユカイなことになっている。

ルイズの暴挙を、体を張って止めはしたが、その後のフォローをしないあたり、コルベールの、教師にあるまじきミスといえた。

そうして、トリステイン側の人間が、告げるべき言葉を捜しあぐねているうちに、いままでろくにしゃべっていなかった少年が、遠慮がちに口を開いた。

「あ、ああ。そうだよな。ここがどこかは知らないけど、でも、俺の住んでたところだって、人のものや家族を奪うのは犯罪だったぜ。たしか、俺んとこじゃ、ペットは飼い主の所有物あつかいだったはずだ。

そんでもって、飼い主の中には、ペットを自分の子供みたいにあつかってる人だっている。ようするにそれって家族だろ？

家族を誘拐されかけたんじゃ、法律がどうとか以前に、怒るのは当然だよな」

こくこく頷きながら、七季のセリフに賛同する才人の目は、そっと気の毒そうにリドルを見つめた。

思いがけないところから案じる視線を向けられて、ちょっとリドルが戸惑いがちに身じろぐ。

そして才人に対する認識を「バカっぽいマグル」から「お人よし」にランクを上げた。

「それでさ、俺も、この世界の人間じゃないと思うんだ。俺の住んでいたところには、魔法なんてなかったし、そんなのはマンガとか小説とか、空想の中のモノだった。だから、君らのいた世界とも違うんだろうけど、俺が住んでた世界に戻る方法は、あるのかな？」

ちょっと頼りなさそうな少年の、黒い瞳に浮かぶ光は、それでもうんと真摯で、はじけそうな不安を押し隠したものだった。

#39　始まらない物語ー常識のありかー（後書き）

あとがき

＞才人は、人並みの常識を持った高校生、というスタンスでお送りしております。

　原作では短絡的な行動も目に付きますが、そんなに真面目でなくとも、一般家庭に育っていれば、善悪の区別と客観論くらいはふつうに身についてると思います。

　落ち着ける時間と情報さえ与えれば、冷静な判断は下せる余地があるということで。

＃４０　始まらない物語－彼の言い分－（前書き）

まえがき

＞今回はルイズアンチ的な傾向があります。お嫌な方はブラウザバックぷりーず。

＃４０　始まらない物語ー彼の言い分ー

――さて。

ここで安請け合いをするのは簡単だが、それは両者のためにならないことを、七季は良く知っていた。

ゆえに彼女は、話を逸らすのである。

「それは……何とも。あなたの世界が、我々の知っている範囲の世界かどうか、さっぱり見当がつかないですしね。

目的地もわからないのに、船を出すことはできない、とだけ答えておきます。

また後で、詳しい話をしましょう？」

「そっか。うん、わかった」

また後でな。

しっかりと目を見て話したおかげか、才人は、自分と良く似た人種に見える少女の言い分を受け入れたようだ。

それに才人は、ふつうにしていれば、初対面の少女に食ってかかるほど、考えなしでも無礼でもない。むしろフェミニスト傾向にある。まったく下心がないとは言わないが。

「じゃあ、それはそれとして。次は、あなたに自己紹介をして欲しいな。

ああ、私は七季。改めて名乗るけれど、こちら風に言えばナナキ＝ナナチで……たぶん、あなたには七地七季、と名乗った方が良いかな？」

「！

りょーかい。俺は、平賀才人。ここは名前が先だから、サイト＝ヒラガになるのか。俺のことは、好きに呼んでくれてかまわない。

……その、君のことは何て呼べば良い？」

ふわ、と表情を緩めた、七季の、少し砕けた口調と、あどけない面差し。

そして何より、巨乳好きの目に飛び込んできた、Gカップの胸元に、少年の感情は大きく七季寄りになったらしい。

現代日本人である才人にとって、人種的にも、心情的にも、彼女の方が親しみやすいからだろう。

そわそわしながら、黒髪の少女に問いかける。

「お好きにどうぞ」

「じゃあ七季ちゃんで！」

許可されるなり、名前を「ちゃん」づけで呼ぶあたりに、サイトの好感度が見て取れた。

いっぽうアーチャーがちょっとだけ眉間のしわを増やし、リドルがしたん、としっぽを不機嫌そうに打ち付ける。もっともリドルは七季の膝に抱かれているので、ぺしんと少女の太股にぶつかった。

その光景を目に留めたリニスやプレシアが「あらあら」とないしん微笑んでいる。

「ん。じゃあ住所と名前と電話番号――ってのがお約束だけど、それは後回しね。

平賀君について聞かせて欲しいんだ」

「何でも聞いてくれ！」

黒髪の少年は、打ち解けられそうな相手と出会い、ようやく調子を取り戻したらしい。ノートパソコンを抱えたまま、親指をビシッと立てて即答する。

いっぽう、トリステインの教師とルイズは、あまりにも違う反応にあっけに取られている。

「名前は聞いたから、年齢と職業かな。

見たところ高校生くらい……学生だろうけど、大学生の可能性もあるし、場合によっては社会人ってこともありえるでしょう？

仕事とか、学校とか大丈夫？」

気遣わしげな響きのソプラノを向けられて、年頃の少年はドキリ

とする。
七季の大きな黒い瞳は、ともすれば映すものを気持ちごと飲み込んでしまいそうな磁力を秘めている。
「あ、ああ。心配してくれてサンキュな。きょうはガッコないけど、ふだんは高校に通ってるよ。年は十七。七季ちゃんも、それくらいか、ちょっと下くらいだろ？」
いままで敬語だった七季の口調が、気安くなったことにほっとして、才人も親しげにしゃべりだす。
「だね。学生なら、まだ取り返しはつくかな……。これが仕事サボったとかになると、信用問題だしね。私も、いちおう高校生かな。いまはちょっとお休み中で、アーチャーたちと一緒に、プレシアの家で暮らしてるんだ。アリシアと血は繋がってないけど、本当の妹みたいに可愛いよ」
「ああ、そっちの子。うん、可愛いよなー。ありゃ将来、美人になるわ」
「でしょー？」
にぱー。
まるで我がことのように、アリシアが褒められて微笑む七季。そしてプレシアとリニス。
いまだ警戒を怠らないものの、アーチャーも少しだけ口角を上げた。
ついでにリドルが一言挟む。
「ふだんはけっこうお転婆なんだけどね。よっぽど、あの凶暴なのが恐かったんだろうね」
ちろんと黒猫のルビーアイが、ピンクブロンドの少女を舐め――次いで、テスタロッサファミリーと才人が後を追い、しみじみと同意のために頷いた。
ひききっ。
ストレートな嫌味を猫から食らったルイズは、その整った顔立ちを引きつらせたが、ここで怒鳴っては恥の上塗りをするだけだとギ

リギリ歯軋りするに留まった。
「でさ。平賀君、どうやってここに来たのか、覚えてる？」
「お？　おお。覚えてるさ。
修理を頼んでたパソコン――こいつな――を受け取って、アキバを歩いてたら、いきなり目の前に青い鏡が出てきてさ。ちょっと興味本位でのぞいてみたら、いきなり引っ張られたみたいになって、気がついたら外だよ」
わけわかんねえ。
眉をひそめて吐き捨てる少年は、それからの理不尽を思い返して苦い顔をした。
「使い魔召喚の儀がなんたらって言ってたけど、いきなり話もせずに人を拉致（らち）るなんて、ただの犯罪だろ。
しかも学校ぐるみとか。むちゃくちゃ組織的な犯行じゃねえか。俺も不注意だったと思うけど、これはないわ。
うち、たんなる一般家庭だし、父親はサラリーマンだから、身代金なんて払えねえよ。母さんにも怒られるだろうな……」
ストレートな文句をつらつら並べられて、引きつりながらも反論を試みるオールド・オスマン。
「しかしのう、使い魔の召喚は、我々メイジにとって伝統の儀式じゃ。
いままで人間が召喚されたことはなかったが……このままでは、ミス・ヴァリエールは進級できずに退学となってしまう。何とかならんかの？」
「薬や魔法の実験台にされるのかもね」
「ぜってーやだ！」
老魔法使（メイジ）いは、才人の情に訴える言い回しをするが、そこに七季が一言口を挟んだことで、少年は即座に却下した。
「み、ミス・ナナキ。余計な……いや、言いがかりは止めてくれんかのう？」
ヴァリエール家は、トリステインでも大きな力を持つ貴族の家だ。

とりわけ、当主であるヴァリエール公爵は、魔法が使えない娘のルイズを不憫がって、たいそう可愛がっている。

それだけに、使い魔召喚の儀が失敗、トリステイン魔法学院を退学――などという不名誉に陥った場合には、反発や怨恨は必至である。

当事者であるルイズも、自分の進退がかかっているとあって、さっきから凄い目つきで才人と七季を睨んでいる。

が、ちょっとびくついた少年はともかく、司会役を務める少女は、あくまで落ち着いた態度を崩さなかった。

「でも、良くある魔法使いのイメージって、そんな感じでしょう？　呪文の研究や、薬品の研究。魔法の検証。それがじっさいに効くかどうか、実験をすることもあるのでは？」

人を呪い殺さんばかりにギラついたルイズの視線も、どこ吹く風といった態の七季。

才人などは、ふっくらとやわらかそうなラインの、少女の横顔を見つめ「七季ちゃんスゲー」と呟いている。

「それが、手近な使い魔を対象にしてもおかしくはないですし、これは私から見た個人的な見解ですけれど……ミス・ヴァリエールは、自分より下に見ている使い魔の虐待くらい、しそうですね」

ぷちっ。

「ちょっと！　さっきから聞いてれば言いたい放題！　アンタ人を侮辱するのもいい加減にしなさいよ！　その無駄に回る卑しい口を縫われたいの！？」

とうとう、長くもない堪忍袋の緒を切った、ピンクブロンドの美少女が、金切り声を上げて怒鳴り散らした。

由緒ある貴族、ヴァリエール家の三女であるルイズは、もともとプライドが高く、沸点が低い。魔法が使えないことで馬鹿にされてきたこともあって、自分への侮辱には過剰なほどに反応する性格だった。

が。

世の中には、逆らってはいけない相手というものがある。
それを、母・カリーヌで思い知っているはずの少女は、他に脅かされた記憶が、せいぜい身内くらいにしかないため、選択を誤ったのだ。
本能は、七季の不思議な威圧感を感じていたというのに。
「へえ」
そして、地獄の釜が開く。

＃４０　始まらない物語－彼の言い分－（後書き）

あとがき

＞オリ主は、リドルに手出しされた時点で、ルイズに対してムカついてます。表に出さないだけで。

相対的に、リドルを気の毒がってくれた才人には、好意的に接しています。

＃４１　ＩＦ－始まらない物語－彼女の剣（つるぎ）－（前書き）

まえがき

＞今回は、いただいた感想より（書き手の脳内で）派生した、本編のＩＦ編です。

もしも主人公より先に、あのひとがぶちキレたら？というＩＦ話でお送りします。

いうまでもありませんが、ルイズアンチな傾向あり。

そして直接的な描写はしていませんが、ちょっとホラーっぽい内容です。

とりわけ、弓兵のキャラ崩れが深刻です。

出来心で書きました「ＩＦ」なので、格好いい正義の味方な弓兵がお好きな方は、ブラウザバックぷりーず。

ダークなものが嫌いな方も、見ないでください。Ｆａｔｅプレイ済みの方なら平気なレベルだとは思いますが。

アーチャーはこんなことしないよ！と言われても責任は取れません。あしからず。

＃４１　ＩＦ－始まらない物語－彼女の剣（つるぎ）－

「そこまでだ」
響く低音は、鍛打（たんだ）のごとく毅然として。
気がつけば七季の視界は、広く逞しい背中に塞がれていた。
頼もしく、寂しく、そしていとおしい、戦士のそれ。
赤い衣は聖者の守護（まもり）。男の世界を思わせる。
それにどこか安堵して、七季は息を吐き出した。高ぶりはもはや消えうせた。彼女の熱は、彼が継ぐ。

「手を汚すのは私の役目だ、マスター。君がそれをする必要はない」
振り返らない男の、けれども優しい声音。
同時に、七季の体に腕が回り、彼女の目も、ひんやりとした手のひらにふさがれた。
「……リドル？」
いきなり自分を拘束した手の持ち主を、しかし少女は咎めない。
ただ、間違えるはずもないパスの先――そして馴染んだ気配の名前を呼んで、少しだけ身じろぎした。
人外の少年が人型を取った理由が、いまひとつわからず、ないしん七季は首をかしげる。が、そのリドルはというと、こちらも慈しみのにじむ声音で、テスタロッサ親子へと声をかけた。
「プレシア、リニス」
＜消音魔法を。それからアリシアの目をふさいで。
――ノア。格納領域から催眠薬＞
＜イエス、サー＞
ストレージデバイスである「ノア」は、もともと収納用で、七季・

アーチャー・リドルの共有デバイスだ。
だからこそ、彼はリドルの指示に応じた。
ふわりと眠りのベールが少女と幼子を包み込む。
「あ……」
――アーチャー？
七季の目蓋に残る、最後の画（え）は、男の手に光る針と、糸切りバサミだった。

魔法使（メイジ）いたちの目に映るのは、白く褪せた髪の戦士。
その手には、不似合いな裁縫道具が携えられている。
そう。
裁縫道具だ。武器ではない。
糸を通した針は、あまりに脆弱（ぜいじゃく）。糸切りバサミは――さすがに貴族といえども、これくらいは見たことがある――刃物ではあるものの、男の手に隠れるほどの小ささ。暗器としても不十分だろう。
けれども、あたりに立ち込める静寂は不気味なほどで、アーチャーと呼ばれた戦士のまとう気配も、いっそ鬼気迫るほどに重厚だった。
何より、彼から指向性を持って放出される殺気に、トリステインの人間は、残らず凝固して動けない。
「さて」
色のない双眸で男が告げる。
「『舌切り雀』と言う話を知っているかね？」
低い声は淡々と。マスターである黒髪の少女にかけたものとは比べようもないほどに温度の失せた響きが紡ぐ。
「よくよく私のマスターを馬鹿にしてくれたものだ。そんな口は、舌は、必要あるまい？」
窓から差し込む光を受けて、ぎらりと小さな刃が光った。

＃４１　ＩＦ－始まらない物語－彼女の剣（つるぎ）－（後書き）

あとがき

＞すんませんっしたー！（全力で土下座）。

空山さまからいただいたコメントの中で、「弓兵さんがエクスカリばる」にツボを突かれ、突発的に「アチャぶっちぎれ」ルートを模索した結果、このようになりました。

貧困な想像力で申し訳ない。

アーチャーが、こんな裁縫道具に失礼なことするはずないですよね！（そこか）

や、本家でエクスカリバってもいいんですが、どのぐらいの被害を想定したら良いものか判断できなかったのと、建物崩れたら巻き込まれるかなーとか（だから待て）。

才人が空気ですが、この場合だと、彼は「舌切り雀」を知っているので、「糸切りバサミ」に脅えてガタガタ震えているところです。だってアレ舌ちょっき（ｒｙ）　昔話って、意外と殺伐としてますよね。

あくまで出来心の産物です。書き手はエミヤシロウが大好きです、念のため。

※「舌切り雀」。日本のおとぎ話の一つ。

内容は超有名だと思いますので、割愛させていただきます。

＃４２　ある日のアリシア－お姉ちゃんといっしょ－（前書き）

まえがき

＞今回は番外編です。ゼロ魔キャラは登場しません。

　前回があんまりにもアレな内容だったので、突発的にほのぼのが書きたくなりまして。

#42　ある日のアリシア―お姉ちゃんといっしょ―

「……あれー？」

――ここどこだろう。

アリシアは、青い下草を踏みしめて、泉のほとりに立っていた。

さわさわと心地よい風に、しゃらしゃらと揺れる葉ずれの音が混じって、幼い彼女の金髪をふわりとくすぐっていく。まっしろなワンピースのすそが、せわしげにパタパタはためいた。

見上げた空は、高く青く。太陽に照らされて明るく、けれども、人の気配も獣の気配も感じ取れない。

それでいて、懐かしいというか、あたたかい誰かを思い出すから、ちっとも寂しくはないという、矛盾を含んだ世界だった。

生えている草も、アリシアの素足をちっとも傷つけない。

「ママー？　リニスー？」

きょろきょろ見回しながら、ためしにアリシアは声を上げてみる。

不用意に動くことはしない。迷子の基本は、そこから動かないことだからだ。

「お姉ちゃんー？」

親しい人の名前を、片っ端から呼んでみる。

と。

「ありしあ？」

ふわん。

突然、けれども花びらが風に乗って届くような自然さで、黒髪のそのひとは、金髪幼女の前に現れた。

風に翻るまっくろな袖は蝶のよう。ソプラノボイスは小鳥に似て、彼女が奏でる子守唄は、幾度となくアリシアを夢に誘ってくれた、優しい異邦人。

「あ、お姉ちゃん！」
迷わず突進。
ぼすっ、とかなり勢いのいい音をたてて、懐に収まる幼子（おさなご）を、七季は珍しく身じろぎひとつで受け止める。
「どうしてこんなところに……？」
「気がついたらここにいたの。ねえ、お姉ちゃんはココがどこだかわかる？」
ルビー色の目で好奇心いっぱいに見上げてくるアリシアへ、黒髪の少女は苦笑をこぼした。
「わかるけどね」
「！
あれ？　それって、最初お姉ちゃんが着てた服だよね？」
金髪の幼子は、紅い目をかがやかせて、七季の衣装に食いついた。
ミッドでは見慣れないデザインの巫女服は、おしゃれにも敏感な女の子にとって、高い興味の対象らしい。
「良く覚えてるなぁ」
「変わってるけど、お姉ちゃんに凄く似合ってたから。家でも着てくれればいいのに……」
抱きついたままのアリシアは、すりすり年上の姉代わりに懐きながら、おねだりする。
まっくろな巫女服は肌触りが抜群で、しかもアリシアにしてみれば、異国的（エキゾチック）なデザインが見ているだけで楽しい。
――この服を着ているときの七季は、神秘的に見えるんだよね。
私もおそろいで着てみたいなあ。
「残念。これは仕事服でね。あまり汚すわけにもいかないし、手入れも特殊だから、必要なとき以外は着ないようにしてるんだ」
もっとも、生まれ育った世界では、ふつうに毎日バイト先で着倒していたが。
「アーチャーならお洗濯も大丈夫じゃないかな？」
「それは……」

――うんごめん。できるかもって思った。
七季は、彼女の従者の家政夫っぷりに、ちょっとだけ涙をぬぐう。
既にアリシアにまで、そんな認識を受けている錬鉄の英霊に合掌。
いつもお世話になってます。
「聞いてみないと、わからないしね。
そんなに気に入ったんなら、バリアジャケットのデザインで入れておこうか？」
「ホントっ？」
愛くるしいアリシアの顔が、向日葵さながら、ぱあっと明るくなる。
「うん。前から思ってたんだけど、バリアジャケットってさ、魔力で生成するものなんだよね？
いくつかデザイン別で登録しておけば、着替えとしても、けっこう便利じゃないかと思うんだ」
「……盲点だった。じゃあ、バリアジャケットでファッションショーができるね！」
――あれ墓穴掘った？
アリシアの背後に、プレシアとリニスの笑顔が見える。幻覚のはずだ。
「いらっしゃ～い」って。どこぞの司会風に。
「ま、まあ、それはそれとして。いつまでもここにいるわけにもな。アリシア。ちょっと目を閉じて」
「ん？　はーい」
「ほととぎす、鳴きつる方をながむれば　、ただ有明の月ぞ残れる」
七季が和歌を口ずさむと、みるみるアリシアの姿が溶け消えていく。
ついには跡形もなくなったのを確かめて、黒髪の少女はふうとためいきをついた。
晴れた天には、うっすらと白い、月の影。
「さて、私も起きるかな」

ぱち、と黒い睫毛にふちどられた目が開く。
隣を見れば、まだ目を閉じている、ふっくらと愛らしい幼子の寝顔。
起き上がった七季は、自分の上からブランケットがずり落ちるのを見て、くすりと笑んだ。
その姿は巫女服ではなく、ゆったりしたキャラメル色のチュニックに、黒いレギンスのルームウェア姿だ。
おそらく、気の利くアーチャーか、さもなくばアリシアじしんが、彼女の寝ているうちに上掛けを持ってきてくれたのだろう。
「近くで寝てたもんだから、うっかり魂が私(こっち)の体に入ってきちゃったんだな」
さら、と七季の手が、幼子の金髪を梳き上げる。
アリシアを蘇生した折、その魂は神降ろしの巫女の体を経由して、アリシアの肉体に還(かえ)された。そのため、降ろした七季の器を覚えていたのだろう。
彼女じしんの器も、助けるために受け入れた幼子の魂を覚えていたのか、悪霊などは弾かれるだけの霊的防御をすり抜けてしまったようだ。
そもそも七季の器は、降ろした神々が絶賛するほど、高次存在にとって居心地がいいらしい。
――寝心地のいいベッド呼ばわりされたからなぁ……。
ふかふかの、ぽかぽかの、ほわほわらしいですよ。
それって人間としてどうなんだ、とツッコミたいところである。
アリシアの魂も、無意識に惹かれて、七季の中でお昼寝をしていった、という感じだろうか。
――うん、まずいから。
幽体離脱しやすいと、浮遊霊や悪霊なんかに体を乗っ取られてし

まうことがある。七季たちならば除霊もできるが、だからといって放置していい問題ではない。

七季の器に入っていれば、アリシアの霊体じたいが、他の悪霊に害される心配はないけれど、目の前で悪霊をフルボッコにするのは、幼いアリシアには色々な意味でショッキングだろう。

「しばらく、アリシアと添い寝するのは止めよう。最低限、ちゃんと魂が定着するまでは」

いままでは、呼び戻した魂が定着するまで、近くで七季が見守っていたのだが。

一人っ子だったせいか、ある日いきなり居候となった七季にも、アリシアは「お姉ちゃん」呼ばわりで、それはそれは懐きまくってくれた。

そうまで慕われれば、七季とて相手が可愛い。しぜんに守りたいと思うし、プレシアのためにも、アリシアには健やかに育って欲しいのである。

いずれ、離れる日が来るのだとしても。

「ゆっくりおやすみ、アリシア」

妹分の安眠を願って、ふわりと幼子の額に、羽根のようなキスが落とされた。

後日、大好きな姉貴分に添い寝を断られたアリシアが、ショックを受けて泣き出し、七季が理由を明かして説得するまでに、ずいぶんな労力と時間を費やすはめになったとか、ならないとか。

＃４２　ある日のアリシア－お姉ちゃんといっしょ－（後書き）

あとがき

＞妹が欲しいと言っていたアリシアですが、いきなりできた「お姉ちゃん」（仮）に、めちゃくちゃ懐いてます。

妹はともかく、ふつうは「お姉ちゃん」は作れませんからね。

母親ともども恩人ですし、恐い人からも守ってくれた人なので、順調にシスコン化（待て）。

そして神様に寝床（ベッド）呼ばわりされるオリ主。

人気あるので、呼ばれた神様は、たいてい嬉々として降りてきてくれるという。

※ほととぎす鳴きつる方（かた）をながむれば　ただ有明（ありあけ）の月（つき）ぞ残れる

（出典／百人一首から、後徳大寺左大臣の歌）

口語訳：

ほととぎすの鳴き声が聞こえた方角に目をやると、その姿はもう見えず、ただ明け方の月が、　空に残っているだけだった。

オリ主は力を使う際、イメージしやすいので、自分が知っている和歌や祝詞などの言葉を利用するという方法を取っています。

＃４３　始まらない物語－彼女の怒り－（前書き）

まえがき
＞ふたたび本編。
今回はルイズアンチ的な傾向があります。お嫌な方はブラウザバックぷりーず。

＃４３　始まらない物語ー彼女の怒りー

「侮辱。侮辱ね」

くつ、と。

ここで初めて、七季はタチのよろしくない笑みを浮かべた。

長い睫毛にふちどられた、切れ長の大きな目は、ますます目力を強め、すっと細い首を伸ばして、ルイズの眼を射抜く。

「客観的な事実を述べるのと、そこから導き出した推測を少しばかり口にしただけで侮辱とは……正直、片腹痛いです」

良く通るソプラノが響く。

凛、というより、びん、と聞くものの背筋を弾くような、力強さを孕んだ声。

口端を引き上げ、あどけない顔に三日月の笑みを刻む、黒髪の少女。その闇色の瞳が、底光りしていた。

原始的な刃、切れ味鋭い黒曜石を思わせるかがやきである。

もしも、この場に幼なじみの少年ふたりや、彼女を良く知る神門（みかど）がいたのなら、裸足で逃げ出すレベルのそれ。

後輩と短くない付き合いの真言すらも、じりじり後ずさるくらいの――言ってみれば、危険水域の兆候だった。

――あ、終わったな。

これに良く似た空気――否、鬼気を知るアーチャーや、修羅場を踏んできたオールド・オスマンなどは、逃げたい本能と、そうできない理性がせめぎあいつつ、現実逃避を始めている。

彼らは知っているのだ。

台風は、通り過ぎるのを待つしかないことを。

同じことを、リドルもネタにしつつ念話で呟いた。

＜ちんちくりん（ルイズ）終了のお知らせ＞

「私のリドルを『たかが』『猫の分際』呼ばわりした、あなたの人間性を疑うなと？

それこそご冗談を。平賀君のことも『平民』呼ばわりして、名前を問うことすらしませんでしたよね。この話し合いが始まる前、校舎に入ってから廊下を歩いている間、けっこうな時間があったにもかかわらず、です。

とどのつまり、あなたにとって平賀君は『名前を知る価値すらない』存在ということ。

繰り返しになりますが、それを教育者たるミスター・コルベールも、オールド・オスマンも注意ひとつしませんでした。

すなわち、お二人も『平民』に対しては、その程度の認識ということ。

黒猫（リドル）に関しても同様ですね」

ぎしり、と空気が重くなったような気配がした。

プレシアとアリシアは、器用なことに影響外となっているが、七季の膝に座っているリドルは耳を伏せ、しっぽも丸く縮こまり、完全に腰が引けている。

黒髪の少女から放たれる威圧が、尋常ではないことになっているのだ。しかもそれが、進行形で圧を増している。

耳としっぽを隠したリニスも同様で、涙目になって、ぷるぷる首を振っていた。

山猫を素体とする彼女には、いまだ野性の本能が名残（なごり）程度にでも残っている。

そんなリニスは、大きな大きな、それこそ自分を丸呑みにしてしまうような、びっしり牙が植わった顎（あぎと）が、じりじりじりと開いていく錯覚を覚えたほどだ。

――ナナキこわい。超こわい。

幸いにも、プレシア側の席に座っている才人は「あれちょっと七季ちゃん雰囲気変わった？」くらいで済んでいるが、反対側――リニス側に座るルイズは、七季から湧き上がるプレッシャーに、よう

やく何かを悟ったか、青ざめている。こちらは、お漏らし寸前だ。
むしろ、ルイズ側にプレッシャーが行くとばっちりを、リニスが受けているのだろう。
淡々と、口調はむしろ平坦に、とうとうと部屋を流れていく。いつのまにか、彼女の声以外の物音はしなくなっていた。

「神使（しんし）」である七季は、もともと並の人間よりも霊格が高く、霊圧も高い。
どういうことかというと――霊的な存在としての威圧感（プレッシャー）が大きい、ということだ。
たとえば、七季の住んでいる世界でも、霊圧の高い、大型の悪霊などは、生き物が本能的に脅えるほどの恐怖を抱かせる。
もっと格上の、神霊などを前にすると、人間が神々しさや威厳を感じるのも、同じ理屈だ。
魔術師であるアーチャーにいわせるなら「魂魄の重み」の格差、ということになるだろう。
真言いわく「マトモな幽霊や悪霊は手出しすらできない」レベルの七季は、ようするにげんざい、ふだんは抑えていた自分の霊圧で、その場の霊体を圧迫していた。
肉体という「殻」があっても、「神使（しんし）」である少女から吹きつける霊気の突風――否、これはもはや豪雨に近い――は、あっさり体を素通しして、じかにバシバシ霊体へと叩きつけてくるのである。
無意識に方向性をコントロールしているのは賞賛すべきところだが、それでも完璧ではなく、リニスやアーチャー、リドルにも、ちょっぴり余波がいっている。
ただし、アーチャーとリドルは、もともと七季の従者である。圧こそ受けるが、彼女がそうと望まない限り、直接的な被害はおよばない。せいぜい息苦しいだけである。

リニスも常の備えとして、アーチャー謹製のアミュレットを身につけているため、かなり霊気の圧迫は減殺されている。

かたや、リニスやアーチャーたちと違い、護符やアミュレットなどを持っていないトリスティンの人間は、盾になるものひとつない。その結果は、推して知るべし。

「ええ、世界が違えば、文化も常識も違います。それは認めましょう。ですけれどね。

こちらにとって、それが犯罪であると指摘したにもかかわらず、頭ひとつ下げるでもなく、図々しくも個人の身柄を引き渡せと要求する、恥知らずを敬えと？」

ぎちぎちぎちと空気がきしむ。

「大事な使い魔を狙われ奪われようとした私が、怒りを覚えていないとでも？」

あたりの精霊たちが、七季の霊波を受けていきりたち、その感情にシンクロして空気中の水分の氷結を始め、学院長室の気温が物理的に下がりだす。

「預かった生徒の親の、怒りを恐れることはできても、息子を奪われた親の嘆きは考えることもできないと？」

ここにいたって、さすがに才人も異変に気づいた。両腕をさすりながら少年が見れば、トリスティン側――コルベールやルイズの座るイスに、霜が降りていた。否、一部は凍り付いてすらいる。

「あまつさえ、自分たちの利だけを求めて技術をよこせ、とは」

ふざけるな。

低い声。

恫喝ではない。

ただ、ぽつりと呟くほどのそれは、ソプラノ質の彼女が無理なく出せる範囲だったにもかかわらず、恐ろしく脳髄に響いて――ルイズ、コルベール、そしてオスマンの中に楔を打ち込んだ。

その瞬間、リニスは、開いていた顎が、トラバサミのように、がちんと閉まったのを幻視した。その鋭いナイフのような牙が、誰か

の喉笛に深く食い込んださまも。
ずしん、と体の奥の、そのまた内側の――頭の奥の奥に、直接、感情（おもい）を叩き込む響きだった。
目には見えない、けれどたしかな力の発動。
静かに静かに激昂した、それは七季の呪いだ。
霊体に直接、打ち込まれた力が、アンテナの役割を果たして作用する。
通常、呪詛（じゅそ）は、呪いの思念――エネルギーを送受信する媒体を必要とする。
送信機は術者、もしくは呪詛を依頼した人間となり、その受信機を、呪う相手の側に置くことで、呪詛（じゅそ）の影響下に置くのである。
しかし、いましがた七季がやったのは、相手の霊体に直接、受信機を埋め込んだのと変わらない。
ようするに、どこにも逃げ場がないということだ。
もはや吐息すら白くなるほどに冷え切った室内に、何かの水音だけが陰々と響いていた。

時を同じくして、七季の手にするストレージ――「ノア」に収納されている、彼女の携帯電話に、一通のメールが届く。
ちこーん♪

『ななきは　たたり　を　おぼえた』

メールの文面は短く、送信元は七季の先輩だったりした。

＃４３　始まらない物語－彼女の怒り－（後書き）

あとがき

＞物理的な温度変化は、オリ主の霊気に刺激されて、精霊が勝手にハシャいだ結果です。

基本、オリ主は対霊特化の能力なので。

本領発揮するのは、霊的な手段ですよー、と言ってみる。

地味ですが、タチの悪い効果のほどは……待て未来（次回じゃないところがミソ）。

＃４４　始まらない物語－羞恥－（前書き）

まえがき

＞今回はルイズアンチ的な傾向、および失禁描写があります。お嫌な方はブラウザバックぷりーず。

＃４４　始まらない物語ー羞恥ー

しょわあぁ……

何かが染み込むような音。

決して派手ではないけれど、静寂が支配する部屋では、響くほど耳につくそれは、ほどなくして、ぴちゃぴちゃという滴（したた）るような音に取って代わった。

ちょっと眉をひそめてしまうような、つんとした刺激臭。

ソファの下にできる水溜り。

しぜんに集まる視線の先――そこには、ピンクブロンドの少女が、人前で粗相をするという、羞恥プレイもいいところの光景が展開されていた。

「あ……」

小柄で幼くは見えるが、それでも立派に分別のつく年頃。それも、大貴族と呼ばれるヴァリエール家の令嬢が、こともあろうに学院長室での失禁。

お漏らし。

偉大な老魔法使（メイジ）いも、頭髪が薄い（というよりまぶしい）教師も、召喚された黒髪の少年も、ルイズのスカートに広がった染みを凝視していた。

いっぽう、プレシアに抱かれたアリシアは口をつぐみ、ダークヘアのママさん魔導師は顔をしかめ、ネコミミを隠したリニスは、鼻をそれとなく覆う。

無反応なのは、七季主従だけだった。

「――失礼。少々こちらも熱くなりすぎたようです」

黒い外套をまとう少女のソプラノは、熱いというよりも、先刻からずいぶん冷ややかに聞こえたはずだが、それでも七季はそう言った。

「いささか不都合な事故も起こったようですし、ここはいったん、仕切り直しをしてはいかがでしょうか？」

才人に対していたのとは違う、慇懃な――改めて顧みるなら、それは慇懃無礼とわかる――口調で、切り出された内容に、飛びついたのは、むしろオールド・オスマンだった。

「う、うむ！

そうじゃな、話し合いは冷静に行われるべきじゃ。お嬢さん方は、一時的にこの学院の客人として部屋を用意させよう。よろしいかなっ！？」

「異論はありません」

「同意を得られて何よりじゃ。ではコルベール先生、至急――至急じゃ、ミス・ロングビルに、学生寮の一室を、客室として用意するように伝えてきてくれんか」

「はい！」

頭髪が寂しい中年男性が、そのずんぐりした体系に似合わない身のこなしで、学院長を室を飛び出していく。

後には、恥辱と恐怖とで顔を赤紫に染め上げた、ルイズに対して無言を貫く一同の沈黙が残るばかり。

やがて、部屋の準備ができたとロングビルが報告しに、学院長室を訪れるまで――恐怖からすっかり腰が抜けて、動くこともできないルイズは晒し者となったのだった。

「では、こちらの部屋をお使いください。食事の時間になりましたら、メイドが呼びに参ります」

ドアを開けてくれた、緑の髪の女性に、七季はにじむような笑みを向けて相手を見上げた。

「ありがとうございます。よろしければ、お名前をうかがっても？

ミス……」

「ロングビルと申します」
オールド・オスマンの秘書を務めているという女性は、そつなくきびきびした口調で言葉を継いだ。
「重ねて感謝いたします。ミス・ロングビル。私はナナキ＝ナナチと申します。このたびは、お手数をかけてすみません。
ところで私たちは、あまり出歩かない方が良いのでしょうね？」
「……さあ。私は、ただ部屋の用意をするように言われただけですので。
あれほどオールド・オスマンがあわてていたことも、珍しいといえば珍しいですわね」
七季の問いに、ロングビルは首をひねって「何があったのでしょう？」とまなざしを投げてきた。
「さあ。何といっても、幼いとはいえ、淑女が殿方の前で粗相をしたのですもの。あわてるのも無理はないかと」
「ああ……彼女は、かなり気の強い生徒でしたが、いったい何があったのでしょうね？」
「どうも使い魔召喚の儀に、えらく意気込んでいたみたいです。
失敗にもめげず、何度も繰り返し儀式を続けたんだそうで。召喚の後もトラブルが起こり、そのまま学院長室での話し合いになったものですから……。
その間、ずっと我慢していたのではないでしょうか？」
「なるほど」
さもあらん、とロングビルはしみじみ頷いた。日ごろ、少しでもルイズを知っているものであれば、ヴァリエール家の三女が「ゼロ」の二つ名を持っていることは承知のはずだ。
例に洩れず、ロングビルもその目にわずかな同情と呆れを刷いた。いっぽうで、そのかんしゃくの強さも知っていたからだ。
「部屋にある……こちらの紐を引けば、メイドがご用を伺いに参りますわ。それと」
いったん言葉を切った美人秘書は、ちらり、とプレシアへ視線を

投げると、声をひそめて善意の忠告を付け加えた。
「オールド・オスマンは女性好きです。ここだけの話、使い魔で女性の下着の色を確かめるくらいには、筋金入りのスケベジジイです。くれぐれもお気をつけください」
「これは同じ女性としての忠告です」と結ぶロングビルの目が、ちょっとコワい感じに吊りあがっていた。
日ごろ、セクハラを受けまくっている女としての、鬱屈が黒くにじみ出るような幻視を覚えるほど。
「ご忠告、心から感謝しますわ」
プレシアも大きく頷き、「女の敵」に対する認識を深めた。

七季たちが案内された部屋は、学生寮にしては、やたら豪華で広かった。しかも続き部屋（スイートルーム）的な造りをしている。
ひとしきり部屋を見渡した黒髪の少女は、唇を撫でて呟きを落とした。
「ここの生徒は貴族だけみたいだし……ここは、ひょっとすると、王族用の部屋なのかもね」
「マジ！？」
七季の言葉を拾った才人は、素直に「すげー」と感嘆する。
そう、部屋に案内されたのは、才人もいっしょだったのだ。リドルなどは、あいかわらずの黒猫姿のまま、深紅の目を細めて、それを不愉快そうに見上げている。
「マスター。隠し通路が二つ。そちらから入れる、隠し部屋が一つあるが、これといって不審なものや異常はない。
こちらの水差し、ポットの中身、茶葉、ともに無害（オールグリーン）だ。紅茶のようだが、いかがかね？」
こちらも身についた警戒がデフォルトのアーチャーが、解析の魔眼でサーチした結果を報告する。七季は、ぎょっとする黒髪の少年

を後目（しりめ）に、かるく頷きを返した。
「ん。お願いな。やっぱ王族用かな……しかしまあ、思惑が透けて見えすぎるっていうのも、何だかなぁ」
黒髪の少女は、ためいきとともに、どっかと手近なソファに身を投げ出した。
いっぽうアリシアはというと、ベッドの上で跳ねて遊んでいるし、プレシアはその傍らに腰かけている。リニスは、主のデバイスである、杖形態の「ラベンダー」を受け取って、テスタロッサ親子の傍らに控えていた。
「思惑って？」
かたや才人は、七季の向かいに座る形で落ち着きながら、いまのところ一番気を許している少女へと問いかけた。
リドルは黒猫姿でスルリと七季の膝に乗り上げ、アーチャーは申し出通り、紅茶を淹れている。
「私たちの監視。だって、ふつうに考えたら、男女を同室にするなんてありえないもん。
仮に――仮に、だよ？
平賀君と、私たちを同室にするにしたって、向こうの貴族的な考え方なら最低限、従者と主は別室にするはず。だから、どっちにしろ、部屋は二つ以上、用意されるべきなんだ。
もしくは個室を与えて、結託しないようにする。戦力の分断もできるしね。
それをしないで、この人数、しかも男女をいっしょくたなんて乱暴なこと、監視が楽、って以外の思惑が見当たらないんだよね」
とんとん、と黒髪の少女は、細く白い指で、ソファの肘置きを苛立たしげに叩いた。
「監視だって？」
七季の言葉を飲み込んで、その内容を理解した才人が絶句する。
「向こうからしたら、こっちは正体不明の異邦人。しかも非協力的で、魔法が使える相手がいる。まあ当たり前の対応だけど……」

こっちだって気に食わないよね。
頭の後ろで腕を組んでみせた七季は、さっきから指の周りに小さな魔法陣をまとわせている女性に声をかけた。
「プレシア」
「わかってるわ。私も調べたけど、魔法的な細工は、部屋にはされてない」
けど。
「こっちを見ている視線があるわね。遠視の魔法でしょう。魔力のラインが伸びているのをラベンダーが確認したわ」
「頼んでも？」
端的に問う黒髪の少女に、ダークヘアの美女は嫣然と笑みかけた。
「もちろん。レディの会話はもちろん、着替えやその他もろもろをのぞかれるなんて、冗談じゃないわ」
「変態ぼくめつー」
可愛らしい声で、ツインテールの金髪を揺らしつつ、小さな拳を突き上げて、無邪気に相槌を入れるアリシア。
このところ金髪の彼女は、リドルと遊ぶことも多く、黒猫姿の闇の魔法使いに、いろいろと影響を受けているらしい。
「どうぞ、マスター」
「ありがとう、リニス」
カフェオレ色の髪をした女性からプレシアへと、白い杖「ラベンダー」が手渡される。その先端を飾る、紫色の宝玉が淡く光を帯びた。
ふぉんっ。
とたん、絨毯の敷き詰められた部屋の床いっぱいに、紫色の燐光を帯びた魔法陣が展開する。
「うちの子たちをのぞこうだなんて、一万年と二千年早いのよ――！」
ダークヘアのママさん魔導師のセリフに、どうもデジャビュを感じた七季は、ふと膝上のまっくろにゃんこに視線を落とした。

「……リドル、プレシアにまでネタ仕込んだのか？」
「こっちの地球にもあったんだよねー、アクエリオン」
目を逸らしつつ、「あはー」とあまり悪びれていない様子の使い魔に、少女は嘆息をひとつ。
と、ロングパンツに包まれた足を組んだ七季へ、横合いから白磁のカップが差し出される。
「どうぞ、マスター」
「ありがと、アーチャー」
黒髪の少女は、鋼色の瞳を見上げ、従者から受け取った薫り高い紅茶を、じっくりと味わうに留めたのだった。
「あ、おいし」
「それは何より」

＃４４　始まらない物語－羞恥－（後書き）

あとがき

＞というわけで、まずは小手調べ程度にルイズから。

失禁描写が駄目な方もいるかなーと思いましたので、いちおう注意書きをば。

地味なようですが、これからじわじわと災難と不運が、トリステイン側にのっかってきます。

＃４５　始まらない物語ー消えたガンダールヴー

「良ければ君もいかがかね」
「あ、ども」
湯気の立つカップを、白い髪の偉丈夫から受け取った少年は、戸惑いがちに口をつけた。
あまり慣れない紅茶の味に、けれども才人はぱちぱちと瞬きをする。
ふわりと薫る茶葉の芳ばしさ。ほのかに舌をくすぐる甘みと、深いコク。そして熱すぎない温度は、飲み物として文句もつけようのない味わい。
「はー……なんか生き返るー……」
自動販売機の缶飲料に慣れきった高校生も、蕩かすような魔力のある紅茶は、思わず異世界トリップのショックも吹っ飛ばすほどの威力である。
「アーチャー、私にも！」
「私はけっこうですので、プレシアにもらえますか？」
「了解した」
わずかに目元を緩め、褐色の肌の男は、ティーポットを持ち上げる。
アリシアが手を上げてねだれば、用意された湯量を鑑（かんが）みたのか、自分の分は辞退したリニス。しっかりマスターの分は確保するあたり、アーチャーに劣らぬ従者っぷりである。
「ま、プレシアの腕を疑うわけじゃないんだけど、いちおう私も念を入れておくかな」
テスタロッサ親子が、赤い従者の紅茶に舌鼓を打っている間、七季は「ノア」の格納領域から札を取り出し、結界を張る。

霊力を使った設置型のもので、登録した霊波の持ち主以外を、指定範囲の領域に入れない性質だ。

基本は、起動時に込めた霊力を使い果たすまでの使い捨てタイプなのだが、七季はそれをいじって、後から霊力を追加できる術式にしている。霊的な電池式、と考えればわかりやすいだろうか。

七季の指先から流れていく霊波で、札に仕込まれた術式が起動する。

ヴンッ。

札はドアにペタリと貼られ、淡く燐光を帯びている以外は、これといった変化は見て取れない。

「これでよし、と。みんな、このお札は剥がさないでねー」

「はーい」

「おお。もしかしてこれが結界張ってるってやつ？」

良い子のお返事をするアリシアと、才人も、物珍しそうに見るだけで、札に手を伸ばそうとはしなかった。これまでの状況で、どちらが自分にとって味方なのか区別したからだろう。

『マスター。お預かりしている携帯に、メールが二件と、お電話が入っております』

「っと？」

報告を受けて、指示棒ちっくなデバイスから淡いブルーの携帯電話を出してもらえば――七季はのっけから頭を抱えたくなった。

『ナナ、七季！　いまどこ？』

「……霜夏？」

いつも彼女を「ナナ」としか呼ばない幼なじみ。彼が七季を呼び捨てにする事態は、本当に焦り、困っているときだけだ。もしくはぶっちぎれている場合。

『先輩がまた、よそに行っちゃったらしいんだ！　悪いけど、連絡取ってくれ！』

このままだと一課が日干しになる！

真言が在籍する、帝都心霊庁の一課の生き残りである悟空は、職

場で身動きが取れなくなった三蔵から連絡を受けて窮地を逃れたらしく、そちらから霜夏に救援要請が回ったという。

が、出張先の美神令子の事務所を辞しても、霜夏と伯言だけでは、行動不能になった帝都心霊庁の一課全員の面倒など見切れない。女性の職員だっているのだし。

「あちゃー」

幼なじみからの異世界通信に、カップを置いた七季は、眉間のしわを揉んだ。こういう連絡が来る事態は、ひとつにきまっている。

「柱」の役目を一課メンバーにポイ投げして、またもやトンズラかましたのだろう。

「よそ」というのは「よその世界」という意味だ。

それ自体は、さほど珍しい話ではない。

ふだんであれば、それこそ七季を筆頭に、神門神社のバイトーズ、および、七季が手伝いを頼んだ魔族や妖怪なんかが、総出で走り回るのだが、いかんせん、彼女はげんざい遠い異世の空の下。

いまだ霊格が七季よりも低い上、手伝ってくれそうな、人外の知り合いが少ない少年たちでは手に負えない。

余談だが、「柱」の肩代わりには、職員から吸い上げた霊力が使われている。そういうふうにチャンネルが合わせてあるのだ。

妖怪や魔族なら、力の質的に、妖力や魔力になるので、「柱」の肩代わりには巻き込まれないで済むのだが、そういった連中は基本、自分より弱い人間のいうことなど聞いてくれるわけがない。

「どうしたの、ナナキ？」

携帯片手に頭を抱える少女の膝上から、リドルが異変を察して訪ねてくる。

「……ちょっとな。先輩がらみで」

とたんにアーチャーとリドルが、ふたりして顔を引きつらせた。

いっぽうは猫なのでわかりにくいが、それでも「カハッ」と大口を開ければ、それなりに表情の変化は見て取れる。

どちらも、真言に非常識をかまされた記憶が新しいものだから、

できれば彼女がらみのトラブルは避けたいところだろう。
アーチャーにとっては、平行世界の運営や、英霊の捕獲を可能にする、「魔法使い」レベルの遣い手。
リドルにとっては、いまだ「記憶」であった彼を素手でしばきたおし（ドロップキックだから素足というべきか）、優れた闇の魔法使いだったリドルを力ずくで服従せしめた相手。
かるくトラウマものの存在である。
かたや七季はというと、従者たちの動揺をよそに、念話とは似て非なる、ライン越しの会話に集中すべく、目を閉じた。
真言の「眷属」として印がつけられている少女は、たとえ世界が違っても、絆をたどって意志を交わすことができる。
「OK。ちょい待ち」
＜……見つけた。先輩、せんぱーい！＞
＜あれナナちゃん。どした？＞
世界を隔てているとは、とても思えないきがるな口調が返ってくる。
＜一課の皆さんから、つーか霜夏から救援信号（ナースコール）です。そろそろ「戻して」ください＞
＜ぶー。せっかく「狩り」がノッてきたところだったのにぃ＞
＜私いま修行中ですからね？　忘れてませんよね？＞
使い魔ともども異世界にいるので、ぶっ倒れている帝都心霊庁の皆さんのお世話なんて、七季にできるはずがないのだ。
＜あ……てへｖ＞
＜駄目だコイツ。早く何とかしないと＞
＜大ふり乙。うん、お土産にお肉山ほど持って帰るから、許されて？＞
何の肉かは気にしない。日本語もちょっとおかしいけど気にしない。
＜良いですけど。あ、それと私、いまちょっと別のとこにいるんですよ。

こっちでお世話になってる人たちとピクニックに来てまして。言っとかないとと思って＞

＜らじゃらじゃ。わかるよー。そだね、どうせだから、まとめて呼んじゃうか＞

＜はい？＞

かすかな違和感が部屋を包み――そして、一瞬後には世界が変わる。

「やほー、ナナちゃん。ひっさしぶりぃ！」

がば、と抱きつかれた七季の背後で。

「じ、次元移動！？」

「それも全然違和感なかったよ、ママ！」

心なしか、きらきらルビー色の目をかがやかせている親子と。

「ここ、どっかの会社か？」

きょろきょろと、帝都心霊庁のオフィスを見回す才人が、ぶっ倒れている職員を助け起こしたり。

「あー……すまないリニス。あきらめてくれ。危険はないから」

とりあえず、リニスにことわって、救助活動に入ろうとするアーチャーと。

「本当ですか、アーチャー？」

白髪の偉丈夫にならって、それを手伝おうとするリニスに。

「うんほんとに。みんなして不可抗力だから」

黒猫姿から、黒髪の美少年スタイルになったリドルがフォローするという、ちょっとしたカオスな光景が広がっていたりした。

そして、いまだ気づかれていない、七季の携帯には。

『るいずの　おとこうん　が　さがった。

おすまんの　きんうん　が　さがった。

こるべーるの　おんなうん　が　さがった。

あーちゃーの　おんなうん　が　あがった。
りどるの　きんうん　が　あがった。
ななきは　はるけぎにあの　ふらぐ　を　たてた』

そんな文面のメールが、開かれるときを待っている。

＃４５　始まらない物語ー消えたガンダールヴー（後書き）

あとがき

＞何のフラグだよ！というツッコミ待ち（をい待て）。

とりあえず不可抗力でハルケギニア脱出。いきおい巻き込まれて、才人もいっしょ。

チートな先輩逃走事件は、「＃３１」を参照ください。あんな感じで死屍累々。

思ったより字数をくったので、トリステイン側それぞれの不運は、待て次回。

まだだ、まだ終わらんよ！

才人フラグが消えたルイズは、ぶっちゃけワルドに利用されるだけですよね？

某所でチッパイ派の紳士な彼ならともかく、原作ベースのワルド相手の時点で、男運ダダ下がりだと思うのですよ。

＃４６　始まらない物語ー扉の向こうー（前書き）

まえがき

＞今回はルイズアンチ的な傾向があります。
お嫌な方はブラウザバックぷりーず。

#４６　始まらない物語ー扉の向こうー

「ええと……それで、どうしてこんなことになってるんでしょうか」

七季は、神門（みかど）家の居間にかかっている「七季ちゃん初たたり☆記念パーティー」と題された垂れ幕に、頭を抱えつつ、給仕をして回っている式神のお姉さんからグラスを受け取っていた。

赤い外套の弓兵な使い魔が、そわそわと手伝いたそうにしているが、七季はあえてアーチャーを捕まえておいた。

式神から仕事を取り上げるのも、かえって迷惑なものだし、世話焼きな従者は、放っておくと際限なく動き回りそうだったからだ。

「あーちゃー、あーちゃー、落ち着いて。いーから座ってなさいってば」

「む……すまない」

きゅっと七季の小さな手に、自分の片手を質に取られた長身の男は、言われた通りに腰を落ち着ける。まだ若干、そわそわしているが。

「んー？

ナナちゃんが『祟（たた）る』ことを覚えたから、そのお祝いｖ」

「だからなぜに？」

こてん、と首をかしげる七季。

こちらの季節は、リリ（あちら）なの世界と違って、いまだ夏。

着ていた外套類は目立つので、帝都心霊庁に置いている着替え――夏用の制服であるセーラー服――を着ている。

帝都心霊庁から、「へんじがない。しかばねのようだ」状態の職員を、まとめて神霊病院（自衛隊病院のようなものだと思いねえ）に放り込んだあと。

異世界に興味津々のテスタロッサ家ご一行と、なりゆきでこちら

に来てしまった才人を連れて、七季たちは真言を先頭に、この神門（みかど）神社へとたどりついた。
そして、のっけから宴会である。
「あれ？　携帯にメールしたでしょ？」
「携帯に？」
ぱか、と七季が言われるままに携帯電話を開くと。
未開封のメール、一通目。

『ななきは　たたり　を　おぼえた』

未開封のメール、二通目。

『るいずの　おとこうん　が　さがった。
おすまんの　きんうん　が　さがった。
こるべーるの　おんなうん　が　さがった。

あーちゃーの　おんなうん　が　あがった。
りどるの　きんうん　が　あがった。
ななきは　はるけぎにあの　ふらぐ　を　たてた』

「……これ？」
「そう、これ」
七季がおずおず真言の顔を見つめると、栗毛の美少女も、後輩のあどけない面差しを見つめ返し、こっくりとうなずいて答えた。
「私、祟ったんですか？」
ちょこなんと座布団の上に座った、黒髪の少女はふたたび首をかしげる。その横で、世話焼き——最近は過保護もデフォルトになってきた気がする——な色黒従者が、かいがいしく料理を皿に取り分けていた。片手で器用なことである。
——いや、アーチャー。自分も食べような？

優しい従者に内なるツッコミ入れつつ、七季は誰に、とは問わなかった。

ごく最近であれば、心当たりがあったからだ。メールを受信した時間的にも、つじつまの合う相手が三人ほどいる。メールにも名前が出ている、自称「メイジ」だ。

「そう。ナナちゃん、むちゃくちゃ怒ってたでしょ。『祟り』ってね、神様だけじゃなくて、力のある『神使』も使えるの。

たとえば、お稲荷様に失礼なことするでしょ。そうすると、お使いの狐が取りついたりするのも、『祟り』の一種だね」

「ええー……ああ、なるほど」

自分が「祟った」という自覚は薄いが、例を挙げられて、そのシステムじたいは納得できた七季である。

と、少女の小さな手に、しっかり捕まえられていた、白い髪の偉丈夫が、横から興味深そうに口を挟んでくる。料理を取り分けた皿は、さりげなくセーラー服のポニテ少女の前に置かれていた。

「ありがと、アーチャー」

「どういたしまして。

具体的には、どういう事象が起きるのかね？」

「む……元気そーね、イヤミ主夫」

真言は、その美少女顔に、警戒の色を刷きながら、天敵を目にしたように後ずさる。

アーチャーも皮肉げな笑みを浮かべつつ、それでも感謝をにじませて声を返した。

「おかげさまでな。新しいマスターとは上手くやっているよ」

ぱっちん、ぱっちん、ぱちぱっちん。

心なしか、ふたりのあいだに白い火花。

真言とアーチャー、並んでみれば、栗毛の美少女と精悍な偉丈夫で、なかなかお似合いに見えるのだが、いかんせん、性格的に相性がよろしくないらしい。

たいそう美人で可愛らしさを併せ持つ真言だが、中身と裏腹に、その性格はなかなか雄々しい。自分なりのプライドもあって、限られたものにしか懐かないため、付き合いの浅いものに口を挟まれるとカチンとくるらしいのだ。

才色兼備の人間には、よく――とまでは言わないが、ままあることである。

そのうえ意外と沸点が低く、いったん腹を立てると、手が出ることもしばしば。これがまた強い。日ごろ退魔行で神剣（真剣で重い）を振り回している、有段者を舐めてはいけない。

比べると、ちょっと天然ぎみではあるが、ふつうの少女に見える（あくまで「見える」）七季とアーチャーは、なかなか上手くいっていた。

基本、世話焼きの従者を、主たる少女が頼りにして、懐きつつも彼の忠言を受け入れるだけの素直さと大らかさがあるからだ。あと、基本的に七季は肉体言語が苦手なクチで、できるなら交渉は平和的にまとめたい方。

必然的に、手段は搦め手が多く、何かあるとアーチャーを丸め込むこともしばしばだった。

どちらがタチが悪いかというと難しいが――ようするに、当人たちが納得していればいいのである。

「はいはい、二人ともそのへんでね。

つーても先輩、私が祟っても、大したことはないんじゃないですか？」

私、まだ人間ですし。

睨み合うとまではいかないものの、冷戦に突入しそうな男女のあいだに、七季が割って入る。

と、機嫌を直した真言が、思いがけないことを言い出した。

「ん。なら、ちょっと見てみよーか」
栗毛の巫女さんは、そうのたまって、パーティー仕様の居間に、するするとスクリーンを下ろした。
どこからどう見ても和風建築なのに、こんな設備があるあたり、神門家もかなり謎な造りである。
「ここはツッコむべきところかね、マスター」
「いや。ここは『神門さんちだから』で流しておくと良いよ。類似品に、『先輩だし』があるから」
「なるほど」
ちょっとボケた主従の会話もご愛嬌、ということで。

ハルケギニアは、トリステイン魔法学院。
お漏らしで服を汚してしまったルイズは、七季たちが学院長室を去ったあと、ようやく呼ばれたメイドと共に、急いで自室に戻ろうとしていた。
いまはスカートの上から応急処置でタオルを巻いている。しかし、黒いニーソックスには、あからさまな水濡れの染みがつき、いまだ内腿も不愉快な蒸れた感が残っていた。
「は、早く歩きなさいよ！」
付き添いのメイドを急かしながら、肝心のルイズが、内股を気にしてひょこひょこ歩くものだから、なかなか部屋に着かない。
メイドはメイドで、あまり先に進んでも、貴族である生徒を置き去りにするわけにもいかないし、ピンクブロンドの少女に怒鳴られて、たいそう困っていた。
そこに、ルイズの大声を聞きつけた、学院の生徒が通りがかったのは、たんなる偶然でしかない。
「アレ？　さっき召喚に失敗したヴァリエールじゃないか？」
「けっきょく使い魔はどうなったの？」

そのうえ、数人の生徒は、さっきまで「召喚の儀」に居合わせたものたちらしい。どれもけげんな顔で話を聞こうと近寄ってくる。

「何でタオルなんか巻いて……？」

そんな彼らが、アンモニアのニオイに気づくのも早かった。

「ナニ、この臭い」

少年が一人に、少女が二人。大した人数ではないが、三人とも観察眼には長けた生徒だった。

そもそも貴族というものは、お互いの弱点を探ってナンボという部分がある。

子供は親を見て育つもの。とりわけ、そう大貴族でもない場合は、上のものの顔色をうかがうスキルは必須であるので、中小貴族の子弟であった生徒たちは、あっというまに真相を把握した。

大貴族であるヴァリエール家に、面と向かってケンカを売るのは、ただの阿呆である。

三人は、さっと道をあけて、ルイズたちを見送った。

羞恥に身を焼きながらも、廊下を急ぐルイズの背後では、ひそひそと会話が交わされる。

「……失禁……」

「まさか……」

「でもスカート」

「靴下……濡れてた……」

故人にいわく――

開いた口には戸は立たぬ。

悪事千里を走る。

悪いことほど、早く広まるもの。まして、日ごろの行いが悪いものなら、なおさらである。

また、「三人市虎を成す」ともいう。

一人が、「町に虎が出た」といっても信じられないが、三人もそう言うと、聞いた人は信じるようになるということだ。

転じて、嘘や噂も多くの人が言えば、本当のこととして信じら

れるようになってしまうことを指す。

それを証明するように、後日、生徒たちのあいだはおろか、メイドや下働きですら、「ルイズお漏らし事件」は学院中に知れ渡ることとなる。

＃４６　始まらない物語ー扉の向こうー（後書き）

あとがき

＞「錬金」で乾かせるかなー、とも思ったのですが、アンモニアの臭いってけっこう残るものですし、下手に「乾かすだけ」だと染みになりますよね。

それも含めて「錬金」でどうにかできるのかもしれませんが。

ここはひとつ、オールド・オスマンもコルベールも動揺してて、頭からすっぽ抜けたということにしておいてください。

※１）開いた口には戸は立たぬ。

‥うわさはどうやっても防げないということ。

※２）悪事千里を走る。

‥悪い行いや悪い評価は、たちまち世間に知れ渡るものであるということ　。

※３）三人市虎を成す。

‥一人が、町に虎が出たといっても信じられないが、３人も　そう言うと聞いた人は信じるようになるということから、嘘や噂も多くの人が言えば、本当のこととして信じられるようになってしまうこと。

＃４７　始まらない物語―人の噂も？―（前書き）

まえがき

＞今回はルイズアンチ的な傾向があります。
お嫌な方はブラウザバックぷりーず。

＃４７　始まらない物語―人の噂も？―

どういう仕組みなのか、そんなルイズの、自室に戻る映像が生中継のような感じで、神門（みかど）家のスクリーンに映し出されていた。
「うわぁ……。でも、良くあることですよね。小学校のころとか、お漏らしする生徒っていませんでした？」
「いたねぇ」
「あ～。必ずクラスに一人か二人は出るよな。低学年のころって。あと、ガッコでトイレの個室にこもると、しばらくイジメっつーか、陰口のネタにされるんだよな～。特に男は」
七季と真言、そして世界こそ違え、文化はあまり変わらない才人は、うんうん、と頷き合う。
『良くあること、良くあること』
うんうん。
黒髪と栗毛の少女ふたりが、異口同音で相槌を打つ。
「しかし、これが『祟り』かね？
正直な話、あまり大したことがないと思うのだが……」
確かに不名誉なことだろう。しかしアーチャーの目から見れば、命に関わるようなことでもないし、と思えてくる。
「いや、この年になって『お漏らし』は致命的な噂だろ」
才人がスクリーンを指差しつつ、ツッコミを入れる。
「在学中は消えないよねぇ……何年制の学校かは知らないけど」
七季も、少年の言葉にしみじみと頷く。
「まあアレよ。あそこで『人に見られる』っていう『不運』こそが、『祟り』の一環ってわけ」
そして、横から真言の解説が入る。
「てゆーか、ナナちゃんの『祟り』だからなあ。こんなもんで済む

はずないと思うよ。まだ序の口じゃない？
　ナナちゃんじしんが強運だもん。よーするに、それって『運』に関する干渉力とか、影響力が強いってことだから。
　まあ、あくまで自業自得な、転落人生を歩くことにはなると思うけどねー」
　――ってことは、私が『祟った』のは、あのルイズって子だけなのかな？
　メールの内容は、学院長と、ハゲた教師も、だったはずだけど、と七季は首をひねりつつ、アーチャーが取り分けてくれた料理を、もぎゅもぎゅと頬張った。

「そういや、この前ちょっと聖天（＝大聖歓喜天）さんと顔合わせたんだけどさあ。あのひと、まーだナナちゃんのことあきらめてないよー」
「っうえ!?」
　先輩の言葉に、七季はぎくんっと奇声を上げた。そのさまに、アーチャーはけげんな顔をした。
「どうかしたのかね？」
　聖天とは、歓喜天ともいい、仏教の守護神である天部の一つだ。
　この際、チートを体現する真言が、その存在に「会った」というのはさて置こう。
　歓喜天というのは、象頭人身の双身像で描かれることが多い秘仏である。ヒンドゥー教の神の一柱・ガネーシャに似ている、といえば、少しはわかりやすいだろうか。
　もともとは障碍を司る神だったという。
　その通説を裏づけるかのように、歓喜天を用いた呪は、非常に強力ないっぽう、いい加減な供養をするとかえって災いがあるとか、子孫七代の福をも吸い上げる、などの、迷信ともつかない言い伝え

を持つ存在である。
　また俗に、聖天（しょうでん）は人を選ぶといわれ、非道な人間には縁を結ばないし、勤行を一生怠ってはいけないともいわれる。
「いや……うん。個人的に目をつけられているというか、何というか……」
　大きな目を伏せて、うろうろ視線をさまよわせる七季。
　彼女にとって、歓喜天（かんぎてん）は嫌いな神仏ではない。むしろ「悪人成就」のモットーからしても、好きな部類に入る。
　――けど、結縁（けちえん）しないかって言われても困るんだよ！　私、先輩の眷属だもん。それに蹴っ飛ばされたくないし……。
　霊験（れいげん）あらたかな仏ではあるのだが、非常に厳格な性格だという。歓喜天（かんぎてん）に祈願する際、修法がうまくいかない場合は、わかりやすく、術者が祭壇から蹴落とされたりする、という逸話も残っている神仏なのである。
　これらのことをまとめると。
　ちゃんと信仰すればご利益があるが、わりと好き嫌いが激しく、機嫌を損ねると非常におっかない仏様、ということになる。
　人を呪ったり、富を得るには非常に役立つ神仏ではあるが、基本のんきもので、元から強運な七季は、あえて手を出す必要もない。
「あ、でも、この前いただいた大根餅は美味しかったです」
　ほにゃ、と笑う黒髪の少女は、基本、食い意地が張っている。
　ちなみに大根は、歓喜天（かんぎてん）の好物だ。よく供物にされるものだから、おそらく好物についてで、話が盛り上がったことだろう。
「マスター、食べたければ作るから、あまり食べ物に釣られないでくれ……。
　ところで七季が目をつけられているというのは、本当なのか？」
　心配性の従者は、七季に釘を刺しつつ、まじめな顔つきで真言に振り返る。
　こちらも真顔で頷くあたり、まったくシャレではないのだろう。
「いやマジで。うちの子なのは知ってるけど、用があったらいつで

も手を貸すって伝言頼まれたし。
ナナちゃん、ほんとにあのテのひとにモテモテだよねえ」
魔性好きする体質の七季は、元悪神だとか、怨霊神、災厄の神などに好かれる傾向にあるらしい。
そういう神というのは、じっさいに「祟った」逸話が多く――むしろ「祟った」からこそ祀られたものばかりで――力も強い。
そのことは真言も知っているが、そのメンツをあらためて振り返ると、なかなかコワい顔ぶれだったりするものだから、いかな彼女とてちょっと呆れたくなる。
「道真（みちざね）さんとは茶飲み友達でしょ。将門さんとこはフリーパスだし。マガツヒさんもお気に入りだし」
指折り数える少女の言葉に、ちょっとアーチャーも顔を引きつらせた。
彼でも知っている名前がチラホラ出てきたからだ。
それぞれ、
菅原道真、
平将門、
八十禍津日神（やそまがつひのかみ）、
のことである。
いずれも、怨霊から神として祀られるようになった存在や、穢れと災厄を司る神だったりで、わりと正統派の真言にとっては苦手な相手が多い。
「将門公なんてさ、いまだに私ひとりじゃ境内にすら入れないんだよ……成田山に行ったわけでもないのに」
珍しく真言、ちょっと涙目。
「あー……そういえば、この前たまたまお邪魔しに行ったら、鳥居の前で弾かれちゃったって言ってましたっけ。
でも、この前いっしょに行ったときは、何もなかったじゃないですか」
マイナーな神仏の名前や、オカルトちっくな話題に、ついていけ

ない才人が首をかしげているが、それなりに空気が読める高校生なので、あえて口を挟むことを少年はしない。
巨乳の少女ふたりが、仲良く話しているだけで、彼にとってはけっこうな眼福なのだから。
「そーなのよ！
てか、ナナちゃんといっしょならフリーパスって、どんだけなの！？　私あんだけ嫌われてるのに！」
よっぽど七季が好かれていると考えるべきか、それだけ真言が毛嫌いされていると見るべきか。
「君にも苦手な相手がいたのか……」
真言のチートっぷりばかり見ていたような気がするアーチャーは、物珍しそうに栗毛の少女を見つめる。
日本の神道は、いわずもがな多神教。
八百万（やおよろず）というくらいいるのだから、相性の悪い相手だっていて当然である。
「マガツヒさんとこは、穢れの気配が強すぎて、近づくこともできないし」
きついんだよ、あそこ！
ぶちぶちグチる真言を、七季はやんわりとなだめる。
「黄泉路に近い場所ですしね。用があるときは、もっぱら私ががお使いだし。
しょーがないじゃないですか。穢れと災厄を司る神様なんですし。お祓いには欠かせない方なんですよ？」
「知ってるけど！」
苦手なもんは苦手なの！
ちなみに七季は、八十禍津日神（やそまがつひのかみ）にお呼ばれすることが多い。
その性質上、なかなか神使が居つかず、八十禍津日神（やそまがつひのかみ）といっしょにいても平気な顔の七季が重宝されるからだ。
こちらもこちらで、自分の「神使（しんし）」にならないかと、折を見てはコナをかけられているのだが、七季じしんはそれを人に洩らしたこ

とはない。
「平気なのは道真さんとこくらいだよ……」
「別名が雷公ですしね。破邪の力を持つ雷を司ってらっしゃるんで、そんなに居心地は悪くないでしょう？
先輩、この前も梅酒もらってたじゃないですか」
「あれは、ナナちゃんが手伝った梅の実拾いのお礼だってば」
ちなみに太宰府では、その敷地に献上された梅の木が数多く植えられ、毎年、季節になると、その梅の実で梅酒が漬けられている。なかなか美味しいので、一度くらいは買ってみることをおすすめする。
閑話休題。

「ところで、これはどういう仕組みで映し出されているものなの？」
ふいに、ダークヘアのママさん魔導師――プレシアが、うずうずした様子で、疑問を投げた。
指差す先には、ルイズを映したスクリーン。
「ん？
あの連中に、ナナちゃんが『神通力』をじか打ちしたから、それを目印に、周囲の情報を拾ってるって感じかな」
しれっと、物凄いことを言ってのける、栗毛の美少女ハイパー霊能者。
世界を越えてなお「祟る」ことのできる七季も七季だが、その眷属の力を追っかけて、カメラ代わりに映像や音声といった情報を引っ張ってしまう真言も真言である。
「なるほどねえ」
プレシアは、あくまで技術者として、興味深そうにそれを検証しているが、魔術師であるアーチャーから見れば、それは「平行世界の観測」である。

「あいかわらず非常識な……！」
頭痛を堪えるように、頭を抱える褐色の肌の男を、七季が心配そうに見やる。そして黒髪の少女は、横からアーチャーに抱きついて、よしよし、と慰めるように頭を撫でくった。
「先輩だしねぇ。それに、あそこからみんなを移動したのも、私の気配っていうか、魂を目印にして、転移元の機軸座標にしたんじゃないかな」
「マコトだしね」
アーチャーより、ちょっとだけ先輩な使い魔のリドルは、もはや悟りの境地だ。食べるのに不便だからか、美少年姿のまま、そのへんの料理を勝手に取り分けてぱくついている。
「あ、そーだ先輩！
この子……平賀君、あの連中に、よその世界から召喚魔法で無理やり拉致られた被害者なんです。んでもって、別口で転移してた私らといっしょに、部屋に押し込められてたんですけど」
「ありゃ」
アーチャーに抱きついたまま、黒髪の少女が訴える言葉に、真言は琥珀色の目を丸くする。
「よーするに、そこからまた先輩が拉致った形になっちゃったんです」
「あ～……そりゃ悪かったねえ。んじゃアレか。その子のいた世界に戻せばいーの？」
「できればお願いします。
えっと、私が『修行』で放り込まれたのが、次元世界っていって、よーするに銀河系みたく、あちこちに世界があるっていうところだったんです。
ホントは、プレシアたちといっしょに住んでた「地球」の子じゃないかと思って、後でデータ検索かけてみるつもりだったんですけど」
七季じしんは、ちょっとした取引を条件に、元々それくらいの協

力はしても良いかな、と思っていたのだ。
だが、いかんせん真言が、さらにこちらの世界へと拉致ってしまったため、無条件で才人を戻すための協力をすることにしたのだ。
まあ誰が悪いかというと、元凶はルイズたちなのだが。
「なるなる」
ふみふみと頷きながら、テンポ良く話を進める巫女さん主従（かたっぽセーラー服だけど）に、期待を高める黒髪の少年。
「お、お願いします！」
才人も、がばっと土下座した。トリステインの魔法使い（メイジ）よりは、よっぽど話がわかりそうな相手。しかも七季の知り合いであるというなら、悪いようにはしないはず、と少年も懸命に頼み込む。
さっきの会話も、非常識な単語を連発していたような気がするが、じっさい彼じしん、魔法で異世界に召喚された身である。もう何があっても驚くまい。
「リリなのとゼロ魔ね。おっけーおっけー。んじゃ、ちょっと占って特定するから、しばらく席外すねー」
ひらひらと手を振って、栗毛の少女が今から退出した。
「ところでリリなのって何？」
「さあ？」
抱きしめ合ったまま、えらくナチュラルに首をかしげる、七季とアーチャーの主従ふたりと、それをむっつり眺めつつ、ないしん「あ、マコトも見てたんだ」と呟くリドルの姿があったとか。

＃４７　始まらない物語―人の噂も？―（後書き）

あとがき

＞ちょっとマニアなネタに走ってしまいました。読みにくかったらごめんなさい。

いまさらですが、先輩もオタクです。美少女だけど。

オリ主の幼なじみズは、入院した帝都心霊庁の職員の付き添いで病院入りしてますので、宴会場にはいません。

あと、前回と今回は、プレシアたちもかなり空気になってしまいましたな……反省。

＃４８　始まらない物語ー彼女の思惑ー

「どうしてこうなった……」

七季はあの有名なセリフを呟きながら、目の前で人間離れした動きを見せている黒髪の少年――才人を半眼で見つめていた。

霊地・妙神山（みょうじんさん）。

そこは日本でも有数の霊山として名高い場所であり、紹介状を持つ、一部の霊能者しかたどりつけない修行場である。

高く険しい道を登った頂上には、天界の竜神族・小竜姫が管理人として預かる霊場がそびえている。そんな場所で。

ただいま平賀才人は、同じ年頃の少年ふたりを相手取り、身の丈ほどもある棍を手にして奮戦していた。

しかし。

がかっ！

栗毛の少年の双剣――否、二本の木刀の片割れによって、とうという才人の棍が、天高く弾かれてしまう。

「くっ」

「そこまで！　勝負あり！」

石版が円（まる）く敷き詰められた武闘場に、小竜姫の凛とした声が審判を下して響き渡る。

「お二人相手に、ずいぶん動けるようになりましたね、平賀さん」

燃えるような赤毛からのぞく、枝に似た質感の角。小袖に裾の締まったパンツを履いた、おかっぱ頭の美少女――彼女こそが、この妙神山の主。小竜姫である。

「はあっ、はあっ……あ、ありがとうございます、小竜姫さん」
そんなわけで、才人はこの妙神山での修行に励んでいた。
それというのも。

「元の世界に戻すのは、いつでもできるしねー。どうせ異世界トリップを経験したんだから、何かひとつくらい得るものがないと」
という、ありがたくも理不尽な、美少女チート巫女さんのお言葉で、才人はなしくずしに「強くなること」が決まったのである。
いやそれもどうよ、というわりと常識的な七季のツッコミは、
「賛成です。先輩にしては、とても良い考えだと思いますよ」
「僕らも、ナナと仲良しになった平賀君と、ＯＨＡＮＡＳＨＩしてみたいしね」
という、イイ笑顔を浮かべた幼なじみの言葉に遮られた。
「魔王式（なのは）ですね、わかります」
という、日ごろにゃんこ姿の使い魔が、したり顔で納得していたいっぽう、七季にはいまいちわかりかねたのだけれど。

で、心当たりのある「強くなる場所」というのが、この妙神山というわけである。
きょうで、そろそろ「修行」も一週間になるだろうか。
もともと七季たちの時間軸は、夏休み前だったおかげで、ほどなく時間は確保できた。
七季や才人をはじめ、みんなふつうに動いているが、いま才人が戦っていた石版の武闘場は、霊体で戦えるシステムを採用している。
円形状の石版の両端に設置された陣から入ると、霊体が抜き出されるのだ。これで霊体を鍛え、ふだん上げにくい霊力を上げること

ができる。
「お疲れ様、三人とも」
そして、いましがた試合を終えて戻ってきた少年たちに、見学していた七季はドリンクを手渡した。
中身はこの妙神山の霊水で、霊的な消耗を回復させる効果がある。
「っぷはあ、生き返るー！」
「ありがとう、ナナ」
「ありがとうございます、七季。でも、見ていて退屈ではありませんでした？」
ダメージは霊体のみのはずだが、本気で疲れているらしい、才人は目の幅涙を流して感激中。
いっぽう、霜夏と伯言は、このテの修行はいつものことなので、そう消耗した様子もなく、笑顔で礼を口にしていた。
「退屈ないない。むしろ、霜夏も伯言も、よくあれだけ動けると思う」
神使（しんし）として、霊的能力はうなぎのぼりに高くなっていく七季だが、物理的な身体能力は、さほど高くない。
せいぜいが、ちょっと運動神経のいい女の子、というレベルだ。
もっとも、魔法を使った場合は、また別であるが。
「僕らもまだまだだよ」
「さて。それでは、次は私が相手をしようか」
そう言って、座っていた岩から腰を上げたのは、まっかな外套がトレードマークの錬鉄の英霊。
アーチャーの手には、扱い慣れた一対の中華刀。
今度は生身での戦闘訓練だ。いちおう刃引きはしてあるのだが、彼の技量であれば、木刀や棍など、またたくまに砕けてしまう。
よって、この場合は、ひたすら「避ける」こと目的にした、動体視力の向上が狙いである。
「ッス！」
「よろしくお願いします」

「ひぃ。お、鬼教官……っ」
わりと体育会系のノリな霜夏と、同じ双剣使いとして男を尊敬する伯言は、期待に身を引き締めながら一礼する。
いっぽう、いまだ本物の戦士の迫力に慣れない才人は、おののきながらも武闘場へ上がる。陣を踏まなければ、ここはただの修行場となるのだ。
「では始め！」
小竜姫の合図で、白い髪の弓兵が、三人の少年へと襲いかかった。

「ま、こんなもんかな」
床に突っ伏している才人を見下ろし、緋色の袴もあざやかな栗毛の美少女は呟きを落とす。
「死なない程度の運はあるし、そこそこ剣術も仕込んで、お守りもあげたし」
にたあっ、とタチのよろしくない真言の笑みに、霜夏や伯言はおろか、アーチャーやリドルまでもがドン引きしている。
ひとり七季だけはにこにこと、いつかのチュニックと黒い外套を身につけていた。
じじじじじ、と音をたてるのは、運命のジッパー。
「行ってこーい！」
そぉい！というかけ声とともに、七季と才人が虚空の穴へと――ジッパーで開けられた――放り込まれる。
そして、主を追いかける弓兵と黒猫も、その中へと姿を消した。
「……本当に、こんなので次元移動できるのね……」
興味津々の表情で、ルビー色の目をかがやかせるプレシアと、その手を繋いだアリシアも、使い魔であるリニスと共に、「ていっ」とジッパーの中へとダイブした。
えらく思い切りのいいテスタロッサファミリーである。

「さーて、私も――」
がしっ。
「そうは」
「問屋が」
「卸さないんだなあ」
「にぇっ！？」
いそいそとジッパーのふちに足をかけていた真言は、後ろから羽交い絞めにされ、聞こえる声にくりんと振り向いた。
「み、ミカちゃん……？」
そこには、真言の左右の腕を拘束する霜夏と伯言の他に、彼女の首を捉えている、狩衣姿の青年――神門が仁王立ちしていた。
「お前はこの前、脱走したばかりだろうが！」
「いにゃあああ～！　書類みたくないよおぉ～！」
私も遊びに行くんだーい！とジタバタしている少女の、幼なじみである守銭奴神主は、頑としてそれを許さなかった。
「却下だ却下！　まだ三蔵が使い物にならねーんだ。キッチリ仕事してもらうからな！」
黒髪の青年は、そう言いつつ、「柱」の巫女である真言を、ずるずる引きずっていった。
少年ふたりが、その後を追いかける。最大のストッパーである七季がいない以上、真言の見張り役は多いに越したことはないのだ。
「それでは小竜姫さま」
「失礼しました。また来ますね」
「ええ。お待ちしています」
ぺこりと頭を下げる霜夏と伯言たちへ、手を振って、神門神社ご一行を見送る赤毛の美少女竜神族。
そうそう入門者や修行者が来るわけでもないので、コンスタントにこの修行場を利用する彼らは、小竜姫にとっても親しい間柄だ。
ゆえに、この光景も見慣れたもの。
彼らが移動用の陣に乗って、ふたたび下界へ降りるのを、彼女は

穏やかに見守っていた。

＃４８　始まらない物語ー彼女の思惑ー（後書き）

あとがき

＞閑話的な話で、今回は内容が薄かったと思います。申し訳ない。

ふたたびオリ主一行と、テスタロッサ家、才人がゼロ魔世界に戻ります。

あちらの時間軸としては、十分くらいしか立っていない時軸です（本文で書くべき）。

＃４９　始まらない物語ー与えられた使い魔ー（前書き）

まえがき
＞今回はルイズアンチ的な傾向があります。
お嫌な方はブラウザバックぷりーず。

＃４９　始まらない物語―与えられた使い魔―

「我が名はアリシア＝テスタロッサ。
五つの力を司る五角形（ペンタゴン）。我の運命に従いし？使い魔？を召喚せよ」
夜の中、ぼうっと浮かび上がる、青みがかった銀色の鏡。
やがて、その不思議な鏡は、一つの姿を吐き出す。
長い耳と、白い毛皮のそれは、どこからどう見ても、愛くるしいウサギに他ならなかった。

話は一時間前までさかのぼる。
「……お話はわかりました。では、ひとつ取引をいたしましょう」
トリステイン魔法学院の学生寮に戻ってきた七季たちは、幸いにも脱走を気づかれることなく、何食わぬ顔をして夕食を済ませた。
広間のような食堂で、どこかの少女が物凄い目で睨みつけてきたが、七季をはじめとする異世界トリップご一行はガン無視である。
その後は、オールド・オスマンとコルベール、そして他の教師全員を交えての会談となっていた。
学院長室では手狭な感が否めないため、会議室に防音の魔法をかけての話し合いを設けている。
もっとも、家具が氷結した学院長室は、コルベールたちにとっても、かるいトラウマを刻んでいるので、場所を変えることでの気分転換を必要とした、ともいえる。
どうも、七季が静かに静かにキレたときの、あたりが氷結した反応を見て、オールド・オスマンは「こりゃいかん」と思ったらしい。
あわてて警戒を引き上げて、援軍を呼んだというところだろうか。

「取引とは？」

白いひげをしごく、老魔法使い（メイジ）は、飄々としているように見えて、その額には汗が浮かんでいる。

なにしろ、一度は相手を――いま交渉役を務めている七季を、これでもかと怒らせているのだ。またいつキレるのかと、ないしん恐々とするのも、むべなるかな。

先の一件で、コルベールとオールド・オスマンは、この黒髪の少女が、ある程度までは感情を押し隠すことができるうえ、そのぶん堪忍袋の緒を切ったが最後、それはそれは冷ややかに激しく怒るのだと理解していた。

「問題は、ここにいないミス・ヴァリエールの、使い魔となるべき存在がいない、ということなのでしょう？

あなたがたも、彼女も、『平賀君』にこだわっているわけではない。でしたら、代わりの使い魔を用立てれば良いだけの話です」

「そう上手くはいかんから困っておるのじゃ。幻獣を手懐けるのは容易なことではないし、ただの獣では、使い魔としての用をなさん。お嬢さんは、優れた使い魔を従えているようじゃが……心当たりがあるのかね？」

ちらり、とオールド・オスマンは、白い眉に隠れそうになっている目を、七季の背後に控えている偉丈夫へと向けた。

人型の使い魔など、このハルケギニアでは聞いたことがないが、あれほどの戦士が従者となるのなら、じゅうぶんにルイズとヴァリエール家は満足するだろう、と思いを馳せる。

「なければ、こちらから申し出たりはしませんよ。

ああ、言っておきますが、私とアーチャーたちは、死後までも共に道を同じくすると誓った間柄です。

たとえ私の命を絶たれようとも、他人に差し出すことはありませんので、覚え置きくださいね」

にっこりと、作った笑顔で釘を刺す少女のまっくろな目は、笑っていない。

まだ懲りずに人の使い魔に手を出そうなどと、考える方が悪いのである。

「そ、そうかね……うむ。使い魔のアテがあるのなら、それは喜ばしいことじゃが……ミス・ヴァリエールが気に入るかのう？」

「おかしなことをおっしゃるんですね。

聞いたお話によると、使い魔の選定は、まったくの運任せ。きがるに店先の商品を選ぶような、選り好みはできない。だからこそ神聖なのだと聞いた気がしますけれど」

頬に手を当てて、不思議そうに、隣に座るアリシアと――正確には、プレシアの膝上に座っているのだが――「ねぇ？」と顔を見合わせる七季。

ちなみにリニスは、アーチャーと同じように、プレシアたちの背後に立って控えている。前回の会談時、七季の隣に座っていて受けたプレッシャーが、まだ若干トラウマになっているらしい。

野性の本能とは、基本的に強者を恐れるようにできているのだ。

「う、む……それはそうじゃが……」

「もちろん、これは取引ですから、ある程度、そちらの要望に沿った使い魔を用意しますけれど」

「おお！」

その老いた面（おもて）に喜色を浮かべる学院長をよそに、他の教師たちは、うさんくさげな表情を浮かべていた。

彼らの常識では、「使い魔」というのは、一人にひとつきりのもの。

それを用意できる、というのが、これまた彼らの半分も生きていないような少女ときては、無理もない。

「そうですね。こちらの想定する使い魔の性質としては、

・主に従順である。
・主の役に立つ。
・主の世話をする。

・主の身を守る。

こんなところでしょうか？

他に条件があれば、考慮しますけれど。あまり無理を言われても困りますよ」

「うむ、それで十分じゃ。して、そちらの条件とは……？」

心配そうに問いかけるオールド・オスマンへ、七季は薄い笑みを浮かべて、その「条件」を切り出した。

ルイズの使い魔を提供する見返りに、トリステイン魔法学院に通う生徒となった七季たちは、この地で「使い魔」を召喚する権利をも得た。

特に喜んだのが、アリシアである。

身のうちに膨大な魔力を抱える母親と違い、管理世界ではEランクと判を押された幼子（おさなご）は、自らの魔力を使って従者を生み出すことができないでいた。

しかし、ハルケギニアの「使い魔」は、基本的に生物を召喚するもの。もしくは精霊の場合もあるが、それは独立した「いきもの」としての存在である。

したがって、使い魔の維持に魔力を費やす必要はなく、パートナーを手に入れることができる。

成功するかどうかは賭けではあったが……めでたくアリシアは、可愛らしい使い魔と契約することができた。

「我が名はアリシア＝テスタロッサ。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」

キスを落とされた白ウサギは、くすぐったそうに身じろぎをした後、こう口を聞いた。

『よろしく。可愛らしいご主人様』

使い魔とおそろいのルビーアイを、まんまるにした金髪の幼女は、きゃあっと歓声を上げて飛び跳ねる。
愛らしいだけでなく、会話もできる使い魔に、ますますアリシアは喜んでいた。
夜目にも目立つ白い毛皮のウサギも、出会った主に懐いているようで、いっしょにぴょんぴょこ跳ねている。
「じゃあ、次はプレシアな」
コルベールが監視を兼ねて見守る中、七季はダークヘアの女性に振り返った。
「でも、私にはリニスがいるし、いまでも十分なのだけど」
召喚したばかりのウサギと、元気にジャレている愛娘を、ひたすら微笑ましげに見守るプレシアは、母性にあふれていっそう美しい。
女っけのないコルベールも、思わず見とれるほどだが、横からリニスの冷ややかな視線を受けて、あわてつつ背筋を伸ばしていた。
「一生モノだしねぇ……ま、そう軽々しく召喚するわけにもいかないか。それにアリシアみたく、ふつうの使い魔が出るとは限らないし」
むう、と七季が腕を組めば。
「飼い主……もとい、マスターに似るのだったか」
アーチャーが「それは危険かもな」と納得顔で頷く。
「放電する生き物……電気ウナギとか？」
器用にバランスを取って、七季の肩に乗っている、黒猫姿のリドルが、真顔――もとい、真剣な声で候補を挙げた。
「ちょっとリドル。こちらに来てＯＨＡＮＡＳＨＩしましょうか？」
ぱちっと夜の大気に、紫電をまとう指先がきらめく。
あたりはランプと魔法の明かりで照らされてはいたが、それでも現代日本のように、圧倒的な闇を退けるにはいたらない。
「いやいや、ウナギならまだ良いけど。ドラゴンとか出そうじゃない？」
雷の属性を持っているプレシアなら、その使い魔も、似通った性

質を持つかもしれないと、七季が割って入る。
「ど、ドラゴンっ！？　アリなのかそれ！」
けっきょく、七季のはからいで、ハルケギニアにいる間は、彼女の従者あつかいとなった才人も、ファンタジーにつきものの幻獣には、わくわくが隠せない様子で話に乗ってくる。
「さすがに、そう大きなものを召喚ばれるとな……我々も地球に住んでいるのだし、連れて帰ったとき、養うのも一苦労ではないかね？　そうそう空を飛ばせてやることもできないのだ」
いっぽう魔術師であるアーチャーは、まじめに幻獣の飼育について忠告する。
「うーん。それ考えるとなぁ。私も、アーチャーとリドルがいるから、どうしても使い魔が必要ってわけでもないし。私も止めとくかな？」
生き物を飼うなら、責任を持って。
当然の常識である。
が、七季の言葉に、アーチャーやリドルはおろか、プレシアやリニスまでもが、ひそひそと話し合い始めた。
「ナナキが呼ぶとしたら何だと思う？」
「……まったく想像がつかんな」
むしろ、何でもありな気がしてしまうアーチャーたちである。
「七季ちゃんなら、黒猫とかじゃねーの？　あ、でもリドルいるしな」
ノリで才人も加わっている。一週間そこらの付き合いではあるが、もともと気の好い少年は、この一行にもすっかり溶け込んでいた。
「そういう問題でもないと思いますよ」
「ナナキの属性は水と風だった気がするけど……それこそドラゴンの可能性があるんじゃない？」
リニスもやんわりとツッコミ入れつつ、ないしん「ナナキだったらコワいもの呼びそう」とも思っていたり。
プレシアも使い魔と同意見のようで、自分が考えつく可能性を挙

げてみる。
そして。
「お姉ちゃんの使い魔……見てみたいなあ」
とっても素直で悪気のない――しかし、その場の人間の本音を代弁した――アリシアの一言が、夜の平原にぽつりと落ちた。
どうする、七季っ!?

同じころ。トリステイン魔法学院の、学院長室にて。
「これが……私の使い魔？」
ピンクブロンドの少女は、オールド・オスマンから、得られなかったはずの使い魔を与えられていた。
見たことのない生き物である。
否、生き物というには、その使い魔は、あまりにも「生きている」感じがしなかった。
まるで陶器のようなつるりとした、まっしろな体表。
シルエットは虎に似ていたが、頭部は、ともすれば人の顔にも見えるヒヒ。ネコ科のしなやかさを持つ胴体には、虎を思わせる黒縞が走っており、その四肢も太く鋭い爪が見え隠れしている。
きわめつけが、うねるしっぽだ。かぱりと開く先端からのぞく舌といい、牙といい、色こそ白いが、それは蛇にしか見えなかった。
もしもここに、アーチャーがいたのなら、これを「鵺（ぬえ）」と呼んだだろう。
古くは平家物語にも登場する、伝説の生物が「鵺（ぬえ）」。
しかしながら、ここにそれを知るものはいない。
そして、これが、ただその姿を真似ただけの、式神であることを知るものも、また。
「そうじゃ。わけあって、きょうから彼が、君の使い魔となる。主に従順で、君を守ってくれるじゃろう」

「そ、そうですか……」
見たこともない使い魔の姿に、しかしルイズはさっそく有頂天になっていた。
いままで同級生が召喚したことのない幻獣！
しかも、成体の虎に似た姿は、どこからどう見ても強そうで、守り手としても頼もしい。
そのうえルイズの前に、ちょこんと座るさまは、大きな図体にもかかわらず、彼女への従順を感じさせた。
これで、いままでさんざん彼女を馬鹿にしてきたものたちの、鼻を明かせるというものである。
「しかし、幾つかの注意事項もあるのでな、しっかり頭に入れて欲しいのじゃが……」
深刻な顔をした、学院長の注意も上の空で聞き流し、ルイズは、手に入れたばかりの使い魔を、どういうふうにあつかおうかと、あれこれ考え始めていた。

「ところでマスター。あれを与えて本当に大丈夫かね？」
「ああ。心配はいらないよ。あれは交渉用に先輩が作った式神だから。
先輩のだから、できは良いし、確かに見た目は強そうだけど。先輩の眷属である私を、決して傷つけることはできないよ。もし、私たちに害意のある命令を受けたら、その場で紙にもどってしまうようになってる」
「ならば良いのだが……」
「それにね」
心配そうに気を回す、長身の従者に向けて、黒髪の少女は朗らかに笑った。
「『鵺』っていうのは、元来、その声で鳴く得体の知れないものっ

てこと。中身（ゼロの）のないあの子にはお似合いの使い魔だろ？」

私なら、言うことを聞くだけの使い魔なんてゴメンだけれどね。

痛烈な皮肉を飛ばす七季に、側で聞いていたコルベールは何も言えず。

隣で主を見守る弓兵は、ただ穏やかに彼女の頭を撫でただけだった。

＃４９　始まらない物語－与えられた使い魔－（後書き）

あとがき

＞ほのぼので終わるかと思いきや、最後にアンチが入りました。

ええまあ、ぶっちゃけアリシアにも使い魔を持たせてあげたかっただけなんですが。

そして、プレシアとオリ主に、これ以上使い魔を持たせて良いものか迷いまして。

よろしければ、感想からでもご意見をいただけると嬉しいです。

いまのところ、オリ主に使い魔を持たせるのは、アリシアと同じウサギ程度にしようかと思っています。

ネタがないともいう（爆）。

◆ゼロ魔編の登場人物（前書き）

※いちおうルイズアンチ色があります、と注意書きしておきます。

◆ゼロ魔編の登場人物

◆平賀才人

ルイズによって、地球から異世界であるハルケギニアに召喚された高校生。

原作では、ルイズの「使い魔」となる運命だったが、オリ主たちと出会ったことで、使い魔契約（コントラクト・サーヴァント）から逃れた。

お調子者で物事をあまり深く考えない楽天主義。女の子には弱く、少年らしい意地っ張りさも見せる熱血漢。

ガンダールヴのルーンもなく、洗脳じみた暗示も受けていないため、いたってふつうの現代日本人。

トリステインに滞在する間は、一時的に七季の従者としての立場を取っている。

黒髪に黒い瞳。身長は１７２センチ。中肉中背。おっぱいは巨乳派。

◆ルイズ＝フランソワーズ＝ル＝ブラン＝ド＝ラ＝ヴァリエール

ゼロ魔のメインヒロインのはず……だが、才人を使い魔にしなかったことで、大きく運命が変わる貴族令嬢。

初対面でオリ主の使い魔・リドルを、自分の使い魔にしようとさらいかけて失敗。このことから、オリ主一行たちとの間に深い溝ができた。

可愛らしい外見とは裏腹に、気位とプライドは非常に高いうえ、短気で気難しく癇癪持ちという厄介極まりない性格。加えて泣き虫。

魔法がすべて爆発するという失敗ばかりのため、ひとつも魔法の使えない魔法使い（メイジ）という揶揄を込めて「ゼロのルイズ」という二つ名を持つ。

本人はそのことに対して、非常にコンプレックスを抱いている。

桃色がかったブロンドの長髪と鳶色の瞳。身長は１５３サント。小柄で華奢だが、スタイルの良い同性に対してコンプレックスがある。

「１６歳であれはない」との酷評もあり。

（２０１０／１２／１１／更新）

＃５０　ある日の煩悩少年ードキッ☆男だらけの夏休みー（前書き）

まえがき

＞今回は番外編につき、リリなのキャラおよびゼロ魔キャラは登場しません。

オリキャラとＧＳキャラのみです。

＃５０　ある日の煩悩少年ードキッ☆男だらけの夏休みー

「だからナナちゃんいねーのか」
神門（みかど）神社の社務所。
正確には、その奥にある、バックスペースで、赤いバンダナを額に巻いた茶髪の少年――横島忠夫は、アイスを片手に、同じ年頃の少年たちとしゃべっていた。
ただし、こちらは浅葱色の袴をはいた、霜夏と伯言である。
「そ。おかげで気の休まるヒマがなくって……」
しくしくとアイス片手に嘆くのは、まだ若いというのに、若白髪が目立つ少年・霜夏。端正な顔に、気疲れの影がにじんでいるが、それがまた憂い顔に見えると、参拝客の若い女性に大人気だったりする。
「隙を見ては先輩が脱走を図るし、あのひとがいないと神門（みかど）さんは暴走するし……七季がいないと癒しがないんですよ、癒しがっ！」
そのジャニーズ顔に似つかわしくない雄々しさで、ガルルと吼えているのは、つややかな栗毛に、涼しげな目元の伯言。ただしこちらはこちらで、紅茶色の双眸がストレスのためか、いささか険を帯びている。
こちらは、ふだんの秀麗な美貌にワイルドさが加わったと、女性からの黄色い声がかしましい。
「お前ら参拝客のねーちゃんに囲まれてウハウハじゃねーか」
チクショー、リア充が！と呪いの言葉を吐きながら、ぼりぼりアイスをかじる横島少年。
そういう彼は、人のよさも手伝って、話しやすそうに見えるため、黙っていればそれなりなのだが、いかんせん自分に正直すぎるきらいがある。

素直といえば素直なのだが、欲望を人前で吐露してしまう時点でアウトだろう。特に女性にとっては。

それでも母性本能をくすぐるタイプなので、付き合いが長い相手ならば、ちらほらフラグを立てているのだが――悲しいかな、それに気づけるほどの経験値は、まだない。

いっぽう、ただいま横島としゃべっている少年ふたりはといえば、まごうことなきイケメンである。

純朴さと誠実さをかけあわせたような、爽やかスポーツ少年と、ちょっと育ちの良さそうな色気と上品さを兼ね備えた、正統派美少年。

「僕ら、あーいう押しの強い人たちって苦手で……」

若白髪の少年がためいきをつけば。

「仕事ですから、営業スマイルくらいはしますけどね」

栗毛の少年が、目つきを険しくして、かるく頭を振った。

「化粧がケバくて香水臭い人とか、下着なんだか普段着なんだかわからない格好で、前面に『女』を押しつけてくる人とか……正直なところ、女性不信の上塗りをするだけですよ。勘弁して欲しいです」

イケメン二人の、本気でうんざりした顔に、さすがの煩悩少年もちょっと同情したらしく、憐れみを含んだまなざしを投げた。

横島にとっては、ときめきや憧れや煩悩の対象になる女性たちが、彼らにとっては百八十度も違う存在になるらしい。

「難儀なやっちゃなー」

霜夏も伯言も、成績優秀、スポーツ万能、そのうえ人望もあると、五段階評価でオール5の男たちだが、「女性不信」は本物で。

彼らが本当に心を許している、年頃の少女というのは、幼なじみの七季くらい。

この年齢にして、女のコワさを知っているというのも、なかなか不憫なものである。

「幼なじみが死にかけたんですよ？

トラウマになって当たり前でしょう」

一部には美少女顔、とも揶揄される伯言が、これぱかりは吐き捨てるように言う。

それというのも。

その昔――まだ、彼らが一様に幼い、小学生のころ。

既にこの時分からモテていた、霜夏と伯言は、バレンタインデーに大量のチョコをもらっていた。

通常、女の子というのは、同い年の男の子よりもマセているもので、少女マンガなどの情報から、恋愛がらみに関するイベントに熱心だ。

そんなわけで、このころから美少年の片鱗をのぞかせていた、優しく成績もいい男の子は、そんなアピールを受けていたのだが。

『いっぱいもらったねぇ』

恋愛に興味のない幼なじみの女の子・七季はというと、義理チョコのつもりか、チロルチョコをひとつずつ、伯言と霜夏に渡して、二人の戦果を、しげしげと眺めていた。

『遠慮したんですけど……』

『いつのまにか机に突っ込まれてたりして……』

七季の影響で、女の子にも親切なふたりは、強く断ることができずに押し切られてしまったのだ。

その優しさが、まだ彼女たちの人気を呼ぶ理由の一つなのだが、いかんせん、伯言も霜夏も幼い。よく知らない相手から物をもらうことに、喜ぶよりも困惑を深めている。

『ぜんぶ食べるの？』

『いや……』

『さすがにそれは……』

で。

まあ、ここまではよくあるパターンで、彼らからチョコを「おすそわけ」してもらった七季が。

『ナナっ？　ナナ――！』

『しんじゃだめです七季――！』

泡を噴いて倒れ、そのまま緊急入院したのである。

原因は、女の子の「手作りチョコ」。

どこかの雑誌に書いてある「おまじない」とやらのレシピで、コロンだの何だの、アヤしげなものを混入されたチョコレートは、まだ幼い女の子を重態に追い込むほどの威力だった。

以来、「女性からの贈り物」や「バレンタインのチョコレート」に、少年たちが過剰反応するようになったのは、いうまでもない。

「女の子こわい」とトラウマを刻んだのも。

ちなみに、この「あくまのチョコレート」事件をきっかけに、七季は、他人からバレンタインデーにチョコレートをもらうことを、一切禁止された。

他ならぬ幼なじみたちが、泣きながら凄い形相で「チョコレートが食べたいなら僕たちがあげますからっ！」と詰め寄ったため、いかな食い意地の張った彼女も、頷くしかなかったともいう。

それから現在に至るまで、その約束は続いており、毎年バレンタインデーになると、伯言と霜夏は、幼なじみの少女にチョコレートを献上するのがならわしとなっている。

それをふつうに美味しく食べるのだから、七季も、意外と図太い性格と胃袋であるといえよう。

「それで自分から料理をしようと思い立つ、お前らも凄いけどなー」

バレンタインに献上するチョコレートというのも、たいてい二人の少年の手作りだという話は、七季から聞いて横島も知っている。

おかげで、栄養失調ぎみの横島にも、たまに「味見」と称して、彼らからの差し入れがきたりする。

さらに余談だが、バレンタインデー以外の七季は、ふつうにチョコ菓子も食べている。彼女の食に対する情熱は、推して知るべし。

七季いわく「食べ物に罪はない」だそうだ。

ただし、その一件で、彼女は刺激物に過剰反応するようになり、

極端に苦いもの、辛いもの、酸っぱいものへの苦手意識を覚えるようになったという。

「まあ、たしかにナナちゃんは癒しだわ」

基本、懐いた相手には無防備で、スキンシップ過剰ぎみの少女は、横島にも出会いがしらにハグをしてくる貴重な存在だ。

しかも巨乳である。

ぼいんぼいん、たゆんたゆんのおっぱいは、お年頃の煩悩少年にとって、貴重なエロス補給分に他ならない。

もっとも、オープンスケベなわりに、正面から無邪気に懐いてくれる相手には、いかがわしいことをできない、フェミニストな横島である。

彼にとっては、女の子でありながら小動物、といったカテゴリにくくられるだろう。少なくとも美神のように、襲いかかりたい相手ではない。

横島がアクションを起こさずとも、ごろごろ懐いてくれるので、気兼ねなく「女の子」のやわらかさを堪能することのできるあたり、ぬいぐるみに近い。

抱きしめて癒される、というアレである。

七季と同じ行動を取る人間に、先輩の真言も当てはまるのだが――こちらは、ことあるごとに横島を雇いたいと、ヘッドハンティングじみた言動をしてくれるため、彼の雇い主である美神との仲が（一方的に）よろしくない。

横島的には、ちょっと心臓に悪い相手だ。

それでも、GS（ゴーストスイーパー）である美神令子と、真言の交流が続いている原因の一つが――

「先輩ダレてるから、もうしばらくはかかると思うよ」

若白髪の少年が、腕時計をチラリと見て「時間は平気？」と横島に尋ねた。

霜夏は、横島の敵であるイケメンだが、悪い人間ではない。むしろ、料理上手で男気もあり、いまも夏休みの課題を写させてくれる

くらい親切だったりする。
伯言の方も、広い武家屋敷に一人暮らしという環境なので、たまに友人のよしみで集まっては、泊まったりダベったりと快適なスペースを提供してくれる間柄。
そこに幼なじみの少女を交えることもしばしばで、そうなると手料理も出てくる好待遇。
横島も、この神社でアルバイトをしている彼らとは、同業者じみた意識があるから、二人と友達づきあいをして、それなりの関係を築いている。
「おう。そこんとこは美神さんも織り込み済みだからな。真言さんが札を書き上げるまで、気長に待たせてもらうわ」
カリカリとシャープペンを走らせながら、横島も苦笑を浮かべる。
この神社の巫女であり、帝都心霊庁の切り札ともいわしめる真言は、強力な破魔札（はまふだ）や霊符を作ることに長けている。
本人が単純作業を嫌うため、あまり多くは作られないが、オカルト関係の商品をあつかう厄珍堂などでは、一枚一千万から、上は億越えの値段がつく人気商品として販売されているシロモノで。
だが、そんな札を、時折ではあるが、真言は美神への謝礼代わりに渡すことがある。
それが、仕事の手伝いを頼んだり、美神の事務所で働く横島を、一時的に借り受ける際の、報酬なのである。
元手は二、三千円そこらと、末端価格に比べればタダ同然なので、美神は真言に強く出ることができないという力関係にある。
そんなわけだから、美神の事務所に勤める丁稚（でっち）・横島は、きょうもきょうとて、お使いにやってきたのだった。
「まあナナちゃんというおっぱい（いやし）はないが、クーラーに当たりながら、課題を片付けられるだけ、ありがたいと思うか」
『あ、あのひとに手を出したらもぐ（もぎます）からね』
「お前らイケメンのくせして余裕ないな！」
こえええぇ！

にこやかに言ってのける霜夏と伯言にツッコミつつ、額にバンダナを巻いた少年は、「だからイケメンなのに、こいつら親近感があるんだよなー」とひとりごちた。

こんな彼らは、しっかり友人である。

仲良きことは、美しきかな?

＃５０　ある日の煩悩少年ードキッ☆男だらけの夏休みー（後書き）

あとがき

＞突発的に横島君を出したくなったので書いてみた。かっとしてやった。

タイトルともども反省はしていない（をい）。

使い魔についてのアイデアを、もう少しうかがってみたいなー、と思ったので、番外編をつっこんで先延ばしにしてみる駄目な書き手です。

いや、思いのほか面白くて。

ちなみに書き手の脳内に上がった候補には、横島君もいました。

アシュタロス戦の後の時軸なので、ふつうに文殊が使えるチートキャラだし。

＃５１　ＩＦ－始まらない物語－そのネズミ、危険につき－

「ピカ？」
赤いほっぺに黄色いボディ。ジグザグしっぽに、長い耳。
「どう見てもピカチュウです、本当にありがとうございました」
プレシアが召喚した使い魔に、七季は思わずリドルと顔を見合わせていた。そこ隣では、アーチャーが「モンスターボールなしでも休めるのだろうか……」と、ズレた呟きを洩らしている。
「たしかにっ、たしかに電気出すけどさ！」
「電気ネズミだもんな、俗称」
才人まで七季の肩を叩いて、うんうん頷いている。
「かわいい～っ！」
いっぽうアリシアは、母親が召喚んだ使い魔の愛らしさに、弾んだ声を上げ、金髪幼女の使い魔である白ウサギのライバル心を煽っている。
『同じげっ歯類として負けられませんっ』
とか、にぎり拳作っちゃってるし。
どうでもいいが、アリシアの使い魔君、思いのほか知性が高いというか、人間くさいというか。
ウサギが「げっ歯類」を自称しちゃうってどうなんだ。
ひとり大人しいリニスはというと――
「げ」
「お、落ち着いてリニスっ」
大きさは違えど、ネズミ的な生物を、本能で「獲物」と認識しているのか、群青色の目が、やたらめったらギラギラしている。チュニックの下に隠されているしっぽも、心なしかパタパタ動いているようで。

「ピッ？　ピカピッ！」
こちらも野生的な本能で気づいたのか、まだ契約を済ませていない黄色いネズミなポケモン（仮）は、リニスを認めて、ぱりぱりと頬袋に電気を溜め始めた。
「ま、待てピカチュウ！　この人は敵じゃないぞ！」
「ピィィカチュ――！」
ばりばりりぃ！
女性の姿をしているリニスをかばうため、飛び出した才人は――哀れ、電撃の餌食となり。
こんがり焼けた才人を前に、プレシアと電気ネズミな使い魔との一騎打ち――もとい、ＯＨＡＮＡＳＨＩが始まったとか、始まらないとか。

＃５１　ＩＦ―始まらない物語―そのネズミ、危険につき―（後書き）

あとがき

＞ちょっと時間があったので、いただいたネタからＩＦ小話を書いてみた。

　本当のネタはオリ主の使い魔として、だったんですが、まだ決めかねているので、あえてこっちでやらかしました。

　追記

：感想から「ウサギは《げっ歯類》ではなく《重歯目》」というツッコミをいただきましたが、ネタです。ご了承のうえスルーしてください。

#52　始まらない物語ー彼の使い魔？ー

「ならいっそ、アーチャーたちが使い魔を召喚するっていうのは？」
『は？』

そんな七季の提案で、英霊化した魔術師（固有結界持ち）と、闇の魔法使い（プレ）は、サモン・サーヴァントを試してみることになった。

アーチャーもリドルも、理論や術式基盤が違うとはいえ、魔道の徒。

管理世界で魔力Eランクのアリシアが使い魔をゲットできたのだから、成功する確率は、それなりに高いはずだ。

「まあアレだ。一生モノの契約（おしごと）なんだし。呼び出してから、職場環境というか、契約内容をお互い話し合って、折り合いがつかないようなら、お帰り願うというのはどうだろう」

バイトの面接みたく。

「……それはちょっと身勝手ではないかね？」

黒髪の少女のアイデアに、生真面目な弓兵が渋い顔をするが、七季もふるふるかぶりを振る。

「んにゃんにゃ。呼び出したから即契約、っていう方が問題だと思うよ。

だって一生のお付き合いだよ？

契約したら、主にだって、使い魔を養う義務があるんだもん。ちゃんとした環境を用意できるかどうか、最低限、確認くらいはするべきじゃないかな。

養えもしないのに、身柄を引き受ける方が身勝手というか……無責任だと思う」

まあ、召喚をしなければ、考える必要もないのだが、仮に使い魔を呼び出した場合は、七季の言い分も間違っていないだろう。

トリステイン魔法学院の生徒と違って、彼らは貴族ではないのだから。

もっとも、トリステインの貴族もピンキリで、必ずしも経済状態が良いとは限らないのは――幸か不幸か、七季たちの知るところではない。

「しかし、必ずしも意思疎通できる相手とは限らないだろう？」

「ふつうの動物や幻獣なら、リドルが通訳できるよ」

（念話もあるし）

こそり、とコルベールにはわからないように付け加えられた念話からのセリフで、はた、と弓兵も頷いた。

「……なるほど」

てなわけで。

「五つの力を司る五角形（ペンタゴン）。我の運命に従いし？使い魔？を召喚せよ」

真名の詠唱は、低く小声で行ったアーチャーは、使い慣れた双剣を儀仗にサモン・サーヴァントに臨（のぞ）む。

召喚の儀は、彼が知るものに比べて簡素だ。

錬鉄の英霊。

剣製の魔術師。

そう呼ばれた「剣」の属性たる男が呼び出すモノ。

アーチャーじしん、期待がないといったら嘘になるだろう。

そして――

銀色――否、それは白銀色の体躯を持っていた。
ぽこりと膨らんだ中央部分には二つの目と笑みを象った口。まるで目玉焼きのようなシルエット。
ぽわぽわっと同色の泡めいたものを宙に揺らめかせ、地面にわだかまる姿は、溶けかけのアイスにも似ているだろうか。ただし銀色。食べたら危険系な色合いである。
どこか見るものを和ませる、まん丸な目は、この場にいるものの多くが良く知っているものであった――
『どう見てもはぐれメタルです、本当にありがとうございました』
日本人である少年少女、そして日本文化に毒されきった黒猫姿の魔法使いが口をそろえてネタに走った。
「『はぐれ』ってところしか合ってない気がするんだが……」
ちょっと落ち込んだ白い髪の偉丈夫は、いちおうはアウトサイダーだった自覚があるらしく、ＯＲＴ状態でひとりごちる。
「それともあれか。どこまでいっても雑魚は雑魚と、そういうことか……」
まあ「スライム」といえば雑魚モンスターの代名詞だが。
「い、いや、アーチャーさん。はぐメタ（＝はぐれメタルの略称）は雑魚だけど、メタルスライムの約十倍の経験値あるし！」
物凄く珍しいじゃないですか！
元来お人よしの才人は、一生懸命にフォローしようとするのだが、「雑魚だけど」で追い討ちをかけていることに気づいていない。
と。
「あら？　増えたのかしら」
プレシアがモンスターの異変に気づいた。
はぐれメタルと思っていた、白銀色のスライムが、数を増やして、不定形ながら、意外と機敏にぴょんぴょん跳ね動き――いつのまにやら、七季の腕や肩、頭などに懐いていたのだ。
「……ナナキと仲良しなところも似てるんじゃない？」

「いや、危険がないのなら良いんだが。召喚者よりも七季に懐いている時点で、ダメなんじゃないだろうか」
ＯＲＴ状態からは脱したものの、まだしょげたように眉尻を下げている精悍な男は、ちょっと女性にとって可愛らしく映る。
ために、七季は使い魔を慰めがてら、アーチャーにがばりと抱きついて、「よしよし」と背中を撫でた。
「可愛くていーじゃないか。私は好きだぞ？」
ぎゅーっとハグする少女に、少しおたつきながらも、表情を緩める褐色の肌の男。
「そうかね」
しかし、まだ契約もしていないスライムたちは、どういうわけか、こぞって黒髪の少女に引っついていた。しかも一匹や二匹ではない。
「ひい、ふう、みい……まさかっ！」
スライムを数えた才人が、ぎょっとした顔で驚くのと、夜闇の中に、ぱあっと白銀色の光が生まれるのとは、同時だった。
ぼよよん。
そんな、ちょっと間の抜けた音と共に、八匹のスライムは、誇らしげに王冠をいただく、でっかいメタルキングと化して、七季を上に乗っけていた。
「いや……うん。ナナキは魔物系に好かれるからね……」
これ以上、どうコメントしていいものやら、言葉を捜しあぐねたリドルは、ぽよんぽよんのメタルキングに乗っけられて、きゃあきゃあはしゃいでいる、黒髪の少女を眺めるしかなかったという。

＃５２　始まらない物語ー彼の使い魔？ー（後書き）

あとがき

＞きのうは疲れて更新できなかったので、いただいたネタから小話的に上げてみる。

オリ主ではなく、弓兵の使い魔ですが。

アチャに「『はぐれ』ってところしか合ってない気がするんだが……」って言わせてみたかっただけの話（待て）。

メタルキングは本来、メタルスライムの合体ですし。そのへんはご都合主義なので、お見逃しください。

ちなみにメタルキングはキングサイズのベッドくらいの大きさという設定。キングだけに。

契約するかどうかは決めてないので、あえて書かずにゴー。

＃５３　始まらない物語ー彼？の生態ー（前書き）

まえがき

＞今回のネタは一部捏造がありますので、了承のうえスルーしてください。

#53　始まらない物語ー彼？の生態ー

「さて、契約するかどうかだが」
アーチャーは腕組みしたまま、七季を乗っけて、ぽよんぽよん揺れている白銀色の巨大スライムを見上げていた。
とりあえず、二メートル近い身長の男よりも、目線が高い位置にあることは確実であるが、まだ契約を済ませてもいないのに、人懐っこいことこのうえない。
気がつけば、アリシアまでが七季と一緒になって乗っかっている。
「先に衣……はともかくとして、食住について聞いた方が良いと思う、これ」
見た目からじゃ、何を食べるのかわかりにくいし。
目線が合わないせいで、アーチャーの肩によじ登ってきた、黒猫姿のリドルが提案すれば。
「だね。んじゃ、何を食べるのか教えてくれる？　好物とかもあったら、それも」
すとんと、滑らかな肉まんフォルムのモンスターから滑り降りた七季も、メタルキングを見上げて問いかける。同時に念話の回線を繋ぐ。
＜いし　たべる。みず　のむ。　……こうぶつ？　こうぶつ　まりょく　ななき＞
と、思いがけない返答がよこされて、黒髪の少女が目を丸くした。
はたで見ていたコルベールは、何故、彼女たちが話が通じているように会話するのかがわからず、首をひねっている。
「私っ！？」
＜こうぶつ。すきなもの。ちがう？＞
ほよーん、と悪気なさげな感じで伝わってくる意思に、七季は、

目を吊り上げた従者たちを押さえつつ、さらに突っ込んだ質問を投げた。
「おーけー、アーチャー、リドル、落ち着こうか。えーっと、それは私の肉とかではなく？」
＜ななき　たべない＞
「よし、食人ではないと確認。だから落ち着け二人とも！」
横から白髪の男に抱きついて、殺気立っていたアーチャーとリドルをなだめる少女。
いっぽうダークヘアのママさん魔導師は、念話の回線を繋いではいないものの、不穏な空気を察したらしく。
「アリシア。ちょっとそこ危ないから降りてらっしゃい」
と、ちゃっかり娘を避難させにかかっている。わりとシビアだ。
「はーい」
素直な返事をした金髪幼女は、つるんと巨大スライムから滑り降り、カフェオレ色の髪をした癒し系山猫娘に、無事キャッチされた。
＜あーちゃー　りどる　も　ななき　こうぶつ？＞
かたや、弓兵を含んだ主従は、なおも念話と肉声での会話を続けている。
「うん、それは誤解を招く言い回しだから気をつけような。えーと。よーするに、石を食べて、水を飲むのが常食。んで、好物は鉱物と魔力、と」
黒髪の少女は、打神鞭バージョンなデバイス「ノア」を片手に、ふむふむ頷いていた。赤い外套をまとうアーチャーも、何とか落ち着きを取り戻し、七季の方へ渡りたがる黒猫の橋渡しをしてやる。
「あ、二度目の『こうぶつ』はそっちなわけ」
無事、するんと少女の胸に収まったリドルは、まっくろな三角耳をぴるぴる動かしながら、声を上げた。
「石を食べるなら、経済的ではあるか……鉱物が好きなのは、やはり『メタル』だからかね」
アーチャーも、主夫的な言葉を洩らしつつ、自分なりの感想を呟

く。
「魔力……魔力ねぇ……」
ぴっ。
と、でっかい肉まんフォルムなモンスターを見上げていた七季は、ふと思いついて、指先を軽く魔力刃で切ってみた。
基本的に攻撃には向かない能力ばかりの彼女だが、デバイス「ノア」を用いれば、こういった使い方もできるのだ。
「マスター、何を」
「はい、あーん」
アーチャーが止めるよりも、七季が傷ついた指先を、モンスターの口に突っ込む方が早かった。ためらいもなく魔物の口に、一部とはいえ、自分の肉体を突っ込むなど、ある意味、えらい度胸である。
＜あーん＞
ぱくり。
と。
でっかいメタルキング口は、それ以上、小柄な少女を飲み込むでもなく、その指先をちょっぴりくわえただけで――そこから滴る血潮を口にした。
とたん。
ぱああっ、と夜闇の中に、ふたたび白銀の光が生まれた。
その眩しさにコルベールが身構え、杖先を向ける。アーチャーはすかさず七季を抱えて飛びすさり、リニスもアリシアとプレシアを抱いて退避した。
「ひえええっ」
才人はといえば、自力でダッシュである。弓兵に鍛えられた経験は、一週間たらずとはいえ、ダテではなかったらしい。
「!?」
しかし、光が収まった先には、先ほどと何ら変わらぬ光景が――ただ巨大なモンスターの姿があるばかり。
＜れべるあっぷ　した＞

ただし、メタルキングの念話を聞き取った三人は――否、一人と一匹は――思いがけない言葉に仰天した。

『何いぃぃ！？』

「あ、光ったのって、だからか」

ひとりマイペースな黒衣の少女だけが、アーチャーに抱きかかえられたまま、ぽむり、と納得したように「ノア」を握った拳と、空いた手のひらを打ち合わせる。

「君は落ち着きすぎだっ！」

そして苦労性の英霊は、七季ののんきさにツッコミを入れながら、ないしん頭を抱えるのだった。

夜はまだ終わらない。

#53　始まらない物語ー彼?の生態ー（後書き）

あとがき

＞今回も短いですが、ネタを思いついたので、区切りがいいところまで書いてみました。

メタルキングの設定捏造が甚だしい件について。

かっとしてやった。いまは公開している（つまり反省はしていないと）。

申し訳ない。しかし書いてて楽しかった。

うーむ話が進まない。

＃５４　始まらない物語ー邪神と雷獣ー

お次はリドルの召喚だったが……これがマズかった。

失敗したのかというと、ある意味では失敗だったし、成功といえば成功だったが、異世界トリップご一行は、総出でその召喚をキャンセルすることに奮闘した。

何故ならば。

召喚（よ）ばれたものが――えらくヤバげな――どうも邪神・ヨグ＝ソトホートっぽい、うねうねしたものだったので。

サモン・サーヴァントの鏡が出るなり、やおら叫んだ七季の直感によって、プレシアの雷撃魔法、アーチャーのカラドボルクから壊（ブロ）れた幻想（ークン・ファンタズム）のコンボを連打でかまし。

その隙に、七季とリドルで空間に霊的な干渉して、召喚の扉を壊したのだ。

ちなみに才人はというと、メタルキングを盾代わりに、いちばんか弱いアリシアを守るため、リニスと二人で後衛を引き受けていた。

「……はーっ、はあっ……」

「あ……ある意味、リドルが一番のアタリだったのかな……？」

「こんなアタリはいらない……っ！」

宝具の連打という、なかなかのムチャっぷりをかまして、さすがに息が上がっているアーチャーと、何気にまだ余裕がありそうな軽口を叩く七季。そしてその場の人間の思いを代表するセリフを吐き出すリドル。

コルベールは何をしていたかというと、召喚の扉から、触手っぽ

いものが出てきた時点で、邪気にアテられたらしく、そのへんで目を回している。
「な……何だったのかしら、あれ……」
「やー……たぶん、宇宙的な邪神さまっぽい？」
プレシアは、アリシア可愛さに邪神に歯向かうだけの精神力を使い果たしたせいか、いまやリニスと一緒に、ぷるぷる震えながら愛娘を抱きしめている。
テスタロッサ主従、ちょっぴり涙目な様子が可愛い。
才人はメタルキングに無言で懐いている。王冠をかぶった白銀色のモンスターは、これといって変わりがない。
「さー次行ってみよう！」
『やるのか（よ）、オイ！』
弓兵と少年、黒猫のツッコミがきれいにかぶって夜闇に響いた。

「何でえ。見知った気配がすると思ったら、『贄（にえ）の巫女』かよ」
プレシアの召喚で顔を出したもの――それは、鬣（たてがみ）と鋭い牙を持つ、黄金（きん）色の獣だった。
「とら――っ！」
ぼふっ。
とたん、それを目にするなり、黒髪の少女が「とら」と呼んだ大きな獣に飛びついてモフり始める。
「ちょ、七季ちゃん!?」
「マスター、何をっ！」
「……いや、あれ知り合いっぽいよ？」
驚く男二人に、冷静なリドルのツッコミが入る。
強靭な筋肉で構成された体躯を覆う、金の毛並みの妖獣――それは、かつて、獣の槍の担い手と共に、「白面（はくめん）の者」を討った大妖・とらであった。

「ったく。あいかわらずの恐いもの知らずだな、オメーはよ。やーらかそうな肉しやがって、食うぞコラ」
「にゃー」
長く鋭い爪を持った手――それは、前脚ではなく、人間のそれのように、器用に動く――で、ひょいと小柄な少女の襟首を、猫の子よろしくをつまみあげたとらは、呆れた声で周りを振り向く。
「で、こりゃどーゆーことよ？」

「ほーほー。よーするに、ニンゲンが式神だの護鬼だのを捕まえるために、こーゆー『扉』を開けてんのか」
かつて五百年も封じられていた大妖は、長生きしているだけあって、意外とオカルト事情に詳しかった。
「で？　わしを使おうってか？」
「とら」の名の通り、虎を思わせるくまどりと、鋭い牙が植わった口をニタアっと開き、とらは楽しげに人間たちを威嚇しつつからかった。
リニスなどは「ぴぃっ」と鳴いて飛び上がり、それでも使い魔の根性で、プレシアとアリシアを抱いて飛び退る。
だが、初対面のプレシアたちはともかく、知り合いの七季は怯みもしない。
「やー。さすがにそれはないわ。てか、とらがいなくなったら潮君が泣くぞ？　相棒はどしたよ」
「うっせーや。あのちびなら修行だとかって、親父に引きずられて山に行ってらぁ」
へん、と鼻を鳴らす雷獣に、七季は大きな目をぱちぱちと瞬く。
「……つまり、潮君いなくてヒマだったから、ちょっと顔を出してみた？」
「潮のちびはカンケーねえ！　ただまあ、ここんとこ退屈してたん

でな。よそで暴れるんなら、あのボケも文句ねーだろ」
あっちで暴れるとうるさくってよ、とぼやく大妖は、どこか拗ねたような声音で、首根っこを捕まえていた七季を地上に下ろした。
「あーうん。よーするにヒマ潰しに、ちょっと顔貸してくれると。じゃあ契約はナシだな。
プレシアー。いちおー護衛役にはついてくれるっぽいよー。それでいいー？」
七季の問いかけに、ダークヘアのママさん魔導師は、こくこく頷いた。
さっきの邪神なんたらよりは、ずっと威圧感がマシだし、こちらは曲がりなりにも言葉が通じるのだ。おまけに七季の知り合いらしいとくれば、否やはない。
ちなみにプレシアとリニスに抱かれているアリシアは、とらをふたたびモフっている姉代わりの少女を、羨ましそうに見つめている。意外と大物だ。
「けど、とら。あんま無差別に暴れてくれると困るよ？」
「へん。わしに指図するなんざ、五百年早いっての」
そういう大妖はしかし、小物には興味がないクチだ。自分に噛みつかれでもしない限りは。
だから七季は、それほど心配していないが。
「まあ格が違うしねぇ。
うーん……そーだ。アーチャーと手合わせってのでどう？
うちの使い魔さんたちは強いし、とらなら鍛錬相手にしても大丈夫そうだし」
「あん？
……使い魔ねえ。お前、いつのまにあんなの捕まえたよ？」
じろじろと赤い外套の男と、黒猫を眺め回す妖獣に、七季はへにゃんっと笑って、とらの腕に頬をすり寄せた。
「んー。その話は後でなー。で、とらはヒマ潰しに付き合ってくれるんでオケ？」

「はんぱっかよこすなら遊んでやらあ」

潮少年につきあって、ちょっとだけ丸くなった金の妖獣は、そんなセリフと共に、テスタロッサ親子の用心棒役を承諾したのだった。

＃５４　始まらない物語ー邪神と雷獣ー（後書き）

あとがき

＞いただいたネタからインスパイアして、リドルの使い魔（未遂）に邪神をチョイスしてみました。

いや、契約はさすがにしませんでしたが（笑）。

あとプレシアが呼び出した使い魔（未遂）で、「うしおととら」から「とら」。

雷獣だし。趣味満載でほんとすみません。

※ヨグ＝ソトホート

‥クトゥルフ神話に登場する架空の神性。

一部では超有名な宇宙レベルのヤバげな邪神さま。

今回は名前だけの登場になりました。

＃５５　始まらない物語ー朝飯前ー

「ふぁ……ぅふ」

ぱふ、とあくびを洩らす口元を手のひらで覆い、七季た一行は、メイドの案内で食堂へ向かっていた。

召喚の夜から翌朝である。

彼女のなで肩には、その黒髪を引き立てるかのごとくあざやかな、極彩色の羽根に彩られた鳥が一羽、品良く羽根を休めていた。

シームルグ。

それが七季の召喚した使い魔の種族だった。

イラン（もしくはペルシャ）神話に登場する神鳥で、セーンムルヴとも呼ばれる、学識豊かで人語を話す鳥――鳥類の王、と称される存在である。

五彩七色にゆらめく長い尾羽や、猛禽のようなくちばし、冠羽のきらめかしさ、金色に輝く体などが特徴として挙げられるだろう。

いまは体から放つ光を収めているため、それほどまぶしくはないものの、まるで孔雀やインコを思わせる羽根のあでやかさは、まさしく「鳥の王」というにふさわしい。

シルエットは、鷲と孔雀とインコを足して、いいとこ取りをした、と表現するとわかりやすいか。

足はやや長めだが、爪とくちばしは鋭く、雄々しさと優美さが同居するその姿は、生ける芸術品、といっても過言ではない。

幸いにも、最初から念話なしで言葉が通じたため、七季はシームルグ相手に事情を明かし、丁重にシームルグの意見を尋ねたのだが、

鳥の王様は男前に言い放ってくれたのだ。
「仕(つか)える気もない相手であれば、最初から召喚には応じぬ。そなたは一言、我に『許す』と言えば良いのだ」
――ええと、どこぞの麒麟さまを思い出したのは、私だけ？
某景国の「許すとおっしゃい」というセリフを脳裏に浮かべつつ、七季はおずおずとコントラクト・サーヴァントにおよんだ。
こうまで言われてお断りしようものなら、間違いなくこのプライド高そうな神鳥は暴れだしそうである。
「我が名は七地七季。五つの力を司る五角形(ペンタゴン)。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」
誓いのキスをくちばしに落とし、黒髪の少女は、孔雀ほどもある大きな神鳥に告げた。
「これより我らと道を共に歩むことを許します。あなたの望みはありますか？」
「願わくば、我が主より誉(ほま)れある名を賜(たま)わらんことを」
「……では『東風(こち)』と。よろしく、東風(こち)」
「うむ。よろしく頼むぞ、主殿(あるじどの)」
ちなみに、ここまでくれば勢いだからと、リニスが召喚した使い魔は、エコーというイタチそっくりな幻獣だった。
大きな青い目が可愛らしく、これまたアリシアがとても喜んだため、「これならふつうに養えるから」とプレシアの薦めもあって、リニスは契約を交わすことになった。
食べ物はイタチとあまり変わらないが、先住の魔法を使い、変身する能力があるらしいと、本人――もとい、エコーじしんの申告で明らかになった。

リドルと才人をのぞいて、全員が使い魔持ちになったものだから、いっきにパーティー数は二倍である。

なかなかの大所帯だった。
昨夜は、召喚が終わった後で、目を回していたコルベールを叩き起こし、部屋まで戻った後に、ちょっとした宴会をしていたので、夜更かししていた面々は、一様に眠そうなのである。
「マスター、足元に気をつけてくれ」
もっとも、英霊であるアーチャーに、そういった疲れは微塵もない。
きのう大盤振る舞いした魔力でさえ、七季に供給してもらえば問題ないのだから、とらと並んでピンシャンしている。
「ん……ありがと」
男の手に引かれて、ぽてぽて歩く黒髪の少女の肩に乗るシームルグ・東風（こち）も、危なげなくバランスを取って静かに主と同行していた。
ちなみに彼（オスだった）は、きのうの宴会で、その素晴らしい歌声を披露してくれた芸達者である。
ほどなく、異世界トリップご一行がたどりついた広間は、驚きのざわめきが広がったが、眠たげな七季たちは、スルー全開で席に着いた。
そのまま朝食が始まるかと思いきや――聞き覚えのある声が、アルヴィーズの食堂に響き渡った。
「ちょっと！　何でアンタたちがこんなところにいるのよ！」
七季たちが朝食にありつくのは、まだ遠そうである。

＃５５　始まらない物語ー朝飯前ー（後書き）

あとがき

＞どうにか話を進める前まで行きました。短くてすみません。

つなぎなので内容が薄くなってしまいましたが（汗）。

＃５６　始まらない物語ー東から吹く風ー（前書き）

まえがき

＞今回はルイズアンチ的な傾向があります。お嫌な方はブラウザバックぷりーず。

#56　始まらない物語ー東から吹く風ー

――おなかすいた。ねむい。

そんなところへ、甲高い声を鼓膜からつっこまれた少女の機嫌は、すこぶるよろしくなかった。

ななめどころか底辺である。

既に七季の周囲では、ぱち、ぱちんっと微細な音が聞こえ始めている。

元の世界や、プレシアたちと住んでいた管理世界でなら、このような現象はなかったはずだ。

しかし、ここは精霊が多く住まうハルケギニア。

彼女から洩れた霊気に活性化した精霊の影響で、氷結した空気中の水分が、砕けては再結合するのを繰り返し始めているのだ。

ひごろ関心のないことには全力でスルー。揉め事めんどい、ケンカするより話し合え、が信条の七季だったが――空腹時の機嫌の悪さといったら、親兄弟はおろか、友人知人にいたるまで知っていることで。

マスターの不機嫌を悟ったインテリジェントデバイス「黎明」などは、勝手に起動しようかと、指輪の石を青く明滅させ始めている。

いうまでもなくアーチャーとリドルの使い魔コンビは、アイコンタクトで対処を決定。

――沈めるか？

――任せた。

が、リドルがノアに命じてバインドと催眠薬のコンボをぶちかますより先に、もうひとり――否、一羽か――主の不機嫌を感じ取って動いたものがいた。

「小娘がぴいぴいと。とく黙れ」

少し低めの、寝不足の頭にもやわらかな響きで奏でたのは、昨夜から七季の使い魔になったばかりのシームルグである。
「な、アンタに命令される覚えはな」
「黙れと言うた」
ぴたり、とルイズの言葉が不自然に途切れた。
ぱくぱくと、まるでエサをねだる金魚か鯉のように口を動かすばかりで、ピンクブロンドの少女の声はいっこうに出ない。
「……消音の魔法かしら」
プレシアも、ほっと胸を撫で下ろしながら、七季の肩に鎮座する、極彩色の神鳥をうかがう。
いっぽう、つんとシームルグが胸をそらした拍子に、きらびやかな冠羽がさらりと揺れる。頭部を飾るそれは、王冠のようにかがやかしく、見るものの目を楽しませた。
「何。ちょっとばかり、風の精霊を撫でてやったまでのこと。大人しく餌をついばんでいれば良いものを。おのが分もわきまえぬ、未熟な雛のさえずりは、聞き苦しいばかりゆえな」
そう言ったきり、東風はルイズに目もくれない。
彼は鋭いくちばしを、主人のやわらかな頬にこすりつけて「褒めてくれ」と言わんばかりに、キュルルと甘く鳴いて彼女の気を引こうとする。
「ん……ありがとー、東風。ごはん食べよー」
かたや七季はというと、「騒音」が止んだことに、ほわりと目元を緩めていた。彼女の細い指が、新たな使い魔のくちばしをそっと撫でる。
起き抜けで、あまり血の気のない少女の肌はいっそう白く、やわらかそうに見える。
どこかオリエンタルな印象を与える七季が、夜色の髪にふちどられた、あどけない面持ちで、この色あざやかな神鳥と戯れるさまは、不思議と神々しく。
本来、使い魔を連れての食事など非常識であろうに、文句をつけ

ようとするものは誰もいなかった。
いっぽう、物理的に文句が言えなくなったルイズは、実力行使とばかりに、今度は七季へとつかみかかろうとする。
「――っ！」
言葉が通じなければ肉体言語とは、貴族の子女にあるまじき行いだが、対する黒髪の少女は、するりとそれをいなすや――いっそ典雅とすらいえる、ゆったりした身のこなしで背を向けた。
もはや七季の黒い瞳には、朝食しか目に入っていない。その足取りさえ、従者に手を取られて進むさまがステップを踏んでいるように映るのは、どうしたことか。
いきおい、マントの代わりに黒衣をまとう、異邦人娘に身をかわされたルイズの末路は、わかりきったこと。ぴかぴかに磨かれた床との、熱烈なキスである。
ふだんであれば――そして相手がルイズでなければ――アーチャーや才人あたりが少女を支えたかもしれないが、いままでの行動が行動である。
まして、同級生たちですら「ゼロのルイズ」と陰口を叩くものが多い少女に、タイミングよく手を貸そうとするものは少数。そのうえ、その少数派は――いないわけではないのだが――たまたま側に居合わせていなかった。
これもルイズにとりついた「祟り」のなせる不運なのだとは、誰知ろう。
結果として誰ひとり助けるものはおらず、ピンクブロンドの少女は手首から突っ込む形で転げ、声もなく身悶える羽目になった。

そして、ようやく七季は食事が取れるかと思いきや。
「では、食事の前に、きょうは皆に留学生の紹介をしようかの。ミス・ナナチ、ミス・テスタロッサ……こちらへ」

――おなかへった……胃袋がせつない。

オールド・オスマンの声に、七季は朝食の並ぶテーブルへ、未練たっぷりのまなざしと嘆息をこぼして、食堂の前方へと歩を進めた。

それでも姿勢はまっすぐ。小柄な体躯にまとう黒衣が、颯爽と翻る。

巫女のバイトという立場柄、骨の髄まで立ち居振る舞いは仕込まれている七季である。

その後ろに、従者であるアーチャーと才人、テスタロッサファミリーが続く。皆、バリアジャケットか、それに近い礼装などをまとっているのは、彼らがいまだ警戒を解いていない証拠だ。

才人にさえ、アーチャー製の投影品が渡され、アリシアには、プレシアの魔力で作ったバリアジャケット仕様の赤いコートが着せられていた。ちなみに色指定はアリシア本人のものだったりする。

そして職員のテーブル前に並ぶと、一同は順番にあいさつするよう指示された。

空腹で、そのうえ朝から不愉快な相手――いまだルイズはリドルの件に関して謝罪していない――に絡まれたとあって、機嫌は限りなく底辺ではあったが、ここでそれを出すほど、七季は子供でもない。

「『東の世界（ロバ・アル・カリイエ）』より参りました。ナナキ＝ナナチと申します」

ふ。

黒髪の少女は、どこかアルカイックな印象を与える、にじむような笑みを浮かべて、中華風に拱手の礼をとった。

魔法学院の制服は準備していないため、裾をつまめるスカートではなく、パンツルックだからという理由もある。そのうえ彼女の肩には、いまだ使い魔であるシームルグが留まっているのだ。これでは頭が下げられない。

＜えーと。ちょっと降りては＞

＜断る＞

＜ですよねー＞

そんな会話が、こっそり念話であったことは蛇足である。
この鳥の王様、どうも七季にくっついているのがお気に入りらしく、そのままデフォルトにする気らしい。
ちなみにリドルも黒猫姿で七季に抱かれている。
＜うむ。既成事実とは素晴らしい言葉だな＞
＜ちょ、王様、王様ー！？＞
なかなかユカイな念話で、やっと七季の目も覚めてきた。
そんな彼女の隣では、白い髪の従者が七季たちの念話を漏れ聞いて、ないしん頭を抱えていたり。
――何故だろう。激しく嫌なデジャビュが……。
たぶん磨耗している中には、金ぴかな記憶とかあるのだと思われる。武器の記憶だけはいただいて、英雄王は削除りたかったのかもしれないが。ちゃんと記憶には残っている。主に戦いの経験として。

さておき。
生徒たちの注目は甚だしかった。
「東の世界（ロバ・アル・カリイエ）」といえば、いまは行き来のない砂漠の向こう。
「東方」＝異文化という連想が成り立っているがゆえに、未知なる物への興味は、誰しもが抱くところである。
素性を隠すための文句として、それを前置きにした七季の、つかみは上々だったといえるだろう。
「変わった服装ねえ……」
黒髪の少女は、バリアジャケットである黒い羽織に、白い中華風のインナーを着込んでいた。
もともとお泊りのパジャマ用にと、真言が後輩へプレゼントしてくれたもので、白地に色糸で牡丹と青鳥が刺繍されている。やや薄手なのだが、上着を着ているのでそれほど目立ちはしない。
襟元がきっちり詰まっているのも、見ようによっては礼服じみて

いてストイックに映る。ボトムは黒いロングパンツだ。
ほぼ男装に近い、マニッシュな服を、女性らしいメリハリのあるボディにまとっているため、どこか背徳的な魅力を帯びている。
トリステイン魔法学院の女生徒は、みんなスカートだけに、いっそう七季のいでたちは人目を惹いていた。
「あのチョーカー。やっぱり財力のある家なんでしょうね」
デバイス「ノア」が、大きな柘榴石（ガーネット）のチョーカーとして胸元を飾っているのも、まっしろなインナーに映えて深紅がいっそうあざやかに映る。
「あら、でもあっちのご婦人は、こちらと似てるデザインよ？」
栗毛の少女が目に留めたのは、プレシアの姿だ。
こちらは、いつかと同じ、藤色のロングスカートに白いハイネック、スカートと同系色のバリアジャケットを、コートとしてまとっている。
胸元にかかっている、紫水晶（アメジスト）のペンダントは、デバイス「ラベンダー」の待機状態だったりする。
「黒髪か。こっちじゃあまり見ないな」
男子生徒が見つめる七季は、髪も瞳も、服装までが、ほぼ黒ずくめ。
なのに肩に乗せた、使い魔と思しき鳥が、極彩色の羽根を持っているため、両者を引き立て合っている。
あのシームルグじたいが、七季を飾る存在の一つとして機能していた。
賢い幻鳥は、それすらも理解しているのだろう。ぴたりと少女に寄り添って離れない。
「……不思議な子」
何より七季の瞳には、力があった。
凛と背筋を伸ばして、あたりをまっすぐに見据える夜色の瞳は、一瞬ではあるが、その場の少年少女たちを圧倒するほどに。
風のトライアングルメイジである、青い髪の少女は、異邦の少女

が従えるシームルグを、少しだけ羨ましげに見つめた。
彼女自身は風韻竜と契約しているが、そのシルフィードはまだまだ子供っぽい。
比べて、あのシームルグが主を思って行動するほどに賢いときている。ただしタバサは、これといってルイズと親しいわけでもないので、彼女を助けるようなことはしなかったけれど。
「家庭の事情により、従者を二人連れての行動となりますが、お見知りおきください。
アーチャー、才人、ごあいさつを」
続いて、七季が自分の両隣に立つ、男と少年を手で指し示した。

＃５６　始まらない物語ー東から吹く風ー（後書き）

あとがき
＞ちょっと長くなったので分割しました。

＃５７　始まらない物語－虚実の茶番－（前書き）

まえがき

＞今回はルイズアンチ的な傾向があります。お嫌な方はブラウザバックぷりーず。

#57　始まらない物語ー虚実の茶番ー

「アーチャーと申します。家名は主に捧げておりますので、ご容赦を」

そうつけ加えて、錬鉄の英霊は真名を隠す。

赤い外套をまとう偉丈夫は、主に合わせて、いまは黒い中華風のインナーを着ていた。さすがに屋内での革鎧はごついため、一時的に外しているのだ。

ほかは普段と変わらない。

彼のデバイスは、それぞれ、あかがね色の金属とオニキスを組み合わせたバングル、あかがねいろの金属と、黒ガーネットを組み合わせたイヤーカフという姿で、静かに自分の出番を待っている。

もう一つ、アーチャーにはデバイスがあるのだが、そちらは腰につけたシースの一つに納まっていた。ちなみに干将・莫耶は、怪しまれないようにあらかじめ投影したものを帯刀している。許可は学院長からとっていた。

「学院長とマスターのご厚意により、こちらの魔法を学ぶお許しをいただきました。皆様と席を並べる栄誉に恥じないよう、誠心、学んでいく所存です」

続けて、黒髪の少年が口を開く。

「サイト＝ヒラガと申します」

こちらは、アーチャーの投影品による、サイズ違いの赤い外套を身につけている。

同じ主に仕える従者としては、服装を揃えた方がしぜんに見えるだろうという配慮がなされた結果だ。

才人もインナーは中華風のシャツ。じつのところ、修行用に妙神山で着ていたカンフーシャツだから、着慣れたものだ。

腰にはアーチャー同様に帯刀。ただし中身はというと、ちょっと細工を施してある三節棍だったりする。引き出せば、一本の棍としても使えるようになっている便利な武器である。

「浅学非才の身ではありますが、マスターの乳兄弟として、護衛の任を仰せつかりました」

周りの生徒は、気位の高い貴族ばかり。

それゆえ七季は、事前に才人から、人前では従者として呼び捨てることについて許可を取っていた。

『オッケーオッケー。気を使わなくって良いよ。

それに、呼び捨ての方が、かえって仲良い感じじゃん？』

気の好い少年は、あっさりそれを許した。

元より、王制のトリステイン事情は、高校生ならば、少し考えれば理解できることである。

ちなみに才人の呼び方は、「七季ちゃん」から変わっていない。

七季が考えた、対外的な言い訳は、

『私たちが乳兄弟で、私が才人に「そう呼んで欲しい」とわがままを言っている、ってことにする』

という形を通すつもりである。

プレシアなどは「念が入り過ぎじゃない？」と呆れたが、貴族の執事を務めた経験もあるアーチャーにいわせれば、「そうでもしないと、主人が侮られる」ということらしい。

「家の事情」というのも、そう言っておけば、向こうが勝手に「名家の跡取り」「相続問題」などと勘ぐってくれるからである。

面倒ではあるが、彼らの正体を明かすわけにはいかない以上、偽装は必要不可欠なのだった。

「皆様の目に付くこともあるかと思いますが、主の影として、ご理解ください」

褐色の肌の偉丈夫と、まだ少年の域を出ない黒髪の若者ふたりは、続けてあいさつをしてから、二人そろってぺこりと頭を下げた。

これで、アーチャーは従者としては先輩で、魔法を学ぶことも許されているが、才人は主人である七季の乳兄弟という立場があり、従者としては、二人が同等にあつかわれているのだと、生徒たちに知らしめたわけである。

蛇足だが、才人の挨拶は、アーチャーによって考えられたもので、あらかじめ少年は、それを丸暗記しての言葉だった。

ふつうの高校生に、人に仕えるものとしての言葉遣いを考えろという方が無謀である。

これから才人は、トリステインに滞在する限り、なるべくアーチャーの真似をすることに決めていた。

「プレシア＝テスタロッサです。こちらは娘のアリシア」

「アリシア＝テスタロッサです。よろしくお願いします！」

そして、ダークヘアの美女が、金髪ツインテールの可愛らしい幼女と共に進み出る。拱手のしぐさは七季にならったものだ。

「ナナキとは、第二の娘のように親しい間柄ですの。そうね、彼女の後見役と思っていただければよろしいわ。

故郷では魔導に携わるものとして、また研究者として働いていました。我々の魔法と、こちらの魔法はずいぶん違うので、研究者としても興味深いです。

我々を客人として、招いてくださった学院長には、とても感謝していますわ。皆さんとは年が離れていますけれど、娘たちともども、よろしくお願いします」

幾分とうのたった観はあるが、それでも十二分に美しいプレシアである。豊満なボディラインに、慈母の微笑みを浮かべるルビーアイの美女に、ほとんどの男子生徒はでれっと鼻の下を伸ばした。

かたや女生徒たちはというと、そんな男子にいい顔はしていないものの、可愛らしいアリシアの元気な挨拶には、きゃあきゃあとはしゃいだ声を上げている。

いつの時代でも、女の子は可愛いものが好きなのである。
中には、アーチャーや才人をチラチラと値踏みしている少女もいるようだ。
「リニス」
プレシアに呼ばれて、カフェオレ色の髪を持つ美人が進み出た。
「はい。リニスといいます。プレシアの従者で、アリシアのお世話役でもあります。こちらでは珍しいようですが……」
言いつつ、リニスはかぶっていた大きな帽子を取って見せた。
ざわっ。
カフェオレ色の髪から、同色のネコミミがぴるんとのぞく。
「私は、人型と、山猫形態と、二つの姿を取ることができるタイプの従者です。お見知りおきください」
ほんわりと笑った顔は、種族の壁を越えた癒し系だった。
保健室の先生タイプとでもいえば良いだろうか。
一部の男子生徒あたりは、ネコミミ美女という、新しいジャンルの萌えに目覚めかけている。
そこで自己紹介は終わるかと思いきや――思わぬところから抗議の声が上がった。
「ちょっと。僕のことは紹介なし？」
腕の中から、伸び上がったリドルが、たしたしと黒い前脚で七季に猫パンチをしかけてきたのだ。
「えーと。確かにリドルは従者だし……でも、リドル紹介すると、なしくずしに使い魔のみんなも紹介することに……」
リドルのしぐさは可愛らしいが、早く朝食を食べたい少女は、どうしよう、と困り顔。
七季は、ちょっと考えてオールド・オスマンを振り返った。
「時間は大丈夫でしょうか？」
「うむ。余裕を見て、食事の時間は取っておるからの。かまわんよ」
「んじゃリドル。手短にな？」
微妙に黒いものを（具体的に言うと食欲）をにじませて念を押す、

黒髪の少女にちょっぴりビビりつつも、まっくろにゃんこは七季の腕の中から声を上げる。
「ナナキの従者・リドル。言っておくけど、うちのお姫様に手を出したら、タダじゃおかないからね」
リドルのテノールは、広い食堂にも良く通った。
最後に物騒な宣言をつけ加えた黒猫は、ふん、と気位高そうにおとがいを上げる。
高貴なルビー色の目を持つ猫は、不思議とその物言いも似合って見えるもので、あちこちからちょっとした羨望のまなざしが注がれた。
口をきける、見栄えの良い使い魔というのは、貴族にとって自慢の種になるものなのだ。何より意思の疎通が楽なのは、往々にして、使い勝手の良さにも通じるのである。
「ふむ。一番手は先達に譲ったが……七季殿の使い魔で、東風という。
そうよな。主に貢ぎ物があれば、話を聞いてつかわす。
失せモノ探し、恋路の行方、近しい未来――真に知りたきことがあるならば、まず礼をもって尋ねて来やるが良い。あるいは栄光をつかむ好機やもしれんぞ？」
「ちょ、東風！？」
「さしあたって、主の役に立つには、これが近道かと思ってな」
我に地の下を這いずることはできぬゆえ、宝石などは貢いでやれぬ。
あくまでも上から目線のシームルグの言葉に、しかし生徒の一部は目の色を変えていた。
特に「恋路」のあたりで、女生徒の熱が上がっている。
母親の病を治す術を求めているタバサも、何やら考え込み始めた。
「あーもう。後で騒動になるじゃないか……んと、アーチャーは連れてきてるんだっけ？」
「一部というか一匹というか……まあ、いる」

さすがにメタルキングの巨体を、そのまま出すわけにはいかないため、はぐれメタル八匹のうち、一匹だけを剣のシース（鞘）にくっつけてきたらしい。

アーチャーが腕を上げれば、主の意図を察して、しゅるしゅると銀色の軟体が這い登ってきた。

「私の使い魔で、プラタです。攻撃しなければ害はないので、ご心配なく」

見慣れない、白銀が熔けかけたような奇妙なモンスターに、ささやかな悲鳴も聞こえたが、さしたる混乱にはならなかった。

ちなみに「プラタ」とはスペイン語で「銀」のことだ。

続いてプレシアが虚空に声をかける。

「トラ、出てきてちょうだい」

「ったく。とっととメシにしようぜ」

ふわり、と金糸の鬣（たてがみ）をなびかせる雷獣が姿を現した。とらは、ふわふわ宙を漂うと、つん、と七季の黒髪をつまみあげる。

「さっきから腹へって機嫌悪いったらねー。猫っかぶりも大変だなァ、オイ」

ズラリと並んだ鋭い牙を見せて、けけけ、と笑う大妖に、前列の生徒が「ひっ」と息を呑んだ。

「うっさいよ。おなか減ってるのは、とらだって一緒だろ」

むう、と唇を尖らせて、鋭い爪牙を持つ妖獣にも怯まずあしらう少女を、貴族の子弟たちは驚愕のまなざしで見つめている。

「おおっと。おいテメーら。ひとつ言っとくが、コイツを怒らせると厄介なことになるからな。とんでもねー目に遭いたくなけりゃ、ちょっかいかけんじゃねーぞ」

しかし珍しいことに、とらはそんな忠告を残して姿を消した。

「とんでもない目というと……」

「先輩のことかな？」

アーチャーのまなざしを受けて、黒髪の少女がへろっと答えを返す。

「前に先輩の旦那（龍神）と、とらでバトったことがあるんだよね」
ゴジラ対キングギドラもびっくりの怪獣大決戦でした。
ちなみに会場は妙神山。たぶんに酔った弾みのご乱行だったりする。
「何をやっているんだか……」
七季の呟きを耳にして、苦労性の偉丈夫はこめかみを揉みながら深々と嘆息した。
その場にいなかった自分と違って、おそらくは後片付けをする羽目になったのであろう、霜夏や伯言、神門（みかど）の苦労を思いやったに違いない。
その間に、ひょこ、と列から顔を出した七季は、金髪ツインテールの幼子に声をかける。
「じゃ、後はアリシアとリニスんとこの子か」
「うん。えっと、私の使い魔のエイプリルです」
まっしろなウサギを抱えたまま、ちょこんと一礼するアリシア。
かたや、長い耳の小動物は、ひくひくとヒゲをそよがせて、主とおそろいのルビーアイに、生徒たちを映すばかり。大人しいものである。
白ウサギに幼女という取り合わせは、ぬいぐるみを抱えているようで、微笑ましいことこのうえない。
とらのインパクトがあったぶん、余計に食堂の空気はほのぼのと和んだ。
次いで、リニスが斜めがけのポシェットから、ひょろ長い獣を連れ出してみせる。
「メイ、ご挨拶を」
と、イタチそっくりの幻獣・エコーは、きゅるっと風をまとい、アリシアくらいの幼女の姿をとった。
「メイです。リニス姉さまの使い魔になりました。よろしくお願いします」
青い瞳に茶髪の幼女は、そう言うと、ふたたび獣型になって、ち

ょろちょろとリニスの肩に駆け上がる。こちらも愛らしい使い魔であった。

「では、新たな学友との出会いを喜んで、きょうの糧をいただくとしようかの」

オールド・オスマンの音頭で、パチパチと拍手に迎えられながら、七季たちは食卓に就く。

余談ではあるが――転倒の際に、手首をひねったルイズは、自分で朝食を食べることができず、メイドの手を煩わせることとなったという。

#57　始まらない物語ー虚実の茶番ー（後書き）

あとがき

＞生徒たちへの顔見世で、だいぶ文章を食いました。

ですが、いちおう使い魔たちの名前と、建前の立場が出揃いましたので、これからぼちぼち話を進めていきます。

のったりペースの話ですが、お付き合いありがとうございます～。

◆ゼロ魔編の使い魔たち

◆東風（こち）：シームルグ

オリ主の使い魔。属性は風。

イラン（もしくはペルシャ）神話に登場する神鳥。セーンムルヴとも呼ばれる。学識豊かで人語を話す「鳥類の王」と称される存在。五彩七色にゆらめく長い尾羽、猛禽のようなくちばし、きらきらしい冠羽、金色にかがやく体が特徴。

鷲と孔雀とインコを足して、いいとこ取りをしたような姿をしている。

ゾロアスター教神話にいわく、太古の海に二本の木があり、そのうちの一本に棲んでいたとされる。この木の上でシームルグが羽ばたくと、種子が撒き散らされ、その種子からあらゆる種類の植物が生えたという。

王様っぽい、えらそうな物言いだが、主人であるオリ主には甘い。忠誠心も高く、主のためなら積極的に動こうとする。

オリ主のことは「主殿（あるじどの）」と呼ぶ。

◆プラタ（※）：メタルキング（はぐれメタルｘ８）

アーチャーの使い魔。属性は土。

金属の身体を持ったキングスライムで、メタル系スライムの一種。倒して得られる経験値は、はぐれメタルの約３倍。

通常は、合体メタルスライムが８匹合体してこの姿になったり。

この話では、ご都合主義な設定で、はぐれメタル８匹が合体した

もの。
守備力の高さと素早さには定評があり、物理攻撃、魔法攻撃ともに、とんでもない耐性を持つチートっぽいモンスター。

基本は念話で意思疎通。ひらがなでしゃべる、のほほんスライム。はぐメタ形態でも会話は変わらず。
主人であるアーチャーよりもオリ主に懐いているフシがあるが、ちゃんとアーチャーを守る気はあるらしい。
常時、はぐメタ形態で、一匹は必ずアーチャーにくっついて行動している。
アーチャのことは「あーちゃー」と呼ぶ。

※プラタ
＞スペイン語で「銀」の意。

◆とら：字伏（あざふせ）
プレシア親子の護衛役。属性は雷？
長い鬣（たてがみ）に金の体毛、鋭い爪に黒いくまどり。
ご存知、「うしおととら」の主役の片割れ。
人語を解し、雷を操り、炎を吐くという強力な妖怪で、二千年以上も生きている大妖（たいよう）。
もちろん空も飛べるし壁抜けもできる多芸ぶり。ただしガラスやコンクリなどの人工物は無理らしい。
雷獣とも、字伏（あざふせ）とも呼ばれる存在。ただし昔の呼び名「長飛丸（ながとびまる）」よりも、人間の少年・潮につけられた「とら」の呼び名を好む。
凶悪でケンカっぱやく、ずる賢いくらい頭も回るが、人間とのつきあいもそこそこあり、たまに気に入った相手を見つけると、じゃれることもある。
ちなみに、めったにやらないが、人間に化けることもできる。

知り合いであるオリ主との取引で、暇つぶしにプレシアたちの用心棒を引き受ける。
好物はハンバーガー。昔は人間を食っていたが、いまはけっこう雑食。妖怪も食べる。
基本的に人間の名前は呼ぶことが少ない。オリ主のことは「贄（にえ）の巫女」と呼ぶ。

◆エイプリル：ウサギ
アリシアの使い魔。属性は木（五行の木気を参考）
まっしろな毛皮に紅い瞳のウサギ。ふつうサイズより、ちょっと大きめ。
じつは大国主と八上姫神との婚姻を取り持った、因幡（いなば）の白兎の眷属。
知り合いであるオリ主の気配に釣られて、ちょっと顔を出しに来たところ、出会ったアリシアを気に入って契約。
上司である白兎神が動物医療の神であることから、みずからも動物医療に詳しい。また皮膚病の治療にも長けている。
神使の端くれなので人語を解する。薬草に詳しく、気性は穏やか。好物は果物。
アリシアのことは「ご主人様」と呼ぶ。
「卯月」が四月であることから、エイプリルと命名。

◆メイ：エコー
リニスの使い魔。属性は風（たぶん）。
イタチそっくりの見た目に、大きく青い目の幻獣。
韻龍と同じく、先住の魔法を使い変身する能力がある。

ふだんはリニスのポシェットか、肩の上が定位置。

茶髪で青い目の幼女に変身する。リニスのことは「姉さま」と呼び、基本的に人懐っこい。

単純に、アリシアの使い魔が「エイプリル」だったので、その次の「五月」で「メイ」と名づけられた。

＃５８　始まらない物語ー土の魔法ー

「どんな授業なんだろう。楽しみだな！」

たとえ、彼女たちが放り込まれるのが、一年生ではなく、何故か二年生の授業だとしても。

そしてリドルをさらおうとしたルイズのいるクラスに、わざわざ七季たち一行を加える学院長の意図がまったく理解できないとしても。

それでも、基本的に好奇心旺盛で、新しい知識や技術をものにできる機会を、黒髪の少女やプレシアは、しんそこ楽しみにしていた。

「ごぎげんよう、皆さん。春の使い魔召喚は成功したようですね。このシュヴルーズ、春の新学期にさまざま使い魔を見るのが楽しみなんですよ」

ふくよかな体形の女性教師は、そう口火を切って、教室をざっと見渡した。

クラスの生徒と彼らが連れている使い魔たちは、十人十色。その中には、まっしろで奇妙な獣形の使い魔を従えているルイズがいたが、年配の女性教師の気を引いたのは、別の存在だった。

「おや、あなたがたが、東方からいらっしゃったという留学生ですね？

皆さん、なかなか珍しい使い魔を召喚したようで……特に、ミス・プレシア＝テスタロッサと、ミスタ・アーチャーは、いままで見たこともない種族ですね」

七季の隣に座るアーチャーが教師の言葉にかるく頷いて応じ、才

人とリニスに挟まれたダークヘアの美女は、金髪の幼い娘を膝に乗せたまま、にっこりと微笑んで返した。

ちなみに、とらはプレシアの背後に浮いている。最後列だから、他の生徒の視界をふさぐことはない。

「娘ともども、プレシア、アリシアと名前で区別してくださって結構ですわ、シュヴルーズ先生」

年が近いとはいえ、シュヴルーズは教えを請う相手。

プレシアは丁寧に応対する。その態度に、シュヴルーズも親しみと敬意を込めた笑みで頷いてみせた。

「そうでした。あなたがたは親子でいらっしゃったのですものね。編入したばかりの留学生もいることですし、まずはおさらいから始めるとしましょう」

教壇にたった、土系統の魔法使（メイジ）いは、こほんとせきばらいをして、あらためて名乗りを上げた。

「では授業を始めます。

私の二つ名は『赤土』。赤土のシュヴルーズです。これから一年間、皆さんには『土』系統の講義をします。

さて――ミスタ・マリコルヌ、魔法の四大系統はご存知ですよね？」

ちょっと太目の少年が、シュヴルーズに問われて、はきはきと応える。

「はい。ミセス・シュヴルーズ。『火』『水』『土』『風』です」

年配の女性教師は、「そうです」と頷いて、ふたたび説明を続けた。

「今は失われた『虚無』を合わせ、五つの系統があることは、皆さんも知っての通りです。

留学生の方には、耳慣れないことでしょうか？」

シュヴルーズの言葉に、かるく手を上げた七季が発言を求めて、教師へと目線を送る。

「どうぞ、ミス・ナナチ」

「ありがとうございます、シュヴルーズ先生。
そうですね……『虚無』の系統は聞き覚えがありませんが、我々の故郷には、似た考え方があります。
一つは、四大といって、地・水・火・風の、四つの要素を、世界の構成要素とする考え方。
もう一つは、木・火・土・金・水の、五つの要素を、世界の構成要素とする考え方です。
後者は五つの要素に由来して、五行と呼ばれています。これは、五つの要素が、互いに影響を与え合い、その生滅盛衰によって天地万物が変化し、循環する、という考え方です」
黒髪の少女の言葉に、シュヴルーズや、比較的クラスの中でも真面目な生徒が、興味深げな面持ちで聞き耳を立てる。
「それは……二つの考え方があるのですか？」
ハルケギニアではブリミル教という要素があるため、人間のうちでは国を問わず、魔法の体系は統一されている。
異文化とはいえ、魔法に相当する理論が一つではない、ということに、彼らは興味を抱いたのだ。
「思想だけであれば、もっとたくさんの種類があります。
ですが、術式をあつかううえでは、この二つが代表的・大局的な見方であると、私は認識しています」
七季は言いながら、自分の言葉を反芻した。
五行は、いわゆる陰陽家の思想であり、のちに、陰陽五行説となって、アジア圏に広く流布する文化である。
それは文字通り、陰陽師の基（もとい）であり東洋の術者の多くが学ぶ思想でもある。
対する四元素説は、西洋の一大思想だ。こちらは、錬金術など西洋魔術の根幹を支える思想といえる。
「国や土地、人が違えば、その数だけ思想があるのは当然ですから。
こちらでは、こちらの思想も考え方の一つとして、そうあるものと学ぶつもりです」

郷に入っては郷に従え、という言葉もありますしね。

そう穏やかに締めくくる七季に、シュヴルーズは、見かけよりもずっと彼女は芯が強いのだと感じ取った。

懐が深いのと、ただ流されるのは違うのである。「自分と違うもの」を、「違う」と認識しながら受け入れるには、自分そのものを支える、確たる芯がなければ、取り込んだものと混ざって、混乱してしまうのが人間というものだからだ。

それは、シュヴルーズがあつかう「土」の、鉱物に関するイメージと似ていた。

確たるイメージがなければ、「錬金」は不純物（まざりもの）が多いばかりの低品質なものになるからである。

「それは良い心がけだと思いますよ。

ところでミス・ナナチ。参考までに聞いておきたいのですが、火・土・水は、こちらと変わらないとして、木と金の要素は、どういうものなのですか？」

「土」の魔法使（メイジ）いは、わりと地味な魔法が多いいっぽう、やはり知性に通じる傾向が強い。

シュヴルーズも例に洩れず、異文化の思想に、思わず興味を引かれたらしく、ついつい深追いしてしまった。

「ん……と。

木（もく）は、まあ文字通り、植物のことです。

『木行（もくぎょう）』ともいって、木の花や葉が、幹の上を覆っている立木が元となっていて、樹木の成長・発育する様子を表す……だったかな。

それと、五行は季節に対応しているので、木行は『春』の象徴です。

金は金属ですね。

こちらも別名は『金行』。土中に光りかがやく鉱物・金属が元となっていて、金属のように冷徹・堅固・確実な性質を表す。象徴するのは、収獲の季節『秋』。

つけ加えるなら、シュヴルーズ先生の属性に当たる「土」は「季

節の変わり目」の象徴。
植物の芽が、地中から発芽する様子が元となっていて、万物を育成・保護する性質を表すんです。
私は好きな性質ですね。作物は土がなければ育ちませんし、空を飛ぶのも嫌いじゃありませんが、やっぱり地に足が着いている方が落ち着きますから。母なる大地は偉大です」
「まあ！」
黒衣の少女がつけ加えた感想に、シュヴルーズは思わず顔をほころばせた。
「土」の魔法は、土木建築などの一見、地味な魔法が多いため、他の魔法使い（メイジ）からはかるく見られることが多いのだ。
黄金を作るにしたって、トライアングルのシュヴルーズでは手が届かず、スクウェアクラスの遣い手に限られた話なのだから。
「ええ、そうですね。貴重な意見をありがとうございます、ミス・ナナチ。
身びいきではないのですが、私はこの四つの系統の中で『土』は最も重要な位置にあると考えています。
『土』系統の魔法は、万物の組成を司り、この魔法のおかげで、私たちは重要な金属を作り出し、加工できているのです。
もし『土』の魔法がなければ、大きな石から建物を作り出すこともできませんし、農作物の収穫も今よりもっと手間のかかる仕事になっていたでしょう。
このように『土』系統の魔法のおかげであなた方は今の生活を送ることができているわけです」
年配の女性教師は、ボリュームのある体を、教壇の上で嬉しげに揺すって、とうとうと持論を述べた。
座っている生徒たちの大半は、「聞き飽きた」という顔をしているが、その言葉を聞いた七季たちは、それぞれに目をかがやかせて情報を反芻している。
＜ってことは、「土」の魔法を覚えると、作物を作るのに有利って

こと？

　アーチャー、これは覚えて家庭菜園を作ろう！　それに、ひょっとすると鉱物の精製もできる可能性があるよ！＞

＜主殿（あるじどの）は畑を作る気か。ならば作物の種を提供しても良いが＞

＜興味深い話だな……それに、思った以上に使い勝手が良さそうだ。ふむ、家庭菜園。大いに賛成だ。授業のあとも質問できる時間が取れると良いのだが。土地の確保の問題もある＞

＜じゃまないし　たべる＞

＜ナナキってば、思いっきり庶民的な魔法の使い方するよね。アチャ男も東風（こち）もノリ気だし……良いけどさ。ところで、こっちでもマンドラゴラ植える気？＞

＜誰がアチャ男か。しかしマンドラゴラがどうしたのかね？＞

　七季主従は、既に念話でガーデニング計画を立てている。

＜金属を作り出すことができる……デバイスのフレーム作りにも役立ちそうね＞

＜あ、ナナキ！　家庭菜園作るんなら、果物も植えようよ！＞

＜薬草も植えよう、ご主人様。備えあれば憂いなしだよ。それに僕は薬草にも詳しいし！＞

＜果樹だと時間がかかりますよ、アリシア。ブルーベリーあたりが手ごろでしょうか？　イチゴの季節は、植えるには時期がずれてしまいましたしね＞

＜姉さまたちがおやつに食べるなら、摘んできましょうか？＞

＜……いや、良いけど。みんなけっこうたくましいのな＞

　テスタロッサ主従の念話に、ついでで回線を繋いでもらった才人もツッコミを入れている。

「それでは、いまから皆さんには『土』系統の基本『錬金』の魔法を覚えてもらいます。

　一年生のときに覚えてしまった人もいると思いますが、留学生の方もいることですし。基本は大事ですので、おさらいのつもりで受けてください」

そう告げると、シュヴルーズは、お手本を見せるために、教卓の上にある石に向かって魔法を唱えた。

「錬金」

すると石ころは光りだし――やがて、にぶく黄色がかった光を帯びる金属へと変わり果てる。

「え？」

「……石の組成が変わっているな。あれは真鍮（しんちゅう）だ」

「呪文は短いんだね。ってか、わりと非常識」

ぱちぱちと大きな目を瞬く七季と、解析の魔眼で、錬金後の石を見つめるアーチャー。そして、少女の膝上から身を乗り出し、前脚を机にかけて感想を述べるリドル。

みんな一様に、そのあっけなさと、引き起こされた物質変換という事象の結果に驚いていた。

「ゴゴ、ゴールドですか？　ミセス・シュヴルーズ」

燃えるような赤毛の少女が、興奮にどもりながら問いを投げる。

七季たちは知らなかったが、キュルケという少女だ。「火」の属性の魔法使（メイジ）いである。

「違いますよ、コレはただの真鍮です。ゴールドを錬金できるのは『スクウェア』クラスのメイジだけです。私はただの……」

シュヴルーズは、いったん言葉を切ってから、咳ばらいをして続けた。

「『トライアングル』ですから」

#５８　始まらない物語ー土の魔法ー（後書き）

あとがき

＞しっかり授業も受けながら、念話の雑談はフリーダムなオリ主一行。

　きょうは忙しかったので、更新が遅くなりました。

＃５９　始まらない物語ー石ころと貴石ー（前書き）

まえがき

＞今回はルイズアンチ的な傾向があります。お嫌な方はブラウザバックぷりーず。

#59　始まらない物語ー石ころと貴石ー

スクウェア。トライアングル。
それは図形の種類だ。七季の脳裏に、単純な図が浮かぶ。
――四角（スクウェア）は四点。三角（トライアングル）は三点から成る形。
それがクラスの違い。ようするに格の違いだと推測はできる。
「シュヴルーズ先生」
すっと黒髪の少女が手を上げる。わからないことは質問すべきだろう。いまは授業なのだから、機会は逃さない方が良い。
「どうしました、ミス・ナナチ？」
「『スクウェア』や『トライアングル』について、教えていただけないでしょうか？
クラスが違うと聞いたので、おそらくメイジについてのランクわけのようなものだとは思うのですが、具体的には、どういう差があるのでしょうか？」
ああ、とシュヴルーズは合点したように頷いた。
「そうでした。
では、簡単ではありますが、説明をしましょう」
黒板に、チョークで白く図形が描かれる。
丸い点が一つ。
線が一本。
三角形が一つ。
四角形が一つ。
「これが、メイジのランクの由来です。まず、『ドット』」
コン、とシュヴルーズが丸い点をチョークで示した。
「これは、一つの系統を使うメイジのことです。次に」
コン、と差された図形――今度は一本線に、七季たちの視線が映

る。
「『ライン』。これは『土』と『火』のように、二つの系統を足せるメイジのこと。
魔法は単体でも使えますが、そこに別系統の魔法を足すことで、さらに強力な呪文になります」
ふむふむ、と小柄な少女や白い髪の男が頷き、黒髪の少年も「へえ」と興味深そうにノートを取っている。
プレシアもノートを取りながら、こっそりデバイスに記録までさせていたりする。ちなみに文房具類は、ふつうに七季の私物である。
「『トライアングル』と『スクウェア』は、もうわかりますね。足せる系統の数が違うだけです」
するとシュヴルーズの言葉に、アリシアが手を上げて質問を投げた。
「じゃあ、たとえば『スクウェア』になるには、四つの系統ぜんぶの素質がないとダメってことですか？」
「良い質問ですね、ミス・アリシア。
答えはノーです。
『土』と『土』のように、同じ系統を足すこともできるんですよ。つまりメイジのクラスを決定付けるのは、使える属性の数ではありません。精神力の大きさ、そしてメイジじしんの経験値が大きく物を言います。
クラスが上のメイジほど、足せる系統が上がります。それは、使う魔法の威力が上がるということです。
同じ系統を三つ足せるのなら、それは『トライアングル』クラス。だから、他の系統の素質がないからといって、必ずしもメイジとして大成しないというわけではありません」
「わかりました。ありがとうございます！」
「いいえ。基本的なことほど、大事なものです。熱心でとても嬉しいですよ」
一年生で習ったのだろう内容を、つまらなさげに聞き流している

生徒たちへを、シュヴルーズはちらりと一瞥し――可愛らしい金髪ツインテールの生徒に、にっこりと笑いかけた。
貴族の生徒はプライドが高いので、教えを受ける立場であっても、いちいちお礼を言ったりはしないものだ。
「では、せっかくですから……そうですね、ミス・ナナチ。あなたに『錬金』の魔法を使ってみてもらいましょう」
「はい」
呼ばれた七季は、素直に教卓の前まで進み出る。
留学生が当てられたとあって、それまでだらけていた生徒たちも、ぱっと身を起こして注目した。
「ミス・ナナチは『錬金』の経験はおあり？」
「いいえ。できれば、コツなどありましたら、シュヴルーズ先生に教えていただきたいです」
黒髪の少女は、ストレージデバイスである「ノア」をチョーカーから打神鞭フォームへと変えて、年配の女性教師を見上げた。
さすがに弓形態の「黎明」では、刺激が強すぎるだろう。他はどうだか知らないが、トリステイン魔法学院の生徒たちは、見る限り木製の短い杖を使っているようで、武器らしいものを媒体にしている様子は見受けられない。
籠の形をしたフォーム、「スワロウテイル」では杖と認識されないだろうし、翼の形であるフォーム「ハルピュイア」も同様である。
「そうですね。いちばん重要なのはイメージです。錬金したい金属を、強く思い浮かべるのが、成功の鍵ですよ」
いっぽう、ピンクブロンドの少女――ルイズは、初歩の初歩である質問をした七季を、ないしんで馬鹿にしていた。
――そんなことも知らないなんて。
それでどうやって、このトリステイン魔法学院に編入できたとい

うのか。
　少なくともルイズは、この学院に入学する前から、ヴァリエール家で家庭教師をつけられ――魔法の成果こそ上がらないものの――学力や知識は、本を丸暗記する勢いで詰め込んできたのだ。
　その実力は、筆記テストだけで言えば、入学当初からトップクラスを張れるほど。
　基本的な知識もろくにない様子の留学生に対して、ルイズは「馬鹿にしてるわ！」と憤慨していた。
　それに、彼女が、せっかく素晴らしい使い魔を得たというのに、注目はすべて七季たち留学生に向かってしまっている。
　ようやくクラスメイトたちの鼻を明かせる、と思い込んでいた少女には、これまた気に食わない展開だった。
　――初めてで、そう簡単に成功するわけないじゃない。
　ふん、とルイズは、手に入れた使い魔の、白くつるりとした額に手を這わせる。
　ヒヒの顔に似た、獣形の存在は、いまは大人しくルイズの足元にうずくまって控えていた。
　素晴らしい使い魔。強い使い魔。そんな使い魔の主である自分が、無能な魔法使い（メイジ）であるわけがない、と少女は己に言い聞かせる。
　――この私が、あれだけ何度やっても上手くいかないんだもの。あんな女が、一度で成功するはずないんだから。
　いまやルイズは、魔法使い（メイジ）の証明である使い魔だけを、プライドのよりどころにしつつある。ピンクブロンドの貴族令嬢は、いまだ名前もつけていない使い魔を、精神安定剤代わりにしていることに、気づいていない。
　――せいぜい恥をかけばいいんだわ！
　朝食の前から声の出なくなってしまった喉は、いまだ回復する様子を見せない。
　気に入らないことに文句をつけられないことが、どれだけストレスになるのかを、ルイズは我が身をもって体験している最中である。

そして喉と同様、朝食前に七季に体をかわされて以来、ひねってしまった両手首も、包帯の下でじくじくと痛みながら少女を苛んでいた。

「イメージ……」

少し考え込んで、七季はふと思いついた。

いまから錬金するのは小石。つまり、石に近いものの方が、よりイメージが近く、変換しやすいのではないだろうかと。

「先生、錬金するのは金属でなくてはいけませんか？

たとえば、同じ石でも、質の違うものに変えるのも、イメージさえしっかりしていれば、錬金としてできるんでしょうか？」

「それはミス・ナナチの言う通り、可能ですよ。錬金は、いわば万物の組成を司る『土』の魔法の代表的なもの。まずは挑戦してみることです」

シュヴルーズは生徒になりたての少女を、温かいまなざしで見守る。

「ありがとうございます、先生。参考になりました。

では、いきます」

七季は、目標となる小石をまっすぐに見つめ、その脳裏にとあるものを念じた。

――炭素。炭素。炭素。

高温にして高圧。凄まじく苛烈な過程を経て、地中の奥深くから生み出される、金剛石。

かがやかしく硬い宝石の王は、アダマス――「侵されざるもの」と呼ばれる、不変の象徴。

――ひしめけ光。凍えろ火の粉。水のごとく清らかに。風を圧して研ぎ澄ませ。

音にならない呟きは、少女の胸の奥で呪となり、力を練り上げる。

錬磨し、新たな働きかけを起こし始める。
それは、錬金にしては遅かったかもしれない。
ハルケギニアの魔法に慣れた生徒であれば、一瞬とはいわずとも、数秒で錬金を済ませることもできるのだから。
ただし、七季によって杖先を向けられた石は、いまだ光に包まれたまま、その変化を終わらせようとはしなかった。
デバイスを握る指先が力を注ぎ、魔道の器は、新たな魔法を刻み込まれて歓喜に揺れる。
少女の魔法は――初めての錬金は、ついに佳境を迎えた。
――光の山（コ・イ・ヌール）。
それは、あくまでイメージ。
インドで発見された、かつては世界最大のダイヤモンドと謳（うた）われたもの。
異邦人の少女は、その目にしたことのあるレプリカを脳裏に描き、錬金を行ったのだ。
イメージは成った。そこでようやく、七季は合図となる呪文を紡ぐ。
「錬金」
フッ。
石を包んでいた光が消えた。
しかし、次の瞬間には、別の光を――かがやきをまとった石が、その教卓の上に現れていた。
「ガラス……？」
がたんっ。
生徒の一人が呟いた言葉に、しかし女性教師はひっくり返っていた。
シュヴルーズは、教卓の上にかがやく石――光を取り込むように華麗なカットを施された、小ぶりなティーポットほどもある宝石から、目を離さない。
「これは、これは……」

「ダイヤモンド、だな」
教室の奥。一番後ろの列に座るアーチャーの声が、呆れた響きをにじませて、その石の正体を明かした。
解析を得意とする彼の目には、その真贋はあからさますぎるほど。おまけに、どれだけイメージが強烈だったのか、炭素の結晶した純度がハンパない。
「たしかに、炭素の同素体だからイメージしやすかったのかもしれんが……やりすぎだ、マスター」
おまけに最初の石と比べて、質量までが増えている。七季のイメージしたダイヤモンドのサイズが大きかったからだろうが、本当にトンデモ魔法である。
「む。だってこれが、いちばんイメージしやすい石だったんだ」
――石から貴石（いし）に。
黒髪の少女にとっては、金属の変換よりもずっと連想しやすかったのだ。
音もなく前列まで歩いてきた男は、その腕を伸ばしてシュヴルーズを助け起こすと、彼女の肩をかるく揺さぶって正気づかせた。
「さて先生。彼女の錬金は成功、ということでよろしいでしょうか？」
「あ、ありがとうございます、ミスタ。
……せ、成功ですとも！　これが成功でなくて、何なのでしょう！　いま純度も調べますわ……」
よたよたしながらも、シュヴルーズは興奮を隠せない面持ちで、その巨大な貴石に杖を向ける。
いまや教師の反応で、それがまぎれもない宝石であると理解した生徒たち――とりわけ、女生徒は、穴が開きそうなほどの視線で、ティーポット大のダイヤモンドと七季を交互に見つめていた。
みごとなブリリアントカットに研磨された金剛石は、きらきらしく光を弾き、その内部に七色の光彩を孕んで鎮座している。
「どうやら、主殿（あるじどの）に宝石を貢ぐ必要はなくなったようだな」

席に残されていた極彩色の神鳥が、やれやれと呟けば、ちょっと真顔で目の据わったプレシアがぶつぶつと独り言を洩らしている。
「本当にムチャクチャな魔法ね……私にもできるかしら」
「きらっきらだねー」
「そうですねー」
「プレシアさんこえぇ……けど、あれマジでダイヤモンド？　うっわ。冗談みたいな大きさだなー」
隣に座っている才人が、若干ママさん魔導師の本気にヒきぎみだが、それでも七季がダイヤモンドを生み出したことに関しては、損得抜きで感嘆している。
アリシアの純粋な感想と、ほわほわしたリニスの相槌に比べて、ぎらぎらした目つきを向ける生徒たちとの温度差が凄まじい。
「素晴らしい純度です、ミス・ナナチ！
これは立派な宝石ですよっ。傷もなく、不純物もない、きわめて美しい宝石です！
ああ……何という……光をあますことなく取り込むように研磨されていて、このカットの細工がまた秀逸です……」
うっとりと巨大なダイヤモンドに見惚れるシュヴルーズも、やはり女性ということなのだろう。
褒められるのは良いのだが、錬金がとっくに終わってしまった七季は、手持ち無沙汰で仕方ない。
「あの、シュヴルーズ先生。席に戻っても良いでしょうか」
「あ。ええ、ミス・ナナチ。素晴らしい錬金でした。ラインクラスでも、こうはいきませんよ。
あなたは、最低でもトライアングルクラスの素質をお持ちです。初めての錬金で、この結果ですから……あなたはおそらく、土の魔法と、きわめて相性が良いのでしょう。先が楽しみです」
がっしりと両手を握られて、べた褒めの勢いで賞賛された黒髪の少女は、苦笑いしつつ、「ありがとうございます」と礼を述べた。
「でも、まだまだです。錬金には、かなり時間がかかりましたし…

…これからも、よろしくご指導をお願いします」

ぺこり、と頭を下げる七季に、女性教師は「謙虚だこと！」と目尻を下げてまた彼女の中における、七季という生徒の株を上げた。

正直、シュヴルーズは、目の前の彼女に、己以上の可能性を感じていた。それは嫉妬を覚えるほどの素質である。

しかし、さながら貴重な宝石の原石ともいえる素質を持った生徒が、謙虚に頭を下げて、じしんに教えを請い、敬ってくれるというのは、教師にとって誇らしいものである。

シュヴルーズは、この生徒を、立派な「土」の魔法使いに育て上げようと、ひそかに誓った。

「ところでミス・ナナチ。こちらの宝石は……」

「？　元の石は先生が用意なさったものですから、先生にお渡しするのがスジでしょう。

それに、我々はまだ、ほんの一歩を踏み出したばかりのひよっ子です。またわからないことがあったら、何度も先生にうかがって、ご迷惑をかけるかもしれません。どうぞ、その節はよろしくお願いします」

黒髪の少女は、そう如才なく言ってのけると、心配げな従者の待つ席へトコトコ戻って行った。

――まあ、下手に持って帰って、誰かに部屋を荒らされるとか、困るし。

いちおう結界は張るが、霊符などは消耗品なので、そうそう無駄遣いはしたくないのが本音である。

さすがに教室中の視線を集めた自覚のある七季は、特に女生徒からの妬みを逸らすために、あの巨大なダイヤモンドは、「留学生一行」からの教師へのツケ届け代わりにすることを選んだのだ。

「土」の魔法使いであるシュヴルーズは、七季たちにとって、味方につけておいて損はない相手だ。

――それに、家庭（？）菜園を作るのに、協力してもらえるかもしれないしなー。農作物の収穫アップとかの知識は、マジ欲しい。

意外とちゃっかりしている七季である。

かたや、ひと財産もののダイヤモンドをよこされたシュヴルーズはというと、家を建てたばかりの財政状態で、思わぬ収入に違いなく。

歓喜でえらいことになった内面を必死に取り繕いつつ、律儀に授業を続ける彼女は、教師としては立派な方であるといえよう。

ただし、この日以来、わりと公平に生徒を見るシュヴルーズの中で、留学生一行の優先度が上がったのは――まあ、無理もないことであった。

＃５９　始まらない物語－石ころと貴石－（後書き）

あとがき

＞錬金チートはテンプレですが、せっかくなのでやってみた。

しかしオリ主は、女性なのに宝石よりも保身を選ぶタヌキっぷり。色気ないな。

あ、いまさらですが、オリ主の属性は水と風ですよ。土じゃないです（笑）。

※コ・イ・ヌール

かつては世界最大のダイヤモンドと呼ばれた宝石。多くの伝説や神話、逸話に彩られており、その歴史において周辺国の幾人もの王侯がその所有を争った。

最終的に、インド女帝となったイギリスのヴィクトリア女王のものとなり、現在はロンドン塔で展示されている。大きさは１０５カラット（２１．６ｇ）。

＃６０　始まらない物語ー突撃☆プラタの朝ごはんー（前書き）

まえがき

＞無性にほのぼのが書きたくなったので、突発的に番外編を書いてみる。

#６０　始まらない物語ー突撃☆プラタの朝ごはんー

やたらめったら量とカロリーの多そうな朝食を、とらの助けでやっつけたあと。

七季は、始業までの空いた時間で、使い魔たちの食事を取らせることにした。

「といっても、エイプリルはアリシアから果物もらって食べてたし、とらには食べ切れなかった料理のあまりを食べてもらったし。メイも、やっぱりリニスから肉もらって食べてたし。東風は自分で出したナッツ食べてたっけ……あれ？　食べてないのってプラタだけ？」

「さすがに食卓に石はないからな」

アーチャーも困った顔で頬をかいていた。

ちなみにリドルは、見ため猫の姿だが、正体は怨霊みたいなものなので、じつのとこと食事はいらなかったりする。まあ七季に付き合って、適当に彼女の皿からつまんでいたが。

「んー。じゃあちょっくら石でも掘りに行くかぁ。とら、昨夜このへんウロウロしてたっしょ。岩場とかあったら教えてぷりーづ」

にゃーにゃー言いながら黒髪の少女にじゃれつかれて、めんどくさげに金の雷獣が「何でぇ、知ってやがったのかよ」と気のない声をこぼした。

「なーんでわしが、そんなことせにゃならんのよ」

「んー……連れてってくれたら、私がよそで覚えた魔法、見せたげるよ？」

ちなみに岩掘るのは攻撃魔法ですが。

七季の口車に乗って、とらはいそいそと近くの岩場までの案内を引き受けた。

ふだん真言の影に隠れて、ぐーたらしている彼女を知っているだけに、とらは、そんな黒髪の少女が覚えたのだという「攻撃」魔法に興味が湧いたらしい。

妖怪や悪霊を相手取る、チーム「斗花（とうか）」の戦いは、彼も見たことがあるものの、いつも七季は全体を見渡す位置にいる司令塔であり、サポート役であり、彼女じしんが戦う姿など、ほとんど見られなかったからだ。

もっとも、補給や情報管制などは、戦ううえでの立派な役目であり、彼女なりの「戦い方」ではあるのだけれど。

「おおー。絶景かな絶景かな」

さて、その当人である七季はというと。

気まぐれで凶暴な大妖に、堂々と乗っかって、現場まで運んでもらうというちゃっかりっぷりを見せていた。

そんな黒衣の少女を、才人もアーチャーも苦笑ぎみに眺めている。乗せているとらも、相棒の少年を思い出すらしく、まんざらでもないようだ。

ちなみにシームルグである東風（こち）は、元より飛ぶことが本領の鳥である。その極彩色の羽根に風をまとって、金の雷獣の隣に並び、テスタロッサファミリーは、これまたプレシアの魔法で空を飛んでいる。

「高いねえ、ママ」

「そうね。アリシアは恐くないかしら？」

「大丈夫！」

「リドルは……器用ですね」

リニスが空中を浮遊しながら、先を行く影を見つめて、ちょっぴり遠い目をしている。

というのも、リドルは「ノア」に収納していた箒に乗っており、黒猫が箒で飛ぶという、いささかシュールな光景を展開中だからだ。

「慣れてるしね～」

自力で飛べないはずの、才人とアーチャーはというと。

「うん、マジ絶景。てか人間って、生身で空飛べるもんなんだ……」

銀色の穂先をもった箒――アーチャーのデバイスである「エスピナ」に腰かけて飛行していた。

箒と言っても、竹箒ではない。

柄の部分は、黄色を帯びた淡褐色の木材で、これは七季が真言からもらった、世界樹の枝を素材にしたものである。銀色の穂先はミスリル製。

神性を帯びたトネリコの枝は、魔術的な媒体としても優れているため、デバイスの素材としては珍しいものの、決して悪いものではない。

が、これが飛行用のデバイスかというと、そうではなかった。

「まさか本当に箒で空を飛べる日が来るとはな……」

たんにアーチャーは、「箒としての」あつかいで、飛んでいることになる。七季とリドルから、ハリポタ式の飛行術を習った成果であった。

デバイス「エスピナ」の詳しいスペックは、ひとまずおくが――世界樹の枝にミスリルほか、貴重な素材を惜しげもなく使われた「魔改造」済みのシロモノであることは、いうまでもない。

「おらよ」

トリステイン魔法学院から、さほど離れていない森の中にある岩場。

そこに到着すると、とらは自分の背中から、黒衣の少女をつまみ上げた。

「ありがと、とら。おお、ここなら良さげだな」

「とっとと見せやがれ」
「あいあい」
無事に岩場へと着地した七季は、とらに急かされ、大きな黒い目をきらめかせると、「黎明、セットアップ」と声をかけた。
「フォーム『ストリング』」
『イエス、ユアハイネス。フォーム『ストリング』』
とたんに、菫青石（アイオライト）の指輪が、漆黒の弓に早代わりする。
「おお？　おもしれーカラクリじゃねーか」
金の雷獣は、弓を手にする少女の姿を、物珍しげにしげしげと観察した。七季が武器らしいものを手にすることは稀である。
そこに、アーチャーらも到着する。赤い外套をまとう従者に、七季ひらひら手招きをしつつ声をかけた。
「アーチャー。ついでだし、『エスピナ』の動作確認もしといたら？」
「ふむ。そうだな、マスターの案に乗るとしようか。エスピナ」
『スィ、セニョール』
標準サイズよりも大きめの箒は、男の呼びかけに応じて、その手に収まった。
「エスピナ」とはスペイン語で「棘」の意である。
「さすがにここで集束魔法はマズいからね。通常の射撃魔法で行こっか」
高い位置にある男の肩に、ぽん、と七季が小さな手を置いて、従者に指示を下す。
「了解した」
「じゃ、まずは私からな」
アーチャーの隣に並んだ少女が、結い上げた黒髪を春風になびかせ、漆黒の弓を引き絞る。その立ち姿は、小柄ながら清廉で、動作に少しのよどみもない。白い髪の偉丈夫は、そこに経験の裏打ちを見て取る。
魔力で紡がれた弦は青く。つがえられるのは、これまた藍色の魔

力矢。そこまでは、ふつうの武器と変らないように見えた。
きゅいんっ。
「お？」
とらが、その目に興味をにじませて視線を向けた。
魔力矢の周囲に、直径五センチほどだろうか、小さい多層の魔法陣が展開されたのだ。同時に、八個の魔力球が矢を取り囲んで浮かぶ。
「連弾・八葉（はちよう）」
しゅざざざっ。
弦と矢が指から解き放たれる「離れ」と同時、八つの軌跡が空を裂いて岩壁へと突き刺さる。
がかっ！　がらららら……。
「連弾・九曜（くよう）」
「十干（じっかん）」
「十二支」
「二十八宿」
次々と放たれる魔力矢。そのうえ、矢の数はじわじわと増やされていく。
しぜん、岩壁は、ががががっ！と音を立てて、まるでマシンガンを打ち込まれるように蜂の巣状の穴を作り、そこからヒビが入って、崩れ落ちるということになる。
ひとつひとつの破壊力は、たいしたものではないのだが（それでも拳銃レベルはある）、一度の射撃で、必ず複数の魔力矢を同時に着弾させ、面攻撃を行うコントロールは大したものである。主従は似るということだろうか。
連射されると、ちょっとした弾幕もいいところだ。
それを顔色ひとつ変えずに、がりがりやるものだから、とらも少女の容赦なさにちょぴっと汗を浮かべだした。いわずもがな、才人やリニスあたりは無言でヒいている。
ふだんは暴力的な面を見せず、もっぱらぐーたらしている七季の

姿ばかりを目にするだけに、彼女自ら武器を取って攻撃する姿のギャップがハンパない。

彼らは一様に「七季を怒らせるのは止めよう」と決意を新たにしていた。誰だって蜂の巣にされるのは嫌である。

ちなみに、アリシアは素直に「凄い凄い」とはしゃいでいるが、プレシアあたりは「トリガーハッピーの気でもあるのかしら」と微妙に心配顔だ。

が、誰かが止めるよりも先に、七季じしんがあっさり手を止めた。

「こんなもんか。時間もないし。じゃ、アーチャー交代な」

「ああ。なかなかの腕だな、マスター」

「さんきゅ」

ぱちん、と片手を打ち合わせた主従は、互いに目で笑い合う。

そしてアーチャーは銀色の穂先を前に向けると、それを槍をあつかうかのごとく、腰を落として構えた。

「剣製開始（トレース・オン）」

白い髪の男が口にしたキーワードとともに、エスピナの穂先――否、その奥に隠れた砲身から、小さな魔力刃が打ち込まれた。

ゴガガガガッ。

刃といっても、数センチ単位のそれである。しかも、先ほどの七季と同様、連射されるのだから、弾丸の貫通力が凶悪になっただけのマシンガンと変わらない。

かてて加えて、また狙いが正確なものだから、命中した岩が、面白いようにゴリゴリ削り取られて、ガレキの山を作り上げていく。

「た、戦う執事さんだ……」

箒を構えて射撃魔法を繰り出すアーチャーを見て、才人が呟いたのもむべなるかな。

まったくの蛇足ではあるが、世界樹の枝を使った柄の部分には、仕込み杖のように、槍も隠されていたりする。

作ったときのコンセプトは「魔法の箒」だったはずが、どっちかというと「魔改造な箒」というありさまである。

「マンガではときどき見かけるけどねえ」
どっぷり日本文化（サブカル）に浸かったリドルが、阿呆なツッコミを入れたりして。
「ふむ。これくらいで良いだろう」
唐突に射撃が止む。
「おつかれー」
七季とアーチャーの主従によって生み出されたガレキは、ちょっとした小山ほどのサイズになって積み上がっていた。
と、はぐれメタルに分離して、それぞれメンバーにくっついていたプラタ（分体）が、わらわら集まってきて、一斉にもしゃもしゃガレキを食べ始める。
やがて五分もしないうちに、瓦礫の山は半分ほどになっていた。
「……けっこう食べたなぁ」
七季が、プラタたちの大食っぷりに目を丸くしていると、アーチャーは分体の一匹を拾い上げて、白銀色の使い魔に問い質した。
「これでどのくらい保（も）つ？」
＜いっしゅうかん　へいき＞
「意外とエコだな」
男の手の中のはぐれメタルをつつきながら、七季は「水飲む？」と水筒を取り出した。
ついでに、何故突っ込まれていたのかはわからないが、手荷物の中に紛れていたペット用の皿を引っ張り出す。
＜ありがとー＞
そこに水を注いでやると、置いた地面にわらわらプラタ（分体）たちは集まってきて、水を飲み始めた。
「どういたしまして」
「ふむ……予想よりも反動がないし、動作も軽い。当面、戦闘における問題はなさそうだな」
かるく箒を振って、魔力の残滓をはらうアーチャーに、作り手の一人であるプレシアが嬉しげに声をかける。

「良かった。気になることがあったら、いつでも言ってちょうだい。随時、改良していくから」
「そのうち集束砲撃魔法のデータも取りたいですね」
リニスもうきうきと会話に加わってくる。
さりげなく物騒な単語が混じっていることに、しかしながらツッコミを入れられる人材が、いまのところいないのは嘆くべきだろうか。
集束砲撃魔法ってアレですよね、ＳＬＢ（スターライトブレーカー）と同じ、例のアレですよね。
「お前ら、いったいどこに入れたんだ？」
が、才人は才人で、あのガレキの山の半分を食い尽くしたプラタたちを抱え上げて、ためつすがめつ眺めては首をかしげている。
「姉さまー。木イチゴ摘んできましたー」
幼女に変身したメイが、蔓で編んだ籠を掲げて、ぱたぱた走ってきたり。
「主殿（あるじどの）。水晶を見つけたゆえ、リドルの助力で掘り出してきたのだが」
「ナナキー。どうもこのへん、鉱床があるっぽいよー」
まっくろにゃんことド派手な神鳥が、仲良くそのへんから帰ってきたり。
まったくフリーダムな、異世界トリップご一行は、日常会話に紛れ込んでいた、トンデモ魔法の単語をもののみごとにスルーして、仲良く学院に戻ったのであった。

＃６０　始まらない物語ー突撃☆プラタの朝ごはんー（後書き）

あとがき

＞メタキンの朝ごはんをネタに書いたら、ぐだぐだになってしまいました。オチつかなかったっぽい。

そのうち、アーチャーのデバイスは、ちゃんと出番を用意するつもりですが、まずは箒型のデバイス「エスピナ」を登場させてみました。

箒で砲撃やらないか？

集束砲撃魔法。

ようするにアーチャーでＳＬＢ（スターライトブレイカー）。エクスカリバーと違う点は、他人の魔力を使えるところ。

エミヤシロウで射撃魔法とか、相手は涙目。

だって「当たる」こと前提の射撃だし。

書き手が調子に乗ってやらかした産物なので、実戦に投入するかは不透明。

じっさい使うときは、オリ主がコンデンサ代わりになります（だからシャレ抜きで鬼仕様）。

#61　始まらない物語ー夜に交わるー

話は時をさかのぼり。
それは、契約の夜のこと。

「器に水を満たしましょう。水にかけらを溶かしましょう。私は容れる。私は肯う。この身は揺れる。この身は満ちる。海を抱える宮殿と、血潮を棄てる径を持つ」

コルベールが背後で目を回しているうちに、と黒衣の少女は、この地の霊脈に触れることを選んだ。
「ちょっと待ってて」と言われたテスタロッサ親子や、七季の従者たちは、おとなしく彼女の行動を見守る。
肌寒い春の夜。
七季の唇は少し褪せた桜色に冷えて、とうとうと歌うかのごとく呪を唱えだした。

「御統を綴れ。しろしめす担い手。盟約もなく、制約も告げず、私は呼び慕う。名を持つ君よ。私は此処に。牙なき夜の散歩者が誘う」

少女は目を閉じる。しん、と体の内側が静まり返る感覚。
風ひとつない湖面。雲ひとつない蒼天。水に映りこむ天が、双天をなす。
神降ろしをするとき、彼女はこのイメージを浮かべる。
水と空。
たっぷりと湛えられた水に潜ることもできるし、その上にある空を巡ることもできる。

どちらも、揺らぎやすく捉えどころのない、彼女の力を表現するのにふさわしい象徴。

空と充足の隣り合う世界。

そんな世界を、七季の魂が見下ろしている。

どれだけの窮地に陥ろうとも、この世界が荒れ狂うことはない。

水底には泥だってある。水面から突き出し、空に伸びる梢が、生い茂る葉の色を変えることもある。

それでも、神降ろしを担う彼女の世界は、揺らがない。

揺らいではいけないのだ。

水底の泥がかき回され、湛えられた水が逆巻き、天をめざして昇るとき。

それは、彼女の中に眠るものが起きるときなのだから。

夜風に闇色の黒髪が流れる。

神気、と呼ぶしかない、清冽で神々しい気が、七季を中心に広がっていく。

夜の平原。

現実では、異装の黒巫女は穢れを祓い、存在を純化し、駘蕩し、誘いの声を上げる。

うち振る鈴の音は呼び水。

「天地の狭間。婚星を導に」

――鈴が鳴る。

それは現実のものではない。

幻想の、彼女の内側でうち振られる、イメージの祭具だ。

五色の紐をひらめかせ、葡萄のごとく纏め上げられた黄金色の鈴

「我が背なに永久の翼。我が胞衣は異邦の条理。たゆまぬ弦もちて哀歌と凱歌を奏でる贄人」

たちが、しゃん、しゃん、と脳裏に響く。
金属の内側、空洞の壁にぶつかる玉が（魂が）、神降ろしの巫女の中で震えている。
――そう、魂（たま）が震えている。
七季の黒い瞳が、虚空を仰いだ。裡（うち）を見つめる意識とは裏腹に。
――私の中で。
からんからん、からん。
からららん、かからん、からん、りりん。
しゃりんしゃりん、しゃららら……。
音が振る。
音が降る。
清らかな響きは、頭の先から下りていき、首を伝って背筋を滑り、肩を超えて指先へと走る。
腰を撫でて、ふくらはぎを通り、くるぶしをたどり、つま先を抜けて、地面へと繋がる。

「縁（えにし）の杯を交わさん」

足裏に感じる、霊脈が震えた。
ぅをぉん……。
彼女の霊体がいま、霊脈と接続される。
じんわりと足から這い上がってくる熱は、この土地の息吹だ。
それを七季は、満遍なく、ゆっくりと経絡に沿って総身に流し巡らせていく。
爪先からわき腹を駆け上がり、心臓をくるくると回りこんで、肩から腕をなぞり、指をさかのぼって額を目指す。
春の、いまだ眠り覚めやらぬ大気に身を引き締めながら、彼女の体は霊的な熱を帯びて高ぶっていく。
ハルケギニアという世界の、奥底に眠る霊気が七季を包み、その肌身に馴染んでいく。

いわばこれは、土地との交わりであり、契約を交わすことと等しい儀式だ。

一朝一夕でできることではない。

たとえ、アーチャーが知る、優れた魔術師――土地の管理人（セカンドオーナー）だった遠坂凛とて、準備もなしにやれはしないだろう。

それを七季は――この土地を訪れたばかりの異邦人が――呪具などの媒体もなく、たんなるイメージとトランスのみで霊脈にアクセスし、霊脈の恩恵を受けることのできる絆を結ぼうとしているのだ。

もしもこの地に魔術師がいたのなら、この光景を目にして簒奪（さんだつ）だと罵っただろうか。

けれども、じっさいはこの世界に魔術師はおらず。

魔法使（メイジ）いたちは、霊脈という存在すら知らず、まして、それを御する術（すべ）はなく。

そして精霊や神霊たちを、敬いながらも身近な存在として関わってきた七季にとって、これは「挨拶」に過ぎない。

ハルケギニアにおける「トリステインの土地」という「いきもの」に触れ、自分の存在を知らせ、認識させ、自分からの信仰（こうい）を捧げて、加護を受け取る。

巫女であり、「神使（しんし）」たる少女からすれば、当然のことだ。

本来であれば神社などに参拝に行くべきなのだが、いかんせん、彼女はここの土地神が祀られている場所を知らない。神社に相当するものもないだろう。

この世界はブリミルという始祖の魔法使いを機軸にした、一神教に染め抜かれているのだから。

ゆえに、七季はじかに「トリステイン」という土地の扉を叩き、挨拶した、ということだ。

「我が名は七地七季。贄（にえ）の巫女にして、竜に連なるもの。この天地（あめつち）の加護に、心からの感謝を――」

そして「トリスティン」という存在は、七季を「認めた」。
このマレビトを受け入れ、その信仰を捧げる巫女――彼女を援けることを約束する。
ここに縁は結ばれた。
声なき声が、その名を呼ぶ。
指なき指が、その身を抱く。
黒髪の少女は、霊的な余韻も覚めやらぬ上気した面持ちのまま、誰もが目を奪われるような魔性じみた磁力を湛えて、嫣然と微笑を浮かべていた。

「……で？」
「で？」
コルベールを叩き起こして、部屋に戻った七季は、ダークヘアのママさん魔導師にがっちり肩をつかまれて、尋問まったただなかだった。
「さっきの何？」
「さっきの？」
こきり、と首をかしげる黒髪の少女に、プレシアは部屋の隅でうなだれている黒猫と弓兵を指差して続けた。
「あれが儀式だったのは何となくわかったわ。で、あれは何なの？　リドルとアーチャーが頭抱えてるのと、関係があるんでしょう？」
ちなみに七季と契約したばかりの東風は、どうやら彼女の従者として先達であるふたりに憐憫を覚えたらしく、そのきらびやかな翼で、ぱさぱさ男と猫の肩を叩いて（？）いる。励ましているようだ。
「ああ。あれはここの霊脈に挨拶したんだ。んで、気に入ってもらえたから、加護ゲット。
どうも、ここの住民って、大部分が、自然への感謝とか崇敬とかの信仰が薄いらしくって、私が挨拶したら、えらい勢いで懐かれた」

「？……それって凄いことなのかしら」
「霊力切れの心配はないなぁ。ここ一帯の霊脈と繋がったから。で、私は霊力を魔力に変換できるんで」
「……なるほど。チートにも程があるわね」
プレシアも、アーチャーたちが頭を抱えたくなった理由がわかった。デバイス持ちの七季に、無限の魔力。そりゃ従者としての価値を見つめたくもなるってものである。
「さすが人外（マコト）の後輩……」
「霊脈乗っ取りって、単独でできるものなのか？……いや、魔術とでは、アプローチの仕方が違うのかもしれないが、それにしたって……」
「うむ。今回のことで、主殿（あるじどの）の器が規格外であると、良くわかった。苦労するな、これからも」
男（またはオス）三人で、七季の従者たちは、何やら互いの理解を深めているようだ。
「でも何でアーチャーたちが落ち込むんだ？
私の霊力って、ようするにリドルやみんなに回すんだから、けっきょくみんなの魔力に回るんだけど」
『……あ』
「それに、私ひとりじゃ大したことはできないぞ。いままでだって、リドルや、アーチャーや、プレシアたちに助けてもらって、どうにかやってきたんだから」
よいしょと部屋の隅まで寄って行って、そのままでかい図体の男に抱きつく、黒髪の少女。
「そうか。そうだな」
「つーわけで、これからも面倒かけるけど、よろしく」
にぱー、と笑って、今度はリドルを抱き上げる七季に、自称ツンデレなスリザリンの後継者は、
「ま、まあ仕方ないから助けてあげるよっ。……あとで久しぶりに、血（ごはん）くれるんなら」

「りょーかい。そういえば、しばらく飲んでないんだっけ？」
プレシアたちと一緒だったからなぁ、と七季はリドルのふわふわした毛並みに、頬をすり寄せた。まっくろなしっぽが、嬉しさを表すように、ぱたぱた揺れているのは、見ないふり。
そして、それぞれの使い魔召喚を祝して、盛り上がった一同が、そのまま宴会騒ぎに発展するのだが――それはまた、別の話。

#６１　始まらない物語ー夜に交わるー（後書き）

あとがき

＞宴会は防音の魔法かけてやりました。

本編か番外か、どっちに分類するか迷ったんですが、いちおう本編。

ルイズ再登場の前に、ほのぼの小話でやる気を上げてみるヘタレ書き手。

＃６２　始まらない物語ー水の魔法ー（前書き）

まえがき
＞今回はルイズアンチ的な傾向があります。お嫌な方はブラウザバックぷりーず。

#62　始まらない物語ー水の魔法ー

ときは現在まで戻り、ふたたび「土」の魔法の授業。
まっくろずくめの留学生による、巨大ダイヤモンド錬金の興奮も冷めやらぬまま、シュヴルーズは、懸命に授業を続けていた。
「さて、それでは他の方にも錬金をやっていただきましょう」
教師の目が、ぐるりと教室を見渡す。
「では、ミスタ・グラモン。前へ」
「は、はいっ」
「土」系統のドットである金髪の少年が、呼ばれて前へと進み出る。
ちなみに、とらは途中で飽きたのか、この時点で外へ壁抜けしていった。
コンクリートならともかくも、ここの壁は石から作られて、固定化をかけられたものだから、とらにとっては容易く壁抜けができるのだ。もともと姿を消せることもあって、誰に見咎められることもない。
「それからミス・ヴァリエール。前へ」
ざわっ。
シュヴルーズが錬金用の小石を用意している背後では、ちょっとしたパニックが巻き起こった。
「ちょ、何で！」
「誰か止めろよっ」
あからさまにあわてる生徒たちの姿に、ルイズの魔法を知らない七季たちは、けげんそうに目を瞬く。
「ね、何かマズいの？」
七季は、ちょうど前の席に座っている女生徒の肩をちょんちょん

とつついた。
「マズいなんてもんじゃ……！
あ、そうか。あなたは来たばかりだから知らないのね。あの子の魔法は爆発を起こすのよ！」
凄く危ないんだから！
金髪をみごとな縦ロールに巻いた少女――モンモランシーは、うしろの席を振り返ると、親切に答えてくれた。
「……マジ？」
何故に爆発。
「てか、それは攻撃魔法なんじゃ？」
「違うの。理由はわからないけど、どんな魔法でも爆発が起こっちゃうのよ。
でも、もし本当に、あの子が魔法を使うんなら、あなたたちも逃げなさい！　絶対よ！」
そんなふうに忠告までしてくれる。いくら錬金が上手くいったとしても、まだ七季たちが初心者だと知っているモンモランシーは、小さなアリシアを心配そうに見つめた。同じ金髪だから、妹のようにも思えるのだろう。
「本当に危ないのよ。これは意地悪なんかじゃなくて、本当のことなの。前は怪我人だって出てるのよ」
と、他の生徒にも動きがあった。シュヴルーズが錬金したときに声を上げた赤毛の少女、キュルケだ。
「先生……その……止めといた方が良いと思います」
「どうしてですか？」
「あの、ですね……ルイズに魔法を使わせるのは、はっきり言って危険です」
ナイスバディの女生徒が口にした警告に、教室中の生徒がこぞって頷いた。
ルイズと一緒に前へ出ているギーシュも同じだ。むしろ、造花の薔薇を杖として手にする少年は、涙目になっている。

「僕からもお願いします、シュヴルーズ先生！」
「錬金することの何が危険なのですか？
彼女はとても努力家であると聞いています。さあ、ミス・ヴァリエール。失敗を恐れていては何事も始まりません。周りの人たちのことなんか忘れて、頑張ってみなさい」
生徒を公平にあつかおうとする、女性教師の姿勢は立派なものだった。
ただし、彼女はルイズの魔法について、前任の教師から申し送りをされていない。それが災いした。
「ルイズ、お願いだからやめて」
「ギーシュ！」
キュルケがまっさおな顔になりながら言えば、モンモランシーも悲痛な声で少年の名前を呼んだ。
「モンモランシー……君は生きてくれ」
蒼白を通り越して、金髪の美少年の顔色は、いまや紙のようにまっしろだ。
が、その恐れは、いったん据え置かれた。
ぱくぱくと口を動かすルイズが、喉に手を当てたからだ。
「おや？
ミス・ヴァリエールは喉を痛めたのですか？」
問われた小さな少女は、背後を振り向くと、今度は七季たちを――正確には、その傍らにいる極彩色の鳥を指差し、懸命に口を動かした。
「？
手首も怪我をしているようですね。ミス・モンモランシ。あなたは水の魔法が得意でしたね。彼女を治療してあげてください」
「は、はい」
シュヴルーズの言葉に従って、金髪ロールヘアの少女が席を立つ。
そのまま彼女は、ルイズの手首をかるく診察して、魔法を使った。
「ひねったのね。これくらいなら……」

モンモランシーが呪文とともに杖を振ると、ルイズの手首から、痛みがだいぶ薄くなった。
「無茶をしなければ、明日には完治するわ」
その様子を眺めていた七季は、単純に「おお」と感心する。
――そーか。こっちの「水」の魔法って、ああいうふうに使えるのか。
治癒系のバリエーションがあると便利だなぁ、とサポートに特化するつもりの七季が、「水」の魔法の授業にも期待を寄せていると。
「声の方は……ちょっと専門違いね。喉に異常はないもの」
首をかしげるモンモランシーの言葉に、手当てを受けたルイズは頭を下げるでもなく――ぎっと目を吊り上げて、七季たちの方へと睨みつけてきた。
――なんじゃらほい。……ああ。
「水」の魔法についてのメモ書きなど、ノートに気づいたことを書き込んでいた七季は、ルイズの声について心当たりを思い出した。
「そういや東風（こち）。あの子の声、封じたまま？」
「べつだん問題もあるまい？」
きらきらしい神鳥は、しれっと本気だ。
「あーうん。またうるさくなるだろうけどな……絡まれるのも面倒だから、戻してやって。授業に支障が出ると、先生も困るだろうし」
七季の物言いもけっこう酷いが、彼女としては、できるなら金輪際、ルイズには関わりたくないと思っている。
ああいう、人の話を聞かず、ろくに回りも見えていないくせに権力を振りかざす手合いが、七季はいちばん苦手だったからだ。
――お金もらう仕事ならともかく、親交を深める気もない相手とのいさかいは時間の無駄だし。
好きでもない相手に労力を割くのは徒労だし、それくらいなら、彼女は魔法の練習や料理でもしていた方がずっとマシ、という性格だった。
――ケンカするのも怒るのも、エネルギーがいるもんなぁ。

根っからのぐーたら娘である。
「主殿（あるじどの）の頼みなら」
黒髪の少女に言われて、東風（こち）は渋々と力をふるう。
目にもあざやかな彩りのシームルグは、ルイズという少女の周りで声の響きを遮っていた、風の精霊をねぎらってから解放したのだった。

＃６２　始まらない物語－水の魔法－（後書き）

あとがき

＞ふつう授業って、一人当ててておしまい、ってことはないでしょうから。

　原作では、しょっぱなからルイズが騒動を起こしたがために授業は中断しましたが、まともな授業なら、複数の生徒に当てるのがふつうということで。

　ルイズふたたび。

　学院にはメイジも多数いるので、遅かれ早かれ喉もケガも回復したとは思いますが、流れ的に教師なら無視はしないでしょうと授業中に回復イベント（ＲＰＧか）。

＃６３　始まらない物語－ゼロの魔法－（前書き）

まえがき

＞今回はルイズアンチ的な傾向があります。お嫌な方はブラウザバックぷりーず。

#63　始まらない物語―ゼロの魔法―

「戻ったっ。私の声が、戻ったわ！」

そのままルイズは七季たちへ罵声を浴びせようといきりたったのだが、いまは授業中。

不穏な気配を察したシュヴルーズが、声をかける方が早かった。

「それで、ミス・ヴァリエール。錬金はできそうですか？」

「やります！」

ふたたびクラスにパニック――もはや混沌と言っていいかもしれない。

教室のあちこちから悲鳴が上がる。気の早いものは、おのが使い魔を連れて教室を逃げ出そうとまでしている。

だが、当人――この騒ぎの元凶ともいえる、ピンクブロンドの少女はというと、やる気と自信に満ちあふれた顔で言い切った。肝心の声も取り戻し、手首の痛みも薄らいだのだ。

それに使い魔を得たことで、ルイズは自分に自信を取り戻したのである。否、あまりあるとさえいえた。

まっしろな異形の使い魔から、おのが杖を受け取った少女は、「ゼロ」の汚名を今度こそ返上せんとばかりに、気合を入れて錬金に臨(のぞ)む。

――あんな初心者が成功したんだもの。私ができないはずないわ！　きっとイメージが重要なのよ！

ここまで来ると、七季もアーチャーも思考を戦闘用に切り替えた。

魔法が使えるからと、特権意識による優越と余裕でのんきそうに

見える生徒たちが、あんな反応をするというのは、命の危機――もしくは、それに近いものを、既に経験しているからだろう。

――となると、やることは一つだ。

「アーチャー。好きに行動して良い。許す」

七季の言葉は、本来マスターを守るべき従者が、自分の護衛から外れることを許す、という意味だ。

＜ノア、術式準備。多層式シールド『八重垣（やえがき）』＞

＜イエス、キャプテン＞

まっくろな羽織をまとう黒髪の少女は、指示棒型のデバイスを手に、念話を交えた指示を飛ばす。

「ノア」はストレージだから、あらかじめ登録してある魔法を起動するなら、「黎明」よりも早いのだ。

「私とプレシア、リドルはプロテクション張るから。あ、リニスも？東風（こち）も張れるなら、シールドか結界お願い。物理防御できるのを、最硬度で。展開位置は、前方一面のみ。準備は良い？」

＜ここの生徒たちに恩を売れるチャンスかも。シールド展開位置は席の最前列で。アーチャーはケガ人出したくないんだろ？

後ろはこっちで守るから、ギーシュって子と、先生の確保しといで。……ルイズは使い魔連れてるから、あっちが何とかするだろ＞

「感謝する、マスター」

「りょーかい。起きろ、ウロボロス」

「ラベンダー、セットアップ。いつでもＯＫよ」

「ふむ……心得た」

＜たてになるよ？＞

すると、アーチャーにくっついていた、はぐメタ形態のプラタ（分体）が、念話で口を挟んできた。

「では、プラタはアリシアの前にいてくれ」

しゅるると男の腕を伝って、アリシアの座る席の――プレシアに抱かれているから、じっさいはテスタロッサ親子の――前にたゆん、と乗っかる、白銀はぐメタ。

もちろんこれは最終防衛ラインで、七季たちが結界を張るのは、ずっと前――生徒が座る最前列の席からだ。
「うう。僕ってば役立たず」
「きゅう……」
いっぽう、結界を張れないエイプリルとメイが、申し訳なさそうに、マスターの懐でうなだれている。
「そんなことないよ！」
白ウサギを抱いた幼子が、使い魔たちを励ませば。
「適材適所。君らには君らの役目があるだろ。守護（まもり）はこっちに任せなさい」
きっぱりと言い切って杖をかまえる、七季の小柄な背中は、少女ながらに男前だ。
「俺も盾ぐらいにはなるつもりだけど。七季ちゃんが男前過ぎる件」
ちくしょー惚れそうだぜ。
「ナナキになら、嫁入りしても良いですけど」
そしたらみんな、家族ですね。
ちょっと天然ぎみのリニスは、ほわほわとした雰囲気のまま、さりげなく爆弾発言を飛ばしている。ジョークだろう、きっと。たぶん。
＜リニス姉さま、ナナキも姉さまですよ？＞
ちなみにメイも、主さながらの天然ぼけで、まじめにツッコミを入れている。
「ちょ、どっちが上？　いやスンマセンしたプレシアさん！」
軽口を叩きながら、才人も警戒態勢になる。黒髪の少年は腰を上げると、カフェオレ色の髪を持つ山猫娘の隣へ回り込んだ。
アリシアにはプラタがディフェンスについているから、彼はリニスの盾になるつもりだ。
七季には、東風（こち）とリドル、使い魔がふたりもついている。あちらは魔法を使えるのだから、才人よりもずっと強力な守りのはず。
彼もまた、アーチャーと、七季の幼なじみたちを交えた修行で、

戦いにおける最低限の判断がつくくらいには成長していたのだ。

そして。

「いいですか、ミス・ヴァリエール。錬金したい金属を強く思い浮かべてくださいね」

ギーシュが錬金を成功させたあと、ピンクブロンドの少女に順番が回ってきた。とたんに生徒たちは、怯えたように机の下に隠れ始める。

まだ席に戻れないギーシュは、それでもせいいっぱい被害を少なくしようと、教室の壁に張り付いている始末だ。

いっぽう、アーチャーは音もなく前へと進み、ルイズの爆発するという魔法を解析しながら、シュヴルーズとギーシュをかばうタイミングを計る。

ヴンっ。

と、ルイズの魔法が発動する数秒前に、藍色の燐光を帯びた魔法陣が生徒たちの前に浮かび上がった。

「これ何？」

七季が張った八枚のシールド。

その内側に、紫色の、別の魔法陣が展開される。こちらはプレシアのプロテクションだ。そこに、リドルのものである、深緑のそれと、リニスのシールドが次々と重ねられていく。

見たこともない魔法に、生徒たちが目を丸くする中。

最後に東風（こち）の、風の魔法による結界が完成したのを皮切りに、ルイズの魔法が発動した。

「錬金！」

小石に膨大すぎる魔力が注ぎ込まれて、意思を反映できない力が暴発を起こす。

ぼがんっ！

が、既にそのころには、女性教師と金髪の少年は、アーチャーの手によって避難させられ、爆発の余波は、彼の投影した盾によって防がれていた。

アイギスの盾。イージス艦の語源にもなった伝説の武器である。かたや、被害らしい被害はというと、その爆発の元凶であるルイズが、少しばかりコゲたことくらいだろう。こちらは白い鵺に襟首を引っ張られて、とっさに距離をとったおかげだろうが。

七季たちの張った結界で、生徒たちには傷ひとつない。

「きゃー！」

「お、落ち着けっ。ぶげらっ」

ただし、いまの轟音で驚いた使い魔たちがパニックを起こしたらしく、暴れていることが問題だった。中には、他人の使い魔を飲み込んでしまった使い魔もいる。

だが、こちらもすぐにケリがついた。

「きゅるるるククゥ！」

＜静まれ！　ものども！＞

神鳥であるシームルグ・東風が、教室に響き渡る制止の声を、念話と同時に投げかけたからだ。

ぴた、と幻獣をはじめとした獣や鳥、そのた使い魔たちが動きを止める。さすが神鳥の面目躍如ということだろうか。

小動物を飲み込みかけていた大蛇はというと、七季に何度か喉を優しくさすられて、あっけなく丸呑みしていた他の使い魔を吐き出した。

けぽっ。

「よーしよしよし、良い子、良い子」

「シュー……」

撫でられた大蛇はうっとりしている。吐き出された小動物は、助かったことに感激しながら、マスターらしき少女に抱きついて、でろんでろんの涎まみれな体に、悲鳴を上げられていたりするが。

「七季ちゃんが猛獣使いな件」

動物園の飼育員もびっくりな少女に、才人がツッコミを入れている。

「パーセルタングでもないのに、ナナキが蛇に懐かれている件」

同じように、蛇語がわかるリドルもツッコミを入れていた。

「ちょ、ちょっと失敗したみたいね」

けほっ。

ススに汚れた顔で、強気にうそぶくピンクブロンドの少女へ、当然ながら一斉にブーイングが突き刺さった。

ちなみにルイズは、いまだ襟首を使い魔にくわえられた姿という、ちょっと間抜けなありさまで、甚だしく緊張感に欠けている。

「なに言っているんだよ！」

「今の魔法はどう考えても失敗だろ！」

「そうよ！」

「私たちが今までルイズの失敗魔法でどれだけ迷惑したと思っているのよ！！」

非難轟々である。

ここでしおらしく謝れば、まだ可愛げもあるのだろうが、大貴族の令嬢として溺愛され、トリステイン魔法学院に入学するまでは、そこそこちやほやされてきた少女は、人に頭を下げるということに、まったく慣れていなかった。

もしかすると、謝っては負けだとすら思っているのかもしれない。

結界のおかげで、ケガ人が出ていないから問題ないとみなしたのだろうが、それは大きな間違いだ。そもそも、他人を危険な目に合わせた時点で、謝るべきである。

しかも原因はルイズだと、彼女じしんが理解していながらの爆発で、誠意ある行動を取れないとなれば、いずれ貴族として家を継ぎ、次世代の国を担う立場となる学友たちに、遺恨を残すことは疑いない。

「あ、ああ……」

かたや。

ルイズに錬金を命じたシュヴルーズも、黒板や壁にめり込んでいる石の破片を見つけて青ざめていた。

貴族の子弟がケガをすれば、今度は彼女の責任問題である。

そのうえ、その生徒の実家同士で、また揉めごとが起こる可能性まで出てくるのだから、学院にとっても頭の痛い話だ。

生徒同士の決闘が禁止されているのも、じつはそういう理由からで。

――あの魔法陣……おそらく結界でしょう。あれがなければどうなっていたことか……。

いままでシュヴルーズがみたことのない魔法。ならば使い手はハッキリしている。留学生のいずれかだ。

「あ、ありがとうございます、ミスタ・アーチャー……ミスタ・グラモンも、ケガはありませんか？」

「ないです！　その、助けてくれてありがとう、ございます。サー・アーチャー」

シュヴルーズと同じくアーチャーにかばわれたギーシュ少年は、さすが軍人の家系だけあって、危ないところを助けられた相手への礼儀はしっかりしたものだった。このあたりはルイズよりもよっぽど潔い。

強い戦士への憧れと敬意もあるのだろう。赤い外套に包まれた背中を見つめるギーシュの目は、英雄を見るようにかがやいている。

「いや。ケガがないなら良かった」

そしてケガどころか、危うく進退問題に発展するところだったシュヴルーズは、いまだ収まらぬ震えに我が身を抱きしめながら、生徒たちの無事に安堵と、心からの感謝を覚えるのだった。

#６３　始まらない物語－ゼロの魔法－（後書き）

あとがき

＞そんなわけで、原作に忠実に沿った、爆発魔法。

そして基本的に、損得がらみか身内のためにしか動かないオリ主。

ただ今回は、恩の売るためと、結界を張る手間はそんなに変わらないので、生徒たちも保護しました。

ついでにシュヴルーズ先生を味方につけるべく、ダメ押しをば。

＃６４　始まらない物語－東の魔法？－（前書き）

まえがき
＞今回はルイズアンチ的な傾向があります。お嫌な方はブラウザバックぷりーず。

＃６４　始まらない物語ー東の魔法？ー

――アタマいたー……。

「いや、あれだけの爆発を起こしといて謝らないってどうなんだ？」

失敗するのは別に良い。けれども、それが招いた結果で、迷惑をかけたのだ。人としての礼儀というものがあるだろう。

――正直、常識を疑うんだけど。

七季も頬杖をつきつつ、ピンクブロンドの少女を白い目で見ていた。

彼女らが結界を張ったから良いようなものの、あの爆発は、ちょっとした小型爆弾レベルの規模だった。

七季たちの結界がなければ、爆風で砕けた石の破片による、怪我人くらいは出たはずだ。当たり所が悪ければ最悪、失明する恐れさえある。

「みんなにケガがなくて良かったねー、ママ」

「ええそうね。アリシア、良い子。本当に良い子だわ……」

黒衣の少女だけではない。一児の親であるプレシアも、ないしん「親はどんな教育をしているのかしら」と呆れ顔だ。

そして、仕事にかまけていた間も、歪むことなく育ってくれた我が子に、深い感謝と幸福を覚えたのだった。

ママさん魔導師は、かいぐりかいぐり愛娘の金髪頭を撫でながら、席に戻ってきた黒髪の少女をねぎらう。彼女は動きやすいように、机のあけられた通路に立っていたのだ。

「お疲れ様、ナナキ」

「プレシアもな。リニスとリドルも、お疲れ。東風（こち）もありがとなー」

「うむ。造作ないことよ」

こちらも手を上げてプレシアに応じ、他のものを七季がねぎらえ

ば、シームルグは胸をそらし、黒髪の少年もガッツポーズをとってみせる。
「才人とプラタ、そっちもケガない？」
「おう、この通り」
＜へいきー＞
ぷるるん、と机にわだかまっていたプラタ（分体）も念話で返事をすると、戻ってきたアーチャーの鞘に、しゅるしゅると登っていった。
＜おかえり　あーちゃー＞
「ああ。ご苦労だった。大事ないかね、マスター」
「ん。オールグリーン。そっちも？」
「問題ない」
ぱちん、と。
赤い外套の騎士と、黒衣の少女が手を打ち合わせて互いをねぎらう。
ジャンプしたリドルも、そこに肉球パンチで参加した。
「……器用だな、リドル」
もちろん、特に秘匿している会話ではないため、七季たちの声は、あたりの生徒にも聞こえている。
「って、さっきの魔法陣、君らのか！」
「あれってどういう魔法？」
「結界とか、防御魔法よね？　どんな属性なの？」
「風が使われているのはわかったんだが……」
一人がしゃべりはじめたのを皮切りに、わっと七季たち自称「留学生」は取り囲まれた。
「うん、こうなるとは思ってたけど」
ぱんぱん！
「はいはい、いまは授業中ですからね。質問は放課後まで待ってちょうだいな。先生が困っていらっしゃるわ」
手を叩いて場を収めたのは、さすがに年上の貫禄か、ダークヘア

の美女、プレシアである。膝からアリシアを降ろして立ち上がった彼女の声は、良く響いた。

「でも！　先生だっていまの魔法に興味がありますよね！？」

生徒の一人――長い赤毛の少女が好奇心いっぱいに声を上げれば、ふたたびプレシアが、それを押さえにかかった。

「申し訳ないけれど、私たちにとって、こちらの授業はとても貴重なの。

ましてや、いまは初めての授業ですもの。最後まで聴講してはいけないかしら？」

「あう……ごめんなさい……」

大人の余裕たっぷりの、プレシアのまっとうな言い分に、さすがのキュルケもすごすごと引き下がる。

「さて。授業中にお騒がせして申し訳ありませんでしたわ、先生。留学生一同を代表して謝罪いたします。どうぞ授業を続けてくださいませ」

ダークヘアの髪を揺らし、プレシアは優雅に一礼する。

「いいえ、ミス・プレシア。むしろ、お礼を申し上げなければなりませんわ。ありがとうございます。

では、授業を再開しますよ！

ミス・ヴァリエールとミスタ・グラモンは、席にお戻りなさい」

生徒たちの間からは、いまだ謝罪ひとつないルイズに対する、白い目が突き刺さっていたが、それ以上の非難はなかった。

自分たちへの被害を防いでくれたのだろう留学生たちが、きちんと授業を受けたいというのだ。生徒たちは彼らを慮(おもんばか)っておとなしく遠慮したのだった。

そのぶん、授業が終わるや、生徒たちの盛り上がりは、ひとかたならぬものになった。

騒動を予見していた七季たちは、賢明なことに、次の授業にそなえるべく、さっさとトンズラしてのけたのだが。

かたや、クラスメートはというと、問い質したい相手である本人たちがいなくなったものだから、その興奮のやり場をなくしてしまった。

だが、勢いとはどこかに持っていかれるものである。生徒は、「ルイズ爆発魔法事件」の顛末を、他のクラスの友人や先輩、後輩、または在学する親戚などに話して、その興奮と驚きをわかってもらおうと熱弁に走り。

結果――

翌日には、トリステイン魔法学院の、ほぼ全校生徒が知るところとなる。

そんなこととはつゆ知らず。

七季たち一行は、ギトーという教師とともに、中庭に立っていた。

「それでは、これから君たちの得意な系統を調べる。一人ずつ順番に行うから、来たまえ」

手招きをされて、誰からともなく、七季からということになり、黒髪の少女はとことこと男に近寄った。

「よろしくお願いします、先生。ナナキ＝ナナチです。それで、どうやって得意な系統を調べるんでしょうか？」

「ふむ。それには魔法を一つ使ってもらう」

ギトーは年若いわりに、不健康そうな印象を与える男の教師だったが、思いのほか親切に答えてくれた。

「ブレイド！」

ヴン。

呪文をギトーが唱えると、その杖先から一メートルあまりの魔力刃が伸びた。

「おお！」
ぱちぱちと七季が拍手をすると、ギトーは気を良くしたらしく、自慢げに系統判別の方法を明かす。
「このように、ブレイドを使うとだ、得意な系統の色が、この魔力の刃に出るのだよ。見ればわかるので、いちばん簡単な方法だな」
「なるほど。私たちは初めてなので、使うところから始めなくてはいけません。よろしければ、先生にコツを教えて欲しいのですが」
じっと七季が黒い瞳で見上げると、細面の男は鷹揚に頷いて、自分の杖先から魔力刃を消した。
「そうだな。何にせよ、魔法を使うにはイメージが大切だ。さっき、私が使ってみせたブレイドのイメージが消えないうちに、まずは頭で思い描く。目を閉じるのも良いだろう。あとはやってみることだ。
呪文は『ブレイド』。失敗など、はなから考えるな。できると思い込むことから始めるのだ。イメージが確かなほど、その再現率は高くなる」
小柄な少女は、こくりと頷くと、目を閉じて心を落ち着けた。握る「ノア」の杖先に、ひたすら意識を集中する。
注ぎ込んだ力は、その先から刃となって形作られるのだ。そのイメージのままに、力を流し込み、想像の中で刃を作る。
――私が刃を作るなら。透きとおったものが良い。水のように澄んで、風のように鋭い。
かるく、はやく、するどい刃を。
自身の中を流れる水。伝わる響き。静かに練り上げられる魔力は、流動的な性質を保ったまま、そこに宿り、滞留――否、還流する。
「……ブレイド」
呟きは小さく、それでもたしかな力を孕んで呪(しゅ)を紡いだ。
「むうッ！」
ギトーが低くうなりを洩らし、満足げに七季の華奢な肩をつかんだ。

「成功だ、ミス・ナナチ。素晴らしい。君には風と水の系統に才能があるようだ」

目を開けた先には、ギトーと同じくらいの――およそ一メートルあまりの魔力刃が、片刃に緑、片刃に青の色彩を帯びて、静かにかがやいていた。

＃６４　始まらない物語ー東の魔法？ー（後書き）

あとがき

＞ちょいと、魔法の種類を一通りオリ主たちに経験させるため、駆け足で参ります～。

#65　始まらない物語ー風の魔法ー

けっきょく判明した系統は、

風：七季、プレシア、
水：七季、リドル、アリシア
火：アーチャー、リニス
土：アーチャー、リドル

という結果になった。七季主従は、得意系統の属性に、おのおのそれなりの心当たりがあるものだから、何ともいえない面持ちをしている。

「や。そーだろーとは思ったんだよ。そもそも龍神さま系列の眷属なんだし、水は馴染み深いし。風は……占星術的には、風の不動宮あたりだっけな、そういえば」

「火と土……ああ、剣を鍛つ、錬鉄の性だからな……」

「土は蛇に近いんだろうけど……水って、まさか例の『秘密の部屋』絡みじゃないだろうね……」

――ああ、入り口トイレだったって言ってたな。しかも女子の。サラザール＝スリザリンも、何考えてそんなとこにしたんだろ。

言うとリドルがヘコむから、胸のうちだけで相槌を入れている七季も、昔の人はわからんなぁ、と思っていたりする。

と、何やらぶつぶつ言っている男と猫に、プレシアが呆れたような声をかけた。

「何言ってるの。系統が二つも出たんなら、良いことじゃないの」

「良かったですね、アリシア。魔法が成功して」

「えへへー」

管理世界では、魔力がEランクと判定されたアリシアだったが、こちらでは魔法が発動するのに問題はなかったようだ。

小さいながらも、五センチほどの青い「ブレイド」が杖先から確認された。

ちなみに。

いまさらだが、アリシアの杖は、アーチャーが一週間で作った急造品である。ただし、素材は真言が提供した世界樹の枝に、「神使（しんし）」である七季の血と、竜の鱗が入っている特別製だ。

鱗も真言が異世界でハントした竜から採取した素材である。断じて、真言の旦那の龍神のものではない。杖自体はハリポタ式の作りをしている。

「アーチャーお手製の杖だもんな。アリシアもアーチャーも凄いぞ」

七季は、金髪の可愛らしい妹分を、かいぐりかいぐり撫でまくりながら、従者とアリシアを褒めている。

というのも、その杖は、七季たちがプレシアたちまで巻き込んで、いったん元の世界に戻った折に、ひとりアーチャーだけが真言に拉致られて、ハリポタ世界で杖職人であるオリバンダー指導の元、作り上げた品なのである。

サモン・サーヴァントの折に、しっかり役立つことが証明されたので、問題はない。

いかんせん、アーチャーの頭を撫でるには、ちょっと身長が足りない七季のこと。黒髪の少女は、ひとしきりアリシアを撫でたくると、今度は長身の男にハグして背中を撫でた。

「アーチャーもお疲れ様」

「ああ、ありがとうマスター。喜んでもらえたのだ、何よりだよ」

鋼色の鋭い鷹の目も、嬉しそうに細めて、アーチャーは受け止めた少女の背中を、ぽんぽんとかるく叩いた。

「けど、まさかナナキが、あのギトーって男とあんなに仲良くなるなんて思わなかったよ」

戻る道すがら、少女の腕に抱かれたリドルが、白い面輪を見上げながら言う。
「んー？
でも風の魔法って、かなり有用じゃないか。それで盛り上がったんだよねぇ」
レビテーション。フライ。サイレント。遠見の魔法に、ユビキタス。
＜それに、あのテの人は、わりとあつかいやすいというか。話が合う人に飢えてるようなところがあるからさ＞
念話でこっそり黒い会話も挟むあたりが、七季とリドルの気が合う理由の一端だろう。
――あどけないように見えて、腹芸もいけるクチだもんね、ナナキは。
リドルも頷きつつ、しっぽで少女の腕を撫でて相槌に代える。
＜で、褒めて持ち上げて知識を引き出すって？　ナナキもワルよのぉ＞
＜お代官様こそ＞
にこにこしながら、そんな会話を交わす主従に、念話をまた聞きしているアーチャーがぼそりとツッコむ。
「何を話しているんだか……」
「音に敏感な「風」の魔法は、情報を集めるのにうってつけだし、日常生活にも役立つ軽量化や……遠見の魔法は、光の屈折率でも利用してるのかな？
そのへんの考察とかも聞いてみたくって、ついプレシアと一緒に話し込んじゃったんだよな」
「風は最強！」という持論を保つギトーは、それだけに、風の魔法についてかなり詳しく、学者肌のプレシアの質問にも良く答えていた。
プレシアと話していて、ギトーじしんにも新たな発見があったらしい。嬉々として、また話す機会を設けるように強請（ねだ）られた。

「そうね。特にユビキタスといったかしら。風が偏在する、という観点から分身を作り出す、あの魔法は素晴らしいわ。

なにしろ、分身おのおのが思考を持ち、杖まで分身するから、分身にも魔法が撃てるだなんて。ミッドやベルカでも、該当する魔法は見当たらないわよ？」

ダークヘアのママさん魔導師は、ルビー色の瞳をきらきらさせながら声を弾ませる。

「スクウェアスペルだって言ってたから、頑張ってレベル上げないとね、ママ！」

リニスと手を繋いでいるアリシアも、プレシアを見上げながら母親を励ます。

「って、それって魔法使いの最上級ってことじゃん！」

そこに才人が習ったばかりの知識でツッコんだ。シュヴルーズの授業は、きっちり少年の頭の中にも残っていたようだ。

「や。聞いた話によると、トライアングルメイジ二人が、力を合わせると使える合体魔法で、ヘクサゴンスペルってのがあるらしいよ？」

「ヘクサゴンってーと……六角形だから、足す系統が六つってことか」

うへー、と才人が高校生らしく、名前との因果関係から思いつく。

「息がぴったりと合わないと使えないとかで、四王家――この世界、ハルケギニアにある、四つの王家――の血によって可能になる、四王家にのみ許された魔法って話だったけど」

「始祖の血、とかいうものらしいな。始祖のメイジ、ブリミルというものの血を、この世界の王家は継いでいる。

ガリア、アルビオン、ロマリア、そしてここ、トリステイン。その四国の王家は、それぞれが始祖の血を継ぐものとして、格式が高いと自称している。ヘクサゴンスペルは、そのゆえんでもある」

七季の肩に留まっている東風（こち）が、知識を披露して補足した。

「へー……待てよ。トライアングル二人でヘクサゴン。なら、単純

に考えると、スクウェア二人で――八角形って、何ていうんだっけ？」

揃いの赤い外套を身にまとっている、黒髪の少年に見上げられたアーチャーが、横から助け舟を出す。

「オクタゴンだな」

「そう！　そのオクタゴンとか行けるんじゃね？」

才人のツッコミに、プレシアの目がかがやく。

「とりあえず、また放課後に話す約束があるものね。そこは是非、訊いてみましょう」

「プレシアー。目が狩人（ハンター）の目になってるぞー」

ぱたぱた手を振りながら、「ママさん自重」と七季もツッコむが、いかんせん、マッドな気（け）のある、研究者の顔も持ったプレシアは止まらない。

こちらの魔法は、管理世界のそれと違って、攻撃よりも、より生活に密着した性質なのが、娘のために魔法の力を避けようとしたプレシアの忌避感を、やわらげているのだろう。

それにハルケギニアの魔法は、本気でムチャっぷりなものが横行しているし。

「偏在……偏在があれば、アリシアと遊んで、研究をして、働くことも……ふふふ、夢が広がるわあ……」

前言撤回。

わりと、切実な欲望がらみだった。特にアリシア絡み。

「最低、一人でも分身ができればっ」

握りこぶしを作って吼える、ママさん魔導師、絶好調。

「母の愛だねぇ」

「いや……そうなんだけど……」

「平和利用でけっこうなことだ」

「最近プレシアもナナキに感化されてきたよね」

ほのぼのとダークヘアの美女を眺める七季と、ちょっぴり暴走気味なプレシアを止めなくて良いのかと悩む才人。

そして、基本的に人が幸せなら良いんじゃないかと天然ボケ入るエミヤシロウなアーチャーに、まとめにかかろうとするリドルのツッコミがむなしく響く。

「とりあえず、お昼ご飯を食べよう」

「まだ早いよ！？」

マイペースかつ食い意地の張った七季の主張に、幼い妹分がすかさずツッコミを入れて、話は続く。

＃６５　始まらない物語ー風の魔法ー（後書き）

あとがき

＞人数が多いと、会話に終始してしまう罠。わりとぐだぐだですみませぬ。

あと、とらがフリーダムで家出ぎみ。とらだからなぁ。

ギトー先生はなー、ヤな性格かもしれませんが、気に入られさえすれば、わりとホイホイ教えてくれそうな気がするんですよね。

つーわけで、二人ほどお気に入りの生徒ポジションに突っ込んでみました。

年の近いプレシアと、変人のあつかいに定評のあるオリ主なら、わりとあしらいやすい相手だと思います。

ところで、ギトー先生って独身でしたっけ？

#66　始まらない物語ー彼女のランチー

ぱたん、と学生寮のドアが閉まる。
いったん七季たちは、自室――与えられた部屋まで戻ってきたのだ。
「いやね、きのうの晩と、朝は、ここのご飯食べただろ？」
「うん」
アリシアと目線を合わせるために、黒髪の少女は膝を落としてかがみこむ。
「ぶっちゃけ、お米が恋しいです。もっと言うと、アーチャーのご飯が食べたい！」
ぐっと握り拳を作って主張する七季のセリフに、才人がコケた。
「って七季ちゃん！？」
「あんなカロリー過多な食事ばっか食べてられるかー！
あれは乙女への挑戦か？　挑戦なのかっ！？
いや美味しかったんだけど！　あんなの毎日食べてたら恐ろしいことになるわ！」
「……ナナキに同意するわ」
さりげなく、スタイル維持に気を使っていたのか、賛同するプレシアの声がやたら低い。
リドルは「ナナキはともかく乙女って年齢じゃないだろプレシアは」というツッコミを、喉の奥にしまい込んだ。その判断は、きっと間違ってなんかいない。
首をかしげているアリシアに、リニスはやんわりと「大人になったらわかりますよ」と助言をしている。
「たしかに、あのメニューでは脂肪分が多すぎる。乳製品、とりわけ生クリームを使ったソースや、油を使った料理が多いのが原因な

のだろうが。それにしたって肉料理の多さが目に付くな」
料理人としての観点から、アーチャーも言いたいことはあったようだ。
「ってかね、私たちはさ、とらがいるからまだマシなんだけど。あそこにいる生徒たちって、好きなものしか食べてないだろ？　食い散らかして残すのがもったいないったら！　食材さんに謝れーっ！！」
それが何よりも言いたかったことらしい。黒髪の少女は、これぞ魂の叫びとばかりに絶叫した。
しゃがーっ、と怪獣よろしく叫ぶ主に、しかし赤い外套の従者は、深い同意を示して頷いた。
「マスターの言う通りだ。おそらく、貴族の文化として、とにかく量の多い料理を並べることで豊かさを演出しようというのだろうが……あれでは、残飯の量もかなりにのぼるはずだ。
しかしマスター。あれは料理人の責ではないと思われる。今朝がた、たまたま料理長のマルトー氏と顔を合わせたが、どうしようもないのだと言っていた。
下手にメニューを質素なものに変更したり、量を減らすと、貴族の方から苦情がくるらしい」
白い髪の男は、そうフォローして、精悍な面差しに苦い色を刷く。
「そっか……って、アーチャー今朝、うちにいたよな？」
「早朝、鍛錬の後にな。たまたま出くわしたんだ」
「七季ちゃん寝てたから仕方ないって。ちなみにアーチャーさん、料理の話で、そのマルトーっておっちゃんと、えらい盛り上がってたぞ」
どさくさに紛れて、水くみや下ごしらえまで手伝ったのは、余談である。
どこに行ってもブラウニー、なエミヤシロウ。
そして、ハルケギニアに来てからも、ちゃんとアーチャー相手に、才人が鍛錬していたことが発覚した。まだ二日目だが。

「ううう……大人の事情があるのは、わかるんだ。それに人の職場を荒らすのが良くないこともなっ。だから！」

ぐおっと立ち上がり、七季はどこからともなく、米袋（一キロ）を取り出した。

にゅっ。

「とりあえず、おにぎりで我慢する」

「……了解した、マスター」

気のせいか、背後にライオンが見えそうな主の、食への情熱に、料理上手の従者はおとなしく片手を上げて応（こた）えるのだった。

ところ変わって、トリステイン魔法学院の厨房。

昼食の仕込みは終わり、あとは盛り付けと配膳だけ、というところまで終わっているそこは、さながら戦の前の小休止、といったところか。

「ふう……あと一時間もすれば、貴族様の昼食の時間だな。お前ら、いまのうちにカトラリー出しとけよ」

「はいッス！」

マルトーの指示で、ナイフ、フォーク、スプーンなどの金物類が引き出される。

朝食の後にきちんと洗われたものだが、念のため、汚れやゴミ、毒物などが仕込まれていないか、確認するのだ。

するとそこに、朝方マルトーと顔合わせた白い髪の男がやって来た。ただし、服装は黒い中華風のシャツに赤いエプロンをつけたいでたちである。

「失礼、マルトー氏はいるかね？」

「おう！　あんたは朝の。アーチャー殿だったか。どうした？」

この厨房を預かる料理長は、その貫禄ある体躯で、きびきびとやってくる。

「ふむ。もう昼の仕込みは終わっているか……。
ああ、ちょっとな。折り入って相談があるのだが。少しばかり、かまどを使わせていただけないかね？」
「かまどを？
ふむ……理由は聞かせてもらえるんだろうな？」
マルトーは、アーチャーに劣らぬ鋭い眼で男を見やる。
「非常に申し訳ないのだが、うちのマスターが、故郷の料理を食べたいと仰せでね。
言っておくが、マルトー氏が作る料理の、味に不満はないそうだ。むしろ美味しいと言っていた。ただ……こちらの料理――ことに貴族向けの食事は、量が多くて、重いだろう？
ご馳走ばかりでは、胃が疲れてしまうから、という話なんだ」
無骨ながら、同じ料理人としての誇りを汚さぬようにと、アーチャーはマルトーに対して、丁寧に説明する。
「話はわかった。で、お前さんの後ろで袋抱えてるのが、その貴族様かね？」
「こんにちはー」
米袋を抱えてついてきた七季は、ぺこり、とマルトーに頭を下げた。ちなみに、厨房に動物はＮＧだろうということで、東風（こち）は部屋で留守番している。
「ほんっとーにごめんなさい。でも、アーチャーのごはんが、おにぎりが食べたいんです」
まっくろな目を、きらきらうるうるさせてマルトーに詰め寄る、黒髪の少女の目は、まるっきり飢えた子のそれだった。
目は口ほどに物を言う。
むしろ、いまの七季は、完璧に、飢えた口の代弁を目がしていた。
「ごはん食べたい」それが、どうしようもなく、マルトーの料理人魂を疼かせる。
そう。彼だって、人を喜ばせるために、「美味しい」の笑顔が見たくて、料理の道へ進んだのだから。

「……わかった。だがな、俺だってこの厨房を預かる料理長だ」
「感謝する、マルトー氏。私にできることなら、何でも言ってくれ」
「ああ。その『オニギリ』って料理を、俺にも教えてもらうからな！」
親指を立てて、ここは譲れないと言ってのける料理長。その目は燃えていた。いまだ知らぬ他国の料理、その好奇心と情熱が、男を熱くたぎらせるのだ。
カーン！
ここに、火蓋は切って落とされた。

#６６　始まらない物語ー彼女のランチー（後書き）

あとがき

＞いや、何のよ。

と書き手じしんがツッコんでみる。

スーパーお料理タイムが書けるかどうかは、筆力的に難しいので、まずはおにぎりで小手調べってことにしておいてください。

我ながら、ほのぼのネタに対する筆の滑りやすさはおかしいと思います。

タイトルは「王様のブ〇ンチ」から。

＃67　彼女たちのクリスマス（前書き）

まえがき

＞今回は、リリなの・ゼロ魔キャラが登場しない番外編です。

#67　彼女たちのクリスマス

「行ってきまーす」
黒髪の少女は、カーキ色のコートと白いマフラーを身につけて、元気に外へ飛び出した。
「車に気をつけなさいね～」
「あいよー」
十二月二十四日。
世間的にはクリスマス・イヴ。
幽霊的な居候なので、七地家の料理に手を出せないアーチャーが霊体化のまま、心なしか残念そうな声で、主人たる少女に話しかける。
「デートかね、マスター」
「は？　何でさ。きょうもバイトですよ私ゃ」
自転車をこぐ七季の肩には、いつのまにか黒猫姿でくっついたリドルも顔を出す。
「バイト？　バイトって神社の？」
「もちのろん！」
正面から吹く寒風に、少女の黒いポニーテールが翻る。それはまるで、戦旗のごとく。

「っはよーございまーす！」
「おう、早いな七地（後輩）。とっとと着替えて来い」
「あいさー」
黒髪の青年神主と出くわし、七季はちゃっと敬礼しながら社務所

に急ぐ。
「おはようございますっ」
いつものまっくろ巫女服に着替えた黒髪の少女は、臨時のバイト巫女さんや、真言が使う式神が化けた巫女さん、そして袴姿をしている幼なじみの少年たちが、せっせとお守り作りをしている作業場に顔を出した。
「おはよー」
「おはようございます、七季」
「おはよ、ナナ」
そう。
世間様ではジングルベルなご時勢でも、神社はこの時期――お守りや縁起物作りの、ド修羅場中。
たとえるなら、冬コミ前のオタクに近いものがあると思っていただければ良いだろう。
ことに、美少女巫女さんな真言や、美少年が加わっているバイトーズのいる神門（みかど）神社は、年々参拝者が増えてきたため、今年は例年よりも多くの参拝者を見込んでいる。
一部では「守銭奴（しゅせんど）神主」の称号も名高い神門（みかど）青年が、それを考えないはずがなく、こうして、臨時のバイトを雇って、せっせとお札やお守り作りに精を出しているという次第。
いうなれば。
クリスマス？　何それ美味しいの？　ってな具合である。
「ふっ……友達なんか、みーんな彼氏持ちよ……」
「私もよ。一人さみしいクリスマス送るくらいなら、ここでイケメン眺めて時給の良いバイトに勤（いそ）しむ方が健全よっ！」
稼いだバイト代で新年セールに特攻かけるわ！
「あはー。うちなんて、もっとヒドいぞー。両親姉弟、それぞれカップルで旅行行きやがったの」
遠い目をしてらっしゃるお姉さんや、握りこぶしを作って勤労意欲に燃えてらっしゃるお嬢さん、悟りの微笑みを浮かべて現実逃避

に走る少女まで、さまざまだ。
――クリスマス、カップルばかりと思うなよ。
にゃんこ姿で七季にくっついているリドルが、こっそり胸のうちで俳句を詠んでしまうくらいにはカオスだった。
＜……もしかして、毎年、こんな感じ？＞
思わず念話で話しかけてしまったリドルに、黒髪の少女はこっそり「いんや」と答えた。
＜去年までは、式神のおねーさんと、私たち三人で回してたんだけどなー。今年は神頼みする人が多くなるだろうからって＞
まあ、このままでは、お守りに怨念とか入っちゃうそうな気がするので、フォローくらいは入れておく七季である。
「あ、お昼になったら、神門（みかど）さんたちから差し入れが来ると思いますよ。ごはんとケーキ。
それと夕方からは、私たちが抜ける代わりに、イケメンの助っ人が来ますから」
まっくろ巫女の言葉に、やさぐれていた臨時バイトの巫女さんの目が、きらん、とかがやく。
「ほんとっ？」
「はいです。こんなときに働いてもらってるからって」
七季も、せっせと手を動かしながら、にこやかに答える。
「あああ、もうそれだけが楽しみっ！」
「頑張るわよー」
「あ、それこっち」
＜つーわけでリドル、アーチャー。夕方からは、ここでのお手伝い、よろしく＞
＜その手伝いって、私たちのことか！？＞
＜ちょっとナナキ！＞
抗議の声を（念話で）上げる使い魔たちへ、七季も念話で説明する。
＜夕方からは、退魔の方の仕事が入ってんだよね。

ちなみに神門さんと先輩、昼間は昼間で厄払いの出張しまくってる。年末は多いんだよね～。年が終わる前に厄払い、っての＞

もう一度言おう。クリスマス？　何それ美味しいの？

＜……ああ、だからさっき、出くわしたのか＞

＜ちょっと待ってよ！

じゃあ僕らはなおさらナナキについて行かなきゃ危ないだろ！？＞

何だかんだいって、少女に過保護なリドルが噛みつけば。

＜ん。そこはだいじょーぶ。夜になると、いい加減、仕事尽くめで先輩も気が立ってるから、あっという間に退魔は終わるし＞

＜じゃあ何でナナキがついてく必要があるのさ？＞

まだ不服そうなリドルが、黒猫姿で肉球パンチを繰り出す。

＜暴れる先輩のなだめ役です＞

＜＜……なるほど＞＞

Ｓのつく寮出身の、ツンデレ万年優等生と、苦労性の弓兵が、念話で完全にシンクロした。

真言の世話役がデフォルトな神門も、連日の仕事や運転に疲れているし、基本的に惚れてる相手にダダ甘だから、ストッパーとしてはあまり期待できない。

だもんだから、マイペースで、日ごろから栗毛の美少女巫女さんを上手に丸め込むのに慣れている、後輩の七季が、お付きとして必須なわけだ。

＜ま、お嬢さん方を遅くまで働かせるわけにもいかないから、八時までには迎えに来るよ。臨時のバイト巫女さん返すのは、七時の予定だし＞

＜それなら、まあ……＞

＜本当に気をつけてよ？＞

＜ん。わかってる。あ、それとね？＞

せっせとお守りを作りながら一言。

＜あすもあさっても、そんな感じだから＞

＜＜オイイイィ！？＞＞

使い魔ふたりのツッコミを受けながら、まっくろ衣装のにわか巫女さんのイヴは、こうして過ぎていく。

お金を稼ぐって大変ですよね。

#67　彼女たちのクリスマス（後書き）

あとがき

＞何かクリスマスネタを……と思ったら、こんなしょっぱい話になりました。

　25日には、弓兵が神社のキッチン借りて、こっそりケーキ作りそうな気もしますが。

　ちなみに神社的な打ち上げは、きっと三が日が過ぎたあと。もしくは小正月まで終わってから。

　たぶんみんなストレス発散ではっちゃけます。もうそれって新年会じゃね？

＃６８　それを修羅場と人は言う（前書き）

まえがき

＞今回は番外編につき、リリなのキャラおよびゼロ魔キャラは登場しません。

#６８　それを修羅場と人は言う

顔を合わせて生ぬるい笑みを浮かべていた。
十二月二十五日。二十二時。オレンジ頭の少年と、黒髪の少女は
『お疲れ』
「よぉ、七季」
「やー、いっちー」

場所は、毎度おなじみ、神門（みかど）神社。
その敷地内にある、神門（みかど）家の居間にて。
「私、国語担当。古文も漢文も現国も引き受けた！」
七季が古語辞典片手に胸を叩けば。
「じゃ、俺は英語な」
一護が英和辞書を持ち上げて隣を見る。
「できれば、霜夏か伯言、理数系でっ」
幼なじみのご指名に、若白髪の少年が資料集を積み上げ。
「うーん。じゃあ僕が生物・化学・物理」
「で、僕が数学やりますね」
栗毛の少年が参考書をパラ見する。
「つーことは、俺が社会科か？」
額にバンダナを巻いた横島少年が、不安そうに教科書を眺めやり。
ここに、「冬休みの課題・対策チーム」の勉強会は始まった。

「つーかな。虚（ホロウ）は年末年始もカンケーねーしよ」
おちおちゆっくりしてられねー。
英和辞書で単語を調べながらボヤくのは、死神代行・黒崎一護。
「うちもねぇ、昼間はバイトでお守り作りと、社務所のお仕事をローテで回してるし。夜は退魔のお仕事が多いんだよなぁ、この時期」
ふう、とためいきをつきながら、問題文の古文に、かたっぱしから斜線を入れて、動詞や名詞を区切っていく、バイト巫女さん・七季。
「必要なのはわかるんだけど、この時期に出される宿題を見ると……」
若干、遠い目であさっての方向を見つめるのは、幼なじみと同じく神門（みかど）神社でバイトをしている霜夏で。
「殺意が湧きますよね、こう、そこはかとなく」
ふふふふふ、と秀麗な容貌に黒いものをにじませて、魔王もびっくりの悪辣な笑みを浮かべている伯言。
「ああ、神社は年末年始は稼ぎ時だもんな。うちもなー。年末は、どこのGS（ゴーストスイーパー）も忙しいって話だしなあ」
もちろん腕っこきの美神令子も、その例に洩れず、彼女の事務所でバイトをしている横島も「法律なにそれ美味しいの？」な労働条件でコキ使われているため、こめかみをシャーペンの尻でコリコリかきながら、課題の消化に精を出す。
社会科であれば、教科書や資料集を首っ引きで調べれば、たいていそこに答えが書いてあるから、成績のよろしくない少年にも、何とか手に負えるようだ。
ようするに、年の瀬に繁盛（死神代行はまた別だが）するバイト先で謀殺される、霊能者もどきな高校生たちが、よってたかって宿題を片付けるための集いなのであった。
余談だが、こんな時間に集まっているのも、それぞれバイトや代行の仕事を片付けてから集まったら、しぜんと遅くなったのである。
「いやでもマジで助かるわ」

きょうは、一時的にルキアと交代してきた一護が、「七季の発案だったんだよな」と黒髪の少女を見やる。
「それはこっちのセリフ。私が得意のなのは国語だけだし。いっちーは満遍なく全教科できるだろー？」
「俺は国語の偏差値七十越えとかいかねえよ。お前、英語だって偏差値六十台だろーが」
「それも数学の偏差値が五十以下だから、けっきょく三教科だと平均六十前後に落ち着くんだけどねー」
かりかりと、文系が得意な一護と七季が言い合えば。
「お前ら嫌味か！」
出席日数からしてヤバめの横島少年がツッコむ。
「忠夫は頭が悪いわけじゃないよ。基礎すっ飛ばしてるから、わからなくなるんだ。せめて公式は覚えとかないと」
そこに、やんわりと霜夏のテノールが友人をなだめにかかり。
「苦手っていうのは、七季みたいなのを言うんですよ。
応用の証明問題ができるのに、何で、単純な計算問題の間違いが、ああも頻発するのやら……。
公式も覚えていて、理屈もわかっているのに、それでも点数が低いなんて。あれこそ本当に向いてないって言うんですよ」
「数学のテストは、正確さとスピードが命だからな」
トレードマークの眉間のしわをほどいて、一護は黒髪の少女を可哀想なものを見る目で眺める。
「本っ気で向いてねーんだな、七季」
「ううう……知ってらい。数字苦手なんだよ！」
「数学じゃなくて数字ときたか」
一護のツッコミに、むうと唇を引き結びながら、それでも黒髪の少女は、かしかしとワークの空白を埋めていく。
「それにしても、やっぱ五人で一教科ずつ手分けすると、だいぶ違うなー」
学校は違うものの、課題に出された問題集が同じなのを幸いに、

横島が安堵の息をつく。彼が担当している社会科は、選択問題が多めのワークだったので、書く手間のわりに、進みが速い。

どすんっ。

と、やおら、居間の天井が揺れた。

「……えーと……？」

額にバンダナを巻いた少年は、おそるおそる、上を指差した。

「なあ、あれって」

「ん。先輩も書類仕事持ち帰ってるからさ。あっちはアーチャーと神門（みかど）さんで補助っつーか見張りやってるはずだけど」

ワークから顔を上げた七季が答えるのと同時。

どすばたんっ。

また、大きな物音がした。

「……先輩だしね」

「漣（さざなみ）さんだしな」

「あ、僕コーヒー淹れてきます」

霜夏も天上を見上げ、一護が努めて課題に視線を落とし、伯言がキッチンへと避難するように、腰を上げた。

「お前らも慣れてんなー」

何ともいえない面持ちで、横島もスルーでページに目を落とす。

宿題をやるだけでも重労働なのに、このうえ人外大決戦な騒動に巻き込まれてはかなわん、と思うのは、彼のみならず、この場の誰もが同意するところだろう。

「つーか、きょうで半分は片すぞ！」

「マジか！？」

「おーらい」

「了解」

「ぜんぶ埋めてしまっても、かまわないんでしょう？」

一護の渇に、横島、七季、霜夏、伯言、それぞれの答えが上がり、学生たちの夜は更けていく。

彼らは夜明けまで眠らない。

#６８　それを修羅場と人は言う（後書き）

あとがき

＞今年のクリスマスは、ちょうど土日でしたし。

ちょっと詰まっているので、小話の番外をば。イヴに引き続き、またしてもしょっぱいクリスマス。

ゼロ魔の本編が上手く進まなくて……。いっそ別方向の切り口にするかな、本編。

ほんとは二階で先輩相手にアーチャーがＵＢＷ展開してるとかって話にするつもりだったんですが、やまもオチも意味もない小話に、固有結界もどうかと思ったので自重。オチなかったし。

どうでも良い話ですが、このメンツに金田一一をぶち込むと、もれなく殺人事件に巻き込まれます。

金田一少年は、オリ主の友人という設定。

◆オリ主の世界の登場人物一追加一

◆七地霜夏

オリ主のイトコで幼なじみ。神門（みかど）神社でバイトをする、通称「バイトーズ」の一人。

真面目で優しく、成績優秀、スポーツ万能、人望も厚いとリア充っぷり甚だしいイケメンだが、幼いころのトラウマで女性不信。

幼なじみの七季だけが例外で、世話焼き性分もそこに由来する。

料理が得意で手先が器用。方向オンチが玉に瑕。

マイペースなオリ主に振り回されることに、そろそろ悟りを開きつつある。ふだんは人が好いが、七季が絡むと人が変わる。

若白髪に黒い瞳。身長は１７２センチ。爽やか系スポーツ少年。

退魔行において、棍をふるい、前線での防御を担当する。

◆陸遜伯言（出典：三國無双）

オリ主の幼なじみ。神門（みかど）神社でバイトをする、通称「バイトーズ」の一人。

容姿端麗、文武両道を地でいく、こちらもジャニーズ系のイケメン。他人とは一線を引きがち。やっぱり幼いころのトラウマで女性不信。

外面は良いが、意外と毒舌。ついでに謀略系というか腹黒。料理、裁縫、炊事に洗濯、一通りやってのける。じつはハッキングが得意。遺産で財テクもやっている。

幼くして両親を亡くしているため、小さいころからの幼なじみである七季に依存ぎみ。本命には一途に尽くすタイプ。

親族の後見を受けて、広い屋敷に一人で住んでいる。剣術道場の跡取りでもあり、道場は現在、親族が師範代を務めている。

栗毛に紅茶色の瞳。身長は１７１センチ。ジャニーズ系少年。退魔行において、双剣をふるい、前線での攻撃を担当する。

◆横島忠夫（出典：ＧＳ美神）

オリ主たちの友人。美神令子除霊事務所でバイトするＧＳ見習い（ゴーストスイーパー）（いちおう資格もち）の高校生。

モノノケに好かれる体質らしい。バカ呼ばわりされることもしばしばながら、土壇場のひらめきはちょっとしたもの。悪運の強さも折り紙つき。

スケベでエロスのためなら命も懸ける女好き。そのためか、霊力の源は煩悩という変り種だが、「文殊」という霊力の結晶に、文字の力を込めて解放する能力は、応用性の広さがハンパない。

下心もあるが、基本的に女性に優しく、男に厳しい。イケメンは敵だと言ってはばからない。

両親は海外に住んでいるため、アパートで貧乏な一人暮らし中。ときどき栄養失調で行き倒れかけたりする。

茶髪に黒い瞳。額に巻いた赤いバンダナがトレードマーク。身長１７５センチ。大きな目で、平凡な顔立ち。

◆黒崎一護（出典：ＢＬＥＡＣＨ）

オリ主の友人。斬魄刀（ざんぱくとう）「斬月（ざんげつ）」を持つ、死神代行。

不良っぽい見ためと目つきの悪さから誤解されがちだが、友人思い、家族思いの性格。教師の風当たりを防ぐため、成績は優秀。

ハイスペックな霊感が災いし、現世を荒らす悪しき霊体・虚（ホロウ）に襲

われた際に、出会った死神・ルキアから「死神の力」を譲り受けた。以降、それをきっかけに、死神の仕事を代行する。

母親を早くに亡くしているため、かえって家族の結束は固い。妹が二人いるため、無自覚な世話焼き気質。

オレンジ色の髪に茶色の瞳。身長は１７４センチ。ちょっと鋭い目つきのせいで絡まれやすい。

#69　始まらない物語ー災厄の足音ー

ちょうど、赤い弓兵が、その腕前を厨房の料理人に披露しているのと同じころ。

トリステイン魔法学院の学院長室には、ひとりの客人が訪れていた。

「そうですか……ルイズが使い魔を」

真相は明かされないままに、婚約者である少女が使い魔を無事に得たという話を聞いて、鼻下から顎先にかけてヒゲを蓄えた騎士・ワルドは双眸を細めていた。

「うむ。いっぷう変わった使い魔ではあるがのう」

「できれば顔を見て行きたいところですが……彼女はまだ授業中ですか？」

応接用のソファに座っているのは、風采の良い男だった。ヒゲと同じ、淡い髪色に涼やかな目元は貴公子然としているものの、その長身は軍人らしく鍛え上げられている。

「そうじゃのう。この時間が終われば、昼食になりますわい。それまで、しばし学院でゆっくりしてはいかがかね？」

姫様も、使いに出したそなたを咎めるようなことはするまい。

ワルドから受け取った手紙――それは、近いうち、トリステインの王女・アンリエッタが学院を訪問するという内容の――を読んでいたオールド・オスマンの言葉に、男は「ありがとうございます」と微笑む。

「では、お言葉に甘えることにします。昼食まで、学院を見て回っても？」

「かまいませんぞ。ああ、それと」

腰を上げるワルドに、老魔法使い（メイジ）はこう声をかけた。

「最近、東方から来たという留学生を入れましてな。悪い人物らではないのだが……ミス・ヴァリエールとは、折り合いが良くない。もし、もめるような場面を見かけたら、それとなく止めてもらいたい」

「ふむ。心得ました」

ふとワルドは、ドアの前で足を止める。彼は珍しく背を向けたまま、オールド・オスマンに対して問いを投げた。

「……ルイズの魔法は、あいかわらずですか？」

「……あいかわらずじゃ」

使い魔を得た後も、という老人の返事に、グリフォン隊の隊長である騎士は、「そうですか」とだけ呟き、学院長室を辞した。

そして厨房の作業台では。

肉巻きおにぎり。めはり寿司。おかかに梅に塩昆布。海苔を巻いたの。塩だけのもの。

丸、三角、俵と、具材の区別をつけやすくするために、違う形で握られた、一口サイズのおにぎりたちが、行儀良く皿に並んでいる。

少し冷まして、荒熱を取った白米で作られた、その料理たちは、まだ温かさを孕んで、食べられるときを待っていた。

「急いでいたし、こんなものか……」

調理に使ったボウルを片付けながら、それでもアーチャーは、満足のいくできばえに頷いていた。

「ホントはもち米でも炊きたかったんだけどねぇ。時間なかったし」

「ああ。あれはあれで弾力があって美味いからな。しかし炊く時間を考えると、これでギリギリだろう」

「炊いた穀物の中に、具材を入れる料理か……それを混ぜたり、包んだりするだけでも、ずいぶん変わるもんだな」

一緒に調理したマルトーも、初めての料理にしげしげとできあが

ったものを見つめている。
「他にも調理方法はあるのだが。昼食の時間が近い。配膳の邪魔になってはまずいだろう？」
定番の一つである鮭は、いかんせん手元になかったのと、焼く時間を惜しんだのとで、残念ながらここにはない。
肉巻きおにぎりだけは、真言から土産としてもらった「何かの肉」（異世界産）を七季が保管していたため、薄切りにしたそれに下味をつけ、軽く焼いたものを使ったのだ。そのあとに味噌ダレでこってりと仕上げ、小ネギを散らしてある。
味噌ダレの香ばしさが、否応なく食欲をそそる一品だ。
あとは、梅や塩昆布などの保存食。おかかも、常備菜として、アーチャーが作っておいたものである。
ちなみに、めはり寿司というのは、高菜の浅漬けの葉でくるんだ、弁当用のおにぎりのこと。本来は、その名の通り、目を見張るほどの大きさだったとも言われているが、今回は食べやすいように一口サイズで揃えたのだ。
というか、そろそろ七季の収納スペースに何を突っ込んでいるんだと、ツッコミが来ても良さそうなものだが、少女いわく「ごはんとおかずがあれば、どこ行っても困らないじゃない？」という答えが返ってくるだけである。
つけ加えるなら、今回、米を炊いたのは、これまた七季が持ち込んだ羽釜だったりする。
だから収納スペースに何を突っ込んでいるんだと（以下略）。
アーチャー自作の惣菜が、何故か主である少女の懐――もとい、収納空間――にしまわれているのも、ちょっと問題な気がするが。
その七季はというと、こちらは使った羽釜から、ペリペリおこげをはがして、皿に盛っている。これはこれでサクサクしていて美味しいのだ。
「気遣いありがとよ。しかし……そっちのお嬢さんも、良くこんなに食材を持ってきたなあ」

梅干だの塩昆布だの、海苔だのと、おにぎりに使った具材を、次から次へと取り出しては、アーチャーやマルトーに渡していく少女に、料理長はおろか、厨房にいる料理人やメイドまでもが唖然としていた。

「企業秘密でっす」

にぱー、とご機嫌に笑う少女は、「ごはんだ♪ごはんだ♪」本当に嬉しげで、マルトーも笑い出したくなる。他の料理人たちも苦笑顔だ。

――ここまで料理を心待ちにされれば、そりゃあ作ってやりたくもなるだろうなあ。

短い時間の中で、マルトーが自分に劣らぬと認めた料理人、アーチャーに「冥利に尽きるってやつかね」と振り返る。

いっぽう七季は、ざっと洗ってきゅこきゅこ綺麗に拭き上げた羽釜を、やっぱりどこからともなくしまい込んだ。まあ、仕組みは例のアレなのだが。

そして黒髪の少女は、いそいそと大皿を持ち上げる。あぶった海苔の香りがふわりと芳ばしく漂い、それに、あわててメイドが皿を取り上げようとした。

「お待ちください！　私が運びます！」

「を？」

きょとん。

ぱちぱちと七季は、大きな目を瞬いたが、数秒後には正気に戻って（目の前のおにぎりに、かなり浮かれていたらしい）、あどけない頬をきりりと引き締めた。

アーチャーにとっては、少女の腰あたりに、ぱたぱた動く尻尾の幻覚が見えているけれど。

「ああ。仕事を取って悪かったね。忙しいところに煩わせて申し訳ないけど、運ぶのを手伝ってくれるかな？」

こういった雑事も、メイドの仕事である。七季はそれを思い出し、やんわりとした口調で黒髪のメイドに頼んだ。

生徒の一員としてあつかわれている七季に、こういう運びものをさせて知らぬ顔をすることは、メイドたち使用人にとって、怠慢と言われても文句の言えないことになってしまう。

「はいっ。マルトーさん、配膳の方は……」

「わかってる。代わりに頼んでおくさ」

黒髪のメイド――シエスタという名前の娘は、皿を持ったまま会釈する。

そのやりとりの間に、アーチャーも洗いものを済ませたようで、エプロンを外しながら――といっても、じつはバリアジャケットのデザインを変えただけなのだが――ふたたび赤い外套をまとって、七季たちの下に歩いてきた。

「ではマルトー氏。厨房を使わせてもらって感謝する。我々の分の昼食は、そちらで食べてもらってかまわない。夕食はいただく予定だから。すまんな」

「あ、おい。こっちの皿のは？」

言いながら、マルトーは、十個ほどおにぎりが乗った皿を指差した。

「ああ。おすそ分けだ。あまり量はないが、まかないにでも出してくれ。

温かい方が美味しいが、冷めても食べられるから、何だったら持って帰ってもかまわんよ」

ひらひらと大きな手を振って、こちらもシエスタ同様、片手におにぎりの並ぶ大皿を運ぶ白髪の偉丈夫。

「アーチャー、早くっ」

まるで待ちきれない子犬のように、黒衣をまとう小柄な少女が、くいくいと男の赤い外套を引っ張って先を急かす。

長身の従者を見上げるまっくろな目が、星屑を孕んだようにきらきらしていて、見るものが絆されそうなくらい期待に満ちている。

シエスタも、思わず実家の弟妹たちを思い出した。

「まったく……行儀が悪いのだがな」

ほら、と言いつつ、褐色の肌の男は、こっそり投影した箸で、手まり寿司に良く似たサイズのめはり寿司をひとつ、飢えた主の口に放り込んだ。

「んむ」

少し深みを帯びた緑の高菜に包まれた丸いおにぎりは、黒髪の少女を落ち着かせるには十分だったらしく。

「ｖ」

少し頬を膨らませた小動物よろしく、むぐむぐやりながら、七季は弾んだ足取りで従者たちの先導にと歩き出す。小さな背中で、ポニーテールの黒髪が、しっぽよろしく左右に揺れた。

その素直なさまに、シエスタも笑いを誘われて、愛らしい顔をほころばせている。

「可愛らしい方ですね」

「まあ、な。しかし、我々のために手間取らせてすまない。言ってみれば、主のわがままだからな。私からもわびておこう」

「いえ、そんな！」

戦士然としたアーチャーから謝辞を受けて、シエスタは目を丸くしつつもかぶりを振った。

もっと無茶を言う貴族の方が、うんと多いのだ。

それに比べれば、七季らのふるまいなど、可愛いものである。

「でも、ちょっと意外でした。貴族の方って、確かに好みにはうるさいですけど、あんなふうに……失礼ですけど、うちの弟や妹みたいに、おなかをすかせて涙目になるなんて」

可愛かったですけどね。

シエスタは、短い時間だけで、七季たちが他の「貴族様」とは違うことに気づいて、少し口を緩めた。

そして、運命が交差する。

ワルドの目は、黒髪の少女に気づき。
鋭い鷹の目が見慣れぬ騎士を怪しみ。
神使（しんし）の少女は、出くわした男を、しんそこ胡散臭いと直感した。
「やあ。こんにちは。君が、東方から来たという留学生かな？」

#６９　始まらない物語ー災厄の足音ー（後書き）

あとがき
＞ワルド登場。
書き直したら、しぜんとこうなりました。
前触れもない訪問ではなく、いちおうアンリエッタの予定を知らせる使者として出してみました。

前回、出来心で番外編を書いたら、そのままノリで尸魂界（ソウルソサイエティ）乱入編とか書きそうになったので、我自重。
酔っぱらい霊能者ズが、ノリで虚（ホロウ）フルボッコにする話とかな。

＃７０　始まらない物語ー空っぽー（前書き）

まえがき

＞今回はルイズアンチ的な傾向があります。お嫌な方はブラウザバックぷりーず。

#70　始まらない物語ー空っぽー

アーチャーやシエスタを無視して、まっさきに声をかけられた七季は、目の前の帯剣した男には答えず、ささっと従者の影に隠れた。
まるで人慣れない猫のよう。常の彼女にはあるまじき行いに、盾にされた形のアーチャーが、少しだけ目を見開く。
「マスター？」
皿を揺らさない程度の力で、くいくいと腕を引かれ、赤い外套をまとう男は、黒髪の少女へとかがみこむ。そのさまを、シエスタとワルドはけげんそうに眺めていた。
「『知らない人と口をきいてはいけません』って言われてるから、って伝えて」
＜ぶっちゃけ私、あの男としゃべりたくない。何か変な感じがする＞
ぼしょぼしょと耳に小声でささやくのとは別に、アーチャーの頭に流し込まれる念話が、赤裸々に七季の本音を語る。
＜変な感じ？＞
＜何だろう……妙に空っぽというか、とにかく変＞
「了解した、マスター」
ふだんは警戒していても、そうそう初対面の相手に見せるようなことはしない七季の、あからさまな行動に、従者はそれが近づきたくもないということか、と理解した。
最初から態度に出すことで、相手からも線引きをさせようというのだろう。もし、それを見てもなお踏み込んでくるというのなら、それこそはっきりと遠ざけてかまうまい。
「失礼しました。我が主は、知らない御仁と口をきかぬよう、ご両親から言い渡されているもので……」
主の非礼は、代わっておわびします、とアーチャーは白く褪せた

頭を下げた。
「これは失礼。レディにぶしつけなことをしてしまった。私はジャン＝ジャック＝フランシス＝ド＝ワルド。トリステイン王国が魔法衛士隊、『グリフォン隊』の隊長で、子爵の身分をいただくものです。
よろしければ、レディのお名前をうかがっても？」
立礼するワルドに、渋々といった感じで、黒髪の少女は従者の影から顔を出した。
しかし、いったん前に出ると、立ち居振る舞いは典雅なものだ。しゃんと背筋を伸ばすと拱手の礼で応じる。
黒衣をまとう少女は、小柄な容姿ながら、まっすぐに闇色の瞳を向けて、金鈴のごとく凛と響くソプラノで名乗りを上げた。
「初めまして、ワルド子爵。
東方から参りました、ナナキ＝ナナチと申します。
若輩の身ではありますが、故郷では『神使（しんし）』の身分を賜り、神妻である『柱』の巫女姫にお仕（つか）えしております。
これなるは我が従者、アーチャー。以後、お見知りおきくださいませ」
拱手の手をほどいた七季は、白い手を伸ばして、傍らの使い魔を紹介すると、「では失礼」と締めくくり、そのまま立ち去ろうとした。
そっけない態度に、ワルドも苦笑がちに道を空けようとした。
男にとってのファーストインプレッションは、せいぜい「人見知りがちで頑なな少女」というところだろう。追加するなら「それなりに身分の高そうな」が枕詞につくぐらい。
そこで、終わっていれば。
「ワルド様っ？」

が、廊下に響いた高い声に、いっぽうは眉根を寄せ、いっぽうは腕を広げて歓迎を示した。
「やあ、ルイズ。久しぶりだね」
「どうしてワルド様がここに……っ？」
ピンクブロンドの少女が、黒いスカートを翻して、足早に駆けてくる。
望んで聞きたくはないが、覚えのある声に、七季はシエスタと従者を急かして、さっさとその場を後にしようとしたのだが。
「ちょっと。何でアンタが……あなたが、ワルド様と話してたのよ？」
――ほっとけよ。関係ないだろ。
ないしんそうは思っていても、礼儀として最低限、七季は対応しようとする。
「たまたまワルド子爵から声をかけられたので、名乗っただけです」
他意はありません。
けだるげに切れ長の黒い目を流す少女は、そうすると長い睫毛が影を作り、あどけない面輪におとなびた影を作る。
ふだん大きな目を開けていることが多いため、そう目立つこともないのだが、七季がふとした拍子に目を伏せると、しぜんと退廃的な趣を醸し出した。
まったく意図しないところで、ぞっとするような色気のある流し目になり、ルイズの背後にいた男子生徒たちがいきおいざわめく。
洩れるためいきとあいまったそれを、色目を使ったのだと曲解したピンクブロンドの少女は、きんきん響く声で七季を糾弾し始めた。
「言っておくけど、ワルド様は魔法衛士隊の隊長なんですからね！　ヴァリエールとも親しかったんだから。何か魂胆があって近づいたんじゃないでしょうね！」
――言いがかりもいいところなんだけど。
はぁ、とこぼれる吐息は、精神的な疲労を孕んだもの。ワルドに七季が目を向けたのも「誤解を解いてください」という意図を込め

て。
しかし、視野狭窄もいいところのルイズには、あくまで神経を逆撫でするものにしかなりえない。
「ワルド様に色目なんか使わないで！　汚らわしい！」
――盛りのついたメス猫か。
ぎゃんぎゃんわめくツルペタ少女を、もはや七季は一顧だにしなかった。時間の無駄だ、と判断したのだ。
「アーチャー、行こう。せっかくのご飯が冷めてしまう。相手をするだけ時間の無駄だ」
言葉の通じない相手に尽くす言葉はない。
いきりたつルイズとは対照的に、七季の声は落ち着いていて低かったが、かえってそれは廊下に響いた。
シエスタに声をかけなかったのは、七季が声をかけることで、立場が弱いメイドの少女にまで矛先が向けられないように配慮した結果である。そして、その判断は正しかった。
「何ですって！　こんな貧相なものと私を比べることじたい……っ！」
ルイズは、彼女にとって手近にいた、アーチャーの持っている皿を叩き落そうとしたのだ。もし、シエスタにまで注意が言っていたなら、より弱いメイド少女の皿を狙っただろう。
だが、世界の奴隷から解放されたとしても、英霊は英霊。
歴戦の戦士が、ルイズ程度に後れを取るはずもなく。
ひょいっと身をかわす赤い外套の男。いっぽう、すかされたルイズは当然、目標を見失って体勢を崩す。
「あっ」
もちろんアーチャーに、ピンクブロンドの少女を助ける義理はない。そもそも、七季が相手をしていないのに、わざわざつっかかってくる、ルイズの好戦的なところにアーチャーは眉をひそめていたのだ。
最初からケンカ腰で、人の話を聞く姿勢がかけらもない。

こういう手合いは、最初にガツンと食らわせてから戦意を削ぎ、その後で言うことを聞かせるのが効果的なのだが、七季が争いを望まない以上、アーチャーも手出しする気はなかった。

逆らわず、しかし屈しない。七季の態度は、現状では大人の対応といえる。

「おっと」

幸いにも、この場合はワルドが手を差し伸べた。

「あ、ありがとうございます、ワルド様っ」

「何、ルイズは僕の婚約者だからね」

キザったらしい口ぶりで笑顔を浮かべるヒゲの騎士は、アーチャーへと目を向ける。

「ところで君は、もう少しレディへのあつかいを学んだ方が良いんじゃないかな？」

「恐れ入ります。主を侮辱する方への敬意は持ち合わせておりませんので」

褐色の肌の男は、鋼色に光る鷹の目を細め、慇懃無礼に返した。

じっさい、七季はかるく目を伏せ、視線を流しただけで秋波など送っていない。

たんなるルイズのひがみと言いがかりである。そもそもルイズに誤解を解くこともしないワルドが何を言うのか。

目礼だけで、黒髪の少女たちと去ろうとするアーチャーへ、ワルドの手が奔(はし)るも――

げしっ。

「おぶぁ！」

やおらヒゲの男は、前触れなく訪れた衝撃に頭を蹴っ飛ばされ、抱きとめたルイズもろもと、ごろごろごろんっ、と廊下を転がりもんどりうった。

ごづーん。

何かが壁にぶつかった音がした。

「よー」

「あ、とら。ごはん食べるよ」
ワルドを蹴っ飛ばしたのは、散歩（？）から戻ってきた、黄金の大妖だった。
実体化し、ネコ科のそれを思わせる後ろ脚は、躊躇も容赦もなく、風のスクウェアを吹っ飛ばして悪びれない。
ワルドとルイズの惨状を、まったくのスルーで妖獣を迎える七季も同類である。
とらにとっては、邪魔だったから蹴っ飛ばしたに過ぎない。
「おう。はんばっかはあるかよ？」
「む。きょうはおにぎり一色なのでな。代わりにライスバーガーを作ってみた」
とらの問いに、料理人であるアーチャーが律儀に答えた。
「ふーん。どう違うのよ？」
「バンズの代わりに、米で挟んである」
そのまま、和気藹々としゃべりながら歩き出す主従と妖獣に、おたおたしながらもついていくシエスタ。
後には。
我に返り、昼食を取るため、食堂に急ぐ生徒たちと、壁にぶつかって気絶したまま、放置されるワルドとルイズだけが残されたのだった。

#７０　始まらない物語ー空っぽー（後書き）

あとがき

＞とら、再登場。

良いトコどりともいう（笑）。

どうやってまとめようと思っていたら、とらが出てきてくれました。

＃７１　ある日の彼女ー悪魔のお茶会ー（前書き）

まえがき
＞今回は、オリキャラ中心の番外編的な話です。
リリなの、ゼロ魔キャラは登場しません。

#７１　ある日の彼女ー悪魔のお茶会ー

つるりと丸い、ボーンチャイナのティーポット。
春摘み紅茶と、たっぷりのお湯も抜かりなく。
テーブルの上、高くそびえるアイアンスタンド。
チーズやサーモン、鴨肉を挟んだサンドイッチ。
色とりどりのプチ・フール。
焼き立てのスコーン。
引き立て役はジャムとサワークリーム。
そこに黒曜石のナイフを添えて。

悪魔のお茶会、始まります。

「本日は、お招きいただきありがとうございます」
黒いスカートの裾をつまみ、ちょん、と一礼した黒髪の少女に、集まった一同は穏やかな笑みを浮かべている。
いずれも、目の覚めるような美貌の持ち主ばかりだ。
黒髪、金髪、銀髪、赤毛、中にはスキンヘッドのものまでいるが、決して見苦しくはない。むしろ、どこか僧侶のような、学者のような、知的かつ精悍な容貌を引き立てている。
瞳の色もさまざまで、さながら宝石の博覧会のよう。
招かれた挨拶をした少女と比べると、話にもならないレベルだが、それでも彼女には黒曜石を思わせる、宝石とはいわずとも、原始的な刃のごときかがやきが秘められていた。
「ようこそ、七季殿。よく来てくださった」

「さ、お席へどうぞ」
ホスト役だろう黒髪の男性が口火を切ると、次いで、給仕役らしいメイド服の女性が七季に席を勧める。
「では、お言葉に甘えて」
メイドにも会釈をしてから、少女は螺鈿（らでん）と黒漆で飾られた木製のイスにそっと腰かけた。
典型的なお茶会である。
まっしろなテーブルクロスには、しみひとつない。
淡い色合いのカーテンやインテリアの中、あえて漆黒のアイアンスタンドには、金でふちどられた三枚のプレート。
それぞれの階層には、サンドイッチ、スコーン、一口サイズのケーキとマドレーヌが鎮座している。
セットされた人数分の茶器には、古式ゆかしい紺色の服に白いエプロンをまとった女性が、二人して紅茶をサーブして回り。
「それでは、皆さん。よろしいかな？」
黒髪の男性は、その場に集まった客人に声をかけると、高らかに宣言した。
「『楽しき悪魔崇拝者（サタニスト）』、開店パーティーを存分に楽しんでいただきたい！」

「初めまして、今代（こんだい）（今の君主や主人の意味。＝当代）。七地七季と申します」
いつもはポニーテールに結っている黒髪を、シニヨンにまとめた少女は、音頭を取った黒髪の男性に、そう名乗った。
「お会いできたことを嬉しく思います。私はアスタロトの名を継ぎしもの。どうぞ、好きなように呼んでください」
優美に微笑む男性――じつは七季以外、この場にいるものはすべて悪魔と呼ばれる人外たちであった。

皆が皆、目もくらむような美貌の持ち主だが、彼らは一様に、ただの人間であるはずの少女へと、熱い視線を注いでいる。
「では、このまま今代（こんだい）と。
くしくも私は、先代アスタロト公爵と親交がありました。短い間ではありましたが……どうぞ、区別をつけるためと、お許しください」
スタンドカラーのブラウスに黒いスカートを合わせてまとう七季は、そっと目を伏せ振り返る。
おのが存在が悪であることを強いられる、その長すぎる生に抗うために戦った魂は、既に輪廻の輪の中だ。
「ええ、その話は聞き及んでおります。天界・人界・魔界を巻き込んだ、神魔大戦……あれを生き抜かれたとは、なかなかどうして」
先代の悪魔公爵アスタロトがもくろんだ、神への、否、世界への造反（クーデター）。
仮にも、そのころ既に「神使」であったとはいえ、七季は、か弱き人の身でありながら、それに巻き込まれたのだ。
悪魔たちからすれば、驚くべきことであった。
じつをいえば七季は、もっぱらラスボス・アスタロト――アシュと彼女は呼んでいたが――の側で、お茶を飲んだり、人生相談（聞き手）をやっていたくらいなのだが。
それは言わぬが花、ってやつである。
「こうして今代（こんだい）にお目にかかれたのも、何かの縁でございましょう」
ふわ、と薫り高い紅茶を含んで微笑む七季は、本当に幸せそうに目を細める。
ルビー色の飲み物は、こくのある、それでいて渋みの少ない、とびっきりの極上品だった。
ふはあ、と少し子供っぽい、それだけに正直な感嘆が見て取れるためいきが、桜色の唇から洩れる。
「とっても美味しいです。行きつけのお店が、ひとつ増えそうですね」

あどけない面差しの中には、過去への憂いは既にない。
にこにこしながら、悪魔の開いた店を褒める少女に、「光栄です」と黒髪の公爵は口端を上げ、同席する男女もさざめき笑んだ。
みずみずしくも、どこか甘い七季の精気は、そこにいるだけで、人ならぬものを心地よくさせる。まして、彼女が気を許したものにとってはなおさらだ。
黒髪の少女を囲む悪魔たちは、果物じみた香気に似ている、精気のかけらを吸い込んでは、砂糖菓子のようにそれを味わう。
「噂の『誘魔』殿のおめがねにかなったのなら、商売もひと安心です」
美貌の悪魔公爵も、きゅうと目を細めて、サンドイッチをつまむ七季を眺めていた。
悪魔うちで、彼女のグルメっぷりは知らぬものがないほどだったりするのだが――幸か不幸か、七季が魔界のゴシップ事情に詳しいわけもない。
いっぽう魔族たちの間では、七地七季という人間は、たいそう有名人だったりする。
否、それは『人』としてというより、伝説の宝石、神話の食べ物にも似たあつかい。
誰もが名前を知っているが、実物を知る者は一握り――神魔大戦の事後処理に関わったものか、たまたま運よく知り合ったものだけ。
まして、この『お茶会』に参加できるのは、熾烈な競争を制した実力者のみ。そのうえローテーション制なのである。
とある国のことわざにいわく「うまいものは一人で食え。まずいものは大勢で食え」。
人数が少ないほど、分け前は多くなるのだから。
――うむ。人間も上手いことを言う。
いまだ若い、今代アスタロト公爵は、しみじみと頷き、目の前の少女を見つめていた。そうするだけで、ふわりと漂う果物じみた香りが、心地よい酩酊感とともに、彼の霊体までも溶かすようだ。

視線を向ければ、無意識に流れる公爵の魔力も、不思議なことに、すうっと七季の中に吸い込まれていく。それを妙だとも思わない。

人間を呪縛し魅了する、悪魔のまなざし。邪眼（イヴル・アイ）とも呼ばれるそれは、魔性の力によるものだが、この黒髪の少女は、それに惑わされることもなく、水か酸素のように吸い取ってしまうらしい。

紅茶が注がれる水音や、プチフールをサーブする物音をＢＧＭに、和やかな空気が店内を満たす。

クラシックをアレンジしたバイオリン曲も、午後のお茶会を邪魔することなく会話の合間を流れていった。

#７１　ある日の彼女ー悪魔のお茶会ー（後書き）

あとがき

＞年末あわただしいので、申し訳ありませんが、ストックからのＵＰです。

以前、ちょっと感想からいただいていた、ＧＳアシュタロスについての話をば。

補足すると、作中でオリ主が「先代」と呼んでいるのが、ＧＳでコスモ・プロセッサを作り、神魔大戦を引き起こしたアシュタロスのことです。

今代（こんだい）アスタロトは完全にオリキャラですので、ご了承ください。

字数が多かった気がしたので、二つに分けました。続きは明日ということで。

オリ主の口調が違うのは仕様です。場の雰囲気に合わせてます。

スコーンにはクロテッドクリームが定番なのでしょうが、以前オニオン入りサワークリームつけて食べたスコーンが絶品だったもので……（をい）。

あと固めのスコーンも悪くはないのですが、ふんわり焼きたての、やわらかいスコーンはいっぺん食べると癖になります（何の話だ）。

＃７２　ある日の彼女ー誘魔のお茶会ー（前書き）

まえがき

＞引き続き、前回と同じく、オリキャラ中心の番外編的な話です。

リリなの、ゼロ魔キャラは登場しません。

#７２　ある日の彼女ー誘魔のお茶会ー

「『誘魔（ゆうま）』ですか。どっちかというと、庁内じゃ『ＵＭＡ（びっくりナマモノ）』あつかいですけどねぇ」

「まあ」

「いやいや、上手いことを」

「ちょｗ」

代替わりの挨拶がてら、このお茶会を開いた今代（こんだい）アスタロトを除けば、参加者は、これまでに何度か七季とお茶を飲んだことがあるメンバーである。

したがって、ドレスや礼服に身を包んだ悪魔たちは、七季の二つ名をネタに、気安いノリでころころ笑う。

いったい誰が始めた風習なのか、帝都心霊庁には、前線で戦う職員にコードネームをつける慣例を設けていて、しかも自己申告がなかった場合、上司がつけることになっている。

役所としては、ほとんど存在が秘されている帝都心霊庁と、他の部署の職員が合同で作戦に当たるときに使うためだというのだが……これが、非常に、厨二くさい。

まあ、新入りのときに、うっかり上司から厨二っぽい二つ名をつけられた人間が、部下を持つ立場になったとき、同じ羞恥プレ……もとい、伝統を受け継いでいる、ともいう。

そして、わざわざ七季が「誘魔」の二つ名をつけられた理由は、もちろんある。

「それでは、ナイフをお借りしたいのですが」

ざわ、と悪魔たちに緊張が走る。

しかしそれは、敵意や警戒ではなく、期待を孕んだものに過ぎない。

メイドの一人が、心得たように奥へ下がり――ほどなく、抜き身のナイフをナフキンに乗せて捧げ持ってきた。こちらも、お茶会の常連で、七季の見慣れた悪魔である。

「今代（こんだい）の継承をお祝いして、私からもささやかな供物（くもつ）を」

漆黒の刃は、良く見れば金属ではない。黒曜石を磨いて、薄く研ぎ上げたものを、象牙の柄にはめ込んだものだ。グリップには、ここにはない鞘と揃いの意匠が、金とルビー、それから赤水晶で装飾されている。

差し出されたそれを、白い小さな手が取り上げる。

七季は、原始の時代から使われてきた石の刃を、さっとおのが手の甲に走らせた。

すかさずメイドが、その下に白磁の杯を置く。まっしろな雪さながらの器に、切り口から滴ったばかりの血潮が、鮮やかな色を添えて悪魔たちの目を焼いた。

ごくり、と複数の喉が鳴る。

「こちらは、いつも通り、皆さんの紅茶にどうぞ。

今代（こんだい）殿には、失礼ですが、新鮮なものを手ずからと思うのですが……」

少女の言葉も半ばまで。

既に、アスタロトの名を持つ男は、流血する七季の手を取っていた。

その美貌はうっとりと蕩け、切れ長の瞳は酩酊しているように潤んでいる。並の人間であれば、十人が十人、残らず欲情するような凄艶さだ。

その様を、七季はまるで猫に甘噛みされるかのような面持ちで、微笑を浮かべながら黙認しているだけ。傷がない方の手にフォークを握り、優雅な手つきでプチ・フールをつついている。

いっぽう、あどけない少女の傷口から血をすする悪魔公爵の姿は、まるで忠誠のキスさながら。夢中になって舐め取っている。

喉を鳴らすほどの量があるわけでもない。それでも、ティースプ

ーン一杯がせいぜいの、他の悪魔にとっては、羨ましいほどの特権である。祝いの品としては、当たり年のワインよりも価値があると言っていい。

これぞ「誘魔（ゆうま）」の所以（ゆえん）――血液のみならず、魔性のものを惹きつける体質（フェロモン）は、生き物として、七季が生まれ持った天稟（てんぴん）だった。

人間であり、「神使（しんし）」でありながら、魔族を忌み嫌うことなく。さりとて契約もせず、少しの親交と、献血（おくりもの）を続ける少女。

自分に正直な彼女は、悪魔が付け入るような隙を見せない。ささやかな願いは、自分で相応の努力をするか、周りを丸め込んだり、巻き込んだりして叶えてしまうし、さもなくば、あっさり見切りをつける。

自分が仕（つか）え、信仰するはずの神々に対しては、もっとおかしい。願うよりも慰めを差し出し、荒ぶる力を鎮めるために走り回ってことを収める。与えられる恩恵は、しっかりばっちり受け取っているが、人間であればもっと高望みをしてもおかしくない。

人の欲望を満たすことを生業（なりわい）とする悪魔からすれば、ずいぶん妙だと首をかしげる行動だが、彼らに問われた七季は、それを笑っていなすだけ。

「神様の祟りは、ささいな願いよりもずっと恐いですよ？」

荒れる天候。流行（はや）る病。日照りに不作、水不足。

それが収まることは恩恵なのだと、少女は言う。平穏な暮らしは、むしろ自分が欲しがるものの一つなのだと――欲望には違いないだろうと、悪魔たちに説く。

「私は欲張りだからね。平穏っていうのは、とっても贅沢なことでしょう？

美味しいものが食べられて、こうしてあなたたちと、ゆっくりお茶が飲めるんだもの」

心からの言葉に、おのおの頷く美貌の人外。
「なるほど」
「それは確かに――贅沢なこと」
下克上は日常茶飯事。身分やルールは遵守されるが、そのいっぽうで、弱いものは蹴落とされるが、悪魔の常。地位を上げたければ、そこに座るものを打ち倒し、引き摺り下ろすのが魔界の近道。
こうして、お気に入りの存在と、誰に邪魔されるでもなく、心地よく穏やかに過ごせる時間は、魔性のものたちにとっては稀なこと。だからこそ。
人間界で開かれる、月に一度のお茶会は、場所を変え、メンバーを変えども、たったひとりを囲んで繰り返される。
悪魔たちは、その輪に加わる日を、心待ちにする。
紅く濡れた音は、いまだ止まらず。
少女の笑みが崩れることもなく。
紅茶の湯気は薫り高く。
魔性が集うお茶会は、きょうも穏やかに過ぎていく。

#７２　ある日の彼女ー誘魔のお茶会ー（後書き）

あとがき

＞というわけで、オリ主の二つ名をつけてみた。

しかし帝都心霊庁での、オリ主の通り名は「誘魔」よりも「ＵＭＡ」もしくは「魔物ホイホイ」だったり。

攻撃力は低いのですが、魔性系全般に対して好感度が高いので、下手な護符より役に立ちます。囮や避雷針的な意味で（待て）。

ＧＳアシュタロスも、そのうち出します。

#７３　ある日の彼女ー魔性のひとー（前書き）

まえがき

＞引き続き、前回と同じく、オリキャラ中心の番外編的な話です。

リリなの、ゼロ魔キャラは登場しません。

#73　ある日の彼女―魔性のひと―

「それじゃ、ごちそうさまでした」
「いつでもおいでになってください」
悪魔が開いた喫茶店「楽しき悪魔崇拝者（サタニスト）」を辞した七季は、ショートカット用の小道を抜け、レンガが敷き詰められた歩道に出た。
あたりは日も暮れかけた黄昏時。
紫苑色に暮れる空の下、斜めがけのシンプルなショルダーバッグから携帯電話を取り出すと、少女は登録してあるナンバーを選んでコールした。
耳に聞こえる着メロは「ミッドナイト・シャッフル」。
一昔前の曲だが、液晶のディスプレイにはコール先の相手が表示されていた。
「芦優太郎」と。

黒塗りの高級車に揺られ、七季は運転手に声をかける。
「芦君のお加減はいかがですか？」
「最近は、ご回復もめざましく……おかげさまで」
壮年の運転手は、制帽と白い手袋をきっちりと身につけた姿で、礼儀正しく黒髪の少女に答えを返す。
「そうですか、それは良かった。きょうはどれくらい時間があるでしょうか？」
「一時間といったところでしょう」
「では、四十五分たったらお暇することにします」
「了解しました」

途中から主語の消えた会話を、壮年の男と女子高生は淡々と交わす。まるでそれがしきたりのように。

「こんにちはー。七地ですー」

コンコン、とノックする少女に、病室の奥から、入室の許可が出た。

がらら、と引き戸のドアが中から開かれる。サングラスをかけた強面のボディガードが、小さく頷いて「ようこそ」と歓迎の言葉を告げる。七季も一礼して、部屋に踏み込んだ。

彼女と入れ替わりに立ち去る足音。もっとも、ボディガード数人は、部屋の前で控えているのだろうけれど。

「やあ、いらっしゃい」

黒髪の少女を出迎えたのは、病室のベッドに座ったまま、書類仕事をしている美貌の男だった。

「久しぶり、アシュ」

「ああ、久しぶり」

最後に会ったのは四日前かな。

にぱりと笑う七季に、亜麻色の髪の男は、少し目元を緩めてイスを彼女に勧めるのだった。

芦優太郎――アシ・グループの若き総帥にして、つい最近まで、事故による昏睡状態だった男だ。

しかし、それは表向きの話。

芦優太郎といえば、かつては神魔大戦において、偽りの世界の中で、アシュタロスが美神を騙しきるために使った「人間としての」名前である。

どういうことかというと。
「仕事ばっかりしてると、体壊すぞ？」
「はは、しかしこれが私の仕事でね。まあ、魔族だったころよりはやりがいがあるよ」
ようするに、いま七季の目の前にいる男は、かつて「アシュタロス」であった魂であり――げんざいは人間として、輪廻の輪に放り込まれた存在なのだった。
そしてつじつまを合わせるため、じっさいには後継者問題で紛糾していたアシ・グループに、「芦優太郎」という存在を押し込み、いままでの不在を「事故による入院のため」と工作された。
神魔そろって、国家までもグルになった偽装工作である。真実を知るのは一握り、というわけだ。
「魔族のころと同じノリで仕事すると体壊すって言ってんだよ、私は」
で、その一握りであるところの存在が、七季である。
ベッド脇に置かれたイスに腰かけた、黒髪の少女は、ぐりぐりと無造作な手つきで男の頭を撫で、かき回す。
目上の相手に――しかも男にやることではないが、優太郎は、くすぐったそうに琥珀色の目を細めて、七季にされるがままだ。
「君と、またこうして会える日が来るとはな」
「やー。我ながら、エンカウント率の高さがコワいわー」
にこやかに話すふたりだが、もちろん、最初からアシュタロスの記憶をそのままにされていたわけではない。
人間に転生――ならぬ、編生（へんせい）――させる時点で、神魔大戦を引き起こした悪魔としての記憶は、封印された。
この時点では、「芦優太郎」は記憶喪失として、人間に生まれ変わったのだ。
ところがどっこい、どんどこしょ。
たまたま病院を、友人の見舞いで訪れた七季が――この時点で、彼女はアシュタロスの編生体が入院しているとは知らなかった――

たまたま、中庭でぼーっとしている優太郎を見かけたのだ。
車椅子に座った、入院患者らしき男が、看護婦もつけずに一人でいるものだから（このころボディーガードを不審がった優太郎は彼らを遠ざけていた）、何となく声をかけたのが七季で。
それが、すべてのきっかけだった。

『君は……』
『具合でも悪いんですか？　あ、看護婦さん呼んできますね』
頭を抱える優太郎に、その場を立ち去ろうとする少女を、男は腕をつかんで引き止めた。
『ダメだ。ここに。何かが思い出せそうなんだ……！』
『……？　でも、頭痛いんじゃないですか？』
ああ、そういえば。
『おにーさん、私の友達に似てます。生真面目で美形で、なのに職場環境が悪くって、思いつめて自爆しちゃったひとに』
『ッ……あああ！』
『ちょ、看護婦さーん、看護婦さーん！』

一度に記憶を取り戻すことはなかった。
しかし、それ以来、優太郎は七季に固執し、週に一度は必ず自分を見舞うように懇願し。
結果として、彼女がそれに応じた結果、じょじょに男は「記憶喪失の人間」から「アシュタロス」としての記憶を取り戻し始めることになる。
いまでは、すっかり以前の記憶や知識を取り戻し、企業の総帥として立ち回れるだけのものは手に入れたのだ。
残念ながら、「芦優太郎」としての体には、魔族の魔力がないために、そのテの知識はあっても、術は使えない状態だが。
それでも彼は、友人を一人、ふたたび手に入れることができたし、やりがいのある仕事も環境も与えられている。能力も常人以上だ。

神魔の上層部は、とっくに「優太郎」が「アシュタロス」の記憶を取り戻したことを知っているだろうが、これまでに何のアクションもないことから、黙認することにしたのだろう。

「なあ、アシュは退院したら、まず何がしたい？」

黒髪の少女は、男の頭を抱え込んだまま、ぐりぐりと優太郎のそれを撫で続ける。まるで「頑張りました」と褒めるように。

優太郎の仕事をする手は、完全に止まっていた。このあどけない面差しの友人が来る時間を、ないしん彼は、とても大事にしているのだから。仕事を続けようとしていたのも、ちょっとしたポーズに過ぎない。

そうすると、必ず、この年下の友人は、彼を心配してくれるのだ。男を「アシュ」と呼ぶのも、いまや彼女だけの特権である。

「そうだな……快気祝いのパーティーでもやろうか」

いっぽう、長く伸びた髪を、後ろでひとくくりにした男は、ニッといたずらっぽい笑みを浮かべた。

「パーティー？」

「君やメフィスト……いまは美神令子といったか……関係者一同を招待して、アッといわせてやるのも、面白いだろう？」

「ぶは！」

噴き出した七季は、ここぞと共犯者の笑みを浮かべて、協力を申し出る。

「んじゃ、招待客のリストアップは、私がしておこっか？

みんなの連絡先は知ってるし――表向きは、キーやんとサっちゃんからの企画ってことにして、口裏を合わせてもらおうよ。新たな魂の門出を祝う、とかなんとか」

ルシオラを想う横島少年も、落ち着いたいまなら、会わせても大丈夫だろう。いずれルシオラは、横島の娘として生まれてくると決まっている。

「……いつのまに、上層部と知り合ったんだ、君は」

むー、と眉間にしわを寄せる優太郎は、しかめっつらでも美形で

ある。ただし言動は、まるっきり、友人を取られて拗ねる子供だ。
「ん？
そりゃー、アシュの処遇を話し合ってるところに、ねぢこんだときに決まってるさー。『芦君』の背景や事情を捏造したのも私だぞ？いままで、さんっざんコキ使ってケアせずに放置してたんだから、そのぶん環境くらいは整えてやれってね。そのときルシオラちゃん転生の件も、きっちり確約ぶんどってきたし」
本当は、子供で転生、ならぬ編生する案だったんだけど。
「君が」
優太郎は、ぎょっと目を丸くした。というか、神魔上層部の相談に、人間がねじ込むあたりで、既にびっくりな話である。
「うん。本当は、愛情あふれるご家庭で育てられる子供だとベストだったんだけど、残念ながら適性のある親御さんが、この環境下にはいなかったみたいで。
んで、そんだけ恵まれた環境にある子供で孤児だと、今度は利用するために、良くない大人が寄ってきそう、ってことで、既に成人済みって設定にしたみたい」
「なるほど……」
だからこその、記憶喪失だったわけだ。
つじつまを合わせるには、「記憶がない」方が都合がいい。二十年以上も――この体では二十六歳という設定らしいが――記憶を一から捏造する、というのは、なかなか手間のかかる作業だ。どこかでボロが出る確率は高い。
「どこに『生まれる』かは、私も教えてもらってなかったんだけどさ。偶然、アシュと出くわしちゃうなんて、これも縁かなぁ」
ころころ笑う少女は、かつて「アシュタロス」が出した犠牲の数も、引き起こした事件も知っている。
あまつさえ、その身柄を人質とするために攫ったことすらある。
――それでも彼女は変わらなかった。
もっとも、それは七季の大事な存在や、彼女じしんを、じかに害

さなかったからではあるが。
七季がアシュタロス陣営に誘拐されていた間、この黒髪の少女は、もっぱらラスボス・アシュタロスの茶飲み友達となっていたのだ。
それまでの経緯は割愛する。
けれどもそれが、運命の分岐点だったと言って良い。
あどけなく見えて、優しさや残酷さも持ちあわせる、七季という人間を、男はとても得がたく思い、好いている。
――彼女も魔性だ。
かつて魔性だった男は、いまも思う。
――種(しゅ)としてではなく、本質的に、他のものを惹き込み、縛りつける。それを「魔性」と言わずに何と言うのか。
もろく、危うい、か弱い人間だとしても、彼女もまた「魔性」だったのだと、男は喜びと共に深く笑む。
「そうだな。私も幸運に感謝するとしよう」
ほとんど初めて、男の口から、かけねのない感謝が滑り出した。
この友と再会できた、引き合わせたのが神だというのなら、このときばかりは感謝しても良い、と思えたのだ。
「君と言う友人を得られたことに感謝を」
だから七季。
「困ったことがあったら、いつでも言ってくれ」
微笑む男は、この「友人」に誓いを立てる。
「神使(しんし)」として、長い道を歩く彼女に。
「私は――芦優太郎も、アシュも、君の友人だ。
ゆえに七季、君の敵は私の敵。もしも君を害されたなら――私は全力をもって報復することを」
男の琥珀色の瞳が、強い決意を孕んで、きらきらとかがやいていた。
この場に他の人間がいたなら、きっと魅了されずにはいられないだろう、稀有な美しさをまとって。
人間「芦優太郎」は、新たな道を選び取る。

#７３　ある日の彼女ー魔性のひとー（後書き）

あとがき

＞ということで、人間になった「アシュタロス」の登場でした。今後は「芦優太郎」として顔を出します。ネギま編とかに（をい）。

補足すると、番外編の「今代（こんだい）」は「アスタロト」。「アシュタロス」は世界への反乱を起こした忌み名として、次代は改名されました、ということに。

捏造が多い話ですまんです。

なので、ＧＳアシュタロスは「アシュ」「アシュタロス」のまま、オリキャラのアスタロト公爵は「アスタロト」で区別しています。

名前が違うのはそういうことですので、ご了承の程を。

うん、オリ主は基本的にとんでもない相手ばっかりオトす、たらしスキルを持っています。

エミヤシロウとは、実は似たもの主従（待て）。

＃７４　初詣の惨劇？（前書き）

まえがき

＞引き続き、前回と同じく、番外編的な話です。

リリなの、ゼロ魔キャラは登場しません。

代わりといっては何ですが、ＢＬＥＡＣＨキャラが出張ってます。

#74　初詣の惨劇？

「黒崎くーん！　あけましておめでとー！」
「おおう、今年も何という美しさ――！」
めぎょっ。
「おう。今年もよろしくな、井上。あ、チャド。コンよろしく」
「ああ。おめでとう、一護」
「ん。今年もよろしく」
「ぎゃあああ！　一護オォォテメエェェ！」
「……あけましておめでとう」
「おー石田。これから行くトコは、ひょっとすると尸魂界（ソウルソサイエティ）よかヤバいけど、命の危険はないから気にするな」
「それでどう安心しろと!?　これから行くのは初詣の神社のはずだろう黒崎！」
振袖姿の巨乳美少女に、ダウンジャケットを着たオレンジ頭の少年。さらに同年代のそれより飛びぬけてガタイの良い黒髪天然パーマの少年……？に、メガネをかけた線の細い少年。
そんなちぐはぐカルテット（プラスぬいぐるみ）は、大きな鳥居をくぐって参道へと踏み出した。
神社の名は、神門（みかど）神社――

投光器の投げかける、しらじらとした光に照らされて、参道を覆う梢のアーケードは、霜が降ったようにけぶって見える。
そんな、梢の隙間からのぞく天蓋はいまだ蒼闇。ちらほら星の影さえ目に留まる。それは当然、時刻は朝の六時。

だというのに、玉砂利の敷き詰められた道には、多くもないが目視できる範囲に二十人は見て取れるあたり、この神社の盛況さがうかがえた。

「へえ……こんな時間なのに、開いてるもんなんだな……」

黒髪の少年、雨竜が、レンズの奥で切れ長の目を瞬く。先導する一護が、ついでのように応えた。

「俺も知らなかったんだけどよ。ここでバイトしてるやつが教えてくれたんだよ。この時間がいちばん空(す)いてるんだと」

「そうなんだー」

長い栗毛を和装に合わせて結い上げた少女が、弾んだ声で少年に応じる。

元旦の神社とは思えないスムーズさで、歩みは進む。

数時間前までは、ラッシュ時の電車もかくやという混雑を見せた場所だったとは、とても思えない快適さであった。

手水場(ちょうずば)で手と口をすすぎ、身を清める。地下からくみ上げているという水は、この厳しい冷え込みの中にあって、かえって温かく感じた。

「く、黒崎君、ハンカチある？　良かったら……」

「ああ、大丈夫だ。チャドは？」

「ム。問題ない」

「黒崎……」

ライオンのぬいぐるみ姿であるコンは、さすがに人目があると自覚して、おとなしくはしているが、チャドと呼ばれたガタイのいい少年の懐で、雨竜と同じくジト目を向けている。

参道に連なる小道にズラリと並ぶ屋台を横目に、長くはない道を急ぐ少年と少女。気がつけば、投光器とは違う、灯篭のやわらかな明かりに夜明け前の闇を照らされながら、社務所の前を通り抜ける。

二礼二拍手、一礼。それとお賽銭。

「さて、と」

狭くはない境内である。その四角く玉砂利の敷き詰められた斎庭(ゆにわ)

を、ふちどるかのごとく、臨時に設営されたお守りの授与所のテントがあちこちに見受けられる中。
白い羽織に緋色の袴をまとった影がひとつ。
黎明の薄闇に浮き上がる白い鳥のように、ひらひらと袖をはためかせて、一護たちへと近寄ってきた。
「や、いっちー」
七地七季。
一護いうところの「ここでバイトしてるやつ」である。
いつもポニーテールだった闇色の黒髪は、珍しく背中と首の境目あたりでゆるくひとつに結わえられ、どことなく平安時代の姫を思わせる髪型になっている。
「白いぞ！」
「黒くない！」
「白いな……」
「え、ふつうの巫女さんだよ！？」
四人いっぺんに、さんざんなツッコミが入る。
ちなみに順番は一護、雨竜、チャド、織姫だ。
というのも、げんざい黒髪の少女が来ているのは、いつものトレードマークである、まっくろ巫女服ではなく——白い小袖と羽織り、そして緋色の袴という、ごくごく一般的な巫女の装いであったからだ。
「初詣だからねー。きょうくらいはフツーの巫女さんのカッコもするさー」
ふふ。
口調は変わらないものの、しっとりと品良く笑う、あどけない面輪の少女は、ふだんの快活さというか、奔放さが、なりをひそめている。
「ど……どうした？」
驚いたのは、四人の中でいちばん七季と関わることの多い一護だ。
目つきの悪い少年は、それでも整った顔に心配げな表情を浮かべて、

「何か悪いもんでも食ったのか？」と「熱でもあるのか？」と額に手を当て――
「つめてっ！」
「え？」
オレンジ頭の少年のセリフに、いちばん反応したのは、それを凝視していた織姫である。
手を洗う際に、手袋をはずしていた一護は、そのままダウンジャケットのポケットに手を突っ込んだまま、素手だったのだ。
が、驚くクラスメイトの美少女より、世話焼きデフォルトぎみな兄気質の一護が気を引かれたのは、氷と区別がつかないほどに冷え切った、友人の少女で。
「おまっ……ちょっと来い！」
ぱっとあたりをうかがうや、全力で――そう、死神代行の経験から身につけた全力で――巫女服姿の七季を、物陰に連れ込んだ。
「黒崎っ」
あわてたのは、メガネをかけた雨竜少年である。周囲を慮って声をひそめたものの、すぐさま気配を追って、後を追う。
が、連れの動揺をよそに、一護は、人間と思えないほどに肌が冷え切っている七季をがくがく揺さぶっていた。
自分が着ていたダウンジャケットを、すかさず羽織らせてしまう。さすがに寒かったが、目の前の少女は、放っておいたら凍死するんじゃないかと思えるほど冷たかったのだ。
「わぁ、いっちーの上着あったかーい」
へにゃっとした口調と、上品なままの笑顔の乖離が、一護の中で凄まじいギャップとなってがちがち不協和音を立てる。
「しょ、正気に戻れ、七季！」
「だいじょーぶだよー。吹きっさらしの外で、一晩中お守り授与してたからー、ちょっと顔が戻らないだけー」
うへへへへ、と洩れる笑い声だけは、ふだんの少女に近い、やや変なもので。

しかしそれは、いつもの調子を取り戻したわけではなく、徹夜明けのテンションがなせるわざであり。
決して元気になったわけでは、ない。
「にしても、こんなに冷えてたらカゼ引くだろーが！」
いまも、触れている肩は、その衣越しにもひんやりと冷たく。
たよりない、少女の撫で肩をつかんだまま、オレンジ頭の少年は心配を隠さずに叱る。
「んー。だーいーじゃうぶ。寒くないよー。とっくに感覚ないからー。冷えてると、かえってその方が楽だよー」
仕事するのに。
にこり、と。あくまで楚々とした、まさしく「巫女らしい」営業スマイルを浮かべるままに、「神使（しんし）」たる黒髪の少女は平然とのたまった。
――感覚ないって、それもう凍死レベルでヤバくねえか？！
少なくとも、雪山での「寝たら死ぬぞ！」フラグくらいは立ってもおかしくないレベルだろう。
「それにねー。もう少ししたら、っていうか、六時でアガリなんだー。だから、いっちーたちに回収してもらおうとー……思ってー」
だんだん、ねじの切れた玩具みたく、口調が間延びしてくる七季。
なんか息絶える前の虫の声みたいで怖い。
「でねー。六時から、朔日餅（ついたちもち）が、境内で、販売される、からさー……着替える間に、いっちーに、買っといて、って頼み、たくて」
「わかった！　わかったから、お前はとっとと着替えて来い！」
ちょっと一護も目頭が熱くなってきた。
ここまで弱ってなお、食い意地だけは消えない七季の根性が笑えるのか、それとも、ここまでバイトをこき使う、神門（みかど）の守銭奴神主っぷりに憤るのか。
とりあえず、ここで友人を凍死させてなるものか、とヤンキーっぽい見た目のわりに、男気も世話焼き気質も旺盛な少年は、七季を社務所へと連行したのだった。

やっぱり全力で。

その間に。

「そっかそっか。織姫ちゃんって言うんだー。で、一護のこと、にくからず想っている、と。恋する乙女だねー」

かわいーかわいー。

「あああああの、そのっ！」

栗毛の美少女巫女さんに、かいぐりかいぐりかまい倒されて、まっかになっている織姫と。

「うりゅんは面白いなー。それじゃあたしには勝てないよん？」

「い、井上さんを放せっ！」

織姫を抱えたままの巫女さんに、いぢり倒されている生真面目ツッコミ気質な雨竜がいたとか、いないとか。

「……放っておいて大丈夫なのか？」

「ああ。ありゃ真言姐さんのいつものことだ。別に平気だから放っとけ」

一護もいじり倒されてるからな。

ライオンのぬいぐるみ、コンと、真顔で話し合っているチャドは、その騒動を静かに見守っていたらしいと、のちに発見した霜夏と伯言は言う。

＃７４　初詣の惨劇？（後書き）

あとがき

＞あけましておめでとうございます。

せっかくですので、お正月ネタで番外編をば（本編どした）。

続きます。

#７５　がんばれ巫女さん（前書き）

まえがき

＞引き続き、前回と同じく、番外編的な話です。

リリなの、ゼロ魔キャラは登場しません。

代わりといっては何ですが、ぬら孫、ＢＬＥＡＣＨキャラが出張ってます。

#75　がんばれ巫女さん

「おもちだおもちだー」

へはははは、と気の抜けるような笑い声で浮かれる七季は、一護が確保した、二つ入り一箱三百円の「朔日餅（ついたちもち）」の箱を掲げて、嬉しそうに跳ねようとして――幼なじみたちにガッチリ確保されていた。

「足元危ないんですから、気をつけてください」

さすがに体力が違うのか、一晩くらいの徹夜ではびくともしない栗毛の美少年・伯言が、少女のくびれたウェストに腕を回す。

ちなみに、七季が欲しがった「朔日餅（ついたちもち）」というのは、毎月一日に、朝の六時から神社の境内で販売される、月替わりの和菓子で、その日限りの限定品だ。

売り出された当初は、昼過ぎでも買えたのだが、口コミで定着したのか、いまや十時前には売切れてしまうことも多い、人気商品である。

「あ、あの……七地さん、大丈夫なの、かな……？」

おずおずと、テンションのおかしい黒髪の少女を心配する織姫だが、伯言よりも人当たりのいい霜夏が、代わって応じた。

「あ、気にしないで。毎年こう、ってわけでもないけど、特に今年は忙しくってね。何だかんだで、年季の入ってるナナに、いちばんしわ寄せがきちゃったんだよ。

このひと売り子に慣れてるから、いちばん参拝客の来る、本殿近くの授与所を任せることになって。それでも休憩は入れたんだけど……」

参拝客をさばきはじめたのは、夜の十一時から。しかし、準備とチェックは九時、十時あたりから、既に始まっていたわけで。

それから、ほぼ立ちっぱなし。屋根こそあれど、吹きっさらし。

授与所には、燃えやすいお札があるので、ちゃんとした社務所ならともかく、臨時に設置したテントにはストーブが置けないのだ。

いちおう服の内側には、張るカイロを仕込んでいたのだが、それも低温ヤケドに気をつける以上、程があるというもので。

若白髪の少年は、苦笑がちに濡れ羽色の目を、幼なじみへと向ける。

「で、コレか」

一護も半眼になって黒髪の少女を見つめ、まだ起きて動きはする、七季の手からそっと荷物を取り上げた。

そして、持っていた使い捨てカイロを、彼女の冷え切った頬に当ててやる。

「ふやぅ」

何とも気の抜ける、寝ぼけた猫みたいな吐息を洩らして、黒髪の少女はきゅうっと目を細めた。そのまま、無言で動物よろしく、すりすり一護の手に懐き始める。

たぶんに理性が飛んでいるらしい。ふだんであれば、織姫の前で、こんなふるまいには出ないだろう。

夜道では危ないので、引き続き、背後から伯言が支え、霜夏が先導し、一護が荷物を持ってカイロを当ててやっている。

最初は、一護がいっそおぶろうとしたのだが、それに霜夏と伯言が異議を唱え、今度は幼なじみのどちらかが背負うかで、またしてももめ。

ならばと善意からチャドが申し出ると、今度は一護も微妙な顔になり。

紆余曲折を経て、この事態に至る。

そんな光景を目にした雨竜が、ひとり頭を抱えたのは余談である。

――何てややこしい人間関係なんだ……。

この年齢から、しっかり苦労性でツッコミ気質の少年は、さっきから一護を気にしている織姫を、ちらちら気遣っている。

どこからどう見ても恋する乙女なのだが、肝心のオレンジ頭は、

ひたすら危なっかしい七季の世話を焼くので手一杯らしく、織姫の視線には気づいた様子がない。
「で、真言さんは、ほんとーに置いてきて良かったのか？」
「初詣ですよ？　祭神がいなくてどうするんですか」
胡乱な一護の問いかけに、栗毛の少年が鼻で笑う。
「……それもそうか」
件（くだん）の真言――帝都心霊庁の最終兵器とまでいわしめるハイパー美少女霊能者は、神門（みかど）神社の祭神である、龍神様が、常にくっついていらっしゃる。
その彼女を動かすということは、祭神の龍神も、一緒に神社から動くことになるわけで。
「七日までは、神社にカンヅメだよ、先輩は」
霜夏もあははは、とやけに清々しく笑いながらサムズアップしている。ふだんどれだけ鬱憤が溜まっているかが、目に見えるというものだ。
ちなみに、その真言はというと。
「ううう、ちっくしょーい！　べらんめぇ！」
たまたま参拝に訪れた、ＢＡＢＥＬのチルドレン、薫、紫穂、葵のエスパー三人娘をとっ捕まえて、社殿の奥深く、自棄酒中だったりする（お酒は二十歳になってから）。
閑話休題。

で。
「どうぞ。何もない家ですけど」
そう言いながら、いかめしい木製の門扉を――正確には、その横にある通用口を開けたのは、栗毛の少年、伯言。
「ふわー。大きいねー」
織姫などは、武家屋敷そのままの一軒家を見上げて感嘆の声を上

げている。実家が大病院ではあるものの、いまは質素なアパートで一人暮らしの雨竜も、ちょっと目を丸くして、栗毛の少年と屋敷を見比べた。

いっぽう伯言はというと、幼なじみの少女を、半ば抱えるようにして、さっさと家の中へ入っていく。

「戻りましたよ」

奥に少年が声をかければ、ふっと現れる黒い影――否、それは黒髪にルビーアイの映える、高校生くらいの秀麗な少年の姿だった。ふだんは黒猫姿をとることの多いリドルである。

「お帰り。で、ナナキは」

言いながら、主たる少女が、ダメっぽくなっているのを見て取った人外の少年・リドルは、言葉を切るなり、伯言から彼女をぶんどった。そのまま小脇に抱えて居間まで運び入れる。

「あ、おい！」

「ちょっと！」

あわててぱたぱた追いかける霊感少年少女たち。

かたや、駆けつけた先には、既に宴会の支度が整っていた。先客もいるようで、メガネをかけた小柄な少年や、やけに頭が大きく目立つ老人なども座っている。

「こ、こんにちは。お邪魔してます」

「おう。お前さんがたも、お嬢の知り合いかね」

「こんちは……？」

反射的にあいさつを口にしながら、一護は相手が人外であることを敏感に察する。もとより、死神代行になるよりずっと前から、彼はハイスペックな霊感の持ち主なのだ。

それを横目に、リドルは一護たちに頓着せず、居間にいた和服の美女――毛倡妓（けじょうろう）へと、ふにゃふにゃの七季を手渡す。

「悪いけど、ナナキをお風呂に入れてくれない？

このままベッドに叩き込んでも、冷えてちゃ話にならないからさ」

「あれま。ずいぶん冷えちゃって……ほら、つらら。この子、ちょ

っとお前さんみたいだよ」
「うわあホントだ。たしかにこれじゃ、人間は危ないですもんね。私も、脱がすまでなら手伝います。
若、ちょっと失礼しますね」
「うん、つらら。七季姉さんのこと、よろしくね」
華奢な見ために似合わず、毛倡妓（けじょうろう）とつららは、かるがる七季を運んでいく。
七季を「姉さん」と優しい声で親しみを込めて呼び、つららに若、と呼ばれた少年は、メガネを載せたあどけない面差しに、心配そうな色を刷いて、人外の少女と美女を見送った。
そこに、白く褪せた髪をいただく偉丈夫が、茶碗を盆に載せて現れる。その鍛え抜かれた長身に、妙にしっくりと似合う赤いエプロンを身につけて。
「外は寒かっただろう。料理はあらかた支度が終わったから、まずは甘酒でも飲みたまえ。
マスターは……ああ、了解した。七季は、入浴したら、そのまま休むそうだ。さすがにキツかったらしい」
すまないな。
甘酒の入った茶碗を配りながら、途中、主たる少女の念話を受け取って、居間に集まった客人らに彼女の欠席をわびる。
「あ、いや。七季がメシ食わずに寝るって、そんだけハードだったんだ……でしょうし」
初めてアーチャーと対面する一護は、自分と同い年の少女を「マスター」呼ばわりする男に、違和感を感じつつも、ぎこちなく応じる。
しかし、そわそわと落ち着かなげな様子は、居心地悪そうだ。
「敬語を止めてもらってかまわない。
自己紹介が遅くなったが、私はアーチャーといって、そこのリドルともども、七季の使い魔だよ。
だから、人外には違いないが、そう警戒しないでもらいたいのだ

が」
　男の鋼色のまなざしの先には、身がまえる雨竜少年や、アーチャーの様子をうかがうチャド、そして、ヘアピンを押さえている織姫がいた。
「……すいません」
「ご、ごめんなさい」
「悪かった」
　と、頭の大きな老人――ぬらりひょんが、好々爺然とした声を上げて朗らかに笑った。
「ほっほっほ。嬢ちゃんは人外を引っかけるのが得意だからのう。これくらいで目くじら立てとったら身が保たんよ。のう、リクオ？」
「っけほっ！　え、ええと……」
　リクオと呼ばれた少年――妖怪ぬらりひょんの血を受け継ぐ少年は、大きな目を白黒させながら、控えめにコクリと頷いた。
「えと、あいさつが遅くなってごめんなさい。奴良（ぬら）リクオです。よろしくお願いします」
　ぺこり、と頭を下げる小柄な少年は、おとなしげだが、目が大きく、ややもすると少女のように整った顔立ちだ。
「うむ、わしもうっかりしておったわい。我が名はぬらりひょん。このリクオは、わしの孫での。七季の嬢ちゃんとは茶飲み友達なんじゃ」
　それっぽい、頭の大きな老人は、みたまんまの妖怪じいさまだったというわけだ。
「……ぬらりひょんと茶飲み友達って、オイ。あいつもどんだけ……」
　オレンジ色の頭を抱える一護を、アーチャーはくつりと笑いながら見下ろして「さて」と口火を切る。
　ちょうど、上着を置いて、着替えを済ませた霜夏と伯言が、居間に戻ってきたのだ。
「一同そろって――とはいかないが、そろそろ朝食にするとしよう。

ああ、うちのマスターの分は取り分けてあるから、恨まれる心配はしなくていい」

しっかりした作りの卓の上には、黒塗り蒔絵の重箱がふたつ。どれも、腕に覚えのある主夫――もとい、錬鉄の英霊がよりをかけて仕上げたおせちである。

かぱりと蓋を開けたお重は彩りあざやかで、目にも食欲をそそるご馳走に違いなく。

食べ盛りの少年少女たちが、思わず歓声を上げて盛り上がっているころ――風呂で丸洗いされた、「神使（しんし）」の人外たらし少女は、浴衣を着せられた後、幼なじみのベッドで爆睡していたのだった。

#75　がんばれ巫女さん（後書き）

あとがき

＞オリ主、主人公なのに珍しく目立っていません（笑）。

てか、あまりにハードなバイトのため、眠気に負けました。もうこれは、しょっぱいお正月シリーズ、とでも名づけた方が良いんだろーか。

ついでとばかり、ぬら孫も混入してみた。

元ネタは、元旦の初詣から。今年はとりわけ寒かったですね。

朔日餅（ついたちもち）めあてで朝六時に参拝したら、境内はあかあかと、巫女さんたちも立ち働いていらっしゃったので。

これは夜中からずっとこんな調子で、朝方にシフト制で交代するんだろーなー、と思いついたネタです。

朔日餅、または参拝餅というのは、じっさいにうちの近所の神社で売り出されている名物だったり。

近所の和菓子店とコラボってるので、ふつうに美味しいです。

◆オリ主世界の登場人物一追加一

◆芦優太郎／アシュタロス（出典：ＧＳ美神）

オリ主の友人。巨大企業「アシ・グループ」の総帥。

元は、魔界トップクラスの実力をもつ超上級魔族。メドーサ、デミアン、ベルゼブルら強大な神族・魔族たちを従えていた。

しかし、永遠に悪役で在り続けることしか出来ない救われない邪悪であること、自身（アシュタロス）は死ぬと、神魔のバランスが崩れるため強制的に復活させられ、死ぬことも出来ない世界に絶望。

新たな世界の創造、あるいは大きな戦いを起こすことで、自身の死を天界に認めさせようとして、世界への反抗（クーデター）を画策。俗にいう「神魔大戦」を引き起こした。

その結果、神魔上層部の決定によって、魂を輪廻の輪に放り込まれ、元上級悪魔から人間に、転生、ならぬ編生。

いったんは記憶を封じられるも、七季との出会いでじょじょに前世のそれを取り戻し、いまに至る。

冷静沈着で狡猾、予想外の事態にも対応するだけの柔軟性と、部下を統率するにふさわしい覇気をそなえる。

高いプライドの持ち主だが、前世で知遇を得た七季に、その苦悩と孤独をやわらげられた。そのため、彼女を「友人」として認めている。

亜麻色の髪に紫暗の瞳。身長は１８９センチ。霊力は一般人よりも高く、術は使えないものの、オカルト的な知識には造詣が深い。

◆奴良（ぬら）　リクオ（出典：ぬらりひょんの孫）
　オリ主の友人。人間と妖怪のクオーター（混血）。
妖怪ぬらりひょんの孫。運動神経が抜群で、成績もかなり優秀。いっぽう、性格はきわめて温厚で、争いごとを好まないお人よし。だが、最近になって妖怪の血に目覚める。そのありようは、ほぼ二重人格に近い。覚醒時のリクオは覚醒前の事もすべて把握している。
　極道一家「奴良組」三代目候補（若頭）であり、覚醒時は、妖怪の血によって姿形、性格がガラリと変わる。屋敷の妖怪たちからは「若」「リクオ様」などと呼ばれている。どちらの人格でも恋愛ごとには非常に疎い。

　ぬらりひょんの茶飲み友達であるオリ主のことを「七季姉さん」と呼んで慕っている。
　小柄で可愛らしく、素直な性格なので、可愛い物好きの真言には玩具かペットさながら、猫かわいがりされているが、真言のことはちょっと苦手。

　身長１４８センチ。茶髪に眼鏡をかけているが、視力はかなりいい。

◇妖怪時のリクオ（夜若）
　鋭い目付きとたなびく長髪で、若かりし頃のぬらりひょんとよく似た容姿をした長身の青年。
　昼のリクオと比べると、大胆不敵で、一人称も「ボク」から「オレ」に代わる。いまだ若いながらもカリスマ性にあふれ、強い「畏（おそ）れ」を見るものに抱かせる。
　ただし、夜のリクオは既に昼（人間）は昼のリクオの領分、夜（妖怪）は自分の領分であると割り切っている。

身長１７５センチ。

#７６　黒い兎と赤い弓（前書き）

まえがき

＞引き続き、前回と同じく、番外編的な話です。

リリなの、ゼロ魔キャラは登場しません。

代わりといっては何ですが、ぬら孫、ＢＬＥＡＣＨキャラが出張ってます。

#76　黒い兎と赤い弓

「うぎゅ」

ぐっすり昼間で眠ったら、今度は食欲が目を覚ました七季。

さて、起きて腹を満たそうと、ほぼ本能で幼なじみから借りたベッドを這い出したのは良いのだが。

げんざい、胃袋をぎゅうぎゅう圧迫されている最中だったりする。

「お……お姉さん、つららちゃん、そろそろ死むる。タマシイ脱走する～」

晴れ着――赤い振袖――の帯を締めるために、雪女の少女と、毛倡妓の、ふたりがかりで締め上げられている七季は、小鳥の断末魔みたいな声を上げて、したぱたと儚い抗議をした。

「むぅ。まあ、これくらいで良いかねぇ」

「はい。でも七季姉さまは、お着物が似合う方ですねっ」

撫で肩かつ小柄な、典型的な日本人体形だからだ。

ただし。

「……胸以外はな」

げっそりとした面持ちで、七季が付け足す。

正確には、バストとヒップに、これでもかと女性らしいラインを描く脂肪がくっついてくれたため、彼女が和服を着るには、かなり詰め物をする必要があったりする。

本来であれば、寸胴体形こそ、和服が似合う条件なのだから。

おかげで、胸の下――ようするに、ちょうど胃袋あたりだ――に、タオルなどの詰め物をして、形を整えた結果、七季の胃袋と腹部は、より圧迫されることになり。

さっきみたいな、弱々しい断末魔を上げる羽目になった、というわけだ。

特に予定はないが、もしも結婚式をするなら、絶対にドレスにしよう、と和服を着るたびに決意を新たにする七季である。

――ごはん食べられないじゃないかっ！

ここに幼なじみ連中がいたら、「そこかい」とまっさきにツッコんでいたに違いない。

で。

寝起きを強襲されて、あれよあれよと振袖を着せられた七季は、

「いいやめんどい。このままで」と、へろへろになりながら、食料を求めに、居間へ向かい。

「ごちそーさまでしたっ」

ぱん、と手を合わせて、それはそれは幸せそうに笑う、黒髪の少女に、昼食の席を同じくしていた少年少女たちが、知らず笑みを誘われていた。

「おそまつさま、マスター」

中でも、おせちの作り手であったアーチャーは、いつも皮肉げな面持ちもどこへやら。面映そうに口元を緩めて、食後のお茶を彼女へと差し出している。

「んーん。すっごくすっごく美味しかったっ！」

かがやかんばかりに満面の笑み、全開で言い切る七季は、どこまでも無邪気でストレートな賛辞を、声音と態度で、これでもかとダダ洩れにしている。

「……石田。俺あいつの後ろに犬のしっぽが見えるんだけど。ぱたぱた動いてるの。幻覚だよな」

「……黒崎。それは幻覚だ。でも僕にも見える。まっくろなウサ耳もだ。ああ霊だっているんだ、幻覚が見えてもおかしくない」

ツッコミ役の多い、真面目な少年ふたり組が、ちょっと少女の陽気にアテられて、少しだけ道を踏み外しかけているのは余談である。

「……花が飛んでいるように見える、な」
くるくるとくせのある黒髪の特徴的な、大柄な少年も、ぽつり、と呟きを落とした。
「しっかりしろチャド！　それは幻覚だ！」
親友をがくがく揺さぶる一護の声が、何故か必死だ。
いっぽう。
「あの、お兄さんたち、何をしてるんですか？」
メガネをかけたリクオは、けげんそうな面持ちで、若白髪の少年と、栗毛の少年の行動に疑問を投げかけている。
「ん？　新年のいたずらをね」
「食べる邪魔さえしなければ、七季は基本的にスルーですからね」
幼なじみの背後に回って、仮装グッズの黒いウサ耳と、犬しっぽ（電動で動く）をせっせと取りつけて、こっそり周りをおちょくる伯言と霜夏がいたりした。
ちなみに、魔法で小さな花を散らしていたのはリドルだったりする。意外と悪ノリするあたり、元ホグワーツ生らしく、茶目っ気はたっぷりのようだ。

「まあ冗談はこれくらいにして」
正気に戻った一護と雨竜に、ジャーマンスープレックスで沈められそうになった少年ふたりは、朝食の後、七季ともども仮眠を取ったせいか、それなりに元気である。
「いっつも黒ばっかりだからわからなかったけどよ、お前、赤も似合うんだな」
朴念仁には珍しく、一護が少女の装いを褒める言葉を口にしていた。
雪白の肌に冴える黒髪。それと対照的に華やかな、赤地に枝垂桜の咲いた振袖を、七季は身にまとっている。

ちょこんと正座している少女は、そわそわと指遊びをしている。その指先も、常とは違って、つややかな桜色のマニキュアが塗られて光っていた。

「ほらナナキ、動かない」

「んー」

着物が済んだら、今度は化粧だ、と、何故かリドルがメイク道具を持ち出してきて、少女の顔を画布代わりにいじっている最中。

「やっぱり、まっかなのより、ちょっとピンクかオレンジ入った色の方が良いよね？」

「あ、こっちのパール入ったのは？」

七季よりも女性らしい織姫は、何だかんだいって興味があるのか、それをのぞき込んでは、リドルと一緒に、あーでもない、こーでもない、と言いながら七季のメイクを手伝って楽しんでいる。

――どっから出した、リドル。

「楽しそうだな、井上さん」

「ああ……」

いたたまれなさげに、ちょっと遠巻きなのが、チャドと雨竜。こちらはしょうがない。蛇足だが、チャドはしっかりコンを押さえていた。

そして、主を飾るのにいちばん手を出しそうなアーチャーは、というと、昼食の後片付け中だ。どこまでもマメな男である。

「そっか？……赤は、私には華やか過ぎて、ちょっと落ち着かないんだけど」

せめてもの抵抗なのか、七季がまとう着物の、裾あたりは黒く染められており、そこに金の流水紋が河のごとく描かれ、枝垂桜から裾野の金河にかけて、胡蝶が飛ぶという典雅な絵柄だ。

金の帯に、緑の帯締めと漆塗りの帯留めが、きっちりと全体を引き締めている。

「似合ってますよ！　ね、若！」

すかさず、ミニスカートをはいているつららが声を上げ、幼なじ

みの言葉に、リクオも思ったままの賛辞を送った。
「うん。七季姉さん、綺麗です」
「……ありがと。つららちゃんも、りっくんも、ええ子や……」
——お世辞でも嬉しいわ。
しみじみ呟きながら、七季は年下の少年少女たちを、わしわし撫でくる。姉弟みたいに、きゃあきゃあはしゃいだ声を上げる、つららとリクオ。
「つーか、何でここに女物の着物があるんだ？」
ふと覚えた疑問に、一護がぽつりと声を上げると。
「それは、僕の母上のですから」
にっこりと、この屋敷の主——伯言から、思いがけない答えが返ってきて、霜夏と七季以外のものが目を丸くした。
「若いときの持ち物らしいですけどね。着てくれる人がいる方が、母上も喜んでくれるでしょう」
いずれは、うちの嫁ですし。
言外に牽制かける少年の腹黒さを、その場の誰もが理解した。ちなみに七季と霜夏は慣れっこなので、スルーである。
「黒いのの方が良いって言ったんだけど」
いまは亡き、伯言の母は、良家のお嬢さんで、手持ちの振袖も一着や二着ではきかない。もちろん何枚もあったのだ。
「僕らの独断と偏見で赤に決定です」
にっこり。
きらきらしくイイ笑顔を浮かべるジャニーズ顔の少年は、キッチンから出てきたアーチャーに視線を向けた。
「似合うから良いじゃないですか」
ねえ？
「ああ。赤い花は数あれど、たとえるならば緋牡丹というところか」
俗に「百花の王」と称えられる、牡丹の花言葉は「王者の風格」「富貴」「恥じらい」「高貴」「壮麗」——いずれもきらびやかな言葉ばかりだ。

「……アーチャーが生前からたらしだっていうのはわかった」
七季は、過分な褒め言葉に、紅を乗せたばかりの唇を尖らせながらも、ほんのり頬を染めてそっぽを向こうとする。
「こらナナキ、動かない！」
「ぎにゃっ」
ルビーアイの少年に、おとがいをつかまれ、ぎっちり顔を固定された七季は、くっきりと濃い眉を思わしげにひそめて「何の羞恥プレイ」とボヤきながら、ふと首筋をさすった。
長い黒髪を結い上げたことで、あらわになったうなじは、そのあどけない面貌にもまして色が白い。後ろを振り返ったしぐさが、ひどく色っぽいのだが、本人に自覚はさっぱりない。
ようやくメイクが終わったので、今度はリドルも咎めなかった。
「アーチャー。やっぱ髪きつく結いすぎだと思うんだけど」
どうも頭が突っ張る感覚に、七季は長身の従者を見上げるのだが。
「しかしな。付け毛（エクステンション）やウィッグは用意してなかったから、結うには、少々きつめにするほかなかったんだが」
「う～」
低くうめきながらも、七季は渋々主張を引っ込めた。
「それ、アーチャーさんが結ったのか？」
「うん。アーチャー、一通り何でもできるよ。着付けもやれるし」
七季の答えに、一護は鋭い目を瞬き「じゃ、お前の着付けも？」と反射的に問う。
「や。きょうはつららちゃんたちいたし。そっちに頼んだけど」
帯って、ひとりで締めるの大変なんだよね。
ふう、と嘆息する少女の言葉に、少年が一人、胸を撫で下ろしたことを知るものは――たぶんない。
そこに。
「メリー！　たっのも――！」
「ちょっ、セイバー！　それ違ーう！」
表――玄関の方から、少女の声がふたつ、聞こえてきたのだった。

#７６　黒い兎と赤い弓（後書き）

あとがき

＞ちっ、長引いてゲストまで出せなかった！

わかるひとにしかわからないかもしれないので、補足をば。

タイプムーンエースの６号についてるオマケＤＶＤが元ネタです。

ニコに落ちているんで聞いてみるとよろしい。

#７７　白い兎と紅い剣（前書き）

まえがき

＞引き続き、前回と同じく、番外編的な話です。

リリなの、ゼロ魔キャラは登場しません。

代わりといっては何ですが、ぬら孫、ＢＬＥＡＣＨキャラが出張ってます。

#77　白い兎と紅い剣

「はいはい、あけおめ、しろウサ」
「あけおめ、犬の皮かぶったオオカミ」
玄関先で、霜夏と栗毛の少女が、和やかに（？）挨拶していると。
「いらっしゃい、白兎（しろう）。つっても、ここ伯言ちなんだけど」
奥から緋色の晴れ着をまとった七季が現れたとたん、紺地の振袖を着た少女が、満面の笑みでがばっと抱きついた。
「久しぶり、ナナ――っ！」

「……で、そっちの人たちは？」
引き続き、陸家の居間にて。
アーチャーの入れたお茶を前に、一護たち四人と、七季主従、幼なじみの少年ふたりが勢ぞろいしたところに、新たな少女ふたりと、緑のネクタイを締めた男がひとり、追加された。
これでも手狭にならないあたり、横島少年が居合わせたなら、「チクショー金持ちってヤツは……！」と悔し泣きしたかもしれない。
「うん？
この子が衛宮白兎（えみやしろう）。うちの母方のイトコでね、私の親友。
いまは海外で音楽の勉強してるんだけど……今年は帰ってきたんだね。教えてくれても良いのに」
一護の問いに答えつつ、栗毛の少女を振り返った七季は、むぅと唇を尖らせた。
「うーん、ナナの驚く顔が見たくて。それにしても……」
いたずらっぽく笑った白兎（しろう）は、しげしげと黒髪の少女を眺めやり。

「やっぱり可愛い子が綺麗な格好なのは良いね。キツネくん、褒めてつかわす。グッジョブ！」
「あいかわらずド失礼ですよね、衛宮さんは。でも、七季に対する賛辞には同感です。やりましたよ！」
悪態をつきつつも、サムズアップでイイ笑顔を交わす栗毛の少年少女に、その場の人間は「ああ、悪友ってやつ」と一致した認識に至った。
――待て。衛宮、だと？
約一名、聞き覚えのある苗字に、何やら眉をひそめて考えて込んでいるが、彼の真名を知っているはずのマスターは、のんきに親友へと問いかけていた。
「ところで白兎。隣の美人さんと、男前さんはどなた？」
紹介してくれないのか？
こきりと首をかしげる七季に見上げられ、紺地の振袖をまとう少女は「ああ」と隣に手のひらを向けた。
「後ろのはロビンさん。
こっちの彼女はセイバー……ルキウス＝セイバー＝ネロ＝フォン＝クラウディウス。
私のパトロンで――騎士、だよ。若く見えるけど、れっきとしたドイツ貴族の当主でね、腕っこきの企業家でもあるんだ。知り合ったのは、お父さんの関係なんだけど」
「なるほど。切嗣さん絡みか。じゃあ、後ろの男前さんは、白兎か、彼女の護衛ってとこ？」
「その通りだ」
深紅のドレスを身にまとい、緑茶を少し珍しそうにしながらすすっていた、金髪碧眼の美少女が、少しくせのあるアクセントで口を挟んだ。
「ただいま、奏者から紹介に預かった、クラウディウス家が当主、ルキウス＝セイバー＝ネロ＝フォン＝クラウディウスだ。
そちのことは、奏者から聞き及んでいる。とても……とても大切

な友人だとな。
　余のことはセイバー、と呼ぶが良い。うむ、奏者も良い趣味をしている。余も気に入ったぞ」
　外国人のせいか、やけに時代がかった口調でしゃべるセイバーだが、にこにこしながら、白い繊手を七季へと伸ばしてきた。
「？」
　うちゅう。
　重なる唇に、ときが止まった。

　長かったような気もするし、短かったような気もする。
　しかし、その場の人間が硬直していたのは、一様に変わらなかった。
「……ぅん、ぷぁ」
　ほどけた少女たちの唇を、つかのま銀糸が繋いで消える。
　ぷつ、とそれが切れると同時、何か別のものも切れたように感じたのは――きっと、間違いではないだろう。
「ふむ。こちらを上級者と感じ取る敏感さもさることながら、そのまま素直に余を受け止める従順さも愛らしい。これは、ますます気に入ったぞ、奏者」
　つやつやした満面の笑顔でのたまう金髪の美少女は、王様全開な発言だったが。
　それよりも度肝を抜いたのは、続いた黒髪の少女のセリフだった。
「んぅ、上手ですねぇ、フロイライン・セイバー。気持ちよかったです」
　ほわん。
『ちょっと待てえええぇ！』
　もの凄くナチュラルに、いっさいの悪気なく、ほのぼの笑顔で――しかも濡れた唇がやけに艶（なまめ）かしく――ちょっと頬まで染めて言っ

てのけた七季に、いまだ硬直から抜け出せない織姫以外の、総ツッコミが入った。
「そこで順応しちゃダメでしょお嬢さん！
ある意味たくましい生存本能と言えないこともないけど、順応しちゃダメだから！」
乙女的に！
まず、がっしり七季の肩をつかんで、赤いドレスのセイバー嬢から、黒髪の少女を引き離したのは、緑のネクタイを締めたスーツ姿の男前だった。
「私のマスターを離してもらおう」
そこに、ショックのあまり出遅れたアーチャーが、すかさず両者の間に割って入る。出刃包丁つきで。
ちゃき。
『ネロ、鉄の処女に抱かれる？』
いっぽう栗毛の少女――白兎はというと、にこやかな笑顔でおっそろしい内容のドイツ語を吐いていたり。
かるくカオスである。
なんか一部、命の危機に陥っている面々もいるが、それをよそに、今度は一護が七季に説教をしている。
「おおおお前なっ、いくら相手が女とはいえ、キスされたんだぞ！　もっと危機感もて！」
せめて抵抗しろ！
動揺が冒頭部分でダダ漏れだが、まあ思春期の少年なので、いたしかたない。
ちなみに、目くじら立てそうなリドルはというと、まっくろオーラを出して、金髪少女を締め上げている白兎を「やっちゃえー」と応援している最中だ。ドイツ語も理解できるらしい。
「ん？　でも、ちっちゃいころからキスには慣れてるし。
白兎の大事なひとみたいだから、危害を加えるのも何だかなぁと思って。あとは胸をちょっと揉まれたくらいで、痛いこともされな

かったぞ？」
　あっけらかんとした口調で反論する黒髪の少女に、ふたたび、ときが止まる。
「うむ。余のスカウターではGカップというところだな。なかなかの大戦力。揉み応えがあったぞ」
　ちゅどーん。
　追い討ちで誘爆。
「ま……負けないもんっ！」
　そして、ようやく正気を取り戻した（？）織姫が、妙な対抗心を燃やして声を上げ。
　まだまだカオスは止まらない。

#77　白い兎と紅い剣（後書き）

あとがき

＞短めですが、まずは小手調べで。

ご存知、Ｆａｔｅ／ＥＸＴＲＡから赤剣と女主、ついでに緑茶のセットでドン☆

まだまだ続くよ。

ちなみにＥＸ女主ですが、同じ二次創作を手がけていらっしゃる、雷雨（らう）さまの作品「Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ・Ｕｎｄｅｒｓｅａ　Ｔｓｕｋｉｎｏｗａ」から主人公・白兎（しろう）嬢をゲストとしてお招きしました。

コラボの許可を下さった雷雨（らう）さま、ありがとうございます！

白兎（しろう）さんの黒セリフ、ありがたく引用しました（笑）。書くのがムチャクチャ楽しかったです。

#７８　犯人さがし？（前書き）

まえがき

＞引き続き、前回と同じく、番外編的な話です。

リリなの、ゼロ魔キャラは登場しません。

ぬら孫、ＢＬＥＡＣＨキャラ、Ｆａｔｅ／ＥＸＴＲＡキャラが出張ってます。

あと、今回はちょっと微エロかつ下ネタ傾向かも。お嫌な方はブラウザバックぷりーず。

#78　犯人さがし？

「――待て。ここで事態を整理しよう」
一見、冷静に思える――思えるだけだが――白く褪せた髪の男が、事態を取りまとめようとした。
じっさいは、己の中に渦巻く疑問を解消するためだが。
「いろいろと問題はあるが……加害者とか加害者とか加害者とか。それはひとまず置いておいてだ。マスター、どうして君がキスに慣れているのかね？　しかも小さいころから」
赤いドレスをまとったセイバーへの苛立ちをダダ洩らしつつ、アーチャーはカオスの元凶、その一端を担う黒髪の少女に問いかける。
「ん？　うちの母さんがキス魔だから」
へろっ。
対して、七季の返答は簡潔だった。
思いのほか、まっとうな返答に、その場の常識人が胸を撫で下ろすも。
「なるほど。しかしだな、さっきのような……こほん、ディープキスは、さすがに家族ではやらないだろう？」
霊体化で七地家をうろついている――もとい、居候しているアーチャーの記憶には、確かにスキンシップの激しい母親が、娘の胸を揉んだり尻を撫でたりしている光景がある。
しかし、キスは頬や首筋までだったはずだ。
「しないねぇ」
のんきに答えつつ、赤い晴れ着の少女は、膝上に懐いているリクオの頭を撫でていた。腰に腕を回してきゅうっと抱きついている少年のメガネを、白い指で外してやる。
――ごはん食べたから眠いのかなぁ。

リクオの背後では「若、頑張ってください！」とつららがエールを送っているが。

「だが、ナナキは、余に応えはしないまでも、上手く呼吸はしていたぞ。あれは最低限、されるのに慣れていなければ、そうはなるまい？」

いらんフォロー……というか、アーチャーいわくの「加害者」から証言が飛んでくる。

いまだ白兎（しろう）にヘッドロックされたまま、金髪碧眼の少女がもたらす言葉に、一護も雨竜もギョッとする。チャドでさえ、前髪に隠れがちな目を丸くしていた。

「そりゃ慣れてるから」

けろりん。

そして、またもや爆弾発言。そろそろ爆弾娘というニックネームをつけても良いかもしれない、七季。

「お前、つき合ってるヤツいたのか？」

反射的に一護がツッコミを兼ねた問いを投げる。

「いんや？」

対する黒髪の少女は、ふるふる頭を振って眉をひそめた。きつく髪を結われたせいで、やっぱりちょっと頭痛がするのだ。

「使い魔の我々も、そんな存在は知らんな……」

アーチャーの呟きに、美少年姿のリドルも相槌を打つ。

「放課後はバイト三昧だし。たまに休みがあるかと思えば、マコトに連れ回されたりしてるし」

あとは幼なじみの家に遊びに――というより、本を読みに――行くのが関の山。

――ん？

小さいころから。

一緒にいて。

バイトで顔を合わせる。

で、七季に手を出しそうな存在といえば。

ぱたぱたとドミノ倒しのように、その場の人間の思考が連鎖し、隠れていたものが顔を出し――

『犯人は――お前らだっ！』

ずびしっ。

織姫と、当事者を除いた指が、一斉に少年ふたりへと向かって突きつけられた。

「あはー。刷り込みって、幼なじみの特権ですよねー」

悪気なく、しかし腹黒く笑うのは、栗毛の美少年・伯言。

「子供のころからの習慣だからねえ」

爽やかに――まるで非はありません、というように――朗らかに続けるのは、若白髪の少年・霜夏。

「昔、マンガか何か見て、好奇心で始めたら、くせになっちゃったんだよなぁ」

そして、いつも通りマイペースきわまりない調子で補足を挟む黒髪の少女・七季。

「誰か止めろよ！」

すかさずツッコむ一護。もうご苦労様としか言うほかない。顔が赤いのは、ご愛嬌。

「気持ち良かったし」

さらっと聞き捨てならない本音を洩らす巨乳娘に、アーチャーとリドルが頭を抱え、そんな七季の頭を、何故か首ごと抱きしめる栗毛の少女。

「この子は～」

結い髪を崩さないように、あらわになっているこめかみ一点を、ぐりぐりと指先で白兎はつついている。

彼女の「蹴倒したろか、あのオオカミども」という呟きは、幸か不幸か、セイバーと七季にしか聞こえなかったが。

「まあ、ふつうは人前でやっちゃいけないってことは、子供心にもわかりましたから、ほら」

共犯者の笑みを浮かべている伯言と霜夏に、ジト目が向かうも、

少年たちは怯まない。
「三人だけの秘密、ってやつにしたんだよね」
タチの悪いことこのうえないが、そのころから、七季につられて本をよく読む彼らは、理解力がムダに高かったので。
「あ……あざとい……」
うめく雨竜のセリフは、その場の人間の心情を代弁していたことだろう。
「そして問題発言だな、七地」
ふだん無口なチャドもツッコまずにはいられない。それじたい、事態のカオスっぷりの酷さを物語っている。
「でも、ちゅーだけだぞ？」
こてん、と首をかしげる――頭部には、いまだ白兎（しろう）をくっつけたままだが――黒髪の少女。
そして、この期におよんで、なおも悪気がさっぱり皆無の七季だが、やはり同じ血を引くもののなせる業（わざ）か、今度は白兎（しろう）も爆弾発言を炸裂させた。
「あれ？　じゃあナナの巨乳は、連中に揉まれておっきくなったわけじゃ」
「ないから。これ自前だから。そもそも大きくしたかないやい」
どんな疑いかけてたんだ。
すかさず即答する少女の黒い瞳には、紺地に舞い踊る、雪のような祝い鶴を散らした晴れ着。それをまとう栗毛の親友へと、七季のジト目が向けられる。
いっぽう、少女たちのバストに関する話題転換に、純情な思春期まっさかりの少年たちが一斉に口をつぐんだが――剛毅な少女たちは、さっぱり気にしていなかった。
「それは世の女性に対する挑戦だよナナ！」
「うむ。奏者には奏者の良さがあるが、それだけの大戦力（Gカップ）、一朝一夕には身につかぬものだ」
力強く、拳を握って主張する白兎（しろう）と、彼女に仕える騎士であると

ころのセイバーが、そろって七季に畳みかける。
「白兎（しろう）だって小さいわけじゃないだろ！　それくらいがベストだから！」
「何おう！　じゃあ、その乳をよこせえぇ！」
吼えるなり、士郎の白く長い指が、赤地の振袖に包まれた七季のバストをわしづかむ。
「にゃあああ！」
カオスっぷりも、ここにきわまれり、であった。

#78　犯人さがし？（後書き）

あとがき

＞ネウロねたを入れてみた。そして話が終わらない。あれー？

おっぱいおっぱいすみません。同性同士は遠慮がないのと、基本的にオリ主の周りはスキンシップ過多な連中ばかりです。

母の血を色濃く引いたオリ主と、そんな彼女に感化された幼なじみズ、フリーダム。

横島君が知ったら暴れるな、これは。

#７９　正義はどこだ？（前書き）

まえがき

＞引き続き、前回と同じく、番外編的な話です。

リリなの、ゼロ魔キャラは登場しません。

ぬら孫、ＢＬＥＡＣＨキャラ、Ｆａｔｅ／ＥＸＴＲＡキャラが出張ってます。

あと今回も、ちょっと微エロかつ下ネタ傾向かも。お嫌な方はブラウザバックぷりーず。

#79　正義はどこだ？

「はーっ、はーっ……はーっ……」

けっきょく、親友の襲撃（ただしバスト限定）から、アーチャーによって救い出された七季は、げんざい従者の懐で丸くなりながら、ロビンの謝罪を受けていた。

「悪かったな、お嬢さん。うちの姫さんが暴走して」

「うぅ」

ややオレンジがかった、ハチミツ色の髪に緑のタイが似合う、スーツ姿の男前から拳を落とされて、頭を抱えた白兎（しろう）が、まだ恨みがましげな目を向けている。視線の先は七季ではなく、ロビンだが。

「まったくだ」

やれやれと嘆息するアーチャーに、ロビンは少しムッとした表情を浮かべたものの、いわゆる自分側であるセイバーと白兎（しろう）の粗相（そそう）――というにはワイルドすぎる暴走は、確かに目に余るものだったので、言葉を呑んだ。

ちなみに「粗相（そそう）」とは、「不注意や軽率さから起こす過ち」を指す。白兎（しろう）とセイバーは、がっつり確信犯なのだから、不注意から、とは言いがたい。

「納得いかないっ。無加工、天然モノで、あんなに大きく育つなんてっ！」

むきいっ、と熱さ冷めやらぬ口調で、白い手指をわきわきさせる栗毛の少女に、ふたたびゴツン、と拳が――今度はかるく――ロビンによって落とされる。

「まだ言うか」

そこに伯言が、他人事のようにポツリと呟きを洩らす。

「単語だけ聞いてると、真珠か魚の養殖みたいですね」

「私はマグロかっ？」
「その単語だと、別の意味に聞こえなくもない」
リドルのアレなセリフに、今度は霜夏からのツッコミが入った。
「リドル自重」
さんざん親友に乳を揉みしだかれた七季は、さすがに胸元をかばいながらも反論する。
いっぽう、白兎によってくつろげられた赤い和服の胸元を、黙ってアーチャーが整えていた。つくづくマメである。
いまだ少女たちの話題はおっぱいから離れない。
「だいたいなぁ、胸の大きさでいうなら、井上さんだっているんだぞ！　別に何かしたわけじゃないだろ？！」
「え」
「あ」
「な、ないよっ！　何にもしてないからね！」
思わぬ矛先を向けられた、白い晴れ着姿の少女が、今度は一護の方に向かって、わたわたしながら潔白を主張する。
「いや、何も言ってねえから」
だがしかし、乙女心をさくっとスルーしてしまう朴念仁、健在である。
「それで、キスの話じゃなかったのかい？」
やれやれと、さすがに重ねた経験と年齢が違う毛倡妓（けじょうろう）が、ぱんぱん、と手を叩いて方向の修正に当たる。
いつのまにか、すっかりおっぱい談義になっていたことに、ようやく当の少女たちが気づいたようだ。
『あ』
すかさず七季がその流れに乗った。
「それに、キスって言ったって、誰かれかまわずやってるわけじゃないし。大事で、しても良い、って同意をもらった相手にだけだぞ。基本的に、人の嫌がることをする気はないからな。誰かに刺されるのもごめんだし」

むぅ。

胡坐をかいたアーチャーの膝上に座り、すっかり親子よろしく納まっている七季は、唇を尖らせながらも、その場所から動く様子はない。アーチャーじしんも、べつだんどける気はないようだ。そのまま二人してちょこんと座っている。

これはこれで問題じゃないのかと、ロビンが褐色の肌の偉丈夫にジト目を向けたが、アーチャーはどこ吹く風とスルーした。

その様子に「コイツやっぱ気に食わねえ」と緑のタイを締めた男は、胸中ひそかに憤る。

「君の幼なじみ連中、モテるんじゃなかったっけ？」

リドルのツッコミはもっともだ。けれども、七季は悪びれた様子がない。

彼女にとっては、キスは昔からの習慣だから、他に迷惑をかけるでなし、目くじらを立てるようなことではない。

世間一般と、自分たちの常識の違いは理解しているものの、必ずしも適用する必要はない、と思っている。誰かに危害を加えているわけではないのだから。

「私が言うのもなんだけど、ふたりとも、女性不信もの凄いぞ？恋人がいるわけじゃないし。恋人ができたら、もうしないけどな。お相手がいるひとに、手出しはしないよ。女の子を泣かせるのは、シュミじゃない」

だからね。

「フロイライン・セイバー。キスくらいならかまわないけど、白兎（しろう）を泣かせたら、容赦しないからね、私」

にっこり。

やわらかく白い頬と、オレンジがかった紅を乗せた唇が優しげに笑う。しかし目力の強い、大きな目は、まっすぐ少女の碧眼を射抜いていた。

目は口ほどにものを言う。

そのまなざしは「テメー白兎（しろう）を泣かせたらぬっ殺す」と主張して

いた。
「……ふむ。余のことは、敬称をつけずにセイバーと呼ぶが良い。しかと心得た。余は白兎（しろう）の騎士。涙をはらうことこそ本領だ。そしてナナキは、奏者の許可があれば良い、と」
「曲解したぞオイ！」
すかさず一護のツッコミが入る。
「それ以前に、女の子同士だろう、君たちは！」
もう一人の常識人、雨竜も、ここぞと追撃をかけた。
が。
きょっとん、とした黒い瞳に見つめ返されて、少年たちがたじろいだのも束の間。
「私は、好きなら男の人でも女の子でも気にしないけど」
「余も同感だ。可愛いければ、男でも女でもどちらでもいける。日本には、こんな名言があるというではないか。
『可愛いは正義！』
うむ、良い言葉だ。気が合うな、ナナキ」
金髪の少女と、黒髪の少女は一転、にこにこと握手を交わしている。
たぶん、この二人に関していちばん抑止力になりそうな白兎（しろう）はというと。
「仲良しなのは良いことだよね。でもセイバーは、私の嫁。七季は私の親友。二人とも大好きだし、見てる分には……うん、仲間はずれはちょっと嫌。
……ん？　ふたりとも嫁にしちゃえばオッケー？」
「何かやばいフリーダムさで意気投合した！
そして姫さん、アンタだけでも戻ってきて！」
ちょっと泣きの入った声で絶叫するロビン。
陸家は敷地の広い一軒家なので、ご近所さんの迷惑にもならない、素晴らしい環境です（ツッコミ的に）。
「今後は女も警戒しないとダメか……」

「とりあえず、先輩と衛宮さんはブラックリストのトップですね……」

ふだんの爽やかさはどこへやら。

ぶつぶつと、何やら黒いオーラをにじませながら、密談をしている伯言と霜夏に、いっそツッコミ入れるハリセンが欲しい、と思いながら叫ぶ、一護の声が居間に響いたのだった。

「だから順応が早すぎるぞ、お前ら！」

#79　正義はどこだ？（後書き）

あとがき

＞一護と雨竜、そして緑茶が不憫です。ツッコミ頑張れ。

ふだん彼らと同じ立場のはずのアーチャーが、ツッコまないのに違和感を感じるかもしれませんが、他にツッコミ役がいるのと、最終的にはオリ主が幸せなら良いんじゃないかと思っているからです。

あとバスト談義に口を挟むとろくなことにならない、というのは、きっと生前の経験から学習（笑）。

リドルは、いざとなったらオリ主たちに混ざる気まんまん（待て）。

#８０　歌うサーヴァント（前書き）

まえがき

＞引き続き、前回と同じく、番外編的な話です。

リリなの、ゼロ魔キャラは登場しません。

ぬら孫、ＢＬＥＡＣＨキャラ、Ｆａｔｅ／ＥＸＴＲＡキャラが出張ってます。

#80　歌うサーヴァント

「忘れてた。ナナ、これお土産」
ぽん。
と、紺地の晴れ着をまとう栗毛の少女は、手荷物――古式ゆかしい風呂敷包みだ――から、B5サイズの箱を取り出した。厚みは十センチほど。リボンがかけられているが、受け取ると、何とも軽い。
「おお。お気遣いありがとう」
「でもそれ食べ物じゃないから。食べられるお土産はこっちね。スイスのチョコレート」
親友の嗜好を、良くわかっている説明で、白兎（しろう）がもう一つ箱を手渡す。平面サイズは同じなのだが、箱の厚みが三センチほどだ。
「わーいv」
「わかりやすっ！」とその場の人間が、ないしんツッコミつつも、まあ七季が食い意地張っているのは周知のことなので、温かくスルーする面々である。
「ってことは」
「もしかして新作ですか？」
ひょこ、と七季の両隣から顔を出したのは、さっきまで白兎（しろう）と一護にシメられていた伯言と霜夏。
「あんたらも丈夫いな……そ。これがムーンセルの看板商品『コンコルディア・サーヴァント』の新作なり！」
ひかえおろう！
水戸黄門ばりに紹介したところで、パソコンユーザーの現代っ子たちが、「おお」と反応する。
「『コン鯖』か。ニコで音声とか画像は良く落ちてるけど、現物は見たことねえな」

一護も七季の手元をのぞきこみ――といっても、包装されたままなので、いかんせん、中身が見えるわけではないのだが。
「白兎ー。開けてもいーい？」
「どうぞー」
黒髪の少女が、ラッピングに指をかけると、彼女のイス代わりになっていたアーチャーが、ひょいと背後から箱を取り上げて、器用に中身を取り出した。
「ほら」
「ありがと、アーチャー」
「いや、いい加減そこから降りたらどうだ？」
お膝抱っこでナチュラルにふるまう七季主従に、思わず一護のツッコミが入る。
「んお？　ああ、そだな」
従者である男の膝から降りようとして、今度は両隣を幼なじみの少年に挟まれていた七季は、きょろきょろ左右を見比べる。
「ちょっと空けてくれる？」
「ああ」
「どうぞ」
「りっくんも、ちょっとごめんしてなー」
「うん」
そして、膝上に頭を預けていたリクオ少年を、やんわりはがすと、ようやく黒髪の少女は、アーチャーの膝上から撤退した。
んしょっと。
「では、新しいお茶でも淹れてくるとしよう」
主の少女が膝からどいたので、腰を上げた白い髪の男は、そう言うと急須を手に、キッチンへと引っ込んでいく。
「ありがとー」
「あ、お気遣いなくー」
その背中を、七季と白兎の声だけが追いかけた。

コンコルディア。
それは、古代ローマの女神にして、協調、相互理解、婚姻の調和を司る一柱だ。
ギリシア神話のハルモニアに対応しており、長い外套をまとって座り、パテラ（献酒杯）、コルヌー・コピアイ（豊穣の象徴）、カドゥケウス（平和の象徴）などを持っている姿で描かれる。
そして、「コンコルディア・サーヴァント」とは、調和の女神・コンコルディアから授けられた、音楽を司る精霊を、自分の従者（サーヴァント）として契約する、というコンセプト内容。
それはゲームというよりも音楽ソフトであり、リアルな歌声を合成するためのソフトウェアである。
一部のユーザーやファンの間からは、サーヴァントと呼ばれる精霊――歌声の質で分けられたキャラだが――を「鯖」と略したりして、「コン鯖」と呼ばれることも多い。
「ってわけ」
「コン鯖」を知らないアーチャーに、簡単な説明をした七季は、さらに補足を加える。
「んで、そのサーヴァントの、キャラデザのモデルになった人が、何人かいるんだけど……」
ちなみに、いったんは彼女の膝から降ろされたはずのリクオはというと、ちゃっかり黒髪の少女の横にもぐりこみ、「コンコルディア・サーヴァント」の取扱説明書を読んでいた。
「歌う従者（サーヴァント）、か……」
「このセイバーが、サーヴァントの一人、『セイバー』のモデルなわけ」
白兎（しろう）が続きを引き取って、金髪少女の白い頬をつんつんつついた。
「おお、どうりで何か見覚えがあるなと」
ぱちん、と七季が手のひらを打ち合わせてセイバーを見やる。

金髪アホ毛、緑の瞳。そして華やかでちょっとエロティックな深紅のドレスが、サーヴァント「セイバー」のキャラデザインである。

もっとも、きょうセイバーが着ているのは、ふつうの紅いドレスだが。

「他にも『アーチャー』『キャスター』『ライダー』『アサシン』『ランサー』『バーサーカー』がいるよ。それぞれが特徴的な声のキャラなんだ。

あと、七人のサーヴァント全員を買ってそろえると、特典でもらえるデータがあったりね」

基本的に、声のキャラ別で販売されているシリーズなのである。余談だが、その特典データの通称は「聖杯」と呼ばれている。女神コンコルディアが、杯を与える、というシナリオでデータを受け取るからだ。

聞き覚えのありすぎる単語に、ひとり眉間にしわを寄せている錬鉄の英霊。

――衛宮……聖杯……いや、しかし。

男前の従者が、何やらぐるぐるしているのはわかっているが、この場に人も多いことだし、とスルーする七季。はたして優しいのか、大ざっぱなのか。

しかし、念話でいきなりのぞいたりしないあたりが、どこかの「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」見習いとは違うところである。

「あれ。そういえば、ロビンさん、ちょっと『アーチャー』……うちのじゃなくて『コン鯖』のに、似てるよね？」

と、七季の黒い瞳が、オレンジ色がかったハチミツ色の金髪を映して瞬いた。

「うん。ロビンさんも、モデルだから」

照れくさいのか、白兎（しろう）によってモデルの件をばらされた男はそっぽを向く。シャープなラインの整った横顔は、少しだけ赤みを帯びている。

「俺は、ただの護衛なんですがね」

くすり、と栗毛の少女が笑みを洩らすところに、白兎からロビンへの親愛と信頼が見て取れた。

「お父さんがさ、『アーチャー』の声サンプリングに悩んでるときに、たまたま居合わせてね。強引にスカウトしちゃったんだよ。まあ元から私の護衛ではあったんだけど」

衛宮切嗣。

白兎の養父にして、ベンチャー企業「ムーンセル」の取締役。そして「コンコルディア・サーヴァント」の開発者そのひとである。

業界では「電子の魔術師」などというキャッチフレーズで雑誌にも紹介される鬼才だが――家事能力はさっぱりない。娘の白兎がいなければ、栄養失調になること間違いなしの男だったりする。

つまり白兎は、社長令嬢ということで。

護衛として、ロビンがつくのも頷けるというものだ。

「へえ……そういえば、切嗣さん、元気？」

「あいかわらずかなぁ。ナナや叔母様にも会いたいって言ってたんだけど、仕事が押してねー。けっきょく私だけで帰国したの」

「ありゃりゃ」

それを聞いて七季は、眉尻をへにょんと下げた。

女性全般に優しい切嗣は、養女とはいえ、小さなころから引き取った白兎を溺愛している。

――そりゃ、いまごろ仕事が進まずに、ぐっだぐだなんじゃないかなぁ。

七季も姪っ子として、また白兎の親友として可愛がってもらっている切嗣のこと。ねぎらいや気遣いもしたくなるというもので。

――きりちゃん、がんばれ。

幼いころ呼んでいた叔父の名を、ないしん彼女はひとりごちると、あとで切嗣に、白兎の振袖姿をメール添付してやろうと心に留めたのだった。

「じゃあ、なっちゃんも？」
「うん。棗は、お父さんのとばっちり食って、舞弥さんと一緒に仕事中」
――また新しい名前だ。
ぐるぐるしていたアーチャーの意識が、次々と投げ込まれる情報に反応して現実に浮き上がる。
「マスター。『なっちゃん』とは？」
灰藤色の瞳を向ける男の問いかけに、赤い晴れ着をまとう黒髪の少女は、この場にはいない、もう一人のイトコを説明する。
「白兎の弟（？）くん。双子なんだよ。白兎は、バイオリニストの道を歩いてるんだけど、棗君……なっちゃんは、コンピュータ関係の才能があってね」
「いずれは、お父さんの跡継ぎだからね。いまは、秘書の舞弥さんのアシスタントというか、見習いあつかいで、会社に出入りしてるわけ。
まあ……実質的には、お父さんの見張り兼、アシスタントなんだけど」
親友らしく、七季と白兎の、息の合った説明は、英霊「エミヤシロウ」の思考にさざなみを立てた。
――衛宮白兎……衛宮棗……どちらも、覚えのない存在だ。ここに「エミヤシロウ」はいないということか。
サーヴァントの存在も、ゲームというかソフトウェアの中だけならば、と少しだけアーチャーは胸を撫で下ろす。
よしよし。
落ち着きを取り戻した彼の安堵を感じ取ったのか、七季は小さな手で、アーチャーの白く褪せた髪を優しい手つきで撫でた。
「あと、舞弥さんから伝言」
「ん？」
と、かいぐり従者を撫でくり慰める、黒髪の少女へ、白兎がひょ

いと言葉を投げた。
久宇舞弥（ひさうまいや）は切嗣の秘書を務める、男装の麗人チックな美人であるが。
「『早く嫁に来てください』って。棗（なつめ）ので良いから」
『ちょっと待てええぇぇ！』
「ちょ、舞弥（まいや）さんっ！？」
ツッコミを入れる、一部男性陣と、珍しくあわあわする七季をよそに。
『おといきやがれ、って伝言、よろしくお願いします』
びっ。
慣れっこらしく、そろって立てた親指を床に向かって指した伯言と霜夏が、「ゴートゥヘル」な爽やかまっくろスマイルを浮かべてのたまったとか。
「私の義母でも良いってよ？」
「勘弁して白兎（しろう）。それに舞弥（まいや）さん切嗣さんのこと大好きだろ！」
「ナナのことも大好きだから、いっそみんなで幸せになろうって。舞弥さんは愛人ポジションでも良いってよ？」
「私もたいがいだけど、舞弥（まいや）さんもはっちゃけ過ぎ！　ぶっちゃけ過ぎ！」

#８０　歌うサーヴァント（後書き）

あとがき

＞というわけで、やりたかったもう一つのネタ「サーヴァントでボーカロイド」でした（笑）。

オリ主の世界では、エクストラのサーヴァントキャラが、ボカロちっくなソフトのモデルとなっています。たんなる趣味です。

「赤剣に歌わせるのかよ！」というツッコミもあるでしょうが、あくまでモデルですので。声サンプリングしたら、あとは機械まかせですから。

本当はカラオケやらせたかったんだ。赤剣のオンチネタと合わせて。

白兎（しろう）さんの弟・棗（なつめ）くん、せっかくなので雷雨さんとこの設定からお借りしました。士郎がいない世界を印象付けるためにも。

まあアレです。ＥＸの男主人公です。オリ主とは男友達のノリで仲良し。

あと舞弥（まいや）のキャラ壊し過ぎました。正直すまん。オリ主以上にフリーダムになった。

彼女は、原作通り、殺伐とした人生を送り、たまたま切嗣に拾われましたが、オリ主がうっかりケーキをご馳走してから、餌付けされまくって甘党になったという設定です。

#８１　秘密（前書き）

まえがき

＞引き続き、前回と同じく、番外編的な話です。

リリなの、ゼロ魔キャラは登場しません。

Ｆａｔｅ／ＥＸＴＲＡキャラが出張ってます。

#81　秘密

一護やリクオたちが陸家を辞したあと。
屋敷に残ったのは、七季主従と、彼女の幼なじみ一行だった。
「さてと。これでぶっちゃけた話ができるってもんよ」
黒髪の少女が、赤い振袖姿のまま、ずずっと緑茶をすする。
張り詰めた雰囲気――とりわけ、赤いドレスの美少女と、紺色の振袖をまとう栗毛のバイオリニストが醸し出している空気は、初陣前の新兵にも似ている。
「どうも、身内だけで旧交を温める、という雰囲気ではないな。さてマスター？」
白い髪の従者に促され、おもむろに七季は口を開いた。
「ん……まあよーするに、白兎に稽古をつけてやって欲しい、って話なんだけどな」
『は？』
障子とガラス越しに、やわらかな陽射しが差し込む居間。
鋭い鷹の目とルビーアイが、同時に丸くなって、栗毛の少女と、おのが主を見比べた。
いったん切り出してしまえば、七季の桜色の唇は、とうとうと隠していた事情を打ち明ける。
「白兎たちが衛宮の養子だってことは話したっけか？
その前――つまり、白兎たちの亡くなった両親は、魔法使いだったんだ。で、白兎となっちゃんも、いちおう魔法が使える」
「ちょっと待ってくれ、マスター。こちらの魔法使いというと」

話を遮ったアーチャーの眉間には、みごとな渓谷ができていた。
「心配いらないから。この前、仕事の前資料で渡した、あの『魔法使い』とは違う。
……や、魔法の術式は一緒なんだけどな。正確には、その思想が違う。白兎（しろう）や、そのご両親は『立派な魔法使い（マギステル・マギ）』をめざしたりはしなかった」
麻帆良学園の監査――アーチャーに七季が渡したという、仕事の前資料とは、ようするに、麻帆良の魔法使いと、彼らがやってきたことに対する被害報告書などのデータをまとめたものだ。
もちろん、それを読んで、かつては「正義の味方」であったアーチャーが良い印象を抱くはずもない。
いまだ男の顔は、精悍に引き締まったままだ。
「亡くなった白兎（しろう）たちのご両親はな、魔法を『力』の一種として捉えている人たちだったんだ。
狩りに使ったり、生活するのを楽にしたりするため――そうだな、リドルのいた世界みたいな使い方、って言ったらわかりやすいか？
とにかくまあ、戦いのために力を使うことは選ばなかった。んで、そういう考え方は、『立派な魔法使い（マギステル・マギ）』をめざして当然、な魔法使い連中の間じゃ異端でね」
「ああ……」
――魔術使い、みたいなものか。
アーチャーと比べれば、使い道はかなり違うが、それはそれで責められるようなことではないだろう。
「まあ、いろいろはしょると、白兎（しろう）たちは『立派な魔法使い（マギステル・マギ）』連中の手を逃れて、一般人――とりあえず魔法は使えない切嗣さんに引き取られた。そこまでは良いんだ」
「奏者は、魔力が多くてな」
ぽつり。
それまで黙っていたセイバーが、朱唇を開いて、ためいきをこぼした。

それを聞いて、すぐさま黒髪の少年――リドルが、はん、と口を挟む。

「なるほど。会社の規模はさておき、社長令嬢。まだ年若くて、魔力が多くて、元孤児――利用価値はいくらでもあるってわけだ」

黒い言葉に、しかし頷いたのは、白兎(しろう)じしん。

「棗の方は男だし、セキュリティの高い会社に居続けることも多いし。もちろん、ボディガードだってついてる。そもそも、お父さんと舞弥(まいや)さんがついてるから……めったなことにはならないよ」

いっぽうの白兎(しろう)には不安が残る。

「私はこれでも、音楽家の端くれ。コンサートや、セイバーと一緒に、社交界にも顔を出したりする。当然、不特定多数の人間と関わることになる。ロビンさんがついてくれてるけど……」

「圧倒的に狙われやすい、というわけだな」

アーチャーの言葉に、ロビンが端正な顔をしかめ、栗色の頭がこくん、と上下した。

「ちなみに白兎(しろう)は、初歩の魔法をいくつか使える。あとは、指導者がいないから、なっちゃんと一緒に独学でやってたみたいだけど。そのへんは文通で話を聞いてたしな。

で、思ったわけだ。うちには、魔王もびっくりの魔法使いと、物凄く強くて頼りになる戦士がいるって」

「つまり、私たちに教師役をしろ、と」

嘆息する弓の騎士は、隣に座る少女の、あどけない顔を見下ろした。じいっと見上げてくる夜色の瞳は、少しだけ不安げに揺れている。

「あくまでも、お願いだけどな。白兎(しろう)に何かあっても、私はすぐには助けに行けない……まあ、そのときは暴れるけど。全開で潰しにいくけど」

口調はどこまでも真摯で、親友を慈しむ思いにあふれた声音のままだったが――後半やけに物騒だった。

私の白兎（しろう）に手出しするなんて、馬鹿なの？死ぬの？

そんな幻聴が聞こえてきた、アーチャーとロビンである。

ちなみにリドルは、やたらめったら楽しげに「そのときは任せて」とイイ笑顔でサムズアップしていた。さすがプレ闇の帝王。ルビー色の瞳が、きらきらしている。何か魔性の宝石っぽい。

「余からも頼む。我が家も、世間一般の魔法とは違う術式を伝えているが……基本的に、一子相伝でな。おそらく奏者に適性はないし、教えることもできぬ」

ただ、この事実を明かすことで、信頼の証とさせてくれ。

難しい顔で事情を説明するセイバーは、聖緑の瞳でひたむきにアーチャーを見つめた。

いっぽうリドルは既に乗り気で、いそいそと「杖を買いにいかなきゃね」とスケジュールを立て始めている。

「私も、『魔法』を教えることはできないが？」

「アーチャーさんには、戦い方を……できれば、剣術や、格闘術を教えて欲しいんです」

まだ渋い顔のアーチャーを口説き落とすべく、白兎（しろう）は懸命に食いつく。彼の主たる七季はというと、紹介した手前、これ以上は口を挟もうとしなかった。師弟関係を結ぶのは、あくまで本人たちの問題だからだ。

「何？」

「これでも、銃器のあつかいには慣れています。自衛のために、お父さんや舞弥（まいや）さんたちから仕込まれました」

戦い方も、それなりには。

「それ以上の必要があると？」

少女に戦わせたくない男は、険しい表情で幾度も思いとどまるように牽制するのだが、白兎（しろう）もまた必死だった。

「戦うのなら、相手の手の内を知る必要があります。どう攻めてく

るのか、どう切り返せばいいのか。それに、相手が来るとわかっていて、対策一つ立てないなんて、そっちの方が愚かでしょう？
お父さんも舞弥さんも、仕事がありますし。ロビンさんだって、指導にかまけて気を抜くわけにはいかない。私には、どうしても指導者が必要なんです」
白兎のとび色の瞳は、守りたいもののために、琥珀色のかがやきを帯びていた。
保身からではない。我が身を守ることで、危険にさらされる家族を守ろうとする、それは他者への想いだった。
――負けられない。奪わせない。
たしかに、いまこのとき、彼女の目には、体には、魔力があふれている。感情の高ぶりでこうなるようでは、制御の必要があるだろう。
――生兵法は大ケガの元、か。
「……良いだろう。ただし、こちらにいる間だけだ。私は七季の従者だ。マスターを守りきれないようでは、本末転倒だからな」
「ありがとうございますっ！」
「良かったな、白兎。余からも礼を言う」
「お嬢さんが世話かけるが、よろしく頼む」
白兎、セイバー、ロビンがそろってアーチャーたちへと頭を下げた。

「しかしマスター。何でまた我々なのかね？」
七季とて、ミッドチルダ式の魔法の遣い手である。
「あのな……こっちで弾幕とかやったら目立ってしょーがないだろーが」
「う」
「格闘や剣なんかの武器なら、まだごまかしきくし、修行も道場で

十分。それにリドルみたいな杖なら、こっちもバレにくいし」
まさか白兎にまでデバイスを持たせるわけにもいかないだろう。
「ちょっと！　ナナも魔法使えるようになったの！？」
「だあっ！　やんないぞっ、やんないからなっ！」

#81　秘密（後書き）

あとがき

＞予定より長くなってしまいましたが、ネギま編への伏線なので、お許しを。

白兎（しろう）さんも参戦するので、いまのうちに弓兵とリドルに弟子入りしました。

もうちょっと幼なじみたちで書きたいネタがあったんですが、ひとまずこれにて。

次回から、ゼロ魔編が再開です。

◆オリ主世界の登場人物一ゲスト一（前書き）

※こちらのキャラは、二次創作「Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ・Ｕｎｄｅｒｓｅａ　Ｔｓｕｋｉｎｏｗａ」の作者・雷雨（らう）さまから許可をいただいて、お借りしたうえでの捏造設定です。

◆オリ主世界の登場人物一ゲスト一

◆衛宮白兎（えみや　しろう）

オリ主の母方のイトコ兼親友。げんざいは海外で音楽の勉強中。新進気鋭のバイオリニスト。

双子の兄弟がいる。

養父の衛宮切嗣は、とあるソフトウェアの開発者で「電子の魔術師」と呼ばれる鬼才。ただし生活能力は皆無。娘の白兎（しろう）がいなかったら栄養失調間違いなし。

毒舌で自由奔放。降りかかる火の粉を払うためには、力ずくも厭わない豪快さをそなえるが、いっぽうでは家族思いで、繊細な感性の持ち主。

オリ主の影響を受けて、だんだん正確が男前になりつつある。

ふさわしくない持ち主を破滅させるという、バイオリンの名器（魔道具）「聖杯」に選ばれた担い手。

亡き両親は、麻帆良とは違う考えを持つ、異端の魔法使いだった。そのため、魔法使いとしての教育は受けていないが、魔法は使える。ただし我流。

身を守るために銃器の扱いや護身術に長ける。

げんざいの環境は、切嗣が取締役を務めるベンチャー企業「ムーンセル」の社長令嬢。

また、七季のツテで、アーチャーとリドルに師事することに。

長い栗毛にとび色の瞳。身長１６０センチ。所有するバイオリン「聖杯」には隠された力があるという。青系の服を好んで着る。

◆ルキウス＝セイバー＝ネロ＝フォン＝クラウディウス

白兎（しろう）のパトロンにして騎士。芸術を愛する、ドイツ貴族クラウディウス家の若き当主。

男女問わず、可愛らしいもの、美しいものが好きな性格で、文化や芸術への投資も惜しまない、辣腕企業家。

私設軍隊といって差しつかえない武力を保有するいっぽう、麻帆良のような画一化された西洋魔法使いのそれではない、一子相伝の秘術を継承している。

白兎（しろう）と、魔道具であるバイオリン「聖杯」を引き合わせたのも彼女。

異能者として表に出ることは少ないが、その情報網は、ヨーロッパ全土に張り巡らされており、自勢力に害があるときのみ、動くという。

金の髪に碧い目。身長１５０センチ。赤いドレスがトレードマーク。

◆ロビン＝Ｈ（フッド）＝ブラックモア

白兎のボディガード兼運転手。企業「ムーンセル」ではなく、衛宮切嗣個人に雇用されている。

元孤児。ストリートチルドレンのリーダー的存在だったが、たまたま出会った軍人・ダン・ブラックモアに引き取られる。

その後、ダンに鍛錬を受けながらも、ブラックモア夫婦に愛されて育ち、英国軍に入隊。特殊部隊経験を経たのち、任務中に事件を起こして除隊。

白兎（しろう）の引きによって、彼女の護衛に抜擢される。家族以外の周囲からはさんざんな反対に遭うも、白兎（しろう）じしんによって蹴っ飛ばされ、おして望まれた。

口が悪く、人を挑発するのが得意。人あしらいも上手い。ただし基本的に慎重で、「小心者」「臆病者」と自称するほど、念には念を入れる性格。

元孤児であった自分の生まれにコンプレックスを抱いているが、それすらも許容して、自分を望んでくれた白兎（しろう）に、口には出さずとも、深い崇敬と信頼を抱いている。

もっかの悩みは、仕える主が、幼なじみの影響で、年を経るごとに男前になっていくこと。

あと、いつか白兎（しろう）がセイバーに食われるんじゃないかと、ないしんハラハラしている。

オレンジがかったハチミツ色の金髪に緑の瞳。長身痩躯。緑色のネクタイがトレードマーク。

#82　始まらない物語ーニワトリと彼女ー

「カナリア食ったあとの猫ってあんな感じかな？」
「ひなたの猫とか？」
「ええと、たとえが猫なのはアレですけど、否定はしません」
「すっごく幸せそうな顔だよね」
『ほんとーにナナキ（ちゃん）って、美味しいもの食べるの好きなんだなあ』
異口同音に呟く一同の視線のゆく先には、うりうりととらに懐いて（というか背もたれ代わりにして）、ほにゃほにゃ笑み崩れながら寝かけている黒髪の少女が一人いた。
「にゃあ～」

トリステイン魔法学院の学生寮。
「満足してもらえたようで、何よりだ」
アーチャーお手製のおにぎりは、大好評。
食べている最中も、マスターをはじめ、みんなから絶賛されていた料理人――もとい、錬鉄の英霊は、誇らしげに食後のお茶をふたたび淹れる。
人数が多いため、緑茶は二煎めまで出してから、ようやく全員に回りきったため、今度は別の茶葉だ。色が黒いそれは、プーアル茶。黒茶と呼ばれる、中国茶の一種である。
「そら、マスター。これで目を覚ましてくれ。午後からも授業があるのだろう？」
「ん？……さんくす、あーちゃー。いただきます」

お猪口に良く似た、白い茶杯を受け取って、七季は少しくせのある黒茶を口に含む。深みのある味わいは、油分を流す効能もあって、ちょっとこってりした肉巻きおにぎりのあと口をさっぱりと洗い流してくれる。

温かいお茶で、これまたほっこりと白い頬を緩めている少女は、いかにも幸せいっぱいで、見ているプレシアたちも和みまくっていた。

ちなみに、七季の背もたれ代わりになっている金色の妖獣も、その巨体のうしろで、ぱっさぱっさと毛足の長い、馬みたいなしっぽを揺らしている。どうやら昼食は、かなりお気に召したようだ。

妖怪すらも満足させる、料理の鉄人――もとい、錬鉄の英霊、エミヤシロウ。さすがである。

「ふはー……まあ、食い意地張ってるのはいまさらだし、認めるけどさ。私にだって言い分ってものがある！」

食いしん坊バンザイ、なあつかいは年ごろの乙女として、さすがにアレだったのか、七季は、にぎりこぶしを作って声を上げた。

「うおっ？」

その勢いに、ちょっとだけ才人がのけぞって、黒髪を散らした。

「というと？」

自分もお茶を飲んでいたアーチャーが、主の少女へけげんそうな相槌を打ってよこす。

「幼稚園に上がる前かそこらの年頃で、ニワトリ目の前でさばかれてみ？

かるくトラウマだから。忘れられないから」

「……それはふつう、お肉が食べられなくなるんじゃないかしら？」

七季のセリフに、ダークヘアのママさん魔導士が「それは……」と、ちょっと顔を引きつらせつつも、まっとうなツッコミを入れる。

もちろん、彼女の娘であるアリシアは、パックに入った鶏肉しか見たことはないだろう。

いっぽう料理人のアーチャーは微妙な顔だ。

だが、プレシアのセリフに、小柄な少女はまっくろな頭をふるふる振った。

「その直後に、さばいたばっかの鶏刺(とりさし)と、煮物を食べさせられた――美味しかったんだ」

『――』

その場の全員が、否応なく黙り込む。何といっていいのかわからない。

「美味しかったんだよ！

目の前で首折られて逆さ吊りにされて切られた首から血抜きされてるの、目の前で見てたのにっ。

そのあとの処理は割愛するけど！

生きてたニワトリさばかれてくのを目の前でがっつり見た後に、ほこほこ砂糖醤油の芳ばしい湯気上げながら出てきた煮物、美味しかったんだ！」

くわっ、と目を開いて主張する少女には、異様な迫力があった。

アリシアなどは、剣幕にビビッてリニスに抱きついている。

それがふいに、ふっとかき消え――悟りを開いた仏のような微笑に変わった。

「そのとき本能的に理解しちゃったんだ……ああ、命は、食べ物なんだって」

そっと合掌する七季の姿は、ふっくらした白い手といい、どこか浮世離れした微笑といい、菩薩もかくやというやわらかなたたずまいで、そこにいた。お嬢さん、「神使(しんし)」のはずだが。

同時に、アーチャーは「このマスターとなら、末永くやっていけそうだ」と感じた。料理人的に。

「しかもそれ、毎年繰り返される、ばーちゃんちの年中行事でな。年末に、飼ってるニワトリつぶしてお祝いというか、ご馳走にするのがならわしなんだ。田舎だから。

そんなわけで、食べ物イコール命、ってのを、骨の髄まで刻まれた結果――食べ物はムダにしちゃいけない、というもったいない精

神が、根を張って枝葉を伸ばして花まで咲かせちゃってる感じ」
だから、いまだにダイエットのためにもごはんを残す、ってのが違和感あるんだけど。
「ああ、うん。それは……そうなるよなあ……」
才人も苦笑ぎみにコリコリ頬をかいた。
「でもナナキが美味しいもの好きなのは、たんなる性分だよね」
「そだな」
リドルのツッコミに、食い意地の張った少女は、あっさり間髪入れずに頷いた。
「ちなみに、うちのばーちゃんちでさばくのは軍鶏（シャモ）だ。美味いぞ」
兼業農家なので、野菜も取れたてのぴかぴかである。
「それは……なかなか贅沢な」
スーパーなどでは、軍鶏（シャモ）肉はあまり出回らない高級品である。
――なるほど、七季の舌が肥えているのは、まずそこからか。
ひとり納得する男に、七季はやっぱり食い意地全開のおねだりをするのだった。
「烏骨鶏もいる。あっちは食べたことないけど。卵だけならもらえるから、今度アーチャーにプリン作って欲しい」
「了解した」
「良い主従ね、本当に」
やれやれとプレシアのこぼした呟きに、対抗心を燃やしたリニスが「プレシア！　私だってプレシアのお役に立ちますから！」とたぎって、山猫娘を落ち着かせるのにまたひと悶着あったとか。

#８２　始まらない物語－ニワトリと彼女－（後書き）

あとがき

＞ようやくゼロ魔編の再会です。お待たせしました～……って、まだ正月ボケがぬけていないのか、のっけからこんなノリ。

プレシアたちとのお正月を書けなかったんで、久しぶりにテスタロッサ家とほのぼのです。

#83　始まらない物語ー先生と彼女ー

昼食のあと。

食休みを挟んでからの午後の授業という流れは、現代日本でもあまり変わらないが、生徒による清掃時間などはない。

校舎や学生寮を掃除するのは、基本的に罰を除けば、メイドたち使用人の仕事であるからだ。

そこに少しの違和感を覚えつつも、七季や才人たち、異世界トリップ一行は、教室の席へと座った。

今度は、水の魔法の授業である。

教師が到着するまでのざわめきは、やはり世界は違えど、そう変わるものでもない。

七季たちもまた、小声で、水の魔法に対する期待を話し合っていた。

かちゃり。

そこに、ドアの開く音がする。

こつ、こつ、こつ。

かるい足音とともに教壇へと登ったのは、天然パーマなのか、くるくるとくせのある白髪の、優しげな老教師だった。頭髪は薄くなる様子はなく、銀髪にも近いまっしろな髪が、豊かに頭部を覆っている。

そげた顔には年輪のようなしわが刻まれているが、黒い瞳だけは、子供のようにきらきらと強い光を湛えていた。叡智と、童心が優しく同居する目だ。

とん、と彼は教卓に書籍と小瓶を置くと、七季と変わらないくらいの背を、少し猫背ぎみにして、生徒たちの顔を一通り眺めた。薄い肩ではあるが、それが逆に、人の警戒を解くような優しさとなっ

ている。
「……うん。起立、礼」
教師の号令で、一斉に生徒が立ち上がり、一礼して、ふたたび着席した。
学生としての反射で、七季たちもそれにならう。
「では、出席を取るよ」
耳慣れた言葉……しかし、トリステインの授業では、初めて聞く言葉に、思わず才人と七季、そしてアーチャーが顔を見合わせた。
「……ナナキ＝ナナチ」
「はい！」
元気に返事をした少女に、ふと老教師の目が、優しく和んだ。
「そうか……君が留学生だね」
懐かしい色だ。
小さな呟きを、人外の聴覚をそなえるアーチャーとリニス、そしてリドルだけが感知した。
しかし、すぐに彼は出席簿と思しき、薄いファイルにチェックをつける作業に戻った。五分もかからなかっただろう。
「さて。去年から知っている人もいるだろうけれど、新人さんもいるようだからね。あらためて、自己紹介といこう。
コウスケ＝キンダイチ＝ド＝ガティネ。皆さんに、水の魔法を教える教師です。
もっとも、ガティネの家は、跡取りに譲って隠居の身だからね……きがるにキンダイチ先生、と呼んでくれれば嬉しいな」
「金田一先生!?」
老教師の言葉に、すっとんきょうな声を上げたのは、誰あろう七季だった。
生徒たちが残らず目を丸くする中で、教壇に立つ人物だけが、ふっと目を細める。
「そう。君のように呼んでくれると嬉しい。ありがとう、ミス・ナナチ」

目尻のしわも愛嬌たっぷりに、にっこり笑ったキンダイチは、ぱんぱんと手をたたくことで、生徒の注目を逸らした。
「さあ、可愛い新人さんを見ていたい気持ちもわかるけれど、そろそろ授業を始めますよ」
優しげな老教師は、そう言って上手に場を取りまとめたのだった。

＜どうしたのだね、マスター。らしくない＞
＜ああもう……らしくもなくなるさ！＞
＜ちょっと、ホントに大丈夫？＞
＜あとでな！　あとで説明する……つーか、平賀君、キンダイチって名前に心当たりないの？＞
＜へ？　いや、知り合いにはいねーと思うけど……？＞

「金田一耕助先生、ですね？」
ずぱっ。
教員用の部屋を訪れた七季は、前置きなしで、くせっ毛の白髪を持つ老人に問いを――それは確信に近かったが――投げた。
「ああ。まさか、君みたいな若い子が、僕を知っているとは思わなかったよ……」
感慨深そうに目を細め、キンダイチ氏は少女の問いに頷いた。
金田一耕助。
昭和の時代、数々の難事件を解決した名探偵、そのひとであった。
七季の友人、金田一一の祖父でもある。
「その名前もさることながら、雰囲気が……はじめちゃんに、お孫さんに良く似ていらっしゃいますから。とっても優しい目です」
告げる七季も、憧れと慈しみと懸念、そして、えもいわれぬ感激

の入り混じった、複雑なまなざしで、向かい側に座る名探偵を見つめている。
「そうか。君は、一の」
「友人です。はじめちゃんも美雪ちゃんも、元気ですよ」
「ああ。それは良かった」
「良く事件に巻き込まれてますけど」
がたっ。
イスから転げ落ちたキンダイチは、呆然とした目で、イスに座ったままの黒髪の少女を仰いで動かない。
「それは……やっぱり」
「大丈夫です。彼には、支えてくれる幼なじみも、友人も、たくさんいます。ひとりじゃないし、何より、はじめちゃんは強いから」
温かいソプラノが、人の暗部に疲れていた老探偵をそっと包んだ。自身も跪いた七季の白い手が、しわだらけの枯れ木みたいなキンダイチの手を取る。
「罪を憎んでも、人を赦(ゆる)せます」
その言霊(ことだま)。
聡明すぎる頭脳を持って生まれた——孫を案じていた祖父の目から、ふいにぼろぼろと大粒の涙が流れ落ちた。
「そう、か……あの子は……ちゃんと……」
人を愛することができるのか。
疲れきった旅人が、ようやく宿を見出したような、深い安堵に満ちた呟きだった。

いっぽう、金田一耕助を知らないプレシアやリドルは、蚊帳の外ぎみだった。才人も困った顔で、いたたまれなさそうにしている。
＜ようするに、どういうことかしら？＞
＜このひと、海外で姿を消したって言われてる、名探偵さん！

私の友達のおじいさんなんだよ。平賀君とかは、聞いたことない？　金田一耕助って＞

＜うーんと……＞

小説をライトノベルくらいしか読まない才人は、念話の内容に首をかしげている。

＜外国に渡ってからは、消息が知れないって話だったけど……まさか、異世界トリップしたうえ、こんなファンタジー世界にいるとはね……＞

＜もしかして……＞

＜たぶん、サモン・サーヴァントで召喚されたか……もしくは、純粋に、時空のひずみか何かにハマって神隠しに遭ったか、ってところじゃない？＞

その後、落ち着きを取り戻したキンダイチが、いっそう七季たちと打ち解けて、話に花を咲かせるようになったのは、いうまでもない。

#８３　始まらない物語ー先生と彼女ー（後書き）

あとがき

＞てなわけで、金田一耕助探偵、水の魔法使いとして登場！

「金田一少年の事件簿」の「じっちゃん」です。

誰得。我得っ！

まあ、オリ主たちが、トリステインの戦争に関わるフラグとでも思ってください。うちのオリ主は、下手するとトリステイン見捨てかねないもんで。

ネタで「金田一先生」がやりたかっただけです（まて）。ついでに、オリ主たちに好意的な水の魔法の教師も欲しかったり。

ちなみにキンダイチが名乗った家名のガティネ家は、プランタジネット王朝のプランタジネット家、その前身であるガティネ家から、まんま採用しました。

金田一の別読み、カネダイチに似てたからではないですよ（笑）。

蛇足ですが、「プランタジネット」とはマメ科の植物エニシダの木（ｐｌａｎｔａ　ｇｅｎｅｓｔａ：日本名は「金雀枝」）のこと。エニシダをガティネ家の紋章としていたことから、後に家名となったそうな。

＃８４　始まらない物語ー衝撃ー（前書き）

まえがき
＞今回はルイズアンチ的な傾向があります。お嫌な方はブラウザバックぷりーず。

#84　始まらない物語ー衝撃ー

「そーいえば、お昼の前に、とらが蹴っ飛ばした人がいたっけ」
ぽん、と何かの拍子に思い出したことを、ぽろっと七季が口にしたのをきっかけに。
彼女たちは、医務室へお見舞いに行くことになった。
それというのも、うっかり七季が口走ったのが、キンダイチの教員室で、優しい老教師は、それならお見舞いに行ってはどうだろう、と勧めてくれたのだ。
目を回したワルドとルイズが、医務室に運ばれたことは、キンダイチも知っていたらしい。
しかし、昼食の時間を回って、さらに午後の授業が終わっている。さすがに医務室にいるとは思っていなかった七季だが、残念ながら、どれだけヒマをもてあましているのか、グリフォン隊の隊長は、いまだ医務室に居座っているらしかった。

「……こっちの騎士で、隊長っていうからには、軍人みたいなもんだろ。どんだけ軟弱なんだ？」
ぽそっと廊下を歩く七季が呆れ半分に呟く。彼女の肩に留まっているシームルグが「マダオよな」ときっつい一言を追加した。
ちなみにマダオとは、「ま」るで「ダ」メな「お」っさん、の略である。
東風（こち）、既にリドルとの交流で、いち早く日本文化（サブカル）をモノにしているらしい。
＜まだお＞

アーチャーの帯剣している鞘にくっついていたプラタ（分体）も、さりげなく同感の意を示す。
「打ちどころが悪かったとか？」
お人よしな才人がフォローめいた相槌を打つも、横からさっくりアーチャーがそれを否定する。
「いや。それなら、いつまでも学院の医務室などという、ハンパな場所に置いてはおかないだろう。
子爵という身分もあるようだしな。とっくに専門の医者なり、術者なりを呼びつけるか、しかるべき設備の整った場所に搬送するはずだが」
「ですよねえ」
プレシアの後ろに控えて歩くリニスも、白い髪の偉丈夫に同意した。美人な癒し系山猫娘は、カフェオレ色の髪と同じ毛色のネコミミを不満げにぴるぴる動かしている。
「まあ、トラは私の使い魔ってことになっているから……私がお見舞いに行くのは、スジってものでしょうね」
肩をすくめたプレシアの手には、厨房で作ってもらったサンドイッチのトレイが載っていた。花や果物を学院で用意できるものでもなし、お見舞いの品がわり、というわけだ。
ちなみにティーセットのワゴンは、彼女の従者であるリニスが運んでいる。アーチャーや七季、才人が手伝いを申し出たのだが、いちおう誠意を見せるため、ということで遠慮されたのだ。
例によって、いちおう元凶のとらは、外で散歩中である。
もっとも、彼の行動に文句をつけるようなものは、一行の中には誰ひとりいなかった。
彼が、ワルドを蹴飛ばしルイズを巻き込んだと聞いたときは、そろってサムズアップしたものである。
「……ナナキいじめる人、きらい」
むぅ。
純真なアリシアですら、姉のように慕う七季に、言いがかりじみ

た物言いで絡んでくる少女には、悪感情を持っていたらしい。むべなるかな。

「まあ、儀礼的に謝ったら、とっとと退散するに限るね」

七季の胸に抱かれたリドルも、黒猫姿でルビーの目をちろりと細めて締めくくった。

「失礼します」

入室の許可を受けて、医務室に入った七季一行は、ちょうど起き上がったところらしいワルドに会釈した。

ルイズは、まだ奥のベッドで寝ているらしい。

――どうりで水の魔法の授業が静かだったわけだ。

七季の胸に抱かれたままのリドルが、ないしんひとりごちる。

「……やあ。君は、さっきの」

しかし、黒髪の少女に声をかけたヒゲ子爵は、彼女の背後に続く美女を目にして、絶句した。

ぎゅごごーん！

そんな雷撃で鐘を鳴らしたかのような衝撃が、男の全身を打ち据えたのだ。

ワルドの目は、ダークヘアのママさん魔導師――プレシアに釘づけになっていた。

「母上に似ている……！」

『はい？』

ルビーの瞳。暗色の髪。

ワルドとは似ても似つかないプレシアは、しかしアリシアという娘を愛する、慈愛と包容力に満ちた美を湛えている。

それは、母性という美しさ。

母を亡くし、その寂寞から、じょじょに混迷の闇のるつぼへと深入りしていた男には、いきなり現れた彼女の美しさは、心に射し込

んだ、一条の光に等しい。
「あの、お見舞いといってはなんですけれど」
サンドイッチの載ったトレイを差し出すプレシアの手を、がしりとワルドのごつい手が握った。
「ありがとうございます。美しい方。ぜひ、お名前を教えていただきたい。
僕はワルド。ジャン＝ジャック＝フランシス＝ド＝ワルドと申します。若輩ながら、グリフォン隊の隊長を務めておりまして、子爵位を持っております」
ルイズを婚約者だとうそぶいた口で、ナンパまがいにプレシアの名を尋ねる。その言動に、アーチャーも七季も、眉をひそめずにはいられない。
いっぽうのワルドは、公の場での「私」ではなく「僕」と人称を変えていることからして、ずいぶんプレシアに執心のようだ。
――何様のつもりかしら。
かたやプレシアはというと、ないしん、この男の手を振り払いたくてたまらない。
七季たちの話では、ルイズの関係者のようだし、あの少女に言いがかりをつけられて困っている七季を、助けることすらしなかったというではないか。
異世界の巫女を、恩人として、また友人でもあり娘のように思っているプレシアにとっては、ワルドなどろくでもない男にしか思えない。
もちろん、身内のひいき目が入っていることも、大人の彼女はじゅうぶん承知していたが――だからといって、この軽薄な男に、色よい返事をしてやる義理は、かけらもなかった。
そんな母親を助けようと、今度はアリシアが声を上げる。
「おじさん、ママを放してください。いきなりレディの手をつかむなんて、失礼です！」
すぐ側から飛んできた声に、ワルドが振り向くと、金髪ツインテ

ールの幼女が、母親と同じルビー色の目を怒らせて、不審たっぷりのまなざしを向けていた。
「君は……この方のお嬢さんかい？」
「そうですっ。早く行こ、ママ。あのルイズって人が起きてきたら、またお姉ちゃんに言いがかりつけてくるにきまってるよ！」
幼いアリシアの中で、ルイズの評価は、既に底辺を這っている。
大好きな姉貴分の敵は、自分の敵、とアリシアの中で認識されているようだった。
「君の、お姉ちゃん？……彼女――ナナチ嬢がかい？」
金髪の幼女の言葉に、ヒゲをたくわえた子爵はけげんそうなまなざしを七季へと向けた。黒髪の少女の名前は、ナナキ＝ナナチ。
ダークヘアの美女と、金髪の娘は、彼女の家族だというのか。
――しょうがない。
プレシアはないしん嘆息して、みずから名乗ることにした。
「手を離していただけないかしら？」
「あ、失礼」
母性あふれる美女の手を、名残惜しそうに離した男に、アーチャーや七季、才人やリドルからの白い目が飛ぶが、ワルド本人は気づいていないのか。
「私はプレシア＝テスタロッサと申します。この子は娘のアリシア。ナナキとは、血縁上の親子ではありませんが、娘のように思っておりますの。彼女の保護者、といったところですわ」
ベッド脇に置かれたサイドテーブルに、トレイを置くと、プレシアはかるく頭を下げた。
「このたびは、私の使い魔が失礼をしたようで、一言おわびに参りました。
お昼がまだのようでしたら、軽食と紅茶をお持ちしたので、召し上がってくださいね。こちらの厨房で作ったものなので、味は保障します」
リニスが無言で、ティーセットとデザートを載せたワゴンをベッ

ド脇に配する。
「これはありがたい。お心遣い、いたみいります。なあに。少々やんちゃな使い魔君でしたが、気にするほどでもありません。ミセス・テスタロッサと知り合えたきっかけを、むしろ感謝したいくらいですよ」
キラッと白い歯を見せて笑うワルドに、こっそり才人が「キモッ」という顔をした。同感だ、とリドルも頷いている。
七季とアーチャーの主従は、そろって無表情だった。どちらも反応する価値もない、と思っている。その目が、リニスの、ぼわぼわになったネコしっぽを、じっと見つめていた。
「ああ、プレシア（マスター）につく悪い虫を潰したくてしょうがないんだろうな」と、これまた弓の騎士と異世界のまっくろ巫女が、おそろいの思考を脳裏に流している。
「私、夫とは別れておりますので、ミセス、とは呼ばないでいただきたいわ」
「そうですか！　いや、これは失礼！」
ますますやに下がるワルドに、気分のいいものなど、一人もいない。
医務室に常駐している水の魔法使い（メイジ）さえ、「国防の一角を担うグリフォン隊の隊長が、こんなに軽薄で良いものか」と眉をひそめている。
それにしても、ルイズが起きてこないのは不幸中の幸いだが、このワルドの声の大きさで目覚めないあたり、ピンクブロンドの少女の図太さがうかがえた。
「……それでは、これで失礼します。医務室でお休みになっていたのですもの。安静になさってね」
「ありがとうございます、ミス・プレシア」
誰も、プレシアを名前で呼んで良い、などとは言っていないのだが、ワルドは馴れ馴れしく彼女を呼んだ。
背を向けて医務室を辞したプレシアの表情が、苦虫を噛み潰した

ようであったことは――いうまでもない。

＃８４　始まらない物語ー衝撃ー（後書き）

あとがき

＞つーわけで、ワルド↓プレシアのフラグが立ちました。

成就はしませんけど。

まあアレです。ルイズの使い捨て色が濃厚になっただけです。

＃８５　始まらない物語ー災厄の種ー（前書き）

まえがき

＞今回はルイズアンチ的な傾向があります。お嫌な方はブラウザバックぷりーず。

#85　始まらない物語ー災厄の種ー

土の魔法の教師・シュヴルーズに、「土の魔法を学ぶため」という名目で許しを得た七季は、嬉々として畑を作った。

場所は、学院の敷地から少し離れた土地。いちおうオールド・オスマンにも話を通しているため、問題はこれっぽっちもない。

農具はというと、器用なアーチャーによる投影品――ではなく、錬金の魔法による手作り。

また、そこにたまたまギーシュが通りがかったことも幸いした。

「ルイズ爆発魔法事件」でアーチャーに恩義を感じている少年は、グラモン家の四男である。家督を相続する可能性は低いが、いちおう領地についてもそれなりに考えているらしい。

「じっさいに作物を作ることによる、土壌改良の実験かい？　ふむ……領地を治める貴族としては、興味深いね。サー・アーチャーが加わっているというなら、僕も謹んで協力させてもらうよ！」

そう言って、ギーシュは土の改良や農具の錬金に手を貸し、気がつけば、自分と同様に「土の魔法使い（メイジ）」の素質を秘めたアーチャーと意気投合。さらに、七季たちの畑作りにも協力してくれることになった。

やはり、錬金でも何でも、実践するのがいちばんの近道なのだろう。

肝心の作物の種だが、これは意外なことに、シームルグである東風（こち）が、はばたきひとつで手品よろしく出してくれた。

シームルグの伝説にいわく――太古の海には二本の木があり、シームルグは、そのうちの一本に棲んでいたとされる。この木の上で彼が羽ばたくと種子が撒き散らされ、その種子から、あらゆる種類の植物が生えたという。

「うむ。種子であれば、何でも出せるぞ」
そう大言した神鳥の言葉に偽りはなく、アーモンドやカシューナッツ、ピーナッツといった、食べられる種子まで出てきたのには、プレシアも目を丸くしたものだ。
ちなみに、トウモロコシなどは、どういう仕組みなのか、新鮮なものを一本まるごと出したため、喜んだ七季がゆでて食べた。ちょっと目的からずれたのは、ご愛嬌だ。
「ギーシュに誘われたんだけど……面白いことをやってるのね？」
金髪の少年に声をかけられた、金髪ロールの少女・モンモランシーが、このメンバーに加わったのは、畑の作物が、ようやく芽を出したころ。
アリシアの使い魔・エイプリルの発案で、薬草も育てている菜園に、水の魔法使い（メイジ）である彼女が、興味を持たないはずがなく。
七季たちの話を聞いて、水の魔法の教師・キンダイチが顔を出しているところに、たまたま出くわし、水の秘薬に使う薬草について、老教師と意見を交わしながら、水やりをするようになり。
様子を見に来たシュヴルーズも、ときたま土壌改良の成果を観察しながら、七季たちと食事をしたり、畑の隅で、趣味で花を植えたりして。
べつだん、口止めもしていなかったため、モンモランシーから話を聞いた女生徒が、幾人か顔を出すことも珍しくなくなり。
気がつけば、アーチャー設計の元、ギーシュとシュヴルーズの協力で建てられた、少し大きめの小屋――というには、かまどまで作られた百姓家のようなものだが――が、すっかりサロン化していた。
ちなみに、ここには風の魔法の教師であるギトーも入り浸っている。
水のキンダイチ、土のシュヴルーズ、風のギトー。三人の教師が、ときには授業についても話し合いつつ、生徒たちの「魔法実験」と題した畑仕事を眺めるのは、それなりに楽しい趣味となっていたのだ。

「しかし……畑を作るのに、水や土はともかく、風の魔法も使うとは……」

物珍しげに、ギトーが窓から見ているのは、ガラス製の温室である。

一見、何でもないように見えるが（ガラスの温室はトリステインでも珍しいものの）、そこには風の魔法による光の屈折が使われており、日照量を調節していたりする。

「植物を育てるには、水と土だけでなく、光も重要な要素だと、実験からわかったのだそうですよ」

穏やかな面持ちで語るのは、元日本人であるキンダイチだ。彼とて光合成の条件は知っている。

「生命を育てるには、土だけでは足りない、相関関係があるのだというレポートが提出されました……まだ、経過報告なのですけれど」

シュヴルーズが、七季から受け取ったレポート用紙――これも、羊皮紙ではなく、日本で使われている漂白紙だ――を、二人の教師に見せる。文字は、しっかりハルケギニアの公用語だ。

「ほう」

「なるほど。土壌の成分による、比較実験もやっているのですか。こちらは、まだ結果待ちのようですが。先が楽しみですね、シュヴルーズ先生」

レポートにざっと目を通したキンダイチが、目尻のしわを優しく深める。

「ええ！」

かたや、ふくよかな面貌に、喜びと誇らしげな色を浮かべる女性教師を目にして、ギトーも頷いて考え込んだ。

「ふむ……たまには、実践だけでなく、こういった研究も生徒たちにさせてみるべきか……。

ああ、それはそれとして、こちらは、ミス・プレシアが個人的にまとめた風の魔法についての考察レポートなのだが」

「これは……かなり詳細に数値化されてますね？」

「うむ。この実験には、私みずからも協力しました。ミス・プレシアやミス・ナナチだけでは、使えない魔法もありますからな。安定性についても、その熟練度に関する差が……」
穏やかな休日である。いまこのときは。

そのころ、外では。
きょうの畑仕事を終わらせた少年少女たちが、東屋――これもアーチャーやギーシュが作った――で、思い思いにくつろいでいた。
傍らには、アーチャーの入れた紅茶と、珍しく、アリシアお手製のクッキーがある。
「やっぱりメイジがやると、畑仕事もずいぶん楽なんだなー」
感心した声を上げるのは、こちらの魔法が使えない才人である。
だからといって、役に立たないわけではない。ギーシュやアーチャーが錬金した肥料をまいたり、雑草を抜いたりと、鍛錬がてらせっせと体を動かしていた。
「そうね。でも、メイジだけじゃ、やっぱり行き届かない部分があるってわかったわ」
水やりを担当しているモンモランシーが、才人やアーチャーに視線を投げる。
作物の葉っぱの痛み具合で、病気にかかっているかどうかを判別したり、間引きをしたり、雑草抜きだって、魔法でやれるとは限らないのだ。
「ああ。手を取り合ってこそ、作物を育てられるのだと気づいたよ。それに、やっぱり人数があった方が、どうしたって作業は進むしね」
ギーシュもクッキーをつまみながら頷いた。
「君たち……アレについてのツッコミはなしかね？」
何かを堪えるような声で、アーチャーが指差す先。
ぴこたんぴこたんっ。ぴこたんぴこたんっ。

「ぜんたーい、とまれっ。いち、に！」
ぴこたんっ。
黒いしっぽよろしく、ポニーテールを春風になびかせた七季の号令一下、奇妙な植物――赤ん坊サイズの大根みたいな――が、いっせいに歩みを止めた。
そう。それまでその植物たち――目鼻や口に見える切れ目のある――は、黒髪の少女のあとをついて、歩いていたのだ。それこそ、犬の散歩よろしく。
マンドラゴラ。
マンドレイクとも呼ばれるそれは、古くから薬草として用いられたが、魔術や錬金術の原料としても登場する。根茎が幾枝にも分かれ、個体によっては人型に似る。幻覚、幻聴を伴い時には死に至る神経毒が根に含まれる植物である。
「ナナキだしね」
黒猫姿のリドルが、いささか遠い目でアーチャーに応じた。才人たちは、はなから目を逸らして見なかったことにしているらしい。
それもそのはず。
いま目の前で動いているのは、伝説通り、人のように動き、引き抜くと悲鳴を上げて、まともに聞いた人間は発狂して死んでしまうという魔法植物の一種である。
リドルが生まれ育ったハリポタ世界では、わりと有名な存在だが――それでもふつうは、地面に埋まっているのがふつうで、あんなふうに出歩いたりはしない。
「ナナキ、マンドラゴラと意思疎通できるらしいよ。ふつうに固体の見分けつくって言ってたし」
そんでもって、七季に懐くらしいのだ、マンドラゴラは。
まあ、見たとおりである。彼女の号令にも従っているようだし。
「……どうなんだ、それは」
眉間に寄せたしわもくっきりと、疲れきった声を洩らすアーチャーに、リドルはむしろ、悟りの境地にいたった老僧のような、穏や

かな声で返した。
「うん、あれに関してはツッコむだけムダだよ？」
余談だが、七季がハリポタ世界にいたころも、ホグワーツの七不思議として数えられていた現象だったりする。
ちなみに、そのマンドラゴラ行進のうしろには、面白がったアリシアが、トコトコついて回って、姉のように慕う七季に「すごいね」とはしゃいで、きゃっきゃとジャレついていた。平和なものである。
つけ加えると、ここにいないプレシアは、小屋に作り上げた自分の工房にこもって、リニスを助手にデバイスの改造中だ。
七季とアーチャー、リドルがいるなら心配ないと安心して、子守りを任せたらしい。
まあ、東風（こち）やプラタ（分体）八匹もいることだし、いざとなったら一軍くらいは返り討ちにできる戦力には違いない。
とらもヒマだったのか、出てきて、マンドラゴラをけったいそうにつついている。そして今度は七季とアリシアにモフられ始めた。
「……平和だな」
「……平和だね」
小鳥のさえずりも長閑に、休日の午後は、穏やかに流れていこうとしていた。

悲鳴は、いかにして届いたのか。
それに重なる爆音が、学院側からとどろくや、まったりとしていた空気はうち砕かれ、三人の教師も小屋から飛び出してきた。
「何だ！？」
学院からは、黒煙がのろしのように上がっていた。
七季たちの建てた小屋は、学院からは少し離れた林の中だ。ここからでは、状況がわかるはずもない。
だが、遠見の魔法の使い手や、風の精霊を操る術に長けた神鳥が、

ここにはいた。
「侵入者のようだな。生徒が人質に取られている」
「……ミス・ヴァリエールか。まずいな」
東風（こち）の呟きを補足するように、ギトーが切れ長の目を細めて、苦々しく呟いた。
ルイズの性格は、この場の誰もが知っている。下手に犯人を刺激しなければ良いのだが、彼女の口の悪さでは難しいかもしれない、とシュヴルーズは青ざめ、キンダイチは穏やかな相貌を痛ましげにしかめた。
トリステイン魔法学院に侵入するほどの手練である。
大貴族であるヴァリエールを敵に回すほど、頭が悪いとは思いたくないが、いまだ襲撃犯の目的は知れない。
あわてて学院に戻ろうとするギーシュたちを、キンダイチが強い声で押し留めた。
「ここにいなさい。むやみに飛び込んでは、かえって犯人を刺激することになる」
「あ……」
いっぽう、七季たちはというと。
「東風（こち）、音声こっちに回せる？」
「造作もない」
色あざやかな羽根を持つ神鳥は、主の言葉にさっそく応じて反映する。
『隊長！　ここにいるのはわかってるんだ！　出てきたらどうです？』
『ちょっと！　離しなさいよっ、私を誰だと思ってるの！』
どこか狂気じみた男の声と、きんきんとヒステリックに響く少女の声。

「……バカだろ？」
七季の呟きに、否定の言葉は飛んでこない。
「この声聞いただけでも、けっこうヤバげな相手だって、私でもわかる。薬キメてんのか、素のままなのかわかんないけど、これはヤバい相手だろ？」
あどけない顔をしかめて吐き捨てるように言う、黒衣の少女に、アーチャーも渋い顔で嘆息した。
「ろれつは回っている。興奮しているが……これだけでは、薬物の使用まではわからんな」
『貴族にこんなことして……タダで済むと思ってんの！』
『隊長！　コルベール隊長――！』
「……話、噛みあってないし。
アーチャー。とりあえず、アリシアをプレシアの工房に連れてって。教育に悪い。あと結界張らせて。そこから出るなって伝言よろしく。動くんなら、その後だよ」
「了解した！」
うずうずしている様子の男に、七季は妹分の保護を優先させる。
人質に取られているのは、あのルイズだ。気に食わないとはいっても、放置すればアーチャーが気にするだろう。
黒髪の少女が手を振ると、白い髪の従者は、ひとつ頷いて、金髪の幼女を抱き上げた。その場から姿を消す男を見送った七季は、周りにいたマンドラゴラたちに声をかける。
「悪いけど、きょうはこのへんで戻って。また明日な――」
と、やおら少女の絶叫が、その場にいたものの耳をつんざいた。

#85　始まらない物語ー災厄の種ー（後書き）

あとがき

＞うん、ほのぼの書くはずが、がっつりイベント起こりました。

フーケ討伐が消えた代わりに、メンヌヴィル投下してみた。

コッパゲ、ひとりハブられている間に不幸が降りかかります。もちろんルイズはいうまでもない。

続くよ！

＃８６　始まらない物語－不運－（前書き）

まえがき
＞今回はルイズアンチ的な傾向があります。お嫌な方はブラウザバックぷりーず。

#８６　始まらない物語ー不運ー

時間は、七季たちが風の精霊越しに聞いた悲鳴が上がるよりも、十分前にさかのぼる。

「白炎」の二つ名を持つ傭兵・メンヌヴィルは、ピンクブロンドの少女を人質に抱え、太い声を張り上げていた。

その目は、かつて上司であったコルベールによって焼かれ、とっくに盲(めし)いているが、歴戦の戦士である男にとっては、気配を読むことなどたやすい。

ましてや、熱を探知する能力を手に入れたメンヌヴィルである。物陰に隠れた人間など、すぐに判別がついた。

「は、バレバレだぜ仔ネズミちゃんよお！」

メンヌヴィルの炎が、隠れひそんでいたキュルケに襲いかかる。いかつい戦士の背後から挟み撃ちにするつもりだったタバサが、すかさず火魔法使い(メイジ)の炎を水の壁で防ごうとするが、タバサの水は、手練の傭兵に打ち破られた。

盲目の男は、青い髪の少女の存在すら感知していたのだ。

「――ッ！」

「きゃあああ！」

ヤケドの痛みに絶句するタバサの集中が解け、炎に巻かれて悲鳴を上げるキュルケ。

風と火、ふたりのトライアングルを相手に、メンヌヴィルは喜悦の声を上げた。

「イイ！　イイねぇ――これだ。肉の焼けるニオイ。とりわけ、イキのイイ、若い女のは格別だ。これこそが俺の望むもの。

さあ隊長。俺の炎は、これしきじゃ食い足りない。とっとと出てこないと、カワイイ餓鬼どものステーキが並ぶぜえ！」

しかし、呼べど叫べど、男の待つ相手は姿を見せなかった。
それもそのはず。
コルベールは、運悪く――そう、運悪く、だ。
朝から街まで買出しに出かけていたのだ。趣味の発明の材料が足りなくなったという理由で。
駆けつけるはずの教師は、この場に現れない。
何故ならば。
学院への侵入者は、決してメンヌヴィル一人ではなかった。
手引きしたものがおり、また、魔法使いの卵（メイジ）と――たとえ魔法の発動ができるとしても、使いこなせるかどうかは別だ――教師を制圧するだけの傭兵崩れたちが、そこかしこで戦闘していた。
教師を足止めし、あるいは無力化し、学院内には、出かけた生徒以外のおおよそが、既に捕われているありさまだったのだ。
ひとり、メンヌヴィルに連れ歩かれているルイズは、いわばコルベールに対する生餌に他ならない。
また、そうすればコルベールは出てくると、炎に狂う男にささやいたものもいた。
けれどもじっさい、いつまでたってもコルベールは姿を見せず。
ゆらゆらと揺らぎなびく炎の性のごとく、落ち着かないメンヌヴィルが痺れを切らすのは、程なくのことだった。
――たりないタリナイたりない。
焼いたとはいっても、キュルケもタバサも、せいぜいが、顔を庇った肘から先、そして脚を焦がしただけだ。
杖を持てないほどに焼け爛れてはいるものの、あのくらいなら、水の秘薬を使えば痕も残らないだろう。もっとも集中を阻害するヤケドの痛みで、杖が握れたとしても、ろくに魔法は使えないが。
それにしたって、メンヌヴィルにしては、ずいぶんとハンパな燃やし方である。
この男がその気になったなら、骨まで燃やすこともできるはず。
それを知るものは、残念ながらこの場には誰ひとりいなかったが――

―ようするに、メンヌヴィルは、欲求不満だった。
ふと、男は異臭に気づいた。
ルイズの足元に水溜りができている。キュルケとタバサの焼け爛れて、ケロイド状になった腕を見て、自分を捕えている火魔法使い(メイジ)が、どれだけ危険な人物か、ようやく遅まきながらわかったらしい。
戦場に出たこともない箱入り令嬢は、恐怖のあまり失禁していたのだ。
「くせぇな……」
チッ、とメンヌヴィルが舌打ちする。びくり、と男の腕の中で震えたルイズの顔は、既に涙でぐしゃぐしゃだった。
「ご……ごろざ、ないで……」
うえぇ。
鼻水まで垂れ流して哀願する少女は、見た目だけは評判だった美貌も台無しだった。見る影もない。
それを間近に抱え込んでいるメンヌヴィルも、さすがに嫌な顔をした。
「おまけに汚ぇ。
オイオイ、お前を助けようとしたオトモダチは心配じゃねえのかよ?
魔法が使えないどころか、中身までできそこないたぁ、すくいようがねぇ餓鬼だなオイ」
メンヌヴィルは、ピンクブロンドの少女を、げらげらと嘲り笑った。
男の、ヤケド痕が醜悪に残る強面(こわもて)にのぞきこまれ、ひっ、と息を呑むルイズ。
「俺の顔が恐いかい、お嬢ちゃんよ。しかしな、こりゃあ、お前らのセンセイがつけた傷よ。
コルベール隊長――ここでは教師をしてるんだってな?
あいつが俺の顔を焼き、俺から光を奪い、そうして自分だけは口をぬぐってセンセイ面(づら)をしているのさ」

その言葉に、ルイズはおろか、ヤケドの痛みにうずくまっていたキュルケとタバサもはっと顔を上げた。

「……ここまで話しても出て来ねえか……マジで見捨てられたな、お前ら」

役に立たねえ。

苦々しげにいかつい容貌をゆがめる男に、物陰から白い獣形が襲いかかったのは、そのときだった。

衝撃で、メンヌヴィルが思わずルイズを放り出す。

それはルイズの使い魔――白い肌の鵺（ぬえ）だった。厨房まで、ルイズのメモを運び、クックベリーパイを受け取るように命じられていた式神は、ようやくメンヌヴィルの隙を見つけて主を助けようとしたのだ。

温度のない式神だからこそ、男の熱探知をくぐり抜けられた行幸だった。

しかし、小さな幸運が、次なる災いを呼ぶこともある。

「くそがっ！」

腕を噛まれ、怒りに駆られたメンヌヴィルは、自分を襲った、まっしろな異形に向けて炎を放った。

ときを同じくして、ようやく恐ろしい火魔法使い（メイジ）から逃れることができると安堵したルイズは、窮地を救ってくれた、頼もしい使い魔へと駆け寄っていたのだ。

彼女を救おうとした友人を振り返ることなく。

ただ、使い魔に乗って逃げようと。

結果。

足音をたどって放たれたメンヌヴィルの炎は、当てるはずのないルイズへ襲いかかる。

少女の絶叫が廊下に響き渡った。

#８６　始まらない物語－不運－（後書き）

あとがき

＞ちょっと短めですが、そのころの校舎内の動きでした。

不運が重なり、ルイズは友人の信用すらも失っていきます。

命の危機にさらされて、助けるのを失敗した相手と、敵に一矢報いた使い魔（依存ぎみ）を比べてしまうのは、仕方ないことでもありますが……こういうところで本性がな、という。

コルベールの不在は、ルイズとコルベール、両者の「祟り」が相乗した結果の不運です。

#87　始まらない物語ー放たれる矢ー

とっさに走り出そうとしたのは、才人とキンダイチ。
しかし、その足は、三歩目から先に進もうとはしなかった。風の精霊を操るシームルグ・東風（こち）の魔法によって、その場に留められていたからだ。
「落ち着いてください」
静かなソプラノが、老教師と少年の背筋に、冷水をかけたかのごとくひんやりと響いた。
「何をっ」
「早く行かなければ生徒がっ」
「考えなしに飛び込んで殺される気ですか？」
二人の男が振り向いた先。黒瑪瑙の瞳は石のようにゆるぎなく、強い光を湛えていた。
七季の目を見るなり、頭に血を上らせていた二人が口を閉じる。既に少女の思考は、「仕事用」のそれだ。退魔業のための――魔を狩り、霊なるものを討ち、調伏せしめる任を負う、死の境界で戦うためのもの。
居合わせるシュヴルーズもギトーも、生徒の変貌に声もなく視線を注いでいた。
「東風（こち）。周りの情報は拾えるね？」
『ルイズ――！』
「三人の娘子は生存。ルイズとやらを捕えていた犯人は男。火メイジだな。会話からしてコルベール氏に怨恨ありと判断。
キュルケ、タバサが犯人を挟撃しようともくろむも失敗。負傷している。水の秘薬を使えば治療可能なレベルだ。
続いてルイズの使い魔が、主人を助けようとして犯人を襲撃。ル

イズが男の手から逃れ、逃走を図ったところ、犯人が使い魔を攻撃した炎に割り込む形となって直撃。

犯人の意図したところではないな。最初からルイズを殺す気はなかったようだ。動揺が感じられる。ルイズの負傷も、主ならば治療可能だろう。

また、校内には、ルイズを捉えた火メイジの他に、複数の傭兵らしき男が点在。げんざい生徒や教師を拘束中だ」

東風（こち）のもたらす情報に頷き、黒髪の少女はデバイスを起動する。

「オーケー。こっちに情報回して。私が出力する。ノア、セットアップ」

『イエス、キャプテン』

少女のチョーカーが答え、その手に指示棒スタイルのデバイスとして現れる。

「ウィンドウ表示。データ反映」

フォン。

七季の短い指示に応（こた）えて、中空に藍色の地図が浮かび上がる。トリステイン魔法学院の平面図と、幾つかに色分けされたドットが散らばっている。

「赤が火メイジ。ルイズを捕えていた犯人の現在地です。青が魔法学院の関係者。白が、共犯と思しきメイジや傭兵……犯人の仲間です」

ちょうど、七季が説明しているところへ、アーチャーが戻ってきた。

「マスター！」

「現場の情報が入った。主犯はコルベール先生に怨恨を持つ火メイジ。ルイズが人質に取られていたけど、げんざいは、ほか二人の少女ともども負傷。

ほかの生徒と教師は、幾つかの場所に分けて監視されているらしい」

「ノア」で出力した現場データを七季が示せば、アーチャーは無

言でそれを頭に叩き込む。その間に、七季はシュヴルーズへと声をかけた。

「コルベール先生は、どちらへ？　現場には……学院には気配がないようですが」

東風（こち）から、使い魔としてのラインを通じて彼女に回された情報には、コルベールの姿はなかった。女性教師は、青ざめた顔のまま、記憶を必死に掘り返す。

「たしか……朝に、街まで買い物に出ると……」

「そうですか。いらっしゃれば、犯人の気を逸らしてもらうくらいはできたんですが」

どこまでも硬質で冷ややかな七季のソプラノは、ふだんの穏やかで温かみのある少女とは別人のようだ。入手した情報を統合し、分類し、再構築する将の顔つきをしている。

ギーシュやモンモランシーも、信じられないものを見る表情で、異邦の巫女を見つめていた。

「ギトー先生」

「何、だね」

石のように硬く、それでいて深く響く七季のソプラノに、風のメイジたる教師は、びくりと肩を震わせた。

「あちらに風のメイジはいませんか。こちらが風の魔法を使ってもバレないかどうか、私では判断がつきません。先生のご意見を」

「待ちたまえ……いないようだな。いまのところ、我々以外、風に干渉している魔力はない。少しくらい使えるものはいるかもしれんが、こちらの魔法を察知できるほどではないとみて間違いないだろう」

「ありがとうございます」

一礼して、七季はアーチャーへと向き直る。

「学院関係者が捕われているのは三ヶ所。これに、ルイズたちが負傷して動けないでいるポイントが一ヶ所だ。

三方向……いや、四方向から攻めようと思う。アーチャーには主

犯らしい火メイジを担当してもらいたいけど、いける？」

＜ただし狙撃は却下。生徒たちの前で、犯人とはいえドタマぶち抜くと、あとで何言われるかわかんないからな。

けど、威嚇や戦闘における射撃ならかまわない。あと心臓ぶち抜くのも勘弁な。生け捕り前提。手足くらいは逝ってよし＞

「了解した」

数え切れない戦場と地獄を渡り歩いてきた錬鉄の英霊は、さすがだった。鋼のように硬い声で、しかし鷹のように鋭い瞳で、主からの念話も交えたオーダーを受諾する。

「ま、待ちたまえ。何をする気で……！」

キンダイチが、ようやく我に返ったのか、あわてて七季に声をかけるが、返す少女の言葉はシビアで簡潔だった。

「いまから軍なり、王宮なりに連絡して、救援が来るのにどれだけかかりますか？」

「それは……」

「たしか、責任者のオールド・オスマンは、きょう王宮に出向いておられるはず。私は寡聞にして、この異常を即座に通達する術（すべ）を知りません。

あの男の異常性は、さっきの音声だけでもおわかりでしょう。時間がたてばたつほど、生徒や関係者は命の危険が高まります」

ですから。

「先生方の力をお貸し願いたい。いちばん危険な火メイジは、アーチャーが押さえます。

先生方は、学院関係者が捕われている三つのポイントに、それぞれ向かって救出していただきたいのです」

「しかし、一人では……！」

シュヴルーズが、おろおろと首を振るが、七季はけげんそうに――しかし、やはり石を思わせる硬質な瞳で――切り返した。

「一人？　何をおっしゃっているのです？」

「え？」

「ギトー先生は、偏在が使えましたよね。三人ほど、出していただけませんか」

七季の言葉に、はたと風の使い手が目をかがやかせる。

「なるほど。そういうことか――ユビキタス・デル・ウィンデ」

ふぃん。

あえかな風のゆらぎとともに、ギトーの輪郭が四人に増えた。

「東風（こち）の情報によれば、監視役は、必ずしもメイジばかりではないそうです。魔法の威力や練度から判断するに、ドットからライン。一箇所につき、メイジ二人と非メイジ数人、といった配置ですね。監禁されている学院関係者は、杖を取り上げた上で拘束、無力化されています。だからこそ、この少人数で監視が可能なのでしょう。他に学院の外を警備している非メイジの傭兵が一個小隊ほど。こちらは私たちで何とかします。

キンダイチ先生、シュヴルーズ先生は、偏在一人と組んでください。ギトー先生ご本人も、偏在とペア。

スリープクラウドが使える水メイジ、ゴーレムや錬金が可能な土メイジと、探索に長け、攻撃性の高い風メイジのコンビなら、場の制圧は早いはずです。

まして、風の使い手ふたりなら――いうまでもありませんね、ギトー先生？」

「は――そうだな、風が最強たるゆえん、見せつけてくれよう！」

杖を掲げるギトーを上手く煽る、生徒の舌先三寸に、ちらりと「末恐ろしいなあ」と黒髪の少女を見やる土と水の魔法使い（メイジ）が二人。

「生徒は全員、この場で待機。いちおう増援を警戒して、才人も、生徒たちの警護に残します」

メイジでない少年を戦場となった学院に放り込むわけにはいかない。足手まといになってしまう可能性が高いだろう。

七季の言葉に、才人じしんやギーシュたちも頷く。トリステイン魔法学院の生徒は、基本的に貴族の子弟。保護しなければいけない対象である。

その政治性を理解している少女の言葉に、教師たちも七季に目礼で返す。

「リドルと私も、ここで待機です。非力ですから戦闘には向きませんし、代わりに、距離をとって風魔法での支援を行います。学院を囲む小隊の対策も兼ねて。

それと東風、アーチャーについて行って」

少女の肩に乗っていた、極彩色の神鳥は、くると鳴いて首肯した。

＜アーチャー、東風、主犯は生け捕りで頼む。

死んでいなければ、私が何とかするから。裏に何かないとも限らない＞

＜了解した＞

＜御意＞

「この作戦に異議・異存があれば、お聞きします」

最初から最後まで、七季の目は、生徒たちを見なかった。ただ深い夜色の瞳は、魔法の使い手として熟練した戦力となる――教師たちと、おのが従者のみを映していた。

『……いや』

四人のギトーが異口同音に呟き。

「現状では、これに勝る方法はないでしょう」

優しい老教師が、その瞳に強い決意を浮かべ。

「こうしている間にも、生徒たちには危険が……ありますものね」

ふくよかな体をゆすった女性教師が、それでも子を守る母のごとき強さを孕んだ。

「アクシデントがあれば、臨機応変に対応する。マスターの指示に従おう」

赤い外套の偉丈夫が、低い声で作戦に同意した。

「ではこれを」

最後に七季は、小さなものを全員に配った。彼らはけげんな顔をしながらも、それを受け取る。

「作戦の立案・説明に割いた時間は十分……敵が新たな動きを始めるのに、ギリギリのラインでしょう」

はっと一同が顔を上げる。大人たちの面持ちが戦いを前にして引き締まった。

「貴君らの健闘を祈ります」

――行動（アタック）開始！

#87　始まらない物語ー放たれる矢ー（後書き）

あとがき

＞ちょっと冗長でしたかね。

アーチャーに立案させても良かったんですけど、彼に任せると、単独でやりかねないんですよね……。

基本的に、能力はあるもんだから、自分が泥をかぶって犯人殲滅とか。

メンヌヴィル狙撃も、アーチャーならやりそうかなと思ったので、先にオリ主に釘を刺してもらいました。

タバサはともかく、戦場を知らない少女の前でドタマぶち抜いたら、あとで貴族の親あたりから苦情が来そうな気がしたんで。

ちなみにオリ主は前線に出ません。必要ないですし。

#88　始まらない物語ー胎動ー

起動した箒型のデバイス「エスピナ」に乗って校舎に接近しながら、アーチャーは他のデバイス二つを起動する。

「イルシオン、フォーム『ガントレット』。アギラス、セットアップ。リンク開始」

『イエス、マスター』

オニキスをはめ込まれた、あかがね色のバングルが手甲――ガントレットと化して男の片腕を覆い。

黒柘榴石をはめ込まれた、こちらもあかがね色のイヤーカフが、耳から消えて、代わりにガントレットの上から装備する盾と、ハーフショルダーガードへと変じる。どちらも、陽の光を受けてあかがねいろに照り映えている。

それは、攻撃型の従者を守り、支えるために、伝説の金属・ヒヒイロカネより造られた、非常識な強度のアームドデバイスだ。

「幻」と「鷹」の名を持つ相棒でその身を鎧い、剣製の魔術師は空を征く。

「さて、こちらも始めるか」

風の魔法やデバイスで、音もなく校舎へ接近する大人たちを見送りながら、黒髪の少女は片手を伸ばした。

「黎明、セットアップ。フォーム『スワロウテイル』。リンク開始」

「ウロボロス、リンク開始」

七季の声に隠れるように、リドルも小声でデバイスに命じる。

とたん、まっくろな車輪を思わせる籠が、中空に出現した。七季のデバイス「黎明」の姿だ。

籠の中央に位置する扉が、カパリと開き、そこから漆黒の蝶や燕が、さあっと飛び出していく。

主の色を宿したかのような夜色の小さな翼たちは、ほどなく校舎周りに到達した。重量の軽いそれらは風に乗り、救出に向かった大人たちよりも格段に早い。

そして、身のうちに抱えた即効性の催眠薬を、主の指示通りに振りまき始めた。

「ふぁ……」

「むぐ……」

校舎の外。虫や小鳥がいても、風景としか映らない場所で、見回っていた敵兵たちが、次々にくずおれていく。

何せ、「黎明」に格納されていたのは、リドルとプレシア謹製の催眠薬だ。そんじょそこらのものとは、わけが違う。

ついで、緑色の魔力素を帯びた拘束魔法――バインドが、次々と傭兵たちを捕獲していく。リドルの魔法だった。

「黎明」とリンクしたデバイス「ウロボロス」から伝達された情報によって、ターゲットの座標を特定。手当たり次第にバインドを遠隔設置していった結果だ。

やがて、校舎にたどり着いた教師たちは、そのイモムシさながらの光景を見て、驚くことになる。

「これでよし」

「なんでぇ。直接ぶっちめに行かねえのかよ？」

ふわり、と春風に金の鬣をなびかせるのは、黒いくまどりもあざやかな妖獣・とらだ。

それまで学院の周囲をうろついていた気配が、次々と動かなくなったのを、感覚の鋭い彼は知覚したのか、つまらなさそうに口を出してきた。

珍しく七季たちの戦いを手伝う気だったらしい。黒髪の少女は、ぱちぱちと大きな目を瞬いて、大妖（たいよう）の巨躯を見上げる。

「手伝ってくれるつもりだったのか？」

「へん……ヒマつぶしにはならぁな」

素直ではない応えに、しかし七季は、あどけない顔をぱっとかがやかせた。

「じゃあ頼みたいことがあるんだ！」

戦いのさなかにあるというのに、満面の笑みを浮かべる少女は、えらく愛らしい。

そしてとらは、こんなふうに笑える彼女が嫌いではない。

闘争を楽しんで乗り越えられるものは「強い」ことを、彼は知っている。そして、戦いの中で笑うことも泣くこともできる、まっとうさというものを、持ったままでいられるものは、もっと強いことも。

『とら――！』

金の大妖の脳裏に、ドングリ目玉のまっすぐな少年が過ぎっていった。

ちびでがむしゃらなニンゲンと、やっぱりちまい七季では、方向性は違うけれど、ふたりともあれで仲が良い。

黒髪の少女に、こしょこしょと耳打ちをされたとらは、最初こそ不思議そうな面持ちをしていたが――次第に楽しげな気配をまとい始め、説明が終わるころには、にたあっとタチの悪い笑顔になっていた。

七季の、全力で策をめぐらして人をコケにするところも、とらは気に入っていたりした。

上機嫌で、空の彼方へと飛んでいく、黄金色の影を見送る、黒髪の少女。

いっぽう、頭を抑える教師たちが消えるなり言い出したのは、ギーシュだった。
「ナナキ！　やはり待機する必要はない！　僕らも学院に――」
「誰がヒマだって言った？」
くるり、と振り向いた彼女の黒い瞳に射すくめられ、金髪の少年は、うぐりと言葉を呑んだ。
黒い羽織の袖を翻した少女は、しゃんと伸びた背筋のまま、どこか優雅に振り返る。
「ギーシュにはしてもらうことがある。檻を造ってくれ」
「檻だって？」
七季の言葉に、フリルブラウスを着た少年は、珍妙な顔をした。
「そう。捕えた傭兵たちを入れる檻だ。そうだな……」
七季が指示したのは、細かい網のようなフェンスだった。
その外側に、さらなる鉄格子で囲いを造る、二重構造の八面体。
「底……床には脱走防止のために、固定化を念入りにかける。いま、学院の校舎の周囲を見張っている兵士たちを鎮圧してるから、檻ができ次第、そこに拘留する」
まるで軍隊における上官のように、容赦ない無駄をそぎ落とした物言いに、ギーシュは圧（お）される形で従った。
格が違う、と無意識に悟ったのかもしれない。
教師たちに作戦を持ちかけ、そのときと同じ空気で話す――というより命じる七季の空気は、ぴんと張り詰めて硬く、冷たかった。
まるで磨き抜かれた水晶のよう。刃のように鋭くはないものの、透き通って清らかなのに、ひんやりと冷たく、熱を奪う石を思わせた。
「っは、あ……こ、これでどうだい……？」
そして、ギーシュが造った青銅の檻は、彼らのたまり場ともなっている小屋から、少し離れた場所に設（しつら）えられた。けっこうな大きさなので、新たに木を切り開いて、ちょっとした広場を作る必要があったくらいだ。

「ああ、適当だね。お疲れ様」
きんっ。
さらにそれは、七季の手によって錬金され、青銅製の牢獄は、堅固な鋼の檻と化した。そのうえで、床には厳重に固定化がかけられる。もちろん鋼鉄の檻じたいにも、がちがちの強度を持たせて固め上げた。
「こ……ここまでするの……？」
その様子を見ていたモンモランシーをはじめ、数人の女生徒が、唖然とするほどに、七季は念を入れている。
「しかし……ナナキ。造ったは、良いが、この檻には、入り口が、ないよ……？」
檻を作ったのだけで、精神力を使い果たしそうなギーシュは、ぜはぜはと息切れしながら、欠陥を指摘するも。
「いや、これはこのままで良いんだ」
黒髪の少女は、そっけなく答えると、おのがデバイスたちに命を下した。
「サーチ開始。目標、バインド済みの非メイジ。転送魔法、スタンバイ」
『イエス、ユアハイネス』
リンクしている「黎明」と「ノア」が、そろって答えを返す。五秒ほどで、次なる報告が伝達される。
『目標、四十五体。座標の特定、完了しました』
「よし。転送術式「千本鳥居」実行」
『転送』
完成した檻の中に、藍色の燐光を帯びた魔法陣が次々に散らばっていくのを、魔法使い（メイジ）の少年少女たちは呆然と眺めていた。

同じころ。

トリステイン魔法学院の校舎内――その廊下では、タバサとキュルケが思わず目を覆っていた。

ルイズの背中は焼け焦げ、血のにじむまっかな地肌が爛れかけている。

炎を背中から食らったときに焼けた、長いピンクブロンドは、燃やすものを求めて、火が上へ昇ろうとしたので、見かねた――もっとも目には見えないが温度でわかる――メンヌヴィルじしんが、持っていた剣で髪を切り落とした。

無残な有様だった。ヤケドの痛みにのたうちまわり「あああああ」と意味のないわめき声を上げているから、意識があることはわかる。

タバサは風と水の魔法使い(メイジ)だが、杖も握れないこの状態でできることはない。

仮に、杖が握れたとしても、水の秘薬もなしに、ルイズの傷をどうこうできるとは思わなかった。

「くそが……どこまでも面倒をかけやがる……」

唾棄するメンヌヴィルは「おい」とキュルケたちに声をかけた。

こちらはルイズよりもだいぶマシで、手足に負傷したといえども、受け答えできるだけの余裕は、かろうじてあった。

もっとも、これは戦闘経験のあるタバサや、失敗すると危険な火の魔法の使い手たるキュルケならではだっただろうが。

「医務室は」

どこだ、とメンヌヴィルは訊こうとしていた。そこならば、水の秘薬のストックがあるかもしれないと思ったからだ。

しかし男の声は途中で遮られた。

ドドドドドッ、と窓すら貫通してきた矢が、一斉にメンヌヴィルの手足を打ち抜き、床へと縫いつけたからだった。

「ッ！」

流星のごとく廊下を横切り、打ち込まれた射撃は、手首、肩、膝、と器用に間接を打ち抜き、その後おまけとばかりに、第二波で手のひら、アキレス腱を左右そろって射止め、火魔法使い(メイジ)を釘付けにし

た。
発動体となるはずの杖――鉄の金棒だ――も、ご丁寧に第二波の射撃でぼろぼろに打ち砕かれていた。恐ろしい技量と矢の威力である。
否。
それは矢というよりも、剣であった。
まるで十字架のような、細身の剣。それが生み出された世界では「黒鍵」と呼ばれるものだったが――この場にそれを知るものは、射手以外にはいない。
そして、その恐るべき射手は、力を振り絞って黒鍵の戒めを解こうとした男に、容赦はしなかった。
ガカッ。
メンヌヴィルの首筋。
それをぎりぎり跨ぐように――二本の剣が、交差して突き立っていた。身動きをすれば、そのまま首が剣に食い込む高さである。
そこまでして、ようやっと魔弾の射手――アーチャーは、ひょいと壊れた窓から廊下へ姿を現したのだ。

「遅くなってすまなかった」
白い髪。なめし革のような褐色の肌。ウィスタリアのほのかな色を混ぜたかのような、鋼色の瞳。
現れた男に、言われた言葉をキュルケは最初、理解できなかった。
自分たちが――火と風のトライアングルふたりが――手も足も出なかった相手を、ろくな抵抗も許さずに打ち倒したのが、目の前の男だとはわからなかったのだ。
しかも、手段が、魔法というよりは射撃。
その精度ときたら、魔法みたいな技術ではあったけれど。
「……え？」

「酷い怪我だ。私では治療はできないが……」
ふ、と思わしげに目をヤケドへと向けた偉丈夫は、一言「バインド」と呟いた。
とたんに、炎を思わせる赤い外套をまとった戦士の、背後にうつぶせになっていたメンヌヴィルを、赤みを帯びた拘束が包み込む。
「おかしな真似をするな」
チラリと狂人めいた火魔法使い(メイジ)を一瞥し、アーチャーの目配せ一つで、メンヌヴィルはがくりと意識を失った。
彼らの保有する技術を知らないキュルケの目には、それがデバイスにしまっておいた催眠薬の効果だとはわからない。ついでに、自害を防ぐためだったのだとは、さらに理解がおよばなかった。
「私が運ぶより、マスターに来てもらった方が早いか……」
ぽつ、と呟いた低い声を、キュルケはひどくセクシーだと、場違いにも思った。
「痛むだろうが、少し待ってくれ。じきに手当てをできるものが到着するから」
精悍な横顔には、彼女たちの傷を、心から案じる憂いの色が影となっている。力強い優しさ、というのは、こういうものを言うのだろう、と赤毛の少女はアーチャーに見惚れた。
「はい……」
あれほどの圧倒的な強さをそなえている戦士に気遣われる。
火のトライアングルとして、自分の強さに自信を持っていた少女は、いつにないときめきが、胸を焦がし始めたことを漠然と感じ取っていた。

#８８　始まらない物語ー胎動ー（後書き）

あとがき

＞弓兵、ますはキュルケにフラグが立ちました（待て）。

原作だとコッパゲの立ち位置にアーチャーが突っ込まれたことになります。でもふつうに考えたらこうなるよーな。

メンヌヴィル、あっさり制圧し過ぎましたかね。

遠距離から攻撃できるアーチャーって、メンヌヴィルには天敵くさいかと思ってこうなったんですが。

まがりなりにも英霊ですしね。ただの人間相手だと、はなからスペック違いすぎ。

弓兵の中で、ドタマも心臓もぶち抜いていないし、あれは「射撃」の範囲です、と言い張ってみる。

#89　始まらない物語―誰（た）がための―

＜一階廊下の制圧、完了だ。負傷者が三人いるので、マスターに来てもらいたいのだが＞

アーチャーから届いた念話に、七季はあどけない面輪を少しだけしかめた。

＜まだ他の三人が救出を終えていない。一刻を争う、というわけではないんだろう？＞

いまげんざい、手勢のうちで治癒魔法に長けているのは水の魔法の教師たるキンダイチと、同じく水の系統に才のある――何より、高度医療に特化したデバイスを持つ、七季に他ならない。

その七季は、いまだ敵勢力が鎮圧されていない現場に足を踏み入れられるほど、自分の戦闘能力について過信していない。

＜それは……＞

そうだが、とためらいがちな答えが、七季の脳裏に響く。

あの錬鉄の英霊は優しくて、目の前の人間が苦しんでいるのが嫌なのは、彼女にもわかっていた。しかしこの戦場において、少女は場を把握しておかねばならない。

――いま、この場を動くわけには行かない。

冷静に情勢を把握するものが、戦場には必要なのだ。闘争が沈静したと確定しないうちは。

いかにトリステイン魔法学院の危機管理意識が緩みきったものだったとしても、まがりなりにも貴族の子弟を預かる学校だ。

魔法は使えないながらも、警備の兵はいたし、魔法の使い手ばかりの学院を、いきなり襲って得をするものは少ないはず。

――非メイジなら、いざ知らず。

けれども襲撃者には魔法の使い手が混ざっていた。むしろ主犯だ。

魔法使いへの反乱と言うわけではなさそうだ。
――なのに連中は、この学院に狙いを定めた。
侵入者は傭兵らしき戦士と魔法使いだという情報だった。
――傭兵を雇うには金が要る。
ふつうの傭兵ですら、そうなのだ。魔法を使える傭兵であればなおのこと。それも、これだけの数だ。決して小さくはない金額だろう。
――そんな金を動かすには、理由が要るはず。
裏があるのは明らかである。七季は、それをこそ警戒していた。
これほどの金と人を動かす狙い。そして、その狙いが重要なものであればあるほど、敵に回っている相手はしつこいだろう。金を使った相手が、簡単にあきらめるなどと、七季は思わない。
ここまで来ると、政治の話だ。
貴族の子弟が詰め込まれた学院を、武力で制圧する。これは立派な政治問題。あとの余波を考えても、頭が痛い話だ。七季には関わる気はないけれども。
そして、彼女は、あの皮肉屋だけれど、優しくてまっすぐな従者が、政治にはこれっぽっちも向いていないことを、とうに理解している。ならばそれを考えるのは、主の役目だとも。
――関わる気はないけれど、関わらせないようにしてやらなきゃいけないのがいるからな。
主に赤い弓兵とか、生真面目な従者とか、過保護な英霊とか。
まあ同一人物である。
それなりに自己保存本能と危機管理意識が発達している才人や、腹芸から暗殺までイケそうな、リドルの心配はしていない。
いざとなったら、自分たちが矢面に立つ気で、七季はプレシアたちには関わらせなかったのだ。
＜外周に配置されていた非メイジ、四十五人は、バインドで拘束のち、こちらで回収した。いまは鋼鉄の檻でおもてなし中だ。仲良く寝てるよ＞

色よい返事の代わりに、黒髪の少女は、新しい情報をアーチャーへ伝えた。すなわち、いまのところ外からの乱入はないのだと。

＜完全に学院内を制圧するまで、そこを動いちゃダメだ、アーチャー。いちおう増援は送ってる。渡したもの、つけておくように＞

＜増援？　もしやプレシアを？＞

＜はずれ。どうしても急ぎたいのか、アーチャーは？＞

しょうがないな、という響きをにじませる七季に、アーチャーから、ばつの悪そうな感情の波が伝わってくる。

＜ムチャを言っている、な……＞

見なくても、きっとしょげた面持ちなのがわかる響きだった。

七季が思わず「うわぁ現場行って頭撫でまくってやりたい」と白い手をわきわきさせるほど。

無骨で優しいあの男を、彼女はとても愛しいと思う。

――本当に、可愛いんだから。

問題があると自分で片付けようとするアーチャーが、人を頼るのは、一種の甘えだ。

出会った当初は、これでもかと七季に気を使っていた男は、少女が頼り甘え倒したのが功を奏して、遠慮がちながらも、ときどき甘えてくるようになった。

基本的に愛されて育った七季は、甘えるのも上手いが、同じくらい、甘やかし方も上手かったりする。

＜アーチャー＞

ふ、と少女の思念が、あまい優しさを帯びた。

＜条件があるよ＞

七季の伝えたそれは、ある意味まっとうであり、アーチャーにしてみれば、拒むようなことではなかった。

そのころ、とある空の上では。

一頭のグリフォンが、黄金色のドラゴンに、追い回されている最中だった。

ばちっ。ばちばちばちっ。

春の陽射しをきらきらと弾く、金色の鱗。ドラゴンの中では小ぶりなはずのそれは、灼熱の炎を吐き、雷撃を操り、獲物を弄ぶように追いすがる。

しゅごおぅっ。

いっぽう、逃げ惑うグリフォンはというと、騎士を乗せたまま飛ぶのでせいいっぱいで、不安定なことこのうえない。

風の魔法使い（メイジ）たる男が魔法を放とうとしても、金のドラゴンに当たるはずもなく、振り落とされそうになるのが関の山だった。

おまけにだ。

どごしっ！

「がっ」

べむちっ！

「おごっ」

すごごんっ！

「ほあぁッ」

金のドラゴンから放たれる、白銀色の何かが、目にも留まらぬスピードで――もし、この場に鷹の目を持つ錬鉄の英霊がいたならば、その動きを追うこともできただろうが――グリフォンの乗り手であるワルドを、幾度も直撃していた。

誰知ろう。

その白銀色が、アーチャーの使い魔たる、プラタ（分体）であることを。

本来メタルキングである彼は、はぐれメタルに分離した姿のまま、トリステイン魔法学院に近づく怪しげな男を、凄まじいスピードで打ちのめし、とらともども足止めしていたのだ。

そう。

ここまでプラタ（分体）を運び、いまも足場となって共同戦線を

張っているのは、珍しいことに、金の毛皮を持つ妖獣・とらだった。
変化能力を持つ彼は、「学院に近づく怪しげなやつがいたら、フルボッコにして良いよ」と言われ、嬉々として警戒役を買って出たのだ。
その際、あのまっくろトリップ娘は「せっかくだから、プラタの実力も見てみると良いよ」と、はぐれメタル姿の使い魔を、ドラゴンに化けた大妖といっしょに同行させたのである。
とらは、思いがけない戦闘力を見せるプラタにご機嫌だった。
朝は、鍛錬を日課とするアーチャーともバトっているが、今度からはプラタを交えてみても面白いだろう、と思うほどには。
もはやワルド主従は、態の良いサンドバッグ兼玩具であった。
こうして、ルイズの窮地を救いに来たはずの男は、みずからが仕組んだ出来レースに乗りそこなったのである。

そのころ、魔法学院から離れた場所にある小屋の中では。
「ママ、この術式、どう思う？」
お茶を飲みながら、金髪ツインテールの幼女が、ノートを広げて、ダークヘアの美女に質問していた。それは宿題に悩む小学生のようだ。
「ううん……いまいち効果が薄いんじゃないかしら。使えるとしたら、魔力量の多い、ナナキくらいじゃない？」
しかし、答えるプレシアと話し合っているのは、家族とも友人とも慕う少女の、デバイスに追加する、新たな魔法の模索であった。
「ハルケギニアの魔法を阻害するＡＭＦ（アンチマギリングフィールド）ですか……ああ、『黎明』のフォーム『スワロウテイル』なら、結界の基点にできるのでは？」
リニスも混ざって、わいわいと盛り上がる。機嫌よさげに、カフェオレ色のしっぽがパタパタ揺れていた。
「とすると……『黎明』のバージョンアップがしたいわね」

「術式もうちょっといじってみようかなぁ」

くあ～ぁ。

防音魔法を施した屋内。大あくびをしながら警護役を続ける、とらの分身が、平和なテスタロッサ家の女性陣をのんびり見守っていた。

#89　始まらない物語－誰（た）がための－（後書き）

あとがき

＞ワルドと戦っているのが、とらの本体です。

プラタの出番を、という感想をいただいたので、せっかくだから、とらと組ませて、ワルドフルボッコ要員にしてみた。

思いのほか楽しす。

忘れがちですが、とら、変化も分身もできるんですよね。地味にチートだぞ、あの妖怪。

ちなみに変化&分身は、申し訳程度にアリバイ作り（笑）。

小屋の外では、リドルとオリ主が結界張ってスタンバってます。

#９０　始まらない物語―その娘、危険につき―

＜……と、いうわけだ＞

＜ふむ。了解。ありがと、東風（こち）＞

使い魔からの念話で、とらたちが相手をしている敵方の増援らしきものがワルドだけ、と聞いて、ひとまず七季は肩から力を抜いた。

風の精霊を操り、情報収集ができるシームルグをアーチャーとともに送ったのは、戦況をより正確に把握するためだが、それは間違いではなかったらしい。

――するってぇと、あのヒゲ子爵が、黒幕か、主犯から送られた監視役ってことか……。

本格的にクーデターでも起こそうとしているのかね。

黒髪の少女は、そっと親指で唇をなぞって、大きな目を細めた。

彼女にとってトリステインという国など知ったことではないが、自分がいる間に、クーデターなどに巻き込まれてはかなわない。

あいにくと七季の使い魔には、血の気の多いものがいるのだから。

――つーか、よその政治問題に関わると、ろくなことがないからな……。

情報は握るが、手出しをするのは避けたい。

そんなふうに思いを巡らせ、少女はあどけない面輪を上げた。ふっと、そこらにいる生徒数人と、才人に声をかける。

「これから見ることは、他言無用。誰かに話したら、いろいろとモぐよ？」

『はいっ！』

迫力に気圧されて、反射的に返事をしたギーシュたちは、続いて目にした光景に、言葉を失った。

何となれば。

「ユビキタス・デル・ウィンデ――」
七季が唱えたのは、「偏在」の魔法。風のスクウェア・スペルだったのだから。
『――!?』
「これでよし」
「じゃあ、私はアーチャーんとこに行ってくるね」
「オッケー。情報管制は、並列処理で共有ってことで」
二人の「七季」が、ひらひらと互いに小さな手を振り合う。
「え？　え？」
「な、……どうして、偏在がっ」
「えええええ!?」
思わずパニクる生徒たちと対照的に「すげー七季ちゃん。分身の術だー」とのんきなセリフを吐く才人。彼の中では、七季もじゅうぶん反則な域にはいっている人間なので、それほど驚くことはないらしい。慣れって恐い。
「はいはい、お静かに。でないと、口を針と糸で縫い縫いしちゃうぞー？」
偏在の方の七季が、にっこり笑顔で脅しをかけると、ぴたりと騒ぎは沈静した。じっさいに、彼女が針と糸を持ち出してきたからだ。
「ん。良くできました、と」
とたん、本体の方の七季が、「ノア」をふるって風の魔法を全員にかける。リドルにもだ。
同時に、彼女が別の魔法を使ったことなんて、リドル以外の誰にも悟られることはなく。
＜総員、防音態勢！＞
いっぽう、行動中の教師たちとアーチャー、東風（こち）に、七季の念話が響き渡った。
ギトーの偏在たちが、素早く風の魔法で味方の耳をふさぎ、アーチャーの耳を、東風（こち）がふさぐ。もっとも、救出チームは皆、事前に七季から渡された耳栓をつけていたが。

＜ファイア！＞

念話による七季の合図は――校舎内に入り込んでいた、マンドラゴラによって攻撃に転じた。

『きょわ※をみめょ☆わぎゅろぎぇを＊をををををを――！！』

すなわち、音響兵器である。

＃９０　始まらない物語－その娘、危険につき－（後書き）

あとがき

＞短くてすみません。

とりあえず、アーチャーに急かされたんで、オリ主が念のために仕込んでおいた増援で、さっくりカタをつけました（え）。

使わないなら、使わないで済んだんですが、先生たちの戦闘は陽動をも兼ねていたという話。

＃９１　始まらない物語－ゼロの数－（前書き）

まえがき

＞今回はルイズアンチ的な傾向があります。お嫌な方はブラウザバックぷりーず。

#９１　始まらない物語－ゼロの数－

「ほい、お待たせっと」
ふぉん。
転送魔法で現れた黒衣の少女に、きらびやかな翼が飛んでいき、寄り添うがごとくその肩に留まる。
すると、一瞬遅れて、横合いから伸びた腕が、七季のウェストに巻きついたかと思うと、砕けたガラスの散らばる場所から彼女を遠ざけて下ろした。
「うよ。さんくす、アーチャー」
すとん。
「どういたしまして。……しかし、こんな手段をとるとは」
嘆息する騎士の鋭い目は、床でびくびくのたうっているメンヌヴィルを、少しだけ不憫そうに眺めている。
もちろん床に標本よろしく張りつけられて、身動き取れなかった襲撃犯は、耳をふさぐことは不可能。もののみごとに、生ける音響兵器の犠牲者となった。
ついでに、床に転がっていたルイズも同じ末路をたどっている。
キュルケとタバサまではカバーした、東風（こち）の風魔法は、ピンクブロンドの少女だけガン無視したらしい。まあ、主至上主義な彼の性格なら当然だろう。
「だいじょーぶ。死んでない。この子ら、そのへんの調整できるし、実証済み」
ぶい。
デバイス片手に、親指、中指、人差し指を三本立てて、変則的なピースサインを作る七季は、たゆんと重たげな胸を張る。その二の腕に、今回の立役者――マンドラゴラが、いつのまにかダッコちゃ

んよろしく、くっついていた。
　既に少女の肩に留まっているシームルグが、ちょっとだけ、けったいそうな目で、この不思議トンデモ魔法植物を検分していたり。
「実証済み……待て、マスター。前にもやったのか」
　アーチャーの灰藤色の双眸が、ジト目で少女のあどけない顔を見つめる。
「ま、昔話はあとあと。やんなきゃいけないことがあるだろー？」
　ちっちっと人差し指をふりふり、七季はかつんとブーツのカカトを鳴らした。
「ああ。違いない。頼む、マスター」
　キュルケたちを振り向く男について、七季もとことこ女生徒たちに近寄る。
「や。失礼するよ。君らは話ができそうだから、先に言っておくけど、治療費はもらうよ？」
　黒髪の少女が、従者に提示した条件。
　それが、手当てをした、貴族の子弟からは、ちゃんと治療費を取ること、だったのだ。
「うっ、わ、わかったわ……お願い、できる……？」
　苦痛に玉の汗を浮かべながらも褐色の肌の美少女は、七季に治療を請う。
「そっちの君も、治療する代わりに、代価を払ってもらう。了承するなら、頷いて」
「……ん」
　こくん、と青い髪の少女と、赤毛の少女はそろって肯(うべな)うや、七季はふわりと微笑んでみせた。傷ついたものを慈しむような、見ているだけで染み入るような笑顔である。
「ガニュメデス、セットアップ。フォーム『カドゥケウス』」
　そして、七季の第三デバイスが起動する。

紫水晶（アメジスト）のついた銀のイヤーカフが、七季の耳から消えた。
代わりに、少女の手に収まったのは、一本の杖。頭にはヘルメスの翼、柄には二匹の蛇が巻きついた魔杖。
「カドゥケウス」の名の通り、ギリシャ・ローマ神話において、伝令の神ヘルメスが持つ、魔法の杖を模したそれは、高度医療を目的としたデバイスだ。
ハイスペックな演算機能をフルに使った治癒魔法を展開できる、この機体は、多種多様なナノマシンを内蔵しており、デバイスの修復やメンテ、自己修復も可能。もちろん人体にナノマシンを投与しての治療も念頭に置かれている。
その杖先を少女二人に向け、七季はデバイスを通して負傷の度合いのデータを得る。すぐさまそれは反映され、彼女はヤケドを癒すのに適当な魔力をデバイスへ注ぎ込んだ。
「術式『アムリタ』」
ぽう……。
藍色の魔力光に、金の粒子がちらちらと舞う。まるで、そこだけ夜の精霊が留まったかのような光景に、キュルケもタバサも目を奪われた。
気がつけば、さっきまで彼女たちをさいなんでいた痛みはない。負傷した手足を確かめても、周りより、ほんの少し赤みを帯びているくらいで、新しい皮膚に生まれ変わっているのが見て取れた。
「嘘……！」
「秘薬も使わずに、凄い……」
おのが手足を、ためつすがめつ確かめる少女たちを前に、七季は、懐から取り出した和紙の便箋に、さらさらと治療費の請求金額を書き綴る。
「ん、こんなもんかな」
ぴらり、とキュルケたちに提示されたのは、ふつうの水の秘薬の相場、およそ二本ぶんに相当する金額。

「二人まとめてだったし、それを折半してくれれば良いよ。分割でかまわないし、利子はなし。返済期限は……そうだな、半年ってとこ」

ぽん、と二枚の証文――キュルケたち側のぶんと七季の控えぶんだ――に、桜を模した割り印が捺される。

「それで良いの！？」

金銭感覚が鋭いキュルケが、驚きの声を上げた。

ふつうの水の秘薬を二本使ったって、こんなに綺麗に癒えはしない。しかも一般的な治療は、秘薬に、水の魔法の専門家たる、魔法使いの技量が必要だ。もちろん魔法使いへの礼金も必要になる。

これだから、ふつうの平民は、大怪我を負うと手を尽くすこともできないのだ。

七季の提示した金額は、キュルケが無駄遣いをせずに、一ヶ月我慢すれば、どうにかお小遣いで払える値段だった。もちろん折半しての一人ぶんだが。

一般的な下級貴族の子供の小遣いでも、三ヶ月あれば払いきれるだろう。

「同級生のよしみ、ってのが一つ。

もう一つは……私はミス・ヴァリエールが好きではないけれど、友人を助けようとした、あなたたちの行いの気高さに、敬意を表して、ってとこ。私も、大事な友人のためなら、危険に飛び込むこともするだろうから」

ふわ、とにじむような笑みを浮かべる少女の、黒い瞳には、離れている誰かを慕う、温かな感情があふれていた。

「でも、これからは気をつけた方が良いよ。今回は運が良かったけど、いつも取り返しのつくケガだとは、限らないからね」

「……ええ。そうね」

「……肝に銘じておく」

異邦の少女に釘を刺された美少女ふたりは、表情を引き締めて頷いた。

いっぽう七季は「さて」とルイズにレビテーションをかけて運ぶ。
「あ、あの……ミス・ナナチ。ルイズの治療は……？」
キュルケがおずおずと声をかける。
七季とルイズの間に横たわる、溝の深さまでは知らないとしても、何度となくルイズが留学生たちに食ってかかっていることを知っているゲルマニアの少女は、面と向かってヴァリエールの少女を治療してくれとは言えなかった。
ましてや、代価を払うとはいえ、治療してもらったキュルケにとって、七季は恩人である。
それがなくとも、彼女らの窮地を救ったのは、この黒衣をまとう少女の従者――アーチャーだったのだから。
「治療はするけどね。勝手に治したんじゃ、治療費、踏み倒されそうだから」
さっきまでの、キュルケたちに忠告をしていた、優しい声音とは打って変わった、冷ややかなソプラノだった。
「そ、そぉ……」
「……それは、賢明」
「立てるかね？」
額に汗を浮かべるキュルケとタバサは、気絶したままのメンヌヴィルを担いだアーチャーに頷き、黒衣をまとう少女のあとを追った。

そして七季たちは、救出された生徒たちと、ギトー、シュヴルーズ、キンダイチら教師と合流。
場所は、アルヴィーズの食堂だ。外出中のものを除いた全校生徒と教師が、集まれるだけの場所というと、ここが適当だったのである。友人や教師が、お互いの顔を見ては、無事を喜び合っていた。
「お疲れ様です。
んで、さっそくですが、これからミス・ヴァリエールを治療する

んで、皆さんには、証人になっていただきたいんです」
「証人？」
「はい」
けげんな顔をする、生徒や、捕われていた他の教師にも聞こえるように、七季は声を響かせた。
マンドラゴラたちの声を、校舎中に届けた、風の魔法のアレンジ版だ。
「私は彼女を治療します。しかし、タダではありません。これは、私たちの保有する技術であり、私の魔力を使っての施術行為です。これに代価を求めるのは、当然のことでしょう？」
黒髪の少女の言葉に、「それはそうだ」と生徒たちが頷く。
モンモランシーのように、自分で作った香水や、水の秘薬を販売して、小遣い稼ぎにする貴族だっているのだ。医療行為であるなら、なおのこと、求められる技術は高く、そのぶん代価も高くなる。
「この酷いヤケドを、私は治療可能です。しかし、跡形もなくなれば、ミス・ヴァリエールは、治療じたいをなかったものとする可能性がある――ようするに、代金を踏み倒されるかもしれないので」
私、彼女と仲が悪いですから。
きっぱりと隠すことなくぶっちゃけた七季に、あまり彼女たちのことを知らない上級生が、くすくすと笑った。
「まさかぁ」
「ヴァリエール家は大貴族だもの」
そんなみみっちいこと、しないわよ。
しかし、ルイズのクラスメイトは「さもありなん」と納得顔になった。最近のルイズは、いっそう七季たちに対して態度が悪くなっている。
クラスメイトの中には、何度か留学生たちの共同研究である「畑」に遊びに行ったものが半数くらいはいて、ルイズがそれを快く思っていないことも知っていた。
「まあ、念には念を入れて、ということで。先生方も、よろしくお

願いします。
　その代わりといっては何ですが、我々の魔法で治癒するところをお見せしますので」
　これには、教師連中も食いついた。ルイズのケガは、なかなか酷い度合いのヤケドだが、これを七季は「跡形もなくなる」と言い切るほどに癒せるというのだ。
　二つ返事で、トリステイン魔法学院の教師と生徒は、この治療行為の証人となることを了承した。
「よろしい。証人となりましょう。杖にかけて」
『杖にかけて！』
　ノリの良い生徒が、キンダイチのあとに続いて唱和した。
「では」
　気絶したままレビテーションで浮いているピンクブロンド――ずいぶん短くなってしまったが――の少女を、七季は食堂のテーブルに降ろす。
　小柄な少女が携（たずさ）えるのは、双翼双蛇に飾られた魔杖。あかがねいろの柄はヒヒイロカネ。青い宝珠を抱いた黄金の翼に、柄を這い登る黒白の蛇。何とも神秘的な杖だった。
「術式『アムリタ』『小さな海（スリーピングデューティー）』」
　ぽぅ……。
　藍色に金の粒子を散らす魔力光が、杖先からルイズの背中を丸く撫でる。
　そのあとには、焼け焦げた服からのぞく、まっしろな背中が現れた。
　わあっと生徒たちが歓声を上げる。
　あまりにもあざやかな手際と魔法に、教師たちも目をみはって、気絶したままのルイズの背中を確かめた。
「これは……」
「何とまあ」
　いっぽうの七季は、さっきと同じように、さらさらと和紙の便箋

に請求金額を書き綴っていた。
ただし、キュルケたちとは違って、ゼロが一桁多い。それを、便箋とおそろいの封筒に入れて、丁寧に宛名まで記してから、七季はルイズを覚醒させた。
「……ここ、は……？」
「おはようございます、ミス・ヴァリエール。
学院を襲撃していた不届きモノは、先生方と、私の従者によって無事に捕縛されました。
あなたを捕らえていた傭兵は、アーチャーが打ち倒し、あなたのケガは、私が治療しました。これは、その代価です」
立て板に水のごとく、黒衣の異邦人娘から説明されて、ピンクブロンドの少女は、しかめっつらになる。
「は……？」
眉をひそめながらも、差し出されたものを受け取り、確かめたルイズは、その目にした金額に絶叫した。
「こんなもの、何で払わなきゃいけないのよ――！」

#９１　始まらない物語－ゼロの数－（後書き）

あとがき

＞ルイズの治療そっちのけで放置って、わりと酷いように感じるかもしれませんが、じっさい放っておいた時間は、せいぜい十分程度です。

救急車で病院に搬送する時間を考えたら、そこまで長く放置していたわけではないかと。

#９２　ゆびきり－紅い指－（前書き）

まえがき
＞今回は、番外編的な話です。
リリなの、ゼロ魔キャラは登場しません。

#92　ゆびきり ―紅い指―

「きりちゃん。その子たちが、きりちゃんの子供？」
ひょこん、と首をかしげた七季は、無精ひげを生やした黒髪の男――衛宮切嗣を見上げて、その足元に目を向けた。
栗毛にとび色の瞳がおそろいの、良く似た男の子と女の子が、そろって切嗣の足から顔をのぞかせている。
「うん。そうだよ。白兎（しろう）、棗（なつめ）、この子は僕の姉さんの子供で、七季ちゃんだ。君たちとはイトコになるね」
「イトコ？」
ぱちくり。
自分の部屋で本を――図鑑を広げていた七季は、じいっと二人の子供を見つめた。
外国の血が入っているのか、黒ではなく、栗色のつややかな髪の毛と、雪花石膏（アラバスター）みたいな白い肌。それから、とび色の瞳が、窓から差し込む陽射しにきらめくと、琥珀色に光って見えた。
――きれいな子だなぁ。
それが七季の感想だった。
いっぽうの七季は、目も髪も、烏の濡羽（ぬれば）色にも優るかという、みごとな黒である。
――和服を着せたなら、日本人形みたいだろうな。
思わず、叔父である切嗣もそう考えてしまうほどに、屋内にいるときの七季は、おとなしやかだ。瞬きしなければ、名工の手による生き人形かと思われるほど。
これが外にいったん出たなら、母親に「鉄砲玉」と称されるくらい、元気に走り回るのだとは、つくづく子供というのは、わからないものだ、と男はないしん苦笑した。

「そう。イトコだ。いろいろ事情はあるけど……七季ちゃん、この子たちと友達になってくれるかい？」

膝をついて、視線を合わせてくる切嗣の言葉を受けて、七季が、今度は逆方向に首をかしげる。その拍子に、まっくろな切り下げ髪が、さらりと白くやわらかそうな頬にかかった。とたんに、きょろり、と彼女の目が動く。

大きな夜色の瞳に、まっすぐ見つめられて、びくっと女の子の方が、薄い肩を弾ませた。

ただ、相手を観察していただけの七季は、一通り眺めると、相手が自分に手出しをするような、意地悪な子ではないのだと判断した。それなら七季に否やはない。

「うん、わかった」

彼女は、警戒はしても、人見知りはしない性格なのだ。

――やな子じゃなさそう。

子供ながらに、七季は人の本性を感じ取る勘の良さがあった。本能的なものなのか。よっぽどのことがない限り、彼女の第一印象は外れない。

「こんにちは。七地七季です。妹が一人いるけど、いまは出かけてるんだ。

君は、しろうちゃんと、なつめちゃん、どっち？」

子供にしては落ち着いた、やわらかなソプラノが部屋に響いた。妹がいるせいか、精神的には少し成長が早めなのだろう。

「わ、私が白兎（しろう）だよ。ちゃんづけはちょっと……できたら、白兎（しろう）って呼んで。そっちの方が慣れてるから……」

「うん。わかった。じゃあ、そっちの子が、なっちゃんだね」

にぱっと、屈託なく笑った七季の表情に、つかのま目を奪われていた男の子が、遅れて反応した。

「な、なっちゃんって……」

彼は白兎（しろう）よりも引っ込み思案なのか、それとも初対面の女の子に照れているのか、おぶおぶと口ごもる。

「私のことは好きに呼んでね。友達は、七季とかナナちゃんとか呼ぶかな」
「じゃあ、ナナって呼ぶことにする」
女の子の方が、順応が早かった。白兎は、とことこ黒髪の女の子に寄って行くと、ぺたんと傍らに腰を下ろす。こちらも、七季は自分に害のない存在だと認めたらしい。
「仲良くしてね」
まず、七季がにっこり笑って言った。
「仲良くしよう」
次に白兎が、こっくり頷いて笑った。彼女が差し出した手を、七季が不思議そうに見ると、いつのまにか姉の後を追ってきた棗が、おずおずとした声で説明した。
「シェイクハンド……あくしゅ、だよ。手をにぎって、よろしく、っていうあいさつなんだ」
「ん。わかった。なっちゃん、物知りだね！」
すごいね、と褒められた棗は、色素の薄い頬をぱっと染めた。その間に、白兎と握手した七季が、今度は栗毛の男の子へと、手を差し出す。
「なっちゃんも、あくしゅ」
「う、ん」
仲良くしような。

外で遊ぼう、と言ったのが誰だったのか、定かではない。もしかしたら、切嗣や、七季の母あたりが「子供は外で遊んでおいで」と送り出したのかもしれない。
だが。
「ううう、うぐっ、ぇう……」
まっしろな細腕を血まみれにした七季が、ぼろぼろ涙を流しなが

ら歯を食いしばっている。犬を刺激しないよう、大声を上げないだけ、我慢強いとさえ言えるだろう。

黒髪の子供が、大型犬に噛まれてしまったことは、動かしがたい事実だった。

緑色の首輪が見て取れることから、飼い犬だということはわかる。しかしリードはなく、責任を持つべきである飼い主も、周りには見当たらなかった。

運が悪かったとしか言いようがない。

たまたま棗（なつめ）が空き缶を蹴った。それが、一匹だけで徘徊していた、土佐犬と思しき猛犬にクリーンヒットしてしまったのだ。

追いかけられたのは、棗（なつめ）も、白兎（しろう）も、七季も一緒。

ただし、噛まれそうになったのは白兎（しろう）で、しかも狙われた場所が首筋。獣の本能だったのだろう。

それを防ぐために、七季はとっさに割って入った——正確には、腕を突っ込んだのだ。

何かの本で読んだ、犬の口に拳ごと腕を突っ込んでしまえば噛まれない、という情報を、うろおぼえで実践したのである。

が、もともと小さな子供の拳と腕。食いちぎられることこそなかったものの、つっかえるほどの質量はなく。

結果的に、猛犬の牙は、白いブラウスごと肌を噛み破り、幼い七季の腕に食い込み——いまだ彼女の肘から先は、ダラダラとまっかな血を垂れ流していた。

「う、あ——なな き、を——はなせえっ！」

子供の目から見れば、惨劇、といって差しつかえない光景に呆けていた白兎（しろう）が、ようやく我に返る。

同時に、栗毛の女の子は、とび色の目を琥珀にかがやかせ、ぎっとまなじりを吊り上げた。大きな双眸が、闘志に燃えて力を帯びる。

「さぎた、まぎか！」

きんっ。

腕を突き出す白兎（しろう）の叫びによって生まれた、数条の氷の矢が、土

佐犬の巨体に襲いかかる。
　尋常ならぬものを、わずかに残る野生の本能で感じ取ったか、大型犬は、とっさに避けるべく、七季の細腕から口を離した。
「あぅっ！」
　ど、と地面に倒れ込んだ子供は、噛まれた腕を抱えながら、短い苦鳴を洩らしつつも、意識を失わずに顔を上げた。
　すると。
　涙に濡れた、大きな黒瑪瑙の瞳が映したのは、思いがけない光景だった。
「魔法の射手（サギタ・マギカ）！」
　白兎（しろう）に良く似た栗毛の男の子が、不思議な呪文を叫ぶと、さっきまで七季を噛んでいた大きな犬が吹っ飛ばされたのだ。
　そこに、激昂した姉が追い討ちをかける。
「魔法の射手（サギタ・マギカ）あぁッ！」
　こちらは目視できた。矢というよりも、ツララに近い。
　七季は気づかなかったが、最初に放った第一矢よりも、それは格段に大きかった。
　ドウッ！
「ギャウッ」
　小さく見積もっても、木材サイズの氷でできた柱が、猛犬に突き刺さり、そのまま凶暴な犬を氷漬けにする。
　息を荒げたままの、栗毛の双子は、口を血まみれにしている犬が動かなくなったのを確認するや、ぱっと七季に駆け寄ってきた。
「ナナ！」
「ひどい……！」
　棗（なつめ）も白兎（しろう）も、まるで自分が傷を負ったように、ぼろぼろ泣きながら「ごめん」と繰り返し、衣服を朱に染めた黒髪の女の子を、二人がかりで運んだ。
　力なく揺れる指は、したたる血潮に紅く染まっていた。
　――自分たちが、魔法を隠さなければ。

――あのとき、すぐに犬をはねのけ、凍らせていれば。

衛宮姉弟は、悔やんでも悔やみきれない想いを抱きながら、病院で目を覚ましたイトコに謝り続けた。

#92　ゆびきり－紅い指－（後書き）

あとがき

＞わりとまともな（？）戦闘が続いたので、耐え切れず、ほのぼのなノリの番外編を突っ込んでみる。

何故かうっかり流血沙汰の罠。あ、あれー……？

もうちょっとだけ続くよ！

#９３　ゆびきり－白い指－（前書き）

まえがき

＞前回に引き続き、番外編的な話です。

リリなの、ゼロ魔キャラは登場しません。

#93　ゆびきり ー白い指ー

そして。

「何であやまるの？」

白い病室の中、くっきり冴える黒い瞳をきょとんと丸くして、腕を包帯でぐるぐる巻きにされた幼子は、しんそこ不思議そうにイトコたちを無事な方の手で撫でた。

「なっちゃん、白兎（しろう）も、助けてくれたよ？」

私、まだお礼を言ってない。

あどけない、まろやかな頬の面輪に、ふんわり花がほころぶような笑みが浮かぶ。そこに、恨みの影も苛立ちのしわも、何ひとつ見当たらない、満月みたいな笑顔だった。

「ありがとう。ふたりの服、汚しちゃってごめんね。恐いのから、助けてくれて、ありがとね」

痛みはない。

麻酔が効いているせいで、噛まれた手の感覚じたいがない。泣きじゃくる双子を、片手でもどかしげに撫でながら、七季は妹をなだめるように優しく叱った。

「でも、ああいうときは逃げなくちゃダメだよ。逃げておとなを呼ばなくちゃ。二人とも、ケガしてない？」

そんな言葉を聞いて、白兎（しろう）と棗（なつめ）は、いっそうわんわん泣き出した。

「わたし、まほう、つかえたのに……かくしてた、から、ななき、ケガさせた……っ」

「ぼく、おとこなの、に……ふたり、まもれ、なか、った！」

ごめんね。ごめんね。ともだちなのに。

きっと、うんと痛かった。

いっぱい血が出て恐かった。

繰り返し謝る、できたばかりの友達は、目が溶けてしまうんじゃないかと思うくらい、七季の前で泣きじゃくっていた。
「だいじょうぶだよ。きょうけんびょう、とかも、かかってないって、お医者さんが言ってたし、傷も、残らないって」
それにね。
「いのちあってのものだね、ってこういうことを言うんだと思う。生きてんだから、気にするな！」
ばしばしっと衛宮姉弟の背中を叩いて、男前に言い放った七季に、しゃくりあげてばかりの二人は驚いて、目を丸くした。拍子に、ぴたりと涙が止まる。
「むちゃくちゃだよ……」
「ナナ……」
すん、と鼻をすすり上げた、女の子の方が、ふるふるかぶりを振って、きっと瞳に強い光を浮かべた。
「わたし、もっと強くなる！　ナナを守れるくらい！　もう、こんなケガ、絶対にさせない！」
「ぼく、ぼくもっ！　もし、きずものになっても、七季をお嫁さんにもらうから！」
姉弟そろって言い募る衛宮家の双子に、黒髪の子供は、ぽん、ぽんと一回ずつ頭へ手を置いた。
「やだなあ。白兎（しろう）がケガすると、いっしょに遊べないじゃないか。なっちゃん。けっこんって、本当に好きな人としなきゃダメだよ？」
「ぼく、七季のこと、好きだよ？」
まだ涙の残る顔で、こてん、と首をかしげる男の子に、七季は暇つぶし用に持ってきてもらった少女マンガを手渡した。
「ま、これ読んでから、もっぺん考えよーな？」
「？」
されるがままに少女マンガを受け取る棗（なつめ）。その横で、唇を尖らせて「でもっ」と七季の無事な手を握る白兎（しろう）。

「じゃあ白兎。約束して」
「うんっ！」
反射的に、栗毛の女の子は勢い良く頷く。
「かくしごとはしても良い。でも、これから私に、うそはつかないって」

「……？　かくすのは、良いの？　魔法かくしてたの、おこってないの？」
黒髪の女の子の言葉に、白兎はきょとりと目を瞬いた。とび色の目が、不思議そうな光を浮かべる。
「何で？　私だって、かくしごとの一つや二つ、あるよ？　言いたくないことも、言わなくて良いことも、だれだってあると思う。自分がかくすのは良くて、他の人にはかくすな、なんて不公平だよ」
こまっしゃくれたセリフだが、本が大好きな七季は、このとき既に、同年代の子供よりは精神年齢が高く――生まれ持った、個人主義という個性もまた、発露しかけていた。
彼女の中には「ひとはひと」という言葉が、既に根づいていたのだ。
「それに、白兎は、理由もなくかくしてたわけじゃないと思って」
無理に誘うことはないけれど、白兎の性格なら、楽しいことや面白いことは、分かち合おうとするだろう。
だから七季は、猛犬を凍りつかせた「魔法」とやらを見て、すぐさま「ああ、あれは危ないものなんだな」と理解したのだ。
マンガやアニメで見るぶんには良いけれど、じっさいに殴ったり叩いたりするのは、痛くて恐いものだと、七季も知っている。
あれだけの強さが――威力があるものが――危なくないわけがない、と幼くても観察眼の鋭い彼女は、しぜんと悟ったのである。

それを見せびらかさない、イトコの優しさと頭の良さを、むしろ七季は歓迎していた。

「魔法はすごいけど、やっぱり人前で使うのは止めといた方が良いと思う。

私、なっちゃんと白兎（しろう）が、じっけんざいりょうとかにされちゃうの、やだし。仮面ライダーみたく改造されたりしたら、白兎（しろう）も、やでしょ？」

ヒーローだって正体をかくすし。

七季は、日曜の朝八時から始まる、ヒーローものが好きだった。

幼なじみの霜夏や伯言の家に泊まったときに、一緒に見ていたからだ。

「……ナナ、いがいとコワいこと、言うね」

「気をつけろって言ってんの」

めっ、と七季は勇敢なイトコをたしなめた。

「珍しいものとか、特別なものとか持ってると、ねたむ人は多いんだよ。ほめられることが多いだけでも、いじめられたりするんだから」

七季の言葉は、実体験に基づいたもの。

素直で大人の言うことを良く聞く彼女は、基本的に「良い子」で、だから幼稚園では、先生のお気に入りで。

それが気に食わないからと、仲間はずれにされることもあったし、綺麗なヘアピンや髪留めなんかを取られることもあったりした。

「七季も、いじめられたの？」

棗（なつめ）の心配そうな問いに、黒髪の女の子は、ベッドに半身を起こしたままで頷いた。

「うん」

姪っ子を猫かわいがりしていた切嗣や、初孫を喜んだ祖父母から、七季がものをもらうことは多く――彼女が他の子供を妬むよりは、妬まれる方がずっと多かったせいもある。

「ほしがって、それがもらえないと、いじめるのがひどくなったり

もするんだよ。だから、本当に大事なものは、かくさなきゃダメ。持ってることも、かくした方が良い」

「自分がされて嫌なことは、人にしてはいけません」――幼稚園の先生から言われたことを、まだ純真な子供は、そのまま飲み込んでいた。

仲良くなったイトコたちが、自分みたいに痛い目に遭うのも嫌だから、黒髪の子供は一生懸命に相手を説き伏せようとした。

「……うん」

まじめな声で話す黒髪の子供に、こっくりと白兎（しろう）は頷いて、これまで以上に気をつけようと、心に誓う。

もしも自分が嫌な目にあったら、きっと目の前の友達と、棗（なつめ）だけは泣かせてしまうだろう、そう思ったから。

「でも七季。ぼく、白兎（しろう）も七季も大事だけど、かくせないよ？」

切嗣も。

かたや、困った顔で、栗毛の男の子――棗（なつめ）が「どうしたら良いの？」とイトコの枕辺にひっつく。

棗（なつめ）からしたら大真面目だ。

「うん。だからね、どうしたら良いのか、私も、たくさんのことを知ろうと思うんだ」

ぱむぱむ。

七季は、膝に乗せていた本を、かるく叩いて示した。

「ちしきやじょうほうは、力になるんだって。きりちゃんから聞いたよ。

それに本には、私たちが知らないことが、いっぱい書いてある。本を書いているのは、おとなでしょう？」

「うん」

「ちしきやじょうほうは、ちから……」

心に刻み込むように、栗毛の女の子は、薔薇色の唇で繰り返す。

とび色の瞳が、知性の光を孕んで、きらきら揺れていた。

「おとなは子供より物知りだから、きっと、大事なものの守り方も

書いてるんじゃないかと思うよ。
絵本みたいに、ぜんぶが本当のことじゃないと思うけど、でも、知らないよりは、知ってた方が良いと思う。知らないふりはできても、知ったかぶりは役に立たないから」
七季は本が好きだ。まだ知らないことが、たくさん、たくさん書いてある。
「はくげんのお父さんも言ってた。三人寄れば、もんじゅのちえ、だって。一人じゃわからないことも、他の人と話し合えば、わかることもあるんだって。
だったら、私と、白兎と、なっちゃんと、みんなで力を合わせたら、上手くいくかもしれない。それに、きりちゃんは、おとなで優しいよ。きっと白兎たちのことも大事にしてくれる。
魔法のことは、話してみた？」
「ううん……」
「私たち、ようしだよ。もらわれっこなんだ。切嗣さんとは本当の親子じゃないの。死んじゃったパパとママが、魔法使いだったんだ」
言いにくそうに、それでも白兎は目を伏せながらも七季へと打ち明けた。
「そか。いろいろとじじょうがある、って言ってたのは、それか……」
ケガ人であるはずの幼子は、ふと目を伏せて考え込む。ふだんの切嗣のことを考えて「たぶん大丈夫かな」と結論を出した。
子供の七季の目から見ても、切嗣は変わり者だ。
七季の母が結婚するまでは、もっぱら彼の世話を焼いていたのは、七季の母だったという。
『でも、あのひとはいざというとき、とっても頼りになるのよ』
切嗣の話をするとき、七季の母は決まってそう言った。優しい人だけど、怒るととても恐いのだと。そして、彼が怒るのは、決まって家族や、大事な人がらみのことだった。
七季は小さな頭の中で、くるくると思考のねじを回した。

「やっぱり、きりちゃんに話そう。信じてくれないなら、そのままかくせば良いし。
もし、万が一、きりちゃんが白兎(しろう)たちにひどいことしたり、言ったりしたら、私も、きりちゃんとえんきりする」
きっぱりと黒髪の子供は宣言した。
「え……」
「私、きりちゃんのこと好きだよ。でも、白兎(しろう)となっちゃんも好き。もし、きりちゃんが、私の好きなひとにひどいことするなら、いつか私もひどいことされると思う」
それならいらない。
子供の理論は、いつでも突飛だ。そして、残酷でもある。
かなり物凄いことを言っているのだが、幼い子供たちは気づかなかった。
ただ、目の前の女の子が、自分たちの味方をしてくれるのだと、言っていることだけは理解した。
「私は、白兎(しろう)と、なっちゃんの味方になる。約束だよ」
ゆびきり、げんまん。
包帯に包まれた指と、魔法使いの指。
まっしろな小指を絡めた、幼い誓い。
「だから、きっと恐くないよ。きりちゃんに話そう?」
女の子と男の子は、それぞれこっくり頷いて。
知らせを聞いて駆けつけてきた切嗣に、彼らの秘密を打ち明けたのは——衛宮家の双子と、七季がまだ、五歳のときの話。

#９３　ゆびきり－白い指－（後書き）

あとがき

＞そんなわけで、オリ主が友人を大切にする人間に親切な理由は、過去に根ざしていたという話。

昔、自分も似たようなことやらかしてたんだな、これが。

ちなみに白兎（しろう）さんの弟、棗君は、いまだにこの過去がトラウマ。

恋愛感情はないけど、傷物にしちゃったオリ主を嫁にもらうつもりでいる、ド天然な男の子に成長したという裏設定。

悪気なく、真面目に本気なので、「いや、ちゃんとマトモな恋愛&青春して来い頼むから」と困っているオリ主。

若干、オリ主の精神年齢が高いような気がしますが、読書好きで考えるくせがついているのと、いじめられた経験で、人間的に成長するはめになったからです。

苦労すると、精神年齢って上がりますよね。

＃９４　始まらない物語－代価－（前書き）

まえがき
＞今回はルイズアンチ的な傾向があります。お嫌な方はブラウザバックぷりーず。

#９４　始まらない物語ー代価ー

「そうですか」
ただ、一言。
耳障りなまでに甲高い、ルイズの支払い拒否に対して、七季の唇から紡がれたのは、清水のせせらぎを思わせる、涼やかなソプラノだった。
その言葉に、ピンクブロンドの――無残に髪が首筋あたりで散切りになっているとはいえ――少女は、自分の言い分が通ったものと思ったのか、ふん、と鼻息を荒くして、限りなく平らに近い胸を張った。
――私が正しいに決まってるじゃない。
そう言わんばかりの態度である。
が、双翼双蛇の魔杖を携える少女が、それを受け入れるはずもない。
七季のまっくろな双眸は、知性の光を宿して静かにきらめき、その白い相貌は不思議な気高さをにじませて、すっと首を伸ばすや、あたりを睥睨した。さながら、託宣を下す巫女のごとく。
「お聞きになりましたか、皆さん？」
七季の声は、憤りも蔑みも感じられない、落ち着いた響きだった。呼びかけるためだけの、それが余計に、静まり返った食堂の中で、凛と響く。
風になびく稲穂のように、さあっと何かが広がっていった。
それは人の感情が作る、ざわめき。
そこで初めて、ルイズは自分が――自分たちが――どういう状況にあるのか、あわてて周囲を見回した。
アルヴィーズの食堂。そこには生徒と教師が、ほとんど勢ぞろい

している。学院の手入れをする、使用人の姿さえ見つかった。
皆、多かれ少なかれ、何かしらのケガをしたり、服を汚していたりした。傭兵たちに襲撃されたときの名残だ。
彼らの目は、一様にルイズを注視している。そのまなざしの一つ一つが、非難の色を帯びていた。
「信じられない」「幾ら何でも」「あんなに酷いケガだったのを」「治療してもらっておきながら……」ぼそぼそと、どこからともなく聞こえる響きは、決してルイズに好意的なものではない。
彼女を助けようとして大怪我をしたキュルケですら、苦い顔をして、やがてはルイズから目を逸らした。赤毛の少女は、ルイズに見切りをつけたのだろう。その背中を、慰めるようにタバサが叩く。
「な、何よっ」
蔑みの色すら混じる視線に、「ゼロ」の二つ名を持つ少女が、反射的に噛みつくさまを、主に寄り添うアーチャーも嘆息しながら眺めていた。
「何というか……ここまでくると、いっそみごとだな」
ことごとく墓穴を掘りまくるルイズの行動が無様すぎて、いっそ七季のやり口が悪辣に見えてくるほどだ。じっさいには、異邦の少女は、ごくまっとうなことしかやっていないが。
傷ついたものを癒した。払える能力があるものに、治療の代価を要求した。事実だけを見れば、それだけのことだ。
「予測通りだろう」
七季の頬に、うりうりと顔をすり寄せて懐く東風（こち）は、ルイズなど知ったことか、と視線もくれない。
その間に、黒髪の少女は、そっとデバイスを操り、校内に散らばっていたマンドラゴラたちを魔法で、本来の居場所である温室へと転移させた。
傭兵たちを檻の中に捕えるどさくさに紛れて、彼らを校内に仕込んだのも、同じ転移魔法を使ったのだ。
主力を陽動と兼ね、その能力があったからとはいえ、敵兵の捕縛

に乗じて伏兵を仕込むその手管は、七季の、軍師や参謀としての適性を示している。

いずれは、これに外交能力を身につけさせて、「柱」の巫女たる真言の守り手とするのだとは、帝都心霊庁の、神門（みかど）や観音（かんのん）をはじめとする、お偉方の意向だ。

弱冠、十代にしてこのありさまなのだから、順調すぎるほどの成長といえるだろう。

さておき。

「最初から、あなたじしんに払っていただけるとは思ってませんよ。ですから、ご自分で、ご実家の方に連絡なさるとばかり……」

はふ、と思わしげにためいきをつくと、黒髪の少女は、あどけない面持ちを憂いに翳らせて目を伏せた。あくまでパフォーマンスだ。

暗に「実家に問い合わせる手間すら惜しんだ」「ヴァリエール家は、ルイズの治療費を出すのを渋る」のだということを、他ならぬルイズが態度で示した、その事実を憂いているのだと、学院関係者に見せつけるためでもある。

貴族の世界では――とりわけ、この伝統や格式、建前が重要視されるトリステインでは――必要なことだ。

「わかりました。ご実家には、私の方から直接お手紙を差し上げます。

その際、治療前のケガの状態と、治療後の状態の、詳細な資料と、カルテ――診療録、それから皆さんの証言も添付して、お送りすることにしましょう」

つまりそれは、他の貴族に、ルイズのケガと醜態を知られているということだ。事実である以上、七季が手加減する必要はどこにもないし、むしろ詳細に書き綴る気だ。

水の魔法の教師であるキンダイチならば、専門的な見地からも証

言してくれるだろう。
「ああ、それと」
七季は、いま思いついたといわんばかりに、ぱむり、と杖を握る手と、もう片方の手のひらを合わせた。
「この事件は、本をただせば、警備の甘さを招いた、オールド・オスマンの責任ですから……お話しすれば、半額くらいは持っていただけると思いますよ？」
にこり、と黒髪の少女は無邪気な笑みを浮かべる。
確かにこれは、紛うことなき不祥事だ。それも、トリステイン魔法学院の歴史に残ろうかという、大事件。
しかも、主犯らしきメンヌヴィルは、教師であるコルベールの名を連呼していた。狙いは彼だと、すぐわかる。コルベールを採用したのがオールド・オスマンであれば、それも原因の一端を担ったことになり。
そのうえ、いまは治療されているが、ルイズを助けるために大ケガを負ったのは、ゲルマニア貴族のキュルケと、ガリア王家の色を髪に宿すタバサ。
立派な国際問題である。
つまり七季のそれは「口止め料込みだと思え」ということなのだ。
そこまでルイズが頭を回せたかというと、さだかではないが――ともかく、ヴァリエール家の三女は、「事件の責任は学院長にある」と責任転嫁できることくらいは気づいたようだ。
「そ、そう。何にしろ、学院で起きた事件ですもの。オールド・オスマンにご相談するのは当然よね！」
「ええ」
あくまでにこやかに微笑んで、七季は、まとう上着の、たっぷりとした黒い袖を揺らすと、出口をルイズへ指し示した。
「少し、お部屋で休んではいかがです？
ヤケドは治療しましたけれど、焼けた衣服までは直せませんでしたから。レディがいつまでも背中を人目に晒すというのも、はした

ないでしょう？」
「きゃっ」
すうすうする背中に、ようやく気づいたのか、ルイズはあわてて食堂を出て行った。その丸出しの背中に、いまだ非難がましい視線が突き刺さっていることには気づかずに。

「さてと」
――ケガ人多いな。酷くはないけど、アーチャーが気にするだろうし。
べつだん七季は、ここの貴族が好きではないが、中には平民も混じっているし、親切にしてもらったものもいる。それを見過ごすほど、彼女は非道ではなかった。
七季は、ふたたび魔杖を模したデバイス「ガニュメデス」をかまえるや、握る手のひらに魔力を集める。。
その先端、黄金の双翼に抱かれた青い宝珠が、ふわり、と藍色の魔力光を帯びた。
「術式『アムリタ』」
ぱぅ……
アルヴィーズの食堂に、やわらかな夜色の光――否、夜空が降ってきたかのような幻想的な光景が満ちる。深い藍色の光に、黄金色の粒子がちらちらと瞬く魔力。
「わあ……」
「これは、さっきの」
その光は、襲撃者と戦ったキンダイチ、ギトーらをはじめ、無力化される際に殴られた生徒や使用人、教師らの傷までも、不思議な温かさを伴って癒しきった。
そして異邦の少女は、この施術さえも策に組み入れる。
「不運にも、事件に巻き込まれた皆さんは、大なり小なり、おケガ

をしていたことと思います。
さぞかし心を痛め、お疲れになったことでしょう。
僭越ながら、未熟ものなりに、できる限りの手当てをさせていただきました。もしも代価を払うお気持ちがあるのでしたら……さっき申し上げた、ヴァリエール家への証言に、お口添えいただければ、お代はいりません」
すると横から、タイミング良くアーチャーが口を挟んで問いかけた。
「ちなみにマスター。証言しない場合の代金は、どれくらいかね？」
七季の口にした金額は、最高級の水の秘薬四本を、全校生徒の人数分で割った金額――不在の生徒数ぶんに、教師や使用人の数を当てはめた形だ――とどのつまり、大人平民の、小遣い程度の額だった。
「へ？」
「そんなものなの？」
きょっとーん、と上級生の貴族たちが目を丸くする。
ふつうの水の秘薬を使えば、全快するようなケガではあったが、それでも七季の使った魔法の規格外さは、わかるつもりだ。東方から来たという留学生は、この場にいた人間のケガを一気に癒したのだ。
あの人数である。それは、このハルケギニアでは、水のスクウェアでもできるかどうかの大魔法に分類されるに違いない。
その代価としては、安すぎる。
「あ、分割払いも受け付けます。半年くらいの期限で」
だああっ。
付け足された言葉に、さらに脱力感が広がる生徒と、平民である使用人たち。
「そ、そんな金額で良いんですか……？」
おずおずと、思わず問いかけたのはシエスタだ。日ごろアーチャーらと接触の多い彼女は、七季が気さくというか、大ざっぱで、平

民を差別しないのも知っている。
だからこそ、一同を代表して、みんなが覚えているだろう疑問を投げた。
「証言を金で買った、とか言いがかりつけられるのもアレですしね。一人頭は使用人の方でも払えそうな金額ですけど、まあ、全員ぶん集まれば、最高級の水の秘薬、四本分くらいですよ？」
けっこうな大金である。
「それに、使用人の方から、無理に証言を集めようとは思ってませんから。アルバイト――ちょっとした、お小遣い稼ぎみたいなものを兼ねてるんです」
だから、かしこまる必要はないんですよ。
自分よりも少し背の高いシエスタの黒髪を撫でて、七季は、ふんわり安心させるような笑みを浮かべた。
「貴族の方からは、より貴重な金言をいただければと思いますけれど」
この言葉で、貴族といえども、裕福でない下級貴族の子弟たちは、嬉々として証言を添えることに決定した。たとえ平民が自由にできる程度の金といっても、十代の少年少女には、小さくない金額だ。
それを、手紙一つでチャラにできるのである。おまけに七季の言葉は「金よりも貴族の言葉の方が価値が高い」という建前をくれた。これで動かない方が、どうかしている。
また、裕福な中級以上の貴族の子供でも、「ルイズの態度は目に余る」「ナナキに代価を払うのは当然だ」と考えるものは、やはり証言の手紙を書くことにした。
自分の懐が痛まない、という事態に、人間は寛容になれるものである。中には「ヴァリエール家ほどの財産があるくせに、治療費を踏み倒そうなんて」と嫉妬交じりのものもいた。ひとそれぞれである。
タバサは、先の一件でケガを癒されているので無言を貫いているが、ルイズに愛想をつかしたキュルケは「この際だから」と詳細な

証言の手紙を書いてやることにした。七季への恩返しにもなるだろう、と。

仇敵たるツェルプストーの娘にまで、事件の証言をされれば、ヴァリエールとしても動かざるを得ないだろう。もちろんキュルケは、ゲルマニアの実家にも報告するつもりだ。

「そうそう、主犯の火メイジを捕えたのは、うちのアーチャーですけど、事件の顛末なら、皆さんの救出に携(たずさ)わった先生方にお聞きするのがよろしいと思いますよ。

とりわけ、ギトー先生のご活躍は、素晴らしいものでした。偏在を駆使した作戦の遂行は、やはり風メイジの真骨頂ですね」

さらっとギトーへの煽(おだ)てを織り交ぜ、生徒たちの関心をそちらへ逸らしておいて、彼らがわあっとギトーを取り囲んだ隙に、七季はアルヴィーズの食堂を脱出した。

彼女の目配せを受けた、従者と教師たちもまた、あとに続く。

これから、メンヌヴィルたちをはじめとする、事件の容疑者のあつかいを決めなければならなかった。

＃９４　始まらない物語ー代価ー（後書き）

あとがき

＞政治的というか、水面下の暗躍というか……オリ主の地道な根回しです。

生徒とメイドさんたちへの回復魔法は「アーチャーが気にしそうだからついでに」という感じなんですが（従者に過保護）、どうせだからと治療費がわりに証言ぷりーず、と言ってみた。言うだけタダだし。

原作を見る限り、ルイズは政治について疎そうなので（特に初期は考えなし）、オリ主の「半額オールド・オスマンが払ってくれるよ」発言も、裏を理解できないかと。

そして金運低下のオスマン、私財が目減りします（祟り効果）。

コルベールはいうまでもなく、事件の渦中の人なので、処分なしに済むはずがありません。

#９５　始まらない物語ー残照の行方ー（前書き）

まえがき

＞今回はルイズアンチ的な傾向があります。お嫌な方はブラウザバックぷりーず。

#95　始まらない物語ー残照の行方ー

マントの代わりに黒衣をまとう異邦人娘に、着替えを勧められた――正確には、部屋に引っ込むようにだが――ルイズは、寮の自室で、まっさおになっていた。

脱いだブラウスは、背中に揺れていたはずのマントすらも貫いて、巨大な穴が開いていたからだ。穴のふちは、ほとんど炭化して、まっくろになっている。

それを確かめてようやっと、彼女の脳裏には、メンヌヴィルの炎を浴びたときの、とんでもない痛みと恐怖がよみがえったのである。

そこに、メンヌヴィルへ襲いかかってから、姿の見えなかった、あの白い使い魔が戻ってきた。

言葉が話せないとはいえ、まっしろな鵺（ぬえ）は、しっぽを器用に使ってドアを開ける。そして、震えるルイズのを慰めるように寄り添った。

「うあああ……ごわがった……ごわがっだよお……」

メンヌヴィルに捕われた際、失禁した水濡れは乾いているものの（それもあって七季はレビテーションを使ったのだが）、アンモニアの臭気は、いまだ染みついている。

しかし、つるりと冷たい陶器のような肌を持つ式神は、文句をつける言葉もなく、ただ従順に主に従うだけだ。

作り手である真言の眷属――七季の命で近寄れない場合を除けば。

ルイズが放り出したはずの、治療費の請求書は、そっと使い魔によって机の上に置かれ、春の日が暮れていく残照を静かに受け止めていた。

時刻は、ルイズが自室に戻るよりも、少し前。

「サイレント」をかけられた部屋には、窓からの赤い光が射し込んでいる。

「結論から言うと、彼から、薬物と水の魔法をかけられている反応が出ました」

ふっくらとした横顔を、残照に紅くふちどられた七季は、集まった教師の面々に、火の使い手――メンヌヴィルへの診断結果を打ち明けた。座る彼女の背後には、従者である白い髪の偉丈夫が、護衛のために立ったまま控えている。

いっぽう、ざわ、と反応する顔ぶれの中に、学院長であるオールド・オスマンや、事件の元凶であると見られているコルベールの姿はない。

学院長が出向いているという王宮へは、さっそく鷹が伝令として飛ばされたが、連絡がついて、オールド・オスマンが最速で戻ってきたとしても、おそらく夜になってしまうだろう。

それまで、メンヌヴィルや傭兵たちを放っておくわけにはいかない。

そんなわけで、いま、学院に残っている教師たちと、事件を半ば終息させた七季たちでの話し合いが、いままさに行われていた。

「うちのアーチャーが、この火メイジを倒したときにつけた傷から、血液を採取して分析した結果です。キンダイチ先生、これを」

もちろん、気の回る従者に手抜かりはなく、メンヌヴィルには既に止血がなされている。

七季はデータを印刷した紙を、白髪の老賢者に差し出した。水の魔法使い（メイジ）である彼の言葉であれば、いっそう信憑性も増すだろう、と思ってのことだ。

ついでに彼女が、医療用デバイス「ガニュメデス」をフォーム「カドゥケウス」で起動状態にしているのは、それっぽい威厳を出すためだったりする。

政治の場では、こういうハッタリも必要なのだと、七季はバイト先の上司から学んでいた。

「これは……！」

ちなみに、そのメンヌヴィルはというと、アーチャーに担いで運ばれ、いまは会議室の中央、床に転がされている。万が一、暴れだされるとことなので、キンダイチが念を入れてスリープクラウドをかけていた。

「自白を取る際に使われる、暗示用の薬物ですね。それと水の魔法は……かなり強い。洗脳、もしくは『操り』に近い部類のものでしょう」

黒い瞳の老教師は、眉間に憂いをにじませて、穏やかな相貌をしかめている。

――何ということだ。それでは。

診断のために、キンダイチじしんも、メンヌヴィルに魔法を使ってみたが、七季が提示したのと同じような結果が出たことに愕然としていた。

「つまり……この男は操られていた。この襲撃には、裏がある、ということですか？」

シュヴルーズが、震える声で、それでも考察した結果を口に出した。

とたん、「まさか」「いったい誰が」「すぐに王宮に報告を」と教師の間から声が上がる。

学院を襲ったものの、主犯が操られていたとなると、その背後に黒幕がいるのは明らかだ。

当初は、てっきりコルベールを狙っての怨恨とばかり思っていた学院側も、事態が思いがけない方向に転がっていくのを感じて、困惑と不安に身を震わせる。

「残念ながら、若輩であり、いわばよそものである私に、トリステインの事情はわかりません」

遠まわしに「トリステインの政治にはノータッチ」と無関係を明

示して、七季は教師たちの顔を見回した。
いずれの教師も「そりゃそうだ」という面持ちをしている。彼女らの建前は「東方から来た留学生」なのだ。
そして、さっき見せた治癒魔法――あれほどの腕前があるのなら、トリステインで有名にならないはずがない。しかし、七季の存在は、つい最近まで、誰も知るものがいなかった。
すなわちそれは、はるか遠くの国、もしくは場所にいたからなのだろう、と教師の大半は、判断し始めていた。ただ一人、少女の祖国を知るキンダイチだけは、彼女がもっと遠く――異世界の来訪者であることを知っていたが。
何にせよ、トリステインの爵位を持たないものは、政治に関係できるわけがない。
財産を持つ豪商であるならば、貴族にも貸しを作れるため、隠然とした影響力を持つこともできるから、また別かもしれないが、いずれにせよ、七季たちが、この件に関与する理由が、表立って見つからないことは確かだった。
「ですから、基本的に、襲撃者うんぬんのあつかいや、その政治性なんかの詮索は、先生方にお任せしようと思います。私が口を出す話でもありませんし」
トリステイン魔法学院の生徒で、なおかつ異邦人という立場上、それが許される少女を、教師たちは羨ましそうに見つめた。
彼女の言っていることはもっともだし、関わられても困る。しかし、これからの騒動を思えば、頭痛がしてくるというものだ。
「あとまあ、これは蛇足なんですが」
七季はぽつり、と、どうでも良いように付け足した。
「一ヶ月もあれば、この男をおとなしくさせたうえで、穏便に証言をさせることもできますけど」

『は？』

一同は、そろって少女のあどけない、少し疲れのにじむ面輪を凝視した。アーチャーですら、ちょっと驚いた顔をしている。

＜本気かね、マスター＞

とりわけアーチャーは、メンヌヴィルをじかに見たうえで、戦った（一方的ではあるが）経験を持つ。

あの狂乱ぶりが薬物によるものとはいえ、戦士としての力量は、普通に考えれば十分過ぎる相手だ。それを、か弱い七季がどうこうできるとは、ちょっと思えないだけに、確認を取らずにはいられない。

＜できないことは言わないよ。面倒だし＞

＜いや、そういう問題では……＞

キンダイチやシュヴルーズは、校外にいたため、現場に居合わせなかったが、凄まじい炎を操って、最初に学院の正面を突破したのは、メンヌヴィルなのである。

ついでに、ルイズを人質にするまで、彼はさんざん校内で暴れまわっていた。それを知る教師たちは「空耳か？」と我が耳を疑った顔をしている。火事にならなかったのは、ひとえに固定化の賜物だ。

ここに才人がいたなら、「魔法スゲェ」と呟くことだろう。

「薬物を抜くのは、キンダイチ先生のお力があれば、そう難しいことではありませんし」

七季は、けだるげな表情のまま、ちらりと床に転がる盲目の男を一瞥した。

「ちょ……ちょっと待ってくれたまえ。薬物は確かに、僕の専門だよ。ここに成分表もあるし、一ヶ月といわず、三日あれば、解毒剤くらいは作ってみせる。

しかしだね。問題は、彼を支配している水の魔法だ。それに、もしも洗脳が解けたとしてもだよ、彼が危険な傭兵メイジなのは、変わらない。そう簡単にどうこうできる相手では」

おろおろしながら、言い募るキンダイチに、黒髪の少女は、こて

ん、と首をかしげて、ポニーテールの黒髪を揺らした。
「たぶん、そっちも大丈夫です。彼を支配しているのは、水の魔法――すなわち、他者の魔力です。なら、それを洗い流してやれば良い。
術式を仕込まずに、ただ魔力を流して、洗脳だか何だかにつかわれている魔力を、押し流してやれば良いんですよ。そういうの、得意なんです、私」
ようするにそれは「穢れを祓う」ことだ。「神使（しんし）」にして巫女たる七季の独断場といえる。
もっとも使うのは、魔力ではなく霊力だが、トリステインの人々には「魔力」で通した方がわかりやすいだろう。
――ああ。それはそうだな。
アーチャーも、ないしんひそかに頷いた。それに薬物関係も、七季のデバイスであれば中和できる可能性が高い。いざとなれば、リドルの魔法薬もある。
「あと、正気に戻ったのを、服従させるだけなら、三日もあればできますけど……それだと、人格改造じみたことになっちゃいますしね。元の性格はどっか行っちゃうんで、下手すると、私が主犯だ、なんて疑われそうですし」
面倒くさいなぁ、という雰囲気を隠すことなく、七季は深々と嘆息した。
かたや、少女のセリフを聞いた教師たちは、唖然としている。
学院を襲撃するような、あの凶暴な狂人を「人格改造できる」なんて、いったいどうやれば可能だというのか。
一部の男性教諭の中には、ちょっぴり「女王様」な黒髪の少女の、いかがわしい連想が浮かんだのは――余談である。
「それを回避するためには、元の性格は残したまま、比較的『穏便に』飼い馴らすことが必要でしょうし。ちょっと時間かかるんですよね。
もっとも、すぐさま王宮に引き渡して、拷問、自白、っていうん

なら、私の出る幕はないですが。十中八、九、彼は殺されるんでしょうね」

むしろ、そちらの可能性の方がずっと高い。

そこまで話すと、七季は黒瑪瑙の瞳で、静かに横たわるメンヌヴィルを見つめた。

白く逆立った髪が、少し彼女の従者に似ている。鍛え上げられた戦士の体躯。焼かれて光を奪われた、その証をまざまざと残す、ヤケドの傷跡。

――覚えておこう。

自分が打ち倒したわけではないが、従者に命じ、作戦を立て、そうして彼を死に追い込むのは七季だ。罪悪感はないが、重みはある。自分が生きるために「食う」ものの、命の重みだ。

ぴくり、と少しだけ男が身じろぎしたような気がした。

メンヌヴィルは、深い眠りのさなかにあった。

夢を見ている意識があるのなら、それは浅いのかもしれないが、それを知る術は、彼にはない。

火の魔法使い（メイジ）たる彼の夢。

しかしそれは、くらいくらい、明かりのないまっくらな中に、自分が寄る辺もなくたゆたっている感覚だった。

盲目の彼には、闇は珍しくないものだ。しかし現実ならば、自分が生み出す炎が、他者の息遣いが、何よりも熱があったはず。

けれどもここは、冷ややかなほどに何もない。

ただの闇。闇であることがわかるだけの。

ふいに、その闇から力を、気配を――視線が、向けられているような気がして、メンヌヴィルは顔を上げた。

――やっぱり、何も見えるわきゃねえ。

けれど男は何故か、そう、何故か。

その視線が悪くない、と。

嘲笑でも哄笑でもなく、思いがけずこぼしたように、口端を上げて笑っていた。

#９５　始まらない物語ー残照の行方ー（後書き）

あとがき

＞ジャンキーっぽかったのは、じっさいに薬物を仕込まれていたからでした、というオチ。

あと、水の魔法うんたらというのは「アンドバリの指輪」の実験に使われたからです。ちょっと早めに盗んできたばかりの物を、実際に使えるかどうか、ワルドがメンヌヴィルで試してみたという。

本編で書くべきでしょうが、面倒なので割愛（待て）。

さすがに、いきなりメンヌヴィルに洗脳は警戒されるでしょうから、「飲み物に薬物→酩酊・忘我状態→アンドバリの指輪で洗脳」という流れです、きっと。

政治がらみ、本気で面倒臭い（泣）。

#９６　始まらない物語ー黄昏色の不安ー

「あー……つっかれたぁ」

ぼふ、とソファベッド――寮の部屋ではなく、小屋の地下に作られている自室の――に突っ伏した七季は、アーチャーお手製のクッションを抱きしめて、うりうり頬ずりした。

まっくろな羽織に包まれた、その小さな背中に、「お疲れ様」と温かみのある、ねぎらいの声が降ってくる。

「でも、本当に私たちは出なくて良かったの？」

さらりと肩口で揺れる、つややかなダークヘア。

そっとソファベッドに腰かけて、少女の背中をいたわるように撫でるのは、事件の間、小屋に引きこもっていたプレシアである。

既にギーシュたち生徒は、畑から引き上げさせ、捕えた傭兵たちは、いまだ小屋の外にある檻の中。オールド・オスマンが帰還するまでは、取りあつかいを保留しているのだ。

教師たちの意見は、さっきの会議で一通り取りまとめたが、責任者である学院長が帰ってきてから、改めて判断を仰ぎ、正式な決定を下す必要があった。

ゆえに、七季たちは見張りを兼ねて、この小屋にいるというわけだ。

「んー。面倒ごとになるのは、目に見えてたし。アリシアがいるだろ？

あんまり、大人の政治的な話とか、そーゆーの見せたくなかったんだよ」

クッションに伏せていた顔を、少しだけ上げて、七季はプレシアの紅い瞳を見上げた。温かで優しい手のひらが、ゆっくりと彼女の背中を滑っていく感触が快くて、七季は大きな目をうっとり細めた。

長く伸びているその様子は、飼い主にブラッシングされている猫のよう。

「ありがとう」

いっぽう、愛娘を気遣う言葉に、ダークヘアの美女は、潤みかけたまなざしで少女を見つめる。

物理的な戦闘に加わったわけではないが、プレシアが第二の娘とも思う少女が、事件を終息に導くだけの采配をふるったことを、きちんと彼女は理解していた。

それは「戦い」であり、かつてアレクトロ社の魔力炉に関する訴訟において、テスタロッサ家を守ったときと、同じ顔をしていたことからも明らかで。

――また、守られていたのね。

プレシアの胸に、えもいわれぬいとおしさと、申し訳なさと、衝動的な感情が入り混じって爆発する。

「もう、この子は！」

がばっ。

「ちょ、プレシア？　にゃああっ！？」

思い余ってちからいっぱいぎゅうぎゅう抱きしめてくるプレシアに、いっぽうの少女は、目を白黒させておたつくが、黒猫姿の従者と、白い髪の偉丈夫は、くつくつ笑うだけだ。才人は、美女と少女の絡みに目をかがやかせている。

七季と知り合ってからこちら、テスタロッサ家の愛情表現は、ストレートかつワイルドさを増している。

「次、私ねっ」

「じゃあ、アリシアの次で」

「せっかくだから、俺も」

手を上げて、七季のハグ権を順番待ちするアリシア、リニス、そして才人。

「よし、君は待ちたまえ」

ひとり少年だけに、アーチャーからの教育的指導（ツッコミ）が入ったようだ。

「ちょ、いや俺も心配してたんですよっ！　や、やましい気持ちはこれっぽっちもおぉ！」
合掌。

そのころ、東風（こち）はというと。
「のきょむっ」
まだワルド主従で遊んでいる、とら（ドラゴン姿）とプラタのところへ、こっそり姿を隠してやって行き（光学迷彩的なステルスだと思いねえ）。
「さて……そろそろ終わりだ」
ごおおおっ。
小型の竜巻で、ワルド主従をふっ飛ばしてから、とらたちの帰還を促した。
「何でえ、もう終わりかよ？」
＜おわり　かえる？＞
「うむ。アーチャーが食事を用意しておる」
余談ではあるが。
その東風（こち）の起こした竜巻に、たまたま、とらの放った火炎が巻き込まれて、ちょっと物騒な感じの赤い竜巻が、空を飛ぶ幻獣たちの間でしばらく評判になったとか、ならないとか。

プレシア、アリシア、リニス、と順番にきゅうきゅう抱きしめられた挙句、最後はテスタロッサファミリー総出でもみくちゃにされた七季は、ちょっと恍惚とした面持ちでくったりしていた。
「ふにゃ……ふわふわの、もぎゅもぎゅの、イイにおいでした～……」

ふだん、とらをモフっているのとは逆の立場になった少女は、案外と幸せそうだった。アーチャーに教育的指導を食らった才人も、その光景を眺めて「ごちそうさまです」と呟いていたり。

ちなみにソファベッドに横たわる七季の懐には、いまだコアラよろしく、アリシアがしがみついている。

「お姉ちゃんもふわふわ～」

えへへへへ、と、愛らしい顔に満面の笑みを浮かべる金髪幼女は、七季のやわらかな胸に、むにむに頬をすり寄せてご機嫌だ。

襲撃・占拠されていた学院を取り戻すために、アリシアが知らないところで彼女が戦っていたと聞いたときには、ないしんお冠だったのだが、大好きな姉貴分にケガがないこともわかり、ようやく安心したらしい。

シスコンが進んでいる愛娘を、しかしプレシアは微笑ましげに見つめるばかりだ。

「本当に仲が良いんだから、あの子たちったら」

――もういっそ、何とかしてナナキの世界に移住できないかしら？

ふんわりと白い頬を緩めて、唇をほころばせるプレシアの表情は、その美貌に浮かぶ慈愛があふれんばかり。

別室に捕えてあるメンヌヴィルに、さっき雷撃ブチ込んできたのと同一人物だとは、とても思えない聖母っぷりである。

ちなみに、姿の見えないリドルはというと、少年姿をとって別室にいる。メンヌヴィルを見張る――というよりは、プレシアの雷撃を含めた彼の傷を治療するべく、魔法薬をあつかっているのだ。

そして、もう一人の従者――アーチャーは、学院の方へ出向いている。

襲撃のショックがいまだ癒えぬ学院関係者を、マルトーら厨房関係者と共に、料理で元気づけるために奮闘中だ。どこまでも気配りの細かい男である。

「おう。こんなところで何してんだ？」

にょっ。

そこに、ようやく「ワルドいぢめ」から帰還した、黄金の大妖――とらが、ドラゴンから変化を解いた姿で現れた。

この小屋は、土や石、木材に固定化をかけてあるため、妖怪の彼なら、どこからでも壁抜けができるという便利構造なのだ（とらにだけだが）。

「ええ、ちょっと家族の絆を深めていたの。トラ、そちらはどうだったの？」

建前は、おのが使い魔になっている妖獣に、ダークヘアの美女ママさんは、アーチャーが用意した肉料理を勧めながら、とらに尋ねた。

「大したこたぁなかったがよ。鷲の頭に獅子の体の――こっちじゃ、幻獣、つーのか。アレに乗った、ヒゲのニンゲンを、ちいっとばかりつついてきただけよ」

あぐっ。

さんざん玩具にされたワルドが、とらのセリフを聞いたら泣きそうである。

「そうだったの。その人間の、目的とか、何か言ってなかった？良かったら教えて欲しいの」

だって私たちとナナキの敵だったら困るもの。

優しげな笑みはそのままに、美女のルビーアイは底光りしていた。獲物を狩る獣さながらの、ワイルドなかがやきである。うるわしいお顔が、さらに野性味を帯びてきらきらしている。

プレシアの反応を、楽しそうにクツクツと笑い、目の周りにくまどりのある妖獣は、「アイツのツレはおもしれえな」と呟いた。

「ま、覚えてる限りじゃ……『るいず』『手に入れる』『ぷれしあ』『僕が』『ヒーロー』『出番が』……こんなとこか？」

ぷらた、ってのが、さんざんしゃべる途中でブチのめしてたからな。

ぺろり、と肉料理の皿を平らげた大妖は、綺麗に皿まで舐めてから、ちょっぴり残念そうに白い皿を見つめた。物足りないらしい。

「そう……」

みぎいっ！

やおら、とらのセリフを聞くや、即座に起動してプレシアの手に握られたデバイス「ラベンダー」が、珍しく焦った声を出した。

『ま、マスターっ、落ち着いてくださイッ、ちょ、いたたたた』

一部音声が、せっぱつまったあまり、不自然な感じだが、すぐにプレシアは力を抜いた。

「ごめんなさいね、ラベンダー。ちょっと頭に血が上ってしまって」

『ええと……とりあえず、フレーム修理したいんですが。きょう変えたばっかりなのに、ヒビ、入ってます。しかもコアの近くまで』

魔力ぷりーず。

人間であれば、額に汗が浮かぶところだろう。「ラベンダー」は、こっそりプレシアの握力データ（緊急時）を修正しつつ、「母親最強」とＡＩに叩き込んだ。

とりあえず、娘と家族がらみのプレシアは、魔力まで上限値が上がるらしい。新しいデータを、さっそく記録する「ラベンダー」。

「あら、いけない。意外とヤワね。強度計算を間違えたかしら？

どうせだから、いっそのことアーチャーに頼んで、フレームを鍛造してもらうべき？」

これまでアーチャーが鍛造した、デバイス用のフレームは、七季、リドル、そしてアーチャーじしんのためのものだが、いずれも貴重な鉱物に魔力を流し込まれるため、アームドデバイスもびっくりの強度を誇っている。

『ええと……丈夫なのは良いことですけど、マスター。私、インテリジェントデバイスですよ？　アームドじゃありませんからね？』

ふだんはプレシアをからかってばかりの「ラベンダー」は「人間だったら冷や汗ダラダラものですよね、これ」などと思考ルーチンを回しつつ、珍しく主の魔改造に怯えるはめになったのだった。

#９６　始まらない物語ー黄昏色の不安ー（後書き）

あとがき

＞話題が殺伐としてきたんで、ここらでほのぼのを書きたかっただけです（待て）。

　ようやくテスタロッサファミリー再登場。久しぶりに「ラベンダー」もしゃべりました。

　デルフっぽいあつかいですまん、「ラベンダー」。しかし本家デルフリンガーはどうしよう。どっかで出すべき？

　サブタイトルの「黄昏色」は「ラベンダー」に引っかけてみた。

#97　始まらない物語ー水と炎ー

深く蒼い空は、見上げても果てどなく。
梢のささやきは鈴の音に似て、ただ打ち寄せる。
折り重なる深緑の枝と青い下草、そして雲のない蒼穹に抱かれるようにして、澄み切った水を湛える泉がある。
その聖域のような場所に、気がつけばメンヌヴィルは立っていた。
――どこだ、ここは。
男は、コルベールがいるという魔法学院を襲撃し、その挙句に、飛んできた剣によって四肢を縫い留められたはずだ。
静か過ぎる足音に、熱のない背中。まるで冷ややかな鋼のような。
それでいて、戦場の気配を、誰よりも濃厚にまとう男。
意識を失う前に残る、わずかな記憶を振り返れば、戦鬼のごとき自分ですらも及ばぬような、とびきりの戦士の気配だったことだけが印象深い。
――ああ、あの男を焼いてみたかった。
おそらくは、かつてメンヌヴィルを焼いたコルベールすらも、捻り潰すことができるであろう男。名も知らぬ彼に思いを馳せながら、しかし、メンヌヴィルは背筋を凍らせるような恐怖に、現在進行形で相対していた。
「お前は……『何』だ？」
がちがちと、歯の根が合わなくなるような、肉体の萎縮。
否、それは真実、彼の肉体なのだろうか？
四肢の間接や腱を、あの剣によって射抜かれたのに？
しかし、その違和感にも気づくことができないほどに、いまのメンヌヴィルは「畏れ」を抱いていた。
――目の前のコレは、いったい「何」だ。

自問自答を繰り返す男の、見つめる――見えない目で、映るはずがないのに「見えている」矛盾を抱えて――先には、恐ろしい存在感があった。

その体躯は小さかった。

巨漢と言ってもいいメンヌヴィルに比べれば、まさに大人と子供。百五十センチを少し過ぎただけの、小柄な少女は、泉に足先をつけて座っている。

まとう衣服は、トリステインでは見慣れぬデザインの黒衣。それが巫女服であるなどとは、メンヌヴィルが知るよしもない。

あどけなく白い面（おもて）は、つややかな黒髪にふちどられ、特徴的な大きな目は、やはり髪と同じ、夜色。

ただ、星空を孕んだかのように、きらきらとかがやく瞳は、思慮深い光を湛えて、じっと男の姿を映している。静かだけれど、力のあるまなざしに、メンヌヴィルはその場から動けなくなっていた。

ふと、それが唇を開く。

「初めまして。私はナナキ＝ナナチ。あなたを捕えた、アーチャーの主です。よろしければ、お名前をうかがいたいのですが」

凛、と鳴り響く声は、金鈴に似ている。

穏やかなのに、その澄んだソプラノは、抗いがたい力をもって男を支配した。

メンヌヴィルは、求められるままに、おのが名を紡ぐ。

「メンヌヴィル……『白炎』の、メンヌヴィルだ……」

「メンヌ、ヴィル」

ぽつ、と少女の呟きが落ちた。

とたんに泉の表面に波紋がふわりと広がる。それはすぐに収まって、しかし空気の色は、わずかながら確かに変わった。

「そう。メンヌヴィルという、お名前なんですね」

すうっ。

黒い瞳が、その名を飲み込む。

男は、いっそうの圧迫感を感じた。まるで、体ごとガチガチに凍らされたような不自由さ。

かつて、たまたま出くわした千年クラスのドラゴンだとて、これほどのプレッシャーを持っていたかどうか。

相手の吐息ひとつに怯え、まなざしにすら呪縛される。自分の体が、呼吸すらもままならぬかのような、生殺与奪のいっさいを、目の前の小さな少女に握られているという直感。

彼の本能が叫んでいた。

ここでは、自分の炎など、役には立たないと。火の粉ひとつ、起こせはしないと。

ああそうだろう。ここは堅固な檻――否、メンヌヴィルにとっての、深海のようなものなのだと。

「おわかりですか？」

不思議な問いかけだった。

しかしメンヌヴィルは頷いた。それしか許されていない。わからずにはいられない。

彼女こそが――七季こそが、この世界の王であると。

「それで」

メンヌヴィルは、干上がった喉で、しゃがれ声を搾り出した。

「俺は、何をすれば良い？」

ふむ、と七季は、自分の中に引っ張り込んだ、メンヌヴィルの魂を観察していた。

彼女本来の霊圧を解放して相対したのは、悪くない方法だったらしい。肉体という鎧を脱いだ魂は、あからさまな霊格の差を、それはそれは敏感に感じ取らせた。

たとえるならそれは、マッパの人に、まっかに焼けた焼き鏝を近づけるようなものだと説明すれば、わかりやすいだろうか。

対等どころか、すっかりかしこまっている男に、七季はぺんぺん、と自分の隣の芝をかるく叩いて彼を呼び寄せた。

「お話をしましょう。ここに座ってください」

無言で頷く、白い髪の男に、七季はどこからともなく引っ張り出したティーカップを差し出した。もちろん中身は温かい紅茶である。

ここは彼女の内包する世界。ゆえに、すべては彼女の意のまま。いわば、魂を引っ張り込まれたメンヌヴィルは、七季の腹に飲み込まれたようなものだ。

霊格が上である「神使（しんし）」の少女を、男が傷つけられる手段は皆無である。

パイロマニアの火魔法使（メイジ）いは、言われるがままに腰を下ろすが、カップを受け取る彼の面持ちは、あからさまに引きつっていた。

「ま、紅茶でも飲みながら聞いてください。

トリステイン魔法学院を襲撃した一味は、全員捕えられました。いまは、学院長の帰還を待って、改めて裁可する途中、というところです」

七季の言葉に、ないしん首をかしげながらも、メンヌヴィルは手渡された紅茶らしきものをすすった。彼に断る権利はおそらくない、と判断してのことだ。

――学院に、あの数を制圧できるだけの戦力があったのか……？

しかし、現にメンヌヴィルを倒すほどの使い手が現れたのだ。渡された情報は正しくなかったということだろう。

「まだ、襲撃者への事情聴取は行われていません。理由は幾つかありますが……そのひとつは、あなたに薬物と水の魔法がかけられていたからです」

「ッ！？」

むせるメンヌヴィルに、七季はけげんそうな目を向けつつも、説明を続けた。

「自覚、なかったんですか……。
自白なんかに使われる、暗示用の薬物が数種類。それと、洗脳に近い、強力な水の魔法が使われています。どっちも、ふつうであれば解毒や解除が困難なものです」
「ッの野郎！」
思わず憤りを洩らした、いかつい男に、七季の小さな手がやんわりと置かれた。
「まだ続きがあるんです。ゆえに、あなたがたの襲撃には、裏があると。そう、判断されました。薬が仕込まれたくらいですし……こだけの話、その『野郎』にも、心当たりがあります」
それでですね。
七季はメンヌヴィルをなだめるように、ぽんぽんと彼のごつい肩をたたいた。
「……何、だ？」
まるで生徒か親に叱られる子供のような態度で、男は黒衣の少女を振り返る。
「ありていに言えば、今後の身の振り方に対するご相談なんですよ。襲撃の内幕を、あらいざらい、吐いて欲しいんです。その代わりに、黒幕、もしくは主犯から狙われるであろう、あなたの命を助けます。
かけられた洗脳を解き、薬物も解毒し、ある程度の身の安全も確保します」
どうですか？
「いま俺は、こうして話してるんだが……？」
持ちかけられた話は、メンヌヴィルにとっては、破格の条件だ。美味すぎる、とも男が思ったが、依然として目の前の少女に逆らう気にはなれない。だからただ、疑問を投げかけた。
「ああ。だって生身じゃありませんから。薬に侵されて、魔法かけられてる肉体の影響を、いっさい受けない魂で、いまお話してるんですよ」

ぺんぺん、と男の鍛え抜かれた胸を手のひらで叩く七季に、メンヌヴィルはわけがわからん、という面持ちで首を捻る。

「んーと。そうですね。ようするに、肉体は、心の『入れ物』なわけです。

たとえば、花瓶に絵の具で落書きしたとしても、中の水は汚れないでしょう？」

それと同じことです。

魔法で操ることができるのは、肉体までだ。魂ではない。

だからこそ七季は、直接メンヌヴィルの魂を引っ張り込んで、話をつけることにしたのだから。

「まあ、肉体と精神、魂についての考察は、こんなときにすることでもありませんし、割愛します。

それよりもですね、早いところ話をまとめてしまいたいんです。あなたが、襲撃についての全容を明かしてくれるなら、学院長くらい丸め込んでみせます。幸いに、オールド・オスマンには、そこそこ貸しがありますから」

メンヌヴィルは両手を挙げた。降参のポーズだ。

「オーケー。あんたの言う通りにする。正直、勝てる気がこれっぽっちもしねえからな」

――年代モノのドラゴン以上に恐い人間なんざ、相手にするだけ命のムダだ。

戦いを、命のやりとりを繰り返してきた傭兵は、命の使いどころをわきまえている。メンヌヴィルは、命の焼けるニオイは好きだったが、燃やせもしない相手に無駄死にをするような酔狂ではない。

「それに黒髪の留学生――あんたが、こんなにおっそろしい相手だなんて、命に関わる情報を流さなかったやつに、立てる義理もなかろうよ」

神々しい、寒気のするような水の気配をまとって微笑む少女に、盲目の男は膝をついて頭（こうべ）を垂れた。

騎士でもない男が、首を差し出すそのポーズは、心からの服従を

示す証に他ならなかった。

#97　始まらない物語－水と炎－（後書き）

あとがき

＞ちょっとあっさりしすぎかもしれませんが、メンヌヴィル攻略。

魂引っこ抜いて、霊体でＯＨＡＮＡＳＨＩに持ち込みました。ただの人間に、オリ主相手だとこうなります。

ふつうに攻略すると、二週間くらいの監禁話になっちゃうんで。いい年こいたオッサン傭兵の監禁日記って誰得？ってことで、さっくりクリアしました。

え？　誰か「メンヌヴィル監禁だいありー☆」とか見たい方いるんですか？

#９８　始まらない物語ー紫陽花の庭ー

そのころ王宮では。

アンリエッタ王女の、トリステイン魔法学院訪問に関する打ち合わせ――それは、訪れる際のルートや、スケジュールなど、多岐にわたる内容の――に訪れていた、オールド・オスマンは、鷹便を受け取って仰天していた。

『学院ニ襲撃者アリ。タダチニ帰還サレタシ』

短いその一文で、ようやく長い話し合いを済ませたばかりの老魔法使い（メイジ）は、すぐさま、手近にいた魔法衛士隊に頼んで、行きと同じくグリフォンに飛び乗った。

このとき、彼が王宮へ報告せずにいたことが、運命を分けたのだとは――神のみぞ知ることであった。

「……行ったか」

グリフォンを見送る黒髪のメイドは、朱鷺色のルージュを乗せた唇で笑みを刻んでいた。

白くふっくらした面輪は、けれども下品でないレベルでくっきりとアイラインが入り、その目尻と目頭には、オレンジブラウンのアイシャドーが品良く陰影を作っている。

加えて、きっちりと結い上げてまとめた黒髪と、少し酷薄そうな印象を与える、フレームレスのメガネが、物静かな雰囲気とあいまって、彼女を本来よりも年かさに見せていた。

しかし、「オルタンシア」と名乗る、このメイドの声をアーチャーが聞いたなら、「何故こんなところに？」と目を丸くしたに違い

ない。
つまるところ――彼女は、七季の偏在が変装した姿であった。
「オルタンシア。仕事には慣れたかね？」
そこに、中年の貴族が声をかけてきた。
ジュール＝ド＝モット。
「波濤」の二つ名を持つ、水のトライアングルで、「オルタンシア」の保証人だ。
「はい。モット伯さま。おかげさまで、皆さん、とても良くしてくださいます」
控えめな笑みを浮かべて、頭を下げる「オルタンシア」。三つ編みにして、くるりと丸く結い上げた黒髪のおかげか、まっしろなうなじが襟口からのぞく。同時に、重たげなバストが鍾乳石よろしく、たゆんと垂れた。
小鼻を広げて、その細い首とたわわな乳房を凝視するモット。
「そ、そうかね。うむ、何よりだ」
そんなモット伯のツテで王宮のメイドにもぐりこんだ七季の偏在――彼女の目的は、一言で述べるなら情報収集だ。
政情にきな臭いものがあれば、いつでも引き上げるか、立ち回ることができるようにとの意図で、仕込まれたものだが――思いのほか「終わっている」トリステインの内情に、少女の七季ですら、頭を抱えたくなっていたところである。
「では、モット伯さま。お茶を差し上げますので、こちらへ」
メイドながら、貴族の後見を受けている「オルタンシア」には、個室の控え室が与えられている。すれ違う貴族や、他のメイドからの視線は「ああ、良くあることだな」という色がうかがえたが、それだけだ。珍しいことではない。
ぱたりと閉まったドアの内側で、さっそく「オルタンシア」は、しまい込んでいたものを取り出した。
「今週の分になります。どうぞ、お納めくださいまし」
そもそも、ツテに使ったモット伯からして、百合小説を、ハルケ

ギニアの言語に翻訳したコピー本で、容易く懐柔できたのだ。

「おお！」

手渡されたものを、モットは頬ずりせんばかりに待ちわびていたらしく、歓喜の声を上げた。

「水のメイジとして造詣が深く、蔵書家としても一流のモット伯さまに、それほど楽しみにしていただけるなんて、光栄ですわ」

目を伏せ、はにかんだ声を紡ぐ黒髪のメイドに、モットは「ううう、もったいない」とないしん手をわきわきさせていた。

小柄で巨乳の「オルタンシア」。

モットにとっては十分に守備範囲なのだが、残念なことに、彼女には既に言い交わした相手がいるという。

どうも言葉の端々からモットが察するに、魔法衛士隊の一人であるらしく「少しでも恋人の近くにいたいから……」と、見ためお堅いツンデレな彼女が頬を染めたときには、モットも一瞬「闇討ちしてやろうか」と思ったほどである。

さすがに、魔法衛士隊にケンカを売るような愚考は、一分ほどで消去したが。

その代わりに、「オルタンシア」は、モットに代価を差し出した。

美少女同士の、禁断の恋物語である。

表現はソフトだが、男性の読み手からすれば、身もだえしたくなるような、妖しく耽美な世界が、そこには広がっていた。

トリステインに――そもそもハルケギニアに、この手の本は数少ない。

何と言っても、まず識字率が低いのだ。

そして文章をまともに書ける人間は、ほとんどが貴族である（商人などの例外もいるが）。自分の名誉を慮る地位の人間が、いかがわしいものを広めるようなことは、まずない。あったとしても別名

だ。

つまり、誰が書いたかわからない。それらしい人間がいても、面と向かって「あの本の続きを……」などとは言いにくいし「売ってくれ」とも言えない。

自分の手持ちでない本となれば、それを見せた人間の存在があり、たいていの場合、秘されたその本を「見せた」人間の信用問題に発展してしまうからだ。

まあ、好事家の間では、少ないながらに、細々と流通してはいるのだが。

それでも、圧倒的に少ないことは確かである。

しかし、魔法使(メイジ)いくずれの「オルタンシア」には、女性ながらに才能があったらしい。「ご相談があるのです」とモット家を訪れた彼女が、

「これは売り物になりませんでしょうか……？」

と差し出したものを読んだモットは、雷に打たれたような衝撃を味わったのだ。

しかも「オルタンシア」じしんも読書家だった。蔵書の多いモットの書斎の本を、いくつか読ませてみると（そのテの本も含めて）、

「このようなものはどうでしょう？」

と、やたらめったらモットの嗜好にピンポイントなネタをふってくる。

いわば「オルタンシア」は、トリステインのオタクな彼が、初めて出会った同好の士であった。

しかも、既に「言い交わした相手がいる」という彼女は、アダルトな話題もナチュラルにこなす大物である。

ぶしつけにも、興味半分で恋人との営みに突っ込んだモットに対して、メガネをかけた巨乳少女は「それは乙女の秘密ですv」といたずらっぽく笑って受け流す大人だった。

そのあと、意外と天然なのか、うっかりポロっと

「しいて言うならおっぱい好きでしょうか？　乳枕って気持ち良い

みたいですよ？」
と洩らして、モットに新たな世界を開眼させた。もちろん彼女が館を辞したあとで、モットは囲っている愛妾でトライした。
結果は――次に「オルタンシア」が屋敷を訪れたとき、モットは彼女にモット家の書斎を自由に出入りする権利を与えた、とだけ述べておこう。
既にモットは、性差を越えて友情まで感じるほどになっていた。
おまけに「オルタンシア」も、彼と系統を同じくする水の魔法使（メイジ）い。
趣味といい、魔法の知識といい、話が尽きることはない。
気がつけば、ゆうに一時間が過ぎていた。
ふつうのメイドであれば、職務怠慢もいいところであるが、「オルタンシア」は魔法使（メイジ）いくずれとはいえ、貴族の後ろ盾を持っているメイドである。貴族のもてなしは、仕事の一環。
加えて。
「忘れていた。これはささやかだが、手土産だ。メイドの皆と一緒に食べると良い」
モットは焼き菓子の詰め込まれた箱を、黒髪の少女へと手渡した。
女癖は悪いものの、女性好きなだけあって、モットは貴族にしては、そこそこ気の回る男である。「オルタンシア」が甘いもの好きなこともあり、毎回、こうして欠かさず手土産を持ってくるのが恒例となっていた。
「ありがとうございます、モット伯さま」
こういう差し入れを分け与えることで、「オルタンシア」は他のメイドから嫉妬よりも感謝を買うことに成功していた。ふだん仕事を真面目にこなすことはいうまでもないが。
もちろん、同僚とお茶を飲むときのおしゃべりも、重要な情報源だ。
「むう……時が過ぎるのは早いな」
「またのお越し、心からお待ちしております」

部屋を出るモットを笑顔で見送り、取って返した「オルタンシア」は、モットから受け取った「手土産」の中に、水の魔法に関する書籍を見つけて苦笑した。

出版されたばかりの新作だ。これについての感想が欲しいということだろう。

「こっちは『本体』に送っておくかな」

あとで東風（こち）をよこしてもらおう。

呟いた七季の偏在は、メイド服の裾を翻して、本来の仕事に戻るのだった。

「しかし、我ながら対魔力が幸いするとはね」

本来ならば、風の魔法使い（メイジ）にバレそうな「偏在」魔法。

けれど、七季の持つ対魔力のレジストで、ディテクトマジックや、その他の魔法的な干渉も弾かれ打ち消されてしまうため、「オルタンシア」の正体が、偏在とバレる心配は、まったくないのであった。

＃９８　始まらない物語ー紫陽花の庭ー（後書き）

あとがき

＞「オルタンシア」は「紫陽花」のフランス語。七変化、ってことで。某シスターとかぶったのは偶然。

あれ、おかしいな。よその動きをフォローするためと、オリ主の情報収集を書くだけのつもりだったのに。

気がついたらモット伯が出張ってた。

たぶん某おっぱい帝国の影響だと思います。まじめな話題が続いたんで、バカ話が書きたかったんだ！

#99　始まらない物語ー あかいあくまー

夕食は、アーチャーやマルトーらが腕をふるった料理で、大いに盛り上がった。

初めて食べる料理に、生徒は興味津々だったし、文句をつけようとしたルイズは、周りから一斉に白い目を向けられて、思わず小さくなっていた。

しかしその裏では、ようやく学院に戻ってきたオールドオスマンと、研究のために資材を乗せた馬車で、のんびり帰ってきたコルベールが、他の教師から総出で責められていたことを、生徒らは知る由もなかった。

「まさか……！」

白い髪にヤケド痕が残っている強面（こわもて）という、盲目の火魔法使い（メイジ）の存在を聞かされたとき、メガネをかけたコルベールの顔色は、蒼白を通り越して、紙のように白くなっていた。

「まさか、ではありません。彼は、コルベール先生、あなたの名を連呼していました」

シュヴルーズが、同意を求めるように、その場に同席していたアーチャーを振り返れば、褐色の肌の偉丈夫は、重々しく頷いて言を継いだ。

窓の外は闇。

淡いオレンジ色をした魔法の光に照らされる男は、赤い外套が映えて、炎をまとう戦神のようにも見える。

「ミス・ヴァリエールを人質に取った男は、鉄柱を細工した金棒を

杖として使い、友人を助けようとした、ミス・タバサ、ミス・ツェルプストーの二人に、まずヤケドを負わせた。

私のマスターが治療して、いまでは跡形もないが、重症と言っていいレベルだった。さらには、隙をついて逃げ出そうとした、ミス・ヴァリエールも、男の炎で焼かれ……二人よりも重度のヤケドを負う結果に」

こちらも、マスターが治療したがね。

ひらり、と差し出されたのは、七季のデバイス「黎明」がデータとして保存しておいた、治療前の画像だ。ルイズだけでなく、タバサ、キュルケのものまである。

「ッ！」

その惨さに、コルベールをはじめ、状態を知っていた周りの教師も、あらためて息を呑んだ。

かまわず、アーチャーは低い声で説明を続ける。

「いまは、学院から離れた小屋に、眠りの魔法と薬を併用して、眠らせている。しかし、その男には、元より洗脳らしき魔法と、暗示用の薬物が使われていた。どういうことかわかるかね？」

学院長であるオールド・オスマンも、白い眉の下から、懊悩のにじむ眼光をのぞかせてうめいた。

「ただの怨恨ではない。何者かが……目的をもって、学院を襲撃したと……そういうことかね」

「我々はトリステインのものではない。故に、その政治にも関心がない。その立場から見ても、まあ妥当なところだと思うがね」

鋭い灰藤色の目を細めて、冷めた声音で切り返すアーチャー。ここに七季はいない。白い髪の従者は、おなかをすかせた少女を食事に行かせ、自分ひとりでこの場に残っていた。

――いざとなれば念話があるしな。

それに彼は、昼間の戦いで指揮を取っていた主を、早く休ませてやりたかった。

政治の見極めと、メンヌヴィルの懐柔と併せて、既に七季が行っ

ている。あとは、学院長に事情を説明し、どれだけのものを引き出せるか――それに尽きる。

「幸いにも、被害は少なく済んだ、といえるだろう。教師の方々が、尽力したおかげだ。しかし、これはれっきとした不祥事。貴族の子弟を預かる学び舎に、襲撃者の侵入を許し、あまつさえ生徒を傷つけることになった。

学院長であるオールド・オスマン、そして犯人を引き寄せる火種となったコルベール先生、この責任を、どう取られるのかね？」

コルベールは答える言葉を持たず、うなだれるしかない。

ヴァリエールの三女である、ルイズの負傷。

大国・ガリア王家の血に連なると思われる、青い髪の少女・タバサの負傷。

そして、ゲルマニアの貴族・ツェルプストーの娘・キュルケの負傷。

どれ一つとっても、トリステインにとっての火種になりうる一大事。

そのうえに、それらを引き起こしたのは、コルベールを狙った火魔法使い（メイジ）で――さらに裏があるという。

オールド・オスマンは、額に脂汗を浮かべてうなるばかりだった。

「主犯のメイジは、キンダイチ先生のご助力があれば、数日中に正気に戻せるだろう。事情を吐くかどうかは……尋問次第だろうが、私にも、いささかの心得がある」

アーチャーの言葉に、学院長は、はたと顔を上げた。

「……犯人から、情報を引き出せるというのかね？」

このまま、王宮に事件を報告すれば、オールド・オスマンの更迭は間違いない。

しかも事件の規模が大きい。

最悪の場合、オールド・オスマンの首が、飛ぶようなこともあるだろう。物理的にだ。

何せ、ルイズの父親は、娘を溺愛している。

ヴェリエールの末っ子である彼女は、行き遅れのエレオノールや、病弱なカトレアと比べて、両親にかけられた期待が特に重い。

魔法が使えない「ゼロ」であってもだ。

――使い魔を得たと知らせたときには、ずいぶん喜んでいたはずじゃからのう……。

それだけに、ルイズが傷ついたと知ったら、怒りようは凄まじいはずだ。

――下手をすれば、烈風カリンが殴り込んでくることも……。

そこまで考えて、白ヒゲの老人は、ぶるっと震えた。

「できないことはないと思うが。

しかし、この学院は王立、もしくは国立だろう？　それを襲撃した犯人なのだから、王宮に引き渡すのがスジではないかね？」

七季の意図を――メンヌヴィルとの取引を――知っている男は、精悍な顔に、わざとけげんな色を浮かべた。

「まあ、真実が知りたいというのであれば、マスターの方が適当だろうな。彼女であれば、一月もあれば相手を飼い馴らすことができる。

ただ、時間がかかることは否めない。王宮は、そこまで待ったりはしないだろう？

人格を改造しても良いのであれば、ただ従順なだけの人形にも、証言くらいはできると思うが」

アーチャーは顎を撫で、「マスターの安全が確保できるなら、どちらでもかまわんがね」とでも言いたげに、イスの背もたれに体を預けて嘆息した。

指を組んだ両手を机に乗せるさまは、本当にけだるげで、投げやりに見える。端正な横顔が、どこか退廃的な影を帯びていた。事情を知らない女性であれば、十人中、七、八人は釣れそうな男ぶりだ。

学院の関係者である、ミス・ロングビルからも、ほう、というためいきが洩れた。

「それにしても、これでは後始末が面倒なことになるだろうな。非メイジの傭兵だけで四十五人。傭兵メイジが六人と、主犯のメイジが一人……合計で五十二人か。護送するだけでも、けっこうな人数だ。

そのうえ、学園の警備兵は全滅。新たな警備を手配するにしても、この事件が明らかになれば、人が集まるかどうか……。

そういえば、近々、この国の王女が学院を訪問すると、生徒たちが話していたが。これでは、予定は立ち消えになる可能性が高いだろうな」

問題を次々に列挙され、さすがの学院長も顔を引きつらせた。

「あ、アンリエッタさまのことまで知っておるのかね？」

「ミス・ヴァリエールが、ワルド子爵から聞いたのだと、自慢げに吹聴していた気がするが。ガセかね？」

ちらりと鋼色の瞳が視線を返す。

さっくり鉄面皮で答えるアーチャーの言葉に、オールド・オスマンは今度こそ頭を抱えた。

「何でも、生徒が召喚した、使い魔を披露するイベントがあるのだとか……しかし、これでは、イベントどころではあるまい」

警備すらろくにいない学院に、まさか王族を接待することなど、できようはずもないのだから。

もはや、まっしろに燃え尽きようとしている白髪の老人に、アーチャーは、主さながらの「あくまのささやき」をポツリと落とした。

「解決策が、ないではないがな」

それは、水面（みなも）に落とした一滴の毒薬のように、さっとオールド・オスマンをはじめ、学院関係者の間に広がって溶けた。

#９９　始まらない物語ー あかいあくまー （後書き）

あとがき

＞弓兵のターン！

オリ主だけでなく、従者にも見せ場が欲しかったので、交渉役をやってもらいました。

まあ、オリ主一行の方針にはメドがついたので、世話焼きな弓兵は「ひと狩り行ってくる」と出張ったらしいです。

#１００　始まらない物語ー やぎさんゆうびんー

アーチャーがトリステイン魔法学院の一室――正確には、会議室にいるころ。

アルヴィーズの食堂では、食後のお茶とデザートに突入した七季が、生徒たちから取り囲まれていた。

「ミス・ナナチっ、あのこれ、治療のお礼です！」

「これは僕から。念のため印章を押しておきました」

「お気遣いありがとうございます」

治療の「お礼」として、証言を記した手紙、また、治療費の入った封筒を渡してくる、少年少女たち。救出されてから食事が始まるまでに、一時間はあったから、その間に用意したのだろう。

中には、証言か治療費どちらかのうえに、ちょっとしたお菓子や小物を添える、気のきいた生徒もいて、異世界トリップご一行は対応に大忙しだ。

「お姉ちゃん、大人気だねー」

アリシアはツインテールに結った金髪を、ウサミミさながら揺らしつつ、黒髪の少女が受け取ったものを、倉庫代わりのデバイス「マーチ」に入れていく。

「マーチ」の待機状態は、淡いピンク色の珊瑚をあしらったペンダントで、半円状に丸く磨かれたカボッションカットが、愛らしいアリシアに良く似合うアクセサリーだ。

もちろん作り手は、母親であるプレシアと、その使い魔・リニスだが、待機モードのデザイン案を出したのは七季である。そんなデバイスは、アリシアにとって宝物のひとつだったりする。

＜イエス、マスター＞

いっぽうの「マーチ」は、幼いマスターに念話で応じると、受け

入れるものを分類しつつ、作業を続ける。
アリシアに魔力は少ないが、魔法プログラムを組むことができる頭脳は、まさにプレシア譲り。彼女はマルチタスクを使って、色々な魔法プログラムを姉――そう感じている七季のために組んでいるのだった。

――これだけあれば、送るのにも大丈夫だろーな。
受け取ったものを、寮の部屋であらためた七季は、机に向かうと、今度はさらさらとペンを走らせる。
医療用デバイス「ガニュメデス」にアドバイスを受けながらの、カルテ作成だ。
これに、ルイズの負ったヤケドの、治療前・治療後の画像。貴族の子弟が証言を印した手紙は、ちょっとしたセンチ単位の厚みを作っているし、さらには別口で、キンダイチからの診断書と証言の手紙をそろえれば完成である。
ちなみに食事を終えたリドルとテスタロッサファミリーは、風呂を設置してある小屋でバスタイム中。
政治的な問題に関心の薄い才人はというと、学院との交渉に向かったアーチャーの代わりに厨房へ向かい、食器洗いなどを手伝っている。
ようするに、東風（こち）と、プラタ（分体）だけが、部屋には残っている状態だ。さらに蛇足だが、プラタ（分体）の幾つかは、プレシアたちやアーチャーにそれぞれ護衛代わりにくっついているが。
――そーいや内容証明なんかもあった方が良いよなぁ。
権威は使ってこそのもの。
――うん、学院長に内容証明をしてもらおう。
小学生のころから受験戦争をくぐりぬけている少女は、それなりに事務手続きにも詳しく、万が一にもトボけられないようにと、念

話をアーチャーに飛ばしたのだった。

証拠隠滅のために命を狙われるはずの傭兵たちを雇って、学院を警備させれば良い、という逆転の発想に、オールド・オスマンをはじめ、教師陣がうなりながら悩んでいるころ。

＜アーチャー、いま平気？＞

主人である少女から入った念話に、アーチャーはそれと悟られないよう、表情を変えずに応答した。

＜ああ、問題ない。どうしたのかね？＞

＜ん。生徒からの証言はだいぶ集まったからさ。あとはキンダイチ先生の診断書もらって、送るだけなんだけど。

内容証明を、学院長にしてもらえないかなと思ってさ。ほら、万が一にも、ルイズの家で受け取ってませんとか、知りませんとか言われたら業腹だし＞

＜そうか。了解した。それも条件に加えておこう＞

＜さんきゅ。よろしくなー＞

何故だか、脳裏にひらひらと手を振る七季の映像まで浮かんでしまい、ないしんアーチャーは苦笑しながら請けあった。

＜あ、それとな＞

そのまま途切れると思った念話に、付け足される。

＜アーチャーのごはん、きょうも美味しかった！　ごちそうさま！＞

一緒に食べられなくて残念だったけど、早く戻ってきてな、と感謝いっぱいに伝えられて、思わず顔を手のひらで隠す、白い髪の偉丈夫。

そうでもしなければ、笑う口元を悟られてしまったかもしれない。

なにしろ彼の脳内マスターは、小花を散らして幸せそうに、にっぱり笑っていたのだから。

――修行が足りない、な。

やれやれ。

「フェイスチェンジで傭兵の顔を変えるくらい簡単ではないのかね？それ用の道具もあると聞いたが。まあ、事件をもみ消す以上、それらの費用は学院長持ちだろうがね。

傭兵たちも、自分の命と引き換えであれば、まじめに働くだろうよ。そもそも傭兵は、金と命の駆け引きに敏感な人種だ。契約はきっちりこなしてこそ、自分の価値があると、プロならわかっている。それなりの報酬を払い、命を助けるためにかくまうという条件であれば、否やはないはずだ。

それに、もしも犯人――事件の黒幕だな――が傭兵たちのことを詮索したとしても、逆に『何故そんなことを言うのか』と切り返せば済む。痛い腹を探られて困るのは、黒幕の方だからな」

うっかりつられて笑みを誘われた錬鉄の英霊は、「困ったマスターだ」とひとりごちながら、七季の要望通り、とっととこの交渉をまとめるため、ふたたび舌先三寸をひらめかせるのだった。

#１００　始まらない物語ー やぎさんゆうびん ー（後書き）

あとがき

＞オリ主分が足りない、と感想いただいたので、念話越しですが、主従の会話をば。

タイトルの「やぎさんゆうびん」は「しろやぎさんから～」の歌いだしが有名な童謡のタイトルです。

ちょっと消化試合っぽいですかね。さくっとすっ飛ばしても良かったんですけど。

まあ、このあとは学院長から内容証明のサインもらって、キンダイチ先生からもカルテ書いてもらって、東風（こち）で請求書を速達、という流れになります。

そこまでは書かないので、前段階の説明くらいは、と。

次回は１００話突破記念の番外編です。かるくカオスなので、ご了承ください。

具体的に言うとアーチャーや先輩の斬魄刀ネタ。

◆ゼロ魔編の登場人物ー追加ー

◆オルタンシア

オリ主の「偏在」。情報収集のため、トリステインの王宮にもぐりこんでいる。

メイクは、朱鷺色のルージュに、オレンジブラウンのアイシャドー。

童顔をごまかすために、フレームレスのメガネをかけている。物静かな雰囲気と落ち着きで、本来よりも年かさに見える。

長い黒髪は、きっちりと結い上げられている。Ｆａｔｅのセイバーみたいなヘアスタイル。

後見人というか、王宮にもぐりこむに当たってのツテは、ジュール＝ド＝モット。

「波濤」の二つ名を持つ、水のトライアングルで、「オルタンシア」の保証人。

彼女の差し出す、いわゆる百合本に篭絡されて、王宮メイドへの推薦を行ったが、同じ水メイジであり、読書家でもある「オルタンシア」と意気投合。

いまでは、ほぼ趣味友達と化している。

モット伯よけに、予防線として、王宮の近衛がに恋人がいる、という建前を敷いている。

※「オルタンシア」は、フランス語で「紫陽花」の意。

◆コウスケ＝キンダイチ＝ド＝ガティネ

トリステイン魔法学院の、水の魔法の教師。

その正体は、かつて昭和の名探偵として名を馳せた、金田一耕助探偵、そのひと。

オリ主の友人である、金田一一少年の祖父でもある。

かつてのトレードマークであった、もじゃもじゃ頭は、みごとな白髪になり、その聡明な頭脳をいまも豊かに覆っている。

この話の捏造設定では、戦時中、ハルケギニアに突如として召喚され、当時のガティネ家の当主に拾われる。

それからは、ガティネ家の当主の好意で、魔法について教授され、中でも医療に長けた水魔法に熱中。

ついには、その水魔法の適性と聡明さから、ガティネ家において深い尊敬を受けるようになり、ガティネ家の跡取り娘とわりない仲に。

ただし、妻の妊娠を知らないうちに、今度は「神隠し」によって、地球へ帰還。身につけた水の魔法をこっそりと使いつつ、世界大戦をくぐり抜けて、どうにか帰国する。

のちに日本で探偵として活躍。

だが、アメリカに渡航した先で、消息不明に。じつは、ふたたびハルケギニアへとトリップしていた。

ガティネ家では、いまだ妻が存命。その再会を喜ぶが、ほどなく夫人は死去。

正式に、ガティネの家は、跡取りに譲って隠居の身となる。

その後も、自力で帰還するすべが見つからないので、水の魔法の研究に没頭。

健康を心配したガティネの家族たちが、トリステイン魔法学院の教師へと推薦することで、いまに至る。

オリ主たちには「キンダイチ先生」と呼ばれている。

#１０１　剣を執るもの―欲食星（ほしくいぼし）―（前書き）

まえがき

＞今回は、番外編的な話です。

リリなの、ゼロ魔キャラは登場しません。

#１０１　剣を執るもの―欲食星（ほしくいぼし）―

いつもの緋袴（ひばかま）は黒い死覇装（しはくしょう）に。
風に栗色の髪が揺れ。
帯刀しているそれを、白い繊手が引き抜くと同時。
「さざめけ、欲食星（ほしくいぼし）」
そのかけ声と共に、斬魄刀（ざんぱくとう）が顕現する。

丸いボディにピンクのカラー。つぶらな瞳に赤い足。
「どう見てもカービィです。ありがとうございました」
思わずノリでツッコんだ一護の前で、真言の斬魄刀（ざんぱくとう）らしきそれは、まん丸ボディでぷかぷか浮かんだまま、二十センチほどの体に比べて、大きな口をぱかりと開き。
しゅごおおおおお。
「吸い込んだー！」
手当たり次第、そのへんにいた虚（ホロウ）を掃除機もびっくりな勢いで吸い込み。
ぼよんっ☆
「変形した！？」
飲み込んだ虚（ホロウ）の能力をコピーしたのか、何だか尖ったシルエットに変わり。
「ちょ、ビーム出した！」
しばばばばっ。
どう見てもビームにしか思えない虚閃（セロ）を吐くピンクの丸い物体に、ツッコミ続けるオレンジ頭の少年。

ぺっ。ぼごんっ。
「吐き出して同士討ちさせた！」
えええええええ！？
次から次に巨大な虚（ホロウ）を食い捨てていく、トンデモ斬魄刀（ざんぱくとう）の主だろう真言に声をかけようと、一護は踏み出して。

目が覚めた。
がばっ。
少年は、早朝にもかかわらず、そのまま家を飛び出していく。
がしょがしょがしょがしょ。
激しく嫌な疑問というか疑念に駆られて、着替えるヒマも惜しんでスウェット姿で自転車（チャリ）をこぎ。
キキイッ！
ほとんど乗り捨て同然で、その神社の駐輪場に自転車を放り出すや、問答無用でその家屋に飛び込んだ。
ばん！
「漣さん、斬魄刀（ざんぱくとう）持ってねえよな！？　カービィじゃねえよな！」
「ふぇ？」
寝ていたところを布団はがれて、突然がくがく揺さぶられた栗毛の美少女――漣真言は、寝起きの頭をこれでもかとシェイクされ。
「カービィじゃないよな？　カービィじゃないって言ってくれ！」
「カービィカービィうるっさいわ――！！」
めごしっ！
けっきょく、我慢できなくなって、一護をしばき倒すまで、それは続いたのだった。

で。

「朝から押しかけて、すんませんっした……」

「どしたん。いっちー」

日曜の朝。バイトのため神門(みかど)神社に出勤してきた七季は、オレンジ色の頭に、でっかいたんこぶ作った少年を、まじまじと見つめて首をかしげた。

ちょうど彼女が出勤してくる際に、ダッシュで神門家に駆け込んだ一護を見かけたため、だいたいの顛末は理解しているが、そこまで取り乱した理由がわからない。

とりあえず、見ためヤンキーっぽくても、基本、まじめで礼儀正しい少年のことを知っているからだ。

「いや、それがな……夢見が悪くてよ」

ばつが悪そうに口を開いた一護の話を聞いて、黒髪の少女は「はぁ」と嘆息しながら、彼の頭を撫でた。

「うん。それはびっくりだね。んで先輩、斬魄刀(ざんぱくとう)、持ってたりするんですか？」

「持ってるけど？」

ただでさえ朝が弱い真言は、まだ眠気が抜けないのか、不機嫌そうに琥珀色の目を半眼にしつつ、神門(みかど)青年の淹れたお茶をすすっていた。

「持ってるのかよ！？」

「初耳ですー」

ぎょっとする少年に対して、まだ私服姿の七季は、のんきに合いの手を挟む。

「カービィじゃねえよな！？」

「……違うけど。だからカービィうるさい」

「見てみたいですねぇ」

栗毛の美少女に詰め寄った一護がくっつきすぎだと思ったのか、死神代行の蜜柑色した脳天に、ごちんと神門(みかど)の拳が突き刺さり。

いっぽう、マイペースに自分の興味を口にする、「神使(しんし)」の少女

が、ほえほえのたまうと。
「んじゃ行く？　尸魂界（ソウルソサエティ）」
思いがけない返事がポロリとこぼれ。
『え』

「あそこなら、暴れても問題ないし」
「何だその物騒な理由！」
「問題はあると思いますけどねぇ」
そんなわけで、チートな巫女さんと、ＵＭＡな「神使（しんし）」、死神代行な少年は、近くて遠い、霊なる世界に出かけることになったのだった。

#１０１　剣を執るもの―欲食星（ほしくいぼし）―（後書き）

あとがき

＞まずは、１００話突破、ここまでお付き合いくださり、ありがとうございます。

お気に入り４００件越え、累計プレビュー８７万越え、これもひとえに読み手さまのおかげです。

記念として、これからしばらく尸魂界でのドタバタになります。

予定では２～４話くらい。

ゼロ魔編を楽しみにしてくださっている方には申し訳ありませんが、お付き合いいただければ幸いです。

斬魄刀（ざんぱくとう）を書きたかったんです！

#１０２　剣を執るもの―刃の名前―（前書き）

まえがき

＞今回は、番外編的な話です。リリなの、ゼロ魔キャラは登場しません。

#１０２　剣を執るもの―刃の名前―

「斬魄刀（ざんぱくとう）？」
「うん」
聞き慣れない単語に、男はなめし革のような肌の相貌を引き締めて、主たる少女を見つめた。
「ええと……死神が持ってる刀のことでさ。基本的には、現世を彷徨（さまよ）う、死者の魂を昇華させる際に使われるものなんだけど」
七季は、それを先輩――真言も持っているというので、見せてもらうために出かけるのだ、と説明した。
「死者……まあ、幽霊さんだわな。悪霊って言ってもいい。そういう連中の中には、虚（ホロウ）ってのがいて、タチが悪いやつだと、死神さんも霊体だからって、食っちゃおうとするのもいるんだ」
同じ霊体だし、食べれば自分の力になるしね。
この世界の霊界事情に、アーチャーは首を捻りつつも、とりあえず飲み込むことに努める。
「んで、死神さんたちも、はいそうですか、ってな具合に食べられるわけにはいかない。
だから死神の武器である斬魄刀（ざんぱくとう）には、虚（ホロウ）を倒すための、特殊能力なんかもついてたりする、ってことなんだけど……おーらい？」
「了解した。
しかし、死神までいるのか」
「霊界探偵とかもいるよ。まあ、そっちはまた、霊界の階層とか、お仕事的に別だけど」
しれっとナチュラルに返す七季の言葉に、アーチャーは痛みを覚えるような気がするこめかみを黙って揉んだ。
「明日は尸魂界（ソウルソサエティ）に、いっちーと、アーチャーたちも連れてくんだっ

て。初めてだから楽しみ！」
　へにゃんと笑って明日の準備とやらを済ませた七季は、「もしかしたら、アーチャーも斬魄刀（ざんぱくとう）を使えるかもしれないぞ？」と弾んだ声で付け足して、従者の頬にかるく触れる。
　まるっきり無邪気な「おやすみのキス」に、いい加減慣れるべきだろうかと、白い髪の従者は、そろそろ悟りの境地で、同じしぐさを返した。
　リドルなどは黒猫姿のまま、まったく悪びれずに、直接七季の唇を舐めているのだから、気にするだけムダなのだろうけれど、それでもアーチャーは、やっぱり無防備すぎる少女に頭を悩ませつつ、消灯したのだった。
「だからもぐりこむなと」
　がし。
「ちっ」
　どさまぎで七季のベッドにもぐりこもうとする黒猫（中身は魔法使い）を引っぺがす、一日の最後の日課を無事に果たして。

　それは、黒い鞘に収まった、何の変哲もない日本刀に見えた。
　手渡されたアーチャーが鞘から抜いても、現れるのは薄く光を反射する白刃。
　しかし。
　その目が――本質を解析するという魔眼が、その刃を映したとき、その現象は男へと襲いかかった。

「たいがー道場――！」
　がおおおん。

猛り狂う虎もかくやという宣言と共に、現れた袴姿の女性は、竹刀を手にしていた。
「やっほーシロウ」
そしてもう一人。紺ブルマーにTシャツという古式ゆかしい体操服を身にまとう、ちまい銀髪紅眼の美少女がひとり。
「な……！？」
――ふ、藤ねえと、イリヤ？
ずざっ。
磨耗したはずの記憶。その奥底に、修学旅行の不良の、ナイフだか彫刻等だかで刻まれたメッセージよろしく、がりがり彫り込まれていたアレな存在に、錬鉄の英霊は思わず後ずさった。
「ちっがーう！
私は妖刀・虎竹刀（とらしない）っ。敬意を込めて、ししょーと呼ぶがいい！」
虎のストラップをつけた竹刀を、びっと突きつける、ショートカットの女性に。
「私は幼刀・雪小悪魔（ゆきこあくま）だよー。弟子1号って呼んでね！」
小太刀サイズの白木の鞘を抱く、銀髪ロングのブルマー少女。
『わたしたち、シロウの斬魄刀（ざんぱくとう）だよ！』
にっこり笑ってのたまう最強姉コンビは、「キラッ☆」なポーズをとった。
「これからよろしくねー」
「二人で一つ。つまり、二刀一対だからね。やっぱりシロウには双剣だよね？」

「はっ！」
眠らないはずの英霊――しかし、七季の従者になってからは、その行動を人間に近づけているためか、休息もとるようになったアーチャーは、目を開くや、あわててあたりを見回した。

時刻は、いまだ二時半。
月の支配する刻限である。
青い月光が、カーテンの隙間からかすかに射し込む薄闇には、ベッドに横たわる少女の、安らかな寝息と、果物じみた体臭だけが、ほのかにこぼれて感覚をくすぐるだけ。
あまりといえば、あまりな夢に、あぐらをかいて座り込んだ男は、ぼそりと聞くもののない呟きを落とした。
「――竹刀と小太刀で二刀流って、さすがにバランス悪くないか？」

#１０２　剣を執るもの一刃の名前一（後書き）

あとがき

＞ネタです（きっぱり）。

友人からネタもらったときは、「それだ！」と思わず。

ししょーとロリブルマの二刀流。うん、エミヤシロウらしい。

ちなみにネタは許可済みです。さんくす友よ。

あ、まともな弓兵の斬魄刀（ざんぱくとう）もあるんで、ちゃんとそっちも書きます。ご心配なく。

＃１０３　剣を執るもの ―尸魂界へ行こう―（前書き）

まえがき

＞今回は、番外編的な話です。リリなの、ゼロ魔キャラは登場しません。

#１０３　剣を執るもの―尸魂界へ行こう―

尸魂界（ソウルソサエティ）は、いわゆる霊界である。

七季の生まれ育った世界では、霊的社会の発展が著しく、死後の魂をあつかう霊界は、いくつもの階層に分かれている。

尸魂界（ソウルソサエティ）は、その中のひとつなのだが、当然ながら、ふつうは霊体でしか踏み入ることができない。

「つーわけで、いっちーは死神化ね」

おなじみ、神門神社の敷地にある、神門家にて。

栗色の髪を結った美少女巫女さんは、オレンジ頭の少年に指示を飛ばす。

「おう」

かしっ。

コンの本体――義魂丸を口に含んだ一護は、その肉体から抜け出す。黒装束の和服といういでたちは、俗に死覇装（しはくしょう）と呼ばれるものだ。

「おお、いっちーかっこいー」

ぱちぱちと拍手する七季も、いつもの黒ずくめ――こちらは、巫女服という違いがあるが。

「褒めても何も出ねーぞ」

そっぽを向く少年は、耳のあたりが赤くなっている。が、一護の体に収まった改造魂魄であるところのコンは、それを生温い目で眺めるだけである。

「えーと。リドルとアーチャーは、元から霊体ですし……あとは、私と先輩ですね。どうするんですか？」

首をかしげる七季の、まっくろなポニーテールがひょこりと揺れる。

あどけない面輪に、けげんそうな色を乗せる少女に、真言はぴこ

ぴこ人差し指を振ってみせた。
「チッチッ。心配ご無用！
何のための神使（しんし）？　ダテに霊格は高くないっ！」
真言いわく、彼女たちは、このまま無加工で出入りできるという。
「ほへ～」
感心したように頷く七季と、「この生きる非常識め」という視線を向けるアーチャー&リドルに、たぷるんと胸を張ってみせる真言。
と、そこにおずおずとした声が割って入った。
「あの……真言殿？」
七季とは違う、ショートカットの黒髪を揺らす少女。その名は、朽木ルキア。
「私は……」
あいにく義魂丸を切らしているのですが。
そう呟いて目を伏せるルキアに、真言はにっこり笑って告げた。
「ん。心配ないない。ルッキーもちゃんと連れて行くよん」
すちゃっ。
取り出したるは、バット。何やらお札が貼られている。
ご存知の方もいるかもしれないが、これぞGS（ゴーストスイーパー）御用達（ごようたし）。
横島少年が、宇宙に行く際にも使ったという、幽体離脱用のバットである。
「っ！？」
ルキアが驚く暇（いとま）もあればこそ。
かきーん。
フルスイングされたバットは、みごと少女の後頭部にクリーンヒット。義骸から、きれいにルキアの霊体が抜け出した。
「良い子は真似しちゃいけないぞっ」
「……あいかわらず、容赦ねーな」
ひとすじ汗を浮かべてひとりごちる一護に、同意を示すアーチャーとリドルが、うんうん頷いていた。

で。

本来であれば、穿界門（せんかいもん）や、それをくぐって、現世と尸魂界（ソウルソサエティ）を繋ぐ通路である、断界（だんがい）を通らなければ行くことのできない尸魂界（ソウルソサエティ）だが。

これまたおなじみ、先輩の開けた「ジッパー」による移動である。

「……何でもありだな、もう」

霊体化のまま、主である少女の肩を抱くアーチャーなどは、本気で遠い目をしている。いっぽう、珍しく黒猫姿ではない、少年形態のリドルも、無言で目を逸らすありさまだ。

「漣さんだしなー」

死神姿の一護も、この一言で解決、とばかりに、あさっての方向を目がさまよっていたり。

「さー行くぞー！」

ひとり、真言に抱えられたルキアが、わけのわからない現象に、目を白黒させながら、わたわたしているが、少女が呼び出した式神――白虎にまたがったとたん、もふもふの誘惑に気を取られて、あっさり大人しくなった。

そして、霊力を持つ貴族や死神達が住む、瀞霊廷（せいれいてい）。

そこに彼らが降り立ったとたん、強大な霊圧に引かれて集まってきた死神たちは。

『すんっませんっしたーーー！！』

七季の顔を見るなり、土下座で後ずさったのだった。

「……は？」

＃１０３　剣を執るもの 一尸魂界へ行こう 一（後書き）

あとがき

＞念のため。バットはエ●カリボルグではありません。

次回、斬魄刀（ざんぱくとう）が登場します。

＃１０４　剣を執るもの－烏衣（うい）－（前書き）

まえがき

＞今回は、番外編的な話です。リリなの、ゼロ魔キャラは登場しません。

＃１０４　剣を執るもの－烏衣（ういー）－

「お前、何したんだ？」
ジト目で一護に問われた七季は、あわててぷるぷる首を振った。
「知らないぞっ！
だいたい私、ここ来るの初めてだし！」
濡れ衣だっ。
土下座する死覇装（しはくしょう）の群れ――しかも、真言たちの霊圧を感じて、駆けつけてくるはしから、死神が土下座または逃げ去っていくのだからタチが悪い。
「……その、何だ。
これが死神式の、歓迎の流儀なのかね？」
土下座で後ずさるのが？
思わず、白い髪の偉丈夫がうろんな目で呟いてしまうのも、むべなるかな。
「俺に訊かれても」
アーチャーのまじめ半分、冗談半分なツッコミに、半目で即答するオレンジ頭の少年ひとり。
まあ、死神代行とはいえ、一護も尸魂界（ソウルソサエティ）に来るのは初めてだから、訊かれても困るというものだが。
「どうでも良いけど、土下座したまま後ずさるって、びっくりした海老みたいだよね。海老土下座？」
「失礼だろそりゃ。ってか、何でも食い物につなげんな」
すぱん。
かるく七季にツッコミを入れたオレンジ頭の少年に、土下座していた面々から「勇者だ……」「勇者が現れたぞ……！」と、尊敬のまなざしが向けられる始末。

やっぱりカオスである。

「というか、ここに来たことあるのはマコトだけなんだから、犯人は決まったよーなものじゃない？」

ちろん。

少年姿のリドルが、ルビーアイを、これまたジト目で栗毛の美少女に向ける。

「先輩、何したんですか？　てゆーか、なじょして私がビビられることにっ！？」

そして、現在進行形で、死神一同に怯えられている黒髪の少女は、栗毛の巫女さんに食ってかかるも。

「知らないにゃ～」

すっとぼける真言は、白虎にまたがったまま、琥珀の瞳をあさっての方向に逸らして口笛を吹き始めている。わざとらしいったらない。

「ああもう埒があきませんっ。そこのひと！」

ぐいっ。

七季は、いちばん手近にいた、奇妙な髪飾りをつけている若い男――白い羽織を着ていたので、目立ったのだ――を、力任せに引っ張り上げた。

ここは尸魂界（ソウルソサエティ）。霊力がものをいう世界なので、肉体的には非力な少女でも、霊圧・霊力、ともに人間離れしている彼女は、なまなかな死神をかるく吹っ飛ばせるだけの膂力に変わる。

「いったい私が何をしたと？　わかりやすくキリキリ吐いてください。いますぐに！」

「はっ」

見目うるわしい青年は、小柄な少女に顔をのぞきこまれるや、ぴきこんと硬直しながらも、あくまで従順に七季の要請に応じた。

「尸魂界（ソウルソサエティ）、護廷十三隊、特別教官・漣真言（さざなみ）殿の斬魄刀（ざんぱくとう）である貴君に、敬意を表するものであります、公主！」

見たこともない兄の姿に、七季の背後でルキアが固まっている。

「ざんぱくとう……私が？」
きょん、と七季が、まっくろな目を丸くしているところへ、今度は、膝まで届くみごとな白ヒゲを、紐で縛った老人がやってきた。
こちらも、黒い死覇装に、隊長の証である白い羽織をまとっている。
禿頭に十字傷の目立つ彼こそは、護廷十三隊総隊長・山本元柳斎重國である。
「あ、やっほー。重じい」
が、総隊長の威厳などどこ吹く風。緋袴の美少女巫女は、のんきにいつもの調子でひらひら手を振る。
「やはり、お主じゃったか……」
深々とためいきをつく老翁に、真言は「久しぶりに稽古つけにきたよー」とあくまで悪びれない。
「それはありがたいがのう。その……そちらの面々は、いったい何者じゃ？」
年輪のようなしわに埋もれない、細い眼光は猛者のそれだ。日本刀にも似た重國のまなざしは、すっと黒髪の少女や、赤い外套の騎士、ルビーアイの少年を撫でていった。
どいつもこいつも、並みの席官どころか、隊長クラスを凌駕せんばかりの霊圧である。
「うちの眷属と、お友達のルキアちゃんだね」
きっぱり。
圧されず笑顔でのたまう真言のセリフに、びびくん！と白い羽織の美青年――朽木白哉が反応するも、他に言葉を持たないらしい。
六番隊隊長は、沈黙をもってその場をやり過ごした。
「ま、あとで詳しい話もあるけど……まずは、私の斬魄刀を見せるって、うちの子に約束してるの。若いの、何人か借りても良い？」
ひいいいぃっ。
声にならない悲鳴が、土下座したままの黒い群れから立ち上るも、護廷十三番隊の総隊長は非情だった。
「好きなのを持って行けい」

総隊長オォオォオオ！
死神たちの血涙を振り絞った怨念――もとい、心の声は、聞き届けられることはなかったという。

「やー白哉ん。おひさしー」
訓練場で、真言と相対しているのは、最初に七季から問い詰められた青年――朽木白哉。
元より、ムダ口を叩かない貴族然とした男だが、その端正な容貌は、いまから行われる鍛錬という名の地獄を思い、硬く強張っている。
「久方ぶりにお会いする、漣殿。して、きょうは」
「ん。始解までで止めておこーか。初心者いるし」
ふわんと微笑む栗毛の美少女は、まっかな髪の青年・恋次から受け取った斬魄刀（ざんぱくとう）――尸魂界（ソウルソサエティ）に預けていたものだ――を手に、「ちょっと待ってね」とことわった。
「夜（よ）を率（い）て春天に誘（いざな）え――烏衣（うい）」
それは解号。
斬魄刀（ざんぱくとう）の力を解放する、第一段階「始解」のために必要な言葉だ。
ふだん斬魄刀（ざんぱくとう）は、封印状態であるのが常。しかし例外はいつでもあるもので、常に始解状態を保つものも存在する。
そういった斬魄刀（ざんぱくとう）は「常時解放型」の斬魄刀（ざんぱくとう）と呼ばれる。一護の「斬月」がこれだ。
さておき。
真言が解号を紡ぐや、その黒い鞘はかき消え、ほのかに桜色の燐光を帯びる透き通った刀身が姿を現した。
「あれが先輩の斬魄刀（ざんぱくとう）……？」
ふわぁ。
七季が黒い瞳をかがやかせて見つめる。まるで純度の高い薔薇水（ローズクォーツ）

晶さながらの刃は、五色の糸を柄に巻きつけられて、祭具のよう。
同時に、真言の巫女服が、一護と似たような黒衣に変じ、桜色の千早――巫女が上に羽織る、薄手の上着――をふわりとまとった。
りりん、とどこかで鈴の音が鳴る。
「……ん？」
ふと彼女が目を向ければ、七季の足元には、小さな女の子。
ふっくらと白い頬に、まん丸の黒い瞳。まっくろなポニーテールと、黒ずくめの服まで、誰かさんそっくりの。
その髪を飾る結い紐に、金色の鈴がついていた。どうも、これが音を立てたらしい。
「産んだのか？」
と、黒髪の少女の、隣に立っていた一護も、その女の子を見つめたあと、七季の顔を見比べて爆弾発言を投下した。
「それは、何かな？　私が妊娠してみえるくらい、太っていたと、そういうことかなっ？」
ぎりぎりぎり。
「ろーぷろー……っ！」
少年の発言は、乙女心の触れてはいけない部分に直撃したらしく、少女の細腕が、一護の首を問答無用で締め上げていく。
「しかし……そっくりだな」
「そうだね。アルバムで見た、昔のナナキみたいだ」
ひょい、と女の子を抱き上げて見つめる、アーチャーとリドル。
『――ん？』
白い髪の偉丈夫と、黒髪の少年が、そろって顔を見合わせた。
ふたりの腕の中には、何から何までそっくりな、黒髪の女の子。
「おお、三つ子なのか。七季も頑張ったな」
「誰が産んだなんて……ッ！？」
ルキアの抱える三人目。
そして、一護を締め上げる七季の足にも、ひとりくっついており。
合計四人。

「……や。おかしくね？」
ようやっと、一護も七季主従も、お互いの顔を見合わせて、ぱちぱち瞬いた。
「つーわけで。これが私の斬魄刀（ざんぱくとう）『烏衣（うい）』なんだなー」
真言も、刃物片手に、ちびっこ七季そっくりの女の子――五人目の――を抱えて、紹介した。
『はいいぃ！？』

そして戦闘――もとい、鍛錬開始。
先手必勝、とばかりに、瞬歩で白哉が真言に襲いかかるも。
シュゴオオオッ。
数十もの光の帯――それは虚閃（セロ）と呼ばれる破壊の閃光であったが――が、白哉を狙い撃ちにしたことで、あわてて青年は引き下がった。
「くっ！　あいかわらずの非常識さだな……！」
何となれば。
数十体の、ギリアンと呼ばれる大虚（メノスグランデ）が、あたりを取り囲んでいたからである。しかも、数はまだ増え続けている。
「な――」
思わず飛び出そうとした一護は、順番待ちをしていた恋次に、拘束され、引き止められた。
「待て。これは鍛錬の一環だ」
「何を……！？」
すわ、このまま瀞霊廷に警報が響き渡るかと思いきや。
瀞霊廷は沈黙を貫いたまま。
ギリアンの前に、小さな――大虚（メノスグランデ）に比べれば、本当に小さな――影が、その白い、ふくふくした手を、前に振った。
そう。まるで、どこかの姫将軍が「なぎはらえ！」とでも言うよ

うに。
ちびっこ七季の合図どんぴしゃのタイミングで、ふたたび虚閃（セロ）が打ち出される。今度は波状攻撃だ。
次々と絶え間なく打ち込まれるそれを、斬魄刀（ざんぱくとう）で弾きながら、白哉はギリアンを切り捨てていくが、いかんせん、数が多い。
何より。
「がっ！」
ぼぐんっ。
ギリアンに紛れていた、ちびっこ七季（斬魄刀）は一人ではなく。
何人もの小さな影が、ちょろちょろと白哉の側を走っては、いきなり自爆していくという、とんでもない能力を披露した挙句。
「はい、おしまい」
白哉の反応速度をはるかに越える一撃を、真言が見舞うことで、その「鍛錬」は、三分ほどで片がついた。
「分身に、ギリアン寄せと自爆能力を持つ斬魄刀（ざんぱくとう）――それが漣教官の『烏衣（うい）』の始解だ」
とてもとても疲れきった、どこかあきらめのにじんだ恋次の声が、その場にいる死神の心情を代弁して、やるせなげに響いていた。

#１０４　剣を執るもの－烏衣（うい）－（後書き）

あとがき

＞というわけで、チートな先輩は、オリ主そっくりな分身が出てくるというアレな斬魄刀（ざんぱくとう）をお持ちでした。

　呼び寄せたギリアンは、もちろん、ちびっこオリ主に従いますが何か？

　何が恐いって、ギリアン操る斬魄刀（分身）は完全にオートで、先輩はまったくのフリーで動けるという点。剣の技は別にありますよ。

※いる【率る／将る】

：古語）１）人を連れて行く。ひきいる。　２）物を身に携えて行く。

※烏衣（うい）

：１）つばめの別名。　２）黒い衣の意。

#１０５　剣を執るもの―烏衣（つばめ）の便り―（前書き）

まえがき

＞今回は、番外編的な話です。リリなの、ゼロ魔キャラは登場しません。

#１０５　剣を執るもの－烏衣（つばめ）の便り－

ぽかーん。

言葉にすれば、それしかないだろう。

兄――血縁ではないが――の強さを知っているルキアはおろか、一護、アーチャー、リドル、七季にいたるまで、あまりにも予想外な斬魄刀（ざんぱくとう）の能力に、魂を飛ばしていた。

いやここ尸魂界だけど。ほぼ全員霊体だけど。

「……いや、うん。これはビビるわ。私でもびっくりだもん」

そして、いちばん早く正気に戻ったのは、斬魄刀（ざんぱくとう）と誤解された黒髪の少女だった。

「し、しかし兄様の千本桜はっ」

次いで言葉を取り戻したルキアが、一護を羽交い絞めにしたままの恋次を振り返るが、まっかな髪に、額に巻いた白布が特徴的な青年は、「あー……」と、言い辛そうに言葉を濁した。

「私の斬魄刀（ざんぱくとう）の刃が、いまだ漣教官を傷つけられたことがないのだ」

と、起き上がった白哉の口から、信じがたい内容が語られた。それを犠牲者その二、もとい、日ごろ最も真言とガチバトルしている数が多い十一番隊隊長――更木剣八が、斬魄刀（ざんぱくとう）の柄でこめかみを掻きながら補足する。

「あいつの霊的な防御が硬すぎてな。当たっても傷つかねえ。千本桜は無数の刃、すなわち桜みてえに小さな刃からの攻撃だ。それが通じねえとなると、刀身のままで攻撃した方が、まだしも威力があるってことだろ」

俺の刃も遠さねえからな。

「た……隊長格の斬撃が通じないのですか？」

大きな目を見開くルキア。

「うわ」
一護も、顔を引きつらせながら慨嘆した。さすが真言、というところだろう。
その間に、ようやく一護を解放した恋次や、栗毛の美少女との対戦を終わらせた白哉が、斬魄刀「烏衣」の呼び寄せたギリアンを切り伏せる。
いちおう決着がついたので、後始末だ。
ギリアンは、虚には違いないので、倒さなければ、いつまでたっても「烏衣」の分身について回る。「烏衣」さえいれば、暴れることはないのだが。
真言相手には通じない、始解の「千本桜」ではあるものの、ギリアン程度であれば役に立つ。白哉が繰り出す、白い花吹雪さながらに舞い散る無数の白刃を眺めて、アーチャーが「ほう」と感嘆の声を洩らした。
いっぽう、元凶の真言はというと、まだ斬魄刀を収める気配はなく、ちびっこ七季そっくりな分身をいくつも作り、何事か言いつけている。
黒ずくめの小さな女の子は、こくりとうなずくと、三々五々に、ぱたたーっと散らばって、いずこへか、駆けて行った。
「あ、おい！　止めなくて良いのか？」
「ん。おつかい言いつけただけだから」
「烏衣」の分身を追いかけようとした一護の袖を、しっかり真言がつかまえて引き止める。いっぽう、七季も「おつかい？」と首をかしげて「何する気だろ」とアーチャーを見上げた。
「さてな」
「しかしまあ……カオスな剣だねえ」
分身とか、爆発するとか、無数の刃に分解するとか、ナイワー。
リドルも呆れを含んだ声で嘆息する。
「あれは日本刀。刀だ。『剣』は本来、両刃のものを指し、『刀』は片刃のものを指す。

もっとも、日本刀の発明以後、両刃の剣が完全に廃れてしまったからな。区別する必要がなくなったから、日本では『剣』というと日本刀のことだがな」

さすがに剣製の魔術師。刀剣類についてはうるさいようだ。

西洋出身であるリドルへの説明だったが、教師のように告げる褐色の肌の偉丈夫に、ルキアが感心したまなざしを向けて、ふむふむ頷く。

「ま、斬魄刀（ざんぱくとう）は、所持者自身の魂を元にして形作られているっていうし。だから形状とか能力は、個人個人でぜんぜん違うんだけどね」

ふっ、と真言の手から、桜色の刀身を持った日本刀が消える。その代わり、小さな三歳児くらいの七季が、栗毛の少女に抱かれていた。

「つーわけで、ナナちゃんたちの斬魄刀（ざんぱくとう）も、見てみよーか」

『へ？』

悪戯っぽい笑みを浮かべた、真言の美貌に、その場の人間が訊き返したのは、いうまでもない。

いっぽうそのころ。

てってけてってって。てってけてってって。

護廷十三番隊の隊舎を、軽い足音が駆けて行く。

あるものは目を和ませ、あるものは壁に張りつきやり過ごし、反応はそれぞれだが、本来であれば、この場所では、あまり見ることのない三歳児くらいの女の子が、足音の主である。

やがて烏衣（うい）（＝黒衣）の女の子は、十三番隊の隊舎にたどりつくと、小さな手のひらを押し当てて、うんしょ、とばかりに大きな扉を開いた。

ここは尸魂界。

そのものの霊圧が、ものをいう世界である。

「おや、いらっしゃい」
穏やかな男性の声が、彼女を出迎えた。病弱なことで名高い、十三番隊の隊長だが、白く長い髪にふちどられた相貌は、優しげで理知的だ。起きて仕事をしているところを見ると、きょうは体調が良いらしい。
その手が、ひょいと烏衣（ういい）の分身である、ちびっこ七季を抱き上げた。
「しばらく見なかったね。お使いかな？」
こくんと頷く女の子に、浮竹十四郎は、そうか、と目を細めて笑う。
ぱたぱたと身振りを交えて説明するちびっこ七季に、副隊長代理である清音も、ほんわかと胸を和ませて見守る。
隊長である浮竹至上、といえる彼女だが、子供好きな浮竹が和んでいる光景は、それだけで幸せに感じるのだ。
「ふむ……朽木が？　そうか、ありがとう。総隊長も知っているなら大丈夫だろう」
す、と腰を上げる男に、金髪の娘はパッとみずからも立ち上がる。
「隊長、どちらへ？　お供します！」
「うん。漣君がね。うちの子を連れて来たらしいんだが……その件で、話があるそうだ。あと、斬魄刀（ざんぱくとう）を三本ほど、用意してくれないか」
「はい！」
自分の覚えた疑問を口にするよりも、浮竹の意志に忠実な清音である。
ちなみに、おつかいを無事に済ませた、ちびっこ七季はというと。
浮竹に抱っこされたまま、お使いのご褒美としてもらった饅頭を、もぐもぐ頬張って食べていた。
「お茶も飲むかい？」
こくん。

そしてまた同じころ。
「たいちょー。漣教官から、おつかい来ましたよー」
廊下を歩く途中で拾ったのだろう、松本乱菊の腕には、ちっこい黒髪の幼女が、その豊満な胸元にきゅうとしがみついていた。口が微妙にもごもごしているのは、もらった飴でも舐めているのだろう。
「仕事中だ！」
とばっちりで、真言のトラブルに巻き込まれることの多い日番谷は、デスクワークに逃避しようとしていたが。
「面白いもの見れるそうですよ。てか、来なきゃ隊舎に遊びに行くって」
「……ちくしょう」
無駄な抵抗か、と銀髪の少年は、しぶしぶ腰を上げた。
トラブルに巻き込まれるのが嫌だから、彼女の霊圧を感じても行かなかったというのに。
「きょうは漣教官の眷族も来てるんだそうです。イイ男だと良いなー」
「あれのツレだぞ。厄介ごとの塊に決まってるだろうが」
さすが苦労性の少年、良い勘である。
副隊長の乱菊を引きつれ、日番谷冬獅郎は、桜色の刃を持つ神妻の元へと足を急がせる。
――とっとと済むと良いんだが。

浮竹の届ける浅打（あさうち）によって目覚める、新たな刃。
その名はまだ、誰も知らない。

#１０５　剣を執るもの―烏衣（つばめ）の便り―（後書き）

あとがき

＞ほぼ閑話ですね。先輩の防御力は、そもそも白哉では突破できないというチート。

初期の一護ＶＳ更木みたいな感じだと思ってください。どんだけ。

あ、ヨン様とギンは留守です。

次回こそは斬魄刀（ざんぱくとう）を！

＃１０６　剣を執るもの―王水（おうすい）―（前書き）

まえがき

＞今回は、番外編的な話です。リリなの、ゼロ魔キャラは登場しません。

#１０６　剣を執るもの－王水（おうすい）－

こぷん。とぷん。たぷん。
白い気泡が、かすかに弾ける音は優しく。
寒くも熱くもない、何ひとつ、縛られるもののない世界。
害するものはないゆえに、装う必要もない。
だから少女は一糸まとわぬ姿でたゆたう。
滄溟（そうめい）は果てなく。
「んーと……」
ふわふわと、青い水の中に浮かびながら、七季は、はたと記憶を取り戻した。
「そーだ。斬魄刀（ざんぱくとう）と話すって話だった」

浅打（あさうち）、と呼ばれる刀を与えられた少女は、「斬魄刀（ざんぱくとう）の具象化」をしてみろ、と先輩から言われたのだ。
「よーするに、斬月さんみたく、お話ができれば良いんですか？」
ちなみに「斬月」は一護の斬魄刀（ざんぱくとう）だ。「神降ろし」が得意な七季は、いったん彼女の器を通して彼を「降ろし」、顕現させて交流が可能という、トンデモ特技を持っている。
いまではすっかり茶飲み友達と化しているというのだから、本当にびっくりナマモノである。
最初にやったときは、さすがの一護も、全身全霊でもってツッコミを入れたものだが、いまでは「斬月さん元気？」と訊かれて「おー」と代わりに一護が答えるくらいには、日常になっていたりする。
慣れって恐い。

「まあ、具象化は時間かかるのがフツーだしね。しばらく一緒にいれば、話くらいできるでしょ。私も一日くらいかかったし」
ナナちゃんなら、一日あればできるんじゃない？
――できるかあああ！
さらっと真言は言ってのけるが、白哉や恋次は、ないしん総ツッコミだ。
「具象化」は、第一段階の解放である「始解」に必要な「斬魄刀」本体との対話と同調」をすっ飛ばした、第二段階の解放「卍解」にいたるための過程だ。
そもそも「卍解」からして、その境地に至るには、才能のある者でも十年以上の鍛錬が必要とされる。そして修得者は例外なく、尸魂界の歴史に永遠にその名を刻まれる。それほどの偉業なのだ。
だが、「卍解」に至るのが困難とされる理由は、そもそも「具象化」に至るのが困難なため。
具象化とは、対話の際に死神が精神世界に赴くのではなく、斬魄刀の本体を、死神のいる世界に呼び出す事。
具象化した斬魄刀の本体を倒す事を、斬魄刀を「屈服」させるといい、これに成功して初めて、卍解を修得できる。
ようするに斬魄刀の「具象化」は、「卍解」の肝といえる。
もっとも「神降ろし」が得意な七季にとっては、相手の名前さえわかれば、手土産を持っていく程度の手間でしかない。
死神と「神使」たる少女の間には、えらい認識の差があることを、まだ白哉たちは知らない。
「あの、真言殿は卍解も……？」
おずおずと、ルキアが栗毛の美少女に問いかけると、真言はあっさり答えてみせた。
「使えるよ？」
けろっ。
七季は知る由もないことだが、「卍解」は「始解」同様に変形、特殊能力の付加などが伴ういっぽう、その戦闘能力は、一般的に「

始解」の五倍から十倍に跳ね上がると言われている。
どう間違っても、ぽんと斬魄刀を渡された初心者が、その日のうちに習得できるようなシロモノではありえない。
まあアレである。そこんところをツッコむと、真言の「卍解」は、低く見積もっても、あの威力から五倍の威力になるわけだが。
それに思い当たったルキアが、ひとり栗毛の少女から遠ざかって、ドン引いてたり。
――だってアレで「始解」だと！
「卍解」は、基本的に始解の能力・特性を強化したものである場合が多いが、その強大さゆえに、斬魄刀戦術の最終奥義とされている。
また、これは余談になるが、「卍解」修得者は、斬魄刀の名を呼ぶ事なく「始解」することも可能だ。
ちなみに、そういうきちんとした説明を、アーチャーとリドルは、斬魄刀を持ってきてくれた、浮竹たちから聞いていた。
一護も、いままでノリとか勘で斬魄刀を使っていたものだから、もともとまじめな性分も手伝って、ふんふんと頷いている。
で。
アーチャー、リドル、七季は、それぞれ黒塗りの鞘に入った斬魄刀を持たされた。
「つーわけでレッスン1！　名前を聞いてみよう！」
真言の適当な説明で、七季はその一振りを胸に抱いてみたわけだが――
「『神降ろし』と同じ要領で、トランスに持ってったら、ここに来ちゃったんだよな。
たぶん、この水ぜんぶが斬魄刀さん？くんかな？
このまましゃべれるもんかなぁ。でも、マッパで自己紹介は勘弁

な！」

水の中でも話せるっぽい、とわかった七季は、見下ろした自分の胸がたゆたゆと揺れているのを見て、唇を尖らせた。まっしろな曲線を描くおっぱいは、支え隠す下着もなく、わがままいっぱいに解放されている。

雪を思わせるその胸元には、つややかな黒髪が、結い紐から解かれて、ふわふわと絹糸のように散りかかっていた。

――うん、このフリーダムさに慣れちゃいかんわ。裸族になってしまう。

世の中には、自宅に戻るとマッパの方もいるそうだが。

ぱたぱたと立ち泳ぎとクロールの要領で水っぽいものを掻くと、思いのほかスムーズに体が進んだ。

どうも、七季の意志で動けるらしい。

――いや楽しいけど。水は好きだし、呼吸できるっぽいから、楽だけどね？

むうむう考え込むこと三分間（体感的に）。

立ち泳ぎを止めても、沈むわけではないらしく。

「おーにさーんこーちらー。てーのなーるほーうへー」

ぱちんぱちんと、水の中でたゆたいながら、黒髪の少女は手を鳴らしてみた。水は本来、空気よりも音の伝道が良いものだ。

それ以前に、ここは、斬魄刀（ざんぱくとう）と、それを内包するはずの彼女自身の世界なのだから、聞こえていないはずがない。

どこから差し込む光なのか、水中には時折、きらきらと光を反射するものがあって明るい。魚群だろうか。

おいで。おいで。ここまでおいで。

誘（いざな）いの声が、さざめいて揺れる。蒼い水は言霊（ことだま）を伝える。

――だって君は、私のもの。

七季が産み、七季が担（にな）い、七季が収める、彼女のための刃（やいば）。

求める力は、優しく強く。

そして何より傍にある。

――名前をあげよう。
名前をちょうだい？
「王水（おうすい）」
「ななきっ」
七季の胸にしがみつく子供は、あかがねの髪に、小さな角を持っていた。

とぷんっ。
不意に浮上した意識に、七季は黒い目を開いた。
「……あるぇ？」
その場にいるもの――白哉をはじめ、浮竹や恋次、清音といった死神連中が、彼女の胸元を凝視している。
座り込んだままの七季が見下ろせば、斬魄刀（ざんぱくとう）を抱いていたはずのそこには、赤毛の小さな男の子が、さっきと同じようにしがみついていた。
大きさとしては十歳くらいだろうか。青い水干に、トパーズみたいな金晴眼。あかがね色の短い髪から、ちょこんとのぞく黒い角。
「ほら、できた」
にんまり笑う真言を不思議に思いつつ、七季はそっと少年の頭を撫でた。
「王水（おうすい）？」
「……ん」
黒衣に包まれた少女の胸に、「王水」と呼ばれた赤毛の少年はすりすり懐いて、幸せそうに目を細める。
「酒天滄溟王水（しゅてんそうめいおうすい）――おれは、ななきのもの」
ななきの敵は溶かしつくすし、ななきの味方は癒してあげる。
「これからは、ずっと、いっしょだよ」
にっこり笑った少年は、どこか弓の騎士に、面影が似ていた。

#１０６　剣を執るもの―王水（おうすい）―（後書き）

あとがき

＞オリ主の斬魄刀（ざんぱくとう）は、酒天（しゅてん）＝酒呑で、酒呑童子（しゅてんどうじ）から取りました。

見た目はちびっこ士郎がモデルですけどね！

もろに雷雨さんとこの「ちびっ子士郎の聖杯戦争」の影響です（自重しない）。

まあ、まじめな話、斬魄刀（ざんぱくとう）と対話中の水（海）やオリ主の姿は、母性の象徴であります（本編で書くところだな）。

目覚めたばっかりですし、斬魄刀（ざんぱくとう）の本体も幼いので、こんな感じになりました。あ、既に屈服しきってますんで（待て）。

＃１０７　剣を執るもの－銃剣と蛇－（前書き）

まえがき

＞今回は、番外編的な話です。リリなの、ゼロ魔キャラは登場しません。

#１０７　剣を執るもの ― 銃剣と蛇 ―

その場の死神が考えたことはひとつだった。
――このトンデモ主従め。
「その、何だ」
いっぽう、困惑しきりなのはアーチャーである。黒髪の少女が抱いている――というよりしがみつかれている――のは、何だか見覚えのあるような、ないような、赤毛の少年。
頭部には、三センチほどの、微妙にカーブした黒い角が一対、ちょこんとのぞいているが。
「とりあえず、うちのマスターは『具象化』とやらに成功した、ということで良いのかね？」
『色々ツッコミどころは多いけどな』
恋次、日番谷、浮竹あたりから、異口同音の返答が飛んできた。
その背後では、白哉と真言が、何やらごそごそ話している。
「ふむ」
「じゃあナナキ。コツとかあったら教えてよ」
ほとんど初めて目にする事象に、いくら説明を聞いたところで埒が明かない、とリドルが、にじにじ黒衣の少女に詰め寄る。
黒髪の少年に問われて、七季はこてり、と頭を傾けた。
「んー。じゃあ、リンクしてトランスしてみよか」
「え」
「は？」
しがみつく「王水」もそのままに、七季が従者ふたりの手を握ったとたん。
かしゃり。
世界はスライドのごとく一変した。

そこは、洞窟のようだった。
けれども応接室のようでもある。
無骨な岩壁の空洞。そこに脈打つ、いくつもの時計。
こち、こち、こち、こち。
くつ、くつ、くつ、くつ。
「おや」
臙脂色の布を張られた、木製フレームのソファセット。足元に敷き詰められた毛足の長い緋色の絨毯。
そんな空間に、一人の男性がたたずんでいた。
振り向いた男は、三十路くらいだろうか。精悍なラインの横顔が振り返る。
優しげな琥珀の目に、蓬髪といっても良いような、無造作にはねた夕焼け色の髪。
あまり覇気を感じさせないけれど、その長身は均整の取れた体躯で、まっくろなフロックコートを身につけている。ウィングカラーのワイシャツにウェストコートと、一見、紳士然としたいでたちだが、タイはない。
ポケットからのぞいている銀のチェーンは、おそらく懐中時計のものだろう。
ちく、ちく、ちく。
たつ、たつ、たつ。
宙に浮かぶ、無数の針が、時を刻む。
「初めまして、お嬢さん。こんな殺風景な場所にようこそ」
すると黒衣の男は、七季に向かって、優雅に一礼してみせた。
「あ、お邪魔してます。こんにちは、七地七季です」
あわてて少女も頭を下げる。だが、隣にいるアーチャーは、鋭い目を見開いたまま男を凝視しているし、逆隣のリドルも、ぴりぴり

とした空気のまま、油断なくあたりをうかがっていた。
「これはご丁寧に。それでは、俺も名乗らなくてはね」
アーチャー――エミヤシロウから見れば、養父を若くしたような男は、こう告げた。
「俺は『切嗣(きりつぐ)』。そこにいる、困った男の斬魄刀(ざんぱくとう)だよ」
「え」
ぱっと下げていた頭を上げた七季は、その視界に映ったものに唖然とした。
洞窟のようだと思っていた部屋の壁。
それは、巨大な――あまりにも巨大な、大蛇の表皮だったのだ。
少女の見上げた先に、赤々と燃える灼熱の睛(ひとみ)は、彼らを見下ろして笑っていた。
「我は『遠呂知(おろち)』――さて」
『覚悟は良いか？　野郎ども』

ドン！
爆発じみた轟音と共に、顕現した大蛇が、二人の男へと襲いかかった。
「どわあああっ！？」
とばっちりを食らいそうになった死神たちは、瞬歩やら何やらで、あわててそれを回避に走る。
この中でいちばん未熟な一護はというと、真言に引っつかまれて事なきを得た。
「うわちゃあ……大物が釣れたねえ」
訓練場を囲う壁の上から、手でひさしを作って見物する、栗毛の少女の言葉に、一護は勢い良くツッコミを入れる。
「大物にも程があんだろ！」
何しろ、顕現した大蛇は、八頭。

かるく校舎サイズはあろうかというそれが絡み合いながら、それぞれに攻撃してくるのだから、避けるだけでも一苦労。おまけに、それだけの巨体で通常のアーチャー並にスピードが速いというビックリ生物（？）。

ごがががっ。

「つーか、あれも斬魄刀だってのか！？」

むちゃくちゃデカいじゃねーか！

――キングギドラか！

と、そこに、同じく避難してきた恋次が横から口を挟んだ。

「あー……隊長格の斬魄刀ならアリだろ。霊圧からしたら、おかしくねーよ。しかし……うちの蛇尾丸よかでけーな」

悔しげに呟く赤毛の男に、一護は「ハアッ？」と振り向く。

「マジでか」

「マジだ。つーか、霊力・霊圧がデカいほど、攻撃力が上がってくのが斬魄刀だぞ？

それ考えると……あの七季っつー女は、珍しいクチだな。霊圧の高さに比べて、解放した斬魄刀が、小さくまとまってるっつーか」

「ナナちゃんだもん。効率重視なんじゃない？」

真言も、見物しながら能力の考察に加わる。

「……罠張るとか、毒とかか？」

「結界張って相手を拘束してからフルボッコとか？」

「激しく待て。あの女、どういうやつなんだ」

七季を良く知らない恋次が、思わず半目でツッコミを入れる。

さて、その当人はというと。

「はくしっ」

「寒いのかい？」

アーチャーの斬魄刀「切嗣」によって、小脇に抱えられていたり

した。
「……や。誰かが噂でもしてるんじゃないかと」
「そっか」
ほやーん、としたノリで、赤毛の男と黒髪の少女は、やりとりしているが、その間も、リドルとアーチャーは現在進行形で、八頭八尾の大蛇に追い回されては、回避に必死だ。
大きさといい、その形といい、間違いなく「ヤマタノオロチ」がモデルに違いない。
アーチャーは、攻撃を避けながらも、投影で「射殺す百頭（ナインライブズブレイドワークス）」を連打、などという鬼スキルを披露しているが、とにかく攻撃がずらされる。
本来、彼の技能からすれば、ありえないことだが。
「刻令（こくれい）」
かちん、と「切嗣」の持っている銀時計が針を動かす。
その度に、一秒ほどリドルの斬魄刀（ざんぱくとう）「遠呂知（おろち）」の時間が――体内時間が加速される。もしもアーチャーと同じ世界の、魔術を知るものであれば、それを「固有時制御」と呼んだかもしれない。
あげく、「切嗣」が携（たずさ）えた銃剣で打ち込んだ銃弾は、必ず複数で同時に着弾する。
射撃スピードもさることながら、アーチャーそっくりな命中率といい、霊力で弾頭を装填しているリロードいらずといい、反則技もいいところの極悪スペックだ。
しかも「赤原猟犬（フルンディング）」や「刺し穿つ死棘の槍（ゲイボルク）」などを改造した矢を飛ばしたところ、その矢と銃弾が衝突するなり、構成を狂わされて爆散、もしくは逆走する、という恐ろしい結果になった。
リドルもアーチャーも、厄介な「切嗣（ざんぱくとう）」を先にしとめようとつけ狙うのだが、いかんせん、この狡猾な斬魄刀は、七季を抱えたまま飛び回っている。
彼女を害する意図はないようだが、それでも少女を巻き込みたくない二人は、手を組んでいるとしか思えない、八頭八尾の大蛇と、

黒衣の男にボロボロにされている。
「あいにく、野郎に容赦する気はないからね。もっとしっかりしてもらわないと」
七季ちゃんは任せられないなあ。
「弱者に従う義理はない」
穏やかに笑いながら、えげつない攻撃を次々に繰り出す「切嗣」と、嘲笑をもってドラのような低い声を転がしつつ、巨体で圧殺せんと奔る「遠呂知」。チームワークが良すぎである。
この光景を、ここにはいない霜夏や伯言が見たなら、呟いたことだろう。「何この無理ゲー」と。
従者をボロボロにされているのに、七季が黙ってみているというのも、不思議な話ではあるが。
「君は、もうちょっと抵抗するかと思ったんだけど」
少女を人質に取った形の「切嗣」じしん、不思議そうに七季を見つめた。
銃剣を操りながらも、黒衣の男は上手く大蛇を障害物にして身を隠す。
「うん？
でも、こういう状況も、いつかあるかもしれないから」
斬魄刀の化身に抱えられながら、七季の黒い瞳は、じっと傷ついた赤い騎士と、黒髪の少年を見つめていた。
ふたりの従者は、これからもずっと同じ道を歩く七季の道連れ。
「主なんだから――目を逸らしちゃいけないでしょう」
ぽつりとこぼれたソプラノは、大蛇がのたうつ轟音に消えてしまいそうな、静かな呟きで、それでも深い夜色は揺らぎはしなかった。
「あの傷は、いつかの私がつける傷だと思うから」
守られ、彼らを戦わせる七季が、アーチャーたちに与える傷は、きっとあれより多いはず、と少女は「切嗣」にぽつぽつ告げた。
「いや、意外だ」
がんがんリドルたちに銃弾をぶち込みながら、それでも「切嗣」

はおかしげに笑う。
「本当に意外だよ。君は、彼らを守ると思っていた」
黒衣の男の片手に抱かれた、少女は見上げる。
「どうして？」
その唇が弧を描いた。
――どうして守らないなんて、思うんだ？
「私はあなたの片手を塞いでる。これも立派な役目だろ？」
相手の足を引っ張るのは、戦い方の基本だもの。
そして。

ずず……ん。
「げ」
切嗣の琥珀の目が、くずおれ地に伏す大蛇の姿を映し出した。
良く見れば、斬魄刀（ざんぱくとう）「遠呂知（おろち）」の体表は、緑だった鱗が、紫色とか黒とか、ヤバげな具合に変色している。
思わず動きを止めた「切嗣」に、アーチャーの投影したマグダラの聖骸布が、すかさずグルリと巻きついた。
「しまった！」
「念のため氷結っと」
ぴきこん。
「え」
七季の呟きで、拘束された「切嗣」の首から下が、さらに氷漬けにされる。冷凍赤ミイラ、的な仕上がりになった。
「だって私、さっきからずっと『王水』解放しっぱなしだよ？」
ひらひら手を振る黒髪の少女は一見、抜刀しているようには見えない。
だが、王水の能力は、「浸透（しんとう）」「凝集」「拡散」。
基本的には、水っぽいものを操るのに長けていて、みずからも拡

散できるという能力なのだが、そこにはオプションがついていた。
卍解であれば「生老病死（しょうろうびょうし）」の四つの杯から、一つの効果を選んで任意の目標に浸透させることができるというもの。
「何それ恐い」
思わず、素で「切嗣」が即答したのも当然である。斬魄刀（ざんぱくとう）も冒す病ってどんなんですかと小一時間（以下略）。
「ようするに『遠呂知（おろち）』は……」
「『病』の杯で、絶賛病気中です」
黒衣の男の、言葉にならぬまなざしに、七季がきっぱり言い切った。ちなみに「遠呂知（おろち）」は高熱にうんうんうなされている。びちびちのたうっているだけで、そのへんの地面がひび割れている。
「まあアレだ。斬魄刀（ざんぱくとう）って、ユーザーにぶちのめされないと、『屈服』しないんだよね？」
こてん、と首をかしげた少女の黒瑪瑙の瞳は、いっさいの悪気なく澄み切っていた。
その背後には、あかいあくま――もとい、錬鉄の英霊と、みどりのあくま、ならぬ、闇の帝王（プレ）が仁王立ち。
「いんぺりおおおぉ！」
「あんりみてっどぶれいどわーくすぅぅ！」
アーチャーとリドルが卍解まで至ったのか――それは、龍神様の嫁のみぞ知る。

#１０７　剣を執るもの ― 銃剣と蛇 ―（後書き）

あとがき

＞ふたりの手を握ってたんで、同時にオリ主が具象化で引っ張ってしまったというオチ。これは酷い。

斬魄刀（ざんぱくとう）ネタを読まれて、わりとまじめに考察してくださる方が増えてますが、あくまでネタですから！

ムダに設定だけは作ってますけど、今後どっか（本編）で出てくる予定はありませんので。

リドルの斬魄刀（ざんぱくとう）は、ボツった使い魔ネタをリサイクルです。蛇つながり。

あと、ラストのセリフは「服従の呪文（インペリオ）」。うっかり死の呪文を唱えさせるところだったんで、あわててリテイクしました。

リドルの斬魄刀（ざんぱくとう）は「高志之八俣遠呂知（こしのやまたのおろち）」、

アーチャーの斬魄刀（ざんぱくとう）は「刻帝因果切嗣（こくていいんがきりつぐ）」です。

アチャに固有時制御つけたら鬼だよね、というだけの思いつき。

ネタですから。

＃１０８　剣を執るもの―桜と蝶―（前書き）

まえがき

＞今回は、番外編的な話です。リリなの、ゼロ魔キャラは登場しません。

#１０８　剣を執るもの―桜と蝶―

「さてと」
ちゃっぷん。
そんな水音のあとに、アーチャーたちにも負けないほどべっこべこにされた斬魄刀ズと、その使い手ふたりは、あっというまに元通り――というか、「王水」の能力によって回復した。
「みんな、お疲れさま」
「ああ、すまないな、マスター」
「ありがと、ナナキ」
使った魔力とか霊力といったものが回復された、錬鉄の英霊とＳ寮の万年主席美少年は、驚きつつも礼を言う。いっぽうの斬魄刀たちはというと。
「七季ちゃんは、良い斬魄刀を持ってるなあ」
「当たり前だっ」
「切嗣」の言葉に胸を張る水干姿の少年に、熾火のような双眸の大蛇が、戦き（おのの）をにじませたまなざしを向けていたり。
「……他はともかく、ぬしらには金輪際、逆らわぬ」
くわばらくわばら。
「本気で反則技なんだが、そいつ」
そしてジト目で呟く恋次が、七季たちの背後に広がる惨状と、元気にうねうねしている八頭八尾の大蛇に頭痛を覚えていた。
ちなみに「遠呂知（おろち）」と「切嗣」は、自分をぶちのめした使い手よりも先に、問答無用で黒髪の少女に頭を下げたことを記しておく。
「私が呼ぶ使い魔は、どうしてマスターの方に懐くんだろうな……？」
アーチャーが、若干やさぐれぎみな声でぶつぶつ愚痴っていると

ころに、リドルは「力関係がはっきり反映されてるからじゃない？」とザックリ両断。心当たりがありあまるだけに、赤い外套の男は無言でうなだれる。

まあ、リドルの方も「遠呂知」が、黒髪の少女に屈服しきっているのを認めて、ちょっと微妙な面持ちだが、容赦なく病気の罠にハメられた身としては、しょうがないのだろうと思い直す。

正直な話、「王水」の能力なら、霊的存在であるリドルたちにも作用するのだから、他人事ではない。

――本気で極悪スペックじゃない？　目に見えない攻撃とか、えげつないにもほどがあるよ！

かたや、この惨状の元凶ともいえる――七季たちと斬魄刀を引き合わせたのは彼女なのだから――真言はというと。

「んじゃあ私、ちょっと下界に出かけてくるわ」

ナナちゃんたちの斬魄刀も見たことだし。

ちゃっ。

琥珀の目をきらめかせた栗毛の美少女は、片手を上げて挨拶に代える。その白い面には力強い笑みが浮かび、傍らには、ひらひらと舞う黒揚羽――いわゆる地獄蝶を従えていた。

その両脇には、白い羽織をまとった男がふたり、浮竹と白哉という、非常に珍しい組み合わせがそろって頷いている。どうやら真言の出先に、彼らもついていくらしい。

「ふぇ？　先輩、どこ行くんですか？」

当然ながら、七季はとことこ真言へと近寄って、死覇装の袖をくいくい引っ張った。

いつのまにか黒衣をまとう栗毛の少女は、ちびっこ七季を二人ほどくっつけ、手には桜色の刃を携えているあたり――どうも「始解」のまま出かけるつもりらしい。どんだけ物騒な「お出かけ」だというのか。

「ひとりで危ないところに行っちゃダメです」

七季は、あどけない面輪に心配の色を刷いて、いちおうの主人に

当たる少女についていこうとするそぶりを見せるのだが、真言はそれを許さない。
「ちょっとねー。野暮用ってやつよ。一人じゃないから。白哉んと、うっきーも連れてくから。
ナナちゃんは留守番ね。すぐ……は無理でも、きょう中には戻ってくるから、そのあいだ、ひっつんにでも真央霊術院を案内してもらっといで」
「は！？」
いきなりご指名を受けた日番谷は、アイスブルーの目を丸くした。
自分の斬魄刀である「氷輪丸」――真言が来ると、隊長格の帯刀が許されることになっている――が、「遠呂知」や、何故か七季の存在にざわめいて、話したがるという椿事に出くわしていたところに、思いがけないご指名である。
「ちなみに重じいには根回し済みだから。その間の仕事は、マユりんに振ってある」
真言いわくのマユりんとは、すなわち十二番隊の隊長のことである。
「……大丈夫なのか、それ」
「真央霊術院で、ナナちゃんたちのデータ取ったら、それを回すってことで取引に使えるから」
イイ笑顔ですぱっと切り返す真言には、言い知れない迫力が感じられる。
気圧された日番谷は、しぜんと頷いていた。
「わ、わかった……気をつけろよ……？」
白哉たちと共に、姿を消す少女の、華奢な後姿を見送る一同だったが。
ぽつり、と七季の呟きは、やけに彼らの耳を打った。
「先輩……怒ってたねー……」
うん。こわかった。
残された死神たちは、無言で同意を示すべく、おのおの頷いてい

たという。

そして空座町。

「テメェいたいけな女の子を生贄にするなんて万死に値するわあああぁ！」

「貴様、私の妹の体をよくも――！」

「私の部下を何だと――百遍ほど死んでください！」

どっこおおおおん。

ルキアの義兄と上司、そして友人による、浦原フルボッコ大会は、日が暮れるまで続いたとか続かないとか。

＃１０８　剣を執るもの―桜と蝶―（後書き）

あとがき
＞今回は短めで。
ルキアＩＮ崩玉を、チートな先輩が白哉と浮竹にバラしました。
部下思いの上司と、シスコン義兄、自重しない。
限定解除？　なにそれ美味しいの？

＃１０９　剣を執るもの―崩れた計画―（前書き）

まえがき

＞今回は、番外編的な話です。リリなの、ゼロ魔キャラは登場しません。

#１０９　剣を執るもの－崩れた計画－

「七地……だったか？　ちょっと良いか」
「はい？」
白い羽織をまとった銀髪の少年――日番谷に声をかけられて、ひとしきり真央霊術院を見て回った七季は首をかしげた。
「どうも『氷輪丸』が、さっきからアンタを気にしててな。心当たりがあるか？」
アイスブルーの目には不審の色。
自分よりも年下に見える少年が、背負っている鞘に触れる。おそらく「氷輪丸」は斬魄刀の名前なのだろう、と察して、黒髪の少女は、ふるふるかぶりを振った。
「いえ。私は、ここに来るの初めてですし。しいて言うなら、私が人外好きすることくらいですねぇ」
へろーんとした口調で首をかしげる少女は、ふと、言葉を継いだ。
「『氷輪丸』くん？　初めまして」
まるで子供相手に目を合わせるように、かがみこんだ七季は、日番谷の肩越しに、斬魄刀へと話しかけた。

「ただいまー」
「あ、先輩。お帰りなさーい」
「お疲れッス」
死神を育成する学校――真央霊術院の、一日体験入学のようなことをしていた一護たちは、日番谷の司る十番隊舎で、まったりお茶を飲んでいるところだった。

珍しいことに、七季によって顕現した「斬月」の姿もある。
人ならぬ身である男は、茶をすすりながら、ちらりと横に座る黒髪の少女――その腕に抱かれているものを盗み見ている。
彼女が胸に抱いてくつろいでいるのは、みずからの斬魄刀「王水」の化身と、こちらは封印こそ解かれていないものの、すっかり七季に懐いてしまった日番谷の斬魄刀「氷輪丸」であった。
ひとり「氷輪丸」の声が聞こえる、使い手の日番谷には、やたらめったら上機嫌な、ハートマークでも飛ばさんばかりの斬魄刀の感情が伝わってくるが、彼は黙々と仕事に――励んでいるというより逃避している。
――他人の斬魄刀を手懐ける人間とか、ありえないだろーが！
まあ、現在進行形で、彼の「氷輪丸」が懐いているわけだが。
「もー。アーチャーってばつれなーい」
「すまないが離れてくれないか」
ちなみに、アーチャーは何故か、十番隊の備品の修理をしており、彼の斬魄刀である「切嗣」は「切嗣」で、お茶を入れたり書類をまとめたりと、仕事を片付ける日番谷のサポートをしていた。
主従そろってブラウニーな存在である。
余談ではあるが、乱菊にちょっかいをかけられた、赤い外套の男は、修理作業に逃避し。
黒衣をまとう赤毛の男は、やはり洗練されたふるまいと、穏やかな顔の下に秘められた力強さが女性好きするのか、十番隊の女性隊員にチラチラ向けられる視線を、笑顔でスルー中だ。
「あ、日番谷隊長、次はこれです」
「見慣れない人だけど……新しい隊員かな？」
むろん、そこには男性隊員の嫉妬のオーラがくろぐろと混じっている。
「おのれ黒いの」
「ちくしょう赤いの」
『リア充爆発しろ』

そこはかとなくカオスな十番隊舎に、戻ってきた真言も、思わず口にするべき言葉を探しあぐねた。
「あー……どうだった？　学校は」
ぐりん。
「鬼道、ってのが面白かったです。詠唱は長めですけど」
「だな。死神って、かたっぱしから虚切り倒してくもんだとばっかり思ってたけど、治癒とか通信の術があるのな」
腰を上げて、真言の席を作る七季と、その隣に座っていたオレンジの髪の少年が、お互い頷きながら見学の感想を述べた。
隊舎のカオスな空気はスルーらしい。慣れたのだろう。きっと。
「そーかそーか。そりゃ何より」
じゃ。
「いっちー、今度から週に二日は、真央霊術院に通ってね」
「は？」

話は少し、さかのぼる。
「ルキアが死神の能力を譲渡したというのは、あの男か」
浦原フルボッコ大会が、盛況のうちに幕を閉じたあと。
白く端正な面に、苦渋の色を刷いた白哉は、沈痛な声で吐き出した。
死神の能力を譲渡することは、罪である。おそらくルキアは良くて休職、もしくは死神の身分を剥奪される恐れがある。
亡き妻から託されたルキアを溺愛レベルで過保護に囲ってきた白哉としては、一護の存在は苦々しい限り。
あの男さえいなければ――と、ちょっと物騒な思考に走る朽木家のシスコン当主を、チート巫女、もとい、真言のセリフが撃墜した。
「何言ってんの。いっちーは死神の息子だよ？　死神の息子に死神の力があって、何がおかしいの？」

「……は？」

「検査すれば、すぐわかる話だし。まあ、私らから見れば、一目瞭然なんだけどねー」

神妻の真言や、「神使（しんし）」の七季は、魂で相手を特定することができる。それは、裏を返せば、魂の特徴がわかるということでもあるのだ。

「まあ、ルキアちゃんが、その素質を引き出すためにちょっかいかけた可能性はあるけど？」

まがりなりにも、貴族である朽木家の当主である白哉は、頭が悪いわけではない。義妹に関しては、ちょっと不器用かつ、行き過ぎた愛情表現を示すこともあるが、それはそれ。

真言の投げた命綱を、警戒しながらもつかみ取る。

「……なるほど。それで、教官は何が望みだ？」

白哉の鋭い視線に、身じろぎすらせず、真言は琥珀の瞳で男を見返した。

「うちの――帝都心霊庁の――人手不足は知ってるでしょ？いっちーはね、ぶっちゃけ、将来有望な職員候補なのよ。ここで潰されちゃ困るの。一心さんとも知らない仲じゃないしね。

確かに、あの子には死神の血が、その力が秘められてるよ？」

しかし、基本的には「死神」は、死後の――霊なるものの職業なのだ。

「でも、だからってバランサーである死神が、勝手に生者どうこうして良いはずないでしょーが。

寿命うんぬんは、霊界の、コエンマさんとこあたりの仕事だぁね。いっちーには、人間としての将来があるの。おわかり？」

ここまで、くどくどしく説いてから、真言は、ふわふわ波打つ栗毛をぱさりと後ろへはらった。

「帝都心霊庁は、庁に採用予定の学生を、尸魂界との交流に送り、研修とすることを提案します」

「てなわけで、尸魂界で修行してもらおうと」
「本人の知らんところで話を進めるな――！」
ちからいっぱいツッコミを入れる一護だが、栗毛の少女に悪びれた様子はない。
「でも公務員だよ？
手当ていっぱいつくし、お給料良いし、霊力が生かせるし――ナナちゃんもいるよ？」
うぐっ。
言葉に詰まるオレンジ髪の少年が、拳を握るいっぽう、真言は琥珀の双眸をカマボコ目にして、にやんと笑う。
「高校生なんだし、そろそろ進路考えても良いんじゃない？
うちのバイトーズは、のきなみ職員候補なんだよね。霜夏も伯言も、帝都心霊庁に就職予定なの。
いちおう強制じゃないけど、ナナちゃん来るのに、あいつらが来ないわけないし。待遇も良いよ？
うちの職員って、みんな基本的に二束のわらじだからさ。実家が寺とか神社の関係者ばっかで、勤務は基本的に、二日に一日のシフト制なの。そーでもしないと、霊力の回復もあるし、潰れちゃうから」
事務畑はともかく、前線で悪霊などに立ち向かうことが多い真言たち、一課のメンバーは、朝も夜も関係ない。いわば医者や看護婦のようなもので、ハードワークだ。
帝都心霊庁の職員に限っては、副業も禁じられていない。
オカルト分野の技術者は少なく、護符などを販売したり、実家の家業を手伝うことも多いためだ。回りまわって、一課の仕事が減ったり、帝都心霊庁に卸される護符や霊符の類になるのだから、禁じることは悪手といえよう。
「でも先輩、いっちーはお医者さんの息子ですよ？

医師や看護士になるかもしれないじゃないですか。無理強いは良くないです」

七季は、悪意なく、やんわりと真言をたしなめるのだが、一護はその言葉に考え込む。

彼の父親・黒崎一心は、黒埼病院の院長だ。小さな病院だが、患者を治療するその仕事を、尊敬していないわけがない。

ただ、昔から一護には霊なるものが見えていて——言ってしまえば、死者の方が、身近になってしまっていた。

——医者は、生者相手の仕事だ。

死神代行であれば、虚（ホロウ）を倒していれば、それで良かったが、果たして一護が医者に向いているのかどうかは、彼じしんにもわからなかった。

「でもねえ。このままじゃ、いっちーの始末がつかないんだよ」

七季に膝上に抱っこされて乗っかった、赤毛の少年の頬をつつきながら、いやいやと顔をそらされた真言は、ぷうっとふくれてみせた。

「いっちーの性格で、いきなり斬魄刀は没収。記憶いじってハイさよなら——って、納得する？」

「無理だね」

「でしょ？」

「そりゃあ……」

オレンジ色の髪の少年が答えるより先に、黒髪の少女がすっぱり切って捨てた。真言も栗毛を揺らして、七季を見つめる。

一護も、しぶしぶ同意を示した。

「だから、いっちーを、こういうものに関わらせたままでいられるようにするには、現状、うちに所属してもらうのが良いんだって——ミカちゃんが言ってた」

「あ。やっぱ神門（みかど）さんなんだ、これ考えたの」

——てか、新人欲しいのが九割っぽいですけど。

ないしんツッコむ七季。

考えるよりも突っ走ることが圧倒的に多い真言には、珍しいと思ったら、やはり彼女の世話係が噛んでいたらしい。

まあ、たいていの場合、力技で何とかできてしまうのが、真言の凄いところであるが。

「新人の促成栽培したいんだけど、妙神山って交通が不便でしょ」

「秘境ですもんね」

「だから、いっそのこと、霊体だけ鍛えられる場所として、尸魂界を研修先にしたらどうかって。お給料も出るよー。まだ就職してないし、研修中だから、ちょっとだけど。

いっちーはテストケース第一号ってとこ。上手く行けば、これから人員増やすって。あと前もって（？）死神として鍛えておけば、死後、ここで働けるでしょ？　尸魂界も人手不足には変わりないしさ」

目的のためなら手段を選ばない男、それが神門（みかど）である。

「ぶっちゃけた話、ナナちゃんがいないときのストッパーを増やしたいんだってさ」

もちろん、異世界に脱走癖のある真言の、である。

『ああ、なるほど』

アーチャーやリドルはおろか、尸魂界の死神連中までが、さもありなん、と頷いた。

ときどき真言に拉致されて、巻き込まれトリップをする一護も同様である。

「ま、霊力のコントロールを学ぶには良いと思うよ。いっちー、何にも知らないから大ざっぱだし。良い機会だからやってみ？

あ、ルッキーは、下界から尸魂界に戻って、また別のお仕事だって。ただし、いっちーが学院に入るんなら、そのサポートしてくれるけど。

空座町の方は、ちゃんと別の死神が回るから大丈夫だよー。もともとシフト制というか、交代制なんだから」

「うーん……」

そんな感じで、栗毛の美少女の勧誘じみたセリフに、ふたたび一護が考え込んでいるころ。

「フム。結果として、黒崎なる男のサンプルから、確かに死神の遺伝子が見つかったヨ」

涅の言葉に、白哉が、妹を罪人にせずに済みそうだと安堵のためいきを洩らし、その横では、ぐるぐる巻きになった浦原が、スカートの中をのぞかれそうになったネムに、足先でつつかれていた。

「漣君いわく、技術開発局には、『崩玉』のフェイクを作って欲しい、と」

白哉と一緒に、浦原喜助を連行してきた浮竹が、デスマスクを連想させる面の涅へ、ことづけられた言葉を伝える。

「……肝心の『崩玉』じたいはドコへやったのだネ？」

涅は、指の長い手を、わきわきと動かしながら、苛立たしげに問いただした。おそらく、「崩玉」をいじりたくてたまらないのだろう。

「それは――」

「ところで先輩。それ何ですか？」

「これ？」

真言が弄んでいた、黒っぽいビー玉のようなものを、七季は不思議そうに眺めていた。

「『崩玉』って言うらしいよ」

「ほーぎょく？」

――宝石のことかな？

こてん、と黒髪の少女は首をかしげる。結ったポニーテールが、

ひょこりとしっぽよろしく揺れてはねた。
「ところで、ナナちゃんの斬魄刀って、ものを溶かせるっぽいこと言ってたよね？」
「はあ。みたいですよ。だよね、王水？」
「ん」
こくん、と頷く赤毛の少年は、さっきからぺったり黒衣の少女にくっついてご満悦だ。幼さの抜けない、ふっくらした頬で、にぱーっと笑うところが、主たる七季と似ている。
「これ溶かせる？」
ぽん。
差し出された「崩玉」。金睛眼にそれを映した「王水」は、真言には答えず、七季を振り向いた。
「ななきは、これ溶かしたら、褒めてくれる？」
きらきら期待を込めたハチミツ色のまなざしで見つめられて、少女は「ええと」と困った顔をする。
「これ、溶かしちゃっていいんですか？」
「できれば跡形もなく」
――危険物ってことですか。
即座に返ってきた言葉に、「崩玉」が何か知る由もない七季は、夜色の目を伏せると、すこしだけ瞬いて「王水」を撫でた。
「お願い、王水。綺麗に溶かしちゃって」
「うん！」
とたんに、ビー玉サイズのそれは、しゅうっとかすかな音と共に消えた。
「早！」
間近で見ていた一護も思わずツッコむスピードだ。これが敵に回ったらと思うと、心底シャレにならない斬魄刀である。
「そういや溶かしたものって、最終的にどうなるんだ？」
「ななきの栄養になるよ！」
にっこり笑顔で、元気にお返事をした水干姿のちびっこは、褒め

て褒めて、と黒衣をまとう少女の、たわわな胸元に顔を埋めて、ごろごろ懐いていた。

#１０９　剣を執るもの－崩れた計画－（後書き）

あとがき

＞あんまり山場はなかったくせに、原作ブレイクの度合いが酷い件。

ムダに長くなりました。

#１１０　剣を執るもの―酒と剣と花の名と―（前書き）

まえがき

＞今回は、番外編的な話です。リリなの、ゼロ魔キャラは登場しません。

#１１０　剣を執るもの―酒と剣と花の名と―

「というわけで、『崩玉』は問題なくナナちゃんの栄養になりました☆」

『ウオオオォォイ！』

ジッパー開けて技術開発局へとチョクで報告にやってきた、トンデモ巫女――もとい、真言の報告を聞くなり、浮竹や十二番隊の面々がこぞってツッコミに走ったことを、誰が責められるだろうか（反語）。

「問題大アリっすよ！？　何してくれちゃってんですか漣サン！」

床にグルグル巻きで転がされたままわめく浦原と。

「その『ナナちゃん』とやらをいますぐ連れて来たまエ！　ワタシじきじきに解剖したいネ！」

「はい却下ーｖ」

ずごしっ。

思わず本音をダダ洩れにした涅は、問答無用で、栗毛の少女の足蹴にされて沈黙した。

『……』

まがりなりにも、十二番隊の隊長である涅を、即座に沈められる真言の、実力と容赦なさに、その場の人間が恐れおののく。

一斉に、ずざざっと後ずさった死神たちは、「ヤベェ地雷だ」と直感したらしい。涅に絶対服従のネムですら、緋袴の巫女――斬魄刀を納めたので、いつもの姿に戻っている――から距離を取っていることから見ても明らかだ。

「うちのナナちゃんに手出ししようなんて馬鹿なの？　死ぬの？

ルッキーの体に細工したテメェが人のこと言えると思ってんのか浦原。

祈るカミサマなんて心にないだろうから、このままミンチでオーケー？」

「ちょっとマコト。そいつら潰したら、『崩玉』の偽物作れないじゃない。まだ生かしておかなくちゃ」

まっかなオーラを背負った巨乳巫女さんに、ツッコミを入れた猛者。

それは、浮竹たちに念のためついてきた、リドルだった。黒髪の少年は、そのルビーアイに呆れの色を浮かべつつ、さりげに黒い言動を混ぜ込んでいる。

「まだ」ということは、用済みになったらお払い箱ということですよね？

白哉と浮竹、そして浦原あたりが、何ともいえない面持ちで、秀麗な容貌の人外少年を見つめているが、当人はいたって涼しい顔だ。

「いやコイツ、ミンチにしたくらいじゃ死なないし」

「ならば良し」

即座に切り返すリドル、さすが闇の魔法使いである。

七季を実験動物あつかいした涅に、表面上はクールでも、大変ご立腹だったようだ。意外と丈夫な浦原は、すっかり気絶しているデスマスク隊長と違って、まだ意識がある。

「いやいやいや、良くないッスからね！」

「これでも彼も隊長だから！　言動は、涅に非があったけど！」

「……再生するにしても、元に戻る待ち時間が惜しいのではないかと」

浮竹に続き、白哉も、フォローと思えない、なかなか辛辣なセリフではあるものの、リドルたちを止めに入る。

『ちっ』

そろって舌打ちする、琥珀の目の美少女と、ルビーアイの美少年に、十二番隊の隊員は、そろって彼らに手出しするまいと誓ったとか。

それから三時間後――。

『Ｓｏ　ａｓ　Ｉ　ｐｒａｙ，　――その体は、きっと』

『ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｂｌａｄｅ　ｗｏｒｋｓ．――剣で出来ていた』

漆黒のはずの夜天が赤空（しゃっくう）に燃える世界で、白の男と、赤の男は対峙していた。

がかかかきんっ。

不毛の荒野に、ざあっと散り躍（おど）る白。

あでやかな桜のような花吹雪は、そのじつ、ひとひらばかりの白刃が乱れ舞う光景に他ならない。

華麗な刃の白を遮るは、薔薇色。

一重にして七枚の、神秘的な花びらは、投げつけられた武器を拒む絶対の防御。

波濤のごとく押し寄せる桜刃をかいくぐり、白の男に殺到する白銀黄金（がねこがね）の剣群が空を裂く。

それは、まさに絢爛として、夢幻のごとき光景だった。

始まりは、よくあることに、真言の一言から。

「呑むぞーっ！」

乱菊が乗り、引きずられた日番谷が白哉を巻き込み、恋次が引っ張られ、吐血した浮竹が運ばれて、兄と一護を心配したルキアが加わり。

気がつけば死神と英霊と「神使（しんし）」、神妻主従を交えた、カオスき

わまりないドンチャン騒ぎが、朽木邸にて催される運びとなった。
一護と七季は、未成年だからと断って、ふたりして紅茶に逃げているが、大人のアーチャーと、記憶になってウン十年のリドルは、逃げられるはずもない。
七季の従者は二人して、真言が持ち込んだ酒の相伴に預かることとなった。
「アチャ男にはこれね！」
どん。
『おんな泣かせ』
もったいないけど、と押し出されたそれは、純米大吟醸。
その名前を見て、「ああ」と一部の男性陣が納得顔で頷く。
「……嫌味かね」
その精悍な面(おもて)を引きつらせるアーチャー。
「いやいや、これはどんぴしゃでしょ」
具象化したままの「切嗣」が横からツッコミを入れた。笑顔で、主にもまったく遠慮のない斬魄刀である。
「ナナちゃんには、これを是非、呑んで欲しかったんだけどなあ」
続いて真言が引っ張り出した銘柄を見て、こちらも一同が苦笑い。
『鬼ころし』
「鬼をも殺す強い酒」と謳われた酒だ。しかも、栗毛の少女が持ち出したのは、特別純米原酒。
「……や。私、お酒苦手ですから。しかもこれ、辛口だし」
それを、ぱたぱた手を振りながら断る、黒髪の少女。
甘党の七季は、アルコールよりもお茶党なのだ。
「でも、言いたいことはわかる。名前は合ってるわ」
一護もうんうん頷いた。
「にゃろー」
むくれる黒髪の少女は、かるく拳で少年をぶつまねをする。
「リドルには三蛇酒でも用意したかったんだけどさあ、あいにく品切れで」

残念そうに唇を尖らせつつ、自分のコップにとぷとぷ「鬼ころし」を注ぐ真言。美少女なのにコップ酒て。

ちなみに「三蛇酒」とは、ハブ、まむし、コブラの三種類の蛇と様々な薬草をミックスした薬酒で、スタミナ剤にもなると言われるものだ。中国では、リウマチに効果があると伝えられている。

蛇足である。蛇だけに。

「いや、そんなアヤしげなものはノーサンキューだから」

言いつつ、並んでいた酒瓶の中から、ワインを選んで開ける黒髪の少年。とっくとっくと赤い芳醇な液体が、グラスに注がれていく。

まあ、そんな感じで。

ルキアにお酌をされた白哉が無言で照れたり、乱菊に脱がされそうになった日番谷が、氷輪丸（うっかり帯刀したままだったが、真言がいる間は問題ない）を抜きかけたり。

また、真言がそれに目をつけて、日番谷に氷を作らせたり。

朽木家には珍しく、わいわいやりながらの宴席だったのだけれども。

いうまでもないが、尸魂界で饗される酒は、死神が飲むもの。

すなわち。

霊体が酔うためのものである。

当然のごとく、英霊たるアーチャー、リドルも例外ではない。

「だからさ～。さいしょ、ルッキーの中に『崩玉』見つけたときはさ～。てっきり、いっちーの側にいたいから、そのための義骸に乗っけた重石（おもし）？みたいなものだと思ってたのね～」

ほんのり頬を桜色に染めて、上機嫌でしゃべる栗毛の少女に、黒髪の少女も相槌を打つ。

ちなみに七季は、いまだに「崩玉」がどんなものであるか、わかっていない。

「あ～。それ、私も思いました～。何か変なの、朽木さんの中にある～って。あれ重石じゃなかったんだ～」

あはははは～。

赤巫女と黒巫女は、仲良くふわふわ笑っている。

七季の口調も浮かれているのは、乱菊や真言が、こっそり彼女の紅茶にリキュールやブランデーを垂らしていたためだ。

そのままアルコールを飲むことは苦手な七季だが、コーヒーや紅茶、ゼリーやお菓子などに混ぜるぶんには平気という、いささか変わった嗜好の持ち主だったりする。

顔には出やすいけれど、もともと内臓が丈夫な少女のことだから、おそらく肝臓も強く、アルコールの分解が早いのだろう。

じっさい口にしたところで、顔は赤くなるが、三十分もすると落ち着いてくるのだから。

ところが、のんきにしゃべる少女たちの会話を、聞きとがめたものがいた。

「……ルキア。あの黒崎なるものとは、どういう関係だ？

よもや、人目をはばかるような間柄ではないだろうな。正直に、この兄に打ち明けるのだ」

端正な面差しに据わった目の青年が追求する言葉に、耳をダンボにしている赤毛の青年が一人。

「な、何をおっしゃるのです、兄様！　一護と私は、そそそそのような関係ではありませんっ！」

酔いのせいだけではなく頬を染め、華奢な黒髪の少女が、どもりながら声を上げるも。

「ないから。俺とルキアは、単なる協力者だって。変な疑いかけんな」

ジト目ですぱんと白哉にツッコみ、乙女心を粉砕する一護に、今度はシスコン兄貴が食ってかかる。

「何だと！　貴様、うちのルキアの何が不満だというのだ！」

「ちょ、言ってることがさっきと違うぞアンタ！」

仏頂面のイケメンに詰め寄られて、あわてて身を引くオレンジ髪の少年。
「しいていうなら女性らしさじゃない？」
と、新たに会話を引っかき回すリドルが参入。
「たわごとを！　うちのルキアは、行儀作法から何から、厳しくしつけてきた！　嫁入り修行も抜かりない！」
拳を握って力説する、黒髪の美青年。しかし六番隊隊長の威厳、台無しである。
ちなみに外野で、こっそり白哉のセリフに聞き耳を立てている恋次は「そーかー」などと、どきどき胸をときめかせている。頑張れワカゾー。
「……だいぶ酔ってんな」
既に壁際に退避した日番谷少年は、ぽつりと離れた場所からツッコミを入れた。
彼の隣では、ふだんの白哉からは考えも寄らない醜態を眺めて、その胸に一升瓶を抱えた乱菊が、きゃらきゃら陽気に笑っている。
「イイじゃないですかあ～。面白くてＶ」
「青春だねえ」
乱菊にお酌をしているのは、主人から離れている「切嗣」である。赤毛に金の目をした男は、脱いだ黒いフロックコートを腕にかけ、膝上に乗せている。
かたやアーチャーはというと、そのへんに転がっている酒瓶を片付けて、朽木家の使用人に渡している。こちらはこちらで、まめな男である。
「具体的にいうと、包容力。ていうか、バスト」
いっぽう、白哉を中心とした、一護、ルキア、リドルの会話はまだ続いていたらしい。
「はうっ！」
ざっすり。
黒髪の少年の指摘に、思わず自分の胸部を押さえて、うずくまる

ルキア。乙女心を直撃された模様。
「うちのナナキを見なよ。豊かさの象徴のような、たわわに揺れるおっぱいの動きだけで、男心を駆り立てる魔性！
母なる海を連想させる、変幻自在の柔軟性に、顔を埋めたときの、あたたかさと信じられないやわらかさ！
何より、男の手にもなお余る、あの大きさに到達することができたときの、満たされる征服欲ときたら、世界における最高峰の山を登りきった達成感をも越えるね！」
ちからいっぱい熱弁する、魔法使いの少年だが、やっぱりこちらも酔っている。間違いなく酔っている。シラフでも言いそうだけど。
「何を言う！
ルキアの魅力は、清楚さと可憐さだ！　贅肉などない、折れんばかりのほっそりした手足！　儚い首筋！　穢れを知らぬ白百合そのもの！」
いつもの無口さはどこへやら、据わった目もそのままに、熱意を込めた声で義妹の魅力を語る白哉。
その間に、落ち込んだルキアへとにじにじ近寄った七季が、
「朽木さーん。ね、元気出して。アーチャーにあんみつ作ってもらお？　甘いもの好きだったよね？」
と、気を引き、顔を上げさせると。
「そーだよ。アチャ男はアレだけど、料理はお菓子でも何でも美味しいよー。乙女心を傷つけたヤツは、あとで私が折檻しとくから」
真言も横からルキアを支えて、ふたりしてきゅうきゅう抱きつく。
「漣殿……七地さん……ああ、でもほんとに、やわらかくて気持ち良いです……」
ちょっと男の気持ちがわかります。
少女たちの間では、何やら妖しげな香りを漂わせた友情が築かれていたり、いなかったり。
非常に余談だが、その背後で、ぼたぼた赤いものをこぼしている、赤毛の青年が「切嗣」に介抱されていた。主に似て、世話焼きな斬

魄刀である。
さらにそれを酒の肴にする乱菊と、日番谷。
「乳など、しょせん見苦しい贅肉！　それがわからんのか！」
ぴきっ。
ちょっとアルコールで熱っぽかった部屋の空気が、凍りついた。
乱菊も、むっとした顔になり、真言もジト目を白哉に向ける。
そして。

#１１０　剣を執るもの―酒と剣と花の名と―（後書き）

あとがき

＞続きます。きのう同様、えらい長くなって遅くなりました（泣）。

#１１１　剣を執るもの―酒と桜と剣の男―（前書き）

まえがき

＞今回は、番外編的な話です。リリなの、ゼロ魔キャラは登場しません。

#111　剣を執るもの ―酒と桜と剣の男―

ぼろっ。

「あれ？」

大きな夜色の瞳から、水晶みたいな涙がぼろぼろこぼれ落ちるさまに、誰より本人がびっくりしていた。

「な……七地殿……？」

「あれ？　あれ？　止まんない……」

ぐしぐしと目元をこすって涙を拭おうとする黒髪の少女は、あとからあとから湧き出してくる涙に、おたおたしている。

いいかげん酔いの回っている七季は、「贅肉」という単語に、思いのほかショックを受けていたらしい。

白哉に対しては何の遺恨もないのだが、刺されたような痛みが胸をじくじくと苛(さいな)み、頭からすうっと血の気が引いている。

くらっとした彼女を支えたのは――無骨な手だった。

「あーちゃー？」

さっきまで、こまごまと片づけをしていた男が、くしゃりと黒髪をかき混ぜる。

濡れた黒瑪瑙の瞳に、いたわるような笑みをにじませた従者の、精悍な双眸が映り込んだ。

『Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ．――――体は剣で出来ている。

Ｓｔｅｅｌ　ｉｓ　ｍｙ　ｂｏｄｙ，　ａｎｄ　ｆｉｒｅ　ｉｓ　ｍｙ　ｂｌｏｏｄ．――――血潮は鉄で　心は硝子。

Ｉ ｈａｖｅ ｃｒｅａｔｅｄ ｏｖｅｒ ａ ｔｈｏｕｓａｎｄ ｂｌａｄｅｓ．――――幾たびの戦場を越えて不敗。
Ｕｎｋｎｏｗｎ ｔｏ Ｄｅａｔｈ．――――ただの一度も敗走はなく、
Ｎｏｒ ｋｎｏｗｎ ｔｏ Ｌｉｆｅ．――――ただの一度も理解されない。
Ｈａｖｅ ｗｉｔｈｓｔｏｏｄ ｐａｉｎ ｔｏ ｃｒｅａｔｅ ｍａｎｙ ｗｅａｐｏｎｓ．――――彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う。
Ｙｅｔ，ｔｈｏｓｅ ｈａｎｄｓ ｗｉｌｌ ｎｅｖｅｒ ｈｏｌｄ ａｎｙｔｈｉｎｇ．――――故に、生涯に意味はなく。
Ｓｏ ａｓ Ｉ ｐｒａｙ，ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ ｂｌａｄｅ ｗｏｒｋｓ．――――その体は、きっと剣で出来ていた』

それは「無限の剣製（アンリミテッド・ブレイドワークス）」。
複製された無数の剣が、さながら墓標のように大地に突き立つ、剣の丘の心象世界。その内部は、あらゆる剣を構成する要素で満ちており、目にした剣を瞬時に読み取り複製、結界内に記憶する。
彼の生まれ育った世界における、魔法に最も近い、大魔術。
いきなり固有結界を展開した男は、やっぱり酔っていた。
「さあ、これなら周囲に被害が出ることもないだろう」
確かに、そこは現実をめくり返した、心象世界にして、バトルフィールド。この世にして、この世ならざる場所。
「マスターを傷つけた不届き者と、話をつけてくる」
鋼色の鷹の目も、きっちり据わっていた。
酔っている。間違いなく、酔っている。
「ＯＨＡＮＡＳＨＩですね、わかります」
すかさず横からツッコミを入れるリドル。

「……ん」
すんっ、と鼻を鳴らした少女も、酔っ払いである。まだ止まらない涙をこぼしながら腕を伸ばして、きゅうっと従者の首を抱いた。
「ケガしちゃ、やだ」
酩酊状態で理性がきいてないだけに、本音がダダ洩れているのだろう。ふだんは言わない無茶をねだる。彼女らしくない、不安げなソプラノで、アーチャーに擦り寄る七季は、いとけない少女にしか思えない。
「了解した」
「やったれ、アチャ」
ぐっ。
座ったままの真言が、立てた親指を、地面に向ける。
「私が許す！」
「お気をつけて」
ルキアまでが、手を振って見送る。いつのまにか赤い外套に包まれている背中を見送りながら、ルキアは、今度は自分から七季を抱きしめた。
「すまない、兄様が……」
「んーん。リドルもアレだし。ごめんね。朽木さんかわいーよ。きっといっちーも、そう思ってるよー」
ふたたびにゃんにゃんジャレだす、酔っ払い乙女たち。
「私も混ざってこよーっと」
そこに乱入、もとい、がばっと抱きつく勢いで参入する乱菊がいたり。
少し離れた場所では、まだ理性をすっ飛ばしていない日番谷が、初めて目にする固有結界というトンデモ現象に、我が目を疑っている最中だ。
「さて、マスターがお呼びだ」
すっ。
錬鉄の英霊が手を上げるなり、立ち上がる「切嗣」。

とたんに、彼は斬魄刀へ変じると、銃剣となって担い手の傍らに納まった。
「刃の貯蔵は十分か？」
「散れ、千本桜」
対する白哉も、斬魄刀を解放していた。
いきなりはね上がった霊気に、一護が飛びのき、リドルも宙を飛んで七季の傍らに着地する。
そして激突する、剣群と、桜刃。
サイズの違う宝剣たちにぶつかり、身悶えする白刃の花吹雪へと、さらに黒白の双剣が投擲される。
千将・莫耶は、宝具たるべき硬さによって白刃の雲を抜け、その向こうへたたずむはずの白哉へと襲いかかる。
「くっ！」
すかさず瞬歩で逃れる青年。その身を庇うように、千本桜の雲霞が後を追う。
宝具を知らぬ白哉のこと。まさか、千本桜の刃が突破されるとは思わなかったのだろう。一気に警戒を引き上げ、卍解へと至る。
「千本桜景厳（せんぼんざくらかげよし）」
柄さえも手放し、地面に吸い込まれるようにかき消える。
次いで、足元から巨大な千本の刀身が立ち昇る。直後それらはいっせいに舞い散るや、始解時を遙かに上回る数の刃と化してアーチャーへと躍りかかった。その総数は、およそ数億枚。
桜色の濁流が、赤衣の男に迫るも。
ドン！
「熾天覆う七つの円冠（ロー・アイアス）」
広がる薔薇色の光からなる七枚の花弁は、一枚一枚が城壁と同等の防御力を持つ、アーチャーの得意とする防御用宝具によって、押し寄せる千本桜の白刃が塞き止められた。
どどどどうっ。
「攻撃型とばかり……防御もこれほど硬いとは！」

しかも、斬魄刀である「切嗣」を屈服させた戦いからは思いも寄らない、凄まじい異能だ。

その間にも、この世界に突き刺さるあまたの剣は、空を飛び、次々と白哉をつけ狙う。

鬼道を織り交ぜる暇もないほどに襲いかかる剣、剣、剣。

宝具の硬さは、先刻の衝突で承知している白哉は、瞬歩を連用しながらも、アーチャーへ叩きつけていた千本桜を、防御のために引き戻した。

ガゥンガゥンガゥン！

が、そこに斬魄刀「切嗣」から放たれた銃弾が撃ち込まれる。

『――ッ！』

「千本桜」から、声にならない悲鳴が上がった。

同時に、白哉が崩れ落ち、舞い散っていた桜刃が、残らず地に落ちた。

ざざあっ。

まるで潮騒のような音を立てて、刃の花びらが散り落ちる。あとにはいびつな刀が残った。

「切嗣」の卍解能力「刻帝因果切嗣（こくていいんがきりつぐ）」。

それは、かつて「魔術師殺し」と呼ばれた男の切り札――「起源弾」と等しい能力をそなえた魔弾。

撃った相手の「因果を切り嗣ぎ、狂わせる」という最悪のシロモノ。

「マスター」

だが、従者に呼ばれた七季は、とことこ近寄ると、倒れ伏している白哉にかがみこんだ。

「王水」

少女の一言によって、アーチャーがもたらした傷も異常も――すべてが癒され払底される。

あとに残ったのは、高い矜持をへし折られ、叩きのめされた、朽木白哉がいたという事実だけ。

「オーダー通りだ、マスター」
跪く弓の騎士に、白哉を癒し終わった黒髪の少女は、きゅうっと抱きつく。
「ん」
無傷で帰ってきた――戦いを終わらせた褐色の肌の偉丈夫の、あたたかさに安堵して、七季はその頬に唇を寄せた。
「おかえり、アーチャー」

そのあと。
固有結界を解除したはいいが、盛り上がった女性陣から祝福とばかりに、寄ってたかってハグやキスの雨あられを受けたアーチャーは、男性陣からのきなみ白い目で見られたという。
「……あれを越えなきゃいけないのか、俺」
ちくしょ、と呟いた一護は、がしがしオレンジ色の頭をかくと、テンションぶっちぎりの真言に、ぼそりとささやいた。
「研修の話、受けるわ」
少年の抱く大志は、はるか高く。
越えたい壁も、また厚く。
「らーじゃ。がんばれ、いっちー」
いっぽう、サムズアップした少女も、思惑通りの展開にほくそえんでいたりした。

「くしゅんっ」
「寒いのかね？」
「ん？……んんー？」
アーチャーの言葉に、ふるふるかぶりを振る七季は、背筋に走っ

た悪寒みたいなもの――不思議と嫌な気配はしない――に首をかしげつつ、朽木家の使用人に、風呂へと案内されたのだった。

そんでもって翌日。

本音をダダ洩らし、羞恥に溺れて溺死しそうな白哉と。

酔った弾みで、固有結界を展開するという暴挙におよんだことを、猛省してうなだれているアーチャーと。

ゆうべのドタバタを心から楽しんだものの、珍しく二日酔いなるものになっているリドルと。

酔っ払いガールズの、にゃんにゃん光景が脳裏から離れずに、ぶつぶつ理性を引き戻そうとしている恋次と。

ひとり決意を新たにしている一護と。

そんな面々を、「どうしろと？」とないしんグッタリしつつも、職場へと引率する日番谷の姿が、朽木邸から見られたという。

ちなみに女性陣はというと。

ルキアは、しばらく崩玉がらみの騒動が落ち着くまで、朽木家に待機。

乱菊は、休日なので帰宅。

真言と七季はというと、斬魄刀を預けるために、隊舎へと向かったのだが。

「ななきと離れるなんて、ぜったいやだ――！」

彼女の斬魄刀である「王水」の、ごねることごねること。

かなり強力な――むしろ極悪の域にある――「王水」を、このまま下界へ持ち込ませるわけにはいかない、という総隊長の結論に、幼い斬魄刀は、だだっ子全開で嫌がった。

まあ、真言の斬魄刀でさえ、尸魂界に預けられているのだ。「王水」もそうなるのは当然なのだが、使い手を慕う彼は、七季に触れてもらえない距離にあるなど耐えられない、と目をぎらつかせて反抗しかかった。

仕方なく七季が具象化を解いたのだが、それですら、封印状態で暴れるという規格外っぷりを見せつける始末。

七季が抱いていれば収まるのだが、引き離すと、とたんに鞘から抜き身へとなるのだから、手に負えない。

と。

「しゃーない……『烏衣息長帯比売(ういのおきながたらしひめ)』」

真言が、みずからの斬魄刀を呼ぶなり。

しゃらん。

黒衣をまとった彼女が顕現した。

趣を凝らして結われた黒髪には、緋色の牡丹が飾られ。

繊手は長くゆったりした袖に隠れて、翻れば翼のよう。

高い位置で締められた錦の帯によって、はちきれんばかりの豊かなバストが強調され。

中華風の衣装である合わせからは、これでもかとわがままなボリュームの乳房を締め付けられた、まっしろな谷間が、窮屈そうにのぞいている。

もちろん隠されていない喉からデコルテにかけて、その白さを引き立てるように、ねっとりと紅い玉髄の首飾りが揺れている。帯にも、花を模した玉飾りが下がっていた。

あどけなさを残しながらも成熟した卵型の面輪には、大きな目が夜色にきらめき。目尻には、艶(あで)やかさをさらに引き立てる紅がほのかに刷かれて。

ふっくらと果物じみた唇には、朱鷺色の紅を。

ようするに、卍解した真言の斬魄刀は、大人になった七季――それも、めちゃくちゃ色っぽく、官服を着崩した姿の――だった。

『うおおぉ！？』

一護はおろか、恋次も思わず前かがみになるセクシーさだ。
ふだんの七季は、パンツルックに襟付きのシャツや、男装一歩手前のきちりとした格好が多いだけに、このいでたちは刺激的だ。
小柄な体躯は庇護欲をそそらんばかりに華奢なのに、胸元や腰周りはむっちりと肉づきが良く、男に愛されることを知った大人の凄艶さが、匂いたつように肌身を包んでいる。
露出しているのは、せいぜいが胸の谷間と首筋だけなのだが、谷間に桜花のような朱痣が散っているのが、悩ましい。
もっとも、卍解状態で、この彼女にしごかれたことのある白哉などは、土下座で後ずさるという、例の奇妙なスキルを発揮していた。
いったい何をされたのやら。
「やれやれ、手のかかる」
「あ」
背丈は七季とそれほど変わらない「烏衣（ういい）」は、そっくりな黒髪の少女から、ひょいと封印姿の「王水」を受け取った。
「坊。姫（ひい）さまを困らせるのは止めてくれ。寂しいのなら、他にやりようはある。
七季殿。あなたの髪を結っている紐をいただけるかな？」
「え、ええ。良いですけど」
大人の自分を見ているような、姉がいるような、不思議な心持ちで、七季はしゅるりと解いた紅い紐を「烏衣（ういい）」へと手渡した。
すると、袖口から指を除かせた「烏衣（ういい）」は、きゅっと結い紐で王水にちょうちょ結びをした。
「これで良し。主の気配が残っているものがあれば、この子も安心するでしょう。あとは、私と一緒に保管してもらえば、寂しくはないでしょう？」
後半は、胸に抱く「王水」に向かっての言葉に、斬魄刀の黒鞘が、かたりと揺れた。
――がまん、する。
声なき拗ねた響きが伝わってきて、七季はそっと斬魄刀の柄に唇

を押し当てていた。
「また、会いに来るから」
とたん、ぱあっと王水のまとう雰囲気が明るく華やいだ。
ようやく落ち着いた、トンデモ斬魄刀に、居合わせた死神たちが、胸を撫で下ろす。
「さーて。いろいろ面白かったね。んじゃ帰るよー」

そんなこんなで。
七季と一護の、尸魂界デビューは、こうして幕を閉じたのだった。

#１１１　剣を執るもの ―酒と桜と剣の男―（後書き）

あとがき

＞１００話記念に、いただいたリクとネタを書くだけの話だったのに、気がつけば１０話を超える長丁場（汗）。

お付き合いいただき、本当にありがとうございました！

うん、しれっと原作ブレイクしたし。どうしてこうなった……（遠い目）。

先輩の斬魄刀「烏衣息長帯比売（ういのおきながたらしひめ）」は「神功皇后（じんぐうこうごう）」の別名「息長帯比売（おきながたらしひめ）」から取りました。

「たらし」って響きがオリ主っぽかったんで（笑）。

次回からは、予定通り、ゼロ魔本編を再開します。これからも、どうぞよろしくお願いします！

#１１２　始まらない物語ー長女、来るー（前書き）

まえがき
＞今回はルイズアンチ的な傾向があります。お嫌な方はブラウザバックぷりーず。

#112　始まらない物語ー長女、来るー

「おかえり、アーチャー。お疲れさま」
「ああ。ただいま、マスター」
オールド・オスマンから、もぎとれるだけもぎ取ってきた赤い外套の騎士は、かるい達成感を伴う疲れを胸に、少女のハグを受け止めた。
ぽすっ。
小柄でやわらかく、あたたかい体は、毛皮こそないものの、小動物さながらに、触れるものの気持ちをやわらげる。
入浴を済ませたこともあって、石鹸につけられた、すずらんの香りが、ほのかに彼の鼻先をくすぐる。
「それじゃ寝ようか」
男の帰りを待っていたのだろう。
学生寮の部屋――ではなく、学院から離れた小屋――のリビングにそろった、異世界トリップご一行は、いずれもパジャマ姿だ。
リドルとリニスは、にゃんこフォームになっているが。
「そうだな」
もともと英霊であるアーチャーは、霊体化すれば、汚れその他はリセットされる。急いで風呂にはいる必要もないといえばない。
「じゃ、私の中においで。アーチャー、リドル。きょうは頑張ったし、ふたりとも一緒に寝よ？」
ぶふぉ！
ふんわりにっこり笑顔で腕を差し伸べる、黒髪の少女に悪気はない。
七季のセリフを誤解した才人が、いきおい噴いているが。
「ああ。お言葉に甘えよう」

「独り占めできないのは気に入らないけど……ま、しょーがないか」
すうっ。
言うなり、霊体化した二人は、七季の中に――器の中に納まった。
「おやすみー」
「神使（しんし）」である少女の体は、霊なるものにとっては、いわば最高級の寝心地を約束する安眠ベッド。
てなわけで、約一名に多大な誤解と妄想を植えつけた主従は、戦いの疲れを癒すべく、仲良くベッドに入ったのだった。
「まぎらわしいんだか羨ましいんだか！」
頑張れ青少年。

トリステイン魔法学院が襲撃を受けた翌日。
「ちびルイズ！　これはどういうこと!?」
ヴァリエール家の三女である、ピンクブロンドの少女は、金髪の長女に襲撃――もとい、訪問を受けて、がみがみと説教を受けていた。
肉の薄い、白い頬は、幾度となくつねりあげられているため、くっきりと一部だけがまっかに跡がついている。
「ケガをしたというのに連絡もなし！
ミス・ナナチから手紙を受け取って、どれだけ心配をかけたと思ってるの!?」
七季に手紙の配達を頼まれたシームルグ・東風（こち）は、持ち前の能力をフル活用して、きのうのうちにヴァリエール領と学院を往復したのである。
ぎゅうううう。
「ひたひ、ひたいれす、きゃんっ！　あだだだ」
「しかもルイズ、あなた、その場で治療費の支払いを断ったそうじゃないの！

手紙には、その一部始終を記した内容と、証拠として、その場に居合わせた生徒たちの直筆の証言が添えられていたわ。

どういうことかわかってるの、おちび！

あなたは自分の価値を貶めた、いいえ、ヴァリエールの名前を貶めたのよ！　反省なさい！」

さんざん妹の頬をつねり上げたエレオノールは、そこまで叱りつけて、ようやっとルイズの顔から指を離した。

「ひ～ん……で、でも姉さま……勝手に治療しておいて、あんな金額……」

私のお小遣いじゃ、払えないと思ったんですもの。

じんじん痛む頬をさすりながら、ルイズは涙目で金髪の姉の細面（ほそおもて）を見上げた。

「それに、あの女、気に食わないし」

ぽそり。

本来であれば平日、授業があるところだが、さすがに襲撃事件の翌日である。爆破された校舎の一部を修理したり、外出して難を逃れた生徒への説明など、やるべきことは多岐にわたる。

そういう事情でトリステイン魔法学院は、うちわの決定で急遽、休校となっていた。あすには授業を再開する予定である。

「お馬鹿！」

「ひっ！」

とっさにつねられまいと、両頬を庇って首をすくめたルイズは、姉の落とした雷にぎゅっと目をつぶった。

「あなたのやったことはね、ヴァリエールは、ルイズの治療に出す金はない、治療に礼すらしない、そう公衆の面前で宣言したのと同じことなのよ！

仮に、請求された金額が高額だったとしても、そこはまず、鷹揚に頷いて『では、のちほど……』と即答を避けるところ！

それから、あらためて当事者同士で金額の交渉をすれば良いの。

しかも添付された診断書は、この学院のガティネ翁じゃないの！

あの方は、いまでこそ隠居していらっしゃるけど、トリステインでも、知る人ぞ知る、高名な水メイジなのよ。一度は、我が家でもカトレアを診てもらった方。

ただ、カトレアを診断したあと、自分には治療できないと仰って、身を引かれたのだけれど」

「高名って……けっきょく、ちいねえさまを治せないんじゃ」

ぶつぶつ文句を小声で口にする少女に、ぎっとエレオノールはそのきつい目尻をさらに吊り上げた。

「ガティネ翁はね、表には出ないけれど、さまざまな水の秘薬に関する論文を書かれているの。そのほとんどが、アカデミーでも、なかなかお目にかかれないような、最先端の内容ばかりよ」

つまりそれは、トリステインでもトップクラスということだ。

まあ、ほぼ昭和にかけての知識とはいえ、それでもキンダイチは現代日本人。

「そのガティネ翁にまで、証言をされていたのよ！

水メイジの観点から見ても、彼女――ミス・ナナチの治療には、文句がつけようがないって。

私も術前のケガを写し取ったと思われる絵を見たわ。正直、いまのルイズが動けるのは、彼女のおかげだということだけはハッキリしてる」

これだけ元気にわめけるのなら、ヤケドの影響はないと見て良いだろう。

ぎりぎり、とエレオノールは、そのキツめの美貌に怒気を刷いたまま、苛立たしげに告げた。

「だからこうして、私が治療費を持ってくることになったんですからね！　もっと反省なさい！」

「ひーん！」

今度はエレオノールに耳をぐいぐい引っ張られ、ルイズは黒髪の留学生がいる場所への、水先案内人となったのだった。

「なるほど。ラ・ヴァリエール公爵方はご多忙につき、長女であるレディがいらっしゃったと」

例によって、場所は学院から離れた小屋である。

その一室で、七季はメガネをかけた金髪の女性と相対していた。

正確には、エレオノールの隣にルイズも座っているのだが、彼女はここに来るなり、またしても余計な口をきこうとしたので、姉に口をつねり上げられるというおしおきを受けて以来、沈黙の一手だ。

「ええ。この度は、不肖の妹がお手数をかけたこと、大変申し訳ないと思っております。

無礼をおわびすると同時に、感謝いたします。こちらが治療費になりますわ」

ずいとテーブルに差し出された皮袋は、じゃらりと硬貨のこすれる重たげな音を立てて、エレオノールの手を離れた。

さっきまでルイズをつねってばかりいたとは思えない、外ヅラ全開の立ち居振る舞いである。

が、いかんせん、さいぜん本性を暴露したばかりなので、せっかくの猫が台無しであった。

いっぽうの七季は、着ぐるみレベルの猫、三枚重ねくらいだろうか。

「これはご丁寧に。アーチャー」

給仕役も兼ねて、従者然と背後に控えていた偉丈夫は、すっと洗練された身のこなしで、金貨の詰まっているだろう皮袋を持ち上げるや、黒髪の少女に目配せした。

＜金額通り、確かに＞

アーチャーの解析にかかれば、袋入りの金貨を勘定することなど朝飯前だ。能力の無駄遣いと言われればそれまでだが。

「では、こちらが領収書になります。確かに治療費は受け取りました、と」

すっ。

群青色のインクで、綺麗に罫の入った紙へ、さらさらと七季がサインする。そのじつは元の世界の百均ショップで買った領収書だが。

「……確かに」

受け取った見慣れない紙の、薄さと手の込んだ作りに驚く色を、ないしん押し隠しつつ、エレオノールは饗された紅茶を口に含んで、目の前の小柄な少女を観察し――

「あら、美味しい」

実家でも、なかなか味わえないような薫り高さと風味を引き出された茶に、ぽろっと本音を洩らした。

「良い従者をお持ちね。ミス・ナナチ」

「レディにお褒めいただき、光栄です。私には、もったいないくらいの従者ですけどね」

ふふ、とはにかんだ笑みを、あどけない面輪に浮かべる黒髪の少女は、温かい目をアーチャーに向けた。口調は猫全開だが、従者大好きオーラは案外、素だったりする。

いっぽう白い髪の従者は、簡潔に「恐れ入ります」と、皮袋を銀のトレイに乗せたまま、恭しく一礼した。

「今回の事件の首謀者を捕えたのも、彼です。

レディに、このような場所にご足労いただいたのは恐縮ですけれど、この小屋に、いまだ襲撃犯を拘留しているので……いざというときは、アーチャーが対処できる、ということが理由の一つなのです。

襲撃犯を、生徒がいる学院に拘留しておくのは望ましくありませんし、対処できる人間が、犯人から離れるのも賢明ではありませんでしょう？

高貴なご婦人をお迎えするには、いささか殺風景な場所ではありますが、そういうわけですので、お許しください」

くっきりと濃い眉を、申し訳なさそうに下げて、彼女たちがこの場にいる理由を説明する七季。

エレオノールも、なるほど、と頷いた。
「寮の部屋を留守にしていたのは、そういう理由からですか」
「お恥ずかしい話ですけれど……あんな事件があったあとでしょう？　心細くて。またあんなことがあるのではないか、と考えると、やっぱりアーチャーを頼ってしまって」
膝上の手をきゅっと握り締めてうつむき、怯えと羞恥をにじませた令嬢を装う黒髪の少女。ちなみに才人が見たなら噴き出すのがわかっているので、彼は、この小屋のキッチンでパンケーキを焼いている最中だ。アリシアのおやつである。
かたや、彼女の本性を知らないエレオノールはというと、当然のこと、と同意した。
「無理もありませんわ。心中、お察しします。
ところで……ルイズのヤケドを跡形もなく治療したミス・ナナチは、優れた水メイジでいらっしゃるようですわね？」
「そんな。キンダイチ先生のご指導の賜物です。私など、まだまだ未熟で……」
レンズの奥のツリ目を光らせるエレオノールの、不穏なまなざしに、気づいた様子もないふうの異邦人娘は、従者の入れた紅茶に、ほっこりと白い頬を緩ませる。
「キンダイチ……ああ、ガティネ翁のことですか。ですが、ミス・ナナチ。病気の治療に関しても、造詣が深いのでは？」
「まさか」
きょとん、とエレオノールの言葉に、大きな黒瑪瑙の目を丸くした七季は、ぱちぱち瞬いたあと、首を振った。
「ヤケドは外傷ですけど、病気は、体の内部の動きです。ぱっと見ためでわかるケガと、見えない場所に巣くう病気の治療は、ぜんぜん別物ですよ。
私は、まだそこまでの境地ではありません。水の魔法であれば、キンダイチ先生にかなうはずもありません」
――デバイスがなければな。

こっそり胸のうちだけで付け足す七季。
東風（こち）の集めた情報の中には、ヴァリエール家の次女が、命には関わらないものの、病弱でずっと病を患っているという。
おそらくエレオノールが七季に食いついたのは、それが噛んでいるに違いない。
すっとアーチャーが、その場を辞す。治療費の入った皮袋を、下げて奥にしまうためだ。
「そう、ですか……。しかし、ガティネ翁に教えを受けているのであれば、いずれ、画期的な発見をする、優秀な水メイジになられることでしょう。アカデミーの一員としても、期待していますわ」
「まだ若輩の身ですが、できる限り努力する所存です。本日は、わざわざ足を運んでいただき、ありがとうございました」
ぺこり、と黒衣の少女が頭を下げる。
これで実質、ヴァリエールの使者であったエレオノールと、ルイズの治療費を請求した七季との会談は終わりを告げた。

しかし別れ際。
見送りに出たアーチャーに、エレオノールは振り返ると、こう話しかけたのだ。
「あなた、うちの執事にならない？」
「姉さま？！」
「……光栄なお言葉ですが、私はマスターに生涯の忠誠を誓っておりますので」
キツめの美女にナンパまがいのセリフを投げられた弓の騎士は、殿勤かつ丁重に断りの返事を返した。
またひとつ、七季一行との間に、しこりを残して、ヴァリエールの独身貴族な長女は、去っていったのだった。

#１１２　始まらない物語ー長女、来るー（後書き）

あとがき

＞てなわけで、久しぶりのゼロ魔は、エレオノール登場でした。

良いサブタイが思いつかなかったので、まんまです。

ヴァリエール家の反応は、まがりなりにも公爵なんだから早いんじゃないかと。

#113　始まらない物語ー三女、帰るー

「使い魔品評会？」

襲撃時、学院から離れていたために、これといってケガもなく、時間をもてあまし気味のギーシュやモンモランシーは、学院から離れた「小屋」を訪れていた。

ちなみに、日課の畑仕事は、こんな日でもしっかり行ったあとである。

「ああ。毎年、トリステイン魔法学院の恒例で開かれる催しでね」

「生徒たちが召喚した使い魔を、学園中にお披露目するのが目的なのよ。

ちなみに、春の使い魔召喚の儀式――サモン・サーヴァント――で召喚した二年生は全員、強制参加って但し書きがつくんだけど」

金髪の少年少女から話を聞いて、七季は「へえ」と相槌を打った。

「固定化」をかけられたガラスを張りめぐらせてある、温室風のサロン。

配置されているのは、クッションが一体化している布張りのものではなく、木材を組み合わせたソファセットなのだが、現代工芸品のような洗練された趣がある。

しっかりした木作りの座席に、クッションを乗せただけのシンプルな作りは、案外と座りやすくて、来客にも好評なインテリアだ。

ちなみにプレシアなどは、時間があるときや研究に行き詰まったときは、このソファで仮眠するくらいのお気に入りだったりする。

それらの設計がアーチャーの手によるものだというのは、蛇足だろうか。

「そんなものがあるんだ」

かちゃり。

黒髪の少女は空になったティーカップをソーサーに戻すと、まるでインテリアのように宙に浮かぶ黒い鳥篭――インテリジェントデバイスである「黎明」――を、指先でつついた。

すると、双剣を収めた黒いケージの中で、愛らしい鳴き声を響かせては、止まり木を渡っていた燕が、開いた扉から一羽、ぱたた、と七季の指先に移動する。

こんなことをしなくても、デバイスに繋いだ念話のラインから、必要な情報が送られてくるのだが、そこはそれ、気分というもの。

＜ふむ。いまのところ、学院の周囲に異常はない、か＞

きのうの襲撃からずっと、「黎明」を警戒に当たらせているトリップ娘は、新手が来ないことに安堵していた。彼女としては、いちばん可能性があるのは、昨夜だと思っていたからだ。

ガラスの天井から差し込む、春の陽射しに目を細める少女の、まっくろなポニーテールはしっぽのごとく、ゆらりと揺れた。

そんな七季の膝の上には、当然のように、リドルが黒猫バージョンで陣取っている。しっぽだけが、主とおそろいのようにぴくぴく動いていた。

＜……一晩中、そうして警戒をしていたのかね？＞

ちらりと灰藤色のまなざしが、少女のあどけない面輪を滑る。昨夜は、彼女の厚意に甘えて、その器の中でゆっくりと英気を養っていただけに、アーチャーは少しむくれているようだ。

あいかわらずの赤い外套姿は、いちおう「小屋」に拘留しているメンヌヴィルを警戒してのこと。もっとも彼は、げんざい七季とリドルの魔法と薬で、あらためてぐっすりお休み中だが。

＜デバイスの性質上、私の方が適任ってだけ。警戒だけなら、わざわざアーチャーにさせる必要はないし、襲撃があったら叩き起こす気ではいたしね。

意識を少しだけ割いて、魔力を回してたってだけだよ。私だって、ちゃんと休んではいるから、そうへそを曲げないで欲しいんだけど＞

――ま、ここ一週間くらいは続けるつもりではあるけどね。

なめし革のような、褐色の相貌が、わずかに眉間のしわを解き、白磁のティーポットを持ち上げる。

＜まったく……＞

嘆息したアーチャーが、空のカップに紅茶を注いでくれたので、七季は「ありがと」と男を仰いで、紅茶を口に含んだ。ふわりと口内に広がる香気と甘さが少女をくすぐる。

ほにゃ、と七季の白い頬が、幸せそうに緩むのを見て、白い髪の偉丈夫も、少しだけ口端を上げた。みずからが饗したもので喜んでもらえるのは、彼にとって嬉しいものである。

「でも、『品評会』というからには、ただ自己紹介して終わり、ってわけじゃないんでしょう？

具体的には何をするのかしら」

いっぽう、アリシアを膝枕しつつ、コーヒーをすするプレシアも、七季の横で興味深そうに話を聞いていたらしい。

陽射しをふんだんに取り込む造りのため、ちょっと室温が高めの部屋なので、プレシアの長いダークヘアは、アップにしてあった。真言の土産である、朱塗りの簪が、品良くあざやかに華やぎを添えている。

「そうですね、使い魔の特技を生かした芸などを披露するのが一般的かと。

僕のヴェルダンデなら、この優雅な気品を披露するだけで、十分に賞は狙えるでしょうけどね！」

年上のプレシアには、さすがに敬語を忘れないギーシュだが、でっかいモグラの使い魔を自慢げに引っ張り出されても、ママさん魔導師は苦笑するしかない。

「そうね。でも、芸といっても……困るわね」

プレシアは、慈愛と知性とが同居する美貌に、ちょっぴり困惑を浮かべて嘆息した。

なにしろ彼女の「使い魔」――建前上――はとらである。彼が人間の余興などにつきあってくれるかは、プレシアでなくとも考え込

むだろう。
「そりゃまた、隠し芸大会になりそうな感じだな」
おやつのホットケーキを、追加で運んできた才人も話に加わり、彼らは、使い魔品評会のネタについて、あーでもない、こーでもない、と話し込むことになる。

同じころ、学生寮の一室では。
「さあ、荷造りは済んだわね。帰るわよ、ちびルイズ！」
七季との会談の間に、メイドに荷造りを――ルイズの荷物のだ――を命じておいたエレオノールは、目を白黒させるピンクブロンドの少女を、猫の子さながらひっ捕まえて、連行（ドナドナ）していた。
「うぐっ、あ、あねさば、どうして……っ」
「治療されたとはいえ、うちのかかりつけの水メイジにも確認させないとね。
それに、カトレアがずいぶん心配していたし、父さま母さまだって、あなたのことを一目見たいと思ってるのよ。まずは、みんなに無事な姿を見せなさい！」
そう言い放つと、金髪のスレンダー美女は、実家から乗ってきた馬車に、三女を放り込んで、みずからも乗り込んだのだった。
ちなみに馬車の中には、当然のように、ヴァリエールの姉妹を世話するためのメイドが待機している。
学院のメイドから受け取った荷物を、御者とメイドが手際よくしまいこんで。
「出して」
エレオノールの一言で、馬車はパカポコがらがらと動き出し。
こうして、ヴァリエール家の三女は「使い魔品評会」を前にして、強制的に、一時帰郷とあいなったのだった。

#１１３　始まらない物語ー三女、帰るー（後書き）

あとがき

＞というわけで、短いですが、アルビオンフラグが消失しました。

王女来ても、ルイズ不在ですが何か？

我ながら原作ブレイク甚だしいですな。だが自重しない。

コルベールや学院長の悲喜こもごもは、またのちほど。

#１１４　始まらない物語ー炎のソナターー

いっぽう、空になったルイズの部屋の隣では。

赤毛の少女が、ああでもない、こうでもない、と手持ちの衣装を広げては、かたっぱしから自分の体に当て、姿見に映しているところだった。

「ここはアピールしたいところだけど……でも、彼のマスターの服装は地味よね。

彼じしんもお堅そうだし、ここは清楚に攻めるべきかしら。ああでも、そんな服、持ってないわ！」

きのう、窮地をアーチャーによって救われたキュルケは、異邦の従者にお礼を言いに行くため、着る服について、これでもかと悩んでいた。

心を寄せる相手に、少しでも良く見てもらいたい。それが彼女の本音だ。乙女である。

恋の狩人を自認する、ツェルプストーの娘。もちろん、いままでの姿勢は攻めの一手。

しかし、異性から言い寄られることの多かった少女は、男を見る目もそれなりに持っていた。

そんなキュルケの勘が告げている。

アーチャーは、あまり色気を前面に押し出すと、引いてしまうと。

そのうえ、彼はキュルケよりも十は年上と見て間違いない。下手をすると、あしらわれて終わりだろう。

それに、いままでの浮名は、学院の中でも有名だ。もちろんキュルケの、である。

アーチャーの耳にも、その一つや二つ、入っていておかしくはないだろう。

「この情熱は本物だけど……どうやったら信じてもらえるかしら？
そこらの子には、ひけをとらない自信があるけど、ナナチって、意外と胸が大きいのよね。あれを見慣れているとなると……インパクトとしては、薄いかもしれないわ。
あ、でも、まずはお礼を言うのが先よね。それで、お礼にってことで、デートを申し込むとして……どこが良いかしら。やっぱりトリスタニア？」
ぶつぶつ考え込みながら、今度はアクセサリーボックスから、髪飾りやペンダントなどを引っ張り出すキュルケ。
ベッドの上に、色とりどりの布地や石があふれ返る。
と、ドアを叩く音が響いた。
「はーい、ちょっと待って！」
あわてて部屋着とはいえ、身づくろいをして、ドアを開ける赤毛の少女は、「あら」と拍子抜けしたように肩を落とした。
「タバサじゃない。どうしたの？」

青い髪をボブカット切りそろえた少女は、友人の逞しさに、少しだけ呆れていた。
戦場を知らないキュルケが、あわや殺されかけたというのに、すっかり新しい恋の相手に夢中になっている。もっとも、いまのところ片恋ではあるが。
タバサでもわかる。キュルケの新しい恋の獲物というのは、きのう傭兵を圧倒した、アーチャーのことだろう。
それなりの修羅場を――恋愛のではなく――くぐり抜けた彼女も、異邦の戦士の、凄まじい技量には驚嘆するしかなかった。
しかもまだ、底が見えない。どれだけ強いのかと、少女は心胆を寒からしめたほどだ。
けれどもキュルケは、うきうきと恋の熱に浮かれている。

タバサは友人が心配になった。
――あれは、手に負える相手じゃない。
少なくともキュルケには無理な気がした。あの男を、アーチャーを従者として従えている、黒髪の少女には、そこまでの恐怖を感じたりはしないが、おそらく彼を従えるだけの実力なり、理由なりがあるのだろう。
そうタバサは推測している。
彼女の目から見て、アーチャーの仕えようは、まぎれもなく主を想い、支えようとするものだったし、異邦の少女もまた、それをためらいなく受け取っていた。
そこには絆が見て取れた。
少しだけ、タバサの胸の奥が痛む。
ひとり強大な敵と戦わなければいけない運命（さだめ）の重さが、肩に食い込む気がして。
けれど、そんな自分を友人だと言ってくれた少女が、側にいるから。
「下手に手を出すと、ケガをする」
キュルケに傷ついて欲しくないと、そう思っての忠告を、赤毛の少女は苦笑で受け止めた。
「ありがと」
でもね。
「心の炎が止められないのよ」
うっとりと笑うキュルケの美貌は、いままで見たこともないくらい美しい、とタバサは胸の中でひとりごちた。

#１１４　始まらない物語ー炎のソナタ－（後書き）

あとがき

＞短いですが、キュルケ&タバサ。

アーチャーを「狩りに行く」つもりの微熱と、そんな友人の行動を見越して、心配たまらん雪風。

けっきょく、これから「小屋」に行くんですが。いい加減「小屋」に個別名称をつけた方が良いんだろうか。

#115　始まらない物語ー水と風のフーガー

「結論から言うと、無理」
きぱっ。
七季の放つソプラノに、青い髪の少女はきつく唇を噛みしめた。
キュルケと共に、留学生一行のいるという小屋を訪れたタバサは、話があるのだと、黒髪の少女に人払いを頼んだ。
結果として、小屋にいたギーシュらは眉をひそめたのだが、それでも七季は、小屋に設けた自室へとタバサを招き入れることで場を収めた。
才人には、引き続きモンモランシーたちのもてなしを任せ、リドルとアーチャーだけを連れて、共に話を聞いたのだが。
「……そう。診るだけでも？」
食らいつくようなまなざしを向けてくるタバサに、けれども黒髪の少女は、すっと大きな目を細めて切り返した。
「こちらから訊いても良いかな？
ミス・タバサはキンダイチ先生に頼んでみた？」
「……いいえ」
思いのほか強くゆるぎない夜色の瞳に見返されて、はっと息を呑んだタバサは、とっさに目を逸らす。
「おかしな話だね。少なくとも教師の地位にあるくらい、水のメイジとしての腕が保証された先生に頼まず、どうして私に来るのかな？」
口を滑らせたことに気づいたメガネ少女は、口元を押さえるも、飛び出した言葉は取り消せない。
「まず、その時点で怪しいから、あなたの家まで行く気になれないというのが、まず一点」

膝上に丸くなって、けれどもルビーアイを油断なくタバサに向けて目配りするリドルの、まっくろな毛皮を撫でながら、七季は言葉を紡ぐ。

「青い髪」

びくっ。

トリップ娘の指摘に、あっと顔を上げるタバサの目には、石のごとく温度のない黒が映りこむ。

「とある王族の特徴なんだってな。それを隠しもせずに、変装すらなく、堂々と動いている時点で、国家間の陰謀を疑ったのが一点。ああ、そのメガネと偽名で変装だとか、笑えない冗談は止めてくれな？」

「ッ！」

「つーかいまさらなツッコミなんだけど、フェイスチェンジは？日常的に使っているような、魔法の気配はないし。もしくは、それ用の道具とかさ。表ざたにできない身分だったとしても、それくらい用意できるだろうに」

「私のことを知って……！」

腰を浮かせる青い髪の少女に、しかし七季は泰然と座ったままで、ひらひら手を振って、タバサに座るよう示した。

「いや知らんし。たださ、やんごとなき血筋の、うら若いお嬢さんがだよ、こんなところフラフラしてる時点でおかしいだろ？」

そりゃあ訳アリだって思うわさ。

斜め後ろに控えている、アーチャーが、眉間のしわを増産している様子を、横目に見ながら、七季は再度「座って座って」と、手を振った。

政治は苦手だろうが、数え切れない修羅場をくぐってきた男にとって、きな臭いものをかぎつけるのは難しいことではない。

「まあ、それがわかってるだろうに、受け入れた学院長が、何考えてるかまでは知らないけど。

その、とある王家から、賄賂でももらってるのか、それとも何ら

かの密約か便宜でもはかってもらってるのか……さて。
想像だけなら、いくらでもできるわな。
んで？
そーゆー怪しげな事情たっぷりの存在であるところのミス・タバサ。
あなたが、何も知らない私に、何も話さずに、ただ治療をしてくれ、って言ったのを、怪しむなっての？」
くっきりと、わざわざ言葉を強調して言い放った七季のセリフに、今度ことタバサはうつむいた。
「あとな。いまさらだけど、考えなし過ぎる」
しかし黒髪の少女は、そこにさらなる追撃を加えた。
「曲がりなりにも王家の血に連なる人間が、本当に自由の身だと？絶対に、あんた見張られてると思うんだが。少なくとも、私が王ならそうするね。しかも他国にもぐりこんでる最中。そっちで何かしら小細工されたらコトだろうし。
見たところ、年齢的には、王の庶子か姪あたりが妥当かな。そういう存在って、ふつうは幽閉されるか、政略結婚の良い駒だし。外に出す時点でおかしい。
それをよその国で動かしてるなんて、絶対に何かしらの思惑があるだろ」
七季の容赦ない物言いに、タバサの狭い肩が震えていた。
北花壇騎士団の任務があるからだ、とは、さすがに言い返せない。そもそも、七季の言い分には、スジが通っている。
タバサは、父・シャルルを粛清したジョゼフへの憎しみで気がつけないでいるが、本来であれば、シャルルの血筋であるタバサは、文字通り首を切られていてもおかしくない立場だ。
いままでは、ひそかに彼女を支援するシャルル派の人間の、恭しく耳ざわりの良い言葉か、もしくはイトコであるイザベラの、罵倒じみたセリフしか、ほとんどぶつけられたことのない少女にとって、冷静な指摘は鋭く胸を刺した。

「これは、あくまでも私の勘ぐりだけど……あなたが見張られている場合、私に接触したことは、そっちの上司だか、王家の誰だかに報告されるだろうね。

下手すると、私まで、そっちの王家に目をつけられるはめになるわけだ。それを見越して、わざわざ協力しろと言いに来たんなら、あざといにもほどがある」

「ちが……っ」

そこまで考えが及んでいなかったタバサは、青い目をみはり、ぶんぶん首を振った。

けれど、黒衣をまとう少女の目は、冷えたままだ。

「ミス・タバサ。あなたが、友人思いなのは、私にもわかる。個人的には、家族を大切にしているのも、好ましいと思う。

けれどな。私にも守りたいものがあるんだ。

あなたが私を、私たちを巻き込んでも、母親を助けたいと思うのと同じで、私は、あなたたちを見捨ててでも、傷つけたくないものがある」

静かな部屋に、ちからづよく響くソプラノは、黒曜石のまなざしとともに、タバサの胸へと突き刺さる。

「それに、戦争の引き金にされるのは、まっぴらごめんなんでね」

「――え？」

ざくざくと異邦の少女に滅多切りにされて、ヘコんでいたガリア王家の血を引く少女は、またしても思いがけない言葉に、間抜けな声を上げてしまう。

「自覚なかったのか？」

対する七季は、くっきりと書いたように濃い眉をひそめて、とうとうと続けた。

「王の庶子だか姪だか知らないけど、継承権のある人間が、病気の

家族を人質にとられて、大人しくしていた。
つまり、裏を返せば、人質がいなければ、大人しくしていない――何かやらかすってことだろうに。
そんな患者を治療すれば、トンズラするなり、王の対抗派閥に担がれるなるなりして、クーデターが起きるだろ。日陰の身っぽい人間がウロつけるのは、それなりの後ろ盾か、支援がある証拠だからな」
じっさい、シャルル派の人間から援助を受けているタバサは絶句する。
ふだん見る限りは、従者に世話を焼かれて、のんべんだらりとしている感じの少女が、冷徹に政治を語っているのだ。無理もない。
トリステイン魔法学院へ、ガリアの人間であるタバサが留学させられたのは、じつのところ厄介払いの意味が強い。
それでも、ただ放っておくわけではないのは、時折とはいえ、任務が下されることからも明らかだ。イザベラの嫌がらせも兼ねているのだろうが、七季の指摘する通り、監視がついていると見て間違いない。
「まあ人間、タダじゃ金を出したりはしない。もちろん支援するからには、甘い汁を吸う予定があるわけだ。投資した金は回収するものだし。
んで、王さまサイドからすると、その人質とやらを、治療して助けた人間は、自分に逆らう敵側だわな。
当然、潰しに来る。戦争に善悪の判断とかないぞ、言っとくが。おおまかな大義名分さえあれば成り立つわけだ。そもそも王制で、反逆する方が、法律的には罪になるわけだし」
言いがかりでも何でも、王の言葉は力である。下手をすると、それは法律よりも強い。
七季の、立て板に水のごとく流れていく言葉を、タバサは、半ば呆然とした面持ちで聞いている。
「それが他国のもの――この場合は、いちおう、滞在中という点で

は、トリステインのものになるわけだけど――であったばあいは、国ぐるみで言いがかりをつけて、乗っ取りにかかったりする。国力に差があるなら、口実に使えるし」

どっかの国と、トリステインみたいにな。

呟く七季の言葉は、机上の空論とはいえ、シビアきわまりない。

「ついでに言うなら、自分の国土で戦争をするより、他国を戦場にすれば、被害は出ない。

で、私がいて、あなたがいるトリステインが、侵略されて戦場になる――とか考えてしまうわけだ、私はな。

あと、母国じゃないけど、いちおうやっかいになっている土地の、住んでる人に、のきなみ恨まれるようなことはしたくないってのが、私の本音」

ずず、と紅茶をすする音だけが、沈黙の満ちた部屋にむなしく響いた。

「風が吹けば桶屋が儲かる――つーか、誰かの動きで、えらいことになったりするんだよ。特に、王族とか、やんごとなき身分の方はね。そういうの、考えなしに動かれるのが、いちばん迷惑」

きっぱりと言い切られて、タバサは暗澹とした気分に駆られた。

冷たいセリフだったが、それでも理解できる部分はあった。理解できてしまうから、固まらざるを得ない。

タバサの、母親を治療したいという目的は、下手をすると、一国の民ごと不幸にする願いだと言われたようなものだからだ。

――それでも私は、母様を。

「ま、そういう政治的な理由が一点」

さっきの言葉で、話が終わっていたと思っていたタバサは、ふと顔を上げた。七季のソプラノは続きを紡いでいる。

「こっからは、治療に関わる話になる。

ミス・タバサは治療治療って言うけどな。治らなかったときのことは――もっと言ってしまえば、悪化したときのことは、考えてないだろ」

「っ！？」

青い髪の少女の、真向かいで、黒髪の少女は、深い――深い、ためいきをついた。

「絶対に治るなんて保障は、誰にもできない。ケガはともかく……いや、ケガですら、かかる医者が悪いと、場合によっては手足を切り落とすはめになったりするわけだし。

そんでもって、病気、もしくは心の傷なんかだと、下手にあつかうだけで悪化することは、十分に考えられるんだ」

七季の脳裏にあるのは、「医療ミス」という単語。

タバサの母親は、薬品でおかしくなったという。

では解毒ができれば良いのかというと、現代日本人である七季は、首をかしげずにはいられない。

脳溢血などでも、手当てが遅れれば、それだけで脳に障害が残ることは、広く知られていることだろう。

「心を狂わされた」と聞いたとき、彼女は「脳に障害を負ったのではないか」と発想したのだ。

脳は、人間の体でも、最も複雑な役割を担う部位だ。そこを薬物で冒された場合、人格が崩壊したとすれば、魔法で簡単に治るものなのか、と七季は考え込んだ。

一般に、麻薬を乱用すると中枢神経を冒されるという。幻覚や妄想に襲われるなど、後遺症も計り知れない。

「一言で『心が狂う』と言っても、薬だけが原因とは限らない。複合的な要因ということも考えられる」

「複合的？　どういうこと？」

「薬物が脳を冒す。それによって脳が――頭の中身が、損傷する。そして記憶や理性が混乱し、妄想や幻覚に取りつかれる。

仮に、この推測が正しいとすれば、ただ薬物を解毒したとしても、損傷した脳は治らない。だから狂ったまま、ということは十分に考えられる。

そうだな。たとえを挙げるなら、いったん破いたり、インクをぶ

ちまけた本を、元通りにできるのか、ということになる」
「本なら錬金で」
すがるような口調で口を挟むタバサだが、七季は、いまや難しい顔で、彼女の言葉を遮った。
「本ならな」
しかし、この場合の「本」は「人間」なのだ。人間の頭に、錬金をかけるわけにはいかないし、それが成功するかどうか、保障など何ひとつない。
――もしも、デバイスに内蔵しているナノマシンを使って、脳細胞を修復できたとしても、破壊された脳細胞に刻まれていた記憶までは再生できないだろう。
脳細胞を増やすことはできたとしても、それはあくまで、「新しい」細胞だ。壊れた細胞のデータまでは取り戻せない。
とりあえず、七季の知る範囲の知識では、それが限界だ。
「私なんか、キンダイチ先生に比べれば、ひよっこも良いところだよ。人体に錬金が使えるのかどうかなんて、まったく知らない。これも、あくまで仮定の話だけど。もしやるとして、ミス・タバサは、その母上を人体実験されても良いのか？」
――人体実験。
その単語の生々しさ、危うさに、青い髪の少女は、こぼれ落ちんばかりに目を見開いて、握りしめた拳を小刻みに震わせた。
「酷い言い方だけどな。それが事実だ。
私は……もし、母がそんな状態になったら、人体実験なんて嫌だからさ。だから、ミス・タバサの母上を治療することはできない」
「あ……」
タバサはかくん、と背筋から力が抜けていくのを感じた。
とさ、とソファの背もたれに、小柄な体躯を預ける。
そんな様子を、七季は硬い表情で見つめていた。
「それと、これは蛇足だけど」
青い髪の少女は、まだ何かあるのか、と思いながら、おっくうそ

うに、青い双眸を七季へと向けた。
「精神的なショックも加わっての発狂だとすれば――それじたい、当人の心を守るためのものである可能性がある」
「え？」
タバサは、わけがわからない、という顔をした。
「防衛本能、っていうのが、人間にはあるんだよ。自分の心を壊さないために、逃避する。
外界の情報を遮断して、自分を傷つけるものから、身を守ろうとすることがあるんだ。それだと――治療方法は、根本的に異なってくる」
まあ、じっさいの患者を診てはいないから、あくまで可能性の一例だけどね。
そこまで話して、七季もソファに背中を預けた。
「そういう判断は、プロでも困る場合があるんだよ。
私は、つい最近、水の魔法を習い始めたばかりの人間だ。専門家じゃないんでね。それを当てにするのは危険だ、って納得してもらいたくて、長々と話しちゃったな」
疲れをにじませたソプラノを耳にして、起き上がったタバサは、黒髪の少女を見つめた。
「――あなたなら」
「何？」
「もしも、あなたが、私の立場だったら、どうする？」
それは、らしくもない問いだった。でも、誰かに訊いてみたいと、ずっとタバサが思っていたことでもあった。
「私なら？
逃げるね」
簡潔このうえない言葉。
一言で終わらせた七季のそれが、あまりにも早くきっぱりとしていたから、青い髪の少女は、ぱちぱち瞬いて、もう一度、問うた。
「何故？」

「我が身が可愛い。大事なものが可愛い。だから、他は切り落として逃げる。大事なものだけ持って逃げる。

できうるならば、名前を変えて姿を変えて、手の届かないところまで。逃げて逃げて逃げ切って、それでもって幸せになるさ」

私は、ハッピーエンドが好きなんだ。

それは、とても利己的な発言だったけれど。

あまりに力強く、堂々とした声音だったために、ひどくタバサの胸を打って響いた。

「逃げられ、なかったら……？」

「逃げるための手段を考える。逃げたあとのことを考える。考えるだけならタダだし。考えておいて損はない。私は、そう思ってる」

言い切る七季に、青い目をうろうろとさまよわせ、タバサは、考え込んだ末に、これで最後にしようと決意した。

「もしも……もしも私が、名前を変えて、姿を変えて、逃げてきたら。他をすべて、捨ててきたら」

助けてくれる？

「上手くやりなよ」

それが答えだった。

#１１５　始まらない物語ー水と風のフーガー（後書き）

あとがき

＞タバサとオリ主の会談。あーだこーだ考えてたら、予想外に手間取りました。

　オリ主が治療を断る理由、を書いたつもりだったんですが……いつのまにやら、タバサ出奔フラグに。

　どうしてこうなった……。

#116　始まらない物語ー虚無のロンドー

トリステイン魔法学院襲撃事件から、ぐるりとめぐって、ふたたび虚無の曜日。

「お出かけだー！」

元気良く、飛び跳ねたのは、ウサミミを髣髴とさせる、金髪ツインテールのアリシア。バリアジャケットの紅い外套が春風に舞う。

その後ろを、微笑ましげな面持ちでついていくリニス。カフェオレ色の髪は、ネコミミを隠すために白い大きな帽子をかぶっている。斜めがけのポシェットには、使い魔のメイがちょこんと顔を出していたり。

もちろんプレシアも、従者と同様、にこにこ顔で愛娘にデレっぱなしだ。「うふふふふ」と、何やらタマシイ洩れそうな勢いで、アヤしい笑い声が垂れ流しになっているのは、まあご愛嬌というやつで。

そんなテスタロッサファミリーの後ろから、黒と赤の主従が顔をのぞかせる。

「いやー、ちみっこは元気だねー」

「仕方あるまい。こちらに来て、初めて街まで出かけるのだから」

頭の後ろで腕を組みつつ、ほのぼのと嘆じる七季と、その横に並ぶアーチャーは「やれやれ」といった表情で会話している。

珍しく、男の肩に陣取るリドルも、黒猫姿のまま、相槌を打った。

「……そういやそうだね。一通りのものは、学院で手に入ったし」

正確には、学院と、七季の懐から、であるが。

「あら。私が最後かしら。お待たせしてごめんなさい」

そこに、赤毛の少女がやってきた。

ことの起こりは、キュルケがアーチャーに「お礼」と称して申し込んだデートである。

しかし「次の虚無の曜日に」と指定した少女に、アーチャーは首を横に振った。

フリッグの舞踏会が翌日に控えるその日は、ドレスなどを用意していない七季たち一行が、街まで買い物に出る予定だったのだ。

ちなみに、舞踏会については、たまたまギーシュから聞き及んだことである。何も通達しなかった学院長については、七季をはじめプレシアなどが「おのれ、のしたろか」と物騒な呟きを洩らしたほど。

さておき。

王都・トリスタニアの案内を、ギーシュやモンモランシーに頼むつもりだった彼らに、ならば、とキュルケが名乗りを上げたのだ。

ゲルマニア貴族である彼女だが、トリステインに留学して二年目。それなりに街については知っている。ドレスや紳士服をあつかっている店も案内できる、というので、七季たちは提案に乗ることにしたのだった。

「行ってらっしゃいやし、お嬢！」

まだ二十歳そこらであろう、白い髪の男が、出かける彼女らにあいさつをして見送る。

「うい。警備お疲れさまー」

彼こそは、襲撃犯の一人――主犯である、メンヌヴィルだった。

しかし、いまやリドル謹製の若返り薬を飲み、その副産物から、焼けたはずの目は元通りになり、名前と顔を（魔法で）変えて、この学院の警備兵に納まっている。

いまや「フラム」と名乗る彼は、七季のことだけは「お嬢」と呼んで敬意をあらわにする。他の傭兵くずれも、メンヌヴィルの正体は知っているから、彼が敬う少女を丁重にあつかうようになったの

は当然だろう。
そんな様子を、不思議そうに見て、けれども賢明なことに沈黙を選んだキュルケは、魔法で浮いている荷台のクッションに背中を預けて、赤衣の男をぼうっと眺めた。
手綱を操るアーチャーの、精悍な横顔に注がれる少女の視線が熱っぽい。
プレシアやリニスは苦笑し、幼いながらも、女性の勘で、キュルケがアーチャーに恋心を向けていると気づいたアリシアはむくれ顔。
だが、鋼さながら仏頂面を崩さない男は、街までの距離を無言で通すのだった。
余談だが、七季は荷台に敷き詰めたクッションに転がって、すよすよリドルと寝ていた。他の使い魔たちは今回、留守番である。

時間は流れて、王都・トリスタニア。
錬金で作った荷台だけを「レビテーション」で浮かせて、一頭の馬に引かせた馬車もどきは、思いのほか早く着いた。
なにしろ、本来であれば負担をかける、乗り手や荷物の重さがかからないため、馬は軽快なスピードを出せるからだ。
魔法使い(メイジ)が何人もいるのだから、「レビテーション」は交代でかけることもできるし、ものぐさで合理主義の七季が出したアイデアは上手く成功したといえるだろう。
「これ可愛いっ」
「アリシアには何でも似合いますから、迷いますねえ」
「ピンクはどうかしら。でも、デザインはこっちの方が……」
「うーん。やっぱり、金髪に映える若草色が、私はオススメ」
ずらりと並ぶ、ひらひらのドレスに、愛らしい幼女がルビーの瞳をかがやかせる。
親ばか――リニスはプレシアの従者だが――全開で、頬に手を当

てながら店員やプレシアと話し合う癒し系美女と、迷う様子はなく、すっぱり一択の七季が対照的だ。
ひとり、いたたまれない様子なのが、長身の偉丈夫――いわずと知れた、アーチャーである。
ただいまリドルは七季の影に引っ込んでいるので、実質、男は一人だけ。居心地悪いこと、このうえないだろうと思われる。
七季も、どちらかといえば、アーチャーに近い心情だから、苦笑を浮かべつつ、さっさと選んで切り上げようとしているのだが、まあ女性の買い物というのは、一般的に長いものだ。
二人きりのデート、とはいかなかったキュルケも、アーチャーにセクシーなドレスを見せつけて、さっきから「これはどうかしら？」と絡んでいる。
もちろん、女性が多い、この店の店員たちは、いったい男と女性たちの関係はいかなるものかと、鵜の目鷹の目で見守っているありさま。
＜うん。アーチャー、ごめん＞
さすがに私だけじゃ手に負えないわ、と念話の後半は、まなざしだけで物を言う黒髪の少女に、不敗の戦士は、あきらめに近い、悟ったような表情を浮かべていた。
その鷹の目が、どこかにお散歩ぎみな面持ちで。
＜気にすることはない。私とて――これはな＞
洒落っ気のない主従は、やっぱりドレスやアクセサリーに目の色を変える女心は難しいらしい。
こそこそ念話で、「何か食べに行こうか」「いや置いていくとあとが恐い」などと話しているあたり、似たもの同士というか、何というか。
＜いっそ食材でも見に行く？　雑貨店も見てみたいんだよね。掘り出し物があるかも＞
＜私は武器屋に興味がある。まがりなりにも異世界だからな。ひょっとすると、知らないものがあるかもしれん＞

＜おお。欲しいものがあったら言ってな。オールド・オスマンから巻き上げたし、懐はあったかいから＞

にやん、と悪い笑みを浮かべる黒髪の少女は、その功労者である男の、凛々しい横顔を見上げて、とん、とかるく拳をぶつけた。

＜アーチャーのおかげで＞

＜ふ。役に立てて何よりだ＞

見下ろす男も、灰藤の目を細めて、まなざしだけで笑う。

「おぬしもワルよのう」というアレである。

そんな、仲良し主従の様子に、キリキリ気をもんでいる少女が一人。

いわずとしれたキュルケだ。

「もう。ミスタ！　どっちが良いか、答えてくださいな！」

アーチャーの腕に抱きつき、思い切り豊満なバストを押しつけようとするゲルマニア娘。

だが、それを体さばきでするっとかわす百戦錬磨の戦士。

彼らの追いかけっこは、手を変え品を変え、一時間ほど続いたという。

そのころ、トリステイン魔法学院では。

傭兵を雇う賃金や、そのためのフェイスチェンジ用の道具代、七季たちへの口止め料などで、私財が半分に目減りしたことに、たいそうヘコんでいる学院長がいたとか。

#１１６　始まらない物語ー虚無のロンドー（後書き）

あとがき

＞メンヌヴィルの偽名「フラム」はフランス語の「炎、輝き」から取りました。

考察ｗｉｋｉを見る限り、「フリッグの舞踏会」って、使い魔召喚から、わりとすぐなんですね。

無理やり感がありますが、ご都合主義ということで、スルーしたってください。

才人がいない理由は、次回にて。

#117　始まらない物語ー剣と水のセレナーデー

いっぽう、七季たちが、王都・トリスタニアで買い物をしているころ。

「シエスター！　こっち終わったぞー！」

才人は、明日の舞踏会に向けた準備を手伝っていた。

フリッグの舞踏会は、貴族である生徒たちのためのイベントであるが、もちろんその準備は、学院の使用人たちが行う。

今朝の、アーチャーとの鍛錬時、顔を合わせたときに出会ったシエスタから、その話を聞いた才人は、みずから手伝いを申し出たのだ。

こちらの世界では、日ごろから従者としてのアーチャーを見習うことにしている才人は、手が空くと人の手伝いをしている、ブラウニーな男の行動にならったまでのこと。

それに、こちらの世界での家事が、どれだけ大変かということも、じっさいにやってみてわかっているから、少しでも人手があった方が良いだろう、と思ったのである。

いまは遠く離れている母親への感謝の念が強まるのと併せて、着々と執事化が進んでいる少年であった。

「ありがとうございます、才人さん。テーブル運び、大変だったでしょう？」

床にモップをかける手を止めて、黒髪の少女がお礼を言う。ちょうど才人が、彼女の近くまでやってきたところだったから、シエスタの優しい笑顔はしっかり少年に焼きついた。

健全な現代少年である才人には、これだけでも十分なご褒美。ますますやる気がチャージされるというものである。

――アーチャーさん！　感謝の言葉が嬉しいって、俺にもわかっ

たよ！

ちょっぴり下心のひそんだ、青少年の甘酸っぱいときめきと、人の喜ぶ顔が純粋に見たい男では、そのないしんに大きな違いがあるのだが――そこはそれ、言わぬが花というもの。

彼の思考にツッコミを入れる無粋な人間もいないから、才人はニカッと人の良い笑顔を浮かべてみせた。

日本人としては平均的な顔立ちの彼は、アクもクセもない顔立ちだが、同年代の少年にしては、ニキビなども浮かんでいない。わりと清潔感のある容貌だ。

嫌味のない笑みは、がっつきさえしなければ、異性にも好感を与えるには十分だろう。

「シエスタこそ。疲れてないか？

俺は男だからさ。力仕事は鍛錬にもなるし。他に手伝うことがあったら、言ってくれよな！」

腕を持ち上げてポージングをする、黒髪の少年のおどけたしぐさに、タルブ村の少女はクスクス笑いながらも、掃除を再開した。

「じゃあ、倉庫から出したテーブルを、壁際に並べてもらえますか？

これが終われば、マルトーさんがお昼を作ってくれてますから。頑張りましょう！」

「おう！」

アーチャーは、女所帯である一行の、護衛のためにも学院に残ることはできなかった。

白い髪の偉丈夫は、そのことをわびたが、才人は「適材適所ってやつですよ」とかるく笑って見送ったものだ。

アーチャーとの鍛錬を続けているとはいえ、否、だからこそ、七季たちを守るためには、彼がついていった方が良い、と才人は言った。

もちろん七季やアリシアは、トリスタニア行きについて、才人に「一緒に行かないか」と誘ったのだが、少年は「シエスタと約束があるから」と断ったのである。

――うん。悪くないよな。
疲れはしたものの、いっしょに食事をするシエスタの笑顔を見て、才人は「人助けって、良いな」と胸を温かくしたのだった。

そしてフリッグの舞踏会。
才人は、品の良いグレーの燕尾服。アーチャーは色違いの、黒い燕尾服で、それぞれ女性をエスコートしていた。
「足元に気をつけたまえ、プレシア」
「従者を借りるわよ、ナナキ」
「はーい。よろしくな、才人」
「お、おう。よろしく、七季ちゃん」
見ための年齢的に、プレシアをアーチャーが、七季を才人がエスコートする形になったのが、ふだんと違っているところだ。
「もー。私たちのエスコートはー？」
ぷうっとふくれるアリシアは、若草色のふんわりとしたミニ丈ドレスに、薄手のシフォンをショールとしてまとっているため、春の妖精さながら愛らしい。胸元には、珊瑚のペンダントに見えるデバイス「マーチ」が揺れている。
「まあまあ。せっかくのイベントですから。アリシアは、私とじゃ嫌ですか？」
いっぽう、その手を引くリニスはというと、白いホルターネックのドレスに、ピンクのコサージュ。ミントグリーンの真珠を連ねたロングネックレスを身につけているので、こちらも春の乙女といった風情。
「むー……リニスは好きっ。
でも、いつもよりおめかししてる、ママとナナキともくっつきたいの！」
そっちですか。

「あ、あの。踊っていただけませんか」
そうこうしていると、今度はリニスに男子生徒からのお声がかかった。
ネコミミがあろうとも、彼女が美人であることには間違いなく、ころっとした太目の少年が、まっかな顔でリニスへと手と差し出す。
「申し訳ありません。私はアリシアの世話係ですから……」
やんわりと断りの文句を口にする山猫娘に、ツインテール幼女が、ますますむくれていると。
「小さなレディ。俺と踊っていただけませんか」
今度は、アリシアじしんにもダンスの誘いが来る始末。
総じて、テスタロッサファミリーは美人ぞろい。当然だろう。他にも数人が集まってきて、ばちばちと牽制の飛ばしあいになってきた。
そこに、まっすぐ料理のテーブルから戻ってきた七季と、連れの才人が声をかける。
「やほー。おお、アリシアもリニスも、モテモテだなぁ」
「これはミス……」
どん！
振り向いた少年たちは、とたんに、現れた黒髪の少女へと、目が釘付けになった。
七季がまとっているのは、肩の見えるドレス。紺地に、銀砂のようなかがやきが、光の加減で浮かび上がるその生地に、三日月を模した、白銀のチェーンベルトが三連になって巻きついている。
布地じたいは手が込んでいるが、ほぼ無地に近いシンプルさだ。
それはいい。
問題は、デザインである。
長さはくるぶし丈のロング。
ただし、ドレスの左側には、腰から裾にかけて深いスリットが入っており、なおかつその部分がレースで透けている。暗い紺に映える、まっしろな太股の描く肉感的なラインは、もはや少女の域をは

み出していた。

かてて加えて、けしからんのが胸元だ。

たわわな乳肉が、ほぼ円筒型のドレスに、きゅうくつそうに押し込められて、陰影を刻む谷間を作り、その色は日焼けなど知らぬかのごとく、まぶしくシャンデリアの光を弾き、男の目を射抜く。

濃い暗色のドレスは、いわずもがな、ボリュームのあるバストが、ぱっつんぱっつんに張り詰めて布地が引っ張られ、その稜線をあざやかにクッキリとふちどっている。

そのうえ、七季は小柄な部類で、このハルケギニアの、同年代の少年であれば、上から見下ろされることが圧倒的に多い。

畢竟（ひっきょう）――彼女の胸元が、そのドレスの中へ吸い込まれる、きわどい絶景をギリギリまで見ることができるというわけで。

胸の先があと少しで見えるかどうか、という暗がりの奥が、また探究心をそそるのである。

巨乳好きであれば、一度や二度は間違いなく下目使いでのぞきこまずにはいられない、なかなかにエロい装束だと断言できるだろう。

ちなみに、才人の感想としては、「良くこんなのアーチャーさんが許したなあ」である。眺める彼の目尻が下がっていたことは、わざわざ述べるまでもない。

もっともアーチャーはというと、七季がこのドレスを選んだときに、裾の長さや色が大人しかったので、べつだん何も言わなかっただけの話なのだが。

いっぽう。

下目使いで、黒髪の少女の胸元をのぞきこんだ少年たちは、当然ながら、鼻の下が伸びているわけで。

アリシアとリニスは、だらしない顔の彼らの誘いを、あらためて丁重にお断りしたのだった。

さていっぽう。

せっかくだから、とアーチャーのリードで一曲ダンスを踊ったプレシアは、というと。

終わったとたんに、主に男性教諭から、ダンスの申し込みを熱心にされていた。中には少年の姿も見て取れるようだ。

かたやアーチャーはアーチャーで、女性教諭はおろか、生徒である貴族令嬢たちからも取り囲まれて、二人して困り顔である。

「ミス・プレシア。是非ともダンスを私と！」

「今宵は一段とお美しいですな」

「ええい、ここは老い先短い先達に譲らんか！」

「学院長、腰を痛めますよ！」

どさくさにまぎれて、オールド・オスマンも加わっている。ギトーはプレシアに向ける声が、やや熱っぽさを帯びていたり。

淡い紫色の、あでやかなドレスをまとったプレシアは、ロケットおっぱい――もとい、母性あふれるバストやボディラインがくっきり出ているため、子持ちとは思えないほど魅力的な女性だ。

ドレスのデザインは、七季ほど挑発的ではないにしろ、どうしたって、むっちりと張り詰めて脂の乗ったバストやヒップが目立ち、雄の興奮をそそるというもの。バインバインである。

いつもはかけているメガネも、メイクがはげるからという理由で取り去っているいま、美しいルビーの瞳があらわになって、いっそう妖艶さを増している。

「ミスター。あの、よろしければ、少しお話を……」

「ダンスがお得意とは知りませんでしたわ。次は、私と」

「あの、あの……先日は、ありがとうございましたっ」

いっぽう、そのパートナーを務めていたアーチャーはというと、漆黒の燕尾服を、その堂々たる鋼の体躯にまとい、たたずむだけでも絵になる男ぶり。

加えて、戦士でありながら洗練された物腰が、作法にうるさい貴族の目にも素晴らしい。

一見ありふれた燕尾服は、表の黒に対して裏地が赤く、彼らしいアクセントを添えたものとなっていた。
ハンカチを差し出した少女に「どういたしまして」とだけ返して、アーチャーは灰藤の目を、プレシアのルビーアイと見合わせた。
アイコンタクトは一瞬。
＜逃げるかね＞
＜賛成＞
「失礼。マスターに呼ばれているものでね」
「ごめんなさい。ちょっと娘がぐずっているみたいなの」
大人ふたりは、営業スマイルを浮かべて、一目散に撤退した。

「お、戻ってきた」
「おかえりなさい、二人とも」
「やー。美男美女、やっぱ見てると目の保養だねー」
取ってきた料理をぱくついている才人と、ジュースのグラスを手にしているリニスが、アダルトコンビ（他意はない）に手を振り。
きょうのパートナーと同じく、「ダンス何それ美味しいの？」とばかり、食い気に走っている七季が、けらけらと笑いながらアーチャーとプレシアを褒める。
「アーチャーカッコ良かった！　まるで童話の、お姫様と踊る王子様みたい！」
どーん。
「おっと。こっちのお姫様はお転婆で困るな。しかし……私など、王子というガラではないだろう」
アリシアは、慣れている相手に突撃し、褐色の肌の男にひょいと抱きとめられた。
「アーチャーは騎士だよなー」
ナイトさまだね。

七季も、男に抱かれる妹分の、ふくふくした頬をつんつんしながら軽口を叩く。
「あら。そうするとお姫様は私ってことになるのかしら？」
「いやプレシアさんは、どっちかってーと女王様……」
うっかり失言した才人は、笑顔でダークヘアのママさん魔導師に、頬を引っ張られている。
「ひててて」
「何か言ったかしら？」
かがやかんばかりの笑顔がうるわしいママさん大魔導師、指先に込められた握力が、尋常ではないご様子。
才人の頬が、みにょーんと、えらい勢いで引き伸ばされているあたり、間違いないだろう。
＜うん、女王様だな＞
＜それは言わない、お約束＞
七季の影に潜んでいるリドルは、こっそり少女に同意を求め「サイト乙」と言ったとか、言わないとか。
「二人ともモテモテだったじゃん。踊ってくれれば良いのに」
アリシアつつきを止めると、はむはむオードブルのカナッペをぱくつきだした黒髪の少女に、アーチャーがジト目を向けてツッコミを入れる。
「そういうマスターは踊ったのかね？」
「私は最初から料理めあてだから！」
すがすがしいまでの笑顔で、すっぱり言い切る少女に、プレシアはもちろん、アリシアもリニスも生温い視線を向けた。才人だけは、苦笑しながら少女と同様に、自分の皿の料理をつついている。
「アーチャー、ゴー」
アリシアの号令で、素早く幼子を解放した男は、すかさず紺のドレスに包まれた腰を捕まえる。
「ほぇ？」
アーチャーが黒髪の少女を捕獲すると同時、ぱぱっと彼女の手か

ら、皿とフォークがリニスとプレシアによって奪われた。
「あ！」
私のごはんっ！
しかしながら、七季の腰は、がっちりと男の手が――腕が巻きつけられて、離れることはかなわない。
「さて、マスター」
ダンスの経験はおありかね？
その夜、疲れ知らずの従者によるリードで、黒髪の少女がへとへとになるまで、つき合わされたとか、されないとか――。

のちに、とある黒髪の少年は、こう語った。
「俺は、踊り疲れて、息も絶え絶えな七季ちゃんが、あのドレス姿なのに、平静でいられるアーチャーさんが、まじパねえと思いました」
周りの男連中、かなりの数が前かがみだったッスよ？
さらに蛇足ではあるが。
アーチャーいわく、食べるのが大好きなくせに、運動が嫌いな（苦手ではないし、運動神経も悪くはないという不思議）インドア派マスターの、運動不足解消を手伝っただけとか。
舞踏会の翌日、しれっと言ってのけた従者に、筋肉痛でベッドに引きこもった少女が、恨みがましげな目を潤ませていたという。

#117　始まらない物語ー剣と水のセレナーデー（後書き）

あとがき

＞意外と才人がリア充に。

あとデルフ購入は、あえて伏せたまま、フリッグの舞踏会に突入。

アーチャーは、体調管理も従者の役目だと思ってます。

たぶん善意。

#118　始まらない物語ー剣と異邦人のパッションー

「んで、どうだったんだ？」
ベッドに半身を起こし、従者から差し出されたマグカップを受け取った黒髪の少女は、傍らに座るアーチャーを見上げた。
「デルフリンガー、と名乗ったよ。なかなか口が達者でな、かなり騒がしい」
肩をすくめる男に、七季は「ふぅん」と相槌を打ちつつ、マグの中のスープに、ふうふう息を吹きかける。
たかが筋肉痛に治癒魔法を使うのは、もったいないし体にも悪そうだから、という理由で、七季は不貞寝はんぶん、ひとり寮のベッドにもぐりこんでいた。
では、他の同居人は何をしているのかというと。
才人は、ギーシュたちと畑の手入れ。
アリシアは、使い魔のウサギ、エイプリルと、キンダイチ老に連れられて、使い魔を飼育している畜舎で、動物たちの診察というかふれあい中。
そして、リドル、リニス、プレシアのマッド三人組はというと、生徒たちに「モンスターハウス」やら「ロバ・アル・カリ家」やら、「豊穣の小屋」やら好き勝手に呼ばれている小屋で、とあるものの研究まっさいちゅうだったりする。
インテリジェンスソード。
その名の通り、意志ある剣として、ゲームや小説にたびたび登場するファンタジーな武器が、げんざいの彼らの研究対象だった。
一昨日の買い物で、たまたま立ち寄った武器屋から、アーチャーが見つけた掘り出し物である。
これは珍しいというので、研究者肌のリドル、プレシアはもちろ

ん、従者のリニスも、やっきになって調べている。
いまは主の様子を見に来たアーチャーも、さいぜんまでは、その摩訶不思議な剣をいじくりまわしていた一人であった。
「へえ、いちおう名前持ちなんだ？
憑依型と先天存在型、どっちなんだろーなぁ」
背中に当てられたクッションにもたれながら、ぽつりと呟く少女の言葉を、アーチャーは瞬きひとつのあとに訊き返した。
「というと？」
「ん？
意志ある剣ってーのは、だいたい二通りに分類されるだろ。
憑依型は、文字通り、別の誰かの思念がとっついた形。俗にいう、妖刀とかは、こっちが多いね。だいたい怨念がついてるパターン。
よりしろが刀剣じゃなかったらしいけど、リドルもこのパターンだな。聞いた話だと、日記に『記憶』を保存してたらしいから」
ことん、と七季はスープを飲み干したマグをサイドテーブルに置いた。
「もう一つが先天存在型。
剣じたいの意志が、最初からある、もしくは途中から生まれるパターン。付喪神とかはこれかな。他者ではなくて、剣、器物そのものの記憶であり、意志がそなわっているもの。
そうだな、ご神刀の類（たぐい）は、こっちが多いかな。鍛冶、とりわけ神剣を鍛えることは、はるか昔、神事だったわけだし。
場合によっては、剣じたいに神性が宿る場合もある。幾分かは、作り手に影響されるけれどね」
「なるほど。言われてみれば」
ただし、そういうものはひどく珍しいし、はっきりと意志を持っている剣だと、アーチャーの剣の丘には刺さらない。
「私の知り合いには、刀の声が聞こえる人がいるよ。あと、古代の神剣の機嫌取れる人とか」
だから、今回のは、どっちかなぁ、と思って。

「……この際、マスターの交友関係の不思議さは問うまい」
ためいきをつきつつ、白い髪の偉丈夫は、ぐりぐりと自分のこめかみをもんだ。
「それに照らし合わせれば、憑依型のようだ。リドルが自分と似たようなものだ、と言っていたからな」
「へぇ。他には何かわかったことがあるの？」
「どうも、六千年前から存在する剣らしい……あくまで、自称だが」
それが本当であれば、「魔術師」たるアーチャーにとっては、けっこうな神秘を孕む剣、ということになるのだが。
ぎゃあぎゃあ騒いでいる口ぶり――口は見えないが――からすると、どうも敬意を払うべき存在に思えない、というのが、彼の本音である。
「うっわぁ、六千年！　けっこういってるねぇ」
明るい口調で感嘆を洩らした七季は、ふと思いつきを舌に乗せてみた。
「でも、リドルと同じ憑依型なら、たぶん私がカットアンドペーストできるよ。中身、他のものに移せると思う」
ぽん、とかるく言われた内容を聞くなり、アーチャーは鋼色の双眸を見開き――それはそれは、タチのよろしくない笑みを浮かべた。
「では、その旨プレシアに伝えておこう」

同じころ。
プレシアの工房で、電流を流されたり、材質を削られたり、さんざん美女二人にいじくり倒されているデルフリンガーは、言い知れぬ悪寒に襲われたとか。
「いやあああ、そこはらめえええ」
どっとはらい。

#118　始まらない物語ー剣と異邦人のパッションー（後書き）

あとがき

＞よく考えなくても、デルフって、他の剣にとっつけるんですよね。ならオリ主がどうこうできるかなと。

ほぼ本人（剣）が登場しないままの話でサーセン（笑）。

サブタイトルの「パッション」は「受難曲」の意です。パッション、またはパッションミュージック。

本来は四つの福音書に基づく、イエス・キリストの受難を描いた音楽作品のことですが、まあデルフの受難ってことで（笑）。

「ｐａｓｓｉｏｎ」は情熱、激情などを意味する単語でもあります。

#１１９　始まらない物語ー降臨のファンファーレー

晴天の下、まっしろなユニコーンが牽く四頭立ての馬車が、近衛隊に囲まれて颯爽と学院の玄関までやってくる。

すぐさま、緋色の絨毯がさっと花道となるべく広げられ、馬車からは訪問者の姿が現れた。

「トリステイン王国王女、アンリエッタ姫殿下のおなーりー！」

呼び出しの衛士が声を張り上げる。

生徒たちの間から沸き起こったどよめきは、しかしすぐに落胆によって地面に落ちた。

最初に姿を現したのは、四十過ぎの痩せこけた男――マザリーニ枢機卿だったからだ。鳥の骨、と揶揄されるにふさわしく、高位のものにしては、珍しいほど細身だった。それが心労によるものだと、知るものは少ない。

彼の登場に、ガッカリして鼻を鳴らした生徒を、枢機卿は意に介した風もなく、馬車の横に立つ。続いて降りてくる王女の手が、マザリーニの手を支えにして降りてきた。

わあっ。

今度こそ、生徒らの間に歓声が沸き起こった。

王女も彼らへ向けて薔薇のような微笑みを浮かべるや、優雅なしぐさで手を振る。

しみ一つなく整った、可憐な面差しに、青い瞳。赤紫の、緩やかに波打つ髪。肩口までのそれを飾るティアラは、青い宝石がはめ込まれた銀色で、春の陽射しを静かに照り返していた。

「王女ってことは……殿下、って呼べば良いのかな？」
ま、直接しゃべる機会はないだろうけど。
いちおう生徒の礼儀として、出迎えに顔を出していた七季は、こそりと長身の従者を見上げて確認を取った。
アーチャーの、なめし革のような褐色の横顔が、鷹の目だけを動かして低く答える。
「ああ。それで問題ない」
＜しかし、先日の襲撃の件……用心した方が良さそうだ＞
＜だね＞
＜きを　つける＞
アーチャーの鞘にとりついている、はぐメタ・プラタも、念話で同意を示していた。
メンヌヴィルから情報を引き出した七季以下、異世界トリップ一行と、トリステイン魔法学院の教師は、既にあの事件の黒幕がワルドであることを知っている。
にもかかわらず、それを公表しないでいるのは……げんざい、目の前でワルドがマザリーニや王女の信頼を勝ち得ているらしいさまを見れば、言いがかりだと白を切られるか、新たな火種になることがわかっているからだ。
学院の教師も貴族である。キンダイチをはじめ、彼らは賢明にも口をつぐんだ。
ひとまず、グリフォン隊の隊長として、今回のアンリエッタ警護を務めているワルドに対する監視を強めることくらいしか、教師にできることはない。
王族が訪れる学院で、また新たな事件を起こされるかもしれないという懸念に、真相を知る学院関係者は、ピリピリしているのだった。
「本物のお姫さまだー」
いっぽうテスタロッサファミリーはというと、あまりお目にかかることのない存在に、ほのぼのと物見高い視線を送っている。

「そうね、アリシア」
きょうも金の髪をツインテールに結ったアリシアは、ルビーの瞳をかがやかせて、豪華な馬車から降りてきたドレス姿の美少女を眺めている最中。
その隣では、愛娘の小さな手を握ったプレシアが、王女そっちのけで、慈愛に満ちた笑顔を浮かべてアリシアを見つめていた。
＜思ったより威厳がありませんね。ナナキの方がコワ……ええと、凛としてると思います＞
＜リニス。本音ダダ洩れてるから。でも同意。王族にしちゃ、緊張感に欠ける笑顔だね。薄っぺらい＞
念話で、使い魔にゃんこ組の、リニスとリドルは、本能的に何かが気に入らないのか、さんざんにアンリエッタをけなしている。
見た目には、けっこうな美少女なのだが、見とれているのは才人だけのようだ。
＜そうか？　美人じゃん＞
＜君、女を見る目を養わないと、苦労するよ＞
＜リドルは苦労してないのか？＞
念話による、絶妙な才人の切り返しに、珍しく闇の帝王（プレ）は黙り込んだという。

同じころ。
遠く離れた、ガリアの空の下では。
じーっ。
「よいしょっと」
にょっ。
やおら、空間に出現したジッパーから、栗毛の巫女さんが体を乗り出していた。
突然の非常事態に、さすがの国王も目をかっぴらいて固まってい

る。彼の使い魔たる美女は、暗躍のために他国に出向いているところであり、ツッコミを入れる存在や、フォローをする人間も、すぐ近くにはいないときている。

「おし。目標通り。

私、惨状――ちがった、参上！」

文字的には間違っていないセリフを吐いた巨乳美少女は、ガリアの王宮に降臨したのだった。

#１１９　始まらない物語ー降臨のファンファーレー（後書き）

あとがき

＞短くてすみません。

デルフ魔改造に期待を寄せていらっしゃる方もおいででしょうが、ここは伏線（伏せられるのかオイ）を張るべく、龍神の嫁リターン。

狂王とガチやれるのって、まあこの人かなと。

あ、次回はフツーにほのぼのベースです（笑）。

#１２０　始まらない物語ー夜の女王ー

そんなわけで、使い魔品評会。

――ルイズはどこかしら？

アンリエッタは、彼女いわく「オトモダチ」である、ルイズの姿を探してキョロキョロしていたが、彼女が実家へ強制連行されているとは知らぬが仏。

とっくにピンクブロンドの少女は、長姉によってヴァリエール領へとドナドナされているのだから。

いわずもがな、自称「婚約者」であるところのワルドも、つるぺたツンデレ爆発娘をそれとなく探したが、最初からいないものは、いかな風の魔法使い（メイジ）とはいえ、見つけられるはずもない。

いっぽう、アンリエッタがルイズに会うための口実であった品評会は、というと。

キュルケの使い魔であるサラマンダーが火の輪くぐりをしたり、タバサの使い魔であるドラゴンが空中で回転技を見せたりと、それなりに盛り上がりを見せていた。

そして、校庭に設（しつら）えられたステージに、七季たち留学生一行が登場する。

いままでとは違って、サイトも含めた六人と使い魔せいぞろいで現れた一同に、生徒の間からざわめきが洩れた。

口火を切ったのは、意外なことに、黒髪の少年・才人だ。

いつもの赤い外套ではなく、その髪の色と同じ、漆黒の衣装は軍服じみた詰襟である。

「僭越ながら、我ら一同、使い魔たちの力を合わせ、しばしの寸劇を披露いたしたく存じます。

拙きものではありますが、全員の持ち時間を合計して、一つの評

価としていただきますよう、お願い申し上げます――」
朗々と声を張り上げた少年は、アーチャー仕込みの礼を、優雅に取ってみせた。
「それでは寸劇『夜の女王』です」
告げた才人は、ささっとステージの端に寄ると、背中に隠していた台本を取り出した。ナレーター役を兼ねているのだ。

『母親をさらわれてしまった村娘・アリシアは、その犯人である、夜の精霊の女王が棲むという、世界の果てのお城へとやって来ました』
「展開速いな！」
客席からツッコミを入れたのはギーシュである。
仕方がないといえば、仕方ない。時間は限られているので、適当に台本はトリミングした内容なのだ。
もっとも、オリジナルというわけではなく、寸劇の元ネタは「雪の女王」。
主人公の少女が、さらわれた幼なじみを取り戻すために、長い旅をする物語だ。
それを、本来は少年である幼なじみを、母親に置き換え、さらに誘拐犯である「雪の女王」を、架空の「夜の精霊の女王」という設定に改変した内容になっている。
さらには、使い魔に芸をさせる、という目的から、その寸隙の中で歌を歌う、ミュージカル的な要素を織り込んだ、ちょっとカオス仕様だ。
『しかし、アリシアと、お供のウサギ・エイプリルは、女王の配下である、夜の精霊に捕まってしまいます』
村娘っぽい、素朴だけれど可愛らしいエプロンドレスを着たツインテールの幼女は、広間を模した、セットの中央に引き出される形

で、黒い従者服をまとったリニスに連れて来られる。かぶっている帽子も、きょうは黒い。

その肩に乗ったエコー・メイが、きゅるりと風を操って、アリシアの華奢な体を拘束してみせた。

膝をつくアリシアへと、白いウサギのエイプリルが、心配そうに寄り添う。

「”そなたが侵入者か”」

ステージの中央、木製のイスに紅いビロードをかぶせた玉座に泰然と座るのは、夜色の髪を結い上げ、威圧感を放つ少女である。

女王らしく見せるために霊圧を少しばかり解放し、バリアジャケットのデザインを花魁風に変更してまとった七季は、座したままで傲然と顎先を上げて、アリシアを見下ろしていた。

「”幼い身で、ようも我が城に参ったものよ――して、何用じゃ”」

七季のあどけない面輪が、目元と唇に紅を刷かれて、ぞっとするほど妖艶な笑みを浮かべる。

小柄な体躯でありながら、開かれた胸元から、まっしろで豊満な谷間をのぞかせた、黒衣の女王は、まさに夜を統べるにふさわしい姿だ。

対するアリシアは、彼女の前に膝をつき、手首を拘束されながらも、けなげなほどに一生懸命、言い募る。

「”ママを返してください！”」

「”母を追ってきたか……”」

きゅうっと大きな黒い双眸が、細まってアリシアを映す。幼い子供は、目の前の相手が与える圧迫感に、小さなその身を震わせて耐えた。

七季の体から放たれる威圧感に、客席の生徒はおろか、アンリエッタまでもがおののく。

「”ならば、我が使い魔に歌声を取り戻させてみよ。我が父を亡くしてのち、声を失いたる、我が半身を！”」

「夜の女王」に扮する七季が指し示したのは、玉座の傍ら――ア

ーチャーの肩に留まる、色あざやかなシームルグだった。
白い髪の偉丈夫もまた、従者役として、いつもとは違う黒衣をまとっている。長身の男を止まり木代わりにする神鳥は、五色の尾羽を揺らめかせて、心なしか、悲しげに少女を眺めやる。
「”お前の母にも、同じことを命じた。もし東風(こち)が――私の使い魔が、声を取り戻したなら、何でも望みどおりの褒美を与えるとな”」
『そう言われて、アリシアは困りました。手は縛られているし、アリシアは、お医者さまではありません。薬も持ってはいません。
いったいどうしたら、目の前の綺麗な、そして夜の女王が大事にしている鳥が、ふたたび歌うようになるのか、幼い彼女にはわかりませんでした』
才人のナレーションが、ふたたび入る。
「”ねえ、アリシア”」
『すると、アリシアの使い魔である、エイプリルが、こう言いました』
「”ひとりぼっちになって、歌を忘れてしまった鳥には、歌を聞かせてやれば思い出すかもしれないよ”」
長い耳をぴくぴく揺らすウサギに服を引っ張られて、アリシアはこてんと首をかしげる。
「”いっしょに歌ってあげる人がいれば、もしかしたら”」
『アリシアの使い魔は、ただの白いウサギではありましたが、とっても歌が上手でした。ママが家にいたころは、みんな一緒になって歌い、アリシアの家は、いつでも笑顔と歌であふれていたのです』
こくんとひとつ頷いて、アリシアは跪いたまま、エイプリルと一緒に、深呼吸。
そして。

あっちへ行ったり　こっちへ来たり

追いかけてくる　まっかな瞳
このまま心臓ひっぱって　持ってかないで

置いてかないで
並んで歩こう？　隠れてないで
素直な気持ちをぶつけてみよう

幼い女の子のソプラノと、かろやかなテノールが絡み合って、跳ね回るように高らかに空へと響き渡る。
どこからか聞こえるバックミュージックは、「夜の女王」演じる七季の、背中に広がる水晶の翼――デバイス「黎明」から奏でられるもの。

仲直り　したいけど
仲直り　できるさ
そう思える　心が素敵
シアワセ　あげたい
シアワセに　してあげたい
あなたが
私と
僕と

『うれしい　楽しい　大好き！
私も　うれしい　楽しい　大好き！』
ルビー色の瞳を合わせて、ウサギとアリシアが、愛らしく、声を弾ませて歌う。
「ぜんぶぜんぶ」

「ほんとの気持ち」
『だから　これからも仲良くしてくれるよね？』
まるでウサミミのように、ツインテールの金髪をふりふり、アリシアが歌い上げたとたん。
新たな声が、音楽が、滑り出した。

東雲は彼方　黄金（こがね）に焦がれて
眩しく照らす　暁にはばたき
此方の西に　暮れる紅（くれない）
沈む黄昏（たそがれ）　星の銀紗
行き交う日々に太陰を仰げば

「……落ちるも昇るも瞬きの逢瀬（おうせ）
背中合わせもかなわぬならば
ひとり天寝（そらぬ）る私を　せめて
照らしておくれと君に請う」
七彩五色の翼に寄り添い、歌の続きを「女王」が紡ぐ。
さらなる続きを、男が添えた。
「糸の先持つ君のこと　ずっと護っていたかった
流れる水よりなお早い　つれない風の背中でも――」
白い髪の偉丈夫を見上げ、ふと黒髪の「女王」は振り向く。
『鳥は、ずっと寂しかったのです。父王を失った悲しみのあまり、歌を忘れてしまった自分を、元に戻すための手段を探して、女王はあちこちに出かけていきました。
お城に戻れば、夜の国を受け継いだ女王としての仕事があります。ですから、鳥と一緒にいる時間は、前よりも、うんとわずかになってしまったのです。
一緒に歌ってくれる時間も、ありません。鳥は、大好きな主人と、

一緒に歌えないことが寂しくて、悲しくて、ますます元気をなくしていたのでした。
だから、アリシアたちの声を聞いて、一緒に仲良く歌う姿を見て、とても羨ましくなったのです』
才人は、台本を見ているとはいえ、よどみなくナレーターを務めている。
そして。
「”みごと。約定を果たそう”」
黒髪の「女王」が、さっと手を振ると、舞台の一角――カーテンで区切ってあったところから、メタルキングが現れた。
当然、アーチャーの使い魔・プラタ本来の姿である。
観客席から、どよめきが洩れた。
とたん。
ぼうんっ。
煙と共に、一瞬その姿がかき消える。
プラタが、はぐれメタルに分解して、するすると舞台袖にはけていった。そのあとには、アリシアとよく似たデザインの服を着込んだプレシアが立っている。
「”ママ！”」
アリシアが、ぱっとダークヘアの女性に飛びついた。
「”会いたかったわ、アリシア！”」
音楽は、まだ鳴り響いている。
ついにはナレーター役を務めていた才人も舞台に入り、従者役として七季の背後に控えていたリニスも加わり、声は重なる。
『姿を変えども変わらぬ光よ
背中合わせに座す君よ
今宵もひとり天寝（そらぬ）る私に　どうか降り注いでおくれ
東雲よ　西果てよ　天涯の君よ
どうか私に　降り注いでおくれ――』

「これにて、寸劇『夜の女王』終わらせていただきます。ご清聴、ありがとうございました」

最後はやはり、才人の挨拶と、出演者全員の一礼で幕を閉じた。

#１２０　始まらない物語ー夜の女王ー（後書き）

あとがき

＞ムダに長いわりに、内容はさっぱりありません！（言い切った）

「隠し芸なんて無理だから、カラオケやろうぜ！」という才人のアイデアが通った形の寸劇です。

歌のイメージはこちらですが、あくまでイメージです。

▼

アリシア&エイプリル

：「シアワセうさぎ」ビートまりお　あまね　ｍｙｕ３１４

オリ主&東風&アーチャー

：「東ノ暁　西ノ黄昏」【合唱】【ふぁみむ・クリヲタ】

です。ニコで検索すると出てくるかと。

歌詞掲載ガイドラインに伴い、一部修正しました。

#１２１　始まらない物語ー舞台裏のラプソディー

「入賞おめでとう」
「姫様が、僕のヴェルダンデの魅力に気づかないとは……残念だよ。しかし、君たちが、あんな劇をやるとは思ってなかったなあ」
七季たちが「サロン」と通称で呼び始めた小屋ではなく――珍しく、学生寮の部屋で、ギーシュやモンモランシーは、きょうの使い魔品評会について話していた。
「ああ、あれな」
才人が苦笑しつつも、アーチャーお手製の焼き菓子を、従者よろしくサーブする。同じ男としても、尊敬するところの多い英霊を、才人は見習うようになっていた。
ちなみに、その白磁に勿忘草が描かれた皿も、錬金の練習として、七季やアーチャーが作ったものだったりする。
アーチャーはアーチャーで、いつもの赤い外套姿のまま、紅茶を注いだカップを配っている最中だ。
「うちの使い魔は、東風（こち）以外、あまり芸事に縁がなくてさ」
そう説明するのは、黒い瞳の少女。まっくろな髪にふちどられた、あどけない面輪が、紅茶の薫り高さにふんわりとほころんで、七季は男から温かいカップを受け取る。
「アリシアのエイプリルが、ことのほか落ち込んだんだよ。特技が「薬草に詳しいこと」ってのは、役には立つけど、ああいう機会では、ステージ栄えはしないから」
その白ウサギはというと、いまは大好きな主の懐で、満足げにヒゲをそよがせ、アリシアに擦り寄っている。
愛くるしい金髪幼女と、ぬいぐるみみたいな白ウサギの取り合わせに、リニスとプレシアはおろか、七季やモンモランシーも、問答

無用で和んでいた。
「プラタは……ステージで見たと思うが、合体と分離で一発ネタくらいはできるんだがな」
一通り紅茶を配り終えたアーチャーが、七季の許しを得て、腰を下ろす。黒髪の少年も、彼にならって、ようやく座に加わった。
「東風（こち）は歌が凄く上手いんだ。だから、いっそのこと、みんなで歌ったらどうかって」
才人が目を向けた先には、黒髪の少女が座る、イスの背もたれに留まっている極彩色の神鳥の姿。
＜「カラオケやろうぜ！」は驚いたけどなー＞
＜う。だってわかりやすいだろ？＞
こっそり七季からの念話も交えてしゃべる才人。こちらも慣れたものである。彼らと念話で話すうちに、いつのまにかマルチタスクが身についていることを――少年じしんは、知る由もない。
「けどまあ、ただ歌うだけってのも、つまらないし」
「ステージ栄えするように、劇の演出として取り入れることにしたのよ。ナナキがね」
少女のセリフを後半だけ引き取ったプレシアが、ルビーアイを細めつつ、七季の黒髪を、かいぐりと撫で回す。そのさまは、まるで実の親子のごとく、ほのぼのとした空気を醸し出して、見るものの気持ちを和ませた。
＜さすがうちの子＞
＜もしもしプレシア？＞
満面の笑みを浮かべるダークヘアの美人ママさんに、七季の膝に丸くなっていたリドルが、思わず念話でツッコミを入れるのも、すっかり日常である。
＜お姉ちゃんは、このままうちの子になれば良いと思うよ！＞
＜そうですねえ＞
＜髪の色だけなら、プレシアさんの娘に見えなくもなくね？＞
アリシアとリニスまでが、にこにこしながら念話に加わって話す

内容を、こっそりアーチャーあたりは頭痛を覚えながら、ないしん嘆息する。

才人もさりげなく、テスタロッサファミリー寄りのコメントを挟んでいるだけに、七季の従者はチラリと頭に、勝気な少女を思い浮かべた。

――七季にも、血の繋がった妹がいるんだが……。

しかもツンデレだが、リドルやアーチャーの目から見れば、じゅうぶん過ぎるほどにシスコンである。姉である七季も、妹にはダダ甘だが。

彼女とアリシアが顔を合わせたら、えらいことになるだろうな、と思いつつ、アーチャーは鋼色の瞳を、あさっての方向へと向けた。七季の妹と、その幼なじみとの、裏取引っぽいまっくろ会話を思い出したのである。

「でも、配役を決めるまでは苦労したんだぞー。そりゃもう、もめるもめる」

いっぽう従者の懸念そっちのけで、七季はころころ笑いながら、まっくろな目を傍らのプレシアへと走らせる。

「最初は、『夜の女王』ってくらいだから、ナイスバディで美人さんなプレシアに、『女王』役をやってもらうつもりだったんだけど」

「アリシアの敵役なんて嫌！って譲らなくて……」

ステージでは、「夜の女王の従者」役だったリニスが、くすくすと可憐な表情で笑い声をこぼす。

「そ、それはっ。リニスだって、最初は自分が『アリシアの母親』役ってことに、嬉しそうだったじゃないの！」

うふふ。

あわてて反論するも、カフェオレ色の髪にふちどられた、優しげなリニスのにっこり笑顔に、ママさん魔導師はぐうと言葉を詰まらせた。

「で、まあプレシアさんが『母親』役を譲らなくってなー」

才人がそこに合いの手を挟むと。
「次に、じゃあ『夜の女王』を『王』にして、アーチャーにやらせようか、って話になったわけ」
七季の膝の上から、首を伸ばして、カップの紅茶を器用に舐めていた黒猫リドルも、口を挟んだ。
「そしたらアーチャーが、サイトお兄ちゃんの言葉にすねちゃったんだよ」
プレシアと山猫娘に挟まれて座るアリシアは、リニスの使い魔である、イタチそっくりのメイを首に巻きつけて、くすぐったそうにしながら付け足した。
「サー・アーチャーが？」
「何か意外ね」
ギーシュが目を丸くし、モンモランシーも青い目を、褐色の肌の偉丈夫へと向けた。
それまで七季を取り巻く、架空の姉妹合戦に思いを馳せていたアーチャーが、ばつの悪そうな面持ちで、事情をバラしたアリシアへと目を逸らす。
「サイト、何を言ったんだい？」
「はは……」
黒髪の少年も、そのときのことを思い出したのか、ギーシュに問われて頬をかく。
「それがさあ。プレシアだからって、夜の『女王』にしたわけなんだけど。アーチャーは男だから『女王』はおかしいだろ？」
そんなサイトに代わって、アーチャーの主たる少女が事情を明かした。
「んで、『夜の王』に名称を変えようか、って話になったんだけど。才人が、『夜の帝王』――私たちの故郷で言う、女ったらしの遊び人の頂点、みたいだって、うっかりと」
言っちゃったわけだ。
とたん、アーチャーはらしくもなく、ぷいっとそっぽを向く。

「しかもさぁ。ほら、『女王』役だった、私の衣装、黒を基調とした、わりと豪華なものだったろ？

あれみたいに、豪奢で黒を基調とした衣装のアーチャーを想像したらしくって、みんなして『ジゴロだ！たらしだ！似合い過ぎる！』って大ウケしちゃってな」

どう見ても夜のお仕事（ホスト）です。本当にありがとうございます。

「ぶふっ！」

「わ……わかるわ！

それは……ミスタには悪いけど、でも、ミスタ・アーチャー、とっても素敵ですものね」

噴き出すギーシュの隣で、金髪ロールヘアを震わせたモンモランシーも、笑いすぎで涙目になりながら、ちゃっかり本音を口にする。

「モ、モンモランシー！？」

すると、思いを寄せる少女が、自分ではない男を褒めたことに金髪を振り乱して、あわてるギーシュ。

「彼女にちょっかいをかける気はないから、落ち着きたまえ」

あわあわする少年を、ためいきつきつつアーチャーはなだめる。

「んでまあ、結果として消去法で、私が『女王』役をやることになったんだ。最初は、従者役その一の予定だったんだけどなー」

ほとんどしゃべらずに済むと思ったのに。

「ステージでは違和感なかったわよ？　案外ナナキ、役者でもいけるのかもしれないわね」

モンモランシーが、ちまりと目の前に座っている、小柄な少女を見て、感嘆する。

――こうして見ている分には、ただの少女にしか見えないのだけれど。

「ちなみに選曲は、才人でした」

現代高校生は、ニコ動やボカロ曲も知っていて、七季とふたりして――さりげなくリドルも混ざっていたりしたが――さんざん盛り上がったことは、まあ余談である。

そのころ、遠くガリアの空の下では。

「陛下――！　ジョゼフ様――！？」

広い王宮に、主を探す、シェフィールドの声だけが、むなしくどこまでも響き渡っていた。

#１２１　始まらない物語ー舞台裏のラプソディー（後書き）

あとがき

＞この舞台裏話を書くための演劇ネタだったと言っても過言ではありません（待て）。

「夜の帝王」アーチャー（笑）。

いや、フツーに考えたら「夜の女王」ポジションはアチャかプレシアの二択ですよね？

どっちもゴネたので、オリ主が代打になりました、という。

似合いそうなリドルは、まだ猫のふりしてますし。

披露する使い魔がおらず、地味な才人はナレーターで出番を作りました。

弓兵は黙って立ってるだけでも存在感あるんで。

次回は、二日（？）遅れでバレンタインネタというか、チョコレート絡みの小話を上げるかもしれません。

あ、ジョゼフは先輩に拉致られました。ジョゼフがんばれ。超がんばれ。

#122　黒くて、固くて、甘いもの？（前書き）

まえがき

＞とりあえず、時制そっちのけで読んでください。いちおう番外かもしれない。

　オイこれいつの話だってのは、書き手がさんざんセルフツッコミしましたから。

　でも先輩は出てきます。

#122　黒くて、固くて、甘いもの？

「ありがとう、ミスタ・アーチャー。助かったわ！」
金髪を縦ロールにした少女、モンモランシーは、ようやく完成した香水に、上機嫌な笑顔を浮かべて、白い髪の偉丈夫へと感謝を述べていた。
「どういたしまして。
しかし、私がやったことといえば、香水用の小瓶を錬金したことと、調合の際の、温度管理をしたくらいなのだがね」
「それがいちばん助かったの！」
香水を詰める綺麗な小瓶は、購入するとなると、それなりの金額になる。
ただし、土の魔法に適性のあるアーチャーは、器用なことも手伝って、細工も得意だし、売り物にしても遜色ないできばえの、クリスタルガラス製の小瓶が一山ほどもできあがったのだ。
余談だが、小瓶作りに勤しむアーチャーを見て、彼の真似をしたがったアリシアも、苦手な錬金魔法にトライし。
またその横で、可愛い妹分にせがまれ誘われた七季や、リドルも、遊びがてら、そのデキを競ったりしたものだから、むやみに小瓶が増えたことをつけ加えておこう。
で、山ほどの小瓶を、依頼者であるモンモランシーへと届けにきたアーチャーは、香水を調合中の少女にとっ捕まり、否応なしにコキ使われたという次第。
二つ名を「香水」と名乗るほどの腕前を持つモンモランシーは、
「これは売れるわ！」と自信たっぷりに、胸を張っていた。
「あ、そうそう。ミスタ。ちょっとかがんでいただけないかしら？」
「何かね？」

ひょい、と言われるままに長身を腰から折り曲げた男は。
しゅっ。
首筋にかかる水気を感じて、反射的に飛びのいた。
「!?　もう、大げさね。お礼よ。せっかくだから、おすそわけ」
アーチャーが見やれば、モンモランシーはその手に、噴霧器を取り付けた、香水の瓶をかまえていた。
「……まったく。私は貴婦人ではないのでね、そういう嗜みはないんだが」
――血の臭いをごまかすためならまだしも。
ほんの少し、残った過去のかけらに、剣製の魔術師は思いを馳せる。
モンモランシーの自信作らしい香水は、ナッツの芳ばしさにカカオの苦味とバニラの甘さをブレンドし、少しスパイシーなベルガモットを加えたような――そう、どこかチョコレートの香りに似ているものだった。
「あら。美味しそうな香りでしょう？
これならきっと、お菓子が大好きな、あなたのマスターもイチコロよv」
にっこり笑って悪びれない、金髪の少女は、絶句する男をさっさと部屋から追い出して、残りの香水を瓶詰めする作業に没頭したのだった。

「やれやれ……。しかしこれは、風呂にでも入らないと、落ちそうにないな……」
くん、と鼻を鳴らしたアーチャーは、香水を吹きつけられたのだろう、自分の首筋をさすりつつ、寮の部屋へと戻った。
決して悪い香りではない。だが、それは女性がまとうのなら、という話で、オーブンでこんがりと焼いたフォンダンショコラに似た

香気は、正直アーチャーには似つかわしくないだろう。
――モノを作ってもないのに、こんな香りをさせていたら、彼女はがっかりするだろうな。
食い意地の張った、おのがマスターの、しょんぼりとうなだれるさまをさまを脳裏に思い描き、アーチャーは精悍な面差しに苦笑を浮かべる。
「このぶんでは、きょうのお茶請けは決まりだな。さて、マスターが材料を持ち合わせているといいのだが……」
かちゃ。
ドアを開けると、さっきまで一緒になってガラスの小瓶を作っていた、アリシアと七季が、一緒にソファに寝転んでいるのが目に映る。
「あら、おかえりなさい……」
男へ声をかけたプレシアは、七季の従者から漂ってくる香りに気づいたのか、「あらあら」といった面持ちでクスクス笑う。
「おやつでも作ってきたのかしら？」
「残念ながら、これはモンモランシ嬢の悪戯でね。新作の香水だよ」
「それは七季ががっかりしますねえ」
イスに腰かけて編み物をしていたリニスと、何やら本を読んでいたプレシアは、互いの顔を見合わせて、肩をすくめた。
どうやらテスタロッサ主従が考えたことは同じらしい。
「なのでまあ、お叱りを受ける前に、作ってしまおうと思ってね。材料の調達に来たのだが」
七季の懐が、四次元ポケットと化しているのは、仲間うちでは周知の事実である。彼女の先輩――真言直伝のスキルなので、それ以上ツッコむことは、誰もしないが。
「あ、じゃあ俺も手伝うことありますか」
それまで、金髪幼女と黒髪巨乳少女の、心とエロスが同時に満たされるお昼寝シーンを堪能していた才人が、さっと腰を上げた。こちらも順調に執事化が進んでいるようである。

「ふむ。ではブラウニーでも焼こうかね。マスターが材料を持っていればだが」

とりあえず、肝心のチョコレートとココアの当ては、絶賛お昼寝中だ。さっきまで錬金をぶっ続けでしていたので、さすがに眠くなったのだろう。

いかに七季の魔力が無尽蔵に近いとはいえ、彼女じしんの体力は、少女のものだ。無理もない。

「マスター。起きてくれ、マスター」

その華奢な撫で肩を、そっとアーチャーがつかんで揺り起こすと、ほどなく、ぱち、と白い目蓋に覆われていた目が開いた。

ただし、春の陽射しとアリシアの子供体温の温かさに包まっていた思考は、夢と現(うつつ)を行ったり来たりの真っ最中。

「んぅ……？　あーちゃー？」

ほやん、と何とも舌っ足らずなソプラノがこぼれて、はたはたと蝶の翅(はね)がはためくように瞬きしたかと思いきや。

「いいにおいがする……」

ちょうど少女を起こすために、その傍らに跪いていた従者は、ぐい、と思いがけない力で引き寄せられ。

かぷ。

「――」

七季の唇の奥。真珠みたいに並んだ歯が、男の耳をお菓子みたいに何のためらいもなく噛みついた。

しかも食いちぎろうとか、そういう意図は感じられない、子猫か子犬が甘噛みするような、まさしく絶妙な力加減で。

「ん？　んん？」

硬直するアーチャーをよそに、食い意地の張った少女は、はみはみと彼の耳柄を唇で挟んで弄んだ――もとい、味見をしたあと、何が物足りなかったのか、今度は首筋に噛みついた。

かり。

こちらも力加減は、さっきと同じ。

ただ、香水の甘くほろ苦い香りが強いのか、鼻先をそこに埋め、舌を這わせて何度も繰り返す始末。

どがたんっ！

ようやく正気に戻ったアーチャーが、テーブルをひっくり返して飛びのくや。

「ん……かたくて、くろくて、あーちゃー」

とろん、と少女の面輪が甘く蕩けた笑顔を浮かべた。

「チョコみたいに、おいしい」

そう、ふんわりとのたまった七季は、そのままこてん、とソファにふたたび頭を下ろして目を閉じた。

「ね……寝ぼけてたのか……？」

どっどっど、とかりそめの心臓を脈打たせつつ、ひっくり返ったテーブルセットに埋もれるアーチャー。

「ッ……俺もモンモンの香水つけてくる――！」

そして叫びながら、ダッシュで才人が部屋を飛び出したとか。

あわてて少年を捕獲したアーチャーが、モンモランシーの香水を、あらためて分析したとか。

そんなことは、起きた七季は露知らず。

アーチャーが作ったおやつのクックベリーパイを食べる彼女の顔は、非常に満足げであった。

「あ、明日は、おやつにブラウニーが食べたいな」

『んぐっ』

さらに余談。

モンモランシーの新作香水は、若い異性にのみ誘引効果があるというので、アーチャーお達しの元、厳重に封印されたとか、されないとか。

いっぽう、遠く離れた異世界では。
「私だー！　来たぞー！」
とある廃墟で、その世界でも名うての悪党――幻影旅団の面々が、押しかけた真言を見るや、ダッシュでトンズラしようとして、あっさり全員叩きのめされていたとか。
「ちょっと、ナナキ（ストッパー）は！？」
金髪碧眼の青年、シャルナークがツッコむも。
「ナナちゃんなら修行中で、よその世界に放り込んでるけど？」
「それで、その男はいったい……？」
襟首つかまれている、青い髪のジョゼフは、いきなり景色が変わったゴミだらけの世界に、唖然と言葉を失っていたのだが――それはまた、別の話。

#122　黒くて、固くて、甘いもの？（後書き）

あとがき

＞ちょっと更新が遅くなりましたが、バレンタインつーか、チョコレートネタです。

そしてジョゼフはハンター世界にご案内。

#123　始まらない物語ー肩透かしのプレリュードー

近衛を引き連れ、さんざん衆目を集めながら学院をうろついていたアンリエッタは、いつまでたってもピンクブロンドの少女を見つけられないことに、業を煮やしたのか、学院長である老魔法使い（メイジ）に疑問を投げた。

「オールド・オスマン、ルイズがどこにいるか、ご存じありませんか？　久しぶりに、お友達と会えると思っていたのですが」

「ほ？　ミス・ヴァリエールでしたら、先日から、実家に戻っておりますが……」

王宮には報告していないが、ルイズがケガをした、あの一件で、ヴァリエール家とは少々もめたオールド・オスマンは、ないしん冷や冷やしながら沈着を装って答えた。

既に、七季たちに支払われた治療費の半分を、学院長からヴァリエール家へ支払うことで、示談となった話ではあるが、痛い腹を探られたくない身としては、つつかれるだけでも頭痛がするというものだ。

「え？」

いっぽう、ルイズが不在とは、思ってもみなかったアンリエッタは、青い目を見開いて、ぽかんと口を開けた。「トリステインの薔薇」とも謳われる美貌が台無しである。

物騒な――じつに物騒かつ厄介な頼みごとを、「お友達」に持ちかけるつもりだった王女は、あてがはずれて数秒のあいだ、呆然とした。

「そういえば、殿下と彼女は、幼なじみでしたな。何かご用でもおありでしたかな？」

その反応をオスマン老がいぶかったのは、むしろ当然であろう。

他の貴族の子弟たちが聞いている前で、何の配慮もなく「お友達」呼ばわりしてしまう、アンリエッタの浅慮さもさることながら、その「お友達」と連絡を取った様子もない。

ルイズが学院から去ったのは、少なくとも一週間は前のことである。それだけあれば、仮に会うつもりがあるのなら、連絡なり、何なり、いくらでもできたはずであった。

「い、いいえっ……。

ひ、久しぶりに、お友達のルイズに会えるのではと、楽しみにしていたのですけれど……そうですか。いないのですか……」

悄然と肩を落としたアンリエッタ同様、その護衛についているワルドも、ないしん手懐けるつもりの少女がいないことに、あらためて驚いたのだった。

同じトリステイン魔法学院は、学生寮。

「それはそうと、マスター」

ギーシュやモンモランシーが辞したあと、異世界トリップ一行は、それぞれに、編み物をしたり、本を読んだり、勉強をしたりと過ごしていたのだが。

「ん？」

声をかけられた七季は、ふと顔を上げて、おのが従者たる褐色の肌の男を振り返った。

「この前、トリスタニアに出かけたとき、ギルドものぞいてきたのだが、依頼を受ける許可をもらいたい」

アーチャーの言葉に、ことん、と小鳥さながら首をかしげる七季。

窓の外はもう暗い。魔力を灯したランプの明かりに、まっくろなポニーテールが灯火のオレンジ色を帯びて、ふわりと揺れた。

「オスマン老から受け取った金があるとはいえ、節約するに越したことはない。

それに、いきなり何もなしに収入がある、ということは、色々と疑われやすいからな。表立った収入の糸口を作った方が良いと思うのだが」

「なるほど」

もっともなセリフに、黒衣の少女は頷いて、さっきまで編み物をしていたアーチャーの顔を見つめ返す。

いつもなら、とっくに厨房へマルトーを手伝いに出かけている時間だが、アンリエッタ王女滞在の間は、異邦人である彼が厨房に出入りするのは好ましくない、ということで自重しているのだ。

「それなりに蓄えがあるとはいえ、稼いでおいて損はないし、出かけるついでに、マスターたちの作った秘薬を売りさばくこともできる」

「一石二鳥、というわけね」

話を聞いていたプレシアも、納得の声を上げた。

「ただ、私はあくまでマスターの従者だからな。むやみと離れるわけにはいかないし、もちろん許しなしに、依頼を受けることもしたくない。

どうだろう？　許可してはもらえないかね？」

じっと隣からうかがってくる、鋼色の瞳に、少しだけ考え込む。

「んー……わかった。ただし、三つ約束すること」

ぴっ。

立てられた三本の指に、今度は男が首をかしげた。

「？」

「依頼の見極めは、私もいる場ですること」

白い指が、ひとつ折り曲げられる。

「了解した。あとの二つは？」

またひとつ、指が折り曲げられる。

「ケガをするな、とは言わない。でも、ケガをしたことを隠さないこと。それから――」

大きな夜色の瞳が、アーチャーから逸れて、黒髪の少年に走った。

「才人を連れて行くこと」
「俺!?」
名前を出された少年は、思わず自分を指差して、アーチャーと七季の間で、視線を行ったりきたりさせる。
「……なるほど。つまり、ムチャをするなと」
ひとつ、偉丈夫が深いためいきをついた。
ようするに七季が意図しているのは、一人で突っ走りがちなアーチャーに重石(おもし)をつけることなのだ。
「そゆこと」
にん、とあどけない少女の面輪に、人の悪い、それでいて確かに慈しみの色がにじみ出た笑みが浮かぶ。
「了解した――ただし才人、君がついてくるか否かは、もちろん選択できるのだぞ?」
そう言い、赤い外套をまとう錬鉄の英霊は、鋭い目を少年へと走らせた。七季はアーチャーに、彼を連れて行けと言った。しかしそれは、才人じしんの承諾あっての話だ。
「ええと」
少年は、少しだけ口をつぐんで、じっと黒髪の少女を見つめた。
才人がアーチャーよりも弱く、未熟なことを、彼女が知らないはずはない。確実に足手まといになるのもわかっている。それでも、七季は才人について行けと、目で言っていた。
――ああ、心配なんだな。
「俺、行きます」
黒髪の少女が、アーチャーを心配するように、才人もまた、七季を気にかけていた。きっとアーチャーに何かあったら、少女は傷つくのだろう。
それがわかるから、才人は自分が、尊敬する男のストッパー役を引き受ける気になった。
「そうか」
アーチャーは、少年の決意に何も言わず。

「じゃ、この話は終わりかな」
七季も、アーチャーに向けるのとは違う、けれども優しい笑みだけを、才人に見せて答えに代えた。
「ああ。依頼はマスターと一緒に見に行くことになるのだから、虚無の曜日、ということになるな」
「あ、そっか」
――どんな仕事、すんのかな。
男の言葉に、才人は声を上げると、少しだけ胸の奥が沸き立つのを感じた。
「ママー、リニスー。ナナキお姉ちゃんも、お風呂入りに行こー」
そこにアリシアが声をかける。きょうは、王族が来ているということで、厨房も張り切って品数の多いメニューが並ぶらしく、そのために夕食の時間も、常より遅くなると言われていた
その間は時間が空くので、どうせだからと、七季たちは早めに入浴することにしたのだ。どうせ風呂のある小屋――「サロン」は、学生寮からは少し離れている。
「あら、もうそんな時間？」
はたとプレシアも腰を上げ、すっかり主に代わって準備万端のリニスが、横から着替え一式の入ったバッグを差し出した。
「マスター、準備はこちらに」
「はいはい」
王族の加わる食事ということで、今夜のディナーは正装が原則。
「ドレスを着るのは、フリッグの舞踏会以来ね」
「げ。またヒール履くのか……」
「もー。何でお姉ちゃんは、おめかし嫌がるのー？」
そんなこんなで、わいわいとかしましい女性陣のあとを、才人とアーチャーは護衛がてら、苦笑しながらついていくのだった。

――ふーん。王女がピンクに、いったい何の用なんだろうね。

そのころリドルは、珍しく主から離れて、近衛として王女の側についている、ワルドの挙動をうかがうために、こっそり張りついていたのだが。

ルイズを探し回っていたらしい、アンリエッタの行動にも、疑念を抱いていたのだった。

――ま、僕らには関係ないと思うけど……。

するり、とその場を後にした黒猫は、そのまま「サロン」と呼んでいる小屋へと向かい、ちゃっかり女性陣のお風呂に便乗して、ぬくぬくと温まったという。

#１２３　始まらない物語ー肩透かしのプレリュードー（後書き）

あとがき

＞リドルが不在の理由でした。地味に見張って仕事してたんですよという。

ジョゼフ珍道中（違）は今回、お休みです（待て）。

#１２４　始まらない物語－鏡の裏のメヌエット－

「何で拉致ったかって？」
狂王と呼ばれた男に問われた、世にもうるわしい美少女はキッパリすっぱり即答した。
「うちのナナちゃんのぞいてたからじゃ！」
どげしっ。
いい年した美丈夫を、何のためらいもなく蹴っ飛ばした真言は、ふん、と胸を張ってのたまった。
「ナナちゃんは私の！
私のに手出しするヤツにはきっちりＯＨＡＮＡＳＨＩしてやんよ」
緋色の袴もあでやかに、波打つ栗毛を結わえた美麗巫女は、「調教開始」とサディスティックに微笑んでみせた。

流星街。
それは、何を捨てても許される場所。
家具や機械、産業廃棄物などといった、いわゆるゴミから、銃や刃物といった武器、そして死体から生きた人間まで。
政治的空白地帯である、この土地には、ハンター世界において、最も多人種が住むともいわれ、誰が何を捨てても、一切の干渉がない。
そんな場所に放り込まれたジョゼフは、真言からの簡単な説明を聞きながら、見渡す限りのゴミの山に、呆然と目をみはるしかなかった。
「人の……住む場所があるのか」

こんなところに。

呟く男は、王として一国を率いる立場にいる。スラムなどの存在は知っていたが、ゴミの町――否、町の様相すら呈していない、ただ廃棄物の堆積した景色に、ひたすら衝撃を受ける。

鼻を突く臭気は、それでも風向きのおかげで、だいぶマシな方なのだが、それでもジョゼフは顔をしかめずにはいられない。

そんなゴミの山にとりつく小さな影。

大人か子供かまでは判別できないが、人間だろう。彼らは、その積み上がった廃棄物を掘り起こしては、何か有用なもの――口に入れられるもの、ねぐらの足しになるもの、金になるものを見つけるために動き回るのだ。

異邦の街に立ち尽くす、青い髪の男は、しかしすぐに襟首をつかまれて、小柄な少女に引きずられることになる。

「さて。働かざるもの、食うべからず。ってことで、作物を取りにれっつらごー！」

「えええええ」

「加速」を使う隙もなく、ジョゼフは栗毛の少女にドナドナされた。

たどりついた場所には、ちょうど一反ほどの畑が広がっていた。

ゴミしかないと思っていた土地に、それはやけに豊かな光景として、ジョゼフの目には映る。緑の葉っぱと黒い土。そしてまるまると実をつける野菜や果樹が、そこにはあった。

流星街の中で、ここだけは楽園のよう――と思うのは、しかし早計である。

「遅かったね」

この畑の手入れをしていたのは、幻影旅団の面々だった。

彼らは雑草を抜き終わったところで、ちょうど水をまくつもりだ

ったらしい、金髪碧眼の青年が、幾分かくたびれぎみのホースを手に、振り返る。
「んー。かるくこの街について、説明をね。当分、ここで修行させるから」
さくっとカルいノリで注げた真言の言葉に、これまた何気ない口調で、シャルナークが返した。
「本気？　すぐ死にそうだけど」
朗らかな笑顔で、世間話でもするかのように言ってのけた青年に、しかしジョゼフは反射的に飛びすさる。
「……へえ」
童顔の中にかがやく、青年のエメラルドの瞳が、いたずらっぽく笑みを刻んだ。
「とうはたってるけど、素質はあるみたいだね。いきなり『開く』の？」
「んー。とりあえず、畑仕事させて、体力見てからにするつもり」
言い知れない威圧感を、シャルナークから感じ取ったジョゼフは、このまま逃げようと「加速」に踏み切ったのだが。
がし。
「あいにく、逃がすなって言われてるんでな」
二メートルはゆうに超える、毛皮をまとった巨漢の、大きな手に捕まえられ、ジョゼフは逃げ場を失った。
悪名高き「蜘蛛」たちが守る、豊かな菜園。ここで異邦の狂王は、悩みなど吹っ飛ぶ生存競争に放り込まれることになる。

いっぽうそのころ、ハルケギニアのトリステイン魔法学院では。
交代制とはいえ、アンリエッタ王女の警備そっちのけで、プレシアを口説きに来たワルドが、リニスの不興を買って、砲撃魔法をぶち込まれていた。

非殺傷設定とはいえ、渾身の魔力を込めて放ったリニスは、やたらめったらイイ笑顔で、サムズアップするプレシアに、同じく親指を立てたという。

#１２４　始まらない物語ー鏡の裏のメヌエットー（後書き）

あとがき

＞ちょっとだけ、「ジョゼフ珍道中（拡大版）」をお届けしてみました。

今回は、感想からいただいたネタで、ワルドがオチ担当。

珍しくオリ主の出番がありませんでした（笑）。

チートな先輩はオリ主のことを「自分のもの」認識してますが、オリ主もオリ主で「自分は先輩のもの」という認識している主従です。

まあ先輩は、オリ主にちゃんと、守り手にふさわしいお相手を見繕って、くっつける気でいますが。そこらの馬の骨を近づける気はないのです。

◆デバイス設定ー追加ー

◆七季

第三デバイス：ガニュメデス

＞インテリジェントデバイス。人格は男の娘（こ）（待テ）。ボクッ子な口調とアルトの声域が特徴。

プレシアの指導を受けたリドルが試験的に作ったデバイス。もろにウケ狙いでネタに走った、別の意味での魔改造品。しかし話す機会があまりない（汗）。

しかし機能は折り紙つきで、やたらめったら高度な演算機能をそなえている。七季の希望で、治癒魔法を使うためにハイスペック仕様となった。

同じ七季のデバイス・黎明を「兄さん」と呼ぶ。待機状態は、紫（ア）水晶（メジスト）のついた銀のイヤーカフ。

【基本フォーム：カドゥケウス（※1）】

＞杖形態。コンセプトは、まんま、魔法の杖。高度医療を目的とした形態。

名前の通り、双翼と双蛇をあしらった儀仗で、ハイスペックな演算機能をフルに使った治癒魔法を展開できる。

また、多種多様なナノマシンを内蔵しており、デバイスの修復やメンテ、自己修復も可能。もちろん人体にナノマシンを投与しての治療も念頭に置かれている。

※1）カドゥケウス

ギリシャ・ローマ神話において、伝令の神ヘルメスが持つ魔法の杖。頭にはヘルメスの翼が飾られ、柄には2匹のヘビが巻きついて

いる。
医の紋章である「アスクレピオスの杖」はヘビが1匹の意匠で、ヘルメスの杖とは似て非なるもの。

◆アーチャー
第一デバイス：イルシオン（※2後述）
＞非人格型アームドデバイス。の、はず。意志っぽいものを持つ。
テスタロッサ親子と、リドル、七季までが手を加えた、ちょっぴり規格外なトンデモ魔改造デバイス。
伝説の金属・ヒヒイロカネや賢者の石、神使である七季の血など、「魔術」的要素を含んだ素材を、これでもかとぶち込んでフレームから鍛造したワンオフ品。
製作者全員が、テンション上がりきって自重しなかった結果、人格をつけていないにも関わらず、魂が宿るという、おもろかしいことになった。
いまのところ人格はないが、なんとなく感情は伝わるらしい。ある程度、勝手に動いてくれる。
待機状態は、あかがね色の金属とオニキスを組み合わせたバングル。

【基本フォーム：ガントレット】
＞篭手形態。コンセプトは魔法の防具。機体の防具としての丈夫さを追求しつつも、機能は幻術に特化している。
アーチャーが投影する武器と、気配を持たせた幻影の武器とを併用することで、戦闘をより有利に導く。バインドなど、基本的な魔法プログラムもいくつか入っている。

【射撃フォーム：アロー】

＞弓形態。刃物がついた、あかがね色の弓。非殺傷設定が使える魔力矢を打ち出すための形態。威嚇・手加減用。
　もちろんこの状態でも投影や幻術は使えるので、幻術混じりの魔力矢や物理的な矢という、バリエーション豊かな使い方ができる。

※2）イルシオン
＞スペイン語で「幻」の意。

　第二デバイス：アギラス（※3）
＞非人格型アームドデバイス。
　ただし、イルシオンと同じ素材から作られたため、兄弟機のようなもので、やっぱり意志っぽいものが宿っている。こちらもある程度は自己判断で作動できる。
　兄弟機・イルシオンとリンクすることで、カートリッジの魔力を互いに流用が可能。また、カートリッジから、使い手であるアーチャーへ魔力を供給することも可能。
　ただしアーチャーの使用するカートリッジは、彼用に調整された特別製で（リンカーコアを通さない魔力の特性上）、使えるのはアーチャーと七季、リドルのみ。
　待機状態は、あかがねいろの金属と、黒ガーネットを組み合わせたイヤーカフ。

【基本フォーム：ガード】
＞セパレート型とでもいうか、二つで一つのセット形態。
　ハーフショルダーガード部分：第四次ランサー、ディルムッドの肩当てのような、シンプルなデザイン。
　シールド部分：片手に装着する盾タイプ。投影で攻撃力の高い武装をあつかえるアーチャーの、防御面を支えるために特化。

物理的な防御力はもちろん、多種多様かつ高硬度のシールドを多重展開できる。カートリッジを複数リロードすれば、ロー・アイアスに近い耐久度のシールドを張ることもできる。

※3）アギラス
＞スペイン語で「鷹（タカ）」もしくは「鷲（わし）」の意。

第三デバイス：エスピナ（※4）
＞非人格型アームドデバイス。
もともとは、アーチャーが飛ぶための箒を作ってみよう、というコンセプトで作られたはずのデバイス。
いつのまにか銃身やら槍やら仕込まれたのは、多分にプレシアをそそのかした真言の、悪ノリによるもの。
世界樹の小枝とミスリルを主体にしたフレームで、木材とは思えない強度を誇る。箒のはずだが「アームドデバイス」認定された、これまた魔改造品。
待機状態は、まさかの十徳ナイフ。

【基本フォーム：ガンランス】
＞銃槍というよりも、砲と槍といった形態。でも箒型。コンセプトは「魔法の箒」だが、どっちかというと「魔改造な箒」というありさま。
掃く穂先部分に砲身が隠されており、柄の部分は、仕込み杖のように、槍が隠されている。
穂先部分はミスリル製で、持ち手にあたる柄の部分が世界樹の木材。仕込み槍のブレード部分には、モンハン世界の竜素材が使われているというトンデモ仕様。
箒としては乗って飛ぶことができる（ハリポタ式）。また、七季

やリドルのデバイスとリンクが可能。

だが、本来の目的からは大幅にずれ、砲撃魔法を使用することを念頭に置いた威力重視型として完成された。

カートリッジ式ではなく、七季をコンデンサとして使い、周囲の魔力を集束して射撃魔法を使うという、びっくりデバイス。

ようするにアーチャーでＳＬＢ（スターライトブレイカー）。エクスカリバーと違う点は、他人の魔力を使えるところ（シャレ抜きで鬼仕様）。

エミヤシロウで射撃魔法とか、相手は涙目である。もっとも魔力の集束には時間が必要なので、前衛がいることが前提。

アーチャーとオリ主ふたりをフリーにする必要があるので、あまり実践的ではない。

※４）エスピナ

＞スペイン語で「棘」を意味する。

◆リドル

第一デバイス：エキドナ（※５）

＞インテリジェントデバイス。人格は女性型で恭しい。

プレシア、リニス、アリシアに、七季とアーチャー総出で手を入れまくった、これまた魔改造品。

こちらもアーチャーのデバイス同様、伝説の金属・オリハルコンやアムリタ、神使である七季の血など、「魔術」的要素を含んだ素材を、めいっぱいぶち込んでフレームから鍛造したワンオフ品。

しかもフレームの鍛造をアーチャーが請け負ったため、インテリジェントデバイスにあるまじき強度となった。ふつうにアームドデバイスとガチバトルできる。

そのうえベルカ式のカートリッジを試験的に導入したため、魔法の威力もえらいことに。闇の帝王にふさわしいスペックといえる。
待機状態は、エメラルドのついた銀のイヤーカフ。

【基本フォーム：ロッド】
＞杖形態。いわずもがな、コンセプトは「魔法の杖」。リドルの第二デバイス「ウロボロス」や、七季が装備するストレージ「ノア」とのリンクによって、幅広い魔法が使える。
見た目は象牙のタクトとウェストに装備したホルスター。リドルは打神鞭仕様にしたかったらしいが、「自重しろ」と却下された。主に弓兵とかに。

【近接フォーム：トンファー】
＞トンファー形態。懐に入られたときの近接戦闘用。インテリジェントデバイスにあるまじき強度があるからこその用途。ちなみに、この状態でも魔法は使用可能。
アーチャーの発案によって、トンファーの先から鎖つき鉄球も出てくる。

※5）エキドナ
＞ギリシア神話に登場する怪物。上半身は美女で下半身は蛇という。『蝮の女』がその名の意味。

第二デバイス：ウロボロス（※6）
＞ストレージデバイス。
素材はエキドナと同じ。ただし、機能は七季の「ノア」と同じく「魔法の本」をコンセプトに作られた。記録した魔法プログラムをデータとして溜め込むことができる。

待機状態および基本フォームは、いずれもブラッドストーンのついたチョーカー。猫の姿でも身につけられることを念頭に置かれているため、リドルが変身すると、オートで大きさが変わる。

※6）ウロボロス

＞古代の象徴の1つで、己の尾を噛んで環となったヘビもしくは竜を図案化したもの。語源は、「尾を飲み込む（蛇）」

#１２５　鏡界のソルフェージュ ― あわただしい渡り鳥 ―

「つーわけで、迎えに来たよー」
にょき。
いきなり、虚空に開いたジッパーから、うるわしい顔をのぞかせた真言に、風呂上がりのトリップ一行は、思わずぴきんと固まった。
「おお、みんなおめかし。野郎はどーでも良いけど、美人と可愛い子は大歓迎ｖ」
「えーっと……どういうわけですか？」
その中でも、いちばん彼女に耐性のある七季が、数瞬ののちに再起動して問いかける。フリーダムで垂れ流された本音はスルーするあたり、彼女の慣れっぷりがうかがえる。
「マコトだー。お久しぶりです、こんばんはー！」
次いで、若草色のドレスを愛らしく着こなしたアリシアが、ちょん、と裾をつまんで、ごあいさつ。おなじみの金のツインテールが揺れるさまは、どこか華麗なアクセサリーのよう。
「お久しぶりです、マコト」
「ばんわっす」
続いて、律儀でちょっと天然入ったリニス、つきあいが浅いゆえに、かえって「こんなもの」だとデフォルト登録してしまった観のある才人と、あいさつが続く。
「こんばんはー」
――うん。東風（こち）とデルフ、それからデバイスくらいかな。
かたや、ぱちぱち瞬く七季の黒い目は、違わず、おのが主たる栗毛の少女を映しつつ――脳裏には持って帰る、もしくは連れて帰るものをリストアップしていた。
錬金した宝石などの貴重品は、基本、例の収納空間にかたっぱし

から突っ込んでいるので、あまり移動に不便はない。
剣であるデルフリンガーは、このところ日常的に弄られていたため、収納空間ではなく、すぐに手の届くところに置かれていたのだ。
＜黎明、戻っておいで＞
＜イエス、ユアハイネス＞
学院の哨戒に当たらせていた「スワロウテイル」フォームのデバイス端末を呼び戻し、少女は、その指に菫青石（アイオライト）の指輪を飾った。
――そーだ。いったん偏在も消しとかなきゃ。
幸い、時間は夜。王宮にもぐりこませた「オルタンシア」はベッドの中だ。意識の中で繋がっている手綱を解き、注いでおいた魔力を解く。
こちらに戻ってから、また改めて編んだ偏在を、転移魔法で送り込めば良いだろう。
ふ、と言葉にならない手ごたえを、意識の端で感じながら、七季は極彩色のシームルグを手元に呼び寄せる。
「主殿の帰郷か」
連れて行け、とばかり、羽ばたきとともに、紺色のドレスをまとう少女の肩へ――傷つけないよう、正確には、その肩を覆うショールの上に――足をかける東風（こち）が、その色あざやかな羽で、主を飾るかのごとく寄り添う。
「どこに行くんですか？」
うっかり帰るものだと思っていると、とんでもない方向に拉致られたりする。
それを、これまでに幾度となく経験している七季は、だから東風（こち）には答えずに、真言へと確認を取って振り返った。
「シャルたちが、ナナちゃんに会いたいって言うから」
案の定、である。
彼女が口にしたのは、異世界での養い子の一人――流星街で育った、念能力者の名前だ。
――まーた何かムチャやらかしたのかな？

七季はちょっとだけ、いまや幻影旅団と呼ばれている――名乗ったのは、頭が良いくせに、子供っぽいリーダー格の男だが――メンバーを、鍛えるために行った、真言の「修行」を振り返った。

数瞬ほど、思考が止まり。

――よし。今回はアーチャーのご飯をふるまってあげよう。

きっと美味しいものが好きな彼らは、元気になってくれるに違いない、とひとりこくこく頷いている七季。

いっぽう、緋袴をはいたチート巫女の言葉に、リドルと才人だけが「んん？」と妙な声を上げている。

「はあ。ってことは、お仕事は？」

いちおう釘を刺しておく七季。バイト先の上司である、神門神社の守銭奴神主には、ストッパーとしての役割を任されているので、それなりに気を回さなくてはならないのだ。

「ちゃんと退庁してから行ったから、だーいじょぶじょぶ」

ここで仕事はぜんぶ終わった、と言わないのが真言である。

「……もしかして、また何か捕まえたんですか？」

黒髪の少女は、小鳥よろしく、きゅるりと首をかしげる。

――猫みたいなトコあるからなぁ、先輩。

ようするに、目の前のチートな巫女さんは、捕まえた獲物を見せに来る、あの習性に似た行動を取ることが多いのだ。

新しい使い魔や式神を捕獲したときしかり、珍しい品物を手に入れたときしかり。

ちなみに、新たな術を開発したときには、しばしばその実験台にされることも、あったりなかったり。

「あはー」

琥珀の双眸を、三日月みたく細めて、にんまり笑う少女にドン引いたのは、そのタチの悪さを知っている、アーチャーとリドル、そしてつきあいこそ短いものの、修行でしごかれたことのある才人だ。

男三人は、こぞって顔を引きつらせ、その思考をシンクロさせた。

――そうか……新たな獲物が捕まったか……。

らしくもなく、胸のうちだけで十字を切る男性陣。
心なしか、その目が遠い。

「ええと、マコト？
私たち、こちらに来てから一ヶ月もたっていないのよ。まだ、こちらの魔法を習熟するには、ぜんぜん時間が足りないわ」
とっさにそう言ってから、ないしんプレシアは考え込む。ラベンダー色のドレス姿が艶かしいだけに、知性を湛えてきらめくルビーアイが際立って見えるのも、いっそう美しく映えている。
――学院への襲撃。クーデターか、もしくはテロの疑い……きな臭くなってきた、ということかしら？
彼女は、目の前の神妻が、どれだけ七季を大切にしているか、その一端を知っている。おのが「神使（しんし）」を、厄介ごとに巻き込まれる前に迎えに来た、と言われたなら、納得せざるをえない程度には。
しかし真言は元気いっぱいに、ダークヘアの美女へと請けあった。
「そのへんは心配ご無用っ！
こっちにまた来るときに、私たちが、ここから移動した直後の時間に合わせるから。実質のタイムラグは、数秒ってとこ」
ブイサインを作って胸を張る、栗毛の少女のバストがたゆんと揺れた。
「さすがチート」
間髪入れずにツッコんだのは、お風呂上がりで、ふわふわピカピカの毛艶を誇るまっくろにゃんこ、こと、リドルである。
水気は魔法で飛ばすというドライヤー要らずは、地味に便利だ。
とたん、猫好き、ケダモノ好きな真言は、すぐさま黒猫姿のリドルを抱き上げた。
「ふぉおお、ふわふわ！　もふもふ～！」
頬ずりする少女に、若干迷惑そうなリドルだが、黙って彼女の好

きにさせる。これも、いつものこととといえばいつものことだ。
中身は悪霊もどきだと知っていても、もふもふ美麗にゃんこであるかぎり、リドルの身の安全は保障されている。
リドルあざとい、というなかれ。手元の式神を、みんな帝都心霊庁の同僚に貸し出している真言は、もふもふの毛皮に飢えているのである。しかも、こちらの季節は、いまだ肌寒い春。体温のあるあったか毛皮は、それだけで気持ち良い。
そのあいだに、七季たちは手分けして支度を――といっても、手荷物をデバイスに放り込むだけだが――整える。
改造途中のデルフも、しっかりデバイスに収納された。あとでまた、今度は真言の手も入れて、しっかりばっちり改造するのだ。
デルフ、南無。
――金田一先生のことは……また日を改めた方が良いかな。
いかな殺人事件の場数を踏んだ名探偵といえども、さすがに物騒なハンター世界へ同行させるのはな、となしんひとりごちた七季は「とりあえずドレスどうしよう」と、いたって現実的な問題に思いを馳せたのだった。

#125　鏡界のソルフェージュ ― あわただしい渡り鳥 ― （後書き）

あとがき

＞ちょっと急ぎ足になりました。

ジョゼフと合流すると長くなるんで……いったんカットで。

そんなわけで、オリ主一行、ゼロ魔世界から、一時離脱。

これからしばらくは、異世界におけるジョゼフ受難……もとい、

「ジョゼフ珍道中？編」が開始します。

お付き合いくだされば幸いです。

ぶっちゃけ、オリ主パートと先輩パートを分けて書くのに手間取ったもんで、いっしょくたにしてみた（待て）。

ストッパーきたから、少しはマシに……なると良いなあ。

#126　鏡界のソルフェージュ ― 災厄の収穫祭 ―

「って、ここどこですか？」
いきなり、白とベージュで統一された部屋に放り込まれた七季をはじめ、才人やリニスがあたりを見回す。
広い部屋ではあるが、ベッドが目につくところに置かれていることから、ホテルの一室だろうことがうかがえた。
「ん？　ヨークシンのホテル」
『ちょっと待てッ！』
すかさずツッコんだのは、黒髪の少年と、まっくろにゃんこ。
ようするに、日本文化知識のある男性陣（サブカル）だった。アーチャーはアーチャーで、くせというか習い性に近いらしく、部屋に盗聴器その他が取りつけられていないか、一通り解析している最中だ。
「ここってハンター世界!?」
「マジっすか！　念とかあんの?!」
さいぜん「シャル」の名に首を捻っていた、才人とリドルは、今度こそ聞き覚えのある都市名に気づいたらしく、トンデモ能力が存在する世界にテンションが高い。
「あれ。みんな、いまここにいるんですか？」
いっぽう七季は、この世界にはなじみがあるため、のほほーんとした空気のまま、ホテルの設備を見回しているとらに乗っかって、絶賛モフり中である。
宙をふよふよしている大妖の下では、若草色のドレスを着たままのアリシアが「次は私ねっ」とルビーの瞳をきらきらさせて、ねだっていたり。
「うんや。流星街にいるんだけど。ほら、アリシアには刺激強いから、連中」

ふるふる栗毛の頭を振ったのは真言である。
「ああ……」
納得の声を上げる黒髪の少女に、はたと気づいたのか、才人がその顔を引きつらせる。
「連中、って。もしかして流星街にいるってことは……？」
「旅団のみんな、元気かなー」
ほやーんとした口調で懐かしむ七季と、栗毛の少女を見比べたリドルは「どんなことになってるんだろう……」と、ゼロ魔についてのブレイクっぷりを振り返り、ないしんワクテカしながら、ぴこぴこしっぽを振っていた。

けっきょく、アリシアとプレシア、そしてリニスは留守番ということで、ヨークシン観光をすることになり。
テスタロッサ家の護衛として、久しぶりに人型になったリドルも、ヨークシンに残ることになった。人外少年の表情が、何とも残念そうだったのは、いうまでもないことだろうか。
リドルは、こそこそ才人に耳打ちし、ぜひ「幻影旅団」の変わりっぷり……もとい、どんな様子なのかを、報告するよう取り引きを持ちかけていた。
ちなみに、観光の軍資金はというと、七季の渡した家族カードである。
クレジットカードを託されたことよりも、恩人であり友人である少女に、「家族」あつかいされたことに、プレシア親子がきゅんきゅんしていたことは、まあ余談である。
「いってらっしゃーい」
「お気をつけて」
「おみやげ買ってくるわね」
「デバイス持っていくから、何かあったらすぐに連絡してね。駆け

つけるから」
かくして。
大・中・小、美人三人と美少年ひとりに見送られ、巫女さん一行は捨てられた街・流星街へ発ったのだった。
ジッパーで。

そこは、戦場だった。
まっかなものが、けたたましく笑い、薄い緑が空を裂き、紫の影が疾駆する。
黒い土の上――男たちは戦っていた。
野菜と。
「ちーす！　つーわけでナナちゃん連れて来たぞー！」
がごっ。
ジッパーから出てきた真言の声に、うっかり隙を作った青い髪の男は、薄い緑――それは、ジャガイモの葉っぱであったのだが――に殴り倒されて、昏倒した。
「あ、ナナキ。久しぶりー」
そこに、ようやく紫の物体――通称「歩きナス」と呼ばれるもの――を捕獲したシャルナークが、笑顔で寄ってくる。
「こんにちはー、シャル。きょうはナスの煮浸しでもするの？」
「きょうはノブナガが当番だからさ。ジャポン食には違いないけど。でも、ナナキが来るってわかってるなら、てんぷらかも？」
金髪碧眼の青年は、あどけなさを残した童顔で、にこにこと話しかける。
が、少女の背後に控える従者たちは、動き回る作物――だろう、物体に、唖然と言葉を失っていた。
「な……なあ、七季ちゃん。これ、何？」
おそるおそる、さっきジョゼフをぶちのめした葉っぱを指差すの

は、才人だ。
黒髪の少女は彼を振り返ると、あっけらかんとした口調でのたまった。
「ん？　それは『ダンシング・ジャガイモ』。ここは、先輩や私が品種改良した作物を植えてる畑だよ」
ただし、現在進行形で、念能力者であるクロロが「歩きナス」をダッシュで追いかけるようなトンデモ植物、と注釈がつくことを、しれっと七季は省略してのけた。

#126　鏡界のソルフェージュ ― 災厄の収穫祭 ― （後書き）

あとがき

＞短いですが、旅団と合流。

トンデモ野菜、めいどばい巫女ンビ。

つーわけで、流星街の畑は魔境です。詳しくは次回。

#127　鏡界のソルフェージュ ― 廃墟の食卓 ―

「……ッこれが、おふくろの味、ってヤツか」
悔しいが、うめえ。
羽箒を髣髴とさせる、チョンマゲ風の髪型が特徴的な男は、その男くさい面相で、だくだく涙を流しながら、手に抱えた小鉢の肉じゃがを食べつくした。男泣きである。
「俺の負けだ！　アンタに弟子入りさせてくれ！」
がばりとノブナガが頭を下げた先には、ちょっと困り顔の、料理の鉄人――もとい、錬鉄の英霊が座っていた。

その土地で、元気いっぱいに動き回る、野菜とおぼしき植物を見て、さすがのアーチャーも固まった。
しかし、である。
「アーチャー。きょう肉じゃが食べたい」
たぶん和食だし。
くいくい赤い外套の袖を引っ張ったのは、黒髪にふちどられた、あどけない顔の少女。見上げてくる黒い瞳は、きらきら期待にかがやいて、ハルケギニアでは食べにくかった和食をおねだりしていた。
七季にとっては、慣れっことはいえ、なかなか図太い神経である。
「……それは、かまわないが」
「やた！」
アーチャーの答えを聞くなり、七季は、目の前のトンデモ光景を、どこ吹く風といった調子で、てってこ畑に分け入っていく。
紺地のドレスをたくしあげた少女は、さっきまでジョゼフと戦っ

ていたジャガイモ――「ダンシング・ジャガイモ」に近づくと。
「お座り」
ぴっ。
少女が命じたとたん、ジャガイモは、その緑の茎をまっすぐ伸ばして直立。
次いで。
「お手」
ぱさ。
差し出された白い手に、緑の葉っぱが乗せられて。
「あ。ここんとこ、ちょっと虫に食われてる。誰か手入れサボった？」
まるでペットに話しかけるかのように、七季が声をかけると、ジャガイモは、その緑の体をふるふる左右に揺すって、否定の意を示し。
「そーか。おかわり」
ぱさ。
また、別の葉っぱが、少女の手に乗る。
「ん。麩も入ってないし、こっちは大丈夫、と。じゃあ、ちょっと根っこもらうからね」
そう七季が宣言すると、ジャガイモは、おのが根元を掘り返されるのを受け入れて、いくつかの塊茎――芋を収穫されたのち、また根元が埋め戻されるまで、いたって大人しくしていた。
「アーチャー、ジャガイモ採れた！」
まるでお使いから戻ってきた子犬のように、弾んだ声でぱたぱた戻ってくる少女の、白い顔についた土汚れを指先でぬぐいながら、赤い外套をきた従者は、物凄く迷ってから、問いかけた。
「これで作れ、と？」
「大丈夫。美味しいよ！」
にっこり笑顔で言い切られては、とっさに返す言葉が出てこない。
「……せめてニンジンとタマネギが欲しいな」

七季が食べるというのなら、作ってやろうではないか、と開き直った男は、その後、とらとともに、動き回る野菜をハントしにかかったという。

流星街は、幻影旅団の本拠地（ホーム）。その廃墟では、ただいま食事の真っ最中。

廃墟と言うわりに、綺麗に掃除されたフロアには、およそ四家族ぶんほどのタイニングセットが配され、巨大なテーブルには、本日の料理当番である、ノブナガ力作のジャポン食が、所狭しと整列している。

いまさらだが、もちろん食材は、あの、やたらめったらアクティブな野菜たちである。

「ナスのてんぷら、うまー」

しゃくしゃく。んぐんぐ。

七季は、上げたてのてんぷらを、塩でいただきながら、それはそれは幸せそうに笑っている。

さくっとした歯ざわりの衣に、閉じ込められていたほくほく熱々の野菜のうまみが、シンプルな塩のしょっぱさをアクセントにじゅわっと広がる。

「これ美味しいよー」

きっちりごくんと飲み込んでから、きょうの料理人に賛辞を送る黒髪の少女。

いっぽう、見ためはどうみても年上だが、子供のころから七季と真言に餌付けされまくった、オッサン顔の男は、照れ隠しのつもりか「おう」と短く応じながら、自分もジャガイモのてんぷらを箸でつまんだ。

「けど、さっきの肉じゃがにはかなわねえ」

こちらも口の中のものを、きっちり飲み込んでから発言するノブ

ナガ。こういうしつけは、真言よりも、むしろ七季の方がうるさかったりしたものだ。

「褒めてくれるのは嬉しいが」

さっき弟子入りを請われたばかりの、白い髪の偉丈夫は、やれやれと嘆息する。

「そうきりきりしていては、せっかく料理の味が落ちてしまうぞ。技術を盗みたいというのであれば、まあ、機会があれば手伝ってくれ」

「おお！」

イエス！

アーチャーの言葉に、ぱっと無精ヒゲの目立つ面貌をかがやかせた男は、箸を握ったまま、思わずガッツポーズをした。よっぽど嬉しかったらしい。

そんな光景を、ないしん「うわあ」と信じられない心持ちで眺める少年が一人。

才人である。

黒髪の少年は、まさか幻影旅団が、手料理に精を出すなどとは、思ってもみなかったのだが、ノブナガの饗したジャポン食は美味かった。

家庭料理というよりは、どちらかというと、そろそろ料亭の味である。

もっとも、料亭に行ったことのない才人は、「うちの母さんのメシよか美味いぞ！？」ということしかわからなかったが。

「そうですかー。ジョゼフさんって言うんですね。私はナナキ＝ナナチです。よろしくお願いします」

「う、うむ。こちらこそ……？」

ジョゼフと呼ばれた、青い髪とヒゲの目立つ男は、若干びくびく

しつつ、黒髪の少女にあいさつした。
それもそのはず。
この数日の間に、周りの人間――「幻影旅団」のメンバーが、どれだけとんでもない人間なのか、嫌というほど実感しているジョゼフである。
彼が放り込まれた畑の野菜は、「加速」が使えるジョゼフでさえ、ジャガイモ以上の相手は無理である。
なのに虚無の魔法である「加速」を使ってすら、倒すことのできない「歩きナス」――「歩く」とは名ばかりの――を、彼らはふつうに素手で倒す、もとい、収穫するのだ。
――魔法など使っていないのに。
呪文すら聞こえないので、魔法を使っているようには見えない、というのが正しいが。
エルフの先住魔法とも、また違う。
魔法そっちのけで、あまつさえ、武器らしい武器もなく、素手で、凄まじい戦闘力をふるう人間。
そんな彼らに囲まれ、逃げることも許されず、持ちうる叡智も役には立たない――しかも回りはゴミだらけの不毛地帯――そういう環境に置かれたジョゼフは初めて、祖国を、生まれ育ったガリアを恋しいと思ったのである。
さておき。
ジョゼフをこんな状況に放り込んだ元凶である、栗毛の美少女が、新たに連れて来たのが七季だった。
しかも、恐るべき戦闘力を持つ、旅団メンバーとはいたって親しげ。
ジョゼフの頭はいま、この少女にどう対応すべきか、どうやったら故郷に帰ることができるのか、とにかくフル回転で現状打破のために動いていた。
「んで先輩。私を呼んだ理由って、このひとですか？」
「んー」

もぎゅもぎゅナスの煮浸しを頬張っている真言は、呼吸だけで返事をする。

そのフォローをするように、横から小柄な青年――フェイタンが、舌足らずな口調で口を挟んだ。

「マコトは青いの鍛える言てたね。あとナナキ、治癒能力つけた聞いたよ。きっと回復役に呼んだに決まてるね」

エセな中国人っぽい口調は、しかしフェイタンの素だ。

中華料理が得意な彼は、のちにアーチャーと激闘を繰り広げることになるのだが――それはまた、別の話である。

#127　鏡界のソルフェージュ ー廃墟の食卓ー（後書き）

あとがき

＞ちょっと内容が薄めですな。旅団のメンバーは、みんなグルメハンターになりました。

それぞれが得意ジャンルを持ってます。

オリ主と先輩に育てられたらそうなるよ！

#128　鏡界のソルフェージュ ― 失われた青 ―

ハルケギニアは、ガリア王国。

それは、青き王が姿を消してから、しばらく時が流れたあとの光景。

「どこに……いったいどこにいるというの……！？」

半狂乱になって、主の存在を求める、黒髪の美女――シェフィールドの姿が、夜の王宮に浮き上がっていた。

いっぽう、時を同じくした、ガリアのとある館では。

緩んだ監視をこれ幸いと、他の未練を振り切り、心を鎖（とざ）した母を抱える、血に濡れた少女の姿があった。

「母様……私は」

薬によって眠りのさなかにある、青い髪の女性。その腕から人形がこぼれ落ちた。

「もう『人形（タバサ）』はいらない――『王女（シャルロット）』も」

ただ、母とともに生きるために。

身代わりとする、顔を潰した女の亡骸をベッドに横たえさせると、青い髪の少女は、使い魔である風韻竜・シルフィードに目配せした。

マスクで顔を覆っているのは、少女の姿をした彼女が、しゃべることを戒めるためでもある。

仇であるジョゼフが失踪したことで、シェフィールドがタバサの監視に回していた腕利きさえも引き上げさせて、その捜索に当たらせていることを、少女は知らない。

けれどもそれは、タバサと呼ばれた少女にとって、千載一遇のチャンスだった。

かの留学生一行の間でならば「神のご加護」とでも言われたかもしれない、幸運。

まるで選択を迫るようなそれに、シャルルの娘であった少女は、踏み切った。
きょうを限りに、彼女はその青を捨てるのだ。王家の証であるその色を。
「行く」
そして、青き髪の二人と、風韻竜がひそやかに立ち去ったあと、その屋敷は紅蓮の炎に包まれた。
闇に消えた彼女たちの行方は、誰も知らない――。

さて。
世界変わって、ハンター世界。
七季たちが、流星街に入ってから、一夜が明けたあとである。
「ほらほら、どうしたあっ！
足が動きもしないジャガイモ相手にそれじゃ、先に進めないよ！
ずっとジャガイモばっか食うかアアン？」
青い髪の男――実年齢は四十半ば。見た目は三十路の美丈夫――が、おのが半分も生きていないように見える巫女に、檄を飛ばされて「ダンシング・ジャガイモ」と戦っている。
「『世界を滅ぼす』男が、ジャガイモ相手に勝てないなんて笑止！
きょう中に、ナスまで進めないなら、そのヒゲそり落とすから覚悟しろ！」
「ひいいぃッ！？」
悲鳴じみた声を上げて、ジャガイモへと拳を繰り出すジョゼフ。
しかし、「加速」で強化されたはずのその拳は、たやすく緑の葉っぱに受け止められた。
ぱんっ。
拳が弾かれると同時、ジョゼフの体を襲う複数の衝撃――当然ながら、ジャガイモの葉っぱは、人間の両手ではない。何枚もあるの

だ。
　ジョゼフが攻撃するとできる、胴体の隙めがけて、ゆうに十を越える打撃が叩き込まれる。
　対するジョゼフは、片手で一つを受けつつ、とっさに後ろへと飛ぼうとするのだが――間に合わない。
　植物に死角はなく、故に、不意を衝くことは難しい。なおかつ、その茎と葉が届く限り、ジョゼフの攻撃は防がれる。
「……訊いても良いッスか」
　才人は、隣で檄を飛ばしている、栗毛の美少女――真言を横目でうかがった。
「ん、どした？」
　少年の視界の端では、うっかりしたのか、「ダンシング・ジャガイモ」に頭をシバかれて、コケているフィンクス（念能力者）がいたりする。
「あそこでゴツいにーさんが、ジャガイモに叩かれてよろけてるんですけど、念能力者って、たしかオーラまとってますよね……？」
「纏」という技術である。
　いくら料理上手で、わきあいあいと畑の世話してよーが、幻影旅団には違いないはずなので、彼らは腕っこきの能力者のはずである。
「ああ、そりゃあ」
　にっかり。ぺっかり。それはそれはイイ笑顔で、真言は堂々とのたまった。
「やつらのダンスには魂（ソウル）があるからね！」
　びっ、とサムズアップする美少女巫女さんに、絶句するいたいけな少年がひとり。
「ソウル＝オーラですよね、わかります」
　ほやんとした笑顔で、通りすがりにツッコミ入れていった七季のソプラノが、やけに才人の耳に残った。
　――アリなのかそれ。
　だいぶ真言たちの非常識に慣れてきたと思っていた少年だが、ま

だまだのようである。

いっぽう七季はというと。

半袖の体操服にジャージという、やたら学生らしい作業着姿で、アーチャーを従えつつ、畑の一角に立っていた。

リンゴの木の下である。

元はといえば、アップルバイが食べたいと言い出した七季が、当初は、その懐からリンゴを取り出そうとしたのだが。

「あ、間違えた」

懐をごそごそしていた黒髪の少女は、そのまっしろく小さな手に、ピンクの丸い物体を握って、そう呟いた。

『ヂーッ、ヂーッ』

サイズは、それこそリンゴほど。

まんまる球体なピンクのボディには、やたらめったらゴツむさくるしい顔がつき、細い玩具みたいな手足が生えたそれは、面妖な鳴き声を上げつつ、じたばたしていた。

「ナマモノっ！？」

とっさに驚いたアーチャーを、誰が責められるだろうか。

「やー。失敗しっぱい。丸くて顔がついてるから、間違えちゃった」

「どう考えても一つリンゴにあるまじき要素があるのだが！？」

白い髪の従者のツッコミも何のその。

「リンゴは畑にあるから、取ってくる」という少女に、危惧を抱いたらしい男は、例によってとことこついてきたという次第。

ちなみに彼女たちの背後では、アクティブな野菜の手ごわさが気に入ったのか、とらがナス相手に追いかけっこをしている。

「あ、いけね。棒取ってこなくちゃ」

ぱむりと手を叩いた七季は、ここで待っているよう、従者に言いつけると、さくさく敷地の一角にある小屋――おそらくは納屋――

へと歩いていった。
アーチャーが、自分が行くと申し出る暇もない。
と。
いまさらながら、彼は英霊である。
リンゴの木くらいの高さなら、ジャンプでもぎ取れるくらいの身体能力はかるくあるわけで。
思い立った彼が、それを行動に移したのは、べつだん珍しくもないことだった。
しかし、わざわざ七季は言ったのだ。
「待っててな」
と。
その理由は――
飛び上がった鷹の目に映ったリンゴは、じつに奇妙な面相をしていた。
紅くて丸い。サイズ的にも、市場に出回っているのと、そう変わらない。
だが、顔がついていた。
しかも濃い。
劇画調の、ぶっとい眉のあるやつ、といったら、日本人であれば想像しやすいだろうか。
それを。
ぶちり。
びっくりしつつも、アーチャーが手早くもぎとると。
ボバーン！
「あ」
空中で、不意を衝かれて落っこちた従者に、あわてて少女がぱたぱたと駆け寄った。
「もー！　だから待っててって言ったのに！」
大丈夫か？
ぱっとかがみこんで、男の無事を確かめる七季は、アーチャーが

せいぜいすすけているくらいなのを確認して、ほっと胸を撫で下ろした。
「……マスター」
「ん？」
「なぜリンゴが爆発するのかね？」
彼の手には、赤い果実がしっかり存在していたが、もぎ取るなり、爆発の衝撃を受けたのは、まさしくそこからであった。
「そーゆーリンゴだから。『爆発リンゴ』ってゆーんだよ」
だから、取るときは、棒で落とすんだよー。
のほほんと続ける少女に、アーチャーがツッコんだのは、まあ無理もないことだっただろう。
「何でさっ！」

余談だが。
けっきょく、きょう中にジャガイモをクリアできなかったジョゼフは、約束（？）通り、そのヒゲを真言にそり落とされたという。
ジョゼフがんばれ。

#１２８　鏡界のソルフェージュ－失われた青－（後書き）

あとがき

＞前半と後半のギャップがハンパなくて申し訳ない。

タバサは王族としての自分を捨てました。

いっぽうジョゼフは……人間個人としての、大事な何かを（強制的に）捨てることに。

ヒゲもなくしたよ！

感想からいただいたアイデアを採用させていただきました。ありがとうございます。

ちなみにオリ主が間違えて取り出したのは「ジバクくん」です（ｂｙ柴田亜美）。

#129　鏡界のソルフェージュ ―そのころのシスコン―

ヨークシン観光を楽しんでいたテスタロッサ家一行は、たまたまリドルが見つけたレストラン「蜘蛛の巣」で、ランチを楽しんでいた。

少し値は張るものの、コースのランチはめっぽう味が良く、すっかり舌が肥えてしまった一行にも、大当たりだと好評である。

「アーチャーと結婚したら、ずっとお姉ちゃんといっしょにいられるかなあ？」

――そしたら、アーチャーとも、お姉ちゃんとも、大好きな人と離れないで済む？

思いがけない、娘の爆弾発言を、しかしプレシアは叱るでもなく、少し考えてから真顔で返した。

「……そうね」

「そこのところはどうなんですか、リドル？」

次いで、リニスが黒髪の少年を振り返る。カフェオレ色の髪を揺らす山猫娘に、リドルはルビーアイを瞬いて、やれやれと嘆息した。

「それ僕に聞くの？」

「ナナキたちのことを、良く知っているかと思いまして」

「そのへんの契約については、マコトに訊いた方が良いよ」

コーヒーを一口すすり、人外の少年は肩をすくめる。

「でも一つ言えることは……」

「言えることは？」

リドルが切った言葉の先を促す、癒し系美女に、ルビー色の瞳が、悪戯っぽく笑った。

「ママ」

「なあにアリシア？」

「人外には法律関係ないから、嫁はいくらいてもオッケー☆」
ぐっと少年が親指を立ててみせるなり、こちらもサムズアップで彼を讃える、ちびっこツインテール幼女。
「リドルぐっじょぶ！」
「まあ人外の旦那が、いくらいてもオッケーなのと同じで」
ぽそりと洩れた小声を、野生の聴力か、しっかりばっちり聞き取ったリニスがツッコミを入れる。
「ナナキ狙いですよね、どう考えても」
「そう……いくらいてもオーケーなの……」
いっぽう、アリシアとおそろいのルビーアイに、野生のかがやきを灯すダークヘアの美人ママさんが一人。
「マスター、目が狩人（ハンター）です」
ハンター世界だけに。
リニスのツッコミもどこ吹く風。ぶつぶつと計画を練り始めたプレシアを、恐ろしげに見つめるのは、リニスの使い魔であるイタチ――そっくりなエコー、メイだった。
『きゅー』
＜――おなかすいたです、リニス姉さまー＞
＜あとでね＞

世界（ところ）変わって、長女不在の七地家にて。
「あれ、ねこいないの？　またバイト？」
学習塾の夏期講習から帰ってきた、おかっぱの少女は、静まり返った家の中の気配をうかがって、送り迎えをしてくれた母親へと振り返った。
「みたいねえ」
のほほーんとした口調で返ってくる、何とも大ざっぱな答えに、染めたのではない茶色の前髪を上げて、額を出している少女は、む

うっと眉根を寄せた。
「また神社？　ちゃんと宿題やってんの、アレ」
おっとりしてみえるはずのタレ目を勝気に吊り上げ、まるで保護者のようなことを言い出す次女に、七地家の母親は、のんびりと――長女が資質を受け継いだと思われる――マイペースなノリで「さあねえ」と首をかしげた。
「伯言くんと霜夏ちゃんがいるから、大丈夫だとは思うけど」
「まったくもう。中学生よりもヒマな高校生ってどうなのよ？」
ぷりぷりしながら、三つ違いの姉と変わらない身長の少女は、スカートの裾を翻して、自室へと荷物を置きに向かう。
そして、カバンから塾のテキストを取り出して、きちんと机に置いてから、空になったカバンに、財布を突っ込んで部屋を出た。
いったん外出したからと、洗面所で手を洗うのは、潔癖症のなせるわざだ。
「図書館に、本借りに行ってくるー！」
それからリビングのグラスに注がれた麦茶を、ちゃっかり一息で飲み干して、七季の妹――七地八音（はつね）は、夏空の下に飛び出した。
「いってらっしゃい。車に気をつけるのよ～」

買ってもらったばかりの黒い日傘を空にかざし、てってこ少女は道を行く。自転車に乗れない運動神経の持ち主は、この道行を「ウォーキング」「ダイエット」と自分に言い聞かせて、ひたすら暑い日差しをパラソルで遮る。
八音（はつね）のとび色の目が、ふと青銅の大きな鳥居を見とめて、きゅっと力を持った。
――別に、通り道だからよ。
そこは神門（みかど）神社。
少女が「ねこ」呼ばわりする姉がアルバイトしている神社である。

しゃりしゃりしゃり、と参道に敷き詰められた玉砂利が、波音に似た音を立てて参拝者を迎え入れる。

参道には、うっそりと茂った枝葉のアーケードが影を落とし、来た道よりも格段に涼しい空気を提供している。

「……こんにちは」

「こんにちは、八音さん」

少女がちょっとだけ間を空けてあいさつしたのは、相手の笑顔が――栗毛の美少年のそれが――あんまりにも完璧で胡散臭いから。

――やっぱり違うのね。

自分の姉に向けるのとは違う、と聡明な少女は、思いながらもひょこりと会釈した。

「あいにくと、七季ならいませんよ」

浅葱色の袴をはいた少年は、箒を手に、目配せで八音についてくるよう促す。短い付き合いでもないから、少女はしゃべりながらも、さっさと足を動かした。

「はーくん、私まだ何も言ってないんだけど」

「でも、七季の様子を見に来たんでしょう？」

いちおう幼なじみの間柄である伯言を「はーくん」と呼びつつ、八音は嘆息して目を逸らした。

「たんなる散歩だってばっ。ここ涼しいから。図書館に行くついでに寄ったのよ」

「図書館に行くには、少し遠回りですけどね」

くすくす笑う栗毛の少年は、さっきの営業スマイルとは違って、どこか意地悪げだ。からかいの色を含んだ声音に、ようやく八音はほっと胸を撫で下ろした。

――そう、こうじゃなくっちゃ。

なにしろ相手は、彼女の共犯者なのだから。

「さっきの笑顔、ナニ？　あれが営業スマイル？」

うっさんくさいったらないんだけど。

「失礼ですねえ。あれは参拝者さんに好評なんですよ？」

ちょっと眉を上げた美少年は、いかにも心外、というふうに声をひそめる。
「絶対ねこには向けないでしょ、アレ」
「当然です」
かるく毒を吐く年下の幼なじみにも、栗毛の美少年は小揺るぎもしない。穏やかな声のままで、箒をしまう物置へと向かう。
「で？　ちょっとは進んだの？」
少女がとび色の瞳で、長身の相手をうかがえば、見上げられた伯言は、苦笑を浮かべつつも肩をすくめて八音（はつね）へと応じる。
「それがなかなか。手ごわいです」
「もう！」
煮え切らない言葉に、おかっぱの少女は憤慨した面持ちで噛みついた。
「早く、うちのバカねこ落としちゃってよ。
最近、白い髪した、外国人っぽい男と街を歩いてるのを見たって友達から聞いたの。しかも、十は年の差があるっぽい。
ただでさえ、あのねこ変人に好かれやすいんだから、タチの悪い虫がつく前に、しっかり捕まえてよね！」
――ああそれはアーチャーさんのことですね。間違いなく。
伯言は知っている。
おそらくそれは、紛れもない、七季の使い魔である。きっと買出しの際に、現界したアーチャーが荷物持ちを申し出たのだろう。彼はたいそうな過保護だからして。
「お姉さん相手に、凄い言いようですねえ……」
さすがに、ちょっと呆れた声音の美少年にも、八音（はつね）は吊り上げたタレ目を戻そうとはしなかった。
ちょっと薄く、下がりぎみの眉といい、タレ目といい、面長の顔の作りは優しく気弱そうなのに、その瞳に浮かぶ気性は、むしろ苛烈だ。
「だってフラフラ危なっかしいったら！

目を離したら、ホントどこ行くかわかったもんじゃないわよ。あんなぐーたらボケナス娘、どこぞに嫁いでも、姑にイビられて帰ってくるに決まってるじゃない！

どうせ私が面倒みるはめになるんだからっ。少しでもマシな相手とくっつけないと心配でこっちがハゲちゃうわ！」

きゃんきゃん並べ立てるセリフは、姉である七季のこき下ろしだが、そのじつ彼女への庇護心がダダ洩れて垂れ流されている。

――本当にシスコンですよねえ。

七季の妹である彼女とも、長いつきあいの伯言は、紅茶色の目をそっと伏せて、過去を振り返った。

昔の八音（はつね）は、それはそれは人見知りで、母親の後ろに隠れるか、七季の後をちょこちょこついて回る、大人しい女の子だった。

べつだん伯言たちは、彼女をいじめたりはしなかったが、他の子につつかれると、すぐにぴいぴい泣いていたのを思い出す。

それが、ここまで勝気になったのは、良くも悪くも姉たる七季のおかげである。そのころ同年代の子に比べて、強く賢く、ついでに気も強かった七季は、妹をいじめる相手には、言葉か平手でもって、はっ倒したものである。

そんな姉の庇護を受けて育った八音（はつね）は、しだいに自信をつけ、ついでに弱いものいじめをすることもなく、ふだんはマイペースな姉を見習って、ふてぶてしく凛々しく、逞しくなったのだ。

だから。

ずっと側で、彼女たち姉妹を見てきた、霜夏と伯言だけは知っている。

八音（はつね）の中では、いまだ七季は、彼女だけのヒーローであり――どれだけ嫉妬やコンプレックスがあろうとも――絶対に嫌いになれない存在なのだということを。

――なにしろ、先輩に妬くくらいですからねえ。

筋金入りのシスコンである。

「その点、僕なら昔から良く知ってるし、両親もとっくに他界して

ますからね。
……しかし、僕から言い出したこととはいえ、まさか君が乗ってくださるとは思ってませんでしたよ」
伯言は、もはや依存とさえいえるほど想いを寄せてやまない、幼なじみ――七季を射止めるために、まずは馬から、と彼女の妹である八音（はつね）に協力を持ちかけたのだが。
その八音（はつね）が、がぜんやる気で、「とっとと七季をモノにしろ」とばかりに協力を惜しまないのには、少年じしんがびっくりした。
「だってこのご時勢、不況まっさかりだし。
うちの、ぼけらーっとしてるバカねこが、就職できるかどーかも怪しいしっ。
だったら、いっそ将来性のある、んでもって、うちのねこのことを、ちゃんと好きで、大事にしてくれる旦那にもらわれて、永久就職した方が、ずっとアレのためになるってもんでしょ……」
最後の方は、ごにょごにょと尻すぼみになっていたが、ようするに八音（はつね）は、彼女の姉である七季が、好きで好きで心配でたまらないのであった。それこそ、将来どころか、老後の心配さえしてしまうくらいに。
あまり似ていない姉妹だが、肌の白さだけはそっくりの頬を、暑さのせいだけではなく紅くして、栗毛の少女はぷいっとそっぽを向いた。
――ツンデレ乙。
たぶん、本人が聞いたら、間違いなく暴れだすようなことを、胸のうちだけでひとりごちて、少年は秀麗な容貌に笑み浮かべた。
「ええ。ずっと、一生、死んでも大事にします」
にっこり。
「だから協力、お願いしますね」
でも、霜夏じゃなくて、どうして僕を選んでくれたんです？
「合点承知。てか、霜夏くんとこは、叔母さんがダメ。あのひと性格悪いから、絶対バカねこイビられる」

はーくんの性格の悪さは、敵にしか向けられないでしょ。
呟く少女は、彼が絶対に七季を敵に回しはしないと知っている。
「君が妹――義妹（いもうと）なら、上手くやれると思いますよ、僕ら」
――ええ、七季を好きなもの同士。
天使のような、悪魔の笑顔を浮かべる伯言と、八音（はつね）は、似ても似つかないのにそっくりな顔をしていたという。

「おかえりー、クロロ」
「ただいま」
ホームへ戻ってきた、黒髪の青年に七季が声をかけると、幻影旅団のリーダーは、ふと思い出したように切り出した。
「きょう来た客でな。ナナキの気配が残ってた男一人に大中小の女三人がいたんだが」
「リドルたちかな？」
はむ。
言いつつ、きのう収穫した「自爆リンゴ」を材料にした、アーチャーお手製のアップルパイを食べる黒髪の少女。
すると、それまでハードカバーの書物に目を落としていた真言も、ふみふみ頷きながら、ベルガモットの香り漂う紅茶をすすった。
「偶然にしたって、お前らの店を見つけるとは、運の良い連中だなー」
腕っこきの料理人ばかりがそろっている幻影旅団のメンバーは、ヨークシンに「蜘蛛の巣」という名前のレストランをかまえている。
キッチンに入るのは、交代制だが、きょうはクロロの番だったらしい。多国籍料理や、創作料理が得意な彼は、その見目麗しさからも絶大な人気を誇っている。
「ナナキ狙いで、そこの男と結婚する算段を立てていたぞ」
「は？」

指されたアーチャーが、ティーポットを持ったまま、きょとんと鋼色の目を見開いて、ぎぎぎ、と主たる小柄な少女を振り返った。
「ついでに紅い目の男は、ナナキ狙いだ。ガチで」
「てことはリドルか。いまさらだなぁ」
どうせ一生いっしょなのに。
さらっとのたまった少女は、アップルパイの美味しさに、ふんわり幸せそうな笑みをこぼして、アーチャーに紅茶のおかわりをねだった。

「ちょっと待て。それで良いのかねマスター」
「ん？　私の処女は、もしかしたら神様の供物（くもつ）にするかもしれないから、ちょっとあげられないかも」
「さらに待て！」
「だって私、巫女だし。巫女の純潔って、力を失った神様には、最高の捧げものだから。必要になるかもーって」
「私もナナちゃんの割り切りっぷりはどうかと思う。乙女として」
「私は先輩のものですからー」
はくしゅっ。
「あれ寒気が」

#129　鏡界のソルフェージュ ―そのころのシスコン―（後書き）

あとがき

＞シスコンな妹たちを書きたかったので、オリ主の実妹にも登場してもらいました。

アーチャーが遠い目をしていたまっくろ会話というのは、伯言と八音（はつね）の裏取引という。

愛はあるんだけどな。煮詰まりすぎてドロドロです。ヤンデレ素質持ちの二人。

アリシアは、アーチャーが好き。でもオリ主も好きだから、横取りする気はない。みんなで仲良くすれば良いじゃない！と思ってる。

#１３０　鏡界のソルフェージュ―華麗なる戦績―

一日目
○ジョゼフ―爆発リンゴ×
▼
二日目
○ジョゼフ―笑うトマト×
▼
現在
×ジョゼフ―ダンシング・ジャガイモ○

一日目。
○ジョゼフ―爆発リンゴ×

「んじゃ、まずは、あのリンゴを取ることから始めよう」
ほい、と栗毛の少女から手渡された棒を、反射的に受け取ってしまってから、青いヒゲの美丈夫は、困惑の面持ちを浮かべていた。
――何故、俺がこんなことを？
生粋の王族であったジョゼフである。いくら色々なことを試してみたとはいえ、農家の真似事まではやったことがなかった。
しかし、彼をこの異世界に拉致してきた、とんでもない相手――真言は、ジョゼフの言い分など知ったことかとばかり、問答無用でガリア王に命じる。
「その棒で、上手くリンゴをもぐんだよ。ただし、爆発するから気をつけるように」

「……は？」
腕を伸ばして棒を掲げ、どうにかこうにか、赤い果実を手元に引き寄せようとしていた青い髪の美丈夫は、栗毛の少女のセリフ――その後半部分にけげんさを覚えて振り返った。
とたん。
ぼばーん！
「――ッ！？」
頭上で起こった爆発に、思わず飛びのいたジョゼフは、すかさず、すわ敵襲かとあたりを警戒したのだが。
「何やってんの。爆発するって言ったでしょ。リンゴだよ、リンゴ」
真言が指差す先には、枝からもぎとられて、落っこちたらしいリンゴが、地面にごろりと転がっている。
「……は？　え？」
おそるおそる、そのリンゴを拾い上げれば、紅いつややかな果実には、やたらめったらゴツ濃ゆい顔が刻まれている。
「……リンゴ、か？」
これが？
香りは確かに爽やかで甘いのだが、見たこともない形態のそれが、果たして食べられるのかどうか、とジョゼフは跪いたまま、その真言いわく「リンゴ」を片手にうんうん考え込んだ。
「とりあえず、このカゴいっぱい取るように」
ぽん、と側に置かれたのは、ピクニックに良く使うサイズのバスケットだ。
けっきょくジョゼフは、言われた通り、そのカゴいっぱいになるまでリンゴを収穫することに専念した結果――爆音ごときには動じないようになっていた。

二日目。

○ジョゼフ一笑うトマト×

ゆうべの夕食は、リンゴづくしだったジョゼフ。その翌日である。
「んじゃ、きょうはトマトを摘むように」
またしても畑――ただしきょうは、黒土のではなく、だいぶ乾いた土の畑に連れてこられ、真言にカゴを渡される。
サイズは、きのうリンゴを入れたのよりも大きい、背負うタイプのカゴだ。
「これがいっぱいになるまで、そこのトマトを摘むように。赤いのだけだからね」
ぴっと人差し指を立てて命じる、栗毛の少女は、それだけ言うと、周りで雑草を抜いて、畑の手入れをしている幻影旅団の面々に声をかけに行ってしまう。
逃げ出そうとしても、周りの彼らは、いずれもジョゼフを捕獲できるだけの実力者らしいと、初日で既に説明のうえで立証されていた。
――この俺が、農夫の真似事とはな……。
しかし、もしもこの場に、魔法が使えるシャルルがいたとしても、同じことをやらされるのだろうな、とふとジョゼフは考えた。
野菜の収穫は手作業だ。
きのうの「爆発リンゴ」も、ただ地面に落っことして拾うのでは、果実に傷がつく、と途中で栗毛の見目麗しい少女に蹴り倒されたのは、記憶に新しい。
ネットを張って受け止めたリンゴを、せっせと回収して回るのだ。
トマトも手でちぎらねば始まらない――と考えたところで、少しだけジョゼフは苦く笑った。
そして、さて始めるか、と諦観ぎみにトマトの木へと近づいたところで。
『食べてエエエェ！　私を、食べてエエエェ！』
「うぉわっ！？」

緑の葉っぱに隠れていた、赤い果実が、絶叫したのだ。しかも、きのうのリンゴ同様――、否、目が開いて血走って見えるだけに、こっちの方が百倍コワい。

『食べてエエエェ！　私を、食べてエエエェ！』

しかも聞こえる声が、甲高い、女みたいなそれなのだ。その場から動かないとはいえ、そんなゲタゲタ笑いながら絶叫する、赤い野菜が、怖くないはずがない。

さすがのジョゼフもドン引きである。

きのうの爆発に慣れたことで、ちっとやそっとじゃ驚かない自信のあった王様、それから三十分ほど、トマトと距離を取って様子をうかがうことに専念した。

けっきょく、一定の距離まで近づくと、どうしてもトマトがゲタゲタ笑いながら「食べて――！」と迫る（その場からは動かないが、気分的に）ので、ジョゼフは観念して、その「笑うトマト」を、カゴいっぱいぶっちぎったのだった。

ちなみに、その日の夕食は、トマトソースのパスタであった。

そして現在。

×ジョゼフ一ダンシング・ジャガイモ○

ぼぐっ！

オーラをまとった緑の葉っぱにＫＯされた美丈夫が、きょうもまた、ずしゃりと畑に崩れ落ちる。

その向こうに、「ひえええええっ」とドン引きしながら、笑うトマトを摘み取っている才人の姿を眺めつつ、七季は背後へと振り返った。

「フィンー。ちょっとジョゼフさん運んでー」

「ああ？　しゃーねーな」

眉なし強面（こわもて）のフィンクスだが、クセものぞろいの旅団の中では、わりと気のいい部類に入る。

ほとんど育ての親である、黒髪の少女のお願いに、肩をすくめて応じてくれた。

そして廃墟の一室。ジョゼフにあてがわれた部屋のベッドで、異邦の娘は、魔杖を模したデバイスを起動する。

「ガニュメデス、セットアップ。フォーム『カドゥケウス』」

双翼双蛇をあしらった杖に、ふわりと灯る、藍色の魔力光。

「アムリタ」

杖をかざされたジョゼフの負う、打ち身や骨折が静かに癒されていく。

――これでよし。

いまだ青い髪の男は気絶したままだ。医療用デバイス「ガニュメデス」の診断によれば、脳震盪などはないので、このまま寝かせておいてかまわないだろう。

「せんぱーい、治療終わりましたー」

七季がジョゼフの部屋から出ると、リビングあつかいの部屋には、ノートパソコンをいじっているシャルナークと真言の姿があった。

「ん。お疲れ。じゃあ夕飯までほっとくか。きょうもジャガイモだけど」

「さすがに、トマトとリンゴだけじゃ、栄養が偏りますもんね」

だから、まだ収穫（クリア）していないジャガイモも、食事として出しているのだ。炭水化物は大事である。

「先輩、優しいですね」

たぶんジョゼフが聞いたら、涙を流してツッコミを入れるだろうセリフを、七季はほのぼのとした表情で紡いだ。

「そういえば、さっき才人――平賀君が、トマト摘んでましたよ、ドン引きしながらでしたけど」

「あいつ意外と根性あるなー」

感心した声で目を丸くする栗毛の少女に、七季は「あとでお茶に

誘いましょう」とにっこり笑って、ソファに腰を下ろした。
「あ、ナナキ。除念の依頼来てるから」
「らじゃ」

#１３０　鏡界のソルフェージュ－華麗なる戦績－（後書き）

あとがき

＞ジョゼフＶＳＤＢ（ドメスティックベジタブル）。

読み手さまが上手いこと感想で仰っていたので（笑）。

とりあえず、ジャガイモまでの道のりは、こんなんでしたという。

#131　鏡界のソルフェージュ ― 盤上の駒 ―

「キングを取るのが手っ取り早いと思ったんだろう」
真言が、いったい何を考えて自分を拉致したのか、とぼやくジョゼフに、黒髪の青年は、黒のポーンを弄びつつ、口端を吊り上げた。

こちら――ハンター世界と七季たちが呼ぶ世界に、ハルケギニアは、ガリアの王が連れ込まれて数日。
ようやっと体力に余裕の出てきたジョゼフが、夕食のあと、何をするでもなくぼーっとしているところへ、こちらも暇をもてあましていたらしいクロロが「チェスはできるか？」と持ち込んで、いまに至る。
良くも悪くも、興味を持たない相手には無関心きわまりない、幻影旅団のリーダーが、声をかけることじたいが珍しいことを、ジョゼフが知る由もない。
まして、その誘いが、そろそろ現状――無理やり放り込まれた異世界ライフの――に慣れ始めたジョゼフの、抱くであろう疑問やストレスを吐き出させるために、七季と真言が仕組んだことであろうとは。
いかにふるまいが傍若無人ではあっても、あの巫女ンビは、人の気持ちがわからないわけではないのだから。
そんなわけで。
チェス盤を挟んで相対したクロロの言葉に、青い髪の――ヒゲはそり落とされてしまった――男は、一秒ののちに、盤上の駒へと目を落とした。

すい、と彼のクイーンが滑る。
「――なるほど。いかにクイーンが働こうとも、キング（おれ）がなければ勝負にならぬ、と」
そういうわけか。
涼しくなってしまった顎を撫ぜ、ジョゼフは胸のうちで嘆息した。
兵士（ポーン）も砦（ルーク）も騎士（ナイト）もすっ飛ばし、女王（クイーン）――ジョゼフにとっては、使い魔・シェフィールドこそが、その位置に値したが――すらも無視して、栗毛の少女は、王（キング）を奪取した。
――確かに、これでは戦（いくさ）にならぬな。
ハルケギニアを巻き込む、大戦争。
しかし、その指揮者がいなければ、計画は停滞するだろう。
シェフィールドは混乱し、ジョゼフを探すだろうし、レコンキスタへの援助も滞る可能性がある。
世界を隔てたのだから、使い魔の絆すら途絶えることも考えられたが――あいにくと、その証であるルーンが刻まれているのは、シェフィールドの方である。
遠く異世界のジョゼフでは、確認することはできなかった。
「ナナキであれば、また話は違っただろうが……マコトだからな。あれは、盤ごとひっくり返すやつだ」
端正な面差しの青年は、その黒い目を細めて、トン、と白黒のチェス盤を指先で叩く。
「原作」を知っている真言は、いずれ引き起こされる戦争を知っており、自分の「神使（しんし）」が戦乱に巻き込まれることを、よしとはしなかった。
そのため、戦争の元凶である、ジョゼフという因子（キング）を、盤上から取り除いたのである。
「……は。それでは、あの気まぐれな女神は、いったいこれから俺をどうする気なのだろうな」
ジョゼフの青い目が、うつろな色に燻（くすぶ）り揺らめく。それはどこか、曇り空を映す海の色に似ている。

しかしいっぽうで、彼は、カタカタと進んでいく盤面の戦況に、いつになく胸のうちが沸き立つのを感じていた。目の前の青年が、ジョゼフと競い合うことのできる知略の持ち主であることを、いまや疑うべくもない。

「さて。アレは龍神の妻らしくてな」

コトン、とクロロのポーンが盤上を往く。

「嵐を呼ぶと、相場が決まっているさ」

チェックメイト。

追い詰められた自分のキングに、ジョゼフは目を丸くすると、「もう一戦！」と声を上げていた。

その青い目は、見出した好敵手に、アクアマリンよろしくきらめいて、澄んだ色をのぞかせるのだった。

#131　鏡界のソルフェージュ ― 盤上の駒 ―（後書き）

あとがき

＞短いうえに、野郎オンリーという花のなさですみません（笑）。

オリ主、主人公なのに影も形もない。

あんまりジョゼフが不憫だったので、ここらでトモダチを作ってみました。

彼の悲劇の一端は、ジョゼフと対等に渡り合える存在が（色んな意味で）いなかったことにも起因していると思うんです。

クロロなら頭脳レベル的に張り合えるんじゃないかなー、とジョゼフの友人ポジについてもらうことに。とりあえず趣味トモで。

シェフィ姉さんが運んでくるはずの資金が滞って、パニクるレコンキスタ陣営も書こうかと思ったんですが、時制的には先の話だし、さらにオッサンだらけなので自重しました（待て）。

#132　鏡界のソルフェージュ ― 時には昔の話を ―

自分の過去を、頭の中身を、他者に知られるという羞恥プレイにさらされた挙句。

才人からクロロから七季から真言から、色々な言葉をかけられて、さらに羞恥の上塗りをして、そろそろどっぷり浸かった羞恥の海から自力で這い上がった、新・ジョゼフは、ツンギレぎみに叫んだ。

「ええい俺だけ過去をのぞかれるというのは納得がいかん！　手始めにクロロ、貴様の昔の恥ずかしい話をしてもらうぞ！」

それでも、命令形でないところ、自分と同じく頭の中身の記憶を、直接――と言わないところが、何となく、初めて？できた友人への感情が見て取れる。

非常に余談だが、このパクノダの念能力「記憶弾（メモリーボム）」は、「原作」とは違い、他の料理人からレシピを盗むために、パクノダが開発した能力だったりする。

人や物体に触れ、そこに残された記憶を読み取ることができる、いわばサイコメトリー能力は、その目的に非常に役立っているといえる。

また、今回ジョゼフの記憶を他者に見せたのは、その引き出した相手の記憶を、弾に込めて人を撃つと、撃たれた人はその記憶を植え付けられるという、「記憶弾（メモリーボム）」の派生能力であることを、つけ加えておく。

「昔の話か……別にかまわないが。なら、俺とナナキの出会いでも話すか？」

さくっとスルーするかと思ったクロロは、しかし存外あっさりとジョゼフの要求に応じた。

当の青い髪の男が「え？　良いの？」といった面持ちで、ちょっ

とソファに座ったまま居住まいを正しているあたり、予想外らしい。
たまたまジョゼフの隣に座っていた才人も、ないしん気になっていた点を話題に出されて、ワクテカした面持ちで、黒髪の青年と、まっくろポニーテールの少女をキョトキョト見比べた。
――あー。あとでリドルにも話してやんないとな。絶対すねるぞ。
見ためルビーアイにゃんこな人外少年に、すっかりフレンドリーさを感じている才人は、ひそかに胸を弾ませた心持ちで、話が始まるのを待つ。気分は、楽しみにしていた映画の上映を待つ観客だ。
いっぽう、黙ってはいるものの、やはり七季の過去となれば気になるらしい、褐色の肌の偉丈夫が、ちらちら黒髪の少女をうかがっている。
ついでに、七季の隣に座っている栗毛の少女は、何がお気に召さないのか、唇を尖らせている。
「別に良いよー。私も記憶ぼんやりだけど、まあ二人でフォローしつつ話そっかー」
あむっ。
それまで、リスのごとく、アーチャーお手製のドーナツを、こくこく頷きながら食べていた七季は、のんびりした口調でのたまうや、ブルマー姿のままで脂のついた指をぺろりと舐めた。
このホームに戻って、ジョゼフ羞恥プレイ（違）を開催するまで、このトリップ娘は、そのへんをジョギングしていたのである。
野菜の収穫以外は、あまり外を出歩きたがらない――いちおう治安が悪いという理由から――少女を、運動不足は良くない、と案じたアーチャー付き添いの下、えっちらおっちら走らされた、というのが真相だったりするのだが。
ちなみにTシャツと紺ブルマーという体操服は、特にトレーニングウェアを持たない、七季の私物だ。学校指定のものなので、誰の趣味でもないことを追記しておく。

俺がナナキと出会ったのは、たぶん六歳かそこらのころ。
まだ、流星街に捨てられて、そうたっていなかったと思う。
「……！」
淡々と話す声に、ジョゼフの青い目が静かに驚きを孕んで見開かれる。
いっぽう黒髪の少年は、真面目な顔でひたすら聞き逃さないようにと、注意をこちらに向けていた。
流星街はゴミの街。何を捨てても許される。もちろん人間も例に洩れず。
俺は、そんなことは知らないままに――けれど、自分が捨てられていたことは、漠然と悟り始めていたよ。
とりあえず、食べられるものを探さなければ、あっというまに動けなくなる。たまに出くわす、この街の人間には、水をくれるものもいたが、俺をさらおうとする奴もいた。
捨てられて、一週間たっていたかどうかのころだ。さすがにそれだけあれば、ある程度のことは子供にも理解できた。
とかく、子供は弱いから食い物にされやすいんだと。やっと掘り当てた食べられるものを、横取りされたことも、一度や二度じゃない。
悔しかったし、ひもじかったな。いつか同じ目に遭わせてやると、そう思った。
俺から奪うものは、そいつも奪われてしかるべきだ。とてもわかりやすい考えだろう？
ジョゼフの目が、弱々しく、遠い星のような瞬きを見せた。
「慣れかけていた俺は、その日、ナナキを拾った」
拾ったものは、そいつのもの、っていうのが、流星街のルールな

んだって。
教えてくれたのは、身なりはそろそろボロボロで薄汚れていたけど、とても綺麗で可愛い男の子だったよ。
私の手を、おっかなびっくり握って、でもそれからは離そうとしなかった。
やわらかくて良い匂いだって、泣きそうな顔で言われたのを憶えてる。それで妹を思い出したんだ。
「可愛くて、思わず抱きしめたら、まっかになったんだよね」
くすくす笑いながら言うと、いまやすっかり大きくなったクロロは、むうと唇を尖らせて、ごまかすようにコーヒーをすすった。どうやら、あちらもバッチリ憶えているらしい。
「暖房の代わりにするつもりなんだって。
私はどうしたかっていうと、じつは先輩に放り込まれた「修行」の最中でさ。うっかり失敗したのか何なのか、そこまではわからなかったけど。
どうも緊急の仕事――帝都心霊庁のね――に呼び出されたらしい先輩と、上手く連絡が取れなくって困ったから、とりあえずついていくことにしたんだ」
「いや、『とりあえず』でついていったらまずいだろう！」
知らない人間についていったらいけないと言うだろうに！
アーチャーのツッコミに、苦笑が浮かんだ。
「だって、どう見ても、うちの妹よりも小さな子だったんだもん。親も見当たらないし、周りもゴミだらけで、何となく物騒な雰囲気だったし。困ったときはお互い様かなぁって」
「七季ちゃんのマイペースっぷりが、天元突破な件」
すかさず平賀君もツッコんできた。こちらは心配よりも呆れが強い。まあ、いまこうして元気にしゃべってるんだから、危機はなかったとわかってるんだろう。

「でだ。そこから先が、運が悪かった――否、結果的には、良かったことになるのか、あれは？」
「そうだねぇ」
ナナキも、のほほんとした声で相槌を打ってきた。
いまや、あからさまにアーチャーという名の男が、顔を引きつらせている。
まあ、嫌な予感がするんだろうな。そして、その勘は正しい。
「結論を言うと、子供の俺とナナキは、人買いに捕まったんだ」
その言葉を、むすーっとした顔でマコトが聞いている。いまでもあれは、五指に入る、マコトの失態らしい。
あのころマコトも運の悪いことに、その五指に入る失策――というよりは不運――に、同時進行で遭っていたらしいから、責めるのは酷だと、理性的にはわかっているのだが。
「人か……ッ！？」
ええー！
いまこうして、のほほんとした顔で話している少女と、その犯罪的な言葉のギャップにおたおたしているサイトが、ナナキに訊くべきかどうかで、目に見えて葛藤している。
まあ、事実だけを言えば、ナナキに害はなかったんだが。
「むしろ、俺に関して言えば幸運だったんだ。ナナキが、よりにもよって、その人買いに、俺とセットで販売してくれと言ったんだから」
ああ、アーチャーが物凄い顔でナナキを凝視している。マコトは、つややかに波打つ栗毛を、いかにも不機嫌そうに、がしがしかき回し始めた。
本当にあれを聞いたときは、俺も耳を疑ったものだ。
「『この子は、私の弟なので、一緒のところに売ってください。抵抗はしませんから。痛いのは嫌です。
おじさんも、商品に傷がつくのは嫌でしょう？

それに私、処女です。傷がなくて、従順な若い女の子は、きっと需要があるし、イイ値段がつくと思うんです。私とこの子、引き離さずにセット販売なら、そのぶん高値もつけられます』。

まだ一言一句憶えてる。俺どころか、言われた人買いが目を丸くしていたのもな。

そんでもって、汚いよりも綺麗な方が高値がつくと言って、その人買いの男に、風呂を使いたいと言い出したり、俺の着替えを要求した日には……もう開いた口が塞がらないというか」

あんまり堂々と言うもんだから、人買いの方が、柄にもなく気を使ってな。これがまた、ほいほい言うことを聞くんだ。

すると、ナナキが、にっこり笑って嬉しそうに礼を言う。「ありがとう」って言われるたびに、男の顔が百面相になるのが、他人事ながらおかしくて仕方なかった。

「けっきょく俺たちはナナキの要求通り、セットで売られたんだが——その売られた先というのが、な」

くつくつ喉から笑いが洩れてしまうのは、仕方ないだろう。

本当に、あれは傑作だった。

ああ、あの男は——人買いは、たったひとりの少女に、ナナキの笑顔とまっすぐな感謝に絆(ほだ)されたのだ。

「一見、ナイスミドルなおじさまでねぇ。どこかの企業の社長さんだったかな？

とにかくお金持ちなのは、お屋敷の大きさと、その造りの凝りようからわかったよ。私たちが案内されたのは、ぶっちゃけ隠し部屋だったし」

あれは、わくわくしたなぁ、と思わず振り返る。

書斎の本棚の一角が、隠し部屋の扉ってのはロマンだよね。

ふと目をやると、何だか予想外にジョゼフさんがおたおたしてい

た。ここまでの展開なら、まあふつうは好き放題に陵辱ルート――ってな具合になるわな。貴族とか、エロゲなら。

けれど、事実はときに、小説よりも奇なり、なのだ。

「とっても優しげで、上品な、上流階級のナイスミドルは――ドMな変態という名の紳士だったのです」

ぶふぶは！

ジョゼフさんとアーチャーが、同時に紅茶を噴き、それを平賀君が、ささっとタオルで片付け始めた。順調に執事化が進んでいると思うのは、私だけかなぁ？

「穢れない、純真無垢でいたいけな少女に、罵られ蔑まれるのがお好みという、生粋の『紳士』でねー。

そりゃー私は、ちょっと涙混じりの声で『変態っ』『恥ずかしくないんですか！』『いい大人のくせに、そんな格好でいやらしい……！』と、心を込めて罵ってあげたのも、いまでは良い思い出です」

あはは。

くったくなく笑う私に、アーチャーとジョゼフさんが、声もなくテーブルに突っ伏していた。

うん、人間イスになったおじさまの背中に座ったりとかもしたけどね。

「運良く？真性の変態――それもドMに当たったってのは、たぶんにナナちゃんの強運なんだとしても……それを笑顔で話せちゃう、大らか過ぎる包容力が、おねーさん心配っ」

トラウマとか作ってない？　ほんとに？

ぷるぷるしながら、涙目で私の顔をのぞきこんでくる先輩は可愛いです。大丈夫ですよー。

「でも、人の性癖は千差万別ですから。相手を傷つけないなら、私はかまわないと思いますよ？」

痛いこともされませんでしたし。

「ナナキが上手いことやってくれたおかげで、おまけの俺も、下にも置かない待遇だったしなー……」

ちょぴっとだけ、クロロが遠い目で呟いている。
うーん。やっぱり子供のころにアブノーマルな世界を知ったのは、情操教育に悪かったよな。ごめん。
「そ、そういう問題じゃないような……」
平賀君も、おずおずとツッコミに参加してくる。あ、アーチャーの噴いた紅茶の片付け、ありがとな。
「うん、どういたしまして」
「まあ、先輩が迎えに来るのが遅れたのも、ちょうど入った緊急任務で、神門（みかど）さんが先輩かばって死にかけてたって理由だし。私もクロロも、わりと平和に過ごしてたんで」
「その代わりといってはなんだが、俺は変態に拒否反応が出るようになったな」
「それは悪いと思ってる」
ほのぼのとアダルティな――しかもアングラちっくな話題で朗らかに話す、黒髪の少女とその養い子を、その場の誰もが凝視しつつ、このマイペース加減は、しっかりクロロにも受け継がれているのだと、思わずにはいられない一同だった。

#１３２　鏡界のソルフェージュ ― 時には昔の話を ―（後書き）

あとがき

＞ちびっこ旅団の話が気になるとコメントいただいたので、調子に乗って書いてみた。

タイトルは、某空飛ぶ豚のアニメの主題歌から。

ジョゼフのトラウマをあっさり暴露するという要素が目的ですが、その内容はスルーという、ある意味暴挙（笑）。

#１３３　鏡界のソルフェージュ－狩人と蜘蛛－

「じゃあ、そろそろハンター試験を受けさせよっか」
ぽん、ときょうのメニューを口にするような、何でもない口調で言い出した栗毛の少女によって、ジョゼフは、世界でも類を見ない難関とされる、ハンター試験の受験が（強制的に）決定した。

さて。
時間はだいぶ飛んで、この世界での一月。
第２８７期ハンター試験に向けて、真言が紹介した、知り合いのナビゲーターをめざし、青い髪の男が最初の関門をくぐり抜けているころ。
巨乳の巫女さんコンビと、その従者、そして幻影旅団の面々は、既に試験会場に到着していた。
いわずもがな、ジッパーからである。
既に到着していた受験生の中には、ぎょっとするものも多かったが、その中に真言の姿を見つけたトンパなどは、無言でダッシュしている。もちろん逃げ出す方に。
と。
ねっとりとした殺気に、アーチャーがおのがマスターを庇おうとするよりも早く、黒髪の青年は、七季を抱いたまま大きく跳びすさっていた。
「やあクロロ。あいかわらずツレないなァ」
「寄るな変態！」
ぞわわわわっ、と鳥肌をたてたクロロは、名前を呼ばれることす

ら耐えがたい、と顎を引いて軽快を崩さない。
かたや、ピエロを髣髴とさせるメイクと、トランプのスートをあしらった奇抜な衣装で現れた男は、いくぶん高めの、どこか粘っこい口調でチロリと黒髪の青年を流し見た。
「戦(や)らないか？」
ドギャアアン☆
水色の髪をかき上げ、腰を突き出したセクシーポーズをとる、鍛え抜かれたマッシヴな長身の男・ヒソカ。はたから見れば変態である。十人中、十一人くらい納得しそうな変態だ。
「誰がやるかあああああッ！」
ちからいっぱい叫んだクロロは、その端正な顔を蒼白にしている。いっぽう彼の腕の中の七季は、大きな声に、フリーの両手を耳に当てて、ちゃっかり自衛しているところだ。
ちなみに、珍しく余裕のないクロロを、真言は可哀想なものを見る目で眺めていた。彼女も変態は大の苦手である。
「まったく……いくら迫っても相手にしてくれないから、ボクは苦労してフレンチの腕を極め、正式に旅団入りしたっていうのに。いったい何が気に食わないんだい？」
「お前の存在じたいがレッドカードだボケ！」
がるるるる。
「あーあ。団長もなあ。ヒソカ苦手なのはわかるけど、嫌がったらアイツ喜ぶだけだってわかってるのに」
シャルナークが、金髪頭の後ろで腕を組みつつ「モテる男は大変だね」と軽口を叩いている。他人事だからこそ、楽しめるというものだ。
「クロロ。君と彼の関係はどうでも良いが、マスターをこちらに返して欲しいのだがね」
そのままでは、七季が巻き込まれてしまうだろう。
変態につきまとわれるクロロに同情はしても、より無力な少女が巻き込まれてはかなわない、とばかりに、本音ダダ洩れぎみの要求

を投げるアーチャー。根が正直者である。
「おや」
　すると、いま気づいたように、ヒソカの目が赤い外套の男を映し出した。
「へェ……キミも、なかなか美味しそうだ……ｖ」
　ぺろり、と舌なめずりをするピエロ男の手に、さーっとトランプが舞う。
「ごめんこうむる！」
　言うが早いか、錬鉄の英霊は、クロロの懐から小柄な少女の体をもぎ取り、そこから十メートルも距離を取った。英霊の身体能力は、ダテではないのだ。
「じゃあマコト。ボクと遊ばないかい？」
　くるりと振り向くマッドなピエロに、栗毛の少女が返す言葉は即答だ。
「十メートル以内に寄るな変態ピエロ」
「酷いなァ」
　言いざま、一息で距離を詰めてくるヒソカに、琥珀の双眸をすがめた巫女が抜刀する。疾（シッ）、と白刃が奔（はし）り、男のしかけた伸縮自在の愛（バンジーガム）を切り捨てる。
「やかましいわド変態ピエロっ！」
「ボクは奇術師ｖ」
　物騒きわまりない戦闘が始まったことで、あわてて受付をしていたマーメンが、試験官であるハンターを呼びに駆けて行く。
「……あれも旅団の一員なのかね」
　物凄くビミョーな顔で、七季を腕に抱いたまま問うアーチャーに、黒いマントをまとうフェイタンが、舌足らずな口調で説明した。
「ヤツはヒソカ。強いやつと死合うのが、何より好きなバトルマニアよ。団長と戦うためだけに、旅団入りした変態ね」
「変態嫌いの団長は、ひたすら逃げの一手で、まともに戦えたためしがないけどねー」

シャルナークが、ぴこぴこ携帯を操作しながら、フェイタンの言葉に補足する。
「料理は上手なんだけどねぇ」
「七季ちゃん食べたの！？」
従者の逞しい腕に抱っこされたまま呟く七季に、才人がぎょっとしながら我が耳を疑っていた。

#１３３　鏡界のソルフェージュ－狩人と蜘蛛－（後書き）

あとがき
＞変態は変態（笑）。
　ただし、この話での彼は、団長恋しさ（笑）に、フレンチを極めて、以前の団員四番を蹴落としたという剛の者です。腕っ節もそうだけど、料理も。
　読み手さまから、団長は変態をどうしたんだ、という疑問をいただいたので、書いてみた。

※追記
　何故か投稿ミスで、「盤上の駒」と差し替わっていたので再度ＵＰしました。
（２０１１／０３／２９）

#１３４　鏡界のソルフェージュ ― 二つの星と蜘蛛の夢 ―

そのころジョゼフはというと。

ナビゲーター役のジンと共に、何故か、通りすがりのトラックに乗っけられていた。

「オメーも大変だなあ！」

かっかっか、と磊落（らいらく）に笑いながら、ジンは、真言に振り回される青い髪の異邦人をねぎらった。

世にも稀な「二ツ星（ダブル）」の称号を持つプロハンターは、異世界の王国・ガリアを束ねるジョゼフよりも十歳ほど年下というだけだろうに、それはそれは凄まじい童顔である。

とりわけそれを助長しているのが、少年そのものといった印象を与える、まっくろな目だ。

未知なる物への探求、はるかな旅路への冒険、未来を恐れることのない力強さと柔軟性。それらが渾然一体となって、燦然と燃える瞳は、さながら太陽。

狩人（ハンター）という称号はなるほど、「漢（おとこ）」の代名詞かと、納得してしまうほどに、かがやかしい存在感だった。

真言の友人というのも、頷けるというものだ。

そんなジンは、ハンター試験に対して、珍しく緊張しているジョゼフに、いままで自分が経験した冒険譚を、面白おかしく物語った。

絶滅したはずの貴重な獣と、食料の肉を取り合ったこと。

うっかりボス認定されてしまい、獣が離れずに困ったこと。

身の丈どころか、島ほどもある巨大な海洋生物の、寝返りで、乗っている船が沈みそうになったこと。

たまたま上陸した島で、とんでもない嵐に遭遇し――島ごと沈みかけそうになって、必死に仲間と知恵を絞ったこと。

食べた生物の特性を取り込んだ次代を産むという、ちっぽけな虫の、奇妙な生態のこと。

鎖国同然に、機械文明を拒んでいる、独裁国にもぐりこんだときのこと。

すべてがジョゼフには新鮮で、興味深く、四十を過ぎた男の胸を、年甲斐もなくわくわくさせた。

「お前も、試験を受けるからにはハンターを目指すんだろ？

どんなハンターになるのか、人それぞれで違うけどよ、ジョゼフが合格すれば、いつかどこかで出会うかもしれない、お仲間ってわけだ」

にかっと陽性の笑みをこぼすジンは、懐から取り出したメモ帳に、さらさらと書きつけた。

「そいつは俺のホームコードとメアドだ。失くすなよ？

ま、年も近いみたいだしな。携帯買ったら、連絡くれ」

べり、とちぎり取ったメモ用紙を渡されたジョゼフは、二人目の友人、といっても過言ではないあつかいに、ないしんひそかに感動していた。

「あ、ああ。かたじけない。必ず、携帯を買ったら連絡させてもらう」

それなりに、ハンター世界に馴染んだジョゼフであれば、携帯電話の存在くらいはしっている。シャルナークが、良くいじっていたからだ。

旅団のホームに引きこもっていた彼に、現金の持ち合わせがあるはずもなかったが、ここでようやっと、ジョゼフは勤労の意欲というものを覚えた。

――金を稼ぎ、携帯電話とやらを買おう！

ガリアの王様、初めての決意であった。

場所は変わって、とある船の中。
「親父を探すために、ハンターになるんだ！」
『俺は”蜘蛛の巣”にいる』
ミトがジンから託された伝言は、たった一言。
以来、くじら島で育ったゴンは、野山を駆け巡ったものだが――
それは、実物の蜘蛛の巣ではなく、「蜘蛛の巣」という名前の「何か」だろうと、ミトに諭されて、いまに至る。
もっとも、ゴンが野生児なことには、変わりないが。
「奇遇だな。私も、『蜘蛛』には縁がある」
言い出したのは、まるで少女のように秀麗な面差しをした金髪の少年、クラピカだ。
「私は少数民族の出でな……詳しいことは省くが、幼い頃に野垂れ死にかけた。
それを助けてくれたのが、たまたま旅の途中で通りがかった、幻影旅団――通称を、『蜘蛛』と呼ばれる、料理人の一団だったのだ」
飢えたクラピカに饗されたのは、たった一杯の温かなスープ。
しかしそれは、千金にも勝るご馳走であった。
家族を失い、寒さに凍え、飢えに衰えた子供に、それは天の恵みに他ならず。
「彼らは、拾った私を介抱すると、やがて、しかるべき最寄りの施設に預けて立ち去ったが……その恩を、忘れたことはない」
独特の模様をあしらった民族衣装をまとう少年は、とび色の目をきらきらとかがやかせて、希望に満ちた声を紡いだ。
「私は、彼らが経営するという店『蜘蛛の巣』で働く料理人になるのが夢なのだ！」
「あれ？　『蜘蛛の巣』？」
「うむ。しかし『蜘蛛』と俗に呼ばれる『幻影旅団』に加わるには、厳しい選考基準があってな。
最低限の資格は、ハンターライセンスを持っていること。
そして、一流の料理人は、どんな食材をも狩ることのできる、強

靭な肉体を持ち、いうまでもなく素晴らしい料理を饗せることが必要なのだ。噂によれば、旅団の団員は、A級賞金首と同等の実力を持つらしい」

「そりゃどんな料理人だよ！」

クラピカの話にツッコんだのは、医者志望だという、ちょっと老け顔の青年、レオリオだ。

さいぜんまで、船酔いに苦しむ乗客の介抱をしていた彼は、ちょっと皮肉屋だが、中身はいたって気の良い性格である。

「レオリオは？　どうしてハンターを目指してるの？」

「俺か？

まあ、ありきたりだけどよ。病気のダチを助けてくれた恩人が、ハンターだったんだよ」

難病に苦しむ少年を助けるには、高額の手術代が必要だった。

しかし、彼の家には、そんな余裕はありはしない。助かる可能性があるのに、金がないばかりに、見捨てられる命がある――。

理不尽だが、いっぽうで世界にはありふれた話だ。

「運がよかった。言ってみれば、それだけの話だけどな。

たまたま迷子になってたそのハンターと、ダチの見舞いに行く途中に出くわしてよ。目的地まで連れて行ったんだ。そしたら、お礼だって言って、治してくれた――じっさい治したのは、その人のツレだったんだけどな」

小さな丸いサングラスを鼻梁に引っかけたレオリオは、その奥にある目を、優しい決意で光らせていた。

「ああ。俺も、こういう風になりたいって思ったよ。

手術が必要なダチの体は、そのひとが飲ませた薬で、あっというまに良くなった。

一生働いてでも、金を返す、そう言った、俺とダチに、あのひとは、こう持ちかけたんだ」

『ならば等価交換をしましょう』

「いつか出会う誰かを、同じように助けてやってくれ、ってさ。『情けは人のためならず』――情けは人のためじゃなくて、いずれは巡って自分に返ってくるから、誰にでも親切にしておいた方が良い。

その人の国の言葉なんだと」

黒い目を細めるレオリオに、話を聞いていたクラピカが相槌を打った。

「なるほど。聖書にもいわく『して欲しい事を他人に為せ』――良い言葉だと、私も思う」

しみじみと頷く、クルタ族の少年に、ゴンも太陽みたいな笑顔を見せた。

「じゃあ、頑張ってハンターになろうね！」

#１３４　鏡界のソルフェージュ－二つの星と蜘蛛の夢－（後書き）

あとがき

＞ジョゼフ、二人目のオトモダチをゲット。

真逆のタイプだけど、これはこれで相性が良いと思います。

そして本来のハンター主人公組み。既に原作ブレイク済みです（笑）。

幻影旅団は料理人集団なので、「緋の目？　なにそれ美味しいの？」状態です。リアルに。

ちなみに、クラピカがスープをもらった旅団は、当時まだ少年時代で、料理の武者修行中だったという（待て）。

旅をしていたから「旅団」。

あと、レオリオの友人を助けたのは、ハリポタの魔法薬を持っていたオリ主です。この時代はまだデバイスなし。

レオリオと遭遇した迷子は、チートな先輩。彼女、方向音痴なんですよ。

#135　鏡界のソルフェージュ ― 飼い猫と友人 ―

ぱひゅーん。

開始された第一次試験。それは試験官であるサトツを追いかけて、ひたすら走る――否、ついていくことだったのだが。

歩くサトツを追いかける受験生たちは、ちらちらと後ろを、または自分の前を気にしていた。

それというのも

「は、はっ……七季ちゃん、それ、アリなんっ？」

何だかんだいって、幻影旅団のホームで、アーチャーとの鍛錬や、アクティブ全開の野菜と戦っていた才人は、それなりに身体能力がアップしていた。

サトツのペースにも、それほど乱されることなく、わりと落ち着いて自分なりのペースで走っているが、横に飛んでいる物体が気になるのは、しょうがない。

「ハンター試験は、持ち込み自由だし。私のこれ、いちおー自力だから」

答える黒髪の少女は、いつかのミニ丈バリアジャケット――まっくろな中華風の衣装というアレだ――で、箒に跨って飛んでいる。こちらはデバイスでも何でもない、モノホンの箒だ。ただしハリポタ製。

短い裾からにょっきり伸びた、むっちりと白い太股と、それを半ばまで覆う、紺色のストッキングの対比が、やたらめったら艶（なまめ）かしい。

ちなみに少し先には、サトツを見失わないための保険なのか、七季の使い魔であるシームルグ・東風（こち）が、色あざやかな羽根を広げて飛んでいる。

「ミルキに送ってやろーっと」
ぱしゃり。
携帯で写メっているのは、ゾルディック家の次男坊と友人のシャルナークだ。
たったかたったか、かろやかな足取りで走る、金髪碧眼の童顔青年は、パーカー姿も爽やかに、七季のコスプレ衣装じみた姿を眺めてご機嫌だったりする。
「こら、シャル！」
ちなみに、「原作」では、キルアに「ブタ君」呼ばわりされていたミルキだが――ちまたでは出回らない、幻の高級食材である、例の、アクティブな野菜を収穫するために努力を厭わず。
結果的にトレーニングをこなすことになった彼は、切れ長の目に長身という、けっこうな美形に成長した。
ただし中身はオタクなのだが、趣味に費やす資金のために、暗殺者の仕事はきっちりこなすうえ、真言や七季、シャルナークやクロロといった友人にも恵まれるという、とんだリア充っぷりを発揮している。
つい先日なぞは、設備が整っていることで有名な、ジャポンの漫画喫茶に、友人総出で繰り出すために、ゾルディックの飛行船を使ったりもした。
そこでまたひと悶着あったのだが――それはまた、別の話である。
さておき。
ぴこりーん♪
「送信かんりょー。いやあ反応が楽しみ♪」
けらけら笑うシャルナークに、こそりと黒髪の少年が近づいて耳打ちする。
「あとで写メ、こっちにも回してもらってイイすか？」
「何出す？」
「ハルケギニアでの七季ちゃんの話とか、どうっすか？」
「商談成立！」

こそこそとやりとりする、男ふたりに、横からゴン、と褐色の拳が天誅を下す。
「まったく。何をしているのかね」
走りながらためいきをつくという、常人にはなしがたいしぐさをこなす、赤い外套の偉丈夫が、携帯電話を取り上げようとするのを、あわててシャルナークはダッシュしてかわした。
「こら、待たないか！　マスターを取引のネタにするんじゃないっ」
「アチャ男は過保護ね。
それにシャル、きとナナキの恥ずかしい写真、いくらでも持てるよ」
ひきっ。
しれっと爆弾発言を投げつけて走り抜けていく黒い影――フェイタンに、一瞬、アーチャーが硬直し。
「その話を詳しく聞かせてもらおうか」
弓の騎士は、ぐんっと走る足に力を込めた。

いっぽうジョゼフは。
「ほう。友達が欲しいのかね」
「そーなんだよ。二番目の兄貴には、オタクだけど、良くうちに遊びに来るトモダチがいるのにさ。
この前なんて、仕事でもないのに、うちの飛行船で外国まで行ったとかって！　そのトモダチ連中とさ！
それに比べて、俺なんか、うちの跡取りだって、お袋がうるさくてうるさくて……ろくに外にも出してくれないんだぜ。レールを敷かれた人生ってのも何だかなー、ってーか」
ぶーぶー不満を並べているのは、銀髪の少年――ゾルディック家の三男坊・キルア少年だったりする。
彼の話に「そう珍しい話でもないと思うが」とジョゼフが考えて

しまうのは、やはり彼が上流階級、その中でも最高峰の王族だからだろう。
　囲い込まれて育てられてきた血筋の人間だからこそ、理解できることがある。
「ふむ。往々にして、そういうことはあるものだ。
　ずいぶん純粋培養されて育てられたようだが、外の世界でも、決してない話ではない。むしろ、俺も同じような立場だったな」
　こちらも、念能力者たちにもまれて鍛えられたおかげか、さして息切れすることもなく、走りながらしゃべるという荒業をこなしているジョゼフ。
　その後ろを走っているレオリオが、死にそうな顔だったりするのだが。
「え？　オッサンも？」
「おっさ……まあ、仕方ないか。四十を超えているからな俺も」
「若いなオイ！」
　すかさずツッコミを入れたのは、老け顔だとさんざん言われたレオリオで。
「えー！」
　オッサン呼ばわりしたキルアじしんも、驚きの声を上げる。
「レオリオ……下手をすると、君より若く見えるんじゃないか、彼は？」
　真顔で振り向く、クラピカの顔に、唾を飛ばさんばかりのいきおいで反論するスーツの青年。
「うっせええ！」
　にぎやかに主人公組と話しているジョゼフは、なかなか楽しそうである。
「話を戻してだ。
　囲い込まれるのは、それなりの理由があるということだ。俺にもあったし、弟にもあった」
「へえ……な、その理由って？」

キルアは、青く猫みたいなアーモンド形の目を、きらきらさせながら、ジョゼフに話しかける。
年こそ離れているものの、自分と似たような環境だったという男に、興味が湧いたのだろう。
「家庭の事情というやつだな。命を狙われたり、誰かに利用される恐れがあった。
それは、俺たちが何かしたから、というよりも、これから俺たちが何かするから、というのが理由だったんだがな」
「ん？　どういう意味だ？」
「ふむ。力を持った家に生まれるのは、本人のせいでなくとも、責任が伴い、ときにそれが災いや鎖ともなる、ということだ。色々な意味でな」
「ふーん……」
キルアは、大人のジョゼフから話を聞いて、少しだけ考え込んだようだ。
「けど。けどさ。やっぱ、オレはトモダチってのが欲しい」
一人じゃつまんねーし。
「……そうか」
眉間にシワを寄せる猫目少年に、ジョゼフはかるく背中を叩いた。
「まあ、友人がいるというのは、悪いことではないさ。きっと」

#１３５　鏡界のソルフェージュ ― 飼い猫と友人 ― （後書き）

あとがき

＞思ったよりも難産というか……ジョゼフとキルアが意気投合する予定なんて、なかったんですが。

どうしてこうなった。

キルアのゾル家時代は、完全室内飼いの猫みたいだなー、と思わないでもないです。

#136　鏡界のソルフェージュ ― 魔女と子猫 ―

「何だっけなー。なーんかを思い出すんだよ……七季ちゃん見てると」

あいかわらず、箒に乗って空飛ぶ少女を横目に見ている才人は、走りながらもウンウンうなっていた。わりと余裕である。

「『魔女宅』じゃない？」

まさしく、七季が跨る箒の後ろに、ちょこん、と座る黒猫姿のリドルが、名作アニメの使い魔役よろしくしゃべるのを聞いて、「おお！」と少年が手を打つ。

「それだ！

てかリドル、わざわざ出てきたのはそのためか！」

「ここはお約束だよね」

日本文化（サブカル）どっぷりのオタ同士で、何やら理解を深めている、男ふたりはさておき。

「アーチャー、アーチャー」

かるくフェイタンとシャルナークを締め上げ、「七季の恥ずかしい写真」について事情聴取した、赤い外套の偉丈夫は、追いついてきた黒髪の少女に話しかけられて、振り向いた。

「ああ。ことわりもなく側から離れてすまなかった、マスター」

律儀にわびる従者へ、七季はにぱーっと笑顔を浮かべて、ふるふるかぶりを振る。

「ん。いまはそんなに危なくないから、へーき」

そういう彼女だが、途中で蹴落とそうと襲いかかってきた受験生もいて――結果、意思持つデバイスである「黎明」の魔力弾や、サイトの棍で叩きのめされていたりするのだ。

短いハルケギニア生活の間に、すっかり従者根性が染み付いてし

まったらしい才人である。
余談ではあるが、自分もストレス発散したかった真言が、獲物を取られて、地味にぶーたれていたことを追記しておく。むしろ、これは襲撃者には幸いであっただろう。
旅団も逃げる、チートな巫女さんから、ぶちのめされる前に、意識がトンズラできたのだから。
「あのさ、あとでプリン作って欲しいんだ」
「？……かまわないが。ここで話すようなことかね？」
桜色の唇に、こそりと耳打ちされた男は、灰藤の色にけげんな色を浮かべつつも、断りはしない。
ついでに、色よい返事をしたおかげで、浮かれた七季が、箒に乗ったまま、走るアーチャーの首に抱きついてきても、されるがままというダダ甘っぷりだ。
背後のリドルと才人からジト目が送られているのも、むべなるかな。
「この先に……もっと走らないと、ダメだけど。クモワシって鳥の住んでる山があってさ。その卵がもう絶品なんだ！」
弾んだソプラノで、うきうきと訴える少女の目は、黒い夜空に星を散らしたようにまばゆい。
むしろ、クモワシの卵こそ、幻影旅団と彼女たちが、この試験にもぐりこんだ目的そのものである。
「マスター。マスター。わかったから。顔が近い」
そりゃもうマジでキスする五秒前、ってな距離くらい。
冷静なようでいて、どきまぎしている弓兵に、「リア充もげろ」の視線が、ゲイボルグとなってあちこちから飛んでくる。もちろん発信源は、むさっくるしい受験生の皆様である。
「わかったー。んじゃ、あとでなー」
ふわ。
離れぎわ、ナチュラルに頬へとかすめていった唇のやわらかさに、褐色の頬をわかりにくく染めた男へ、「このムッツリが」と真言か

らも白い目が飛んできたとか、こないとか。

「ゴン、どうした？」

さっきから会話に加わっていない、黒髪ツンツン頭の少年へと、キルアは問いを投げかけた。

暗殺一家などに生まれた彼とは、比べるべくもないほどにまっすぐな黒い目が、キルアの背後を見つめたまま、動かない。

ゴンの足じたいは、後ろ向きのまま走るという器用さを発揮しているのだが。

「ん……あのおねーさん、どう見ても、浮いてるよね……？」

黒髪の少年がガン見していたのは、彼と似た、まっくろな髪をポニーテールに結って風になびかせる、ミニ丈官服姿の七季だった。

その衣装同様、まっくろな箒に跨っている彼女の体は、特にこれといった支えもないのに、ぷかぷか宙に浮いたまま、すいーっと空気を滑っている。

どうもゴンは、ずっと七季が気になっていたらしい。

思わず黒髪の少年が指差す先を、目で追って――銀髪の少年は、くるりと再び視線を前に戻した。

「良いかゴン。あれは、あーゆーナマモノだ。気にしたら負けだ」

たったった。

「？」

後ろ向きのまま走る半ズボンの少年は、ツリ目が特徴的なキルアの顔と、ふよふよ箒で空中遊泳をしている少女の、のほほんとした童顔を見比べて、ことんと首をかしげた。

ちょっぴりキルアの目が据わっている。無理やりそれで自分を納得させようとしているが丸わかりだ。

「ナマモノて」

オメーそれは女の子に対して失礼だろうが。

額に玉の汗を浮かべ、とうとうスーツを脱いだレオリオが、上半身裸のままツッコむ。
「……手品の類、とも思えないな」
クラピカもちらりと後ろを振り返る。
何せハンター試験の最中である。手品といえば、むしろ格好と自称「奇術師」の男の方が、よっぽど「らしい」だろうが。
「来るな！　寄るな！　滅びろ変態！」
「ツレないなア」
ゴンたちよりも、もっと先――ちょうど先頭集団で、黒髪の青年の悲鳴と、ねっとりした声が聞こえていることから、察して欲しい。
ちなみにキルアは、体力からしたらとっくに先頭集団に陣取っていておかしくないのを、ヒソカを避けるために、あえてペースを落としていたりする。だからこそ、レオリオもどうにか並んでいられるのだ。
健全な青少年たちは、全力で変態を見なかったことにした。
「あいつ、うちの兄貴のトモダチなんだよ。
言っておくけど、空飛ぶくらいで驚いてたら、やってらんねーからな。
あいつはたぶん、トモダチの中ではいちばん弱っちいんだけど、うちのミケを服従させるくらいのバケモノだぞ？」
ミケというのは、ゾルディック家の敷地で放し飼いにされている、番犬代わりの魔獣の名前だ。
じっさいのミケを知らないゴンやクラピカたちは、顔を見合わせて眉尻を下げているが、キルアは真顔である。
いっぽう、これまで七季たちと暮らしてきたジョゼフだけは、しみじみと納得した面持ちで頷いた。
「うむ。ナナキだからな。あれは、ああいう生き物として認識するしかあるまい」
青い双眸を、遠くへ飛ばすジョゼフに、キルアが「あんたも知り合いだったのか……」と同情するような表情を浮かべた。

「兄貴もライセンス持ちだって言うし、あいつらもみんな持ってるらしいからさ。べ、別に、仲間に入れて欲しいとか、そういうわけじゃねーけどっ」

――ツンデレだ。

――ツンデレだな。

レオリオとジョゼフの目が、空中でかち合い、静かにアイコンタクトを交わした。シンクロ率、二百パーセント。

「そうか。しかし、今回の試験は荒れそうだな」

クラピカの見つめる先には、クロロを追いかけるヒソカのとばっちりを受けて――主にクロロが肉の盾にするという理由で――次々に脱落する受験生が道にこぼれていくという、ちょっとした阿鼻叫喚が展開されていたという。

#136　鏡界のソルフェージュ ー魔女と子猫ー（後書き）

あとがき

＞前回、オリ主の出番が薄かったので、主従セットで出したら無駄に糖度が高くなった件。

オリ主は「プリン作ってくれるって。ありがとなー」の感謝を込めたキス。ただそれだけ。

彼女はナチュラルにキス魔ですから。幼なじみズに仕込まれたのはダテじゃないぜ。

美味しいものが絡むと、わりと見境なくなるオリ主。アーチャーもアーチャーの料理も大好き。

キルアは、兄貴のトモダチに話しかけたいけど、話しかけられないツンデレです。

たまに先輩につかまってオモチャにされてます。先輩は猫好きですから。

ハリポタ魔法使えるんで、先輩とオリ主はリアル魔女なんですがなー。

#137　ある日の巫女ンビ―ドキッ☆女だらけの雛祭り―（前書き）

まえがき
＞今回は、番外編です。
ゼロ魔キャラが登場しません。

#137　ある日の巫女ンビ ―ドキッ☆女だらけの雛祭り―

すう。

「それではこれより、『帝都心霊庁』と『B．A．B．E．L．』による、合同婚活パーティー！

副題『狩りの時間だ野郎ども！』を開幕する――！！

おおおおお！

マイクを握る黒髪ウェービーヘアの美女――に見える――観世音菩薩の宣言に、男女入り混じった怒号が、帝都心霊庁の地下大ホールに轟（とどろ）いた。

「何でまた、こんなイベントを……」

地下ホールの二階席――いわゆる、天井桟敷な感じの観覧席に、ちょこんと座って呟くのは、まっくろポニーテールの巨乳巫女こと、七季である。

「そりゃー、昨今は未婚率の高さが問題になってるからな。

特に『B．A．B．E．L．』や、ウチなんかは、仕事がハード、機密満載、結婚相手の身辺調査はむしろデフォルト、なんて職場だと、『結婚相手どうやって探せと！』なんて突き上げが激しくてなー。特に適齢期の女性職員から。

だもんで、いっそのこと、同業者、もしくは似たような仕事してる相手との婚活をバックアップしてみようと、合コンとは名ばかりのサバイバルゲームを企画してみたわけだ」

「うん、後半ちょっと待て？」

グラスを傾けてワインを飲む、美貌の上司（予定）に、七季はジ

ト目でツッコミを入れた。こちらの手には、白酒を入れたコップが、かなり中身の減った状態で揺れている。
「何故に合コンがサバゲー？」
「見ろ。あそこに巨大な雛壇があるだろう」
つややかにネイルの施された観音の指先を、目で追えば、そこには赤い毛氈を敷かれた階段状のセットがででん、と鎮座ましましている。
「はあ」
ひょいと下のホールをのぞき込んだ七季は、黒い目をぱちぱち瞬いて、一部の職員が雛人形を模したコスプレで座っているという、そのセットを眺めやる。
ちなみに、コスプレしている職員は、「B．A．B．E．L．」や「帝都心霊庁」の中では珍しい、既婚者組みであることを追記しておこう。
「目当ての相手をゲットし、あの雛壇のてっぺんまで駆け上がったら、そいつらはそのまま南の島へご招待、という特典が、問答無用で押し付けられる」
ぐっ、と親指を立ててイイ笑顔を浮かべる観音のうるわしい美貌には「仕込みは万全」と書いてある。
「つまりハネムーンで子作り推奨？」
「ザッツライツ！
やっぱ少子化対策は、上からやってかないとな」
イエイ。
「良いんですかちょっと」
ゴーイングマイウェイな観音とツッコミを入れている七季しかしゃべっていないが、この間ずっとむっつり黙り込んでいる真言も、この場にはいたりする。
「しかしまあ……これでやっと先輩が機嫌悪い理由がわかりましたよ。神門（みかど）さんがちょっかいかけられてるのは、面白くないでしょうしね」

黒髪の少女は、両片想いな幼なじみの先輩たちを思い、ないしん「あーあ」とためいきをついた。

いっぽうの地下ホールでは。

「はーい。それじゃ、男性陣は、この桃の花の造花を胸につけてねー」

ちゃきちゃきと動き回って進行を仕切っているのは、「B・A・B・E・L・」の蕾見不二子管理官。推定８３歳とは思えない、バインバインのボディラインと、美貌の持ち主である。ミニスカからのぞくおみ足も、非常に眩しい。

「僕ら、バイトなんですけどねえ……」

「俺もか？」

「とっとと七季見つけて避難しましょう」

霜夏、伯言、の神門（みかど）神社バイトーズに加え、いまは尸魂界でのインターン扱いになっている一護も、この場には呼ばれていたりする。

そんな霊感少年トリオに、近くにいた三蔵から「ほらよ」と棍が手渡された。

『はい？』

「まあ、せいぜい気張って逃げろよ」

言い捨てた、金髪の美青年は、すぐさま駆け出す。

とたん、彼らの周りに、ギラついた目の女性たちが襲いかかる。

比喩でなしに。

「先手必勝オォ！」

「ごめんねっ、あとでやさしーく介抱してあげるからv」

「しつけは最初が肝心よね？」

エスパーや霊能者、入り乱れた戦女神（ヴァルキュリー）が、若い男たちを狩りの獲物としてロックオンしている。

「ルールその１。捕まえちゃえばこっちのモノv」

蕾見管理官がにっこり笑って解説を入れる。
「捕まえたお相手と、雛壇のてっぺんまでたどり着けば、カップル成立☆　南の島への旅行が待ってるわよー♪」
「なんちゅー無理やりなルールですかッ！」
霜夏のツッコミもどこ吹く風。
術や式神、ＥＳＰを駆使した女性陣は、年下の将来有望な少年たちを、猟犬のように追跡する。
いまさらながら、霜夏と伯言は、女性不信に磨きがかかるのではないだろうか。
ちなみに三蔵はというと、こちらは日ごろ仕事を押し付けられている恨みとばかり、神門（みかど）を盾にして女性陣の猛攻をかわしていた。

「でも、何故に先輩と私は不参加？」
七季が首をかしげるのも道理で、下のホールには、一護、霜夏、伯言といった友人や幼なじみ連中が投入されているのに、同じバイトである少女は、二階席でのんびりティータイム中である。
もっとも七季は、この時期にしか出回らない、好物の白酒を舐めてご満悦だが。
「アホ言え。お前らなんぞをあの中に投入したら、色んな意味でエライことになるだろーが」
観音は、呆れぎみな声で、ひらひらと長い爪の手を振ってみせる。
そのセリフを聞いて、あどけない面差しに不服げな色を刷く少女がひとり。
「……神門（みかど）さんを突っ込んだ時点で、じゅーぶんエライことになってると思うんですけどねぇ……」
くぴ。
ちらりと七季が目を走らせれば、隣に座る栗毛の少女の手元から、ひっきりなしに式神が飛び出しているのがわかる。

ホールからは「ちょっとマコちゃん何すんの！」と、神門青年にちょっかいをかけていた女性陣から抗議の声が上がっているが、真言はいたってふてぶてしく、「式神の散歩だもん」と言い放っている。

「ジェラシーな乙女心ですねー」

神様の嫁、な真言だが、そもそも彼女は、昔から、幼なじみの神門が好きだったのである。

しかし、真言を溺愛し、見込んだ龍神に横槍を入れられたため、告白はなかったことにされ。

それでも彼を思い続けていた矢先、今度は神門が、仕事のトラブルで真言をかばって死にかけたため、彼女は想い人を助けるために、その身を龍神にささげる約束を交わして、いまにいたる。

日ごろから真言の世話をしている神門はもちろん、彼女まっしぐらの一途な片想いを続けているが、真言も真言で、神妻となる運命を受け入れながら、神門を大事に思っているのが実情だったりする。

プラトニックな両片想い。

生殺しというか、純愛というべきか。

「神門はまあ、逃げ切るだろーがな。そういうお前は良いのか？」

振り向く観音は、どことなくビミョーな顔をしていた。彼女には、非常に珍しい表情だ。

さて、チートな巫女さんの使い魔――もとい、式神は、ふだん貸し出されている同僚から回収されて、いまや主の手元からばっしばっし妨害行為に励んでいるわけだが。

では七季の使い魔はというと。

『結婚したい女の人がいたら、連れてきていーからな？』

そう言われて、少女のいる二階席から、地下ホールへとポイ投げされた形のアーチャーは、いまだショックで固まっていた。

――何故だろう。

べつだん七季とアーチャーの関係は、恋人とか、そういう色みはない。

言葉にするならば、ただ主従という形である。べったべたにスキンシップ過多だが。

これが、からかいを含んでいたなら、まだアーチャーは、ちょっとタチの悪い、七季の悪戯だと、呆れることができただろう。

けれど彼女のソプラノは、ただ優しく、夜色の目には、慈しみの色すら見て取れた。それがよけいに、従者の胸をえぐったのは確かで。

いっぽう、同じセリフをいわれたリドルはというと、そうそうに再起動して、少年姿から黒猫モードにシフトチェンジしていた。

――うん。じゃあ僕が行けば良い話だし。

孤児から成り上がったバイタリティと図太さは、ダテではないのである。リドルはいわば、攻めの男。自分から動いてこそ、得られるものがある、と知っている。

桃花の造花は、既にポイ捨てされていた。

「じゃ、お先」

言いざま、マジカルにゃんこは、手持ちのデバイスでゆうゆうと空を飛び、一散に二階席へと退避していった。

「あ」

思わず、黒いしっぽのケダモノを見送ってしまったアーチャーは、珍しくおたおたとあたりを見回し――ぎくりと体を強張らせた。

周りの女性陣の目がコワい。

「何でさ――！」

心眼（真）を身につけた錬鉄の英霊は、頭で判断するより早く、ダッシュで駆け出していた。

「お前の従者は、ずいぶんヘコんでたようだが」
波打つ黒髪の麗人に、七季はとろりと笑んでみせた。
ハチミツのように甘く、濃厚で、匂い立つような笑顔は、妹であり、姉であり、母であり、雌であり、乙女であり――およそ思いつく限りの、女という要素を渾然一体として煮詰めたかのような、透明感のある凄みが内包されていた。
「私、あの子たち、好きですよ」
愛してます。
ふんわり春風のようにやわらかい響きのソプラノには、果物を思わせる甘い香りが入り混じる。
「大好きで、大好きで――ときどき、めちゃくちゃに可愛がりたくなるんですよね」
ふ、と大きな目を細め、ふっくらとした唇で、少しだけ弧を描く少女は、ひどく艶(あで)やかだ。
夕闇の危うさを匂わせる白い肌が、夜色の髪と衣服にふちどられて、いっそう春の宴に際立って見える。
「リドルはまあ、自分に正直ですから、欲しいものは、人でもモノでも正直に言うでしょうし。そうでなくても、自分で何とかしちゃうだけのバイタリティがありますしね」
でも、と黒髪の少女は、いとおしげなまなざしを、眼下で逃げ回る弓兵に向ける。
「アーチャーは、欲しがり方を知らないというか。不器用なんですよ。自分が人外、ってことも、じつは精神的なストッパーになってるでしょうね、無意識に」
だから、人間の女性に好意を告げられた場合、もし自分も好意を持ったとしても、拒んでしまうだろう。
「ちょっと無理やりにでも、ショックを与えたかったんです。
私、アーチャーをいっぱい愛して大事にしたいし、アーチャーが、

いっぱい他の人にも愛されていて欲しいと思ってるんで」
「ぶふ」
少し観音が飲み物を噴いてむせた。
「……それは、何か？　むしろアレに、複数の女をはべらせておきたいと」
今度は観音が、ジト目で七季を見つめた。
「おかえり、リドル」
「ただいまー」
対する黒髪の少女は、ころころ鈴のような笑い声をこぼして、飛んできたリドルを膝上に乗せる。まっくろな猫は、ちゃっかりと主の膝で丸くなり、階下の争いを対岸の火事にした。
「さすがに、私だけじゃ、手に余るでしょう。一人で何とかなるなんて、間違っても思わないですよ」
ことりと首をかしげた七季は、脳裏に、彼の世界を――夢の階（きざはし）を経て、良く流し込まれてくる、まっかな荒野を思い浮かべる。
寂しく、熱く、神聖な、男の聖域を。
七季は、あれさえもいとしい。
さすがに、あの場所に一人きりというのは、七季が個人的に寂しいので、たいてい定期的にアーチャーの魂を、自分の器の中に、リドルともども引っ張り込んで寝ていたりするが。
「アーチャーは優しいけど、傷もたぶん深いから。もう溺死するくらいに愛情注いで、どうにかこうにか埋まるかなーって感じ」
「……お前の愛情は、ときどきグローバル過ぎて、オレでも理解しかねる」
がしがし黒髪をかき回す観音の横で、従者である「神使（しんし）」を見つめていた真言が、ぽつりと呟いた。
「ナナちゃんは、アチャ男とかリドルとか、抱きたい？」
爆弾発言をかました栗毛の美少女は、やっぱり手元から、妨害作業として、ばしばし式神を飛ばしているが。
その琥珀の目は、わりとマジだった。

「そうですねぇ」
これまたあっさり答える七季。
にゃんこ姿でくつろいでいたリドルが、彼女の膝上で噴いた。
――びっくりした。素でびっくりした！
いつか冗談口をアリシアたちに叩いた人外少年は、嘘から出た誠になりそうな話に、アーチャーをオモチャにしようとワクテカしていたのだが、七季も加わるというのは、ちょっと予想外だ。
ついでに少女が、リドルもＯＫだという点で頭パーンってなった。ついでに黒いしっぽもピーンってなってる。
「もともと私、体はコミュケーションツールの一つだと思ってますから。『好き』って気持ちは伝えやすいじゃないですか。そっちのが」
アーチャーの声と指、ものすっごい好みです。
いつのまにか、凄みのある笑顔を引っ込めて、ふにゃんとナチュラルな笑顔を浮かべている七季の、あどけない面差しは愛くるしい。ほわほわして和む。
なのに、言ってることはかなり過激だ。
「もちろん種の保存としての本能的な役目もあるでしょうけど。私はどっちかというと、ボディランゲージな感じかなぁ」
――ボディランゲージの意味が違うよナナキ！
いや合ってるのか？　ボディトーク？
内なるツッコミを入れるリドル、若干混乱しつつも、さすがにガールズトークには自重ぎみ。
「霜夏とか伯言は？」
「するだけなら問題ないですけど」
これまたけろっと言ってのける、まっくろ巫女さん、きょうは本音ダダ洩れ祭りか。
「でもまあ、向こうにも選ぶ権利があるでしょー。
あと伯言は……いまでも私に依存ぎみなんで、しちゃうと律儀に結婚まっしぐらコースかもしんないし。きがるに『試しにやっちゃ

うかー☆』とも言えないし」
――たぶんそれ、正解だと思う。
リドルは幼なじみズの行動その他を吟味して、意外とわかっている七季に感心した。
「それに、伯言と霜夏はー……女性不信ぎみでも、うちの八音（はつね）とは仲良いですからー。義弟になる可能性が、なきにしもあらず？」
――いやそれは、確実に未来の義妹としてあつかってね？
内なるツッコミを入れたリドルと観音は、互いの考えがシンクロしたことを直感し、無言でぷにぷに肉球と手のひらを合わせた。ハイタッチの代わりに。
「んじゃ、いっちーはどうよ？」
「だから向こうにも選ぶ権利がー……って」
「いやほら好み的に。ぶっちゃけてみ？」
神門（みかど）が、眼下で女性職員にコナかけられまくっているのを見て、不機嫌絶好調な、栗毛の巫女さんの目はコワい。
「んー……前、お正月にジャケット貸してもらったじゃないですかー」
「あったっけ？」
「はいたぶん。ええと、いっちーの匂い、好きです。くるまってると、ほわほわします」
えへ。
七季は白いふっくらした頬を、ほんのり桜色の染めてはにかんだ。
ここまでダダ洩らしにしたところで、ようやくリドルは異変の元凶を悟る。
「……マコト。いったいナナキに何仕込んだのさ？」
「改良済みの真実薬（ベリタセラム）を一滴ポチョッと混ぜた白酒」
どうやら新薬の実験台にされたらしい七季の本音は、しっかりばっちりボイスレコーダーに記録されており。

「で？
ここまでナナちゃんの話を聞いた野郎ども、このボイレコ、いくらで買う？」
これを盾に、とっとと押し倒して、既成事実作ってきやがれ。
後日、「激闘！雛祭り」（タイトル違っとる）を生き抜いた一部の男性陣は、ド天然きわまりないテンプテーション娘の発言を、真言から聞かされ身悶えていたという。
神様や悪魔から、あっついラブコールを受ける「神使（しんし）」の身を、早く固めて、きっちり自分の手元においておきたい、チートな巫女さんの策謀や、いかに。

#137　ある日の巫女ンビ－ドキッ☆女だらけの雛祭り－（後書き）

あとがき

＞ぐっだぐだに長引きました……すみません（汗）。

あのサバイバル合コンじたいは、観音と不二子ちゃん（＝蕾見管理官）の発案です。

先輩が、男性陣をけしかけている理由ですが、ちゃんと事情がありまして。

以前、オリ主が言ったように、彼女がどっかの神様に抱かれて、うっかり神様の子供を妊娠すると、じつは政治的な問題が発生したり。

ようするに、旦那となる神様に、オリ主を持ってかれかねないので、その前に、自陣というか、知り合いでくっつけてしまおうという。

チートな先輩は、オリ主が大好きです（そこ!?）。

嫁にやりたくないから婿に来い、という話（え）。

※「真実薬」はハリポタ世界の自白剤です。

#１３８　鏡界のソルフェージュ ― 兄とプリンと飛行船 ―

二次試験は、カオスだった。

まあ、美食ハンターのメンチが仕切るテスト内容に、一流どころの料理人である、幻影旅団と、錬鉄の英雄が参加していたのだ。

その反応や、推して知るべし。

いろいろあって、けっきょく受験生たちは、マフタツ山に生息するクモワシの卵をとってくることになったのだが――

「卵、とったどー！」

その秀麗な外見に似合わない、雄々しい宣言をかました真言は、クモワシの糸で葡萄の房状にまとめられている卵を空に掲げていた。

と、にわかに大地がかげり出す。

ゴウン、ゴウン、ゴウン……

『迎えに来たぞ！　プリンどこだー！』

姿を現した飛行船についているマークを見た、銀髪の少年が目元をこすって、何度か確認するも。

「あれ、うちのマークじゃん。けど、あんな船あったっけか……？」

ゾルディックの家紋を入れた飛行船は、マフタツ山に颯爽と降り立った。

「よォ、キルア。順調に残ってんのな」

飛行船から出てきたのは、黒髪をざっくり切った、切れ長の目が特徴的な青年だった。

「ミル兄ィ！　てか何しに来たんだよ」

ぐりぐり頭を撫でられて、憎まれ口を叩きつつも嬉しげなキルアが、兄弟の睦まじさを物語っている。

いっぽうで、ゾルディック家の長兄・イルミの変装姿であるギタラクルが、視界の端でカタカタ良いながら、さりげなく次兄へ殺気

を飛ばしているが。
「あ、マコト。迎えに来てやったぞ。プリンどこだ」
それを流れるようにスルーしたミルキは、ぐりんと栗毛の巫女さんを振り返った。
「いま材料確保したとこ。プリンはまだない。キッチン貸して」
「任せろ！
この飛行船には、最新のキッチン設備を積んである！」
「ほう」
力強くサムズアップしたミルキは、さっさと飛行船へ戻っていく。
そのあとを、旅団のメンバーと七季一行が追いかけた。
「ミルキ、サトウキビは用意した？」
真言に問われたゾルディック家の青年が「ぬかりはないぜ」と不敵に笑う。
「もちろん狩ってきた。手ごわかったがな……」
ちなみに、彼らいうところの「サトウキビ」とは、やはりアクティブな野菜の一種で、「鎖刀機敏（サトウキビ）」と当て字がされるナマモノである。
日本刀を使った、強化系のノブナガと、ガチで近接戦闘ができるという、おっそろしい作物で、いまのところ、レベルは最上位。
その鋭い葉で応戦する、剣豪もビックリの遣い手だったりする。
「お前……アイツを倒したのか！？」
ミルキの返答に、クロロが黒い目を大きく見開く。
「プリンに砂糖は欠かせない。当然だろ？」
フッ。
「心友（とも）よ……！」
がっ。
ミルキとクロロの二人の青年の腕がクロスし、絆を深める。ここに、プリン同盟が締結した。
「プーリーン」
「プーリーン」

黒髪黒目の美青年ふたりが、こぞってプリンコールをかける姿は何だかアレだ。

「というわけで、アチャ男。プリン追加で」

ぴっと人差し指を立てる真言に、白い髪の偉丈夫が「やれやれ」と肩をすくめる。

「アーチャー、アーチャー。お願いします。あとな、クモワシの卵の他に、こっちの卵でバケツプリン作ってくれないか？」

くいくい赤い外套を引っ張られたアーチャーは、七季の、きらきらと期待に満ちた、まっくろな瞳に見上げられて言葉に詰まった。

ほだされたのも、もちろんあるが、黒衣の少女が取り出した「こっちの卵」というのが、えらく巨大な、ちょうど背負いカゴにすっぽり入るくらいのサイズだったからである。

「どこからこんなものを……？」

どうせ出したのは、七季の懐からに決まっているから、アーチャーが訪ねたのは、むしろ原産地の方である。

「ん？　これはクボタくんジュニアの卵。ほら、畑の一角に、巣があるだろ？」

ちなみにジュニアの親である、「クボタくん」は、パプワ島のナマモノである。

「ああ、あの巨大なニワトリ（？）か……」

「たぶんニワトリ。クボタくんもジュニアも飛ぶけど」

そして才人とジョゼフだけが、受験のために、その場へと残る。

「んじゃなキルア。試験、落ちんじゃねーぞ」

「っさいなー。わかってるよ！　てかマジプリンのために来たのかよ！」

捨てゼリフを残す次兄に向かって、元気に啖呵を切る銀髪の少年と。

「てなわけで。私たちはここで失礼。平賀君、ファイトー！　終わったら迎えに来るからなー」

「おー！」
七季の言葉に、ガッツポーズで応じる黒髪の少年と。
「ジョゼフ、落ちたら泰山麻婆（たいざんマーボ）の刑ね」
「理不尽な！」
フェイタンの罰ゲームに恐れおののく青い髪の男が、飛行船を見送った。

「プリンうまうま」
「アーチャーは神」
「あんた、うちの料理人にならないか？」
真言、クロロ、ミルキのセリフに、満足げな笑みを薄く浮かべつつ、コーヒーをサーブする白い髪の偉丈夫は、何やら考え込んでいる面持ちの少女に気づいて声をかけた。
「どうしたのかね、マスター？」
「ん……あのさ、ジョゼフさんと、平賀君のぶん、取っておいて良い？」
もっと食べたいけど、と未練がましげなまなざしを送りつつも、七季は、いまごろハンター試験で頑張っている、異邦人コンビに、おすそ分けというか、ご褒美をあげたくて、それ以上プリンのカップに手を出すのを止めた。
彼女の不思議空間なら、鮮度を保ったままで保管ができるから、生物な（ＵＭＡな意味でなく）プリンも劣化することなく取っておけるだろう。
「そうか」
ぐりぐりと大きな手のひらに撫でられて、七季はあどけない顔を、くすぐったそうに、へにゃりと緩めた。
「できたてが美味しいのは、わかってるんだけどな。でも、やっぱり美味しいものは、みんなで食べた方が、きっと美味しいよ」

「ああ。マスターの好きにすると良い」
そう言って、残った自分の分もしまいこんだ少女に、のちのちクロロがプリンをねだったのだが、珍しく七季は、頑として養い子に渡さなかったという。

#１３８　鏡界のソルフェージュ－兄とプリンと飛行船－（後書き）

あとがき

＞今回は短めです。はしょって申し訳ない。

ちゃっかりミルキ登場。サトウキビは強敵。団長でも手こずります。

強化系のノブナガが、いちばん相性が良いので、甘いものが食べたい団長は、良くノブナガをけしかけることに（待て）。

ハンター試験中にプリン製作は、いくらなんでもアレかなと、オリ主一行は途中でリタイアしました。

#１３９　鏡界のソルフェージュ ― 青の惨劇 ―

「キル」
ようやく針山男から、猫目青年に戻ったイルミは、襟首つかまえた、黒衣の少女を猫の子よろしく持ち上げると、こうのたまった。
「最低、コレレベルのトモダチ百人作るまで、戻ってくるなって。親父からの伝言」
「にゃー」
ハンター試験合格者の集まった会場で、黒髪うるわしい兄から、そんなお言葉をもらったキルアは、がっちり硬直した。
目の前の七季は、レベルだけ見れば、真言と対等に話せる、トンデモＵＭＡである。そんなレベルの知り合い――しかもトモダチレベルを百人探せとか、何の冗談かと。
「つまり女の子を百人ナンパして来いと、そういう話ですね？」
いっぽう、マイペース天元突破な少女は、イルミのセリフを都合よく曲解した。
ちょっと情緒が未発達なゾルディック家の長男は、こきりと首をかしげて「なるほど」と呟く。言葉通りに受け止めすぎる、融通の利かなさが、彼の悪いところだ。
「キルはうちの跡取りだからね。そういうことか」
『納得した――！』
ハンター試験の受験生、総ツッコミである。ありなのかオイ。
ジョゼフとサイトを迎えに来た、旅団の面々も呆れぎみだ。
「久しぶりに見た。ナナキの『あくまのささやき』」
「引かかるヤツもヤツね」
くすくす笑うシャルナークに、フェイタンがしれっと辛口のツッコミを入れてウボォーに担がれているジョゼフを見上げる。

「帰たら泰山麻婆の刑ね」
気絶しているはずのジョゼフが、びびくん、と震えた。
「運が悪かったな……」
珍しく、青い髪の男に向ける、クロロのまなざしが同情的だった。
念を体得していない才人が合格して、四大行までは体得したジョゼフが不合格となった理由。
それは、最後の試験である、逆トーナメントの相手が、ヒソカだったのである。

正確には、初戦の相手がゴンであり、二戦目がイルミ、最後の相手がヒソカという、「何このイジメ」的な組み合わせだったのだ。
試験中に仲良くなったゴンの、父親を探すという夢に立ちふさがるのは忍びなく、一戦目の勝ちを譲ったところ。
こちらはキルアに初戦の勝ちを譲った、ブラコンイルミとバッティングの二戦目。
そして、才人に勝ちを譲ったヒソカとの三戦目。
もう一度言おう。
何このイジメ。
おまけにジョゼフが少しばかり念を使えると悟ったヒソカは興奮するしで、身の危険を感じた（貞操的に）ジョゼフは、ギブアップを宣言。
ヒソカ戦をからくも切り上げたジョゼフの青い髪には、ちょっとだけ白いものが年相応に増えたとか、増えないとか。

#139　鏡界のソルフェージュ ー青の惨劇ー（後書き）

あとがき
＞さらにきのうより短くてすみません。
でもネタ的には詰め込んだ。
おかしな兄貴・イルミと、不運ジョゼフ。あと、幸運値が意外に高い才人。
ヒソカに目はつけられたけど、ハンターライセンスはゲットしたよ！

#１４０　鏡界のソルフェージュ－赤の幕間劇－

――目が覚めたら、知らない場所でした。
ぱちぱち黒い大きな目を瞬いた七季は、こてりと首をかしげて、ベッドの中でひとりごちた。
――うん。まずいかも？

時間はさかのぼり、ジョゼフがハンター試験から帰還してのち。
「料理はこういうことに使うべきではないのだが……」
ぶしーっ！　フシュウウゥ！　ぼこぼこぼこっ！
アーチャーの差し出す丼には、たっぷりの赤いマグマ――もとい、麻婆豆腐が盛り付けられていた。
通称「泰山麻婆」。
どこぞの外道神父お気に入りの、地獄さながらの激辛料理である。
「さ。食べるね」
ニンマリ目を細めて、まっかな皿を青い髪の男に勧めるフェイタンは、ドSの称号にふさわしい、ご機嫌っぷりだ。
いっぽう、アーチャーが麻婆の丼を運んでくるなり、本能的な危険を感じたのか、黒髪の少女は「ぴいっ」と鳴いて、あわてて従者から距離を取った。
その小柄な体を、大きなウボォーの後ろに隠す姿は、見知らぬ人間を警戒する子猫のようで、ちょっとだけ従者はショックを受ける。
「あ……あれが食べ物だってのか……！？」
一メートル離れた場所からでも、つんと鼻を刺激するその香りは、スパイスというよりも、劇薬物を連想させる。

才人は引きつった面持ちで、じりじりテーブルからあとずさった。
幸い少年は、フェイタンと麻婆を食べる約束もしていないし、ハンターライセンスは、無事に取得済みだ。
「失敬な。私は食べられない料理など作らんよ」
そう言いきるところをみると、どうやらアーチャーは、その激辛料理を食べることができるようだ。
良く見れば、ジョゼフの分の他に、皿が二つ、用意されている。
一つはアーチャーの分として。
「これを食べるのも久しぶりね」
もう一つは、どうやら中華料理が得意なフェイタンの分らしい。
「さすがにこの麻婆に打ち勝つものは、まだ完成してないが……いずれは、アチャ男を超えてやるね」
「ふ。ついて来れるか？」
舌足らずな青年の言葉に、白い髪の偉丈夫は、鋭い双眸を細めて不敵にうそぶく。
と。
気がつけば、ウボォーの影から出てきた七季が、おずおずとアーチャーに近づいてきたところだった。
「ほ……本当に、大丈夫……？」
ちら、と少女の黒い瞳がのぞき込んだのは白い湯気を上げる、いかにも辛そうな赤い料理。そこかしこに見える豆腐の生成りの色さえも、ラー油のあかがね色にてらてらと光って挑戦的だ。
マスターである七季が、辛いものが苦手な甘党であることを、男は良く知っていた。
ただ、食べる気があるのなら、アーチャーが止める理由はどこにもない。
この麻婆は、彼の自信作でもあったし、豆腐にひき肉、スパイスをふんだんに使った料理は、育ち盛りの少女にも勧めるに値するだけの栄養価がある。
だからアーチャーは、あくまで善意で――そう、善意で――レン

ゲにすくったそれを、差し出した。
「食べてみるかね？」
七季は迷っていた。
辛いものが苦手なのは、自他ともに認める彼女である。
小さなころに、トウガラシで痛い目を見た七季は、それ以来、刺激の強い食べ物が、のきなみダメになってしまった。
加えて追い討ちをかけたのが、例のチョコレート事件である。入院する原因となったそれも、やはり変な味、苦い、妙な味がしたのを、いまでもしっかり覚えている少女は、自分の本能が警鐘を鳴らしているのを感じ取っていた。
しかし。
しかし、である。
目の前の従者への信頼――それが、七季を踏みとどまらせた。
アーチャーの作ったものなら。
――大丈夫、かも？
一口くらいなら、と黒髪の少女は、思い切って白いレンゲをぱくっとくわえて中身を口にした。
とたん。
「――」
ぱたり、と彼女は倒れた。
意識を強制シャットダウンした七季は、受身も取れず、まったく無防備にその場で昏倒したのだった。
外道麻婆から、ふたたび意識を取り戻した少女は、幸い、命に別状こそなかったものの――

「声が出ない？」
こくん、と頷く七季に、シャルナークをはじめ、旅団のメンバーが眉根をひそめ、腕組みをした栗毛の少女は、あからさまに不機嫌になった。
「アチャ男、これからあの麻婆、作るの禁止ね」
「なッ」
「食べるなとは言わないけど。でも、二度とナナちゃんの前に出しちゃダメだかんね」
元凶となった料理の、製作者に言い含めている真言をよそに、シャルナークは黒髪の少女を診察していた。才人も、横で心配そうに見守っている。
ちなみに、七季が倒れたと聞いて、プレシアたちの元から駆けつけてきたリドルはというと、この場にいない。七季を昏倒せしめた麻婆を、別室で分析している最中だ。
解析ならば、アーチャーがお手の物のはずだが――その現物を、胸を張って「食べ物だ」と言い切ったのは彼である。
リドルに任せるのが賢明だろう。
「はい、口開けてー。……あー……こりゃ酷い。喉の粘膜がやられてるね。もともとナナキは、粘膜系弱いのに」
「うー」
「無理に声を出そうとしない方が良いよ。病院連れてく？」
ライセンスがあるから、安く上がるし。
真言を振り向く金髪碧眼の青年に、すると七季が、くいくい服を引っ張って、自分のデバイスを操ろうとした。
彼女のデバイス「ガニュメデス」は医療用。すなわち、治療魔法が使えるのだ。
しかし。
「？」
＜ガニュメデス、セットアップ。……ガニュメデス？＞
念話で話しかけても、デバイスはうんともすんとも言わない。仕

方なく、七季は真言へ異常を報告しようとした。
＜先輩、デバイスが使えなくなって……せんぱーい？＞
しかし栗毛の少女は、アーチャーをいじるの忙しいのか、彼女の「神使（しんし）」念話に反応しない。
「マコト。ナナキが何か用があるみたいだけど」
かろうじて、様子を観察していたシャルナークが、気を利かせて声をかけたところで、やっと注意を七季へと向けた。
「どした？」
――あれ？
七季は、それに違和感を感じて、ためしにサラサラとベッドサイドのメモ帳による筆談を試みた。
『念話、聞こえました？』
「？……うんにゃ？」
『デバイスが起動しないんです。いま、声が出ないから、念話で話しかけたんですけど……もしかしたら私、いま、魔法が使えない状態なのかも』
「……！」
秀麗な相貌を険しくした真言は、すぐさま弓兵を振り返った。
「アーチャー。ナナちゃんをいますぐ診察。私も霊体の方を調べるから！」
結果は黒。
「喉の粘膜が炎症を起こしているな。あと、魔力の流れが若干おかしい。
我々とのパスは繋がっているし、供給もあるのだが……ラインがねじれているというか、正常ではない。念話の魔法ではなく、パスを通じた伝達を試みてはみたが、電波状況の悪い、携帯電話みたいな感じだな」
「霊力からの魔力変換が上手くできなくなってるみたい。一時的なものだけど……。
よっぽど衝撃を受けたんじゃないかな。霊体と器の接続不良を引

き起こすなんて。あれ、魔法薬か何か？」

可愛がっている、大事な「神使（しんし）」を異常に叩き落した麻婆豆腐に、真言はまだむすっと唇を尖らせている。

「あれは、あくまで食品、料理だ。まあ……あれを愛好していた神父は、かなり歪んだ外道だったがね。料理じたいに罪はない」

とはいえ、一時的にでも、七季から声を奪い、あまつさえ念話すら使えない状況の原因を作ったのは、他ならぬアーチャーである。

白い髪の偉丈夫は、そっと跪き、黒髪の少女が横たわるベッドサイドに侍ると、低く真摯な声音で、おのが非をわびた。

「すまなかった、マスター。償いと言ってはなんだが、君が全快するまでのあいだ、責任を持って私がマスターを看病しよう」

褐色の長い指が、きゅっと小さな白い手を包み込む。

「――」

「自重しろ、このムッツリ」

ごすっ。

七季の手を握る男の後頭部を、栗毛の少女の拳が捉える。

「それじゃアンタにとってのご褒美でしょーが。ナナちゃんの世話は、パクとマチに任せて、野郎は引き上げるよ。ゆっくり休ませたんさい」

そのままズルズル引きずられていくアーチャーを、心配そうに見つめる七季は、ぱくぱく唇を動かすが、やはり声は出ない。

『ごめんな』

せっかく食べさせてくれたのに。

少女の唇を読んだ男は、かるく顎を引いて答えに代えた。

次いで、才人やシャルナーク、クロロたちも「お大事に」「ゆっくり休めよ」「明日は喉に優しいもん作ってやるからな」と口々に言い置いて、部屋を辞す。

パクノダやマチも、看病の準備をしてくるから、と言って、先に風呂を済ませるよう、七季に言いつけた。

こく、と頷いた少女は、そのままバスルームに向かい――

――窓からとらを見かけて、声をかけようとしたんだけど、出ないから、追いかけたんだっけ。

そこから先の記憶がないことからして、大方、流星街にありがちな人さらいに捕まったのだろう。

声が出ないというのが、地味に痛い。これでは口車に乗せて、自分のペースに巻き込むというテは使えない。

デバイスも、風呂に入るのではずしてきてしまった。

せめて、「黎明」があれば、インテリジェントデバイスの彼は、マスターを守るために、適切な判断を下してくれただろうに。

――しっかし、人身売買だとしたら、二度目かなぁ？

まだ、意外と余裕のある七季だった。

＃１４０　鏡界のソルフェージュ－赤の幕間劇－（後書き）

あとがき

＞というわけで、珍しくオリ主のピンチ。

恐るべきは泰山麻婆。魔法や霊力にも異常を引き起こすって、どんだけ（笑）。

#１４１　鏡界のソルフェージュ－恐怖劇（グランギニョール）の幕開け－

「ナナちゃんが見つからないの！」
拉致されたのであろう、黒髪の少女を「ジッパーで迎えに行けば」と才人が提案するなり、泣きそうな顔で真言が叫んだ。いや、もうほとんど涙がこぼれかけている。
「え」
「見つからないって……どういうこと？」
シャルナークが、エメラルドの目を険しく吊り上げて訊き返した。
ここは幻影旅団のホーム。リビング代わりに使っている部屋に、ジョゼフを除く一同が集まっていた。
七季は、真言の「神使（しんし）」である。
この場にいる人間は、誰しもそれを知っていた。二人の少女のあいだには、絆でもある、主従のラインが結ばれていることも。
「だからっ、いつも繋がってるラインが、妙に感じ取りにくくて、ナナちゃんの居場所が特定できないんだってばっ！」
場所がわからないから、真言はジッパーでの移動ができない。
もともと方向音痴の彼女は、ふだん七季の存在を感じ取って、それを基点にジッパーを開けているのだ。
「……我々もだ」
難しい顔をしているのは、アーチャーも同じだった。リドルも少年姿になり、ルビーの双眸を細くして、不機嫌なテノールを紡ぎ上げる。
「え、あの？」
才人は、七季と主従の関係を結んでいる使い魔たちが、のきなみ不機嫌なことに、きょときょとと首をめぐらせて、彼らの顔を見比べる。

「ようするに、霊的、魔法的な追跡ができないってことだよ。ナナキが、デバイスを身につけていれば、まだ手段はあったんだけど……『黎明』も『ノア』も『ガニュメデス』も置きっぱなしだ」

せめて、持っていってくれれば、デバイス同士のリンクで、アーチャーやリドルのデバイスから、追跡できたはずなのに。

「風呂に入る前だからだね。きっと」

桜色の髪をポニーテールに結い上げたマチが、悔しそうに吐き捨てた。

「くそっ、せめて、私かパクの、どっちかがついていれば良かったんだ……！」

「いまは悔やんでいてもしょうがない」

かるく、ぽん、とマチの頭をクロロの大きな手のひらがなだめる。

幻影旅団のリーダーは、どれほどの危機でも、基本的に冷静沈着だ。変態が絡むこと以外なら。

ただし、そのまっくろな目は、きっちりバッチリ据わっていた。

シスコンから姉を奪うと、どうなるか。それは、飢えたライオンから肉を奪うくらいに明白なことである。

「まずナナキを探そう。可能性としては、外に出て、拉致された。それが一番高い。マコト」

長身の青年は、その深い闇色の目を、ついと栗毛の少女へと向けた。この中で、最も優れた探索能力を持っているのは、彼女なのだ。

「ふ……ふふふふ……うん、わかってる。わかってるよ、クロロ」

どこか底冷えするような、奇妙な冷気を――否、霊気をまといつかせて笑う、緋袴の巫女姫の周りを、青い燐光がぐるりと照らし出す。

「町中、国中――世界中だって探してやるんだからっ！」

琥珀の瞳を黄金（きん）にきらめかせた美少女は、憤りのにじむ声を力へと変えて、おのが式神たちを呼び戻した。

そう、世界すらも越えて。

そのころ帝都心霊庁では、真言から貸し出されていた式神が、のきなみ消えたことに、職員がパニックを起こしていたのだが――これはまた、別の話である。

「シャルは人身売買の業者をかたっぱしから当たってくれ」
「OK。入荷の日付が、きょう以降のやつのデータを洗えばいいんだよね」
すぐさま金髪の青年がパソコンに向かい、キーを叩き始める。
「そうだ。俺はイルミに連絡を取る。たまの出費だ――豪勢にいくか」
クロロは携帯電話を取り出しながら、動きたくてたまらないのだろう、旅団員たちの古参を目に留めた。
「パクとマチは、プレシアとやらに連絡を。迎えに――」
「それは私が行こう。転移魔法で移動すれば早い」
アーチャーが青年の言葉を遮るが、クロロは首を振る。
「アーチャーとリドルは、あの『麻婆』の効果が、どれくらいで切れるのかを急いで分析してくれ。七季から異常が消えれば、すぐにでも真言が『開け』られる」
「団長、オレら、店を閉めてくる」
意外と几帳面なウボォーが、彼らの店である「蜘蛛の巣」の臨時休業を思い立ち、動き出す。
「ああ。そっちは任せた。それとパク、ノストラードファミリーのネオンという娘に連絡を取れ。
『お姉さまの危機だ』と告げれば、話が通る。この写真を持って行け」
「了解です、団長」

ぱし、とパクノダが受け取ったのは、黒髪の少女が、黒猫のリドルを抱いて、ふんわり笑っているスナップ写真だ。いったい、いつ撮ったものやら。

「イルミ、依頼だ――」

そして同じころ。

騒動の元凶はというと。

よそで七季と同じように攫われたらしい、少年少女、幼女たちを抱きしめては、よしよしと慰めていた。

声も出ないし、やることがないので、ぶっちゃけ暇だったのである。

――おなか空いたなぁ……。

だが、ベッドの並んだ病室っぽい部屋を訪れた男のいうことには、検査があるから食事は抜き、だそうなのだ。

――んー。これは臓器売買のセン？

それなら、臓器を摘出されるまでは、手荒なことはされるまいが。

――肺と腎臓、一つずつなら、おとなしく提供するんだけどなぁ。

命には代えられないし、となないしんひとりごちる七季の手は、あくまで優しく、小さな男の子を撫でている。

年のころは、ゴンと同じくらいだろうか。眉の太い、あどけなくも凛々しい顔立ちだが、いかんせん、消毒薬の臭いや、この雰囲気が苦手なようで、不安そうな表情が消えない。

まあ、えてして子供は病院が苦手なものである。七季はそうではないけれど。

――でもさすがに、心臓抜かれたら死んじゃうなぁ……。

さて、何ができるだろう、と考える彼女が、たぶん関係者の中で、いちばん落ち着いているに違いなかった。

#１４１　鏡界のソルフェージュ－恐怖劇（グランギニョール）の幕開け－（後

あとがき

＞ヒートアップ先輩。マジ泣きです。

いままでオリ主がどこにいるかわからない、なんてことがなかったので、余計に恐い。

弓兵は、あとで先輩に殴られますが、甘んじて受けます。元凶だから。

いちばん平和なのって、じつはオリ主。拉致られた人間が何やってんだかな。

#１４２　鏡界のソルフェージュ ― 韻文劇の紡ぎ手 ―

『冷たい誘いに乗ってはいけない
それは幸せではないが不幸せでもないのだから
一度触ったものを放置してはいけない
それはあるべき姿ではないのだから

円の重心がずれてしまう
天体は狂わず運行するだろう
受け入れる準備は既に出来ているのだ
少年の名前が高く響くだろう

暗闇を歩き続けるといいだろう
全ては言葉に含まれているのだから
極楽鳥の鳴き声がする
誰も残っていないのだ

無数の成熟と無数の鎖
男は化石を発掘するだろう
やりかけたままで投げ出してはいけない
嵐の時ほど大きな獲物が獲れるだろう』

「天使の自動筆記（ラブリーゴーストライター）」。
それは、ノストラードファミリーのボス・ライトの娘が持つ、特質系の念能力だ。
自動書記による、四行詩という形式で行われる予知。

悪い予言には必ず警告が示され、その警告を守れば予言を回避できる。

その精度は凄まじく、マフィアの上層部である、十老頭にもファンがいるほどだ。もっとも、その愛らしい容貌も、少なからぬ要素ではあるだろうが。

条件としては、対象者に、直筆で名前・生年月日・血液型を紙に書いてもらう必要があるのだが、七季と親しいネオンの元には、前もって書かれたストックが何十枚も常備されている。

「……なるほど」

パクノダたちによって連れてこられた、ネオンの予言を一読したクロロは、その黒い目を細めて、紙をその場のメンバーに回し読みさせた。

ネオンだけは、不安そうに一同の顔をちらちら見回している。

七季を「お姉さま」と慕う少女は、彼女の不在を聞かされて、能力を使うことを即座に自分から言い出したほどだ。

この場には、真言や幻影旅団ばかりでなく、七季の失踪を聞かされたプレシア一行も、残らずそろっていた。アリシアの手には、どこぞのカードキャプターな魔法少女を思わせる、可愛らしいピンクのロッドが握られているが。

「一つ朗報だな。予言が四部そろっていることから、今月中は、ナナキが生存できるというわけだ」

とん、と青年の長い指がテーブルを叩く。ネオンの能力を知るクロロが低い声で呟いた。

「既に、月の半分は過ぎている。残りは半分……三節目、四節目に注目すべきだ。さて」

コピー能力を持つコルトピが、その紙を人数分コピーして、ネオン以外に配った。予言の紡ぎ手であるネオンは、自分の書いた予言を見ないことを習慣にしているからだ。

「『暗闇を歩き続けるといいだろう』。

『暗闇』は、いったん置いて、『歩き続ける』ということは、比

喩としても、ナナキが動ける、もしくは考えられるだけの環境にあることを示していると思う。

この予言は、ナナキへのアドバイスだ。だから、『全ては言葉に含まれている』というのは、裏を返せば、彼女が『情報を得られる場所にいる』ということ」

予言を分析、解釈するクロロの低い声が、ぼんやりとオレンジ色の明かりに照らし出される、廃墟のリビングにさざなみを打つように広がる。

「『極楽鳥の鳴き声がする』……これは、ナナキがいる場所に、極楽鳥がいるということか。それとも」

「それは東風（こち）のことかもしれん」

ふいに、違う男の声が、クロロのセリフを遮った。

「東風（こち）？」

青年は見目うるわしい顔を上げると、その黒い瞳に、白い髪の偉丈夫を映して、けげんな声を洩らした。

「マスターの使い魔で、シームルグだ。極彩色の羽根を持つ神鳥でな、たしかこちらに連れてきているはずだ」

ホームにも連れ込んでいたはずだが、姿を見ないところからすると、七季と一緒にいる可能性は高いだろう。

「ふむ……」

アーチャーの言葉に、黒髪の青年は予言の書かれている紙を指でなぞった。

「『誰も残っていないのだ』――気になるのは、これだな」

四節目の予言がしっかり存在することからして、七季が四週目も生きているのは間違いない。

だが、彼女の他に「誰もいない」環境だとしたら――それはそれで、問題のある状況に違いない。

「それは簡単なことではないか？」

ふたたび、違う男の声が――リビングの入り口から飛んできた。

「ジョゼフか」

「もう起きたのか？」
青い髪の四十路男は、かつかつと歩を進め、手近なイスにどかりと腰を下ろした。
「あの娘を、お前らから奪った連中だろう？
そいつらを、お前らが許すとも思えん。のきなみ吹っ飛ばされるから、『誰も残っていない』のだろうよ」
腕組みしながら、胸を張って自信満々に言ってのけるジョゼフに、真言と才人の呆れがふんだんに含まれた呟きがこぼれた。
「意外と丈夫いなコイツ」
「七季ちゃんは一口でダウンしたのに……あの地獄の麻婆、一皿完食して、ダウンはしたけど、一晩たったら復活かよ。パねぇなこのひと」

＃１４２　鏡界のソルフェージュ－韻文劇の紡ぎ手－（後書き）

あとがき

＞何気に魔改造の成果が出ているＪＯＺＥＨＵです（笑）。

じょぜふは　泰山麻婆に　たいせいが　できた。

てれってれーん♪

作中の予言詩は「予言詩メーカー」で作成しました。意外と面白い結果が出たので、そのまま引用。

※韻文劇：韻文で書かれた劇。

#１４３　鏡界のソルフェージュ ― 即興劇と子守唄 ―

「口を開けて」
かぱ。
検査のために、まずは内診を受けていた七季は、診察を終えた医者に妙な顔をされて、首をかしげた。
「？」
「……最初から口が利けないわけじゃなくて、喉の炎症が原因か。痛みはあるかね？」
こくん、と頷いた黒髪の少女に、白衣を着た壮年の医師は、「さて」とカルテを見やった。
「咳もくしゃみもないし……原因に心当たりは？」
『気絶するほど辛い麻婆を食べました』
きゅっと医師の手を取って、その手のひらに筆談を試みた少女に、男は、それはそれは不憫そうなまなざしを向けた。
――何でまた、こんな子が流星街に落ちてるのかね。わけがわからん。
医師の手を握る七季の手指はやわらかく、何より清潔で、いままでまともな暮らしをしていたのだろうと、たやすく判じることができた。
「香辛料による炎症かね」
こくん。
もう一度、頷く七季は、ついでとばかりに医師へ訴える。
『おなか空きました。辛いの嫌です。喉痛い。検査が終わったら甘いものが食べたいです。おとなしくしてますから』
じーっと、黒めがちな、大きな瞳で子犬のように見上げられて、臓器売買をする犯罪組織に協力している男も、ちょっと言葉に詰ま

った。
「ま、まあ……買い手がつくまでは、健康な方が良いだろうしな。いちおう話は通しておこう」
ぱっ。
黒髪にふちどられた、あどけない七季の面差しが、ほころぶ花のように明るくなる。
握った医師の手を、ぶんぶん振って感謝を伝える黒髪の少女に、医師は居心地悪そうに、検査へ進むよう促した。

一通り、検査を終えた七季は、元いた――押し込まれていたともいうが――ベッドの並ぶ部屋に戻されていた。
この白い建物は、非合法の病院施設であり、犯罪組織が「商品」を検分し、振り分けるための「倉庫」がわりなのだな、プリン食べたいなぁ、と彼女が考えを巡らせていたところ。
「おう、いたな」
鍵をかけられていたはずのドアが開き、あまり医師っぽくない、いかつい顔の男が、まっすぐ七季を目指してやってきた。
――え。まだ検査したばっかりだろ？　もう買い手がついたのか？　まだ検査結果も出てないと思うんだけど。
他にも攫われてきた子供はいたが、開いたドアの向こうには、別の男が張り付いている。逃げ出せそうにはなかった。
いっぽう、声が出ない七季は、首をかしげることで、相手に用件を問う。
「お前、ガキどもをなだめるのが上手いんだってな。ちょっと来い」
ぐい、と腕をつかまれた少女の、小柄な体は、ぽすっとあっけなく男にぶつかってしまう。
すると、目つきの悪い男は、じろりと七季を一瞥するや、面倒そうに――けれども、どこかほっとしたように――嘆息した。

「なるほど。『使えねえ』か。オーラもダダ洩れ……確かに流星街育ちじゃあなさそうだ」

手荒にあつかわれた七季は、ないしんムッとしたが、ここで抵抗するほどバカではない。

ぺちぺちとかるく男の腕を気を引くために叩いて、もう一度、まっくろな目で問いかけた。

「ガキどもがびいびい鳴きやがって、やかましいんだよ。検査が進みゃしねえ。

この部屋にいるときは黙って大人しかったのにだ。お前がなだめてたんだろうがよ」

――なるほど。監視カメラもあるわけか。

当然だろうな、と思いつつ、七季は背後を振り向いた。そこには、まだ検査を受けていない、彼女よりも年下の子供たちが、不安そうに七季を見つめている。

七季は、「いってきます」と言うように、ちびっこたちへひらひら手を振ると、素直に男に従って部屋を出た。

――どうせやることもないし。

それに、自分ひとりでは出られなかった病室を出て、建物内を探索できる、貴重な機会を逃したくはない。

七季はポニーテールを揺らしながら、ぺたぺたスリッパの足音をたてて、白い廊下を歩き続けた。

どうやら、この施設の職員たちに、七季は「子守り要因」とみなされたらしい。

――あるぇー？　何でさ。プロの看護婦さんとかいるんでないの？

物凄くまっとうなツッコミであったが、ここにいる「看護士」は、犯罪組織に従事しているような面々である。

「看護婦」は、見張りを兼ねた警備員たち、屈強な男たちの「お

楽しみ」に忙しいし、そうでなければ検査のアシスタントをしている。

子供をあやすスキルなど、ろくに持っていないものばかりだった。まあ、ある意味、人気稼業といえる、表の病院と違って、しょせん売り飛ばすのだから相手に気を使う必要はない、と思っているからなのだろうが。

そんなわけで、この施設に放り込まれて――正確には目覚めて――以来、七季は、ちびっこ一人ひとりの検査に同席し、ぐずる子供を抱きしめ、慰め、撫でてやり、注射の間は手を握ってやり、としていたら、当然のごとく懐かれた。

「おねーちゃん、おねーちゃん」

「だっこー」

ふだん弓兵に世話を焼かれている印象の強い七季だが、彼女は八音という、れっきとした妹がいる、姉。しかもいちおう長女である。自分よりも幼いちびっこたちを見ていると、昔の妹を思い出し、ついついかまってしまうのは、自然なことだ。

――声が出ないから、子守唄が歌えないのが残念だなぁ。

「ううう……痛かったっすー。注射嫌いっすー！」

と、「ズシ」と名乗った少年が、泣きながらしがみついてきた。七季は、まだ声が出ないので、黙って彼の短い髪をわしわし撫でてやる。「頑張ったね。いい子いい子」という気持ちを込めて。

ついでに、泣きやんで顔を上げたズシの額に、にっこり笑ってキスを落としてやると、少年はまっかになりながらも、ぎゅっと七季の体に腕を回して、ぐりぐり胸元に顔をすり寄せてきた。

彼女がちびっこたちに人気なのは、じつはこのバストのせいもあったりする。

それはそれは豊かに、ふわふわたゆんたゆんな巨乳は、いまだ幼い子供たちに、強烈な母性を感じさせるらしく、みんなこぞって抱きつきにくるのだ。

――いや、良いけど。

何せ、実家の妹は「あんたは胸まで生意気わがままいっぱいかー！」と半ば言いがかりをつけながら、もみしだきにくるので、それよりはずっとマシである。

一ヶ月に一度は、その発作が出る栗毛の少女を、じつは七季は心配していたり、いなかったり。

――八音（はつね）、べつにちっちゃいわけじゃないのになぁ。

Gカップという規格外サイズな七季だが、その三つ離れた妹だって、Cカップはあるのだ。何が不満なのだろう、と一部ド天然入っている姉は、ないしん首をかしげいている。

――CとかDのが、下着は可愛いの多いのに。

それを口にすると、また強制マッサージが待っているので、七季はいつもおとなしくしているのだが、自分の胸を見下ろしてみて、ちょっと嘆息した。

――着替えのブラが欲しいなぁ。

良く考えてみなくても、着のみ、着のままで攫われてきた少女に、着替えなどない。

病院で見かける術着のような、あわせを紐で結んでまとうタイプの、簡素な寝巻きじみた衣服が与えられているのだが、正直、これでは七季の胸が支えられない。

いうまでもなくノーブラである。それがまた、ちびっこたちに、いっそうバストが好評な原因ともなっているのだが。

かろうじて、ショーツの方は、病院やエステサロンで使われる、使い捨ての紙ショーツが支給されている。が、心もとないのは当然である。

――裸族になるのも時間の問題？……いや、その前に売り飛ばされ……る前に、みんなが来てくれると良いなぁ。

わりと他力本願なことを考えつつ、七季はきょうも、ちびっこたちを抱きしめながら、先輩への念話を試みているのであった。

＜せんぱーい。火の海にしちゃ嫌ですよー？＞

＃１４３　鏡界のソルフェージュ ― 即興劇と子守唄 ―（後書き）

あとがき

＞オリ主オンリーですみませぬ。

緊張感がないというので、捕われた彼女が何をしているかと書いてみたんですが……やっぱり緊張感がありませんでした。がくり。

次回こそはネタをっ！

#１４４　鏡界のソルフェージュ－歌劇なＭバタフライ－

「団長、店、閉めてきたぜ」
「あと客だ」
ヨークシンから戻ってきた、ウボォーとフィンクス、ノブナガたちの後ろには、ゾルディック家の面々。
それだけではない。
弟子であるカイトと、黒髪の少年を従えたジンに、キルアと同行していたはずのゴン。
そして、特徴的な蝶を思わせるヒゲをたくわえた老人と、その面影を、色濃く継いだ、パピヨンマスクの少年が、スーツ姿で佇んでいた。
「ジン？」
「ご苦労、イルミ」
「あ、バクシャク卿じゃん。お久しぶりー」
ジョゼフは、ハンター試験のナビゲーターであった、友人二号の姿に驚き、クロロは連絡を取ったゾルディックの長男をねぎらい、そしてシャルナークは、「蜘蛛の巣」の出資者（パトロン）である蝶野爆爵（ばくしゃく）に手を上げた。
「ばくっ……！？」
いっぽう才人はというと、バクシャク卿と呼ばれた老紳士の背後、パピヨンマスクをつけた少年に目を見開く。
どう見てもパピヨン――蝶野攻爵（こうしゃく）――です、ありがとうございました。
才人とリドルの思考がシンクロする。
「何。久しぶりに、店で孫とディナーをと思ったのだが。彼らが閉店準備をしていたのでな。話を聞いたのだ」

バタフライひげが印象的なバクシャク卿は、事情を簡単に明かすと、後ろの玄孫（やしゃご）を振り返った。
「コウシャク」
「ナナキとマコトは、俺とカズキ＝ムトウの病を治した恩人だからね。見過ごせはしないさ」
ばさあっ。
「あいかわらず、どう見ても変態という名の紳士だなお前らは！」
ここで脱ぐな！
すかさず真言が、すぱーん！とハリセンでツッコミ入れつつ、アーチャーたちとは面識のない彼らを紹介する。
「こんなんでも念能力者だ、こいつら。バクシャク＝バタフライ＝チョウノと、そっちのブーメランパンツいっちょになった若いのが、コウシャク＝パピヨン＝チョウノっての」
バクシャク卿の玄孫（やしゃご）ね。
栗毛の巫女に、親指で指されたパピヨンマスクの少年が、さらにジンの連れである黒髪の少年を引っ張る。
「これがカズキ＝ムトウ。偽善者だが、この俺と並ぶ程度には腕が立つ。いちおう、ジンの弟子だしな」
パピヨンが、何故か、我がことのように胸を張ってカズキを紹介する。くせのある黒髪の特徴的な少年は、片手を上げてあいさつに代えた。
「七季さんの危機だって聞いたら、黙ってられなくってさ。パピヨンも、こんなんだけど、頼りになるんだぜ」
どうやらカズキとパピヨンは、それなりに仲が良いらしい。
「武装錬金」を知っているリドルと才人は、目の前の光景のカオスっぷりに、こっそり頭を抱えた。
「で、ジンは……『蜘蛛の巣』にメシ食いにきたところを、カイトにつかまった、と」
真言は、半目になって、二ツ星（ダブル）ハンターにツッコミを入れた。
「自分を見つけること」を、弟子への課題にしたはずの男は、面

目なさそうに頭をかいている。その腕をつかんでいる、キャスケットをかぶった長身の青年が、シャープな顔立ちに心配の色をにじませて頷いた。

「ナナキに教えてもらったんだ。ジンさんが『蜘蛛の巣』の常連だってな。しかし、せっかく土産を持って逢いに行こうと思っていた矢先に……」

「しかし何で息子のゴンまでいるわけ？」

けげんそうに、真言が琥珀の目を向ける先には、父親に良く似た、黒髪、黒目の少年。

「オレはキルアと一緒だったから」

「仕事が入ったって言ったんだけどな」

肩をすくめるのは、銀髪猫目の少年である。

「そんで、ミル兄ぃと『蜘蛛の巣』の前で待ち合わせてたら、ゴンの親父と、そこのカイトって人と出くわしたワケ」

とんだエンカウント率である。

そこに。

「ナナキの居場所……ううん、売られた先がわかったわよ！」

プレシアの声が響いた。

ママさん魔導師、シャルナーク、リニス、そして、デバイスたちのサポートまで用いたアーチャーの四人が、手分けして電子の海における情報を探った結果として、ついに捜し求める少女の存在を突き止めることができたらしい。

「ＮＧＬ自治国……ナナキを売ったのは、臓器売買組織だ」

告げるシャルナークの童顔が、険しく歪んでいた。

#１４４　鏡界のソルフェージュ ― 歌劇なＭバタフライ ―（後書き）

あとがき

＞そんなわけで、しれっと武装錬金もクロスしてみました。

ご存じない方は申し訳ない。

ちなみに、その昔、クロロとオリ主を買ったドＭな紳士が爆爵卿（ばくしゃく）です。Ｍ（マスター）バタフライ。

とんだ混入具合ですみません。でも、やりたかったネタだったんです。

変態という名の紳士＝パピヨンのひいひいじーちゃん。

念能力者なので、爆爵卿（ばくしゃく）は当時、ナイスミドルに見えたという話です（笑）。

あと蛇足ですが、マスターブラボーはジンの友人とか、そんなん。

たんなるネタです。

#１４５　鏡界のソルフェージュ―そして誰もいなくなった―

さて。はるか遠い流星街で、怒れる蜘蛛と龍神の嫁、その他もろもろがテンションを滾らせているころ。

七季はといえば。

『とら、ついてきてたのかー』

ＮＧＬ自治国へ「商品」として輸送される船の中で、黄金の大妖と、おしゃべりなどしている真っ最中だったりした。

とらは、黒髪の少女が拉致されてすぐに気づき、何をするのかと、興味半分に、そのあとを追いかけてきたのだが、あれよあれよと七季が「集荷」され、他の子供ともども、検査施設へ運ばれてしまい、コンクリートの建物には侵入が難しく。

あちこち窓ものぞき込んでみたが、脱走防止のためか、すべてはめ殺し。

ためしに壊してみたが、すぐに警備員がすっ飛んできた上に、検査施設は思いのほか広く、七季がどこにいるかの見当もつかなかった。

そして先日、ようやっと、搬送というか「出荷」される子供たちに混じって、コンクリートのビルから出てくる彼女を見つけたのである。

「なーんで逃げねえのよ？」

『デバイスも何もナシだからなぁ』

例によって、まだ声が出ない七季は、とらの手を指でなぞっての筆談中。

やはり臓器は新鮮なものに限る、というわけで、直前まで生かして運ぶ方法が取られていたため、幸か不幸か、七季はしっかりばっちり意識もある。そのうえ、ある程度の自由も保障されている。

それまで、おとなしく従順に子守役を担っていたのが効いたらしい。

七季がしゃべれないことで油断をしているらしく、監視の目こそあるものの、わりとどこにでも通してくれるし、彼女を憚って声をひそめるような配慮もしていない。

そのことから、七季は自分たちが、このまま行けば、ＮＧＬという国まで送られることを把握していた。

だから何ができるわけでもないのだが。

『念話も試してるんだけど、反応ないし、デバイスもないから』

お手上げです。

そう示すように、両手を上げる小柄な少女に、とらは長い耳を、ぱたぱた動かしながら、珍しい申し出を口にした。

「……乗るか？」

七季ひとりであれば、とらは乗せて飛ぶことができるだろう。

ただし。

『とら、どこに飛んでいけば良いか、わかる？』

「う」

ただ彼女を追いかけてきた妖怪は、「飛んでりゃそのうち着くだろう」くらいに考えているが、もちろん彼が、流星街の場所を覚えているかどうかというと、まったく定かではない。

『それに、この子たちがなぁ』

ちらり、と七季がまっくろな目を流した先には、同じ船室に押し込まれた子供たち。

彼女と同じく、ＮＧＬへ売られる、「ドナー」たちだ。

中には、とらが見える子供もいるらしく、ちらちらと七季たちの方をうかがっているものもいる。

一人ならば、とらのおかげで逃げ出せる。しかし、ちびっこたちを置き去りにするのは、文字通り、彼らを見捨てることだ。

まさか、とらに、いちいち全員を運んでもらうわけにもいかないだろう。

――いっぺんに運べたらなぁ……。
もっとも、七季に念能力はない。
そこまで考えたところで、無意識に懐を探っていた少女は、ふいに「あ」と口を開けた。

十人のインディアンの少年が食事に出かけた。
一人がのどを詰まらせて、九人になった。

九人のインディアンの少年が遅くまで起きていた。
一人が寝過ごして、八人になった。

八人のインディアンの少年がデヴァンを旅していた。
一人がそこに残って、七人になった。

七人のインディアンの少年が薪(まき)を割っていた。
一人が自分を真っ二つに割って、六人になった。

六人のインディアンの少年が蜂蜜をいたずらしていた。
蜂が一人を刺して、五人になった。

五人のインディアンの少年が法律に夢中になった。
一人が大法院に入って、四人になった。

四人のインディアンの少年が海へ出かけた。
一人が燻製(くんせい)のにしんにのまれ、三人になった。

三人のインディアンの少年が動物園を歩いていた。
大熊が一人を抱きしめ、二人になった。

二人のインディアンの少年が日向に坐った
一人が陽に焼かれて、一人になった。

一人のインディアンの少年が後に残された
しかしそいつが結婚すると
後には
誰もいなくなった……

ＮＧＬに到着後。
気がつけば、部屋に閉じ込めていた子供が、七季を除いていなくなっていたことに、警備員たちは叱責を食らっていた。
臓器移植を必要としているのは、ＮＧＬ自治国の幹部もそうだが、他に、ＮＧＬ自治国と裏で繋がっている、ミテネ連邦のお偉いさんや、資産家なども、顧客に入っているのだ。
つまりＮＧＬ自治国は、隠れ蓑としても使われたことになる。
否、むしろＮＧＬ自治国が、仲介役をみずから引き受け、彼らからさらなる恩恵を受け取るためのカードでもあった。
もちろん警備員たちは、ひとり残っていた七季を問い詰めたが、しゃべれない彼女は首を振るばかり。
逆に、男たちが連れて行ったのではないのかと、筆談で尋ねてくるありさま。
予定していた数の、半分どころか、七季ひとり分の臓器しか手元にない――まだ彼女は生きているが――ことで、今度は、少女の臓器を移植する権利をめぐって、顧客同士でのいさかいが起き始める。
命の惜しい連中は、「臓器」の値段を吊り上げるのだから、いまのところ「買主」であり、七季の所有権を持っているＮＧＬ自治国は、笑いが止まらない――かというと、そうでもないのだが。

ともかく、いまだ引き取り手の決まらない七季は、当分のあいだ、身の安全が保障されていた。

『先輩、いまごろどのへんかな？』

「けっこう余裕あるなお前」

目の前で、自分のはらわたの値段をオークションされているというのに、のんきに筆談を続ける少女に、とらは呆れのまなざしを送って嘆息した。

――身分証もないし、旅費もないし、服もコレだし。お迎え来るまで待ってた方が良いよなぁ。

彼女がさらわれてから三日。そろそろ色々な意味で限界だった。

いっぽう、どこかの空の飛行船の中では。

「ところでジョゼフ。いったいお前、どうやってあの麻婆を解毒したんだ？」

移動中に、クロロが青い髪の美丈夫に尋ねたところ。

「『絶』で一晩寝ていたら治ったが」

「ちょ、念能力者が、回復に『絶』で一晩かけるって、どんだけ大ケガあつかい！？」

すかさず才人がツッコミを入れていたという。

#１４５　鏡界のソルフェージュ―そして誰もいなくなった―（後書き）

あとがき

＞とらのターン。もう一つの元凶、ちゃんといました。

あと「誰も残っていないのだ」を。

作中の詩は「そして誰もいなくなった」で有名な「十人のインディアン」です。

※お詫びという名の自重

三月十一日の三陸沖を震源とする強い地震があり、それに伴う震災が、いまもなお続いております。

震源地から遠い場所に住む書き手にできることは、被災地の方のご無事と、お亡くなりになった方の冥福を祈ることくらいです。

ふだん、おちゃらけたものを書いているやつが言うのもなんですが、しばらくの間、作品の内容について自重させていただこうと思います。

「気にしてもどーしよーもなかろーもん。何になると？」というご意見もあるかと存じます。

ですが、この先に待っている展開が、まあお察しとは思いますが、天災クラスの大暴れなわけでして……。

ちょっと書くのを待っていただけたら、と思います。

もちろん、これは書き手の個人的な意見です。

ただ、東北に住んでいる友人の、安否がしれなかったときの言い知れない不安や、やるせなさは、ひとの神経をささくれだたせるものだと知っている人間として、読む方の心を逆撫でするものは、書きたくないのです。

（アンチもの書いておいてそれか、とツッコまれるかもしれませんが、あれは最初から、そういう作品として、おことわりさせていただいているので）

手前勝手な話だとは、じゅうじゅう承知の上で、しばらくの間、「ジョゼフ珍道中？」編を中断させていただきたいと思います。

どうか、ご理解くださいませ。

ほとぼりが冷めたら、再開します。

それじゃあしばらく更新はしないのか、という話ですが。
そこはそれ、暇つぶし程度にでもなればと。
ほぼアクションの出てこないような、オリ主たちの過去話でも書くつもりです。
回想シーンとかも入れて、なるべく弓兵たちの出番も作りつつ、ほのぼの話を楽しんでいただければ幸いです。

とりあえず、友人の安否も知れたので、作品を書ける程度には落ち着いた、へたれ書き手からの、ごあいさつでした。
ここまでお付き合いいただき、本当にありがとうございます。
本日の日付が変わるころに、またお会いできることを願って。
如月　拝

#１４６　つながれた手ー春の訪れー（前書き）

まえがき

＞「大事なものには鍵かけて編」は、現在進行中の本編より、ちょっと未来の話です。

おおまかな具体例を挙げると、ゼロ魔編のあと。

まあオリ主の世界では、まだ夏休みなんですが。

基本的に、リリなの、ゼロ魔キャラは登場しません。

#１４６　つながれた手ー春の訪れー

「そういえば、君たちはどうやって出会ったんだ？」
神門（みかど）神社の昼下がり。何の気なしに、アーチャーが口にした言葉に、その場の少年少女たちは、お互いの顔を見合わせた。
「うーんと……この中で、いちばん付き合いが長いのは……」
「僕と七季でしょうね」
あたりを見回す、黒髪の少女の言葉に手を上げたのは、幼なじみの片割れ、伯言である。
「ちょっと待った。僕とナナは、ほとんど生まれたときからの付き合いだよ？」
しかし、つややかな栗毛にふちどられた秀麗な面差しの少年は、異議を唱える霜夏の言い分を鼻先で笑った。
「霜夏は、幼稚園も小学校も、中学だって別だったでしょう。トータルで見れば、僕の方が長いに決まってます」
胸を張る伯言に、緋袴をはいた美人巫女さんが「あれ、そんなもんなの？」と首をかしげる。
「私と霜夏は血縁ですけど、ご近所ってわけじゃなかったですからねぇ」
アーチャーの淹れたお茶をすすって、まったり中の七季は、あくびする猫みたいな、のんきな口調でほのぼの答える。
「全寮制の学校だったんだから、仕方ないじゃないですか」
むくれ顔で切り返す、若白髪の少年に、「へえ」とリドルが黒猫姿のまま、ぴこぴこしっぽを振って相槌を打つ。
そして、幼なじみの少女と、いちばん付き合いが長い、と豪語する伯言が、昔語りを始めた。

もそもそ、ごそごそ。ずぽっ。
形よく整えられた、緑うるわしい生垣の一角に、つやつや天使のわっかが光る、まっくろ頭がひとつ生えた。
「む？」
お隣との境である生垣を突破したのは……ひらひらレースがついた、まっしろなブラウスに、淡いブルーのスカート。そして桜色のカーディガンをまとった、幼稚園生くらいの女の子。
まだまだ丸っこいフォルムとあいまって、可愛らしいことこのうえないが――いかんせん、女の子としては不似合いなくらい、元気いっぱい黒い瞳をかがやかせている。
七季、四歳。
どうしようもなく好奇心旺盛なお年頃であった。

いっぽう。
そのお隣の庭の隅。
「うっく……ふぇ……っ」
さっき竹刀でぶたれた痛みに、べそをかいてうずくまっている、ひとりの男の子がいた。
やはり春の日差しを弾く、つややかな栗色の髪に、まっしろな肌の子供だ。泣いてさえいなければ、天使のようだと誰もが口をそろえる、愛らしい男の子であった。
伯言、四歳。
甘えたい盛りのお年頃だというのに、早くも道場で剣の道に叩き込まれ――幼いながらに――その境遇を嘆いているところだった。
「どっかいたいの？」
「え？」

と。

やおら響いたソプラノに、驚いて伯言は顔を上げる。そこには肩先でくるんとカールした黒髪の女の子がひとり、じっと彼を見詰めているのだった。

ベビーブルーのスカートが汚れることもかまわずに、うずくまる伯言の傍らに跪いた七季は、ふっくらした小さな手を伸ばすと。

「いたいのいたいの、とんでいけー」

男の子の栗毛を、そう言って撫でた。

びっくりして固まっている彼の様子を見て、七季は足りないと思ったのか、何度も繰り返す。

「まだ、いたい？」

じいっと心配そうにのぞきこんでくる、黒い瞳の女の子に、伯言は思わず首を振っていた。

「だ、だいじょうぶ」

「よかったね！」

にぱっ。

元気いっぱいほころんだ、満面の笑顔を向けられて、

――お日さまみたいだ……。

ほんわり、胸があたたくなる伯言。

とたんに相手のことが気になって、彼はいつのまにか女の子の手を、きゅっと握りしめる。

「うん、ありがとう――きみ、だれ？」

「七地七季。四さいだよ。きみは？」

「陸遜伯言。ぼくも四さい。どこから来たの？」

「あっちー」

問われた七季は、素直に生垣を指差した。もちろんその向こうには、七地家がある。

もっとも、それは公務員宿舎の一つである、平屋だったのだが。

同年代の子供より、はるかに賢い伯言は、すぐにそれがお隣に住んでいる女の子だと理解した。

それが「ふほうしんにゅう」だという野暮なツッコミはナシである。

「いっしょの幼稚園じゃないよね？
ぼく、きみのこと見たことないもの」

「あたしも。りく……？　りっくんのことしらないよ」

首をかしげる七季に、わざわざ伯言は注意を挟んだ。

「りっくんじゃなくて伯言。……ううん、伯言って呼んでよ」

「はくげんくん？」

「伯言。くんはいらない」

「はくげん」

「うん。ななき、って呼んでもいい？」

「いいよー」

にっこり。

いつも「ちゃん」づけで、あまり呼ばれたことのない名前だけど、そこに嫌な気持ちがあるわけではないと感じた七季は、無邪気に笑ってそれを受け入れた。

もともと人懐っこい七季だから、彼女は「新しいおともだちだ！」という認識になり始める。

「なかよくしよ！」

「うん！」

ほやほやっと笑いあう子供たちのあいだに、あたたかい春風が吹いていく。

すると。

「伯言」

息子を迎えに来た父親――道場主でもある――が、そこに現れた。

剣道着をきりりと着こなした長身の男は、なるほど目許が男の子と似ていた。

「ちちうえ」

「？　こんにちは、おじさん」

見知らぬ男性ではあるが、七季はぺこりとおじぎをする。彼のま

とう雰囲気が、新しい友達に似ていたせいだろう。
かたや、思いも寄らない珍客の存在に、栗毛の男性は、切れ長の目をわずかにみはった。
「こんにちは、お嬢さん。
……伯言。こちらの女の子は？　お前の友達かい？」
「はい父上」
きぱり。
即答する伯言。
そこには一片のためらいもない。
七季はといえば、さっぱり疑問も持たず、にこにこ嬉しそうに笑っている。
その光景を眺めた男性は、しばらく考えていたが、息子が泣き止んでいるのをよしとして、道場へ戻るように促した。
「……っ」
びくり、と剣道着をまとった小さな肩がはねる。
それを感じて、七季が彼の手を握った。
「はくげん」
いたい？
黒い瞳が心配そうに、伯言を見つめる。
「だいじょうぶだから、ななき」
きゅう、っと小さな手が重なりあう。
なにやら知らないうちに生まれているらしい、ちびっこ同士の新たな絆に、ひとり蚊帳の外の父親は、感慨深くうなずいていたりした。

「じだいげきだ！」
その場のいきおいで、とっとこ伯言たちについてきた七季は、大きな瞳をきらきらかがやかせて、道場で打ち合う剣士たちを見つめ

ていた。
そんな反応に、伯言はしんそこびっくりして彼女を引き止める。
そうしなければ、いまにも道場へ飛び込んでしまいそうな勢いだったのだ。
「ど、どうしたの？」
「じだいげきみたいだよ、はくげんっ。チャンバラだー♪」
あどけない、ぷっくりした白い頬を桜色に染めた女の子は、きゃあきゃあはしゃぎまくっている。
どちらかといえば厳格な、道場の雰囲気に、そこだけが場違いな明るさと華やかさが咲く。
「時代劇が好きなのかい？」
道場主でもある男性が尋ねると、七季は元気よく返事した。
「うん！　大好き！」
かっこいいよね！
なんでもない、素直なその一言が、伯言の歩く道を決定付けたのだとは――いまだ彼女の知るよしも、ない。

「ああ。そーそー。あのあと、母さんから怒られたんだよなぁ。服を汚して帰ってきたから」
それで七季は、綺麗な服を汚すから怒られるのだと思って、男の子みたいな格好をするようになったのだが。
「七季は昔からお転婆でしたから。
でも、小さい頃の七季は、ぱっちりした黒い目に、肩先でかるくカールした黒髪の綺麗な、それはそれは可愛い女の子でして。
白いブラウスと、パステルカラーのスカートをはいて、ちょこんと座っているところは、もう誘拐されそうなくらい可愛かったですよ」
うっとり笑いながら語る、白皙の少年は、心なしかアーチャーに

ドヤ顔をしているように見える。
「そう言う伯言は、天使みたいに可愛い男の子だったけどなー」
どうしてこうなったのやら。
腹黒策士、小悪魔系に育った幼なじみを眺めて、しみじみとひとりごちる七季。
――元凶がそれを言うか。
その場の誰もが、黒髪の少女に内なるツッコミを入れていたのは、いうまでもない。

#１４６　つながれた手ー春の訪れー（後書き）

あとがき
＞某所で載せていたのを改訂しました。
しばらくはちびっこ話です。
オリ主はじじばばに可愛がられていたので、時代劇が大好きという渋い趣味の子供でした（笑）。

#１４７　つながれた手ー片道の邂逅ー（前書き）

まえがき
＞今回は、番外編的な話です。
リリなの、ゼロ魔キャラは登場しません。

#147　つながれた手ー片道の邂逅ー

「じゃあ次は僕の話を――」
「はいカット」
すぱーん。
「酷い！」
霜夏と伯言のかけ合いを眺めつつ、ひょいとしゃべりだしたのは、遊びに来ていた一護だった。
「俺は、例によって、虚（ホロウ）を追っかけてる最中に、漣さんたちと出くわしたんだっけな」
「だなぁ。最初にいっちーと顔合わせたのは、先輩じゃなくて、私だったけど」
明るいオレンジ色の髪の少年が、まっくろな死覇装（しはくしょう）をまとっている姿は、いかにも目立っていたことを思い出し、七季は大きな目をにっこり細めて屈託なく笑った。
「先輩が、神剣で虚（ホロウ）をさくさく切り倒してるところにぶつかって、ぽっかーんとしてたっけなぁ。いっちーも朽木さんも」
「いや、あれは誰でも驚くだろ、フツー」
虚（ホロウ）も怨霊の一種には違いない。
このところ、霊力の高い子供が襲われる事件が頻発していたため、七季たちは、帝都心霊庁のチーム「斗花（とうか）」としての除霊に当たっていたのだった。
「で、なしくずしに、いっちーも除霊に巻き込まれて……協力してくれて、いっちーのことを、先輩が気に入っちゃったもんだから」
「あ、それは僕も覚えてる。そのまま『お持ち帰りぃ！』されちゃったんだよね」
若白髪の少年が、七季の言葉を継いで、しみじみと気の毒そうに

一護をみやった。
「いっちーはカッコよかったからなぁ」
さらっとほわんと褒め殺しをしてのける、黒髪の少女の言葉に、ぶっきらぼうな純情少年がゆだった顔でそっぽを向いた。
「青春してんねー」
栗毛の美少女が、にやんと猫みたいな面持ちで口端を吊り上げ、一護をかるい口調でからかった。
「だーっ！　そういう漣さんは、コイツといつ知り合ったんだよ！？」
目つきの悪い霊感少年は、いきおいあまって七季を指差すが、その長い指は「行儀が悪いぞ」とばかり、ぺん、とアーチャーに叩かれた。
過保護な従者は、マスターである少女が指差されるのが気に食わなかったらしい。
「あ、すんません……」
「私と先輩が知り合ったのって、中学生のころかなぁ？」
いっぽうこてん、と首をかしげた七季が、ポニーテールを揺らしていると、それを否定する声は、栗毛の美少女じしんから放たれた。
「何言ってんの。私がナナちゃんのこと見つけたのは、もっと子供のころの話だぞ？」

「へ？」
きょとん、とまっくろな目を、まんまるくする黒髪の少女に、真言は片眉を上げながら、茶菓子のせんべいに手を伸ばした。
「まあ初めて見かけたのは、たぶん幼稚園くらいか？
お前、そのへんの公園で、悪魔と遊んでたから。魔性の気配っぽいのがするなと思ってのぞいたら、同い年くらいのちびっこが、きゃっきゃと仲良く遊んでるもんだから、びっくりしたのを覚えてる」

「……お前」
「……マスター」
「……ナナキって」
一護、アーチャー、リドルから、それぞれにジト目を向けられた七季は、ちょっとあわあわしながら「え、え？　あれ？」と言葉を捜しあぐねている。
トパーズ色の瞳、灰藤色の瞳、ルビー色の瞳、三対のまなざしが一極集中。
たぶんビームだったら穴が開いているレベル。
「あれ？　ナナ、そういう類（たぐい）、昔は見えたの？」
「悪魔……いまも魔族の方とは仲が良いですしね。変なこととかされてないなら、まあ」
かたや、むやみやたらと順応力たくましいのが、幼なじみの少年たちだ。
霜夏は素朴な疑問を投げ、伯言は「いまさらだし」な反応というあっさり加減。本当に慣れって恐いものである。
白の上着に浅黄の袴をはいた少年ふたりは、さくっとちびっこ七季の非常識っぷりをスルーした。
「まあ、とりあえず害はなさそうなんで、放っておいたんだけど」
そしてスルーしたのは、彼女もだったらしい。
「放置かよ！？」
龍神の嫁のセリフに、すかさずツッコんだのは一護である。
「ムチャ言うな。さすがにそのころは、私もちびっこだぞ。ランク不明の悪魔四人を相手にどうしろと」
「マジお前、何してたんだ……」
ますます少年の鋭い目から、呆れのまなざしを飛ばされて、七季はうにゃうにゃ口ごもる。
「あ、遊んでただけだもんっ。たぶん？」
「何で最後が疑問形だっ！？」
しかも悪魔と遊ぶなよ！

ツッコミを入れまくるオレンジ頭の少年に、真言はやれやれと言いたげな顔で、ちらりと琥珀の目を流した。一護と同じく、渋い顔をしているのは、褐色の肌の偉丈夫。すなわち七季の使い魔である。

自分が出会っていないころの心配までするあたり、その過保護っぷりが、自分の幼なじみに似ているな、となかしん真言は苦笑した。

それだけ七季が大切に思われているということなら、真言にとっても嬉しいことである。

「そのへんは、まだ心配ないって。たんに、ナナちゃんが魔性好きするうえに人見知りしない子だったから、寄ってきた悪魔たちと遊んでただけらしいよ」

もっとも、それはのちに七季と再会した悪魔から、真言が聞いた話ではあるが。

「むしろ、ナナちゃん狙いで寄ってくる変質者を撃退してたって言ってたし」

どんな撃退方法だったかは、ご想像にお任せしよう。

「ほう、変質者……」

「アーチャー、顔コワいぞ」

「問題が起こったのは、それよりもっとあとだったしな」

「ん？」

#147　つながれた手ー片道の邂逅ー（後書き）

あとがき

＞いま明かされる、衝撃の過去！

とか言ってみたり。

まだ続くんですが、ネタ的には。

#１４８　つながれた手ー夢の通い路ー（前書き）

まえがき

＞ちょっとだけ登校拒否や、自傷に関する描写があります。

お嫌な方は、ブラウザバックぷりーず。

それ程きつい内容ではありません。ほのぼのベースですから。

#148　つながれた手ー夢の通い路ー

「次に出くわしたのが――私が中一んときだな。つまり、ナナちゃんが小学六年生のとき」

ひききっ。

続けられた真言の言葉に、珍しく七季が、あどけない顔をはっきりと引きつらせた。

「どした」

少女の表情をうかがう一護の目に、うなだれるまっくろポニーテールの頭が映る。少年の目には、その七季の頭に、へにょんと後ろ向きに寝てしまった、三角ネコミミの幻影が見えた。

ちょっと可愛いと思ってしまったのは、彼だけの秘密である。

「しょ……小六って……私の黒歴史……何故に？」

ええええええ。

いっぽう、絶望のうめきを上げる少女を見つめる伯言の端正な顔は、何やら記憶を振り返っているようで。

「小六ですか……あのときの、七季のクラス担任は最悪でしたからね」

はたと思い当たったように、栗毛の少年は苦い面持ちでためいきをこぼした。

「ちょ、伯言っ」

わたわたしながら幼馴染の少年の口を封じようとする七季は、その手を伸ばすが、細い手首をしっかり押さえられてしまい、もののついでとばかりに、ぬいぐるみよろしく抱きこまれる。

「だってアレでしょう？　七季の登校拒否の理由は」

「うぐ」

きゅう。

夏といえども、クーラーのきいている屋内で、冷えた体には人のぬくもりが心地よく。少年は、甘い香りのするやわらかな少女の体を嬉々として堪能する。

「え」

「わあ」

「……マジでか」

それぞれ、霜夏、真言、一護と、声を上げた順に、少年少女たちは、栗毛の美少年へジト目を向けるが、肝心の伯言は何のその。

アーチャーから突き刺さる、矢のごとき視線もどこ吹く風とばかり、夏仕様の、薄いまっくろ巫女服に包まれた七季を抱きしめてご満悦だ。

「マスター」

やけに低い声を投げてくる男に、七季は、びくりと小柄な体を震わせて、おずおずと黒く濡れた瞳をアーチャーへと向ける。

そのさまは、飼い主に叱られた子犬のよう。

まるっきり主従の立場が逆転している。

「だ、だって。別に問題とか起こしたわけじゃないし、成績も悪くないのに、やたら私に目をつけてきたんだぞっ。

理由もなくイビってくる相手と毎日、顔を合わせてたら、ストレスでおかしくなったんだよ！」

――あのときの精神状態は、最悪だった。

具体的に言うと、腹痛や頭痛が起こったのだ。それも毎朝。

典型的な登校拒否の症状である。

七季は、軟弱な自分の小学生時代を知って、アーチャーが怒っているのかと、思わず近くの幼なじみにしがみつくが、周りの人間は、男の不機嫌の理由を察していた。

――や。それたんなるヤキモチだから。

ぱたぱたと手を振るツッコミを、胸のうちで入れつつ、一同は話の続きを促す。

「まあ、その担任というのが、四十代のオールド・ミスでしてね。

陰険というか、ヒステリーというか……とにかく性格が悪いったら。根性の悪さが、そのまま顔に出てましたしね。七季だけじゃなくて、生徒にのきなみ嫌われてたんですけど」

ぴっちぴちに若くて、頭も良くて、おまけに男子に人気のある七季に、いわれのない嫉妬でもしたんでしょう。

つけ加えるなら、やたら絡まれる幼なじみを、当然のごとく伯言がかばったりするものだから、それで余計にヒステリーを起こしたのかもしれない。

当時の彼は、もうそのころから見目うるわしく、小学生にしては身長も伸びていて、女子には絶大な人気を誇っていたのだから。

「それはそうと、僕の知らない間に、七季と先輩が会ってたんですか？　いったいどこで？」

小学生までは、それこそ、七季の「おはようからおやすみまで暮らしを見つめる……」を地で行っていた伯言である。

まあ、幼くして両親を失くした少年を、ご近所の七地家が面倒見ていたようなものなので、当然といえば当然だが。

「僕が知らないとしたら、インフルエンザにかかったとかで、しばらく七季に会えなかったときくらいのものですけど」

「そろそろストーカーで訴えても良いような気がしてきた」

栗毛の少年に、もう一人の幼なじみ・霜夏が、無表情でツッコミを入れた。

「うん、たぶんそれ。そのときナナちゃん、悪魔にとりつかれて、ちょっとえらいことになってたんだ」

『はぁ？！』

その場の人間の、大半がすっとんきょうな声を上げるのを、ひとり張本人の七季は「あちゃー」とばかり、片手で顔を押さえて、ふたたびうなだれていた。

「ううう……だから黒歴史だって……」

ナイトメア。
それは、人に寄生し、その人間に悪夢を見せることで、その人間の生気を奪い徐々に殺していく夢魔の名前だ。
「正確には、種族名なんだけどね。インキュバスやサキュバスと同じ流れをくむ魔族なの。
ナナちゃんが取りつかれた……って言って良いのかは、ちょっと微妙だけど、とにかく、引っかかったのは、それだった」
腕組みして、昔語りをする真言の表情は、どことなく微妙だ。
「詳細はさておき、ともかく、眠ったまま、起きなくなった娘さんを心配して、七地さんちの親御さんが、うちの神社に頼んだのね。医者に診せても、『ただ寝てるだけ』としか、言われなかったから」
ただねえ。
「そのころから、神門（みかど）神社で、いちばん力があるのは、私だったわけ。
けど、霊力があっても、子供だった私には、経験が圧倒的に足りなかった。ただ悪霊を斬れば済む話じゃなかったから。
ナイトメアは精神寄生体で、人の心の奥深くにもぐりこむ悪魔。それを除霊するには、霊波を流し込んで、その取りつかれた被害者の精神に、直接ダイブするのが、いちばん効率的。
でも、いくら霊力が高いって言っても、しょせんは子供。他人の心を傷つけずに、悪魔を退治できるかって話になると……とうてい無理だったの」
難しい顔で、記憶を振り返る真言の表情は、晴れない。
「んでまあ……私じゃ無理だから、専門家に頼むことにしたのね」
異世界の名医、ドクター・メフィストに。
『結論から言うと、この患者は「寄生」されているわけではない』

確かに悪魔が、体の中に入ってはいるが。
『むしろこれは、悪魔が、患者の精神を包み込み隔離しているだけの状態だ。精気は吸われていないし、悪魔は、彼女を「守っている」のだと主張している』
白いケープを身にまとう、絶世の美貌の持ち主は、眉ひとつ動かすことなく言ってのけた。
それは、珍しくもない自閉だろう。
嫌で嫌で仕方がない現実から、自分の心を守るための逃避。
それほど少女は、まいにち顔を合わせる教師が、苦痛でならなかったのだ。
それでも頑張って、頑張って、どうにかこうにか、二学期までは学校に通った。
けれど二月――中学受験を控えたころ、とうとうプツリと神経の糸が、少女の中で切れてしまったのだ。
それが、我慢の限界だった。
襲い来る偏頭痛に、通常の倍ほども痛み止めを服用して、けだるい体と重い気分に、無理やり蓋をしていたものが、弾けてしまった。
たとえば、家族も幼なじみも振り捨てて、ひたすらに安穏とした夢の中にこもってしまうほど。その手首には自傷の痕。その頭部にも、自分で引き抜いたと思しき、毛髪の空白地帯が隠されていた。
世間では「中二病」と呼ばれるだろうそれは、しかし悪魔を抱き込むという、突拍子もない手段で実現された。
『無理やり「はがす」ことは難しくない。ただし、悪魔は死ぬがね』
メフィストと呼ばれる男は、魔界都市「新宿」きっての凄腕の医者だ。
これしきの患者など、ものの数ではないのだろうが、いまだ眠り続け、夢にたゆたう幼い少女が、その魅力で悪魔を虜（とりこ）としたことに、少しだけ目を細めていた。
『どうするかね？』
メフィストが問いかけたのは、いまだ眠り続ける、夢の中の少女・

七季にだ。
彼女は、悪魔を殺すことを拒んだ。
自分を守るために、手を差し伸べた相手を、助けてくれたものを、彼女は助けたかったのだ。
『良かろう』

「ううう……恥ずかしい……ええ精神的ヒッキーでしたとも。学校行きたくない、あの先生の顔、見たくないってそればっかりだったさ！」
七季にとっては、このうえない黒歴史である。しかも他人に知られた時点で、かるく羞恥で溺死しそうだ。
伯言の懐に、ぐりぐり顔を埋めて、恥ずかしさに身悶える少女を、幼なじみはちょっと幸せそうに抱きしめていた。その秀麗な顔がにやけている伯言である。
「んで、ナナちゃんは、悪魔の紡ぐ夢から出てきた。
ただドクターは、このまま放っておくと、またぞろ似たようなことが起こるだろうからって、ナナちゃんの『目』を――霊感を閉じたのね」
「あ。どうりで小六のころから、悪魔さんたちが見えなくなったと」
ふと顔を上げるや、ぽん、と拳と手のひらを打ち合わせる黒髪の少女に、ほぼ全員の総ツッコミが入った。
『気づけよ！』
「大人になったら妖怪とか見えなくなるって本で読んだから、てっきり潮時だったのかと」
いまだ栗毛の少年にひっついたまま、のんきにのたまう七季のマイペースっぷりは、昔から変わらないらしい。
小学生で中二病とは、精神年齢がやや高めだったようだが。
「まあ、いまはそこそこ大きくなったし、落ち着いたってことで、

霊格上がったついでに、霊感の封印も解いたんだけど。
考えてみりゃ、ナナちゃん異世界に連れてった間も、ずっと眠りっぱだったわ。わりわり、覚えてるわけないかー」
あはははは。
いっぽう、朗らかに笑う栗毛の美少女に、ひょこんと首をかしげた七季のポニーテールが、しっぽみたいに揺れた。
「あ、でも、すっごく美人のお医者さんのことなら覚えてますよ。何度か診察されましたから」
夢の中で。
――あれ？　ナナちゃん「神使（しんし）」でもない、まったくの一般人時代に、ドクターの顔見て平気だったわけ？
常人であれば、その神々しいまでの美貌に倒れ伏すものも当たり前。彼を見た後では、どんな美女でも色褪せて見えるという、空前絶後の美しさを体現する男に、とんだ耐性を発揮している少女の猛者っぷりに、ちょっぴし真言は額に汗を浮かべていた。

#１４８　つながれた手ー夢の通い路ー（後書き）

あとがき

＞というわけで、「魔界医師メフィスト」もクロスオーバー。異世界ですけど。

　オリ主、ドクター・メフィスト見て以来、美形に耐性ついているので、どんな美人でもわりと平常心です。

　妙なところで精神が鍛えられてます。

※ナイトメア：ＧＳ美神に登場した、馬型の夢魔。人に寄生し、その人間に悪夢を見せることで、その人間の生気を奪い徐々に殺していく。

◆オリ主の過去の関係者

◆ドクター・メフィスト（出典：魔界医師メフィスト）
白いケープを常に身にまとう、絶世の美貌の男で、通称「魔界医師」。ドクトル・ファウストの弟子。
死者をも蘇らせると言われる、高度な医療技術の持ち主。
医学だけでなく自然科学、歴史、宗教、魔術や呪術などあらゆる知識に精通しているが、これらはあくまで医療手段のひとつとしての扱い。戦闘力では『魔界都市〈新宿〉』最強のうちの一人。
ただし、断固たるプロフェッショナリズムの持ち主で、自分の身や知識、所有物や病院、退院した「一般人」、果ては魔界都市〈新宿〉そのものにいかなる害があろうとも、自身が認めた患者とその治療を優先する主義を持つ。
〈新宿〉区内では常に中立の立場。
男色家。

※メフィスト病院
：魔界都市〈新宿〉の旧新宿区役所跡に建設されたドクター・メフィストを院長とする個人病院。
内科・外科などの医療分野の他に心霊療法のようなオカルト分野や魔術も扱っている。

※『魔界都市〈新宿〉』
：“魔震”（デビル・クエイク）と呼ばれる謎の大地震によって瞬時に壊滅し、これに伴い発生した亀裂によって外界と隔絶され、怪異と暴力の跋扈する犯罪都市となった東京都新宿区の別名。
実在の新宿と区別する為に『〈　〉（カッコ）付きの“新宿”』

と呼称される。菊地秀行の作品群に登場する架空の都市名。

（２０１１／０３／１５）

#１４９　つながれた手ーウナギとドジョウー

「ってことは、それが本当の『出会い』だったわけかぁ……」

ほとんど覚えてないけど。

しみじみ呟きながら、七季は少年の懐に抱かれたまま、小鉢に盛られた、豆腐スイーツをスプーンですくう。

レアチーズケーキ風のそれは、豆腐半丁と白味噌、レモン汁とメープルシロップで作る、お手軽レシピだ。

トッピングには、いただきもののスターフルーツをスライスしてあしらってあるのが、何ともさわやか。

滑らかな舌触りと、コクのある風味にレモンが酸味を添える、神門（みかど）お手製の本日のおやつである。

「マスターが覚えているのは、どんな出会いだったのだね？」

ほうじ茶のおかわりを注ぎながら、褐色の肌の偉丈夫が投げかけた問いに、ぼんやりと過去を回想する七季。

彼女の、まっくろなまなざしが、虚空をふよふよさまよったまま、こてり、と黒髪の頭が傾いて、ポニーテールをひょこんと揺らした。

「……ドジョウとウナギの違いで豆腐？」

何だそりゃ。

やたらすっとんきょうな答えが返ってきて、思わず鋼色の目を白黒させるアーチャー。

鋭い目をぱちぱち瞬くさまが、何となく愛嬌を感じられる。

その光景を見守っていた真言たちは、「ああ、遊んでくれると思って持ってきたボールを隠された犬みたいだな」と、やけに具体的な（そしてド失礼な）感想を抱いた。

「……できれば、最初から話してくれないか？」

そして忠犬、もとい忠実かつ律儀な従者は、とんちんかんなマス

ターのセリフにもめげず、話の続きを促していた。
やっぱり気になるらしい。
「うーんと」

七季は、この土地の生まれで、いまでこそ、また戻ってきてはいるが、もともと七地家は引越しの多い家だった。
それというのも、稼ぎ手である父親が、公務員だったからだ。
ことに、国家公務員というのは、たらい回しのように、あちこちに異動を余儀なくされる。その地での癒着を防ぐためだ。
それは、結婚後から端を発し、長女である七季が生まれる前、生まれてから、そして幼稚園に上がる前、と宿替えをしていることからも察することができるだろう。
「いちばん落ち着いてたのは、伯言のご近所になってから、小学校を卒業するまでかなぁ？
幼稚園のころは、伯言とこのご近所に住んでて、小学校に上がるころには、また引越したんだけど、それは新しくできた、公務員宿舎に移ったからで。そこも伯言ちから近かったし」
住まいがころころ変わるせいで、七季は「場所」に執着することはなかった。
ひとところに留まることはなく、いずれはそこから立ち去ることがわかっている。彼女の心は、気がつけば旅人のように自由で、とらえどころのない柔軟性を育んでいた。それは新たな場所に順応するためには必要なことだったからだろう。
「小学校までは、ここに住んでた。ごたごたしたけど、まあ中学受験も合格したしね。付属中に上がるか――ってところで、また引越し。
ただ、今度は県外だったんだ」
それでいちばんわりを食ったのは、ずっとご近所で、七地家で面

倒を見てもらっていた伯言だろう。
どっちかというと、彼は七地家の長女にこそ執着していたのだが。
「ええ、ええ。……おかげで、七季はよそに行ってしまって……僕だけが残されて……中学二年までは――あの夏までは、本当に暗黒時代でした……」
「うお！」
陰鬱とした、おどろおどろしいオーラを湧き上がらせる栗毛の美少年に、一護が全力でヒいていた。
心なしか、虚（ホロウ）より、邪悪なプレッシャーがあるような。
「おかしいな。私、まいにち伯言と電話してた記憶があるよ？」
こきり、と小鳥さながら首をかしげた少女は、おかげでちっとも離れている気がしなかったことを思い出していた。
「週に一回は手紙も書いてたし。それに伯言、誕生日プレゼントにって、携帯電話もくれたよな。プリペイド式の」
心配性の幼なじみは「何かあったらすぐにかけてくださいね！」と言って、涙ながらにそれを七季に渡してきた記憶は、いまだにしっかり脳裏に焼きついている。
「七季からはかけてくれませんでしたけどね！」
「私がかける前に、伯言がかけてくるんだもん。しょーがないじゃないか」
食べ終わったスイーツの器をテーブルに置いた七季は、ちょっと拗ねた口調で噛みついてみせる幼なじみの少年を、白くやわらかな手で撫でて、よしよしとなだめた。
「だからそろそろ訴えた方が……」
端正な顔なのに、いまは無表情でツッコミを入れている霜夏の目もコワい。幾分か据わっているような気がしないでもない。
――おっまえ、こちとら全寮制の学校で、夏休みと冬休みと春休みしか、ナナと会えなかったんだぞ、コンチクショー！
男の嫉妬は女の五万倍という話だが、本当だろうか。
何やら幼なじみたちの雰囲気がピリピリしてきたので、アーチャ

ーがそこに水を差して修正した。
「それで、彼女とはどこで出会ったんだ？」
ついでにとばかり、ひょいと少女の身柄を伯言から取り上げて、ちゃっかり自分の傍らに保護するあたりが、筋金入りの従者根性である。
『あ』
獲物を取り上げられた少年ふたりが異口同音に振り向き、いっぽうでオレンジ頭の死神代行も、ちょっぴりジト目でアーチャーを見やった。
――このひとも、たいがい過保護で甘いよな。てか、下ろしたんだから、腰から手を離しても良いんじゃねえか？
「ん。こっちの中学。けっきょく、一年半でこっちに戻ってきたんだよ。
ちょうど、私が中学二年の夏休み……の、登校日だったかな。物凄い勢いで目立ってたから、先輩」
「目立ってた？　何でまた」
鋭い双眸を、きょとんと不思議そうに瞬かせる一護は、スライスされた星型のスターフルーツをしゃくりとかじる。梨に似た甘酸っぱさが口の中に広がるのを感じながら、彼は首をひねった。
まあ真言は、ちょっと見ないくらいの美少女ではあるけれど。けげんな面持ちで問う、オレンジ頭の少年に、あっさり七季はとんでもないことを言ってのけた。
「校庭で、でっかいドジョウ相手に大立ち回りやってたから」
『……は？』
「あー、あれかー。そういえば、あれがナナちゃんだったのかー」
覚えてる覚えてる。

ぽかーん、と口を開けてあっけに取られる面々をよそに、当事者の一人であった栗毛の美少女が、からから笑う。

「身の丈が、校舎くらいある、でっかいドジョウでしたよねぇ。あれ、あとで神門（みかど）さんに聞いたら、このへんの土地神なんですって？」

それを真言は「でっかい蒲焼き食べたい！」という理由で、狩りにかかったのだ。

「てっきりウナギだとばっかり思ってたんだけど、ナナちゃんが『それ、ウナギじゃなくてドジョウですよー。食べるなら豆腐を用意しないと』ってツッコんでくれたんだよね」

ちなみに七季の言った、その調理法とは、「ドジョウ豆腐」という――「地獄鍋」ともいう――ものである。

まず、鍋に水を入れ、生きたままのどじょうを一緒に煮立たせる。そこに豆腐を入れると、熱さに耐えきれないどじょうが冷たいままの豆腐の中に逃げ入り、そのまま豆腐と共に煮え上がってできる、という仕組み。

もっとも、素人がやるには難しいようだが。

「ですねぇ。そんで、でっかいドジョウ相手に、日本刀振り回してた、巨乳の美人さんが、制服姿の神門（みかど）さんに向かって『ミカちゃん、豆腐持って来い！』って言ったんでした」

懐かしいなぁ。

そんなほのぼの会話に、その神門（みかど）青年も、袴姿で合いの手を入れる。

「ついでに如月（後輩）が『でっかい鍋もいりますよー？』って言ったのもな」

まさか、あの真言にツッコミを入れて、理由はどうあれ行動を止めた挙句、好いように転がす人間がいるとは、神門（みかど）も思っていなかったのだ。

「けっきょく、あのドジョウがもぐりこめるほどの豆腐は作れなくてなー」

「作ろうとしたんですか？」

校舎サイズのドジョウが入る豆腐を!?
幼なじみの少女をめぐって、ばちばち火花を散らしていた霜夏が、思わず振り返ってツッコむ。しっかり話は聞いていたらしい。
「まあ、その名残で、豆腐作りにハマったミカちゃんが、まいにち豆腐を作って神社で売っているというわけだ」
どうだ美味いだろ!
「それで、ここの神社の名物になったんですかー」
デザート入りの小鉢を片手に、胸を張る真言に、ほわほわした口調で頷く七季は、「神門(みかど)さーん。おかわりもらって良いですかー?」と端正な面差しの神主に声をかけている。
「ほれ。食え。真言もいるか?」
「もらうー」
「ありがとうございますー。これも神門(みかど)さんの手作りなんですねぇ」
うまうまと、レアチーズケーキ風の豆腐スイーツに舌鼓を打つ黒髪の少女は、見るからに幸せそうだ。
くっきり黒い眉尻は下がって、ふっくらした頬が、ほにゃりと緩んで表情が蕩けている。
「って、このおやつの材料から手作りだったんですか!?」
びっくりするのは伯言も同じだ。自分の手にした小鉢の中身を見つめなおす美少年に、真言が、我がことのように、えっへんと威張ってみせた。
「この神社だけの限定品だしね。美味しいって評判だから、朝は主婦の皆様方がこぞって買いに来る絶品豆腐だぞ!」
朝は主婦の戦場である。
「神社が戦場にッ!?」
一護もツッコミを入れる横で、心なしか、そわそわした弓兵が、「豆腐作りを手伝いたいのだが」と守銭奴神主に交渉していたとか、いないとか。

#１４９　つながれた手ー ウナギとドジョウ ー（後書き）

あとがき

＞というわけで、オリ主が覚えている「出会い」も十分トンデモ事件でしたという（笑）。

今回はちびっこじゃありませんでしたな。

あと弓兵は、このあと豆腐作りに参加するも、すっかり神門（みかど）さんのお株を奪ってしまったため、（神門（みかど）さんが）泣きながら蹴りだされるはめになります（をい）。

ちなみに、神門（みかど）神社では、もちろん大豆から作っております。

#150　つながれた手―龍に連なるもの―

約束をしよう。
きっと、ずっと、傍にいる。
この声が届くように。
この歌が届くように。
君の名を呼ぶために。
私の名を印すために。

それは契約という名の、約束。

これはまだ、錬鉄の英霊が、その「座」に縛られていた頃の話。
「ところで君は『神使』と言ったが、具体的には誰に仕え、どういう任を負っているのかね？」
まっかな天地に挟まれた世界。
ちょうど英霊エミヤは、おのが「座」に迷い込んできた少女の隣――ここでは異物であるはずの、七季が取り出したわら束の上という何ともアレな場所だが――に座り、いたってしぜんな疑問をぶつけていた。
彼が黒衣の巫女に問いかけたのは、当然といえるだろう。
相手はただの少女にしか見えないとはいえ、世界の外――あらゆる場所から隔絶されているはずの「座」に侵入した形の存在なのだから。
その正体を知りたいと思うのは、英霊といえども、人と変わりない。

「うんとですね、お仕えしてるのは、学校の先輩です」
「……は？」
ジッパーでやって来たという、意味不明――もとい、不思議な答えを返してくれた少女は、またもやエミヤの意表を衝いた言葉を繰り出してきた。
「そうすると、何かな。学校の先輩が、神様ということかね？」
体調を崩すはずもない、英霊の身でありながら、頭痛を覚え始めたような気がする男に、七季はのんびりとした口調でお茶をすすった。
これまた彼女が袖口から取り出した、ペットボトル飲料と、湯のみだったりする。しかも、きっちりエミヤの分まで用意されていた。
「んー、ちょっと違うんです。先輩が、龍神のお嫁さん認定されているので、その縁からですね」
「龍神と結婚、かね」
え、ドラゴンの嫁？
思わず硬直する錬鉄の英霊。
なお、龍といえば、エミヤにとってはドラゴンを連想しがちだが、巫女である七季にとっては、水神の色が強い存在である。
なべて、アジア圏では、龍と水は、縁の深いものであるからだ。
――あーうん。ふつうのひとはびっくりするかなぁ。
七季からすれば、異類婚姻譚は、さして珍しいとも思えないのだが（昔話で馴染んでいるため）、常識からすれば十分に驚くことなのだろう、と少女は頷く。
話し相手のエミヤも、生前から魔術師だったのだし、いまでは英霊という立派な人外の仲間入りなのだが。
「エミヤさんは、英霊って言いましたよね？
きっと、私が知っているのや、思っているのとは違う感じの、でも高次存在なのは、何となくわかります」
にこ、と。
少女はあどけない顔で――それでもどこか、確固たるよりどころ

があると感じさせる、芯の強さを垣間見せて笑った。
「あなたが知るのとは、違うかもしれません。
見る人によって、事実は色々な顔になるから。
でも私が、私たちが神様と呼んでいる存在の、伴侶なのが、先輩なんです」
それは認識の問題なのだと、七季は言った。

「私にとって神様っていうのは、『祟る』存在なんですよ」
祟り――それは、神仏や霊魂などの超自然的存在が、人間に災いを与えること、また、その時に働く力そのものをいう。
七季は、それを神と呼ぶのだと。
「たたる」
エミヤは思わず顔をしかめた。
タタリ。
それは災厄の名前だ。
彼にとっては、とある吸血鬼が起こした現象でもある。
一見して、人を守護する神のやることではないように思えるが、
「神使」たる少女は迷わず肯定した。
「です。神様は恐いものです」
人が抗えないほどの災厄。
それは人ならぬものの顕現――立ちあり、すなわり「たたり」と。
「だから人は、それを祀り上げて鎮める――『お祭り』は本来『祀る』こと、すなわち祭祀ですから」
その昔、政治は「政」と呼ばれた。
これは一説には、そういった祟る神を祀る、祭祀こそが、統治者の最たる役目であったことに由来するという。
すなわち、流行り病、飢饉、天災、その他の災厄そのものが神の顕現であり、それを畏れ、鎮めて封印し、祀り上げることこそが統

治者の負うべき義務であると。
のち、それが転じて、神社祭祀の始まりとなった――すなわち、祭祀を専門とする、神職の誕生である。
歴史的な考察はさておき。
「祀り上げた存在を、神と呼ぶ。そして、荒ぶることのないように、祟ることのないように、鎮め、慰める。
それが、宮司をはじめとする神職、そして巫女の本来の役目です」
ようするに神道のそれは、畏れる対象を鎮め、平安を保つことこそが意義といっていい。
波風を立てずに、調和を目指す。それは日本人の習性にも根付いている。ことなかれ主義というのは、決して理由のない性質ではない。
はるかいにしえの時代、異変すなわち天災であり、常ならぬことは、そのまま命の危機に直結した。
「ことなかれ」とは――「ことなくあれ」。事件などがありませんように。
目立ったことがないのは、平和の印、というわけだ。
もっとも、そうは問屋が卸さない。人間が二人以上そろった時点で、争いが生まれるのは、もはや常識だろう。
だからこそ、平和が貴重なものだともいえるけれど。
話を元に戻そう。
「言い換えれば、私たちは、お世話役ですね。少なくとも、私はそう認識しています」
それは聞くだけなら簡単なことのようにも思える。
世話役。
しかし世話をするべき相手は、神とも呼ばれる高次存在。
荒ぶれば、人などたやすく命を失うような力の持ち主。
「ただ、神様をお祀りする社を管理・維持する役目は必要ですし、それには細々とした雑事もこなさなければなりません。
供物の手配、祭具の手入れ、祭祀の進行、土地のものとのやり取

り……仕事は多岐に渡ります。
そのうちに役目はシステム化され、神様に侍(はべ)る能力よりも、物質的な折衝能力や、権威にまつわる政治力が優先されるようになったんでしょうね」
この国において、宗教と政治は、その成り立ちから長いあいだ不可分の存在だった。二度の大戦で、それが寸断されるまで、神官や、仏を戴く僧侶たちが政治に介入した事例は、歴史書にも残っているほど。
宗教は、ときに人身をまとめるために都合のいい道具としてあつかわれることも多いからだ。
「私は、いわば神様に侍(はべ)る側の人間です」
それは采女(うねめ)であり、同時に供物(くもつ)であることを意味する。
七季は黒衣に覆われたその胸元を、いとしむように、小さな手で撫でた。
そこには、布地に隠されてこそいるものの、彼女の「主」である存在につけられた、「神使(しんし)」たるべき「証(あかし)」がある。
龍神の眷属である印(しるし)。
霊視でしか見ることのできない、青い燐光を帯びる、一枚の鱗が、ひそやかに眠っていた。
「役目は、世話役――っぽいのは、別の人がいるので、どちらかというと遊び相手になるんでしょうか。気晴らしに付き合ったりして、心を慰めるのが、たぶん本来のお仕事です」
「いまは違う、と？」
鷹のごとく鋭いエミヤの目に、ふわりとほころぶ七季の笑みが映り込む。
「友達ですからね」
「主従なのに？」

きょとん、と藤色の混じった灰色の瞳が、少女を見つめていた。
英霊たる男は、短くもないが長くもない、彼女とのやりとりを反芻する。
記憶は磨耗しても、記憶力までが磨耗したわけではないらしい。
生前は魔術の師匠に「覚えが悪い」と、折々しばき倒されたものだが、さいぜんの会話くらいは、苦もなく思い出すことができた。
――七季はたしかに「仕えている」といったはずだ。
「お仕えしてるのは、学校の先輩」だと。
「もともと、友達だったんです」
いまだって友達のつもりですけど。
耳に快いソプラノは、春風さながら穏やかで、やわらかい声音をしている。
砂塵を含んだ風に、ふわり、と黒髪が揺れて、エミヤの視界を舞った。そこだけが、夜の風にも思える。
「好きですよ。ちょっとぶっ飛んだところもあるけど、優しいし、男前な性格だし、一緒にいて楽しいです。
――だから大事にしたいんです」
かちん、と男と少女の目がぶつかった。
深い、深い、黒。
夜のような、闇のような。
寿命の半分も生きたことのないだろう、幼い子供のくせに、ひどく底知れない瞳。
鋼の意志を持つエミヤの、鷹の瞳を受け止めて怯まない幼さは、どこかの誰かを連想させた。
「寂しいのは嫌じゃないですか」
ぽん、と。
強靭な弦を弾くみたいな、単純で澄み切ったソプラノが、彼の耳を打った。
黒い瞳の少女が紡ぐ言葉は、まるでゆるやかな歌のように、灼熱の世界をとうとうと流れていく。

「遠くない未来に、先輩は周りから取り残されることになる。
神様は欲張りだから、大好きな人と、ずっとずっと一緒にいたがって、自分と同じような力と寿命を与えて引き止める。
でもそれだと、先輩が寂しいでしょう？」
高次存在と添い遂げる。それは時の流れに取り残されること。
異類婚姻譚――人外のものと、人間が交わる話。昔話にもよくある例だ。
違う種族と結婚したものは、やがてそちら側になってしまう。
「だから、私は傍にいようと決めたんです」
寂しくないように。
笑い合えるように。
忘れないように。
白い手が、そっと黒衣に覆われた胸元――その心臓の上に押し当てられた。
それはまるで祈るように。
「大好きな人と、楽しく暮らす未来が欲しい。ただ、それだけなんですよ」
彼女が失うことを知ったから。
いつか流す涙をぬぐうための、立場が欲しいと考えた。
握った手で慰め力づけるだけの、権利が欲しいと志した。
ただ、それだけ。
選択は、彼女のものだった。
「先輩は、私を『選んで』くれたから」
たとえそれが、七季じしんを「守る」ためだったとしても。
神を孕むことができる可能性を秘めた七季を、他の神々の手から庇護するために、おのが「神使」に迎えた真言。
その優しさに、傷つくこともあるに違いない彼女を、失いたくないと思った。
人の心のままでいられるよう、支えたいと思った。
――大好きだから。

「だからごめんなさい、エミヤさん。
いくらあなたが、人ならぬものと交わす契約の恐ろしさを教えてくれても。あなたの道行きを聞かせてくれても――先輩との契約は切りません」
透き通った夜色の瞳で、七季はその手をエミヤの手に重ねた。
男の手にあったのは、「破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）」。
裏切りの魔女・メディアじしんの象徴が具現化した、あらゆる魔術による生成物を初期化する短剣である対魔術宝具だ。
それが契約である以上、神との間に結ばれた少女との絆を、断ち切ることのできる可能性は、決して低くないだろう。
「……そうか」
自分がどれほど人を殺し続け、殺して殺して殺し尽くしてきたか――その地獄すらも生温く感じるような、煉獄の檻に捕われたゆえんを話しても、考えを曲げない七季に、錬鉄の英雄は、寂しげな笑みを浮かべた。
ああ、やはり自分には誰も救えないのかと。
けれども、嫌われることを承知で話した後も、少女のエミヤを見つめる瞳に曇りはなかった。嫌悪も、恐れも、蔑みすらも。
「心配してくれて、ありがとう。通りすがりの私のことを、苦しかった思い出を打ち明けてまで、助けてくれようとしたこと、忘れません」
まっすぐに、心からの微笑みを向けて見上げてくる七季の言葉は、男を絶句させた。
「だから私も、あなたを助けます。きっと」

「そういうわけで、マスターは、いかに『先輩』が好きかということを、めいっぱい惚気てくれてね」
「にゃあああ！」

七季との出会いを問われたアーチャーは、言いつつ、口を塞ごうとしてくる黒髪の少女の手をつかまえて、自分の膝にその体をひょいと乗っけつつ、いいように拘束した。

「お、おっ、覚えて……！」

「忘れられないさ」

珍しく、まっかになって恨みがましげに見上げてくる七季の、あどけない面輪に、にやりと笑い返してやりながら、白い髪の男は「親切を無にされたのだからな」と思ってもいないことをうそぶいた。

――ああ、忘れない。

あの赤い世界で――ひとりきりの座で、差し伸べられた手を、重ねた手を、忘れられはしない。

そして真言の手を介したとはいえ、じっさいに彼を助けたときの、「エミヤ」の救出をしんそこから喜ぶ、七季の笑顔も。

――その笑顔を曇らせたくないと――支えたいのだと思ったのだから、仕方ない。

「愛されていて、羨ましい限りだな」

あくまでからかう口調を崩さずに、げんざい「アーチャー」と呼ばれる男が、真言へ声をかけると。

「あんたもね」

と照れまくっているらしい栗毛の少女に切り返されて、ちょっとだけ錬鉄の英雄が言葉に詰まったのは、また別の話である。

#１５０　つながれた手－龍に連なるもの－（後書き）

あとがき

＞ネタないかー、と思って、ストックの中から発掘した結果、書きかけだった、オリ主と弓兵の話が出てきたので、ちょいと手を入れて上げました。

弓兵との出会いは、最初の方で書いてますからな。

はしょった部分の話です。先輩がお迎えに来るまで、何を話していたのかという。

途中まで、オリ主がチートな先輩をいかに好きで、どうして「神使（しんし）」になったのかという話だったのに、気がついたら弓兵が惚気てた（え）。

#151　つながれた手ー両手に花？ー

「マスターの小さなころか。そういえば、見たことはないな」
ちらりと灰藤色の鋭い瞳で流し見る、アーチャーの声には、少しだけ残念そうな響き。
七地家にもアルバムはあるのだろうが、男の主である七季がそれを持ち出してきたことはない。
まあ、いつぞやの斬魄刀騒ぎで、彼女の子供のころそっくりとおぼしき姿なら、目撃したことがあるのだが。
「あ、僕、写真持ってますよ」
「何でやねーん！」
すぱん、とどこかのお笑い芸人のようなツッコミを入れた霜夏をよそに、栗毛の少年は、いそいそと生徒手帳を取りだした。
そこには、つややかな天使のわっかを戴く、まっくろな髪の女の子と、彼女の手を握ってはにかむ、それこそ天使のように可愛らしい、栗毛の男の子が並んでいる写真が挟まっていた。
「こちらの女の子がマスターか。なるほど、面影そのままだな」
ぱっちりと長い睫にふちどられた、大きな黒瑪瑙の瞳。肩先まで届くくらいのセミロングの黒髪に、ふっくらとやわらかそうな白い頬と。
初々しい果実に似た色合いの唇は、チョコレート味とおぼしきアイスを、ぱっくりくわえている。
そんな幼い七季の片手を握っている男の子が、おそらく伯言だろう。
向日葵を背に、にっこり笑っている姿は、本当に幸せそうで、あどけない。
いまではすっかり、先の尖ったしっぽが似合うような腹黒っぷり

になってしまった彼に、はたしてどんな経緯があったのだろうか。
「他にもありますよ」
そう言って、七季の幼なじみである栗毛の少年は、パスケースや携帯電話からも、筒井筒の少女のポートレイトを取り出して見せた。
「だから、そろそろストーカーで訴えても（以下略）」

「……どの写真のマスターも、何かしら食べているな」
アイスをくわえる七季。トウモロコシをかじる七季。リンゴをかじる七季。
中には、伯言や霜夏、幼なじみに「あーん」と、お菓子や果物を食べさせられているスナップもあった。
「てゆーか、何でこんなに常備してんのよ」
ちみっこいころのナナちゃんを。
褐色の肌の偉丈夫が、ふと気づいたことを口にすれば、いっぽうで、我に返った真言が、しごく当然のツッコミを入れていた。
「可愛いじゃないですか」
確かに少年の言う通り、ものを食べている七季は、かなりの確率で、ご機嫌なエンジェルスマイルを浮かべている。
そうでなくとも、一生懸命食べている姿は、何だか小動物チックだ。
「あと、七季が何かしら食べているのは、写真嫌いだったので、食べているときしか、じっとしていなかったからです」
少女の幼なじみである伯言は、訳知り顔でさらっと七季のことを暴露する。いまでも彼女は、あまり写真に映ろうとしないので、何気に七季のものは価値が高いのだ。
――それもどうよ。
リドルや一護が、無言で内なるツッコミを入れているころ。
当人のまっくろ巫女さんはというと、二杯目の豆腐チーズケーキ

を食べ終わったので、白い指先で、ひょいとおからクッキーをつまんでいる。どうも物足りなかったらしい。
ぽしぽしと七季が食べるそれに、一つ年上の少女も手を伸ばしていた。
「まあでも確かに可愛いわ、これは」
あっさり頷く真言に、しかし反論の声を上げたのは、誉められた七季だったりする。
「伯言の方が可愛いってば。あのころの伯言は、気の優しい、ちょっと引っ込み思案な男の子だったんですよ」
女の子みたいだったから、勘違いされて、何度も誘拐されかけたのを、引っ張って助けたのも、いまでは良い思い出です。
さらっと事件を舌に乗せる少女は、ぽりぽりとクッキーをリスのごとくかじる。
「ちょっと待て！」
それってヤバいだろ。
オレンジ頭の少年が、鋭い目つきでツッコミを入れるが、さらわれかけた当人の伯言が、あははと笑いながら言ってのける。
「あのころの七季は活発でしたから。変態の股間を蹴り飛ばして、そのあいだに手を繋いで逃げたことが何度もありましたよ」
「……敵に容赦ないのは、昔からなのね、ナナちゃん」
ちょっぴり声を落とした真言は、心なしか、こわごわと黒髪の後輩を見つめて、ぶるりと震えた。
変態さん、南無。
「あー……うん、まあ。相手が変態ならしゃーねーかな」
マジで容赦ねえな。
一護もチラチラ黒髪の少女をうかがいつつ、「うん、あいつを怒らせるのは止めておこう」と思ったとか、思わないとか。

「でまあ、そんなわけで、ちびっこいナナキが見てみたくなってね」
薬を盛ってみました。
黒猫ばーじょんリドルの言葉に、「見りゃわかるわ！」と異口同音のツッコミが、あちこちから上がる。
それというのも。
ちょん、っとただいま神門（みかど）家の座布団に座っているのは、黒髪を肩口でかるくカールさせた、五歳くらいの女の子と、ふわふわ栗毛を背中まで伸ばしている、琥珀の瞳の女の子だったからだ。
お察しかと思うが、それぞれリドル謹製「若返り薬・改」を盛られた、七季と真言である。
どのへんが「改」かと言うと。
「にゃんこかわいーv
しゃべるんだ。すごいねー」
リドルを捕まえて、ぬいぐるみみたいにもみくちゃに抱きしめる真言と。
「あの……ここ、どこですか？」
じっとアーチャーを見上げる、ちびっこ七季のまっくろな目はが、完全に知らない人へ向けるまなざしだったことだろう。
つまり記憶までが若返っているのである。
もちろん着ていた服まで縮むわけではないので、いま彼女たちが着ているのは、昔ちびっこだった真言の服だ。ちゃんと保存されていたのが幸いしたといえる。
「ミカちゃんちじゃないかな？」
あたりをキョロキョロ見回していた、やはりちびっこ真言は、黒髪の女の子の疑問に横から声をかけた。
「ミカちゃん？」
こてん、と首をかしげる七季は、「お友達？」と尋ねると、栗毛の女の子はこくんと頷いて、「私のイトコだよ」とその姿を探した。
すると。
当の神門（みかど）青年は、ただいま部屋の隅で、何やら大葛藤中らしく、

肩を震わせながら丸くなっている。
久しぶりに見た、懐かしい初恋の相手（ただし現在進行形）を前に、萌えっぷりが甚だしく、必死で理性を繋ぎとめているまっさいちゅうなのだが。
「ミカちゃ」
とてて、と近寄ってきたちび真言に、とうとう臨海突破してしまった。
ぶぱああ！
噴水のごとく、華麗に鼻血を噴き出す男前に、純真な子供がドン引きしないはずがない。
何より、もう一人の子供が、それを許さなかった。
「近寄っちゃダメ！　あれ変態だよ！」
ちび七季の言葉が、とっても耳に痛い神門（みかど）である。
繋いだ手を引っ張り、自分も小さいだろうに、その背中にちび真言を庇いこむ、黒髪の女の子は、確かに凛々しかった。
大きな黒瑪瑙の瞳を、きっと吊り上げ、小さな体を緊張させて、大の男を前に警戒する姿は、まるでふーふー毛並みを逆立てている子猫のよう。
そのうえ。
「お兄ちゃんたち、霜夏くんと伯言の知り合いですかっ」
ちょっと舌足らずなソプラノで、きゅっと服を引っ張って見上げる、七季のセリフが、また極悪だった。
神門（みかど）ほどリアクションは大きくなかったが、七季の幼なじみたちも、クリティカルヒットで大ダメージを負うはめになる。
だっぱだっぱ。
無言で鼻からあふれる、まっかな情熱の色が、やけにあざやかだ。
幼なじみの面影を残した、霜夏と伯言によく似た「お兄さん」の反応に、こちらもまたドン引きする、ちび七季と、ちび真言。
けっきょく、最終的に、彼女たちがすがったのは――

「その殺気を止めてくれないかね」
ところ変わって、帝都心霊庁。その一課のオフィスである。
深々とためいきをついているアーチャーは、珍しく白いワイシャツ姿にグレイのスラックスというリーマンスタイルで、右手にちび七季を、左手にちび真言を抱えていた。
抱っこしているわけではないのだが、それぞれの手を、女の子たちに抱え込まれて懐かれているので、実質、「両手に花」を体現していることになる。ちびっこだが。
もちろん、彼に殺気を飛ばしているのは、神門（みかど）をはじめ、女の子たちの幼なじみどもである。
「キリキリ仕事しやがれ」
がすっ。
「をぐふっ」
そんな怨念たっぷりの神門（みかど）青年へ、蹴りをくれるのは、帝都心霊庁の一課課長補佐、三蔵だ。坊主のくせに、やたらヤクザ蹴りの似合う男である。
金髪紫眼の、女とも見紛う、うるわしい美貌の青年僧は、幼女となった真言を抱えて仕事が手につかない、名目上はいちおう上司の男に仕事をさせるため、その子守りをアーチャーに任せる形で引っ張ってきたのだ。
ちなみに霜夏と伯言が何故ここにいるかというと、真言から離れない七季を追いかけてきたのである。
げんざいは神門（みかど）の見張りと化しているが。
「テメェがガタガタ抜かすから、アレを連れて来たんだろうが。子守りと護衛はアーチャーに任せて、さっさと仕事を片付けやがれ」
「ううう……まこ……真言おぉ～」
「えと、あの……」

「ダメだよ、マコちゃん。あれは変態さんだから、近寄っちゃ、めっ！」

狩衣姿の青年に、哀れっぽい声で呼ばれた栗毛の幼女は、おたおたと身じろぎするも、その傍らに張りついている黒髪の幼女が、きっちりそれを阻止している。

その昔、伯言を誘拐犯や変質者の魔の手から守ったという話も、あながち嘘ではなさそうだ。

「偉いな、七季は」

大きな褐色の手のひらに、かいぐりと撫でられて、嬉しげにきゅっと目を細めるちび七季は、もっとかまって、とばかりに男の腰に懐く。

「えへー。アチャにー、きょうはおやつ、何作るのー？」

もともと人見知りをしない子供であったちび七季は、あの場でいちばん安全とみなしたアーチャーに、あっさり懐いた。

幼い彼女たちを見て、鼻血を噴くような「変態」でもなく、穏やかで優しい手のひらに、頼もしい大きな体と、凛々しい声が、ちび七季にとってはクリティカルだったらしい。

加えて、美味しいおやつで餌付けされたものだから、いまやどこに行くにも、ひよこみたいに男のあとをついて回る。

「そうだな。キャロット・ケーキでも焼くとしようか」

「にんじん？」

きょん、と黒い瞳でアーチャーを見上げる幼女は、けげんそうに訊き返す。

「ああ。七季はもう英語がわかるのか？」

「英会話教室で習ってるから。たんごカードのカルタ、楽しいよ」

得意なんだ！

えへん、とまだ膨らみもしない胸を張る、この幼女が、いずれ脅威のGカップに育つなどと、いったい誰が想像できるだろう。

彼女の未来を――育った姿を――知っている、白い髪の偉丈夫は、

「子供の成長は凄いものだな」と、ないしんしみじみ考えた。

「そうか。七季は、凄いな」
「アチャにーも、お料理じょーずで凄いよー」
そして、ちび七季をもう一度だけ撫でると、まだ神門（みかど）の方を気にしている真言を促し、キッチン設備のある給湯室へと歩を進めたのだった。
「早く仕事を片づければ、真言にもかまえる時間ができるのではないかね？」
「はっ！」
去り際、しっかり神門（みかど）にハッパをかけていくあたりは、やはりお人よしである。

その後、しばらく元の姿に戻るまでの間、ちび真言とちび七季、そして彼女たちをくっつけたアーチャーと、おまけのリドルは、帝都心霊庁一課の、癒しを担っていたという。

#１５１　つながれた手ー両手に花？ー（後書き）

あとがき

＞元に戻るまで、家に返すわけにも行かないちびコンビを、アーチャーたちは帝都心霊庁と神門家で保護していました。

ちびオリ主は、既に人外慣れしているので、ナチュラルに弓兵べったり。

アチャが正直に事情を話したら、ちびオリ主はあっさり納得しました（待て）。

#152　つながれた手ー天使のさんぽー

「……ひま」
「ひま？」
隣から聞こえた声に、ひょいと絵本から顔を上げた黒髪の幼女は、足をぷらぷらさせている、栗毛の幼女を振り返って、こてりと首を倒した。

「アチャにー。マコちゃんがおさんぽしたいってー」
てとてとてと。
ちび真言と手を繋ぎ、引っ張ってきた幼いマスターに、アーチャーは書類を整頓していた手を止めて、キャスターつきのイスに座ったまま向き直る。
リドルの「若返り薬・改」を盛られた少女ふたりは、戻るまでの間、この帝都心霊庁と神門（みかど）神社で預かることが決定済みだ。
昼間は、一課長である神門（みかど）に仕事をさせるため、オフィスに子連れで来ているのだが、子守りのアーチャーまでもが、気がつけば書類整理をやらされているあたり、人手不足はあいかわらずといったところか。
「散歩かね」
きいっ。
子供が、ここまでじっとしていたことの方が、むしろ珍しいだろう。
さっきまでは、帝都心霊庁の一課が入っているオフィスの一角にある、畳敷きのスペースで、幼女ふたりはめいめいに暇を潰してい

たところだ。
幼い七季は、絵本をねだってからは、そちらを黙々と読んでいたようだが、彼女よりも活発らしい、ちび真言の方は、他に遊び相手もおらず、おままごとセットや人形遊びに飽きてしまったようだ。
最初は、ちび七季もおままごとをしていたのだが、どうも、周りの大人が仕事をしているのを見て、声を出すのが迷惑になると思ったらしく、早々に読書へ切り替えてしまった。
こちらは、一人で時間を潰すことに慣れているらしいことが、うかがえる。
かたや、ちび真言の方はというと、ふだん神門（みかど）という格好の遊び相手がいたものだから、あまり一人遊びというものには慣れていない。かくれんぼや鬼ごっこ、かけっこなど、めいっぱい体を使った遊び方が多かったせいで、落ち着かない。
「一人で行ったら迷子になるでしょ？
勝手に出たらいけないから、アチャにーに聞いてからにしようと思って」
くりんと男を見上げるのは、ちび七季のまっくろな瞳だ。
どうやら、最初は一人で庁内の探検に出かけようとした栗毛の幼女を、七季が引き止めて、ここまで連れて来たらしかった。
この年ごろの彼女は、基本的に大人の言いつけを素直に守る子供で、アーチャーの注意をきちんと覚えていたものと思われる。
「そうか」
偉いぞ、と男の手のひらが、幼い七季の黒髪を撫でる。ごろごろ喉を鳴らしそうな猫を思わせる表情で、目を細める黒い髪の幼女を、ちび真言が、じっともの言いたげに横から眺めていると。
「君も勝手に飛び出さなかったのは偉かった。いい子だな」
くしゃり、と幼女の栗毛を、無骨な男の指が優しく梳いた。ぱちぱちっと琥珀の目を瞬いた、幼い真言が、ぱっと頬を染めてはにかむ。
「……ん」

「ね？　アチャにーは優しいから、ちゃんと聞きに行けば、怒ったりしないよ？」

きゅっと桜色のスカートを握る栗毛の幼女に、青いワンピースを着たちび七季が明るく笑って、出会って間もない（と本人たちは思っている）女の子と、年上の男の顔を見比べた。

見るだに、七季は幼いながらも、警戒心の強い、ちび真言と、あまり日本人ぽく見えないアーチャーとの間を取り持とうとしているようだ。

――意外と面倒見が良いというか……。

ふ、と彼には珍しい、てらいのない笑みを浮かべた褐色の肌の男に、ぱちりと幼い真言が琥珀の目を見開き、いっぽうのちび七季は、彼に誘われたように、にぱっと笑ってアーチャーを見上げていた。

で。

「どうしてこうなった……？」

弓兵の呟きは、帝都心霊庁の廊下にこぼれて四散した。

アーチャーのまなざしの先。

そこには、小さな羽根を背負った天使――もとい、ちびっこふたりが、彼の手から伸びる、赤いリードの先につながれている。

両肩と両脇にベルトがあり、ベストのように着ることで、上半身に装着する仕組みのハーネス――いわゆる「迷子ひも」といえばわかりやすいだろうか。

何故か神門（みかど）から提供されたそれは、背中部分にくっついた、キルト地で作られた白い羽がふっくらしていて、可愛らしい女の子ふたりに、良く似合っているデザインだ。

ひもの色が赤いあたり、どこか「赤い糸」を連想させないでもない。できるならば、神門（みかど）みずからが、真言と自分の間につなぎたかったであろう一品である。

ただし、げんざいは二本のリードが絡まって、幼女が折り重なるという光景ができあがっていた。

好奇心旺盛で、なおかつ方向音痴な、ちび真言が、あちこちフラフラ行ったり来たりするので、必然、リードがちび七季のものとこんがらがった結果である。

じたばたするせいで、余計にわちゃわちゃ絡んでしまっているのは、まあ仕方のないことだろう。

幼い二人の傍らに跪いたアーチャーは、苦労してリードを解くと、「また五分後には同じようなことになるんだろうな」と思いつつ、転がっていた幼女を支えて立ち上がらせた。

「アチャにー。ありがとー」

ぽんぽん、と青い服についた埃をはらってやる保護者兼従者に、ちび七季が、きゅっと男の首にしがみついて、お礼を言う。

「どういたしまして。ケガはないかね？」

「ん。へーき！」

黒髪にふちどられた、白い面輪の女の子は、にこぱと笑って元気に返した。

きらきらした黒瑪瑙の瞳が、まっすぐアーチャーを映し出して、そこに曇りのない信頼を孕んで光っているのが、何とも面映ゆい。

「そうか」

ふ、と精悍な面輪の口元を緩めた、ワイシャツ姿の男が、次いで、栗毛の幼女を支えながら、同じように服の汚れをはたいていると。

「ごめんなさい……」

しょげ返った声が、震える鈴のように、ちび真言の唇からほろりとこぼれ落ちた。

「どうした？　どこか痛いところでも？」

ちょっと泣き出しそうな響きを含む声に驚いて、アーチャーが下から栗毛にふちどられた幼い顔をのぞきこむと。

「いっつも、こんなんだから。私が、あちこち行って、そのたんびに、ミカちゃんが探してくれるから。

だから、もう嫌になっちゃって、ミカちゃんと一緒にいられないのかな……っ？」

ふるふるこぼれ落ちそうに涙を湛えた琥珀の目で呟く、幼い真言に、「なるほど、彼はずいぶん愛されているな」とないしんアーチャーは苦笑した。

げんざい似たような境遇だというのに、子供になった七季が、あんまりにも落ち着いているから、ここまで彼女が不安になっているとは思わなかったのだ。

そして、親でもなく、祖父母でもなく、まっさきに神門（みかど）の名が出てくるあたり、よっぽど幼い真言にとって、イトコである彼が、心の深い場所にいるであろうことがわかる。

「そんなことはない。それこそ、天地がひっくり返ったとしても、君の言う『ミカちゃん』が、君を嫌いになることはないだろう」

ぽんぽん、と腕を回した小さな背中を叩いて、アーチャーがなだめるものの、それからしばらく栗毛の幼女は、神門（みかど）の名を呼び続けていたという。

「離せっ、まこが、真言が俺を呼んでいる――っ！」

「阿呆なこと言わんと、とっとと仕事しやがれこのバ課長！」

ガゥン！

同じころ。

帝都心霊庁の一課では、そんな騒ぎが起こっていたとか、いないとか。

で。

「二本ならんでるから、こんがらがるんだと思うの」

まっすぐの一本にしちゃえば良いんだよ。
そう言い出したちび七季のアイデアで、アーチャーが彼女のリードを持ち、ちび七季が、ちび真言のリードを持つことにした結果。
とてことてこ。とてててててっ。
「ていっ」
「うぎゅふっ」
ふらふらどこかに行こうとしたちび真言のリードは、目ざとく気づいた黒髪の幼女によってキュッと引っ張られ。
結果として、一本釣りよろしく、足を止める栗毛の幼女がいたりする。
「……小さくなっても、手綱を取るのは七季の方か……」
しかし、上手いことやるものだな。
七季であれば「ライダー」の適正があるかもしれん、と、ちょっぴり阿呆なことを考えつつ、アーチャーが引き続き、何とか平和に幼女ふたりの散歩を続けていると。
前方から歩いてきた、オレンジ頭の少年――身長だけ見れば、青年といってもおかしくない――と出くわした。
とたん。
「……アーチャーさん、意外と鬼畜だったんスね」
光の加減で、金にも見える、鋭い双眸でジト目を向けてくる一護に、「何の話だ」と眉をひそめるアーチャー。
「まさか、漣さんと七季、どっちもだなんて――いつ産ませたんスか？」
「良し。ここは殴っても良いよな？」
こめかみに怒りの四つ角を浮かべた錬鉄の英雄が、とりあえず黒崎家の長男をしばき倒すまで、あと五秒。

「ところで七季は、不安に思うことはないのかね？」

心配があったら、ちゃんと言ってくれないか。
そう問いかけたアーチャーに、黒髪の幼女は、あっけらかんとした口調で、こう答えた。
「何かね、私とアチャにーの間で、つながってる気がするんだ。それをたどると落ち着くの。アチャにーが傍にいるから、大丈夫なんだーって」
赤い糸ってこんな感じかなぁ？
ほわほわ嬉しげに笑う、ちびっこ七季に、撃沈された剣製の魔術師が、いたとかいないとか。

#152　つながれた手ー天使のさんぽー（後書き）

あとがき

＞ちびっこ巫女ンビが好評だったので、どうせだから書きたかったネタを続けて投下。

天使の羽つき迷子ひも。リードにつながれて、あっちゃこっちゃ動くちびっこ、絶対可愛いと思うんだ。

あとチートな先輩の手綱を取るオリ主。ちびっこでも変わらない。

ちびオリ主いわくの「赤い糸」「つながり」は、もちろん使い魔のパスです。

#１５３　ＩＦ～奪われた翼（前書き）

まえがき

＞物凄く……ネタです。

先に謝っておきます。かっとしてやりました。ごめんなさい。

#153　IF～奪われた翼

七地七季、どうやら転生したようです。

――おーらい。よーわからんが、記憶がどっかでぷっつり途切れてる。

物心ついたときには、ウェールズの山奥。

イギリスの片田舎と思しきその村で、七季は「ナナキ＝スプリングフィールド」という名をもって呼ばれていた。

一つ違いの弟の名前は「ネギ」である。

父親の名前は「ナギ」。

母親の名前は、訊いても教えてもらえなかった。

とにかく村人の大半は、口を開けば「ナギ」「英雄」「サウザンド・マスター」とうるさいこと。

孤児であるスプリングフィールド姉弟は、その父親の威光によって、なにかともてはやされ、期待を寄せられてはいたが、七季じしんは、それをまったくありがたく思っていなかった。

――この村は、おかしい。

みずからを「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」を称する彼らは、大戦の英雄であるという「ナギ」を讃えては、何かと「ナギのように」「ナギのように」と九官鳥よろしく繰り返す。

中身は既に、大人であった七季は、まるで洗脳のようなその言葉から、いまだ幼い――こちらは精神年齢も年相応の――弟、ネギの耳をふさいだ。

「ネギ、この村の、大人の言うことを鵜呑みにしちゃダメだよ」
七季は、転生前の容姿そっくりな――黒い瞳で、じっと赤毛の弟の目をのぞきこんだ。
大人たちは、父親である「ナギ」の色彩を、色濃く継いだ男の子に、ことさら過重な期待をかけていた。スポイルされかけていたネギを、叱りつけ、抱きしめ、あるいは庇うのは、いつだって、一つ年上なだけの七季の役目だった。
幼くして、大人顔負けの聡明さを持つ幼女にまで「さすがナギの娘」と声をかけられたとき、七季はこの村の住人に見切りをつけた。
ああ、どうしようもない、と。
「どうして？　ナナキ姉さん」
まだ十にも満たない男の子は、不思議そうにしながら、それでも大好きな姉の言葉には逆らわない。
何故なら、彼女はネギの「絶対」。
いつでも手を伸ばし、抱きしめて、寄り添ってくれる、たった一人のネギの「家族」。
自分たちを残していった「ナギ」なんかより、ずっと温かく確かな存在に、伝聞だけのあやふやな「父親」の幻が、勝てる道理などない。
「人間は嘘をつく生き物だから。そして、勘違いや思い込みを簡単にする生き物だからね」
見てごらん。
七季は、開いた図鑑の、月の写真を指差した。まっしろな指先が、暗黒に浮かぶ灰色の大地を、切り取って映している。
図鑑をのぞき込む、七季の黒髪がさらりと揺れた。
「これがどうかしたの？」
赤毛の弟は、彼女と同じように本をのぞき込みながら、じっと姉の言葉を待つ。

「荒れ果てて、何にもない。自分で燃えてさえいない、この星を、私たちが地球から見るとき、まんまるで綺麗な、金色の光の円に見えるでしょう？」

「……うん」

幼くとも、知能指数はそれなりに高いだろう男の子は、素直に姉の言葉に頷いた。

動物も、植物すらいない、灰色の大地は、何だか寂しい。

「あれは太陽の光を反射してるんだって。それで、うんと離れて、遠い場所の、地球から眺めているから、本当の姿はわからない」

深い闇色の瞳に吸い込まれそうな心持ちで、七季のソプラノを聞くネギは、またこくりと頷いた。

「傍にあるものが、本当だとは限らない。目に見えることが、真実だとは限らない。

ネギ、考えなさい。目の前の人は、本当に知っていることを話しているのか。嘘はついていないのか。隠していることはないのか。

みんながみんな、訊いたことを、知りたいことを、答えてくれるとは限らないんだよ。

私が、お母さんのことを訊いたとき、誰も教えてくれなかったの」

「おかあさん？」

ネギは、きょとんとメガネの奥の、あどけない目を丸くした。

おかあさん、って？

ああそういえば、幼なじみの家族には、ちゃんと大人の女の人がいる。

けれどもネギは、姉である七季の方がずっと好きだった。

とても物知りで、いつでも傍にいてくれて、そして姉の作ってくれる料理の方が、美味しかったから。

「でも、僕らは、お父さんだっていないし」

「ナギ＝スプリングフィールドは『死んだ』ね。でも、私たちは生まれている。木の股から生まれわけじゃあるまいし。産んだ人がいるはずなんだ。そのひとは、いったいどこへ行ったの？」

『死んだ』かどうか、なんてことさえ、教えてもらえない。
「……あれ？」
こきん、とネギは首をかしげた。
――そうだ。おかしい。「ナギ」「ナギ」と村の人間はうるさいくらいなのに。
ネギは、一度も女性の名前は聞いたことがない。
もしかして「ナギ」は母親の名前なのか？
そんな馬鹿な。
「誰かにとって、都合の悪いことだから、言わないんだと思う。隠してるんだよ」
推測する七季のソプラノは静かでひんやりしていて、それがかえって、ネギの耳に、脳裏にするりと入り込んだ。
彼の中で、村人に対する疑惑の芽は、じょじょに育っていくことになる。

燃え盛る村と、林立する石像。
黒い翼の群れ。
悪魔。
その日、ネギ＝スプリングフィールドと、ナナキ＝スプリングフィールドの住む村は、壊滅した。
炸裂する雷に、滅ぼされる悪魔。
「……お前……そうか…」
フードつきの外套をまとった男が、大ぶりの杖を手に、赤毛の少年へと近づく。
震えながら、それでも必死に杖を構えて立つネギの背後には、黒髪の幼女。ネギ最愛の姉がいる。
怯える子供の頭に、男が手を伸ばしたとたん。
「遅いわあああああっ！」

ごききんっ！
杖を持った魔法使い――その股間を蹴り飛ばしたのは、まっくろな瞳の幼女だった。
「いまさら何の用だ、この役立たず！」
「お……おおぉ……」
蹴り飛ばされた股間を押さえ、内股になって、ぴょんぴょん飛んでいる男の姿に、威厳もへったくれもない。
対照的に、男の股間をクリーンヒットした七季は、ぎらぎら光る瞳で、その華奢な背中に弟を庇った。
どん、と仁王立ちする姿の、凛々しいこと。
「本物なのか、それとも『ナギ』を騙ったニセモノなのかは知らないけどな、どっちにしろお呼びじゃないんだよ！」
救われた相手に向けるものとは、とても思えない罵声と糾弾を、黒髪の幼女は男へと投げつけていた。
「もっと早く悪魔を倒せたんじゃないのか。タイミングが良すぎる。しかも顔を隠した変質者なんかに、うちの大事な弟を触らせるとか、マジありえん」
拳を握る七季の背中を、ネギは、ぼうっと見つめていた。
悪魔たちを虐殺していた恐ろしい男から、自分を守ってくれる、大好きな姉の背中は、泣きたくなるほど頼もしかったのだ。
さっきまで恐怖に染め抜かれていた瞳は、いまや七季を映して、陶然としている。
――お姉ちゃんカッコイイ。
その光景は、のちにネギのシスコンを助長する、最大の要因となることを、いまだ誰も知らない。
「ぐぅ……お、お前、ナナキ、か……？」
たくましくなって……。
「貴様に呼ばせる名前なぞないわ！」
げすっ！
幼女は容赦なく、股間を押さえる男の手の上から、さらに追撃を

食らわせた。鬼である。

「仮に、本物の父親だとして。

生きていたくせに子供を放置しておいて、いまさら父親ヅラ？

どのツラさげて。この恥知らず。死んだ振りするってのに、遺産の一つも残さずに、子供を捨ててトンズラした男なんて、願い下げだね。二度とそのツラ見せんなボケ！」

あまりの展開に、石化光線を口に溜めたままフリーズしていた魔族も唖然としている。

強すぎる。いろいろ強すぎるわ、この子。

くるり。

いきなり振り向かれて、魔族――ヘルマンは、思わずびくりと肩を跳ねさせた。

憤りできらきら星空みたいに光る、まっくろな目の強さに、闇の住人たる魔性が惹きつけられる。

「そこの悪魔さん」

「な、何かね……？」

つい呼びかけに答えるために、石化光線を消してしまった魔族は、反射的にぴっと背筋を正していた。

「私と取引して欲しい。

こんなクソの役にもたたない男なんていらない。

そのくせ厄介ごとだけ押し付けるなんて、ほんっと使えない、子供を守るべき親としてサイテーだもの。

私は、私と弟を守りたい。穏やかな暮らしがしたいだけ」

――そして、もしも会えるのなら。この胸に残された、絆のつながる先を、追いかけられるのなら。

黒髪の幼女は、いまだ膨らむ兆しを見せない、平らな胸の中心を、そっと撫ぜた。

肉体に刻まれたのではない――けれども魂に打ち込まれ印（しるし）された、「神使（しんし）」たる証が、彼女の中には息づいているのだ。

「私の魂は、あのひとのものだから……あげられるものは、そんな

に多くないんだけど。
この体はまだ、手付かずだから。私の純潔を捧げる代わりに、私たちの保護者となって、仮契約（パクティオー）をしてもらえませんか」
「は」
度肝を抜かれたのは、やはり男と、悪魔の方である。
まさか、父親と思しき男の前で、身の安全と引き換えに身売りの話を持ちかけるなんて、とんでもない幼女だ。
しかも相手は悪魔である。
いましがた、自分の住んでいた村を襲っていた。
「足りませんか？
困ったな……足がないと、逃げるときに困るし……あとは、左腕と片目までなら、何とか……」
しかも、このうえ自分の体を切り売りする検討までしている。表情を見る限り、かなり本気だ。
「あ、いやいやいや。十分だ。純潔で十分だが……本気かね？」
思わずツッコミを入れてしまったヘルマンに、罪はないだろう、たぶん。
「冗談で身売りするつもりはないですが。可愛い弟と自分の身柄がかかっているんです。心底かけねなしの本気ですが何か？」
真顔で切り返されて、ないしん「マジでか」とか言いたくなるヘルマン。
人間にペースを握られるというのも、長い悪魔生活の中で、初めてのことである。
「し、しかしだね。さいぜんまで私たちは、この村を襲撃していたわけであって」
「誰の命令かは知りませんけど、そりゃ黒幕が悪いんでしょーよ」
すぱん、と即座に七季が切り返した。
「確かに村は燃えました。けど、何で魂を取らずに石化なんですか。おかしいでしょう。
悪魔さんは本来、契約をもって人間の魂を手にするのが本業。そ

れが、中途半端に石化だけ？

結果的に、『死人』は一人もいない、この状況で、逆上するほど、私はこの村の人間に愛着も執着も持っていませんよ。しょせん『ナギ』の信者でしかなかったひとたちに」

高く凛々しく澄んだソプラノは、しかし氷のように冷徹に即断した。

「スタンさんくらいでしたね。あの中でマトモなのは……。それでさえ、二言目には『ナギ』でしたけど」

石のごとく冷ややかで硬質な夜色の双眸で、七季はすっと瓦礫と化した村を眺めやる。

しかし彼女にとって、それはどこか虚ろな光景に見えた。惨劇というには――血も泥も流れておらず、ただ燃えるだけの炎は篝火（かがりび）のようで。

生き物の臭いがしないからだろうか。

「ここは箱庭だったんでしょう。『英雄』の雛を、人形を培養するための。

私は――この村の住人が、ずっと気持ち悪くて、仕方がなかったんですよ」

七季には、愛し愛されて育った、前世の記憶が色濃く刻まれていた。

人とぶつかり、いさかい、叱られ、謝り、抱きしめられた温かさを知っていた。

ともに喜び、同じ趣味の仲間と語らい、ときには背中を預けて戦った。流す涙の苦しみも、胃の腑を絞られるような切なさも、ずっとずっと残っている。

そんな「本物」を知る幼女に――この村の人々のあつかいは、まるで腫れ物をつつく子供のように、興味半分で薄っぺらく、胡散臭く感じられたのだ。

「上手く思い通りに育たないから、罪悪感や、恐怖心で、魔法を学ぶように駆り立てようとでもしたのか。それとも本当に、私たち『

ナギ』の子供が邪魔で、抹殺しようとしたのか。それはわかりませんけど」

もはや言葉を紡ぐ幼女のソプラノは平坦だった。

「嘘をつく人間よりも、嘘をつかない悪魔の方が、よっぽど頼りがいがありますよ」

暗に、背後の「ナギ」と思しきフード姿の男への、痛烈な嫌味なのだろう。

小さな白い手を差し伸べる七季は、まだ、ほんの子供だ。

しかしその姿は、じつに堂々として、気品にあふれていた。

気がつけば、ヘルマンは跪いていた。

彼の本能は、目の前の幼女に、どうしようもなく惹かれてならないのだ。

「……良いのかね？

この村を襲わせた人間と、つながっている私と、契約をしても」

それは、むしろ忠告のように響いた。

燃え盛る炎の中、漆黒の翼を持つ悪魔が、幼く穢れない娘の前に控えて、どこか心配そうにすら見えるまなざしを送る。

「あなたの契約に、『ナギ＝スプリングフィールドの子供を育ててはならない』なんて要項はないでしょう？」

抹殺にしては、これは手ぬるすぎる。

黒髪をなびかせ、不敵に笑う幼女は、今生での、たったひとりの弟と手をつなぎ、傲然と言い切る。

「ああ、確かに」

「ならば問題ありません」

にっこり。

悪魔にとって、交わした契約は絶対。

七季が「悪魔は嘘をつかない」と言ったのは、このことを指す。

悪魔は、契約書に書かれたことについては、厳密に守るのだ。

しかし――だからこそ、契約書に書いていないことは、穴として衝ける。

まさか、悪魔が「英雄の子供」たちを育てるなど、誰も思うまい。
――ああ。これは何と面白そうな契約主だろう。
えてして悪魔には、享楽的な性質のものが多い。ヘルマンも、多分に洩れず、この退屈だけはなさそうな幼女を前に、心が浮き立つような気分に駆られていた。
そして彼は、幼い娘の従者となる。

このあと、仮契約（パクティオー）の魔法陣に、ネギが乱入して、どさくさまぎれに七季とカードを作ったとか。
正式な契約を交わした（取引上の）七季が、さっそくヘルマンに要請して、日本に姉弟ともどもトンズラしたとか。
そこで、ヘルマンを名目上の祖父として暮らし、スプリングフィールド姉弟は、偽名の苗字を「七地」にしたとか。
まあ、いろいろあったのだが。

「ようやく見つけた……！」

「ヘルマン、ネギを連れて逃げてっ」

「まさか悪魔と一緒に暮らしているとは」

「お姉ちゃん！　ナナキお姉ちゃんもいっしょに……ッ！」

「ネギは私の弟だ。あんたたちの操り人形なんかにはさせない！」

「お姉ちゃあああああぁぁん！」

「どうした、ネギくん。そんな拳では、憎い魔法使いどもは倒せんぞ！」

「はあっ、はあっ……」

「憎しみは力になる。君には、闇の魔法の素養がある……それを育て、掌握したまえ」

「お姉ちゃんの、仇を取るには……！」

「そうだ。もっと、もっとだ。怒り、悲しみ、昂ぶりたまえ。私はしょせん悪魔。こんな教え方しかできんがね」

「十分です。僕は、強くなりたい――！」

「良い魂の色だ。君の憎悪は、深く、甘いな」

白い魂は愛ゆえに闇へと堕ちる。
砕かれた心のかけらは、すべてを切り裂くために研ぎ澄まされた。

「滅ぼしてあげます。魔法使い。あなたたちが、僕からすべてを奪った」

こんな世界は、いらない。

魔のものどもを道連れに、ネギ＝スプリングフィールドの魔法世界侵攻が幕を開ける――

「……って夢を見たんですよ」

長々と語られたトンデモ夢の内容に、七季の話を聞かされた神門（みかど）神社の面々とアーチャーたちは、そろってちゃぶ台に突っ伏したという。

#153　IF～奪われた翼（後書き）

あとがき
＞突発的に思いついたネタでサーセンｗ
ちびっこを書いていたら、ふと「オリ主がちびっこでネギ姉に転生したらどうなるんだろう？」という妄想から広がった話です。
たんなるネタ。

なぜかシスコン化したネギが、魔王ポジションになった罠ｗ
オリ主がいる時点で、ネギがファザコンになる可能性は皆無です。
父親なにそれ美味しいの？
その代わり超シスコン。お姉ちゃんラブ。
どうしてこうなった。

#154　つながれた手ー鍵をかけたいものもあるー

「ミカちゃんは入っちゃダメ――ッ！」
どっこぉおん！
ある日の神門（みかど）神社、もとい神門（みかど）家に、そんなアニメ声の絶叫が響き渡った。

「……で？
あそこでミカドがじめじめしてるのと、この家にマコトの部屋が二つあるのと、いったいどんな関係があるわけ？」
夏場は毛皮がうっとうしいと、ここしばらく少年姿のリドルが放った問いに、どういうわけか、七季は「先輩の部屋は二つあるんだけど」と返したばかりで。
すっかり第二の家とばかり、こちらも麦茶と水羊羹を運んできたりと、かいがいしく立ち回っているアーチャーが、興味深げな目の色で、すとんと神門（みかど）家の居間に腰を下ろした。
時刻は三時。
そろそろと太陽は中天から降り始めたが、今度は輻射熱が凄まじく、いちばん参拝者の少ない時間帯である。
さすがに毎日バイトをしているわけではない七季は、黒いキャミソールに、薄手のシャツを上着代わりとして羽織った、一見、年頃の少女らしいでたちだ。
だが、伸ばした足を包んでいるのは、紺の化繊パンツだし、羽織ったシャツはアーチャーの男物だったりするから、あまり女性らしいとはいえない。
それでもキャミソールの胸元からのぞける谷間と、そのたわわな

シルエットが、無骨なほどのシンプルさに引き立てられる形で目立っているから、ピンポイントに色っぽかったりするのだが。

さておき。

「えーとね、先輩の部屋、一つは来客用なんだ。ふつうに片付いてて、まあちょっと神門さんの趣味が炸裂してて、定期的に模様替えなんかもされてる部屋な」

「うんごめん。その時点でツッコミどころが多すぎるんだけど」

黒髪にルビーアイが特徴的な美少年のためいきに、七季は「いただきまーす」と、もうひとりの従者へ手を合わせた。

「ああ、召し上がれ」

頷く男は、目に涼しげな、ブルーグレーのサマセーターと黒いスマートなシルエットのカーゴパンツを合わせたいでたちで、胡坐をかいている。

「ん。美味し」

漉し餡の、控えめな甘さと滑らかな舌触りが、つるりと涼しく喉を通っていく水羊羹は、アーチャーのお手製らしく、絶品である。

「それは何よりだ」

ほやん、といかにも幸せそうにほころんだ、見るものの脱力しきりの笑顔に、白い髪の偉丈夫は、満足そうに鋭い目を細めた。

そのアーチャーはというと、自分は麦茶だけをすすり、少女の話を聞いている。

「んく……と。まあ、そのへんは神門さんだからということで。そっちの部屋はね、さっきも説明した通り、神門さんの手が入ってるわけ。掃除も、模様替えも。まあ、先輩のお世話が趣味みたいな人だし」

「ああうん。アーチャーみたいなもんだよね」

「どういう意味だ」

「そのまんまだけど」

間髪入れずに従者間でのプチ漫才が展開されているが、七季はどこ吹く風といった様子で、うまうまと水羊羹を堪能している。

「はい、あーん」
そして卓球のラリーよろしくしゃべっていたアーチャーの口に、ほいっと水羊羹をすくったスプーンを差し込んだ。
「……マスター」
何ともいえない表情で、ごくんと口に突っ込まれたものを飲み込んだ男は、眉尻を下げて少女を見つめる。
「はい、リドルもあーん」
「ん」
ぱく。
こちらは、差し出された別のスプーン（リドル用に用意された水羊羹の）を自分からくわえる。
「まあまあだね」
「……そうかね」
「そんで、問題は、もう一つの部屋なんだけど」
さくっと片手間に使い魔たちの小競り合いを納めて、七季はへろーんと間延びした空気のまま続ける。
「ぶっちゃけ樹海。てか腐海？」
こてん、とあどけない面輪で、愛くるしく首をかしげた少女に、無言で人外の従者たちが、ほわほわ和んでいると。
――あれ？　樹海？
――ナ○シカ？
三十秒くらいして、ようやっと理性が回れ右して戻ってきた。
もしかしたら人外とはいえ、彼らも暑さで多少ダレてるのかもしれない。
「まあ先輩もオタで腐のつく女子だからして。神門さんに見られたくないものもあるとゆー、乙女ゴコロなんじゃないかな。きっと」
ＢＬ本とか同人誌とかいろいろ。
――見られたら泣くだろうな。どっちも。
「だから、そーゆーものをしまってる部屋は、神門さん立ち入り禁止にされてるってわけ。神門さんは、先輩の部屋に入れてもらえな

いって、その一点で気にしてへコんでるだけだから」
あー美味しかった。
にぱーっと満足そうに笑う少女の「ごちそうさまでした！」という元気の良い声に、またしても和んだアーチャーが、「お粗末さま」と大きな手のひらでぐりぐり七季の頭を撫ぜる。
「あれ？　ナナキはそういうの、持ってないの？」
フツーにアチャ男が掃除とかするのに、何も言わないよね？
黒髪を揺らして、首を捻るリドルに、ちゃっかりした少女は、けろっと手を振った。
「見られたくないものは、クローゼットのダンボールの中に突っ込んであるし。開けちゃダメって、前もって言ってあるからね。アーチャーはそういうの、きっちりしてるだろ？」
神門（みかど）さんは、つい片付けるのに手を出しちゃいそうだもん。だから先輩も入れてくんないんだよ。
「……あることは、あるんだ？」
リドルが、ちょっとワクワクしたような、コワいもの見たさ、といった面持ちで小柄な少女を見つめる。
「まぁ私は基本、雑食だし。何でも読むよー。ＢＬだろうがＧＬだろうがＮＬだろうが。中には、もらいものの同人誌もあるし、ふつーにえっちぃのもあるけど。
でも、ごーかんものはないかな。やっぱ受身になる立場としては、読んでると、何となく痛々しくってヤだし」
ごんっ。
七季のセリフを聞いて、側に座っていた褐色の肌の男が、ちゃぶ台に額をぶつけた。
「読みたいなら、出したげるけど。読みたい？　ほんとーに読みたい？」
黒髪の少女は、まっくろな瞳で、じっとアーチャーの精悍な顔をのぞきこんでくる。きらきらした穢れない目なのに、どうしたことか、精神的なプレッシャーがハンパない。

「ま、マスター……？」
「だって私もお年頃だから。興味ない方がおかしいよ？」
アーチャーがえっちぃの見たいなら、貸してあげるけど。
くりん、と澄み切った黒瑪瑙の瞳に見つめられて、らしくなくうろたえる弓兵に、外野よろしく眺めているリドルは「ぷくく」と悪魔の笑みを浮かべていた。

ちょっとだけ精神的にいぢめられたアーチャーが、オーバーヒートぎみでちゃぶ台に撃沈したのち。
「ところで、そういう見られたらヤバいものって、自分の身に何かあったときが困るんじゃない？」
いまだ部屋の隅でキノコ栽培に励んでいる神門青年を眺めやりながら、リドルがツッコめば。
「私の場合は八音がいるからなぁ。こっそり処分してくれる手はずになってる。
先輩だと、私がいなかったら、神門さんが発見するはめになるんだろうけど」
「神門乙」
まああれだ。
「大事なものには、鍵かけてしまっておくのがいちばんなんだけどねー」
いざというときのための、備えは必要だよねという話である。

#154　つながれた手ー鍵をかけたいものもあるー（後書き）

あとがき

＞オタには、わりと切実かつ、ありがちなネタで失礼しました。

腐女子だろうと、乙女ゴコロは健在な先輩です。てーか神門（みかど）さんは、もっと別のことに気を回した方が良い（笑）。

オリ主はどっちかというと乙女ゴコロうんぬんではなく「知らない方が、アーチャーの精神衛生には優しいぞ？」と従者への気遣いが先に立つタイプ。

読みたいなら止めないが、勧めない、という方向性です。

題材になるものが同性だろうが異性だろうが、えっちぃものはえっちぃという感覚のオリ主。面白ければ、気にしない（待て）。

#155　つながれた手ー鍵をかけた宝箱ー

きょうもきょうとて、霊験あらたかと噂の神門神社には、まっくろ巫女さんとイケメン少年ふたりのアルバイトたちが立ち働き、ようやく日が沈もうとしていた。

夏の日は長い。

ぼちぼち夕食の時間なので、バイトーズたちは夏休み中の常で、神門家の食卓にちゃっかり加わっていたりする。

「いっただきまーす！」

手を合わせて、まっさきにあいさつというよりは宣言した黒髪の少女にならい、他の面々も口々に続く。

「いただきます」

「ごちになりまーす」

「ま、せっかく用意されてるんだし、いただくとするかな」

「いただきます……マスター、取り皿がこっちにあるから」

「あ、ミカちゃん。チャンネル変えて」

「あいよ」

どこからどう見ても、一家の団らん風景である。ナチュラル過ぎてツッコミどころが見当たらない。

人外を除けば、若者ばっかりの食卓は、こうしてにぎやかに過ぎていく。

「そういえばさ、ナナちゃんの初恋って誰よ？」

食後のお茶をすすりながら、浴衣姿の真言がのんびりと呟いたのは、バラエティ番組の内容のせいだろう。

芸能人の初恋の人を訪ねるという、はた迷惑といえないこともない企画である。

「あ、お前らの初恋は、聞かんでもわかるから」

少年ふたりにすぱっと言ってのけた真言へ、異口同音の非難が上がる。

『酷い！』

「まあそりゃわかりやすいからねえ」

ひとしきり食事を終えたリドルは、少年姿のまま、手近な柱にもたれ、長い足を投げ出すという、だらしない姿勢でくつろいでいる。夏場に、必要がなければ、黒猫の毛皮は遠慮したいのだろう。

「んむ？」

栗毛の少女に問われた七季は、杏仁豆腐をつるんと飲み込んだあと、ほにゃっと幸せそうに笑って言ってのけた。

こちらも、部屋着がわりのシンプルな浴衣を着こなしている。少し褪せた藍の枯れ具合が、ほどよく馴染んで、少女のみずみずしい肢体を、品良くしっくりと包んでいた。

「伯言のおとーさんです。もうお亡くなりだけど」

家族思いで優しくて、ダンディで凛々しくて、そりゃあ素敵なおじさまでした。

両手で湯飲みを抱えたまま、てれてれとはにかむ、黒髪の少女がまとう空気は、エアコンの冷気の中で、ほわんとそこだけ春めいているよう。

純粋な憧れと尊敬の入り混じる、あけすけな好意は、そのソプラノを聞くものなら、誰だって感じ取れただろう。

剣術家であり、みずから道場の師範であった陸家の当主は、門弟から慕われる人格者だった。

愛息子の幼なじみとして、陸家に出入りしていた七季は、よく可愛がってもらったものだ。

「……ハードル高っ。初恋のライバルが父親って」

日ごろ、あまり相性の良くない伯言へ、珍しく真言が同情のこも

ったまなざしを向けて、声をひそめる。
もっとも、伯言にはしっかり聞こえているのだが。
「ふ、ふふ……父上は、たしかに尊敬できる人でした。
しかし、いまはもういないんです。そして僕は、その父上の血を引いています。最近では、若いころに似てきたと、叔父上からもお墨つきをもらっていますからね。ちょっとだけ僕の方が有利ですっ！」
にぎり拳を作って小さく主張する、ジャニーズ顔の美少年。
その根性の逞しさに、真言も思わず「をい」とツッコミを入れた。
――逞しすぎるだろう、それは。
ないしんアーチャーも胸のうちだけでひとりごちる。
あくまで善意的に解釈すれば、少年は、家族の死を乗り越えて、成長したのだと――言えないこともないだろう、たぶん。
その親父さんは、草葉の陰で泣いているかもしれないが。
「そうは言うけど、ナナのは年上趣味だろ。どっちかって言うと」
ぽそりとこちらもツッコミを入れるのは、若白髪の少年。もう一人の幼なじみである霜夏は、端正な面輪に、どこか達観の色をにじませている。
「強くて男前で優しくて年上で……ははは、何だかとってもデジャビュを感じます」
「顔コワいぞ、七地（兄）」
切り分けたスイカを、キッチンから運んできた、Tシャツ姿の神門（みかど）青年が、半目でツッコミを入れる。
「強くて男前で優しくて年上……神門（みかど）さんのこと？」
部分的にイトコのテノールが聞こえたのか、きょとんと黒瑪瑙の瞳を瞬かせた七季が、また妙なタイミングで訊き返すものだから、またぞろ話がカオスな方向に転がり始める。
「そういえば、一時期は、とんでもねー勘違いが横行して、苦労したっけなー……」
いささか遠い目で過去を振り返る、神門（みかど）の背中は、すすけぎみだ。

「ああ。先輩が、私と神門さんとくっつけようとしたときの話ですね」

うわあ。

少年ふたりと、人外の男ふたりが、そろって思考をシンクロさせた。

――それは不憫だから、止めてやれ。

と。

けっきょく、その珍騒動は、いいかげん、泣きの入った神門の必死の訴えと、七季のにべもない却下で、あっさりストップをかけられたため、真言の暴走ともいえる「（自分の）好きなものはくっつけてまとめておけば良いじゃない！」プランは未遂に終わったことを、述べておく。

さて後日。

「お加減いかがですかー？」

七季たち主従と、神門神社バイトーズは、とある総合病院を訪れていた。

ここには、もともとの神門神社の宮司――すなわち、神門青年の父親が入院しているのである。

うっかりと仕事で――退魔業の――ミスった彼は、できのいい息子に、宮司の代理を任せて、のんびり療養中の身だったりする。

幸か不幸か、その息子は、持ち前の才覚でめきめきと神社の収入を右肩上がりに伸ばしているわけだが。

「やあ。七地さんちの。こんにちは」

「こんにちはー。これお見舞いです」

白いベッドに体を起こした壮年の男性は、見るからにお人よしそうな、温厚な顔立ちをしている。

目から鼻に抜けるような、商売人気質たくましい神門の、実の親

とは思えない穏やかさだ。
「これはこれは。ご丁寧にどうも」
にこにこと笑顔の絶えない男性は、さいぜんまでモンハンをプレイしていた精神の若さを見せ、年若い見舞い客と、楽しく話を弾ませていたのだったが。
「初恋ねえ。あれには、不憫なことになりましたなあ」
何気なく、先日の話題を口に乗せた少女の言葉に、神門（父）はいささか遠い目で回顧した。
「？」
七季と霜夏、そして伯言、ついでに姿を消してはいるが、きちんと主についてきたアーチャーとリドルが霊体のまま話を聞く。
「君らには、話しておきましょうかね……」
そうして神門神社の宮司から、とんでもない真言たちの初恋ブレイク話が語られたのだ。

「うちの息子と真言ちゃんは、知っての通り幼なじみでね。まあ、言ってしまえば相思相愛というやつだ。
ただし、子供のころの汐は、あまのじゃくというか、照れ屋というか……いまでいう、ツンデレってやつだな。まあ、大人から見れば一目瞭然だったんだが。真言ちゃんを好きなことを、なかなか口に出せずにいたんだよ」
それはまだ、彼らが小学生時代の話である。良くあることだろう。
「しかしまあ、ご存知と思うが、真言ちゃんは行動派でねえ。思い切りが良いというか。
まあ、うちの家系は、どうも気風のいい女性に惚れる家系なのかもしれんなあ……。
っと。話がずれてしまったな。どういうことかというと、つまり、先に真言ちゃんが、うちのに告白したんだな」

『ええっ！？』

いま明かされる新事実。

七季たちをはじめ、真言にデレデレな神門（みかど）青年しか知らない、バイトーズとアーチャー、リドルの人外コンビは面白いほど驚いた。

「驚いたかね？

けどなあ。気の毒なのは、ここからだ。

その告白の翌日から一週間――ずーっと汐のやつは、熱を出して寝込みっぱなしでなあ。ようやく起き上がったときには、その真言ちゃんの告白から何から、さっぱり忘れてしまったんだよ。

真言ちゃんと過ごした記憶ごと、な」

『何ですと！』

え、何その不憫すぎる展開。

「真言ちゃんは落ち込んでなあ……記憶をすっ飛ばすほど、自分のことが嫌いだったのか、告白がショックだったのかって、そりゃあ気に病んで、気に病んで……」

当たり前だろう。

幼い少女が、せいいっぱい勇気を振り絞って、つたないといえども、大好きな相手に告白した結果が、まさかの記憶喪失である。

『うわあ……』

「先輩……」

「でも神門（みかど）さんも不憫すぎる……」

「どんな罰が当たったんですか、それ」

「まさにそれだよ」

伯言の呟きをとらえて、神門（みかど）宮司は、しょんぼりと肩を落として告げた。

「その原因がなあ。何というか……まあ、うちの祭神さまなんだ」

――え。

空気が凍った。

こう、ぴきんと。

「ほとんど生まれたときから、真言ちゃんに目をつけて……もとい、

目をかけていた龍神さまがな。
　このままじゃ真言ちゃんと取られっちまう、ってんで――その告白を、なかったことにしたんだな。
　ただ、それじゃ解決はしないだろう？
　告白をなかったことにしても、「好き」という感情が消えるわけじゃあない。
　けっきょく龍神さまは……汐の抱えていた、真言ちゃんへの好意、それを抱く過程というものを、のきなみ抜き取っておしまいになったそうだ。
　ようするに、真言ちゃんがイトコだという情報は、何となく残っているんだが、過ごした記憶というものがなくなってしまった。うちの息子は、お見舞いに来た真言ちゃんと、ほとんど初対面みたいな感じになってしまったよ」
　――何それ酷い。
　その場の人間、のみならず、人外であるアーチャーやリドルまでもが、ないしんツッコんだ。
　――それは酷い。
　しかし神とは、理不尽なものなのだ。
「祭神さまは『若気の至りだった』と反省なさったようだけどなあ。まあ、それからは、逆の追っかけっこだな。自分を避ける真言ちゃんを気にして、汐が追いかける。まいにち、まいにち繰り返しだ」
　そのうち、少女の悲しみがようやく薄らいだころ。
　ふたたび少年の中には、真言への恋が育っていた。
「けっきょくあいつは、また真言ちゃんを好きになったんだよ。龍神さまも、前回の……なかったことにして、真言ちゃんをずいぶん悲しませたことを反省されてな。今度は我慢なさろうと思ったんだそうだ」
　そして、その日がやってきた。
「うちの息子が、真言ちゃんを庇って、大怪我したことは知っているかい？」

「あ、はい」
ちょうど「修行」に出されていた七季は、異世界で誘拐まっさいちゅうだったが、それがタイミング悪く、神門が重症を負ったせいだと、あとで聞いたのだ。
「まあ、何だ。それがけっこう危なかったらしくて。……真言ちゃんは、うちの息子を助けるために、龍神さまにおすがりしたんだそうだ。その代わりに、神妻になると、お約束した」
ぶわっ。
「ちょ、何それ……」
神門神社のバイトーズは、いま開かされた真実に、思わずもらい泣きした。
だって神門は、すべて記憶を失ってから、それでも真言と絆を一から築いたのに。
彼に守られた真言は、神門を助けたくて、その身を彼のためになげうつ決断を下したのである。
「龍神さまはな、性急なのは良くないと、お待ちになるとおっしゃったんだそうだ。うちの……汐と添って、それが人としての生を、終えるまで、待つくらいはする、と」
だが、真言ちゃんは潔癖というか、律儀というか。
「けじめだから、とあの子は言ったんだそうだよ」
頑固で困ったものだねえ。
眉尻を下げて、ゆるゆると嘆じる神門宮司の目は、昔から可愛がっていた姪っ子を案じる色を浮かべていた。
「まあ、アレだ。そんなわけで、ちょっと不器用ものの、うちの連中だけどね。これからも、どうかよろしくしてやっておくれ」
おっとりと、優しげな声で頭を下げた男に、まだ涙目の少年少女たちは、こぞってこくこく頷いた。
「今度から、もうちょっと神門さんに優しくしよう……」
「神様に邪魔されるとか、もう不憫すぎる……」
「ああ、だからね」

ふと、宮司は、いたわりと善意のこもった声で言葉を続けた。
「大事なものがあったら、何が何でも手放さないように、気をつけた方が良いよ。取り合っているうちに、とんでもない横槍が――なんて、本末転倒だろう？」
あくまで、何気ない口調で告げられた言葉は、少年たちの胸、そのド真ん中に突き刺さった。
――それは。

「神様に横取りされるよりは」
「共有で共存共栄……ですか」
真面目な顔をつき合わせる、若白髪と栗毛の少年は、陸家の離れで、ぶちぶちと話を煮詰めていた。
「神門（みかど）さんの前例があるからなあ」
「尊い犠牲……です、ね」
神に見初められた、真言。
しかし彼らの幼なじみである少女もまた、神魔に好意を寄せられる存在である。
「記憶を消されて横取りとか、冗談じゃない」
「神が理不尽なのは、先輩を見ても明らかですからね……」
幼かったとはいえ、あの真言が運命を弄ばれたのだ。
「早いところ手をつけて」
「でも、どっちが『初めて』をもらうんです？」

「っくしゅ！」
とても不穏な会話が、幼なじみによって進んでいるとは露知らず。
七季は、クーラーのきいた店内で、くしゃみをしていた。

「待たせてすまない」
「待ってないって」
料理本の会計を済ませてきたアーチャーが、カバンの中から薄手の上着を取り出して、少女へと着せかける。
「ふぇ？」
「いや、さっきくしゃみをしていただろう？」
寒いのではないかと。
「ありがと」
へにゃ、と顔をほころばせる七季に口元を緩めて、男も彼女の背中を促す。
「アーチャー」
「ん？」
「ずっと、いっしょだから」
つないだ手に、力を込める少女へ、アーチャーは「わかっている」とでもいうように頷いてみせた。
「もちろんだ、七季」

「ところで、ナナの偏在だったら、同時にエッチできるのかな」
「……どうなんでしょう」

#１５５　つながれた手ー鍵をかけた宝箱ー（後書き）

あとがき

＞不憫な神門（みかど）さんと先輩の初恋ブレイクがメインだったのに、最後らへんが薄暗い！

やつらしょせんオリ主の幼なじみですからな。けっこう思考がぶっとぶのは仕方ない。

あと神門（みかど）さんのパパンは確信犯。

「早く君らでくっついちゃって、真言ちゃん安心させてあげてね」という叔父心。さりげに黒い。

だって神門（みかど）さんの親だもの。

#156　つながれた手ー千の雨と一（前書き）

まえがき

＞いまさらなんですが、「大事なものには鍵かけて編」は、現在進行中の本編より、ちょっと未来の話です。

おおまかな具体例を挙げると、ゼロ魔編のあと。

まあオリ主の世界では、まだ夏休みなんですが。

震災の被害に対して、ちょっと自重しているため、内容を前倒しして書いております。

あとで注意書きをつけ加えておきます……。

#156　つながれた手ー千の雨とー

「いきなりだが、明日から旅行に行くぞ」
『はい？』
とある昼下がり。
夏らしく、冷やし中華と温野菜のサラダ、しんじょ揚げという昼食を平らげた、神門神社のバイトーズ三人は、そろいもそろって、きょとんと目を丸くした。
対する、緋色の袴姿の巨乳巫女さんはというと、決定事項、とばかり、明日の集合時刻などを告げていく。
「明日は朝七時、神社に集合な。ああ、ナナちゃんは絶対だけど、お前らは、来ても来なくてもよし」
あわててメモる黒髪の少女をよそに、真言は、は霜夏と伯言へ「いちおー部屋は確保してあるけど」と琥珀色の目を向ける。
「せんぱーい。お泊りって、何日くらいですかね？」
手を上げて質問した七季へ、引率の教師よろしく、栗毛の少女が注意を挟む。
「二泊三日かな。あと、ナナちゃんは使い魔も忘れないよーに」
「……ここにいるのは知っているだろう」
ふっ。
エーテルを編んで実体化した、褐色の肌の偉丈夫が、神門家の居間に現れる。
器用というか何というか、足元は裸足、服装はトレードマークの外套ではなく、黒いインナーにパンツといういでたちだ。
そんな長身の偉丈夫が片膝をついて現れても、驚くようなメンツではないが、アーチャーは旅行の目的が気になるのか、灰藤色のまなざしを神妻の少女へと向けた。

「それでいったい、どこへ、何をしに行くのだね？」
「ん。ちょっと物件を探しにね」
『は？』

「やほー。ちーちゃん」
ひらひらと白い手を振ってみせる黒髪の少女に、ぱっと顔を上げた栗毛の少女は、レンズの奥の瞳をかがやかせて、強気な――それでいて、しんそこ嬉しそうな笑顔を浮かべた。
「久しぶり、ナナ姉！」
ぎゅっと抱擁するさまは、仲の良い友人に見えただろう。同年代と言われても、まったく違和感がないほどに。
日ごろ、クラスメートに対して反感を抱きがちな千雨にしては、驚くべき行動といえる。それくらい、少女と七季の親密さがうかがえた。
「マスター、こちらは？」
と、声をかけたアーチャーへ振り向いた少女が、彼と七季を見比べる。
視線の先には、黒いすっきりとしたシルエットのパンツに包まれた長い足と、それに支えられた長身。涼しげな紺のジャケットに薄いブルーのシャツを着こなした、精悍な面差しの偉丈夫がたたずんでいた。
――うわ。何かインテリヤクザっぽい男だな。
あまりカタギには見えない雰囲気は、静かなのに、どこか日本刀めいた鋭さを感じさせる。研ぎ澄まされた刃の美しさ、とでも言えば良いだろうか。
芯の通った、凛とした存在感は、人ごみの中にあっても目立つものだ。
危険な芸術品みたいな存在、という印象を、千雨はアーチャーに

抱いた。
「ん。私と先輩の知り合いで、長谷川千雨さん。私は『ちーちゃん』って呼んでる」
友達だよ。
「マスター？……ええとナナ姉、この男の人との、関係は？」
ぱっと見、無愛想なアーチャーは強面（こわもて）の部類にも見える男だ。褐色の肌に白い髪。そのうえ瞳の色も鋼色、ときては、まさか彼の生まれが日本人などとは思うまい。
まして、彼が人外で、知り合いの使い魔なのだとは。
「えと……」
文字通り主人です、と答えて良いものかどうか、とっさに七季は口ごもった。
かけねなしの真実なのだが、言ったが最後、かなり盛大な誤解を生むだろう。
すると横から、もう一人の友人が助け舟を出した。
「下僕だよ」
にっこり笑ってのたまったのは、いわずもがな、天下無敵のチート巫女、漣真言そのひとである。
すかさず七季は、それ以上何か言われないように、先輩の口を塞いだ、反対側の手をアーチャーの腕と絡めた。
「うん。私の嫁！」
「そうか……嫁か」
「そこで納得するのかね！？」
意外とあっさり頷いてしまった、メガネの少女にツッコむアーチャー。
しかし千雨は、どこか達観した笑みを浮かべて、長身の男を見上げた。
「……ナナ姉だからな」
「ああ、それで納得してしまうくらいには、彼女との付き合いが長いということか」

苦労性っぽいな。
そんな第一印象を千雨に抱きつつ、アーチャーは改めて自己紹介をした。
「私はアーチャー。
マスタ……七季の従者――世話役兼、保護者兼、護衛でね。彼女を守るのが仕事だ。怪しい人間ではないから、あまり気にしないでくれ」
怪しいのは自覚があるが、人間ではないから、嘘は言っていないだろう、とわりと屁理屈をこねるアーチャーはしれっとないしん呟いていた。
「そうか。私は、長谷川千雨。ナナ姉と姫さん……真言さんの友人で、この麻帆良に住んでる、女子中学生だ」
よろしく。
男の差し出した手に、少しためらいつつも、千雨は握手を交わした。
「んじゃ行こう。まずはホテルに案内するよ」

#１５６　つながれた手ー千の雨と一（後書き）

あとがき

＞短いですが、オリ主一行が麻帆良入りしました。

まだネギま編は始まりませんが、既に原作ブレイクの気配（笑）。

千雨とオリ主たちの出会いは、そのうち。

#157　つながれた手ー雨を受け止めた手のひらー

「悪霊ッたいさ――ん！」
ずばっしゅ。
「大丈夫？」
おどろおどろしい気配が、白銀の刀に切り払われる光景を背に。
まっすぐな黒い瞳と、差し伸べられた手のひらが、どうしようもなく私の胸を締めつけた。

世界の半分は不条理で。
世界の半分は無関心だ。
私の「おかしい」と世界の「ふつう」は、良く似ているらしい。
麻帆良。
それが私、長谷川千雨の住む世界の名前――

何で？
何で？
それが私の中に渦巻く疑問だった。
けれどそれを、誰も不思議に思わない。
それを不思議に思う私を、おかしく思う。
ここで、私は異物。
世界に馴染めない、灰色の雛。

違う世界に逃げ出したかった。
私がおかしくない世界。
私を傷めない世界。
嘘でも良いから。
一人になりたくない。

いないはずの、物語のキャラになりきる。
笑顔がある。
褒めてくれる。
話しかける声は、私をおかしいだなんて責めたりはしない。
知らない人でも。
私を知っているはずの人より、優しい。
でも、その手を取るのは恐かった。
知らないから。

知らなくても、趣味を同じくする人たちが集まるイベントは、熱気に満ちてエネルギーがあって、お祭りみたいだ。
ちょっとだけ、私をつまはじきにする、あの世界と似ているのが、玉に瑕だけど。
ここに集まる人たちは、日常とは違う、非日常を作り出すことで、それを割り切って楽しんでいる。
お祭りは、終わるからこそ、楽しい。
毎日がお祭りなんて、疲れるだけだ。
みんな、それを知っている。

――だから、私はあの世界に疲れてしまった。

そんな、みんなが楽しむ、麻帆良の外の、お祭りの日に。

『萌エェエエェエェエェ！』

がらがっしゃあああん。

並べられていた机がひっくり返り、その上に載っていた冊子が宙を舞う。

自分と同じように、コスプレしていた人たちが蹴散らされ、悲鳴を上げる。

写真を撮る人々に囲まれていた私は、何事かと、人垣の向こうをのぞき込んで。

――目が、合った。

「ひッ」

のっぺりした黒。ただ塗り潰された黒としか思えない、虚ろな――けれども、目としか思えない、それ。

それが悪霊なのだと、のちに私は聞かされることになる。

折り重なる人の欲望が、建物――この場に染み付いた念となって凝り、動けるようになるほど成長した怨念。

それが、悪霊の正体だった。

その目は、コスプレ姿の私を見つめ、襲いかかってきた。

ハッキリと見えるわけじゃない。

それでも恐いものが、自分の手に負えないものが向かってくることだけは感知できた。

体がすくんで動けない。

私にできるのは、ただぼんやりと思い浮かべるあきらめだけ。

「ああ……意外と短い人生だったな……」

呟く瞬間、ふわり、とあたたかいものに包まれた。
――あれ？
ばちん、と何かを弾くような音。
流れる黒髪。
白い横顔。
黒衣の袖から伸ばされた白い手と。
「残念でした――先輩っ！」
「合点！」
手のひらの向こうに舞う、白と緋色。
駆ける肢体に追従するように、さっと翻る、結われた栗毛。
白銀が、ひらめく。
「悪霊ッたいさ――ん！」
銀光に切り裂かれて、霧散する嫌な気配を、どこか遠くに感じながら、私を抱きこんでいたと思しき、年上の少女は、そっと私を床に下ろす。
いつのまにか、さっきの場所から移動していた。
腰が抜けた私に、髪も目も、その身にまとう巫女服すらも、まっくろな少女は、あらためて私へと白い手を差し出した。
――あれ、こんなキャラいたっけ？
場違いな感想を抱きながら、黒ずくめのその姿は、ひどく眩しく、神々しく見えて。
「大丈夫？」

恐かった。恐かった。ずっとずっとこわかった。
襲われたのは、私がおかしいから？　変だから？
みんなみたいに馴染めないから？
特別じゃないから？
すがりつき、しがみついて離れないまま、わんわん泣き出した私

を、七季と名乗った少女は、落ち着くまで抱きしめていてくれた。
上手く、周りからは隔離されていたと知ったのは、うんとあとのことだ。
「大丈夫。大丈夫。こわかったね。くるしかったね。君は、おかしくなんかないよ。君のせいなんかじゃない。誰だって、人と違うところはあるよ。私だって、君だって、違う。それがふつう。私で良ければ、話を聞くから……」
くりかえし、くりかえし、優しい声で、やわらかい手のひらで背中を撫でてもらって、思い切り泣いた。
泣きじゃくりながら、ほとんどわめくように、いままでの不安や不満をぶちまけた。
八つ当たりもいいところの行動を、けれども七季さんは、そのやわらかい胸に抱きしめて、受け止めてくれた。
いま思い返しても、聖母ってのは、ああいうのをいうんだと思う。
優しくて、あたたかくて、深い。
いつまでも甘えていたくなるような、不思議な安堵に満たされる場所だった。
いっぺんでも味わうと、くせになる。
「君は、何て名前なのかな？」
「……ちさめ。ここでは、『ちう』って名乗ってるけど。長谷川、千雨」
いつもなら、いくら女の子でも、初対面の相手にそうそう名乗ったりはしないけれど。
この人なら、良い、って思った。
「そっか。ちさめちゃんは、頭が良いんだね。それで周りが、良く見えすぎちゃうんだ。きっと」
よしよし、と小さい子にするように——彼女に比べれば、十分私は「小さい子」なんだろうけど——七季さんは、私を撫でてくれた。
「おかしいことを、おかしいって気づけるのはね、凄いことなんだ

よ。気づけない人の方が、きっと、ずっと多い」
少しだけ、懐に抱いていた私を放して、顔を見せた七季さんは、黒髪の綺麗な女の子だった。顔立ちはあどけないのに、その黒い瞳が強い光を孕んでいて、凄く凛として見える人。
離れた距離が、少しだけもどかしくて、寂しかった。
「でも……そんなの、何の役にも立たない……」
寂しいだけだ。
誰も私をわかってくれる人なんて、いない。
「うーん……じゃあ、ちさめちゃんは、どうなりたい？」
慈しむような、とてもやわらかな瞳で見つめられて、私はきょとんと彼女を見上げた。
「どう、なりたい？」
「うん。その場所から、逃げ出したい？
何もかも忘れたい？　気づいたことなんていらないから、みんなと同じになりたい？」
立て続けに問われて、私はぱちぱちと瞬いた。
それは、何度も考えたことがある。
「ふつう」になりたかった。
いじめられたくなかったし、ひとりは寂しかった。
仲の良かった友達でさえ、自分の言うことを信じてくれないのが、何となくわかって、自分にずっと嘘をついて。苦しかった。
押し殺す心は、潰れそうになって、歪んでいた。
「寂しいのが嫌なら、私が友達になるってテもあるけど」
「ほんと？」
述べられた申し出に、一、二もなく飛びついたのは、きっと飢えていたからだ。
目の前の人は、自分を疑っていなかった。嘘つきだなんて、言わなかった。出会ったばかりなのに、とても心配そうに、自分を抱きしめてくれた。
あたたかくて、ふわふわして、自分を守ってくれた。

騙されたとしても、かまわないと、思っていなかったと言ったら嘘になる。

でも、いまでも私は、あのときの選択が間違いだったとは思わない。

苦労はしたけれど。

――それでも、いまが幸せだと、こっそり胸を張ることは、できる。

けっきょく、住所と名前と電話番号を交換して、彼女たちの仕事上の決まりだからと、カウンセリングまで受けさせてもらってから、私は無事に自宅まで送り届けられた――。

「それが、ナナ姉との出会いかな。それから、いまどき珍しく文通なんてして。一月に一回くらいは、ナナ姉と、姫さんが会いに来てくれて。

姫さんはともかく、ナナ姉が携帯電話買ったのが、つい最近なんだけど、さ」

それからは毎日メールしてる。

パスをつけて鍵をかけた携帯電話と、ＰＣの中には、大事なメールが保存されている。

趣味を、自分の世界を持つのは良いことだと勧められて、作ったサイトには、ナナ姉だけでなく、同じ趣味を持つ人が訪れて、それなりの交流もある。

年上も年下も来るし、男も女も同じ趣味で盛り上がる。

私の世界は、麻帆良の外に広がった。

――「変わっている」ことは、別に悪いことなんかじゃなかった。

たぶん赤らんでいる顔を見られたくなくて、私はそっぽを向く。

話していた相手は、ルビー色の瞳が綺麗な、黒猫。リドルという名前の彼は、ナナ姉の「使い魔」だという。

しゃべる猫が、もともと人間で、しかも幽霊みたいなものだと聞いたとき、もう私は驚かなかった。

それよりも「長い付き合いになるから、ちーちゃんには紹介しておきたくて」と言われたときの、嬉しさの方が、何倍も大きくて。

私との出会いよりもあとに、ナナ姉と知り合ったというリドルは、だから、私たちの出会いについて、知りたがった。

きっと、自分の知らないナナ姉のことがあるのが、悔しいんだと思う。

そういう気持ちは、私もわかる。

アーチャーさんや、リドルに出会ったとき、私も悔しかったからだ。何で教えてくれなかったんだろうって。

ふたりがナナ姉の「使い魔」になったのは、最近のことらしいけれど。

だから。

黒猫姿の相手なら、何だか素直に話すことができた。

「今度は、リドルの番。ナナ姉とは、どういう出会いだったんだ？」

ホテルの部屋で、あのひとたちの帰りを待つ間、私はリドルの話に夢中になっていた。

#157　つながれた手ー雨を受け止めた手のひらー（後書き）

あとがき

＞アーチャーは護衛として、オリ主と先輩たちについていきました。

リドルが留守番なのは、千雨に興味を持ったからです。

ついでにリドル、ラインつながってるアーチャーにも、念話で千雨の話を聞かせていたり。

千雨を気にしていたのは、アーチャーも同じだったので。

千雨のイメージを壊したらごめんなさい。

でも、この話の千雨は、こんなわけで、オリ主と先輩に心を開いています。

しかし、ほのぼの目指しているのに、今回はちょっと薄暗くてすみません。

#158　つながれた手ー黒と金ー

「むっ、フッ、やあっ！」

ぴょんぴょんと飛び跳ねている、十歳くらいの金髪の幼女を見かけて、たまたま現場を目にした七季は、ぱちぱちと黒い目を瞬いた。

良く見れば、少女が手を伸ばしている上には、張り出した木の枝に、つばの広い帽子が引っかかっている。あれが、彼女の取りたいものなのだろう。

監査のために麻帆良学園に入ることが決まっている七季たちは、それに先駆けて、入居する家を探しに来たのである。

さっきまで、不動産屋を回っていたのだが、どうも神門は何かが気に入らないらしく、公衆電話をかけに行った。携帯電話もあるのだが、念のため、というやつである。

物件の持ち主が、麻帆良学園の関係者であることが、引っかかっているようだ。

もちろん神門が真言から目を離すわけがない。いきおい、一緒に行動しているので、七季とアーチャーは、彼らと別行動、となったわけだ。

そのアーチャーはというと、面倒くさがって帽子を持ってこなかった主を案じて、木陰のベンチに七季を座らせると、自分は飲み物を買いに出かけたというわけだ。

何かあったら念話で呼ぶようにと、再三、口をすっぱくして言われたが。

――まあ、帽子を取るくらい、良いよな？

ひょいと腰を上げた黒髪の少女は、とことこ無造作に近寄ると、彼女に話しかけた。

「あの帽子を取れば良い？」

「あ？」
白いゴスロリ風のワンピースを着こなした、可愛らしい幼女は、けげんな声で振り向いたが、七季はかまわず、その木の幹に足をかけた。
ファッションよりも、歩きやすさを重視した、シンプルなデザインのウォーキングシューズが、ぐっと幹を踏んで足場にする。
力仕事には向かないだろう、やわらかな白い手は、けれども思いのほかしっかりと幹をつかんで体を持ち上げ、するすると別の枝に手をかけて登っていく。
「よっ、と」
そこそこ丈夫な枝だったことが幸いして、七季が身を乗り出しても、十分に支えることができたおかげで、彼女は指先を、引っかかっている白い帽子に伸ばすことができた。
「ほい」
そのまま、下で枝を見上げていた少女の方へと、帽子を落とす。
「ん」
ぱし。
上手くキャッチした、可愛らしい金髪娘は、その上品な顔立ちに似合わず、サムズアップで七季を讃えた。
「それで良かった？」
紺のスラックスに黒いキャミソール、ベビーブルーのカーディガンといういでたちの少女は、少し高さのある木にも関わらず、危なげなくすとんと飛び降りた。
小学生のころは、よく木登りで男の子たちと競った七季である。体はちゃんと覚えていたらしい。
「ああ、礼を言う」
やけに古めかしい言い回しをする幼女に、七季は「そっか」と目元を緩めて、こう言った。
「どういたしまして、お姉さん」
「……む？」

「じゃあ、私はこれで」
ひらひら手を振って、黒髪の少女は、元いたベンチに戻ろうと踵を返す。
と
「待て待て待て」
ぐっ。
「ん？」
振り返ると、金髪の幼女が、彼女のカーディガンをつかんでいた。
こきりと首をかしげる七季。
「どうかした？　お姉さん」
「それだ」
「どれだ？」
漫才みたいな、短いやり取りが繰り広げられる。
「いま、何と言った？」
「どうかした、って」
「そのあとだ！」
思いのほか、強い口調で見上げられて、黒髪の少女は不思議そうな面持ちで、再度その言葉を口にした。
「お姉さん」

「……これはどうしたことかね、マス……七季」
スポーツ飲料と水のペットボトルを手に、戻ってきたアーチャーは、ご機嫌に高笑いする金髪幼女と、それを前にして首をかしげる黒髪の少女に、日射病ではない目眩を覚えてためいきをついた。
――ああ、また何か変なの引っかけて。
「さあ？」
「とりあえず、日射病にならないうちに、二人ともこれを飲むと良

い」

苦労性かつ、世話焼きの男は、自分の分を見知らぬ幼女に譲ることにして、どうやってこの場を収めようかと、また嘆息したのだった。

#158　つながれた手ー黒と金ー（後書き）

あとがき

＞千雨の話が、ちょっと暗かったので、ほのぼの分を補給するために、追加で。

金髪幼女が、誰かはきっとバレバレでしょうけど（笑）。

オリ主は見た目ではなく、うっかり魂の年齢を見て判断しました。

霊視モードをオフにするの忘れてたらしい。

#159　つながれた手ーつながらない未来ー

「わv」
招待されたログハウスで、饗された紅茶を一口飲んだ七季は、ほにゃっと笑み崩れて賞賛を口にした。
「この紅茶、美味しいです」
ストレートで飲んで、ほのかに甘みがありますよね。
夏といえども、クーラーで程よく冷やされたリビングのこと。
かえって、アイスティーよりも、温かい淹れたての紅茶を、黒髪の少女は喜んだ。かすかに揺れる七季のポニーテールが、犬か猫のしっぽのように錯覚させる。
「そうかそうか。なかなか味のわかるやつで嬉しいぞ」
対する金髪の幼女――エヴァンジェリンは、誇らしげに目を細めると、満足げに胸を張って、みずからも紅茶を口にした。
「まったく……」
ひとり眉間にしわを寄せているのは、褐色の肌に白い髪の男である。
アーチャーは、少し前のやりとりを思い出して、深々と嘆息した。

「よし。気に入った。礼を兼ねて、うちに招待してやろう。茶くらいは出してやる！」
あくまで尊大な口調を崩さない幼女に、当然のごとく口を挟んだのはアーチャーである。
「……七季。知らない人についていってはいけないと言っただろう」
保護者よろしく小言を垂れる、エキゾチックな風貌の偉丈夫に、

齢六百年の幼女が、むっと唇を尖らせた。
「そういえば、この男は何だ？」
「ええと、私の嫁です」
不審そうに従者を見上げた金髪ゴスロリ幼女に、七季はへにゃんと眉尻を下げて、そうのたまった。
さすがに初対面の幼女に「従者」と説明するのは憚られたので、千雨と話した折に、ぽんと飛び出したフレーズを、そのまま使うことにしたらしい。
「そうか。嫁か」
「そこはツッコむところだろう！？」
反射的にツッコミを入れてしまったアーチャーへ、高飛車な幼女は「何を無粋な」と顎先を上げる。
「ジョークも理解できんのか？
ああ、そういえば、お前の名前をまだ聞いていなかったな」
ちらりと男へ一瞥をくれてから、幼い金髪娘は、青い目を七季へと向けた。
「あ、七地七季……えっと、ナナキ＝ナナチです」
「む？　心配いらん。日本語くらいわかるぞ。漢字はどう書くのだ？」
「えーと」
たまたま居合わせた場所が公園だったため、七季はウォーキングシューズの爪先で、こりこりと地面に文字を綴った。
「なるほど、七季か。なかなか良い名前だな。私はエヴァンジェリン＝Ａ＝Ｋ＝マクダウェルだ。
呼びにくければ、エヴァと呼んで良い。七季ならば、特別に許してやろう」
「おお。何か高貴な感じですね。ありがとうございます、エヴァさん」
「ふはははは！　うむ、そこの男は『嫁』と呼んでやる」
「そのまま固定かね？！　ツッコミどころが多いぞ君！」

ってなやりとりのあと。
「あ、でも私たち、連れがいるんですよ。お呼ばれは嬉しいんですけど、ちょっと連絡取っても良いですか？」
ことりと首をかしげる黒髪の少女に、白いゴスロリ服をまとうエヴァンジェリンは「うむ」と鷹揚に頷いてみせた。
「というか、どこまで電話をかけにいったんだ、彼らは……」
まったく。
いささか呆れのにじむ声音で、アーチャーがぼやいていると。
「……あ、先輩。ええ、ちょっと別行動しても大丈夫ですか？」
ターコイズブルーの携帯電話を手に、黒髪の少女が話しだしていた。
『あ、ナナちゃん。どったの？　別行動って？』
「ええと、ちょっと困っているひとのお手伝いをしたら、お礼に、お茶をごちそうしてくださるって話に」
『わー。もう誰か引っかけたの？
あ、ミカちゃん。ナナちゃんが、ナンパされてて、お茶しに行くって』
電話の向こうで、真言が神門に事情を話している。すかさず七季はツッコミを入れた。
「先輩。ナンパちがう」
『じゃあ、ナナちゃんがナンパ？
てかアチャ男、護衛のくせして何してんのよ』
むくれた声が、携帯電話から耳に吹き込まれて、思わず七季は従者をフォローするセリフを口にする。
「アーチャーは悪くないですって。
それより、そっちはどうなったんですか？」
『んー。ミカちゃんがどっかに電話かけてる。いままで見てきた物

件は、何か気に入らないらしくって』
どうやら真言の口ぶりからすると、麻帆良での物件探しは難航しているようだ。
「ですか。んー……どうなるんですかねぇ。あ、それで別行動の件なんですけど。ちーちゃんのこともありますし、お茶をいただいたら、早めにおいとましますから。ダメですか？」
ちなみに千雨がホテルで何をしているかというと、留守番を兼ねて、クーラーのきいたホテルの部屋で、土産の本をリドルと一緒に読み漁っている最中である。
そういうわけだから、おそらく退屈はしていないと思うが。
『そういやそうだね。じゃあ、ナナちゃんたち、そっちの用が済んだら、先に戻っておいて。
夕食いっしょに食べたいから、それまでには戻ってくる。ちうたんによろしくね』
「らじゃりました。じゃあ、ホテルで合流しましょう。またあとで」
『おけー。またね』
ぷつん。
「お待たせしました。許可取れたんで、お邪魔しても良いですか？」
七季の言葉で、エヴァンジェリンの住むログハウス訪問、となったわけだ。

いっぽう、そのころ。
「――てなわけだ。麻帆良関係者の『持ち物』に住むのは、どうもな」
『ふむ。君たちにとっては、敵地も同然、か。なるほど、そんな中で拠点を確保するのは、さぞかし骨が折れるだろうな』
電話口から聞こえてくるのは、神門とさして変わらない年代の、

男の声だった。
どこかハスキーな響きが、女性でなくとも色っぽく聞こえるような、俗にいう美声というやつだ。
『ときに――私も事業で、そちらに進出するかもしれなくてね。手ごろなセカンドハウスを探そうかと思っているんだが』
ハスキーボイスの持ち主は、含むもののある声音で、先を続けた。
『物件をいくつも見てきた君の意見を、参考にしたくてね。「知人」のよしみだ。相談に乗ってくれないかな?』
「ふ、ん。ああ、かまわんが」
相手の意図を汲み取った青年は、口端を引き上げてニヤリと応じる。
『書類仕事も持ち込むだろうし、そうすると、書斎のようなものは必要かな?』
「インターネット、ブロードバンド環境は必須だろうな。できれば家具は、備え付けの方が良いんじゃないか」
セキュリティの問題もある。
『客室もあった方が、来客や友人を泊めるには、便利だろうね?』
「バスルームはともかく、それぞれの部屋にトイレはつけておいた方が不便がないぞ。もちろん、ユニットバスがついていた方が、便利だと思うが」
『なるほど……ときに、マンションのワンフロアをまとめて借りるのと、一軒家と、どっちが不都合ないだろうね?』
「一軒家の方が良いんじゃねえか?
あと、日本家屋よりも洋館だな。畳なんかの、消耗品が少なくて済む。掃除がしやすいってのもあるが」
さりげなく主夫の意見が盛り込まれた意見に、電話の向こうの話し相手は、くつくつと喉を鳴らして「感謝する」と謝辞を述べた。
『ときに――そういう物件を、建てたところで、すぐに移り住めるとは限らないのでね。もしかしたら、確保したあとで、賃貸にするかもしれない』

しらじらしいセリフを吐く相手に、やり手の守銭奴神主は、もっともらしい顔で頷いて答えた。
「ああ、そんな物件があったら、うちも借りたいもんだよ」
『おっと。つい長話をしてしまったな。いつまでと期限は切っているのかな?』
「できれば八月中に」
『そうか――幸運を祈る』
「ああ。またな、芦(あし)」
そうして通話は切れた。

「さて、どう始末をつけたものかな」
その部屋には、黒髪のつややかな美貌の男性が、壁に縫いとめられているモノを眺めて、嘆息した。
それは、「先代」アスタロト――アシュタロスの遺産。
彼によって、捕えられた獲物。
「時間移動能力者……か」
魔性の巣窟に捕われている少女の名前は、超鈴音。
百年以上先の未来からやってきた未来人であった。

#159　つながれた手ー つながらない未来ー（後書き）

あとがき

＞てなわけで原作ブレイク第二弾。

GS美神では「時間移動能力者」は、悪魔に追われ、命を狙われるという設定だったので、せっかくだから流用してみました。

あれは、メフィストの転生先である、美神を探し出して結晶を取り戻すために、アシュタロスが、時間移動能力者の始末を配下に命じたことが理由なんですが。

美神とアシュタロスが決着つける前に、タイムスリップした超鈴音が見つかってたら、間違いなく捕まってるよねと。

でもって、この話では、超鈴音が魔族サイドに捕まっているので、エヴァの従者である、茶々丸が生まれておりません。

もちろん「超包子」もない。さっちゃん、すまん。

超鈴音が生きているのは、結晶を持つにしては、あまりにお粗末な霊力だったので、魔族が徹底的に調べ、なおかつ「ハズレ」であると判明。

そのうえで、限定的にでも時間移動する手段を持った彼女から、情報を搾り取ったため。

生け捕りにできるほど、実力に差があったともいえます。

#160　つながれた手ー かけがね、ひとつ ー

「――以上が、ここ麻帆良における、おおまかな霊たちの分布と霊的拠点の印象です」

赤と金で、華やかに彩られた部屋は、とある中華料理店の個室。

そう言葉を締めくくったのは、紅茶色の瞳が印象的な、栗毛の美少年だ。

「ふむ」

伯言の報告に、神門（みかど）青年は顎をさすりながら、もう一人の少年へと目を転じた。

七季たちとは別行動していた、もう一人の幼なじみである。姿の見えない彼らは彼らで、きちんと仕事をしていたのだった。

「他に気づいたことはあるか？」

「え……と」

いったんは口ごもった若白髪の少年――霜夏は、黒髪の青年に促されて、おずおずと口を開く。

「あの、『世界樹』って呼ばれている、巨大な木なんですが……あれは天界で盗まれたって通達が来ている、『蟠桃（ばんとう）』なんじゃないかと……」

アルバイトとはいえ、神門（みかど）の書類仕事を手伝うことの多い少年は、どこかで見かけた書類の内容を、しっかり記憶していたようだ。

「は？」

かつて、斉天大聖が、天界で管理を担当していたという、天界の蟠桃園（ばんとうえん）。

その三千六百本の蟠桃（ばんとう）のうち、前列の千二百本は、三千年に一度実をつけ、それを食せば仙人になる。真ん中の千二百本は、六千年に一度実をつけ、それを食せば不老不死になる。

そして、一番奥の千二百本は、九千年に一度実をつけ、それを食せば、未来永久に生き続けられる――とされている、伝説の果物が「蟠桃（ばんとう）」である。

その苗が近年、盗まれたと、天界と交流のある政府や機関に通達がなされた。

ただし「近年」といえども、天界の神々の「近年」であるからして、少なくとも、神門（みかど）たちの生まれる前の時代であることは間違いない。

もちろん、発見しだい、すみやかに回収し、天界に返すのが当然である。

「……あれか」

神門（みかど）は、端正な顔をしかめてうなった。

帝都心霊庁にも通達が来ている以上、探さないわけではないのだが、彼らは日々、霊的な戦いや案件に忙殺されている。

そうでなくとも、ここは日本だ。

天界との交流があるとはいえ、蟠桃（ばんとう）がらみであるのなら、神仙とのかかわりが深い崑崙のある中国が妥当であろう、とたかをくくっていたのだが、まさか、こんなところで、それらしいものを見つけるとは。

もしもそれが、本当に蟠桃（ばんとう）であるのなら、いったい犯人は何をもって、こんな地に蟠桃（ばんとう）を置き去りにしたのだろうか。

「わかった。明日は、俺たちも『世界樹』とやらを確認する。くっそ、本当なら交渉ごとが増えるな。

――で、七地（後輩）。お前らの方は、何があった？」

紅い円卓の向かいに座る黒髪の少女を、神門（みかど）のうろんげな目が一瞥した。

それは、七季たちが真言と合流する、三十分前にさかのぼる。

ぱちん。
あっけなく――それは、あまりにあっけなく解き放たれた。
「あ、ごめんなさい。何か、うっかり呪いをレジストしちゃったみたいで」
わびる少女は、まるで、うっかり街中でぶつかった人間のような口ぶりで、へにょりと黒い眉を下げていた。
「い……いま、七季、お前、何をした……？」
「？……だから呪いをレジストしちゃったみたいなんです。ちょっとタチの悪そうなやつだったんで、解いたことで、エヴァさんに何か悪いことがあるわけじゃありませんけど」
あれ？　エヴァさん、呪いに気づいてましたよね？
きょとんと黒瑪瑙の瞳で見つめてくる少女に、エヴァンジェリンは、呆けたような顔を向けてしまった。
自分に絡みついていた、見えない鎖が消えている。
――あの男の、残した呪いが、綺麗さっぱりと。
それは、どんなに忌々しくとも、ひとつの「つながり」だった。
「ナギ」とエヴァンジェリンを結ぶ、絆には違いなかった。
何かが込み上げてくる、それをせき止めるように唇を噛む金髪の吸血姫に、しかし新たな驚きが降りかかったのは、七季のソプラノが何でもないように告げたからだ。
「まあ、いまごろ、呪いをかけた相手はのた打ち回っているでしょうねぇ。
人を呪わば、穴二つ――返（かや）しの風は、何倍にもなって、術者に還るものですから」
黒い瞳が、何かを追いかけるように、虚空をさまよった。
「何を馬鹿な……ナギはもう、死んで」
青い瞳を瞬くエヴァの言葉に、しかし黒髪の少女は、あどけない面持ちのまま、不思議そうに答えた。
「生きていますよ。だって、いましがた、返（かや）しの風が飛んでいくのを、この目で確認しましたから。

術者が消えたあとに破られた呪いというのは、行き場もなく、その場で霧散してしまうか、ちょっと強ければ、しばらくグルグルしたあとに、やっぱり消えてしまうんです。

破られた――私にレジストされた――とたんに、まっすぐどこかへ飛んでいきましたから、まず間違いなく生きていると思いますよ。少なくとも、術者の心臓が動いているのは、間違いないです」

「は――」

――生きていた！　あのナギ（バカ）が、生きていた！？

そのとき、吸血姫の小さな胸のうちを満たしたものは、何だっただろう。

歓喜。希望。苛立ち。憎悪。不可解。

ナギが生きていた。

また会えるかもしれない。

生きているくせに、約束を破ったナギ。

来ると言ったくせに、エヴァンジェリンを置いていったナギ。

そして、そのことを教えてくれた、この少女は、いったい何者なのか？

「七季――貴様、何者だ？

私もてこずる呪いを、あっさりとレジストし、呪詛にも通暁し、そして、そんなものを連れている貴様は」

秀麗な面輪で、鋭く目を光らせるエヴァンジェリンに、アーチャーも気配を尖らせるが、それは七季の白い手によって遮られた。

「七地七季。神門（みかど）神社のアルバイトで『神使（しんし）』やってます」

にっこり。

てらいのない笑顔を浮かべる、黒髪の少女は、六百年を生きた悪の魔法使いにも、怖（お）じる様子もなく言ってのけた。

「うちの神社、出張もやってますから。もしお祓いが必要な場合は、どうぞご用命を。もう一つの呪いは、解けてませんから。

ここに名刺、置いておきますね。それじゃあ、そろそろおいとまします」

紅茶、ごちそうさまでした。
かたんと席を立つ、ポニーテールの少女を、しかしエヴァンジェリンは、それ以上引き止めることも、追求することもしなかった。
「もう一つの……呪い……？」
はっ。
ナギの呪い「登校地獄」にごまかされていた、学園結界と連動する、彼女の魔力を削ぐ呪いが露になり、金髪の少女は、それに気を取られていたからだ。
そのあいだに、七季はアーチャーを引きつれ、エヴァンジェリンの住むログハウスを辞した。

「てなわけで、ちゃんとうちの営業もしてきましたー」
「うし、良くやった」
手を上げ報告する、小柄な少女の黒髪を、わしわしかき回し撫でて、守銭奴神主――もとい、神門（みかど）は、ふたたび考え込んだ。
「エヴァンジェリン＝Ａ＝Ｋ＝マクダウェル……『闇の福音』か。古の吸血姫が、この麻帆良に『偶然』住んでるわきゃねえな。十中八、九、麻帆良学園とつながりがあるはずだが……呪いか」
そのへんに関係があるのかもな。
チラリと神門（みかど）青年からの目配せを受けて、アーチャーが頷いた。
「ま、一日でこれだけ収穫があったんだ。まずは良しとするか。……報告書上げるの、どうせ俺だしな」
本音が多分に含まれているぼやきを洩らすも、これから神門（みかど）は、さらに調査をするのだろう。
何せ、この麻帆良に送り込まれるのは、彼の溺愛する真言である。どんなささいなことも、委細洩らさず調査するに違いなかった。
と、そこに新たな少女の声が響く。
「こんばんはー。あれ、もしかして待たせちゃったんですか？」

メガネをかけた、栗毛の少女――千雨が到着し、ようやっと今夜の晩餐が始まろうとしていた。

#１６０　つながれた手ー かけがね、ひとつ ー（後書き）

あとがき

＞短めですが、とりあえず「登校地獄」をオリ主によって解除。

そこらの怨霊を、気分ひとつで浄化できちゃうところまで来てますからね。

もう霊格低い相手のかけたものなら、呪詛の類が無造作に解けちゃうレベルです。

さよちゃんとの遭遇まで書きたかったんですが、とりあえず書ききった分まで上げておきます。

#161　つながれた手ー夜にまどいてー

「しかし何でまた、麻帆良の物件なんて探しに来たんだ？」
いや、ナナ姉たちと会えたのは嬉しいんだけど。
小声でぽそりと可愛い本音を洩らす千雨に、一瞬だけ沈黙が通り過ぎ。
――話して良いですか？
うかがう黒瑪瑙。
――いんじゃね？
答える黒水晶。
――どうせバレることだしね。
追従する琥珀。
七季、神門（みかど）、そして真言と、三者三様のアイコンタクトが交わされたあとに。
「ん。夏休み明けから、短くて半年、長くて一年くらい、私と先輩が、麻帆良のガッコに通うことになるから」
「え？」
さくっとバラした黒髪の少女の言葉に、千雨はレンズの奥の目を見開いて、我が耳を疑うことになる。

そのころ。
七季たちがいる麻帆良から、遠く離れた七地家では。
神門（みかど）神社の一行と、どこぞへ旅行に出かけたという姉を持つ、栗毛の少女が、ひとり自室で、ぶんむくれた顔をして、夏休みの宿題に向かい合っていた。

「まったく……こんな時期に……。そりゃあ、旅費があっち持ちなのは良いけどっ。だからって……受験生だって自覚あんのっ！？」

ぶちぶち独り言を言うのは、八音（はつね）のくせである。

幼なじみ連中と姉に置き去りにされた形の少女は、まあ、ありていに言えば、拗ねているのだ。

「む」

課題を解いていたルーズリーフが、残り一枚になったと気づいた八音（はつね）は、腹立ち紛れの嘆息をこぼすと、デスクの上にある目覚まし時計を確認した。

時刻は、夜八時。

まだ大きな通りなら人通りが多く、それほど危なくもないだろうと思われる時間帯である。

――早めに課題、片づけたいしね。

タレ目の少女は、かけていたメガネを外すと、薄手のパーカーを羽織ると、財布とショルダーバッグを手に、立ち上がった。

「詳しいことは省くけど、仕事がらみでね。麻帆良学園に編入することになったんだ」

で、そのために住む物件を探しに来たってわけ。

あむっと鶏のから揚げを頬張った七季は、しばらく説明を切り、もぐもぐと口を動かしていた。

聞いている千雨の方も、律儀に彼女がから揚げを飲み込むのを待っている。

すると横から、青年の声が少年たちに向けた申し渡しを投げてくる。

「言っておくが七地（兄）、それと陸家の。お前らは連れて行かねーぞ。そのへん承知しとけ」

「ちょ、何でですかっ！」

「納得いきませんっ！」
神門（みかど）の言葉に、こぞって七季の幼なじみたちが抗議の声を上げるが、傍若無人な俺様神主のセリフはもっともな内容だった。
「お前ら学校があるだろーが。さすがに高卒資格くらいはないと、うちに就職は難しいぞ」
あと、やる気があるなら大卒はとっとけ。進学については相談に乗ってやるから。
「んっく。私と先輩が選ばれたのって、偏在の魔法を使えるからですもんねぇ」
から揚げを飲み込んだ、あどけない面差しの少女が、ほにゃあっと満足げな笑顔のまま、のんきな口調でのたまった。
「偏在の……魔法？」
え、何それ。
耳慣れない単語に、ぽかーんとした栗毛メガネの少女へ、七季はにこにこしたまま、から揚げを勧める。
「ちーちゃん、このから揚げ美味しーよ」
「あ、ども」
反射的に惣菜を取り皿へとって、ぱくんとから揚げを口にした千雨は、「ホントだ。んまい」と口に出さずに相好を崩した。
仲の良い、年上の友人さながらの反応で、うまうまと料理を堪能してから、ようやく疑問を引っ張り戻す。
「ナナ姉、魔法って。使えるのか？」
「童貞でも処女でもないけどねー」
ごっふぁ！
七季の爆弾発言に、いきおいむせ返り、瀕死の少年が二人ほど出た。
幸いにも、むせ返ることこそなかったが、力あまって箸をバッキリ握り折ってしまった男も一人いる。
ちなみに、黒猫姿のリドルはというと、我関せず、といった風に、もくもくと料理を平らげている。

「ありゃ。お箸持ってきてもらおうか」
ナチュラルに反応を流す七季の対応に、メガネをかけた女子中学生は「あいかわらずのツワモノっぷり……」と彼女に振り回されているだろう、アーチャーたちへ、しみじみ同情を抱いてしまった。
「ナナちゃん。誰のせいだと……」
ちょっぴり真言の視線もジト目ぎみだ。
「まあ分身の術みたいなもんだよ。高校には、そっちの分身を行かせるから、本体の私は、しばらく麻帆良に住むってことで」
ぱたぱた手を振る黒髪の少女は、自分が引き起こした惨劇を気にした様子もない。大物である。
「ふーん……ちょっと便利そうだな」
興味深そうに呟く千雨は、けれどもそれ以上突っ込むことはしない。身の程はそこそこにわきまえているのだ。
――てーかナナ姉さん、経験済みなんだ。そーかー……相手、誰だろ？
むしろ、そっちの内容の方が気になって、好奇心がうずいた千雨である。
「この際だからバラしちまうけどな。向こうの――麻帆良学園側の言い分としては、女子中にしか、クラスに押し込める空きがないんだと。
んで、いちばん、うちで若い、真言とコイツを突っ込むことに決まったんだ。下手すると、長谷川って言ったっけな。あんたのクラスになるかもしれないぜ」
「え」
ぱっと顔を上げた千雨の表情は、少しだけ明るかった。どうして高校生を中等部に突っ込むのか、その他もろもろの疑問はあったけれど、それよりも重要なのが、七季たちの存在だった。
何しろ、日ごろから千雨の在籍するクラスは、はっちゃけ過ぎにも程がある。あのテンションについていくどころか、囲まれているだけでも疲れてしまう少女にとって、七季たちが加わるのなら、願

ってもいないことだった。
「それで訊きたいんだが……どうだ？　七地（後輩）と真言を押し込んでも、問題つーか、違和感なさそうか？」
神門（みかど）の、思いのほか真剣な問いかけに、栗毛の少女はしばらく考え込む。多国籍にも程がある、カオスなクラスメートの顔ぶれを振り返り――千雨は迷わずサムズアップした。
「違和感ないッス。問題はあるかもですけど、ふたりよりも、よっぽど変なのとか目立つ連中がそろってるんで」
びしっ。
「なるほど。そーゆークラスなわけだ」
「そーゆークラスなんです」
頷く神門（みかど）に、はああ、と深いためいきをつきつつ答える千雨は、ぐったり肩を落としている。
「ちーちゃん、お疲れだねぇ」
「ナナ姉……」
いい子いい子、と七季に撫でられて、思わずうっとりと目を細めてしまった栗毛の少女を、眺めるその場の人間と人外が思ったことは。
――猫だな。
――猫だ。
――ツンデレ？　いや。ナナキには、むしろデレっぱなしか。
――あいかわらずのたらしっぷりだな。
――可愛いなあ。
少女たちの触れ合いに、まったり和んでいる面々であった。

ところ変わって、七地家の近所。
コンビニでルーズリーフを買った八音（はつね）は、たかたか夜道を急いで

いた。
道は街頭に照らされて、ぽつりぽつりと明るいのだが、何だかきょうに限って、嫌な寒気とざわざわとした悪寒がやまない。
――何だろ。やだな。
それが、本能的な勘であると、幼い少女には気づけはしなかったが――それでも八音は、彼女なりに急いでいた。
コンビニを出たあたりは早足だったのに、いまや小走りである。
あまり運動神経の良くない八音にしたら、授業以外で珍しいことであった。自転車でないのは、単純に乗れないからだ。
ドン！
やおら、大きな音が間近で響いた。
思わず少女が振り返ると、すぐ傍の道路に、べっこり大きな陥没ができている。少なくとも、さっき彼女が通ったときにはなかったものだ。
「！」
落雷でもないだろう。暗い空には星が瞬き、きょうは昼間と同じく、快晴であることを告げている。
不可思議な――そして不気味な現象にすくみあがった八音は、細く遅い足で、それでも一目散に駆け出した。
ぼごっ。ごずっ。ダンダンダン！
恐怖をそのまま足音にしたような怪音が、少女の後ろに迫ってくる。心臓が引きつれそうになりながら、それでも八音はひた走った。
もはや彼女は、恐怖の虜となっていた。もともと八音は、気の弱い少女である。それを知性と理性で固めて武装し、いままで表面をしっかりと鎧ってきたのだ。
いくらシニカルを気取ってみても、命の危機に面したとき、彼女はただの少女であった。
「はッ……お、おねえちゃ……っ」
たすけて。
相手が不在だと知っていても、八音が思わず助けを求めたのは、

たったひとりの姉。自分とは違う、夜色をまとう少女を闇の中に探して、八音（はつね）は手を伸ばした。

怪異が足跡を刻む、暗い夜道に、炎にも似たオレンジ色が奔（はし）る。

がしり、と骨ばって逞しいものに囲い込まれる感触に、八音（はつね）は驚いた。体温があったのだ。

――え。

「荻堂さん、あと頼む！」

鋭く響く声は、別の誰かにかけられたもの。

声の主は、八音（はつね）を抱き上げたまま、その場から疾走した。

少女が走るよりもずっと早く、周りの景色が流れていく。

街灯があるといえども、暗くて良く見えない夜の中に、腕の持ち主であろう人物の、オレンジ色の髪だけが印象深かった。

ふたたび、麻帆良の中華料理店にて。

「どしたんだ、ナナ姉」

差し出された小皿に盛られた料理に、ぷるぷる首を振って拒否をする黒髪の少女へ、千雨はけげんな面持ちで問うた。

「ま……麻婆はヤなの……」

きゅん。

かるく涙目で引いている七季に、ちょっとだけ千雨がときめいたことは、彼女だけの秘密である。

「すっかりトラウマだね」

ひょいと七季の膝から身を乗り出したリドルが、ちろんとアーチャーを見やって「やれやれ」とためいきをつく。

嘆息しているのは、男も同じで、「悪かった」と沈痛な面持ちで、灰藤色の双眸が、気遣わしげに七季を見つめた。

「あ、でも」

おずおずと従者の精悍な面輪を見上げる、少女の目は、「お願い」の色を含んでいた。
「知り合いの人が、すっごい辛党でさ。あの人なら、アーチャーの麻婆、食べたがると思うんだ。今度、作ってくれる？」
くい、と袖を引かれた男が、その「お願い」を断るはずがない。
「ああ。承知した」
「ありがと」
ふわん、と笑った七季の表情に、ようやくアーチャーも安堵の色をにじませて、少女の好みそうな料理を、皿に取り分けてやるのだった。
「てか、ナナ姉がドン引く麻婆って何だよ……」
七季の食い意地を知っている千雨が、げんなりした顔でボヤく横で。
「いや。あれはかるく生物兵器になると思うブツだよ」
その場に居合わせて、事情を知っているリドルがしみじみ呟くと。
「麻婆は鬼門になったんですか……」
「今度から気をつけないとね」
アーチャーには及ばないまでも、料理の得意な少年たちが、幼なじみを釣るためのメニューに、注意書きを加えたとか、加えないとか。

さて。すっかり腹もくちくなって、機嫌よろしく七季たちが料理店を出た、その帰り道。
通りがかったコンビニで、神門（みかど）神社ご一行は、少女の地縛霊を見つけることになる。

#161　つながれた手ー夜にまどいてー（後書き）

あとがき

＞まあ、ちょっとばかし危険発言がありますが、未来の話なのでスルーしたってください。

#162　つながれた手ーナンパ？ー

「へい、お姉さん。ちょっとそこまで霊界に行ってみない？」
「先輩、それ下手なナンパみたいです」
相坂さよ。幽霊になって六十年あまり。初めてのナンパであった。

いっぽうそのころ。
七季の妹はというと。
「ケガねえか？」
ようやっと地面に下ろされたあと、オレンジ頭の少年に、街灯の下でそう問われていた。
あざやかな橙の短髪に、シャープなラインの端正な顔立ち。そろそろ声変わりは終わりそうな低い声は、夜の中に不思議な落ち着きをもたらして響く。
「な……ない、です」
そんな背の高い恩人に、八音（はつね）はどぎまぎしながら頷いた。
さっきの、とんでもない足音は、まぎれもなく命の危機だった。
それが、こんなふうに錯覚させるんだと思いつつも、少女はチラチラと救い手となった少年をうかがう。
鋭い目つきが不良っぽい、琥珀の瞳は、けれどもまっすぐで、目の前の八音（はつね）を案じている。
かたや、少女の答えにホッと息をついた一護は、「そっか」と呟くと、いくぶん強面（こわもて）と自覚のある身を、栗毛の少女から離して、ふたたび尋ねた。
「あんた、七季の知り合いだろ」

言い当てられて、ぱちんと八音は、とび色の瞳を丸くする。
「知り合いっていうか……妹、ですけど……。お兄さん、ねこ、えと、お姉ちゃんの知り合いですか？」
「ああ」
――うわ。ちょ、世間が狭すぎでしょ！
まさか、夜道で危ないところを助けてくれたのが姉の知り合いだとは。
「そっか。やっぱな。似てると思った」
ふ、と一護の鋭い双眸がやわらかい光を浮かべて緩むさまを、栗毛の少女は「あ」と、ないしん息の詰まる思いで見つめた。
八音の心臓の上を、何かがトン、と叩いていったような、そんな感覚。
長身の少年は、良く見ればルームウェアと思しきスウェット姿だったが、そんなくつろいだ格好でも、どこか目を引く容姿だ。立ち姿がスラリとして、引き締まっているからかもしれない。
「似てます、か……？
うち、良く似てない姉妹だって言われるんですけど……」
七地家の長女は、祖父母に「かぐや姫」にも例えられた、みごとな濡れ羽色の黒髪で、次女の八音は、似ても似つかない栗毛だ。
顔立ちも、百八十度、タイプが違う。卵形の顔に、小作りでありながら、すっと通った鼻筋は、低くなく、高すぎず、という七季と、面長の顔に、額が秀でている八音。
あどけない童顔なのに、くっきり書く必要もない眉と、長い睫毛にふちどられた力強い大きな目で、表情によっては凛々しくなる姉と、ちょっと薄い眉にタレ目が柔和そうに映る妹。
比べると、どうしても個々のパーツがはっきりしているため、七季の方がわかりやすい顔立ちをしている。そして性格も、姉の方がエキセントリックなのは、八音も承知していることだ。
面倒くさがりな七季だが、姉妹を並べたとき、やはり目立つのは姉の方であると、年下の少女はわかっていた

――カッコイイな。
相手が、不良っぽい見ためにも関わらず、珍しく八音は、そんな派手な容姿の異性に好感を持った。
ふだんであれば、髪を染めたりピアスをつけるような、チャラチャラした男は範疇外なのに、だ。
目の前の、年上だろう少年は、どこかストイックさを感じるからだろうか。
「う。いや、何つーか、そのっ。こ、声とか……？」
――まさか霊力の気配が似てるなんて、言いにくいことこのうえないぞオイ。
セルフツッコミを入れつつ、わたわたするオレンジ頭の少年に、八音はくすりと笑みを洩らした。
――あ、何か可愛い。
見た目に反して、目の前の少年は優しそうだ、と栗毛の少女は判断した。
それに悔しいが、姉の人を見る目はなかなかのもので、どんなにすっ飛んだ性格であろうが、その芯はマトモな人間しか、傍に置かない。
七季を利用しようとか、傷つけるような人間には、はなから彼女は近づかないのだ。
そして、そういう人間が、八音に害をなす確率も、非常に低い。
何故なら、七季はシスコンなのだから。彼女を良く知る人間なら、まず八音に危害を加えるようなことはしないはずだった。
「さっきは、危ないところを助けてもらって、ありがとうございます」
ぺこり、と八音は頭を下げて礼を言った。
「ああ、いや。どういたしまして」
「お姉ちゃんの妹で、七地八音って言います。それで、お兄さんは？」
「黒崎一護。あんたの姉貴の知り合い……つーか、ダチで、同業者

だ」

#162　つながれた手ーナンパ？ー（後書き）

あとがき

＞短くてすみませんが、とりあえず、書けたところまで。

気がついたら、オリ主の妹と一護が、ナンパみたいな会話になっていた不思議。

#163　つながれた手ー彼の岸、此の岸ー

「ほほう。成仏の仕方がわからなくて、六十年以上も」
コンビニ前では目立つので、ちょいととところ変わって、麻帆良学園の近くにある物陰にて。
ふみふみと、すきとおったセーラー服姿の少女――決して服が透き通っているわけではない――の、身の上話を、ひとしきり聞いた真言は、やおら、にゅっと細長いものをとりだした。
「じゃ、魂葬いっとく？」
――あれ？
その刀に、七季主従は、非常に見覚えがあった。
ひごろ、真言が振り回すご神刀ではない、黒塗りの鞘。
「ってもしかしなくても斬魄刀――っ」
尸魂界に預けたんじゃなかったんですか！
さすがにぎょっとする黒髪の少女の驚嘆も、何のその。
「預けてたよ。呼んだだけ」
しれっとのたまう栗毛の神妻は、斬魄刀の柄を、さよと名乗った幽霊少女の額に、ぽんとハンコよろしく押しつけて、さまよえる霊を送る「魂葬」を行った。
「あ……」
すうっと、さよの輪郭が、夜の闇に溶けていく。
「大丈夫。成仏ってーか、昇天するだけだから。心配いらないよ」
ひらひらと手を振る真言の横で、七季と神門、そして二人に釣られたように、千雨も手を合わせていた。
宗派が違うリドルは、それでもかるく十字をきってやり、アーチャーや伯言、霜夏といった男たちも、合掌する。祈りの形は、案外似ているものだ。

――安らかに眠ってください。
それが、送る少女への、何よりの手向けだった。

霊界。
一口に霊界といえども、ここは現世からやってきた、霊なるものたちを振り分ける、受付のような場所――閻魔庁である。
天井の高い広間のような場所で、おしゃぶりをくわえた幼児が、重厚なデスクに就いていた。コエンマと呼ばれる彼は、何を隠そう、閻魔大王の息子である。
さておき。
彼は新しくやってきた幽霊少女を認め、がさがさと古い閻魔帳を取り出した。
「フム……ここに来るまでに、ずいぶんかかったのう……。まあ良い。相坂さよ、お主は西流魂街一地区『潤林安』へ送られる」
「は、はい」
「連れて行ってやれ」
「はい、コエンマ様」
大きな帽子をかぶった幼児が手を振ると、控えていた鬼が、さよを促して案内する。
鬼が案内につくことで、さよは、てっきり自分は地獄行きなのだと勘違いして、すっかり消沈しているが、ほどなく彼女は待っていた馬車に乗せられた。他の死者――であろう――も一緒だ。
手綱を取るのは、馬の頭を持った鬼、馬頭（めず）である。
がたがたと揺れる馬車の中は、箱型で広く、ちょっと乗り合いバスの様相に似ていた。小さく四角い窓ガラスみたいなのぞき窓からは、荒れ果てた道が車窓を流れていくのが見える。
やがて馬車は止まり、扉は開かれた。
ちょっと室町時代の下町を思わせる、平屋の並んだ町並みが、開

けた視界にうかがえた。
あたりには、新入りを見に来た、物見高い先達が、わらわらと人垣を作っていた。
基本的に、尸魂界では、老若男女混じった、家族のような集団を形成して生活するのが常である。死者は常に追加されるが、住んでいるものは永住というわけではなく、やがて時が来れば、あらたな旅路につくことになる。
と。
「さよっ！」
高い女の声が、人垣の中からまろび出た。
「……あ」
「さよ、さよっ！」
手を伸ばす中年の女性。そのうしろから現れた、同じくらいの男性。どちらも穏やかそうで、少しずつ、さよに似ていた。
長い、つやのある髪は母に。優しげな口元は父に。
「お……お母さんっ、お父さんっ！」
馬車から転がるようにして降りた少女は、ひしと母親に抱きついた。その二人を、今度は父親の腕が包み込む。
「まったく……この子は！　心配ばっかりかけて！」
「さよは寝坊が過ぎるぞ」
呆れたように言いながら、それでも娘の黒髪を撫でる男の手は、戦いを知るもののそれだった。
優しい手のひら。あたたかい声が、また聞けるなんて。
二親にきゅうきゅう抱き締められながら、下界で孤独な浮世暮らしをしていた少女は、歓喜に満ちた涙をあふれさせながら、久方ぶりに思い切り泣いたのだった。
かたや、そのころ瀞霊廷では。

保管されていたはずの斬魄刀「烏衣（うい）」が消えたことで、「王水（おうすい）」も紛失、死神たちの間で、ちょっとしたパニックが起きていたという。

「あああ……ぜーったい、尸魂界で大騒ぎになってますよ！　もう！」

――まさか「王水」も呼んだら出てくる、なんてこと……ないよな？

自分の斬魄刀と、一緒に保管されていたはずの「烏衣（うい）」を、おそるおそるうかがう七季に、「ああ」と真言は何でもないように、それを投げ渡した。

「ほい。ナナちゃんの。ついでに『烏衣（うい）』が連れて来たらしーよ」

「うわ！」

反射的に、それを受け取った少女は、はたと我に返って、全身全霊でツッコミに走る。

「連れてきちゃダメでしょーがあぁっ！」

――ななき……会いたく、なかった……？

「いや、えっとね！？」

ものすごくしょげ返った響きをよこす、幼い斬魄刀を慰めるため、珍しく七季が振り回されたことは、いうまでもない。

「へえぇ……そう。お姉ちゃん、そんなことしてたんだぁ……？」

そのころ、一護から、姉が退魔業なるものをしていたことを知らされた八音が、それはそれは不穏な声音で、くくくと笑っていたことを、七季は知る由もなかった。

――悪い、七季。何か妹さん怒らせた。けど、家族に進路ごと隠

してんのもどうかと思うぞ？
　額に汗を流しつつ、栗毛の少女を自宅まで送るオレンジ頭の少年は、そう胸のうちで、ひとりごちていた。

#163　つながれた手ー彼の岸、此の岸ー（後書き）

あとがき

＞ブリーチでは「死者は、死後、尸魂界へ辿り着くと、まず担当の死神により各所へ無作為に振り分けられる。そのため、どの地区へ行くかは完全に運任せで生前の家族に会うこともまずできない」とあります。

しかし、この話では、コエンマたちのいる閻魔庁で、死者の功罪を量り、それによって流魂街のどの地区に振り分けられるかが決定される、という設定にしております。

ちょうど良くキャラもいるんで、捏造、捏造（笑）。

あとオリ主、妹に隠し事がバレました。

#１６４　つながれた手ー夜に哭（な）くー

さよの魂葬も終わり、七季一行は、その足でホテルへと向かった。
今回は、麻帆良の案内役を務めてくれる千雨の分も、経費で部屋を取っているので、寮には帰らずに一緒である。
夏休みということもあり、「麻帆良を訪れた友人と、保護者つきで外泊する」旨を申請したところ、学生寮の寮母さんからは、快く許可をもらえたことを、つけ加えておく。
「おやすみなさーい」
「おやすみ～」
「おやすみ。ナナ姉、姫さん。ところで……私まで、個室取ってもらって良かった……ん、ですか？」
七季たちと一緒でも良かったのに、と暗に洩らす千雨に、神門（みかど）はパタパタと手を振って流した。
「ついでだしな。あと、明日の朝食は、バイキングなんだが、洋食と和食、どっちにする？」
「和食……かな。洋食は、ふだん食べてるから」
「オーライ。んじゃ、七時ごろに、一階のラウンジ集合な。寝過ごしても、十時まではホテル動かないから、そんときは勝手に食べるように。」
まるで引率の先生じみたセリフを吐く長身の青年に、少しだけ千雨は笑みを誘われた。
「七時ですね。わかりました」
「ん」と返して、彼は、そのまま、真言の部屋へと入っていく。
――ん？
思わず、千雨があたりを見回すと、七季の部屋へ、白い髪の偉丈

夫が入っていくところだった。
――あれ？
「ちょっと神門（みかど）さん！　どーしてアーチャーさんが、ナナと同室なんですかっ！」
栗毛のメガネ少女と、同じ疑問を抱いた人間が、他にもいたらしい。
若白髪の少年が、はっしとすんでのところで青年のジャケットを捕まえて、問いただしていた。
伯言の方はというと、アーチャーのジャケットを捕まえて引き止めている。
「あん？　ホテルの廊下で騒ぐなお前ら。迷惑だろうが」
とたんに声をひそめる霜夏は、やはり根が良い子である。
「……っ。だから、アーチャーさんとナナは別室じゃないんですかっ」
それでも、きゃんきゃん噛みつく少年に、切り返す男の声音は泰然としている。
「そりゃー、お前らが来たからな」
あからさまに面倒そうな面持ちで、神門（みかど）は端正な顔をしかめつつ答えた。
「ツインをお前らに割り振っただろ？
ありゃあ、もともとリドルとアチャ男に割り当てるつもりの部屋だ。
ただ、やつら霊体化できるし、別に眠らなくても良いからな。それをお前らに譲っただけ。んで、あいつらは七地（後輩）の従者だから、そのまま主んとこに引き取らせた。オーケー？」
『うぐっ』
幼なじみ恋しさに、この旅行についてきた少年たちは、仲良く言葉に詰まった。
ようするに、彼らが来なければ、七季とアーチャーたちの同室はなかったわけで。

裏を返せば、自業自得、ということになる。
「ちなみに、こっちはツインだ。俺が真言の世話をするんだから当然だな」
で、何か質問があるのか？
『ううう～』
若白髪と栗毛の美少年たちが、そろって仲良くうめき声のハミングを上げている。
「良しハウス。とっとと部屋に入って寝てしまえ。あ、有料チャンネルは自腹だぞ。経費で落ちねえからな」
『見ませんよ！』
タチの悪い笑みを浮かべる守銭奴神主の言葉に、わんこあつかいされた伯言と霜夏は、口をそろえて反論した。息はピッタリである。さすが長い付き合いというべきか。
いささか憤然とした足取りで、部屋へと引っ込んだ少年たちを見届けて、千雨も割り当てられた部屋へ引き取った。
――なるほど。あの人たちは、ナナ姉が好きなわけか。
しかし、日中、目にした、アーチャーと彼女の睦まじさを見る限り、彼らの分は悪そうだな、と千雨が服を脱ぎながら考えているころ。

「けどミカちゃん。ナナちゃんの部屋、ダブルだよね」
ドアが閉まったあと。
そんな真言のツッコミに、青年神主は、端正な面差しでぬけぬけと言い放つのだった。
「訊かれなかったからな」

さて夜半。

「……マスター、マスター」

「んぅ……？」

黒髪をベッドに散らして眠る少女は、降ってくる低い声と、肩を包む手のひらに揺り起こされ、はたりとひとつ瞬きをした。

「あーちゃ？」

舌足らずなソプラノが、男の名を呼んだ。語尾を伸ばしきれていないあたり、まだ寝ぼけているのだろう。

薄闇の中に、浮かび上がるシルエット。

ぱちり、と灯されたフットライトに照らされた白い髪を見上げて、七季は横たわったまま、もう二、三度瞬きをしてから、自分の耳が濡れていることに気づく。

「？　どしたん？」

目尻から流れたものが、そのまま耳元まで伝ったのだろう。

それが、ちょっと居心地悪く、七季はゆっくりと体を起こして従者に問いかけた。

「どしたんだ、アーチャー？」

「それは、こっちのセリフなんだが……」

嘆息する男は、広いベッドに片膝で乗り上げ、少女の目尻をそっと撫でた。鋼色の瞳が、心配そうに七季の姿を映して揺れる。

「横になってからずっと、涙を流しているから、いったいどうしたのかと……何か、気がかりでもあるのかね？」

「ん……」

すぐ傍に向かい合っているアーチャーの、逞しい胸板に、七季はすり、と懐いてもたれた。

「わたしは、だいじょーぶ。ときどきあるんだよ。こーゆーの」

悲しくもないのに、涙があふれて止まらないことが。

少女の細い腕が、アーチャーの背中に回り、きゅっとしがみついて肌を重ねた。

男の胸元が、七季の涙に少しだけ、しっとりと濡れる。

「だいたい一晩で収まるから……心配させて、ごめんな。何でもないから」
そう呟く少女は、クーラーのきいた部屋で、寄り添った男の体温に、ほっと安堵の息をこぼす。
「目を冷やした方が。濡れタオルを持って来ようか」
あいかわらずの、かいがいしさを発揮する従者に、七季の唇がくすりと笑う吐息を洩らした。
「濡れてたら、涙を吸ってくれないよ。良いから、ここにいて」
少女の手に引かれて、アーチャーはベッドに肘をつく。
「マスター」
ぎし、とダブルベッドが男の体重を受け止めてきしむ。
「大丈夫だから。一緒に寝よ？」
すがるように、甘えるように首を抱かれた従者は、寄り添う七季のやわらかさに、目眩を覚えながら目を閉じた。
「……まったく。困ったマスターだ」
「ん。ありがと」
ふにゃん。
背中に回った力強い腕に抱き寄せられるのを感じながら、涙を流し続けるあどけない顔の娘は、そっと瞑目して男の胸に顔を埋めた。

＋おまけ＋
そのころはリドルは何をしていたのかというと。
空気を読んで、いなくなった　ＯＲ　隠れていた――わけではなく。

七季が泣き始めてすぐ、その涙を舐め取っていたリドル（少年ばーじょん）は、そのまま彼女の浴衣をはだけて、あらぬところまで舐め始めたので、弓兵とデバイス「黎明」の制裁を食らって、睡眠

薬の餌食になっていましたとさ。

#１６４　つながれた手ー夜に哭（な）くー（後書き）

あとがき

＞ナニモシテイマセンヨー。

弓兵は添い寝だけです。今回は。（「は」て）

オリ主が泣いたのは、いちおう理由があります。

◆斬魄刀の設定

◆真言：「烏衣（ういのおきながたらしひめ）／烏衣息長帯比売」
＞五色の糸が巻かれた柄に、透き通った桜色の刀身。

始解（しかい）：刀身とは別に、ちみっこ七季そっくりの分身を生み出す。分身は、ギリアン寄せ・自爆・偵察など、何でもこなす。しゃべりはしないが、話は通じる。お菓子をもらうと喜ぶ。元ネタはジバクくん。

卍解（ばんかい）：軍師バージョン大人（アダルト）七季そっくりの本体が実体化。ホーミング機能つきの、ごんぶとビームが出せる（セロ）。
本体：七季が大人になった姿そっくりの女性。中華風の黒衣をまとっている。

解号「夜を率（い）て春天に誘（いざな）え　烏衣（ういのおきながたらしひめ）」
※いる【率る／将る】：1）人を連れて行く。ひきいる。　2）物を身に携えて行く。

元ネタは神功皇后（じんぐうこうごう）の別名「息長帯比売（おきながたらしひめ）」から。

◆七季：「王水（おうすい）／酒天滄溟王水（しゅてんそうめいおうすい）」
＞少し短めで黒鞘の刀。

始解：水のように気体・液体・固体と変化できる機能を持ち、魂魄を溶かすことも癒すこともできる。灰猫の水版。
卍解：「生老病死」から一つの効果を選んで、相手に攻撃すること

ができる。
本体：五つの角杯（つのさかずき）を宙に浮かべ、目玉みたいな十五の天珠を首にかけた、赤毛に黒い一対の角を生やした、金睛眼の男児。ちびっこ士郎そっくりで青い水干をまとっている。
解号「波雲（なみくも）の愛（うつく）し贄をきこしめせ　王水（おうすい）」

※波雲の愛し：波形の雲の美しい意から、「愛（うつく）し」にかかる枕詞。
元ネタは「酒呑童子（しゅてんどうじ）」

まあ、これ以降、アーチャーたちの斬魄刀は出番ないですが、ついでに（待て）。
いや元々霊体なんだから、ガチでやれそうだし。

◆アーチャー：「切嗣（きりつぐ）／刻帝因果切嗣（こくていいんがきりつぐ）」
＞西洋風の銃剣。霊力で弾頭を装填しているため、弾丸はリロードいらず。

始解：撃鉄を起こすことで、半径二キロ内の、任意の対象の体内時間を操作できる「刻令（こくれい）」という効果を持つ。元ネタは固有時制御。
卍解：撃った相手の「因果を切り嗣ぎ、狂わせる」という弾丸「逆次（さかつぎ）」を撃てる。こちらも元ネタは「起源弾」。
本体：赤毛と琥珀の瞳のほかは、切嗣そっくりな男。ただし、衛宮士郎が知るよりも、やや若い。漆黒の礼装に銀時計を持つ。
解号「しろしめせ切嗣」

◆リドル：「遠呂知（おろち）／高志之八俣遠呂知（こしのやまたのおろち）」、＞細めの蛇矛（だぼう）。

始解：猛毒持ちの、炎を吐ける大蛇が出てくる。ただし一体。狡猾な性格で独立した意思を持つ。

卍解：八頭八尾の大蛇が出てくる。スペックは始解と同じ。

本体：校舎サイズの八頭八尾の大蛇。モデルはもちろんヤマタノオロチ。

解号「貪れ、遠呂知（おろち）」

＃１６５　ＩＦ～彼（か）のものの名は（前書き）

まえがき
＞ネタです。「＃１５３」の設定でどうぞ。

#165　IF～彼（か）のものの名は

熱風に踊る黒髪。
灼熱の夜になびくそれは、戦旗のように。
まっすく前を見据える横顔は、あどけないのに、どこまでも凛々しかった――

ナナキ＝スプリングフィールド。
それが、彼にとって愛すべき姉の名前。
彼女が契約を交わした悪魔・ヘルマンの手によって、スプリングフィールド姉弟が、惨劇の起こった故郷をあとにしてたどりついたのは、日本と言う国。
ネギと同じ国に生まれたはずの幼女は、その黒髪と、同じ眼の色によって、たやすくこの国に溶け込み、赤毛の弟の手を引いて、あちこちを歩き回った。
ヘルマンは紳士然とした老人に化け、幼い彼らの保護者へと扮する。
そうして、新しい生活は幕を開けた。

「凄いね、お姉ちゃん！」
子供特有の頭のやわらかさと、もともと知能指数は高めだったネギは、みるみる日本語を習得していった。
それは、日本人である前世の記憶を持つ、七季すらも舌を巻くほ

どに。
「ネギは頑張りやさんだね。賢いね」
「うん！　僕、もっと頑張るよ！」
――お姉ちゃんが褒めてくれた！
大好きな姉に褒められた男の子は、ますます熱心に勉強し、本を読み、語彙を増やし、知識を求めるようになる。
そうなると、情報にあふれ、娯楽の多い日本という国は、いままでウェールズの片田舎に住んでいた子供にとっては、楽しくて仕方がない、オモチャ箱みたいな土地である。
遊園地。映画館。水族館に、動物園。
アニメにマンガ、ゲームにカラオケ。
いかに悪魔といえども、孫ポジションの幼児たちに、連日あちこちに連れまわされるヘルマンが、思わずぐったりしてしまうほど、といえば、少しはそのアクティブさが理解できるだろうか。
彼らは日系イギリス人ということで、ご近所づきあいも抜かりなく、しゃあしゃあとした顔で一軒家に住み着くと、「七地」という表札をかけて、いたって平和に暮らし始めた。
生活費はというと、幼児のネギに稼げるはずもないから、この場合はヘルマン――かというと、じつは七季が出所であった。
中身はとっくに大人の彼女は、ヘルマンを代表に立て、自分は巫女という触れ込みで、その身にそなわる「神使（しんし）」としての能力を存分に活用して、「お祓い」で稼いでいたのである。
まあ、ちょっとした新興宗教みたいなものだ。
魔法使いが存在し、「関西呪術協会」なるものもある世界に、悪霊がいないはずがない。
幼いけれども、その穢れを祓う力は、まぎれもない一級品。
七季は、その運の良さも手伝って、次第に顧客の層を厚くしていくことになる。

しかし優秀であることが、いつでも有利に働くわけではない。
名前が売れれば、必然、余計なものも呼び込むことになるからだ。
平穏が破られるのは、いつでも突然で。
前触れもなく、そいつらはやってくるのだ。

「ようやく見つけた……！」
自称「立派な魔法使い」。
メガネをかけた壮年の男が、「お祓い」の客でないことは、ずかずかと踏み入ってくることから、すぐさま七季は察した。
ここでも変わらず、材質こそ違えども、まっくろな巫女服を身にまとう、黒髪の幼女は、傍らに控える老人――に扮した従者――へと、指示を飛ばす。
「ヘルマン、ネギを連れて逃げてっ」
「まさか悪魔と一緒に暮らしているとは」
「英雄の子供」であるネギたちを、迎えに来たと言いながら、子供を抱える悪魔・ヘルマンに向かって「魔法の矢」を差し向ける魔法使いたち。
それをレジストするため、黒髪の幼女は、幼い弟と、人外の従者の前に立ちふさがった。
「お姉ちゃん！」
「いきなさい！」
小学生とは思えない、腹の底まで響くようなソプラノが、凛と聞くものの耳を打つ。
「神使（しんし）」たるべき、七季の手にかかれば、精霊魔法など、ものの数ではない。
彼女と相性のいい水や風、闇はいうに及ばず、その他の属性魔法も、のきなみ七季の対魔力によってレジストされ、無効化される。

そうでなくとも、スプリングフィールド姉弟の体には、「大戦の英雄」ナギの血だけではなく、ウェスペルタティア王国の姫君・アリカの血が受け継がれている。

いわんや、他でもない七季のこと。

ウェスペルタティア王族の血筋に、しばしば生じる「完全魔法無効化能力」を持つ、特別な子供――「黄昏の姫御子」のひとりとして、とうに目覚めていた。

狙いの甘い、「魔法の矢」が、赤毛の子供を傷つけるより先に、それらは、たったひとり、黒髪の幼女にかき消されていく。

依然として、ネギ（かぞく）とヘルマンの前から動かない七季は、彼らの殿（しんがり）を務める気だと、魔性の従者にはたやすく知れた。

「ナナキお姉ちゃんもいっしょに……ッ！」

赤毛の男の子は、ヘルマンの懐から、小さな手をめいっぱい伸ばすも、それは彼よりも少し大きいだけの、華奢な背中には、届かない。

品の良い、和装姿の老人を装ったままのヘルマンは、既に転移用のゲートを完成させていた。

見ためは幼くとも、弟を守護するために立ちふさがる七季は、まぎれもないヘルマンの主だ。彼女との約束を、違えるわけにはいかない。

彼は好戦的な悪魔でありながら、ただネギを守って撤退するだけの役目を、このうえなく誇らしく思った。

それは彼女にとって、どれだけの信頼だろう。

幼い、愛すべき、大事な大事な弟を託される――その誇り。

七季に信じられる、そのことが、ヘルマンには何よりもかがやかしい栄誉であり、同時に苦い毒であった。

――何故なら彼女は、ヘルマンがいるのならば、自分がいなくてもネギは大丈夫だと信じている。

「ネギは私の弟だ。あんたたちの操り人形なんかにはさせない！」

毅然と顔を上げて、ただ「ナギ」の影を盲信する魔法使いに相対

する七季の役目は、ただ一つ。
ネギとヘルマンが逃げる時間を稼ぐこと。
「お姉ちゃあああああぁぁん！」
時間にして、わずか数秒。
始めに部屋に踏み入った、壮年の男から放たれる、見えない拳に打ち倒される姉の姿を最後に、ネギはその場から離脱した。

ふたたび行方をくらましたネギを探し、魔法使いたちは、「ナギの子供」の片割れを、どうにか引っ張り出そうと腐心する。
いっぽう、ヘルマンとともに身を隠したネギは、捕われた姉を取り戻すべく、その居所を探し回った。
わずかな希望は、ヘルマンの持つパクティオーカード。
ネギも、どさくさまぎれに七季と作ったのだが、それは弟にはまだ早い、と取り上げられてしまったのだ。
ヘルマンのカードは、

称号：地獄の拳闘士
色調：黒
徳性：知恵
方位：北
星辰性：冥王星
アーティファクト：悪魔の偽典

ただ、この「悪魔の偽典」というアーティファクトは、七季の捜索には、まったく役に立たない、攻撃と防御に特化したシロモノであることを、ヘルマンじしんが説明した。
黒い外套の形を取る、このアーティファクトは、ありとあらゆる聖句が刻まれたことによって黒に見えるだけの白い外套で、これを

まとえば、たとえ悪魔のヘルマンであろうと、聖なる加護を受けることができる一品である。

同時に、聖なるものからの攻撃も完全に無効化するという、魔性のものにとって、このうえないアーティファクトなのだ。

これが、どう攻撃にも特化しているかというと――理由は簡単で、無効化された攻撃は、消えるわけではなく、相手に跳ね返されるから、という、いたって単純ながら、恐ろしい効果を持つからである。

ちなみにこれは、従者だけでなく、他者にも身につけさせることができる。

つまり、七季を守ってヘルマンが戦う場合、このうえない武器となるはずのものであった。

どうしてこれを使わなかったかといえば、それもまた、七季が理由である。

彼女は、これをヘルマンとネギを守るために使うように命じて、最後まで彼らを庇ったのだ。

ヘルマンたちの切り札が、ばれないように。彼らを確実に逃がすために。

あの中で、最も非力かつ、足手まといだったのは、どう考えてもネギだった。

ヘルマンの主は、弟を守るべく、そのアーティファクトを温存させたのである。

石化の魔法を使わせないのも、大ざっぱに言えば、ネギを守るため。

ヘルマンは、七季たちの村を襲わせた契約者には隠れて、ネギたち、スプリングフィールド姉弟を育てていた。

しかし、ヘルマンが、ここで石化の魔法を使ってしまえば、そこから足が着くかもしれないと、七季は考えたのだ。

幼い外見の主に諭された悪魔は、彼女の判断に是と答えた。

泣きじゃくっていたネギに、ヘルマンは半ば、呪詛のごとくに、淡々と、しかしながらこんこんと吹き込み続けた。

七季は、ネギを守るために犠牲になったのだと。
彼女は、誰よりもネギを愛していたと。

それは、紛れもなく嫉妬からくるものであった。
ヘルマンは、ただの契約だけではなく、神との契約を魂に刻んだ、あの黒髪の幼女を慕っていた。
いわば彼女は、この悪魔にとって、大事な大事な掌中の珠であった。

それを奪われたのは、ヘルマンにとって屈辱きわまりないことには違いなかったが、そんな失態も、本をただせば、ネギという足手まといがいたからである。
七季は、弟を守るために残り、ために魔法使いたちに捕われた。
彼女に命じられたのでなければ、そこそこ手間をかけて育てたネギだろうと、ただちに放り投げて、七季だけを守ったものを、とヘルマンはないしん歯噛みさえしていたのだ。

さて。
ここで改めて考えなくてはならないのは、ヘルマンが悪魔であることだ。
人知を超える存在が、本当に人間一人を見失うだろうか？

ヘルマンは、既に、捕われた七季の身柄が、どういうことになっていたのか、知っていた。
彼が探していたのは、彼女の「中身」である。
捕われて拘束された肉体から抜け出した、七季の魂は、仕(つか)えるべ

き主を捜し求めて、すぐさま千里を駆けた。霊体ならではの荒業である。

その間に、眠ったままの「ナギの娘」の体は、身勝手な魔法使いたちの手に落ちた。

同時にヘルマンは、幼いネギを連れまわしながら、魔法使いたちに対する、その疑念と憎しみを育て上げ、絶望まで昇華させることをもくろみ――。

育てた果実は、ついに結実した。

否、弾けたといった方が良いだろうか。

ネギが、ようやく探し当てた七季の姿を見たとき。

ぱきり、と何かが砕けた。

一つしか違わないはずの姉の体は、投薬によって不自然な成長を遂げ。

眠ったままの――魂が抜け出した――体は、機械につながれて脈を打ち。

白い、白い、まっしろな雪色の肌に群がる、見知らぬ大人たち。

彼女の黒髪が、白い病室にくっきりと浮き上がって、ネギの目に焼きついた。

「英雄」の血を引く「胎盤」としてあつかわれる家族の姿を、聡明すぎる少年は理解してしまい――

闇が、生まれた。

狂うことはできず。

許すこともできず。

尊い血を宿す少年は、その日、悪魔と契約する。

「滅ぼしてあげます。魔法使い。あなたたちが、僕からすべてを奪った」

こんな世界は、いらない。

やがて、姉を失った少年と、主を恋い慕う悪魔は、愛するものを探すために研究を積み重ね、平行世界を移動する術を開発。

彼らは肉体を捨て、長い、長い、旅に出る。

「彼女」が生きている世界へとたどり着くために。

そして。

「ナナキお姉ちゃん！」

「へ？」

赤毛の少年は、ネギ＝スプリングフィールドを知らない、七季を見つける。

姉ではない、彼女に驚きながらも、まぎれもなく「七季」である魂の持ち主を見つけた、異世界のネギは、道連れであるヘルマンとともに、この世界での安住を決めた。

彼が憑依した器は、「ネギ＝スプリングフィールド」。

この世界での彼じしん。

――でも、「立派な魔法使い」なんていらない。

ろくに覚えてもいない、愛情ひとつかけられた覚えのない父親に憧れる「ネギ」もいらない。

この世界の「ネギ」の魂は、長いこと付き合ってくれた、ヘルマンへの代価に。

そして、残された器は、「七地ネギ」である自分がもらう。

今度こそ、最愛の姉を守るためにと、かつて魔法世界を滅ぼした少年は、出会って間もない黒髪の少女へ、とびきりの笑顔を向けて抱きついた。

――そう。今度こそ、僕らは幸せになる。

#１６５　ＩＦ～彼（か）のものの名は（後書き）

あとがき

＞「＃１５３」の焼き直しというか、何というか。

まあ同設定でエイプリルフールねたです。

お付き合いありがとうございました（・∀・）ノシ

自分で書いておいてなんですが、薄暗いなー。

あ、幽体離脱してランナウェイした「七地ネギ」の姉オリ主は、運良く、探しに来たチートな先輩とアーチャーたちに見つかり、問答無用で拉致られました。魂だけで。

弟・ネギのことを迎えに行くヒマもなかったとです。

そして取り残され、魔王ルート一直線になった「七地ネギ」。

生命維持装置を外したので、お姉ちゃんはお亡くなり。魂がないことは、ヘルマンが報告済みだったので。

そして、「七地ネギ」はヘルマンと一緒に

宝石翁よろしく平行世界を移動する術を開発。

▼

「姉（オリ主）が生きている世界」を捜し求めて、世界を渡り歩きます。

ただし世界の壁に開ける穴が小さいので、魂だけで移動。ヘルマンじーちゃんつき。

▼

「オリ主のいる世界」に到達。この世界のネギに「七地ネギ」が憑依。

な、流れになります。
続きは書きません（笑）。

#166　四月の魚（前書き）

まえがき
＞おまけのエイプリルフールこぼれ話です。

#166　四月の魚

それは、とある三月の末日のこと。
「アーチャー。ちょっとこっち来て」
こいこい、と黒髪の少女に手招きされた人外の従者は、七季に呼ばれると、すうっと音もなく現界し、白い髪をいただく男の姿を編んだ。
「何だね？」
場所は七季の自室である。
ふだんは用がなければ霊体化しているアーチャーは、ベッドに寝転がる少女の枕元に控える形で現れる。
とたん。
ぐいっと首を抱かれたかと思うと、「パシャリ」という、いかにも人工的なシャッター音がして、はたと状況に思い至った。
「写真嫌いの君まで一緒に映るとは珍しいが……いったい何に使うのだね」
いましがた撮った写真を、ターコイズブルーの携帯電話で確認している少女へ、アーチャーは呆れ半分の声をかける。
「おー。撮れてる撮れてる……ん？　えっとな」
ごにょごにょごにょ。
耳打ちされた男は、ささやかれた言葉に少し考えて、せっかくだからと、その話に乗ることにした。
「ならばマスター。やるからには、徹底的にやりたまえ」
イベントごとには、意外と熱を入れてしまうアーチャーは、その執事スキルを存分に発揮するべく、今度は七季の方を抱え込んで、何やら指導をし始めた。

翌日の四月一日。
一通のメールが、帝都心霊庁とその関係者に、ひそかな驚き――どころか、激震をもたらした。
『結婚しました。』
添付されていた画像は、白いドレスにレースのベールをまとった、黒髪の少女――七季と、彼女を抱き上げている、鋼色の瞳が鋭い男。
いくぶん年の差がある――そして体格差もある――男女の指には、それを誇示するかのようにそろえた指に光る、白銀色のリング。
褐色の肌に、白いタキシードが眩しい、新郎と思しきアーチャーの傍には、どこか彼に似た面影のある、赤毛の幼い男の子がしがみついて。
まるで二人の子供のように映ることは、いうまでもない。
『七地――ッ！』
問答無用で呼び出された黒髪の少女は、そのあどけない面輪にけろっとした表情を浮かべて、堂々と言ってのけた。
「エイプリル・フールですから」
『お前らの場合はシャレにならんから止めろ！』
帝都心霊庁の職員から、総ツッコミを食らった七季は、ドレスをはじめ、指輪などの小道具をそろえてきた従者の、ノリの良さへのツッコミはないんだろうかと、ないしん首をかしげていたという。

「去年は、私がタキシード着て、先輩が花嫁役やったら、神門（みかど）さんに泣かれてさー」
だから今回は、相手を変えてみたんだけど。
騒ぎが収まったあと、過去やらかした「エイプリル・フールのできごと」を語る少女の話に、

――うん。それもシャレにならないから。
霜夏と伯言、ついでにリドルやアーチャーまでが、うちなるツッコミを入れたことは、いうまでもない。
「しかし、この子……どっかアーチャーさんに似てるんだけど……」
「あ、それ王水（おうすい）」
おのが斬魄刀（ざんぱくとう）の名を口にする七季は「あの子もノリノリだったなぁ、そういえば」と考えながら、お茶をすする。
主が大好きな、幼い斬魄刀は、綺麗な格好をした七季の姿に、それはそれはご機嫌だったのを、七季はぼんやり思い出した。
――えっらいテンション高かったなぁ……。
「このドレス、どこから調達してきたんですか？」
栗毛の少年が、オフィスの一角にある座敷――もともとは宿直スペースなのだが――で、七季と同じく茶を飲みながら問いを投げれば。
「アーチャーが持ってきた。手縫いだって言ってたけど」
「マジでか」
答える少女の言葉に、もう一人の幼なじみ・霜夏がツッコミを入れつつ、その当人を振り返る。
「てかアーチャーさん、なんでこんなドレスを……」
「こういう機会でもなければ、マスターは着ないだろうからな。マチが、七季のウェディングドレスは自分が縫うと張り切っていたものだから、ちょっと作ってみたのだよ」
うっかり話に熱が入って、ああだこうだと盛り上がってしまったのだろう。
しかしウェディングドレス――今回、七季が着たものは、白いというだけで、いたってシンプルなものではあったが――は、「ちょっと」で作るものではない。どう考えても。
――張り合ったんだな。
――張り合ったんでしょうね。
――きっとナナキがらみのことだから、ムキになったんだろうな

あ……。

紅茶色の伯言の目と、濡れ羽色の霜夏の目、そして黒猫リドルのルビーアイが、どこか憐憫さえ含んで、いっせいに褐色の肌の偉丈夫を見やった。

「何だね」

『イイエ、ナンデモ』

「あ、リドルばーじょんも作ったんだよ、いちおう」

こっちのがインパクトあったから、アーチャーのに絞ったんだけど。

そう言って、七季が差し出した携帯電話には、少年姿のリドルと、普段着の七季、そしてもう一人、見知らぬ黒髪の男の子が、仲良く液晶画面に映りこんでいた。

「これで『生まれましたv』って文句でも添えようかと思ってたんだけど」

男の子が小学生くらいだから、ツッコミ待ちです。

と笑う幼なじみの少女に、首を捻った若白髪の少年は「この子どこから連れて来たの」と、いたってまっとうな疑問を投げてみる。

「ん？　公園で通りすがりの子を捕まえて、頼んでみた。ジュース一本分がモデル代」

「ああ」

「どうりで、見知らぬ子だと……」

伯言も、霜夏と一緒に「納得いった」と頷いていると。

「何て言ったっけなぁ……ああそう、ミステリ作家と同じ苗字だった。江戸川君、て言ったっけ」

エイプリル・フール用だって言ったら、快く協力してくれたよー。

「へー」

さすがの七季も、その男の子の中身が、高校生探偵であることは、まだ知る由もないことである――

＃１６６　四月の魚（後書き）

あとがき

＞真のオチは、リドルの写真の方でしたという。

ええ、「バーロー」が口癖の名探偵ですが何か（笑）。

「＃１６５」が薄暗かったんで、エイプリル・フールねたで、何とか明るいネタをと考えたものの、間に合いませんで。

ですがまあ、せっかくなので上げておきます（貧乏性とも言う）。

タイトルは、フランスのエイプリル・フール「ポワソン・ダブリル」から。

※ポワソン・ダブリル

‥ポワソンは「魚」、ダブリルは「四月」で「四月の魚」を意味する。

魚はサバを指し、サバはあまり利口ではなく四月になると簡単に釣ることができることから、四月一日にこれを食べさせられた人を「四月の魚」ということが起源という説がある。

#167　つながれた手ー陽のあたる場所ー

それは黒崎家の、朝の食卓でのこと。
「遊子（ゆず）、夏梨（かりん）、親父」
オレンジ頭の長男は、おのが進路について、こう明言した。
「俺、GS（ゴーストスイーパー）になる」

その時刻より少しあと。
朝七時よりは、ちょっと遅れて、ホテル一階のレストランにて、バイキング形式の和食を取り分けた少年少女、そして青年たちは、そろって行儀良く手を合わせていた。
『いただきます』
お定まりの挨拶が終わるや、めいめいに箸を動かして食事に勤しむ彼らだが、その目は一様に、一人の少女へと向けられている。
「あの、じっと見られてると、さすがに食べにくいんですけど……」
うっすらと赤く腫れた目元を押さえつつ、恥じらうように肩をすくめるのは七季だ。
けっきょく一晩中、眠っている間も止まらなかった涙は、彼女の目蓋に熱を持たせ、さっきまではアーチャーの用意した濡れタオルのお世話になっていた。
おかげで、おおよそ腫れは引き、少女の目蓋から目尻にかけての赤みは、アイメイクのように、ほんのりと七季の童顔を艶（あで）やかにさえ見せている。
「本当に、何でもないんですよ」
やんわりとなだめるようにソプラノを奏でる七季は、彼女を心配

する幼なじみや、年の違う友人に、そう繰り返す。
そうはいっても、唇を尖らせる真言や、もの言いたげにまなざしを向けてくる少年たちは、納得したように見えない。
さいぜんも、同室だったアーチャーやリドルに食ってかかろうとしたのを、黒髪の少女が止めて、この結果である。
ただ一人、何か考え込んでいる面持ちの神門青年が、ふと話題を切り替えた。
「きょうは『蟠桃』を見に行く。長谷川、案内を頼めるか」
「あ、はい」
メガネをかけた少女は、ちらちらと七季を心配そうにうかがっていたが、一行を取りまとめる、黒髪の青年の言葉には、素直に頷いた。
「あれこそ麻帆良のアレな象徴だとは思うんですけどね。一見の価値だけは……悔しいけど、あると思います」

麻帆良学園は、確かに夏休みの最中ではあるが、学校が閉まっているわけでは決してない。
部活動の生徒は、元気にトレーニングに励んでいるし、図書館をはじめ、その設備の利用者も多いからだ。
職員室には、やはり教師が仕事をしていて、勉強について質問しに行けば、わりときがるに答えてくれる。
そして、その大木は、敷地内にある広場の程近く、そこに悠然とそびえ立っていた。
「うっ……わあ」
見上げてなお、あまりある高さの樹木。豊かに緑の枝を伸ばす梢は、高楼の甍のごとく。
それは通称「世界樹」と呼ばれる、この麻帆良の象徴「蟠桃」である。

あまりの威容に感心することしきりの、伯言や霜夏。
対して、少し眉をひそめているのは、見慣れてこそいるものの、いまだに不審を隠せない千雨と、解析の魔眼を持つが故に、目の前の樹木が地上のものではないことを察知したアーチャーだ。
いっぽうで。
「……これ、かも」
まるで吸い寄せられるかのごとく、ふらふらと世界樹へ歩み寄っていった黒髪の少女が、ぺたり、とその幹に抱きついたのは、居合わせたものが気にも留めないほどにゆっくりと自然な流れだったからだ。
「うん――これ、この子だ」
目を閉じて、額をこつん、と当てる七季の様子に、神門と真言が、難しい顔をして、お互いに見つめ合った。
「ナナちゃんが泣いてたのは、これが原因ってこと？」
「だろうな。
おい七地（後輩）。間違いないか？」
ツーカーの会話で、短く、断定的なやりとりを終えた幼なじみの神職たちは、黒髪ポニーテールの少女に向かって、そんな声をかけた。
「ん……はい」
蟠桃の幹から顔を上げ、目を開けた七季は、どこかぼんやりとしたまなざしで、ふたたび彼らの元へ戻ってきた。
その小柄な体を、アーチャーが黙って支える。
「何かわかったか」
神門はさすがに「仕事」の顔だ。
これが「蟠桃（ばんとう）」なのだとしたら、速やかに天界に戻すべきもの。
なおかつ、異変があったなら、早急に対応してしかるべきだろう。
これは、天上の聖樹なのだから。
「この子……苦しがってます。下界の空気が合わないんです。穢（けが）れすぎていて。

自分でマナを作ることで、あたりを住みよい環境にしようとしているんですけど、マナを作る先から奪われて、それがどこかに流用されてるから、実を結ぶための力を蓄えることができない……生長も、阻害されてます」

たった数分ほどの「神降ろし」で、「蟠桃」に宿る樹精を受け入れ、その事情を把握した七季は、まるで自分が血を搾られているかのように、いたましげな顔をした。

「食べるため、生きるためなら、それは世の理……」

命を育むためであるなら、その幹に穴を開けられようと、枝を少々もがれようと、木である運命として、「彼女」は受け入れただろう。

しかしここは、「蟠桃」のいるべき世界ではない。

「彼女」がただ自然に生きることすら難しい下界である。

「蟠桃」は、ずっと助けを待っていた。

自分と感応することが可能なものを。

マナにたかるだけの、無神経な、魔法使いではないものを。

巫女である七季と真言は、「彼女」――「蟠桃」にとって、願ってもない待ち人であった。

そのうち七季との間に感応したのは、ふだん真言の方は、ぴっちりと「閉じて」いるからだ。

栗毛の少女と「蟠桃」では、真言の方が霊格が高い。

上位のものと精神的につながるのは、相手の許しなくては、難しいのが実情であった。

七季の場合は、もとより「神降ろし」が得意な彼女のこと。その素質ゆえに、真言よりは「つながりやすい」。

それでもメッセージをはっきり言葉として残せるほどでないのは、少女も霊格が高いことと、「蟠桃」じしんに余力がないせいでもあった。

「つーことは、やっぱモノホンか」

腕を組んだ姿でうなる神門は、帰ったら、またぞろ忙しくなるな、

と苦い顔をした。
それでも無視するわけにはいかないだろう。
そんな光景を、千雨は不思議そうに、それでも苦しげな表情をする七季を心配して、彼女の腕をそっと引く。
「ナナ姉。ちょっと顔色が悪い。どっかで休んだ方が良くないか？」
「ありがと、ちーちゃん」
千雨の触れた手は、びっくりするほど冷えていた。この暑い陽射しの中にあって、それは異常である。
ぎょっとした栗毛の少女は、すぐさま長身の男を――七季の従者だという彼を振り返る。
「アーチャーさんっ、ナナ姉が」
すぐさま褐色の腕が伸びた。千雨から受け取った、やわらかで、ひんやりした体を、抱き上げる。
「心配ない。……貧血だろう。きのう、眠れなかったようだから」
「だいじょーぶだよ」
へにゃ、とちからなく笑う黒髪の少女を、見つめる真言たちの目は険しい。
＜ホントのところは？＞
＜この木に霊力を分け与えたからだろう。おとなしくしていれば、じきに回復するはずだ＞
真言とアーチャーの間に交わされた念話は、伯言や霜夏、そして七季の影にひそむリドルにも伝えられる。
「どこか、適当な店に入って、休憩するとしよう」
そして、ついと踵を返した男の背中を追う形で、千雨たち一行は、道を引き返し始めた。
「あ、案内します！」
あわてて千雨が、アーチャーの前に出て、先導する。
そんな中。
＜まったく……立てなくなるほど分けなくても良かろうに＞
＜んー。でも実を結んだら、お礼にくれるって言われたから＞

少女を心配するあまり、念話で小言めいたセリフを吐く偉丈夫に、やっぱりいつも通り、食い意地の張った答えを返す七季なのであった。

いっぽう、長男の宣言を聞いた黒崎家では。

「そうか……お前は、もともとそういう力が強い。まあ、鍛えて活かす方が、良いのかもしれねえな」

――陽の当たる場所を、歩く方が。

「イチ兄、GS（ゴーストスイーパー）になるの？」

「うわあ。もしかして、一攫千金？」

どこか感慨深げに頷く一心をよそに、きらきら目をかがやかせる妹たち。

「いや。GS（ゴーストスイーパー）つっても、俺の場合は公務員になるつもりなんだけどよ」

ちょっと照れたように頬をかく兄に、遊子は、幼いといえども女の勘か、そこに向かってツッコむ。

「どーゆー心境の変化？」

「あー……そだな。正直に話した方が良いか」

ついきのう、姉に隠し事をされていたと知った、七地家の次女の怒りを目の当たりにした一護は、素直に理由を明かすことにした。

恥ずかしいは、恥ずかしいのだが。

「好きなやつがいる」

そう告白する、少年の目は、ひどく真摯だった。

思わず、にぎやかだった妹たちも空気を読んで静かになるくらいに

「そいつが、進む道を、俺も歩こうと思うんだ。

まあ、悪霊相手の仕事だからな、危険なことはわかってんだ。けど……そいつは、大事なもののために、そこに飛び込む」

だから。

「俺は、そいつを守りたい」
少年の、琥珀色の目は、とても深く、優しい色をしていた。
遊子たち、家族を守ろうとするのとは、良く似ていて――けれども、どこか違う色。
――カッコイイ。
そのとき、妹たちは、二人そろって、自分の兄がとてもとても誇らしく思えた。
同時に、「うちのイチ兄は世界一！」と彼女たちの中に、でっかい横断幕なんかが、掲げられちゃっていた。
「惚れた女のため、か」
――ったく。誰に似たんだか。
笑う一心の顔は、男くさく、それでいて、どこまでも「父親」だった。
「じゃあ根性入れて、鍛えねえとな！」
こーの色男！
「頑張ってお兄ちゃん！」
「今度、そのお相手連れてきなよ！」
――いや、まだ付き合ってないからな？
ばしばし家族に背中を叩かれる少年は、いまさらながら、羞恥に赤面しながらも、家族の理解を得られたことに、ほっと胸を撫で下ろしていた。

#167　つながれた手ー陽のあたる場所ー（後書き）

あとがき

＞てなわけで、オリ主が泣いていた理由は、麻帆良の世界樹「蟠桃（ばんとう）」に感応したから、でした。

いやまあ、他のアレな話とシンクロした可能性も捨て切れませんが。

あと一護は、家族に進路相談というか、宣言。

オリ主妹の、お怒り具合に、「家族に隠し事すると、あとが恐い」と学習した模様。

#168　つながれた手ー その道の先ー

「進路ねぇ。いちおう私は、大学進学するけど」
ようやく甘いものを口にして復活したのか、黒髪ポニーテールの少女は、千雨の問いに、へろりとした口調で答えた。
現在の場所は、休憩するために立ち寄った喫茶店である。
カントリー調の内装に、エアコンで程よく冷えた店内は、夏の暑さもどこへやら。
最初、アーチャーが七季を抱きかかえたまま入店したことに、ぎょっと目を見開いた店員一同だったが、「連れが貧血で」と心配たっぷりの声音で説明されたとたんに、ウェイトレス一同は、ころりと手のひらを返してくれた。
げんざい彼らは、店の中でも奥まったソファ席で、ゆっくりと甘味と紅茶をいただいている最中である。
はむ、と口にした、上品な生クリームの甘さに、ほにゃりと七季の頬が緩んで蕩ける。満たされた歓喜に潤んだ黒瑪瑙は、きゅうっと細くなって切れ長の目尻を優しく下げた。
「えっと……でも、ナナ姉は、姫の職場に就職するんだろ？」
けげんそうなとび色のまなざしを向ける千雨は、目の前に置かれているコーヒーの薫香に、こちらもふだんよりやわらかな表情で問いかける。
「うん、まあね。けど、大卒資格は、持ってると損ってことはないし。それにお給料上がるんだよね。ぶっちゃけた話」
意外とリアリストな一面がある七季は、あっけらかんとした口調で理由をつけ加えると、「それに」と続けた。
「ちーちゃんは聞いたことないかな？
今度からW大学が、GS（ゴーストスイパー）になるための学科を設置するって」

こきり、と七季が小鳥のように首をかしげる拍子に、まっくろなしっぽみたいなポニーテールがひょこりと揺れる。
「……W大学の、新学科？」
――そんな情報あったっけか。
栗毛の少女は、虚空を見つめて頭の中の情報をさらう。W大学は、千雨でなくとも知っているほどの有名な私大だが、さて、どうだったか。
芸能人も多く輩出するW大は、その歴史の古さから、都心に広大な敷地を持ち、知名度を上げるための話題づくりにも余念がなく、時折、アーティストやアスリートなどを受け入れることでも何かと騒がれることが多い。
そこに、彼女の幼なじみも横から口を挟んだ。
「夜間学部――正確には、第二文学部にね。表現・芸術系専修と思想・宗教系専修、文学・言語系専修を混ぜたような、魔道・神霊系専修ってのを作るって話」
「へえ……そりゃあ初耳で、す、けど。何でまた文学部？　夜間なのは、オカルト関係なら、わかる気もするけど」
年上の霜夏に対しては、やはり遠慮があるのか、ぎこちない敬語になる千雨に、若白髪の少年は、端正な面輪で穏やかに笑った。
「ふつうの口調で良いよ。ナナの友達だしね」
「……ども」
「そりゃまあ。祝詞（のりと）とか呪文とか、そのへんが読めなきゃ、こういう仕事は始まらないからでしょう」
あのへん古語とか外国語ですしね。
「あ」
さくっとメガネ少女の疑問に答えるのは、栗毛にふちどられた美貌うるわしい伯言である。
――そういやそうか。
ふだん厄介ごとを嫌って、とことん控えめだが、好奇心は人一倍ある千雨は、居合わせるメンツが七季と真言の知り合いということ

に気を許し、ここぞとばかりに会話を楽しむ。
内容は進路相談だが、あまりふだんは触れることのない話題だけに、少女の目は、きらきらと知的な興奮に光っていた。
「なるほど。でもまた、何だって大学で？
たしか、それ系の専門学校とか、あるんじゃなかったっけ」
「ざっくばらんに言えば、少子化対策。それと、就職率を上げるためだな」
今度は、コーヒーをカップに注ぎながら、神門が答えを投げた。
「昨今の不景気はいうまでもないが、GS（ゴーストスイパー）は、稼げば稼ぐだけ、高額の報酬が約束される人気職だ。
まあ、手に職系だから、食いっぱぐれも、そうそうない。
ところがどっこい、知っての通り、GS（ゴーストスイパー）は狭き門でな。研修や修行はつきもの、ってのが、いままでのGS（ゴーストスイパー）の常識だな。
大学としては、生徒を集めるため、就職率を上げるためにも、GS（ゴーストスイパー）を教育する学科をテスト的に設けるわけだ」
それと。
「W大学の、いまの学長の親が、GS（ゴーストスイパー）協会の理事でな。
そっちのツテから、後継者不足にあえぐ、人手不足の神社や、資格は持ってるけど、いまは働いてないGS（ゴーストスイパー）――たとえば主婦とか――を対象に、講師を招くことにしたんだな」
ぴ、と青年は長い指を一本立てて、さらにつけ加える。
「大学側には、教材を用意する代わりに、実習――除霊においての報酬が入る。もちろん除霊の依頼は選ぶだろうし、実習においての危険性にも同意させる必要があるが。
在学中に、生徒はGS（ゴーストスイパー）をめざし、試験に合格できなくても、そっち関係の人間にツテができるから、卒業後は、引き続き修行や就職のとば口ができるって寸法。講師、生徒、双方にとって悪くはない話だろ」
講師側にも、それなりのギャラは出るわけだし。
「はあ……そういう事情があるんですか……」

納得いった、という面持ちでコーヒーを飲む栗毛の少女は、ちらり、と七季の幼なじみたちに目をやった。
「てことは、おたくらも」
『もちろん、W大に』
にっこり笑って断言する、イケメン少年たちに、千雨はやれやれと嘆息した。
W大の偏差値は、行こうと思ってぱっと合格できるほど、ハードルは低くない――いってしまえば名門だ。
最低ラインが偏差値六十、とか聞いたはずである。
――天は二物を与えずってのは嘘だな、こりゃ。
「でも、そういう話を聞きたかったってことは、ちーちゃんも進路について考えてる？」
ぽん、と何でもないようにかけられたソプラノに、栗毛の少女は、思いっきりむせた。
「えふごふっ……や、別に、ただっ！」
語尾が、思いのほか強くなってしまったことに気づいた千雨は、はたと我に返ると、あわてて声をひそめて、ぼそぼそと続けた。
「できれば……麻帆良の外に進学したい、から……それなら、ナナ姉たちの知ってるとことか。近所も、悪くないかな、って……」
頬を染めてうつむきながら呟く少女は、どこからどう見ても可愛らしいツンデレ未満だった。
――何この可愛いいきもの。
きゅん。
思わず抱きしめそうになって、身を乗り出す七季と真言を、それぞれの保護者がぐいと羽交い絞めよろしく抱きとめる。
「はいどうどう」
「邪魔しないでミカちゃんっ。あんなに可愛いちうたんを抱きしめずにおらりょうか！」
「まだ回復していないのだから、自重してくれ、七季」
「むぅ……。ちーちゃん、あとでめいっぱいぎゅっとするから、覚

悟しておきたまへ」
　わきわき手を動かす、小柄な巨乳巫女ンビに、千雨は真っ赤になって「あああもう恥ずかしいこと言わせやがって！」と逆ギレぎみな声を上げたという。
「あと長谷川。別に霊能力が高くなくても、うちは事務仕事もフツーにあるからな？
　勉強さえできれば、試験の成績しだいで、うちの職場に就職ＯＫだから。パソコン強いやつがいると、助かるんだよな」
　などという、青田買いじみた帝都心霊庁一課長のお言葉が、千雨の耳に引っかかったとか、引っかからないとか。
　――いや、べつに将来の選択肢は、多い方が良いってだけで！

#168　つながれた手ー その道の先ー（後書き）

あとがき

＞短いですが、とりあえず。

オリ主たちの将来的な展望です。まだ当分は高校生ですが。

このあと千雨は、きっとネットでかたっぱしから情報をあさることでしょう。

◆オリ主世界の登場人物ー追加ー

◆長谷川千雨（出典：ネギま）
オリ主の友人。麻帆良学園に通う女子中学生。
対魔力が強いのか、麻帆良の認識阻害効果がある結界をレジストしてしまい、そのために周囲に馴染めず、幼い頃から孤立していた。
一時期は、対人恐怖症の気があったほど。オリ主たちと出会って、人嫌いレベルにまで緩和したが、いまでも麻帆良の非常識さには、根深い反感を抱いている。
お祭り好きで常識外れのクラスメイトたちと一線を画し、冷めた視線で、ないしん周囲にツッコミを入れることが多い。
かけている眼鏡は、人との距離を置くための伊達眼鏡。

じつは面倒見が良く、他人を放っておけない、苦労性な性格。
若年ながら、ハッカーとして優れた技能を持ついっぽう、趣味のコスプレ服は、自分で制作するほどの裁縫スキルを持ち合わせる。
ツッコミ気質でもあることから、アーチャーと気が合いそうである。
オリ主のことは「ナナ姉」、真言のことは「姫」もしくは「姫さん」と呼ぶ。
基本的に、心を開いた彼女たちにはデレっぱなし。
オリ主たちと交流していることから、心霊現象などにある程度、理解がある。「原作」ほど、非科学的な現象への拒否感はないものの、自分の意思なしに巻き込まれることを酷く嫌う。

栗色の髪にとび色の瞳。身長は１６２センチ。イベントでコスプレイヤーとして活動。

「原作」とは違い、ネットアイドルというよりも、レイヤーとしてのサイトを持っている。

◆七地ネギ／ネギ＝スプリングフィールド（出典：ネギま）

平行世界のネギ。ＩＦストーリーに登場する、ナナキ＝スプリングフィールドの弟。

幼い頃から側で共に暮らしてきた、姉・ナナキを溺愛する、ちょっとズレた男の子。

父親であるナギのことより、姉・ナナキのことで頭がいっぱい。

父親？なにそれ美味しいの？

姉が契約した悪魔・ヘルマンと共に日本へ逃亡し、家族三人（姉・ヘルマン・ネギ）で仲良く暮らしていたが、「ナギの子供」を求める、「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」によって襲撃を受ける。

その際、ネギたちを逃がすため、姉が囮になり、彼女と生き別れ状態になる。

ようやく姉を見つけたときには、彼女は「英雄」の血を引く「胎盤」として、植物状態で弄ばれていた。

そのため「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」を何よりも深く憎悪し、数々の悪魔と契約、魔法使いたちを滅ぼすために、魔法世界を制圧した。

どこからどう見ても「魔王ネギ」ルートです。本当にありがとうございました。

のちに平行世界をわたる魔法を開発。契約した祖父代わりの悪魔・ヘルマンとともに、「姉・ナナキが生きている世界」を捜し求め、世界を渡り歩くことに。

元は、思いつきのネタをあらすじだけ書きなぐってみたのと、そ

れを元にした四月馬鹿のＩＦ話。
続きを書くつもりも予定もないものの、一部の読み手さまに根強い人気がある模様。
このシリーズでは、おそらくジョゼフと並ぶ魔改造キャラ（笑）。

#169　鏡界のソルフェージュ ― おはよう ―

「ん……」
ふる、と少女の長い睫毛が揺れる。
少しかすれた、けれども小鳥の声に似た響きが、男の腕の中で久しぶりにこぼれた。
「おはよ。アーチャー」
果実めいた雪白の肌が、なめし革のような胸板に寄り添う。
ベッドに横たわる七季は、春を迎えた花のごとく、ふわりと笑みほころんで朝を告げた。

灰藤色の双眸に映るのは、こぼれんばかりの――否、もうたわわに揺れるまっしろな乳。
窓から差し込む淡い光にツンと浮き上がる朱鷺色が、ますます男の脳裏をかき回す。
「ふあぁ……」
んー、と猫よろしく背伸びをする七季は、わがままいっぱい、たゆんたゆん揺れるバストに頓着しないのか、いったん伸ばした腕を下ろすと、きょときょとあたりを見回した。
「ごめんアーチャー。私の服、知らない？」
「――っ！」
この時点で、白い髪の偉丈夫は、ベッドに声もなく突っ伏した。

いろいろ言いたいことはあったのだが、男は目の前の少女に、幸せそうに笑いかけられて絶句するしかなかった。
「いっぱいアーチャーに触れて、触られて、嬉しかったよ。気持ち良かったし。またしたいな」
まるで、お気に入りの料理を「また食べたい」というように、無邪気な声と表情で、にっぱりおねだりされて、いったいどうしろと言うのだろう。
「アーチャー？」
くい、と腕を引かれた人外の男は、黒く丸い瞳に見上げられて、つい反射的に唇を落としていた。
「……おはよう、マスター」
「ん。おはよ」
頬に返されるキスは、いつも通り。
体を重ねてさえ、まったく反応の変わらない少女に、アーチャーはないしん「これはこれでどうなんだ？」と頭を抱えていたりした。

「で、どうだった？」
七季を救出してのち、初めての朝食の席は、ゾルディック家の飛行船内にて。
ぽーんと主語も何もない問いかけを、栗毛の少女から投げられたアーチャーは「何が」と半目で返した。
とりあえず、お約束というか何というか、破瓜を済ませた七季は、なれない運動で体がだるいらしく、ベッドに寝転がったまま、部屋を出ることはない。
加えて、珍しく「ごはん持ってきてー」とわがままを言ったので、アーチャーは彼女の分の食事を取りに、ボトムとシャツを身につけて、ダイニングまでやってきたのだが。
「何って。ナナちゃんとの初夜」

ぶは。
紅茶を飲んでいた面々が、こぞって噴いた。コントかと思うほどのみごとなシンクロである。
アーチャーはもちろん硬直した。
「な、な……ッ!?」
何で知ってるんだ、と日ごろ鉄面皮の顔を、面白いくらいわやくちゃにして慌てまくる、人外の男に、真言はさっくりと追撃をかける。
「だって昨夜、ナナちゃんに確認取られたというか、宣言されたというか。『処女あげちゃっても良いですかー?』って訊かれたの、私だもんよ」
真言に報告する七季も七季だが、彼女を止めない真言も真言である。
「何故止めない!?」
「ムチャ言うな。私に本気のナナちゃんが止められるわけなかろー」
えっへん、とこちらも立派なバスト――もとい、胸を張って答える栗毛の美少女に、ツッコまれたアーチャーは、返す言葉を持たなかった。
「そーゆーアチャ男は、拒めたのか?」
「……」
まあ、ご存知の通りである。
ようやく戻ってきた、非力かつ危なっかしいド天然な少女マスターに、無邪気におねだりされたアーチャーは、けっきょくのところ美味しく七季をいただいてしまったわけで。
灰藤色の目を逸らす彼のしぐさが、すべてを物語っていた。

「アーチャー」
どうやらきょうの朝食当番らしい、ノブナガが、真顔で白い髪の

偉丈夫に声をかけた。
無言でアーチャーは振り返る。
「赤飯って、粥にしても大丈夫か？」
「ああ。問題なかろう」
「ってツッコミどころはそこかよ！」
和食を得意とする、料理人ふたりにツッコミを入れたのは、久しぶりに出番の回ってきた、才人であった。

#１６９　鏡界のソルフェージュ ― おはよう ―（後書き）

あとがき

＞とりあえず、「ジョゼフ珍道中?」編を再開です。

震災に対して内容を自重した結果、戦闘シーンを、ほぼさっくりとカットしておりますが。

いちおう救出の流れは、おいおい書きます。

その代わりといっては何ですが、盛大な出オチ。

予想通りといいますか、何といいますか、やっぱり弓兵がオリ主の「初めて」のお相手でした（笑）。

これくらいなら、朝チュンだし１５Ｒの域ですよね?

そして久しぶりなのにジョゼフが出てこない罠。

#170　鏡界のソルフェージュ ― 新しい朝 ―

「まずはマスターの食事が最優先だからな」
さも当然、といった面持ちでのたまう、褐色の肌の偉丈夫に、もっともだ、という表情で頷くノブナガも、養い親である七季に対して、たいがいシスコンである。
「いまごろナナキ、腹減らしてるんだろ？　起きてんのか？」
「ああ。疲労以外は問題ない」
「んじゃあ、話は後だ。とりあえず、胃に優しい献立だな。赤飯は、小豆の調達……おいシズク、小豆のストックってあったか？」
メガネをかけた黒髪の少女へ振り返るノブナガに、幻影旅団の一員であるシズクは、かぶりを振った。
「ごめん。さすがに小豆はないよ」
「いや……まあ、急なことだったからな」
申し訳なさそうなシズクは、さすがに旅団に加わるだけあって、「赤飯」が、一部の国において、おめでたいときの食事であると知っているらしい。
いっぽうチョンマゲスタイルの男は、気にするな、とフォローがてら、手を振った。
「赤飯の件はスルー！？」
そこにツッコミを入れるのは、もはやこのメンバーの中で、おそらく唯一の常識人であろう、黒髪の少年――才人だ。
「サイト、『セキハン』とは？」
「俺と七季ちゃんの国の料理。祝い事んときに食べるやつ！」
ひとりけげんそうな顔をしている、みため三十路の、美丈夫――青い髪のガリアの王様に、才人は即答しつつ、周りを見回すが、他にツッコミはいないようだ。

自分の（精神的な）孤独さに、日本人の少年は、ちょっぴり泣きたくなった。

――先生……ツッコミが、欲しいです……。

どこかの顎タプタプなバスケ部顧問に、才人が胸のうちで訴えているあいだに。

備え付けのキッチンで、手早く作った雑炊をノブナガから託されて、アーチャーはふたたび部屋へと戻っていた。

ノブナガいわく、「俺が持っていくわけにゃいかんだろ」とのことである。

とりあえず、七季に饗するための朝食を手に入れたアーチャーは、ノックのあとにドアを開けた。

「や、ダメ。だーめだって！」

「あいつだけズルイ。バージンは譲ったんだから、後ろの『初めて』は僕にくれても良いだろ？」

ベッドの上でじゃれあう、シーツ一枚かぶっただけの少女と。

ルビーの瞳を持った、美しい毛並みの黒猫がじゃれている姿――

それだけを目にすれば、微笑ましいと、言えないこともない光景だったけれど。

片手でトレイを支えた男は、すぐさま空けた手で、むんずと黒猫の襟首をひっつかむや。

ぺいっ。

「ちょ」

バタンッ。

素早く、放り出したリドルを締め出して、優雅な物腰で、おのがマスターである、黒髪の少女へと跪いた。

「待たせてすまなかったな、マスター」

「そんなに待ってないぞ。リドルが出てきて、話してたし」

改めてトレイを差し出すアーチャーに、黒瑪瑙の瞳をきらきらかがやかせた少女は「おかえりー」と無邪気に返す。

――わー。良い匂い。

ぴくり。
「ほう……ずいぶん、きわどい話をしていたようだが？」
褐色のこめかみを引きつらせる、白い髪の男に、七季はぺろっと答えた。
「ん。私の『後ろ』が欲しいって話だった。でも、あれはちゃんと準備しなきゃ、えらいことになるから、そんなすぐには無理だって言ったんだけど」
シーツを胸元まで引き上げて、もそもそ起き上がる少女は、ことんと小首をかしげて「どした？」と不思議そうにアーチャーを見つめている。
「やっぱり、どこ探しても服ないんだよなぁ。アーチャー、知らないか？」
問われた従者は、さいぜんまでの不機嫌もどこへやら、とっさにうぐりと詰まった。
「いや……その……真言に借りてくる」
雑炊の入った土鍋の鎮座するトレイをサイドテーブルに置くと、男は、逃げるように出て行った。
まさか、着られないほど汚してしまったから洗濯中、とは答えられないアーチャーであった。精神的にいたたまれなくて。
もちろん何で汚してしまったかは……ご想像にお任せしよう。

と、部屋から出てきたアーチャーへ、ジト目を向けるルビー色があった。
「……何だね」
「このムッツリ」
部屋から閉め出されたリドルは、不満たらたらで、きのうオイシイ目を見た同輩――七季の使い魔を眺めやる。
「ケダモノ。絶倫。エロテロリスト」

罵言というには、かなりいかがわしい単語ばかりが並ぶ呼称に、ふだんは温厚な弓兵も顔を引きつらせた。
しかも、投げつけられた言葉に、心当たりがあるような、ないような。
「自分はちゃっかりバッチリがっつりナナキをいただいちゃったくせにさ。僕はダメって何なのさ。不公平だろ。嫉妬？」
ぶちぶち垂れ流される、リドルからの怨念がこもったセリフに、アーチャーはそっぽを向いたまま、短く返す。
「彼女の安全のためだ」
「は？　何言ってんの。僕がナナキに何かするとでも？」
白い髪をいただく男を、見上げることに飽いたのか、ふわりとデバイスを使った飛行魔法で浮き上がる黒猫。
昨夜は、いちおう遠慮して、途中で混ざることもせずに、「おあずけ」を食らっていた立場のリドルとしては、この行動ももっともである。
「私のことはともかく、いたいけな少女に変態的な行為を強いるんじゃない！」
処女を失ってまもない七季に、アブノーマルなことをしかけようとしていたリドルへ、アーチャーは羞恥混じりの叱責を吐いた。
「それくらいでガタガタ言うなんて、ちっさいな。
自分はナナキの『初めて』を食べたんだろ？
なら僕だって、後ろの『初めて』をもらう。同じ使い魔として、平等じゃないとね」
「っ……とにかく、ダメだ」
「決めるのはナナキじゃない？」
てか、あの口ぶりなら、ちゃんと「準備」さえすれば、許してくれそうだけどね。
フフンと男を鼻で笑うリドルは、黒髪の少女の大らかさを、かなり理解しているといって良いだろう。
「ダメだと言ってるだろう！　腹上死なんて冗談じゃない！」

「……は？」
思いもよらない言葉に、さすがの闇の魔法使いも、ポカンと顎を落としたのだった。

船内の廊下で、とんでもないことを口走って騒いでいた使い魔ふたりは、仲良くとっ捕まって、尋問室――もとい、ミルキの部屋に連行された。
室内には、今回の救出に加わった男性陣が、勢ぞろいしている。
「……で？」
「『で』とは？」
「腹上死とナナキに、どんな関係があるのか、洗いざらい吐いてもらおうか」
仁王立ちして、イスに座るアーチャーを見下ろすのは、黒髪の青年――クロロである。
「ノーコメントだ」
「よしシャル。パクノダを連れて来い」
「アイサー」
念能力者の厄介さに、ぎょっとした弓兵は、あわててシャルナークを引き止める。
「待て、女性に話すことじゃない！　てか、こんなことを読ませるな！」
「……で？」
笑顔で――ただし、ぜんぜん目が笑っていない――問いかけの形をとるクロロに、物凄く渋々と、アーチャーは理由を打ち明けるのだった。
「はあ……ヨすぎる、ねえ」

隠したがっていた理由が、何ともはや。
嘆息する金髪の少年は、ちょっと呆れ顔だが、答えるアーチャーの表情は、あくまで真面目だ。しかも苦悩の色が見て取れるほどに。
「食べ物にたとえるとすれば、天上の果物だ。甘くてみずみずしくて、食べているうちに味が変わるし、香りも口ざわりも絶品で、そのうえ癖になる。回を重ねるごとに馴染んで、好みの味になっていくわ、中毒性があるわで、尋常じゃない。しかもまだ成長途中……あんなもの、初心者が出くわしてみろ。監禁されてやり殺されるわ！」
いっきにまくし立てた男に、一同は半信半疑のまなざしを向ける。だが、見るからに生真面目というか、堅物というか、およそ彼らの知る限り、こんなアダルティなジョークを口にしそうにないアーチャーのことである。
「つまり……名器、ってことか」
黒猫姿のままのリドルが、そわそわしながら、期待を浮かべたルビーアイで呟けば。
「だから却下だ。『前』だけで、それだぞ。『後ろ』までとなったら……」
――どれだけえらいことになるか。
眉間のしわもクッキリと、アーチャーの口から深々とためいきがこぼれる。
わかりにくく、精悍な褐色の頬を染める偉丈夫に、リドルは改めてジト目を向けた。
「独り占めにしたい、としか思えないんだけど。だいたい僕は初心者じゃない」
「独占欲がない、などとは言わんよ。私は彼女が大切だし……それなりに嫉妬も感じるようにはなってきたさ。
だが、これは七季の身にとって、切実な危険だ。一つところに閉じ込められて、死ぬまで行為を強いられるなど――そんな、女性として、人間として悲惨な末路に、誰がさせたいと思う！」

鋼色の鷹の目は、真剣な憤りを孕んでいた。
真実、この従者は、少女の身を案じているのだ。
「経験者、未経験者の問題ではない。禁欲どころか、欲求じたい、磨耗していたような男が、こんな風に感じることじたい、とんでもないことだ」
およそまっとうな欲求のある男なら、ひとたまりもないぞ。
――間違いなく、相手は、七季に溺れるだろう。その甘美で、淫靡な肉の味に。
いまだあどけない少女の中に眠る、天稟。
それは世が世ならば、「傾城（けいせい）」「傾国（けいこく）」といわしめるほどの。
悪魔さえも惹きつける娘である。このうえ人間も――となったときの惨状を考えて、思わずアーチャーが頭痛を覚えたのも無理はない。
七季が、いたってふつうの一般家庭で育てられたことを、彼はあらためて感謝したほどだ。
このまま、大事に大事に囲い込み、不埒な虫を近づけなければ、とりあえず彼女の安寧は守れるだろう。
その思考が、既に末期だとツッコむものは、まだいない。弓の騎士の名をいただく男の、ないしんを知るものもいないからだ。
「独り占め、はんたーい！」
「やかましい！」
却下といったら却下だ！
使い魔同士の攻防を眺めながら「とりあえず七季も尋常な人間じゃなかったんだなあ」とあらためて納得する男性陣一同であった。
こっそり、アーチャーが絶賛する少女の「味」にも興味はあったが、口にしたが最後、間違いなく、料理上手の男によってなますにされてしまうと理解していた彼らは、賢明にも口をつぐんだのであった。

いっぽう。

「――だって」

念で作った糸を介して、そんな男性陣のこもる部屋のドアから、話を盗み聞きしていたマチは、呆れをにじませた声で吐き出した。

「バカばっかだね、まったく」

「とりあえず、ナナキに服を持っていってあげましょうか」

あいかわらず、凶悪なボディラインのパクノダが、もっか男性陣の間で話題になっている養い親――黒髪のトリップ娘を気遣って、さっさと服を用意していた。

女性は強し、である。

#１７０　鏡界のソルフェージュ－新しい朝－（後書き）

あとがき

＞えちぃネタですみませぬ。

じつはアーチャーもかるくテンパってたり（笑）。

傾城は、本来は「絶世の美女」のことなんですが、この話では、あえて「国を傾けるほどの女性」という意味として使っています。

※傾城（けいせい）／傾国（けいこく）

：「漢書」外戚伝の「北方に佳人有り。…一顧すれば人の城を傾け、再顧すれば人の国を傾く」から。

君主が心を奪われて国を危うくするほどの美人。絶世の美女。

#171　鏡界のソルフェージュ ― めぐる絆 ―

幻影旅団有志による、弓兵へのＯＨＡＮＡＳＨＩは、いったんさておき。

少女の衣服を調達するべく、アーチャーが真言の元へ顔を出しに行くと。

微笑みを浮かべた、見目うるわしい夜叉と化した女性陣に出迎えられ、さっき密談に加わっていた男連中ともども、ぶっ飛ばされるはめになったという。

「しかし、みごとなものだな」

旅団の女性陣にぶっ飛ばされたあと。

毛足の長いカーペットの敷かれた床に身を起こした、青い髪の美丈夫は、しみじみと嘆息した。その呟きを拾った才人が、ひょいと振り返る。

「ん？」

「ナナキの、主としての器量がだ」

黒髪の少年に目で問われたジョゼフは、こぼしたセリフを、同じく起き上がった才人へ説明してやった。

「主……ええと、アーチャーさん絡みのことか」

いったい何が？

単語から七季主従のことかと察した少年だが、今度は何が「みごと」なのかわからずに首をかしげる。

「救出まで、あれほどピリピリしていた男が、いまは、たとえ短い距離とはいえども、主から離れて行動できるまでに落ち着けた、そ

のなしようのことだ」

黒髪の少女を助け出すため、行きの飛行船に乗っていたアーチャーは、おのがデバイスに加え、七季のデバイス「ノア」「黎明」「ガニュメデス」までをもリンク、装備し、それはそれは底知れぬ戦意を圧し殺していた。

その気配は、ガリアの全軍を統べる立場のジョゼフであろうとも、怖気が走るほどに危うい、近づきたくもないものだったのを、男は思い出す。

「えっ……と。でも、アーチャーさんは、七季ちゃんのために、食事を取りに来たり、着替えを持って行ったりするためだろ？」

――それは、ふつうのことじゃないか？

眉尻を下げ、不思議そうに問い返す才人へ、ジョゼフはゆるくかぶりを振った。その端正な面差しに、感心と相半ばする、わずかな懐古の色がにじむ。

「取り戻したとはいえ、いったんは見失って、命の危機にすらさらされていた主を、ふたたび失わない保障がどこにある？

しかもナナキを拉致された理由は、目を放していたから、まさにその一点だろう？

俺のミューズであれば、片時も離れず、今度こそ守り抜こうとするだろう。そのすべてを主のために尽くし、喜びとするのが、使い魔というものだ」

あの男も、同じであろうよ。

「アーチャーとナナキの絆は、おそらく俺とミューズよりも深かろう。

その喪失は、おそらく俺にも計り知れぬ――ひょっとすると、俺が、シャルルを失ったそれに匹敵するかも、な。

不安は、空虚は、際限なく疑念を呼ぶ。

しかしあの娘は、そんな不安に駆られている使い魔に、みずからの体を与え、肉体的なつながりを深く感じさせることで、使い魔を安心させたのだ」

一度はライン――使い魔と主の霊的な「つながり」すらも、危うかったアーチャーには、肌を重ね、最奥までもつながる儀式は、このうえなく確かな証として刻みつけられたはずだ。

すぐ傍に感じる、確かな存在感。

「つながっている」という、紛れもない、物理的な事実。

「おそらく計算ではないだろうが――それだけに、ことさら、俺はあのナナキという娘が恐ろしく、みごとだと思うのだよ」

小賢しい知恵ではなく、本当に必要なことを探り当てている。

「何やらミューズのことが懐かしくなってきたわ……いまごろ、どうしているのであろうな」

誰かが傍にいる、ということは、こんなにも得がたいことだったのか。

世界を隔て、母国に置いて来た形の、おのが使い魔を、思いやるジョゼフの胸には、いままでになかった感情が去来していた。

――もしも再会できるのならば……俺たちも、こんな風に心を通わせることができるだろうか……？

穏やかな面持ちで、たどり着けるはずもない、はるか遠くの相手を追いかける、ジョゼフの様子を、ひとり眺める栗毛の少女が、ニヤリとほくそえんでいたとか、いないとか。

いっぽう、別室では。

「ところでオーラの調子はどうだ？」

「やー。これといって変化はないけど」

ちょっぴりボロボロになりながらも、着替えを持ってきたアーチャーと、ともに訪問したクロロ。

男ふたりを迎えた七季が、ベッドに寝転んだまま、のほほんとした顔で、黒髪の青年に応答している最中だった。

例によって、絶賛締め出し中なリドルは、ここにはいない。

別の部屋でプレシアと話している真言の、やわらかな膝で丸くなっている最中である。それを不貞寝と人は言う。

さておき。

「……それはそれで、わりと非常識なことなんだがな」

クロロは、目の前でナチュラルに「纏」――オーラを体表に留める現象――を続けている、養い親の姿を見つめて、やれやれと嘆息していた。

「心配かけちゃってごめんなぁ。あと、助けにきてくれて、ありがとう」

ほにゃん、と相好を崩す七季に、ちょっとぶっきらぼうな口調で、黒髪の美青年が唇を尖らせる。

「……当たり前だろう」

家族なんだから。

「あーもう、可愛いなクロロは！」

照れる養い子――すっかり図体は大きくなっているが――の可愛さに、辛抱たまらんと腕を伸ばし、ぎゅっと抱きついた七季へ、過保護な従者からの白い目が飛んできた。

「……マスター」

「はいはい、アーチャーもぎゅー」

「い、いや、そういうことではなくっ」

シーツだけをまとって、起き上がってくる少女に、わたわたしつつも抱きしめられる褐色の肌の偉丈夫へ、今度はクロロからジト目が飛ぶ。

「ともかく！　マスターに問題はないのだな？」

「オーラじたいは、そもそも生まれながらにそなわっているものだからな。

人間だけでなく、生物にもいえることだ。念は、それが、より顕在化した形に過ぎない。心配するほどのものではないさ」

ただ。

童顔の青年は、瞳の夜色を深める。

「たとえるなら、人間が念に目覚めるということは、髪が伸びた、程度のことだ。
それじたいに害があるわけではない。
しかし、伸びた髪を梳かすこともせず、手入れも行わず、放置しておけば、絡まることもあるだろう。生活しているうちに、あちこちに引っかかるかもしれない。
だから、できるなら、切るなり何なり、本人に似合う形にするのが望ましい。
みっともなく、ただ長く伸ばしっぱなしの髪は、目立つだろう？
念能力者は念能力者を呼ぶ。そういうことだ」
さすが旅団の中でもリーダーを務めるだけあるというか。
クロロの説明は、念を理解しづらいアーチャーにも、なかなかわかりやすかった。
「……なるほど」
「どうするナナキ。望むなら俺たちが念能力について修行の面倒を見るが」
関係のない人間には、冷酷なほどドライだが、養い親の片割れである七季には、過ぎるほど甘いクロロは、黒い目をきらきらさせながら申し出た。
「んー……でもなぁ」
対する少女の声は、いまいち乗り気ではない。
アーチャーを抱きしめていた腕を解いて、ぽてり、とふたたびベッドに突っ伏す七季は、大きな羽枕を抱え込んだ。
「念の修行って、短くても十年単位だろ。才能あるクロロたちだって、使いこなすまではそれくらいかかってるんだ。凡人の私なんか、ハンパに手をつけても、自爆するのがオチのよーな気がする」
――凡人とか、どの口で言うかな。
彼女にジト目を向けるアーチャーとクロロが考えたことは、おそらく同じだろう。
「それに体力系の修行が無理。どう考えても無理」

むうと眉尻を下げて、ぺふぺふ羽枕を叩く、黒髪の少女に、アーチャーがやんわりと声をかけた。
「最初からあきらめるのは、良くないと思うぞ。マスター」
「アーチャーは、私が何トンもの鉄扉を、素手で開けられると思う？」
「……ええと」
かこんと打ち返された言葉に、思わず詰まる白い髪の男。
「ちなみにゴンは、念なし、ガチの肉体オンリーでそれが可能な素質持ちだから。鍛えればだけど」
作りが違うのですよ、作りが。
「無理だな」
きっぱり。
英霊のアーチャーでさえ、魔力の強化なしには無理である。可能だとすれば、思い当たるのは第五次聖杯戦争のバーサーカー、ヘラクレスあたり、第二候補で「怪力」スキル持ちのライダーあたりだろうか。
あれは生物としての種類が違うからこそ、可能なことだろう。
かたや半神の英雄。かたや伝説の怪物。
即答したアーチャーと、七季の反応に、クロロはあからさまにがっかりした表情を浮かべた。
「ナナキの念能力、見てみたかったんだが……」
せめて系統だけでも。
「目的はそっちか！」
伸ばした白い手のひらで、ぺちん、と青年の額をはたいた七季は、こんな状況になった原因を思い出した。

#171　鏡界のソルフェージュ ― めぐる絆 ―（後書き）

あとがき

＞ようやくジョゼフがまともにしゃべった！

あとシェフィ姉さんとの関係改善フラグ立ててみたり。

オリ主がオーラに目覚めている原因は、次回の回想で書きます。

念能力つけるかどうかは……本人にやる気がありません（笑）。

#172　鏡界のソルフェージュ ― 白銀（しろがね）の衣 ―

七季が捕えられていた部屋は、モニターが設置されていることを除けば、ホテルのような作りの一室だった。

あえてランク付けをするなら、ツインかダブル。

一人を押し込むにしては広めのそれは、もしかすると、別の用途にも使われることがあったのかもしれない。

『――百万！』

『こちらは五百万だ！』

七季は、自分の臓器が競りにかけられる光景を、まっしろな壁にはめ込まれたモニター越しに眺めつつ、つらつらと考えをめぐらせていた。

――うーん。処女のまま死ぬっていうのも、何だかなぁ……。

この場に、彼女の幼なじみや従者がいたならば「この期に及んで気にすることはそれか！」とツッコんでくれたかもしれない。

七季の言い分としては、「童貞のまま死ぬ」という感覚とたぶん変わらないぞ、と反論するだろうが。

時代劇やミステリ好きの彼女としては、「検死のときに調べられて処女って判断されるのとか、物凄くいたたまれない」などと思っていたりする。

――さて。

ひょいと黒いまなざしが、寝転ぶベッドから見て左奥――まっしろな鉄扉をひと舐めする。

部屋のドアは、げんざい厳重な電子ロックで鎖（とざ）されている。

複雑な作りの、特注金属キーを、鍵穴に差し込まないと、電子ロックが開かないという、謎のシステムだ。

――いやまあ、データだけのカードキーでないのは、試行錯誤の

結果なのかもしんないけど。
と。
ゴガアアッ！
モニターの中で、凄まじい破砕音が轟いた。
――を。
続いて、まだ生きているカメラが拾った映像に、自分の知り合いが映っているのを認めて、黒髪の少女は、おのが懐へ手を突っ込んだ。
身にまとっているのは、あいかわらず、手術着のような、簡素な服だが。
『やぁ、東風（こち）。久しぶり？』
にょっ。
いつも収納に使っている、不思議空間から引っ張り出した使い魔へ、七季は例によってメモ帳で筆談を試みた。
傍にくっついている金の大妖は、それを横目に、モニターの画像に張りついて、そわそわしているが。
「む……？
我は主殿（あるじどの）の懐で寝ている間、時間がたったようには感じぬのでな。だがまあ、会いたかったぞ」
現れた神鳥は、さあかまえ、とばかりに、極彩色のあざやかな翼を広げ、くちばしをすり寄せて来る。そんな使い魔に、七季は、あどけない面輪を苦笑に染めて「悪い」とことわった。筆談で。
かりり。
『ちょっとその前に、一仕事して欲しいんだ。人を呼んできて欲しいんだけど』
「声が出ないのか……して、他の使い魔どもがおらぬということは、捕われでもしているということか？」
まったく、あやつらは何をやっているのやら。
どこまでも偉そうにのたまう神鳥に、そもそも自分の油断が原因である七季は、返す言葉がない。

おそらく――ほぼ確実に、生きて帰ることができたら、お説教が待っているようだろう。従者に先輩、旅団メンバーの古参による、盛大なやつが。

『もう助けは来てるみたいだから。ここの場所を知らせて来てくれ。頼めるか？』

開いた窓は、はめ殺しではなかった。やはり、もとは客室なのだろう。ただ、見下ろした光景から察するに、相当な高さがある絶壁と、打ち寄せる波が見て取れたが。

ただし、東風（こち）のように、空を飛べるならば、脱出は可能に違いない。

――せめて箒があればなぁ……。いやでも、魔力がおかしくなってるんだから、あっても飛べないかも。

デバイスはないし、箒も部屋にはない。七季に、他の飛行手段は考えられず、けっきょくシームルグである東風（こち）に、飛んで助けを呼んでもらうことにした。

「む……」

東風（こち）を手放してしまえば、少女を護（まも）るものがいなくなる。彼が渋るのも、もっともだったが、七季はさらに切実なツッコミを入れた。

『いやほら。何か大暴れしてるみたいだから。急がないと、私のいる、こっちの棟まで、とばっちりくらうと、ものっ凄く、いただけないし』

主に、先輩とか先輩とか、先輩とか。

念話での呼びかけは続けていたのだが、さっぱり応答がないことから、いまだ自分の魔力その他の回復は、してないと思われる。

猪突猛進タイプの巫女姫は、ぶちキレると、わりと後先考えない行動に出てしまうので。

――誰かが止めて……くれないか。クロロたちもアレだろうし、さすがにアーチャーたちも怒ってるかなぁ。

気がつけば、とらがいなくなっている。開いた窓から、真言でも探しにいったのだろう。彼女の気配は、妖怪にとっては、このうえ

なく目立つネオンサインみたいなものだから。
「デバイスもなし、従者もなし……でか？」
『この騒ぎなら、臓器売買の取引どころじゃなくなるだろ』
ばささっ。
最後まで東風（こち）はぐずっていたが、七季が筆談で説き伏せたため、シームルグは極彩色の羽根で、窓から羽ばたいていった。
――おなかすいたな……。
ぐぅ。
声は出なくとも、腹は正直。
このとき、七季は空腹のあまり、だいぶ思考力が低下していたと言っても過言ではない。もちろん、動く気力もすっからかんであった。
犯罪者連中も、我が身は可愛いだろうが――いっぽうで、お偉いさんに売りつけて、身の安全を買える「商品」である七季をあきらめるかどうかは定かではない――まっしぐらにトンズラするとは、限らなかったのだ。

男は、追われていた。
しらじらとした蛍光灯の光を弾く、白銀色。
周りの壁に張りつく影のシルエットは、長身の体躯に、長い腕。
高く立てた襟と、目深にかぶったテンガロンハットで、中の人物の顔はわからない。
ただ男にも明らかなのは、相手が恐ろしく手練（てだ）れの念能力者であるという、その一点。
富豪や、国の重鎮を迎えるために、敷き詰められた上質のカーペットに、足音が沈む。
「くっ！」
移動――この際は逃亡を含める――のため、「商品」を取りに来

た男は、焦りを浮かべながら攻撃に移った。
どのみち、この追跡者を排除しなければ、自分の安全はおろか、「商品」を確保することすらできやしない。
放たれる念弾は、放出系能力者としては、わりとポピュラーなもの。
基本、体から離れたオーラは、その距離に比例して、力をなくしていくものだが、この男は、修練や制約などでカバーし、人を殺傷するに十分な威力まで高めていた。
ようするに、彼もまた、それなりの念能力者だったのである。
ただ――
がいんっ！
念弾を跳ね返した白銀のコート。
その能力の名は「シルバースキン」といった。

幸運と不運。
それは、あとになって結果を見てみなければ、わからないこともある。
「シルバースキン」に弾かれた念弾が、たまたま部屋のドアを突き破り、流れ弾として受けてしまったのは、七季の不運か。
それとも、急所ではない左手に当たったこと。加えて、ドアという遮蔽物を貫通したことで、もはや人を殺傷するだけの威力は失っていたことが、幸いか。
とにもかくにも、捕われていた異邦の少女は、肉体的なケガをすることこそなかったが――その身に念弾を受けてしまったことで、体の精孔が開いてしまったのである。
臓器売買組織に雇われていた念能力者を締め上げた、キャプテンブラボーは、目に飛び込んできた情景に、唖然とした。
組織に捕われていた少女が、知り合いである七季だったことに、

驚いたわけではない。
　黒髪の少女の、ベッドに横たわる体が、浮き上がるほどに、膨大なオーラを垂れ流していたからである。
「いやいやいや、これはまずい……ッ！」
　と、ときを同じくして、いきなりラインが正常に戻ったアーチャー、真言、リドルが、こぞってジッパーやら転移魔法やらで駆けつけてきた。
「マスター！」
「ちょ、ナナキ！？」
「何でこんなことになってんの！」
　矢継ぎ早にぶつけられる言葉も、いまは無為でしかない。
　早いところ、このオーラの流出を止めなければ、七季が生気を失って取り返しのつかないことになるのは、もはや明白だ。
「キャプテンブラボー」と呼ばれる、錬金戦団の戦士長は、はたと我に返るや、すぐに思いつきを実行した。
「シルバースキン・リバース！」
　白銀色のコートが、六角形の微細なチップへと解けていき、中から鍛え抜かれた体躯の、壮年の男が現れる。
　彼の念能力「シルバースキン」は、意思ある雪のごとく宙を舞い、今度はキャプテンブラボーではなく、黒髪の少女の体表を覆っていく。
　その光景に、思わずアーチャーが双剣を突きつけようと踏み出すも、緋袴をはいた栗毛の少女に、携えた刃で制された。
　着せた相手の外部へのあらゆる攻撃を遮断する――それが「シルバースキン・リバース」である。
　戦闘においては、そのまま内圧を強めて対象を圧殺することも可能だが、これは蛇足というものか。
　いまげんざい、キャプテンブラボーのやっていることは、拡散してしまうオーラを閉じ込めるため、ただ一点なのだから。
「すまん。どうやら、俺の跳ね返した念弾が、流れ弾となってぶつ

かったようだ」
　殴られるのを承知で、友人である真言に頭を下げる男に、神剣を引っさげた少女は、泣き出しそうな顔で、唇を噛みしめた。
「……シルバースキンで、ナナちゃんのオーラの流出を止めたんだよね？」
「ああ。だが、体に留めることは、本人の意思でしかできん。そういう能力があれば別だろうが……」
「っ、そういう、治療系はナナちゃんの方が得意なんだ……とにかく、纏をするように、念話で教えてみる！」

　そんなわけで、どこからどう見ても不可抗力のできごとではあった。
　救出された少女は、すぐさまミルキ所有の飛行船に運び込まれ、どうにかオーラを留めることには成功したものの、疲労と空腹でぶっ倒れ――またしてもひと悶着あったことは、いうまでもないことだろう。
　ご覧の通り、げんざい七季はピンピンしているわけで、無事にオーラを体表に留めることもできているのだが。
「オーラって生気、生命エネルギーってことだから、使うのに慣れてる霊力で絡めて、留めたんだよねー」
　結果として「纏」にはなっているわけだが、彼女のやったことは、現象としては同じでも、プロセスが違う。
　やっと安定したものを、またどうにか弄れ、と言われても困るのだ。
「クロロたちって器用だよな。これ、ふつーにあつかってるんだもん」
　本能的に「留めているだけ」なので、すぐさまどうこう、とは七季にとって難しいのだ。

「……そっちの方が器用だと思うんだが」

クロロに、念能力の基礎知識のレクチャーを受けつつ、じっさいにオーラの操作を見せてもらって、七季との違いを解析していたアーチャーは、黒髪の青年と一緒に、とっても微妙な面持ちをしていた。

#172　鏡界のソルフェージュ－白銀（しろがね）の衣－（後書き）

あとがき

＞とりあえず、キャプテンブラボーは美味しいところを持っていく男だと信じてる。

あとオリ主は、念能力に目覚めたので、結果として泰山麻婆から回復しました（そんなあつかい）。

前例はジョゼフ。

寝ている間は、オートで「絶」。起きている間はオートで「纏」という状態。

生き残るために、体が本能的に覚えただけですので、これからどうするかは考えてません。

目的は泰山麻婆の解毒（？）一点でしたから。

念能力者でもないと、回復できない外道麻婆、プライスレス。

もうちょっと、救出についての回想をする予定です。

#173　鏡界のソルフェージュ ― その娘、魔砲少女につき ―

「プレシア、アリシアちゃんはまだ寝てるの？」
「ええ。ずいぶんはしゃいでいたから……ナナキも助け出せたし、安心したんでしょうね」
ミルキ所有の飛行船の中。
いうなれば、一同があつまるためのサロンの役目を持つ、広々としたリビングで、ダークヘアのママさん魔導師と、栗毛の巫女姫はのんびりお茶を飲んでいた。
「さすがに、あれだけ魔法を連打したのは初めてだし」
プレシアはルビー色の目を細めて、手元にあるファンシーなロッドをひと撫でした。
それは、クロウカードを捕獲する、魔法少女の持ち物そっくりなデザインのデバイスだ。鳥の頭に似たシルエットに、白い双翼をあしらった杖先が、いかにも可愛らしく女の子向けだ。

インテリジェンスソード、デルフリンガーの意識を宿した杖は、プレシアやリニス、アーチャーにリドル、果ては機械に詳しいシャルナークや真言たちまで加わって、さんざっぱら魔改造の施された素敵デバイスとして生まれた。
使い手の体を操ったり、魔法を吸い込み、その魔力を蓄積する機能はそのままに、ハルケギニア式、およびミッド式の、射撃魔法や防御魔法、そのた補助魔法が組み込まれたストレージデバイス。
七季を救出する折――臓器売買組織の、建物を襲撃する際、そのデバイス「デルフリンガー」を手に、先陣を切ったのは、何とアリ

シアそのひとである。
アーチャーのコートを連想させる、赤いバリアジャケットを翻し、杖に跨り、黒いブーツで颯爽と空を翔ける、金髪ツインテールの幼女は、まさしく魔法少女の姿そのままだ。
うっかり萌えていたミルキが、真言にドつかれていたのは蛇足だろうか。

前もって、トレーニングがてら、真言やリニス、プレシアが魔法を溜め込ませていた「デルフリンガー」の魔力ストックは相当なもので、アリシアは、弾幕ばりの射撃魔法を繰り出して、突破口を開いたのである。
「アリシアの勇姿、しっかり『ラベンダー』に記録させておいたわV」
「抜かりありません！」
びっ。
力強くサムズアップするリニスも、自分のデバイスに、マスターの娘の映像を記録しておいたらしい。
アリシアらぶなテスタロッサファミリーである。
「しかし、あの砲撃はみごとだったよね～」
真言も「アハハ」と若干、乾いた笑いをこぼす。
精孔を開いてしまった七季を回収して、撤退する折、しぶとく「商品」をあきらめず、追いすがってくる男たちにキレた金髪幼女は、残りの魔力をすべて注ぎ込んだ、広範囲の砲撃魔法をぶち込んだのだ。
もちろん、範囲が広がる分、そのインパクトは弱くなるが……デバイスの前方、五百メートルの人間が、のきなみぶっ倒れて死屍累々、というのは、なかなかに壮観な光景である。
ちょっぴり、アリシアの将来が心配になった真言だった。

「ところで」
栗毛の少女の、やわらかな膝から、ひょいとテノールが湧き上がる。
もっか、アーチャーに七季を独占されて不貞寝中の黒猫、もとい、リドルである。
「マコトが、ＮＧＬ……だっけ？
とにかく、あの土地に侵入したとき、君がいきおいで切り捨てた、人間サイズの昆虫って……」
「あー……」
いまさら思い出したのか、真言もさらに微妙な面持ちになる。
土蜘蛛の式神に、とりあえず探索を任せたとき、彼の「糸」に引っかかった、人間サイズのスズメバチっぽい物体。
洞窟の奥にひそんでいたそれは、気色悪かったのと、少しでも、七季かもしれないという期待を裏切って、ぬか喜びさせた八つ当たりから、
『紛らわしいんじゃボケェ！』
と一刀の元に、栗毛の美少女が切り捨てた、奇怪なナマモノ。
「あれって、やっぱり」
「キメラアントだよねぇ……」
それも女王。
大きな腹ごと真っ二つにした亡骸は、放っておくと、妙な病原菌でも流行りそうだったので、アーチャーによって、火の魔法と錬金で、跡形もなく焼却処分、即座に土に還されていたりする。
「だってキショかったし」
「うん、まあね」
――しかも僕たちを食べようなんて、図々しいこと言ってたし。
それなら返り討ちにしたって、何ら問題はないと思うんだ。

闇の魔法使いであるリドルはもちろん、基本的に、弱肉強食なノリがある真言は、うっかりやってしまった原作ブレイクに、口をつぐむことにした。
平和が一番、である。

#１７３　鏡界のソルフェージュ－その娘、魔砲少女につき－（後書き）

あとがき

＞短いですが。

＊臓器売買組織に突撃時のアリシア、魔砲少女化！

＊デルフ、こんなんなりましたけど。

＊キメラアント女王、南無。

の三本立てです。

ＮＧＬ潜入時の回想でした。まだもうちょっとネタがあります。

※ＥＸ　ノクターン作品　－注意書き－

読み手さまから、リクエストが複数あったので、弓兵とオリ主のムニャムニャ……を、お試しに、ノクターンで書いてみることにしました。

年齢制限があるので、こちらには掲載しませんが、いちおうお知らせをば。

十八歳未満の方は、ご遠慮くださいね（・∀・）ノシ

キーワードは「弓七」で検索すれば、出てくるはずです。

まだ短い上、行為じたいの描写はないですが、ネタが既にアレなもんで。

少しずつ、手の空いたときに増えるかもしれませんが、あくまでお試しです。

書き手の書くものですし。あんまり期待しないでください（笑）。

字数が足りないので、もうちょっとだけ。

いまのところ上げているのは、オリ主と弓兵の「初夜」話の導入部だけです。

明日には、もうちょっと突っ込んだ部分まで書く予定ですので、まとめて読みたい方は、ＵＰしてからの方が良いかもしれません。

いちおう、そちらの「夜」部分の更新は、活動報告に、こっそり

書き込んでおきます。
読む方がいるかどうかは、果たして謎ですが。
まあ、ものの試しです。

あくまで基本は本編がメインですので、のんびりペースだと思います。

#174　鏡界のソルフェージュ ―その男、電話番につき―

「でさ」
まだ不機嫌そうに、まっくろなしっぽを、びたんびたんソファに打ちつけているリドルは、ジト目で栗毛の少女の美貌を見上げた。
「あの男、何だったのさ？」

それは、七季を救出するため、ＮＧＬ自治国へ潜入するよりも、少しだけ前の話。
じりりりりりん。じりりりりりん。
古式ゆかしい、黒電話みたいなベルの音が、真言の脳裏に鳴り響いた。
それは、いつまでたっても止む様子がなく、ただでさえ気が立っている巫女姫は、問答無用でジッパーを虚空へと引き開けた。
じゃっ。
「うっさい！　何の用なの『電話番』！」
いきおい、距離どころか世界をも越えるトンデモジッパーから引きずり出されたのは、サングラスをかけた、スーツ姿の青年である。
無理やりな姿勢で着地を強要されたため、彼はぼてっ、と情けない音とともに、飛行船の床へと落下した。
「あたたた……あ、良かった！　漣さん、ご無事だったんですね！」
ぴょこん、とどこかバッタみたいなバイタリティで跳ね起きた青年は、どこにでもありそうな、グレーのスーツをまとっていた。
かけているサングラスで、目の色はわからないが、黒髪に黄色み

がかった肌は、おそらく日本人。もしくは、モンゴロイド系の血を引く一族だろうと思われる。
高くも低くもない鼻梁に、平均的な顔つきとおぼしきシルエットは、その体躯にも及んでいる。
真言に「電話番」呼ばわりされた青年は、しかし憤るでもなく、きょろきょろとあたりを見回しながら呟いた。
「いま、庁舎の方はパニックですよ。漣さん、貸し出し中の式神たちを、のきなみ引き上げたでしょう？
あれで、『柱』の姫に何かあったんじゃないかって……七地ちゃんも、こっちにいないし、連絡取れる人がいないもんだから、私が呼び出されたんですよ」
ちょっと困ったような響きの、かるいテノールが「理由」を説明する。
「そういえば、七地ちゃんは？」
「……」
黙りこんだ真言が、ぎり、と奥歯を噛みしめる。
その問いは、この場の人間にとって、残らず地雷でもあった。
さすがに立ち込めた殺気に、びくん、と反応した青年が、肩をすくめて身構える。
「へえ。あんたも念能力者なんだ」
シャルナークがエメラルドの双眼を剣呑に細め、すうっと男へ意識を向ける。
と、やおら袴姿の少女が、鞘に入ったままの神剣を水平に持ち上げることで、シャルナークの意識は逸らされた。
「マコト、こいつ何なの？」
「うちの……職場の同僚」
「え、ええと。帝都心霊庁総務課、係長補佐、通信班、田中実（みのる）と申しますです！」
あわてて名刺を差し出し（社会人の癖である）自己紹介をする青年――田中に、はたと真言が何かを思い出したような表情で、目を

かがやかせた。
「そうだ！　『電話番』！　あんたナナちゃんと『話せる』？」

彼が「電話番」と呼ばれるのには、わけがある。
それは、青年がそなえる念能力――『彼方への糸電話（貴女と…お話したい！）』に由来する。
具現化系のその能力は、知人の付近に自分と通話可能な糸電話を出現させる、と単純なものだ。
話す相手との距離に比例して、消耗するオーラは増大し、本人との親密度が高ければ、オーラの消費量は減少する。
しかし、いっぽうで、相手が取らない限りつながらない、という、かなり限定された使い道の能力だ。
糸は念、コップ部分は「糸電話として使用可能な日用品に限定される」という制約があったりする、わりとエコロジーな念である。
「は……ええと、この世界にいるなら、たぶんイケますが」
そもそも、田中の能力は、女性との縁のなさを嘆いたあまりに生まれた能力であった。
よって、「相手が好みであればあるほど、通話時間が長くなる」。
「男にはつながらない（男の娘は除く）」。
「地雷女と認定された相手は、無条件にガラスのコップ（割れる）」。
などなど、ツッコミどころ満載の制約がついてくる。
そんな能力者が、美少女である真言に、息を荒げて詰め寄られ、断れるはずがない。スーツ姿の青年は、どぎまぎしながらも頷いた。
たとえ、痛いほどの力で、がっしり両肩をわしづかまれようが、相手は美少女である。
「良し行け『電話番』！」
ちからいっぱい、ちょっぴり殺気立ってもいる、真言にやいやい

急かされて、年上のはずの田中青年は、あわてて念能力を発動する。
周囲の気配と視線が語っていた。
ヤレ。サモナクバ、オレサマ、オマエ、マルカジリ。
『彼方への糸電話（貴女と…お話したい！）』
彼にとって、七季は、才能その他を丸ごと捨てても良いと思うほどに女性との出会いを切望した折、初めて出会った、可愛らしい少女だったりする。
しかも、まともに話せた、初めての女性。
その挙句に、真言や美神、そのた帝都心霊庁の関係者や、ときには白兎など、数々の美女、美少女との縁を（あくまで会話レベルだが）持って来てくれた、稀有なる相手――ときては、もはや心の中では女神あつかいである。
そんな彼が、失敗するとは思えない。
なにしろ、真言やアーチャーのような、契約による霊的なラインではなく、田中のそれは、あくまで念能力。
七季の不調は関係ない。
ほどなく。
『はい？　あ、田中さんですか。お久しぶりです～』
「電話」は、無事につながった。

その後、けっきょく七季が無事なこと、捕われている施設の正確な位置は、彼女にはわからないことなどが語られたところで、田中のオーラ切れのため、ぷっちんと通話は終わってしまったのだが。
あれはあれで、妙というか、役に立ったことは間違いない。
オーラの切れた田中は、電池の切れた携帯電話よろしく、ぱったり気絶。そのまま、ジッパーの向こう（元の世界）へ、真言の式神の一部と一緒にポイ投げされたのであったが。
うん、ちょっと酷いかもしれない。

「だから、『電話番』だよ」
元は七季が、「修行」に出された先で出会った男なのだが、なかなかユカイな人物だったので、真言に紹介したところ、そのまま「お持ち帰り」されて、帝都心霊庁に勤務することとなった。
帝都心霊庁では、七季以外に、世界を越えてでも、真言と連絡を取れる人物として、意外と重宝されている。
ふだんは空回りぎみなので、前線ではなく、もっぱら事務仕事をしているが。
今回は、真言が式神たちをまるっと引き上げてしまったので、すわ何事か、と同僚および上司たちから、連絡を取るように詰め寄られたものと思われる。
何やらデジャヴと感じるが。
「別名は『パシリ』ともいう」
「それは酷い」
真言にセリフにツッコミを入れたリドルも「まあそんな雰囲気だったけどね」と続けているので、十分酷い。
ともあれ、そんな感じで、帝都心霊庁には、けっこう前身が不明だったり、いろいろな事情で、異世界からお持ち帰りされたりした人間（や人外）が、おおむね本人同意の下で働いていたりするのであった。
プレシアの野望が実現する日も、そう遠くないのかもしれない。

＃１７４　鏡界のソルフェージュ－その男、電話番につき－（後書き）

あとがき

＞とりあえず生存は確認されたものの、進行形で身の危険が迫っていたオリ主に、一同はピリピリしてました。

だいたい時系列的には「＃１７４（飛行船内）→＃１７３→＃１７２（オリ主救出）→＃１６９＆１７０（翌朝）」という感じ。

さかのぼって出オチから書きました（笑）。

わかりにくかったら申し訳ない。

登場した「田中実」氏は、読み手さまからいただいたアイデアを元にしたオリキャラです。

ちょっと貧乏くじな、横島君ちっくなお兄さん。

意外と使い勝手が良いので、ネギま編あたりも、「連絡役」として登場するかもです。

#175　鏡界のソルフェージュ ― かみさまのけん ―

さて。
長いこと飛んでいるような気がする、ミルキ所有の飛行船だが。
いったいどこへ向かっていたのかというと――
「皆様、ゾルディック家へ到着いたしました」
そういうことなのである。

『おかえりなさいませ』
ざっ。
漆黒のお仕着せをピシリと着こなした執事と、白いエプロン姿のメイドが、飛行船の昇降口にズラリと花道を作って出迎える。
彼らがいっせいに頭を下げる姿は、それだけでもかなりの壮観だ。
「マコトさま、ナナキさまは、いつも通り、お部屋に案内させていただきます」
「ありがと」
「お世話になります」
鷹揚に頷いて、先導するメイドにとことこついていくあたり、巫女ンビはゾルディック家に慣れきっているようだ。
そのうしろをついていこうとするアーチャーの腕を、がっしりと複数の腕が絡め取る。
「オマエは」
「こっちだ」
ニタアっと笑うフェイタン。目が笑っていないクロロ。他にも、旅団メンバーや錬金戦団の面々、何故かミルキやイルミまで混じっ

ている。
『ＯＨＡＮＡＳＨＩですね、わかります』
才人とリドルが、したり顔で口をそろえていた。

ゾルディック家の庭――といえるかどうか、はなはだ疑問だが――は、恐ろしく広大である。
ゆうに山一つを敷地として所有するのだから、当たり前といえば、当たり前だが。
そしてアーチャーは、赤い外套をまとった武装姿で、踏みならされている訓練場らしき場所へと連行された。
「……あー。いまさら確認するのもアレなのだが、これはリンチというやつでファイナルアンサー？」
準備運動をしているメンツの中には、どういうわけか、パピヨンも混じっている。黒色火薬でできた蝶の翅（はね）に、ちょっとだけ錬鉄の英霊は顔を引きつらせた。
『ファイナルアンサー』
びっ。
にこやかにサムズアップする男性陣、だけでなく、女性陣も混じっているのだから、アーチャーは困り果てた。
「私としては、マスターの家族や友人を傷つける気はないのだが……」
きらめく笑顔で返された。
「ならば黙って地獄に落ちやがれということですね、わかります」
横合いからツッコミを入れるのは、参戦する気はないが、ちゃっかり見物する気はアリアリの才人である。
いまの彼の心情を、一言で表すならば「チクショーリア充が！」。
「僕も参加してこよう」
やっぱムカつくから。

ひょい、と才人の肩から降りた黒猫は、着地するや、一瞬で黒髪の少年へと変貌した。
ちょっとだけ、その様子にイルミが興味深げなまなざしを向けてくる。おそらく潜入に便利そうだとでも思ったのだろう。
ちなみに、ゾル家の大人組――シルバ、キキョウ、ゼノ――と、ジョゼフは、いつのまにか設えられた観覧席に陣取り、観戦する気まんまんだ。
これといった合図があったわけではない。
しかし、戦いに慣れたものたちの、気が一致したのか、いっせいに襲いかかってきた相手を防ぐべく、アーチャーは、彼の内包する「剣の丘」から、もっとも信頼する防御武装を引き上げた。
「投影開始」
「真言――！」
やおら外から響き渡った声に、ちらりと琥珀色の目をやった少女は、やれやれといったしぐさで、テラス窓を開けた。
「あによ。うっさいな」
「どういうことだこれは！」
「何がよ」
珍しくヒートアップした口調で、栗毛の少女を詰問する、長身の偉丈夫の姿を、七季はけげんそうに眺めながら、ちみちみ紅茶を含む。
「どうして私の投影が、宝具のランクそのままで、劣化していない！？」
いかにもめんどくさそうに、片耳に指を突っ込んで、アーチャーの問いをやり過ごした緋袴の美少女は、「ああそれ」と投げやりなソプラノで応じた。
「ナナちゃんとシたからに決まっとろー。巫女の純潔ナメんな」

「は――？」
ぎっし。
求めていたはずの答えを突きつけられた男は、その鍛え抜かれた体躯を、ブリキのオモチャよろしく硬直させた。
「アチャ男の霊格が上がったんだよ。ナナちゃんも上がったっぽいけどな。んで、できることが増えたわけ」
男女の交わりというものも、また一種の神秘である。
その秘奥を知ったことで、七季は新たな階梯を昇り、巫女の純潔を捧げられた高次存在――アーチャーはアーチャーで、好意という名の信仰と、純潔という供物（くもつ）を受け取った形になり、その霊格が上がったのである。
「では、この『神剣の鍛造・創造が可能』というのは……？」
「お前に新しく追加されたスキルだな。おめっとさん」
ぱちぱちと手を叩く真言を前に、白い髪の男は、がくりと膝をついた。
「別に……私は、そういうことを望んで……やったわけでは……」
何だか、ごにょごにょと、申し訳なさそうな低音が聞こえてくるので、真言は「うざっ」とばかりに、もう一人の当事者を振り返った。
さっきまで、どれくらい変化したのか、彼女が調べていた相手――七季である。
「私がアーチャーとしたかったんだし。オマケがついてきた、くらいの認識でいーんじゃないか？
それよりも私、アーチャーが鍛（う）った神剣、見てみたいな」
にぱっとてらいもなく笑いかける、七季の、黒髪にふちどられた、あどけない面輪を見上げ、一瞬ぱちんと見惚れた男は、今度はあからさまにそわそわしだした。
「そう、か。いや、そうだな。試しに作ってみるのも良いだろう。どうせだから、マスターの守り刀でも――」
「おのれイチャらぶしおってからに」

いまだ寒さの厳しい季節に、窓を開けたにもかかわらず、黒髪の少女と、白い髪の偉丈夫の周りだけ、春めいた空気の漂う空間に、さすがの真言も「けっ」と言いたそうな面持ちで、ケーキをやけ食いし始めたのであった。

そのころ。

アーチャーの投影した、「熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）」と宝具によって、返り討ちにされた形の面々は、いまだゾルディック家の訓練場で突っ伏し、番犬であるところの魔獣・ミケに、遠巻きに眺められていたとか、いないとか。

#175　鏡界のソルフェージュ ― かみさまのけん ―（後書き）

あとがき

＞てなわけで、弓兵パワーアップしてたよ、の回でした。

オリ主の処女をもらったおかげで、霊格アップ。

「英霊は完成された形」とあったので、じゃあ格を上げてみれば進化するんじゃね？的なノリでやってみた。

宝具の投影のワンランクダウンがなくなり、神剣も造れるようになりました。

ついでと言ってはなんですが、「神造兵器」エクスカリバーが投影可能。

……やりすぎた？

蛇足ですが、アーチャーが返り討ちにした面々を放ってきたのは、うっかり半分、驚き半分です。

#176　鏡界のソルフェージュ ― 見習い、始めました ―

「何だい、あれはっ！」

ゼノの命令によって、ゾルディック家の執事に回収された面々――アーチャーに返り討ちにされたメンバー――と、ほぼ見物に回っていた暗殺一家は、七季の従者の非常識な強さを肴に、盛り上がっていた。

ちなみに鼻息荒く声を上げたのは、姐御肌のマチである。

アーチャーとは、趣味の針糸仕事で話の合う間柄だったりするが、それにしても、ふだん垣間見ることのない男の強さは、じゅうぶん彼女を興奮させるに値するものだったらしい。

その手にはコップ酒。

大ぶりなツリ目のまなじりを、酒気に染めてさらに吊り上げる、くせっ毛ポニーテール美少女の言葉に、

「あのマコトが、ナナキの従者を任せるだけはあったってわけか……」

と、嘆息するシャルナーク。そのハニーブロンドにふちどられた童顔にエメラルドの双眸が目立つ面持ちは、いまだ不服げだが、アーチャーの実力を認めていないわけではない。

「念能力が使えないとばかり思っていたが」

そう呟くのは、酒の代わりにソフトドリンクを口にする、パピヨンマスクの少年だ。

「強かったなー」

パピヨンに相槌を打つ、つんつん黒髪の少年、カズキ。

その黒い瞳は、憧れの光を浮かべて、きらきらかがやいている。

「とりあえず、明日は手合わせを申し込むか！」

ノリノリなのは、壮年の男、キャプテンブラボー。

『さんせーい！』

どさくさまぎれに、ゾル家のアダルト組まで手を上げていることに「あれ見てまだやる気なのか……」と頬を引きつらせた才人とジョゼフが、黙ってお互いの顔を見合わせたという。

――世界って広いなあ。

そしてデンジャーだ。

むしょうに自分の故郷が懐かしくなった、異邦人コンビであった。

そのころ、真言の部屋では。

窓を閉めたあとも、ほわほわ花でも幻視できそうな春めいた空気を醸し出している空気に、ぷちっとキた神妻が、とうとう行動に出た。

じゃっ。がしっ。ぽいっ。

ここまで三秒である。

順に、

1）空間にジッパーを開けた。

2）アーチャーの襟首をつかんだ。

3）アーチャーポイ投げ。

の流れである。

「ちょ、先輩っ！？」

あわてて真言に詰め寄る七季だが、反対にがっちり抱きしめられ、きゅうきゅうしがみつかれて拗ねられる。

「ナナちゃんは私のだもん！」

「えと……あの……もちろんですよ？

私は先輩の『神使（もの）』ですから……」

困ったように眉尻を下げる七季は、ないしん「可愛いなぁ」と思

ってしまい、すぐには怒れなくなってしまう。
――やきもちを焼く先輩、可愛いなぁ。
とりあえず、なだめるために腕を回して、黒髪の少女は、自分と同じくらい、やわらかで小柄な肢体を抱きしめた。
しばらく少女同士の、ちょっぴり倒錯じみたイチャイチャ――もとい、仲睦まじいスキンシップが繰り広げられる。
「それで先輩、うちのアーチャー、いったいどこにやったんですか？」
「ん。ナナちゃんを『食って』霊格上がったんだし、ちょっと『修行』に出してみた」
ソファに仲良く隣同士で座って、じゃれついたまま話し合う、黒髪と栗毛の少女たち。
一方は、いまだ巫女姿で、もう一方は、黒地にデフォルメされた梅と思しき、丸い五弁の小花が白く散らされている、品のいいワンピースだ。
七季の着ているワンピースは、裾の方になると、梅を象った黒レースで、足が透けて見えるという凝ったデザインで、シンプルながらも趣味の良さが感じられる。
「ええと……私みたいな、ですか？」
「そう」
こっくり頷く真言に、思わず考え込む、「神使」の少女。それが本当ならば――
「異世界か、神様のお手伝いに放り込んだってことで、ファイナルアンサー？」
「ファイナルアンサー。
あいつ、新しいスキル覚えたでしょ。どうせだから、天目一箇神さんとこに送り込んでみた」
さらっと出された名前は、日本神話にも登場する、鍛冶の神である。
「ちったぁ修行になるでしょ。いちおう話も通してあるしね」

涼しい顔で言ってのける先輩に、自分の「修行」がどういうものだったかと振り返って――神様系のほとんどが、お社（やしろ）の掃除や、神様の話し相手、稀に書物の整頓作業などの軽作業だったことを思い出し。

それなら大丈夫か、と七季は真言に「早く返してくださいね」と言うに留めたのだったが。

そして三十分後。

七季たちにとっては三十分であるが、異世界、もしくは異空間に送られた本人は、その限りではない。

ともあれ、ふたたび栗毛の巫女さんから、ジッパーによって、文字通り、引きずり出された男は、何だかやけにぐったりしていた。

「あ、アーチャー？　アーチャー、しっかり！」

あわてて従者の長身をソファに横たわらせ、飲みやすいように冷ました紅茶を口元に持っていく七季の手を、がっちりと大きな男の手が握り締めた。

「え」

「やっと帰ってこれた……ッ」

やたらめったら万感の思いがこもった低い声に、珍しく、おろおろしながらアーチャーの顔をのぞきこむ、黒髪の少女。

精悍な相貌は、一見変わらないようにも見えるが、そのまとう気配には疲労がにじみ、やつれたような影が差している。

「……お疲れさま。おかえりなさい。アーチャー」

がんばったな。

紅茶をひとまず置いて、まずは男をふんわり抱きしめ、いたわる七季へ、ドラを転がすような低い声が降ってきた。

『なあに。心配はいらん。

ちょっとばかり、不純物を取り除き、歪みを叩きなおしただけじ

ゃからの』
「？」
従者を包み込む腕はそのままに、ぱっと七季が振り返ると。
そこには、ジッパーの隙間からのぞく、巨大な一つ目が、炉心の鉄のように炯々と朱金に光っていた。
ドス低い声の主は、おそらく「彼」だろう。
「ええと……うちのアーチャーが、お世話になった神様でいらっしゃいますでしょうか？」
『応。天目一箇神（あめのまひとつのかみ）と申す。そこな見習いの主じゃろ？』
「はい。七地七季と申します」
このたびは、アーチャーが、お手間をかけまして。
まるで我が子を守るように、きゅっとやわらかな胸に、アーチャーの頭部を抱きこみながら頭を下げる黒髪の少女へ、朱金の目はにっかと細くなって笑った。
『おう。良い女子（おなご）じゃな。その見習いは、なかなか見所がある。また折を見て、こちらに寄越してくれんか』
まるで岩を転がしたような、ごろごろとした笑い声が響く部屋に、あっけらかんとした真言のアニメ声が立ち上る。
「よろしゅーおたの申しますー。てことは、合格？」
『うむ。我が弟子、鍛冶神としての見習いとなることを許す！』
ぶおん、とふいごでも盛大に鳴ったかのような音とともに、やたら上機嫌な宣言が降ってきて、七季はぱちぱちと、まっくろな目を瞬かせた。
いきなりの急展開だが、とりあえず彼女にわかったことは一つ。
アーチャーは、鍛冶の神様の見習いとなった、ということだ。
そして、目の前のでっかい一つ目の神様は、そのお師匠さま。
「うちのアーチャーを、よろしくお願いします」
『応！』
ぺこりともっぺん頭を下げた少女に、製鉄・鍛冶を司る神様は、ふたたび剛毅にごろごろ笑ってのけた。

当のアーチャーは、最後まで七季の胸に顔を埋めたまま、ぐったりしていたという。

#176　鏡界のソルフェージュ ― 見習い、始めました ―（後書き）

あとがき

＞そんなわけで、大方の読み手さまの予想とは、斜め上の展開に突っ走ってみる。

神様見習いに「昇格」したアーチャーです。そのわりにあつかいがアレだけど。

神剣を鍛つなら、やっぱり師匠がいないと、と出してみた。

宝具はお手本。ランクダウンしていないので、良い教材です。そんな使い方。

「修行」先で、アチャが何されたかは書きません（笑）。

読み手さまのご想像にお任せします。

※天目一箇神（あめのまひとつのかみ）：日本神話に登場する製鉄・鍛冶の神。「金屋子神（かなやごかみ）」と同一視されることもある。

神名の「目一箇（まひとつ）」は、「一つ目」（片目）の意味であり、鍛冶が鉄の色で、その温度をみるのに片目をつぶっていたことから、または片目を失明する鍛冶の職業病があったことからとされている。

#177　鏡界のソルフェージュ ― メトロポリタンミュージアム ―

ゾルディック家、フリークス家、そして幻影旅団と錬金戦団に、ジョゼフ&才人&リドル&真言&テスタロッサ主従という異世界ご一行をプラスした、カオスな顔ぶれは、ただいま絶賛宴会中だった。

「ほう。娘がいるのか」

「う、む……妻の忘れ形見というやつだ。あまり、かまってはおらんが」

シルバの問いに、青い髪の美丈夫は、何ともいえない面持ちで、手の中のグラスを弄んだ。

「まあ！　羨ましい！　うちは男の子ばっかりで……お父様似なのかしら？　それとも奥様似？」

ちょっとどころでなく、ヒステリックなキキョウの声に、びくっとジョゼフがのけぞるが、そこはそれ、真言たちとの修行で揉まれた王様は、一味違う。

気を取り直して、ドレス姿の女性に目をやった。

「まあ……目元のあたりは、俺に似ているか。髪の色も青だから、似ていなくはないだろうな。だが、いらぬところまで俺に似てしまったのが悔やまれる」

琥珀色のブランデーに視線を落としたジョゼフは、深々と嘆息した。

「魔法が苦手なところまで、似なくても良かったのだがな……」

弟の娘が、シャルルと同じように、早くから魔法の才能を開花させていくのを、どれほど複雑な心境で、ジョゼフは見てきただろう。

もはや、言ってもせんないことだが。

「魔法ですって！」

キィィィン。
ゾルディック家の嫁の声は、たいそう甲高く、聞くものの鼓膜に直撃する。
慣れた面々は、あらかじめ「纏」で鼓膜を保護することに余念がないし、ジンやイルミなどは、まだ念をろくに使えないゴンとキルアの耳を、ちゃっかり指でふさいでいた。
「魔法が使えないなら――」
「念」を使えば良いじゃない！
天空闘技場で、ウィングに師事を始めたばかりだったとはいえ、ヒソカの報告で、ゴンとキルアが既に「念」の存在を把握済みと知っているせいか、キキョウは、マリー＝アントワネットばりのセリフを吐いてくれた。
「いや、フツーの人間は無理っすからね？」
果敢にも、ヒステリックマザーにツッコミを入れた才人へ、ミルキやイルミからの拍手がぱちぱちとまばらに送られた。

「男の子ばっかり？」
少し離れた場所では、ジンが着物姿のカルトを眺めて、けげんそうな表情を浮かべている。
まっくろな切り下げ髪に、ぱっちりした目。唇には紅まで差している子供は、どうみても女の子に見えるだろう。
「カルトは男の子じゃ。ありゃキキョウさんの趣味でな。娘が生まれんので、ああして代わりに娘を持った気分を味わっておるんじゃよ」
マコトやナナキの嬢ちゃんが、うちに出入りするようになって、少しはマシになったんじゃがの。
「……なんつーか……大変だな……」
人様の家庭の事情を知ってしまったジンは、とても申し訳なさそ

うに、ゼノの杯に酌をするのだった。

「そうだ、ジン。ようやく携帯電話を手に入れたのでな。アドレスを」

言いながら、ジョゼフが取り出したのは、彼の髪の色と同じ、青いボディの携帯電話である。

「お、良かったなー！」

にかっと笑みを浮かべながら、ガリアの王様とやりとりする黒髪の男は、やっぱり子持ちのようには見えない。

けれども。

「おっまえ、親父そっくりだなー」

「そう？　キルアだって、お父さんと雰囲気似てるよ？」

銀髪のツリ目少年と、髪も目も、父親譲りのまっくろな、ツンツン頭の少年は、お互いの家族の特徴を挙げて、やいのやいのと盛り上がっている。

「あ、ジョゼフ。それ大事にあつかいなよ。せっかく俺が作ったんだからさ」

そう親父コンビの会話に割り込んできたのは、金髪の青年――シャルナークだ。

「何、これを作ったのか？」

「マコトの頼みでね。ホントは、ハンター試験の合格祝いにするつもりだったみたいだけど」

あんた落ちちゃったからさあ。

きしし、と笑うシャルナークは、「マコトも素直じゃないよねえ」と育ての親を話のネタにしている。

ジョゼフは、携帯電話を受け取ったときのことを思い出した。

『別行動することもあると思うから、いまのうちに渡しておくから。連絡用だからね！』

それは、七季を救出に向かう、飛行船の中でのことだ。
異世界に拉致されたり、とんでもない修行の場に突っ込まれたり、びっくり人間との共同生活を強制されたりと、さんざんな生活ではあったが。
――きっと、変わった、と思うのは、マコトのおかげなのだろうな……。
面と向かって感謝を言う気はないけれど。
それでもジョゼフは、我が身に起こった変化を、思いのほか自分が喜んでいることに気づいていた。
「こおおらシャルウゥ！　何を余計なこと言ってるかな――！」
「やっべ、聞こえてた！　退散退散っっと」
さっきまでプレシアと話していた栗毛の少女が、シャルナークめがけて、一足飛びに飛んでくる。
「そう。もう毎日、何を着せようかって……お買い物が楽しくて……」
「んまあああ！
ああでも、たしかに可愛いお嬢さんでしたわね！　うちのカルトちゃんの服を着せてみたらどうかしら？」
今度はママさん同士で何やら盛り上がっているようで、プレシアはキキョウと娘の可愛さについて話しているようだ。
「俺たちは――」
「宴会芸の達人だ！」
また離れたところでは、カズキたちが何やらヒートアップしていて、念能力の槍を動かす黒髪の少年と、その槍の上で、蝶の羽根をはためかせ、くるくる舞っているパピヨンの姿があったりする。
「それ宴会芸ちゃう。ただの能力や」
ずびし。
砂色の髪の少年が、問答無用のツッコミを入れる。錬金戦団のメンバー、中村剛太だ。
そんな彼の肩を、ぽん、と叩いたのは、ツッコミとして親近感を

覚えた才人。
「ん？」
「同士！」
がっしり。
そんな一方的な友情が芽生えたり、芽生えなかったり。

「うわ何これ」
カオスだなー。
真言の送り出した「修行」で、ぐったりしているアーチャーを自室――七季に割り当てられた部屋という意味だ――に移動させ、さいぜんまで付き添っていた黒髪の少女は、様子を見に来てあんぐりと口を開けた。
いつのまにか、ジョゼフがシルバとアドレスを交換しており、「もし暗殺の依頼があったら、友人のよしみで三割引で受けてやる」と、ありがたい（？）お言葉をもらっていたり。
マチが、カルトやアリシア、ナナキたちに着せる服について、キキョウと熱心に意見交換をし、彼女たちの服を作る依頼を受けていたり。
女の子に間違われたカルトが、ちょっとキレて、キャプテンブラボーに鉄扇で殴りかかってみたものの、「シルバースキン」で、みごとに防がれてぶーたれていたり。
「よおナナキ。何してたんだ？」
ひょいと顔を上げたミルキが、シャープな面差しに切れ長の涼しげな眼を向け、適当に料理を取り分けた皿を、顔なじみの少女に差し出してくる。
「ありがと。うん、アーチャーが先輩の『修行』に放り込まれて、グロッキーでさ。さっきまで面倒見てたんだ。つっても、傍にいるだけなんだけど」

七季がいるだけで、いまの彼は落ち着くらしいので。
「……そうか」
何ともいえない表情で、頭をかくミルキの目は、お空を泳いでいた。
あのアーチャー――昼間、彼らを返り討ちにした――が、ダウンするなんて、いったい何やらかしたんだ、と考えたところで、現実逃避に走ったようだ。
「あ、ナナキだ」
「どこ行ってたんだよー」
ぽてぽてと、四つんばいで近寄ってくるのは、黒髪と銀髪のちみっこだ。
「部屋にいたよー」
ご飯だけ取りに来た。
ほら、とミルキが渡してくれた皿を抱えてみせる七季を見て、ゴンとキルアは「ふうん」と首をかしげている。
「そういえばさ」
ぽん、とキルアが気まぐれな猫っぽく、天空闘技場で出会った、「念」の師匠のことを言い出した。
小柄な少女の周りに、オーラの気配をうっすらと見て取ったからだ。
「ウィングさん、どうしたんだろうな。ズシがいなくなったって、スゲーあわててたじゃん」
「あ」
彼らの修行を見ていてくれた、メガネをかけた男性のことを、ようやくゴンも思い出した。
ズシは、友人のほとんどいなかった少年たちにとって、同年代の、新しい友人であり、修行仲間だったのに。
「ズシ？　それって、太い眉毛で、短い髪の男の子だったり？」
『知ってんの？』
振り返るゴンとキルアに、七季は、いまだ不思議空間に眠らせた

ままの、拉致された被害者であるちびっこたちのことを思い出していた。

――や。さすがに、ククルーマウンテンにある、ゾルディック家のお宅っていうのは、刺激が強いよな？

出すにしても、もうちょっと後にした方が良いよなぁ、と七季は、あどけない顔に、へんにょり眉根を寄せて「さてどうしよう」と皿を持ったまま首をかしげていた。

#177　鏡界のソルフェージュ ― メトロポリタンミュージアム ―（後書き）

あとがき

＞ウィングさん遅刻。

てか、書き手が忘れて（ｒｙ

……うん。保護者メインの宴会です。

ジョゼフが無事に、シルバパパンともオトモダチになりました。

ちなみに「みんなのうた」の「メトロポリタン美術館（ミュージアム）」がイメージＢＧＭなので、タイトルに引用。

人によってはトラウマソングらしいんだが。

あれくらいのカオスっぷりということで、ひとつ。

#178　鏡界のソルフェージュ ― おやつはいかが？ ―

「あ、そういえば」
はたり。
その不思議空間から「出す」ということで、ふいに七季は思いついた。
「平賀君、ジョゼフさーん」
てこてこてこ。
「ん？」
「どした、七季ちゃん」
黒いワンピースの懐から――畢竟（ひっきょう）、それは胸元からということになるのだが――、小柄な少女が取り出したのは、ひんやりと冷気を帯びている金属製のカップだった。
「ほい。アーチャーお手製の、クモワシ卵プリン」
ちゃんと二人の分、取っておいたんだ。
にこぱ。
あどけない少女の面輪がほころんで、とっておきのご褒美を手渡す。
「何」
「アーチャーさんお手製か！」
七季の従者の腕前を知っている、異邦の少年とガリアの王様は、おお、とテンション高く顔をかがやかせる。
「あいかわらず便利だよね、その能力」
「念能力じゃないらしいんだがな」
イルミが黒髪の少女を見つめ、いつもの無表情な猫目フェイスで呟けば、その隣で、酒を物色していたクロロがしれっと相槌を打つ。
「パピヨンと似たようなことやってるのに、場所が違うだけで、こ

こまで印象が違うとは……」
キラッと涙をきらめかせているのは、錬金戦団でも屈指のツッコミ役、剛太だ。
「失敬な。俺とは優雅さが違う」
黒地に、紫ラメの蝶が股間にワンポイントとしてあしらわれた、全身タイツ姿でポーズをキメるパピヨンに、クロロが黙って目を逸らした。変態コワイ。
いっぽう。
「ウンまああ～いっ！」
「バニラの芳ばしさに卵の濃厚さがカスタードを引き立てあっておる。
しっかりと蒸され、引き締められた、少々固めの歯ごたえも堪らんな！」
ジョジョ風の賛辞を上げながら、がっつりとプリンに食いつく才人。
どこまでも優雅にスプーンを繰りながら、それでもあますことなく、クリーム色のスイーツをすくいきるジョゼフ。
「良かった。アーチャーに伝えておくな」
んじゃなー。
くるりとポニーテールの黒髪を翻し、七季は、料理の皿を抱えて宴会場を後にした。

「あれ、ヒソカ？」
部屋に戻る途中で、珍しくピエロメイクをしていない男に出くわし、七季は足を止めた。
エプロンをつけていることから、さいぜんまで厨房にいたことがうかがえる。
幻影旅団に入るために、フレンチを極めたヒソカは、意外と凝り

性でこだわりがあるらしく、料理をするときには、異物が入らないよう、すっぴんで仕込みにかかるのである。

この事実を知っているものは、同じ厨房に入ったことのある、旅団のメンバーと、七季、真言くらいのものだろう。

毒舌のシャルナークは「その気遣いを日常にもまわせよ」とツッコんでいたが。

彼がそれに従ったかどうかは……ふだんのいでたちを見れば、述べるまでもない。

「やあナナキ。従者を連れていないのかい？」

珍しいね。

男にしては、少し高めの軽妙な声でしゃべるヒソカは、メイクをしていなければ、切れ長の目元に艶のにじむ、けっこうな美形である。

しかしきょうは、彼を彼たらしめる、つやつやと変態じみた生気あふれる相貌に、らしくない疲れの影が差している。

「うん、ちょっと……どした？

何か疲れているみたいだけど」

「ああ……こっちはこっちで、ちょっとね。さっきまで厨房を片づけていたから」

いささか遠い目をする、水色の髪の男は、心なし、肩を落として七季に話しかけた。

「料理って……才能なんだよねェ……いまさらながら、ボクはそれを思い知った気分さ……」

――マジでどうした。

七季は内なるツッコミを入れつつ、「そうだ」と高い位置にある、奇術師コックの美貌を見上げた。

「ヒソカもありがとな。助けに来てくれて」

そう。

思いがけないことに、このマッドピエロも、旅団のメンバーと一緒に、ＮＧＬ自治国へ乗り込んできたのだ。

「ああ。別に。面白そうだったからね。殺気立つ旅団のみんなやマコト、それに君の従者たちの気配……アレに囲まれるなんて、なかなかないことだからねェ……」

興奮してイッちゃうかと思ったよ。

アリシアが見れば、五秒で泣き出し、キルアが見たなら即座に逃げ出すと思われる、壮絶にアブない（アブノーマルで「ないわー」の略／待て）表情の男が、くつくつ喉を鳴らすのに、七季はのんきに笑って謝辞を繰り返した。

「それでもさ。ありがとう」

ほんわりと緊張感のない面持ちで、穏やかに見上げてくる、少女のあどけない顔に、ヒソカは唇の中央をきゅっと持ち上げた。ぱっと見、猫っぽい口の形だ。

――まァ。果実としては魅力ないけど、ゲストとしては貴重だからね。

七季は、たったひとり、ためらいもなくヒソカの料理を食べて、正直に感想を言ってくれる相手である。

口に合わないものは、モロに表情に出るし、美味しければ、満面の笑みで味わいながら、おかわり、もしくは「また食べたい」と要求する。実に素直だ。

ヒソカを良く知るものほど、彼の手料理というものを警戒するし、真言は真言で、いまだに毒見を済ませてからでないと、ヒソカの料理を口にしない。

ちなみに、入団試験のとき、そんな男の料理を、まっさきに食べたのは、いうまでもなく、その場に居合わせた七季だ。

しかも、ただ「美味しい」と褒めるのではなく、意外と舌が肥えている少女は、料理に使われている食材にも良く気づくし、いままで食べたことのないものや、工夫が混じっていれば、敏感にそれを察知する。

料理人としては、なかなかありがたい相手だったりするのだ。

「ところで、ここにクッキーがあるんだけど」

「ヒソカのお手製？　やたっ！」
彼が頷くや、即座に片手を伸ばす七季に、男は切れ長の目を細める。ここでドン引くものの方が、圧倒的に多いのだ。
「まあ待ちなよ。それじゃ持ちにくいだろ。ワゴンを貸してあげるからさ」
たっぷり料理の盛られた――ミルキによるものだが――皿を片手で支え、なおかつ、ヒソカお手製のクッキーが入った皿を受け取ろうとする少女に、長身の男はやれやれと七季を制した。
もっともワゴンじたいはゾルディック家のものなのだが。
場所が厨房のすぐ傍だっただけに、ぱっとヒソカがワゴンを引いて、その上に料理とクッキー、ついでに厨房で調達したらしいティーセットを並べる。
「お。紅茶まで。ありがとなー！」
てらいなく笑う表情は、彼に向けられるものの中では、極めて珍しいもの。
「どういたしまして。そうそう、キミの従者、美味しそうだったね」
昼間の戦い――ヒソカにしては、一方的な返り討ちという、結果だったのだが――を思い出して、股間を熱くしながらニンマリ笑う変態に、けれども少女の笑顔は小揺るぎもしない。
「だろー？
でもいまはダメ。先輩の『修行』でぐったりしてるから。そんなの、ヒソカも楽しくないだろ？」
きょろん、と黒瑪瑙の大きな瞳で見つめ返す、七季の物言いがナチュラル過ぎて、うっかり流しそうになるヒソカ。
「……彼がそうなる『修行』って、何だい？」
ちょっとだけフリーズしてから、彼女の発言にツッコむ奇術師コックも、やはり真言の規格外っぷりは、とっくり身に染みているのだろう。
その変態じみたヒソカの表情が、あっというまに憐憫と入り混じった。

「さあ？　私にできるのは、アーチャーをいたわることくらいだし」
ある意味、男前なくらい、さっくり「やるべきことだけ」に集中する、異邦の少女。さすが真言の「神使（しんし）」なだけあるというか。
「うん。あいかわらずキミもツワモノだよね」
「ありがとー。あ、ワゴンもな」
ひらひらと手を振って、ふたたび部屋に戻る廊下を歩く七季の華奢な背中を、切れ長の目がじっと見つめていた。
「ナナキも『使える』ようにはなったんだ……でも、いまは、彼の方が美味しそうだしねェ……」
――デザートは、あとに食べるものだよね、ウン。
しみじみ頷くヒソカの胸のうちを知るものは、幸か不幸か、いまだいないのである。

で。
そのころ、ヒソカが仲謀を片付けるはめになった現況はというと。
「か、カズキ。久しぶりに……その、作ってみた。パクノダたちに教えてもらったから、少しはマシになっていると思う……！」
ずもん。
七季が部屋に戻るルートとは、別ルートで、厨房からワゴンを押して搬送してきた、おかっぱの少女――斗貴子は、赤面しながら、その物体が乗った皿を差し出した。
「斗貴子さん……」
絶句する黒髪の少年。
かたや、外野では、鼻梁に真一文字の傷痕を残す少女の、差し出したものが、何かわからずに討議がなされている。
「ええと……あれ、ナニ？」
「小麦粉の炭化したような臭いがするから……料理というよりは、お菓子の類じゃ？」
「すみません、団長。私は、無力でした……ッ」

見つめ合う少年少女（ただし見ためのみ）をよそに、パティシエであるパクノダが、自らの無力を嘆いて、クロロへと詫びている。
「私の力では、彼女を導くには足りませんでした……」
「珍しく、ヒソカも奮闘したんですけどね」
横からフォローするのは、姿の見当たらなかったシズクだ。黒髪のメガネ少女は、パクノダと一緒になって、お菓子作りを斗貴子に指導していたのだが、惨状は防ぎきれなかったらしい。
「ヒソカの方は、いま厨房の片づけをしています」
変態は変態だが、それだけに、ヒソカの実力は認めているのが、クロロをはじめとする幻影旅団の一致した見解だ。
「……そうか」
「ちなみにアレは、クッキーらしいです」
「マジでか」
フィンクスも眉なしの強面（こわもて）顔に疑念を浮かべつつ、斗貴子の差し出している皿を凝視する。
とても食べ物には見えない。
「……ありがとう。味わって食べるよ！」
がしっと力強く、斗貴子の手ごと皿をつかんだカズキは、かけねなしの感涙を浮かべていた。
どうやら、いままで言葉を失っていたのは、感激に駆られていたからのようだ。
『勇者だ――！』
「武藤スゲェ……」
アーチャーお手製のクモワシ卵プリンを完食し、その余韻に浸りながら手を合わせていた才人が、驚愕の面持ちでカズキを見つめている。
「男だな……」
「もう一度食べたい」と、極上プリンに思いを馳せていたジョゼフも、皿とカズキを見比べて、静かにおののいている。
「いただきます！」

ぐわっ。
斗貴子の手料理に挑む少年を遠巻きに見つめながら、ゾルディック家の家長は、
「ああいうものにも耐性をつけるべきか？」
とおのが妻に相談していたという。
すかさず、
『勘弁してください』
と、甘いもの好きのミルキとキルア兄弟が、そろって土下座したのは、いうまでもない。

いっぽうそのころ。
「アーチャーも食べる？」
はい、あーん。
ぐったりとベッドに横たわる、褐色の肌の従者へ、黒髪の少女が、クッキーを差し出していたりした。
「むぐ」
つんつん、と唇に寄せられた芳ばしい菓子を、思わずアーチャーが口にしたところで。
「美味しいだろ。やっぱヒソカは器用だよなぁ」
七季の言葉に、白い髪の偉丈夫が思いっきりむせたというのは―
―蛇足である。

#178　鏡界のソルフェージュ ― おやつはいかが？ ―（後書き）

あとがき

＞斗貴子さんは？というツッコミをいただいたので、出してみました。

厨房にこもって愛凄料理を錬成中でしたよと（誤字にあらず）。

あと、出し損ねていたクモワシ卵プリン。

無事に、才人とジョゼフにも進呈できました。

#179　鏡界のソルフェージュ ― 焼き入れ ―

熱く灼ける肌を、清らかな水が冷やしていく。
むっとするような蒸気を上げて、おのが身を包み込むそれは、けれども必要な潤いを残して離れていく。
火照りは、いまだ収まらずとも。
総身に張りついていた、刺すような痛みは、もはやわずかに残るだけで、甘い痺れのように彼の感覚に噛みつくばかりだった。

「おはよう、アーチャー」
「マス、ター……？」
男の頭上から降るソプラノは、小鳥のように朝を告げた。
ちゃぷり。
身じろぎをすると上がる水音に醒めた鋭い双眸が、はっと瞬く。
視界に移り込むのは、まだ青みを帯びる黎明の光にふちどられた、白くやわらかな頬。花の色を思わせる唇と。
星を宿したかのごとく、光を孕んで瞬く夜色の瞳が、彼を見下ろして微笑んでいた。
「あ。心配しないで。ここ、私の『中』だから」
浅い泉の中で男の体を抱く少女ー ー七季は、何でもないように告げて、アーチャーの白い髪をそっと梳く。
背中を支える少女の膝上を感じながら、男はしぜんに手を伸ばしていた。

「……おはよう」
まだ照れの残る、朝の「あいさつ」が済んだところで、アーチャーは少女からの説明を聞いていた。
すなわち、「修行」から戻って以来ずっと、調子の優れなかった彼を休ませるべく、七季は従者をその身に受け入れていたという。
魂を、という意味だ。
「落ち着いたみたいだし、もう大丈夫かな」
ほわ、と目尻を下げて声を明るくする少女に、アーチャーは心配をかけたことをわびるばかりだ。
「その……すまない」
「気にしない、気にしない。これもマスターの役目ですから♪」
むしろアーチャーの寝顔が見られて役得！
と、ズレたことを上機嫌でのたまう少女は、きゅっと男の首を抱いて、「あいさつ」のキスを頬に贈ってから、
「じゃあ、『戻す』よ」
と彼の耳にささやいた。

ふ、と冷気に包まれる感覚。
あたたかな、彼女の「中」から押し出された英霊は、そこに一抹の名残惜しさを感じながらも、すぐさま現界する。
すぐ傍にある大きなベッドには、小柄な少女が黒髪をサイドにまとめて邪魔にならないように眠っており、すうすうと健やかな寝息を立てていた。
その真下――彼女に張りつく影の中にひそんでいる気配は、リドルだろう。
七季の寝姿に、乱れがないのを、胸のうちで安堵したのは、ここ

だけの話である。
――私の心が狭いのか……？
答えるもののない問いを、心中だけでひとりごちて、人外の男は「神使（しんし）」の少女が眠るベッドサイドに腰を下ろした。
冬の夜は明けたばかり。
ふだんであれば、鍛錬をしている時間だが、アーチャーはその場から動かず、眠る七季の顔をずっと眺めていた。

「てな具合に、ずっとストロベリってたんだよね」
やさぐれた口調でつらつらと語る、ルビーアイの黒猫――リドルの話を聞いていた面々の中から、にゅっと逞しい腕が伸びたかと思うと、その首ねっこをつかまえてぶら下げた。
「何故知っている!?」
詰め寄るのは、わかりにくく赤面している褐色の肌の男――いうまでもなく、当事者の一人、アーチャーである。
「いや僕もその場にいたからね？」
「ベッドでのことはともかく、『中』のことまで、どうして……っ」
「だからいたし」
ちろーんとジト目を向けるリドルは、首を締め上げられてそうな状態なのに、けろっとしている。さすが人外。
「ナナキ、僕のこともちゃんと『中』に入れてたからね？
あの子の後ろで、丸くなってたから、ナナキの膝に抱かれてる君には見えなかっただろうけど」
イチャイチャしてたし？
言外に「色ボケてんじゃねーぞ」とリドルにツッコまれた錬鉄の英霊は、いまだ離れがたいマスターから引き剥がされ、きょうもきょうとて、錬金の戦士や幻影旅団とのバトルに明け暮れるはめになる。

「さあナナキとマコトはこっちよ」
キキョウと意気投合したプレシアは、第二の娘とも思う七季が、ようやく手元に戻ってきたので、愛娘・アリシアや、真言、果ては斗貴子までも巻き込んでの、ゾル家ファッションショー――もとい、お着替え大会を繰り広げたのだった。
「も、もう無理ぽ」
「姉さま……これくらいで根を上げないで」
いつも母親の餌食になっているカルトから、しっかり逃がさないとばかりにしがみつかれた七季に、なす術はないのであった。

そのころ、ハンター協会では。
ＮＧＬ自治国を根城にした、臓器売買組織と、ＮＧＬ自治国の、実質的な崩壊を、カイトから報告されたネテロが、頭を抱えていたという。

「はい、もしも……え、ズシが！
はい、はい……それで、どこに……」
え。
そして、ゾルティック家に来るように、との連絡を受けたウィングが、情報を集めるために立ち寄っていたハンター協会本部で、固まる姿も見受けられたとか。
どっとはらい。

#１７９　鏡界のソルフェージュ－焼き入れ－（後書き）

あとがき

＞細切れっぽいですが、ウィングさんに連絡とか、そういえばカイトはどこ行ったんだ、とか、そういう部分のフォローです。

一緒にＮＧＬ自治国へ乗り込んでたカイト、お人よしなんで事後処理を押しつけられました。ハンター協会へ連絡してから、人員を派遣してもらい、自分は協会本部へ報告に。おつかれ。

タイトルの「焼き入れ」は、日本刀の製法における工程のひとつ。加熱した刀身を、一気に水槽に沈め急冷する。刀身は、水の中で反りを生じ、十分な冷却の後に引き上げられ、荒砥石で研がれる。まあ弓兵のヤキ入れに引っかけただけなんですが。

今回は、閑話ですね。

ハンター世界のネタは、あと一つか二つです。

れっつ麻婆！（ネタバレとる）

#１８０　鏡界のソルフェージュ ― 赤と青の戦慄 ―

「じゃあ、その料理がどんなのか見てみたいな」
七季が拉致された原因となったものが、アーチャー作の麻婆豆腐だと聞いたイルミの、そんなセリフが、ことの発端だった。

流星街にある、幻影旅団のホームと同じく、ゾルディック家の庭には、その知人である真言が植えた、例のトンデモ野菜の畑があったりする。
修行がてら、この野菜を収穫するのは、ミルキやイルミ、ときにはシルバやキキョウといった、ゾルディック一家の面々である。
収穫すれば、見ため以外は、ほとんどふつうの野菜と変わらない――ただの栄養価の高い、高級食材だから、ふだん調理を任されているのは、ゾルディックに雇われている料理人だ。
たまに、仕事の依頼料代わりに、クロロやシャルナークといった、幻影旅団のメンバーが、料理を作りに訪れることもある。
さておき。
きょうに限っては、ゾルディック一族の食卓に並ぶ料理を、アーチャーが作ることになったわけだ。
「うへー……ここにも、あの野菜が植わってるよ……」
呆れ半分に呟くのは、背中に竹かごをしょった黒髪の少年である。
「笑うトマト」の相手がせいぜいの才人は、今回、収穫した野菜の運搬役だ。
「あれ、まだ冬なのにイチゴがなってる」
緑の葉の下に埋もれるようにして実る、赤い粒々した表皮が特徴

的なそれを、目に留めた七季が摘み取ろうとしたとたん。
「止めるね、ナナキ」
その細い手首を、黒衣の少年――フェイタンが捕まえて引き止めた。後輩の行動を目ざとく見つけた真言も、あっというまにやってくる。
「はいナナちゃんストップ」
言いながら、くい、と栗毛の少女が親指で指す先に目をやれば。
「どうしたんですか？」
不思議そうな面持ちで、首をかしげる七季の視界には、プリン大好き、甘党の青年が、声もなく悶絶している姿が映りこんだ。
「――！」
「それイチゴトウガラシいうね。マコトが団長避けにつくた、カラシの一種よ」
イチゴを端から盗み食いするクロロへの、おしおきがてら作った作物らしい。
わざわざ、ご丁寧にも、イチゴの苗に紛れて植え込んでいるのだそうだ。
「……先輩……」
うわぁ。クロロお気の毒。
ひとりごちながら、苦笑を浮かべる七季に、ふん、と胸を張る琥珀の目の巨乳美少女。ファーつきのコートが、いっそう可愛らしさを際立たせている。
「私に黙って盗み食いだなんて、百年早い！」
「作物を囲うように植えておくと、他の作物にも虫がつきにくいね」
かいがいしく、「イチゴトウガラシ」を園芸用ハサミで摘み取りながら、フェイタンは細めた目に、喜色を浮かべる。
今回は、アーチャーと共に中華料理を作るので、楽しみなのだろう。
「真言さーん、これ何すかー？」
少し離れたところから、黒髪の少年が声を上げる。

青い髪の男と一緒になって、バチバチ発光――というより放電――している物体を眺めている才人に、てこてこ寄っていった栗毛の少女は、「ああそれ」と何でもないようにのたまった。
「それ『電気キノコ』って言うの。触っちゃダメだよ。感電するから」
ひぃ。
ずさっと後ずさる少年とジョゼフが、そろって「何でこんなものが植わってるんだ……」とこわごわ遠巻きに見つめる。
「フツー生身だと、触るのも難しいんだけどねー」
ただし、拷問に慣れているゾルディック一家は、その限りではない。
「美味しいんだよ？
いったん放電させた後でね、焼いて食べると絶品なの。発電機代わりにもなるしねー」
『マジでか』
思わず異口同音に、才人とジョゼフがツッコんでしまったのも、無理はない。
そのとき、ぼふっと音を立てて、胞子を飛ばした「電気キノコ」のそれが、ひよひよ風に乗って、ガリアの王様の青い髪にくっついてしまったことに、誰も気づかなくても。
「もしかして……ここ、『ザビー大根』とかも植わってたりします？」
おそるおそる尋ねた少年に、真言はいかにも残念そうな顔つきで首を振った。
「さすがに止められちゃってねー」
『植えようとしたんだ!?』
今度、才人とツッコミがかぶったのは、戦国ＢＡＳＡＲＡを知っているリドルだった。
どんなものか、ご存じない方は、むさっ苦しい親父顔のついた、青首大根みたいな植物を想像していただくとよろしい。

ちなみに、これを食べるとアヤしい幻覚が見えたり、洗脳されちゃったりするヤバげな植物である。味は……あえて言うまい。

さて。

途中、野菜の収穫に、うっかり宝具を使って「野菜をいためちゃダメだよ」と七季からアーチャーが注意されたり、ジョゼフがようやく、麻婆に使う「歩きナス」に追いつけるようになったりと、些細なイベントはあったが。

いつのまにやら、厨房に引っ張り込まれたジョゼフをアシスタントに、フェイタンとアーチャーとが合作した中華料理は、燦然としたきらめきを放って、ゾルディック家の食卓に並んだのである。

「……たしかに」

「舌にビリビリと……これは、電気キノコを生でいただいたときよりも、刺激的ですわね」

ううむ、と慨嘆しながら、赤いマグマのごとき外道麻婆を口に運ぶ、銀髪ダンディの手つきには、よどみがない。

ツッコミどころ満載のコメントをこぼしながらも、優雅にレンゲを操る、キキョウのしぐさも、また同じである。

あまりの辛さに、幼いキルアなどは、声にならない悲鳴を上げてギブアップ寸前だが、弟のカルトは、涙を流しながらも、完食しようと意地を張っている。

長男・イルミは、いつもの無表情だが、微妙に、その白い額に汗を浮かべていることからして、まったくの無反応、というわけではなさそうだ。

三男と同じ甘党の次男・ミルキはというと、食べるだけはかっこんで、そのあとは杏仁豆腐をドンブリレベルの量で食べている。

ゼノは完食して、デザートのゴマ団子をつついている最中。

ゾルディック家でも、だいぶ反応に差が出ていた。

「だから毒ではないというに……」
苦い声を洩らすのは、やはり作り手のアーチャーである。
もっとも、ゾルディック家の常として、他の料理には、家族おのおのの手で毒薬が投入されているのではあるが。

しかし後日。
「一晩オレの体が強制的に『絶』になるほどとは……遅効性のモノとしては、なかなかだな」
というシルバのお墨付きをもらってしまった、泰山麻婆なのであった。
余談ではあるが。
フェイタンとアーチャーによって、泰山麻婆の作り方を会得してしまったジョゼフは、のちに、その耐性とレシピを、おのが娘にも伝授することとなる。

ジョゼフは　スキル「泰山麻婆」を　げっとした　。

#１８０　鏡界のソルフェージュ－赤と青の戦慄－（後書き）

あとがき
＞地味にジョゼフがスキルアップしてます（笑）。

ゾル家にとっては、「泰山麻婆」はおやつがわりなんじゃ？と読み手さまからいただいたコメントをネタに書いてみました。
食べても倒れるほどじゃないけど、あとで地味に影響が出る効果の食べ物、という結果になりました。
だって「外道麻婆」だもの。
あと、「電気キノコ」も、読み手さまからいただいたネタです。
ありがとうございます（拝跪）。

#１８１　波の花（前書き）

まえがき
＞ちょっとネタ切れになったので唐突に番外編を突っ込んでみました。
　オリ主の世界の未来話なので、リリなの&ゼロ魔キャラは登場しません。

#１８１　波の花

それは、ある日の神門神社の日常である。

「きょうの仕事は雑魚掃除か～……めんどいな」

ぶちぶち言いながら、カレンダーを眺める栗毛の少女の後ろでは、ちょうどアーチャーが冷蔵庫の在庫を確認していたところだった。

さっきまで、新聞の折り込み広告を眺めていた彼は、これから朝の買出しに行くつもりである。

夏休みのあいだ、主の七季が泊まることも多い神門神社には、当然のごとく従者のアーチャーもついてくるわけで。

じつにナチュラルに、神門家の居間やキッチンに陣取っている弓兵だったりした。

その七季はというと、きょうは登校日の上に日直が重なっているとかで、ふだんよりも早めに幼なじみたちと登校していった。

護衛には、リドルが影にひそんでついていっているため、アーチャーは留守番である。

自分もついていこうとする、褐色の肌の従者に、黒髪の少年姿をとる使い魔は、ケケケと笑いながら「ナナキを襲うやつがいたら蜂の巣にしてやんよ」とのたまっていた。また何を見たのやら。

さておき。

――ん。

アーチャーの目は、冷蔵庫の中をざっと見て取り――鳥の手羽元があるのを発見した。大きめのパックが二つ分。おそらくこれが、きょうかあすの夕食のメインだと思われる。

「スパイスやハーブ、塩を振って焼くか……」

そこに、折よく真言からの声がかかった。

「あ、もう塩ないや。

アチャ男、帰りで良いから、お塩買うように、ナナちゃんたちに言っといて」

スパイスや調味料類のストックが入れてある戸棚を覗き込んだ、栗毛の少女は「ミカちゃんめ。買い損ねたな」と洩らしている。

「ああ。了解した」

人外、なおかつ無職のはずの男が、買い物をできるのは不思議かもしれないが、アーチャーの懐は、意外と温かい。

それというのも、本業で忙しい神門（みかど）が、目利きの確かなアーチャーに、食材の調達を頼んだりするため、食費を渡しているのが、まず一つ。

次に、帝都心霊庁の臨時職員としての報酬から、七季が使い魔たちに、きちんと彼らの分の分け前を渡しているのが、二つめ。

そして三つめが、やたらと手先の器用なアーチャーの作った、アクセサリーや、ハンドメイドのバッグなどを、七季が自分のアカウントでオークションなどに代理出品している、売り上げがあるから、というのが主な理由だった。

ともあれ、真言の伝言を引き受けた人外の男は、そのまま買出しに、スーパーマーケットへと出向いたのだった。

ついでに彼が、スーパーの棚から料理用の塩を購入したのは、いうまでもないことだろうか。

その昼過ぎ。

登校日とはいえ、夏休みの後にある文化祭と体育際の準備や何やかやで、昼間で校内にいた七季は、高校を訪れた栗毛の少女と顔を合わせることになった。

「あれ、先輩？」

どうしたんですか。

ひょこひょこと寄ってくる、黒髪の少女に、真言が「ああ」と眉

を上げる。
「仕事の打ち合わせ。きょうの現場、ここなのよ」
ひそ、と耳打ちしてくる真言の声を、くすぐったそうに聞きながら、七季はふみふみと頷く。
――珍しいなぁ。神門さんじゃなく、先輩が来るなんて。
そうは思ったが、この季節は特に、心霊関係の依頼が多くなる。おそらく、父の復帰で神主代理からは解放された青年は、今度はそういう依頼をさばくための仕事か、さもなくば、帝都心霊庁の仕事に囲まれているのだろう、と「神使」の少女はあたりをつけた。
「あ、アチャ男にも言っておいたけど、塩、買っといてね」
別れ際に告げられた言葉を受け取って、七季は「はーい」と手を振りつつ、彼女と別れたのだった。
そしてセーラー服姿の少女は、リドルを影に従え、幼なじみたちとともにスーパーへと立ち寄ったのだった。

「マスター」
そして神門神社に戻る途中――七季は、迎えに来たと思しき、アーチャーと出くわした。
きょうのような晴天に、白い髪の偉丈夫が、片手に傘を携えている姿は、少し奇妙な印象を受ける。
「あれ、アーチャー。どした？」
きょとんと黒い目を丸くする少女の頭上に、ぽんと軽い音を立てて、淡いブルーの日傘が咲く。
「日射病になるぞ」
まったく、と呟いて、そのまま七季に日傘を差しかける従者は、このごろ輪をかけて過保護になったと評判である。
悪意でないのはわかりきっているから、七季も苦笑して「ありがと」と言いつつ、日傘を受け取ろうと手を伸ばした。

「？」

けれど、褐色の手は柄から離れず、そのまま男の長身は少女へと寄り添う。

「君が差すと、周りにぶつかるだろうからな」

確かに、この顔ぶれの中では、いちばん七季の身長が低い。彼女が傘を差せば、隣を歩いていた伯言と霜夏に当たるだろう。

彼らよりも上背のある、アーチャーならば、その限りではないだろうが。

恋しい少女の隣を取られた形の霜夏が、表に出さない程度にムッとするが、もともとお人よしの彼のこと。アーチャーに他意はなく、しかも七季を思ってのこととわかっているから、しぶしぶ場所を譲って引き下がる。

「うん」

「それでは、帰ろうか。

……ああ、真言から、塩を買っておくようにと伝言があってな」

「あ、先輩から聞いたよ」

「そうか。私が出先で買っておいた」

「おお。ありがとー」

そんな風に、暑い日差しの中、和やかに下校時間が流れていったのだが。

その日の夕方。

「アチャ男ー塩どこよー？」

「だからアチャ男ではないと……」

戸棚の中をあさっていた栗毛の少女に呼びつけられ、アーチャーは嘆息しながら、キッチンのスパイスが並ぶ棚を指し示した。

「そこに置いてあるだろう」

やれやれといわんばかりの口調で、褐色の指が差したのは「クレ

●ジーソルト」。
オニオン・ガーリック・オレガノ・ペッパー・セロリなどの、ハーブがミックスされた岩塩である。
手羽元などを酒に十分ほど漬け込み、水気を切ってから、この「クレイジー●ルト」を振って、十分ほど置き。
両面グリル、もしくはオーブンで焼くと、手早くメインが作れるので、暑い日など、長いこと火の番をしたくない日には、うってつけのレシピである。
「……をい」
ハーブ入りの料理用ソルトが入ったボトルをわしづかんで、思わず硬直する、栗毛の美少女が一人。
「私の仕事を言ってみろおおおぉぉ！」
叫んだ真言に、錬鉄の英霊が襟首引っつかまれて、締め上げられる光景に、うっかり遭遇してしまった神門（みかど）神社バイトーズは、あわててご乱心なさる巫女姫を三人がかりで取り押さえたのだった。

そして夜。
びちびち動く浮遊霊をとっつかまえ、「クレ●ジーソルト」のボトルから、塩を振りかける、栗毛の巫女さんの姿が、夜の学校で見受けられた。
「ちょ、待て真言っ！　それはそんな使い方をするもんじゃ……！」
まるでサラダに塩を振りかけるような光景だといえば、わかりやすいだろうか。
「しゃーないじゃん。買ってきた塩ってのが、これなんだし」
ザコ霊なら、塩をまいて除霊できる真言のこと。
その道具として、清め用の塩を必要としていたのだが……アーチャーは、もののみごとに料理用だと勘違いしていたらしい。
赤い外套の似合う英霊は、羞恥のあまり、そのへんで落ち込んで

いらっしゃる。
　手づかみされた浮遊霊は、びちびち動きながらも、真言によって、ハーブ入りの塩を振りかけられると、そのまま大人しく浄化されて消えていく。
「うん、使えるんだから、これで良し！」
「もう……止めてあげてくださいっ」
　落ち込むアーチャーと、何だか、妙に悲しげに浄化されていく浮遊霊に、涙がちょちょ切れる霜夏少年の叫びが、ほとんど人気のない校舎に、むなしくこだましていた。
　ちなみに。
　スーパーで、ふつうの一キロ入り粗塩を買っていた七季はというと――空気を読んで、こっそり自分の買った塩を、ないないしたという。
「だって先輩、楽しそうですし」
　良いニオイですよね、美味しそうかも？
　こてりと首をかしげる少女のツワモノっぷりに、影にひそんだリドルだけが、おののいていたとか、いないとか。

　後日。
「アチャ男。塩買ってきて、塩」
「……またかね」
　先日の一件があるので、苦い顔を隠さないアーチャーは、同じミスを犯さないように、手元のチラシを真言に見せて確認した。
「この塩で良いのか？」
「ん。オッケーオッケー」
　そして、ふたたび退魔業の依頼にて。
「やー。これあると便利なんだよねー」
　ひょいひょいと真言が弄んでいるのは、アーチャーが食用にと買

いこんできたはずの、「ヒマラヤ産の岩塩」である。
ほんのり桜色というか、ピンクがかった紅塩とよばれるものの結晶は、ちょうどガムテープくらいのサイズだろうか。
栗毛の少女は、それをふいにハンドボールよろしく投げつけた。
ぼっごおおぉん！
岩塩の結晶がぶち当たった中級霊が、爆音と共に消えていく。
「……な……！？」
「ヒマラヤ産の塩は、霊力帯びてるからなー。使いやすくて」
「そういう使い方かねっ！？」
思わずツッコんだアーチャーに、居合わせた霜夏と伯言は、うんうんと頷いており、いっぽうの七季は、のほほんとしたソプラノで「霊山ですもんねぇ」と呟いていたのだった。

#１８１　波の花（後書き）

あとがき

＞「波の花」は女房言葉で「塩」の意。

塩（死を）連想させる忌み言葉のため、だそうな。

ちなみに「クレイジーソ●ト」はいちおう商品名なので伏せてみた。

破魔符よりも、岩塩の方が単価は安上がりなので、ちょくちょく使っている先輩。

友人からネタもらいました。さんくす。

作中に登場した料理は、「手羽元クレ●ジーソルト」

参考資料は「クックパッド」です。うむ便利。

#182　鏡界のソルフェージュ ―再会―

時間は少しさかのぼり。
「はい、もしも……え、ズシが！
はい、はい……それで、どこに……」
え。
弟子の居場所を教える電話を受けた、メガネ兄さんこと――ウィングが、ハンター協会本部で固まっているころ。

「先輩、せんぱい、どっちにしろ、他の子も親御さんや元いたところに戻さなきゃならないんですから、一度、ハンター協会に行かないと」
キルアの携帯電話から、ウィングに連絡を取っていた真言は、横からくいくい七季に袖を引かれ、ようやく「ん」と哀れなズシの師匠を呼びつけることを取りやめた。
「でもハンター協会まで行くの、めんどいんだけどなー」
さすがに今回は、一国を機能停止に追い込んだ自覚くらいはある真言だ。ネテロと顔を合わせれば、雨あられと文句が降ってくるのは、目に見えている。
「それでもです。この子たち、放置するわけにはいかないでしょう？」
「むー……」
真言も、拉致された子供を、親元に戻すことに異議はない。
けっきょく彼女たちは、アーチャーの料理と引き換えに、ゾルディック家の飛行船で、ハンター協会の本部まで送ってもらったので

ある。

「その結果がこれとは……」

深々とためいきをつくアーチャーの隣では、キャスケットをかぶった、腰まで届く長い髪の青年が「振り向くな。触らぬ神になんとやら、だ」と達観した面持ちで、アーモンド形の目を虚空にさまよわせている。

彼らの背後では、ハンター協会の会長・ネテロと、帝都心霊庁の切り札「柱」の巫女姫・真言の一騎打ちが、えんえんと続いている最中だ。

「なんちゅーことしてくれたんじゃあああ！」

「やっかましいわ！

こンのエロじじーっ。アンタがあんな犯罪国家ほっぽっとくから悪いんでしょーが！」

うちのナナちゃんに手を出すから悪いッ！

ずががんっ。ごごごんっ。

どがががががが。

工事現場も真っ青な轟音が響き渡る、ハンター協会が所有する修練場。いま、その耐久度が試されている。

もちろん余波が行かないように、真言が結界を張ってのことだが、その少し離れた場所では、ウィングの指導を受けている、黒髪の子供と銀髪の子供、それから砂色の髪の子供に、黒髪の少女が何やらほのぼのと会話している。

温度差がハンパない。

非常に蛇足だが、七季が不思議空間に保護していた子供たちは、無事にハンター協会に預けられ、親元など、しかるべきところに戻るのを待っている状態であることを記しておこう。

「むー……『纏』を止めるって、難しいなぁ」

困った顔でむうむう言っているのは、マチお手製のプレゼントである、青と白を基調としたチャイナワンピを着ている七季。
「いやおかしいから。てか、いまのナナキ、それ『纏』じゃなくて、『堅』になってるってウィングさん言ってたぞ。どうやったらオーラ切れずに続けられるんだよ」
信じられねー、と猫目を向けるキルアは、パーカーにジーンズと比較的ラフな格好で、こちらは『纏』から移行する『堅』の維持に必死だ。
どうやら七季は、無意識で維持しているオーラをどうにか操ろうとして、かえって変な風に集中してしまっているらしく、全身に「硬」を施すという「堅」に変化してしまったようである。
途中の過程をすっ飛ばして、いろいろおかしい。
「ナナキさん凄いっす！」
かたや、尊敬、と目で物言うごとく、ドングリまなこをきらきらかがやかせているのは、いつもの道着を身につけたズシ。
無事に師匠であるウィングと再会できたことを喜び、そのうえキルアやゴンも居合わせたことで、テンション最高潮。
真言から
「こいつも『念』に目覚めちゃったから。ちょっと教えてやって」
と、いきなりもいいところな展開にも、「ナナキさんは恩人っす！」と全力で同意してしまう始末。
「凝」を続けるズシの黒い目には、オーラが集まっているため、念能力者には、よけいに光って見えるかもしれない。
「ナナキは『絶』苦手なの？」
いっぽうゴンは半ズボン姿で、その「絶」のまっさいちゅう。しかし、なかなかオーラを絶てずに、苦戦している模様。
「ははは、そう簡単にはいきませんよ」
にこやかに笑うウィングの頬には、しかし汗が一筋浮かんでいる。
――オーラの維持じたいは綺麗なもの……というか、何故「絶」を通り越して応用技の「堅」を……念に目覚めたばかりの人間が維

持できる時間じゃありませんよ？
　そのオーラ総量こそが、空恐ろしい、とないしんひとりごちるウィングの心境に気づくものは少ない。
　いっこうに減らないオーラに、業を煮やした黒髪の少女は、いっしょに同行してきた養い子の一人――シャルナークへと声をかけた。
「そーだ、シャルー！」
「んー？」
　呼ばれたとたん、ほいほい寄っていく、金髪の童顔青年。
　幻影旅団の古株は、基本、みんな七季と真言に育てられているから、大なり小なり根っからのシスコンである。
　シャルナークも例に洩れず――というか、彼の場合は、赤子のころに捨てられて以来の育ての親なので、旅団内でも一、二を争う――シスコンなのは、言わぬが花、だったりする。
「何、ナナキ」
　ほい、と差し出された少女の手に、ぽんと反射的におのが手を乗せたシャルナークは、次に言われたセリフにエメラルドの相貌を瞬いた。
「アンテナ刺して」
「……はい？」
「だから、シャルのアンテナさして、私のオーラ、操作してみてくんないか？」
　そしたら体が覚えるかもしんないし。
　くりん、と黒瑪瑙の瞳で見上げられた金髪の青年は、ぱちぱち目をしばたいていたが――
「しょうがないなあ」
　と五秒後に答えていた。
「って刺すのかよっ！」
　すかさずツッコミを入れたのは、すっかりツッコミが板についてしまった才人である。

「おお、できた」
結果として。
シャルナークの能力「携帯する他人の運命（ブラックボイス）」を使用しての、「纏」「絶」そして一般人を装うための精孔の開け閉めを習得した七季の姿に、ウィングが凄い勢いで落ち込んだことはいうまでもない。
「い、いままで私の教えてきたことは……」
「いや、ウィングさんは悪くない。じゅうぶんわかりやすい教え方だったさ！」
ヘコむ黒髪の青年を慰めるカイト。
なにしろ、頭よりも体で覚えるジンの弟子だった彼にしてみれば、ウィングの修行はまさに「先生」としてふさわしい、懇切丁寧なもの。
この場合は、ひとえにシャルナークの「オリジナルの携帯電話で人間を操ることができる」という能力が特殊だったからこその結果といえよう。
「俺も『絶』ひとつに、ずいぶん苦労したんだがな……」
もうひとり、そのへんで七季とちびっこの修行を見物していたガリアの王様が、青い髪を心なし色褪せさせて、うなだれていたり。
いっぽうで。
「てっめ、シャル！
お前がもっと早く念能力使ってりゃ、修行も楽だったんじゃねーか！」
「うわ、フィンクス！　ちょっと止めろよ！」
幼なじみ同士のケンカが幻影旅団内で始まっていたり。
「ナナキは、あいかわらずとんでもないことを思いつくな」
シスコン団長が、自分よりもずっと小柄な黒髪の少女を、褒めるように撫で繰り回すという――どこからどう見ても、カオスな光景は、いましばらく続きそうであった。

そして。
「じゃ、ナナちゃんたち戻すね」
じーっ。
ふたたび虚空に、世界を繋ぐジッパーが開かれる。
プレシア、アリシア、リニスに、とら。
才人と、その肩に乗ったリドルに、プラタを乗せたアーチャーと、色あざやかな羽根を揺らす東風(こち)を腕に乗せた七季。
皆、こちらに来る前の正装姿である。
――あれ？
七季が首をかしげる暇(いとま)もあればこそ。
「じゃ、またあとでね」
ポイ投げされた異世界トリップ一行は、遠ざかるジッパーの向こうに。
「じゃあ私らは、ちょっとバラティエにでも行ってくるか！」
また別のジッパーが開く音を聞いたとか。
『えええええ？』

#１８２　鏡界のソルフェージュ－再会－（後書き）

あとがき

＞話の冒頭は、「＃１７９」の終わりあたりの、ウィングさんとこと同じ自軸です。

そして、ようやく次回からはゼロ魔編の再会です。

……あれ？

王様ですか。

ええ、王様は、オリ主たちと、戻る時間軸に時差ができます。

ちゃんとハルケギニアに戻しますが、しばらくジョゼフは出番がないです。

ジョゼフ不在のあいだのネタは、あえて書きませんから。

読み手さまのご指摘を受けて、「念」に関する記述を、一部修正しました。

◆オリ主世界の？登場人物ー追加ー

◆田中実（みのる）

帝都心霊庁の職員にして、真言たちの同僚。

総務課の係長補佐で、所属は通信班。

念能力者であり、けっこうな実力者のはずなのだが、肝心なときに空回りするので、後方支援に回されている若手職員。

その念能力「彼方への糸電話（貴女と…お話したい！）」は、限定的な能力ではあるものの、よく逃亡する真言や、異世界に放り込まれることの多いオリ主と連絡を取れるために、重宝されている。

ただし、そういうときは決まって職場がせっぱつまっているときなので、締め上げられることが多い。貴重な能力者なのに、ちょっと不憫なにーさんである。

自称「非モテ」。フラグ建築士の素質はあるのに、そのフラグをことごとくスルーするという、主人公レベルの鈍感スキルが災いして、「彼女いない暦＝年齢」どころか「女性に話しかけられたことがない暦」記録を更新中だった。

あまりにも女性が話しかけてくれないことに（勝手に）絶望。『全部やるから美人さんとの心温まる会話をプリイィィィヅ！！！』と、何かに願掛けをする。

その際に念能力が開眼しちゃったらしい。

また、タイミングよく、たまたまそこに先輩から放り込まれたオリ主が出くわし、心温まる交流（という名の、慰めとごくふつうの会話）を手に入れる。

以降、オリ主の結んだ縁から、あれよあれよと先輩にお持ち帰りされ、帝都心霊庁に放り込まれ、わりと美人が多い職場で、幸せそ

うにパシり……もとい、働いている。
　オリ主を「七地ちゃん」もしくは「七季ちゃん」、真言を「漣さん」と呼ぶ。

　黒髪にサングラス、グレーのスーツを着た、中肉中背の青年。身長は１７０センチ前後。

※念能力『彼方への糸電話（貴女と…お話したい！）』
：具現化系。知人の付近に、自分と通話可能な糸電話を出現させる、と単純なもの。
　話す相手との距離に比例して、消耗するオーラは増大し、本人との親密度が高ければ、オーラの消費量は減少する。
　しかし、いっぽうで、相手が取らない限りつながらない、という、かなり限定された使い道の能力。
　糸は念、コップ部分は「糸電話として使用可能な日用品に限定される」という制約があったりする、わりとエコロジーな念である。

　女性との縁のなさを嘆いたあまりに生まれた能力なので、その制約もちょっと変。
「相手が好みであればあるほど、通話時間が長くなる」。
「男にはつながらない（男の娘は除く）」。
「地雷女と認定された相手は、無条件にガラスのコップ（割れる）」。
　などなど、ツッコミどころ満載の制約がついてくる。

※読み手さんからアイデアをいただいたオリキャラです。ありがとうございました！

◆デルフリンガー（出典：ゼロの使い魔）

魔剣デルフリンガーの意識を宿したストレージデバイス。

見ためは、某カードを捕獲する魔法少女の杖そっくり。鳥みたいなヘッドに白く可愛らしい双翼がついているピンクのロッド。

使い手の体を操ったり、魔法を吸い込み、その魔力を蓄積する、デルフリンガーの機能はそのままに、ハルケギニア式、およびミッド式の、射撃魔法や防御魔法、そのた補助魔法が組み込まれた。

もちろんプレシアをはじめ、いろいろなメンツに魔改造された極悪スペックのデバイスである。

起動パスはリドルの陰謀で、レイジングハートのものを、そのまま引用。名前のみ、デルフリンガーに変更している。

「我、使命を受けし者なり。
契約のもと、その力を解き放て。
風は空に。
星は天に。
そして不屈の心は、この胸に。
この手に魔法を――デルフリンガー、セットアップ！」

#１８３　始まらない物語ー騎士ー

そうして、ハンター世界から、ふたたびハルケギニアのトリステイン魔法学院――から少し外れた場所にある「サロン」――に戻った七季たち一行は。

「じゃあ『オルタンシア』、引き続き、よろしく」

「了解」

七季が魔法で生み出した「偏在」を、ふたたびトリステイン王宮へと転送し、もぐりこませ。

「とらと東風は、留守番よろしくね」

「王族なんてものがいると、面倒でさ」

不服げな、極彩色の神鳥と、黄金の妖獣をなだめやり。

「リドルは、私の影に」

「ま、王族の並ぶ食事の席じゃね」

「プラタは一匹連れて行こう」

さすがに、王女のいる場に帯剣はまずい、とアーチャーが白銀のはぐれメタルを一匹だけ袖の中に忍ばせる。

「デルフもお留守番だねっ」

「しゃーねーやな」

そして、一見、アクセサリーにしか見えないデバイスを装着し、異世界トリップご一行は、アルヴィーズの食堂へと向かったのである。

王女を賓客とするディナーの席に並び、堅苦しい空気の中、七季たちは重たいメニューを食べた。

いつもより部屋に戻る時間が遅くなったのは、やはりアンリエッタが理由だ。

王女は、いわば学院の客人。なべて生徒は、彼女をもてなす義務がある。

賓客であるアンリエッタを放置して、さっさと自室に戻るわけにはいかない、というわけだ。

そんなわけで、食事を終えた生徒たちは、うるわしい王女を護衛する騎士たちに気を使いながらも、アンリエッタに群がりもてはやしながら、少しでも自分のことをアピールしようと頑張っていたのは、いうまでもない。

いっぽう七季たちは、おざなりに――しかし礼を失さない程度にあいさつしただけでである。

ようやく立ち去った、赤紫の髪の王女に、やれやれと嘆息して、異世界トリップご一行は、そそくさと割り当てられた部屋へ退散したのだったが。

アーチャーは、学院長室から、寮の部屋へと戻る廊下を歩いていた。

彼にしては珍しいことだが、ギルドの依頼を受けるに当たって、魔法学院の学生でも問題ないのかどうか、確かめていなかったのだ。

それを質(ただ)しに、いましがたオールド・オスマンを訪ねたところで、答えは「問題ない」とのこと。

一安心した、アーチャーは、ほとんど足音もなく歩を進める。

そして一つ角を曲がったところで、彼は妙なものに出くわした。

「あら」

ティアラを飾った赤紫の髪に、碧眼の美貌。

トリステインの王女。アンリエッタその人である。

護衛の気配がないことに眉根を寄せ、アーチャーはそこそこの距

離を取って立ち止まった。
「これは殿下」
立礼で十分だろうという判断で、褐色の肌の男は、その長身を折り曲げる。
武人然とした体つきにもかかわらず、品のある偉丈夫の物腰に、アンリエッタは碧眼を瞬いてアーチャーを注視した。
「……お尋ねしても？」
鋭い鷹の目で見返された王女は、無意識に後ずさりながらも頷く。
「どうぞ、発言を許します」
「では。何故このようなところに？
お一人のようだが、護衛の騎士の方々は如何なさったか」
「ちょっと……考えごとをしたくて……」
王族が「一人で」考えごと。
廊下で、護衛もつけず。
アーチャーは、ないしん頭痛を覚えながら、せめてもの忠告を口にした。
「ならば、そのことを承知している騎士の、頭と胴体がつながっているうちに、お戻りになると良い。王族を一人にするなど、責任問題でしょう。
殿下の言葉に従うことが忠義なのか、それに背いてまでも、殿下をお守りするのが忠義なのか、人によって判断は違うかもしれませんが」
言わなければ角が立たないだろう、皮肉を投げたのは、こういう不注意で、じっさいに首が飛ぶことを考えると、アーチャーじしん、やりきれない思いに駆られたからだ。
ワルドを除けば、少なくとも、アンリエッタの周囲を固める騎士たちは、いずれもそれなりの忠誠をもって仕えているように見えた。
――しかし、肝心の本人がこれでは……。
少なくとも、七季の方が、よっぽど「守られる側」としての自覚がある、と思いかけて、つい先日までさらわれていたのを思い出し

た。

――身びいき、か？……いや、しかし。

ふだんはおとなしく守られてくれるし、などと、すっかり従者ばかを発揮している英霊が一人。

いっぽう、仏頂面の騎士に視線を向けられたままのアンリエッタは、そこまで言われて、ようやく自分のしでかしたことに気づいたらしい。

「あ、あの……でしたら、お部屋まで送ってくださいません？」

この発言にも、ふたたび渋面を作ったアーチャーだったが、とりあえず放置しておくわけにもいかないだろう、となしん苦い気持ちで、その手を取ろうとした。

おそらく職務を奪われた形の騎士に、言いがかりをつけられそうだと見当をつけたからだ。

――こんなことばかり、わかるようになってもな。

と、やおらアーチャーは、踏み込んでくる気配に、反射的に抜刀して即応した。

ギンッ。

宝具に負けた騎士の剣が断ち折れて、ちゃりちゃりり……と廊下にひそやかな音をたてる。

アンリエッタを背に庇い、男の手に握られた双剣は、干将・莫耶。いっぽう、獲物を折られて――というか、斬られたのだが――しまったワルドは、舌打ちをしながらも、それ以上アーチャーが攻撃をしてこないと判断すると、折れた剣を携えたままで問いただした。

「こんなところで、殿下と何を？」

「彼女が一人でいらっしゃったので、早く護衛の下に戻るようにと申し上げていたところでね。

殿下、タイミング良くお迎えがいらしたようです。どうぞ」

干将・莫耶を、腰のシースにしまうと、アーチャーは慇懃な口調で、アンリエッタの背中を押した。

「あ、あの……申し訳ありま……」

「お気になさらず。その言葉は、騎士の方々へどうぞ」
失礼。
廊下を照らす魔法の明かりを弾く、精悍な相貌の男は、淡々とした低い声でアンリエッタへ告げるや、一礼すると長身にまとう赤い外套を翻して、颯爽とした足取りで立ち去った。
あとに残されたのは、剣を折られたグリフォン隊の隊長と、王族にしてはふるまいが無謀すぎる少女が一人。
「……殿下。お一人で出かけられては困ります」
「ご、ごめんなさい。ちょっと考えごとがしたくて……」
言い訳にならないセリフを吐く王女に、しかしワルドはそれ以上、何も言いはしなかった。

『殿下の言葉に従うことが忠義なのか、それに背いてまでも、殿下をお守りするのが忠義なのか――』
アンリエッタの脳裏に、夜を統べるような低音がよみがえる。
――あの方なら……どちらを取るのかしら……。
猛禽を思わせる、鋭い双眸。
美しい礼のしぐさに、逞しい体躯。
そんな男の目の光が忘れられず、いつのまにかアンリエッタは、一人になってまでやりたかった「考えごと」を放り出していたのだった。

「おかえり、アーチャー」
どした？
戻ってくるなり、珍しく正面から抱きついてきた従者を受け止めて、黒髪の少女は、けげんそうに首をかしげていたという。
「金輪際、一人で、どこかに行かないでくれ、マスター」

「はーい。もうアーチャーを置いてったりしないよ」
「だからアチャ男、ナナキ独り占め禁止！」

#１８３　始まらない物語ー騎士ー（後書き）

あとがき

＞エミヤシロウは一級フラグ建築士ですから。

てか、アンリエッタは原作でも、一人でルイズの部屋に出かけてましたよね。

あれワルドは気づいて放置してたんでしょうけど。

フツーに考えたら、騎士が王女の脱走に気づかないっておかしいような。

#184　甘露

「そいじゃ、ちょっとよろしくねー」
ぺいっ。
ジョゼフといっしょに、バラティエ前へ落っことした、クロロやシャルナークたち旅団員に、ひらひら手を振った栗毛の少女は、ふたたび別のジッパーの中へと消えていった。
「いってらー」
見送るシャルナークの、気の抜けたセリフが、この展開が珍しくも何でもないことを示していた。

ところ変わって、帝都心霊庁。
「ちゃおッス。カオスじーちゃんいるー？」
その中でも、最深部に位置する技術開発課は、通称を「ラボ」と呼ばれる、変人奇人の巣窟である、
半ばこの部屋の住人と化している、黒髪の男――ドクター高松が、ひょいと書類から顔を上げて、真言を出迎えた。
「これはこれは……『柱』の姫が、何のご用です？」
デスクから離れ、歩み寄ってくるのは、見上げるほどの長身に白衣をまとった男。
「あ、いたの高松。いや相談というか何というか……」
そういえば。
「前に、ナナちゃんの霊基ゲノム解析したのって、あんただったっけ？」
はたと思い出した巫女服の少女に、キザったらしいしぐさで黒髪

を書き上げる高松は「その通りです」と答えてから、尋ね返す。
「彼女に何か変化でも？
希少な霊基データの持ち主ですから、できるかぎり優遇しますよ。何かあったんですか？」
わくわくと切れ長の双眸をかがやかせた男は、はっきり言って、マッドサイエンティストだ。
しかし、彼が腕利きの研究者であることも事実。
「ちょいボケのカオスじーちゃんよりも、あんたの方が適任か……」
可愛い後輩を、研究材料として見ている高松にジト目を送りながらも、真言は深々とためいきをついて、話を切り出した。

「はあ……高次存在である使い魔が、ねえ」
アーチャーと七季の関係の変化、そしてアーチャーが、抱いた少女の体を危険視――というには、アレな方向なのだが――していることを、真言は手短に説明した。
「ナナちゃんを、その……腹上死、させるのは避けたいし……アチャ男に独り占めさせておくのも……アレなんだよね」
そもそもアーチャーがやり過ぎない、という保証はないわけで。
ぶっちゃけた話、真言としては、七季の「護り手」は、多いほうが良い。
それに、このままでは、リドルが収まりがつかないだろうし、幼なじみたちも黙っていないはずだ。
彼らがあきらめることは、たぶんない。
そもそも、あきらめるくらいの想いしかないのであれば、最初に真言が蹴っ飛ばしている。
何より、大事なもの同士がいがみあい、争うことは、七季がいちばん嫌がることだろう。
誰が悪い、と一概に言えないから困るのだが――たぶん、少女と

の関係を独占する形になる、アーチャーに矛先が行くことは間違いない。

真言にしてみれば、あの男がいくらボコられようとかまわないのだが、問題は、それで七季が悲しむことだ。

それに、アーチャーは幼なじみ連中や、リドルを返り討ちにするくらいの力はある。

そうなった場合、結果として、チーム「斗花（とうか）」の戦力が半減することは否めない。

真言も考えているのである。

「どうにかなんないかな？」

たいがい無茶を言っていると、真言にもわかってはいる。

だが、このまま放置して良い問題でもなかった。

「感情論は、この際おいておきましょうか。

いまのところ、七地嬢を抱いたのは、そのアーチャー氏だけなんですね？」

「う？　う、ん……そだね」

わたわたしながらも答える栗毛の少女に、高松は形の良い顎をさすって呟いた。

「サンプルが足りませんねえ……」

一人の言い分を鵜呑みにするのは、ちょっと。

そうひとりごちた男は、その腕を、自分のデスクへと伸ばした。

物理的な鍵と、呪術的な鍵でロックされた引き出しから、目当てのファイルを引っ張り出す。

「ああ、ありました。

七地嬢の保有する霊基ゲノムですが、これは太古――神代の、おそらくは神鳥の一種と共通するものです。

祖となったものの生態は、ある一定の因子を持つもののエネルギーを糧にします。

そのため、因子を持ちうるもの――現在だと、悪魔や妖怪などと共通する因子ですね――を、捕食のために誘引するフェロモンを生

成していたと考えられます。
彼女の「誘魔」と呼ばれる性質・体質は、おそらくこれが原因かと」
あくまで推測ですが。
ファイルをめくりながら、高松の口調は熱を帯び始める。
「彼らの素晴らしいところは、捕食でありながらも、獲物を殺さない点です。一定のエネルギーを吸うと、捕えた獲物をリリースし、リサイクルする。
フェロモンで誘引できるから、言ってしまえば、エサは向こうから来てくれるわけです。必ずしも、死ぬまで『食べる』必要はない。別の固体で、複数回に分けて『食事』をすれば、事足りる。
獲物の数を減らさずにおけるので、同種間での生存競争は少なく、また、その性質も穏やかな傾向にあったと推測されます」
では、何故、彼らが滅びたのか――正確には、地上から姿を消し、天上という、限られた場所でしか生息できなくなったのか。
「一言で言ってしまえば、彼らは無欲すぎたんです。
ええ、種族としての話ですがね。飢えることも、争うことも縁遠く、ただ生きるに足りるだけ。
彼らは――自分たちの形や、変化にこだわりませんでした。固有の種を保存するよりも、その血を他者と混ぜ合わせ、子孫を生き残らせることをこそ、優先した。
繁殖力が強く、生き残る可能性の高い、いくつかの種族に目をつけて、交わったのでしょう」
その中には人間もいたのだろう、と高松は笑った。
「いっぽうで彼らは貪欲とも言えます――何しろ、魔性のものは、エサとなる人間に惹かれて、寄ってきますからね。人間に混じりながら、彼らはよりいっそう狡猾に、狩場を作った、と言えないこともない」
「ええと高松、そういう、めんどーなことは良いから。
私は、ナナちゃんを……その、ふつーにエッチできるよーな感じ

にできるかどーか、って訊いてるんだけど？」
　頭痛を堪えるような苦い顔をする美少女に、高松は「つまらないですねえ」と、気を悪くした様子もなくファイルを置いた。
「まあ、あくまで仮定の話になりますが。私の予想が正しければ、可能でしょう」
「マジ！？」
「ただし、推測だけでは何とも。検証するためのサンプルが必要です」
　しれっとのたまった男に、わけがわからず、真言はきょとんと琥珀の目を瞬く。
「どゆこと？」
「具体的に言うと、七地嬢の、行為の最中のデータが欲しいと」
　高松が殴られたのは、いうまでもない。

＜データ？　あるよ＞
＜は……？＞
　世界を越えた念話で、リドルにグチっていた真言は、そんな返しを受けて、思わず思考停止した。
　何でさ。
　どっかの弓兵の、パニクったときの口調がうつっている。
＜『黎明』が、マスターの『初めて』記念だからって、ばっちり記録してる。なかなか良い性格だよね、あのデバイス＞
　ちなみにリドルは何度か見ている。
　何のためか、とは、あえて述べない。
　――ええええ。
　予想外すぎる事態に、さすがのチート巫女も頭を抱えた。
＜ナナキのためなら、コピー送るって。どーする？＞
＜……や。えーと＞

この場合、記録されちゃっている七季を気遣うべきなのか、それともスルーして口を拭うべきなのか、真言はぐるぐる思考を迷子にした。

＜送ったって＞

いまさらな話だが、真言にもデバイスがあったりする。

プレシアがノリで作ったストレージだが、栗毛の少女はそのデバイスに「ミカド」と名づけていた。本人の前では、絶対に使えないデバイスである。

データを送った、というのは、「ミカド」にということだろう。

七季と従者のデバイスにもリンク機能があるが、彼女と真言のそれにも、同じようにリンク機能がつけられている。

互いの血を触媒にしているため、「神使（しんし）」としてのパスを経由できるという、地味にトンデモ性能だったりするのだが。

＜そ、そお……ありがと……＞

よたよたと危なっかしい思念を最後に、リドルと真言の念話は途絶えた。

「手に入ったんですか……」

それはそれは。

ちょっと驚いた面持ちのマッドサイエンティストは、真言からデータの焼きつけられたＤＶＤを受け取り、くるりと回れ右しかけた少女の腕をつかまえた。

「では、ご一緒に」

「は！？」

ナニゴト？とあわてる真言を、ずるずる引っ張っていく白衣の男は、しゃあしゃあとした面持ちで、ＤＶＤ片手にうそぶく。

「私は、霊視の能力は低くてですね。

推測では、おそらく七地嬢の霊的フェロモンが、行為の相手であ

るアーチャー氏に、高い濃度で噴きつけられ、結果、かなり判断力が低下したのではないかと考えています」

ほら、彼は霊体ですから。

高次存在であるアーチャーは、霊的フェロモンの影響を、もろに受けたのだろう、と高松は高説を垂れた。

「ですので、霊視能力もハイスペックなあなたに、きっちり確かめて欲しいのですよ。

できるだけデータは詳細に検証した方が良いと思うのですが、これはプライベートな映像ですからね。ラボの連中に見せて回るわけにもいきません」

あなたは彼女に極めて近しい人間ですから。

もっともらしいセリフを並べ立て、映像資料を閲覧できる部屋へと、栗毛の少女を引きずり込む高松。

ここだけ見れば、立派な犯罪者である。

しかし、ラボの人間は、誰ひとり動かなかった。

内容が内容だけに、ツッコんでも恐いし、何より、見てしまおうものなら、今度は真言の反応が恐い。

この部署にいる人間のスルースキルも、ハイレベルである。

そして。

「え、ちょ、うわ」

「嘘ぉ……ナナちゃん、チャレンジャーすぎる……！」

「あ、あんなの……無理、無理だって！」

「……うはー……えろい、えろえろだよ……」

「あれ？……でも……たしかに、何か……？」

「もう一度見れば、わかるんじゃないですか？」

「えええ……あうぅ……」

「あ、いまの」

「もう一回、ですか」
「うう……でも、やっぱり……」

「あうー……」
ゆだった顔で出てきた栗毛の美少女とは対照的に、るんるんと擬音がつきそうな上機嫌っぷりで、高松は視聴覚ルームを出てきた。
「検証はできました。
やはり、行為中は、霊的フェロモンの濃度が高かったようですね。ならば、フェロモンを中和する薬品を作ればいいのです」
うきうき弾んだ声音で「これから忙しくなりますよ」と呟く男は、根っからの研究者だ。
「ところでフェロモンのサンプルは」
「ないから！」
ばきりと高松を殴った少女に、非はないだろう。
憤然とした足取りでラボを後にする真言は、しばらくまともに後輩の顔が見られないだろうと、まっかな顔のままで嘆息していた。

「これで、少しは進展すると良いんですがねえ」
彼女は奥手ですから。
真言の背中を見送る男の呟きは、誰に聞かれることもなく、床にこぼれて溶けていった。
神を孕む可能性を秘めた娘たち――もちろん、その筆頭は「神妻」である真言である――がいつ子供を産むのかということは、もっか帝都心霊庁の上層部における、感心ごとの一つでもある。
――どうも、「神妻」よりも「神使（しんし）」の方が早そうですけどね。
信仰の薄れた時代に、新たな世代の神を産みだす「御柱」計画。

その一端を担う高松は、まだ見ぬ種との邂逅に胸を高鳴らせるのだった。

口端を上げる男の笑みは、止まること知らない――

#１８４　甘露（後書き）

あとがき

＞セクハラ高松（言いたいことはそれだけか）。

某アーミンワールドのマッドなサイエンティストがお目見えです。

オリ主の体質にも、ちょっと理屈を添えてみました。

フェロモンもあるんですが、名器なのも本当です。

まあ、やった本人にしか、わからんよな、という。

高松は、あくまで学者なので、理屈と研究ができればそれで良い。

あと今回の勇者は、先輩と「黎明」。

インテリジェントデバイスは、初夜の間、そんなことをやっていましたよという（爆）。

タイトルの「甘露」は、「中華世界古代の伝承で、天地陰陽の気が調和すると天から降る甘い液体」。

陰陽が調和すると、ってあたりから取りました。

全体的に、えちぃネタで失礼。

後で少々付け足しました。

#１８５　始まらない物語－王道－

天空に座す国、アルビオン。
トリステイン魔法学院が、その懐に王女を迎えて静かに眠る夜―
―白の国では、とある一室において、不穏な密談があわただしく進められていた。
「何故いきなり資金が……」
「ガリアの方は」
「もはや……」
のちに「貴族派」と呼ばれる彼らは、組織「レコン・キスタ」に所属する、アルビオン貴族であり、王族を倒して国を奪うため暗躍していたものたちだ。
「ええい、これ以上の議論は不要！」
言いざま、机を叩いたのは、「レコン・キスタ」の代表、オリバー＝クロムウェル。
痩せぎすの司教は、カールした金髪に高い鷲鼻が目立つ男である。
ひごろ理知的に見える碧眼には、いつにない焦りがほの見えているが、それでも三十路過ぎの男は、盟主らしく芝居がかったしぐさで拳を突き上げた。
「既に傭兵どもは雇っているのだ。ただちに起つべし！」
始祖ブリミルのご加護は、我らにあり！
聖職者であるはずのクロムウェルは、そう声を張り上げると、「おお！」と応える貴族たちに囲まれて、優越のにじんだ笑みを浮かべていた。
その背後に、いつも控えていたはずの、美しい黒髪を持つ、秘書の姿はついぞなかった……。

一夜明けて。

トリステインでは、あいにくの雨模様となっていた。

アーチャーと才人は、いつもの鍛錬を取りやめて、厨房の水汲みを手伝うことで、筋トレに代える。

もちろんそれだけでは運動量が足りないのだが、きょうは座学に切り替えた。

場所は、「サロン」の地下にある多目的ルームだ。七季の眠る部屋の、すぐ隣である。

「えええ、マジっすか？」

顔を引きつらせる少年は、嬉しくなさそうだ。

高校生の才人のこと。

使わなければ脳は錆びつき、知識は忘却の彼方へ飛び去ってしまうのが人間というもの。

では、七季の方はというと――こちらはマルチタスクとデバイスを活用することで、授業中にも、高校の教科書内容を学習させていたりする。

過保護かつ生真面目な従者に、抜かりはない。主の方は、ちょっと涙目だったが。

いちおう時間が空けば、同じ高校生同士、才人と七季でテキストを広げ、ああだこうだと勉強し合ってもいるのだが、それだけでは足りない、というのがアーチャーの認識だった。

デバイスが使える少女はともかく、ふだん従者として立ち回っている才人には、時間が足りないのだ。

「何。うちのマスターのように、国語の教科書を丸暗記、などというムチャは言わんよ」

さらっと告げられた言葉に、才人のあごがパカーンと落ちる。

――え。ナニソレ。

目を点にしている少年へ、アーチャーは広い肩をすくめて、手近

なイスに腰かけた。
「古文と漢文は、教科書の原文を、ほぼ丸暗記しているらしい。有名どころは、たいてい日本語訳の載った本が出回っているから、それを読めば内容が把握できるし、文意がわかれば、そこから理解が可能だとか。
……理屈としては、正しいがね」
ようするに、読書の好きな七季は、教科書に載っている文章の本を見つけてきて、そのまま一冊まるごと読んでしまうのだ。
「項羽と劉邦」とか「源氏物語」とか。
話の流れを読み込むことで理解する。
それを「面倒だから」でやってしまうと聞いて、才人は机に突っ伏した。
「フツーに勉強します……」
「現代文は、さすがに読解が中心だから、暗記はしないらしいがね。ノリで理解できると言っていた」
そっちの方が難しいだろう、たぶん。
「ノリって……」
「彼女に言わせれば、問題文の――問い、の方を読み解くコツがあると言っていたな。それも慣れの問題なんだそうだ」
問題文の、くせ、とでも言おうか。
ただし、それを読み解くには、やっぱり「慣れ」――問題を解く回数をこなす必要があるわけで。
「学問に王道なし、ということさ」
けっきょくはな。
片眉を上げた偉丈夫は、トントンとテキストを叩く長い指で、才人を急かす。
ぐんにょりうなだれていた黒髪の少年は、国語の問題集と向き合ったのだった。

――ウェールズさま……。

目覚めたアンリエッタは、雨に煙る窓辺に座り、ぼんやりと物思いに耽っていた。

この雨の向こう、はるか天空に浮かぶ国、アルビオンの世継ぎである美青年――ウェールズ＝テューダーこそが、彼女の想い人であった。

しかし、小国であるトリステインを守るための国策として、彼女は新興国であるゲルマニアの皇帝と婚姻することが決まっている。

それに関して、都合の悪い事実――アンリエッタが、ウェールズ皇太子に送ったラブレター――を、どうにかしなければならない、とアンリエッタは思い悩んでいたのだ。

王女にしては夢見がちな彼女は、「お友達」であるルイズに相談に乗ってもらい、あわよくば――と考えていたことは、否めない。

お節介で無鉄砲な少女であれば、使い魔を召喚できたと自信をつけたいま、ちょっと無謀なことにも手を出すのではないかと。

アンリエッタとて、「外」のことをあまり知らないが、ヴァリエール公爵が溺愛するルイズは、彼女に輪をかけて世間知らずの観がある。

気性は激しいが、いっぽうで感情的な少女をそそのかすのは、決して難しいことではない。

上手くいく可能性は、決して低くないと、アンリエッタは見当をつけていたのだが。

――ままならないものね……。

まさか、目当てのルイズが、学院にいないとは、思ってもいなかったのだ。

王族との交流は、貴族にとってはステータス。

にもかかわらず、その機会を逃すタイミングで、ヴァリエール家が娘を実家に呼び戻すなどと。

――せっかく、ルイズと関わりのある騎士を連れて来たのに……。

グリフォン隊の隊長・ワルド。
じつのところ、ルイズと一緒にアルビオンに送り出すつもりで、グリフォン隊の彼を選んだのだ。グリフォンなら、空を飛べるし、移動も早い。
万が一、何かあったとしても――「子爵」の彼なら、それほど問題にならないだろう。
切り捨てても、という意味で。
――それに。
もしも、ルイズの方に「何か」あったとして――ワルドを慕うルイズが、勝手についていった、と言い抜けることもできる、とアンリエッタは考えていた。
口約束だけの婚約者だとしても、貴族というものは、噂に聡いものだし、何よりワルドじしんが、ルイズとの婚約を冗談に紛れさせて吹聴していることを、アンリエッタも知っていた。
若くしてグリフォン隊の隊長に上り詰めた彼を、見込んでいるからこそ、ヴァリエール公爵も、それを黙認していたフシがある。
ヴァリエール家の婿となるには、身分が低いけれども、そのぶん逆らいにくく、加えてスクウェアという実力者だ。
魔法が失敗ばかりのルイズでも、スクウェアの血筋を入れれば、跡継ぎは――と考えるのが、むしろ自然なことだろう。
いざとなれば、アンリエッタは「ワルド子爵に密命を与えた」と言えば済む。
これならば、多少アンリエッタやワルドに責任はあるとしても、「ワルドについていった」ルイズの自己責任だ。
そこまで考えて、すべては無駄に終わったことに、アンリエッタは、あらためて嘆息した。
雨を弾いて不思議な絵画のように見える窓が、王女の吐息でぼうっと煙る。
そこに映りこむのは、赤紫の髪に、白い面（おもて）と碧眼の少女。
――王女と言っても……しょせん無力な小鳥に過ぎませんのね、

わたくし……。

それを透かして見える灰色の空に、ふとアンリエッタは、赤い外套の騎士を思い出した。

昨夜、つかのま言葉を交わしてすれ違った、長身の偉丈夫。

ワルドの剣すらも斬って捨てた強さ。

精悍な横顔と、鋼のような背中に庇われたときの、言い知れない歓喜に、いまさらながら、アンリエッタは胸を高鳴らせた。

――いけませんわ。私にはウェールズさまという方が……。

妄想の中に沈む碧眼の美少女は、くねくねと細い肢体をくねらせる。

まだ起き抜けで、誰も見るもののいないのが、幸いといえば、幸いか。

ぞくっ。

ふいに襲った寒気に、アーチャーは一瞬、息を呑んで緊張を走らせた。

すぐさま隣の部屋に注意をやり、おのがラインの先をたどってマスターの存在を確かめる。

たどるさきに感じた、やわらかく温かな気配に、ほっと頬を緩めた男へ、考えるために問題文から顔を上げていた才人が、けげんな表情で首をかしげていた。

#185　始まらない物語ー王道ー（後書き）

あとがき

＞うっかり手が滑って、腹黒アンリエッタ。

ジョゼフ不在で、シェフィ姉さんが捜索に突っ走り。

その余波で資金難に陥ったレコン・キスタの反乱が、原作よりも大幅に遅れました。

よって、アンリエッタがルイズを送り込むのは、ちょっとした他国への旅行レベルという想定。

そしたら予想外に、アンリエッタがマトモに見えた件（あくまで原作と比べての話）。

ついでに腹黒かった。でも頭を使うのは、あくまで利己的な事情に限るので、やっぱり残念な王族です。

政治的な考え、というよりは保身のための言い逃れ的な思考。

「項羽と劉邦」が参考文献になるのは、「鴻門の会」。

話が面白いので、おすすめです。

あれって中学の教科書だったっけ？

#186　始まらない物語ー老兵ー

春雨のそぼ降る中を。
ごとり、ごとりと馬車が進む。
褪せた幌と、泥に足を取られて、重たげな足取りの馬を供に。
二つのわだちを残して。
かつての兵士は、去ろうとしていた。

糸のようにささやかな雨は、陽射しを思わせる黄金の大妖にも、あまさず降りかかっては、散らされる。
自由に空を翔ける妖獣にとって、雨はそれほどうっとうしいものではない。
人間と関わることの多くなった彼は、風呂でよく浴びるシャワーとは違った、ひんやりとした温度の雨粒さえも、子供のごとく楽しんで浴びていた。
いまだ、とらがつきあう人間たちは、ほとんどが眠っている時間である。
妖怪に眠りはいらず、だから何か暇つぶしはないものかと――七季たちの眠る、小屋の周囲を飛び回っていた、とらは、ふと目に留まったものへと、興味を引かれて寄っていった。
「うわ！」
いきなり暴れだした馬に、驚いて、どうにかこうにか手綱を操るのは、頭髪の薄い人間の男――トリステイン魔法学院の、教師・コルベールだ。
否、教師だった、と述べた方が良いかもしれない。

きょう彼は、その職を辞して、学院から去るのだから。

とらに驚いた馬が怯えたのは当然、コルベールも、間近に迫った妖獣の、ズラリと並んだ牙に、すかさず杖を取り出そうとしたのは、半ば反射的なものだ。押し隠していた戦士の性(さが)だろう。

「何でえ。『贄(にえ)の娘』の『きょーし』ってやつかよ」

何でこんな時間に出かけてんだ？

しかしコルベールは、黒いくまどりも凶悪な妖獣の口から、思いがけず突きつけられた言葉に、その異形が、七季たち「留学生」の使い魔であると気づいたらしい。

みがまえつつも、雨よけの外套の下から、寂しげな視線を向ける。

「はは……君か。ちょっと離れてもらえるかね、馬が落ち着かなくてね」

別に、とらに譲歩してやる義理はなかったが、人気のない時間に、男が荷物を積んで出かける理由には興味があった。

ふわり、と御者台から、少しはなれたところに、獅子のように長い鬣を雨に濡らす、黄金(きん)の獣が滞空している。

「ありがとう……どうどう、どう。

引越しだよ。私はもう、この学院の教師ではないのでね。なるべく目立たないように、すみやかに、去らなくてはならないから」

そういう意味では、きょうの雨はありがたい、とコルベールは呟いた。

肩を落とす男は、どこか遠くを見ている。

「あんな事件があったあとだ。遅すぎたくらいだよ。いままでいたのは、引継ぎや、引越し先の問題でね……」

メンヌヴィル襲撃事件は、思いのほか、トリステイン魔法学院に傷跡を残していた。

恐るべき火魔法使い・メンヌヴィルを呼び寄せる原因となったコルベールを、使用人たちは、あからさまに遠巻きにしたし、生徒たちは授業を避けた。

学院長であるオールド・オスマンは、せめてもと彼を気遣って、

退職金に色をつけてくれたが。
メンヌヴィル――あらため、フラムと顔を合わせないで済むように、彼が立ち番でないときを、出立の日に選んだのも、学院長である。
その学院長とも、事務的なことしか、ほとんど話さなかった。
コルベールは、久しぶりに口をきくことができた相手に――たとえ人外であろうとも――話さずにはいられなかったのだ。
「忘れたつもりはなかったが……私は、どこかで忘れたがっていたのかもしれん」
ふと男の手が、力なく垂れた。
さっきまで、馬をなだめるために手綱を激しく引っ張っていたせいで、ずれた指輪が、人知れず落ちたことに――誰も気づかない。
ふーん、と、とらは気のない相槌を打った。

「で、燃やさねえのかよ?」
春雨に煙る馬車の影を、木陰から見送る男へ、とらの声が低く響いた。
「へっ」
返す男――フラムのバリトンには、もはや熱が失せている。
「俺の炎も……こんな天気じゃあ、湿気(しけ)っちまわぁ」
煙のごとく白い髪の男は、雨の中に消えていく影を、ただ見送っていた。
やはり黄金(きん)の妖獣は「ふーん」と気のない相槌を打つだけで。

燃え盛る炎に似た、真紅のルビー。
その石がついた指輪が、ぬかるみに沈んでいくことを知るものは

——ただ降りしきる、春の雨のみ。

#186　始まらない物語－老兵－（後書き）

あとがき

＞短いですが、タイトル的にはキリが良いので、ここでカット。

コルベール氏、ここで退場。地味ですまんです。

原作の六巻を確認したら、コルベールは指輪を自分ではめていたようなので。

悩んだのですが、他者の手に渡るには……と考えて、こういう風にしてみました。

ええ、指輪は「炎のルビー」です。

タイトルの「老兵」はマッカーサーの言葉「老兵は　死なず、ただ消え去るのみ」から取りました。

コルベールは、老兵というほど老けてはいないはずですが、イメージ的に。

#187　始まらない物語ー灰かぶりの幸せー

「おはよー」
「おお……脳が爆発ッ」
ハンドメイドなセカンドハウスの中、朝っぱらから頭を抱えている黒髪の少年に出くわし、けげんそうに首をかしげるトリップ娘が、ここに一人。
「どしたん？」
「朝からアーチャーさんと国語のお勉強だよっ」
「……おお。それはお疲れ」
ちょっと引きぎみなしぐさの七季は、リニスと似たチュニックに、いつもの黒い羽織りを模した、バリアジャケットといういでたちだ。
「七季ちゃんにとっての数学みたいなもんだよ」
「悪かった、それはイッちゃうな」
なーむー。
白い手を合わせる七季に、「こら」と褐色のこぶしがコン、と降ってくる。
「人聞きの悪い。
ところでマスター。せっかく着替えてきたところなんだが、今朝は王女が朝食の席に並ぶだろうから、礼服を着た方が無難だぞ」
学院の制服を着る気はないのだろう？
「うぇ」
ついでのようにアーチャーから尋ねられて、ポニーテールの少女はげんなりとうめく。
トリステイン魔法学院の制服――女子のそれは、白いシャツに黒いスカートが基本なのだが、その丈が、やたら短い。
いったい、着る少女たちのセンスによるものなのか、それとも学

院長の趣味によるものなのか、判然としないが。
そして、自分の足の太さを気にしている七季は、ふだん母校の制服以外でスカートをはくことがないのだ。当然、この学院の制服を着たいわけがない。
――動きにくいのはヤなんだけどなー……いざというとき対処しづらいから。
あどけない面輪に、それはそれは面倒そうな色を乗せる少女は、アーチャーのセリフを受け取ると、すぐさま天秤にかけた。
着飾る、という行為が、とことん苦手な少女が、どうするか。
むーっと桜色の唇を尖らせる表情は、拗ねた子供のよう。そのあどけなさは、以前と変わらず、アーチャーはつい笑みを誘われがちだ。
――まったく、世話の焼ける。
ないしん呟きながらも、そんなところが可愛いと思ってしまうのだから、手に負えない。
「何着れば良いんだ……面倒だなぁ」
へにょんと眉尻を下げてうなだれる、七季の首筋を見下ろしながら、人外の従者はぽんぽんと、まっくろな彼女の頭をかまう。
「なら、任せてもらおう。朝からプレシアたちの着せ替え人形にはなりたくないだろう？」
「うぐ。……お願いしまーす」
よみがえる、ファッションショーＩＮゾルディックの悪夢。
黒髪の少女は、しおしおとした態度で、アーチャーの手のひらに背中を促され、自室へと回れ右した。
「あ、アーチャーさん。俺たちはどうすれば？」
いちおう七季たちの「従者」として、共に食堂を利用している才人が、あわてて男にアドバイスを求める。
「ふむ。演劇をやったときの、衣装があっただろう。あれを着たまえ。礼服として通じるはずだ」
詰襟の、軍服じみた漆黒の衣装は「夜の精霊の女王」の臣下役を

演じたときのもの。
なるほど、あれなら仕立ても良いし、通用するだろう。
「らじゃっす！」
才人はチャッと敬礼するや、衣裳部屋として使われている一室へ駆けていった。

朝食は、昨夜と同じように、問題なく進む。
最前列で食事を取るアンリエッタが、ちらちらと白い髪の騎士へ視線を飛ばしていたが、当のアーチャーは、そ知らぬ顔で、隣に座る少女の世話を焼いていた。
「こんな服、いつ買ったっけ……？」
疑問顔の七季は、従者のセレクトで着込んだ服を、しげしげと見下ろしては、けげんそうに黒い目を瞬いている。
首から胸元は白で、その先は灰色という、いささか変わったデザインのブラウスに、熾火のような紅さを湛える、柘榴色（ガーネット）のチョーカーが良く映えている。
派手ではないし、すっきりと品のいいデザインなので、七季も気に入ったが、アーチャーにそれを取り出して見せられるまでは、そんなブラウスの存在など知らなかったのだが。
「あら。それならアーチャーが縫っていたものじゃないかしら」
さらっと何でもないような口調で、答えを投げたのは、紅茶を飲んでいたダークヘアの美女。
ごっふ。
淡いラベンダー色のスーツを着こなしたプレシアのセリフに、才人と七季が仲良くむせる。
「けほけほっ……ど、どんだけ器用なんだ、アーチャー……」
七季はバストのあたりが規格外なので、既製品だとサイズの大きいものを選ぶのが通例になっている。そうでないと、胸が服に収ま

らないのだ。
それが、あつらえたようにピッタリなのだから、二人が驚くのも無理はない。
いっぽう黒衣の少年は、周囲の誰もが思ったことをツッコんでいた。
「てか、それは七季ちゃんのサイズを把握してないと無理な気が」
勇者だ！
会話の聞こえる距離にいた、生徒たち――とりわけ、ギーシュをはじめとした男子生徒が、そろってサムズアップで才人の行動を讃えている。
「何か不備でもあるかね？」
ほら。
平然とした顔で、切り返す男の顔は鉄面皮。鋭い鷹の目だけが、けげんそうな色を浮かべている。
「……いや、着心地良いけどな？」
ありがと。
いっぽう、何も言わずとも手渡されたパンの取り皿を、半ば反射的に、アーチャーから受け取る七季。
食べたかったものが盛り付けられた皿に、まっくろポニーテールの少女は「あれ何でわかったんだろ」と、ないしん首をかしげながら、そのまま流されて、はむりとパンにかじりついた。
「それは何よりだ」
ちょっと誇らしげに目を細める男の、精悍な横顔は、どこまでも男前だったが――ときどき素で天然ボケをかます、この異邦の主従に、周囲の人間は、どこからツッコんでいいやら、言葉を捜しあぐねる始末。
「アーチャー、前にママのセーターも編んでくれたよねえ？」
「そうですねえ」
かたや、アリシアとリニスの会話が、ほのぼのとした声音で紡がれる。

慣れって恐いものである。
そんな光景が繰り広げられている、アルヴィーズの食堂の隅。
赤毛の少女が、ひとり寂しげな面持ちで、座るもののいない隣席を見つめていたことに、気づくものはいなかった。

そのころ。
遠く、ゲルマニアの空の下では。
「母様……」
静かに眠る母の面輪を見下ろしながら、青い髪の少女が一人、木造の一軒家の中で安堵の息をついていた。
トリステイン魔法学院にいたころと違い、メガネを外した少女の顔は、眠る女性と似通った面影がある。
ジョゼフの側近であるシェフィールドや、その部下による追っ手は、不思議となく、それを好機とばかりに、力の限り、急いで逃げてきた少女は、疲れきっていた。
この家を借りるのも、日用品を一から買い揃えるのも、ほとんどすべて自分でやったのだ。
彼女を支援してきた貴族の手助けなしに。
それが、どれほど面倒で大変なことか、ようやく「タバサ」と名乗ってきた少女は思い知った。
違う国で、誰の庇護もないということが、どんなことなのか。
国境を越えることが、どんな意味を持つのか。
――でも、気は楽になった。
もはや彼女にしがらみはない。
ただ母親のために。大事な存在と生きるために、行動すればいい。
首輪がついていないということは、少女の精神を少なからず、緊張から解放していた。
高価なインテリアで整えられた部屋も、かしずく使用人もいない

家だけれど――

「お姉さま！　いま戻ったのね！」

ばんっ。

森で狩りをしてきたシルフィードが、ドアを勢い良く開けて入ってくる。

ごんっ。

大きな杖で額を叩かれた青い髪の美女――人化した使い魔だ――が、主たる少女に涙目で文句を言った。

「痛いのね！　せっかく獲物を持って帰ったのに、酷いのね！」

「母様が起きる……静かに」

きゃんきゃん噛みついていたシルフィードは、そう睨まれると、ぱっと自分の口を両手で塞いだ。

ぼとぼとっ。

その拍子に、ぶら下げていた、きょうの戦果が床に落ちる。

数羽のウサギと、山鳥だ。

――そう。大事なものは、ここにある。

母と使い魔。

いつか、炎の色が良く似合う、あの恋多き親友にも、手紙を届けよう。

「雪風」の二つ名を持つ少女は、その青い目を細めて、ほんの少し笑みを浮かべた。

失ったものは大きく、これからの苦労もわかりきっている。

それでも少女は、「落ちぶれた」としかいえない境遇に、ほのかな希望と幸せを抱き始めていた。

――とりあえず、フェイスチェンジの魔法具を買おう。

珍しい、まっくろな髪が特徴的だった留学生の言葉を思い出し、青い髪の少女は、まず手持ちの財産を確認することに決めたのだった。

#187　始まらない物語ー灰かぶりの幸せー（後書き）

あとがき

＞母親と共に行方をくらませた、タバサのその後です。

　タイトルは、境遇が一変した童話のヒロインから。

ところで、タバサに新しい名前をつけようかと思うんですが、ご意見があれば、お寄せください。

タバサのままの方がわかりやすいでしょうか？

#１８８　始まらない物語ー意地悪なお嬢様ー

進軍する。
進軍する。
隊伍を組み、馬蹄を刻み、わだちを残して、船が浮かぶ。
軍は進む。
兵士は歩む。
馬影は揺れる。
車輪は回る。
船首は上がる。
春光の中、鋼（はがね）をかがやかせ。
レコンキスタの旗の下、戦いの狼煙は、アルビオンの空に上がったのである。

そのころ、トリステインの都市――ラ・ロシェールの宿屋にて、一人の美女が、ぐったりとベッドに突っ伏していた。
ハルケギニアでも珍しい、長い黒髪に、生唾を飲みたくなるような、成熟した豊満な肢体。
しかし、彼女が身にまとうものは、ぴったりと上半身に張りつく薄い衣装――のみならず、じっとりと重苦しく熱っぽい、悲嘆の一色だ。
「ジョゼフさま……ジョゼフさま……」
あらゆる魔道具（マジック・アイテム）を操るという、虚無の使い魔「神の頭脳・ミョズニトニルン」。
その力を駆使して、シェフィールドは、消えた主をハルケギニア

じゅう探し回ったといっても、過言ではない。
彼女はいま、溜まりに溜まった疲労に限界を迎え、深い眠りの中に沈んでいた。
それでも主の名前を呼ぶのは、夢でも見ているのだろうか。
その白い手に握られるものは、しかし求める人のぬくもりではなく、シーツの薄い感触だけ。
宿の一室にこぼれる彼女の嘆きは、いまだ男に届くことはない――。

幾度となく、アーチャーへ目配せを送り、自分へ近づくようにと意図を込めるアンリエッタのふるまいを、いっそすがすがしいほどに、黒衣をまとう偉丈夫はスルーした。
いつもの赤い外套ではないところが、彼らをよく知るものにとっては珍しさを感じさせたが、それをはるかに上回る違和感を抱かせたのが、王女のふるまいだった。
はたから見れば、アンリエッタがアーチャーへ秋波を送っているようにしか見えない。
さすがに七季も「何なんだアレ」と思いながら、こっそり念話で従者へと話しかける。
＜あの王女様と何かあった？＞
＜きのう一人でいるところに出くわしてな。そういうことは慎んだ方が良いとアドバイスしただけだが＞
ふうん、と頷く七季は、それで納得して、追及することもない。
が、これも他のものから見ると、黒髪の少女が、まなざしでアーチャーに問いかけ、見上げられた男が、同じように視線だけで会話した、という「夫婦かお前らは！」とツッコミのひとつも入れたくなるような光景に映るわけで。
男子生徒のうち、マリコルヌあたりなどは「このイチャラブ主従

が！」と血の涙を流していたり、いなかったり。
業を煮やしたアンリエッタが、とうとう席を立ってアーチャーへ話しかけようとしたところで。
「ごきげんよう、アンリエッタ姫殿下」
そこへ金髪ツインテールの少女が立ちふさがった。
気性の激しさがツリ目に表れているが、整った顔立ちのスレンダーな少女である。
彼女こそは、クルデンホルフ大公国の姫殿下――ベアトリス＝イヴォンヌ＝フォン＝クルデンホルフ。
トリステインの貴族たちに金を貸しているために、国内にかなりの影響力を持つ、クルデンホルフ家の娘であった。
立場上、トリステイン王家とマザリーニ、ヴァリエール公爵家のみは頭が上がらない――とされているが、その影響力は決して無視できるものではない。
「まあ。あなたは……クルデンホルフの」
アンリエッタの前で、金髪碧眼の少女は、スカートをつまんで一礼する。
「ベアトリスですわ。朝のご挨拶が遅くなってしまって。父からも、殿下にはよろしく伝えるように申し付かっております の。きのうは殿下もお忙しくて……なかなかお話ができなかったものですから」
ベアトリスは、エメラルドの目を、そっと背後のアーチャーたちに流して、目配せを送った。
アンリエッタには気づかれないように、すぐさま視線を戻し、よそいきの笑顔で話を続ける。
「殿下へお贈りしたいものがあるのですわ。この後のご予定は、どうなっていらっしゃるのでしょう？」
「ええと……」
戸惑うアンリエッタに、横からワルドがさりげない口調でフォローを入れた。

「授業を一コマ見学したあとに、こちらを出立する予定です」
「まあ！
それでは急がなくてはなりませんわね。もっとゆっくりされて欲しいところですけれど……殿下のお時間は、貴重なもの。わがままを言っても困らせてしまうばかりですわね」
ぱちん、と手を打ち合わせたベアトリスは、「こちらからお部屋にうかがってもよろしいかしら？」と赤紫の髪の少女へ問いかける。
そうこうしているあいだに、七季やアーチャーたち、留学生一行は、静かに食堂を後にした。
王女が席を立ったということは、それが食事終了の合図だ。
夕食ならいざ知らず、これから生徒たちには授業が待っている。
アンリエッタとベアトリスは、その立場上、「お話」するとなれば、ふつうは周りの貴族が気を使って、自主的に退場するのも当然といえる。
かくして、金髪少女のもくろみ通り、アンリエッタはアーチャーに話しかける機会を逃したのであった。

「褒めてくださいまし、お姉さま！」
朝食後、七季たちの部屋に押しかけてきたのは、アンリエッタの足止めをしていた少女、ベアトリスだった。
癇の強そうなエメラルドの目を、きらきらさせて懐いてくる少女に、七季も苦笑ぎみながら、その頭を撫でる。
「ありがとう。助かったよ」
メンヌヴィル襲撃事件以来、この金髪ツインテールの高飛車なお嬢様は、いわば命の恩人である――と認識している――七季とアーチャーの、熱烈な支持者となっていた。
「お礼には及びませんわ。サー・アーチャーは、とても優れた騎士ですもの。きっと王女は、お姉さまの傍から引き抜こうとしたに違

いありません！」
　立場上、アンリエッタに敬意を払っているからといって、それが本人に対するものとは限らない。
　ベアトリスは、父親に頭を下げさせるトリステイン王族が好きではなかったし――いまだにクルデンホルフ大公国を、属国として見ている観のある、アンリエッタが気に食わなかった。
　ぐぐっと握りこぶしを作って主張する少女をなだめるように、七季は、二度、三度とベアトリスの頭を撫でて、「まあ厄介ごとの気配はしたなぁ」と、のんびりしたソプラノを紡ぐ。
「私もアーチャーをどっかにやる気はないけどね。気を使ってくれてありがとな」
　見た目は猫系なのに、どう見ても飼い主にかまってもらいたがりの子犬みたいに、期待に満ちた目を向けてくる少女へ、七季はふっと「しょうがないなぁ」というように目元を緩ませた。
「ほら。ビビも授業あるだろ。遅刻するよ？」
　とたん。
　愛称で呼ばれたベアトリスは、ぱあっと顔をかがやかせたかと思うと、頬を染めて「はいっ」と元気な返事をした。
　戸口でアーチャーの見送りを受けた下級生は、別れ際、ぽん、と七季の従者に頭を撫でられたのを皮切りに、かろやかな足取りで自分の部屋へと戻っていった。
　ぱたん。
「……やれやれ。我がマスターは、何人『妹』を作れば気が済むのやら」
「てかアレ半分はアーチャーへの好意だぞ。
　何でも、『セットでいて欲しい』んだと。私とアーチャーには」
　何となく、言いたいことはわからないでもないんだけどな。
　これからの授業は、礼服でなくてかまわないだろうと、黒衣から、いつものいでたちに着替えるアーチャーに、黒髪の少女は、笑みを含んだ声で補足する。

「それはまあ……これからも、そのつもりだが」
何故、関係のない彼女たちまでが、それを望むのかね？
しんそこ不思議そうな男の、褐色の相貌を、するりと七季の影から這い出してきた黒猫――リドルが見上げながら、半眼でツッコんだ。
「それがファン心理ってものだよ」
「ファン？」
やっぱりわけがわからない、という面持ちの英霊に、
「赤薔薇様とか白薔薇様とか」
と例を挙げるリドルへ
「何故マリみて」
と今度は才人がツッコミを入れることしばし。
「ああ」
そういうノリか。
「いや良いけど。アーチャーわかったんだ！？」
「リドルと真言が話しているのを聞いたことがある」
納得の声を上げる従者の、思いがけない反応に、珍しくびっくりする七季なのだった。

#１８８　始まらない物語ー意地悪なお嬢様ー（後書き）

あとがき

＞ベアトリスの愛称って「ビビ」なんですよね。

こんなところで出してみる。

＊アルビオンにてレコンキスタが蜂起。

＊失意のシェフィ姉さん爆睡。

＊知らぬが仏のアンリエッタ、アーチャーにコナかけ失敗。

の三本立てでした。

短いわりにえらい時間がかかりました。

タイトルの「意地悪なお嬢様」はベアトリスのイメージから。

今回はテファではなく、アンリエッタに対しての「意地悪」。

ああいうタイプは、いったん懐くとデレっぱなしだと思うんだ。

タバサの新しい名前、ご意見ありがとうございます（・∀・）ノシ

魅力的な名前が多いので、じっくり考えて参考にさせてもらいまする。

#１８９　始まらない物語ー苦労性の魔法使いー

「お姉ちゃんは私のだもんーっ！」
「うぉわっ！」
ベアトリスが立ち去った後に、いきなりアリシアがそう叫んで七季に抱きつく光景を、当人以外は、やたらめったら微笑ましい面持ちで眺めていたという。
「あらあら」
「仲良きことは、美しき哉（かな）」
「本当にうちの娘たちは可愛いわv」
「ご褒美ですハアハア」
「才人、うしろうしろ」
＜あーちゃー　こわいかお＞
「良いか、エイプリル、メイ。こういうときに発揮するのが、スルースキルというものだ」
「見ざる、聞かざる、言わざる、というやつですね、わかります。僕ウサギですけど」
＜勉強になりますっ＞
リニス、アーチャー、プレシア。それから才人にツッコミを入れた黒猫リドルで、さらに念話で主にツッコミを入れた、プラタ（分体）。
その後に色あざやかな羽根を片方広げる東風（こち）、まっしろな長い耳をぴこぴこ動かすエイプリル、イタチっぽい細長い肢体ごと、こっくり頷くメイ、と使い魔たちの処世術会話が続いたり、続かなかったり。
エセ姉妹の仲睦まじさに、思いがけず萌えてしまった男子高校生の末路や、いかに。

「ソロモンよ、私は帰ってきた！」
まあ例のごとく、才人は無事に復活したわけだが。
「うんそろそろ自重しようか。授業だからな」
すぱーんと背後から少年の後頭部にツッコミを入れるのは、同じ黒髪に黒い瞳の少女、七季である。
きょうの一時間目、土の魔法の授業は、天気が雨だというのに、野外で行われるということで、七季は、黒いパンツ、白とグレーのブラウスの上に、デザイン違いの黒いバリアジャケットを羽織ったいでたちだ。
「一度は言ってみたいセリフだけどねー」
そう軽口を叩くのは、少女の肩に陣取るリドルである。
黒猫の姿をとっているので、地面を歩くと、どうしても濡れてしまうからだ。猫にバリアジャケットも、どうかと思うだろうし。
「えへへー。おそろいだねっ」
さっきと打って変わってご機嫌な金髪ツインテール幼女は、アーチャーの外套に似せた、赤いバリアジャケットを羽織っている。
これが、七季のまとうものと色違いなので「お姉ちゃんといっしょ！」と、にこにこ顔なわけだ。
「そうね。みんな一緒。良かったわね、アリシア」
はしゃいじゃって。可愛い。
いっぽう、うっとりした表情で、ママさん魔導師も色違いの――こちらはラベンダーカラーである――バリアジャケット姿だ。
あどけない愛娘が、七季とつないでいるのとは逆の手を握りながら浮かべる、慈愛あふれる笑顔は、この薄暗い雨雲に覆われた空の下でも、うるわしいことこのうえない。
そんな主と同じく、優しげな笑みを浮かべるリニスも、ベージュ色でバリアジャケットをそろえているあたり、テスタロッサ家は、遊び心満載である。

才人はいうまでもなく、アーチャーが投影した、サイズ違いの外套を羽織っているわけだから、異世界トリップご一行は、みんなして一緒、ということになる。

それぞれ似合っているのが、幸いだろう。

ひとり、アーチャーだけが、ちょっと気恥ずかしそうである。

「しかし、何でまた、こんな天気に外なんかで……」

あちこちから、生徒たちのグチる声が聞こえてくる。雨をよけるために、皆、風や水、場合によっては火の魔法を使っているものがほとんどだ。

ここは、魔法学院からほど近い距離にある平原。

しとしとと降りしきる雨は、春のそれで、激しくはないものの、いっこうに止む気配もない。

「さあ、皆さん！」

注目、とばかりに土の魔法の教師、シュヴルーズの声が、春雨の中にもハッキリと響く。風の魔法でも使っているのだろう。

薄暗い天気の中でも目立つ、水色の衣装が色あざやかだ。

授業を見学するアンリエッタ一行は、シュヴルーズが錬金で作った、仮設の屋根つき観覧席に陣取って、その様子を眺めている。

「魔法を使うにあたって、いつも最適な環境の日ばかりとは限りません。

きょうは、水気の多い中でも、土の魔法を安定して使うことができるように、訓練をいたしましょう！」

『ええー』

思わず生徒たちの間からは、不満の声が洩れる。

シュヴルーズの言っていることは、もっともなのだが、まだ青い少年少女たちからすれば「わざわざ使いにくい環境で魔法を使うなんて面倒」と思うのは、無理もないことだ。

いずれ、軍属になるものは、雨だろうと晴れだろうと、塹壕を掘ったり、砦を建築する急務が起こったりすることになるのだろうが——そこまで考えのおよぶものは、ほとんどいなかった。

しかし、アンリエッタを警護する騎士たちは、さすがに軍属だけあって、その重要性を理解している。
シュヴルーズの授業内容に、小さく頷いているものたちが、ちらほら見受けられた。
グリフォン隊は空戦メインではあるけれど、戦うとなれば、後方支援が欠かせないのはいうまでもない。
そういう意味で、土の魔法使い（メイジ）は、軍人の中でも重宝されるのである。
土の魔法を得意とするグラモン家が、長く軍の名門として続いているのは、決してダテではないのだから。

しばらくは「雨の日に使う錬金」ということで、他の生徒たちと一緒になって、錬金魔法を使っていた七季だったが――ふいに、従者の鋼色をした目が、何かを見つめていることに気づいて、控えめに腕を引いた。
「どした？　アーチャー」
「竜がいる」
降ってきた低い声に、あどけない面輪の少女は、ぱちぱちと大きな目を瞬いて、あらためてアーチャーの視線を追いかけた。
無数の糸のように細く細く降り続く雨のベールに遮られ、七季の目では、男の見ているものを映すことはできない。
「……やっぱ見えん。ああ、でも」
すっと目を伏せ、意識を物理的な視界から、感覚的なものに切り替えて――足元の霊脈をたどって――感じ取った少女は、数秒ののちに「ん、いるな。おっきいのが」と相槌を打った。
「でも何か、人もいるっぽくないか？」
竜といっても、幻獣のドラゴンだ。
大きく、ずんぐりとした気配の、もっと向こうに、それよりも小

さな動くものがあった。
まさか魔法学院を狙っているものだろうか。
――それとも王女狙いか。
黒瑪瑙の瞳に、知性の光が瞬く。
「何にせよ、先生に訊いた方が早いと思うぞ。戦闘態勢でもないんだろ？」
「……ああ。そういう感じではないな」
――しかし、ドラゴンは、群れる性質ではなかったと思うが。
アーチャーの鷹の目には、爬虫類っぽく、この雨に寒そうな様子のドラゴンが、二十頭ほど、一定の距離に散らばっているように見えた。
それでも男の四肢には、戦いを意識して力が流れる。
従者の身のうちに流れ込む魔力を感じながら、七季は彼の腕を引いて、シュヴルーズの元へ小走りに駆け寄ったのだった。

「空中装甲騎士団（ルフト・パンツァー・リッター）？」
何ぞそれ。
女性教諭の口から飛び出した単語に、七季とアーチャーは、そろってけげんな面持ちをしていた。
さっきまで、小柄な少女の肩に乗っかっていたリドルはというと――人語を解する使い魔が珍しいというので、ただいまアンリエッタに請われて、その膝に貸し出されている。
黒猫の姿ながら、彼がたいそう不機嫌だったのはいうまでもない。
合掌。
さておき。
異邦の留学生たちに、空色の服を着たシュヴルーズは、丁寧な口調で説明する。
「クルデンホルフ大公国――ようするに、アンリエッタ姫殿下の祖

父、フィリップ三世陛下によって、大公領を賜ったことから始まる、新興国なのですけれどね。

そのクルデンホルフ大公家の、親衛隊として編成された竜騎士団のことなのです」

シュヴルーズいわく、重厚な甲冑を着用するのが特徴で、ベアトリス＝イヴォンヌ＝フォン＝クルデンホルフがトリステイン魔法学院に入学した際に連れて来たものだという。

――あの子の連れかー。

七季は、脳裏にさっき見たばかりの、金髪ツインテールお嬢様を思い浮かべた。

竜騎士団なので、いわずもがな、騎士一人につき、原則一頭は必ずドラゴンを連れている。

名目上、ベアトリスの護衛である彼らは、二十騎ほどが、学院付近の、この平原にテントを張って、駐留しているとのことだった。

「それはまた……難儀な」

思わず嘆じた七季に、シュヴルーズは、困ったような笑みを見せる。

小声で彼女が講釈したところ、クルデンホルフ大公国は、名目上ながらも独立を維持できるほどの豊かな財力を持っているらしい。

加えていうならば、トリステイン国内の、多くの貴族たちに金を貸しているとのこと。そのため、トリステイン国内にかなりの影響力を持つ。

故に、いかにトリステイン魔法学院といえども、彼らを追い返せるだけの権限はないのだそうだ。

「先日の……あの一件もあったでしょう？」

シュヴルーズが言葉をぼかして匂わせたのは、メンヌヴィルの襲撃してきた事件だろう。

結果的に、クルデンホルフの騎士団は、後手に回ってしまったわけだが、あれは襲撃が迅速だったうえに、ベアトリスも人質となってしまっていた。

学院から、距離を取って駐留していた空中装甲騎士団（ルフト・パンツァー・リッター）は、ために対応できなかった、といえる。

だからこそ、その窮地を救った形のアーチャーと七季たち主従に、ベアトリスは、ここぞと懐いたのであるし――騎士団は、逆に、トリステイン魔法学院から離れたところにいたからこそ、間に合わなかったのだと主張して、前よりも近い、この平原に場所を移して駐留しているのだと、シュヴルーズは、事情を明かした。

「なるほど……」

「学院から近い、開けた場所にある平原というのは、ここくらいなのですわ」

頷くアーチャーを見上げつつ、シュヴルーズは、ぽっちゃりぎみの、豊満な体を不安げに揺らして嘆息した。

トリステイン王族であるアンリエッタを、不便な屋外での授業に引っ張り出したのは、それなりの理由があったというわけだ。

校舎では逃げ場がないことは、先日の襲撃で教師たちが痛感したことだ。

いざとなれば、護衛の騎士団が、グリフォンに乗せて、アンリエッタを逃がすこともできるだろう。

それに、クルデンホルフ大公国は、名目上、トリステイン王国の下。

――何かあれば、彼らの力を借りることも、やぶさかではない、ということか。

七季とアーチャーは、互いの目を合わせると、シュヴルーズの気苦労を思いやってしまった。

授業の見学中に、王女に「何か」あれば、その教師の首が飛ぶことは確実だからだ。もしかしたら、教師同士の押し付け合いさえ、あったかもしれない。

七季の推測通り、というか、何というか。

じっさい、アンリエッタが見学する授業を、くじ引きで決めたという裏事情があったりしたのだが、それはまた別の話である。

とにもかくにも。

ふだん平和な日々であれば、「王族の見学」という名誉も、先日の襲撃でピリピリしている教師たちには、刺激物でしかない。

学院関係者――とりわけ教師――の心境は、一様に、「早く王女が何事もなく帰ってくれますように！」の一言に尽きた。

#189　始まらない物語ー苦労性の魔法使いー（後書き）

あとがき

＞久しぶりのシュヴルーズ先生。

この章タイトルのコンセプトが、「悩み・憂鬱を抱える女性」なので、せっかくだから突っ込んでみたという。

ちょっと中途半端かもしれませんが、ここでいったん切りました。

どれだけ書き手はアンリエッタを書くのが苦手なのかという（苦笑）。

ベアトリスを出したので、ついでに「空中装甲騎士団」も出しました。

アンリエッタに貸し出されたリドル、いとあはれ。

とらは、あいかわらずフリーダムで家出ぎみやなー。

#１９０　始まらない物語ー あとに残った宝物ー

そんな（教師にとってのみ）肝試しじみた授業見学も終わりを告げ。

王女を乗せた馬車と、その一行は、トリステイン魔法学院から立ち去るに見えた――が。

ヒヒン！

ごどっ。

馬車を牽いていたユニコーンが、前方にいた「何か」を蹴り飛ばし、馬車が一時立ち往生するという騒ぎが、最後に起きた。

王女一行を見送っていた生徒たちの間から、ざわめきが上がる。

「何だ、この……っ」

「でかいモグラは！」

グリフォン隊の騎士が、思わず蹴り上げたのは、ジャイアントモール。

「ヴェルダンデ！」

ギーシュの呼ばわった使い魔だった。

ややもすると、昼間でも薄暗い天候である。土色の巨大な獣は、春雨に煙る視界に同化して、見えづらかったらしい。

雨の日には、バイクや自転車が、お年寄りなど通行人をはねる事故が多くなるが、これと同じ理屈だろう。

まして、現代日本と違って、このあたりには街灯や、店の電灯などもないのだから。

「使い魔の躾くらい、しっかりしておきたまえ！」

騎士の一人が、吐き捨てるようにギーシュへとジャイアントモールを放り投げる。

金髪の少年は、あわててレビテーションを唱えると、もこもこし

た使い魔の巨体を受け止めた。
「す、すみませ……！」
てっきり、土の中にいるものとばかり思っていた、ヴェルダンデを目にした少年は、その碧眼に、悲痛な色を浮かべる。
ユニコーンに蹴られたのだろう場所は、ぶくりと醜いほど腫れ上がり、まるで奇形の様相だ。その尖り気味の鼻先や口元からは、薄暗い天気でも見間違えようのない赤があざやかで。
「ナナキ！」
ヴェルダンデを助けてくれ！
ギーシュが助けを求めたのは、水の魔法を得意とする、異邦の娘。ルイズのヤケドすら癒しきる彼女なら、と急いで黒髪の少女へと駆け寄った。
七季は目で頷くや、すぐさまデバイスを起動する。
「ガニュメデス、セットアップ。フォーム『カドゥケウス』。術式『アムリタ』」
黒白の双蛇が絡む、あかがねの魔杖。そのデバイスは、黄金の双翼が抱く、青い宝珠をかがやかせ、藍色に金砂が散る魔力光を、静かに生み出した。
ぱう……っ。
ジャイアントモールの巨体を包み込んだ、夜色の光は、すぐに消え去ったが、同時にそれはヴェルダンデの傷も持ち去ったかのように見えた。
「よし、おっけ」
七季の唇からも、ほっと安堵の息がこぼれ出た。
その間に、アンリエッタを乗せた馬車は、ふたたび動き出す。
金髪碧眼の少年は、グリフォンを従える騎士団をはばかりながらも、小さな声ながら、必死で七季へ感謝の言葉を繰り返した。
「ありがとう、本当にありがとう……！」
性格は軽薄ぎみだが、ギーシュの使い魔を思う気持ちは、なかなか深い。

涙を流すその態度に、七季は、王女を警戒して張り詰めていた緊張を解くと、ぺんぺん、と少年の肩を叩いてなだめてやった。
「はいはい、どうどう。気にするなって。お代はちゃんと……？」
言いかけて、黒髪の少女は、くい、と引っ張られる感覚に上半身を倒した。
――ん？
つられて見下ろせば、いましがた治療したばかりの巨大モグラが、そのぶっとい前脚――の、長い爪につまんだものを、彼女に差し出している。
それは、良く見れば指輪のようだった。
泥にまみれてはいるが、ハルケギニア風にいうならば、「火の力」を感じる石のついたアクセサリーだ。
これが、今朝がたコルベールの落としたものであり――始祖の秘宝であることを知るものは、この場にいない。
宝石のニオイを嗅ぎ取ることのできるヴェルダンデは、この指輪を拾いに来て、王女一行の馬車を牽くユニコーンに蹴られたのだが、七季はたんに、どこからか掘り当てたり、拾ったものをくれたのだろうと思っただけだ。
ジャイアントモールの掘削能力は凄まじく、時折、とんでもない場所に隠されている財宝や、貴重な鉱物などを掘り出してくることがあるという。
「……ヴェルダンデ。もしかして、この指輪が治療代なのかな？」
泥にまみれていた、濡れ鼠も良いところのジャイアントモールは、その出っ張った鼻先をこくこく動かすと、ギーシュの方を振り向いた。
次いで、つぶらな黒い瞳は、感謝の光を湛えて少女を見上げる。
「ナナキは命の恩人だって。これは感謝の印みたいだよ。ヴェルダンデもありがとうって言ってる」
「どういたしまして」
黒衣の少女は、種族を超えて絆を深める、この主従にふんわり微

笑むと、傷の癒えた使い魔から指輪を受け取った。
「ありがとう、ヴェルダンデ。治療代は、たしかにいただいたよ。これからは、もっと周りに気をつけてね。君のご主人様が心配するよ？」
こく。
ジャイアントモールは、その尖った鼻先を上下させると、ギーシュによって優しく地面に下ろされた。レビテーションから解放されたヴェルダンデは、やわらかな土をもりもり掘り始め、やがて土の下へと潜っていった。
今度は、主のための宝物を探しに行ったのか、それとも食事でもしに行ったか。
――掘り出し物かな。
泥に汚れた指輪からは、たしかな力を感じ取ることができる。それを黒髪の少女は、小さな手の中に握りこんで笑った。
火の力ならば、彼女の従者の助けになるだろうと。
春雨の中に翻る、夜色のポニーテールも颯爽と。
そうして七季は従者たちを従えるや、午後の授業にそなえるべく、ひとまず寮へと戻ったのだった。
「とりあえず泥を落とさないとなー」

少女の手に入れた指輪が、始祖の秘宝の一つ「炎のルビー」であると知るのは、その夜のこと――
「サロン」に置かれた、デルフリンガーの指摘によってであったが、またそれは、別の話である。

#１９０　始まらない物語ー あとに残った宝物ー（後書き）

あとがき

＞オリ主、ヴェルダンデの手を経て「炎のルビー」を回収しました。

といっても「始祖？　何それ美味しいの？」なオリ主ですけど。

とりあえず「炎のルビーを確保させといたら？」という読み手さまのアイデアを採用してみました。

「落とし物」してではなく、オリ主に確保させるのが、意外と難しかったです。

フツーに拾ったら、職員室とかに届けそうだったんで。アーチャーいるし。

#１９１　始まらない物語－シンデレラの悩み－

アンリエッタが、トリステイン魔法学院を去った日の夜。
ヴァリエール領に、ひとつの影が踏み込んでいた。
「ワルドさま！」
夜間、わざわざ窓から身を滑り込ませた年上の男を、ルイズは、喜色を浮かべた面持ちで歓迎した。
じつのところ、過保護な両親――とりわけ父親の公爵が――によって、実家で軟禁状態もいいところだった少女は、これでもかとヒマをもてあましていたのである。
学院で予定されたいた、「使い魔の品評会」にも、これでは参加できないだろうと、ふてくされていたルイズは、満面の笑みでワルドに抱きついたが。
「ああ、僕の小さなルイズ！」
砂色の髪の騎士は、その目に鋭い光を浮かべて、「ゼロ」の二つ名を持つ少女へと話を持ちかけた。

同じころ。
トリステイン魔法学院――から、少しはなれた場所にある、「サロン」にて。
「きょうはプレシアたちと寝るから。大丈夫っ！」
「しかしマスター……」
納得いかない、といった面持ちの、なめし革みたいに褐色の肌の従者の、たくましい胸板を、ぐいぐい押して、ようやっと黒髪の少女は、アーチャーの目が届かない場所を手に入れた。

部屋の音が聞こえないように、防音の魔法をかけたあと。
「それで、悩みごとって何かしら？」
メガネを外したダークヘアの美人ママさんと、カフェオレ色の髪が優しい面輪をふちどる癒し系お姉さん、そして、いつもはツインテールに結っている金髪を、ゆるく肩口でくくったルビーアイ幼女。
見るからに美形ぞろいのパジャマパーティーの中、控えめな日本人顔の、それでも黒くぱっちりと大きな目が特徴的な少女は、水の足りない草花のように、へんにょりうなだれて、ベッドの上に座り込んでいた。
「ええと……このごろ、アーチャーが過保護で困るんです……」
困りきった響きのソプラノを洩らす七季に、アドルト組の山猫娘と、ママさん魔導士が、そろって顔を見合わせる。
何をいまさら。
テスタロッサ主従の顔には、そろってそんな文句が書き込まれていた。
「具体的には？」
プレシアに問われて、ますます前のめりになる少女の、若草色のパジャマの胸元から、ごにょごにょとはっきりしない声が洩れる。
「ナナキ？」
リニスに再度促されて、ゆるゆる顔を上げた「神使（しんし）」のトリップ娘は――まっかな顔で、傍にいたアリシアの耳をふさぐと、ちょっぴり涙目になって「悩み」を打ち明けた。
「……ひとりえっちができません」
それはそれは生あったかい沈黙が、女性ばかりのいる部屋に満ち

て、空気の温度をちょっぴり上げた、ような錯覚を与えた。
「？」
耳をふさがれているアリシアは、わけもわからず、不思議そうな顔をしているが、発言者の七季はというと、ふだんは凛々しいほどにくっきりした眉を見る影もなく下げきって、あどけない面差しを耳朶まで羞恥に染めている。
七季の、黒めがちで大きな瞳は、涙に濡れて、つやつやと光っており思わず手に取りたくなるような磁力があった。
――どうしよう。この子、可愛いわ。
――ひとりえっち？……とりあえずいま、ナナキを毛づくろいしてあげたい気持ちでいっぱいです。
夫と別れてからこちら、年単位のブランクがある、元人妻と。
ケダモノちっくな感性が残っている山猫娘が、妙な衝動を覚えて、その優美な手指を、怪しくわきわきさせていた。
「いや、変な意味じゃなくってなっ、ひとりの時間が全然ないっていうか……トイレと風呂くらいしか、ひとりになれないってどうなんだ！？」
最後は逆ギレぎみだが、この場合、七季のそれは散歩に行けなくてキャンキャン鳴いている子犬と変わらない剣幕である。恐いわけがない。
ひとり、近くで姉がわりの形相にびっくりしたアリシアが、その声は聞こえずとも、年上の少女を心配して、ふっくら白い頬を撫でているが、それくらいのものだ。
「あらー……」
黒髪の少女のグチを聞いて、何ともいえない笑いを浮かべるリニスと、首をかしげて、素朴な疑問を投げかけるプレシア。
「言ってやれば良いじゃない。ちょっとは一人にして欲しいって」
「言ったよ。言ったんだけど……一人にするのは心配だからって……」
凄い心配そうな顔と声で反論されるんだもんよ。

――あれは、ご飯の皿を前に、主人から「待て」を言いつけられた、ドーベルマンみたいだった。

可愛さに耐えかねて、つい七季がアーチャーを抱きしめてしまったのは、余談である。

そういう七季も、いまはへにょんと伏せた三角ネコミミと、垂れ下がるしっぽの幻覚が、プレシアやリニスに見えていることを、彼女は知らない。

ここにリドルか、七季の幼なじみ連中がいたなら「君たち似たもの主従だから」とツッコんでくれただろう。

「気になるなら、気配を消して霊体化するって言うんだ。そこまでして、一人にしたくないらしくて……」

あうう。

先日――ハンター世界にいたころを換算すると、そろそろ一週間たらずになるだろうか――マスターである七季がさらわれ、あわや命の危機にさらされて以来、ただでさえ過保護な気のあった白い髪の従者は、それに輪をかけてしまった。

「そんなにベッタリでしたっけ？」

はて。

大きな、それこそテスタロッサファミリーそろって眠るだけの大きさを誇るベッドに、寝転がったリニスが、髪色と同じ、カフェオレ色のネコミミをぴくぴく動かしながら記憶を振り返るが。

――アーチャーは、料理をするだとか、物を運ぶだとか、それこそ疑問を確かめるために、オールド・オスマンを訪ねるなど、そこそこ離れていたような。

いっぽうベッドヘッドにもたれるプレシアも、小花の散った柄のネグリジェを身にまとい、ルビーアイをけげんそうに瞬いている。

「五分や十分単位、最長で、三十分くらいまでなんだよ」

三十分というのは、だいたい七季の入浴時間の平均である。

説明する少女の声は、どこか切なげだ。

アーチャーと肉体的なつながりを結んでコレなのだから、なかっ

たらと思うと――ますます七季はうなだれるしかない。
彼としては、また落ち着いた方なのだ、おそらく。

「もう何て言うか……『どこいつ』のトロかと、いわんばかりに」
ど●でもいっしょ。
その七季のセリフを聞いたとたん、プレシアとリニスの脳裏には、白いネコミミをつけて「～なのにゃ」としゃべる、褐色の肌の弓兵のイメージが過ぎったわけで。
ぶふうっ！
当然ながら、ふたりの美女は、仲良く噴き出すハメになったという。
ハンター世界でもあった、そのお手軽ゲームを、プレイしていたがゆえの悲劇――もとい、喜劇であった。
合掌。

#１９１　始まらない物語－シンデレラの悩み－（後書き）

あとがき

＞一晩おいたら、どうにか書けるだけの文章まとまってくれたのは良いんですが、今度は長すぎた（汗）。

いったん切ります。

そして、つい筆が滑って、下ネタですまんです。

「どこいつ」アーチャー、自重しない（笑）。

#１９２　始まらない物語ー ガラスの靴ー

「え？……ふだんは見せてくれない、意地悪な顔とか、気持ち良さそうな顔が見られたことかな」

ふにゃん。

「初夜」について、プレシアとリニスから「何が良かったか」と、ある意味ものすごくアレな質問をされた少女の、答えがそれだった。

それこそ、新妻みたいに恥じらいを含んだ、咲き初めの花を思わせる笑顔がほころぶ。

そんなふうに照れる七季の、あどけない面差しに、同性であるはずのふたりが、そろってときめいた。

きゅっと組んでそろえた手指は下に。濡れたように見える黒瑪瑙の瞳は、優しく弧を描き。長い睫毛が、ふっくらと白い頬に陰を落として。

淡い光沢のある、若草色のシルクに包まれたバストやヒップがたぷんと震える。

小柄な少女は、その見るからにやわらかく華奢な全身から「大好き」といわんばかりの、ほわほわ春めいたオーラを醸し出していた。

身にまとう体臭までもが、果実とジャスミンを合わせたような、どこか官能的で美味しそうなものに感じられてくる。

――何この可愛い生き物。

膝を崩したまま、ほにゃほにゃ笑う少女は、アリシアから見上げられて「ん？」と妹分の顔をのぞきこんだ。

「ああごめん。耳ふさいだままだったよな」

だから、この話はこれでおしまい。

そう暗に告げる七季に、ダークヘアの美女と、カフェオレ色の山猫娘は「もういっそ私たちでどうにかしちゃった方が早いんじゃね

？」と互いの顔を見合わせていた。
「もー。何のお話だったの？」
「ちょっと大人のお話」
黒髪の少女は、むくれる金髪幼女を、優しく撫でながらなだめて、ぽふんと大きなベッドに横たわる。
「お姉ちゃん……ふにゃ。良いニオイ……」
すうっ。
その胸に抱かれたアリシアも、こてん、と一緒に転がった。やわらかな胸に包まれて、すぐに幼子は夢の中。
「そうそう」
「だからアリシア」
『おやすみなさい』
――ん？
可愛い妹分の寝顔に、ふんわり眠気を誘われて、「くぁ」とあくびをしていた七季は、にじにじ近寄ってくるテスタロッサ主従に、がばりともみくちゃにされたり、されなかったり。
さて、真相は、どこかの白ウサギが知っているかも？
「僕もいるんですけど……いえ、見ざる聞かざる言わざるですよね、わかります」
アリシアの使い魔のエイプリルは、部屋の隅にあるバスケットで、ちんまり丸くなっていた。

さて、そのころ。
ところ変わって、箱入り貴族娘の囲われている、ヴァリエールの屋敷では。
「僕はこれから、殿下の密命を受けて、アルビオンまで行かなくてはならない」
低くささやかれるワルドの言葉に、ルイズはピンクトルマリンを

思わせる目を見開いて、男の顔を見上げた。
「もしかして、危険な任務なのですか？」
世間知らずな少女の胸に、「他国への潜入」という、いかにもな言葉が刷り込まれる。
「……さて。ただ、他国のことだ。何があるかわからない、というのが正直な話でね。国を出る前に、一目、君の顔を見ておきたかった」
「ワルドさま……！」
ルイズは、男の話に「危険な任務に赴く恋人を案じる少女」という役柄を、自分に重ねて陶酔した。
彼女にとってワルドは、口で言うほど恋しい相手では、決してない。
幼い少女は、まだ恋に恋する年ごろであり、それにもまして、ルイズに関して言うならば、見栄の部分がかなりある。
それは「王宮の騎士」を婚約者に持つ、というステータスであり、少なくとも「相手がいる」ということで、他の同性に差をつけられる、見栄えの良いアクセサリーのようなものだ。
「ゼロ」とバカにされることの多い少女にとって、それは他の少女を見下すことのできる、数少ない理由である。
本当に焦がれ、求める相手でもないのに「まあこれなら良いか」と付き合っているのと変わらない。
「だから、というのもおかしいかもしれないが」
ワルドは、いったん言葉を切って、わざともったいつけた。
「僕が無事に戻ってきたら……そのときは、結婚して欲しい、ルイズ」
そんなことだから、ルイズは求婚の言葉を突きつけられたとき、とっさに反応できなかった。

嬉しいとか、拒否感とか、そういうこと以前に、まず驚きが先に来たのだ。

「え……」

「ああ。もう時間がない。ではね、ルイズ！」

そして男も、彼女の返事は待たずに身を翻した。

ワルドが飛び乗ったドラゴンが、みるみる夜空に舞い上がり、やがては見えなくなる。

プロポーズは、女性にとって、いちばんの栄光に包まれる日のはずだ。

しかし現実の話、ルイズの元には、約束の証となる指輪も、彼女を最高に飾り立てるドレスも、薫り高いワインすらもなく――愛の言葉さえ、足りなかった。

ピンクブロンドの少女は、寝巻き姿のまま、プロポーズされた事実とは裏腹に、漠然とした不安を抱え込む。

その胸のわだかまりは、まるで雲の晴れない今夜の空のように、ただ暗澹としていた。

#192　始まらない物語ー ガラスの靴ー（後書き）

あとがき

＞珍しく惚気るオリ主。

うっかり思い出して、無意識に色気を振りまいてしまうあたりが天然です。

プレシアたちのはギャグなんで寸止め。たぶん（たぶんとか言うな）。

うん、うっかりムラムラすることもあるよね！（待て）

ルイズはワルドからプロポーズされましたが……まあ男女間の温度差があからさま。

タイトルの「ガラスの靴」は、シンデレラ・ストーリーの象徴ですが。

じっさいは、あんなもんじゃ歩けませんわな。

ルイズにとっても現実味のない結婚話の象徴としてタイトルに採用しました。

◆ゼロ魔の世界の登場人物ー追加ー

◆ベアトリス＝イヴォンヌ＝フォン＝クルデンホルフ。
クルデンホルフ大公国の姫。愛称は「ビビ」。
独立国の姫であることを鼻にかけており、プライドが高い。だが、いっぽうでクルデンホルフを属国あつかいし、クルデンホルフ家を下に見るトリステイン王家には反発心を抱いている。
空中装甲騎士団を引き連れ、トリステインの魔法学院に留学してきた。クルデンホルフ大公家は、トリステイン王家と親戚筋に当たる。

原作では、ルイズたちより二学年下だが、この話では一学年下になっている。
メンヌヴィル襲撃事件をきっかけに、アーチャーとオリ主の主従を恩人とみなし、ふたりの関係に憧れを抱く。
同じようなファン意識を持つ少女たちを集めた「双剣の騎士と東方の花を見守る会」の総元締め。ここには平民のシエスタも加わっている。

金髪のツインテールと碧眼が特徴の小柄な少女。

◆フラム
元「白炎」の二つ名を持っていた火メイジ・メンヌヴィル。
薬物と「アンドバリの指輪」によってワルドから洗脳されたうえ、トリステイン魔法学院を襲撃したが、のちにオリ主たちの手によっ

て解毒・解呪される。
そのときの取引で、命を助ける代わりに、襲撃事件に関する情報を吐き出し、他の傭兵たちと共に、トリステイン魔法学院の新たな警備兵となった。
リドル謹製の若返り薬を飲み、その副産物から、焼けたはずの目は元通りになり、名前と顔を（魔法で）変えている。
オリ主のことは「お嬢」と呼んで、丁重にあつかっている。

白い髪で長身の男。

※メンヌヴィルの偽名「フラム」はフランス語の「炎、輝き」から取りました。

#１９３　始まらない物語ー足音を聞くー

「戻って良い」
暗黒の空、吹きすぎる風にも紛れそうな低い声が、幻獣の耳に届く。
ルイズにプロポーズを良い逃げした形のワルドは、ドラゴンの背中から、ふとかき消えた。
役目を果たした偏在は、いまごろラ・ロシェールに向かっている本体の命令で、その存在を解いたのだ。
「キュ？　グルルゥ？」
いきなり軽くなった背中に、琥珀の目のドラゴンは、戸惑うように振り返りつつも――彼は、しばし滞空したのち、元いたおのが住処（すみか）へと転進したのだった。

いっぽう、ワルド本体は、というと。
アンリエッタが学院に滞在した夜――この時点で、ワルドはウェールズから手紙を取り戻すようにとの密命を受けていた。
翌朝、もしもアーチャーが首尾よくアンリエッタの話を受けていたなら、彼と共に、アルビオンへと出立する予定だったのだが。
そう上手くいくものではなく、けっきょくのところ、ワルドは一人で――彼にとっては都合良く――アルビオンへ出向くことになったのだ。
トリステイン魔法学院から離れるアンリエッタの護衛は、おのが偏在に任せて、目立つ王女一行を見送り。
ひとり学院の裏手から、こっそりと抜け出したワルドは、少し離

れたところから、グリフォンに乗って、一路、ラ・ロシェールへと向かったのだった。

その不審な影に気づいたのは、学院に近い平原に駐留していた、クルデンホルフの騎士団だけだったが。

ともあれ。

ろくな装備もそろわぬままの出立である。

途中、立ち寄った街や村で、必要なものを調達しながら、ワルドは愛騎を急がせた。

寄り道をしたせいもあって、彼がラ・ロシェールに到着したのは、ルイズの元に遣わした偏在が消えてから、さらにあと。夜明けごろのことである。

余計な詮索をされたくないこと、そして騎獣のグリフォンを預けられるという理由から、ワルドは「女神の杵」亭という宿にチェックインした。

こういう貴族向けの宿というのは、値段が高いぶん、明け方だろうと、少々の無理がきくのである。

さすがのワルドでも、ほぼ一日じゅう飛びっぱなしというのは、強行軍の部類だ。

仮にも軍人である。一日そこらの徹夜でガタがくるような鍛え方はしていないものの、休めるときに休んでおくのも軍人の鉄則には違いない。

念のため、宿で眠る前に偏在を生み出したワルドは、レコンキスタの動向を確認するよう言い含めておいて、休息に入った。

さて。

アンリエッタが戻ってから、一晩明けた王宮では。

きょうもきょうとて、メイド「オルタンシア」として働く、七季の偏在の姿があった。

ちょうど、ラ・ロシェールの宿で、ワルドが眠りについた数時間あとくらいのころあいである。

水の魔法を得意とする「オルタンシア」は、厨房の水汲み仕事をそつなくこなし、ちょうど城の通用口側を通って戻る途中だったのだが。

そこに、滑空して舞い降りてきた一頭のドラゴン。さらには、その背中からまろび出るようにして、一人の男が姿を現した。

――ん？

一見すると商人風なのだが、良く観察すればその体躯が鍛えられたものであることがわかるだろう。

「待て！」

ひょいと首をかしげる黒髪のメイドの視界に、城の門を警備する兵士が、じゃこり、と槍を交差させて、すかさず男を阻むさまが映る。

通用口とはいえ、れっきとした城の出入り口。その警備は当然のものだ。

「ここをどこだと心得る！」

しかし彼は、そんなことではへこたれなかった。

「早くお知らせを！」

必死の形相で叫ぶ男は、おそらく一昼夜かけてトリステインにたどりついたに違いなかった。

「アルビオンで内乱が起こった！　反乱軍にはアルビオン貴族が多数！」

「ッ！」

走り抜けた緊張に、すぐさま別の兵士が王宮へと注進に駆け込む。

――アルビオンって、たしか他国だよねぇ？

おおごとだけど。

とりあえず「オルタンシア」は、自分の務めを果たすべく、みずからも王宮の中へと戻り。

その後、王宮の一角から飛び立った黒い小鳥を、見咎めるものな

ど誰一人いなかった。

「ふ……ふ、ふはははははは！
ハルケギニアよ、俺は帰ってきた――！」
どっぱあぁぁん。
背後に日本海の荒波を背負って叫ぶのは、青い髪の美丈夫。
妙にこんがり日焼けしているところが、海の男っぽい、ガリアの王様である。
そして。
「はいはい、妙なテンションで盛り上がらない」
すぱーん。
そんな王族の後頭部をドツく、うるわしい栗毛の巫女さんに――
正確には、彼らが出てきたジッパーに――アルビオンの城、ニューカッスル城の人々は、ポカーンと口を開けて呆けるのだった。

＃１９３　始まらない物語－足音を聞く－（後書き）

あとがき

＞というわけで、ルイズにプロポーズしたのは、ワルドの偏在でした。

生物まで複製できないかな、と思ったので、グリフォンは本体を乗っけて、ラ・ロシェールへ。

偏在は、どこぞからドラゴン借りて、ヴァリエール領へと、別行動です。

トリステインの王宮に駆け込んできたのは、マザリーニ枢機卿あたりが使ってるスパイ。

ふだんは商人を装いながら、情報を集めたり。

ただ、いちおう秘密裏に動いていたレコンキスタの情報をつかむまでのレベルではないという。

怪しい動きが一部の貴族にある、というくらいです。

もうちょっと間を空けても良かったんですが、面倒だったので（待て）、一気にジョゼフ登場まで持ってきました。

※追記

新章タイトル「魔法中年ダンディＪＯＺＥＨＵ」は読み手さまからアイデアをいただきました。

この場を借りてお礼を申し上げます。山ポンさま、ありがとうございます！

#１９４　始まらない物語ー道に迷ったそのときはー

さて。

レコンキスタの蜂起から一日あまり。

トリステイン王宮にも、その急報が持ち込まれた日――城から飛び立った一羽の小鳥は、トリステイン魔法学院へたどりついていた。

「ふぅん……」

――アルビオンで内乱、か。

はたしてトリステインとは、どんな関係にあった国だったか。

指を止まり木にしたツバメから受け取った情報に、七季は思案深げに目を落とし……その先に、見知った影を認めて、かがみこんだ。

コルベールが辞職したため、火の魔法の授業が、一時的に空いたが故の時間である。

「お、ヴェルダンデ。調子はどう？」

もこり、と地面から顔を出したジャイアントモールと、黒髪の少女は、お互いのまっくろな目を見合わせる。

「ちゃんと治療はしたけど、具合が悪くなったらいつでも来るんだぞ？」

なでり。

土まみれの茶色い毛並みを、かまわず少女ににわしわし撫でられて、つぶらな目を気持ち良さそうに細めるヴェルダンデ。ギーシュの使い魔は、その出っ張った鼻先をピクピク動かした。

ずぼ、といったん地中に引っ込んだ、でっかい茶色の毛玉は、すぐににょきっと顔を出して、その長い爪に乗せたものを差し出してくる。

「どした？」

七季の目に映ったのは、霜柱を思わせる、縦方向に結晶したよう

なラインのある鉱物だった。
春の陽射しを、にぶく弾くそれは、ごろっとしていて、緑や赤紫っぽい色の混じった、ガラスの破片にも見えるだろうか。破片というには、拳ほどのサイズがあるため、置物をカチ割らなければ、こういうものは出ないだろうが。
まあ、手のひらが小さな七季の拳くらいだから、そこまで巨大というほどでもない。
縦横それぞれ十数センチ。
ぼこぼこといびつで、ところどころ、岩のかけらや土がついているあたり、この結晶は巨大モグラの爪によってえぐり取られたものと思われる。さりげなく攻撃力が高いぞ、ヴェルダンデ。
「見せてくれるのか？」
ぐいぐい押しつけられるように、目の前に近づけられるので、七季は多少、引きぎみになりながらも、その鉱物を受け取った。
「何かの原石かな……？」
あいにくと、解析はアーチャーの領分だ。
光に透かしてみても、おいそれと何かがわかるわけではない。
七季は錬金の魔法が使えるが、理系の化学式はさっぱりな部類だから、細かい成分などでモノが何なのか判別する、というのは、いったん調べて覚えたものしかわからないのだ。
イメージのみで錬金する、というのは、わりと簡単にできるのに、不思議なものである。
ならばデバイスに聞けば良さそうなものだが、いかんせん、「黎明」の方は、ただいまメンテ中であった。いまごろはプレシアとリニスの手によって、いろいろと弄ばれていることだろう。
ずぼっ。
黒髪の少女が、まじまじ結晶を眺めていると、ふいにヴェルダンデは、ふたたび地中にもぐってしまった。
「え、ちょっとヴェルダンデ？」
忘れ物！

しかしギーシュの使い魔は、もりもりと地中を掘り進むために、彼女が蹴散らした土で、穴の入り口は塞がってしまった。

あとに残されたのは、鉱物を手に、ぽかんとする小柄な黒衣の少女ひとり。

「しゃーない。あとでギーシュんとこ行くか……」

ためいきをつきつつ、ひょいと立ち上がる異邦人娘は、ヴェルダンデに渡された結晶を片手に、大きく伸びをした。もう片方の手には、既に小鳥の姿はない。

ちなみに、七季がこんなところで単独行動できる理由は――過保護な従者から離れてという意味で――昨夜、いろいろあったとだけ述べておこう。

彼女もアーチャーにむやみやたらと心配をかけたくはないので、「オルタンシア」からの知らせを受け取った時点で、用は済んでいる。

偏在の魔法で、デバイスが複製できるのは便利なことだった。

「空が青いなぁ……」

くぅーるゥるるっ、くるるるるー。

少女が見上げる春天は、きのうの雨が嘘のように晴れ渡り、ただ七季の上に、上空の警戒を兼ねて空を舞うシームルグの影と、穏やかな日差しを投げかけるだけであった。

いっぽう、真言がアルビオンはニューカッスル城に出現したのは、トリステイン魔法学院で暮らす「神使（しんし）」の少女が、アルビオン貴族たちの蜂起を知ってから、さらに数日たったころである。

「な、何者だ貴様らはっ！」

「いや待て、あの青い髪は」

「ガリアの……」

大きく上がった誰何の声に、ひそひそと素性を慮るささやきが続

く。

「――失礼。そこにおわすは、ガリアの国王、ジョセフ陛下とお見受けいたします！」

この城を守備する兵士、騎士、そのたもろもろの軍人の中で、いかにも歴戦の将らしい中年の男が軍服をまとった姿で進み出た。

男は、おのが名と階級を名乗ると、略式に一礼して、他国の王と思しき相手の来意を問うた。

いちおうジョゼフの服装が、王宮から消えたときのものだったために、それらしく見えたというのもある。日に焼けてはいるが。

「……と申します。しかし、このような情勢に、何故このニューカッスル城においでを？」

鋭い目を向けてくる将軍に、ジョゼフは鷹揚なしぐさで苦笑いしてみせた。

「そうか。ここはニューカッスル城か。悪いが、このジョゼフも、ここにいきなり連れてこられたクチでな。

マコトよ。いったいお前は、ここに何の用があるのだ？」

堂々とした体躯の美丈夫が、青い髪を揺らして振り向けば、「マコト」と呼ばれた、栗毛の巨乳少女は、あたりをしきりにキョロキョロと見回していた。

「あっれー？　王様は？」

「何だ、アルビオン王に用があるのか？

ならばふつうに考えれば、王都ロンディニウムの王城、ハヴィランド宮殿にいるだろう。

もっとも、かの将軍の言う『このような情勢』如何では、何とも言えんが……」

ちらり、と青い目をジョゼフが流せば、一瞥されたアルビオン王党派の将軍が、ぐっと言葉に詰まった様子で二人を睨みつけんばかりの形相になる。

「失礼ですが、陛下。そちらの女性は、どのようなご関係でいらっしゃるのでしょう。もしや、新しい王妃殿下で……？」

ぶふうっ！

向けられた言葉に、間髪入れずジョゼフが噴いた。

確かに真言は、見るからに秀麗で可憐、神々しさすら感じるような美少女であるが。

「じょ、冗談は止せ！　これを妻になど……命がいくつあっても足りんわ！」

目をむいて否定に走るガリア王は真剣である。

何しろ相手は、ジョゼフを上回る念能力者たちが、束になってもかなわないような力量の持ち主なのだ。そのうえ数多（あまた）の人外を使い魔として従えたうえ、七季という「神使（しんし）」がついてくるとあっては。

――俺でも、手に負えんわ！

「なーんか失礼なこと言われた気がする」

むー。

ひとしきり、あたりを探って、目当ての存在がいないことに気づいたのか、紅白の巫女装束をまとった真言は、ジト目でガリア国王を「ジョゼフのくせに生意気だ！」と言ってのけた。

あまりの無礼に、アルビオンのとはいえ、貴族である将軍がのけぞらんばかりに驚く。

が、いっぽうのジョゼフは、やれやれと肩をすくめて、少女の栗毛頭を、ぽんぽんとなだめた。

「それで？　これからどうするのだ？」

「ん、めんご。ちょっと間違えちった」

てへぺろ

レコンキスタの蜂起がずれ、スライド式に戦況が遅くなったために、まだ決戦の場であるニューカッスル城まで、王族たちが後退していないのだ。

このままでは、それも時間の問題だろうが……。

「……いや、城ごと間違うとか。方向音痴にも程があるぞ、マコト」

かたや、「原作」を知らない立場のジョゼフは、たんに神妻の少女が、行き先を間違えたのだと判断した。

思わずツッコミを入れてしまうのも、むべなるかな。
「うっさいよー」
いっぽう、怪奇現象もいいところの傍若無人マイペースコンビに、あっけに取られていた周りの軍人たちは、ようやっと彼女たちの会話に頭が追いつき始めた。
「ま、待たれよ！　いったい我が王に何の用が……！」
「んー商談？」
言うが早いか、真言は懐から、ぱっと紙吹雪をまいた。神事にも使うものであるが。
「なっ！？」
「め、面妖な！」
紙の花びらはかるく、あっというまに散らばって、しばしあたりの視界を奪う。
「んじゃ行くよ。えーと」
「王都ロンディニウムの王城、ハヴィランド宮殿、だ」
「そう、そこ！」
紙吹雪の向こう――虚空に開いたジッパーへと身を躍らせた、青い髪の王族と、琥珀の目の巫女姫は、人々が視界を取り戻すころには、跡形もなく消えうせていた。

同じころ、トリステインの都市、ラ・ロシェールの宿。
その一室では――
ガバッ！
死んだように眠っていた、黒髪の美女が目をかっぴらいたかと思うと、唐突に跳ね起きるや。
くんくん！　くんくんくんくんかくんか……
細いおとがいを上げ、空気のニオイをかぎ分けるそのさまは、さながらオオカミか猟犬か。

「コレは……この苦味の中にきわだつ爽やかなシトラス……スパイスと森の香りを混ぜたようなロマンティックでインテリジェンスを感じるこれは……間違いなくジョゼフさまの匂いっ」

シェフィールドの目がクワッ！とかがやき、その紫水晶の双眸にはこれまでに失せていた力が宿っていた。

目指すは、いとしき主、ただひとり。

「ただいまお傍に参ります、ジョゼフさま――！」

そしてラ・ロシェールの、とある船長さんが、セクシーなのに凄みのある美女に脅されて、泣きながら船を出したとか、出さないとか。

#１９４　始まらない物語ー道に迷ったそのときはー（後書き）

あとがき

＞シェフィ姉さん、開眼（待て）。

読み手さまからネタをいただきました（許可済み）。

変態ちっくにしてごめんよ！　でもそれくらいジョゼフが好きだって信じてます！（をい）

シェフィ姉さんの香りの描写のくだりは、某メンズ香水「アティチュード」を参考にしてみました（笑）。

たぶん彼女を乗せた船は、そのままミョズニトニルンの力で魔改造されたに違いない。

冒頭でオリ主がヴェルダンデにもらった石は、トルマリンをイメージ。

「希望」という石言葉を持つ宝石なので、何となく。

※トルマリン。

‥ケイ酸塩鉱物のグループ名。結晶を熱すると電気を帯びるため、日本名・電気石と呼ばれている。宝石のひとつで、十月の誕生石である。石言葉は「希望」。

#１９５　始まらない物語－大同小異－

「父さま……私、いつになったら学院に戻れるんですか？」
実家に連れ戻されて以来、引き続き軟禁状態にある、ヴァリエール家の三女は、ピンクブロンドにふちどられた頬をぷくっと膨らませて、父親である公爵を見上げていた。
白いワンピースに、あざやかな花のような髪の色が映えている。
その髪と良く似た色合いの目で、じっと愛娘に見つめられた五十路の男は、左目にモノクルをはめたまま、その渋い面（おもて）に、困った色をにじませて嘆息した。
深い、苦い、バリトンだ。
「ルイズ。それは無理だ。アルビオンで内乱が起こっているのだ」
つい先日も、彼が宮廷に呼び出された理由はそれだ。
「そんな！
アルビオンのことが、どうして関係するんですか？」
父親の腕を引くルイズに、ヴァリエール公爵は目つきを険しくする。
「アルビオンの王党派の旗色が、思わしくない。かの国の内乱は、貴族が王に牙をむいた形なのだ。下手をすると、我が国に飛び火する。
トリステインにも、救援を要請する使者がたどりついているしな」
政治に詳しくない少女に、父親であるヴァリエール公爵は、噛み砕いてやって説明した。
「せ、戦争になるの？」
娘だからと――しかも末っ子だからと――跡継ぎのための教育をルイズには施さなかったことを、男は少しだけ悔いた。
――可愛い娘には、血なまぐさいことは、できるだけ教えたくな

い。

しかし、この家には現在、世継ぎたる男子はいないのである。王宮がヴァリエール公爵を呼び出したのは、「急ぎ軍団を編成されたし」と通達するためなのだ。

他に男がいない以上、万が一の場合には、軍務を退いたはずの公爵が、出征しなければならないだろう。

――その後、ヴァリエール家がどうなるのか。

彼の血を引く子供は、女ばかりの三姉妹である。

――本来であれば、長女たるエレオノールが婿を取り、家を継ぐのが順当だろう。

しかしエレオノールは、その気性の激しさが災いして、破談を更新中の身のうえだ。公爵に睨まれてでも断るあたり――察するに余りある。

ならば次女のカトレアはというと。

動物好き過ぎるという、多少、突拍子もない一面もあるが、おっとりした性格で、女性らしさ豊かな娘なのだが。

――あの病弱さでは……公爵家の跡取りという激務を課すのは、酷でしかないだろう。

男である彼でさえ、ときに判断に苦悩するような事態も起こるのだ。ましてや、現在の混迷するトリステインの宮廷に関わるなど、娘の病状を悪化させるとしか思えなかった。

残るは、いまこうして戸惑っている、三女のルイズしかいないのである。

やはり母方の血筋なのか、癇の強いところはあるものの、エレオノールよりは若く、まだ修正がきくだろう。娶(めあ)わせる相手によっては、女性らしさも出てくるに違いない。

親ばかなヴァリエール公爵は、本気でそう思っていた。

この家の跡取りはルイズ――それは、当人以外、ヴァリエール一家では暗黙の了解のようなものになっていたのだ。

だからこそ、公爵は、ここでごまかすことしなかった。

「ああ、そうだ。戦争になるかもしれないのだよ、ルイズ。そうなれば、学院どころではない。召集されるものも出てくるし、おそらくは……私も、軍を率いることになるかもしれない」

「そんな！」

厳しいけれど、ふだんは自分を溺愛といえるほどに可愛がってくれる父親が、戦場に出る可能性を知って、「ゼロ」の二つ名を持つ少女は、ピンクブロンドの頭を振った。

「貴族である以上はな。私は、我々は、王への忠誠がある――それが責務だ」

顔をゆがめるルイズに「ただし」と公爵はつけ加えた。

「私が出るのは、お前たちを戦場にやらないためだ。可愛いお前に、娘たちに、傷などつけるものか。

もしも、お前に戦場に出ろなどと、命じるものがあったなら――それがアンリエッタ殿下だろうと、マリアンヌ大后だろうと、私は全身全霊かけて抗うぞ」

愛娘の、傷ひとつないまっしろな頬を、いとしむ手つきで撫でたヴァリエール公爵の表情は、どこからどう見ても一人の父親のそれだった。家族を守る男の顔だ。

「だからルイズ。私と、カリーヌの許しなく、この家を出ることは許さんぞ。これはお前を守るためなのだ。承知しなさい」

「父さま……」

ピンクトルマリンを思わせる目を潤ませた少女は、厳しい慈愛を湛えて命じる父親に、それ以上わがままを通すことはできずにうつむいた。

「まったく。ちびルイズったら。暇をもてあましてるんでしょ」

父親の書斎から出てきた妹の姿に、エレオノールは腕組みをして、背の低いピンクブロンドの少女を見下ろした。かち合う色の瞳は、

そろいのピンクだ。
「あ、姉さま……」
反射的に後ずさる少女。
「大人しくしてらっしゃい。出かけられないのはつまらないでしょうけど、母さまも父さまも、気が立っているのよ」
父親譲りのプロンドを背中に流し、メガネをかけた長女が、紫色のスカートを翻しながら、ルイズの腕を取ってその自室へと引っ張っていく。
途中、メイドにお茶の準備を命じると、エレオノールはそのままルイズの部屋へと入って行った。
「いいこと、ルイズ。父さまは、まだ何も言わないから、私が先に言っておくわよ。ヴァリエールを継ぐのは、あんただからね」
「！？」
ごぷっ。
紅茶にむせる妹には取り合わず、ソファに腰かけた金髪のツンツン美女は、キッと鋭い視線を妹へと向けていた。
「けほ……けほけほっ」
「私の結婚に言及したら……わかってるわね？」
ギラン。
釘を刺されたルイズは、あわててコクコク頷いた。もう何度も、婚約者から破談を言い渡されているエレオノールだ。自覚くらいはあるのだろう。
「私が結婚しようが、結婚すまいが、たぶん一生アカデミーの研究員よ」
もうそれが、ライフワークのようになってしまっている。
――仕事はやりがいがあるし、男性は……縁があれば、結婚しても良いかなとは思っているけれど。
「ともかく。カトレアは病弱だもの。たぶんルイズに婿を取らせて家を継がせる、これは、もううちの中では決定事項よ。
あんまり騒いで、外に出たがると、すぐさま結婚、なんてことに

なるから。それでも良いなら、覚悟を決めてから出かけるのね」
ルイズは、姉から突きつけられた言葉に目を丸くしながらも、いっぽうで、ワルドからプロポーズされたことを、何故だか言い出せないでいた。
末っ子の彼女は、ずっと長姉であるエレオノールが家を継ぐもの、とばかり思っていたからだ。
手の中のカップに視線を落とす少女を、レンズの奥からピンクの目が見つめる。
「まあ、ずっと家の中にこもってると、刺激がないのも確かでしょうしね」
通称「アカデミー」と呼ばれる、王立魔法研究所で、えんえん論文にかじりつくこともあるエレオノールには、ルイズの気持ちがわからないでもない。
ずっと屋内にこもっていると、そのうち気がめいってきたり、新しい刺激が欲しくなったりするのだ。
「だから、あんたが出かけるんじゃなく、相手を呼びなさい。そうね……ちびルイズを治療したっていう、あの留学生たちなんかどうかしら？」
母さまも父さまも忙しくて、出向けないけれど、一度会ってみたいっておっしゃっていたし。珍しい使い魔を連れていたみたいだから、カトレアも喜ぶんじゃないかしら」
「げっ」
思わずこぼれたうめきに、エレオノールが、キツめの目尻を、ますます吊り上げる。
「何なの、ちびルイズ。『げっ』とは。仮にも淑女でしょう。そんな言葉遣いをするなんて」
ぎりぎりと細い指にあるまじき握力で、妹の口をつねり上げるブロンド美女に、ルイズは涙を浮かべながら懇願した。
「ひたたたたっ、ろ、ろめんらはい、あねはま、ゆるひてっ」
「ください、でしょう？」

「ゆるひてくらはい！」
「……まあ良いでしょう」
妹の頬から指を離したエレオノールは、ルイズの向かいに配置されたソファに体を預けると、一度会ったきりの、なめし革のような褐色の肌と精悍な相貌の男を思い浮かべた。
寡黙で控えめ。なのに影のごとく主につき従い、学院の教師でも手こずるほどの凶悪犯を捕えるほどに、腕の立つ従者。
ああいう男なら――と、エレオノールは心を馳せた。
中身もないような言葉を、ただ並べ立てるよりは、包み込むような沈黙の方が、よほど気がきいている。
まなざしや、短い言葉だけで、すべてを察する、七季とアーチャーの間にあった、あの呼吸を振り返るたびに、エレオノールは彼女らしくなく、羨望を覚えてしまう。
伴侶に、とまではいわずとも、アカデミーの助手か、自分づきの侍従にああいう男がいたならと。
――どれくらい強いのかしら。
ヴァリエール家でも最強を誇るカリーヌ――母親ほどではないだろうけれど。
かつて「烈風カリン」の異名で鳴らした母がいるために、ヴァリエールでは女性上位の思想が根付きがちだ。
ふだんは夫である公爵を立てているカリーヌだが、キレたときの恐ろしさは、そのヴァリエール公爵がいちばん叩き込まれているのだから。
ずいぶん身勝手な興味と、ついでに妹の暇つぶしを兼ねて、エレオノールは彼らを我が家に招くことに決めた。
招待の手紙はルイズに書かせ、じつは父親よりもヴァリエールの実権を握っている観のある母、カリーヌに許しを得て。
二十七歳のキャリアウーマンは、みずからも日ごろ溜め込んでいるストレス解消にと、新たな娯楽に手を出すのだった。

#１９５　始まらない物語－大同小異－（後書き）

あとがき

＞シスコンだけど、身勝手さはルイズと良い勝負なエレオノール。

自分から理由もなく会いに行くのはアレだから、相手を呼びつければ良いじゃない！

そんな考え方。

まあ戦争が始まったら、ヴァリエール家は、ふつうに娘を外には出さないでしょう。

よそはともかく「自分の娘だけは！」という感じです。

そんな軟禁状態が不満のルイズ。レコンキスタの反乱を、父親の口から知ります。

エレオノールは、実家に戻ってきた妹がヒマしてるだろうと、頻繁に戻ってきてはルイズにかまうんですが、それがまたルイズにはストレスだったり。

しばらくは出番がないルイズサイドをフォローで入れてみました。

※大同小異

‥大体は同じで細かい部分が少し異なること。似たり寄ったりで大差がないこと。

#196　始まらない物語ー御旗の行く末ー

「いきなりですが、神門さんはモテます」

唐突に話し出した黒髪ポニーテールの少女を、アーチャーやリドルら従者をはじめ、才人やテスタロッサファミリーもけげんな目で眺めた。

さっきまで手紙を読んでいた人間が、何の前触れもなく、脈絡のないことを言い始めれば、誰だってあっけに取られるだろう。

「あー……どうしたのかね、マスター」

アーチャーは白く丸いティーポットを手に、七季のあどけない童顔を心配そうに見つめた。

虚無の曜日である。

固定化をかけられたガラスから、燦燦と日差しが降り注ぐ温室は、いささか暑いくらいで、異世界トリップご一行はライチの木陰に陣取り、お茶を楽しんでいたところだったのだ。

透かし彫りのアイアンフレームの上、ガラスの天板を取り付けたテーブルは、白磁のティーセットと、桜葉の香る、ほんのりピンク色のクッキーが並んでいる。

「その神門さんが、何故いつまでも独り身なのか？」

珍しく従者の問いかけをスルーした「神使」の少女は、どこか遠いところを見つめつつ話を続けた。

彼女が身にまとっているチャイナカラーのシャツは、襟が高く、黒地に青の差し色が入った裾のあたりに銀糸で胡蝶が刺繍された、シックながらも華やかなワンポイントを忘れない一品だ。

「いかに神門さんが先輩大好きでアレとはいえ、そんなのおかまいなしのパワフリャな肉食系女子の方も、少なからず帝都心霊庁にはいるのにです。

その答えは――神門さんのフラグを、先輩がかたっぱしから折っているからだそうなのです」

『はい？』

何かいま、とんでもないことを聞いたような。

七季以外の誰もが、おのが耳を疑った。

「でも先輩は、神門さんのフラグを折ることに熱中するあまり、ついでに自分と神門さんのフラグも折ってしまったりしていると、観音さんから聞きました」

『ウオオオォォイ！』

ずびし。

まっくろルビーアイにゃんこと、黒髪の少年がふたりして（正確には一人と一匹だが）、裏手でツッコミを入れる。

「フラグって折れるもんなの？　いや、折れるものなのかもしれないけどさあ！」

それって他人が狙って、故意にできるもんじゃなくね？

現代人で、ギャルゲにも興味がある才人が思わず追撃を入れれば。

「てかその話だと、マコトってフラグ見えてんの!?　そしてわかるカンノンもフラグ察知スキル持ち!?」

どういう能力かと小一時間（以下略）。

リドルも漫才コンビよろしくの呼吸で、さらにツッコむというノリの良さ。

このメンバーの中でアーチャーだけが「フラグ……？」とけげんな顔をしているが、当の本人が一級フラグ建築士である。自覚なしの。

「他にも先輩は、伯言や霜夏、三蔵なんかのフラグもバッキバキに折っているそうです。

そこからついた異名が『フラグクラッシャー真言』」

「新番組のアニメタイトルみたいだね」

ぽつりとアリシアが呟くと。

「嫌過ぎる、そんな新番組」

と、またしても黒猫姿のリドルが相槌を打った。
「そして、そんな先輩が言っていたのです」
とつとつとした口調を崩さないソプラノで、続ける七季。
「『他のやつのフラグは基本、折ったらそのままなんだけど、ナナちゃんのは、折っても折ってもあとから生えてくるんだよなー』って」
『ウオオォォイ！』
再度、リドルと才人のツッコミが虚空に上がったのは、いうまでもない。

「んでまあ、何が言いたかったのかというと。こんなの行きたくないでござる」
こんなフラグはノーサンキュー。
ぺいっ。
七季がポイ投げしたのは、上等そうな紋章入りの便箋であった。
「こら。温室を散らかすんじゃない」
すかさず、白い髪の偉丈夫がそれをキャッチし、目を通すが――
「……マスターの言いたいことが、何となくわかった気がする」
空いたカップに紅茶を注いだティーポットを下ろし、弓兵の騎士は、鋭い目を伏せるや、深々とためいきをついた。
「何だコレ？」
ハルケギニアの文字に慣れていない才人が、テーブルの上に置かれた手紙を、不思議そうにのぞきこんでは首をかしげるいっぽうで。
「なるほど。ヴァリエール家へのご招待、ね」
それは気が乗らないでしょうね。
親切なプレシアが、その手紙を要約して、黒髪の少年へと伝えてやる。
「行くんですか？」

群青色の目を向けるリニスの問いかけに、パンツルックの少女は「まさか」と一言の元に切り捨てた。
「どこにメリットがある？　てーちょーに、てーちょーに、おことわり、申し上げるに決まってるだろ？」
にっこり笑って、わざわざ強調するあたりに、七季の心情が見て取れた。
すなわち――「冗談じゃない」。

#１９６　始まらない物語ー御旗の行く末ー（後書き）

あとがき
＞短いですが。
常識的に考えたら、行く気が起こるか？という。
オリ主に対するルイズの態度で、「おうちに遊びにいらっしゃい」と言われて、疑わない方がどうかしていると思います。

あと、小ネタのフラグについて。
神格・霊格が高くなると、見えるらしい、という設定です（笑）。
しかし先輩レベルでも、どのフラグが、誰の、どんなフラグかまでは判別が不可能。
よって、手当たり次第に見つけた端から折っていく、という。
帝都心霊庁では、わりと有名な七不思議だったりします（待てい）。

※フラグクラッシャー（出典／ニコニコ大百科）
：立ったと思われるフラグを平気で無視するキャラがいた場合、フラグクラッシャーと呼ばれる。
……が、作中の場合は、フラグをぶっ壊す、という、わりとそのまんまの意味で使っています。

#197　始まらない物語ー惨状ー

ふたたび、話の舞台はアルビオンへと移る。
王都ロンディニウムの王城、ハヴィランド宮殿。
緊迫した情勢ではあるが、いまだ王はその城に留まっていた。もちろん、その息子であるウェールズ王子も軍議に加えられている。
そのさなか。
虚空に出現した奇妙な裂け目――ジッパーである――から、青い髪の美丈夫と、栗毛の美少女の二人組が現れた。
思わず将軍たちが腰の剣に手を奔らせるのと、ジョゼフが声を上げるのとは同時だった。
「久しいな、アルビオン王よ。まだ俺の顔は覚えているかな？」
「ガ、ガリアの！　何故ここに！？
抜くでないっ、この方はガリア王、ジョゼフ一世ぞ！」
ざわめきの中に隠しようもない驚きが混じる。
腰に手をやった将軍たちは、半信半疑ながらも、しぶしぶと元の位置に手を戻した。
「して……何用ですかな。このようなときに、わずか一人の従者でおいでとは」
「誰がコレの従者よ」
ぎろり。
神々しささえ感じられる美少女が、琥珀の瞳でジェームズ一世をねめつけた。
「おっと。止せ止せ、彼女の不興を買わぬ方が身のためだぞ、ご一同。マコトは、俺でも敵わぬ、理不尽の権化だ」
「褒めてないよ、それ」
「褒めてないからな」

飄々としたやりとりに、アルビオンのものたちは、こぞって奇妙な顔をする。
大国ガリアの王と、対等以上にやりとりする、この美少女は、いったい誰なのかと。
「まあ、面倒な話ははしょるぞ。もったいつけた言い回しもなしだ。ジェームズ、お前の息子を、貰い受けにきた」

「何を馬鹿なことを！」
王族の会話に、思わず怒鳴ったのは、将軍の中でも、とりわけ愛国心の強い赤毛の男だった。
きっちりと軍服を着こなした壮年の体は、いまもって鍛え抜かれた頑健さをにじませている。
「黙れ」
その男を制したのは、らしくないことに、巫女服姿の真言だった。
小柄な異邦の少女に、琥珀の目を向けられたとたん、将軍の舌が凍りついて動かなくなる。
あれだけの短い言葉で呪（しゅ）を飛ばした真言に、ないしんジョゼフは舌を巻く。
――まったく。だから敵わんのだ。
「この戦いが不利なことくらい、とうに気づいているだろう、ジェームズ。
お前が王弟モード大公を、処断した理由は問わん。しかしそれが貴族の不審を招いたことは確かだな。結果がこの内乱だ。
似たようなことをしている俺が、言えた義理ではないかもしれんが――俺の場合は、いちおう後処理したからな。理由も明かした。
シャルルは俺を倒そうとしたのだ。
しかし、ジェームズ、お前の理由は明かされぬまま。それでは、いつ第二のモード大公になるのか、処刑されるのかと、貴族が怯え

るもの道理。
貴族をまとめられない王は、王たりえん」
元はとえば、自分がレコンキスタの火種を煽ったのを棚に上げて、ジョゼフはしゃあしゃあと真面目な面持ちで言葉を紡ぐ。
「それは……」
青い髪の美丈夫から、一気に並べ立てられて、しかしジェームズ一世は、薄い唇を噛んだ。同じ王の立場だからこそ、その言葉が突き刺さる。
しかし明かせるはずもない。弟であるモード大公は、忌むべきエルフと通じ、子供まで設けたのだ。
人の口に戸は立てられない。
エルフは人間の敵としてあつかわれている。いずれ民の知るところとなれば、モード大公はエルフを養うための金を、税金を使っていると言われることになっただろう。
それは王弟への不信を招き、ひいては王族、王への不信となる。
せめて追放したことにして、どこぞに移せば良かったものを――
モード大公は、人望はあっても、政治には向かない人物だったのだ。
エルフ親子の追放を拒んだ王弟など、処断するより他になかった。
たとえ身代わりを使って生き残らせたとしても、権力のある立場にあって、隠蔽も政治的判断もできなかった男に、エルフ親子を匿いながら暮らせるとは思えなかった。
あれは苦しい中の、「王としての」判断だった。
「だからこそよ。
ジェームズ、お前の血を引く息子を、新たな王にする。アルビオンとガリアを継ぐ王に」
『――は？』
真言とジョゼフ以外の、その場の人間が、残らずポカンと口を開けた。
「我が娘、イザベラの婿にする。
内乱を起こした反乱軍は、簒奪の徒として討てるだろう。何、世

継ぎの故国を取り戻すためとあらば、ガリアの軍を動かすのもやぶさかではない」

「で、ではこの戦いに助勢していただけると！？」

「それは無理だな」

きっぱりと、冷酷なほどに強く、ジョゼフが即答した。

「間に合わぬ。お前の息子を、ウェールズ王子を、ガリアに迎え、それを周知し、うちの家臣に根回しするだけの手間がいる。

大義名分を作り上げるだけの手間がな。

急いで軍を編成して動かしても、アルビオンにたどり着くころには、この戦いは終わっているだろうよ」

――たしか、アンドバリの指輪とやらを、レコンキスタに回していたはずだからな。

胸のうちだけで、こっそりとひとりごちるジョゼフ。

水の精霊の力を秘めた指輪は、死者すら操ることができる。

貴族連合レコン・キスタの総司令官、オリヴァー＝クロムウェルが、「虚無」を自称するためのよりどころだ。

死体を相手に戦う兵士の士気が、どれだけ下がるかは、見なくてもわかる。

何より。

「臣下を抑え切れなかった、報いは受けねばなるまい？」

王として。

青い双眸から向けられた言葉は、刃のようにジェームズ一世の胸をえぐった。

「ガリア王……いや、ジョゼフ……」

こうして自分についてくれた貴族たち、「王党派」もいるが、それでも「貴族派」の方が多いのが実情である。

「古い時代に幕を下ろせ、ジェームズ。俺は、お前の息子と共に、ハルケギニアを統一する」

「お話は、終わりですか。ならばお引取り願いたい！」
そう叫んだのは、話の渦中にあったウェールズ王子そのひとだった。
碧眼に憤りの光を灯したアルビオンの貴公子は、ガリア王の申し出を我慢ならんとばかりに、一蹴するつもりのようだったが。
「いや……万が一のことは、考えておかねば、な」
その申し出を、呑もう。
かぶりを振るジェームズ一世に、臣下たちアルビオン貴族から次々と声が上がる。
「王！」
「そんな」
「お考え直しを！」
「くどい」
低い、しかし威厳あふれる王の声で、男は臣下と息子を制した。
「ウェールズ。これは二度とない機会なのだ。
わしは……若いお前には、生き残って欲しいと思っていた。しかし、このアルビオンでは、逃げる場所はどこにもない。
縁（ゆかり）あるトリステインは……言ってはなんだが、小国だ。やつらに対抗してまで、お前を受け入れる可能性は低い。
しかしガリアは違う。その王みずからが、お前を受け入れると言ったのだ。しかもアルビオンとガリアの世継ぎとして！
これ以上の話があろうか」
「父上っ」
青い目を見開き、抗弁しようとする王子を遮り、ジェームズ一世は、息子と同じ色の瞳で、ガリアの王を見据えた。
「あくまでわしは、勝つ気でおります。
しかし、万が一……万が一のときは、我が息子を、我が国の民を、お願いできますかな」
強い光を宿してジョゼフを目を射抜くアルビオン王に、青い髪の

美丈夫は、しっかりと頷いた。
「ガリアの王として、この名にかけて誓おう。この場で書類を作り、調印しても良い」
「誰かある！」
部屋に施されていた防音の魔法を解いて、部屋の外に声をかけるジェームズ一世。
「父上！
私は……私は王族として、最後まで共に戦いを」
「聞き分けよ、ウェールズ。お前がトリステイン王女と親しいのは知っている。
しかし、これは王族の役目なのだ、万が一、我らが倒れた場合、アルビオン王家に流れる、始祖の血はどうなる。民の暮らしはどうなるのだ」
金髪の美青年が、はっと息を呑む。
「きゃつら反乱軍の首魁は、『虚無の使い手』を自称する、ロマリアの坊主だった人間と聞く。
そんな、ただでさえ金を巻き上げる人間の、うしろだてを得たものたちが、いったいどんな行動に出るのか……わしには気がかりでならんよ」
苦々しげに吐き出すアルビオン王の声には、寄付を催促するロマリアの人間の記憶が新しい。
ブリミルという英雄への尊敬はあっても、その始祖を掲げる宗教者たちには疑念を抱かざるを得ない――ハルケギニアの宗教は、その実態が乖離していた。

＜話まだ終わんないの？＞
＜まあ待て。建前というものが必要なのだ。王族というのはな＞
いっぽう途中から空気ぎみの巫女さんは、飽きてきたようで、こ

っそり念話でジョゼフに話しかけていたりする。蚊帳の外ぎみなのだから、無理もない。

――ん？

そのときだった。

どっごおおおおぉん！

凄まじい轟音と共に、船が突っ込んだハヴィランド宮殿の横っ腹には、もののみごとな大穴が開いた。

「ジョゼフさまあああああああ！！」

がちこーん。

空飛ぶ国のお城に大穴を開けた、黒髪の美女は、わき目も振らず、ジョゼフまっしぐら。

青い髪の美丈夫に抱きついた「虚無の使い魔」がひとり、ミョズニトニルンは、そのナイスバディを惜しみなく擦りつけて、「お探し申し上げましたっ」ときゅんきゅん子犬ばりに懐きまくったのであった。

「……ちょっぴり考え直しちゃおっかな、わし」

そんな呟きを、アルビオン王、ジェームズ一世がこぼしたのは、また別の話である。

#197　始まらない物語ー惨状ー（後書き）

あとがき

＞シェフィ姉さんは出オチ、最強（言いたいことはそれだけか）。

ちなみに王党派の人々が、ジョゼフを人質にして「ガリアの援軍を～」と言い出さないのは、貴族派とガリア国、両方を敵に回すだけだからです。

まあ「加速」持ちで、なおかつ念能力者のジョゼフに勝てる人間、なんてのは、そうそういないわけですが。

ジョゼフは、早いとこハルケギニア統一して、娘夫婦に統治まる投げして引退する気まんまん。

戦争収めないと、チートな巫女さんに、もれなくフルボッコにされてしまうので、わりと必死です。

アンリエッタ嫁にしても、トリステインじゃ旨味も何もないですからね。

#１９８　始まらない物語ー甘くて、赤いー

「恐かったんやー！　あのねーちゃんに脅されて仕方なかったんやー！」

いちおう、王城を破壊したかどで、牢へと連行されていく、船のクルー。

いっぽうで王党派の皆さんは、ちゃっかりと、船の積荷をせしめていらっしゃる。

「おお、これは火の秘薬、硫黄ですぞ！」

「何と！」

「これは良い！」

ちなみにジョゼフ王はというと、正式な婚姻の書類を用意するにあたって、アルビオン側にも準備があるだろうからと、急遽、用意された部屋に、おのが使い魔と消えていった。

「会いたかったぞ、余のミューズよ」

「そんな、ジョゼフさま……嬉しい……」

これが彼らの会話の一部である。お察しいただきたい。

そして真言はといえば。

「んじゃ、ちょっくら出かけてくるわ」

ロマリアまで。

部屋に入るジョゼフへと、ちゃっと手を上げるや、カルいノリであいさつすると、その両手に赤いものを携えて、ふたたびジッパーの中へと消えていった。

――うむ。やはり、離れていた使い魔と、肉体的なつながりで安

心感を与えてやるのは正解のようだな。
どこぞのハンター世界で、七季主従がやらかしたことを実践した、青い髪の王様は、そんな間違った対処法で、ヤンデレ化寸前のシェフィールドを、まんまと丸め込んでいたとか、いないとか。
「ミューズ。すまなんだな。お前には苦労をかけた。だが、これからも苦労をかけることになると思う。この俺に、まだ付き合ってくれるか？」
男とソファに並んで寄り添う、黒髪の美女は、、ジョゼフからかけられた言葉に、感極まって涙を流した。少し病的なほどに白い頬が、一筋の涙でつうっと濡れる。
「そんな……ジョゼフさま。もったいないお言葉です。てっきり私を、お厭いになったのかと……勘違いだったのですね。私は、ジョゼフさまのお傍にいても良いのですね？　このシェフィールド、命尽きるまで、あなたにお仕えしとうございます……！」
きらきらと黒く濡れた目をかがやかせる、美しい使い魔に、ジョゼフはゆっくりと頷いた。
――そうか、これが主従の絆というものか。
ジョゼフは　てんねん　をみにつけた　。
「うむ。ミューズよ。俺は、このハルケギニアを統一するぞ。そして国が安定した暁には、イザベラとウェールズの夫婦に、後を任せ、悠々自適な暮らしを送るのだ！」
ぐっと握りこぶしを作って力説する、四十路のはずの美形なおっさんが一人。
「ジョ、ジョゼフさま……？　少し、お変わりになりました？」
切れ長の目を、きょとんと丸くするナイスバディの黒髪美女に、青い髪の男はちょっと首をかしげる。
いい年したおっさんが、そんなことをしてもアレなのだが、シェフィールドには効果抜群である。

「む？　こんな俺は嫌いか？」
ずっきゅん。
「いいえ！」
即答だった。
ぐっと拳を握り締めるシェフィールドは、むしろ「ヨッシャアア！」のいきおいだ。
「いろいろあってな。おお、あとで俺の手料理も食わせてやろう。これでも、腕前にはちょっとした自信がついてな」
日に焼けた肌で、ニカッと笑うジョゼフの歯は白くまぶしく、使い魔である巨乳美女の胸を、これでもかと狙い撃ちだ。
「はうっ……ジョ、ジョゼフさま……ミューズは幸せにございます……」
もはや、どこぞの海賊女帝もかくやというメロメロっぷり。
「イザベラも不憫な娘よ……せめて、良い婿をあてがってやらねばな」
「何とお優しい……ジョゼフさま」
そんな、ハチミツに砂糖をぶち込んだかのような部屋の空気に、アルビオンのメイドが、ドアの前で困りきって立ち尽くすことになったのは――また別の話である。

そしてロマリアでは。
「おっりゃあああああ！」
「がふっ」
「おロオオオォ」
いきなり現れた栗毛の美少女によって、まっかな料理を口にぶち込まれた、美貌の教皇――聖エイジス三十二世と、その腹心であり、使い魔であるオッドアイの美少年、ジュリオ＝チェザーレ助祭枢機卿が、もんどりうってノックダウンしていたという。

その料理の名は――泰山麻婆。
ガリア王、ジョゼフの手からなる、至高の激辛料理であった。
その後、彼らの姿を見たものは、ロマリアにはいない。
教皇が持っているはずの、始祖の秘宝も、忽然と姿を消していたのである。

#１９８　始まらない物語－甘くて、赤い－（後書き）

あとがき

＞タイトルは、わりとそのまんまです。

どっかの従者さんではありませぬ（笑）。

そして、ガリアの王様は、見習っちゃいかんところを、オリ主から学習してしまいました（待て）。

先輩は暗躍。

暗躍っていうか（以下略）。

#１９９　始まらない物語ー春よ、来いー

七季もジョゼフも、それぞれ場所こそ違えど、あわただしい情勢に半ば翻弄され、半ば波に乗り、といった態であるが――ここで一つ、視点を移して、彼らを取り巻く人間たちにスポットを当ててみよう。

まずは、ガリア王宮、グラン・トロワにて。

王族の特徴である、青くつややかな髪を下ろしたまま、王の娘であるイザベラは、朝の日課に杖を振っていた。

しかし、期待した効果は発動せず――きょうも彼女は、うるわしい顔に不似合いな、仏頂面を貼り付けて、ためいきをつく。

「くそっ！」

練習しても、練習しても、いっこうに上手くはいかない。

けれどイザベラにできるのは、ひたすら継続することだけ。だって彼女の父も、魔法は上手くできなかった。それでもやがて、使えるようにはなったことを、イザベラは知っている。

だからきょうも、青い髪の少女は練習する。ただ愚直に。ひたむきに。

いつかできるその日が来ることを、待っている。

父のように。

無能と蔑まれても。

軽んじられても。

癒えない孤独と、寂しさを抱えて。

それでも顔を上げて生きていくしかないことを、彼女は知ってい

た。

そんなイザベラの行く手に、心優しい伴侶が用意されていることを知るものは――青い髪の男と、神妻の少女のみであった。

ところ変わって、トリステイン魔法学院――その学生である、クルデンホルフ大公国の姫殿下――ベアトリス＝イヴォンヌ＝フォン＝クルデンホルフの部屋にて。

「皆様方、きょうは朗報がありましてよ！

本日のお茶菓子は、ナナキお姉さまが、過日のお礼にと下さった、サー・アーチャーお手製のクックベリーパイと、スティッククラッカーですわっ」

きゃあっと年ごろの少女たちから、華やかな歓声が上がる。

白いクロスをかけられたテーブルの上には、色あざやかな薔薇が描かれたティーセットに、湯気を上げる紅茶の琥珀色。

それからティーセットとそろいの絵皿に銀色のフォークとスプーンが添えられている。

まだワゴンに乗っているのは、クックベリーパイの鎮座した皿と、スティック状にこんがり焼き上げられたクラッカーの突っ込まれている長めのグラスだ。

金髪ツインテールの少女――ベアトリスは、ふふんと誇らしげに胸を張って、黒髪の特徴的なメイドに、パイを切り分けるように命じた。

「シエスタ、でしたかしら？

あなたも自分の分を切り分けたら、席にお着きなさい。特別に許します」

だって同士ですもの。

「ありがとうございます、ミス・クルデンホルフ！」

「さて……」

こほん、と一息ついたベアトリスは、こう高らかに宣言した。
「ここに『双剣の騎士と東方の花を見守る会』定例会を開催しますわ！」

「しかしナナキは、最近とみに色っぽくなってきたと思うのだが……」
いっぽう、こちらは少年とはいえ、男ばかりの集まりである。
ギーシュやマリコルヌなど、クラスメイトの少年たちが一部屋に集まって、お年ごろの男らしく、バカ話に興じている。
その中には、もちろん、異性を話題にすることもあるわけで。
「あー。あの東方の留学生の」
「お前、モンモランシーはどうしたよ」
「黒髪の子だろ？
従者連れてる。数日前とは、何か違うよな」
「ふだんの仏頂面は、前と変わんないのに、こう……何というか、雰囲気やわらかくなったというか」
「妙に後姿がそそる気がする。腰のあたりが、こう」
虚空にバイオリンのようなラインを描く手つきでジェスチャーする少年がいるかと思えば。
「前は隙なんてありません！って感じだったのにな。ときどき妙に無防備な感じが、このまま押し倒したらイケるんじゃね？と思わないでもない」
あの乳は犯罪だと思う。
真顔で、両手をわきわきさせる少年がいたり。
「ためいきが妙にエロくて、ちょっと授業中におっきした」
「お前らなー。それアーチャーさんに聞かれたら、なますにされんぞ。自重しろ」
わかんないでもないけど。

その中には、七季たちと同じく、東方から来たとわれている黒髪の少年――才人の姿もあったりした。

七季の従者を手本とする才人は、少年にしてはまめまめしく、紅茶を入れてメンバーに配ったりしている。

「『ナマス』って何だい？」

聞き慣れない単語に、ギーシュがけげんな面持ちをすると、黒髪の少年は「ああ」と気づいたように頷いて、ティーポットをテーブルに置いた。

「そっか。こっちにはないか……切り刻まれるぞ、ってこと。それもスライス……いや、細切りか？」

どっちにしろ十分ヤバいから。

「あのひと、いま気が立ってるんだよ。七季ちゃんに関することに限り、過保護に輪がかかってるからな。

自業自得と言えないわけでもないんだけど……そういうことだから、うかつに野郎がちょっかいかけると、ナニをちょん切られても、文句は言えないと思っとけ」

『ひぃ』

その場に居合わせた少年たちは、残らず股間を押さえて縮こまった。

才人に悪気はない。

だってアーチャーは、猫のリドルにすら威嚇するのである。まあ中身は少年なのだが（見ためだけ）。

七季を初めて抱いた日から、数日はたっているというのに、それでもやっぱり白い髪の偉丈夫は、黒衣の似合うポニーテールの少女が傍にいないと、心配顔で。

「ということは……何かあったのかいっ！？」

青い目を爛々とかがやかせるのはギーシュだ。

「まさか下克上？」

おおおっ。

「サー・アーチャーとナナキの身長差ってかなりあるよね」

ちょっと犯罪っぽい。
「騎士が、仕える女主人を押し倒して……やっべ、燃える」
「いやいや逆に踏まれてもハアハア」
『さすがマリコルヌ』
異口同音で、ちょっとアブノーマルな気のある友人にツッコむ少年たち。
なんせ、お年ごろである。話はまだまだ盛り上がる。

「……ということで、才人さんにお聞きした話だと、ミス・ナナチと、サー・アーチャーは、おはようのキスをする間柄なのだそうですっ」
『まあああああ！』
こちらは、ベアトリスの部屋で開かされているお茶会である。
シエスタの話に、碧眼をきらめかせて身悶えている金髪の少女がひとり。
「ラブですわっ！」
はあはあと息も荒いベアトリスに、しかし同調するように頷く少女たちも、めいめい顔が赤い。
引き続き、報告を――もとい、同士にネタを提供するシエスタ。
「いちおう、ミス・テスタロッサのご家族とも、ミス・ナナチはキス……ええ、あいさつですよ？……するそうなのですけれど……。
でも、才人さんは、おはようのキスはしてもらえないそうですし、あの中で、才人さんを除けば、サー・アーチャーだけが、男性でしょう？」
ちょっと残念そうだった才人さんは、あとでお仕置きなのですっ。
うっかり本音がダダ洩れている黒髪メイド少女の言葉に、しかし『双剣の騎士と東方の花を見守る会』のメンバーである女子生徒たちは、きゃいきゃいはしゃぐ。

「キスってどんな風に？」
「抱き上げて？　それともかがみこんでかしら？」
「お二人は、かなり身長差があるはずですものね」
身長差萌え！
「まさか起き抜けのところを、ベッドで……？」
きゃーっｖ
女性の想像力の逞しさは、ときに男性を凌駕するものである。
「そういえば、ミス・ツェルプストーが、サー・アーチャーにご執心のようですわ。先日、彼をお誘いしているのを見かけましたの」
ケティが、肩口までかかる焦茶の髪を揺らしながら、新たな名前を口にした。
「でも、サー・アーチャーは、礼儀正しくお断りになって、すぐにミス・ナナチの元へ早足で戻られたのですわ」
「まあ……胸のサイズは、ゲルマニアのツェルプストーもなかなかでしょうけれど……あれに心を奪われないなんて、何て紳士でいらっしゃるのかしら！」
ベアトリスは、自分のスレンダーな体形に、ひそかなコンプレックスを抱いている。金の髪をツインテールに結った少女は、そのツリ目に、ちょっぴり憤りと嫉妬をちりばめながら、頬を染めてアーチャーを讃えた。
「お優しい方ですものね」
ケティもこくこく頷いて、すみれ色の目を潤ませる。
「ギーシュさまに見捨てられて……泣いていた私を、慰めてくださったときの、低いお声、忘れられませんわ……」
ほうっと甘いためいきをつく、焦茶の髪の少女は、切なそうにその胸を押さえた。
「あら」
「わたくしだって。ヴァリエールの三女が、魔法を爆発させているところに運悪く……それで、足を捻ってしまったところを、サー・アーチャーに助けていただいたの。

抱き上げられたときの、腕の力強さと、胸の逞しさ、あれこそが殿方というものなのですわね」

ベアトリスも、通りすがりのアーチャーに助けられたことがある記憶を反芻して、幸せそうに目を伏せた。

他にも、「私も」「私も」と声が続く。

シエスタも、水汲みを毎朝アーチャーたちに手伝ってもらっているし、水仕事であかぎれのできた手に、痛みをこらえているところを、塗り薬をもらったりしてときめいたことだってあるのだ。

けれど平民であるシエスタは、貴族の娘に比べてリアリストでもあるので、みずから恋の芽を摘み取った。身分差もさることながら、どう考えても、七季とアーチャーの間に割り込めるとは思わなかったからだ。

「でも、サー・アーチャーは、お姉さま一筋……見ていれば、わかりますわ。

あの方は、ずっとお姉さまを見ていらっしゃるし、そのお傍にいることが、幸せなんだって」

灰藤色の瞳は、七季を見つめるとき、いつだって優しい。従者と言葉を交わし、抱きしめる黒髪の少女の声音や、表情も、また。

ふたりが一緒にいるときの、そのまなざしや雰囲気が、彼女たちはいちばん好きなのだ。

ベアトリスもケティも、アーチャーに恋した他の少女たちも——シエスタと同じ答えに行き着いた。

ぶっちゃけ、あのラブオーラだだ漏れの主従に敵う気がしません。

「私たちにできるのは、サー・アーチャーと、お姉さまの幸せを祈ることだけ……」

きゅっと手両手を握り締めて、うっとり嘆息するベアトリス。ツンデレっぽい、キツめの美貌には、どことなく恋する乙女特有の、熱っぽさがにじんでいる。

ようするに、トリステイン魔法学院では、もはや七季主従は、とっくに公認カップルあつかいになっていた。

ちなみにキュルケは、それを承知でアタックしている猛者である。とどのつまり、アーチャーと黒髪の異邦人娘の、仲睦まじさを知らないのは、部外者のアンリエッタやエレオノールくらいのもの、というわけだ。

「……ところで、お二人の仲は、どこまで進んでいらっしゃるのかしら？」

ただまあ、一部の生徒たちには、その仲の良さをネタに、かなり妄想で盛り上がって楽しんでいるものがいることも事実であった。人の趣味はそれぞれである。

#１９９　始まらない物語ー春よ、来いー（後書き）

あとがき

＞サブタイトルは、松任谷由実の同名曲から。

じつはアーチャーが、あちこちフラグを立てまくっているというネタと、それでも主従の仲が良すぎて、半ばあきらめの境地で見守っているものが大半、という話。

できあがっている（ように見える）カップルに、割り込むのは、かなりの勇気が必要。

ベアトリスはファンクラブの元締めです。

男子は男子で、下ネタで盛り上がります（をい）。

彼らから見て、アーチャーは大人ですから。やったのかどうかは、気になるところだと思うんだ。

ついでに、同い年くらいなので、イザベラも突っ込んでみた。

もうちょっとしたら春が来る、と思いたい。

※スティククラッカー

：棒状のクラッカー。食べやすい。

#２００　始まらない物語－信じるもの－

「ちーっす。たっだいまー。あ、話はまとまった？」
ひょっこり顔出す、栗毛の美貌。
アルビオンの王宮、ハヴィランド宮殿に姿を現した、緋袴もあざやかな巫女姫は、見慣れないオマケをぶら下ていた。
そのたおやかな片手の、どこに力が秘められているのだろうか。
ヴィットーリオの名を持つ、ロマリア教皇、聖エイジス三十二世と、その腹心であるジュリオの美形ふたりを襟首だけで引きずる光景は、さすがにガリア王とて唖然とする。
「お、おお……」
ジョゼフは、その青い目を真言に向けたまま、こくこく頷いた。
ウェールズ王子とイザベラの婚姻について、正式にアルビオンとガリア間での契約書類が交わされた。
そして王子がアルビオンの世継ぎたる証として、始祖の秘宝である「風のオルゴール」と「風のルビー」も共に、ガリアへと渡るのだ。
いわば、「嫁入り道具」ならぬ、「婿入り道具」である。
いまはウェールズの荷造りをしている最中で、ジョゼフは、隣に黒髪のナイスバディ美女をくっつけた状態で、賓客用の部屋で待たされていた。
戦時中とはいえ、さすが王宮。豪華かつ、趣味のいい調度品が並んでいる。
「ジョゼフさま……こちらは？」
けげんな面持ちで、青い髪の男を振り返る美女。
「や。初めまして。
ジョゼフの師匠の一人で、マコト＝サザナミです。

こっちの荷物は、ジョゼフの手料理を食べた連中でね、あまりの衝撃に失神してるとこ。いや～、さすがだねっ！」

にこにこしながら真言が告げたセリフに、カッとシェフィールドは紫暗の目を開眼した。

「わ、私を差し置いて、ジョゼフさまの手料理を……ッ！」

少女の正体を詮索するより先に、嫉妬の対象を目の前にぶら下げられた愛の奴隷――もとい、使い魔は、すぐさまロマリアの聖職者ふたりに襲いかかった。

ジョゼフが止める暇も、あればこそ。

もっとも魔法が使えずに「無能王」とさんざん陰口を叩かれた彼は、ブリミルという存在じたいに懐疑的で、半ば厭わしさすら覚えている身。止めるはずもなかったが。

どすぼかばきん。

鈍い音が響く貴賓室で、異邦の美少女は、優雅に王宮の紅茶を飲んでいた。

さて。

ところ変わって、こちらはトリステイン魔法学院の――七季たちが、お茶会を開いているセカンドハウス「サロン」。

その隣に併設されたガラス張りの温室である。

「行きたくないのはわかったが……断る理由を、どうするつもりだね？」

まさか「行きたくありません」とバカ正直に書くわけにもいくまい。

イスに腰かけ、腕を組むアーチャーは、その褐色の相貌にしわを刻む。

「病欠で」

「水のメイジがいるのにかね？」

具体的には、キンダイチ先生とか。
「あう」
手を上げて発言する七季の言葉に、白い髪の偉丈夫から、容赦ないツッコミが飛んできた。
へにょりと眉尻を下げる少女の手を、妹分であるアリシアが、小さな手で励ますように、きゅっと握ってくる。
「おねーちゃん」
「うわーん。アリシア～、アーチャーがいじめる～」
さっぱり本気でないのは丸わかりだが、可愛いツインテール幼女に癒されたかったのか、七季は妹分の小柄な体をぎゅっと抱きこんで、すりすり頬ずりした。当のアリシアは嬉しそうに、よしよし姉貴分の背中を撫でている。
大好きな七季にかまわれて、ご機嫌らしい。黒衣の少女のふくよかな胸に埋まるのも気持ちよく、「ママとは、またちょっと違うなぁ」と、のんきにアレな感想を抱いていたり。
「誰がいじめだ、誰が」
ぺむり。
たわごとをほざく少女の、まっくろな頭のてっぺんに、かるく男の手のひらが乗る。
「逃げちゃダメ？」
こてん、とアリシアを抱きしめたままで首をかしげて見上げる少女の、まっくろな瞳は小動物のようで、ちょっとだけ負けてやりたくなるアーチャーである。
「……しかし、下手な断り文句だと、向こうから迎えが来る可能性もあるぞ。ヴァリエールは大貴族なのだろう？」
「むぅ」
七季まで、従者といっしょになって、眉間にしわをよせる光景に、不謹慎とはわかっていても、笑みを誘われる才人。こういうところは、まったくふつうの女の子でしかない。
それはプレシアやリニスも同じようで、「あらあら」「困りまし

たねえ」と言いつつも、表情はやわらかい。
群青色の双眸が、やさしく和んで、カフェオレ色の三角ネコミミもぴくぴく動きながら、リニスのご機嫌を示していた。
こういう、何気ない時間がいちばん幸せなのよね、とプレシアもルビーアイを細めて、しみじみと呟く。
「じゃあさ、いっそ神様を理由にしちゃえばどーよ？」
『ん？』
「『方違え』だっけ？
縁起の悪い方に行っちゃダメってのが、昔の習慣にあったじゃん。古典に出てくるやつ」
「東方」の風習って言い張っちゃえば？
言い出した黒髪の少年に、まっくろにゃんこがツッコミを入れた。
「あれは、縁起が悪い方角だと困るから、別方向に行って、目的地に向かうってヤツだけどね」
「どっちにしろ、あのルイズって子の実家が不吉そーなんだろ？悪い方角って言い張ればいいんじゃね？」
向こうは、こっちの風習なんて知らないんだし。
才人も、ルイズの印象が印象だけに、わりとひどい言い草である。
「よし、それで行こう」
しかし、言い訳がないのとあるのとでは、ある方が断然まし。
七季の決定で、けっきょく才人のアイデアが採用されたのであった。

＃２００　始まらない物語ー信じるものー（後書き）

あとがき

＞記念すべき２００話なのに、これでもかとあっさり風味で申し訳ない。

ゼロ魔の世界って、何気に「仮病」が使いにくいという。

ロマリア組は、シェフィ姉さんの追及をかわすための、尊い犠牲になりました（合掌）。

次回は２００話突破記念モノです。例によってカオス。

※方違え（かたたがえ）

：陰陽道に基づいて平安時代以降に行われていた風習のひとつ。方忌み（かたいみ）とも言う。

外出や造作、宮中の政、戦の開始などの際、その方角の吉凶を占い、その方角が悪いといったん別の方向に出かけ、目的地の方角が悪い方角にならないようにした。

＃２０１　もう一人の騎士（前書き）

まえがき

＞２００話突破記念ものです。

ネタがはっちゃけているので、ご覚悟を。

#２０１　もう一人の騎士

「……んにゃ？」

ふ、と浮き上がるように目覚めた七季は、降り注ぐ陽射しのまぶしさに、手をかざした。

むせ返るような緑の香りと、水の気配。

「どこだここ」

ぱき、と意識を切り替えるのは、「仕事用」のそれ。

――リドル、いない。アーチャーもか。先輩も……遠いな。少なくとも、ここにはいない。呼んで、『届く』かな？

異常はないか。仲間はどこか。霊的な反応はどうか、と感覚を開いた少女は、すぐ傍にあるものに目を留めて、動きを止めた。

――人外さんがいてはる。

くせのある黒髪は、額が見えるほどに上げられ、ひと房だけが眉間に下りている。目を閉じている相貌は彫刻か何かのように端正だったが、薄い唇と目元を片方だけ飾るホクロが、男の色香を感じさせた。

鞭のようにしなやかな長身痩躯を包む、深緑の衣服は右側がスリーブレスで、襟だけが高い。左腕も半袖で、そちらの肩にはショルダーガードがついている。

何となくアンバランスな軽装なのだが、腰から下を覆う形のブーツと、近くに転がっている赤と黄色の槍から、いちおう武装姿なのだろうということが、うかがえた。

むやみに近づくのは得策ではない、と考えた七季は、その場に座ったまま、声をかける。

逃げ出すに適さない姿勢なのはわかっていたが、相手が寝転がっている以上、見下ろして声をかけるのは、印象が悪いだろうと判断

してのことだ。
「おーい。そこのひとー。もしもーし？」
わけもわからない状況に突き落とされているにしては、緊張感さっぱり皆無のソプラノが、寝転がっている美丈夫に降り注ぐ。
ほどなく男は、ぱち、と切れ長のタレ目を開いた。
――あ、金色だ。
猫みたいだなぁ、となないしんひとりごちる七季は、一緒に暮らしていたはずの山猫娘――リニスを思い出す。彼女の目は、青が深い、群青色だったはずだが。
「……ここは」
「こんにちはー。おにーさんは、ここのひとですかー？」
上半身を起こした男――美青年、と言っていいだろう――へ、七季は小さな手をひらひら振って、気を引いてみる。
「我が主はっ！　聖杯はっ！」
「うおっと」
いきなり詰め寄ってきた人外の美青年に、ぱちぱち黒い目を瞬くと、黒髪の少女は「どーどー」と彼の胸を叩いた。
「びーくーる。てか、お兄さんは言葉通じるんだ。良かった良かった。
んで、ここがどこだかわかりますかね？」
まるで大人しい黒猫のように、小首をかしげて見上げてくる、まっくろずくめの小柄な少女に、青年――ディルムッドは、あらためて、あたりの景色が見たこともないものであることに気づいたのだった。

「七地七季です」
「ランサー……サーヴァント・ランサーだ。取り乱して失礼した」
初めまして。

ぺこり、とお互いに頭を下げて、ちんまい少女と、長身の青年は、泉のほとりで対面していた。
「んーと。とりあえず、話をまとめると。
＊ここことは違う場所にいたはず。
＊どこだここ？
＊お互い面識ないですよね？
ってことで、ファイナルアンサー？」
「あ、ああ」
じっと七季の黒い目で見つめられて、気まずそうにするランサー。
第四次聖杯戦争に召喚された彼は、異性を魅了する魔力――ディルムッドにとっては呪いでしかない――がある、頬のホクロには苦い思い出しかない。
そのため、目の前にいる相手が少女、女と言うだけで、気が重くなってくる。
いっぽう七季は、そんなことは知ったこっちゃないので、さくさく話を進めていく。
「良し。お互いの状況は、大ざっぱに把握しました。
次は、取るべき行動です。
私としては、早く人里にたどり着きたいと思うんですけど、お兄さん――ランサーさんはどうですか？」
「俺、は……」
ディルムッドは、あぐらをかいて座ったまま、金の双眸をしょげたように地面に落とした。
大の男が悄然とうなだれるさまは、まるで主に叱られた犬のようなたたずまいだ。
――聖杯戦争のことを。説明するわけにもいかないだろう。
もはや彼の戦いは終わっている。たしかに自分は、主に自害を命じられたのだから。

けっきょく主君に忠義を尽くしたいという望みは、果たせぬまま。
どんよりと重い空気を漂わせる美青年へ、さっくりと容赦のないソプラノが突き刺さる。
「もしかしてお尋ね者さんですか？
それなら黙っておきますし、森で暮らすってテもあるでしょうけど……でもランサーさん、人外さんですよね？」
「は？」
思いがけない指摘を受けて、ディルムッドは反射的に顔を上げていた。
いま、この少女は何と言った？
「人間と気配違いますし。
あれでも、もうすぐ成仏しちゃうのかな？」
ふわ……
言われるままに、手を見つめれば、かりそめの体を構成するエーテルが、じょじょに指先から解けて、金色の粒子になりつつあった。
それもそのはず。
ここにマスターはおらず、ディルムッドの存在を、世界へと繋ぎとめるくびきもないのだから。
聖杯の存在など、もとより感じるはずもない。
――まだだ。
そのとき、彼の胸にわきおこったのは、痛烈な希求だった。「飢え」とすら言えたかもしれない。
――まだだ！　俺はまだ、何もなしてはいない！

それは、新たな物語の幕開けだった。
ディルムッドが消えてしまうよりも、少し前――たまたま彼らを獲物として襲いかかってきた盗賊の存在によって、ランサーのサーヴァントは、新しい主を得る。

「そいじゃ、まあ……ランサーさんが、理想のご主人様を見つけるまでってことで」
ディルムッドに魔力を供給するためのパスを、キスによって結んだのは、黒髪の少女。
「よろしく頼む」
差し出された手をつかんだのは、双槍の騎士。
「これより我が槍は貴方と共にあり、貴方の運命は俺と共にある。
――ここに、契約は完了した」
黒の瞳と、金の瞳は、落とされた乱世の中を駆け抜けることとなる。
それは、誰も知らない外史の戦い。

そして。

「わ、私が勝ったら……我が軍に下ってもらおう！」
「大人しく婿になりなさい！」
「この袁本初に見初められたのです、光栄に思いなさいな！」

戦うたびに、迫られる女性の数が増えていくことに落ち込むディルムッドを、ぽんぽんとなだめながら慰める七季の姿が、いつしかデフォルトになっていた。
男の金色の目は、心なし涙目である。
「いやぁ……まっさか、三国志の武将が、のきなみ女性の世界だとは……災難だな、ディル」
槍の騎士が、あちこちで女性に迫られるたびに（もちろん戦いだ

けではなく、ほぼ街で暮らすにあたっても日常的に）、助けを受けている小柄な少女に、真名を明かしたのは、一ヶ月もたたないころだった。

存在するための魔力を受け取っているうえに、ことあるごとに窮地を（精神的な意味で）助けられたディルムッドは、恩人である契約者に正体を隠すことを、よしとしなかったためだ。

それ以来、この中華な大陸で「ランサー」と名乗る男は、七季にだけは「ディル」と呼ばれている。

男に「マスター」と呼ばせないのは、いずれ出会う主に取っておけばいい、と少女が言ったからだ。

「私たちは……どっちかというと、相棒みたいなもんだろ？」

ディルムッドにとっての主従関係とは、すなわち上下関係。

七季にしてみれば、できることの少ない彼女と、戦いに長けて、実入りの良い彼に、半ば養われている形なのも、本当は「対等」として良いものか、考えるくらいなのだから。

「しかし七季殿は、どうして俺に……その……ふつうに接してくれるのだ？」

「ん？」

おずおずと、戦場での勇猛さのかけらもなく、どこか不安げに見つめてくる金の目に、ぱちんと夜色の瞳が瞬いた。

七季は、あどけない面輪で、飄々とディルムッドの不安を吹き飛ばす。

「愛のホクロだっけ？

そういう呪いとか、チャーム系の魔法は、ほぼぜんぶレジストするからな、私は」

もとより、霊的な防御力がハンパない彼女である。加えて、「神使（しんし）」である少女の、霊格の高さは上がるいっぽうなので、ディルムッドを悩ませる「愛のホクロ」の効果など、どこ吹く風だ。

そのうえ七季は、ドクター・メフィストの美貌にも動じない免疫がついているとあっては……「輝く顔」と呼ばれるほどの美丈夫で

あっても、外見だけでよろめくようなタチではない。
「だから安心して帰って来い。
この世界なら、きっと、武功を立てて喜んでくれる、ディルにぴったりの君主を見つけられるだろうからさ！」
まるで家族みたいに、気安い笑顔を向けられて、ディルムッドは、主君を求める気持ちとは別に、あたたかいものが胸に込み上げてくるのを感じていた。
――彼女と……七季と出会えたことは、俺にとって僥倖だ。
彼を知るもののない、まったくの異邦の地で――それでも、恋に関係なく、ディルムッドの幸せを願ってくる、そんな存在に、男はあらためて、おのが幸運を感謝するのだった。

やがてディルムッドは、なりゆきから、曹魏の軍に所属することになる。
彼の魔力供給源でもあり、読み書きができることもあって、こまごまとした事務仕事を手伝っていた七季も、いつのまにか文官に取り立てられていた。
同じ屋敷に住む二人の仲を勘ぐるものも多いが――その実態は、きわめてざっくりと色気もない、男同士のような無造作かげんだ。
なにしろ、下手に女性を雇うと、のきなみディルムッドに惚れてしまうため、家人（使用人）は全員、男。
すると今度は、七季の身の回りが心配だというので、槍の騎士がボディーガードも兼ねて、寝室を隣り合わせの続き部屋にしてしまう。
ときどき寝ぼけた少女が、ディルムッドの寝台に転がっていることもしばしばというから、この場に、本来の従者――アーチャーがいたなら、雷を落とすどころの騒ぎではないだろう。
ちなみに七季はというと、ディルムッドが女性不信一歩手前――

いや、だいぶ深刻かもしれない――ことを理解しているので、自分が襲われるとは思っていない。

せいぜい「母性本能をくすぐる、ヘタレなにーちゃん」という認識だから、もっぱら女性関係のトラブルを処理してやりながら、いたって平和に同居していた。

「そいじゃディル。私、ちょっとソソさまに呼ばれてるから、行ってくるなー」

ひらひらと振られる、小さな白い手の持ち主に、緑の黒髪をいただく美貌の騎士は、どことなく複雑な表情で頷く。

見送るまっくろな官服姿は、やわらかな少女の肢体を締め上げて、男装同然に仕立てているのだが、どことなく両性的な色香がにじんで感じられた。

「……ああ」

この魏をまとめる君主、曹操は、ドリルヘアーの金髪に、青い目もあざやかな美少女だが、困った悪癖の持ち主である。

いわく、「女好き」。

それを知ったとき「男でも女でも、そこんとこは変わんないのなー」と七季がのんきに驚いた（？）のは蛇足だろうか。

「春蘭」という真名を持つ、隻眼の女剣士、夏侯惇や、そのイトコであり、弓の名手である「秋蘭」――三国志でいう夏侯淵たちと一緒に、召しだされる先で、異邦の少女が何をされているのか、ディルムッドに量る術はない。

そのためいきの出るような、男の色香を秘める美貌ときたら、思わしげに曇らせるだけで、一幅の絵にもなりそうな按配である。

ディルムッドは、書類を届けにきた官吏たちが顔を赤らめるのも知らぬげに、ないしん悶々とした鬱屈を抱えながら、竹簡に向き合った。

ぐしゃり、とかき上げた黒髪の、ひと房だけ垂れる色合いに、誰かを思い出して、また男は嘆息した。

「……不思議ね」

――ただ撫でられているだけで、こんなに気持ち良いなんて。

「はい？」

膝の上に、「華琳」の真名を持つ少女、曹操の頭を乗せながら、その金髪を、優しく撫でる白い手のひらが、ふと動きを止める。

「続けなさい、烏衣。私は止めて良いとは言っていないわ」

「はい、華琳さま」

曹操の命に、やわらかなソプラノが降ってくる。彼女の持病である頭痛に障らない、優しげな響き。

その手のひらが、曹操の頭を撫ぜるたびに、引いていく痛みが心地よい。

「烏衣」と呼ばれた少女――字の通り、この閨でも黒衣をまとう七季は、まるで我が子をいとしむような手つきで、ひたすら曹魏の主君を撫ぜる。

その手が、曹操に取りつく怨念、悪意、嫉妬といった穢れを祓っていることに気づくものは、この場にはいない。

それこそが「神使」である少女の、異能なのだとは。

「ひゃん！」

「ふふふ……」

まっしろな布が敷き詰められた寝台の上では、曹操と七季、ふたりから少し離れたところで、艶かしい声を上げながら絡み合っている、夏侯の娘たちの姿がある。

七季の手によって、忌々しい頭痛を癒され、愛すべき臣下である、彼女たちの姿を愛でるのが、ここ最近の、曹操の楽しみである。

女性が好きな、この曹魏の主君は、みずからが臣下を愛すること

もたびたびだが、曹操にとっての頭痛は天敵であり、不愉快きわまりないこと。

しかし、異邦の出身であるという、黒髪の少女の膝に頭を預けて、ひとたび撫でられれば、その痛苦は綺麗に吹き飛んでいくのだ。

誰だって、楽しみに際して、気持ちよく万全の状態で臨みたいと思うのがふつうだろう。

なればこそ――七季は「癒し手」して重宝され、その身に魔手がかかることもなく、王たるものの閨に侍ることが許されているのだった。

ナチュラルに順応しているのも、曹操の好みにかなったらしい。

「ところで華琳さま？

ディルのことは……本気で」

「癪だけれど、ね」

妖艶な笑みを浮かべて、美女たちの営みを見つめていた曹操は、思い出したように降ってきたソプラノに、ちょっとだけ頬を染めて、七季のやわらかな下腹に顔を埋めた。照れ隠しである。

――まあ。これ以上の主君はいないよなぁ。

武芸に長け、政にも秀でた軍略家という、文武両道っぷりもさることながら、文化・芸術・料理など、あらゆることにおいて類稀なる才能を持っているときている。尊敬するに値する人物だろう。

そして、ことのほか英傑を好むのは、この世界の曹操も同じである。

卓抜した槍の遣い手であるディルムッドは、とうに彼女から目をつけられている。お気に入りのものは、人だろうと、モノだろうと手に入れる。

それが将であれば、これでもかと優遇するのが、曹操のやり方だった。

ディルムッドが確たる主を得、乱世を共に駆け抜けた相棒と離れる日も近いかと、黒衣の少女は、ただ静かに微笑んで、英雄の頭を撫で続けるのだった。

とうとうディルムッドが曹操に呼び出される日が訪れた。
「ランサー。あなたに我が真名「華琳」を許します」
この世界において、「真名」は、本人が心を許した証として呼ぶことを許した名前であり、本人の許可無く「真名」で呼びかけることは、問答無用で斬られても文句は言えないほどの失礼に当たる。
逆に言えば――これは、曹操からの、最大限の信頼の証なのだ。
「……ッ」
この世界に馴染んでより、決して短くない月日を過ごしたディルムッドは、とっさのことに、言葉が出ない。
しかし。
「烏衣(うい)!?」
驚く黒髪の美女――夏侯惇の叫びにディルムッドが振り向けば、いままで苦楽を共にしてきた契約者は、まるでエーテルが解けたサーヴァントのように、その輪郭を淡くしていく。
「お迎えかな」
ぽつりと呟いた少女の、そのあどけない面輪が、あまりにも嬉しげで、儚くて――男は自覚するよりも先に手を伸ばしていた。
――ああ。
遠ざかって初めてわかるなど、どれだけ自分は愚かだったのかと、美貌の騎士は苦く笑う。
信頼も、名誉も、あたたかさも、帰る場所も。
――求めていたものは、すぐ傍にあったのだ。
やがて必死に手を伸ばしてくるディルムッドの姿を最後に、七季の意識はブラックアウトする。

そこで、目が覚めた。
「……疲れた」
――えらい長い夢だったなぁ。
ないしん「やれやれ」と嘆息して、かぶりを振った七季は、ふと視界に見慣れない色を認めて、首をかしげた。
黄色と赤の棒。
石突以外は、先まで同じ色だが、なんとなく尖って先端が薄くなっているから、槍だろうか。
――アーチャーが出しっぱなしにしたのかな？
几帳面な彼にしては珍しいことである。
ふと、そこで七季は、自分の手を握るものがあることに気づいた。
武器が出しっぱなしだから、それこそアーチャーだろう。
――あれ？　ゆうべは、リドルと一緒に中に入れなかったっけ？
そして――

#２０１　もう一人の騎士（後書き）

あとがき

＞ムダに長くなりました。

以前に読み手さまからいただいた「恋姫にオリ主を突っ込んでみて」というリクと、ついでに別の読み手さまから「四次ランサーに救いを」、というリクを混ぜてみました（待て）。

百合ルートのにゃんにゃん参加は、さすがに傍観だけで。

ここ表だしな！

そしてうっかり引っ張ったよ。

２００話突破、ありがとうございます。

これもひとえに、読み手さまのおかげです！

スーダラなノリの話ですが、どうぞこれからもよろしくお願いします。

#202　始まらない物語ー恋の魔法ー

ただいま「サロン」の一室では、七季と黒髪の青年が仲良く並んで正座姿のまま、絶賛お説教&尋問タイムとあいなっていた。
すがすがしい休日の朝は一転、取調べの様相を呈している。
「で、その男とマスターの関係は？」
「ええと……同居人、でした」
「ほう」
ざっくりとした質問に、同じように端的に答えてしまった黒髪の少女は、ぴくんとはねたアーチャーの眉に「あ、やば」とないしん汗を流す。
「我が主は、ただの同居人ではない。深い恩義がある！」
「ちょ、ディル！　話がややこしくなるから黙ってろ！　ステイ！」
横から、七季が小さくなって尋問されていることに不満を感じたらしい黒髪の美青年は、正座をしたままで、赤い外套をまとう偉丈夫に食ってかかるも、さらに少女からたしなめられて沈黙した。
そのさまは、どこかしつけの行き届いた大型犬のようである。
「えーと。こっちからも確認させてくれ。
私が眠ってから、消えたり何日もたったりしてないんだな？
ふつーにアーチャーとリドル中に入れて、寝て起きただけだよな？」
不審そうな面持ちをしながらも、頷く褐色の肌の従者に、七季は深々とためいきをついて、ことの顛末を手短に話し始めた。
「……つまりマスターは、彼と一緒に、三国志の世界に放り込まれ

て、武将が女ばかりの世界で、厄介ごとを起こす彼の、女性問題を処理しながら暮らしていたと？」

頭痛を覚えるような、突拍子もないストーリーに、鋭い目を閉じたアーチャーは、眉間のしわを揉み解しつつ、復唱した。

「大まかに言えば。いちおう、こっちの私の体が移動してないところを見ると、夢の中でってことになる」

まだ正座を続けている七季は、こちらも真面目な顔でこっくり頷き、「夢などでは……」と言いかけるディルムッドに、「シャラップ」と短く命じる。彼はおとなしく口をつぐんだ。

「七季ちゃんが、あの美形を完全に調教済みの件」

「みごとな犬っぷりだね」

あんまりにもアレな内容に、ディルムッドへ半信半疑ながらもジト眼を向けているサイトが茶々を入れれば、リドルも黒猫姿で追従する。

プレシアとリニスは、面白そうな顔で、七季の話を吟味していたが、アリシアだけは、まだ眠そうに、母親の胸に懐いている。

「幽体離脱か何だか……とりあえず、そのへんの理屈は、あとで先輩とかプレシアとでも話し合ってくれ。私じゃわからん。

そんで、体がこっちに残ったままの私のとこに、どうしてディルがついてきたか、なんだけど……」

はぁ。

いかんせん、七季には、そのへんの記憶がしっかりばっちり残っていた。

「ディル、最後に私が消えるときに手を伸ばしたから……だろうな、十中、八、九」

ここでようやく、少女は夜色の瞳を、乱世の相棒に向ける。

黒髪に金のタレ目と、目元のホクロが印象的な美青年は、きゅっと背筋を伸ばして、七季のまなざしを受け止めた。

彼女の表情は、仕事に対するときのように無愛想で、あどけないながらも硬質な光を双眸に宿していた。

「どうしてまた、あんなことした？
やっとソソさまに、心からの信頼を受け取ったばかりだっただろう。はっきり言って、あれ以上の主はいない。
文武両道、才気煥発、自分にも他人にも厳しいが、家臣を大事にする、料理だって上手な、尊敬に値する軍略家だぞ？」
それを放り出してまで、どうして。
――ようやく、ふさわしい主君に認められたのに。
七季は本当にわからない、という表情で、眉根を寄せていた。
ディルムッドと彼女の間柄は、付き合いの長い、男友達の延長みたいなものだ。
戦うことが、得手ではない七季は、死命を共にした戦友でもないし、もっぱら後方支援や、事務仕事の手伝い、あとは報酬の交渉など、地味な仕事でサポートするのがせいぜい。
もちろん男女の絆など、はなからなく、血の繋がりも、主従関係ですらない。
ディルムッドが存在するための魔力を提供するために、契約はしていたが――言ってしまえば、それだけだ。
お互いの私生活に干渉することは、ディルムッドの女性問題を、彼女が丸く治めるために出張るくらいで、それほど深くは関わっていない。
たまにヤケ酒する男の、酌をしてやったくらいだろうか。ついでにグチもついてきたが。
七季にとっては、幼なじみの少年ふたりや真言、次いで、アーチャーやリドルたちとの付き合いの方が、よっぽど濃密で心を許していることもあって、それを「大したことはない」と思ってしまうのである。
けれど、ディルムッドにとっては、まったく違う。

彼女は――黒衣をまとう異邦の少女は、彼が、ほとんど初めて出会った「恋愛抜きに付き合える女性」であり、ディルムッドに嫉妬を向けない、数少ない「まっとうな付き合いのできる」存在だったのだ。

出会う女性に、かたっぱしから好かれるということは、どういうことか。

それは、裏を返せば、その女性を好いた男から憎まれる、ということなのだ。

そこまでいかなくとも、嫉妬は必ずついてくる。ことにディルムッドは、卓抜した槍の使い手であり、優れた騎士だった。性格も高潔。これで嫉妬するなというのは、よっぽどの人格者でもない限り無理だろう。

それは、彼の生前しかり、第四次聖杯戦争に召喚された折ですら、女性を因果に、主君に厭われることとなった。

「いいや……いいや、七季殿。貴方こそが、我が主。

この、呪いのホクロにも惑わされず、戦うしか能のない俺を導いてくれた――戦場から戻る俺を、ねぎらい、迎えてくれた。

情欲なく、ただ温かく、昼は太陽のごとく行く末を照らし、夜は月のごとく安らぎを与えてもらった。感謝は尽きることを知らず、この恩義に報いるには」

「うん、せっかくなんだけど、ちょっと待とうかディル。うっかり余計なこと言ってるから」

「さてマスター。弁明はあるかね？」

真摯な声で、賢明に言い募るフィオナの騎士を押し止めるも、七季の前に仁王立ちする、もう一人の騎士のプレッシャーがいっそう増した。

「一緒に寝てたのは、しゃーない。私の護衛もあったし、ディルの事情もあったんだ！」

「言ってみたまえ」

鋼色の鷹の目が、正座する少女を見下ろす。

いっぽう、もう一人の使い魔であるリドルも、まっくろな猫しっぽを、びったんびったん床に叩きつけていた。ご立腹である。

才人は完全にディルムッドに敵意を向けていた。「リア充爆発しろ」という低い呟きが恐い。

「あっちの世界での武将は、大半が女だった――よーするに、ディルに夜這いをかける猛者が多くてな」

「……それは」

さすがにアーチャーも絶句した。

かたや、「魔貌」とも呼ばれるほどに、女性を惹きつけてやまない「愛のホクロ」を持つ美青年。

かたや、戦場を駆け抜ける一騎当千の強さを誇る、女武将。

寝込みを襲われれば、さすがのディルムッドとて、分が悪い。

いちおう彼もサーヴァントなのだから、眠る必要はないのかもしれなかったが、魔力の消費を抑えるため、そして人間らしく装うためには、睡眠は必要なことで。

加えて、彼の側で――たとえば隣室などで――眠ることの多い七季に、騒音などで思わぬとばっちりを受けることから、少女と人外の青年は、ふたりして一緒に休むことを選択したのだった。

「やっぱり家でくらい、休ませてやりたかったしなぁ。ディルが、夜這いかけてきた武将を撃退すると、さすがに無音で、とはいかなくてさ。うるさくて、何度、夜中に叩き起こされたことか……。

そりゃ、仕留めるなら、また別かもしんないけど、相手が味方だと、これまた問題で……自軍や友軍の武将を傷つけるのもアレだしさ」

ぶっちゃけ、苦肉の策だったのだ。

「取り押さえて追い返しても、むきになって再戦を挑んでくるし……大変だったんだよ」

黒髪の少女が説明する声を聞いて、ますます美貌の青年はうなだれた。

「七季殿がいなければ……いまごろ、俺は……」

耳に快い、凛々しい声なのに、何故か哀れっぽい響きで、聞くものの耳を打つ。
「モテるのも大変なのねえ」
「それはナナキに懐いちゃいますねえ」
うんうん、とのんきな声を上げる女性陣は、
「ねえアーチャー。そろそろ朝食にしましょう？
アリシアもお腹がすいたみたいだし。ナナキだって、悪気があってこうなったわけではないんだもの」
「空腹では、良い考えも浮かびませんよ。それにナナキも、限界みたいです」
そう取り成して、渋い顔をしている長身の男をなだめにかかる。
リドルは、まだびたびた床をしっぽで叩いていたが、才人の方はというと、壁にかかった時計を見上げて「そういえば」と呟いていた。いつもなら、とっくに朝食を食べ終えている時間なのだ。
へにょんと黒い眉を下げた少女から、「くきゅる～」という、イルカの鳴き声みたいな音が聞こえたのは、そんなタイミングだった。
「あーちゃぁ……」
みゅう、と鳴きながら、物欲しげな潤んだ瞳で見上げてくる小柄な少女に、白い髪の従者がギブアップしたのは、それから程なくのことだった。

が、結果的に、七季が朝食にありつくことはなかった。
着替えを済ませたところで、いきなり押しかけてきた客人がいたからだ。
それは、一週間前に、彼女たちが全員一致した意見の元、招待を断ったヴァリエール家の、公爵夫人と長女だったのだが……
「我が主に、どんなご用件か、承ろう」
応対に出たディルムッドに、金髪のスレンダー美女と、ピンクブ

ロンドのスレンダー美女は一様に心を奪われ、棒立ちになった。
特に公爵夫人であるカリーヌなどは、帯剣に動きやすそうな服と、戦う気見え見えな武装姿であったのだが、けげんそうにそのいでたちを検分するディルムッドの視線に、あわてて首を飾るスカーフや髪型を気にしだした。
「その……一週間前、我が家への招待状を差し上げたのですけれど、こちらの、ミス・ナナチがご都合が悪いというので、あらためてお迎えに上がったのです」
人妻だというのに、高い位置にあるディルムッドの美貌を見上げて、ぽおっと頬を染めるカリーヌに、しかし娘であるエレオノールは文句をつける余裕もない。
ひたすら、目の前の魔貌に見惚れて、あまいためいきと、体の疼きまで覚え始める始末だ。
「……では、しばらくお待ちを」
ぱたん。
この小屋に現れて、まもないディルムッドだが、ここが主と目する七季の居場所である以上、不審者を入れるはずもない。
はたして、鼻先でドアを閉められたカリーヌとエレオノールは、ふたたび男が姿を現すのを、心待ちにしていたが。

「……ということなんだが。しかし、いっぽうのご婦人は、帯剣までして武装しているし、どうも魔術師らしかった。招待を受けるのは、得策ではないと思う」
黒髪の青年は、真面目な顔で、七季にそう報告した。
どんなに女難が付きまとおうと、英霊は英霊である。いわんや、ディルムッドは、聖杯戦争をも駆け抜けた生粋の戦士。
それが、カリーヌたち相手に、警戒しないはずがない。
「あちらさんの招待なら、丁重にお断り、申し上げたはずなんだけ

どねぇ……」
何考えてるんだか。
七季も七季で、ふかーいためいきとともに、憂鬱そうな表情を隠さないのだから、乱世を共に駆け抜けた男が、その意図を悟れないはずもない。
「了解した。お引取り願おう」
ディルムッドの行動は早かった。
彼にとって、ヴァリエール家の権威など知ったことではないし、ただ、黒髪の少女の意向こそが、おのが指針となりうるのだから。
「申し訳ないが、お引取りを」
静かに、しかしきっぱりと告げた、長身の青年に、しかし自分勝手なはずの大貴族の女性たちは、
「あ……」
「は、はい」
『仰る通りに』
そう頷いて、回れ右をした。
相手を見下すことの多い、そして情の強(こわ)い、ヴァリエールの女性たちは、しかし、意外と惚れた相手には従順になってしまうようで。
ふらふらと、熱に浮かされたような足取りで、馬車へと戻っていく、二人の貴婦人を、ディルムッドは一瞥することもなく、ぱたりとふたたびドアを閉ざしたのだった。

「ディル、ぐっじょぶ！」
「汎用人型決戦フラグ兵器か……」
その後、ヴァリエール家の招待に頭を悩ませていた七季には、賞賛の声と共に抱きつかれ、まだ不機嫌な声のリドルには、感嘆のうめきを上げられ。
「使いようか……」

アーチャーには、苦い顔でためいきをつかれつつも。
ディルムッド＝オディナは、めでたく、トリップ巫女さんの従者にと加わることが決まったのだった。

#２０２　始まらない物語ー恋の魔法ー（後書き）

あとがき

＞つーわけで、対ヴァリエール家の切り札、追加（待て）。

あと、プレシアやリニスが、平気な顔でディルムッドを眺めている理由は、次回にでも。

#２０３　始まらない物語ー仮面の男ー

さてさて。

あらためまして、場所は「サロン」のリビングルームである。

木目の美しいテーブルに、七季主従、才人、テスタロッサファミリー、ディルムッドという並びで、めいめいが座っての、エセ家族会議だ。

「まーアレだ。とりあえず、向こうじゃできなかった、ディルの『魔法のホクロ』対策しよーか」

ほっぽっとくと、アーチャー以上にえらいことになるし。

そう言い出した黒髪の少女の、あどけない顔を、みんなして凝視すること、しばし。

「っ……できるのかっ！？」

がばりと七季に詰め寄った青年サーヴァントの、顔の近さが気に入らなかったらしいアーチャーが、無言でディルムッドの黒髪に拳を落とした。

ごんっ。

「自重したまえ」

「アーチャーさんがさりげに黒い件」

「元からじゃない？」

「アーチャー、肌の色もともと黒いもんねー」

才人、リドル、アリシアと、わりかしのんきなツッコミが間に入る。

そんなツッコミトリオ（約一名ボケ）を横に、黒髪ポニーテールの少女が、ぴっと白い指を立てた。

「まずひとつ。フェイスチェンジの魔法をかけます」

ディルムッドの「魔法のホクロ」は、異性を魅了する魔力（呪い）

があるのだが、これは彼を見たときにホクロが目に入るからであって、ようするに「ホクロ」を見えなくしてまえばいい、という七季の考え方だ。

「……そういえば、そんな魔法あったっけ」

変身魔法が使えるリドルが、はたと思い出したように、三角のネコミミをぴるぴる動かす。

ホグワーツ式の魔法は、薬物でも他者に変身できたりするので、あまり彼にとっては印象の深くない魔法だった。

「ハルケギニアの魔法「フェイスチェンジ」は、水と風の合成魔法だろ？

光の屈折を利用したものだから、理論的に、ホクロだけを見えなくすることもできるはず。だから、『魔法のホクロ』のない、ディルの顔にすれば良いんじゃないかと思うんだ」

何も別人の顔にする必要はないだろう、という少女の意見に、アーチャーが「一理ある」と頷く。

「しかし、それだけでは、いささか不安が残るのではないかね？」

「うん。だから、それは前提条件な。

肝心なのは、ここから。フェイスチェンジをかけた上から、さらに顔を隠すものを装備する。具体的にいうと、覆面とか、仮面とか」

ちなみにこのアイデアは、ディルムッドが曹魏に仕えている間にも試したのだが、ふつうの布や木材で作ったものだったからか、戦闘の激しさで外れたり、好奇心たっぷりな同僚や、ゴーイングマイウェイな君主さまに奪われたりと散々だったものだ。

「具体的にいうと、アーチャーに作ってもらおうと思って。

アイデアとしては、聖骸布製の覆面とか。オリハルコン製の仮面とか。魔力を遮断する系の材質でさ」

さすがに乱世のさなかである。そんな材質の加工は、七季だけでは無理だったのだ。

「……ふむ」

褐色の肌の偉丈夫が、「作り手」としての感性を刺激されたのか、

顎をさすりながら、面白そうな顔つきになった。
灰藤色の双眸が、ちらりと少女をうかがう。
「聖骸布の投影品をいじるなら、すぐにでもできるが？」
「あ、じゃあまずはそれで」
そして、アーチャーから手渡された布を、顔に巻きつけたディルムッドの姿は。
『どう見ても赤影です。ありがとうございました』
まっくろにゃんこと黒髪の少年が、異口同音にサブカルねたに突っ走った。
「アカカゲって？」
ひとりネタのわからないアリシアが、可愛らしい顔に疑問符を浮かべて、ウサミミみたいに、ひょこひょこ金色のツインテールを揺らしている。
「あー……『仮面の忍者　赤影』って忍者マンガの主人公だよ」
才人が「さすがにわからなかったか」と苦笑ぎみに答えてやれば、リドルが「顔の上半分を赤い布で隠したら、誰だってああなるよね」とケタケタ笑っている。
ディルムッドの衣装が、しなやかで筋肉質な体にフィットしているものだから、忍者あつかいでも、それほど違和感がないのが、またそれを助長している。
「何だったか……これと似たようなものを、どこかで……」
いっぽう「赤影」状態のディルムッドを凝視して、うんうんうなり始めたのは、錬鉄の英霊だ。
やがて思い当たったのか、アーチャーは、いきなり次のものを投影した。
「ああ、これだ」
エミヤシロウである英霊が取り出だしたるは、蛇の鱗を思わせる組み方をされた、拘束具のような紫の目隠し――皮製のアイマスクが一つ。
それは、「自己封印・暗黒神殿（ブレーカー・ゴルゴーン）」。

強力な幻術結界であると同時に、相手の能力発露を封じる対人宝具であり、第五次聖杯戦争においてのライダー、メデューサの所持していた宝具であった。

本来は、彼女の持つ「石化の魔眼」を封じるためのものだが、これは目元が完全に隠れてしまうので、ディルムッドのホクロも、いわずもがな。

これほど封印にうってつけのものも、ちょっとないと思われた。

「おぉー。さすがアーチャー」

ぱちぱちと小さな手で拍手する七季にならって、幼い妹分も、一緒になって手を打ち合わせる。

とたん、赤い外套の偉丈夫へ、ママさん魔導師の鉄拳が飛んできた。

「がふっ！？」

「子供の前に何てものを！」

……どうやらプレシアは、幅広で紫色のアイマスクを、大人用のアレなシロモノだと勘違いしたらしい。

「プレシア、落ち着いて！　あれ、れっきとした宝具みたいだから！　見た目アレだけど！」

あわてて七季やリニスがダークヘアの美女を羽交い絞めにして、ヒートアップしたママさん魔導師を止めにかかる。

「つ……まさか、そんな勘違いをされるとは……」

アーチャーも予想外である。

イスからずり落ちた、人外の従者は、殴られた頬をさすりながら苦い顔でプレシアたちを見つめた。

「とりあえず、つけてみよーか」

アーチャーが、体を張って出してくれた宝具である。

黒髪の少女はディルムッドの背後に回り、ライダーの宝具である

アイマスクをつけてやった。
結果は。
「ホクロの魔力は、完全に遮断されているようだが……」
解析の魔眼を持つ男が、精悍な面輪をしかめて呟く横で。
「……ディル。『変人』呼ばわりされるのと、それつけてホクロ封じるの、どっちを選ぶ？」
七季が、あどけない顔を、真剣に引き締めてぶつけた問いかけに。
「装備します」
即答するディルムッドがいたという。
ちなみに、はたからは目隠しのように見えるが、ちゃんと装着者の視界は確保できる作りらしい。

「それはそうと、さっきから、そちらのご婦人方は主と同じように、ふつうにふるまっているようだが」
そう言いながら、黒髪の青年は、たいそうけげんな面持ちで、ダークヘアの美女と、カフェオレ色のネコミミ美人を、あらためてうかがった。
頬を染めるわけでも、ディルムッドに熱い視線を向けるわけでもない女性は、彼にとってごくごく珍しいものだ。
「……そういえば」
「そうだな」
「ナナキのパスが通ってるからじゃない？」
思わず顔を見合わせる、アーチャー、七季、そしてリドル。
「ん？」
ふと、にゃんこ姿の使い魔に言われて、七季は大きな黒い目をぱちぱち瞬いた。
「パス？……何故に……」
――あ。

そして、やおら何かに思い当たったらしく「神使（しんし）」の少女は、天上を仰いだ。

「あ～……あれか。この前、プレシアたちと、ちゅーしたからか……」

七季の脳裏によみがえるのは、いつぞやレベルアップの際に言われた、先輩からの言葉だ。

『私がいなくても、とっ捕まえた妖怪でも魔物でも動物でも、お互いの同意さえあれば、キスして眷属にできちゃうから』

――同意って。たしかに同意のうえでキスしたけど。キスが同意ってだけだぞ？

うっかりそれで、簡易的に、プレシアとリニスを眷属化してしまったらしい。アリシアなどは、いわずもがな。スキンシップ過多のシスコンえせ姉妹は、気が向くと、ラブラブちゅっちゅしたりとジャレ合っているのだから。

もちろん、きちんとした契約ではないから、その気になれば、いつでも解除はできる程度のシロモノだが。

同じ主を持つ眷属の間で、呪いの影響など、害のあるものは、まるっと無効化されるらしい。

「……つーわけで。しばらく、眷属のままにしてた方が無難かなと」

手短に明かされた説明に、テスタロッサファミリーは、あっさり頷いた。

「そうね。別に困らないし」

「お姉ちゃんと仲良しー」

「ナナキの従者さんなら、不自由のないように接したいですしねえ」

プレシア、アリシア、リニスは、のほほんと返す。

これで、ディルムッドがふつうに接することのできる人間が、ほんの少しだが、また増えた。

「ところでマスター。どうやって彼の女性問題を処理していたのだね？」

アーチャーの口から飛び出した、しごくもっともな疑問に、まっくろな巫女服をまとった少女は、へろっとのたまった。

「ふつーに『お祓い』した。『呪い』だし」

ようするに、「魔法のホクロ」の呪力に囚われた女性から、その呪力を祓ってやったということだ。

『あ』

「七季ちゃんって、マジで巫女さんなんだったなー」

かぱんと口を開ける、まっくろにゃんこと、弓の騎士の横で、しみじみ思い出すように才人が頷いては、少女の特性を、いまさらながらに再確認していた。

「ただ、敵将の場合だと、私は戦場に出ないんで、『お祓い』のしようがなかったんだけどな」

付け足しのように続けた、童顔トリップ娘の言葉に、その場の誰もが、ディルムッドを見つめて口をそろえた。

『本当に、これ以上ないマスターだな（ね）』

と。

＃２０３　始まらない物語ー仮面の男ー（後書き）

あとがき

＞ダテに「神使（しんし）」はしてねーぜ！というオリ主。

文官やるまでは、ほぼディルムッドの稼ぎで食っていたので、そのお礼代わりに「お祓い」をしてました。ギブアンドテイク。

「赤影」の、布巻いた覆面を見たとき、何かに似てるなー、と思って、ネタにした件。

そしてライダーの仮面は、ふつーに誤解されると思ふ（笑）。

しかし背に腹は帰られない槍兵、装備を選択。

先輩の発言は、「＃１７」から。ずいぶん前の話です。

※「仮面の忍者　赤影」

：横山光輝作の忍者漫画。書き手は原作未読です（をい）。雰囲気でお願いします。

※自己封印・暗黒神殿（ブレーカー・ゴルゴーン）

：強力な幻術結界であると同時に相手の能力発露を封じる対人宝具。（ｗｉｋｉより）

＃２０４　始まらない物語ー君を乗せてー

ガリアとアルビオンの間に、ウェールズ王子とイザベラ姫との婚約が秘密裏に結ばれてから一週間。

アルビオンの王党派軍は、ガリア王ジョゼフから授けられた策を用いて、善戦していた。

だが、レコンキスタ軍の総司令官・クロムウェルの「アンドバリの指輪」によって操られた死兵――本来「死兵」とは、死を覚悟し、死を目的とした兵士のことだが、この場合は字の通り、死んだ兵士だ――は尽きることを知らない。

兵糧を食べない、おぞましいゾンビの群れを兵とするレコンキスタ軍は、資金難に陥っていようと、数の上で有利には違いなく。

生身のクロムウェルや、貴族派の将軍たちは、勝利ののちに手に入るであろう、王城に貯め込まれた宝物を思い描き、傭兵たちの略奪には目をつぶりながら、兵士たちを鼓舞するのだった。

そしてニューカッスル城。

王党派が追い詰められたこの城には、民を逃がすための船が、多数そろえられていた。

アルビオンの船籍でないそれは、ガリアのものだ。

中には、どこかの漁師が使っていたと思しき、ボロボロの貧相な船も混じっているが、それらにも一様に風石が取りつけられている。

それは「大隆起」をハルケギニアに引き起こす原因である鉱脈から、異邦の巫女姫である真言みずからが切り出してきたものだ。

船は、ひそかに静かに発進する。

城の正面では、王党派の軍人たちが、体を張ってレコンキスタに連なる貴族派の軍を引きつけ、戦っている。

一隻、また一隻。

本体から離れていく、たんぽぽの種子のように、音もなく静かに、アルビオンの民を乗せた船は、ニューカッスル城から離れていく。

不自然なそれは、ハルケギニアの魔法とは違う符術――栗毛の美少女の施した術による結果である。

その姿さえも気取られぬ「隠形（おんぎょう）」の術のみごとさに、アルビオンの王は、感嘆のためいきをついた。

アルビオンを離れた民は、行き着く先で、ガリアに新しく作られる都市の民となる。

みずからの手で街を作り、その街は、新たに試行される政策のテストケースとなりながら、ウェールズ王子に与えられる領地ともなるのだ。

難民となるはずの民に、みずから街を作らせるという、その発想。

ジェームズ一世は、青い髪のガリア王の持ちうる、その王としての力を、いまさらながら羨ましく思った。

「さあ、わしにはわしの責務がある」

それは、ジェームズ一世にしかできない、王としての仕事だ。

後に残されるものへの希望を胸に、アルビオンの王は、誇らしげな顔で踵を返した。

いっぽうガリアでは。

いきなり婚約者ができたことに困惑しきりのイザベラ姫が、父親の豹変っぷりに頭を抱える暇もなく、王宮の異変に走り回っていた。

「ああもう、まったく！

何てこったい！　この忙しいときに、こんなけったいなものが生えるなんて！」

突如、グラン・トロワに発生したキノコ――電気を放つという、とんでもなく危険な特性の――が、大繁殖している真っ最中なのだ。

じつは、この胞子を持ち込んだのは、ジョゼフだったりするのだ

が、そのあたりは割愛しよう。
ガリア王は、アルビオンに向けての派兵に向けて軍を再編・準備しているし、彼の使い魔であるシェフィールドは、その補佐をするため、あちこち飛び回っている。
ウェールズ王子にいたっては、ようやくガリア貴族への顔見せが終わったところだが、まだ指揮が取れるほど、この王宮に馴染んでいない。
畢竟、その中でも動ける、身分が高いものというと――イザベラにお鉢が回ってくるわけで。
「ぴぎゃあああ！」
ばちばちばちっ。
「下手に触るんじゃないよ！……ったく。
風メイジ、前へ！
こいつを切り取って浮かしたら運搬するんだよ。
負傷者を回収したら水メイジに回しな！
土メイジは、運んだコイツを、錬金で土に埋めるんだ。雷は土の中に逃げるって、あの女が行ってたからね！」
イザベラいわくの「あの女」とは、シェフィールドではなく、真言のことだったりする。
「それから火メイジ、こいつは燃えるらしいから、城の外にまとめたら焼いちまいな。
念のため、水メイジを一人以上は待機させとくのも忘れるんじゃないよ！」
口こそ悪いものの、陣頭にたって指揮を取る、青い髪の姫の凛々しく美しい横顔に、婚約したばかりのウェールズが思わず見とれたのは――また別の話である。
「お、お姉さま。何かできることは……」
そんな中、おずおずとイザベラに近づいていく影が一つ。
ロマリアの「虚無」主従から絞った情報で、ジョゼフたちによって引き取られた、青い髪の少女――シャルルの遺児である、ジョゼ

ットだ。
双子だけあって、タバサに良く似ていたが、何も知らない彼女は、自分が王族であったという事実を、まだ信じられないまま、年の近いイザベラを姉と慕って頼るのである。
「下がってな！」
「ぴゃっ」
長く青い髪が美しい姫君の声に、思わず飛び上がったジョゼットに、さすがのイザベラも口調をやわらげる。
「つまらないヤケドなんか、したかないだろう？ケガをするよ。こういう荒事は、軍人の仕事だよ。連中の仕事を取ってやるもんじゃない」
「は、はい、お姉さま……」
こくこく頷くジョゼットは、それでもイザベラのドレスをちょっとつまんで、離れずに側にいた。この広い王宮で、いま頼れるのは、彼女だけなのだから。
「ったく……手を出すんじゃないよ？
三班、終了したら、次は広間に向かいな――」
王宮の兵士や騎士である魔法使い（メイジ）を統率し、さらには「ガリア北花壇騎士団」まで引っ張り出しての、イザベラによる「電気キノコ」の駆除は、のちのちまでガリアの語り草になったという。
その後、安全を最大限に考慮しての環境の下で栽培された「電気キノコ」が、ガリアの名物になったとか、ならないとか。

#２０４　始まらない物語ー君を乗せてー（後書き）

あとがき
＞短いですが。
　一週間たっている間に、ガリアやアルビオンがどうなっていたのか、という大まかな動きです。
　タイトルは、空に浮かぶ城の某アニメ主題歌から。

#２０５　始まらない物語ー回帰ー

くるくる、くるくる。
まわる、まわるよ。
世界が回る。

――ああ、おなかがすいてせつない。

「マスターっ!?」
ぽてり、と学院長室で倒れこんだ少女に、従者が悲鳴じみた低音を張り上げ、空腹のあまり目を回した七季を、あわてて赤い外套の男が抱き上げたのだったが。

「むー……」
うぐうぐ、うぐうぐ、と無心に昼食となったオムレツを頬張る少女の白い頬は、リスかハムスターか、といった風情でふくれている。
つい横合いから指で押したくなってしまうような光景だが、褐色の肌の男と、まっくろにゃんこ――中身は悪霊もいいところの闇の魔法使い――は、さすがに自重した。
――食事を邪魔されたナナキは、本気で怒るからなぁ。
一般に、動物が、食事を邪魔されると凄い剣幕で腹を立てるという話であるが、蛇足だろうか。
じぶんがケダモノ姿にもかかわらず、そんな回想をしているリドルは、まっくろな三角ネコミミをぴるぴる動かしながら、ベッドに座って食事をする少女の横顔を見上げた。

わきめもふらず、一心不乱に食事をする七季の姿は、一言で「飢えていた」というよりも、何だか妙な必死さが漂っているように見えるのは、リドルの気のせいだろうか。

その大ぶりな黒瑪瑙の瞳は、水気を湛えて潤んでいるようで。

さて。ここに至るまでの経緯は、というと。

思いがけない客人を追い返した後も、新参者の従者についてのあれこれや、オールド・オスマンをはじめとする学院関係者への顔見せなど、取り急ぎ、済ませておくべき要件を立て続けにこなしたため、気がつけば昼時になっていた。

食事をしていないのは、一同そろって同じだが、そのうちアーチャー、リドル、ディルムッドの人外組は、魔力さえあれば事足りる体質。

プレシアは、七季たち主従と暮らすようになるまでは、朝食は軽く済ませるか、さもなくば省略することも多かった手合いだ。

リニスとアリシアは、もともと少食だし、プレシアが家を空けることが多かったころの名残から、わりと我慢強い。

才人はというと、ディルムッドの一件で、朝の鍛錬がなしになったので、空腹感はあったものの、どうしても我慢できない、というほどでもなく。

そして七季は――必要ならば空腹も耐えるけれど、眠っている間の精神的な疲労もあいまってか、先に体がギブアップして貧血を起こしたらしい。

それに気づいたアーチャーは、あわててプレシアたちと「サロン」に戻り、食事を作ったわけだが。

げんざい、彼らのセカンドハウスと化している、この小屋にいるのは、七季とリドル、アーチャーのみである。

「……ぷは。ごちそーさまでした」

美味しかったぁ。

ほわ、と目尻を下げた七季は、ようやく夜色の髪にふちどられた面輪に、あどけない笑顔を取り戻した。倒れたときには、いっそう白かった頬にも、ほんのりと血の気が差して温かみを取り戻している。

バターの風味が芳ばしい、少し甘めのプレーンオムレツは、栄養価を上げるためにミルクを混ぜた、まろやかで優しい味わい。

その付け合わせには、ほうれん草に似た葉野菜と、ソーセージのソテー。紅茶にはハチミツを落として、とシンプルながら、なかなかボリュームのあるメニューである。

アーチャーとしては、ここにスープをつけたかったのだが、まず手早く仕上げられるものを優先した結果、こうなったというわけだ。

「おそまつさま。しかしマスター。目を回すほどに空腹なら、言ってくれた方がありがたかったのだが」

病院で使われるようなベッド用のテーブルから、アーチャーは、紅茶のカップだけを残してトレイを下げる。

「心臓止まるかと思ったよ。比喩だけど」

鋼色とルビー色がそろって七季にジト目を向ける使い魔コンビ。

姿こそ違えど、マスターへ寄せる思いはひとかたならぬ彼らのことだから、それももっともな言い分である。

たとえ、とっくに心臓は止まっていても（存在的に）、かりそめの体が息苦しいほどに衝撃を受ける感覚は、逃れようもない心の痛みである。

しかしアーチャーとリドルは、とっさに判断ができるだけマシな方で、ディルムッドなどは、彼らが冷静になってしまうほどに取り乱していた。

思わず黒髪の美青年を、二人して殴って黙らせてしまうくらいには（酷）。

――いやあれは倒れた人間を、むやみに揺さぶる愚行を止めるために。

――僕を差し置いてナナキに飛びつくなんて、新参者のくせに生意気だよ。

従者それぞれに言い分はあるようだが。

「ん、ごめん。やっぱ、帰って来れて、気が抜けたのかも」

へにゃん、と緩みきった警戒心皆無の表情で、ふっくらした頬を緩める七季は、幸せそうだ。

小さな両手でカップを捧げ持ち、微笑む少女のソプラノには、しんそこからの安堵と喜びがあふれている。

それは、母親を見つけた子供さながらの無邪気な色だ。

きらきらとかがやく黒瑪瑙は、まっすぐ慕わしげに彼らを見つめるから。

黒猫は少年へ変じ。

戦士は武装を解いて。

伸ばされた手に、黒いシャツをまとう男と、緑のネクタイを締めた少年は、ごく自然に彼女へと寄り添った。紅茶のカップは、邪魔にならないサイドテーブルへ避難済み。

「ただいま」

『……おかえり』

――探さなかった日なんてない。

会いたくて会いたくて、傍にいないとわかっていたけれど、それでも姿を求めて瞳はさまよった。

聞きなれた声を。

白い髪を。

赤い目を。

人ならぬ従者たち。

金の髪を。

赤い目を。

竜胆色の目を。
優しい家族のような友人たち。
そして、親しげに呼ぶ、主の声。
男と少年の、それぞれから伸ばされる腕に抱きしめられ、その体をぎゅうぎゅう抱きしめて、ようやく少女は満たされた吐息をこぼす。
――たとえ夢だったとしても。
決して短くはない時間、離ればなれになった日々が、彼女の中に詰め込まれている。
それらの思い出が、ぶつかり合うたびに、七季の中に切なさの波紋を広げて少女を急かした。
「つーわけだから、責任取って。きょうは一緒にごろごろして」
てい。
ベッドに問答無用で引っ張り込まれた使い魔ふたりは、きょとんと灰藤色とルビー色の目を瞬いたあとに、
『何が「というわけ」だ？』
と首をかしげたのは、まあ無理からぬこと。
「ざっくばらんにまとめると、夢に出て来なかったんで寂しかった。アーチャー分とリドル分が足りないので補給を要します」
ぎゅー。
子供のような理不尽なダダをこねる少女に、二人の男は顔を見合わせるや、同時に噴き出す。
「やれやれ。とんだご無体だ」
「両手に花って？　欲張りだよねえ、マスター？」
温かみを帯びた男の低音と、からかうような少年のテノールには、目の前のいとけない主から求められることへの、確かな喜びと誇らしさ。
自分たちの知らないところで、新たな従者を拾ってきたくせに、それでは物足りないという七季の強欲さに、けれど彼らは満たされる。

かつて異邦の地で、彼女がいないあいだに、どれだけ従者たちが、その存在に飢えたことか。捜し求めたことか。

彼らと同じように、この奔放で危うい、かけがえのない少女が、自分たちを想って、その不在に飢えていたというのなら。

それを嬉しいと思うことは、しぜんなことではないだろうか。

その空虚を、知っている。

その渇きを、知っている。

だから彼らは、拒まない。

「では、その間のマスターの話でも聞こうか」

「ナナキ分も補給しないとね」

魔性の従者たちは、楽しげに寄り添う。

いま傍にいる存在の、確かさを抱きしめて。

「夜になったら、今度はアリシアたちとイチャイチャするんだー」

「そこは夜にこそ僕たちと寝るもんでしょ！？」

「……」

主従で川の字を作って寝転ぶ七季に、すかさずツッコむ黒髪のリドル少年と、反対側で少女を挟んでいる剣製の魔術師は、ちょっとだけ仏頂面。

「ところでプレシアたち、どこ行ったんだ？」

ころん。

気にせず疑問を投げる七季は、やっぱりマイペースである。従者ふたりが傍にいて、安心しているからかもしれない。

体ごと向き直って寝返りを打つ少女の、小柄でやわらかな肢体を片手で支える程度に受け止めて、白い髪の偉丈夫は七季に答えを返す。

「ああ。ランサーの身の回りのものを買いに、王都トリスタニアにな。これから共に暮らすのだから、早めに打ち解けた方が良いだろ

う」

しれっと付け足すアーチャーだが、黒髪の少女が目を回して寝ている間に、彼らを送り出した錬鉄の英霊を「アーチャーさん、意外とあからさまです……！」と才人がツッコミ入れていたことなど、七季が知る由もない。

残るといってきかない黒髪の美青年――ただし聖骸布製の覆面をつけた――が、プレシアとリニスに引きずられていったことも。

「そっかー」

のんきに頷くトリップ娘の、抱きしめる枕を、横からリドルが取り上げようとして、ジャレ合いに発展するのを、やはり同じように、七季の横から手を出して取り上げる男の腕があり。

異邦の「神使（しんし）」主従は、テスタロッサファミリーと男ふたりが帰ってくるまで、仲良くごろごろしていたとか、いないとか。

「いまごろ何してるのかしら……」

「久しぶりの水入らずですもんねえ……」

青い空の下、プレシア主従が、トリスタニアで買い物の最中、そんな呟きを洩らしていたことを、才人とアリシアだけが知っていた。

#２０５　始まらない物語ー回帰ー（後書き）

あとがき

＞突発的に書きたくなったのでやらかしました。

何このイチャらぶ主従。

いちおう補足すると、恋姫世界でディルムッドを引っかけたとはいえ、オリ主は、かなり必死こいてアチャやリドルを探してましたよという。

彼女にとっては、ディルムッドは、あくまでギブアンドテイクな関係で、従者にするつもりはさっぱりなかったんです。

げんざいオリ主にとって「帰る場所」とみなされている従者たちを描いてみました。

今回は、ディルムッドが名前だけしか出てこなくて正直すまん。

#２０６　始まらない物語ー風切り羽ー

異世界からやってきた「神使（しんし）」の少女が、ベッドで従者とごろごろしているころ。

トリステインから、王女の密命を受けてアルビオン入りしたワルドはというと――

ウェールズ王子の暗殺に失敗、目当ての手紙も入手できずに逃亡、という、何ともしまらない状況に陥っていた。

それというのも。

「残念ですが、そのような手紙の心当たりはありません」

アンリエッタから預かった「水のルビー」を身の証として、ウェールズとの対面を許されたワルドだったが、肝心の手紙――そのじつアンリエッタからウェールズへの恋文――について、金髪碧眼の王子は、知らぬ存ぜぬの一点張り。

「仮に、そちらの言うような『手紙』があったとして……このような状況です。とうに燃えている可能性が高いでしょう」

「しかし……！」

ワルドとて、子供の使いではないのだ。あっさり「はいそうですか」と引き下がるだけなら、バカでもできる。

そうそうあきらめるわけにもいかない、砂色の長髪とヒゲをたくわえた騎士は、ただでは帰れぬ、とばかり、図々しくも戦時中の城に滞在していたのだが。

戦局が厳しくなるにつれて、業を煮やしたワルドは、とうとうアルビオンの王党派がニューカッスル城に追い詰められた夜、ウェー

ルズ王子の寝室に忍び込み、暗殺を試みたのだったが。

「なッ！？」

三人がかりの偏在で襲いかかった相手は、致死に達するダメージを受けたとたん、ぱっとかき消えてしまったのだ。

否、あとに残されたのは、千切れかけた白い紙のヒトガタのみ。

スキルニルではない、偏在でもない、まったく未知の魔法――正確に言うと、それは異邦の「術」であったのだが――に、まんまと騙されたワルドは、わずかに明かりの灯る、薄暗い部屋で苦い驚愕を味合わされるはめになったのである。

その後、彼は疑われることを避けるために、あえて城に残った。

ウェールズの死――もっとも消えたのは身代わりなのだから不在と言い換えるべきだ――が伏せられているのを良いことに、ギリギリまでニューカッスル城にと居座り、とうとう戦況がまずいところまで来てからようやく、避難する民とは別の船を都合してもらい、アルビオンを脱出することに成功したのだった。

その行動が、一つの誤解を生んでいることも知らず。

いっぽう、ところ変わって、ガリアの王宮。

そこでは、つい先日、アンリエッタの使者を自称する、トリステインの騎士によって殺害されたはずの王子、ウェールズそのひとがためいきをついていた。

――アン。

思い返されるのは、薄闇の中で複数のワルドから向けられた、風の魔法が襲いかかる風切り音と、刃に胸を貫かれる衝撃。

それは、真言が仕込んだ、身代わりのヒトガタと共有する感覚を通じて、流れ込んできた、何よりの証拠だった。

「水のルビー」を示した騎士の裏切り。

それは、アンリエッタの裏切りではなかっただろうか？

ガリア王・ジョゼフの提案で、不思議な魔法を使う、栗毛の少女の作った身代わりがなければ、ウェールズは間違いなく、殺されていた。

ワルドがレコンキスタである、という背景を知らないものにとっては、トリステイン王女に、国宝を預けられるほど信頼されている騎士が、他国の王族の暗殺を行ったのだ。

それはトリステインの総意と取られても、仕方がないことである。

――君は、何を考えていたんだい？

胸の中の可憐な面影に、いくらウェールズが問いかけても、答えは返ってこない。

恋文はあった。

アンリエッタから、同じ始祖の血を引く、うるわしき王子への愛を、それこそ始祖ブリミルの名の元に誓った恋文だ。

それは、淡い恋の形見であり、アンリエッタが同盟のため、他の男に嫁ぐと聞いた日にも、燃やすことのできなかった、ただひとつのもの。

秘密裏にガリアへと亡命したウェールズが、数少ない持ち物の中に忍ばせていた、大事な思い出の品だった。

――彼女は、私を信じられなかったのだろうか。

アルビオンの王子は、その美しい碧眼に、憂いの影を宿す。

青年は、淡い思いを抱く少女を、信じたかった。

しかしアンリエッタが差し向けた使者は、夜闇に乗じて、ウェールズを襲った。偏在を駆使する手練(てだれ)だ。スクウェアメイジが三人がかりという必殺の構え。

――私が、アンの名誉を守らないとでも。

苦い、渋い、ワインの澱(おり)のような疲れが、プリンスオブウェールズと諡われた、青年の美貌を翳らせていた。

もはや恋の花は枯れ落ちた。

疑いの毒は一滴。

しかし、それは優しい色合いの花びらをあっというまに黒く侵し、

見る影もなくなってしまう。
ウェールズの手の中で、かつての恋を情熱的に綴った少女の手紙が燃えていく。
やがてそれは、白い灰になって、グラントロワの庭に落ちる前に――風に吹き散らされていった。
あとには、何も残らない。
ガリアの王宮では、言葉は乱暴だが、きびきびと凛々しく響く、イザベラ王女の声が兵たちを導いている。
ふと、晴れ渡った夏の空を思わせる、彼女の青い髪がむしょうに見たくなって、ウェールズはその足で歩き出した。
広い王宮ではあるが、魔法を使うのが苦手なイザベラを、魔法なしで追いかけることにした青年の表情は、灰になる手紙を見つめていたときよりも、心なしか晴れやかだった。

#２０６　始まらない物語ー風切り羽ー（後書き）

あとがき

＞短いですが、ワルド側の話と、その行いによって生み出された、ちょっとした疑惑。

ワルドの行動が筒抜けになっていたら、アンリエッタにも疑いがかかったんじゃないかなと。

けっきょくのところ、第三者がいること前提でレコンキスタうんぬん、と叫ばなければ、ワルドがレコンキスタ側なのは、わからないわけで。単独任務だと。

そうなると、彼の身元保証をしているアンリエッタも責任を追及されることになるのでは、という疑問が生まれました。

この話で書いたのは、あくまで可能性の話ですけど。

だって、密命とはいえ、王族の名前を出してきた使者が暗殺やらかした、って、かなりのスキャンダルのはずだよなぁ。

原作では、「ウェールズ暗殺→ほぼタイムラグなしで王党派玉砕」の流れになっているから、うやむやにされているだけなんですよね。

責める立場のアルビオン関係者は、レコンキスタによって駆逐。

残ったのはレコンキスタで、そこに所属するワルドのしわざだから追求されない、という感じ。

そのへん書き手の個人的な見解ですが。

蛇足までに。

ワルドと対面した時点で、既にウェールズはガリア行き。

じっさいにワルドと会ったのは「ヒトガタ」だったんで、風メイジのワルドでも気づかなかったという。

#２０７　始まらない物語ー槍兵の一日・前編ー

英霊は眠らない。

眠るとしても、それは魔力の消費を抑えるために休息するだけで、その感覚までが鈍るわけでは、決してない。

けれども、知覚すべてが遮断されたあと――ふたたび見(まみ)えることのできた、そのあどけない面輪に、ディルムッドは、歓喜を堪えることができず、笑みこぼれた。

消えかけた主――共に異邦を歩く、契約者であった黒髪の少女――へ手を伸ばしたディルムッドは、無事に、世界をも越えて、彼女の側に侍(はべ)ることを許された。

元からいる七季の従者たちが、彼に対して苦い顔をしてはいたが、マスターの決定に異を唱えることはしないらしい。

そして槍兵は、彼女たちが世話になっているという、この場所――トリステイン魔法学院の関係者へ、面通しをすることになった。

「……というわけなので、ランサーには、仮面、もしくは覆面をつけたまま、私の警護をしてもらうことになります」

七季の説明は、こうだ。

東方の実家が、先だってのトリステイン魔法学院襲撃事件を知り、彼女たちのことを心配して、警護役を増やすべく、新たな従者を送り込んできた。

それが、槍を得意とする騎士、ディルムッドであると。

「ランサー」の名は、槍に優れた使い手に贈られる称号であること。

彼は、理由あって、マスターである七季にしか、顔と真名を明かさないことなどが告げられた。
教師たちは、少しけげんな顔をしたが「そういう風習なのです。ディル……彼は、私たちとも違う地方の出なので」と説明されると、頷く程度には受け入れてくれたようだ。
そして、女性教諭だけが、学院長室を退室したあと。
「ディル、覆面を外して」
「は、仰せのままに」
黒髪をポニーテールに結い上げた少女の命じるままに、人外の青年は、その類稀なる美貌を露にした。
「――」
七季一行以外のものが、一様に息を呑む。
男でさえも、目を奪われずにはいられないほどの魅力を湛えたその秀麗さは「魔貌」の名にふさわしい美しさと凛々しさを併せ持つ、戦士の顔だ。
「ご覧いただければ、これからの説明も納得してもらえるかと、まずはディルの素顔を見ていただきました」
ディルムッドに見惚れていた教師たちの耳を、七季のソプラノが凛と打つ。
はたと我に返った男たちは、小柄な少女のあどけない顔に視線を注いだ。
「ディルに覆面をさせた理由は、じつは女性よけのためです」
きっぱりとした言葉に、男性教諭たちの表情が、それぞれに変わる。
あるいは納得に。あるいは嫉妬に。「モゲロ」という呟きは、どこから出たのか。
「彼は、以前暮らしていた土地で……女性問題を起こしまして。それを私が解決したのを恩として、仕えてくれることになった騎士です」
おおむね間違っていないので、ディルムッドは黙って頷いた。

「女性問題を……？
そうなると、そういう人物に学院を歩かせるのは」
あからさまに細面の顔をしかめたのは、風の魔法の教師、ギトーだ。
彼の言葉を受けて、しかし七季はふるふるとかぶりを振った。
「ディルに問題があったのではないんですよ。
端的に言えば、モテすぎたとでも言いますか。彼に懸想し、夜這いをかける女性が、あとからあとから湧いてきたというだけの話です。ちなみにディルは、女性を口説いてすらいません」
はあ。
「しかし、彼は優れた騎士なのでしょう？
それが女性に夜這いをかけられたからといって……」
嘆息する少女の言葉に、にわかには信じがたい、という顔の教師が大半だが。
「以前、いた土地というのがですね、大半の武将が女性という、かなり女性の強いところだったんです。
一軍の将どころか、君主までもが女性です。いくらディルでも、寝込みを一騎当千の猛者に襲いかかられるのは……なかなか骨が折れることでしたよ」
つまりは実力行使での夜這いと知って、教師たちも少々顔を引きつらせた。
「彼はむしろ、禁欲的でした。ただ武を磨き武功を上げることで、忠誠とする部類の人間です。
いまは……そういう環境のおかげで、むしろ、女性不信でしてね。ご覧の通り、この男前でしょう？
女性が放っておかないのは実証済みで、わかりきっていますから……ならば、いっそのこと、最初から顔を隠してしまおうと」
こういうわけです。
異邦の少女の説明に、学院長をはじめ、男性教師たちは、お互いの顔を見合わせた。

そこに七季が追撃をかける。
「ようするに、彼は怪しいものではなく、覆面は、女性よけのための方便なんです。先生がたには、是非ご協力を願いたくて、こうして説明をさせていただきました」
つまり、この美形は、女性をめぐるにあたって、彼らのライバルではないと。
『そういうことなら……全力で協力しよう！』
異口同音、それはそれは、やる気にあふれたサムズアップとイイ笑顔で、「しっと」の炎を胸に秘めた独身男性たちの返事が、学院長室にこだました。

「さすがは我が主」
これほど早く、協力を取りつけられるとは。
どこか天然ボケの入った槍兵は、このやりとりを見て、ただおのがマスターの素晴らしさを讃えるのであった。
黒髪の少女が、空腹のあまり倒れるのは、この直後のことである。

#２０７　始まらない物語ー槍兵の一日・前編ー（後書き）

あとがき

＞更新が間に合いませんでした。がっでむ。

本日は、二話あげます。

続きはのちほど。

#２０８　始まらない物語ー槍兵の一日・後編ー

「マスター！」
「ナナキっ！？」
倒れこむ少女の、華奢な肢体を抱きとめたのは、赤い外套の騎士。
しかしディルムッドは、彼の存在など目にも入らぬ様子で、ただ七季に向かって腕を伸ばした。
また消えてしまうのではないかと。
「主……ッ」
ひしっ。
アーチャーから黒衣の少女を奪い取った美青年は、白い髪の従者に殴られるまで、七季を揺さぶって離さなかったという。

「七季殿……」
まだ未練がましく、振り返り振り返り、背後を見やるディルムッドに、テスタロッサ家の女性三人と、黒髪の少年は苦笑というには、優しすぎる笑みを浮かべていた。
「ほら。急いで買い物を済ませないと、ナナキのところへ戻れないわよ？」
「そうそう。急がば回れ、ってね」
プレシアと才人が、それぞれに明るい口調で前向きに急かすと、目だけをのぞかせ顔半分を赤い聖骸布で覆う青年は、ふしょうぶしょう、といった声音で頷いた。
「そう、だな……よろしく頼む……」
プレシアと手を繋いでいるアリシアは、ツインテールに結った金

髪を、春の陽射しにきらめかせながら、向日葵みたいな笑顔で言ってのけた。
「素敵な服を買って、お姉ちゃんを驚かせてあげようよ！」
「街でナナキへのお土産を選んであげたらどうでしょう？」
リニスもネコミミを隠す帽子をかぶって、穏やかな声で青年の気分を上向きにするような話題を振ってみる。
「土産、か。喜んでくれるものが見つかるだろうか」
少しだけ、金の瞳が期待を孕んでぱちりと瞬く。
そして、学院の門を、いったん霊体化で通り抜けたディルムッドは、少し離れた場所でふたたび実体化すると、プレシアたちと共に、転移魔法で王都トリスタニアへと出かけたのだった。

まず手始めに買い込んだのは、マントと帽子である。
この二つは、大した手間もなく、並べてあるものをすぐ手にとって購入できるから、ありがたい。
シンプルではあるが、ディルムッドの衣服に合わせた深緑のマントは、思いのほか違和感なく彼を騎士らしく見せた。丈が長めなので、野営の折には上掛けがわりにもなる品である。
帽子は、ワルドがかぶっていたような、つば広のものだが、顔を隠すにはもってこいだ。覆面をしているとはいえ、帽子をかぶると陰になるので、あまり目立つことなく街中を歩けた。
「さて、これからが本番よ！」
うふふふふ。
プレシアの、低い笑い声と、レンズの奥にかがやくルビーアイが恐い。
「う……」
ディルムッドは、思わず腰が引けるのを堪えて、どうにかその場に踏みとどまった。うしろで黒髪の少年が「気持ちは良くわかる」

としきりに頷いている。
「楽しみですねえ」
「ママ、どんなの買うの？」
ほのぼのと群青色の目を細めて、マスターに追従するリニスは、微笑ましげにプレシアを見つめている。愛、萌えさかってマース（誤字にあらず）。
ショーウィンドウのガラスが、春の陽射しを照り返して、鏡のように異邦人たちの姿を映し出す。
アリシアが見上げた先には、ダークヘアをアップにまとめて、日よけのベールを垂らした帽子をかぶるプレシア。首をかしげた幼い娘もまた、つば広の、まっしろな帽子をハチミツ色の頭にかぶっている。
「お。ここかな？」
才人でさえ、布製のベレー帽に似たものを身につけていた。どうやら全員で帽子をかぶることで、ディルムッドを埋没させてしまおうという意図らしい。
リニスは元から、ネコミミ隠しに帽子をかぶっているのだし。
そして、以前も来たことのある店に見覚えのあったらしい少年の言葉通り、異世界トリップご一行は、貴族向けの衣料品店に突入したのである。

「どちらが似合うだろうか」
真剣にディルムッドが見比べ、ついにはダークヘアの美人ママさん魔導師と、ああでもない、こうでもない、と言い合っているのは、もちろん彼の服――などではなく、女性用の装飾品だった。
「ナナキは青や黒が好きだけど、ここは別の色でアクセントにするのも良いと思うのよ」
第二の娘、と異邦の少女を呼ばわって憚らないプレシアは、長身

の青年と一緒になって、七季の魅力を語り合っている。二人とも、ディルムッドの衣装を一通り見繕ってから、そろそろ二時間がたとうとしているのだが。

「しかし……赤は、強すぎはしないだろうか。こちらの淡い色はどうだろう。黒髪にも映えると思うのだが」

かたや親ばか、かたや従者ばかで、性別を超えた意気投合っぷりに、才人がうしろでおののいていたりする。

ふつうの男子高校生である彼には、ちょっとばかりついていけない領域だ。

いっぽうアリシアとリニスはというと、さすが貴族御用達の店というかなんというか、出された紅茶とお茶菓子に、のんびり舌鼓を打っている最中である。

「あら良い香り……すいません。この茶葉は、どちらであつかっているお品物ですか？」

――アーチャーへのお土産にできないでしょうか。

カフェオレ色のボブカットも可憐な山猫娘は、ほんわかした笑みのまま店員に問いかけて、紅茶について尋ねていたりする。

「このお菓子……スミレの砂糖漬けかな？

可愛いし、お姉ちゃんに買って帰ったら喜ぶかなあ」

ぱくん。

えてして、ご夫人の買い物は長いものだから、店としても、少しでも売り上げを伸ばすため、たくさん買ってもらえるようにと、客を引き止めるためにサービスは惜しまない。

立って服を選ぶなど、言語道断。座り心地の良いソファと、品物をなるたけ多く並べられる広いテーブルが、こういう店における必需品だ。

そして意外なことに、ディルムッドのモノを見る目は肥えていた。

曹魏で働いていたころは、恩賞などで、宝飾品や絹の類を与えられることも多かったため、見慣れているともいえる。

なまじっかな女性よりもセンスがあるうえに、細部にまでこだわ

るのだから、本当に戦士なのかと才人はツッコミを入れたい気分でいっぱいだった。

――ああでもアーチャーさんも、そのへんは詳しいっけ。

執事スキルＡの人外従者は、そういえば七季のヘアメイクまでやってのけた猛者である。

――あれか。英霊って、そういうスキルが必須なのか。

おもわず胸のうちで呟いている少年に、多大な誤解を植え付けつつあるとは、知らぬが仏、のディルムッドである。

「てゆーか七季ちゃんは、あんまり着飾るの好きじゃないよな……？」

ぽそり、と、小声でアリシアに耳打ちする黒髪の少年は、

「ダメだよ、サイトお兄ちゃん。オトコゴコロってものも理解してあげなきゃ」

と、金髪ツインテールの幼女から、逆に諭されてしまったとか。

そして一行は、誰かに絡まれることもなく、無事に買い物を済ませたのである。

あえて付け足すならば。

スリやごろつきに落ちた魔法使い（メイジ）くずれは、目にも留まらぬディルムッドの手刀や拳一発で沈められ、彼らに絡むよりも先に、意識を刈り取られて地に伏したことを述べておこう。

はっきり言って、戦場帰りの英霊を連れた一行に、手を出す方がバカである。

そして、人目につかぬ場所から、いそいそと転移魔法でトリステイン魔法学院へと戻った槍兵の英霊は――

ころん。ぽてり。きゅうっ。

寝返り、ひとつ。

探す手、ひとつ。

手に届いたものを、抱きしめて。
従者ふたりに挟まれたまま、無防備な子猫のようにすやすやと眠る、主人の姿に衝撃を受けて、くずおれていたとか、いないとか。
「可愛い……！」
「え、そっち!?」

#２０８　始まらない物語ー槍兵の一日・後編ー（後書き）

あとがき

＞こんなディルムッドで石を投げられないだろうか（真剣）。

ほのぼのをめざしたら、槍兵がダメな子っぽくなった不思議。

期待されていたようなイベント（事件）がなくて申し訳ない。

しかし敵には容赦なく一撃でオトすディルムッド。

振り返りもしません。破魔の紅薔薇どころか、素手で瞬殺。それがランサークオリティ。

蛇足ですが、ディルムッドは恋姫世界で、本当に気の抜けたオリ主の寝顔を見たことはありません。

寝てるときも、無意識の警戒をしていたオリ主。

#209　始まらない物語ー役立たずの魔法ー

場所はガリアの、とある地下牢。
魔法で固定化をかけられた、冷たい石壁に、涼やかなはずの男の声が、焦りを含んで反響する。
「くっ……何故だ！　何故、魔法が使えない！？」
いくら杖をふるおうとも、ヴィットーリオ――教皇の魔法は、発動することなく、彼らが「精神力」と呼んでいる力は霧散していくだけだ。
恐るべき力を秘めた「虚無」の魔法。
一度は手に入れた力を、失ったことに対する彼の混乱は、たとえ策略家としてジョゼフ並の頭脳をそなえていたとしても、たやすく収まるものではない。
そして、彼の使い魔も、また。
とび色の左目と、エメラルドの右目というオッドアイ――ハルケギニアでは「月目」と呼ばれる――の美少年、ジュリオも、「神の右手・ヴィンダールヴ」の力を失っていた。
幻獣を操る、虚無の使い魔が、ネズミ一匹使役できないなど、ありうるはずもない。
さきほどから、薄暗い地下牢を行き来する、嫌われ者の小動物と、やっきになって意思疎通を試みている金髪の少年は、きょう何度目かの努力が徒労に終わって、そろそろ肩を落としていた。
誰知ろう。
彼らの異常が、一週間ほども前に、無理やり食べさせられた、異邦の料理――泰山麻婆が原因なのだとは。
はるか異世界で、外道神父が愛好してやまなかったという、その至高の激辛料理は、魔法を使うための、魔力の流れる回路や、使い

魔との間に結ばれたパスにさえ著しいショックを与え、機能を狂わせていたのだ。

それを回復する手段は、いまのところ、ただ一つ。

水の秘薬でも、水の魔法でも、何でもなく――かつて、ガリア王・ジョゼフがそうしたように、そして「神使（しんし）」の少女がそうであったように――念能力者として目覚めることのみ。

生命エネルギーであるオーラを操ることにより、驚異的な回復力を手に入れて、身体と魔力回路のずれとを治してやるしかないのだが。

ヴィットーリオやジュリオが、その事実を知るはずもなかったのである。

げに恐るべきは、外道麻婆なり。

いっぽう、ところ変わって、トリステイン魔法学院の職員室では。

新たな異邦人――ランサーの受け入れについてと、きな臭いアルビオンの内乱の影響についての話題で、持ちきりになっていた。

魔法学院の教師とはいえ、彼らも貴族である。それぞれに領地を持っているもの、親兄弟が軍人であるもの、さまざまな立場がある故に、隣国――天空ではあるが――の情勢もしっかり耳に入っていた。

「アルビオンは……」

「王党派は、ニューカッスル城まで追い詰められたそうだ」

「始祖の血を引く王家に対して、よもや反乱とは」

教師の中には、貴族派に対して、眉をひそめるものも多い。

もっとも、ここで建前だけでも貴族派への反感を示さなければ、それは王家への不忠と取られても仕方ない。おのおのの本音がどうであるかは、また別だ。

ガリア王家とアルビオン王家の密約は、いまだ外へ漏れてはおら

ず、だからこそ小国のトリステインでは、いっそう不安が煽られつつあるのも本音だった。
　王女であるアンリエッタが、ゲルマニアとの政略結婚を控えているとはいえ、彼女が始祖の血を持たないゲルマニアを、野蛮な国と思っていることを、多くのものは知っているからだ。
　それはむしろ、トリステインという国の、国風とすら言えただろう。
　小国であるこの国は、大国・ガリアと、勢いを増しつつある新興国・ゲルマニアに挟まれた位置にあり、プライドのほかに、これといった寄る辺を持たないのだから。
「しかし、このような状況で、サー・ランサーが学院に来られたのは、ある意味、行幸だったかもしれませんな」
　ぽつり、と職員室に穏やかな声が紡がれる。
　水の魔法の老教師――キンダイチの言葉だ。
　彼もまた、戦争経験者である。もっとも、日本における大戦の、と注釈がつくが。
「ミス・ナナチの護衛である、サー・アーチャーの実力は、先だってのことで証明済み。
　推測ではありますが……おそらく彼も、サー・アーチャーと同等か、それ以上の実力をお持ちでしょう。サー・アーチャー、お一人では足りない、との判断で、こちらに送られたのでしょうから」
　より上の実力者をつけるのがふつうだろう、と。
　シワの中に埋もれそうな、優しい目を細めるキンダイチの言葉に、教師たちは注意を引かれ――めいめいに、さもあらん、と頷いた。
「なるほど」
「ごもっとも」
　少しだけ、教師たちの表情に明るさが浮かんだ。
　いつ、アルビオンの戦火が飛び火するかわからない状況で、少しでも戦力となるものがいるのは、頼もしいに違いない。
　いざとなれば、彼らも戦場に出なければならないこともあるのだ。

中には、生徒にすら、軍に引っ張り込まれるものもいるだろう。
たとえば、軍人の家系である、グラモン家の四男坊とか。
ランサーやアーチャーは、あくまで留学生一行の護衛だが、生徒たちを守る存在がいるというのは、彼ら教師にとって、ささやかながらも安堵をもたらす要因であった。
――しかし……アルビオンのように、トリステインがならないとは、限らないのではないだろうか……。
豊かな白髪をいただくキンダイチの胸には、不安がひたひたと水位を増していた。
――レコンキスタは、王家を排した、貴族たちによる連合と聞く。もともと日本人であるキンダイチは、最高学府にまで通った経歴の持ち主だ。ヨーロッパの歴史についての、おおまかな知識は持ち合わせている。
王家を倒した革命。フランス革命は、市民の手によるものだったが、このハルケギニアには、魔法という異能に立ち向かえる民衆は稀だ。
結果、市民ではなく、魔法を持つ王家と同じように、魔法使い（メイジ）である貴族が、上位者である王家を打倒する。
――しかし、これは革命などと呼べるものではない。
ただの権力交代劇だ。
あいかわらず、魔法使い（メイジ）が魔法をもって民衆を支配する。
――そうなると……どちらかといえば、王家は、カエサルの立場だな。
ガイウス＝ユリウス＝カエサル。
ひとによっては、ジュリアス＝シーザーと呼んだ方がわかりやすいだろう。
共和政ローマ期の政治家で、元老院が権力を持つ共和政の改革を試み、権力を我が手に握って、独裁者となった男である。
ただし、共和制を脅かしたため、多くの反発者を生み、結果として暗殺された。

シェイクスピアの戯曲において使われた「ブルータス、お前もか」という言葉が有名な人物である。

さておき。

現状、トリステイン王家は、貴族たちによって国を運営されている立場と言って良い。

王座は空位。

大后マリアンヌは、政治に口を出すこともなく、夫を亡くした失意からか、女王として即位する道を頑なに拒んだ。それは、いまもなお続いている。

その娘、アンリエッタはというと、十七歳という若年のせいか、いまだ「殿下」と呼ばれる中途半端な位置にある。

王位継承権は持っているはずなのだが、いまだ王族の執務を完全にこなすのは難しく、本来さばくべき仕事の多くを、マザリーニ枢機卿が負担しているはずだ。

もちろん彼ひとりで国の運営が担えるはずがなく、王国の司法権を担う「高等法院」の長・リッシュモンや、軍務からは退いているものの、王家の血を引いているヴァリエール公爵など、有力貴族が手分けして受け持っている。

いまのところ、そのアンリエッタは、強大な軍事力を持つゲルマニアとの同盟のため、あちらに嫁ぐことになっているはずだが。

――さて……そうなったとき、トリステインの宮廷は、どうなるのか。

おそらくは、ゲルマニアの人間が、相当数送り込まれ、トリステインの政治に口を出すことは、たやすく予想できる。

そのゲルマニアも帝政だ。

――レコンキスタは、国のトップを蹴落として、貴族で権力を独占しようとする動きではないのか。

それがアルビオンだけならば、言ってはなんだが、対岸の火事でいられる。

だが、ゲルマニアやトリステインにもレコンキスタの手が入り込

んでいた場合――戦いは、避けえないだろう、とキンダイチは、知性の瞬く黒い目を、痛ましげに細めるのだった。

――戦争を回避できる魔法なんて、ありはしない。

#２０９　始まらない物語ー役立たずの魔法ー（後書き）

あとがき
＞いきなり話題がシリアス（汗）。

今回は、ふたたびサブキャラにスポットを当ててみました。
学院の先生たちも貴族なので、それなりに戦況は知っています。
そしてキンダイチ先生は、昭和世代とはいえ、高等教育を受けている人なので、それなりに客観的な推測くらいは立てられます。

ロマリア組は……まあこんな感じです（酷）。
どうして杖を持っているのかというと、魔法が使えないことを自覚させるために、わざと持たせたまま牢に放り込んでいたり。
ジョゼフとオリ主で、魔法が使えなくなるのは実証済みなので。
「虚無」のジョゼフと、ハルケ式、リリなの式魔法の使い手であるオリ主が魔法を使えなくなる、トンデモフード、泰山麻婆。

ちなみに魔力回路のずれは、ほっといても治りません。
骨折みたいなもので、ずれたまま放っておくと、そのうち変な感じに癒着して、外部からどうにかしない限り、元には戻りません。
そんな設定。

◆登場人物一追加一

◆ディルムッド＝オディナ　：　基本方針「主萌え（ゑ）」

（出典：Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏ）

第四次聖杯戦争に召喚された「ランサー」のサーヴァント。

「輝く貌」の異名を持つ、フィオナ騎士団の随一の戦士。

長短二本の槍を持つ、二刀ならぬ二槍の使い手。類稀なる美丈夫で、頬にあるほくろには、異性を魅了する魔力（呪い）がある。騎士道に非常に忠実で、名誉ある戦いを重んずる、誇り高き英霊。

……が、その呪いのおかげで、この話では女性不信ぎみ。

加えて、何のアクシデントが起こったか、「恋姫†無双」世界に落とされた挙句、さまざまな女武将に求婚されたため、その女性不信に拍車をかけた。

「恋姫」世界で出会った、自分と同じく異邦人であるオリ主に、女性問題で助けられたため、非常な恩義を感じている。

分霊体で異世界トリップしていたオリ主が、「恋姫」世界から帰還する際、一緒についてきてしまい、従者となる。

生真面目だが、ちょっと天然入っている気のいい兄さん。ただし、新たな主を得てからは、暴走癖も加わったっぽい。いいからもちつけ。

くせのある黒髪に、金のタレ目。右目の下に魔法のホクロがあるが、それを差し引いても十分以上に美形。身長１８４センチ。

【イメージ&カラー】

深緑／梢／風と木／光を目指すひたむきさ／寒松千丈（※）／／松（花言葉「不老長寿」「同情」「向上心」「哀れみ」「かわいそう」「慈悲」「永遠の若さ」「勇敢」）／雪の中でも嵐の日でも、この身は永久に貴方の元へ／

松の花言葉がガチ過ぎて、書き手がもらい泣きした件（待て）。

「我が勝利、我が主に捧げる」「フィオナの騎士を侮るな」「いざ尋常に」

※寒松千丈

：節義をずっと堅く守り続けること。

「寒松」は厳寒の中の松。「千丈」は時間や空間の長いことをいう。松は厳寒のときにあっても風雪に耐えて緑を保ち続けることから、節操を守り続けることの象徴となった。

#２１０　始まらない物語ー キャッツアイ ー（前書き）

まえがき
＞リクをいただいたので、番外……？
時軸はもろ本編なんですが。

#２１０　始まらない物語ー キャッツアイー

目が覚めた。
かぎ慣れたニオイのする、寝心地の良いベッドで目を覚ます。
うーん、と伸びをしてから、あたりを見回して、ひとりなのに気づく。
申し訳程度に毛づくろいをしてから、ぴょん、とベッドから飛び降りた。
――私の名前は、七季という。

「にあん（おはよー）」
リビングにひょっこり顔を出すと、新聞を読んでいたご主人様に抱き上げられる。
「やれやれ……ようやくお目覚めか」
「にあー、なう（ごはんちょーだい。おなかすいたー）」
ちょっと自慢の、長いまっくろなしっぽを、ご主人様の腕に絡めて催促すれば、大きな手のひらが伸びてきて、額と三角の耳をゆっくり撫でてくれる。
ごつごつした、ちょっと硬い手のひらだけど、この手に撫でられるのが、七季は好きだ。
気づくと背中からお腹まで撫でられているくらい、触るのが上手で気持ちよくなってしまう。
「うるるるる……（ふにゃあ……気持ちいぃ）」
喉が鳴ってしまうのも、いつものことで、だから彼女が正気に戻るころには、器用なご主人様が、すっかり食事の準備を整えている、

という光景に何度となく出くわす。
つるつるした陶器の皿に、やわらかめの料理が盛りつけられている。
魚のニオイがするその料理に、たまらず七季はかぶりついた。

「にぁ（満足ー）」
けぷ。
顔を洗って綺麗にして。それからあらためて、とこととことご主人様に寄っていく。
「なーぉん。にーあ（ごちそうさまでしたー。ご主人様、お料理上手ー）」
すりすり懐いて、ご挨拶。
「お愛想かね。君はマメだな」
くすくす笑う低い声が降ってくる。
そういえば、朝の挨拶がまだだった、と、膝に飛び乗り、前脚をかけて伸び上がる。雪みたいに白っぽくまぶしい、ご主人様の髪は、冷たくないから七季は好きだ。
鼻先をちょん、と合わせて、ご挨拶。
「……ああ、おはよう」
彼の鋭い目つきが、ふ、と細くなって、ふたたび手が七季の体を撫でる。
終わったら、そのまま膝の上で丸くなる。ご主人様の膝は、彼女にとって特等席だ。
そこで、七季の母であるプレシアがリビングに入ってきた。
「にゃん（あら。起きたと思ったら、またお昼寝？）」
「にゃんにゃー（きょうはご主人様とまったりするのー）」
しっぽをゆらゆら振って、プレシアに返事をする。母である彼女も、七季と同じ、まっくろな毛並みだ。

娘をのぞきこむ母に、骨ばった手が伸びた。
「そら。君たちは、このソファがお気に入りだな」
「にゃーおみゃー（好きなのは、ご主人様が座ってるからなんだけどー）」
「にゃんにゃん（伝わらないものねえ……不便だわ）」
母と娘は、嘆息ぎみに、彼の膝に寄り添って寝転んだ。

「アーチャー！　こっちに真言来てねえか！？」
ばんっ。
『みゃっ』
びっくーん、と飼い主の膝から飛び上がった黒猫二匹は、長いしっぽをぼわぼわに膨らませて、みごとに床へと着地した。
乱入者は、というと、彼女たちの友人の、家主――もとい、ご主人様、のはずである。
「……またかね」
玄関先で、いささかうんざりとした声を隠さず、客人とおぼしき男に応対する白い髪の偉丈夫。腕組みしての仁王立ちが、彼の心情を物語っている。
「いい加減、学習したまえ。あまりかまいすぎるのは、猫にもストレスだぞ」
「で、うちの真言は？」
せっかくの休日、愛猫たちとくつろいでいた男は、その穏やかなひと時を邪魔されて、ちょっとイラッとしたものの――持ち前の人の良さから、律儀に神門（みかど）へと答えてやった。
「少なくとも、私は見かけていないがね」
「そか、邪魔したなっ」
言うが早いか、くるりと踵を返す、身のこなしの素早さよ。
「やれやれ」

「なーお？（また先輩、脱走したの？）」
「にゃー（室内飼いのはずなのに、ワイルドねえ）」
長毛種のヒマラヤン。それが、七季の「先輩」であり、神門（みかど）青年の溺愛する飼い猫「真言」である。
しかし、血統書つきのお嬢様にもかかわらず、彼女の気性は好奇心旺盛で誇り高く、かまいすぎの飼い主にすげない態度を取っているツンデレだ。
一匹きりしか飼っていない、神門（みかど）の甘やかしようが原因でもあるのだろうが。
「みゃお？」
ひょい、と抱き上げられる浮遊感に、七季は思わず顔を上げた。
あっというまに、逞しい胸に支えられ、足元にプレシアの黒い毛並みを見下ろしたまま、リビングへと逆戻りする。
そして、さっきと同じように、ご主人様の膝に降ろされた。
「くつろいでるところを邪魔して、すまなかったな」
「にあーん（気にしないで良いですよー）」
「にゃにゃ。にゃーおん、にゃー（本当に、ナナキには甘いんだから。まあ可愛い盛りですけどね）」
プレシアも、自力でソファによじ登り、くるんと男の膝横に寄り添って丸くなる。
まだ子猫の域を出ない娘の可愛さには負ける、と苦笑ぎみに。
そして七季は、優しいリズムで撫でてくる手の優しさに、とろとろと微睡み始め――

「にゃ……」
目が覚めた。
視界に飛び込んできたのは、白い髪。褐色の肌。鋭い目。覚えのある低い声と。

知っている、優しい手のひら。
「ご主人さま……おなかすいたー」
ぴきこん。
紡いだ言葉に、その場の空気が凍るのも、何のその。
すりすりアーチャーに懐く黒髪の少女の、寝ぼけが覚めるのと、人外の男がボコられるのと、さて、どちらが早いのやら。

「うん。猫になってる夢を見たんだって。んで、飼い主がアーチャーだったの」
「……それで、あのセリフかね……」
リニスの買ってきた紅茶を淹れるアーチャーの顔は、ちょっと疲れがにじんでいたとか、いないとか。

#２１０　始まらない物語ー キャッツアイ ー（後書き）

あとがき

＞２２２部突破につき、ネコミミ付けたオリ主が見たいとリクをいただいたので（だいぶ曲解したなオイ）。

すべては最後のオチのため！（待て）

あ、ちょうどディルムッドが帰ってきた直後の話です。

昼寝中のオリ主、そんな夢を見てました（笑）。

こんな話じゃダメっすか。

#２１１　始まらない物語－恋と戦争－

七季一行に槍の騎士・ディルムッドが加わり、彼が初めて王都・トリステインで買い物をした日の、夕刻。

そのころヴァリエール領へと戻る馬車の中では、二人の貴婦人が、甘さのひそむためいきをついていた。

『ハア……』

金髪のツリ目が特徴的な長身の美女と、そちらよりも年かさの、女性でありながら武装が目立つピンクブロンドの女性である。

ふたりの脳裏に浮かぶのは、下がりぎみの目尻に、憂いの影がにじむ秀麗な美貌――そこにあしらわれた一点の泣きボクロさえも、男の色香を感じる美丈夫の面差しだった。

また、低すぎない声も、好ましい。男らしくすげないのに、粗暴ではない品のよさが感じられる声音。

ディルムッドのそれは、彼女たちの耳に、いつまでも居座っていた。

思い返すたびに、耳から頬へと熱が移る心もちがするほどに。

いまになって気づけば、エレオノールもカリーヌも、彼の名前すら聞いていない。

ヴァリエール当主の夫人と、その長女に、ふだんであれば何たる無礼――といきりたつところだが、彼女たちの胸にわきおこるのは、名前すら知らぬ美貌の騎士へ対する、秘められた背徳感である。

名も知らぬ、よその従者に心を奪われてしまった不覚。

同時に、自分よりも「下位のもの」に情を向けるという、後ろめたさ。

それは想像力の豊かな――ときに妄想とすら言われる――女性にとって、下の身分のものに、高貴な女性である自分が征服される、

という「禁断の恋」を想起させるのである。
まあようするに、破談記録を更新中の独身貴族令嬢と、三人の娘がいる人妻は、絶賛妄想中というわけだ。
それなりの年を重ねた女性の想像力である。あれやこれや考えているのだろう。
虚空を見上げる目が虚ろで、妙に頬が上気している。時折、くねくねと体をよじったり、怪しい笑みを浮かべたりと忙しい。
世話役としてついてきたメイドは、使用人のたしなみとして、賢明にも見ないふり、気づかないふりをした。
同じころ、どこかの黒髪の騎士が、背筋を走った悪寒に身震いしていたとか、いないとか。
何にせよ、ヴァリエール公爵夫人と、エレオノール嬢が、実家へたどり着くまでは、あと一日あまりもある。
彼女らの世話をするメイドにとって、長い夜になりそうであった。

「……正気か？」
そして、ガリアの王宮――グラン・トロワの奥まった一角では、エルフの男・ビダーシャルと、青い髪の美丈夫――ジョゼフが会談を開いていた。
会談とはいっても、たった三人きりの密談である。
かたや先住魔法を使うエルフ。かたや「虚無」の魔法を使うガリア王。そして、「虚無」の使い魔の一人、ミョズニトニルン――シェフィールド。
主への侮辱に、黒髪の美女が動くのを制して、ジョゼフは薄い笑みを浮かべた。
「正気だとも。
俺はハルケギニアを統一する。しかるのちに――サハラとの不可侵条約を結ぶ、とな」

悠然とした表情は、いままでと変らないように見えた。
しかし、精霊の力、自然の力を敏感に察するビダーシャルにとって、目の前の男が、以前とは違うことに気づいたのだ。
青い双眸に浮かぶ光は、かつての虚ろな狂熱ではない。めざすものを見据える目、自分の求めるものを知っているものの目だ。
強く、深い。
まぎれもない、王者の目である。
――これは誰だ。
先住魔法で調べても、目の前の男は、正真正銘ガリア王、ジョゼフそのひとだと事実が並ぶばかり。
けれどビダーシャルの受ける印象は、もはや凍った感情に倦んだ、哀れな男ではありえなかった。
「エルフの魔法は、確かに便利だ。高度だろうよ。しかし人間には――ただの人間では――その術式は使えまい。そもそも精霊に対しての、認識が違う」
いきなり飛んだ話の内容に、しかしエルフの男は身を硬くした。
先住魔法は、人間には使えない。
それは、人間が精霊を認識せず――できず――彼らと契約する術を持たない、未熟な種だからだ、とエルフたちは思っている。
「俺は、サハラに興味はない。
ブリミルの威光も……知ったことではない。もはやブリミル教など、神官どもが金を搾るためのシステムに過ぎん」
そのブリミルが唱えた「虚無」の力を、おのが身に宿す男は、魔法というものを絶対視する概念を広めた英雄を、鼻で笑って切り捨てた。
「ずいぶんと大きく出たな」
「何。俺は、俺よりも、お前よりも恐ろしいものを知ったというだけの話だ。そして、可能性というものも、な」
サハラではなくとも、未知の世界はまだあるのだ。

海。その向こうの、新大陸。
かつて放り込まれた冒険の記憶が、ジョゼフの中で疼いていた。
未踏の地には、どんな生物がいるのだろう。どんな食材が眠っているのだろうと。
「サハラに入らずとも、お前のような存在がいれば、貿易くらいはできる」
それ以上の交流は、俺よりあとの世代の役目だろう。
「それに風石の問題については、解決策が出たのでな。わざわざ、当てにもならん『聖地』に突っ込む愚は冒さぬさ」
ニヤリと笑う男の、青く光る目に、ビダーシャルは思わず息を呑んで黙り込んだ。
「俺には、悪魔よりも怖い連中がついているのでな」

「ジョゼフさまに協力するのです！
ハリー！　ハリーハリー！　ハリーハリー！」
そして私たちの華麗なる新婚生活を一刻も早く！
「ヒイイィッ！？」
最終的にエルフのおっさんは、ヤンデレの迫力に屈したとか、屈さないとか。

#２１１　始まらない物語ー恋と戦争ー（後書き）

あとがき

＞短くてすまんです。

にゃんこネタが、あまりにも好評だったので、もう一つくらい突っ込もうかと思ったんですが、体調不良にて、話が上手くまとまらず……。

とりあえず、これ書き上げてから寝ます。

いただいた感想のレスが、明日になりますが、ご容赦くだされ。

タイトルはボカロ曲の「恋は戦争」が元ネタ。まんまでも良かったかもしれん。シェフィ姉さん的には。

#２１２　始まらない物語ー涙ー

そして、話はふたたびトリステイン魔法学院の――少し離れた小屋へと戻る。

「あ、これ！

これ洋服屋さんで、お茶菓子に出されてね、美味しかったから買ってきたの！」

リニスがアーチャーへのお土産にした紅茶を淹れたところで、アリシアが、瓶詰めの砂糖菓子を取り出した。籐の小洒落た籠に入っていたことから、貴族向けのものであることがわかる。

「わぁ。スミレの砂糖漬けか。美味しそうだね」

ぱっ、と黒髪にふちどられた、少女のあどけない面輪がほころんだ。

「えへへ」

姉貴分の七季に喜んでもらえて、アリシアは照れた笑みを浮かべる。そのハチミツ色の髪を、リニスが微笑ましそうに「良かったですね」と優しく撫でた。

ちなみにプレシアはというと、さっきから、デバイスの格納領域に詰め込んでいた、きょうの戦果を、次から次に引っ張り出している最中だったりする。

インテリジェントデバイスである「ラベンダー」が、紫色の宝玉を光らせながら「マスター……買いすぎです」と呆れ半分にツッコんでいたり。

「やれやれ……夕食前だというのに。マスター、少しだけだからな？

アリシアの心遣いを、無碍にするわけにもいかん」

「わかってるって」

えへー。

保護者のような口ぶりで、夕食前の間食に釘を刺す、アーチャー。
従者の褐色の相貌を見上げて、七季はへにゃりと頬を緩めた。こういう、ちょっとしたアーチャーの甘さも、彼女は大好きなのだ。
「あ、きょうのごはん、和食が良いな。アーチャーの食べたい」
「了解した」
いっぽう金髪をツインテールに結った幼女は、はたと思い出したように、黒髪の美青年――ディルムッドの肩を叩いて、彼を促した。
「ほら、ランサーも！」
お姉ちゃんにお土産あるんでしょ？
「あ、ああ」
幼い女の子に急かされる青年というのも、なかなか微笑ましいものだが、才人とリドルはそろって「ヘタレだ」と呟いている。容赦ないな。
「その、マスター」
青年の手から差し出されたのは、光沢あるビロードのケース――そこに鎮座する、簪風の髪飾り。
玉で作られた、白い小花をあしらった簪は、台座の先が二股にわかれているものだ。金にしては重さが軽いため、何かの合金と思われるが、それを目にしたアーチャーが、思わず「ほう」と声を上げるようなシロモノだった。
「可愛い……ありがとな、ディル」
「あ……気に入っていただけたなら、何よりの幸い」
最初は、大きな黒い双眸を、ぱちぱち瞬いていた七季は、ほわ、とてらいのない笑顔になって、ディルムッドへ礼を述べた。
そのまま簪を取り上げて、玉で作られた小花を見つめる黒衣の少女。
「ジャスミンかな？
いまの季節にピッタリだな。ディルって風流なところもあるんだなー」
ねっとりと白い花びらの色合いは、翡翠の仲間に近い。翡翠がジ

ェダイト――硬玉なのに対して、ネフライト、と呼ばれる軟玉のそれと思われる。
「ふむ。材質的には軟玉だろう。ホータン白玉と呼ばれるものと、同じ質だな。良いものだし、マスターの黒髪に映える白さだ」
少女の手から、簪を受け取ったアーチャーが、七季の黒髪に髪飾りを当ててみて、ふむふむ頷いている。
が、ディルムッドの視線に気づくと、すぐに少女へと簪を返した。
「マスター。それをつけるときは、彼に頼むといい」
それくらいの栄誉は、与えてやらんとな。
笑みを含んだアーチャーのセリフに、魔貌の青年は、はっと振り向いたが、くわせものの弓兵はあくまで涼しい顔。
「ん。わかったー」
たぶん何にも考えていない少女のソプラノに、くつくつと性悪そうな笑い声がこぼれる。
リドルあたりが「うわー。余裕ー」と言いつつ、自分も似たような牽制かけるだろうな、となないしんアーチャーに共感していた。
「どーしてだろう。親切なのに、アーチャーさんが恐ぇ気がする……」
呟く黒髪の少年の背中へ、ぺむりとひとつ、肉球スタンプ。
「いや、それで間違ってないから。サイト、君は正しい」
そこに、七季から意外な連絡が告げられ、またもリビングは騒がしくなるのだが。
「ん？
アーチャー、紅茶一人分、追加な。先輩が来るってー」
『はい――？』

「いやー……まさかねえ。教えちゃう前に、ナナちゃん自力でやっちゃうとは……」

珍しく、頭を抱えてうめいている栗毛の美少女の姿に、ディルムッドを除く一同は、目を丸くしていた。
彼女こそは、天下御免のチート巫女、もとい、龍神の嫁・漣真言そのひとである。
「どーゆーことですかー？」
のほほーん、と元凶である七季が、無造作にざっくりと切り込む。
彼女ならではの荒業でもある。
「いやね。私もちょくちょくやってるんだけど……てか、前にそれでナナちゃんと話したでしょ？
よーするに、分霊体っつって、霊体のコピー作って、よその世界に飛ばすやつ。
回収すれば、そこで身に付けたスキルとかも、そのまんま保持できるんだけど……ナナちゃんの場合、くっついてきたのが、同じ霊体だったから、一緒に回収しちゃったんだねえ」
ディルムッドはサーヴァント、つまりは英霊なので、霊体には違いなく――そういうことになってしまったらしい。
「しかもナナちゃん、元から『神降ろし』のスキルあるから、キャパ的にも問題なく受け入れちゃって……」
おねーさんもびっくりよ。
ようするに、真言も頭を抱えるほど、非常識な事態だったらしい。
「えーと。終わり良ければすべて良し、ってことでファイナルアンサー？」
こて、と首をかしげる七季。
『何でそうなる』
ディルムッド以外からの総ツッコミが、黒髪ポニーテールの少女に繰り出された。
「いやでも、元の場所に戻すとかはたぶん無理ですし……あ、ディル、泣きそうな顔しないの」
よしよし。
犬のようにわしわし撫でられている美青年へ、生温い視線がどこ

からともなく注がれる。
「ちょい待ち。出所とか問い合わせてみるから」
どこにさ。
その場の人間の内なるツッコミがシンクロした。およそ二百パーセントくらいのいきおいで。
いっぽう真言は、どこぞの見えない高次存在と、電波ででも交信しているのか、ちょっと虚ろな目で頭上を仰いでいる。見ているぶんには、ちょっぴりコワい。
「――、――？」
しかし七季は慣れているのか、はたまた大物なのか（たぶんどちらもだろうが）、それをさっくりスルーで、ディルムッドに紅茶を勧めたり、お茶請けの砂糖漬けスミレをつまんだりと、いたってマイペースだ。
「はい、リドルもあーん」
「……ん。いいのアレ。ほっといて」
「邪魔する方が殴られると思うよ？」
「それもそっか」
膝上に乗り上げてきた黒猫も、中身は人外なので気にせずに砂糖菓子を食べさせる七季。
平和すぎて、ツッコミの一つも入れたくなる光景である。
「――ん。いちおう結果出た。てか、あんまりにもあんまりで……こっちとは別に頭痛いなー……」
「聞いた方が良いですか？」
こてん、とオモチャみたいに首をかしげる黒髪の少女へ、渋い面持ちの美少女は、ためいきをつきつつ手短に説明した。
「そこの人外にーちゃん？　ランサーだっけ？
詳細は省くけど、ろくでもない魔術儀式の生贄として召喚されたっぽい。んで、やっぱりろくでもない死に方してるわ。
それを……ぶち込まれた先の悪魔みたいなやつが、どっかに落っことしたというか、放り込んだというか……戻っても、大してろく

なことがないっぽい」
物凄く、極端な説明をされていることだけは、わかったが、それを聞いた当人であるディルムッドの表情は、石のように硬かった。
「つまり……お持ち帰りしても、問題ない？」
「ん」
七季の問いに、栗毛の美少女は、紅茶をすすりながら鷹揚に頷いた。
――そっか。

「ディル」
びくり、と男の肩がはねる。
「ディルは、どこに行きたい？　何がしたい？　何になりたい？」
長身痩躯の男に向き直る少女のソプラノは、子守唄のように優しく、澄んで、どこか厳粛だった。
紅茶の湯気が立ち上るテーブルが、いつしか誓いの場所へと変わる。
七季はイスに座ったまま。ここは素朴なリビングだというのに、まるで神殿のような清冽さが部屋に満ちる。
真言の琥珀の瞳が、静かにそれを見守っていた。
「願わくば、貴方の側に。貴方の従者に。それ以上の願いは」
イスから床に場所を変えて跪く、ディルムッドのその懇願は、まるで殉教者のようにも見えた。
「それでは、足りないけど……おいおいでも良いかな」
思わず見上げた青年の、金の眸に映るのは、笑みに良く似た表情。
深い、深い、夜色の瞳が、彼を吸い込む。
片手を当てた、左胸。
「貴方の槍は私と共にあり、私の運命は、貴方と共にある。
――ここに、契約は完了した」

それは、いつかの誓いに対する返礼。
「ディルムッド＝オディナ。
汝、我が従者となるのであれば、おのが幸福を追求することを忘れてはならぬ。
私は犬を飼ったのではなく、臣を手に入れたのだから。
私ができることは、最低限、幸福を手に入れるための環境を整えてやることだけ。
汝は勝利をくわえて戻るだけの猟犬にあらず。
道を共にし、杯を交わし、喜びを分かち合う臣であれ。
喜びを知らぬものは、喜びを与えられない。認められた先にあるものを、見つけなさい」
それは優しいのに、何故か胸に刺さる声だった。
かりそめの肉の奥。魂の芯に突き刺さる鏃（やじり）のように、深く差し込んで外れない。
痛みのない痛みが、ディルムッドの目から、滴（しずく）となってこぼれ落ちた。
「え」
いきなりぼろぼろ泣き出した男に、張り詰めていた空気が解ける。
「ディ、ディル？」
――そんなに酷いこと言ったか？
あわててイスから降りて、黒髪の従者に寄り添った少女の肢体を、槍兵の腕が、すがりつくように抱きしめた。
ぎゅう、と絡みつく腕の強さに戸惑いながらも、七季は、その背に腕を回して、子供をあやすように撫でてやる。
繰り返し、繰り返し。
男の震えが、収まるまで。

#２１２　始まらない物語ー涙ー（後書き）

あとがき

＞うん……どうしてこうなった。

中途半端なところで切ってすみませぬ。

ぬこネタを書くつもりが、気がついたら槍兵を泣かせていた。

本当に四次ランサーファンに石を投げられるんじゃないかコレ。

#２１３　始まらない物語ー不満ー

「落ち着いた？」
「……見苦しいところを」
やわらかな胸に、華奢な肢体、甘い香りと、間近にしてみれば、過ぎるほどに女性らしい要素を詰め込んだ七季に抱きしめられていたディルムッドは――しかし苦手意識を感じることもないことに、ないしん首をかしげながら――恥ずかしげな声で、そっと少女の肩を押し返した。
すると、黒い袖から伸びる細い腕は、何の未練げもなく、するりと離れて、最後に青年の額を撫でていった。
もはや窓の外は夕闇。
薄暗くなるリビングには、魔法の明かりが灯り、あたたかな色の光に照らし出された白い面輪が、慈愛を湛えて、従者を促す。
「泣くことは恥ずかしいことじゃないから、気にしなくて良い。泣けるときに泣いとかないと、あとがしんどいからな」
ぽん、と小さな手のひらが、ディルムッドの胸を叩いた。
「まあ弱みを見せたくない気持ちはわかるけど。ここにいるのは、みんな身内だから、そんなに気にしなくて良い」
きっとな。
落ち着いた響きの声で立ち上がる七季は、そのまま手を差し出して、青年を連れて行く。
「ディル用の部屋を『作って』くる。アーチャー、晩ご飯、よろしくな。
おいで、ディル」
「は」
ひらひらと手を振り、廊下へと消えていく、身長差の激しい主従

を見送り、ちらりと誰ともなく、それぞれの視線がアーチャーとリドルへ向かった。
黒衣の少女が座っていたイスに、ちょこんと残された黒猫と。
まだ少し中身の残った紅茶のカップを片づけ始める、褐色の肌の偉丈夫が。
どちらもむっつりと黙り込んでいるのを、真言だけが「愛されてるなぁ」とのんきに呟きながら、アーチャーの淹れた紅茶を飲んでいた。

同時刻。
天空に浮かぶ国、アルビオンでは。
最後に、硫黄を載せた船が突貫したことによる、甚大な被害を受けたとはいえ、レコンキスタに連なる貴族派が、ようやっと着いた決着に祝杯を挙げているところだった。
最後の拠点のひとつとなったニューカッスル城は占拠され、そこにひそんでいた砂色の髪とヒゲの騎士――ワルドの偏在が、クロムウェルを出迎える。
「閣下、こたびの勝利、謹んでお祝い申し上げます」
「うむ。まずは将兵たちをねぎらわねばなるまい。この城の宝物庫に案内されたし」
「では、こちらへ……」
ハヴィランド宮殿の宝物庫も押さえてはあるのだが、そちらには、かさばる布類や書籍――もちろんそれなりに来歴があるものだが――が大半で、ようするに、すぐに価値のわかる「金目のもの」がなかったのだ。
決戦の場とはいえ、人間というものは、財物を最後まで身近に置きたがるものだろう、と考えたクロムウェルは、このニューカッスル城に王党派の財産が残っているものと信じていた。

はたして。
財産は宝物庫にあった。
あったのだが――
「これだけか？」
クロムウェルが想定していた量よりも、はるかに少なかったのである。
誰知ろう。
決戦の前に、ガリアへと送られたウェールズのために、始祖の秘宝をはじめとする、王家伝来の宝物は、彼と共に婿入り道具として送られ。
残りの財物も、ガリアで王子を支えてくれるように頼みながら、アルビオンを脱出する民たちに、王から配られたことなど。
酒や食料なども、決戦前に開かれた宴によって、だいぶ使われていたため、結果としては、残されたものは、レコンキスタ側の想像を超えて、はるかに微々たるものであった。
それでも、都市ひとつぶんが、かるく一年やっていけるだけの金額分はあったのだが。
クロムウェルの試算としては、まったくもって足りなかった。
多くの将兵が命を落とし、「アンドバリの指輪」の支配下にあるとはいえ――生きている人間が、まったくいないわけではない。
何せ、クロムウェルが命を下せるのは、基本的に単純な内容だ。
「敵を倒せ」とか「死ぬまで暴れろ」といった類の。
クロムウェルが側についていれば、その限りではないが。
これから勢力を広げていくつもりである以上、領地の経営をするために、頭が使える貴族を、一定数、残しておかねばならないのは自明の理だった。
その貴族に対する「分け前」としては、十分ではないだろう。
大前提として、クロムウェルの取り分があるのだから。
彼がトリステイン侵攻を決定するのは、ほどなくのことである。
夜の帳（とばり）が、天空の城にもしんしんと下りていく――。

そしてトリステインは、ヴァリエール領。
まるで城のように壮大な邸宅の一室で、ルイズは、姉のベッドでグチをこぼしていた。
「ちいねえさま……お母さまとエレオノール姉さま、本当にあいつら連れてくるのかしら……」
別に、会いたくなんかないのに。
しかし、あのカリーヌとエレオノールがその気になった以上、まず間違いなく、東方からの留学生たちを引っ張ってくるだろう。
味気ない黒衣に身を包んでいるくせに、はちきれんばかりの胸を揺らしている少女と。
その小柄な肢体を守るように、いつでも控えている赤い外套の騎士と。
気安い口調なのに、どこか鋭さを物腰に帯びてきた平民と。
ルイズよりも幼いくせに、一丁前に魔法を使い始めた金髪の子供と。
出るところは出て、引っ込むところは引っ込んでいる、とても子持ちとは思えない美女と。
その使い魔だという、ネコミミとしっぽのついた、カフェオレカラーの毛並みの亜人と。
そこにいるだけで、独特の存在感を放たずにはいられない、異邦人たち。
脳裏に描くだけで、あざやかに姿がよみがえってしまうのは、それだけインパクトの強い証だ。
絶対に認めたくなんてないけれど、ルイズが「羨ましい」と思ってしまうくらい、人に囲まれ、褒められている。
「ルイズ。私の小さいルイズ。せっかくのお客さまなんでしょう？」
私は楽しみよ。

にっこり笑うカトレアは、ふくよかな胸元に、愛する妹を抱きしめて、自分と同じピンクブロンドの髪を撫でてやる。

「変な連中よ！

でも、あいつらが、あの平民を引き取ったから、私はちゃんとした使い魔をもらえたんだっけ……その点だけは、感謝してやっても良いけど！」

ルイズは、姉の座るベッドの傍らに控えさせた、白い陶器のような肌を持つ「鵺（ぬえ）」を、指先で呼び寄せた。

「ね、ちいねえさま。これが私の使い魔なのよ。何でもいうことを聞いて、凄く聞き分けが良いんだから！」

ピンクトルマリンみたいな目を、きらきらさせて自慢する妹に、しかしカトレアは、浮かない面持ちで、その無機質な使い魔を見つめた。

動物好きな彼女にとって、それは、どうにも「生物」の気配がしなかったからだ。

精霊のような、自然の気配ですらない。

ルイズを傷つける言葉は吐けなくて、代わりにカトレアは、妹にやんわりと釘を刺した。

「ねえルイズ。私に黙って、どこかへ行かないでね。置いて行ったりしないでね？」

「何言ってるの、ちいねえさま！

戦争があるかもしれないって話なのよ。父さまも家にあまり戻ってこないし……学院に戻るのは、当分先みたいだもの。家から勝手に出ちゃダメって言われてるんだもの。つまらないけど」

私、そこまで子供じゃないわ。

唇を尖らせた妹に、カトレアはほっと胸を撫で下ろして、ふたたびルイズの髪を撫でたのだった。

#213　始まらない物語ー不満ー（後書き）

あとがき

＞なかなか話が進まなくて申し訳ない。

あちこち飛んでますね。

一日にどれだけかけるのかと（爆）。

レコンキスタの動きと、ルイズ側の動きもフォローしてみました。

#２１４　始まらない物語ー キッチン ー

「アーチャー。何か手伝うことあるー？」
ひょこ。
キッチンに顔を出した黒髪の少女が声をかけると、赤いエプロンが似合う長身の従者は、ちらりと鋼色の眸で振り返り。
「……ではタマネギでも切ってもらおうか」
そんな声が返ってきた。

「彼は良いのかね？」
「んー。部屋はだいたい増築できたし、あとは家具の配置かなぁ。ディル本人は、いま『中』で寝てる」
とんとんとん。さくさくさく。
キッチンを照らす白い光の中で、大小二つの影が並んで快いリズムを刻んでいる。
タマネギの頭としっぽを切り落とした七季は、男を振り向かずに続ける。バリアジャケットでエプロンを作っているあたり、器用なんだか、ものぐさなんだか。
エプロンの胸元には、生成り色の地に、茶色い肉球マークがワンポイントであしらわれており、その上から「ねこがすき」とひらがなで書かれているあたり、芸が細かい。おそらく実物を元にしているのだろう。
さて、他のメンツはというと。
いまごろ才人は、風呂用の水汲みをしているはずだ。七季が魔法で用意してしまえばすぐなのだが、そこをあえて鍛錬のために人力

で行い、さらにアリシアが水の魔法の練習がてら、それを綺麗に浄化する、ということをやっている。

水の温度を上げるくらいの魔法なら、プレシアでもリニスでも使えるので、いまごろはテスタロッサファミリーで風呂の準備をしているだろう。

日によっては、料理の手伝いがリニスだったり、才人だったり、水の魔法を使うのが七季だったりもする。家事を分担するのは、共同生活において悪いことではない。

「ごはんのあとで良いからさ、部屋のつくりの強度確認とか、家具の錬金とか手伝ってくれないかな。仕事増やして悪いんだけど」

ざく。

少女の手にした小ぶりの包丁がタマネギに食い込む。

「それはかまわないが」

しゅるしゅるしゅる。

アーチャーの手の中で、ジャガイモが、魔法のようにむけていく。

「ずいぶん、彼にかまうのだな」

卵色の中身をあらわにしたイモが、ごろりとボウルに投げ込まれる。

「……へ？」

自分の頭より高い位置から降ってきた声が、ふだんよりも幾分か低くて硬いような気がして、七季はようやく従者の顔を振り仰いだ。もちろん手は止めていない。

いつもと変わらぬ仏頂面――のはずだが、いかんせん、彼が料理するときは、半ば趣味と化した楽しさがあるのか、そこそこ機嫌の良いことが多い。場合によっては、鼻歌つきのこともあるくらいだ。

それが、学院で護衛をしているときと変わらない表情をしているとあっては、七季が感じる違和感も当然だろう。

ぱちん、と少女の大きな目が瞬く。

長い睫毛にふちどられた黒瑪瑙の瞳に、映り込む、褐色の精悍な相貌は、不機嫌、と書いてある。

――あれ。珍しい。

「アーチャーのときもこんなん……じゃ、なかったか。

家具そろえたりとか、部屋造ったりはしてないもんな。うーん。だいぶ状況が違うからなぁ……」

片手は包丁、片手はタマネギをまな板に押さえたまま、まっくろな髪をポニーテールに結っている巨乳少女は考え込む。

「しいていうなら、慣れの問題かな。あのときのアーチャーは初対面で、まずうちに慣れてもらうことが肝心だったし、大人のアーチャーにあれこれ言うよりも、ほっといた方が気楽なんじゃないかとは思ったし。

ただ、ディルの場合はなー。いちおう、そこそこの時間は一緒にいたし、ある程度ケアというか、気を使ってやらないと……インパラが、毎日、雌ライオンに追っかけられるような状況だったわけだし、ストレス溜まってると思うんだよ」

言い方は悪いけど。

ざくざくざく。

答えをつかみ出した七季は、ふたたび手元に視線を戻し、タマネギを切る作業に従事する。

「インパラ……」

「あ、肉じゃがか、カレーなのか？

何となく、くし切りにしちゃってるけど大丈夫か？」

タマネギひとつぶんを切り終えてから、また顔を上げた先では、七季のこぼした、あんまりな回答に、アーチャーが微妙な表情で「良くわかったな」と返してきた。

「いや和食が良いって言ったの、私だし。何か雰囲気的に肉じゃがかなと」

も一つあるかな。

きょうはディルムッドもいるから、多めに作るだろう、と新しい皮付きのタマネギを手に取る七季。

「あとで出すの、牛肉でいい？　それとも豚肉？」

「肉じゃがは牛だろう。地方によっては変わるだろうが」
「うち、たまに母さんが豚で代用するぞ。牛の方が好きだけど、あっちはあっちで美味い」
「……彼に豚肉はどうなんだろうな。イノシシの仲間だし」
ぽつりと呟くアーチャーの言葉に、
「何かまずいのか？」
こてん、と首をかしげる小柄な少女。
「そうか、マスターは知らなかったのか。彼は生前、大きなイノシシに瀕死の重傷を負わされてしまってな、それが死因といえば死因だ」
正確には、その大ケガを負ったとき、近辺に傷を癒す聖水があったのだが、主君・フィン＝マックールが、かつて婚約者を奪われた恨みから、その聖水を二度もこぼし、ようやく三度目にくんできたときには、ディルムッドはこと切れていた――という話である。
ケルト系の話に詳しくなければ、知らない話だろう。
「てことは、牡丹鍋はアウトか。もったいないなぁ……美味しいのに」
しゅん、と眉尻を下げて残念がるあたり、どこまでも食い意地の張った七季である。
「マスターが食べたいなら作るがね」
むしろ狩る。
即答で帰ってきた弓兵の答えに、少女のあどけない顔が苦笑をにじませて「良いよ」とやんわり制す。
「あんまり叩いてやるなよー。ディルは、アーチャーと違って、そんなに丈夫くないんだから」
「……どういう意味かね」
気がつけば、皮むき済みのジャガイモ（じつはダンシング・ジャガイモだったりする）が、そろそろ十個になろうとしている。
「うーん。アーチャーは、叩いても伸びる、鋼みたいな逞しさがあるけど、ディルはポッキリ折れちゃいそうな感じかなー。

ちゃんと光を当てて、水をやれば、すくすく育つ木みたいな？
綺麗だし、伸びも速いけど、あんまり手荒にあつかうもんじゃないかな。
ちなみにリドルは、叩かれたら、叩き返す感じがする。むしろ倍返し上等、みたいな」
まあ、あくまでイメージなんだけどな。
ざっくざく、ざっくん。
「あっちの話だけど。ディルの場合、男にだいぶ恨みというか、嫉妬買ってたからなー。よけいにしんどかったと思うぞ。
またディルに迫る女武将が、どれもこれも美人なうえに、カリスマがあるもんだから――武将なんだから、当たり前っちゃ、当たり前なんだけど――暗殺というか、刺客も来たし」
アーチャーは、ぎょっと目を見開くと、手遅れとはわかっていながら、目の前の少女を案じずにはいられない。
「――マスター。その話を詳しく」
料理の途中で、珍しく包丁を放り出した男の、大きな手のひらに、がっしり両肩をつかまれた七季は、びくっとしながらも話を続けた。危ないので、自分が持っている包丁は、まな板に置く。
蛍光灯に似せた、魔力の白い光に、ぎらぎらと光る鋼色の双眸が目に痛い。
「詳しくって言っても……ぜんぶディルが、ぶっ飛ばしちゃったし。素性の方は……あとから聞いた話だと、私狙いとディル狙い、半々くらいだったみたいだな」
「……どうして」
ディルムッドだけならわかる。異性絡みの恨みや嫉妬を買っていただろうし、戦士として、戦力として危険視されたこともわかる。なにしろ英霊だ。一騎当千のツワモノである。
だが、性格からして、みずから戦場に出ることはないだろう七季が、どうして狙われなければならないのか。
「嫉妬だろ？

いちばんディルに近いところにいたのが私だったから。男装はしてたけど、バレるときはバレるもんだしなぁ。

あと、ディルの女性問題を片付けてたのが私だからかな。消せば、ディルの足を引っ張ったり、精神的に追い詰められると思ったんじゃないか？」

しれっとした顔で、自分が暗殺される理由を挙げる少女が、アーチャーはいたましくてならなかった。

恐ろしくなかったはずがない。平気な顔で話しているが、悪意や刃物を向けられたとき、彼女が傷つかなかったはずがない。

――ついていくことのできなかった自分が、どうこう言えることではないだろうが。

あの男はボコろう、と白い髪の偉丈夫は、あらためて心に誓った。

「……ところで」

じゅわっ。

鍋で牛肉の炒められる、にぎやかな音がキッチンに上がる。そして肉の色が変わったところで、ジャガイモやタマネギなど、具材が足されて炒め合わされて、だし汁が鍋に注がれると――醤油の芳ばしい匂いが立ち上り始めた。

用の済んだ包丁やまな板は片づけられ、空になったボウルを、七季がアーチャーの隣で洗っている。

「ランサーはずいぶん女性に迫られていたようだが……その。マスターは、そういうことはなかったのかね？」

かりにも乱世である。

いくら女性の武将が多いとはいえ、兵士は男もいるだろうし、物騒な世であれば、なおさら七季のような、包容力のある女性は魅力的に映るのではないかと、料理上手の従者が、菜箸を操りながら問いかけたところ。

「んー……『北郷』って言ったかな？
苗字からして、見るからに日本人っぽい男の子――に、声をかけられたことがあるけど」
――あれ、私みたいにトリップしたひとじゃないかと思ったんだけど。
黒髪の、わりと爽やかなふつうの男の子だった印象だけ、残っている。ただ顔はうろ覚えだ。
優しげな声で、「もしかして君も――」と手を伸ばされたところで、美貌の槍兵がすっ飛んできてしまったので、七季はディルムッドを押さえるのに終始してそれっきりだ。陣でのことである。
「ディルが追っ払っちゃってなー。話も聞けずじまいだった。
たぶん黄巾の乱のころかな。私は後方で、もっぱら怪我人の手当てに明け暮れてたんで、あんまり顔とか覚えてないけど。義勇軍――劉備軍の子だったと思う」
一通り洗い物を済ませた黒髪の少女は、水切りにそれらを並べて一息つく。もう少し水気が落ちてから、ざっと魔法で乾燥させるのだ。
「でもまあ、正直それどころじゃなかったというか。アーチャーたちが見つからないかって、それればっかり考えてたような気がするなぁ」
ディルにも、それっぽい人を見かけたら教えてくれるように頼んではおいたけど。
「――そうかね」
いっぽう長身にエプロンをまとう偉丈夫は、ようやく機嫌を直したのか、さっきよりも穏やかな声で短く返した。
くつくつと煮込まれる鍋から、アクがすくいだされていく様子を、小柄な少女がのぞき込む。
「味見まだ？」
「こら」
たしなめる男に、じゃれつく七季。ひたすら平穏で仲睦まじい、

ありふれた光景がそこにある。
「良い匂いなのにー」
夕食に、アーチャーお手製の肉じゃがが並ぶまで、あと少し。

そしてガリア王宮の、とある厨房では。
「良いか、イザベラ。これから俺はお前に料理を教える」
いきなりシェフィールドに拉致され、動きやすいシンプルな服とエプロン姿に着替えさせられた、青い髪の美少女が、三角巾までかぶせられ、王であるジョゼフの前にかしこまっていた。
――いったい何が始まるんだい？
目を白黒させる、おのが娘に、同じくエプロン姿の四十路のおっさん――もとい、美丈夫は、腕組みして堂々と宣言した。
「その名も泰山麻婆！　我ら親子の切り札になる至高の一品である！」
どーん。
さて――ガリア王家の明日はどっちだ？

#２１４　始まらない物語ー キッチン ー（後書き）

あとがき

＞じつは「恋姫」の主人公・北郷一刀とニアミスしていたオリ主。

ディルムッドへの認識や、恋姫世界のできごとをフォローぎみに挟んでみたら、夕飯に砂糖をぶち込む結果になった件。

どうしてこうなった……。

ちなみにオリ主は、家庭科の教科書レベルなら料理できます。成績は五段階で四～五くらい。基本に忠実。味はふつう。

蛇足ついでに。わりと家事は仲間うちで手分けしてたりします。もちろんアーチャーがいちばん得意なわけですが。

手伝ったり、修行がてらやってみたり、まあいろいろ。

いっぽうのガリアでは……ほらアレだ。

キッチンで新たな伝説、爆・誕☆の予感。

#２１５　とある神父の思い出話（前書き）

まえがき
＞番外編です。
　リリなの＆ゼロ魔キャラは登場しませんが、パプワキャラが登場します。

#２１５　とある神父の思い出話

それは、帝都心霊庁の、ある部署での会話である。
「何？
私が、どうしてこの職場に勤めるようになったか、かね。
ふむ……面接のときに話した気がするが……それには、一人の少女が関わっているのだよ」
問われた男は、書類を整頓する手を止めると、そう前置きをして、口火を切った。

季節は春。
緑が萌え、空は冬のそれから青さを増し、公園の花壇には、色あざやかな花が咲きそろうころ。
木製のベンチには、漆黒のカソックをまとった青年――二十代前半にしては、かなり老成して見える――が、ひとり沈鬱な面持ちで座り込んでいた。
明るい土曜日の昼間、わきあいあいとした雰囲気にそぐわない、重苦しいオーラが異様である。
「あの、すみません」
誰もが遠巻きにしているそのベンチに近寄り、あまつさえ声をかけたのは、あどけない顔立ちに、黒めがちな瞳の大きな、一人の少女だった。白と濃紺でふちどられたセーラー服が、春風に揺れて初々しい。
小鳥を思わせる澄んだソプラノが降ってきたことで、うなだれてきた青年はふと顔を上げる。

「……何かね」
きっちり校則通りとおぼしき、膝丈スカートの女学生は、ちょこんと擬音をつけたくなるような小柄な体躯で、男の目の前にたたずんでいた。
斜めがけのメッセンジャーバッグが、その小柄な肢体に似合わぬ巨乳の間を走り、ちょっとした刺激物的な光景になっていたりする。
「ええと、申し訳ないんですが、ここからどいていただけませんか。ちょっと、その……もうしばらくすると、このへん危なくなっちゃうので」
思いのほか、渋いバリトンに、ちょっと目をみはりつつ、黒髪の――制服姿の少女は、そんなセリフを、聖職者の証である、黒衣をまとった青年へと投げた。
要領を得ない言葉に、しかしカソック姿の青年は、ぽつりと呟く。
「君は、GS（ゴーストスイーパー）か」
落ち込んでいた男は、ここでようやく周りどころか、公園の大部分から人気がなくなっていることに気づく。
人払いの結界だろう。人工的に閉じられた異界に特有の、どこか息苦しいような空気が、聖職者である男に、それを感じ取らせる。
「……の、見習いです。お札を貼って、人払いをしたのは良いんですけど……お兄さん、霊能者でしょう？
一般人用の人払いじゃ、レジストしちゃって、でも何か考え事をされてるみたいだから、結界にも気づいてもらえなくて……ちょっと困っちゃいました」
表情が薄いというより、硬い、仏頂面に近い少女は、けれどもへにょんと眉尻を下げているから、その童顔のあどけなさが、いっそうきわだって、男に警戒よりも弛緩をもたらした。
「ふむ。では、手伝おう。悪霊が相手ならば、君よりは腕が立つ」
そんなセリフを紡いで立ち上がった青年のバリトンに、ぱちんと黒髪の少女は瞬きをした。
「いえ、あの……大丈夫ですよ。ちゃんと、退治するのが専門のひ

とがいます。私は、その人たちのサポートをするためのバイトなんです」

「私もいちおう、専門でな」

どこか苦味を感じさせる声で、ふるふるとくせっ毛の頭を振って、神父は続けた。

「ここで悪しき霊を祓い、誰かの助けになるのなら――私の苦悩にも、意味はあったということかもしれん」

その善意からの言葉に、ますます少女は困ったソプラノを奏でた。

「あのでも……目標が、ここに来るまでに、たぶん三十分以上はかかります」

そのセリフには、青年神父も思わず立ち尽くした。

けっきょく、そこで二人は昼食を取ることになったのだ。

少女が、お気に入りのパン屋で買ってきたというサンドイッチの詰め合わせと、家から魔法瓶に入れてきたプーアル茶で空腹を満たす。

食事の前に、祈りを捧げ、十字を切る青年を眺めて、少女は「本当に神父さんなんだなぁ」とのんきな声を洩らす。

「いただきます」

少女は、いつも通りの感謝の言葉。

「あ、私、七地七季って言います」

「ふむ。私は言峰綺礼だ。見ればわかると思うが、神に仕える身でな」

もっとも、私のような不心得者では、神すら見捨てるかもしれんが。

さっきと同じように、暗い面持ちをする言峰の言葉を、七季は何とはなしに聞くことになる。

「ようするに――言峰さんは、人が悶え苦しむのがお好き、と」
まだ年若い少女は、ミもフタもないまとめ方をした。
自覚はあるものの、さすがにいたいけな少女にざっくり容赦ない斬られ方をした青年神父は、サンドイッチを食べきったあとでうなだれる。
「あ、お茶どうぞ」
「……どうも」
ド失礼なことを言っておきながら、平然とお茶を勧める少女の図太さに、ないしんちょっぴり呆れながらも、言峰は嘆息しつつ、内蓋に仕込まれていた、予備のカップを受け取った。
「プーアルかね。珍しいな」
ここはふつう、紅茶だろう。
「ん。さっぱりしてて、好きなんですよ。紅茶よりも渋くなりにくいですし」
「そうかね？」
まるで気安い友人のようなやりとりをする、十歳差の男女。
「でもあれですね。何か言峰さんの悩みって――」
少しくせのある、コクの深い茶が、男の喉を通り過ぎていくのと同時、七季のソプラノも彼の耳を通り抜けて。
「体めあての男の人みたいですね」
ぶふうっ！
仮にも聖職者である言峰の脳と耳鼻咽喉を直撃した。
「あれ、大丈夫ですか？」
げへげほっ、ごふげぶっ。
「ど……どうやったら、そ、んな、結論に……ッ？」
せきこみながらも、さすがにツッコミを入れずにはいられなかったのか、くせのある黒髪の青年神父は、こくんとお茶を飲む七季へと投げかけた。

「だって。今まで信じていた神様が、いつまでたっても、言峰さんの苦しんでいる問題について、解決してくれない、救ってくれないから悩んでるんでしょう？

救ってくれない神様を、もう見切りをつけたいのか、それでも信じるべきなのか、迷ってる、そんなふうに聞こえたんですけど」

神を信じている神父に、あまりにも失礼な言い分だが、それが間違ってはいないだけに、言峰は黙り込んだ。

彼は、普通の人間が美しいと感じる事柄を美しいと感じられない。多くの人間が醜いと感じる事柄に愛着を感じてしまうのだ。

神を信じて仕え、人並以上に道徳や倫理を理解し、それが正しいと思いながらも――人の不幸がなければ、幸福を感じることができない。

ようするに、生まれながらの破綻者なのである。

しかし言峰は、そんな自身の異常を、理解している。それがまた悲劇だ。

わからなければ、止めどころに目安がつかなければ、思いのままに暴走することもできただろう。

しかし彼は、幼いころから、聖職者である父に育てられた。

尊く厳しい神の教えを、ずっとずっと植え込まれ、道徳を信じ、善であることが正しいとする良識を当然として生きてきた。

だが、それは言峰の中で齟齬となって、彼を苦しめる。

欠陥者でありながら、人並みの幸福感を得られない、「外れた」自分を許せず――多くの試みをもって、その歪みを矯正することで、救われようとして、ひたすらに神に祈ってきた。

奉仕の心から、人を助け、悩みを解き、苦行に耐えながらも、人並みの幸福を得ようと、努力を重ねてきたのだ。

「何かそれ、『付き合ってる女の子がやらせてくれないから別れたい』みたいに聞こえるんですよね」

「がふっ！」

救ってくれないから、信じられない。

人は、救われたいから神に祈る。

別にそれは、おかしなことでも珍しいことでも何でもない。

キリスト教徒に限らず、それは神道にも言えることだ。

ただしそれは、神に仕えてきた聖職者たちにとっては、アイデンティティの喪失にも近い。

キリスト者――主を信じるものたち――は、神を疑うことすら罪深い。

けれど、完全に部外者であり、多神教の神道に連なる――といっても、彼女も厳密ではない――七季からすれば、前提というか、適性が違う、と思えてしまう。

――そういう邪念を祓うのは、仏教の方が向いてるんじゃないか？

人の不幸しか楽しめない。

悪徳をこそ愛している。

そんな自分が許せない。

言峰の苦悩は、自分の罪深い性情を受け入れられないことが根本である。

善なるものでありたいのに、悪として生まれついてしまった。

――そんなもん、隣人愛でどうにかできるもんじゃないよなぁ。

基本的に、キリスト教的な教義は、助け合いと団結だろう。そこに清貧、というくらいだろうか。あとはいたって常識的な教えが基本といって良い。神様バンザイは、デフォルトとして。

いっぽうの仏教は、いってしまえば「あきらめ」の宗教だ。

何せ、愛情さえも「悟り」のためには邪魔だというのである。

苦を生んでいた煩悩の炎が消え去り、一切の苦から解放された境地――これが目標である、という教えもある。

他の教えに関しては、さすがにうろ覚えだが、煩悩ありきの人間が、煩悩を捨てていって到達する先に悟りがある、というような感

じだったはずだ。
——そっちの方が合ってるんじゃないかなー。
ただまあ、さすがに七季とて、宗教者に面と向かって「他の宗教の方が合ってるから、鞍替えすれば？」とは言いにくい。
だから、通りすがりでも、知り合ったよしみの助言くらいはしても、罰は当たらないだろう。
「まああれですよ。救ってくれない、救ってくれるは、この際、別にして……言峰さんは、好きなんですか？　神様」
「——は？」
きょとん、と男の黒い目が、ストレートなセリフに丸くなった。
「聖職者って、言ってみれば神様と恋愛してるようなもんじゃないですか。好きか嫌いかで考えちゃえばどーでしょうか」
「いや、それは……考えてもみなかったが……」
おそらく根が真面目なのだろう。
だからこそ、言峰は、こんなに悩むのだ。
不真面目な性格ならば、そもそも建前だけかぶって、裏で好き勝手にやるだろう。
そして悩むということは、少なくとも嫌いではないのだろう。苦しいだけで。
「好きなら、好きなままで良いと思いますよ」
神様は、逃げやしないでしょう。
「しかし、私がこんな迷いのある状態で、迷える信徒の方を導けるかというと……」
七季はサンドイッチの入っていた容器をゴミ箱に入れ、三杯目のお茶を、自分と言峰のカップへと注いだ。
「んー」
ずずずずず。

「じゃあ、職場を変えてみたらどうですか。趣味と実益を兼ねた感じで」
何も教会だけが、居場所ではない。
わけがわからない、という表情で、言峰は、自分よりも十歳は年下の少女を見つめた。
「言峰さん、霊能力あるんですよね？」
「ああ」
「そんでもって、人の苦しむのとか、わりと好きで、ドキドキしちゃうタイプ？」
「恥ずかしながら」
「SとMで言ったら？」
「Sだな」
「言葉責めとか得意？」
「……何を言わせたいのかね」
途中から、とってもアレな質問になってきたため、さすがに青年神父はジト目を七季へと向けた。
「はいこれ」
カバンをごそごそしていた少女は、ふいにメッセンジャーバッグから一枚のビラを取り出した。
さらにそこへ、メモ帳に何やら書き付けて、それも一緒に、言峰へと渡す。
「帝都心霊庁、職員募集要項……？」
黒髪の青年は、目を落としたビラに書いてある文句を読み上げた。
「私のバイト先です。そこの、二課を希望するといいですよ。組織的な霊的犯罪に関わる課で、捕えた関係者から、情報を絞る仕事がありますから」
ようするに、いぢり倒しても問題ないやつを相手にすりゃ良いんですよ。
にっこりと笑ってのたまった少女の顔が――そのときの言峰には、聖母にも見えた。

そして、七季の仕事を、善意で――タダで、という意味だ――手伝ったあと、彼女の紹介状であるメモを手に、青年神父は、帝都心霊庁の門戸を叩く。

吸血鬼を相手にしても引けを取らぬ戦闘力と、霊的能力の高さ、その知識の深さもあいまって、言峰は、みごと難関である帝都心霊庁の試験をクリアする。

そして、本人の希望から、元より人手の少ない二課に配属されてのち、あまたの霊的犯罪者から、情報を搾り取る腕ききとして、恐れられるまでになるのだが。

だからといって、彼のゆがんだ性格が、必ずしも直るわけではなく。

「この性格破綻者がうちに来た元凶は、あいつか……ッ！」

最近では、ちょっと開き直り始めた言峰が、同僚に対する「愛あるいぢめ」にもためらわなくなったいま、仕事の処理件数アップとは裏腹に、二課の職員の心労はうなぎのぼりになったとか、ならないとか。

それでもストレスが頭に来ないらしい、ハーレムは、そのわさわさ豊かなパツキン獅子舞ヘアーを振り乱し、帝都心霊庁の一課でも有名な「誘魔」の二つ名を持つ少女に、罵りの言葉を吐くのだった。

「七季のバカ野郎――！」

「さて、私の恩人に向かって暴言を吐いたのは貴方かね？」

「アッー」

エイメン。

#２１５　とある神父の思い出話（後書き）

あとがき

＞いちおう彼もＦａｔｅ／ＥＸＴＲＡに出ていたので、オリ主の世界にいたりします。

キリスト教や仏教に、これといった他意はありません。あしからず。

ちなみに言峰は、オリ主と出会ったころの若言峰です。Ｚｅｒｏ（第四次）の、まだ物堅い彼のイメージでヨロシク。

完全に開き直っておらず、苦悩していたまじめな言峰に、オリ主の「あくまのささやき」が発揮された結果、こんなんなりました。

いまでは人生エンジョイ中。

この世界では、聖杯戦争はありませんので、趣味と実益を兼ねた職場を紹介してくれたオリ主は、言峰にとって恩人です。

ときどきご飯をおごってくれたりする間柄。

そして、言峰の上司である二課長はハーレムです（パプワの）。

あれくらい神経太くないと、たぶん言峰とはやっていけない。

◆オリ主の世界の登場人物－追加－

◆言峰綺礼（出典：Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏ）

オリ主の知人の神父。帝都心霊庁の二課に務める職員。情報を絞るのが専門の腕っこき。激辛麻婆豆腐が好物。

生まれつき、善より悪を好み、万人が美しいと感じるモノを愛せず、万人が醜いと感じることにしか「幸福」を感じられない欠陥者。

ただし、それらを理解できずとも、道徳観念や常識を備えてはいたため、自らの歪みに苦しみ、それを正そうと様々な修身・試み・信仰に明け暮れた。

それでも自分の破綻が何も変わらない事に、さらに苦悩していたところ、たまたま出会ったオリ主に、新たな道を提示され、趣味と実益を兼ねた仕事に就く。

父・言峰璃正の運営する言峰教会から、オリ主の紹介で帝都心霊庁に移籍。それからのちは、組織的な霊的犯罪者に対処する、二課に就職。その腕をふるう。

他人の心の傷を炙り出し、いたぶることを好む、生粋のドＳ。

ただし、新たな道や、遠慮のいらない友人を紹介してくれたオリ主に対して、深い感謝を抱いている。

くせのある黒髪に黒い瞳。身長は１８５センチ（のちに１９３センチ）。心霊医術と八極拳の達人であり、聖別された投擲剣・黒鍵の使い手（※捏造設定）。

#216　始まらない物語ー秘宝と悲報ー

さて。

キッチンで七季主従が、イチャイチャ――もとい、夕食作りに勤しんでいるころ、チートな巫女さんこと、真言が何をしていたかというと。

「とりあえずデルフ。これに見覚えある？」

栗毛の少女が取り出したのは、古ぼけたオルゴールと、水晶かと思わせる、透き通った石のはまった指輪。

これこそが、アルビオンの王室からぶんどった――もとい、譲り受けた――秘宝、「始祖のオルゴール」と「風のルビー」である。

案の定、ファンシーな魔法少女のステッキと化したデルフリンガーは、元気に反応した。

「うおっと！

こいつぁおどれーた。見覚えも何も、『始祖のオルゴール』と、『風のルビー』じゃねーか！」

「……間違いないね？」

おでれーた、おでれーた、と騒ぐデルフリンガーに念を押して、真言はぶんどってきたハルケギニアの秘宝を、例によって収納に使っている、不思議空間へとしまいこんだ。

――これで二つ。否、三つ。

七季がヴェルダンデから譲り受けた、「炎のルビー」、アルビオンの王室から、ウェールズの亡命と引き換えにされた、「風のルビー」。

そして、ガリア王家に伝わる、「土のルビー」。

虚無の覚醒に必要な、四つのルビーのうち、三つまでが、真言の統べる勢力の手の内にある。

「残るひとつは、トリステイン王室に伝わる、『水のルビー』だね」
真言の、たわわな胸に抱かれている黒猫が、ルビーの瞳を細めて、声を低める。
「原作」では、アンリエッタが、アルビオンに派遣するルイズの、身分証明として、または路銀として渡した国宝。
しかしリドルの話では、ルイズは実家であるヴァリエール家に帰省しているという。
王女が、ヴァリエール領に行幸したというような話はないそうだから、十中、八、九、ルイズの手に「水のルビー」は渡っていない。
そしてアルビオンに潜入し、王子であるウェールズを――正確には、その身代わりを――襲ったのは、ジャン＝ジャック＝フランシス＝ド＝ワルド。
ウェールズの話では、あのヒゲ騎士に、「水のルビー」は渡っている。
その「ルビー」が、偏在によるコピーでなければ、の話だが。
もっとも、対となるはずの、「始祖の祈祷書」がない以上、ルイズに「水のルビー」を渡しても、「虚無」の魔法の使い手としての覚醒はありえない。
ガリアのジョゼフは、他の「虚無」が目覚めることを、戦略上から良しとしない。
アルビオンの「虚無」は、いまのところ行方不明――ハーフエルフのティファニアは、いまだその身を隠しているのだから、実質、害はない――ロマリアの「虚無」は、外道麻婆で機能不全においやった。
ワルドは、魔法の使えないルイズが「虚無」の魔法の使い手ではないかと勘ぐっているものの、その覚醒のために必要なものが、何か、とまでは知らない。
この、始祖の秘宝を確保して、「桃色まな板娘の覚醒フラグをかたっぱしから折るぜイェア」作戦は、じつのところ、「原作」を知るもう一人――リドルの立てたものだったりした。

七季と自分にケンカを売りやがった恨みは、決して忘れない、スリザリン生である。

もっとも、リドルの考案したのは、あくまで始祖の秘宝を独占し、ルイズを「虚無」として目覚めさせない――いわば「無能」に等しい状態に置いておくのがメインで、戦争阻止の力技は、もっぱら真言の独断だ。

ただこの二人、七季がらみとなると、とたんに結託が強く深くなるので、物凄くタチがわるかったりする。

なにしろ、チートレベルの力技と、魔王レベルの悪知恵である。さもありなん。

「それもいずれ、こちらの手に入るけどね」

ガリア王ジョゼフは、アルビオンの王子、ウェールズの暗殺をワルドがもくろんだかどで、彼を送り込んだトリステインに対する賠償金を要求するつもりだ。

王女の婿となるウェールズは、アルビオンの正当なる継承者というだけでなく、いずれはガリアの王となる身。

その刺客となった咎の重さは、いうまでもない。小国トリステインでは、支払いきれないような金額を要求し、そのうえで、国宝である「水のルビー」を賠償のための質として預かる、という手はずに持っていくのである。

ジョゼフは、おのが国の脅威となる「虚無」が邪魔。

リドルや真言は、ルイズを覚醒させるつもりはない。互いの利害は一致しているのである。

ちなみに、「虚無」に関することは知らないが、七季も、ジョゼフがハルケギニアを統一する意思を持っていることは知っている。

大まかな国家情勢くらいは把握しているから、妥当なところだろう、というのが、彼女の見解だ。

さておき。

こうして、異邦人たちのたくらみと、無能王との共犯関係は、ひそやかに進んでいくのであった。

そしてトリステイン王宮では。

ニューカッスル城の落城、およびレコンキスタ――貴族派軍の勝利の知らせを受け取ったアンリエッタが、悲痛な声を上げて卒倒していたという。

意識を失った王女をよそに、王宮の官僚たちはあわただしく動き始める。

その姿を、「オルタンシア」と呼ばれる黒髪のメイドが、レンズの奥の瞳で静かに見つめていることを、誰も知らずにいるのだった。

#216　始まらない物語ー秘宝と悲報ー（後書き）

あとがき

＞短くてすみません。

説明ばかりですが、いちおう補足として挟んでみました。

#２１７　始まらない物語ー使い魔の夜ー

「やっぱりアーチャーのご飯が、いちばん美味しい」
ほにゃん。
それはそれは幸せそうに笑み崩れる、黒髪の少女の童顔を、皆が微笑ましそうに見つめる中で。
ディルムッドだけがひとり、見たことのない七季の表情に、衝撃を受けていた。

先に入浴したテスタロッサファミリーはネグリジェ、パジャマ姿で。
そのあとに汗を流した才人も、スウェットに着替えての夕食である。
笑顔全開でおかずを食べる七季の顔を、じっと凝視したまま動かない黒髪の青年に、アーチャーはけげんそうに声をかけた。
「どうかしたのかね」
「あ、いや……あんなに嬉しそうに食事をする七季殿を見るのは、初めてで……」
ぱちぱちと金の目を瞬くディルムッドの言葉に、黒髪の少年が「へ？」とすっとんきょうな声を上げる。
「七季ちゃんって、いつもメシ食うときはあんな顔してるけど」
なあ？
「そうね」
才人の同意を求める投げかけに、食事の邪魔だからと、ダークヘアをまとめて結い上げた美女がこくりと頷く。隣に座るアリシアも

力いっぱい同意した。
「アーチャーの料理、美味しいもんね！」
「ランサーとのお食事は、違ったのですか？」
不思議そうに群青色のまなざしを向けるのは、ネコミミをカフェオレ色の髪からのぞかせるリニスだ。
山猫娘の問いに、ディルムッドは戸惑いのにじむ面持ちで、おずおずと肯定する。
「口に入れるものには、一通り警戒していた気がするな……」
槍兵の言葉に、アーチャーとリドル以外は皆、眉根を寄せてうなった。
「あれだけ食い意地の張った七季ちゃんが？」
食べ物にこだわらないやつは、人生の半分を損してる、とまで言ってのける子が？
才人が首をかしげれば。
「お姉ちゃんが、食べ物に警戒って……」
「でも土地が違うから、好みに合わなかっただけかもしれませんよ」
腕組みしてルビーアイを伏せるアリシアに、リニスがわかりやすいフォローを入れ。
「ああ、ナナキ、辛いものダメだものね」
納得したようにプレシアが相槌を打った。
だが、彼女の従者であるアーチャーとリドルだけは、何とはなしに想像がついていた。
だって七季がいたのは、乱世だったのだから。
――寄生虫とか食中毒、毒殺を警戒してたんだろうな。
そのへんは、「言わぬが花」というやつだ。せっかくの夕食の席で、わざわざ明かす必要もないだろう。
ちらりと灰藤色の双眸と、ルビーアイが少女をうかがえば、案の定、七季は苦笑のにじむ唇で、こくりと彼らに頷いてみせた。
＜ま、想像通り＞
「やっぱりほら、好みってあるからさー」

黒髪の少女は、つとめて明るい声を放つと、乱世の夢の中では食べることのできなかった、シンプルだけれど味わい深い、肉じゃがの甘さに、舌鼓を打つのだった。

「ところで……」

そろそろ夕食もあらかた片付き、食後のお茶がふるまわれるころ。ランサーのサーヴァントは、ふたたび疑問を投げかけた。

「彼は、いったい？」

ディルムッドが指差したのは、七季とは、少し質の違う黒髪に、血の色を思わせるルビーアイの少年。黒髪に白い肌ではあるが、東洋ではなく、西洋の顔立ちの美少年だった。

「ん。リドルだよ。ほら」

おいで、と七季が腕を伸ばすと、ふたたび黒猫に変化した闇の魔法使い――その記憶――は、かるがるとした身のこなしで、少女の胸へと飛びつき収まる。

「え」

「言ってなかったっけ。リドルは闇の魔法使いの記憶――まあ、悪霊みたいなもんで、ついでに変身の魔法が使えるから、ふだんは、にゃんこでいることが多いんだ。

私の使い魔だし、こっちの方が違和感なく、どこでももぐりこめるからね」

ね、と黒猫を抱く少女の、やわらかな頬に、すり寄ったリドルが、ぺろりと舌を這わせる。

「ああ、他の使い魔も紹介しておかないとな。エイプリルとメイは、ここにいるよな。東風（こち）は……ちょっとお使いに出してるから。

てか、とらは珍しく遅いなぁ。まだ帰ってきてないのかな」

「彼なら傭兵たちの詰め所で『遊んで』いるだろう。きょうは訓練の日だったはずだ」

横から、白い髪の偉丈夫のフォローを受けて、七季は「そっか」と納得した。

「じゃあ、あとであっちに回れば良いか……アーチャー、プラタもいるよな？」

「ここに」

黒シャツ姿だが、腰に帯びている剣はいつも通りだ。アーチャーが双剣のうち、一振りを鞘ごと手に取ると、そこからするすると白銀の液状モンスター――もとい、はぐれメタルが、男の腕へ這い上がってきた。

「これが、アーチャーの使い魔のプラタ。本体は、また別の姿なんだけど……ここじゃ、ちょっとな」

「そういえば真言、他のプラタ（分体）は、どこに連れて行っているんだ」

「ないしょー」

弓兵の問いに、ひらひらと白い手を振る栗毛の少女。

「……？」

けげんそうにしながらも、七季は、ディルムッドに、いわゆる「身内」の使い魔を紹介していく。

ディルムッドは、見たことのない使い魔を、まだ凝視していたが、プラタ（分体）が、するするとアーチャーのシースに戻っていくのを見ると、それでようやく目を逸らした。

「プレシアの使い魔は、傭兵の詰め所にいると思うから、あと回しな。

じゃ、アリシア」

ぽん、と姉貴分の手に背中を促された幼い子供は、ぬいぐるみみたいな使い魔を抱っこしていた。

「この子、エイプリルって言うの」

リビングに置かれたバスケットの中で、こりこりニンジンを食べていた白ウサギが、ツインテール幼女の腕に抱かれて、紅い目を青年へ向ける。

「こんばんは。僕はエイプリルです。お兄さんは？」
「なるほど……しゃべれるとは、まさしく使い魔だな。俺のことは、ランサーと呼んでくれれば良い。七季殿のサーヴァントだ」
アリシアの前に跪き、長い耳の小動物に話しかける青年の姿は、どこか微笑ましい。
「はい、ランサー。マスターともども、よろしくです」
ぴょこん。
猫みたいな、細く透き通ったヒゲを、ひくひくさせていたエイプリルは、長い耳のついた頭を下げてディルムッドへ挨拶した。
いっぽう、イタチに似た幻獣・エコーの挨拶は騒がしく、人に変化できる彼女は、アリシアくらいの幼女になって、元気にディルムッドへとまとわりついた。
「メイですっ。リニスお姉さまの使い魔やってますっ。よろしくですーっ」
体当たりよろしく抱きつかれたディルムッドは、誰かを思い出したのか、少し引きつった顔で、それでも穏やかに挨拶を済ませた。
「ん。よし、と。じゃあ私、お風呂入ってくるなー。行こか、リドル」
そうして黒猫を抱いたまま、リビングをあとにする七季の小さな背中を見送ったディルムッドが――リドルの「中身」が人間の男であることを思い出すのは、十分後のことである。

七季が入浴中のバスルームに乱入した黒髪の槍兵が、問答無用でアーチャーにボコられたり、ちょっぴりアクシデントはあったものの、ディルムッドはいま、マスターである少女に連れられて、この学院を守る傭兵の詰め所を訪れていた。
「おう。お嬢じゃないですかい」

「や。フラムさん、こんばんはー。とら、来てる？」
白い髪の男は、七季の問いに頷くと、彼女の隣に控えている従者の一人――ディルムッドを一瞥しながらも、七季主従を奥へと誘った。
いちおう外出なので、ディルムッドは聖骸布製の覆面で、顔半分を隠している。
「どうぞ。そろそろメシ時でね」
「ああ。これは差し入れだ。ささやかだが」
アーチャーの差し出すバスケットを受け取って、フラム――メンヌヴィルが喜色を浮かべた。
「こりゃありがてえ。旦那の料理は絶品だからな！」
「褒めても、これ以上は何も出ないぞ」
「お邪魔しまーす」
軽口を叩きながらも、アーチャーと七季、ディルムッドの三人は詰め所へと入った。

すっかり暮れた夜の訓練場に、篝火の赤を照り返す、黄金（きん）の毛並みが、夜風に揺れる。
「とら！」
「あん？」
夜闇に瞬く星の明るさを思わせるソプラノ。
呼ばれた妖獣が振り返るや、双槍を手にしたディルムッドが身構えるも。
「ディル、良い」
少女のたおやかな繊手が、それを制した。
「お腹すかない？」
笑いかける七季に、ふわり、と金の獣が宙を舞う。
「何でえ。見慣れないのが一匹いるな？」

「私の使い魔、従者だよ」
「いつのまに増やしたよ？」
とらの低い声に、少女のソプラノが歌うように絡む。湯上がりの黒髪は、いっそうつややかさを増して、夜の闇にも溶けんばかりに深かった。
そして七季が振り返る。
「ディル。こっちが『とら』。私の知り合いで、プレシアの使い魔ってことになってる……大妖だよ」
まがまがしいまでの黒いくまどりを面（おもて）に刷く、人語を解する魔性に、華奢な少女は恐れ気もなく触れる。
その光景が、どうにも男の胸をせきたてて、ディルムッドは七季の肩を抱き寄せていた。
「サーヴァント・ランサー。七季殿の従者だ。よろしく頼む」
「よろしくするつもりはねえがな」
磊落に、傲慢に、とらは笑う。
「なあ『贄の巫女』。コイツとも『遊べる』のかよ？」
「とらが、その気なら、ね」
ふ、とにじむような笑みで、黒髪の少女はそう返す。
「まずは顔見せのために、ここに来たんだ。せっかくだから」
言いながら、七季はどこからともなく、酒樽を取り出す。
樽は、重力に従って、どん、と地面に下ろされた。
「フラムさん。これ、とらと、みんなで召し上がってください。ああ、もちろん夜番の方以外で、ですよ？」
『おおっ！』
「さすがお嬢、話がわかるぜ」
トリステイン魔法学院を、警備している傭兵たちのあいだから、歓声が上がる。
「ついでに、こっちのランサーは、私の、新しい従者です。覚えてやってください。
ディル、顔見せついでに、きょうはここの人と飲んでおいで」

「あ、主。しかし」
俺は我が主を守るために。
ぽん、と背中を押されて、美貌の槍兵は、反論しようとしたが。
「しばらくは、ここでやっていくためにも必要なんだよ。アーチャーは、あのひとたちと戦ったこともあるし、実力は知ってるんだけど、ディルとは面識もないし、いざというときに困るだろ？」
だから敵と間違わないように、顔くらいは覚えておけ、というのが、七季の言い分だった。
「このひとたちは、学院の警備担当者だからね。手合わせすることも、これからあると思う。幸い、女性はいないから、安心しろって」
ぽんぽん、となだめるように背中を促されて、ディルムッドは口をつぐんだ。
「まあディルは潰されるほど弱くないから、酔っ払いの相手は大変かもだけどな。これも付き合いだ」
行っといで。
「主……」
まるで主人においていかれる犬みたいなまなざしが、七季に向かう。
「あ、そーだ。赤は使っても良いけど、黄色は使うなよ。あと、死んでなければ何とかするから」
抽象的で、なおかつ物騒な言いつけを残し、黒髪の少女は、弓兵と一緒に小屋へと帰っていく。
その、寂しげなたたずまいに、メンヌヴィルをはじめとする傭兵たちは、残らず「ああ嬢ちゃんの犬だな」という認識を刻み込んだとか、なんとか。

「道化は、踊るか……」
そのころ。

同じ夜の下、トリステインの王城に戻るワルドを、ひそかに追跡するシームルグのくちばしから、洩れる言葉を聞くものは、誰もいなかった。

#２１７　始まらない物語ー使い魔の夜ー（後書き）

あとがき

＞なかなか話が進みませんでしたが、どうにか一日が終わりました！（長すぎる）

地味な話ばっかりですみません。いやマジで。

使い魔たちの行動のフォローもいちおう入れておきました。

とらは、気が向くと傭兵たちと「遊ん」だり、東風（こち）は偵察に使われていたり、ディルは顔見せに飲み会に放り込まれたり……まあ、いろいろです。

オリ主が最後に言っていたのは、ディルの槍のことですな。

#２１８　始まらない物語ー誤算ー

――どうして、こうなった……？

いくら考えても、答えは出ない。

ただ、目の前にいる相手が、彼女を捕えた男たちの主であることだけは確かで。

「土くれ」のフーケ――マチルダ＝オブ＝サウスゴータ――は、えらく頑丈な鎖に縛られたまま、夜色の髪の異邦人を、見上げるほか、術はなかった。

それは、美貌の槍兵、ディルムッドがハルケギニアに降り立った、翌日のこと。

隣国・アルビオンが落ちたからといって、それはあくまで他国の事情。

かの国を落としたレコンキスタが、次に何を狙うのかなど、真言とリドル以外は知らないわけで。

自分の武を、どうにか七季の役に立てたいと願う、魔貌のサーヴァントは、授業の合間に、うら若い主を困らせていた。

「いや……だからね、ディル。ここはいちおー乱世じゃないんだぞ？そんなにがっつくもんじゃないよ。ディルにとっては物足りないだろうけど……」

休み時間に、紫黒のアイマスクをつけた従者を、そう言ってなだめる黒髪の少女を、周囲はぎょっとした面持ちで見つめている。おそらく一日の授業が終わるころには、新たなうわさが学院を駆け巡っていることだろう。

その引き締まった痩躯に、深緑のマントを身につけた青年は、首から下までは十分に「騎士」で通るのだが。

封印の確かさから、ライダーの宝具である「自己封印・暗黒神殿（ブレーカー・ゴルゴーン）」を装着しているため、どこからどう見ても危ない人に見えてしまう。もしくは何かのプレイ中とか。

おまけに、そんなディルムッドを、さも当然のように、七季が従者としてふるまっているのだから、これで憶測を呼ばないわけがない。

若干名、この新たな組み合わせの主従を眺めて、ハアハア言ってる生徒がいたりするが。

「三角関係？　三角関係ですの！？」

「サー・アーチャーも認めているということかしら……？」

「羨ましいハアハア……ちょ、そこ代われ！」

まあわかりきっていたことなので、プレシアたち、留学生ご一行は、なべてスルーの方向だ。仕方ないったら仕方ない。

「しかし我が主。俺は、この身をもって仕えるしか他に能のない男で――」

「ならばマスター、こうしてはどうだろう」

あまりにも言葉選びが誤解を招く方向だったので、自分の言をもってアーチャーが遮ったのは、ある意味、当然のことだった。

――これだから天然は！

ただいま彼のないしんを知るものがいたなら、おそらく問答無用で「お前が言うか！」とツッコミが入ること確実な思考ではあったが。

「先日の話、ランサーも加えてはどうかね」

＜先日？＞

＜我々にとっては、けっこう前の話になるが、ギルドの依頼を受ける、という話だ。短期の依頼に限定すれば、その日のうちに戻ってくることも可能だろう＞

＜ああ＞

念話でやりとるする黒髪の少女と、長身の偉丈夫は、はためにはアイコンタクトで会話しているようにしか見えないので、これまた一部の少年少女の誤解――もしくは妄想――をかき立てていたりするのだが、それは蛇足というものか。

「さすがサー・アーチャー……余裕だ……」

「新参者には負けないと、そういうことですね！」

「もしかして、三人で……？」

「おい、サイトに聞いてこようぜ」

特に男子生徒が大盛り上がりである。

――おーい、自重しろー。アーチャーさんに聞こえてっぞー。

ないしんだけでツッコミ入れている才人である。七季一行と生活を共にして以来、かなり彼も神経が図太くなったものだ。

いっぽうスルースキルぴか一の七季は、外野をよそに、ふみふみ頷く。

「そっか。そうだな」

戦力が増えれば、それだけリスクは減るだろう。

そんなわけで、弓の騎士と槍の騎士、そして異邦の少年を加えた、急造スリーマンセルが、ここに誕生したのだが。

転移魔法で出向いた彼らが、トリスタニアのギルドから受けた依頼というのが、羽振りのいい商家の警備だったのだ。

才人もいるし、初めての仕事ということで、アーチャーは、わりとかるめのもの――日払い・日雇いだったのだ――を選んだのだが、それがフーケにとっては不運だった。

トリステイン魔法学院に、そこそこ近い、その屋敷の主人は、高官と癒着しているともっぱらのうわさで、貯め込んでいることは確実。

ちょろい仕事だと思っていたのに、蓋を開けてみれば、魔法を無

効化するメイジ殺し――ディルムッド――はいるわ、一発必中のアーチャーはいるわ、さんざんであった。

才人あたりは「無理ゲーだよなぁ」と胸のうちでツッコんでいたくらいである。

もちろん、あっというまに「土くれ」は捕まってしまったのだが。

「アーチャーさん、このひと」

捕えた「フーケ」の顔をのぞきこんだ、黒髪の少年の呼びかけに、白い髪の偉丈夫は苦い声で、その名を呼んだ。

「……ミス・ロングビル」

特徴的な緑のロングヘアに、切れ長の双眸の美女は、どこからどう見ても、オールド・オスマンの秘書であった女性である。

「どうした？」

アイマスクをつけた黒髪の青年だけが、けげんそうな声で、雇い主に連絡しようとするが、それを残りの二人が制止した。

「どうするんですか、これ」

「……仕方あるまい。マスターに相談しよう。

『フーケ』は撃退した。我々の仕事は、屋敷の警備で、『フーケ』の捕縛ではないからな。盗まれたものも取り返したのだから、問題はあるまい」

やれやれと嘆息するアーチャーは、それでも抜け目なく、緑の髪の美人から杖を取り上げ、「天の鎖（エルキドゥ）」でぐるぐる巻きにする。

まだ納得のいかなそうなディルムッドを、おざなりになだめると、赤い外套をまとう男は、雇い主に、盗品の奪還を伝えて、きょうの警備を終えた。

「おっかえりー」

その日の夜半。

ぱたぱたと玄関まで出迎えに来た、少女のかろやかな足音が、春

の闇に響く。
　例によって、場所は「サロン」――七季たちのセカンドハウスである。
「お疲れさ……ま？」
　出てきた小柄な少女は若草色のパジャマに身を包み、胸にリドルを抱いたまま、こてりと首をかしげ、結い上げたポニーテールもひょこりと揺らして、従者の持ち帰った「土産」と、アーチャーの顔を見比べた。
「新しいお嫁さん候補？」
「何でさっ！」
　そんな主従のボケとツッコミに、彼らの背後で才人が噴き出していたことは、いうまでもない。

#２１８　始まらない物語ー誤算ー（後書き）

あとがき

＞というわけで、フーケ回収。

アーチャーが引き合いに出した「話」は、「＃１２３」に出ています。やーっと伏線が回収できた。

まあ、ふつーに才人とアーチャーだけでも無理ゲーですが。

ディルムッド加えたら、鬼に金棒でしょう。

ゴーレムのっけから大破ですよ。おマチさん涙目。

#２１９　始まらない物語－騒がしい夜－

「どうして連れてきてくださらなかったの！？」
アルビオンから帰還したワルドに、少女はワイン色の髪を振り乱し、感情のままに詰め寄った。
レコンキスタ率いる、貴族派の勝利――すなわち王党派の敗北――は、ウェールズ王子の命をも、ないものと決めつけるにじゅうぶんな悲報だった。
それがトリステインの王宮にもたらされたのちの、ワルド帰還である。
アンリエッタの密命を受けてアルビオンに飛んでいた男が、責められないはずがない。
――ウェールズさまがトリステインに亡命していれば。
もっとも、あくまでそれは、アンリエッタ個人にとっては、であったが。
「……畏れながら」
ワルドは、顔を伏せたままで、トリステインの王女へと返答した。
「ウェールズ殿下は、ご自分がトリステインに赴けば、レコンキスタが我が国を攻める口実になってしまうと仰せでした」
「そんな……！」
肩口でそろえられたワイン色の髪は、悲痛に歪む白い面輪を灯火の下にあざやかにふちどる。まるで血の色のように。
「そして姫殿下は、私に『手紙を受け取ってきて欲しい』と仰せでしたが……亡命を勧めるように、とは仰いませんでしたな」
どこか冷ややかな男の声が、アンリエッタの激情を逆撫でする。
レコンキスタ勝利の知らせが、王宮に届いてからこちら、王家の血を引くこの少女は、半狂乱だったと言っていい。

恋しいウェールズの身を案じながら、その身柄の安否は、ほとんど絶望的だった。

だというのに、傷つくアンリエッタをよそに、宮廷の貴族たちは、おのおのの政治的な立ち回りに忙しく、王女の悲嘆には気遣うそぶりすらない。

まあ、既にレコンキスタの勢力が根を張る宮廷では、ある意味、当たり前のことではあったのだが。

「僭越とは存じますが、ウェールズ王子の言は正しいと、私も思います。

レコンキスタを率いる代表は、伝説の「虚無」の使い手だとか……詳細まではわかりませんが、アルビオンを落としたほどの力です。警戒して、しかるべきかと」

「何て、何てこと……」

ワルドの前に立っていた少女は、その美貌を憤激の色に染めて、きつく拳を握り締めた。

ウェールズを救うことができなかった、おのが無力さを腹立たしく思いながら、アンリエッタは、いっぽうで恋する相手を失った悲しみに溺れる。

内乱の起こった国から帰ってきた騎士をねぎらう言葉もかけず。

「それで、手紙は……」

ようやく、のろのろと肝心の密命の成果を問う王女に、ワルドは頭を下げたままで首を振った。

「ウェールズ殿下は、そのような手紙に、お心当たりはないとのことです。

『仮に、そちらの言うような『手紙』があったとして――このような状況では、とうに燃えている可能性が高い』とも仰っておられました」

「そう、ですか……」

がっくりとうなだれる少女。

恋の形見すら、持つことが許されない自分を、アンリエッタは哀

れんだ。
――ウェールズさま。
赤紫の髪の少女は、その脳裏に、金髪碧眼の貴公子を思い描く。
彼も、アンリエッタの名誉を案じてしたことなのだろう。
じっさい、彼女の思惑とは違うところで、その「手紙」は、ウェールズの手によって燃やされていたのだが。
そうしてようやっと、国を隔てた王子と王女の恋という、一つの物語を終えた――終えざるを得なかった――少女は、目の前の騎士に、ねぎらいの言葉と、わずかばかりの褒賞を与えて帰したのだった。
「ご苦労様でした……これは、貴方の働きに対する、心ばかりの感謝です」
それでも、不満は、まなざしや声ににじんで、隠しきれていない。
そんな、「正直すぎる」王女の行く末に、ちらりと思考を割いて――ワルドはすぐにかき消した。
――しょせん、国を失う運命だ。
部屋を辞した騎士の口端には、嘲笑がにじんで影を作っていた。

いっぽう、同じトリステインでも、王都から遠く離れた魔法学院の――さらに少し離れた、とある小屋では。
「アチャ男……ナナちゃんというものがありながら、堂々と新しい女の子を連れ込むとは……」
ちゃきり。
しらじらと灯火を弾く神剣の白刃が、「フーケ」を抱えた長身の偉丈夫に突きつけられる。
畢竟、いっしょくたにフーケの顔の横にも神剣がかするわけで。
――ひいいぃ!?
凄まじいプレッシャーを放ちながら、いまにも刃物をふるわんと

する、栗毛の美少女に、緑の髪の美女は力いっぱいドン引きしていた。

「誤解だっ！」

不名誉きわまりない言いがかりに、即座に反論するアーチャーだが、その横から、のんきっぷりもここにきわまれり、とばかり、のほほんとしたソプラノが割り込んでくる。

「ええと……私は、かまわないですよ？　アーチャーを大事にしてくれる人なら、仲良くできると思いますし」

若草色のパジャマをまとった少女は、そのたわわな胸元に、両手をそろえて恥じらいの色を浮かべていた。

「私もその、さすがに最初から鎖は……ちょっとハードかなって。ええと、痛くなければ縛るくらいはオーケーですけど。最初は、やっぱり目隠しくらいが妥当じゃないかと思うんです」

くりっとした大きな目の、目元をほんのり染めながらのたまうセリフではないだろう。

ぎしりと固まるアーチャーの背後で、才人が外へ駆け出した。

「俺、ちょっと刻ってくる！」

ダッ。

刻る＝丑の刻参りをしてくる。ゆーしー？

捏造単語はさて置いて。

「え……その……我が主は、アーチャーと、そういう関係で……？」

ディルムッドが、目を白黒させながら、ポニーテールの少女と、赤い外套の英霊をかわるがわる見比べている。

「言ってなかったっけ？　あ、僕とプレシア、リニスもナナキの『嫁』だから。そこんとこよろしく」

ひょこりと七季の懐から首を伸ばしたリドルの言葉に、「フーケ」が、突きつけられる白刃の恐怖も忘れて、興味津々の面持ちで聞き耳を立てる、カオスな光景が、収まりをつけるまで――あと五分。

#２１９　始まらない物語ー騒がしい夜ー（後書き）

あとがき

＞ワルドが王宮に帰還。

まあアンリエッタに責められるかなと。

「オトモダチ」のルイズ相手ならともかく、王族としちゃ、言ってはいかんセリフだと思うんですが。

さすがに臣下である、近衛の騎士相手ですから「私を愛していらっしゃらない～」のくだりは言わないでしょうが、そのかわりに、こんな感じになりました。

違和感があったらすみません。

後半を書くのは楽しかったです（笑）。

かるくリドルがぶっちゃけてますが、まあ、そういうことで流してください。

そうそうに槍兵にカミングアウト。

※「刻る」は読み手さまからネタをいただいた造語です。アイデアありがとうございます！

#２２０　始まらない物語ー天国の階段ー

「とまあ、ちょっぴしアダルトな、夜のジョークはさて置いて」
爆弾発言をした「神使（しんし）」の少女は、けろりとした顔で、固まっている浴衣姿の美少女――真言から、ひょいと神剣を取り上げた。
「心配してくれるのは嬉しいですけど、これはしまいましょうね、先輩」
ないない。
ほんわか穏やかなソプラノで話しかけ、器用にもリドルを抱いたまま、きちんと神剣を鞘に収める七季。
その代わり、とでもいうかのように、つややかな毛並みの黒猫を、彼女はおのが懐から、真言へと差し出して、そのやわらかな胸に抱かせた。
ぽすん。
「あ、ディル。平賀君、回収してきて」
「は」
白い指先と共に、ひょいと投げられた命を受けて、どこかおたおたしていた黒髪の青年が、アイマスクをつけたままで、さっと深緑のマントを翻し、夜の中へ消える。
そして若草色のパジャマをまとった少女は、ととっと残る従者に近寄ると、その身長差を埋めるために、かるくジャンプしてアーチャーの首にしがみついた。
「おかえり、アーチャー」
ちゅ。
男の、褐色の頬に、やわらかな唇が触れる。
「『ただいま』は？」
きらきら光る、夜色の大きな瞳に間近から見つめられて、硬直し

ていた男が、ようやく動きを取り戻す。
「……ただいま、マスター」
「ん」
少女の頬に、少しかさついた男の唇が寄せられた。そしてようやく七季は弓の騎士から離れ、ととん、と床へ着地する。
「ナナちゃん……さっき絶対、素だった……」
まだ後輩のトンデモ発言に照れて、頬が赤い、栗毛の美少女がぶーたれるのに、七季はにぱっと笑って受け流す。
「そりゃー八割くらいは本気ですから」
「いや物凄い発言してたよね！？」
「んー。アーチャーが新しいお嫁さんを連れてきたら歓迎するのは本当ですよ？
ただアーチャーは、外でそーゆーことするほど、節操なしでもアレな趣味でもないですし、女の子に酷いことするような性格もないですから。
順当に考えて、まあ悪いことしてた人を、とっ捕まえてきたんだろうな、とは思いましたけど」
確信犯だったらしい。
いっぽう白い髪の偉丈夫は、マスターである少女の発言に、信頼が厚いことを喜べばいいのやら、それともすっとんきょうな前半部分にどうツッコめばいいのやら、苦悩している。
「まあともかく」
黒の似合う、異邦の少女は、夜の中にも浮き上がるほどの存在感でもって、盗賊「フーケ」を迎え入れた。
「中へどうぞ。ミス・ロングビル」

あさっての方向へ走っていた少年を、ディルムッドが無事に回収し、刃を（強制的に）収めた真言が、ぶーたれながらもテーブルに

つき。
　アーチャーが、鎖で縛ったままの緑髪の女性をイスに座らせたところで、短い説明が始まる。
「――というわけで、仕事先で捕えたはいいものの、正直、あつかいに困ってな」
　スリーマンセルでは責任者であった弓兵の言葉に、なるほどと七季は目で頷いて、「フーケ」である女性に視線を投げた。
　軽蔑でも嫌悪でもない、まっすぐな目に、じっと見つめられる居心地の悪さが、彼女の挙動を落ち着きのないものにする。
「……あたしを、どうするつもりだい？」
　この一行の中で、七季が中心人物であることは、女盗賊にもわかっていた。
　きょう彼女を捕えた男たちは皆、この黒髪の少女の従者ばかりなのだから。
　しかしマチルダ――「土くれ」のフーケであり、オールド・オスマンの秘書であるミス・ロングビルである――には、この少女が、いったい彼女をどうするつもりなのか、本気でわからなかった。
　相手が中年親父の貴族なら、マチルダの豊満な体を弄ぶ可能性もあったけれど、相手は女。しかも、うら若い娘だ。
　マチルダの体に用があるとは思えないが。
　――いや、でも従者に与える、って可能性はあるのか。
　ちらり、とマチルダの、琥珀の双眸が長身の男ふたりと少年ひとりを舐めて過ぎった。
　貴族というものは、どんなに善良に見えても、裏の顔がある。たとえ少女といえども、残酷なことを考えつかないとは言い切れない。
　だが、ないしん恐々としているマチルダをよそに、パジャマ姿の異邦人娘は、いたわりに満ちたソプラノで、まずは戻ってきた従者をねぎらった。
「とにかく、お仕事お疲れさま。ディル、アーチャー、平賀君。遅くまで大変だっただろ？　お風呂沸いてるから、平賀君とディ

ルは、ゆっくり入っておいで」
「お、マジ？　良いの？」
「もったいないお言葉」
黒髪の少年と青年は、それぞれに目をかがかせると、ぺこりと頭を下げて、部屋の奥――廊下の向こうへ消えていった。
残ったのは、アーチャーと真言、それから彼女の胸に抱かれたリドルである。
「プレシアたちは、もう休んでいるのかね」
「うん。アリシアと一緒だから。アーチャーたちを待ってる、って言ったんだけどね。子供に夜更かしは毒でしょう？」
「君たちにも夜更かしは勧められないのだがな……」
灰藤色の鋭い目を細めて、七季を見下ろす男のまなざしは保護者のそれだ。これが今夜、マチルダを撃ち落した男なのだろうかと、思わず彼女が思ってしまうほどに、優しげな色が含まれていた。
――こりゃホントに恋仲かもしれないねえ……。
こんな状況だが、マチルダとて女性である。学院内のゴシップには、一通り精通していた。
もちろん、赤い外套をまとう偉丈夫と、そのマスターである少女にまつわるうわさも、いろいろ聞き及んでいる。
さて、どうしたら、この主従と――ついでに、刃物を突きつけた、栗毛の少女を出し抜けるだろう、とマチルダがないしん知恵を絞っていると。
「じゃあミス・ロングビルには、天国に行ってもらいます」
そんな無慈悲なセリフが、七季の唇から歌うように紡がれた。

「あ、あ、あ……ッ」
「ふぅ……あ、いい、ぅん……」
「こうですか？　ここ？　凄いですね……わかりますよ、こりこり

してるの」
「あ、痛っ」
「痛かったですか？　ごめんなさい。優しくしますね？」
「マスター……」
「あ、アーチャー。ダメ、出てかないで」

別室に連れ込まれたマチルダが、アーチャーに運ばれ、七季と共に、その部屋から出るころには、すっかり緑髪の美女の体は、くったり弛緩して、その頬を恍惚に染めていた。
「……ナニしたの、ナナちゃん」
「大丈夫です。私に任せてください」ときっぱり言い切った後輩の少女に押し切られ、何となく、手持ち無沙汰に待っていた真言は、マタタビに酔った猫みたいに幸せそうな顔で伸びている美女を見て、ドン引きしていた。
その元凶は、間違いなく七季だからだ。
「ん？
心と体のマッサージをしただけですよ？」
まぁちょっと、えっちぃことも、ちょっとだけしましたけど。
「大丈夫、同意の上で、傷一つつけてません！」
にっこり。ぺっかり。
後光の射すような、眩しい笑顔で、ひとかけらも悪びれることなく晴れ晴れと言い切った少女の隣で、褐色の肌のせいか、わかりにくく紅くなって目を逸らす男がいたとか、いないとか。

#２２０　始まらない物語ー天国の階段ー（後書き）

あとがき

＞オリ主がナニしたかは、ご想像に任せます（爆）。

いろいろ知ってからは、さらに説得スキルが上がったオリ主です。

チートな先輩とは別の意味で取り扱い危険物。

#221　始まらない物語ー新たな熱ー

さて。

色んな意味で、一部に限り、平和なトリステインから、いったん舞台を移してみよう。

まずロマリア。

教皇である聖エイジス三十二世――ヴィットーリオ＝セレヴァレ――と、一人の助祭枢機卿――ジュリオ＝チェザーレ――を失った「光の国」が、どうなったかというと。

上へ下への大騒ぎ、というには、少し微妙な動きをしていた。

まず発覚した、教皇の不在。

これを隠すことが第一。ただし、共にいなくなった、ヴィットーリオの腹心、ジュリオについては、助祭枢機卿という高くない身分のために捨て置かれた。

幸か不幸か、いてもいなくても、ふだんから教皇の使い魔として、あちこちを飛び回っている彼については、大して気にするものがいなかったのだ。

次に、宗教国家であるロマリアの上層部において、新たな教皇になるための工作が、それぞれの水面下で熾烈なものとなっていた。

「長く教皇の座を空けておくわけにはいくまい」

「次の教皇にふさわしいのは……」

「伝統あるブリミル教の教えに忠実なのは」

ロマリアは、それぞれに派閥があるものの、基本的にはトップダウン方式で、王国の専制君主制に近いものがある。

ようするに、どういうことかというと、誰もが「教皇」という、いちばん高い玉座に座りたがっている、ということだ。

消えてしまった「新教徒教皇」よりも、改革を心よく思わない保守派――ようするに権威をかさに着て、私服を肥やす聖職者たち―

―は、我先に、その後釜に座るべく闘争を開始したのである。
現状、いなくなったヴィットーリオを捜索する手勢は、貧民の救済と、腐敗する神官や寺院組織の改革に力を注ぐ「改革派」のうち、ごくわずかであった。
才知に長けたヴィットーリオは、ある意味ワンマンであった。
ゆえに、その優秀なトップがいなくなると、真面目な配下たちは、政治に長けた、老獪なものたちに対抗するのもせいいっぱいで、その大半が動きを抑えられてしまったのだ。
「あの方は、ロマリアの希望だというのに……！」
「まさか、利権にこだわる保守派が何かしたのでは」
「あれほど身を謹んでいらっしゃる方に」
「おお、何と罪深い……！」
贅沢を遠ざけ、寺院組織の腐敗を一掃しようとしているヴィットーリオには、敵も少なくなかった。
それを、配下のものたちはよくよく知っていたのだ。
行方不明になった教皇をよそに、ロマリアでは権力争いの渦が加熱し、アルビオンの反乱など、まったく眼中にもないありさまだった。

いっぽうゲルマニアでは、アルビオンの反乱についても静観の構えだった。
表向きとしては。
ただし、その水面下では、貴族派が連なる、レコンキスタという組織についての調査と、その不穏分子がおのが国にもひそんでいないかという諜報にやっきになっていた。
そもそも帝政ゲルマニアの皇帝である、アルブレヒト三世は、熾烈な権力争いを勝ち抜き、親族や政敵をことごとく塔に幽閉して皇帝の座に就いた男である。

その影には、常に暗殺の危険がつきまとい、謀略の影があったことは、想像に難くない。

彼は狡猾で用心深く、そのうえ貪欲でもあった。

四十代という男盛りの年齢で、まだまだ皇帝の座を奪われる気も、譲る気もさらさらないアルブレヒト三世は、まず国内の不安要素を徹底的に潰す方策に出たのである。

それが実を結んだかどうかは、また別の話にしよう。

そしてガリア。

アルビオン戦役について、切っても切れない関係がある大国では――。

「イザベラ姫、ああイザベラ姫！

私も魔法が使えなくなって、君がどんなに苦労してきたか、ようやくわかった気がするよ……！」

「ウェールズ、あんた……」

同じ泰山麻婆の餌食になった金髪碧眼の貴公子と、水髪青眸の王女が、同じ危機の中に叩き込まれたことによって、絆を育んでいたりした。

「イザベラで良い、って言っただろ！

あんたは仮にも、あたしの旦那になる男だよ。もっとしっかりおし！」

ぺしん、とウェールズの胸を叩く少女の手は、言葉ほどのそっけなさはない。

「でもウェールズ、あんたよくもまあ、一晩で起き上がってこれたねえ。あたしのときは、三日三晩ばかりも寝込んだっていうのに……」

ちょっと呆れのこもったブルーアイで見上げられて、美貌の青年は、てらいのない笑顔をイザベラへと向けた。

「さすがに可憐な姫君並みに寝込んでいるわけにはいかないよ。これでも軍を率いていた身だからね」
それに。
少し言いよどみはしたものの、ウェールズは、からっとした笑い声を上げて、やけに力強くサムズアップした。
「君の父上の料理は、死ぬほど辛いが不味くはない！
わがアルビオンの料理に比べれば……うん。何でもない……」
後半のセリフには、顔に影を差しながらの王子である。いったい何があったのか。
王族とはいえ、戦時中に、まっとうな料理が出るかどうかは、また別問題、とだけ言っておこう。
そのとき、アルビオンの料理の不味さが有名なことを、青い髪の少女は思い出していた。
――そんなに酷いもんなのかねえ？
「いやええと。あのマーボって料理は、元騎士団の罪人も悶絶したんだけどね……？」
イザベラは、ちょっとツリ目ぎみな美貌に汗を浮かべつつも、「さすがは王族ってことかねえ？」と呟いた。
「ともあれ、さすがに魔法が使えないまま、戦場に出るというのはよろしくない。
義父上は『覚悟ができたら、やって来い』と仰っていた。すると、この魔法が使えない状態を脱する術があるということだ」
ジョゼフお手製の泰山麻婆を食べて、魔法が使えなくなってしまった王子は、きりりと顔を引き締めてイザベラの前に立つ。
「この三日、イザベラと一緒に何かをするのは、正直、とてもためになったよ。君をもっと知ることができた」
うるわしき青年の言葉に、水髪の少女が白い頬をかあっと染め上げる。
「だから、なおさら私には力が必要だ――君と、民と、この国を守るための」

ウェールズの青い眸は、若々しい決意に満ちてかがやいていた。
そのまなざしに射抜かれて、イザベラの胸がとくんと脈打つ。
「行ってくるよ。君の『旦那』になる男だからね」
それが弱くちゃ、話にならない。
青年もまた、面映そうに目尻を染めて、その端正な顔で言ってのけた。
「っ……ったりまえだろ！
しくじったら、容赦しないよ！」
向けられたウェールズの背中に、景気づけとばかり、ばしんと強い手のひらが打ち込まれた。
その熱さに似た痛みは、恋を失って間もない青年の胸に灯った、新たな炎のようだった。

#２２１　始まらない物語ー新たな熱ー（後書き）

あとがき

＞章タイトルが「魔法中年ダンディＪＯＺＥＨＵ」なのに、ジョゼフが出てこなくてすみません。

王様の見せ場は、どっちかというと政治的な部分なので……。

仕事してるんですよ、ジョゼフ。麻婆も作ってるけど。イザベラに教えてるけど。

そしてウェールズも洗礼を受けました。

このあと念能力に目覚めるよ王子（待て）。

ロマリアとゲルマニアはオマケ程度のあつかいです。

かたや権力争い、かたや地盤固め。それぞれに忙しいです。

教皇がいなくなっても、実質、あんまり困らないんじゃないかなー、と。そんな想像で書きました。

まじめな聖職者たちだけが、一生懸命です。エイメン。

#２２２　始まらない物語ー共犯者ー

くぁ。

授業中。まるで猫みたいに、大口を開けてあくびをする黒髪の少女に、ぽすりと褐色の手のひらが降る。

「はしたない」

「うぅ……ねむねむです。むしろ誰のせいかと」

「さてね」

ミス・ロングビルあらため――マチルダ＝オブ＝サウスゴータを、トリステイン魔法学院と同額の給料と、七季のスペシャルなマッサージというオプションで懐柔してから翌朝。

そのあと従者に美味しくいただかれた異邦人娘は、しれっとした顔つきのアーチャーに恨みがましげな目を向けつつ、「やっぱ男前だなぁ」などと、だいぶ惚気の入った感想を抱いていたり。

＜しかしまあ、よくも彼女を味方に引っ張り込めたものだな＞

そんな精悍な横顔の従者から、念話が飛んでくる。

＜何か頼みごとをする相手には、サービスするのが基本だろーもん。まあ、体も心もお疲れみたいだったしね。たっぷりじっくり手をかけて解しましたとも＞

そして七季は、彼女の心がリラックスしきったところに、ここぞとつけ込んだのである。

それまで、いわば小規模な孤児院を、マチルダ一人の稼ぎで支えてきたようなものなのだ。

当然ながら、彼女じしんは最低限の――「フーケ」の稼ぎをもってしても――切り詰めた生活をしていたため、自分自身のケアは十分とは言いがたく。

貴族の生活を捨ててから、久しぶりに他人から受けるマッサージ

や、その他お手入れに思わずうっとりしてしまったことは、マチルダ最大の誤算だったといえよう。

否、誤算はむしろ、七季という少女の存在、そのものだったかもしれない。

とにもかくにも、予備知識なしで、マチルダの事情をおおまかにでも看破した七季は、彼女を土の魔法の家庭教師として雇う代わりに、「フーケ」から足を洗うよう取引を持ちかけた。

じつは七季は、メンヌヴィルも、火の魔法を教わるために、個人的な契約を結んでいたりする。

もっぱらアーチャーのために。

火の魔法の素養がある従者に、少しでも実用的かつ深い知識を身につけさせたいと七季は望んでいた。

コルベール教諭と、異世界トリップ一行の間には、使い魔召喚の儀式以来、深い溝があったし、そのときから彼女は、コルベールに頼らない、火の魔法の師を求めていたのだ。

もっとも、いまやコルベールは魔法学院を辞職するはめになったが。

そして土の魔法。

こちらは、アーチャーだけでなく、リドルにも素養がある。

いうまでもなく、土の魔法の教師、シュヴルーズと彼らの関係は良好だが、一人の師では、やはり教えることに限りがある。

その点、いっては何だが、裏家業に手を染めてきた「フーケ」――マチルダには、シュヴルーズにない融通がきいた。

宝石や金属の相場や、買い取り業者に関する風評、取引についてのセオリーなど。ようするに世間ずれしているのだ。

そういう、ちょっと「裏」の知識が欲しいのだ、という七季の持ちかけは、意外とあっさりマチルダに受け入れられた。

何というか、いままで金銭のやりくりをしてきたマチルダにとって、財テクに関する少女の知識や言い分に、かなり興味と共感をそそられたらしかった。

もちろん報酬も魅力的ではあっただろうが。
それ以前に、思いのほか七季が「話せる」性格であったことが、共犯者となる選択を後押ししたのは確かだった。
＜ともかく、これで宝石だの水の秘薬だの、売却するときに買い叩かれないための戦力ができたってことで＞
＜本当に良かったのかね？＞
＜あとで先輩に聞いた話だと、妹分のためって話だったしなぁ……何かその子、人前に出ると殺されちゃうような立場なんだろ？＞
七季としては、同じシスコンとして、妹を守ろうとする気概は共感できる。
ただ妹が、姉の犯罪を知った場合――烈火のごとく怒るか泣くか、だいたいどっちかなのは、目に見えている。
七季はそう言ってマチルダを説得したのだ。
盗賊は、一生続けていけるような「商売」ではない、と。

「だからいっそのこと、孤児院を作ってしまえば良い、とはね……」
あろうことか、妹分であるティファニアほどの少女の、手練手管に篭絡され――あまつさえ、これから先の未来を示されてしまった元「フーケ」は、宝物庫のチェックをしながら、ためいきをついていた。
けれども、それは重いものでは決してなく、どこか苦笑じみたものだ。
七季は、孤児院を作るための金を、無利子で彼女に貸し付ける、と言った。
ただし建物は、アーチャーやリドルの授業がてら、魔法で作ってしまえば良い。実質かかるのは、土地の代金と孤児院の登記にかかる諸経費、それから生活費だ。
そして、七季のアドバイス通り、トリステインかガリアに孤児院

を作るのであれば、いままでよりも、ずっと生活費――ティファニアたちにかかる――は安く上がるのだ。

アルビオンは食事が不味いという。

しかしそれは、他国に比べて、土地がやせている――すなわち、食べ物が豊富でないことも、理由の一部を占めている。

美食を極める、とまでは言わないが、食事に工夫を凝らすより、まず食べられることを優先した結果ともいえるが、ようするに、作物の価格が、よそよりも高いのだ。

いまティファニアたちは、アルビオン王国のサウスゴータ地方、そのウエストウッド村に身を隠している。

だが、七季の提供する、フェイスチェンジのかかったマジックアイテムによって、表を歩けるようになるのなら、何も隠れ住む理由はなくなり、より住みやすい場所に移ることができるだろう。

もちろん、そのマジックアイテムだって、タダではないが、その代金も、やはり「貸し」で、マチルダの働きで返すことになっている。

彼女の給料――七季が、支払うぶんの――は、半分を、借金の返済に充て、実質、残り半分を現金で手渡される。

それでもかなりの金額だし、魔法学院の秘書は兼業で良いというから、そちらの報酬は、まるまる残る。

しかもマジックアイテムは先渡し。ティファニアたちを迎えに行くのも、送迎をしてくれるという、まさにかゆいところに手が届く、至れりつくせりっぷりだ。

あまりにも都合が良いので、さすがに恩知らずとは思いながら、疑問を投げかけたところ。

「いや……おマチさん、美人でしっかりしてるのに、苦労が顔に出始めてるから……」

同じ女として、放っておけなかった、と、やたらしみじみした声音で言われてしまい、ぴきりとマチルダが固まってしまったのは余談である。

「なんつーか、状況的にシングルマザーだよね？
しかも親兄弟は死んじゃって、妹だけじゃなくって、他にも子供抱えてるとか……」
だからって犯罪に走って良いわけじゃないんだけどさ。
「たぶん妹さん？　その子をほっぽっちゃえば、おマチさんは、もっと良い暮らしもできたと思うんだ。
美人だし、気立ても良いし、しっかりしてるし。それに貴族じゃなくなっても、メイジには違いないしね」
でも、あなたは妹さんを、捨てたりしなかった。
「だからかな。うん……だから、大丈夫かなって思った。
私にできるのは、後押しくらいだけど。そしたらあとは、おマチさんなら、自力で幸せつかめるくらい、強いだろうなって思ったから」
それと。
「うち、孤児というか、親と縁の薄い知り合いが、意外といてさ。それもちょっと理由かな」
リドルは、かつて母親が魔女とバレて父親に捨てられ、残された母親にも先立たれ、孤児院で育った。
エミヤシロウは、聖杯戦争によって家族どころか記憶ごとなくし、養父に引き取られるも、その彼も亡くす。
そして七季の幼なじみである伯言――彼も、幼い頃に、両親を交通事故で亡くし、七地家で半ば面倒を見ていた。
イトコである白兎（しろう）と棗（なつめ）もまた、両親を早くに失い、切嗣に引き取られた子供たちだ。
そういうことだから、七季は家族と縁の薄い相手に対して、少しだけ甘い。
そういう境遇で苦労してきた人間を、知っているから。
もともと差別意識が薄く、そのうえ彼女には人類愛に近い、博愛主義なところもあって、自分と身近な人間に害のない相手には、寛容なのだ。

「やっぱり、大事な人と一緒の方が良いよ。その妹さんも、お姉さんの側にいたいと思ってると思うよ？」

それは揶揄も裏もない、とてもまっすぐな瞳で紡がれた言葉だったので。

マチルダは、七季のそのまなざしに、愛すべきティファニアを重ねてしまい、それ以上の反論はできなかったのだ。

――ああもう。ヤキが回ったかねえ？

それでも緑の髪の美女は、七季たち留学生が、彼女を「盗賊フーケ」として突き出すとは、もう疑ったりはしなかった。

黒髪の留学生たちが、何の束縛もなしに、マチルダを解放したのと同じように。彼女たちを疑ってはいなかった。

#222　始まらない物語ー共犯者ー（後書き）

あとがき

＞アルビオンの作物事情に関しては捏造です。

でも料理が不味いって、農業国ではあまり見かけない気がするので……こんな感じかなと。

英国も農業国じゃないし。

あと戦時中は余計に物価上がるよね。

あとはまあ、ご都合主義です。

オリ主、孤児とか、親なしとかで苦労している相手に弱いんです。

知り合いにチラホラいるもんで。

ただ、依存させるのは良くないと、ヤンデレぎみになってきた伯言で学習はしたので（笑）、あくまでサポートだけです。

けっきょく自分の足で生きていかなきゃならんですしね。

マチルダの名前は、最終的に、彼女じしんから聞いたものです。

オリ主がナニやったかは……うん、語るまい（笑）。

#223　始まらない物語ー にせもののシンデレラ ー

むかし集めた宝物。
ガラスのかけら。丸い石。
セミの抜け殻。蝶の羽。
誓った言葉。遠い夢。
いまでもそれは宝物？

「おはようございます。洗顔用の水をお届けに参りました」
コンコン。
カーテンの隙間から、朝日の差し込む部屋。
ドアをノックする音に、砂色のヒゲを蓄えた男は、「入りたまえ」と許可を出す。
「失礼します」
そうことわって入ってきたのは、うら若い黒髪のメイドだった。
近衛であるワルドは、領地の屋敷とは別に、詰めるための宿舎が王宮の敷地内にある。グリフォン隊の隊長である彼の部屋は、もちろん個室で、書類仕事もできるように、少し広めの贅沢なものだ。
少しキツめの印象を与える面輪に、メガネをかけたメイドは、持ってきた水差しから、備え付けの盥に水を注ぐ。
タオルやヒゲを手入れする道具をてきぱきとそろえる若い娘の、小柄なわりに、たわわなバストに目を留めたワルドは、何となく彼女の名前を問うていた。
「ふむ……君、名前は？」
「はい。『オルタンシア』と申します」

水差しをテーブルに置き、スカートを持ち上げて優雅に礼を取る姿は、良家の子女らしい品のよさだった。
「新入りかい？」
「こちらの宿舎に参るのは、初めてですわ」
愛想はないが、きりりとした顔つきに知性の光が宿る瞳は、どこかワルドの想い人を連想させた。髪の色も深く、そのあたりも似ているせいだろう。
「何か失礼をいたしましたでしょうか？」
「いや……ふだんは違う部署なのかな？」
一口に王宮のメイドといっても、詰める場所はまったく違うものだ。
「はい。本日はマリーが里帰りしておりまして、その代わりに私が参りました」
ぺこり、とまた一礼。
「ああ」
――マリーという娘は、リッシュモンの縁者である貴族令嬢だったはずだな。
王宮のメイドは、貴族の子女の行儀見習いが、その大半を占める。リッシュモンもまた、レコンキスタの一員だ。本格的な政争が起きる前に、身内のものは引き上げさせたのだろう。
「他に何かご用は？」
「そうだな……今夜は空いているかね？　良ければワインなど飲みたいと思うのだが」
ワルドの問いかけに、メイド娘の白い頬が、少しだけ強張った。
「残念ながら。今夜は、モット伯がおいでになる予定ですので」
王宮勅使であるモット伯は、子爵のワルドよりも位が上で、財力もある。ワルドは、相手が悪いとないしん舌打ちしつつ、あくまで穏やかにフォローした。
「そうか。いまの言葉は忘れてくれたまえ」
「かしこまりました。それでは、失礼します」

ぺこり、と黒髪を結い上げた「オルタンシア」の頭が下がる。同時に、その巨乳もたゆんと重力に従って鍾乳石のように存在を主張し、男の本能と煩悩を刺激した。

ぱたむ。

閉じられたドアを睨みながら、ふとワルドは、首にかけていた鎖で揺れる、青い石の指輪を持ち上げた。

「ふ……まさか国宝が、こんなところにあるとは、誰も思わないだろうな」

それこそは、トリステインが所蔵する始祖の秘宝「水のルビー」。昨夜、アンリエッタにワルドが返したものは、偏在によって作られた偽物である。

ワルドの偏在を消せば、すぐにも消えるシロモノだが、どうやらウェールズのことで頭に血が上っていたアンリエッタは気づかなかったらしい。

しまいこまれたあとで指輪が消えれば、それはワルドよりも他のものに疑いがかかるだろう。

くつくつと男の喉から笑いが洩れた。

――どのみちトリステインは滅びる運命だ。あんな小娘に始祖の秘宝など、持つだけムダだ。

ワルドが目指すのは「聖地」である。

男の脳裏に、母の面影が浮かび――それは、やがて別の人物へと摩り替わった。

ダークヘアにルビーアイの知的な美女。

黄金の妖獣を従える、グラマラスな肢体の慈母――プレシアの姿に。

――そうだ。あんなメイドを身代わりにするより、彼女本人を誘うことにしよう。

アルビオン潜入という疲れる任務を果たしたワルドは、おのが仕事を偏在に任せ、荒んだ心を癒すために、きょうの予定を、トリステイン魔法学院の訪問に決定するのだった。

いっぽうヴァリエール家の屋敷では。
「母さまたち、きょうお帰りになるのよね……」
はあ。
きっと、おそらく、間違いなく、あの留学生一行を連れてくるのだろうと思うと、ルイズは朝から重いためいきをつかずにはいられない。
メイドに梳かせているピンクブロンドも、心なしが色褪せたように朝の光を受けている。
「ルイズお嬢様。朝食の準備が整いました」
「いま行くわ。ちいねえさまは？」
「きょうもお加減はよろしいそうで、ご一緒に食事をとられるそうです」
「そう、良かった」
髪を梳かすのとは、別のメイドの呼びかけを、ドアの向こうから受けて、ルイズはソファから腰を上げた。
学院ではないので、私服の白いワンピースが、ふわりと長い裾を揺らす。
「そういえばワルドさま、いったいどうなさっているのかしら……」
いちおう婚約者である男の、最後に告げられた求婚が、いまも少女に奇妙なわだかまりを残しているとは露知らず。
その騎士は、ルイズの知らないところで、他の女を口説く予定を立てているのであった。

そして太陽が中天に上ったころ。
トリステイン魔法学院は、アルヴィーズの食堂に、一人の騎士が

姿を現していた。
「お久しぶりです、ミス・プレシア」
いきなり手の甲にキスされたダークヘアの美女は、その口元をひくつかせて嫌悪感を堪えるはめになった。
「ええと……ミスター？
きょうはどんなご用でいらっしゃったのですか」
しかも昼食時に、グリフォン隊の隊長が、である。
食堂で配膳をしていたメイドが、新たに増えた貴族の姿に、あわてて厨房へと駆けていく（あくまで小走りだが）。
おそらく厨房を預かるマルトーに、客人のことを告げるためだろう。
何の連絡もなかったのだから、料理はいつも通りの人数分しか作っていないはずである。迷惑な話だった。
「おい……何でグリフォン隊の隊長が？」
「こんな時期に」
生徒たちの中にも、けげんというより不審そうな面持ちの少年たちがチラホラいたりする。
何せ、他国とはいえ、アルビオンの内乱があったばかりで、世情はそれとなくピリピリしているのだ。
もちろん宮廷に勤める貴族を親に持つ生徒も、そのことを知っている。
それなのに。
こんな時期に、国防の要ともいうべき、王の近衛たるグリフォン隊の隊長が、ふらふら歩いているのはおかしい。
けれどもワルドは隠すことなく正直に――そう、いっそ潔いまでに――言ってのけた。
「貴方に会いに」
砂色の髪を伸ばしている騎士は、熱っぽい目で、プレシアを見つめていた。まったく回りに頓着していない。
空気を読むべき貴族としてはアウトである。

空気を読まないルイズという前例もあるので、一概には言えないが。

アリシアを挟んで、プレシアの側に座っている七季は、頭痛を覚え、その隣に座っているアーチャーは、黙って主の頭を撫でた。少女の向かいに座っているディルムッドも、アイマスクをつけたままとはいえ、心配そうな気配を隠さない。

プレシアの横に座るリニスは、しっぽをぼわぼわに膨らませて、何かの秒読み段階に突入。

才人は足音を立てずに立ち上がり――静かに周りの生徒たちへ、避難勧告を試みていた。

七季の影にひそんだままのリドルは、ないしん十字を切っており。

やがてアリシアのサムズアップでトリガーが引かれる。

ぺいっ。

その日、山猫娘のデバイスから、ゼロ距離射撃を受けた男がひとり、トリステイン魔法学院から放り出されたとか。

「やほー。ジョゼフー。あんたんちに孤児院ひとつ作りたいんだけど」

許可よこせやオラ。

おなじみ空間ジッパーで断定形のおねだりをガリア国王にかます巨乳美少女に。

「うん？

それなら、いまちょうどアルビオンの避難民で街というか、都市をひとつ作っている最中でな。そっちに作れば良いだろう」

ほれ。

ぺたんと何かのハンコとサインが記入された書類が一枚、ぴらんとチートな巫女さんの手の中に納まり。

「あ、ついでにその孤児院、アルビオンの『虚無』入ってるから」

「オイィィ！？」
かなりノリの良くなった青い髪の王様が、異世界の「神妻」にツッコミ入れつつ謀略を立てたり、立てなかったり。

いっぽう、午後の光が差し込むトリステインの王宮には。
「ゆえに、神聖アルビオン共和国は、貴国に宣戦布告するものである！」
レコンキスタ――アルビオン貴族派からの宣戦布告が響き渡っていた。
「うわちゃー……」
風の魔法で、こっそりそれを漏れ聞いた「オルタンシア」が、目立たない柱の影で天を仰いでいた姿は、誰にも見られることなく――ただ拍車のかかる王宮の混乱を観察するのみ。

そして夜。
「ルイズ。僕の小さなルイズ！」
ワルドの訪問を受けて、ピンクブロンドの少女は、その胸に抱きしめられることに戸惑いを覚えていた。
少し前に戻ってきた、母・カリーヌと、姉・エレオノールは、どこか上の空で、しかも迎えに行ったはずの留学生たちを連れてはいなかった。
それは少女にとって、安堵すべきことだったのだけれど。
何だか熱でもあるのか、行動がおかしい母と姉は、やけに熱心に、ドレスや化粧品の話をしていて、帰りがけに買ってきたらしいそれらを吟味するために部屋にこもってしまったのだ。
ルイズとカトレアにも、お土産として、しっかり香水やドレスは

与えられたのだけれど。
「あ、あのワルド様……」
「どうにか無事に戻ってこれたよ。これもきっと、君のおかげさ。僕の女神！」
「あ、あら……ええ、ワルド様の無事を、始祖ブリミルに祈っていたのが通じたのかもしれません」
既に湯浴みを済ませたルイズは、夜着姿である。きょうは母からお土産にもらった香水などもつけてみたのだ。
そこにワルドは敏感に気づいた。
「おや。きょうはいつもより大人っぽい香りがするね……」
あえて述べておくが、ワルドは二十六歳。しかも、都市の割には老けている。
対するルイズは十六歳。しかも華奢で、いってはなんだがツルペタストンの体形である。
いい年の男が、彼女を抱きしめる姿は、どうにも犯罪臭かった。
「ええと。母さまからいただいた香水をつけてみたんです……」
「そうか。もうすっかり一人前のレディだね」
美男子で通るワルドなのだが、まだ幼いルイズを褒め口説こうとしている姿は、どこか不自然で滑稽だった。
「ところで結婚の話だが……考えてくれたかい？」
「あの、その。でも私、まだ学生ですし……」
「ルイズ！」
強く、眼光鋭く呼ばれて、戦場も知らぬ少女は、びくんと萎縮した。
「僕はアルビオンに行ってきた……そして見たんだ。王党派の、敗北するところを。貴族派の、レコンキスタもね」
「え……！」
そこでようやっと、ピンクブロンドの少女の中で、アルビオンという国と、ワルドの任務とがつながった。
彼は、戦場に行ってきたのだ。

「そこで僕はね、ルイズ。レコンキスタのリーダーが『虚無』という力をふるうのを見たんだよ」
「嘘……」
思わず口元を押さえる少女に、ワルドは低い声で言い聞かせた。
「ルイズ。君が魔法が上手く使えないと言ったね。僕は、それは君が『虚無』の系統じゃないかと思っている」
口ひげを蓄えたワルドの相貌を、ピンクトルマリンの瞳が呆然と見上げた。
「レコンキスタのリーダーも、まったく魔法が使えなかったんだ。それがある日、いきなり強大な力に目覚めたらしい。
ルイズ。僕と行こう。魔法が使いたいと言っていたね。君には未来を切り開く力が眠っている。他にはない、素晴らしい力だよ」

そして少女は、男の偏在と共に、姿を消した。
翌朝、ルイズの書置きだけが、彼女の部屋で発見されたという。

#223　始まらない物語ー にせものシンデレラ ー（後書き）

あとがき

＞というわけで、母と姉が色ボケてる間に、ルイズ出奔。

展開が早くてすみません。

#２２４　始まらない物語ー前夜ー

「あったま痛い……」
夕食前。
いきなり増えた客人――青い髪のガリア王族とそのユカイな家族ご一行だったりする――に、急遽メニューを変更しての鍋物が食卓に並ぶ中。くしゃりと前髪をかき上げ、額に手を当てた少女に、一同の視線が集中した。
「ナナちゃん、カゼ？」
真言が琥珀色の目を心配そうに向け。
「ではベッドの準備を」
すぐさまアーチャーが腰を上げるのを、当の少女が手を振って止めた。
「あ、いやだいじょぶ。精神的なものというか、何というか。王宮にもぐらせてる、偏在からの定期連絡が入ったんだけど……レコンキスタからの宣戦布告が、来たんだって」
トリステインに。
くつくつ湯気を立てる鍋を前に、「？」とクエスチョンマークを浮かべているのは、戦争に縁のないテスタロッサファミリーと才人である。
「宣戦布告って……え？　宣戦布告？」
「せんそーしますよって宣言だよね？」
びっくり顔の少年とツインテール幼女に、足元で白ウサギのエイプリルと、イタチそっくりの幻獣であるメイが顔を見合わせて「どうしよう？」とぷるぷる震えている。
「意外と早かったな。というか、わざわざ布告をしたのか」
てっきり奇襲すると思っていたのだが。

何でもないような顔で――それでも意外そうに――あごをさするのはジョゼフだ。かつてあったヒゲは真言に剃られてしまって、以来、手入れが面倒なこともあって、そのまま剃り続けているらしい。

青い髪の王様の隣に座る黒髪の美女――シェフィールドは「あ、忘れてた」と虚空に目を泳がせつつも、ちゃっかり口をつぐんでいる。

「レコンキスタねえ……ウェールズの仇にゃ違いないけど。ぶっちゃけ、どうなんだい？　仮にもアルビオンの空軍を下すくらいの戦力なんだから、トリステインじゃ、お話にもならないだろ？」

いっぽう、シェフィールドと、金髪碧眼の美青年――プリンス・オブ・ウェールズの間に座っている、青い髪の美少女が、さっくりと容赦ないコメントを挟んでのけた。

シンプルだが、ところどころに手の込んだ刺繍が入った、薄水色の布地のワンピースが似合う少女である。

「まあ、イザベラ殿下の言う通りで、トリステインは上へ下への大騒ぎみたい。

んで、その大まかな動きを情報収集してまとめてから、報告した方が良いと思って、いままで待ったみたいだね」

私の偏在は。

浮かない顔で呟く七季に、口を添えるのは、ワルドを監視がてら、あちこち飛び回っていたガルーダ・東風（こち）である。

「しかしレコンキスタとやらは、もう経済的な余裕はないはずだぞ」

窓辺に設（しつら）えた止まり木に、色あざやかな翼を広げる神鳥は、「奇妙なことよの」と言いながら羽づくろいをする。

合い間に、プレシアやリニスが箸を進める、かちゃかちゃという音がＢＧＭとして流れているのが、何とも長閑だ。

「ん？　そうなの？

お金ないのに戦争って……ンなムチャな」

片眉を上げて、呆れた声を上げる少女に、イザベラが「借金して

戦争ってのも珍しくないからね」と諭していたりする。
「しかし王宮に偏在を仕込むなんて……バレやしないかい？」
大した度胸だねえ。
「大丈夫っぽいです」
ぶい。
どうも「神使（しんし）」の能力からか、相手の探知魔法などをレジストしてしまうらしい、という七季の話に、イザベラは「ンな馬鹿な」という表情をしつつも。
「そっか。あんたマコトの身内だっけ」
と呟いて納得――もとい、流すことにしたようだ。彼女もチートな巫女さんと、その身内に、だいぶ感化されている模様。
「この世界では、宣戦布告はするものではないのかね？」
「否、むしろするのがふつうだな。しかし、財政的に差し迫っているのなら、むしろ奇襲で短期決着をつけそうなものだが」
その方が、手間がないだろう。
黒いシャツ姿で、お玉を手に鍋の具材をすくっているアーチャーが問いかけると、ジョゼフは飄々と答える。
貴族にしてもシンプルすぎる、ブルーグレイの絹で作られたハイカラーシャツと、スラックスに似たボトム姿が、風采のよい姿に、しっくり馴染んでいる。
「んじゃ、あれかな。最初に攻撃するぞ、って恫喝しておいて、お金を絞るためとか？」
「講和、もしくは不戦協定を結ぶため……という線は」
あどけない面輪を黒髪でふちどられた少女の言葉に、ウェールズが、ためらいがちに違う意見を挟むも。
「そのセンは薄かろう。
戦争というものは、畢竟、儲けるため、得をするために起こすものだからな。
戦いました、褒美はありません、では話にならん。名誉や爵位には、それに付随する恩賞があってこそだ。でなければ、臣下が不満

を抱くものさ」
　おおかた、アテにしていた王党派の財産が予想外に少なかったのであわてたのだろうよ。
「しかし、主に尽くしてこその臣下では？」
　眉をひそめる、黒髪の人外青年が反論するものの、彼の主に諭されて、渋々引き下がった。
「みんながみんな、ディルみたいじゃないんだよ。生身の人間だもの。食べていかなきゃならないしね。もちろんディルの忠誠は、とっても尊いと思うけど」
「王党派の金や宝物は、ウェールズ王子とアルビオンの民にあらかた託されて、うちに来たからな」
　ジョゼフの話す内容は、それこそ国の上層部のものだが、いかんせん鍋をつつきながらなので、どうにも緊張感に欠けている。
「む。牡蠣はどのあたりだ？」
「底に沈んでるはずだ。ほらマスター」
「ありがとー。ううう……攻めて来るのかぁ……戦争はんたーい」
　鍋の具をアーチャーに取り分けてもらった七季は、隣に座るもう一人の従者が、うずうずしていることに気づくと、やんわりたしなめた。
「ディールー。先走って突っ込んじゃダメだぞ？」
「は、かしまりました」
　ちょっと残念そうな青年は、いちおうイザベラとシェフィールドがいるので、食事時でもアイマスク装備だ。異様だが、一部の人間以外は気にも留めていない。慣れって怖いものである。
「……何だろう。この緊張感のなさ」
　ちょっと呆然とした声で呟くウェールズに、黒髪の美少年姿をとっているリドルが、はたからツッコんだ。
「いや。この場にいるメンバーだけでも、レコンキスタ撃沈できる戦力だからね？」
　シャレ抜きで。

「え」

「けっきょく、ジョゼフさん、何のご用でこっち来たんですか？」

はう。

湯飲みを両手で持ち、こてりと首をかしげた七季のポニーテールが、ひょっこりしっぽのように跳ねて、疑問を投げかける。

食事のあと。

洗い物当番のディルムッドがキッチンで黙々と動いているあいだ、客人であるガリア王室ご一行と、チートな巫女さんとユカイな仲間たち――もとい、異世界トリップご一行が、リビングでまったりくつろいでいると。

「やはり緑茶が落ち着くな……。

む？

それはだな。うちの娘と、ミューズのドレスをアーチャーに依頼しようと思ってな」

すっかり和食や緑茶と言う習慣に、異世界で馴染みまくったガリアの王様が、すっとんきょうなセリフを吐いた。

『はい？』

異口同音に聞き返す声が湧き起こるも、大半は、錬鉄の英雄の執事スキル――というか、家事スキルを知っているので、納得顔で頷く結果になる。

ああだってアーチャー（さん）だもんね。

「私かね」

「よーするにウェディングドレスを？」

ちょっと戸惑いぎみの光を浮かべる、鋼色の目の男の横で、七季はさらに突っ込んだ質問を投げた。

「うむ。それで、やはりこういうことは本人と相談させるのが良いだろうと連れて来た。むろん、代金は支払うぞ」

国家プロジェクトなので、どーんと来い。
「そんな、ジョゼフさまったら……」
堂々とソファにくつろいでのたまう姿は、どこからどう見ても王様然としているのだが、横に座る黒髪の美女が、何やら妄想に突入しているらしく、くねくねしているさまが、ユカイかつ、けったいである。
「なななななな」
いっぽう正反対に、動揺しきりなのが青い髪の美少女。
白い頬をまっかにそめて、どもっているさまに、隣にウェールズがちょっと萌えていたりする。
「私は、アーチャーが良いなら、かまいませんけど……でも、さすがに戦争中の国では、無理がありますよ?」
「ではすぐ潰してきましょう」
すっくと即座に立ち上がるシェフィールドの紫暗の目は据わっていた。
「落ち着け、ミューズ。トリステインが吹っかけられた戦争に、いきなりガリアが介入してもまずい」
ぽんと青い髪の美丈夫から背中を叩かれて、飼い主に叱られた子犬のようにしゅんとしょげるシェフィールド。彼女の美貌は、その恐ろしさを知っていてもなお、可愛らしく感じるほどである。
「申し訳ありません、ジョゼフさま……」
「うむ」
「それで本音は?」
「トリステインが多少弱ってからの方が、恩を売ってなおかつ抵抗する力も削げて併呑しやすい」
さくっと横から七季の入れたツッコミに、これまたあっさり答えるジョゼフ。
その言葉を聞いて、金髪碧眼の青年は顔をしかめたが、それでも、もはやハルケギニアを統一するつもりのガリア王家に入ったウェールズは、トリステインを庇い立てするような口出しはしなかった。

彼の中には、アンリエッタと、そしてトリステイン王国に対しての不信が、思いのほか深く根を張っているらしい。

「ものっそい、ミもフタもない発言ですね。私、戦争に巻き込まれるの、ヤなんですけど」

誰だって嫌である。

「別に迎撃したってかまわんが。ただし、ガリアにも見せ場を残しておいてもらわねば困るぞ？」

「あのですね。軍勢がどれくらいかわかりませんが、私らが迎撃できるほど少数なわけないでしょうが！」

反射的にツッコミ返した七季に、珍しく深々とためいきをついたジョゼフは、青空よりも海に似た色のジト目を向けるのだった。

ナイワー。

#２２４　始まらない物語ー前夜ー（後書き）

あとがき

＞先輩がジョゼフたち連れて来たので、ガリア王家と鍋パーティー。

次回はレコンキスタ戦のはずですが……何このゆるゆるっぷり。

#225　始まらない物語ー出陣ー

藍色の天空。
高き空に吹き荒れる風と。舞い散る黒髪。月は朧。
そして夜の帳に流れる無数の星屑が、月輪よりもまばゆく、少女たちの足元に群れ集う――そのさまはまるで、星雲のごとく。
魔力を孕む粒子のきらめきは闇夜を照らし、人ならぬものすら恐れおののくほどの圧縮率でもって集束される。
『アーチャー！』
コンデンサとなった黒衣の少女たち――五人から、その膨大かつ凶悪無比な魔力は、人外の男へと注がれさらに束ねられ。
箒型のデバイス「エスピナ」の穂先、その奥に隠されていた砲身が、直径一メートルほどの紅い魔法陣を展開しながら術式の起動を待ち受ける。
そして六つめの力が、まっすぐアーチャーを射た。
ひそかに、確かに、音もなく。彼を害することもなく。
託されたのは、主の力。
禍々しい災厄を司るからこそ、穢れを祓う役目を担いし神――かれをその身に降ろしたがゆえの、恩寵。
「ＳＬＢ（スターラインブレイカー）」
弓の騎士によって、破魔の一射が放たれた。

話は、その日の朝にさかのぼる。
「は……？」
聞かされた話に、七季は思わず間の抜けた声を上げた。

本日一限目の授業。水の魔法を講義するはずの教師は、出征しており、いないというのだ。

珍しく、オールド・オスマンじきじきに、朝食の席で発表されたことに、彼女が呆然としたことを、誰が責められるだろう。

「あの、見る限り、他の先生方は皆さん出勤していらっしゃいますよね。どうしてキンダイチ先生だけ？」

食事が終わるや否や、まっすぐ学院長へ問い質しに行った黒髪の少女に、オールド・オスマンは、白く長いあごヒゲをしごきながら答える。

「むう……水メイジは、戦場において後方支援の貴重な戦力じゃからの。まっさきに召集がかかったのじゃよ。

戦うのではなく、治療であれば、専門の水メイジは、ふだんやっていることと、そう変わらんからの。おっつけ他のメイジも召集されるじゃろうが……」

そのヒゲと同じように、白くふさふさとした眉に隠れた目は、申し訳なさそうな色を浮かべてはいたが、七季の視界に、そんなものは映りはしなかった。

「そうですか。ありがとうございます。頭痛がしてきたので失礼します」

形式的に頭を下げて踵を返すと、アーチャーの腕につかまるようにして――そのじつ彼の腕を引きながら――食堂を後にした。

「きょうは授業サボる」

きっぱり言ってのけたポニーテールの少女を、咎める声はない。

代わりに、低い声が問いかけた。

「どうするつもりだね、マスター」

ゆるぎない灰藤色のまなざしに見つめられて、七季はぐっと顔を上げた。わがままで身勝手な、子供のように苛立った表情が、あど

けない顔を彩っている。
その黒瑪瑙の瞳には、けれども友人を案じる色が深く沈んで底光りしていた。
「かっさらう」
これまた短い、そして断言だった。
「さらってどうするつもりだね」
問いかけが重ねられる。
その間にも、七季は取り出した薬品で髪を染め、目の色を変えていく。本気なのだと、その場の誰もが理解した。
「キンダイチ先生にはね――『向こう』にも居場所があるんだよ」
ハルケギニアで暮らしてきた老探偵。
しかし彼は、もともと七季の友人である、金田一少年の祖父。ようするに、七季たちの世界の住人なのだ。
「……なるほど」
――頭に血が上って考えなしに、というわけではないのか。
いちおう「さらった後」のことにも考えが回っていると知って、男の鷹の目から鋭さが薄らいだ。
敵前逃亡したとなれば、王家からの沙汰をはじめ、その後が怖いが、逃げる先、受け入れ先があるというのなら、最悪、そちらに引っ張ってしまえば良い。
「はじめちゃんのじっちゃんを見殺しになんて、するつもりはないよ」
硬く、強く、そして憤りすら秘めたソプラノが「サロン」のリビングに響いて溶ける。
とうとうバリアジャケットをも、偽装のために漆黒の騎士服へと変えた少女は、ふと横から腕を取られて振り向いた。
「まさかマスター。我々を置いていくつもりではあるまいな？」

人外の従者はともかく、さすがにアリシアたちは置いていこうとした七季だったが、プレシアをはじめとするテスタロッサファミリーは猛反対した。

「私たちを連れて行けないような危ないところに行くつもりなの？」

正論と言えば、あまりにも正論なママさん魔導師のセリフにぐうの音も出ず、

「目立つから……」

という、いささか苦し紛れの言い訳には、

「認識阻害かければ良くね？」

などと、才人からツッコミを食らう始末。

けっきょく七季は、三人の従者と、テスタロッサ家三人、そこにプラス才人と使い魔たちという、いつもの大所帯で行動するはめになったのである。

幸いにも、王宮にもぐりこんでいた「オルタンシア」が、同じく水メイジだからという理由で、後方とはいえ、既に配属されており、そこから情報がもたらされたため、キンダイチの配属先も判明したが。

「何で水メイジのキンダイチ先生が、前線に送り込まれてるんだよ……！」

タルブ村。

レコンキスタは、トリステインに宣戦布告する前に、既に進軍は開始していたらしい。

身軽な使者（宣戦布告の）だけなら、トリステインにいち早く着けるし、宣戦布告を済ませたなら堂々と攻めることができる、という理屈なのか。

ともかく、チートな巫女さんが、ガリアの王族を向こうに送り届け、またどこぞに行ってしまったため、七季たちがタルブ村に駆けつけたのは、もはや日も暮れようかという時刻であった。

タイミングが良いのか悪いのか、村に被害はまだないものの、竜騎士や、空飛ぶ艦隊が、ぎりぎり目視できる位置までやってきてし

まっている。
　そのうえ当然ながら、キンダイチの他に、似たような軍服を着た部隊がくっついている。
　温和だが芯の強く優しい老探偵の性格から考えるに、このまま彼だけさらうには、キンダイチじしんが抵抗しそうだ。
　それを二、三秒でまとめ弾き出すと、七季は宙に浮かんだまま、おのがパーティーに指示を飛ばした。むろん正体を隠すために念話である。平行してキンダイチの説得にも当たる。
＜アーチャー、『例のやつ』使うから、スタンバイして＞
＜了解した＞
「ユビキタス・デル・ウィンデ」
　呪文とともに、箒に跨る黒衣の男装少女が六人に増えた。それぞれに白銀のはぐれメタル――プラタ（分体）を乗せた五体の偏在が、さっと上空で散会する。
＜ディルは私――本体を守って＞
＜承知＞
　七季の箒から飛び降りたディルムッドは、緑色のマントはそのままに、彼の愛槍である「破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）」――そして、こちらはアーチャーの投影品ではあるが「必滅の黄薔薇（ゲイ・ボウ）」を取り出す。
＜リニスとプレシアはアリシアの護衛に専念。できるなら魔法で援護。アリシアは大人しくしてて！＞
＜任せて！＞
＜アリシアにもマスターにも、傷ひとつつけさせません！＞
＜はーい＞
　リニスがアリシアの背後に、そしてプレシアが愛娘の前に、飛行魔法で陣取る。三人とも、髪型こそふだんと同じだが、髪の色を薬品でまっくろに変えており、服装もそろいの騎士服。
　テスタロッサファミリーが、出陣前に、そろって「ナナキとおそろい」とはしゃいでいたのは、微笑ましい余談である。
＜リドルは魔法を好きに撃って良い。あえていうなら、弾幕という

か、量重視で。こっちに近づけないように頼む＞

＜ふふふふふ……誰に言ってるのさ？＞

「見的的必殺（サーチアンドデストローイ）」と笑う、黒髪の美少年（ただし仮面つき）は、さすが闇の帝王の前身だけあって、迫力に満ちあふれていた。

魔王もかくやという威圧感である。漆黒の騎士服が似合いすぎる。

＜平賀君は……ケガしないように気をつけてな。あと、キンダイチ先生の誘導、頼む＞

＜オーライ！＞

ぐっとサムズアップした黒髪の少年も、パピヨンマスクをつけたまま、乗っていたアーチャーの箒から飛び降りた。

「な、何だ、貴様らは！」

「レコンキスタかっ？」

ふわり、と箒で降りてきた赤毛の男装娘に、トリステインの軍人が食ってかかろうとするも、無言でディルムッドの槍に牽制される。

「逃げなさい」

「は？」

「逃げなさい、と言っている。これしきの人員では、あの艦隊に蹂躙されるのがオチです。

我々が足止めをする間に、とっとと本営へ戻って、報告なさい。戦力の見積もりくらいはできるでしょう」

＜キンダイチ先生、聞こえますか？＞

軍人とやりとりしながら、七季はマルチタスクで念話を使って、老教師へと呼びかけていた。

「……え？」

舞台の中、きょろきょろと顔を上げる兵士が一人いた。七季は目配せし、才人にそちらへと向かわせる。

＜キンダイチ先生。ナナチです。逃げてください。あなたが死んだら、はじめちゃんが悲しみます＞

孫の名前を引き合いに出されて、老探偵の心にさざなみが立つ。

＜お願いです。私は、はじめちゃんにあなたを会わせたい。だから

……才人についていってください＞

日が沈みゆくタルブ村の中、念話で説得を続けながら、七季はトリステイン軍人に、こう告げた。

「これから戦略級魔法を使います。巻き込まれたくなければ、お逃げなさい。感じませんか？　魔力の高まりを」

その言葉に、軍人たちが顔を上げて――そろっていっせいに後ずさった。

七季の偏在たちは、既にペンタグラムを描く配置で魔力の集束に取りかかっており、その護衛であるプラタが、凄まじい爆発を引き起こして、竜騎士を蹴散らしている。

ぼごぉん。ちゅどーん。しゅばばばばば。

既にリドルやプレシアによる、砲撃魔法、射撃魔法といった弾幕が、夜闇に花火のごとく舞い散って、その魔力光で暗黒を照らす。ついでに色々撃墜されているが。

「あ、ああ……そうだな、戦場の情報は、すみやかに本営へ報告すべきだなっ！」

顔を見合わせたトリステイン兵が、あわててコクコク頷くや、ざざざーっと潮が引くように撤退していった。

「さて」

そしてようやく、アーチャーの傍らに立った七季は、夜の向こうにいるだろう、レコンキスタ軍を睨み据えた。

#225　始まらない物語－出陣－（後書き）

あとがき

＞駆け足でなんですが、ようやく交戦です。

タルブ戦が夕暮れから夜にかけての時間帯になっているのは、原作よりも色々ずれているからと思ってください。

ちなみに作中の「ＳＬＢ（スターラインブレイカー）」は誤字ではありません。あしからず。

#226　始まらない物語ー盗人ー

いっぽう、七季たちがタルブ村に向かった後のトリステイン魔法学院では。

ヴァリエール家を出奔したルイズが、ワルドの駆るグリフォンに乗って、ひそかに姿を現していた。

というのも、一通りの荷造りはして、家出したピンクブロンドの少女だが、やはり急なことに手落ちがつきものだ。

あれこれと足りないものを言い出せば、きりがない。けれども、いまからヴァリエール家へと、取りに戻ることはいただけない。

そこで彼女は、魔法学院の、寮を思い出したのだ。

一時的な帰省のつもりだったから、実家に持って帰った最低限のもの以外は、ほとんど残っている。

たとえば水の秘薬とか、高価な書物とか、着替えやアクセサリー、エトセトラ。

「良かった。旅に出るんですもの。これくらいはないと」

授業で生徒の姿がない間に、寮へ忍び込んだルイズは、それらのめぼしいものを、同じくしまいこんでいたトランクに詰め込んで、自室を後にした。

「お待たせしました、ワルドさま」

「誰かに見つからなかったかい？」

幸いにも、メイドたちの掃除時間からはずれていたようで、学院の使用人にルイズが見つかることはなかった。

「ええ、大丈夫ですわ」

魔法の使えないルイズは、こそこそと身を隠しながらの行動に、少しだけ腹立たしいものを感じていたが、これも魔法が使えるようになるまでの辛抱、とあらためて自分に言い聞かせる。

そこで彼女は、学院から少し離れた林の中――グリフォンは目立つので、ここに隠していたのだ――で、ふと思い立った。

すぐ近くに見えるのは、あの留学生たちがたまり場にしている小屋ではないだろうか。

生徒たちに「豊穣の小屋」だの「ロバ・アル・カリ家」だのとさまざまな名前で呼ばれている、別荘のようなあつかいの場所。

彼らへの嫉妬と、意趣返しが、ピンクブロンドの少女の脳裏にひらめいた。

以前ルイズは、ハチミツ色の髪をツインテールに結った幼女が話していたことを聞いたことがある。

『私、前はぜんぜん魔法が使えなかったの。でも、アーチャーが作ってくれた杖で、魔法が使えるようになったんだよ』

本当に嬉しそうな笑顔をふりまいていたアリシア。

魔法が使えない少女の記憶には、その言葉がしっかりと焼きついていたのだ。

もっとも、彼女たち――ことに、アリシアが姉と慕う七季――に対して、態度の悪いルイズが言っても、白ウサギを使い魔とする幼女が、彼女に杖を貸すことは、ついぞなかったのだが。

そしてルイズの心に、魔が差した。

――あの子たちは、複数の杖を持ってるって話だったわ。

正確にはデバイスなのだが、それは正しい。

七季の持つデバイスは「黎明」「ノア」「ガニュメデス」の三つ。

アーチャーのデバイスは「イルシオン」「アギラス」「エスピナ」と、これまた三つ。

アリシアすら、ストレージの「マーチ」と、インテリジェンスもどきの「デルフリンガー」。それに加えて、アーチャーお手製のハリポタ式の杖がそろっているのだ。

ルイズが、そこまで詳しく知っているわけではなかったものの、複数の杖を彼らが使える、というのも嫉妬するには十分な理由だ。

なにせ彼女は、一つきりの杖さえ、まともに魔法が発動できない

でいる。
　ワルドは、彼女が「虚無」の魔法を使えるかもしれない、と言っていたが、それも使えなかったら、ルイズは本当に「役立たず」――魔法使い（メイジ）として無能のレッテルを貼られてしまう。
　――そうしたら、ワルドさまも私を見捨てるかも……。
　ぞくっ。
　小柄な少女の背筋に、怖気が走った。
　そんなことは、我慢できない。
　だからルイズは、魔法を使うための可能性を、少しでも上げるために、もはや手段を選ばなかった。
「ワルドさまっ」
　春の日差しは明るいけれど、木々が立ち並ぶ林は、やはり他よりも薄暗い。その木立の中にたたずむ小屋へ、ルイズは婚約者を伴って侵入した。
　「ゼロ」のルイズには、鍵開けの魔法――「アンロック」さえ使えなかったのだ。

　小屋の扉は木製ながらも頑丈で分厚かったが、「アンロック」の魔法であっさり開いた。
　ここで、七季たち異邦人の性格を知るもの――たとえば、キンダイチやギーシュあたり、もしくはメンヌヴィル――なら、それをいぶかしんだことだろう。
　彼女たちにとって、いわば「工房」でもあるこの家に、何の罠も張っていないのはおかしい、と。
　しかし、七季や、その従者の性格をあまり知らないルイズは、ずかずかと他人のテリトリーに踏み込んで、手当たり次第にものを漁っていく。
　それは正しいといえば、正しかった。

誰もが出入りする玄関に罠を張るのは、色々な意味で面倒だ。
だから七季たちは、大事なものがしまってある場所――ようするに、おのおのの部屋に細工をして、罠を張るようにしているのである。
プレシアとリニスは工房。アーチャーやディルムッドなら自室。
リドルは書斎と、続きの研究室で、七季は温室に罠をしかけている。
ただ、アリシアの部屋と七季の部屋には、そういうトラップはなかった。
アリシアはまだ子供だし、七季は七季で、大事なものは、ほとんど自分の袖――ようするに、例の不思議空間――に収納してしまうので、彼女の貴重品を奪うのは、実質とても難しい。
「ルイズ、どうするんだい？」
ワルドはそれとなくリビングを見回しながら、いったいピンクブロンドの少女が、何をするために、この小屋へ入り込んだのか、首をかしげていた。
「杖を探しているんですわ」
「杖？」
はて。
けげんな面持ちで、それでも男は、利用する少女の機嫌を損ねても面倒だ、と風の魔法で一通りの探索をした。
すると。
急いで出かけたために開いていた、アリシアの部屋――そこに、一つのケースが置かれていた。
ぱっと見た目は革張りのケースだ。持ち手のついたトランク風で、日本人なら楽器のケースかな、と思うかもしれない。
砂色の髪を伸ばした男は、それをリビングまで持ってくると、テーブルの上でトランクを開けた。
シリンダー式の錠がついていたのだが、またしても「アンロック」で開かれる。

「杖だわ！」
それは、鳥の頭に似たシルエットのヘッドに、白い翼が取り付けられたようなデザインの、可愛らしい杖だった。
一目見て、それは女性――それも少女用だとわかる作りである。
すると、どこからともなく、男の声がリビングに響いた。
「あん？　何でえ。まな板娘と色ボケ男じゃねえか。手前らどこから来やがった？」
なんとも口の悪いセリフだった。
「何ですって！」
案の定、ルイズはすぐに沸騰して、自分の杖をふるおうとするが、それをワルドがあわてて止めた。
――証拠を残してはまずい。
爆発魔法など、犯人はルイズです、と現場に大書してあるようなものだ。
ぱたん、とトランクを閉じると、すぐにデルフリンガーの声は止んだ。ようするに、このトランクは鞘の代わりなのだ。
夕べ、たまたま調整が終わったばかりのデバイス「デルフリンガー」と、アリシアの調子を見るために、イメージトレーニングをした彼は、ケースにしまわれたまま、持ち主であるアリシアの部屋に置かれていたのだ。
デバイスとしての「デルフリンガー」は、もっぱら攻撃や戦闘に特化しているから、よっぽどプレシアは娘に持たせて出かけようとしたのだが、それを七季に止められて、留守番となっていた。
黒髪の少女は、可愛い妹分に戦闘をさせるつもりは毛頭なかったのである。
残していきたかったのだが、プレシアとリニスが戦場までついていく以上、アリシアを一人にするのが心配なので、けっきょく一家総出で、となったわけだ。
「どうやら、ケースを閉めれば黙るらしいね」
「杖のくせにしゃべるなんて……生意気だわ！」

しかし、流れるように魔法を駆使する黒衣の少女や、彼女の従者であるアーチャーの「杖」――デバイスも、しゃべることを振り返り、ルイズは仕方ないかと思い直した。

きっと、しゃべる杖を使った方が、魔法が上手く使えるのだろうと。

「ワルドさま。行きましょう。もう用は済みましたから」

しっかり「デルフリンガー」の入ったケースをつかんで、男を促す姿に、ないしんワルドは呆れていた。

――ヴァリエールの娘ともあろう少女が、盗みをして悪びれないとは。

まあ、こうして考えなしだからこそ、彼にとってもあつかいやすいのではあるが。

「ああ。急ごうルイズ」

七季たちが、授業をサボっているどころか、まさかレコンキスタが向かっているタルブへ移動していることも知らない盗人たちは、いつ小屋の主が戻ってくるかもしれない、と急いでその場を後にしたのだった。

#226　始まらない物語ー盗人ー（後書き）

あとがき

＞そんなわけで、デルフ、誘拐されました（をい）。

がんばれデルフ。お迎えが来る、その日まで。

#227　始まらない物語ー離反ー

そして、舞台は同じトリステイン。
その王宮では。
「杖を捨てていただきましょう」
「これは……これは、いったい何の真似です、リッシュモン高等法院長！」
もはや老齢の域にかかろうかという男の背後に、ずらりと居並ぶ騎士が、白いドレスをまとうアンリエッタを取り囲んでいた。
武装した軍人たちがひしめく部屋は、決して狭くはないはずなのに、王女の執務室が息苦しく感じるほどの圧迫感に満たされている。
「何の真似、とは……聡明な姫殿下らしくもない」
くつ、と、中年政治家の相貌に、嘲りのしわが刻まれて影を作った。蛇のごときまなざしは、長年に渡って培（つちか）ってきた強欲の濁りを隠しきれていない。
それでも、その本性は、いまのいままでアンリエッタに悟らせることはなかったのだ。王女は、この三十年ほども使えてきた重臣を、露ほども疑ったことはなかったのだから。
「わからないはずがないでしょう。
それでも説明をお望みというのであれば、このリッシュモン、殿下への敬意を表してお話ししますが」
黒いローブをまとう男のぎらつく目が、ワイン色の髪の美少女を見下している。
「この国は変わらなければならないのですよ、殿下。
長い間、トリステインは王が不在のまま、やってまいりました。
……裏を返せば、この国は、王がいなくとも、回るようになっていたのです」

それは、表立って口には出されないが、貴族の多くが知っていることでもあった。

かろうじて、アンリエッタは王族としての執務をこなしているつもりではあるが、それでも経験が足りず、知識も決断力も圧倒的に足りず、その仕事の大半は、マザリーニ枢機卿や、高位の貴族が片づけている。

その母マリアンヌは、夫である王が死んでからは、政治に口出しすることはない。

それが、分をわきまえていると見るか、それとも王族としての責務を果たしていないと見るかは、意見がわかれるところだろう。

しかし王座が空であるという、王国のシステムからすれば、不自然極まりないことが、年単位で続けられた結果――貴族たちの間には、不安と同時に、求心力のない王家への不信と、意味のない王座に取って代わろうとする欲望が生まれ、胎動していたのである。

アンリエッタは、民には人気があった。

けれども彼女には、王族、王たるものの役目である、貴族のとりまとめが、まったくできていなかったのだ。

若いとはいえ、大貴族であるヴァリエールや、実質的には宰相に等しい、マザリーニ枢機卿に頼りっぱなし。これでは、いくら美少女とはいえ、貴族たちに舐められるのが当然というものだ。

王族としての体裁を損なわないだけの威厳はあるものの、古狸や魔性に例えられるような、海千山千の古い貴族たちに、睨みをきかせられるかというと――とうてい無理なレベルである。

結果として、宣戦布告から、さして間を置かずして、レコンキスタと通じる貴族たちが決起したのだ。戦いの準備に取りかかるトリステインの、あわただしさを衝いてのことだった。

「殿下は、お若く、お優しい。その細い肩に、国政を完全に担わせるのは、酷でありましょう」

リッシュモンの口調は穏やかだが、その鋭い目には、もはや儀礼的な敬意すら欠けていた。

尊敬や敬服というものは、「自分よりも相手が上である」と本人が認めたときに生まれるもの。

たとえばそれは、類稀（たぐいまれ）な武力であったり、幼い頃から見せる才気の片鱗であったり、さまざまだ。

アンリエッタとて、平均に比べれば、ずっと魅力的かつ行動力もある少女ではあったのだが――彼女よりも長く生きてきた、老獪な貴族たちの目を覚まさせるほどではなかった、ということなのだろう。

「もう、兵士の目を盗んで、城下に抜け出したり、ただの少女を羨ましがったりする必要はないのです。

難しい政治の話は、我々にお任せください」

「差し出がましいですよ、リッシュモン！　それは王族をないがしろにする発言です！」

「まだおわかりではないようだ」

ざっ。

「！」

周りを取り囲む騎士から、いっせいに杖剣を向けられ、アンリエッタは蒼白になった。

「あ、あなたたち……」

王族に刃を向ける。それはすなわちクーデターだ。じっさいの光景を目にして、ようやく王女はその事実を飲み込んだ。否、叩き込まれた。

絶句する青い目の美少女から、杖を取り上げ、騎士たちが連行していく。

その行列を満足そうに眺めながら、リッシュモンも執務室を出たところで――吹きすさぶ烈風に、騎士たちが吹き飛ばされた！

時間は少しさかのぼる。

王宮では既に、レコンキスタ勢の貴族たちが蜂起し、その手勢と、王家に忠誠を誓う貴族たちの乱戦が巻き起こっていた。

真空の刃が飛び交い、雷撃が床を舐め、雹が襲いかかる、さながらゲリラ戦のよう。

その中には、もちろんヴァリエール公爵の姿もあった。

「くっ……」

そこへ、ルイズの家出を知らせるためにドラゴンを飛ばしてきたヴァリエール公爵夫人――カリーヌが、ドレス姿のままで飛び込んできたのだ。

「これは……何事ですか！」

かつて「烈風カリン」の異名をとった風魔法使い（メイジ）は、さっそく竜巻を起こして、敵味方もろともふっ飛ばすという荒業に出た。人妻となっても、その本性が変わるわけではない。

居合わせた一同は、こぞってゴロゴロと転がりまくり――何人かの、耐性があるものだけは何とか受身を取ったのだが――戦闘を、一時中断した。

カツ、カツ、カツ。

固定化のおかげか、そこまでボコボコになっていない廊下に、ピンクブロンドのスレンダー美女が履く、ヒールの音が鳴り響く。

「カリーヌ……」

「あなた」

炎の化身を思わせる、深紅のドレスをまとった妻の姿に、ヴァリエール攻爵は、場違いにも安堵した。

「いまはどうあれ、ありがたい。恥知らずにも、レコンキスタに通じるものどもが相当数いるらしく、クーデターを起こしているのだ。おそらく殿下の方にも、手勢が回っていると見て間違いない。急がねば」

「わかりました」

三女の家出を知らせるために駆けつけたのだったが、これはタイミングが良かったのか、と夫の無事にないしん喜んだカリーヌは、

公爵と肩を並べて、ヒールとも思えぬ速度で廊下を駆け出した。

そしてアンリエッタを連行する騎士の一段に出くわし、それをカリーヌは風の魔法で吹き飛ばしたのだ。

「殿下」

「公爵、公爵夫人も！」

カリーヌの戦闘力の凄まじさを知る少女は、その美貌を安堵に緩めて、ヴァリエール公爵夫人に抱きついた。

「お怪我は」

「ありません」

ティアラを飾ったワイン色の髪が、多少乱れてはいたが、命に比べれば安いものだろう。

だが、吹き飛ばされた騎士たちは、相手がヴァリエール公爵夫妻だと知ってか知らずか、その杖を引こうとはしない。

「リッシュモン、貴様……！」

居並ぶ騎士の向こうに、自分と同じように、長年、王家へ仕えてきたはずの男を認めて、ヴァリエール公爵は、その渋い面輪を憤りに引きつらせた。

いっぽうリッシュモンはというと、「烈風カリン」の存在は熟知している。

「やれ！」

騎士たちに命を下すと同時、彼は配下を残して駆け出していた。

正しい判断だろう。

そして廊下に、風の地獄が吹き荒れる。

「ところでカリーヌ。王城までお前が出向くとは……何か急用だっ

たのか？」

同じように、リッシュモンの配下によって囚われていた、アンリエッタの母、マリアンヌ大后を救い出してのち、ヴァリエール公爵は、その老いてなお整った顔を妻へと向けた。

「それが――」

ピンクブロンドの美女に耳打ちされた男は、とたんに青筋を浮かべるや、すんでのところで激昂を噛み――思わずカリーヌを叱責してしまったのだ。

「お前は何をしていたのだ！」

愛娘の家出が、寝耳に水だったのは、彼女も同じであり、さしてカリーヌに責はなかったはずなのだが。

それでも家のことは母親に監督責任があるとばかり、一方的な怒りを押し付けた夫に対して、カリーヌの心が冷えていくのは――どうしようもないこととといえよう。

これ以降、ヴァリエール夫妻の間には、ひそかに深い溝が生まれ始める。

夫から心の離れだした人妻が、出会って間もない異邦の騎士に、急速に傾倒していくことを知るものは、その長女のみであった。

#227　始まらない物語ー離反ー（後書き）

あとがき

＞あちこちでバタバタしている話ですみません。

トリステインでクーデター未遂。

同志であるレコンキスタ軍が攻めてくるんだから、後方からも蜂起する可能性はあるんじゃね？と考えの浅い書き手がやらかしてみた。

宣戦布告が、ちゃんと前もってされていれば、タイミング合わせるくらいできるよねと。

ただまあ、トリステインには、原作チートの代名詞、烈風カリンがいるので、そうそうに鎮圧されましたが。

そしてヴァリエール家にも地道にコツコツとヒビを入れてみる（をい）。

#228　始まらない物語ー紫陽花の滴ー

虚空に浮かぶ、無数の水球。
執務室に舞う、それらの主は、銀色のタクトに似た杖をふるい、向かい来る騎士たちを打ち倒しつつ、怯まない。
それは小さな背中だった。
老いて身長の縮んだマザリーニよりもなお、小柄ではないだろうか。
きちりと結い上げた黒髪からのぞく横顔は白く、メガネをかけた黒い瞳は、強く前を見据えて、彼の前から動きはしない。
トリステインの中枢を担う枢機卿を捕えんとした、レコンキスタの手のものは、舞い踊る水に翻弄されている。
圧縮された水球の密度は重く、それらに急所を狙い撃ちされ、打ち倒され、あるいは体の一部を氷結されて、じょじょに勢いを失っていった。
「あなたは……いったい」
やせた老枢機卿の、呆然とした問いかけに、金鈴のごときソプラノが、そっけなく鳴り響いた。
「私は『オルタンシア』。ただのしがないメイドですわ」

いうまでもなく、彼女は七季の偏在であった。
レコンキスタを迎え撃つ、軍に組み入れられるよりも、前の時間のことである。
何やらガシャガシャと鎧を鳴らして群れ歩く騎士の一団に、不審を覚えたエセメイドは、認識阻害の魔法をかるくかけて、そのあと

をつけてみたのだ。
エンカウント率が高すぎだろう、と彼女がセルフツッコミを入れたのは余談である。
レコンキスタからの宣戦布告があって間もない、不穏な時期である。
武装しているところまでは許容できても、その騎士が、集団で、しかも内政を行っているマザリーニの部屋に近づくなど、言語道断。
――怪しさ大爆発だよな。
しばらく務めているだけで、「オルタンシア」にも、このトリステインを支えているのは、実質、マザリーニ枢機卿と一部の貴族だとわかるのだから。
その人物をどうこうする――という時点で、クーデターだ。暗殺というには、行動があからさま過ぎる。
で、その騎士の一団がマザリーニ枢機卿の部屋に押し入るどさくさに紛れて、こっそり「オルタンシア」も部屋に紛れ込んだのだ。
認識阻害をかけたまま。
気配でバレそうなものなのだが、どうも団体行動をしている集団というのは、ある一定の人数で固まって動くとき、「仲間だろう」とそれほど警戒心が動かなかったりする。
「身柄を確保せよとのお達しなのでな」
どうにも偉そうな騎士が、老政治家に杖剣を突きつけるタイミングで、メイドに扮した七季の偏在は、ミッド式の幻覚魔法を使ったのである。

マザリーニの部屋に、蝶が舞う。
夜色の翅(はね)。
黒髪と繊手。
光を弾く水球の群れ。

すべて、彼が初めて見る魔法だった。

四、五センチほどの直径の球体は、騎士たちが剣で切るには小さく、そもそも切ってもすぐに戻る復元力をそなえていた。

銀のタクトが振られるたびに、それらは数を増していく。

次々と舞う水球たちは、騎士たちの顔に、手元に、あるいは急所へと空を切って襲いかかる。

むろん、元は王宮に仕える騎士だけあって、彼らはみな魔法使い（メイジ）である。

風の魔法や土の魔法で、それらを迎撃、あるいは跳ね返そうとするのだが、凄まじい圧縮をもってなされた水球は、その小ささに似合わぬ質量で、氷の壁や生み出される風をも突破した。

男の顔近くで霧散した水球は、どういう仕組みか、騎士を昏倒させ、あるいは弾けて水になったとたんに、接触した男を雷撃に痺れさせ、たかが水の魔法と侮っていた騎士たちの意表を衝いて、次々と討ち取っていった。

しかも水球のすべてが、必ずしも本物とは限らない。

水と風の複合魔法なのか、幻覚を織り交ぜるという戦法は、マザリーニを背後に庇う女一人が、騎士の一団を翻弄するに十分な高度さをそなえていたのだ。

しかし、誰知ろう。

「オルタンシア」と名乗る彼女が生み出した水球の中には、デバイスの中に格納していた、薬物を混ぜ込んだものや、電気の通りやすい生理食塩水に調節したものも相当数あった。

口の周りでいきなり水素と酸素に分解することで、一時的な酸素中毒に追い込んだり、液体のまま素肌に当てて、そこから感電させたり、やっぱり薬品を気化させて眠らせてみたり麻痺させてみたり、と、見た目のわりに手の込んだ細工をしていたのだ。

腕力がないことは、元より承知。

だから彼女は、徹底的な奇策でもって、足りない部分を補うことに終始していた。

黒い蝶は、インテリジェントデバイス「黎明」のフォーム「スワロウテイル」の一部だ。

結界を張りめぐらせ、騒動を他に洩らさず、増援を寄せ付けないため、ついでに、結界の基点を担うデバイスの一部から送られてくる空間情報でもって、逐一、相手の動きを把握し、的確な対応を取るという念の入れようだった。

空気中の水分は、水魔法使(メイジ)いの味方だ。

今回、マザリーニ襲撃に選ばれた騎士たちは、攻撃力の高さを見込まれたのか、風や火、土の魔法を得意とするものばかりで、水の魔法の使い手はいない。

もっとも、この場に他の水魔法使(メイジ)いがいたとしても、七季の邪魔をできるほどの干渉力はなかっただろうが。

ほどなく決着は着いた。

騎士たちは全員バインドによって拘束されたうえ、薬物か雷撃、もしくは酸欠で意識を失っている。

肉体的な不利を理解して、接近戦に持ち込ませなかった「オルタンシア」の勝利だった。

「おケガはありませんか？」

「あ、ああ……」

小柄なのに、凛と背筋を伸ばして見つめてくる、黒い瞳のメイドに問われて、マザリーニ枢機卿はあわてて頷いた。

「これは、やはり……クーデターということなのだろうな」

重いためいきをつく老人に、「オルタンシア」は眉ひとつ動かさずに結界を解いた。

黒い蝶が、ひらひらと部屋の外へ飛んでいく。

「……ご安心を。どうやら王宮内の方は、ヴァリエール公爵と、その夫人があらかた収めたようですわ」

「何、そうか」
ヴァリエール公爵の夫人、というあたりで、マザリーニは枢機卿は、何とも微妙な表情を浮かべる。おそらく、その暴れっぷりに対する被害の総額を気にしているのだろう。
「あらためて礼を言おう。オルタンシア、だったかね？水と……風も使えるようだが、どうして私を助けてくれたのかね」
実質トリステインを切り回している男とは思えない疑問だった。
しかし彼は、自分が多くの貴族に嫌われていることを知っていた。それでもマザリーニは、この国を支えるために黙々と仕事をこなしていたのだ。
「……実質、この国の宰相に値する方とも思えぬお言葉ですが……お答えしましょう。
トリステインには、あなたが必要ですわ、マザリーニ枢機卿。おそらくリッシュモンたちも、それを痛感していたからこそ、あなたを殺さずに、拘束しようとしたのでしょう」
どれだけ嫌われていようと、マザリーニなくしてトリステインが回らないことは事実だった。
癒着も贈賄も、国の体裁があってこそ、その高官が私服を肥やせるのだ。
リッシュモンたちは、それを良く知っていた。
それはヴァリエール公爵も同じであっただろう。
だからこそ、多くの貴族から嫌われていたとしても、彼はいままで暗殺されることもなく、どうにか生き延びてこれたのだ。
マザリーニは「鳥の骨」と揶揄される人物ではあったが――骨は骨でも、なくてはならない、「首の骨」でもあった。
「これから忙しくなります。レコンキスタに連なっていると思われる貴族の、多くを処断することになるはずです。
政務をするものは減り、ますます忙しくなることでしょう。そんな折に、マザリーニ枢機卿にいなくなられては、トリステインが立ち行かなくなります」

きっぱりと言い切る「オルタンシア」の言葉は、理路整然としたものだった。

「私は平穏な生活がしたいだけです。レコンキスタなど、知ったことではありませんし、上の方の首が新しくすげ変わると、それだけ生まれる混乱も大きくなるだけ。迷惑です」

あまりと言えば、あまりな言いようだったが、それはもっともな話だったので、マザリーニも苦笑いするしかなかった。

「まあ……これは、さっきの恩に免じて、黙っていてくださると助かります」

仏頂面の黒髪メイドが、ぺろりと舌を出した拍子にのぞいた愛嬌に、マザリーニは意表を衝かれて面食らった。

存外に、このメイドは若いのではないかと思いつく。

「さて」

小柄な「オルタンシア」は、銀色のタクトに似た、短い杖をふるうと、騎士たちを拘束していたバインドを、今度は頑丈な鎖へと変えた。

転送魔法と錬金の応用である。蛇足だが。

「私、これから衛生兵というか、医療班の一員として、軍に配属されることになっておりますの。失礼ですが、こちらは枢機卿にお任せします。

あ、私のことは伏せておいてください。面倒ごとはごめんですので」

御身、お大事に。

ちゃっ。

白く小さな手をひらりと上げて、あっというまに駆けていったメイド娘の小さな背中を、呼び止める間もなく見送るマザリーニ枢機卿。

「あ……」

しかし、老政治家は、恩人である彼女の意向を無碍にするわけにもいかないと、また嘆息をこぼして、これからの事後処理の面倒さ

に、頭を抱えるのであった。

#２２８　始まらない物語ー紫陽花の滴ー（後書き）

あとがき

＞読み手さまが気にしていらっしゃったので、マザリーニ枢機卿のフォローもしてみたり。

久しぶりの「オルタンシア」です。まだオリ主から、キンダイチ先生の問い合わせが来る前と思ってください。

時間軸がややこしいかなぁ。

#229　始まらない物語ー星降る夜ー

「それって……よーするに『元気玉』だよな？」

プレシアから「集束砲撃魔法」の説明を聞いた七季の開口一声は、そのセリフだった。

俗に「集束型」として分類されるそれは、術者がそれまでに使用した魔力に加えて、周囲の魔導師が使用した魔力をも、ある程度集積することで、得た強大な魔力を、一気に放出する攻撃魔法だ。

術者自身の魔力の残量がわずかでも（トリガーを引くための最小限の魔力は必要だが）強力な砲撃を放てるものの、魔力の集束には、かなり高い魔導技術を要するという。

特に「使用後で空中に拡散した魔力をもう一度実使用レベルまで高める」のはSクラス以上の技術とされている。

その説明を、オタクなまっくろ巫女さんは、さっくり一言で片づけてくれた。

「集めるのが、気か、魔力かの違いだけだろ？

『地球のみんな、オラに元気をわけてくれー！』って言うべき？」

こてり、と首をかしげる、あどけない顔の少女に、元ネタを知っているリドルと才人がそろって噴き出す。

黒猫と少年がシンクロするというのも、はためにはけっこうシュールな光景だ。

マンガもアニメも見たことのないディルムッドが、けげんな面持ちで、黒髪の少女と同じように首をかしげつつ彼女を見つめている。

「サロン」のリビングに集まっての団らん時間に、いつもながらほのぼのとした空気が流れて、ぐだぐだこのうえない。

「んでもって、それ、エスピナの砲身でやるんだよな。アーチャーが言うのか？」

あのセリフ。
まっかな外套をひるがえす、褐色の偉丈夫が真顔でそのセリフをのたまうシーンを想像してしまい。
『ぶはっ』
黒髪の少年と、中身は闇の帝王なまっくろにゃんこの腹筋が瀕死中。
その間に、プレシアが「ドラコンボール」のコミックスを七季から手渡され、パラ読みすること一時間。
しばらくお待ちください……。

ぱたむ。
コミックスが閉じられたとたん。
「『元気玉』ね」
「ですね」
「だねー」
順に、ダークヘアの天才ママさん魔導師、ネコミミ山猫娘、ツインテール幼女、の順番である。
魔導師サイドまで納得のわかりやすさ、プライスレス（待て）。
「言わないからな!?」
さすがに七地家の居候中に、「ドラゴンボール」を読んでいたアーチャーも、問答無用でツッコミを入れた。
「それ以前に、魔力集束技術は、かなり高等なスキルなのだろう？言ってはなんだが、私にできるとは限らないぞ」
才能のなさには定評のあるエミヤシロウである。
「まあでもやるだけ試してみましょうよ。せっかくそのスペックで作ったんだし」
プレシアはやる気まんまんだ。

結果。
「わかっていたさ……」
背中に哀愁を漂わせる、錬鉄の英雄と、そんな従者の背中を優しく撫でて慰める、小柄な少女の姿が、夜の林の中にあった。
「集束砲撃魔法」を撃たせるために、デバイスの強度を研究したプレシアも、いささか残念そうに眉尻を下げる。
「できないものはしょうがないわよね」
「あ、ちょっと待った」
そこで、黒猫姿のリドルが、ごにょごにょと七季に耳打ちした。
「ん？　そりゃかまわないけど。でも、上手くいくのかなぁ」
ちょっと困ったように、落ち込むアーチャーを振り返った七季は、くいくい、と彼の腕を引いてこうねだった。
「アーチャー、ちょっと『エスピナ』貸して？」
ぷりーず。
「……ああ、ほら」
差し出された手に、ぽんと世界樹の枝を使った柄の箒が差し出される。
「ありがとー」
ミスリル製の、銀の穂先を持った箒――の形をしたデバイス――を受け取った少女は、それを抱いて、話しかける。
「『エスピナ』、ユーザー登録ってのかな。私にも使えるようにしてくれるか？」
『スィ。シニョリーナ』
「エスピナ」はアームドデバイスではあるが、受け答えはできるくらいの機能はついている。
七季は手早くユーザー名と起動パスを登録した。
「ユーザー名『七季』。起動パス『非力な強さ』」
『スィ』

柄の一部に埋め込まれた黒い石が、ぼうっと光を帯びる。
そして、結界を張った林の中、さくさく、とことこと、少女の足音が夜に響く。
広場のような開けた場所で、七季は「エスピナ」をかまえ――従者にならった魔力集束を始めた。
ふぉん……。
彼女じしんの藍色の魔力で描かれた魔法陣が、足元に広がる。
そこに吸いまれるように、またそこから跳ねて少女の肢体に這い登るように、とりどりの色を瞬かせる魔力の粒子が、夜闇を星のごとく照らして舞い踊る。
もともと魔族の視線に含まれる魔力さえも吸い取ってしまう七季のこと。
あたりの魔力を集めるのは、さして難しいことではない。
「きれい……」
アリシアは、ルビー色の瞳をきらきらさせて、姉貴分の作り出す、幻想的な光景に見惚れていたが、いっぽうのディルムッドは、その秀麗な面輪を引きつらせていた。
彼が持つ紅い槍「破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）」の「あらゆる魔力の循環を遮断する事が可能で、対象に刃が触れた瞬間その魔術的効果をキャンセルする」という機能ゆえに、「集束砲撃魔法」の相手役に選ばれたのだが。
目の前の少女に集まっていく魔力の圧が、尋常ではない。
そして彼女の目が開く。
「受けてみて、ディバインバスターのバリエーション！」
じゃこん。
そんな擬音が聞こえてきそうな迫力で、銀の穂先から、エスピナの砲身が顔を出す。
きらめく黒い瞳。
まばゆい魔法陣。舞い散る魔力は流星雨のよう。
それらを従え、小柄な少女はデバイスを向ける。告げる言葉は、

さっきリドルにささやかれた決めゼリフ。
「これが私の全力全ッ開！！
スターライトッ！　ブレイカァァーーーッ！！」
ぎゅおおおおおおッ。
彼女の魔力光である、瑠璃色のかがやきが、極太のビームとなってディルムッドへと向かう。
ないしん上げかけた悲鳴を意地で噛み裂き、黒髪の美青年は、頼りとするおのが宝具を、その襲い来る凶悪無比な砲撃魔法へとふるった。
しゅぱっ。
その深紅の刃が触れた先から、集められた魔力が霧散していく。
かき消された集束砲撃魔法は、まるで煙のように解けてかき消えていった。
が。
「――さすがに宝具がなかったら俺でも死にますよ！？」
ちょっぴり涙目のディルムッドに詰め寄られてしまった七季なのだった。

そんな記憶を振り返りつつ。
少女は夜の下で呪を紡ぐ。

「器に水を満たしましょう。水にかけらを溶かしましょう。私は容れる。私は肯う。この身は揺れる。この身は満ちる。海を抱える宮殿と、血潮を棄てる径を持つ」

まとうは黒き騎士服。

「御統を綴れ。しろしめす担い手。盟約もなく、制約も告げず、私

は呼び願う。名を持つ君よ。私は此処に。牙なき夜の散歩者が誘(いざな)う」

それはふつうの言葉のようで――けれど、不思議と聞き入ってしまう力を秘めていた。

「我が背なに永久の翼。我が胞衣(えな)は異邦の条理。たゆまぬ弦(いと)もちて哀歌と凱歌を奏でる贄人(にえびと)」

たゆたうようなリズムで、七季のソプラノが淡々と詠じる。

その声を背に、双槍を携える槍の騎士が駆ける。彼は守り手だ。

「差し招く梢。仮宿(かりやど)の神籬(ひもろぎ)。奇(くす)しき風にやすらう汝」

――鈴が鳴る。

それは現実のものではない。

閉じた目の奥。幻想の、彼女の内側でうち振られる、イメージの祭具だ。

五色の紐をひらめかせ、葡萄のごとく纏め上げられた黄金色の鈴たちが、しゃん、しゃん、と脳裏に響く。

金属の内側、空洞の壁にぶつかる魂が、黒衣をまとう神降ろしの巫女の中で震えている。

からんからん、からん。

からら ん、かからん、からん、りりん。

しゃりんしゃりん、しゃららら……。

音が振る。

音が降る。

清らかな響きは、頭の先から下りていき、首を伝って背筋を滑り、肩を超えて指先へと走る。

天(あめ)から地(つち)へと巡る力に貫かれる少女は、それを心地よくただ受け入れる。

「婚星(よばいぼし)を導(しるべ)に。春告げの鳥は烏衣(うい)を翻す。神魔怪霊(しんまかいれい)、なべて皆われの艫(とも)たらん」

天佑纏麻(てんゆうてんま)。

その呟きをもって、この場を圧する何かが降臨した――

#２２９　始まらない物語ー星降る夜ー（後書き）

あとがき

＞オリ主にあのセリフを言わせたかっただけです（待て）。

あと魔力集束技術って難しかったのな、という補足。

だからアーチャーではなく、オリ主がコンデンサになって集めたという。

そんなＳＬＢ（スターラインブレーカー）のためのこぼれ話。

オリ主が「エスピナ」に登録した起動パス「非力な強さ」の元ネタは某曲「茨の海」から。

＃２３０　始まらない物語ー神降ろしの巫女ー

藍色の天空を翔ける黄金（きん）の妖獣。
五彩の翼をはばたかせる、風の名を担う神鳥。
彼らが夜空を舞うたび、稲妻が走り、紅蓮の炎が闇を割く。
竜騎士を乗せたドラゴンは、とらの鋭い爪にかかり、翼を破られ、あるいは颶風（かぜ）にもまれて墜落していく。
その戦場を取り囲むように点在する、五つの光。
まるで満月のように明るく、暗黒を照らすそれが、黒という色彩をまとう少女だと、地上の誰が気づくだろう。
それほどはるかな高みから、箒に跨る異邦の魔女たちは、魔力の粒子をおのが手に導き、吸い寄せていく。
まるで誘蛾灯のようだ、と、アリシアはルビーアイに映るそのおとぎ話じみた光景を眺めて思う。
姉と慕う七季たち、その従者と偏在は、決して彼女の元までレコンキスタ軍を寄せつけない。
また白銀の光が爆発となって、どおん、と大気越しに振動を伝えてくる。あれはきっとプラタ（分体）だろう。
さすがに、こんな場所で巻き込んでしまってはシャレにならないからと、小動物なエイプリルとメイは、留守番――ではなく、似たようなものだが、七季の懐の不思議空間にしまいこまれている。
おそらくは、この世でいちばん安全な場所かもしれない。
リニスの支援魔法によって、プレシアだけでなく、アリシアにも周囲の景色が拡大されて見えた。
プレシアが生み出した、無数のスフィアは、夜の向こうに飛んでいって――夜に浮かぶ戦艦のいくつかにぶち当たり、花火のように弾けた。

悲鳴は聞こえない。逃げ惑うものたちの表情もわからない。
それは、リドルに言わせれば「カーニバルのよう」だと表現できただろう。
そして祭りは、いまやクライマックスを迎えようとしている。
地上では、槍の騎士と弓の騎士を従える黒衣の少女が、長く荘厳な呪文を唱え終わろうとしているところだった。

それは音もなく降りてくる。
重く、濃厚な気配は、筆舌に尽くしがたい、意思ある暗黒。
それども七季は、そのひとを、その存在を受け入れる。
八十禍津日神（やそまがつひのかみ）。
穢れを司（つかさど）るこの神は、祀（まつ）ることで災厄から逃れられると考えられるようになり、厄除けの守護神として信仰されるようになった一柱である。
かれを受け入れた、神降ろしの巫女は、続いて、その身に宿る神霊の力を借りる。
死者たちの群れが相当数いるだろう、レコンキスタ軍へ向ける、集束砲撃魔法に、浄化の力を付与することで、亡者を操る力を祓うためだ。
桜色の唇が、神威を孕むソプラノを紡ぐ。
「高天原（たかまのはら）に神留（かむづま）り坐（ま）す　皇親神漏岐（すめらがむつかむろぎ）　神漏美（かむろぎ）の命（みこともち）以て
八百萬（やほよろづ）神等（のかみたち）を神集（かむつど）へに集（つど）へ賜（たま）ひ　神議（かむはか）りに議（はか）り賜（たま）ひて――」

歌うように。祈るように。
とうとうと紡ぎだされる文言は祝詞（のりと）。
それも、罪や穢れを祓うための「大祓（おおはらえ）」という儀式に使われる「大祓詞（おおはらえのことば）」だ。

夜風に乗って流れるそれを、少年姿のリドルは、懐かしいような、煩わしいような、不思議な心持ちでそれを聞く。

穢れを祓う祝詞は、悪霊に近い本質の彼に、少なからず影響を与えるからだろう。

「――荒潮の潮の八百道の八潮道の潮の八百會に坐す　速開都比賣と言ふ神
持ち加加呑みてむ　此く加加呑みてば　気吹戸に坐す気吹戸主と言ふ神
根底國に気吹き放ちてむ　此く気吹き放ちてば　根國　底國に坐す速佐須良比賣と言ふ神　持ち佐須良ひ失ひてむ」

低く、絶え間なく、落ち着いた響きのそれは、ともすれば眠気を誘うように、しぜんなリズムで、人間の耳に馴染む。

否、レコンキスタ軍の、騎士を乗せたドラゴンさえも、宙に滞空して聞き入ってしまうほどに快い。

小柄な少女の体が、淡い月色の光を帯びている。それは、身にまとう騎士服が黒いため、いっそう明らかに映り、やわらかに、それでいて神々しく感じられてならない。

それは、とても清らかな光だ。

いまこのとき、彼女じしんが幣となる。

「此く佐須良ひ失ひてば　罪と言ふ罪は在らじと　祓へ給ひ清め給ふ事を
天つ神　國つ神　八百萬神等共に　聞こし食せと白す――」

赤い外套の騎士に、五つの光が注がれる。

そして、いまひとつ。

「八十禍津日神」を降ろした七季の手から、音もなく放たれる力が、アーチャーを射た。

闇に近い、藍色の中にちらちらと金の粒子が瞬くそれは、彼女の魔力光に酷似して――けれども似て非なる力が宿っていた。

主から注がれた力を、いま束ねた力に、男は重ねて装填する。

「ＳＬＢ（スターラインブレイカー）」

弓の騎士によって放たれた、破魔の一射は大きく広く。

都市ひとつを丸ごと飲み込むほどの規模で、戦場の夜を圧倒した。

#２３０　始まらない物語ー神降ろしの巫女ー（後書き）

あとがき

＞短くてすみません。

描写するシーンが、少しかぶっていたので冗長だったでしょうか。

ＳＬＢ（スターラインブレイカー）は、スレイヤーズに登場する、「浄化結界（ホーリィ・ブレス）」の効果をイメージしてみました。

「八十禍津日神（やそまがつひのかみ）」を降ろして、その「穢れを祓う」力を上乗せした魔力（非殺傷設定）でどーん。

レンジ重視なので、威力は本家ＳＬＢ（スターライトブレイカー）を単体で受けたときよりも低めです。いちおう。

ふつうの人間は、非殺傷設定の魔法を受けて、魔力ダメージで気絶するのがせいぜいですが、アンドバリの指輪で操られていた死者は、のきなみお陀仏。ただし死体は残ります（本文で説明しろ）。

※幣（みてぐら）

：「御手座（みてぐら）」の意。「みてくら」とも。，元来は神が宿る依代（よりしろ）として手に持つ採物（とりもの）をさした。神に奉納する物の総称。

ＳＬＢ（スターラインブレイカー）

：「Ｓｔａｒ　Ｌｉｎｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ」の略。ぶっちゃけ弓兵でＳＬＢ（スターライトブレイカー）。

オリ主の偏在五人をコンデンサにした魔力集束を、アーチャーがぶっ放すという対軍魔法。

今回は破邪のシンボルである五芒星を意識した配置で、等間隔に陣取って集束したため、この名前がつけられた。

ぶっちゃけ魔力が効率よく集束できるなら、位置関係はさほど重要ではない。今回は、あくまで浄化・解呪を目的としているため。

浄化結界（ホーリィ・ブレス）

：ゾンビやスケルトン等と言ったアンデッドモンスターを浄化する光の波を放つ呪文。小さな都市なら丸ごと浄化できるほど効果範囲が広いが、使用者の負担も重く、同じ人間だと一日に一回しか使用できない。ナーガが使用。

#231　始まらない物語ー去りゆく老兵ー

藍色の極光とも見紛う、浄化の力を孕んだ魔力が戦場を舐め尽くしたのち。

痛いほどの静寂が、夜に染み渡った。

宙に浮かぶ戦艦は動きを止め、その中に乗り込んでいた亡者たちは、彼らを操っていた力をうち祓われてくずおれる。

同じように、地上でも、命なき兵士が、器はそのままに、倒れ伏したまま動かない。

レコンキスタ軍の中で、少なくはあったが、生きていたものも、のきなみ気を失っていた。

こちらは、非殺傷設定の魔法によって与えられた、魔力ダメージによる気絶である。

しかし、いずれにせよ、進軍してきたレコンキスタの軍を、行動不能に追い込んだことは、紛れもない事実だった。

トリステインの軍人のうち、ひとり才人に保護されていたキンダイチが、唖然とした表情で、静まり返った戦場を見渡す。

「さて」

神降ろしの少女は、あたりに人っ子一人いないのを確認すると、一同に号令を下した。

「撤収――！」

「はい？」

目を点にするキンダイチであった。

「いや当たり前でしょう。私、トリステインの人間じゃないですし。

このまま戦う義理なんて、かけらもないですからね？」
転移魔法でセカンドハウスな「サロン」に戻った七季の、開口一番が、このセリフだった。
「し、しかし……圧倒的に我々が優勢で」
不満そうな面持ちのディルムッドに、黒髪の少女からデコピンが飛ぶ。
「あたっ」
「神降ろし」をした時点で、偽装のための魔法は解除されてしまったらしい。
戦場から無事に戻ってきたことだし、と、他のメンバーもめいめい私服に着替えていた。
「はい、ここで問題です。
私たちがレコンキスタ軍を撃退しました。
王宮が、それを知りました。『良くやった。褒美をやるのでちょっと顔貸せや』と言われます。
ディルも一緒に王宮に上がります。『王族の前で仮面とは無礼な。マスクを取らぬか』とか言われます。
いちおうフェイスチェンジかけてても、ホクロの呪いが完璧に無効化できてるかは不明です。
しかも、元々ディルは美形です。恋人（？）を失くしたばかりの王女が、目の前に現れた、国難を救った美男子と出会って、さて、何を考えるでしょう？」
『うん、アウト』
そりゃー惚れちゃうわ。
才人はおろか、テスタロッサファミリー、リドルにキンダイチまでが異口同音にのたまった。
「何のために変装してったと思ってんだ。正体を隠したまま、ばっくれるためだっつーの」
保身は基本よ？
と、真顔で言い放つ七季に、アーチャーが深いためいきをつく。

「しかし、犯人不在で、トリステイン側が調べないわけがないだろう。何しろ、一度はレコンキスタを撃退した戦力なのだ」
低い声が紡ぐ、もっともなツッコミに、黒髪の少女はにっこりと笑顔を浮かべて、白髪豊かな老教師へと話を振る。
「うん。だからね、それはキンダイチ先生に犯人になってもらおうと思って」
「ぼ、僕ですか？」
修羅場に慣れているはずの老探偵も、こんな怒涛の展開に、ちょっぴり涙目になっていた。

翌日、王宮にて。
ひとり戦場に残ったというキンダイチが、疲労困憊のため、一晩の休息を与えられたのち、レコンキスタ軍が撤退した事情を問い質されるために、王宮へと召し出されていた。
「して、昨晩、何があったのだ」
きのうクーデター未遂の後処理に追われていたマザリーニは、ほぼ完徹のため寝ていない。目の下にクマのある相貌で、問いかける彼の苦労を、ひそかにキンダイチは推し量って哀れんでいた。
「は……畏れながら、きのうタルブ村にて、レコンキスタ軍を撤退させたのは、わたくしめにございます」
宮廷には、軍の要職にある将軍たちや元帥も並んでいたため、その彼らの間からどよめきが洩れる。
なにしろキンダイチは水メイジ。とても一軍を退けられるような戦力ではない。
しかし、この危急のときに表立って野次るような面々は、ほぼレコンキスタと繋がりがあったために、この場には居合わせていなかった。
「面を上げてください。どういうことか、説明してもらえますか？」

信じられないのはアンリエッタも同じで、目の前に跪く、豊かな白髪の老賢者にそっと声をかけた。
「きのう、わたくしめが使ったのは、人生で最高最後の魔法でございました」
「最後の？　どういうことでしょう？」
キンダイチは、その老いてなお、黒く知性のかがやく瞳で、ワインカラーの髪を持つ少女を仰ぎ、そう切り出した。
「わたくしは、水メイジにございます。ふだんは治療薬を専門に研究している教師でございますが、長年の間に試行錯誤した秘薬がございました」
キンダイチの傍らには、「頼んで、自分の研究室から、残りの薬を持って来させた」という立場の、七季が控えている。
ばれにくいように、あえてふだんは着ない、ふんわりと優しい色合いのローブとスカートを身にまとった少女が、恭しく何かを取り出した。
『うっ！！』
ぶしゅううう。
それは、謁見の間の奥に腰かけている、アンリエッタにすらも届くほどの刺激臭を放つ物体であった。
この場に七季の知り合いの人格破綻神父がいたなら、喜んで手を伸ばすだろうそれは。
泰山麻婆。
「この秘薬は、食せば、九割の確率で魔法が使えなくなるほどの劇薬です。しかし、稀に、飛躍的な魔力を得ることができるものなのです」
「な……何と！」
「おお、それは」
「しかし、運よく器以上の魔力を持ったとしても、服用したメイジは、その負荷に耐えられません。私も、例に漏れず……」
キンダイチは、目をかがやかせる将軍たちを前に、沈鬱な表情で

吐き出した。
「レコンキスタを驚かせるほどの、強大な魔法を、一発だけ放つことができました。しかし、この身はもはや、魔法の行使は不可能です。
兵士に投薬するのは無理でしょう。九割のメイジを使い物にならなくする恐れがある秘薬など……」
メイジを使い潰すだけのものです。
そう、きっぱりと言い切るキンダイチの表情は、厳しく、苦渋に満ちていた。
「これは失敗作です。メイジとしての将来をすべて奪ってまで、レコンキスタに勝利しても、おそらくトリステインのためにはなりますまい。
犠牲は、わたくし一人で十分なのです」
そう締めくくる老魔法使い（メイジ）の言葉に、短慮な将軍の一人が「何をのんきな！」と言い捨てて、七季の手から、泰山麻婆の煮えたぎる器を奪い取った。
「あっ」
もちろん彼女がやすやすと渡したのは、わざとである。
そして。
トリステインの王宮に、この世のものとも思えない絶叫が響き渡ったのだった。

こうして、表向き「魔法を使えなくなった」キンダイチは、軍はおろか、魔法学院からも辞することになるのだが――それはまた、別の話である。

#２３１　始まらない物語－去りゆく老兵－（後書き）

あとがき

＞泰山麻婆万能説でプッシュしすぎでしょうか（笑）。

まあアレだ。

オリ主たちが戦っても益がないですし、これトリステインの戦争ですから、という話。

そして、どさくさにまぎれてキンダイチ先生も引っこ抜きました。

#２３２　始まらない物語ー ステップ ー

さて。

いっぽうこちらは、アルビオンのウェストウッド村。

「それじゃ移動するからねー。みんな荷物は持った？」

そう子供たちに声をかけるのは、波打つ栗毛を一つに結った、巫女服姿の美少女。

『はーい！』

元気な子供たちの声が、朝もやの中に上がるのを、あわてて緑の髪をのばした美女と、金髪ロングヘアの爆乳美少女――マチルダとティファニアが短く叱りつけ、たしなめる。

「しっ、静かにしな！」

「みんな、声は小さく、ね」

十歳になるかならないか、それくらいの子供たちは、マチルダに睨まれて、ひゃっと首をすくめたり、自分の口を手で押さえたりと、じつにわかりやすい反応をする。

そんなちびっこたちを――そしてティファニアやマチルダさえも。

「んじゃ目をつぶってねー」

異世界の「神妻」である真言は、かたっぱしから袖の中に突っ込んでいくのであった。

ふたたび話はトリステイン王宮へと戻る。

キンダイチの言う「失敗作の水の秘薬」を口にした将軍は、そのまま悶絶したあげく気絶し、兵士たちによって運ばれていった。

蛇足であるが、これから彼は一生涯、その短慮を悔いて、魔法の

使えない生活に苦悩することとなる。
さておき。
まだ朝といえる時間帯ではあったが、そこにガリアからの使者が到着したという知らせが届いた。
将軍や王女であるアンリエッタ、実質的にはトリステインの宰相ポストにあるマザリーニが、こぞって互いの顔を見合わせる。
タルブ村にて、一度はレコンキスタを撃退できたものの、まだ残存兵力はトリステインの軍と戦えるだけの数はあるだろう。そこに、もしも大国ガリアが漁夫の利とばかり、横合いから攻めてきたら、トリステインはひとたまりもない。
最悪の想像を浮かべたマザリーニや、軍人たちは、唇を噛んで、その可能性が消えてくれるよう願ったが、だからといって、始祖ブリミルがどうにかしてくれるわけではなかった。
「ガティネ翁と、その付き添いは下がってよろしい」
マザリーニの言葉に、ふわふわと豊かな天然パーマの白髪のキンダイチと、ローブ姿の七季は、一礼して謁見の間を辞去する。
そして、ガリアからの使者が伝えたのは、ガリア王ジョゼフと、その側近がトリステインを訪問するという、先触れの内容であった。

ガリア東薔薇騎士団と共に到着した、青い髪の美丈夫――ジョゼフ王は、巷で「無能王」と呼ばれているとは、とても思えないほどの威風をはらって登場した。
その海色の目には叡智。引き締まった端正な横顔には、人の上に立つもの特有の自信と不敵さがあふれ、それでいて雅やかな物腰、と文句もつけようのない王族ぶりである。
昼下がりの王宮で、彼と相対したアンリエッタなど、彼に比べれば小娘もいいところで、ワインレッドの髪を肩口に切りそろえた美少女は、この大国の王にたじろぎがちであった。

「まずは取り込み中のところ、歓迎していただき、いたみいる」
低く、快い声は、迎賓の間に良く通った。
謁見の間ではない。王として、国としての格が上であるガリアの王族を迎えるには、玉座から相手を見下ろす謁見の間は、不都合だったのだ。
それに、きのうのクーデターの一件で、いまだ城内はそこかしこが荒れていた。
ふだん人の入らない――むろん、清掃以外に、という意味だが――迎賓の間が、最も適当だったというわけだ。
マザリーニ枢機卿やアンリエッタからすれば「わかってるなら早く帰れ」と言いたいところである。
何しろ現在進行形で、トリステインは戦時中なのだから。
「だが、こちらも急ぎの話でな。まずはトリステインに告知すべきと思い、まかり越した」
そしてジョゼフが披露したのは、アンリエッタにとって、寝耳に水の話ばかりであった。
アルビオンのウェールズ王子が生きていたこと。
彼が、ガリアの王族、イザベラ王女の婚約者となったこと。
そして、ガリアは王女の婿であるウェールズの正当な権利として、アルビオンを奪還するための支援を全力ですること。
「ウェ、ウェールズさまは生きて……！」
驚きの連続に、アンリエッタはその美貌ながら、あんぐりと口を開けて絶句していた。
生きていたなら、何故ひとこと自分に知らせてくれなかったのかと。
そして、少し考えれば、政略上とわかるだろうに、他の女性と婚約したことに、ないしん途方もない苛立ちを胸に燃やすアンリエッタだった。
もっとも、いまやウェールズ王子の心には、アンリエッタに向ける恋情など、ほとんど煙ほどの薄さもないとは露知らず。

「それはつまり――レコンキスタは、ガリアの獲物、と理解してもよろしいか……？」

いっぽうのマザリーニ枢機卿は、国政を預かる立場だけあって、至極まっとうでもっともな問いかけを投げた。

もしも、それが本当ならば、トリステインはレコンキスタの相手をしなくても済むかもしれないのだ。

「そのことなのだがな。

レコンキスタは現在、このトリステインに侵攻しつつある。我々ガリアは、いわばトリステインの背後にあるだろう。

トリステインの国境を侵して進軍するのは、侵略行為とみなされるのではないかと」

いたってかるい口調で、ジョゼフは老枢機卿へと切り返した。

いくばくかの希望を胸に抱いていたマザリーニ枢機卿は、胸のうちで苦虫を噛み潰す。目の前の為政者が述べることは、まったくもって正論だ。

「そんな！」

アンリエッタが悲鳴のような声を上げた。

ジョゼフが、トリステインを支援する気はないのだと、ようやく理解したからだ。

「そんなも何も……なあ？

大軍を率いて、他国に乗り込むのは、ふつう戦争だと、相場が決まっているだろう。常識的に考えて、許可もないのに、そんなことはやれんよ」

まるで子供に、物の道理を説く父親のような口調で、飄々と答えるジョゼフの背後にたたずむのは、紫暗の目が美しい、プロポーション抜群の美女だ。

彼女こそがジョゼフの側近にして使い魔――シェフィールドである。切れ長の双眸は、ジョゼフに食ってかかる勢いのアンリエッタを、冷ややかに眺めていた。

その手がドレスの隠しポケットに伸びていることなど、主たる男

以外に知る由もない。
＜止めておけ、ミューズ＞
＜ジョゼフさまのおっしゃるままに＞
念話で会話する「虚無」の主従は、このトリステインをさらに追い詰めにかかった。
彼らの中では、もはやこの国は「詰んで」いる。
「それはそうと、婿のウェールズなのだがな」
何でもないように話題を転換したジョゼフに、マザリーニ枢機卿だけが、しわの刻まれた面輪を、けげんそうに向けた。
「ウェールズさまが？」
アンリエッタは当然のように食いつく。ジョゼフとシェフィールドは、胸のうちで笑いが止まらない。
既に、かのうるわしい王子は、とっくにアンリエッタに見切りをつけていることを、この一週間あまりの日々で理解しているからだ。
「アルビオンにて、トリステインから派遣されたという使者に暗殺されかけた。
名前は何と言ったか……そうそう、ワルド、とか。
大使でも文官でもない騎士だったが、王女の信頼の証であろう『水のルビー』を持参していたからという理由で、特別に面会を許されたらしい。
これが、内乱中の王城に、いつまでも図々しく居座って……あげく、王子の命を狙ったのだから、これはもうトリステインの、国ぐるみの陰謀であろうと、ウェールズは、それはそれは傷心していた」
「え……？」
聞かされた言葉が何なのか、アンリエッタは理解することを拒んだ。
――暗殺？　ウェールズさまを？
ワルドは、マザリーニ枢機卿やアンリエッタも信頼の厚い、グリフォン隊隊長の若手エリートだった。
それが、他国の王子を暗殺。

理解の早いマザリーニ枢機卿は、すでに真っ青を通り越して、雪のように白い顔色をしていた。
「で、だ。
いずれガリアをも告ぐウェールズの、後見である俺としては、誠に遺憾であるといわざるを得ない。
なにしろ娘婿の命を狙われたのだからな。本来であれば、アルビオンの王が請求すべきものなのだが――ここは父親代わりとして、ガリアがトリステインへ賠償金と謝罪を要求する」
たん。
会談のテーブルに広げられたのは、王族暗殺未遂に対する賠償請求だった。

そしてトリステイン魔法学院では。
ミッド式の転移魔法によって、瞬時に王宮から離脱したキンダイチと、黒髪の少女が、ウェストウッド村から戻ってきた真言と合流したところだった。
「んじゃあ、ちょっくらバカンスにＧＯ！」
「え？」
「い？」
『えええええ！？』
彼らを出迎えたアーチャーたち、異世界トリップご一行も、真言が開いたジッパーへと、またしてもポイ投げされたのである。
七季たちの運命や、いかに。

#２３２　始まらない物語ー ステップ ー（後書き）

あとがき

＞ちょっくら駆け足で進めました。

これによって、ワルドが指名手配、いっしょくたにルイズもお尋ね者です。

やっと書きたいところまで話が進んだ。

オリ主たちは先輩とどこへ行くかというと……読んでみての、お楽しみ。

かなり超展開になると思いますが、よろしくお付き合いください（拝跪）。

#２３３　始まらない物語ー赤の名前ー

「残念だったな、七季」
「うん……でも珍しいな、『翠屋』が臨時休業なんて」
残念そうな色を隠さない声音で、へにょんと黒い眉を下げた少女は、隣に並ぶ男を見上げてそう呟いた。
彼女の従者が身にまとうのは、ダークブラウンのシャツに黒いジーンズ。
肌の色も褐色のため、全体的に暗い色合いになりがちなのだが、羽織った赤いジャケットと、後ろにかき上げた髪がまっしろに色が抜けているため、上手くバランスを取っている。
むしろ、アーチャーの鋼色の瞳とあいまって、それらがアクセントになっているから、ただでさえ日本人離れした容貌なのに、いっそう目立っていた。
「そうだな。まあ別の店に」
入ろう、と言いかけたところで、アーチャーと七季は、同時にその顔を上げた。
「魔法……いや、これは魔術か！」
同じ系統の魔道を知る、剣製の魔術師が、かるがると少女の体を抱き上げ駆け出す。
ほどなく海鳴臨海公園に到着した彼らは――そこで信じられないものを見つけた。

「アーチャー？　え？　エミヤさん？　ちっこい？」
シロウさん？

従者の腕に抱かれたまま、きょとんと小首をかしげる少女の姿を認めた相手も、ぱちくりと大きな琥珀の瞳を瞬いていた。
「え、何で俺の名前……ってアーチャー！？」
水晶製のペンデュラムを下げていた赤毛の子供は、七季の従者に気づくと、反射的に何かをつかむようなそぶりをしたが――
「たわけっ！」
ごん。
「づっ」
「こんなところで『使う』やつがあるか！」
男の拳を食らった子供は、絶句して小突かれた頭を抱えたのだった。

「ほぇ……なるほどー。どうりでアーチャーと魂そっくりだと思ったー」
あれよあれよと流されて、いつのまにか、黒髪の少女の膝上に抱っこされるはめになっていた子供の名は――「衛宮士郎」と言った。
アーチャーとは根源を同じくしながらも、違う末路に進んだモノであるという。
「貴様……そのザマは何だ。けっきょく凛に迷惑をかけたのだろう」
根源を同じくしながらも、自分とは違う鋼色のジト目を向けられた子供――士郎は、「うぐ」と言葉に詰まった。
げんざいの彼は、蒼崎製のちみっこ人形ボディに魂を入れた状態で、本来ならばアーチャーと色違いの容姿なのだ。
「お、俺のことよりっ、何でお前がこんなところにいるんだよ、アーチャー！」
子供に似つかわしくない、強い光を孕む目で、自分の可能性であった英雄を睨みつける士郎だが、その剣幕も長くは続かない。
「かーいいっV」

きゅむっ。
「ぅむっ！？」
子供好きな七季が、そのたわわな胸に、お子様ボディィの士郎を抱きこんで、きゅうきゅう愛で倒したからである。
「あう……」
ひと段落つくころには、赤毛の男の子は、ちょっと赤い顔でぐったりしていた。
「さて。これで落ち着いて話せるな」
いつのまにか認識阻害の結界が構築されている。どうやら七季は確信犯の模様。
「……マスター。自重してくれ。頼むから」
心なしか、アーチャーの声が低い。
「ます、たー？……ええっ！」
ぱっと顔を跳ね上げた士郎は、こぼれ落ちそうなほどに大きな目を見開いたかと思うと、かわるがわる黒髪の少女と、呆れ顔の偉丈夫を見比べる。
――この子が、お前のマスター？
「ど、どういうことだ！」
「説明が面倒なので省くが、簡潔に言うと、私は英霊の座から引っ張り出され、恩人である七季の従者をやっている」
私は英霊エミヤ本体だ。
そして士郎は、アーチャーが彼女へと向けるまなざしが、自分へのそれとは違って、穏やかで温かい色であることに気づくと、何とも言いがたい、安堵のにじむ表情で頬を緩めた。
「そっか……」
良かった。
聖杯戦争が、この地で起こっているわけではない、と判明したことも喜ばしかったけれど、それが通り過ぎれば、別の感慨が士郎の胸に広がる。
衛宮士郎と英霊エミヤは、どうしてもそりの合わない、気に食わ

ない相手ではあったが――自分と別物である、と認めた以上――「他者」である男の幸福を、士郎が喜ばないはずがなかった。

それが照れくさかったのか、それでもやはり気に食わないのか、アーチャーは赤い髪のちびっこへ、少しだけ力を入れたデコピンをかました。

「でっ！……何すんだっ」

「それで？

貴様はどうしてあんなに焦っていたのだ？

ペンデュラムを用いていたからには探し物だろうが、いったい『何』を探していたのか、答えてみろ」

場合によっては、協力してやらんでもない。

「あ、あああああっ！」

言われてようやく、本格的に酸素が頭に回りだしたのか、士郎はボーイソプラノを張り上げて、背に腹は変えられない、とばかり勢い込んだ。

「なのはがっ！

俺が世話になってる家の女の子がいなくなったんだ！」

「何？」

「『なのは』ちゃんって……あれ？　フェイトの友達だったよな？」

平穏だった日常に、新たな波が起ころうとしていた。

#２３３　始まらない物語ー赤の名前ー（後書き）

あとがき

＞キングクリムゾン！

というわけで一気に時間が流れております。

赤毛ちびっこ、平行世界に逃がされた衛宮士郎の登場です。

これで衛宮大集合ー！とか言ってみる（笑）。

フェイトはリリなの世界で生まれて、なのはの同級生。七季たち一行と一緒に、海鳴市で暮らしてました。

詳細はまたのちほど。

キング「クリムゾン」と赤い弓兵と、赤毛の正義の味方見習い、から、タイトルを「赤の名前」にしてみたり。

#２３４　始まらない物語ー四叉路ー

――なのは、どうしたんだろう……。

教室の中にポツンと空いた空席を見つめ、ハチミツ色の髪をツインテールに結った幼女は、静かにためいきをついた。

フェイト＝テスタロッサ。今年で九歳になる、私立聖祥大附属小学校の三年生だ。

姉そっくりのルビーアイと金髪は、その可憐な容姿とあいまって、いまから将来が楽しみなほど。

必然、男子生徒の人気も相当なものだが、ちらちらと彼女をうかがう男の子たちの視線など、どこ吹く風で、フェイトは大好きな親友の不在に、可愛らしい顔を暗くしていた。

教師の説明する声も、そぞろにしか聞き取れない。

――帰りに、お見舞いに行こう。

それとも、いったん帰って、アーチャーにお土産用のお菓子を焼いてもらった方が良いだろうか、と思うくらいに、この美幼女にとって、褐色の偉丈夫は慣れ親しんだ家族であった。

「ありがとうございました、金田一先生」

「いえ……お役に立って良かったです」

海鳴市の一角にある、雑居ビルでは、そんなやり取りがなされていた。

仕立てのいいスーツを着こなし、秘書らしき付き添いを従えた壮年男性は、いかにも裕福そうだが、そんな人物が深々と頭を下げている。

いっぽうの相手――ふわふわとくせのある白髪をいただく老齢の、こちらも男性は、笑みに良く似た、穏やかな相貌で会釈をした。
彼らは「それでは」と互いに言い合って、どちらからともなく分かれる。
老探偵――金田一耕助は、いまどき珍しい袴姿の和服で、少し背中を丸めながら雑踏に紛れていった。
「これで、いま抱えている事件は、ぜんぶ片付いたけど……何だか、新しい騒動の予感がするなあ」
のんびりと、困ったような響きの声は、人ごみのざわめきに熔けていく。

そして、とある管理外世界。
「それでは、こちらが納品するお品物になります。お確かめになりますか？」
「ああ。高い買い物だからね」
切れ長の瞳がルビー色にかがやく眼鏡美女に、訪れた客が、鼻の下を伸ばしながらも、あわてて頷く。
「ではこちらへどうぞ」
すると、カフェオレ色のボブカットに、同色のネコミミが生えている、癒し形美人が奥から出てきた。案内されるままに、客は奥のシュミレーターへとついていく。
それを見送ったプレシアは、一つに結い上げていたダークヘアを解くと、ほっと嘆息して髪をゆるくかき回した。
「これで一通りの納品は終わり……マコトのアドバイス通り、しばらく休業とは、告知してあるけど」
今度はどこに行くのかしら？
デバイスマイスターとして、この十年ほど働いてきたダークヘアの美女は、まるで時の流れが彼女を置き去りにしたかのごとく、若

々しい。
　薔薇色のルージュを乗せた唇で、きゅっと弧を描きながら、プレシアは店じまいの準備を進めるのだった。

「ひとつめ。『神隠し』」
　海鳴臨海公園の、ベンチに座って赤毛の男の子を抱っこする黒髪の少女は、そう切り出して、指を立てた。
　折り曲げたままの小指には、菫青石（アイオライト）の指輪が光っている。
「ふたつめ。『誘拐』」
　続けて立てられた中指。とたんに士郎がじたばたし始めるのを、彼女は、ちびっこの腹部に回した腕で戒めた。
「みっつめ。『家出』」
　今度は親指が立てられた。ちょっと赤毛の男の子が大人しくなる。が、士郎はふるふるかぶりを振って、その可能性を否定した。
「なのはは、そんなことする子じゃない」
「よっつめ。『その他』……ときに、事実は小説よりも奇なり、だったりするから」
　うしろを振り返り、七季のあどけないけれどまじめな表情を浮かべた顔を目にした士郎は、「わけがわからない」という面持ちで首をかしげていた。
「二つ以上の可能性が混在することもある、ということだ。たとえば、誰かにそそのかされて自発的に家を出た場合、家出であり、誘拐になるだろう」
　横からアーチャーが補足すると、ちびっこ士郎は、ふくふくの頬で唇を尖らせるという、はためには可愛らしいとしか思えない表情でむくれた。
「う、うっさいな。わかってる！」
「まあ、ざっと考えると、こんなところかな。なのはちゃんの失踪

した可能性は」
淡々としたソプラノを紡ぐ少女は、よいしょと膝上から士郎を下ろすと、ベンチから腰を上げた。
同じように、赤いジャケットを身にまとう偉丈夫も立ち上がる。
「じゃ、行こうか。まずは現場を見てからだ」
案内よろしく。
にっこり笑って言われた赤毛の男の子は、いつのまにか当然のように繋がれていた手に「え?」とあっけに取られながらも、たかたか急ぐことになる。

#２３４　始まらない物語ー四叉路ー（後書き）

あとがき

＞サブタイに困って、四のつく言葉から選んでみた（待て）。

何というか、かるい状況説明の小話ですな。リリなの世界に来てから、何してたのか、と。

先輩とリドルはお出かけ中。忘れてたわけじゃ……ないですよ？

（あさって）

ディルもいますが、あとで書きます。

#２３５　始まらない物語ー桃色の名前ー

「……黎明。もう一度、聞かせてくれないかな？」

お願い（プリーズ）。

おそらくは、なのはの失踪に関わるであろう、かすかな次元の歪み――その残り香のような痕跡を分析してのけた、やたらめったら優秀なインテリジェントデバイスは、菫青石（アイオライト）の石をかがやかせ、こう言ってのけた。

『はいマスター。

痕跡を解析したところ、このゲートの術式は、サモン・サーヴァントのそれと共通する点が、複数あります。

なおかつ、残留する魔力パターンに酷似する人物データが、一件ヒットしました。該当者は、ルイズ＝フランソワーズ＝ル＝ブラン＝ド＝ラ＝ヴァリエールです』

あまりといえば、あまりな結果に、七季は頭を抱え、アーチャーは渋面で重いためいきをついた。

――なんてこったい。

話は、三十分ほど前にさかのぼる。

ちびっこ士郎の先導で、高町家までやってきた黒髪の少女と白い髪の偉丈夫は、沈鬱でピリピリした空気に満ちている、なのはの家族に紹介された。

「ただいま。お客さん、連れて来た」

「初めまして。七地七季です。うちのフェイトが、なのはちゃんにお世話になってます」

「彼女と同じく、フェイトの保護者で、アーチャーと言います。お取り込み中に恐れ入ります」
リビングに通された二人は、ぺこりと丁寧に頭を下げた。
「なのはの？……お友達の、ご家族、かしら。あらまあ。こちらこそ、なのはがお世話になって……」
力ないが、それでもやつれてなお美しい笑顔を向ける桃子に、アーチャーがいたましげな目を向け、七季は視線で赤毛の少年を促した。
「桃子さん、士郎さん。この人たちなら、なのはの居場所がわかるかもしれないんだ」
とたんに、高町士郎の目が鋭さの中に焦燥を帯びて、見知らぬ二人連れへと向けられた。
「どういう……ことかな？」
なのはの父は、突拍子もないことを告げる赤毛の男の子へ、説明を求めた。それを七季が白く小さな手で押し留める。
「説明は後回しにしましょう。信じるかどうかは、そちらに任せますし、いまは娘さんを探すことが先決だと思います。疑うのは、あとでもできることでしょうし」
見るからに自分より年下であろう少女から、静かで落ち着きのあるソプラノを突きつけられた男は、いったん口をつぐんで、背後で物凄い目つきをしている息子を振り返り、たしなめた。
「……恭也。落ち着きなさい」
「っ、わかった」
士郎に良く似た、黒髪の青年は、父親の言葉にふいと目を逸らした。
「あの、どうやって探すんですか？」
正体不明な少女と男に、もっともな疑問を投げかけるのは、なのはの母である桃子だ。娘と同じ、明るい栗毛の女性は、期待と不安を湛えたまなざしで、七季たちを見つめる。
「警察には連絡したんですね？」

「え、ええ」
石のように硬い、黒瑪瑙の瞳で見つめ返してくる少女に、戸惑いながらも頷く桃子。
すると小柄な「神使（しんし）」の娘は、こう簡潔に答えてみせた。
「それでは警察にはできない探し方をします」

超能力や霊視のようなものだと言い置いて、まず七季は、なのはの部屋を見せてもらった。
「朝、起こしに来たらいなかったんです」
そう説明したのは、なのはの姉の美由希だ。長い黒髪を三つ編みに結った少女は、妹を心配するあまり目を赤くしていた。おそらく少し泣いたのかもしれない。
「そうですか」
アーチャーが相槌を打つついっぽうで、隣に立つポニーテールの少女は、デバイスや霊視から入る情報を吟味して、短く告げた。
「……ここじゃない」
なのはが失踪した、高町家というテリトリーから出たポイントは、少なくとも自室ではなかった。
そこには、少女の抱える大きな魔力の名残が、煙草の煙にように染み付いてはいたが――言ってしまえば、それだけだ。
ふい、と身を翻して部屋を出た七季は、一般人にしては濃厚すぎる残留魔力の航跡（ウェーキ）を追いかける。
その足が、いくらも動かないうちにピタリと止まった。
「ここは？」
「あ、士郎君の部屋、ですけど……」
おずおずと答える美由希に、硬質な響きを帯びたソプラノが問いを重ねる。
「なのはちゃんは、良く士郎君の部屋に出入りを？」

「は、はい。なのは、恭ちゃんのおかげで、男の子の友達いなくて……。

だから、余計に珍しかったのかもしれないけど、士郎君、凄いんですよ！

英語だけじゃない外国語もできるし、私より頭が良いんじゃないかと思うくらいっ。だから、なのはも良く、苦手な国語を教えてもらって……」

途中で、その妹がいなくなったことを思い出して、ふたたび美由希の声から力がなくなる。

アーチャーは「そりゃあ中身は大人だからな」とないしんツッコミを入れ、七季は目の前のドアをノックした。

「どうしたんだ？　部屋の前で声がしてたけど」

中から出てきた赤毛の子供は、何やら荷造りをしているところだった。

大きくはないが、小さくもない――もっとも子供の士郎と比べると、かるく旅行用と思うくらいの――サイズのバッグが口を開けている。

「いま、なのはちゃんの痕跡おっかけてたとこ。シロくん何してんの？」

どちらも「エミヤシロウ」で紛らわしい、と思ったのか、七季は子供の士郎を愛称で呼ぶことにしたようだ。

「なのはを探しに行く準備を、ちょっとな」

まなざしだけで「だろうな」と半眼を向けるアーチャー。根源が同じ「エミヤシロウ」のことなど、お見通しらしい。

いっぽうの七季は、黒いポニーテールを揺らしながら、おのがデバイスに短く命を下した。

「『黎明』。サーチ開始」

＜術式「ささがに」起動＞

わざと最初だけ声に出したのは、その場にいる美由希や士郎にも、何をしているかわからせるためだ。

パフォーマンスというやつである。退魔業を手伝っている七季は、依頼人に理解させるためには、こういう要素も必要だということを知っていた。

ただし、あまり詳しい情報は明かさない。それ以降の詳しい内容は、念話でやりとりする。

＜残留魔力、術式、そのた怪しいと思われる要素をサーチ開始します。

検索条件……第一位優先事項は「高町なのは」。推定時間、前夜二十一時以降、本日六時以前＞

淡く光を帯びて明滅する、群青色の石がはまった指輪へ、メガネをかけた三つ編みの少女と、ちびっこ士郎の視線が集中した。

＜「黎明」、検索範囲を「海鳴市全域」に指定＞

七季はさらに条件を付け足した。

もしも人間による「誘拐」であるのなら、より新しい、なのはの残留魔力が、市内で発見されるはずである。

＜了解しました。「ノア」「ガニュメデス」リンクおよび並列演算開始します＞

ストレージであるデバイスと、医療用魔法を使うための高機能なデバイスをも動員して、さらに「黎明」は術式の範囲を広げて解析に費やす。

＜マスター。「アギラス」と「エスピナ」も使いたまえ＞

そこに七季の従者から、げんざい使用していない彼のデバイスを、演算装置の一部としてあつかうよう、申し出が入る。

＜オーケー。「黎明」、リンク開始。「アギラス」「エスピナ」接続許可＞

＜イエス、ユアハイネス＞

時間にして、わずか五分。

しかし、七季の膨大な魔力を用いて海鳴市を覆うほどの網を張った範囲魔法は、ほどなく結果を叩き出した。

なのはの痕跡は、士郎の部屋で途切れており、そこには不自然な

――もとい、この世界では使うものなどいないはずの――術式の名残が、霜柱のように溶け残っていたのだ。

そして話は、冒頭に戻る。

#235　始まらない物語ー桃色の名前ー（後書き）

あとがき
＞というわけで、なのは誘拐犯はルイズでした。

「サモン・サーヴァントは、使い魔を一度召喚すると使用不能となってしまう」

「使い魔は、メイジ一人に付き一体のみで、複数の使い魔を召喚する事はできない」

とされていますが、これは召喚の際に、主人の魔力と術式が、召喚した使い魔に、刻印のような形で絡みつくからではないか、と書き手は仮定してみました。

つまり、同じ魔力と術式を刻まれる存在を、ダブらせないための、何らかの条件設定がされている、という感じです。

ものすっごい、ご都合主義で恐縮ですが、才人はチートな先輩やオリ主から、「お祓い」してもらって、ルイズの魔力を洗い流されている、という設定でお願いします。

……あとでちゃんと付け足します（こら）。

#２３６　始まらない物語ー少年の場合ー

「さてと」

しゃん、しゃん、と涼やかな音を立てる玉串によって、心なしか少年の体はかるくなる。

「これで良し。綺麗な体になったよー、と」

「もう捕まるんじゃないよー、とか言ってみる」

きゃらきゃら笑う、ふわふわ栗毛の美少女と、つやつや黒髪ポニーテールの少女に声をかけられた才人は、ぐるりと片腕を回してから、にっかり笑って御礼を言った。

「サンキュ、真言さん、七季ちゃん」

七季たち一行と、栗毛の巫女さんに導かれ、自分の元いた世界まで戻ることのできた少年は、自宅に戻る前に、巫女さんふたりから餞別代わりの「お祓い」を受けたのだ。

久しぶりに見る、まっくろ巫女装束の七季と、紅白で彩られたスタンダードな巫女装束の真言に挟まれる形で、榊の玉串を振られ、水の滴を受けて「穢れ」を祓われる。

『どういたしまして』

ルイズに召喚された少年には、サモン・サーヴァントの術式と、それを施した術者じしんの魔力が染み込み、絡み付いていたためだ。

それも「神妻」や「神使（しんし）」の二人にかかれば、敵ではない。

さくっと綺麗に厄払い、ってなもんである。

「おー。何か、肩が軽いような気がするわー」

ハルケギニアに才人がいたころは、従者の制服と化していた、投影品の聖骸布コートによって、もしルイズが再度サモン・サーヴァントを試しても、彼に干渉しないよう、外側からの働きかけを無力化していた。

しかし、元の世界に戻れば、さすがに投影品である、あの聖骸布のまっかなコートを着せているわけにもいかない。

よって真言は、別れる前に、ハルケギニアから一度は拉致ってしまったおわびにと、才人を送り届けるついでに、「お祓い」をしてくれたのだ。

七季もそれを加わったのは、トリステインにいるあいだ、「従者」として仕えてくれた彼への、お礼のつもりである。どこかの誰かと違って、きっちり衣食住の保障はしていたが。

「あ、そうそう忘れちゃいけない」

にゅ、と黒髪の少女が、黒衣の袖から取り出したのは、才人の私物であるノートパソコン。他にも着替えなんかの私物を一まとめにしたバッグを一つ。

「おー。そういや預かってもらったんだっけ。すっかり忘れてた」

明るい声でからから笑う少年は、ちょっとくせのある黒髪をかき回しながら、それをしっかりと受け取る。

もう出会い系サイトなんかに興味はない。いや、ちょっとだけはあるけれど、それでも、よく知らない相手とホイホイお近づきになろうなんて魂胆は、キレイさっぱり吹き飛んでいた。

ピンクブロンドの髪を持つ少女は、たしかに美少女だったが、中身は最悪――才人にとって――だった。

七季たちがいなければ、いまごろどうなっていたか、考えるだけでも恐ろしい。

おそらく才人には、現代のような人権など認められなかっただろうし、マトモに生活できたかどうかも怪しい。

「真言さん。七季ちゃん。アーチャーさん。リドル。プレシアさん。リニスさん。アリシアちゃん。ディルムッドさんも」

だから彼は、めいっぱいの感謝を込めて、彼女たちに頭を下げた。

「本当にお世話になりました。ありがとうございます！」

それから、とらに東風（こち）、メイとエイプリル、プラタ（分体）の使い魔たちにも。

「俺、頑張るから。だから――また、会えるかな？」

別れのときが近づいていると、少年にはわかっていた。異世界の

娘たちにもわかっていた。
　少年の黒い瞳には水分が膜を張り、それでも強い希望を込めてかがやいている。
「きっとね！」
　緋袴の少女が、琥珀色の目でちからづよく笑う。
「また、いつか」
　黒髪の少女が、白い手をひらりと振って。
「ああ」
　褐色の精悍な相貌を頷かせた男が、眩しげに目を細めた。
「まー僕は年取らないしねー」
　人を食ったように笑う、ルビーアイの少年がとぼけ。
「そのうち、お酒を一緒に飲めると良いわね」
　ダークヘアの美人ママさんが、おっとりと微笑んで隣を振り返れば。
「こちらこそ、お世話になりました」
　カフェオレ色のネコミミを生やした癒し系美女が、才人と同じく一礼した。
「また遊ぼうね、お兄ちゃん！」
　元気いっぱい伸ばした手を振る、ツインテール幼女の隣で。
「短い間だったが……元気でな」
　アイマスクを外した美貌の青年が、突き出した拳を才人のそれとぶつけて合わせた。
　あわただしい、まるで夢みたいな日々が、少年の中でくるくると巡って、スパークした。
　金の妖獣が牙を見せて浮かび、色あざやかな神鳥が羽ばたき、イタチみたいな茶色い幻獣がリニスの肩からつぶらな目を向け、白銀色の不定形モンスターが、念話で挨拶をよこしてくる。
「じゃあ、また！」
　少年の再会を望む声を背に受けて、異邦の住人たちは、虚空のジッパーへと消えていった。

それから十年。
「おい平賀。聞き込み行って来い」
「うす課長。駅前周辺の置き引きですか、それとも繁華街のスリの件ですか」
そろそろ三十路に手が届く年齢となった、平賀才人は、刑事として元気に働いていた。
安物のスーツにも関わらず、しっかりと鍛え上げられた体躯に長身と、いまだに大学生のような童顔の域にある容貌で、婦警そののた異性から人気がある男に成長している。
「……きょう上がってきた件でな。窃盗班のお前の畑からは、ちょいと外れてるんだが」
四十路も半ばを過ぎた課長は、この異常に検挙率の高い刑事に、期待を寄せつつ、声をひそめた。
「小学三年生の女の子が、いなくなったんだそうだ。朝、六時～七時には、もういなくなっていたらしい。捜索願いが家族から出された。その子がな」
「誘拐ですか。連絡は？」
とたん、才人の黒い瞳が鋭く光る。
「しっ。
……連絡は、まだないそうだ。
で、その女の子ってのが、お偉いさんに縁（ゆかり）のある家の子なんだ」
そもそも、失踪した高町なのはの兄・恭也は、月村忍という女性の恋人である。
彼女は、なのはの親友・すずかの姉であるが、資産家のお嬢様、なおかつ「夜の一族」と称する吸血鬼の血族に連なる身だ。
日本国内の「夜の一族」の中でも、名家として目される、月村家の跡取り娘という立場のため、その影響力は、時として水面下にも

およぶ。
「夜の一族」は、昔から人の世の間にひそみ生きてきたため、「夜の一族」のものは一定数、警察や公的機関にも正体を隠したままもぐりこんでいるのだ。
身体能力に優れたものの多い、彼ら一族は、荒事にも強いため、それなりに重宝されている。
それだけではない。
高町家は、イギリス上院議員である、アルバート＝クリステラとも、家族ぐるみの付き合いのある家だったりする。
その妻であるティオレ＝クリステラ、娘であるフィアッセ＝クリステラも、ともに世界的な歌手。そんなＶＩＰが、きがるに立ち寄る場所が高町家である。その事実は、海鳴市に住む古株なら、大なり小なり知っていることだ。
ただし、才人が、この海鳴市に転勤してから数年しかたっていないので、知らなくとも無理はない。
このフラグ建築士なら、個人的に知り合っていても、おかしくはないのだが。
「です、か。まあ家のことはともかくとして、小さな子が家に帰れないって状況は、十分いただけないですね」
暴行事件を起こした議員の息子を、殴ったこともある才人である。その正義感も、行動力も――ついでに彼が助けた人々からもたらされる情報の網も――課長は十分に評価していた。
この男なら、手がかりを見つけられるかもしれない、という期待は、そこから来ている。
「とりあえず、まずは本人の自宅から聞き込みして来い。写真があれば借りて、さらに足で情報を集めろ。相模は――」
「相模さんなら、食中毒で休んでますけど」
相模というのは、同じ窃盗班の相棒でもある、二十代の女性だ。
何でも、たまたまオフの日に入った店で、運悪く集団食中毒に当たり、あえなく入院するはめになったらしい。

「……だったな。ああくそ、人手が足りん！」
「いつものことじゃないスか」
「言うな！　オイ誰か手の空いてるやつ……」
ざざーっと刑事課にいたはずの人員が、部屋から引いていった。
才人が絡む事件は、検挙も早いのだが、そのぶん行動力もスタミナもありすぎる才人に、振り回されることも多いためだ。
たとえば、元陸上選手だった引ったくりを、えんえん才人が追いかけまわして、ついに逮捕したときには、そのとき組んでいたベテラン刑事がすっかり置いてきぼりをくらったという逸話がある。
だから若い相模が、彼の新しい相棒に選ばれたという裏話もあったりなかったり。
「……平賀、悪いが一人で行ってきてくれ。おっつけ、手の空いたのを後から送るから」
本来、二人もしくはそれ以上で行動するのが刑事の基本であるのだが。
そういうわけで、海鳴署の名物デカは、きょうに限って単体で出陣したのであった。
「はい課長、行ってきます！」

#２３６　始まらない物語ー少年の場合ー（後書き）

あとがき

＞話が進まなくて申し訳ありませんが、才人のフォローを入れておきました。

じつはリリなの世界と、才人の世界、つながっていたというカオス設定（待て）。

そして弓兵たちに鍛えられた魔改造ＳＡＩＴＯ、ふだんは助けた被害者や同僚のお嬢さんたちにフラグ乱立して回ってます。

だって師匠がアーチャーですから（笑）。

この年になって嫁がいないのは、女性陣の牽制しあいが熾烈なためという真相です。

#237　始まらない物語ー見えない顔ー

「――たとえ我が身は焼き尽くされても、かの方への誠は、永久に」
ディルムッドの唇が、最後の言葉を紡ぐ。
そしてすべては幕を閉じた。

「お疲れ様でしたー」
わあっ。
収録の終わったスタジオに、明るい歓声が満ちあふれる。
ミキサー室からかけられた声に、密室状態のレコーディングルームは、わいわいと日常の空気に戻っていく。
「あー、やっと煙草が吸えるー」
足早に部屋を出て行く足音。
「ごはん食べに行く人ー？」
手を上げて仲間を募る声。
「おーい、ランちゃん飲み行かねー？」
こちらも誘いの声だったが、ちょうどレコーディングルームを出るところだった青年は、肩越しに振り返って、頭をぺこりと下げた。
ジーンズにシャツ姿と、いたってラフないでたちだが、その容貌は、男でもためいきをつきたくなるような秀麗さで、そのうえにフレームレスの眼鏡が、彼の知的さを感じさせた。
「すみません」
「ランサー」
緑の黒髪を後ろに流す美青年――ディルムッドに近寄ったのは、金髪ロングヘアの美人である。

年のころは、二十前後だろうか。モデル顔負けのナイスバディの上に、ルビーの瞳と白い肌の美貌が乗っかっている。

こちらも横長スクウェアタイプのレンズに、フレームレスの眼鏡をかけており、瞳の色と同じ、赤いブリッジがアクセントを添えていた。

「せっかくのお誘いなのに、本当にすみません。ちょっと、急がなくちゃならなくて……引越し先の件で」

見るからに申し訳ない、というような面持ちで、ディルムッドに代わって、とばかり頭を下げてくる若い娘に、ちょっとびっくりした顔になるのは、ディルムッドを飲みに誘った四十路の中堅どころ声優だ。

「ああ、いや。こちらこそ悪かったよ。急いでるんだろ。かまわないから」

ひらひらを手を振って、行くように促す男性に、金髪娘――アリシア＝テスタロッサは、かがやかんばかりの笑顔を向けた。

「ありがとうございます。それでは」

さっと身を翻したアリシアは、ごくしぜんなしぐさで、青年の腕を取って歩き出す。

美人マネージャーつきのディルムッドを羨ましそうに眺めた男は、苦笑しつつも、今度「海外に移住する」という人気声優を、惜しそうに見送った。

きっかけは、七季の遊び心だった。

「ディル、歌える？」

「はい……？」

声優張りに、甘い凛々しい声をしている従者へ向かって、そんな問いかけをした少女は、リニスやアリシアといった、機械類に強い女性陣たちと悪乗りして、ディルムッドの歌声を、某動画サイトに

投稿したのである。
ちなみにつけた画像は、リニス山猫バージョンの、癒し系ぬこぬこ動画、というダメ押しだった。
「おー、凄い。もうタグついてる」
武人の腹筋を舐めてはいけない。
肺活量？　何それ食べられるの？
そして、音感も悪くなかった人外の青年は、せっかくだからとバイオリンで伴奏してくれたマスターに張り切ってしまい。
「あ、『野生のプロ』にタグ変わった」
リリなの世界の地球において、当初、ヒマをもてあましぎみだった七季とアリシア、そして真言が調子に乗って、立て続けにディルムッドの歌声を追加した結果。
「……再生数がえらいことになってんなー」
動画サイトで固定ファンがつくレベルになってしまった。
そこで、まあ同人誌と似たような感覚で、半ばオタク集団と化しているテスタロッサファミリーおよび七季たちは、ＣＤを焼いたのだ。
ディルムッドの歌った曲のデータを入れたものを、予算の関係で三十枚ほど。
臨時に通販用のサイトを立ち上げて販売したら、その日のうちに完売して、おののくはめになった。
その時点で、動画サイトに投稿してから一ヶ月。
「今度は、ちょっと多めに作ってみようかー」
ディルムッドは、七季が褒めてくれたし、動画サイトで、思いのほか大勢から寄せられたコメントに驚いたしで、黒髪の少女から「作っても良い？」と問われるままに頷いた。
顔も見えないというのに支持してくれる人間もいるのだと、ちょっと嬉しかったからだ。
その美貌――魔貌で苦労してきた青年にとって、顔を見せずに好意を向けられるというのは、考えられない奇跡でもあった。

百枚あったCD（自費制作）は、一週間で完売した。
「……うん、ええと」
「愛のホクロ」の一件で、おいそれと外で働くことのできないディルムッドは、こうして少ないながらも、収入を得る道がついた。
「そうだよな。顔が見えなきゃ、呪い関係ないんだよ。ディル――これって、ディル個人の魅力だからな？」
にっこり笑って七季から告げられたときの衝撃を、彼は忘れることはないだろう。ある意味、この時代だからこその恩恵だった。

そして平行して、天目一箇神（あめのまひとつのかみ）の元に「修行」と称して放り込まれるアーチャーの手で、ディルムッドの「愛のホクロ」を無効化する宝具の制作が進み。
プレシアが、精子バンクから買い取った、元夫――こちらも優秀な人物だったらしい――の精子で、人工授精。妊娠に至り、テスタロッサ家と、共に暮らす七季たち主従の暮らしは、あわただしくなる。
やがて生まれた赤子――「フェイト」とリドルに名づけられた――の子育てに、奔走することもあって、ディルムッドと七季は、もっぱら引きこもり生活へと突入する。
気づいたときには、「魔眼殺し」ならぬ「魔貌殺し」である眼鏡が完成し、ディルムッドは昼日中でも歩ける立場を手に入れた。
よその世界なので、この世界では年を取らない七季は、怪しまれないようにと、めったに出歩かず――代わりに、プレシアがデバイスマイスターとして営業を始めた管理・管理外世界を歩くようにはなったが――基本は子育て。
アレクトロ社からの賠償金や慰謝料があるとはいえ、ただでさえ、この大所帯。
稼ぐために、デバイスマイスターとして働くリニスとプレシアに

代わって、もっぱら世話を焼いていたためか、ちっちゃなフェイトが最初に呼んだのは、姉代わりである黒髪の少女の名前だった。
「にゃ……にゃにゃー？」
「えっと」
抱いていたふわふわ金髪のちびっこが、ちっちゃなもみじの手を伸ばし、にぱー、と笑いかけているのは、紛れもなく七季で。
「おそらく、ナナ、と呼びたいのではないかね？」
アーチャーのツッコミに「ナナキに負けたー！」と涙しながらダッシュで逃げ出す美人ママさん魔導士がいたとか、いないとか。
「だって仕事してるんですもの。前よりは忙しくないから、フェイトにもかまってるはずなのにっ」
「四六時中いっしょだからねー」
まっくろにゃんこなリドルに、肉球でぺむりと背中を叩かれ慰められる、ダークヘアの美女は、それからしばらく店の営業時間を短縮したという。

やがてフェイトが幼稚園に上がるころ。
「ディルー、声優、やってみない？」
動画サイトからの人気で（もちろんいっさい顔出しはしていないが）、ディルムッドは、主にマスターとオタクな使い魔（リドル）のもくろみで、いつのまにか出したCDドラマも売れるようになっていた。
さすがに一人でドラマは無理なので、このへんはリドルやアーチャーなども友情出演しているシロモノだったりする。
閑話休題。
アーチャー制作の「魔貌殺し」も効果はバッチリ実証済みのげんざい、大手を振って働ける立場を手に入れた青年に、七季は長いこと働ける、定年のない職業を提案してみたのだった。

そしていま。
「ランサー」という仮名をそのまま芸名に、ディルムッドは若手声優として、一定のファンを獲得したところで――「界外に出る」と発表し（ただし口頭なので「海外」だと思われた）、活動休止を宣言。
きょうの収録が、最後の仕事だったのだ。
ちなみに声優といっても、海外ドラマの吹き替えがほとんどであることを追記しておく。
七季一行の行動は、彼女じしんと、世界の移動を可能にする真言によって舵を取られている。
その片割れ――栗毛のチート巫女さんから、区切りのころあいを、彼らは一様に告げられていた。
占いをも得意とする真言の宣告は、やがて訪れる波乱を見通していた。

「……フェイトのお友達が誘拐されたらしいの」
さっきナナキお姉ちゃんから念話をもらったわ。
声優「ランサー」のマネージャーとして立ち回るアリシアは、ハンドルを切りながら、振り返ることなく助手席の男へと告げた。
「では」
その救出に？
狭くもないが、広くもない車内。
まなざしと声音で問いかけるディルムッドの目が、金色に光る。
「落ち着いて。……どうも、その誘拐犯がね。
覚えて――そういえば、ランサーは知らないんだっけ？
ハルケギニアの、ピンクブロンドの女の子がいるんだけど。ルイ

ズっていう」
アリシアの愛車である、赤いワーゲンが角を曲がる。
「それは、どういうことだ？　この世界と、かの世界は違うはずだが」
「世界を越えて使い魔を呼び出す魔法があるの。サモン・サーヴァントっていう。
ルイズだけど、一度だけ馬車で押しかけてきたことのある、貴族の女の人たちがいたでしょ。二人連れの。あの家の子なのよ。
サイトお兄ちゃんを、それで誘拐したって前科持ち。ナナキお姉ちゃんの『黎明』が痕跡を解析したから、ほぼ間違いないはず」
思いのほか、ピリピリした空気をまとっているディルムッドは、黙って、金髪にふちどられたアリシアの、白い横顔をうかがった。
「フェイトの同級生よ？
もしも妹（フェイト）が、同じように誘拐されたらと思うと……ぜんぜん他人事だと思えない。
あんなにちっちゃい、無邪気な、可愛い子をッ。また自分の身勝手な理由で召喚したのかと思うと……！」
姉代わりの七季に向けていた彼女のシスコン魂は、新しくできた妹にも、いかんなく発揮されていた。
いまでは成長の止まっている黒髪の少女よりも背が高くなったアリシアは、「お姉ちゃん可愛い、フェイト可愛い」が座右の銘（？）である。
「必要なものは積んでおいたから。このまま、お姉ちゃんのところに向かうよ」
「了解した」

#２３７　始まらない物語ー見えない顔ー（後書き）

あとがき

＞ちょっと変わった組み合わせですが、別にカップリングというわけではありません（笑）。

ディルムッドがリリなの世界で何していたかというフォローです。

顔を見せなきゃ良い職業って、なかなかないですよね。

眼鏡ｏｎディルムッドは、いただいた感想をネタにしました。

アーチャーはもう「宝具作成スキル」持ちになってきた気がする。

大人アリシアは、税理士や司法書士などの資格もち。ディルムッドやプレシアの事務所作って、経理など財務関係の仕事もやってます。自分の給料もそこから出してる。

※ちなみに税理士は未成年者では資格が取れないので、アリシアは二十歳以上です。

#２３８　始まらない物語ー砕かれる棺ー

「っこれで」

虚空に舞うのは紅白の花びら――否、そう見えるだけの、華麗さを身にまとう少女。

「終わりだああっ！」

がきききききん！

宇宙航行をも可能とする、凄まじい強度の合金が、真言のふるう刃によって寸断されていく。

一見、海洋生物のマンタにも似たシルエットのそれは、かつて「聖王のゆりかご」と呼ばれた、古代ベルカ、聖王時代における究極の質量兵器。

天地を統べる聖者の船。

管理局からすれば、ロストロギアとされる――通称「ゆりかご」。

いまだ存在さえ知るものの少ない、その遺物を、異邦の「神妻」は魚でも下ろすかのように切り裂いていった。

あとにのこるのは、轟音と残骸。

それを、飛行魔法で飛び回るリドルが、象牙のタクトに見えるデバイス「エキドナ」をふるい、かたっぱしからストレージデバイスである「ウロボロス」の格納領域へと収めていく。

もちろんすべてが、ブラッドストーンのチョーカーに見えるそれに入るわけではない。

中でも重要な部分や、デバイスに使えそうなパーツを選び、そのまま、あるいは可能なものはハルケギニア式の魔法「錬金」でまとめてしまってから格納する。

真言も手分けして、めぼしいものを式神たちにあさらせては、不思議空間に回収する。

「さーて。これっくらいで良いかなー？」
龍神つきのチートな巫女さんと、闇の帝王の前身。
彼らにかかれば、ロストロギアも涙目である。
＜すみませーん。せんぱーい＞
そこに七季から念話がつながる。伝えられた内容は、新たなきっかけであり、一人の女の子の失踪と、その元凶。
＜ん、りょーかい。プレシア拾ってから、そっち行くわー＞
さくっと返した巫女姫の、しかし琥珀の双眸は野生的なかがやきを帯びている。それはさながら狩りの前の獅子のごとく。
「んじゃ、プレシアに良いお土産もできたし、帰るかー」
「だね」
少年の姿から、黒猫へと変じたリドルは、栗毛の美少女の肩に乗り、そのまま転移魔法を起動する。
すっかり解体されてしまった「ゆりかご」は、重ねてきた長い歳月もどこ吹く風の短さで、ダークヘアの大魔導師が作る、デバイスの材料に早変わりしたのであった。

いっぽう、世界を越えた帝都心霊庁では。
「さて……ジェイル＝スカリエッティ。この名前に間違いはないかね？」
激辛料理が大好物の神父による、天才研究者の洗脳……もとい、「ＯＨＡＮＡＳＨＩ」が始まろうとしていた。
「私は言峰綺礼。
これから長い付き合いになる男の名前だ。覚えておくといい、ドクター・スカリエッティ」
光のない底なし沼のような黒い双眸の神父に見下ろされる、美貌の科学者の命運は――誰も知らない。

そして高町家に集い来るは――巫女たちの縁（えにし）に連なる将星たち。
「こんにちは。海鳴署の……って、七季ちゃん？」
「お久しぶりです、平賀君」
「刑事さん？」
「あ、俺このひとたちと知り合いで」
「お姉ちゃーん。準備してきたよー。ママたちもおっつけ来るって！」
「お疲れ、アリシア、ディル。先輩にも連絡しといたから。プレシアたち拾ってくるらしい」
すっかりと出陣の準備を整えた彼女たちは、御神の剣士たる男たちと、その家族へ、異邦の理（ことわり）による、失踪事件の説明を始めるのだった。

#２３８　始まらない物語－砕かれる棺－（後書き）

あとがき
＞短めにざくっと原作ブレイク。
「ＳｔｒｉｋｅｒＳ」完（始まらない）。

ＳにＳって、とてもいぢりがいがあるそうなので、ドＳと評判のスカさんは、外道神父のイケニエにしてみたよ！
そのうちスカさん洗の……もとい、調教後に、帝都心霊庁のマッドな方々と、研究三昧の充実ライフに耽ればいいよ。

#239　始まらない物語ー獣たちの挽歌ー

＜とらー、そろそろ移動するから、こっち来てー＞

とある神社で、子狐にジャレつかれていた黄金（きん）の妖獣は、そのへんで思い思いに飛び回ったり跳ね回ったりしている、幻獣やモンスターに声をかけた。

「おい。『贄の娘』が戻って来いだとよ」

「きゅーん」

「……行っちゃうの？」と残念そうに、「友達」である人外のものたちを見上げる子狐へ、とらは鋭い爪のついた手をひらひらと振る。

「主殿が呼んでいるからな」

そう答えたのは、神社の木立に足を休めるシームルグ――東風（こち）だ。五色に彩られた翼があざやかに陽射しを弾く。

「メイたちは、お姉さまたちの家族ですからっ」

くるん、と宙返りしたイタチそっくりの小動物は、幼女に変じて、そう告げる。

「ごめんね。君のことは好きだけど、僕の一番はご主人さまだから」

ちょっと大きめの白ウサギが、人間の声でしゃべりだす。

＜くおん　くる？＞

モンスターながら、念話を使えるようになっていた、はぐれメタルのプラタ（分体）が、あいかわらず、のほーんとした笑みで声をかければ。

子狐――「久遠」は、ちょっとだけ迷って、けれども首を横に振った。

「ま、オメーみてーなちまいのは、『贄の娘』にひと呑みされちまうかもなァ」

けけけけ、とまっかな舌をのぞかせて笑う、とらの脅しに、ぼわっ！と子狐のしっぽが膨らむ。

「……さすがにコレを食べはせんだろう」
大して肉もついてないし。
ある意味、下手な肯定よりも恐ろしい東風（こち）のツッコミに、メイもプラタ（分体）さえも目を逸らした。フォローなしである。
彼らは知っていた。
ハルケギニアにいたころ、遠めにシルフィードを眺める彼女が「ドラゴンの肉ってどんな味かなー……」と呟いていたのを。
七季の目は、完全に捕食者のそれだった。
ちなみに彼女の上司である真言は、土地神のドジョウを、ウナギと間違えて食べようとしたことがあったことも追記しておく。
閑話休題。
さておき、神社の子狐と別れを告げた使い魔たちは、とらに乗って、あるいは自分の翼で、異邦の少女たちの元へと飛んでいく。

「――というわけで、なのはちゃんは、異世界に拉致された可能性が、非常に高いです」
七季の説明に、とても信じられない、という顔をした恭也が食ってかかる前に、窓からそれらは飛び込んできた。
正確には、窓を開ける前に、とらが実体化しただけなのだが。
ともあれ、いきなり現れた異形の姿に、御神の剣士たちが、ざっと桃子たちをかばうように身構える。
だが、それは単なる杞憂に過ぎなかった。
「それで、彼らが、同じようにサモン・サーヴァントで召喚された使い魔です」
さいぜんまで少女が話していた、ハルケギニアの魔法使（メイジ）いが行う、使い魔召喚の儀式。
それと、目の前の異形たちをじっさいに見せられ、さすがの高町士郎も低くうめいた。

「私たちが、以前、その異世界で過ごしていたことは、お話しました。彼らはその折に、私たちと契約した使い魔です。これで、少しは飲み込んでいただけましたか？」

七季は、納得しろとは言わない。できるわけがないからだ。

ただ、情報は情報として、最低限、頭に入れてもらわなければ、話が進まない。

ばさり、とはばたいた東風（こち）は、黒髪の少女の肩に留まると、その頬へ、鷲のような猛禽の鋭さを持つくちばしをすり寄せた。

「急ぐのだな。かの娘は、傲慢かつ狭量だ。魔法を使うことのできない平民など、とてもではないが、人としてあつかうとは思えん」

念話を通して、一連の会話を聞いていたシームルグは、人の言葉を流暢に話す大型の鳥に目をむく高町家の人々を前に、珍しくそう忠告した。

「あちらの世界で、平民は常に搾取される側だ。信じるか信じないかは、貴様らの勝手だが」

ルビーさながらの深紅の目を細める神鳥に、シスコン――もとい、妹思いの恭也が爆発した。

「どういうことだ！？」

しかし、殺気じみた怒気を吹き付けられても、黒瑪瑙の瞳は、硬く冷ややかに静かで、いささかの揺らぎもせず、説明を続けた。

「……なのはちゃんが拉致されたと思われる世界は、極端な身分制度がまかり通る、ようするに貴族社会です。

そのうえ、なのはちゃんを召喚したと推測される相手は、王家の血を引く公爵の娘。

たとえ三女といえども、公爵に溺愛されていると聞きます。ここで明かすのは、どうかと思うのですが……一度は、こちらの平賀君も、彼女にサモン・サーヴァントで拉致された被害者です」

「な！」

「本当ですか？」

振り向く恭也と、疑り深く問いかける、高町士郎の視線を受けて、

黒髪の青年は、重々しく頷いた。
捜索届けの出された、なのはについての聞き込みをするため、高町家を訪れていた才人は、そのまま、七季の言葉を補足する。
「あれは、俺が高校生のころの話です。
ちょっとややこしい話は、省きますけど……俺が召喚されたその場に、七季ちゃんたちがいなかったら、俺は、あの世界で一生、そいつの――ルイズっていう貴族の女の子の使い魔として、死ぬまで仕えることになったはずでした」
「でも、刑事さんはここにいるじゃないですか」
才人にまで不審そうな目をむける、美由希に向かって、海鳴署の名物デカは、少年っぽさの残る面輪で、眉尻を下げつつ、苦く笑った。
「それは、この人たちのおかげだよ。
七季ちゃんが、俺の代わりになる使い魔を、そいつに差し出したんだ。
『平民』の俺に、たいそうご不満だったルイズは、俺よりもずっと強そうな使い魔に満足して、『平民』の俺のことなんか、それっきり。使い魔として呼び出したことなんて、おくびにも出さなかった。
七季ちゃんたちが衣食住を保障してくれなければ、たぶん俺はのたれ死んでたかもしれない」
あまりといえば、あまりな話に、赤毛の少年はおろか、恭也や美由希、なのはの母である桃子も絶句した。
「俺を元の世界に返す方法も、あいつらは何も知らなかった。俺は、土下座して、こっちの真言さんに頼み込んだんだ。それでまた色々あったけど、ちゃんと、こっちの世界に連れてきてもらえたってわけ」
でも。
そこで才人は、ふとあごに手をやり、考え込んだ。
「そうだよ。ルイズには、代わりの使い魔がいるはずなんだ。何で

また、サモン・サーヴァントをやったんだ？」
それは、もっともな疑問だった。
「使い魔が消えた、とか？」
少年姿のリドルが、一つの可能性を示唆した。
もともとルイズに与えられたのは、真言が作った式神である。過剰な負担をかけられれば壊れるし、そうでなくとも、七季たち眷属を害するような命令を受ければ、その場で消滅する。
「基本的に、使い魔が死ななければ、サモン・サーヴァントで、新しい使い魔は得られないはずですからね。
……もっとも、彼女に与えられた使い魔は、契約も何もなく従っているだけなんですけど」
何故またサモン・サーヴァントをルイズが行ったのかは、わからない。
ただ、目の前に、ファンタジー満載なモンスターを並べられると、魔術師である士郎のみならず、高町士郎、恭也たち高町家の面々も、七季たちの話を、頭ごなしに嘘だと決めつける気にはなれなかった。
「急かして申し訳ありませんが、ついて来るか、来ないか、それだけ決めてください。
私たちは、いまから、なのはさんが拉致されたと思われる、異世界に行きますので。……シロくんは来る？」
答えをわかっていて、それでも問うたのは、なのはの家族たちが踏ん切りをつけやすくするためだ。
「ああ。さっき準備はしてきたんだ。なのはを……早く、家族の元に、この家に、帰してやりたい」
ためらいもなく立ち上がる士郎の目は、琥珀色の中に強い信念の光を孕んでいる。
「こいつらを、信じるのか？」
わずかに非難めいた、恭也の声に、赤毛の子供は困ったように振り向いた。
「……うん。

こいつは、このアーチャーってやつは、いけすかないけど、でも、女の子をさらうようなやつの味方はしないよ。

それに……そういう、不思議な力や、現象があるっていうのは、俺もわかるんだ。いまは、何の手がかりもない。だったら、なのはがいるかもしれないところに、行ってみる」

きっぱりと言い切る士郎の背中は、小さいのに、それでも何かを守るために戦う、戦士の背中をしていた。

「じゃ、行こうか」

立ち上がる七季一行の中には、才人もいた。刑事である彼がいれば、なのはを取り戻した一連の騒動も、うまく地球の方ではごまかし、それらしく角の立たないようにまとめられると考えたからだ。

「待ってくれ」

虚空に真言がジッパーを開いたあたりで、高町ファミリーの面々が、ぎょっとしながらも――そこに、家長である男から、低く、真剣な声が届いた。

「五分くれ。準備をする」

高町士郎の言葉に、恭也も腰を上げて部屋を出て行く。おのが獲物である小太刀をとりに行ったのだろう

自分もと立ち上がる美由希を、母親の桃子がしっかりと引きとめて、娘を残す、夫の選択に従った。

#２３９　始まらない物語ー獣たちの挽歌ー（後書き）

あとがき

＞使い魔ズと久遠は、まあ小ネタ程度に仕込んでみました。

書き手、とらハ未プレイなので。ｗｉｋｉだけが頼り。

ハルケギニア帰還まで書くつもりだったんですけど、ひとまずここまでで区切ります。

ようやっと次回から、ふたたびゼロ魔世界です。

#２４０　始まらない物語ー深い森ー

それは、星の見えない、暗い夜。
暦の上では、トリステイン王宮を訪れた、ガリア王・ジョゼフが、ワルドの罪を明らかにしたうえで、その身柄の引渡しや、ウェールズ王子暗殺未遂に関する賠償などの要求を、トリステインへと突きつけた日である。
そうとは知らないルイズは、まるで物語の駆け落ちさながらのシュチュエーションに少しだけ酔いしれつつ、ラ・ロシェールに程近い森の中で、砂色の髪の騎士を見上げていた。

「ワルドさま。どうしても……どうしても、やらなければなりませんか？」
ぼんやりと光度を抑えた、魔法の明かりの中に、黒い影が伸びている。
少女の長いピンクブロンドは、まるで生き物のように、ぬめぬめとした光を帯びて見えたが、幸いにも、それを指摘するようなものは、この場にいなかった。
ルイズの目の前には、白くつるりとした、陶器そっくりの質感の肌を持つ、四足の異形――「鵺（ぬえ）」が、座っている。
それは、与えられたとはいえ、いままで忠実にマスターであるルイズを守り、付き従ってきたものだ。
しかしワルドは、それを殺すと宣言した。
理由は簡単だった。
「ルイズ。君の使い魔は、『虚無』の使い魔には当てはまらない。

それは、本当に君の召喚した使い魔かい？」

どこを探しても、契約のルーンが刻まれていない、異形の使い魔を、ワルドは怪しんでいたのだ。

かつて、始祖ブリミルと共に闘い、その名を伝説に残した使い魔は、四人。

あらゆる武器や兵器を自在に扱える使い魔「ガンダールヴ」。

あらゆる幻獣を操る使い魔「ヴィンダールヴ」。

あらゆる魔道具を扱える使い魔「ミョズニトニルン」。

そして、記すことさえはばかられるという第四の使い魔――「リーヴスラシル」

こうして観察しても、武器をふるえるようには見えないし、道具についても同じこと。幻獣を操るようなそぶりもないし、まして、「記すことすらはばかれる」と謳われるような恐ろしさも感じないときては。

「あ、の……コレは、確かに私の召喚した使い魔じゃありません。でも！」

ルイズは、隠していたことを見抜かれた悔しさと羞恥に、顔をまっかにしながらも、夜の森で思わず叫んでいた。

「コレは、この使い魔は、オールド・オスマンからいただいた使い魔です！　殺すなんて、そんな……！」

身勝手さはあいかわらずの少女だったが、それでも、日ごろから、従順に仕えてくれる幻獣（？）への愛着はあった。否、それは愛着というよりも執着だっただろう。

けれども、いまだ名前さえ与えていない、この白い異形は、ルイズにとって、数少ないプライドのよりどころに他ならなかった。

彼だけが、ルイズを魔法使いとして証立ててくれる存在だったからだ。

――そうよ。

留学生だという七季たちが現れてからずっと、学院の話題は彼女たちにまつわる事柄で持ちきり。

しかも、黒髪の少女をはじめとする異邦人たちは、アリシアを除けば、けっこうな魔法の使い手で、ハルケギニアの魔法は初めてだというのに、瞬く間にそれをものにしていくさまは、教師の間でも評判だった。

七季とプレシアは、風のスクウェアである、ギトーのお気に入り。

幼いアリシアは、水のキンダイチと並ぶと、孫と祖父のように微笑ましく。

特大サイズのダイヤモンドを錬金した七季と、ルイズの爆発魔法を防いだアーチャーは、彼らが造る畑のこともあって、土のシュヴルーズから、愛弟子のごとくあつかわれている。

火の魔法については、これといった評判はなかったけれど、授業をするのは生徒の間でも「変人」と名高いコルベールだったから、気になるほどものではなかった。

「そうか……しかしルイズ。使い魔は、メイジ一人につき、一体と決まっている。主か、使い魔が死ぬまではね。

君には、もっとふさわしい使い魔がいるはずだよ。ちゃんと呼び出してみたほうが良い」

ワルドは、その貴公子然とした面持ちを、真面目に引き締め、ピンクブロンドの少女を見下ろしていた。

「でも……でも……」

ちらちらと、まっしろな獣形の使い魔へ、そのツリ目ぎみの双眸を向ける、小柄かつスレンダーな少女。

彼はただ声もなく、暴れだすでもなく、静かに座り込み、ルイズの命令を待っているだけだ。

――こんな従順な使い魔を、殺してしまう必要があるの？

ふつうの貴族であれば、領地を治めるための一環として、亜人討伐に参加していることも多い。

だが、もともと箱入り育ちのルイズのこと。父親であるヴァリエール公爵が、溺愛する彼女に、そんなことをさせるはずもなく。

命を奪うという、その行為に立ちすくむ少女の姿を、ワルドの青

い目が冷徹に眺めていた。
「ルイズ。何も君が手を下す必要はない。まだ魔法の使いこなせない君には、荷が重いからね」
するとワルドは、迷っている少女を尻目に杖をふるい、身動きもしない白の使い魔を、空気の槍で貫いた。
「エア・スピアー」
ドドッ、ドドドドズッ。
姿なき槍によって、みるみる穴だらけにされていく、まっしろな「鵺(ぬえ)」。
「――ッ！」
その光景に、少女はピンクトルマリンを思わせる目をむき、言葉を失った。
制止する暇すらなかった。
彼女がためらっているあいだに、忠実だった使い魔は、槍衾にされ――そして、ぱきん、と陶器の割れるような、澄んだ音をたてて、粉々に消えていった。
「ふむ……死に際まで、まるで見たことのない幻獣だったな……」
――血も流れないとは。
それを幾分か、けげんそうに観察するワルドの声に、ピンクブロンドの少女は信じられない、とばかり、こわごわとした視線を向けた。
しかし男は、それすらもどこ吹く風で、さあ、とルイズを促す。
もはや少女のうちには、恐怖に近い恐慌が生まれていた。
ちらとでも、自分もこうなるかもしれない、と考えてしまったのだ。
くろぐろと影を帯びる、森の木立に囲まれながら、ピンクブロンドの髪をてらてらと光らせる少女は、罪悪感を振り切るように、言い知れない不安を振り払うように、一心にかぶりを振る。
――そんなはずない。私は、ワルドさまの婚約者だもの……ヴァリエールの娘だもの……。

もはや、そのワルドが国を股にかけて指名手配されていることなど、ルイズにとっては、知る由もないことである。

そして、彼について家を出た少女じしん、ヴァリエール家そのものを窮地に陥れ、同じく追われる身となっていることなど――。

何も知らない、思い至ることすらないルイズは、召喚の呪文をふたたび唱えた。

いっぽう、ハルケギニアから遠くかけ離れた異世界にある「地球」では。

かちゃ……。

「士郎、君……おきてる……？」

そろそろと、赤毛の子供が寝起きする部屋に、滑り込む影がひとつ。

こちらはカーテンから差し込む、淡い月の光とはまた別に――青い燐光を帯びた、縦に長い姿見のようなものが、部屋の中をぼんやりと照らしていた。

しかし、この部屋に仮住まいする子供は目覚めない。

平行世界であるこの世界――高町家に引き取られてからは、魔術師としての鍛錬や調整、護符の作成など、連日の徹夜がたたった士郎は、夢も見ないほどぐっすりと寝入っていたのだ。

いっぽうの影――なのはは、長い栗毛を下ろしたパジャマ姿で、ぱちぱちと青い瞳を瞬く。

眠っている士郎の前に、まるでファンタジーのような、青い鏡を浮かんでいたからだ。

――これ、何だろう？

幼いなのはは、さっきまで夢を見ていた。

その夢の中――荒野にひとりぼっちで出てきた士郎が心配で、目が覚めてしまったのだ。

そのまま何となく寝付けず、迷惑とわかっていながらも、つい士郎の存在を確かるため、彼の部屋までやってきたというわけだ。

士郎は息も静かに、ふだんよりもちょっとだけ眉根を解いて眠っている。

その幼い寝顔をのぞきこんだなのはは、ほっと安堵しながらも、いつまで眺めてもなくならない、怪しい鏡へと手を伸ばしてみた。

――幽霊とかじゃ、ないよね？

そのテのものが苦手な彼女だが、それが士郎に取り憑いているかもしれない、と思えば別だった。なのはは、他人のためなら勇気を出せる女の子だったのだ。

手ではらったら消えるのではないか、という、淡い期待は、残念ながらうち砕かれた。

「え？」

ちょうど「鏡」――それは召喚のための「扉」であったのだが――に当たった、なのはの手が、そのまま中へと飲み込まれる。

「ええ？」

奇妙な感触に、なのはは、あわてて腕を引っ張り出そうとした。しかし、あろうことか、彼女の手は、鏡の中から、誰かに引っ張られていた。

なのはは、か弱い小学生である。

そのうえ彼女は、家族の誰に似たのか、極端な運動オンチであった。

そんな幼女が、しっかり抵抗できるはずもない。眠っている士郎へ助けを求める暇もなく――なのはは、その鏡の中へと吸い込まれていった。

やがて、赤毛の男の子だけが眠る部屋は、元の静寂を取り戻す。

そこには怪しい鏡も、なのはの姿も、何もなく。

ただ子供部屋にしては殺風景な室内に、ひとり士郎だけが横たわっているのみ。

それは、なのは失踪が判明する、およそ六時間前のことだった。

＃２４０　始まらない物語－深い森－（後書き）

あとがき

＞サブタイトルはＤｏ　Ａｓ　Ｉｎｆｉｎｉｔｙの「深い森」から。

というわけで、先輩の式神は破壊。

召喚されるのは士郎のはずでしたが、運悪く、彼は眠っていたために、たまたま部屋で「扉」を見つけたなのはが、巻き込まれてしまった、という形です。

まあご都合主義かもしれませんが、おおむねこんな感じでした。

ちなみに、ハルケギニアと才人たちのいる「地球」とでは、時間の流れが、かなり違います。

＃２４１　始まらない物語ー痛みの先ー

同じころ、トリステインの王宮では。

主だった貴族を集めたうえでの会議は、深夜にもかかわらず紛糾していた。

クーデターを未遂に止めたとはいえ、そのレコンキスタに連なる反乱分子は高位の貴族にまで及んでおり、それを知らずにいた貴族たちの混乱といったら、並々ならぬもので。

加えて、ガリアから突きつけられた要求と、ウェールズ王子の暗殺未遂事件に関する責任の所在など、会議は魔女の鍋のごとしであった。

そのうえ、まだレコンキスタの残存兵力は残っているのである。

――ああ、頭が痛い。

隣に座るアンリエッタが、やけに無気力な顔で貴族に責められているのも、止める気が起きないくらいには、マザリーニ枢機卿も疲れていた。

彼が、もはや泣けばいいのか笑えばいいのかわからない心持ちで、メイドから差し出されたお茶を一口含んで――それが、黒髪の「オルタンシア」であることに気づいた。

彼女は、ぺこりと会釈して、他の貴族たちにも紅茶を配って回る。

――ん？

少しだけ、彼の頭痛が軽減したように感じたのは、はたしてマザリーニ枢機卿の気のせいだっただろうか。

それに疲労回復の魔法がかけられていたかどうか――知っているのは、黒髪のメイドそのひとのみである。

いっぽう、出奔した娘の身を案じるヴァリエール公爵はというと、胸を絞られるような痛みを覚えながらも、追っ手を放たずにはおれ

なかった。

――何故だルイズ。何故……！

ルイズと共にいるであろうワルドは、もはや国家における犯罪者なのだ。見逃すわけには行かないし、ガリア王ジョゼフからは、ワルドの身柄引き渡しの要求も来ている。

当然と言えば当然のことで、この期に及んでは、子爵ごときを庇う理由も、彼にはなかった。

いまは亡き、友であったワルドの父親には悪いが、ヴァリエール公爵も目をかけていたというのに、この始末である。国を裏切った男に――ましてや、彼の愛娘をさらった男に――かける情けなど、持ち合わせていない。

星のない夜の下。王城の一室で、貴族たちの会議は踊る。

そして、眠らない城から、ひそかにワルドたちを捜索する追っ手が放たれたことに、気づくものはわずかだった。

「また、平民なの……！？」

ワルドの手によって引っ張り出された、栗毛の幼女を目にしたとたん、ルイズはキツい声音でわめくように叫んだ。

びく、となのはがピンクブロンドの少女を目にして、あわててあたりを見回す。

――さっきまで、士郎君の部屋にいたはずなのに……何で外なの？

なのはは、紫がかった青い目を、暗い森と、そこにたたずむ冗談みたいな色の髪の毛を伸ばした、年上の少女と、そして、さっきからずっと彼女の腕をつかんで離さない男を、あわただしく見比べて、訴えかけた。

「あ、あのっ。ここどこですかっ？

私、うちに帰らなくちゃ……お父さんとお母さんに心配かけちゃう」

見る限り、子供のなのはの頭でも、ここが自宅から遠く離れた場所であろうことは判別できたが、残念ながら、この人気のない森の中に、彼ら以外の人間が見当たらない。

怪しいことこの上ない人物たちではあるものの、なのはは、勇気を振り絞って、ルイズたちへと声をかけた。

「残念だが、君を帰すことはできない」

「え」

「ルイズ。契約を」

頭上から降ってくる低い声に、なのはが思わず顔を上げると、彼女の正面に立っていた少女が距離を詰めていた。

ミニスカートにブラウス、まではふつうの格好だが、どうしてマントなどつけているのかと、なのはが不思議に思う暇もなく。

「まあ、アレよりはマシか……女の子みたいだし」

ワルドに急かされたルイズは、相手が自分より年下で御しやすそう、と思ったのか。才人ほどの反感は見せず、半ばあきらめたようにキスをした。

「我が名はルイズ＝フランソワーズ＝ル＝ブラン＝ド＝ラ＝ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」

――唇に、何かが触れた。

そう思ったときには、ぼやけるほどに少女の顔が、なのはの間近にあり、同時に――凄まじい痛みが、彼女の左手に焼きつけられた。

「あ、うぐあああああぁぁぁぁぁ！」

およそ、幼い女の子には耐え切れないほどの激痛が、彼女の神経に突き刺さる。それはたとえるなら、焼き鏝を当てられるようだった。

ばちばちと、左手から彼女の体の中にかけて、爆ぜる電撃のような痛みが止まらない。

あまりの衝撃に、なのはの目からふっと光が消える。

そのままパジャマをまとった小さな体は、力を失って夜の森に倒

れこんだ。
　かろうじてワルドが彼女を抱きとめるが、その目は、なのはの左手に刻まれたルーンを冷静に観察している。
　いっぽうルイズはというと、目の前で小さな女の子が泣き叫ぶという、ショッキングな光景に驚いて、少しだけばつの悪そうに栗毛の幼女を眺めていた。
「お……大げさ、よ、ね？」
　だってルイズの知る限り、契約のキスでルーンを刻まれた使い魔が、そんなふうに痛みを訴えることなどなかったのだ。
　少なくとも、彼女の同級生のうちでは。
　ただし、考えてみて欲しい。
　なのはは、みずから望んで使い魔になるための「扉」をくぐったわけでもなく、才人のように魔力の低い人間でもない。
　そして彼女は、いまだ知ることのないままに生きているが――なのはの身には、ミッドチルダをはじめとする管理世界の基準に照らせば、ゆうにＡクラスはくだらない魔力量がそなわっている。
　裏を返せば、なのはには、その魔力量に即したレジスト値もあるはずで。
　それが、彼女じしんを冒そうとする魔法の術式と、他者の魔力に対して、免疫のような反応をしたのだとしたら。
　ウィルスという異物を追い出すために、熱を出したり痛みを伴うように、なのはの体もそうなったのだとしたら。
　それは、ある意味、当たり前のことであり、ルイズには思いもつかないことであったに違いない。
　しかしこれ以降、なのはには、ルイズに対するトラウマが植えつけられたことは、いうまでもないことだった。

#２４１　始まらない物語ー痛みの先ー（後書き）

あとがき

＞我ながら酷い。今回は、先に謝っておきます。

なのは、ごめん。

しかし原作でも才人は痛がってましたしね。それに、書き手なりの理屈を捏造した結果、こうなりました。

なのはの魔力量は、相当あるわけですし、そうするとレジストも高いんではないかと。

なので、ルーンでの洗脳も上手くいきません。なのはの魔力量の高さゆえ、というご都合主義でお願いします。

あ、時間の流れを説明するまでたどり着けませんでした。

オリ主たちが登場したら、必ず……！

ジョゼフも主人公も名前だけですみません。

#２４２　始まらない物語ー烏兎匆匆（うとそうそう）のエトランゼー

さて。

ここで蛇足ながら、一つ、時間の整理をしてみよう。

才人がハルケギニアに召喚された日と、七季たち一行が、ハルケギニアを訪れた日は同じ。

そこから「東方より訪れた留学生」として過ごした時間は、およそ一ヶ月あまりだ。

決して長くはない時間である。

ただし、その濃密さは、ここで述べるまでもない。トラブルやハプニングに満ちたものであったことは、関係者であれば、ほとんどが知っていることである。

だが、才人が召喚された時軸と、プレシア操る転移魔法によって、七季たちがハルケギニアへ舞い降りた時軸が同じかというと――じつは、違っていたりする。

同じ「地球」から移動した両者だが、かたやルイズのサモン・サーヴァントという魔法、かたやプレシアのミッドチルダ式魔法。

もともと時間の流れが違うハルケギニアから働きかける、ルイズの魔法は、七季たちがいた地球よりも未来の時間軸から才人を召喚していた。

これは、のちに少年を元いた世界に戻すため、チートな巫女さんであるところの、真言が色々と調べたときに判明したことである。

もっとも、彼女にとって、それは大した違いではなく、ただ才人が拉致された時間軸のポイントを探り当て、その座標めざしてジッパー開けるだけ、という作業だったのだが。

事実だけ並べると、けっこうとんでもないことなのに、真言にとっては「わかって戻れたんだからいーじゃん」でまとめられてしま

う。

いっぽう、七季たちはというと。

才人が高校生である時軸より、前――ようするに昔から、ふつうの転移魔法でハルケギニアまでやってきた。

ハルケギニアから「地球」へ移動する際は、例によって、栗毛の美少女のジッパーで戻ってきたわけなのだが。

ここで問題になるのは、彼らが戻る際に、べつだん真言が何もしなかったことだ。

プレシアたちも、もともと条件に合う――ピクニックがてらデバイスの性能を見るという――管理外世界へ、ちょっと出かけて転移魔法でまた戻ってくるつもりだったので、これといって何もしなかった。

そもそも転移する世界間の時軸の調整というのは、まずふつうの人間には無理だ。「神使（しんし）」の七季でさえ、あちこちの世界を――真言のように――移動するのは、まだできないのである。

真言だからこそのトンデモスキルといえよう。

よって。

ふつうに、ハルケギニアで一ヶ月あまりを過ごして、元いた「地球」に戻った七季一行は、帰りついた先で、年単位の時間が過ぎているという、ちょっとしたウラシマ状態に遭遇することになったのだった。

蛇足ながらつけ加えておくと、地球＝ハルケギニア間の時間の流れの速さは、乱流のようになっており、一定ではなかったりするので、あくまでそのとき限定の話である。

閑話休題。

簡単にまとめれば、以下の通りになる。

＊才人、「地球」から「扉」をくぐる。

＊七季一行、「地球」から転移魔法で管理外世界「ハルケギニア」に転移。

＊七季一行、留学生として生活を開始。

＊いったん真言によって、七季一行が元の世界へ帰還（才人、巻き込まれて異世界トリップ）。

＊七季一行、ジッパーによってハルケギニアに戻る（ただし真言は仕事で逃亡失敗）。

＊メンヌヴィル襲撃事件。

＊ルイズ帰省。

＊フリッグの舞踏会。

＊アンリエッタ行幸。使い魔品評会。

＊ジョゼフ、真言によってハンター世界へ拉致される。

＊七季一行、真言のジッパーでハンター世界へ。

＊七季一行、みたびハルケギニアに戻る。

＊アルビオンにて、レコンキスタ蜂起。

＊レコンキスタ蜂起がトリステインに伝わる。

＊ジョゼフ、ハルケギニアに帰還。ただしアルビオン（ニューカッ

スル城）降臨。

＊七季一行にディルムッド参入。

＊レコンキスタがトリステインへ宣戦布告。

＊トリステインの王城にてクーデター未遂。

＊七季一行、タルブ村にて、レコンキスタと交戦。キンダイチ回収。

＊真言、ウェストウッド村にて、マチルダと共にテファたち回収。

＊ジョゼフ、トリステインを訪れ、賠償請求。

＊七季一行およびキンダイチ、真言のジッパーで、「地球」（リリなの世界）へ。

ここまでで、ハルケギニアにおける生活は、およそ一ヶ月あまり。

あくまで簡単にまとめたものなので、省略した内容については、あえて言及しない。

そして七季たちは、よたび――ハルケギニアへと戻ってきた。

ちょうど、真言が彼らをジッパーに放り込んだ直後の時間軸で。

「ふぅ」

サロンのリビングに降り立った、黒髪の少女が、その桜色の唇から安堵のためいきを吐き出した。

「いまさらですけど……この小屋があって良かったですね。移動も人目につかないし」

ちらりと七季の黒い瞳が、リビングの壁にかかっている時計を眺めて、まだ授業前であることを確かめる。

しかし彼女の背後には、家族を拉致されて怒り心頭の剣士がふた

りと、立場こそ違えど、なのはを案じて、いまにも駆け出しそうに張り詰めた空気の男の子がひとり、控えているのだ。

――きょうもサボるしかないな……。

こちらの魔法は興味深いが、なにしろ人命が懸かっている。すぐさま動きたいのは、七季も同じだったが、高町ファミリーよりも頭の冷えている少女は、まっさきに彼らへ言わなければならないことがあった。

「良いですか三人とも。すぐに着替えてください」

暴れようとする恭也に、今度こそ七季は容赦しなかった。彼女の心境は「手を焼かせるな！」としか言いようがない。

いったん彼の魂を抜いて、久しぶりのＯＨＡＮＡＳＨＩをかましたあと、青年の魂を肉体に戻してから、さらにしばいて叩き起こした。いいかげん、なのはの命が関わっていることもあって、彼女もかなり気が立っていたのだ。

「誰が意味のないことを言いますか！

相手は貴族なんですよ。相応の格好をしなきゃ門前払いも良いところです！」

この世界では社会の仕組みが封建制なのだと怒鳴った少女に、高町士郎と恭也、そしてちびっこ士郎はようやく理解したらしく、アーチャーが錬金で作った従者服に袖を通した。

「いいですか、被疑者は公爵――大貴族の娘です。しかも、げんざい学院にはいなくて、実家に帰っています。

なのはちゃんを迎えに行くためには、その貴族の領地に入り、なおかつ直接、公爵か、公爵夫人に面会する必要があります」

招待もないのに、貴族の領地に入るのも、本当は無礼になるんですが。

苦々しげに、有無を言わせないオーラを放ちつつ説明する七季は、

恭也の向ける、不満げなまなざしに声を投げた。
「何か質問でも？」
「あ……君は、その格好のままなのか？」
暗に、自分たちだけが着替えさせられたのが納得いかない、と言いたいのだろう。
「こちらの世界で、我々は貴族としてあつかわれています。東方――そう呼ばれる、他国の国の、貴族としてね。この国での貴族は、おしなべてメイジ――魔法を使えるものです。貴族でないメイジはいますが、逆はありえません。
高町さんたちが魔法を使えるとは思っていませんので、そうである以上、我々の従者として同伴するしかないんです。
そして、おそらく貴族社会の習慣では、貴族でもないものが、直接、貴族に……それも、公爵に交渉する権利はありません。娘さんを取り戻すには、我々が話をつけることになるでしょう」
「そんな！　俺たちは妹を攫われてるんだぞ！」
硬質な光を浮かべる黒い目で淡々と言って聞かせる、あどけない少女に、黒髪の青年は鋭い目を向け、食ってかかるも。
「恭也」
父親である、高町士郎に制されて、ピタリと口をつぐんだ。
「本来、移動中にでも話した方が、ずっと効率がいいんですけど。どうしていま、ここで話していると思います？
あちらの領地に入ってからでは、盗聴される恐れすらあるからです」
平坦な声音を崩さないソプラノを紡ぐ七季の言葉に、ぎょっとしたのは、むしろ魔術に詳しい士郎だった。
「中世ヨーロッパレベルの文明に、盗聴器はないだろ？」
「ヴァリエールの公爵夫人は、風の魔法の使い手。
声が、空気の振動とイコールで結ばれるのは、わかりますよね？
ようするに、下手にしゃべると、どんなに小声だろうが、相手に筒抜けになる可能性が高いんです」

＜だから我々は、こういう風に『念話』を使います＞
『うおわっ！？』
いきなり頭に響いた少女の声に、そろって高町親子と、赤毛の子供が奇声を上げた。
否、ちびっこ士郎だけは、どうにか口を押さえたが、びびくーん！と小さな肩が跳ねたので丸わかりだ。
「慣れない人には気色悪いというか……頭の中だけでしゃべるのって、考えまでダダ洩れになるでしょう？
だから、基本的にあなた方には使わない方向で行くつもりです。挙動不審で怪しまれると、本末転倒ですし。この魔法が使えないと、受信だけの一方通行ですしね」
いろいろめんどくさいんですよ。
かたや七季が説明している間に、プレシアたちは、さかさかと準備を急ぎ整える。
ディルムッドは、アーチャーから手渡された、投影品の紫色のアイマスク――自己封印・暗黒神殿（ブレーカー・ゴルゴーン）をつけ。
成長したアリシアは、こちらでの年齢に不自然さを感じさせないよう、リドルお手製のハリポタ式「若返り薬」を、才人ともども服用し――そのマズさに、のた打ち回り。
リドルは、例によって黒猫フォームへと変身。七季の肩へと、ちゃっかりよじ登る。
リニスは、うっかり置き忘れていたアリシアのデバイス、「デルフリンガー」を、取りに行って――その盗難に気づくと、プレシアに報告。
「どちらにせよ、他の人間には使えないはずだけれど……」
デバイスである「デルフリンガー」には、パスワードが必要なのだ。それはアリシアじしんが考えたもので、余人は――七季たち主従を含めた「家族」以外は――知らないはずのものである。
「ひとまず、後回しよ。いまは、なのはちゃんを優先しましょう」
「はい」

ひとしきり、七季が、高町親子とちびっこ士郎に注意事項を説明し終わったところで、一同の準備は、あらかた整った。

「それじゃ、途中までは箒と飛行魔法で行きましょう。馬車がスタンダードですけど、チンタラしてたんじゃ、ヴァリエール領までは二日かかります。

転移魔法は、一度行ったところでないと、座標がわからないし…先輩のジッパーだと、あちらに、いらない警戒をさせるでしょうからね。あえて、ヴァリエール領に入ってからは、馬車を使います」

それでも一日がかりの移動になるだろう。

そして、人数をさらにに増やした、七季一行が、ヴァリエール公爵家の屋敷に到着するころ。

ラ・ロシェール近くの森で、異世界から召喚された女の子が、気を失う。

こうして彼らの時間は、ふたたび絡み合い、歯車を回していく――

#２４２　始まらない物語ー烏兎匆匆（うとそうそう）のエトランゼー（後書き）

あとがき

＞ものっそい回りくどいかもしれませんが、いちおうの説明でした。

タイムスケジュールは、あくまでざっくり書いたものです。

高町パパンと恭也、思ったほどすんなり、なのはと合流できるわけではないようです。

あと、この時点でオリ主、ルイズの出奔を知りません。見張ったりしてないし。

ヴァリエール公爵とカリーヌは、娘の家出をひた隠してますからね。

オリ主の偏在「オルタンシア」が追手のことを知っても、それはワルドに向けたものだと思うでしょう。彼女も仕事してるんで。

あと「オルタンシア」、軍に配属される予定だったのに、マザリーニ枢機卿が王城に残しました。人手が足りないとか言って。

あと蛇足ですが、小説のタグに「麻婆があれば」「何でもできる」を追加しました。一言でまとめたかったんですが、十文字以内に収まらなかったので……。

※烏兎匆匆（うとそうそう）

：月日の過ぎるのが早いさま。

古代中国の神話で、太陽には金烏（きんう）（＝三本足のカラス）が、月には玉兎（ぎょくと）（＝ウサギ）が棲むという伝説から。

「金烏玉兎」を略して烏兎とは日と月の事、または歳月の意。匆匆はあわただしいさまの意。

※エトランゼ

：フランス語で「外国からの旅行者。異邦人。よそ者。」の意。

#２４３　始まらない物語ー戦いの条件ー

「しかしこれは、あまりにも……！」

トリステインの、主だった貴族が集められた会議室では、モット伯の非難めいた声が上がっていた。

いまだ夜は深い。

魔法の明かりを灯したシャンデリアの元、彼らが睨んでいるのは、ガリアから突きつけられた損害賠償を要求する書状であった。

「暗殺をもくろみ、実行しようとしたワルド子爵の引き渡しは当然として」

「賠償金が二十億エキューとは……！」

それだけあれば軍備が、と呟いたのは、グラモン元帥で、いまもってレコンキスタの進軍を懸念する身にとっては、当然のことだろう。

国庫から出せないかというと、そうでもない金額だが、だからといって出してしまえば、トリステインが回らなくなる。もともと、予算というものは、いくらあっても足りないのだ。

その限られた中で、マザリーニ枢機卿は、せいいっぱい政策や各関係部署へ分配されるよう、心を配っていたが、じっさいにはかなりの金額が着服されていたことも、レコンキスタがらみの一件で明らかになってきた。

とにもかくにも、トリステインに、そんな余裕はない。

金があるのと、その金を出して問題がないかは、まったく別の話なのだ。そもそも国庫を空にするというのは、国家としてあるまじきことだ。

もちろんガリアも、それは見越している。だからこそ、余計にトリステイン貴族は、危機感を募らせていた。

「しかし、払えない場合、クルデンホルフ大公国の租借権を要求する、とは……」

ヴァリエール公爵の目が、ちらり、とこの場に座っている、当のクルデンホルフ大公をうかがった。壮年の男の顔は、蒼白を通り越して、灰のように白く、ぶるぶると震えている。

租借とは、ある国が、特別の合意のうえ、他国の領土の一部を一定の期間を限って借りること。

租借権は、その権利を指す。

そして租借された領土のことを、租借地という。

租借地とは。

説明が重複することになるが、ある国が、条約で一定期間、他国に貸し与えた土地のことだ。

租借期間中は、貸した国には潜在的な主権が存在するが、実質的な統治権は借りた国が持ち、立法・行政・司法権は、借りた国に移る。

ちなみに「租」とは、年貢や田賦のことで、租借地・租界とは税を取って借す領域、あるいはより狭い区域のこと。租借料が支払われることを想定した用語であるが、実際には、それぞれの条約によったという。

「租借の期間は、賠償金を払い終わるまで。

しかも、王族を暗殺するような人材を送り込んだトリステインは、クルデンホルフを見捨てる可能性があるため、他に担保として『始祖の秘宝』をガリアに預けること、だと……！」

誇り高いトリステイン貴族たちにとって、それは、はらわたの煮えくり返るような言い分ではあったが――なにぶんにも、王族暗殺未遂という、れっきとした事実が横たわっているため、反論したくともできないのが現状である。

ガリアの言い分は、あくまで「始祖の秘宝」は担保であって、賠償金を払い終えた暁には、きちんとクルデンホルフの土地ともども、返却する、というのだ。

面と向かってよこせと言われれば、まだ「国宝をおいそれと渡せるか！」と突っぱねることもできただろうが、あくまで「担保」、である。

――王家の由緒ともなっている、始祖にまつわる秘宝であれば、万が一にも賠償金の支払いを放置はするまい、と見越してのことだろう。

マザリーニは、ガリアの突きつけた要求の裏を読んで、ふかいふかい嘆息をこぼした。

――これで「始祖の秘宝」を見捨てるような真似をすれば、ますますトリステインは、王家としての威信を失うことになる。

さらに悪いことには――トリステインにとってだが――王家が所蔵する「始祖の秘宝」は、一つだけではないのだ。

「水のルビー」と「始祖の祈祷書」。

トリステインが持つ、そのうちの片方だけを預ければ良い、というガリアの要求は、しごくもっともに聞こえる。

じつのところ、そろわなければ効力を発揮しない「始祖の秘宝」のセットを崩し、トリステインの「虚無」の覚醒をくじくためなのだが――ジョゼフのそんなもくろみを、彼らが知る由は、露ほどもない。

「そして最後が」

元帥であるグラモン家当主と、もはや軍を退いたはずのヴァリエール家当主が、そろって顔をつき合わせ、苦い色を醸し出していた。

「ガリア軍が、トリステインの領土を通ることを許可すること、か……」

そうでなくては、ウェールズ王子率いる、ガリアの艦隊が、トリステインへ侵攻しようとしているレコンキスタ軍と交戦することはできない。

その理屈はわかる。

しかし歴戦の軍人たちは、この要求に納得の行かない様子で、口をへの字に曲げたまま、いつまでも渋面を崩すことはなかった。

「ひとまず、『始祖の秘宝』については、『始祖の祈祷書』を預けることにしましょう」

聖職者として「祈祷書」を管理しているマザリーニが、良く知っていることだが、あれは白紙の本でしかない。

あからさまな力を秘めた「水のルビー」を渡すよりもマシだろうと判断したのだが――のちに、それが間違いであることに気づいたときには、もはや、とりかえしのつかないところまできていたのだった。

ワルドの偏在によって作られた、偽「水のルビー」は、翌日、アンリエッタの指から消えることになる。

七季たちを乗せた馬車から、ようやくヴァリエール公爵家が見えてきたのは、真夜中――日本で言えば、丑三つ時、といったところだろうか。

昼夜兼行で、御者を務めていたディルムッドが、馬車の中に声をかけると、アーチャーの肩を借りて寝入っていた黒髪の少女が、目を開けるより先に。

「ぶげらっ！」

馬車から飛び出そうとした恭也青年を、父親の高町士郎が手ずからグーパンで沈めてことなきを得た。

「ペトフィルカス・トタルス。石になれ」

ぴしっ。

そのうえからリドルが、恭也へとハリポタ式の「石化の魔法」をかける。バインドよりも目立たなくて、こういうときには便利なのだ。

肉体はそのままに、何故か、かっちりと動けなくなる、血の気の多い青年がひとり。

「人の、話を、聞いてなかったのかな？」

ざりざりと恭也の顔で爪とぎする黒猫に、容赦などは見受けられない。身動きできない青年は、まっくろにゃんこのなすがままだ。

「真夜中に叩き起こされて、誰が『お願い』を聞く気になるのさ？　バカなの？　死ぬの？」

眠る邪魔にならない程度の明るさで、淡いオレンジ色の魔法光が、ぼんやりと車内を照らす中、ざりざりざりざりと、黒猫の爪とぎは続く。

父である高町士郎も、息子の短絡さには呆れ果てているらしく、それを止めることもなく、「休んでいるところを騒がせて申し訳ない」と、馬車に乗っている七季たち主従や、テスタロッサファミリー、才人やキンダイチに謝った。

半数以上は夢の中である。

「いや……良いですけど……あー、リドル。ついでに防音魔法よろしく。サイレントだっけ？

七季ちゃんとかアリシアちゃんたち起きちゃうからさ」

「ん、りょーかい」

「若返り薬」を飲んで少年姿になった才人は、けれども大人の気遣いというやつで、親しみ慣れた闇の魔法使い（ただしにゃんこ）へ、そつなく頼んで、恭也をスルーすることにした。

翌朝、悲惨なことになった黒髪の青年の顔は、心優しいキンダイチが、水の秘薬で綺麗さっぱり痕も残さず治療してくれたという。

戦いは、すぐそこまで迫っていた。

#２４３　始まらない物語ー戦いの条件ー（後書き）

あとがき

＞のっけから、ダラダラとめんどくさい話題で申し訳ない。

ですが、いちおう描写はしておこうと思いまして。

ジョゼフが要求したのは、次の三つ「金・領土（賃貸）・始祖の秘宝」。

始祖の秘宝と領土は、あくまで借金のカタ、というところがミソです。

あとクルデンホルフ大公国、って、ガリアにしたら、いい中継点になりそうです。トリステインを攻める際の。

どうも、このメンツだと恭也がどうしてもワリを食います。浮くからでしょうな。ハルケ世界で。

ちなみに、ハルケギニアの物価は、「ゼロの使い魔@設定・考察ｗｉｋｉ」を参考にしました。

「タバサの冒険」で金持ちの貴族の総資産が二千万エキューなので、ガリア基準の「金持ち」は、小国のトリステインでは、ごく限られているでしょう。

おそらくヴァリエール家クラスより、少し下くらい。

そんな「金持ち」総資産の百倍なら、国家としてもかなりの額になるのではないかと判断しました。

目安は、国庫を絞れば出せるけれど、それがなければ確実に、あとから不備が出てくることが明らかな金額。

男爵、決闘における身代金の相場が千エキューなので、その二百万倍なら、王族の身代金としては、まあおかしくはないんじゃないでしょうか。慰謝料込みですし。

小ぶりの城
：才人の暗殺料が小さな城が三つ四つ買える値段だそうなので逆算して、三万から五万エキュー。（十七巻）

金持ちの貴族の総資産
：二千万エキュー。（タバサの冒険二巻）

決闘時における貴族の身代金
：例・ソワッソン男爵、千五百エキュー。男爵の相場は千。（十五巻）
（参考：ゼロの使い魔@設定・考察ｗｉｋｉより）

#２４４　始まらない物語－空を往（ゆ）くもの－

「……せんぱい。おねがいだから、ばしゃのなか、ちだらけにしないでくださいよ」

起きるなり、寝起きの舌っ足らずなソプラノで、やたらめったら物騒なセリフを吐き出した少女に、神剣を抜こうとしていた真言が「ちっ」と舌打ちした。

いいかげん、七季に対する恭也の態度の悪さにキレかけていたらしい。

否、キレかけていたのは、むしろ、きのうからずっとで、じつは七季は、それを念話でなだめていたのだから、良く保（も）った方だろう。

慣れていない恭也たちには念話を使わなかったが、真言やプレシアをはじめ、仲間うちではずっと、念話で打ち合わせや、これからのことについて話していたのだから。

「ぁふ……あーもう、アタマ痛い……」

ぐしぐし目元をこすろうとする七季へ、アーチャーから濡れタオルが差し出される。

「マスター」

「ありがと、アーチャー」

のたのたと鈍い動きの少女は、まだうっつらうっつら危なげに揺れる黒髪を、しっぽのごとくに揺らしつつ、キンダイチの治療を受けている黒髪の青年――高町恭也を横目に眺めた。

「あつつつつ……」

「悪いんですけど、ほんっとに大人しくしててください。こっちはこっちで大変なんです」

「何が」

きのうリドルにさんざん爪とぎ板代わりにされた恭也は、鋭い目

つきで少女を見つめ返したが、周りの目が、冷ややかに自分を眺めていることに気づいて、首をすくめた。

なのはが心配なのはわかるが、プレシアたちテスタロッサファミリーは、みんな七季を家族のように思っているし、才人でさえ、恩人でもある少女には甘い。

家族や恩人に態度の悪い人間を、好意的に見るものは少ないだろう。

いっぽうの七季は七季で、そういう高町家サイドの憤りなどは、最初から考慮のうえで、あえて自分が矢面（やおもて）に立ったのだ。

女性陣ばかりのテスタロッサ家はもちろん、真言や才人、キンダイチに八つ当たりさせるわけにはいかない。

――そもそも、このメンバーで、政治的な思考ができそうなのは、リドルと私、次いでアーチャーくらいだろうし。キンダイチ先生にさせるのは……ちょっとなぁ。優しすぎるから。

そのうち主なのは、七季なのだ。

彼女とて、まだ若く、そこまで頭が回るとはいえないのだが、考えの拙さや、至らない部分は、従者がフォローしてくれるし、こういうときに矢面に立つのが、主人の役目だと、七季は思っている。

だから説明を一手に引き受け、多少の八つ当たりくらいは甘んじて受けるつもりなのだが――それでも当然、嬉しいわけではない。憮然とするくらいは勘弁して欲しいものである。

なのはの捜索と平行して、七季は、この一行の安全や立ち位置も確保しなければならないのだから。

「時間がないのと面倒なんで、端的に話します。

この国、きのう王宮でクーデター未遂が起きました。

現在進行形で、その処理と、他国からの侵略――で、いいんだっけ？侵攻だっけ？――にさらされてます。

あと、これから訪問する公爵家の、当主夫妻――公爵と公爵夫人のことですが――は、そのクーデターの関係で、いま王宮にいるらしくて、家には不在です。アンダスタン？」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。それってかなりとんでもないことじゃないか？」

薄暗い馬車の中、大きな琥珀の目を丸くした、ちびっこ士郎が、かつては国外で紛争に関わっていたこともある経験から、あわあわしながら少女へと話しかけた。

「わりと」

へろんとした声で返す七季のあどけない顔には、緊張感のかけらもないけれど。

息子と似た面影をそなえる高町士郎も、怪訝そうな面持ちでポニーテールの少女をうかがう。

「どこからそんな情報を？」

「いろいろです。あと、公爵家についての情報は、訪問の先触れを、東風（こち）――私の使い魔に、先行させましたから」

ガルーダである東風（こち）だけなら、馬車よりもずっとスピードが出せるのだ。

よって、手紙を書くヒマも、正直なところ惜しかったので、しゃべることのできる東風（こち）に直接、口頭で伝えるよう頼み、ヴァリエール家へ飛んでもらったというわけだ。

風を良く遣（つか）う神鳥は、ヴァリエール家の偵察も一通りこなしてくれた。

公爵夫妻の不在は、「オルタンシア」からの連絡もあって、裏は取れていたが、カリーヌ夫人は風の魔法の使い手である。偏在の可能性もあったので、念のため屋敷を探ってもらったところ、彼女の影はどこにもなかった。

――よっぽど急いでいたみたいだな。

この時点で七季は知らないことだが、三女・ルイズの出奔が明らかになったのだから、それも当然の話であった。

「でも、朗報と言えば朗報です。手ごわい風メイジと、政治家でもある公爵がいないのなら、交渉相手はおそらく、ヴァリエール家の長女になるでしょう。

聡明なアカデミー職員ということですが、こちらには切り札がありますしね……」

ちら、と七季の黒い瞳が、御者台の方を舐め、やれやれと少しだけ肩の力を抜いた。

「盗聴の可能性があると言ってなかったかい？」

困惑の声を上げる高町家の家長へ、こっくり頷いた七季は、「それは夫人のことを警戒してですから」と続けた。

「風のスクウェアである、公爵夫人がいないのなら、そこまで警戒しなくて大丈夫です。いちおう、この馬車にも、認識阻害と結界くらいは張ってます、から……」

そこまで言ってのけてから、ぽてりと黒髪の少女は、傍らの従者へ倒れこんだ。

「だめだ。アタマまわんない……おなかすいた……」

空腹でエネルギーが足りないらしい。

くったりとちからなく伸びている七季は、このまま意識を飛ばしそうだ。なにしろ、着いたら公爵家でどうするかと、あーでもない、こーでもないとシュミレーションをしていたのだから。

「いったん外に出て、食事をしよう」

マスターの小柄な体を抱きとめた、褐色の偉丈夫は、そう提案して馬車の扉を開けた。

同じころ、トリステインの王城では。

「仕方あるまい……！」

トリステイン国は、全面的にガリアの要求を呑むことを、滞在していたジョゼフ王へと伝えた。

ただし賠償金の支払いは、一度にではなく、分割して支払うこと。

賠償金に利子をつけない代わり、クルデンホルフ大公国の租借（そしゃく）料の支払いを、ガリアに求めないことなどが条件として添えられた。

ガリア側は、これを鷹揚に受け入れることで合意とする。
「ああ、租借（そしゃく）するクルデンホルフについてだがな」
そこに青い髪のジョゼフは、こんなことを提案した。
「我らが言うのもなんだが、ガリアが租借する以上、クルデンホルフ大公の進退について困るだろう。
よって、だ。クルデンホルフ大公家へ、ガリアからも爵位を与え、ガリア貴族として、いままで通りクルデンホルフを治めてもらおうと思うのだ」
「は――？」
誰より驚いたのは、領地を奪われるとばかり思っていた、クルデンホルフ大公、そのひとであった。
「こちらとしても、クルデンホルフを知り抜いた大公に統治を任せるのが最適だと思うのだ。
なにしろ、豊かな領地だからな。しかし、何も知らぬまま、クルデンホルフに手をつければ、それまでの豊かさを台無しにしてしまうだろう。それでは意味がない」
ひらひらと手を振るジョゼフは、呆ける壮年の男へ、不敵な笑みを見せた。
「クルデンホルフの豊かさは、素晴らしい。それは大公の手腕あってこそだろう。だから俺は、人材としての大公を求めている」
それは、現代風にいうならば、ヘッドハンティングだった。
もともとトリステインの属国としてあつかわれてきた、クルデンホルフ大公国。
その領地は、ガリアへ謝罪する条件として、租借地（そしゃく）となるが――
これは、見方を変えれば、ガリアという大国の庇護を受けられるということだ。
小国トリステインよりも、ずっと格上の。
「これからレコンキスタとの戦いも控えているゆえ、正直、引継ぎだの何だのと、煩わしいことは避けたいのだよ。
そら、こうすれば、大公家が引っ越す必要もなく、そのままでか

まわんだろう？」
　トリステインからすれば、内股膏薬、と罵られてもおかしくないが――これまでずっと、トリステインの属国あつかいだったクルデンホルフとしては、むしろ渡りに船の話。
「つ、謹んで、お受けいたします」
　ジョゼフ王の威風に、クルデンホルフがなびいた瞬間だった。
「では、調印を――」
　トリステイン王家の王女、アンリエッタと、ガリア王家の王、ジョゼフのサインが、羊皮紙へと印され、ここに歴史が刻まれる。
　そしてガリア国の一団は、おのが軍勢を率いるため、トリステインを後にしたのだった。

　国境の上空に待機していたガリア艦隊が、ジョゼフ王を乗せたドラゴンの影を迎え、すべてが動き出す。
「進軍せよ！」
　ざあっ。
　高い空に、風が吹く。
　傍らに、黒髪の美しき使い魔と、金髪のうるわしき王子を従えた青い髪の覇王は、ここに戦いの火蓋を切って落としたのだった。
　トリステインの空に、ガリアの軍影が渡り鳥のごとく長大な影を伸ばしていた――。

　同じく朝のトリステイン魔法学院では。
　ゲルマニアの方角から飛んできた影が、ひとつ。
「開けるのね、開けるのね！」
「は……？　何で、あんた」

驚きに目を見張るキュルケの瞳には、親友である少女の使い魔・シルフィードの青い竜体が映りこんでいた。

「お姉さまから伝言なのね！　早くゲルマニアに戻るのね！」

シルフィが乗せてあげるのね！

#２４４　始まらない物語－空を往（ゆ）くもの－（後書き）

あとがき

＞そのときガリアが動いた！

ってまあ冗談はさておき。

他国の戦争情報って、一般人には、どれくらいの速度で下りてくるものなんでしょうかね。

タバサ（シャルロット）は、トリステイン侵攻は知らなくとも、レコンキスタがアルビオンを取ったのは知っています。

それで、次に攻められるかもしれないトリステインに、まだいるかもしれないキュルケを逃がすため、母の世話で動けない自分の代わりに、シルフィードを派遣しました。

うぬぅ。なのはサイドが進まない。焦らしてすみません。

#２４５　始まらない物語ー震える、左手ー

「……我、使命を受けし者なり」
幼い声は震えていた。
青い空の下に響くは、剣戟と爆音。
そのさなかで、彼女は選択を迫られる。
『契約のもと、その力を解き放て』
「けいやくのもと、そのちからを……とき、はなて」
小さな手には、長すぎるほどのロッド。
『風は空に』
「かぜは、そらに」
ピンク色の握り手に、鳥の頭を模したようなシルエットが、場違いに可愛らしい。
『星は天に』
「ほしは、てんに」
怯えの浮かぶ青い目を、励ます彼の声が、遠く重なる。
それでもこの場に、なのはの味方は、ただひとり。
『そして不屈の心は、この胸に』
「そして……ふくつの、こころは、この、むねにっ」
生き残るため。
ふたたび家族と出会うため。
「この手に魔法を――デルフリンガー、セットアップ！」
幼い子供は、震える左手で、魔杖を掲げた。

なのはの朝は、それまでのものとは違っていた。

否――違い過ぎて、いた。
寝かされていた見知らぬベッドのうえ。
けたたましい破砕音と、ガラスの砕ける澄んだ音色は、彼女の眠りを妨げるには十分すぎるほどのもの。
「っ！？」
それは隣に部屋を取っていた、ワルドとルイズを、追手が襲撃する音だったのだが。
ほどなく部屋の壁は、魔法によってぶち抜かれる。開いた大穴からは、ゆうべ、なのはを自宅から攫ったのであろう誘拐犯と、激痛を与えた少女が飛び込んできた。
幼いなのはの体が、思わず強張った。
「いったい何のつもり！」
甲高い声で、目立たない服装をした闖入者へと叫ぶルイズは、いまもって事態を理解していない。
が、いっぽうのワルドはというと、もはや裏切りが露見していることは、きのう王宮を出て、偏在と入れ替わった時点で把握しているので、大して驚きもしなかった。
驚くというのなら、むしろ、レコンキスタと交戦中である、いまのトリステインに、ワルドへ追っ手をかけるような余力があったという点に、だろう。
王宮から放たれた追手は、ちらりとルイズを一瞥したあと、淡々とした声で砂色の髪の騎士――ワルドに告げた。
「謀反人、ワルド。国家反逆罪およびウェールズ王子暗殺の容疑で逮捕する。速やかに投降するなら良し……」
「するわけが、ないだろう」
だろうな。
「わ、ワルドさまっ？」
ワルドにかけられた容疑の名前を聞いた少女が、ピンクトルマリンの瞳を見開くのと、追手が円陣を組んで、ざっと二人を取り囲むのは同時だった。

その円陣の中には、なのはも含まれてはいたが、元より彼らの関心はワルドと、その連れらしきルイズに絞られている。
「エア・ニードル」
「エア・カッター」
「ジャベリン」
「エア・シールド！」
次々と繰り出される、水や風の魔法による波状攻撃に、風のスクウェアであるワルドが、空気の壁を発生させて、風や氷の刃を防ぐ。
ごごごごうっ。きゅぼ、ぎゅる、どんっ！
「きゃあっ！」
いっぽう、かたや間近で破裂する冷気や風に恐怖を覚えたなのはは、頭を抱えてベッドの上でうずくまった。
跳ね返された氷の刃が、そのへんに置かれていた荷物に当たって、がぱりと口を開けたトランクが、ベッドの側まで転がり寄る。
「ユビキタス・デル・ウィンデ――」
その間にも、ワルドは魔法で「偏在」を生み出し、人数の不利を埋めるために動いていた。
「フライ」を使って、そのまま外に飛び出す長髪の騎士。
彼の小脇には、魔法の使えないルイズも抱えられていた。
ぼろぼろになった部屋に、栗毛の幼女がひとり、残される。
そんな彼女に、話しかける声があった。
「……ああ、まったくひでえ目にあった。お嬢ちゃん、お嬢ちゃん」
「……誰？」
きょろきょろと周りを見回すなのは。だが、まるで嵐が吹き荒れたあとのような部屋には、なのは一人で、他には誰もいない。一部の屋根は吹き飛んで、青空さえ見える始末だ。
「下だよ、お嬢ちゃん。カバンに杖があるだろう。ちょいと手にとっておくれ」
「？……こ、これ、かな？」
そろそろとベッド下をのぞき込むようにして、なのはが蓋の開い

たトランクを持ち上げた。
　細長いケースから、まるで魔女っ子アニメに出てくるような、可愛らしい杖を取り出すと、とたんに大気を震わせるのではない「声」が、なのはの脳裏に響いてきた。
＜おう、助かった！
　お嬢ちゃんが、よもや「使い手」たぁ……災難だ、まったく災難だ＞
「え？　え？」
　どこなの？
　またもキョロキョロする幼い女の子に「デルフリンガー」は「こりゃいけねえ」と気を取り直した。あわてて念話で話しかける。
＜いいからお嬢ちゃん。時間がない。良く聞いてくれ。
　俺は、お嬢ちゃんが握っている杖で、「デルフリンガー」っていう。
　ここは異世界だ。そんで、この世界には、魔法がある。このままじゃ、お嬢ちゃんは危ない。
　お前さんは「使い手」だが、平民で……そのうえ、子供だからな。だが、安心しな。必ず、必ず俺っちが、お前さんを元の世界に、元いたうちに返してやる。だから、俺っちと契約してくんな！＞
「ふぇ！？」
　なのはは混乱していた。
　なにしろ目の前の「杖」がしゃべっているのだ。
　それだけならまだしも、その「杖」は、なのはを家に返してくれるという。
　いきなり拉致されてしまった子供が、信じて良いのかどうか、迷ったとしても、無理はない。
　だがデルフリンガーも焦っていた。すべて説明するには、圧倒的に時間が足りないのだ。
　せめて、なのはに起動してもらわないと、彼女を守る、バリアジャケットの生成すらできない。

＜俺っちには、お嬢ちゃんを守る機能がある。けど、それはお嬢ちゃんと契約しなきゃ、使えない類のもんだ＞

きのう、なのはが気絶したあとで、「デルフリンガー」は、さんざんルイズにいじくられながらケンカをしたが、彼がルイズを認め、契約に至ることは、ついぞなかった。

当たり前である。

ルイズの性格もさることながら、彼を盗んだと、この状況から「デルフリンガー」にわからないはずがないのだから。

――七季姉さんたちなら、必ず何とかしてくれる。

プレシアたちに造られたデバイスに宿り、アリシアがマスターとなった彼であれば、なのはの境遇に同情しないはずがない。

「デルフリンガー」の「使い手」――すなわち「ガンダールヴ」がいるということは、とりもなおさず「虚無」に召喚されたということなのだから。

――さっき、プレシア母さんのデバイスには連絡した。座標は送ったが……さて。

魔力ランクの低いアリシアのためにストックされた魔力は、まだあるものの、ユーザーからの魔力供給はあった方が、もちろん不安はなくなる。

それに「デルフリンガー」に内蔵されたデータや解析機能から見れば、なのはは、十分以上の魔力量の持ち主だ。

魔力さえあれば、「デルフリンガー」は、使い手の体を操ることができる。魔法も、彼の判断で使うことができる。

たとえ、なのはというユーザーが幼く、未熟でも、強化魔法を施したうえで、彼が操るのならば、問題ない動きができるはずなのだ。

＜頼む、お嬢ちゃん！

信じてくれ。

俺っちは、お前さんの盾になる。

お前さんの剣になる。

ずっとずっと待ってた――お前さんの相棒だ＞

死なせるもんか。
愛らしいシルエットの杖から放たれるオーラは、伝わる心情は、たいそう切実で、無機物にもかかわらず、つよくつよく幼い子供の胸を震わせた。
見知らぬ世界で初めて触れた、なのはを案じてくれる感情。
そして外から聞こえる爆発音や、硬い金属が打ち合う音、風のうなりなど、なのはが知らなかったような戦闘の響きが、幼い彼女を脅かし、せきたてた。
「……うん。信じる。信じるよ」
泣きそうな声で、栗毛の子供は、魔法の杖を握り締める。
この世界で、初めて優しい言葉をかけてくれたのは、人間じゃなかったけれど。
ひとかけらの希望が、恐怖に囲まれ立ち竦む、なのはの、幼い心をほのかに温めた。
――帰りたい。
家族たちの待つ、あの家へ。友達のいる、あの世界へ。
――大切な笑顔に、また会いたい。
心が震える。魔力が高まる。
幼いなのはの、小さな胸に眠るリンカーコアが熱を持つ。
＜ああ――ああ、ありがてえ。大丈夫だ、大丈夫だ、相棒。きっと帰してやる。ぜったい守ってやる。俺っちは、魔法の杖にして、ガンダールヴの相棒「デルフリンガー」だ！＞
そして契約が交わされる。
幼い伝説の使い魔と、新しい魔道の器に宿った、古い古い心がいま、絆を結ぶ。
花のような色を帯びた魔力に包み込まれ、なのはとデバイス「デルフリンガー」は、まっしろなバリアジャケットを生成したのだった。

#２４５　始まらない物語ー震える、左手ー（後書き）

あとがき
＞短いですが。
感想で、「なのはサイドを出さないで欲しい」と言われるほどに、ワルドとルイズが嫌う方もいらっしゃるようなので。
あえて二人の描写は最低限に留め、なのはたちだけの会話でまとめてみました。
ようやくデルフリンガー再登場です！（これがやりたかったんだＹＯ！）

ハルケ世界で右も左もわからない、なのはですが、デルフがサポートにつきました。
通報も行きましたからね。あとちょっとの辛抱です。

それからレイハさん、呪文ぶんどってマジごめん。
ただ、デルフの起動パスを決めたのは、例によってリドルです。
闇の帝王、オタク満喫しすぎ（笑）。

#２４６　始まらない物語ー蒼の勝利ー

トリステインの空を覆う、ガリアの艦隊。
その圧倒的な威容を見上げては、恐れおののく民衆たち。
「あれは……」
「フネだよ。戦艦だ」
「すっげー！」
「こら、早く家に入るんだ！」
「あれはトリステインの軍艦じゃあないな」
中でも、それなりに知識のある商人などが、めざとく艦の紋章に気づく。
「え？」
「ガリアの軍だ。あっちのは、アルビオンのだな……」
いまだ布告もなしに、ただ上層部の取り決めだけで、許可されたガリア軍の通行。
そして、自国を侵攻するレコンキスタ軍と戦うのは、トリステインの軍隊ではなく、ガリアの戦艦という事実。
それは、トリステインの民草たちにとっては青天の霹靂であり――国が、ガリアの属国となったかのような印象を与えたことに、貴族たちだけが気づいていなかった。

ガリアから、はるばるトリステインまで出張った空軍は、遠慮も何もなく、同じくトリステインの空に舞うレコンキスタ軍と衝突する。
軍艦から砲撃が放たれ、竜騎士が戦闘機さながら、ブレスを吐い

たり、錐もみ飛行をしながら互いを打ち倒そうと空中戦を展開する。
そんな中。
旗艦は、残したウェールズ王子に指揮を任せ、青い髪のガリア王は、おのが使い魔たる美女を連れ合いに、専用のドラゴンに乗り込んで、あちこちの軍艦を落としていた。
魔法の道具――とりわけ、破壊力の高い火石をばらまくシェフィールドもさることながら、念能力者として目覚めた「虚無」の使い手は、そこに「加速」を上がけするのである。
あろうことか、王であり、マスターであるジョゼフが前衛。そして使い魔たるシェフィールドが後衛という組み合わせは、凶悪に過ぎた。
そんじょそこらの軍人が、束になってもかなわない無双っぷりである。
「ミューズ。そなたには指一本触れさせぬ。安心して前衛を任せよ」
「ジョゼフさま……ああ、ジョゼフさま、かしこまりました。このミューズ、きっとご期待に応えて見せます！」
青い髪の美丈夫の、不敵な笑顔に、ますますミョズニトニルンである黒髪の美女が張り切ったことは、述べるまでもない。
この二人だけで、果たして何十隻の軍艦を落としたことだろう。
そしてジョゼフ主従は、ついに探していた「当たり」を引いた。
「オリヴァー＝クロムウェルだな」
「ひ……！」
カールした金髪に、黒い僧帽をかぶった男は、端正な顔を引きつらせて後ずさった。
使者を操る「アンドバリ」の指輪をはめた、貴族連合レコン・キスタの総司令官――その肩書きに、吊り合うとも思えない胆力のなさで、その顔面に怯えを塗りたくっていた。
もちろん彼は、自分の手にしている最大の武器「アンドバリの指輪」を、目の前の敵に使おうとしたのだが。
念能力者としての修行を流星街で積まされたうえ、「加速」を用

いるジョゼフの方が速かった。
「ぎゃッ！」
指ごと切り落とされたクロムウェルの手に、もはや「アンドバリの指輪」はない。
「ジョゼフさま……お手が汚れます」
手にした司祭の指から、素早く指輪を抜き取ったシェフィールドは、切断面から血を垂れ流す指をふり捨て、うやうやしいしぐさで、ジョゼフの前に跪くと、彼の手をハンカチで拭い、「アンドバリの指輪」をその薬指へとはめた。
――まるで誓いの証のようだわ。
ないしん使い魔が、そんなことを考えて、ぽやぽやしていることを、知ってか知らずか、ジョゼフは鷹揚に頷く。
いっぽうクロムウェルはというと、シェフィールドの繰り出したガーゴイルに取り囲まれて、もはや姿は見えない。
ごとん、と音がしたときには、既に元ブリミル教の司祭の首は落ちていた。
シェフィールドは、ガーゴイルへ、その首を持って着いてくるように命じる。
大将首は討ち取ったのだ。
そして、真実を知るものも、いなくなる。
謀略に長けた王と、その腹心である使い魔は、互いに深く微笑みあって手を取った。
その間にも、軍艦の砲撃は続き、レコンキスタのフネが墜ちていく。
「さて、ミューズ、往(ゆ)くぞ」
「はい。ジョゼフさま。どこへなりとも」
寄り添う主従は竜騎に乗り込み、旗艦へと凱旋する。「オリバー＝クロムウェル、我が手で討ち取ったり！」と知らしめながら。
父の仇、臣下の仇を討ち取った義父に、ウェールズの青い目が、涙の膜を張って、蒼穹を仰いでいた。

#２４６　始まらない物語ー蒼の勝利ー（後書き）

あとがき

＞短くてすみませんが、雰囲気的に、ここでいったんカットです。

ジョゼフ主従、一人勝ちってーか、二人勝ちってーか。

お察しの通り、ガリア無双です。描写は少なめですが、ざっくりダイジェストでお届けしました。

秘密は、ないない。無事に証拠隠滅で、「アンドバリの指輪」も確保っす。

きっとこの方がウェールズは幸せになれると思うんだ。

レコンキスタの糸引いてたの、義父になる人だけどね！

#２４７　始まらない物語ー星の光ー

＜ディルえらいっ！　ご苦労さま＞

念話で、花を飛ばさんばかりに褒め倒しれくれる少女に、黒髪の人外青年は、面映そうに目を細めると、小柄なおのがマスターを見下ろし、はにかんだ。

＜お役に立てて何より……しかし、あれだけで良かったのですか？＞

ないしん首をかしげるディルムッド。

彼がやったことといえば、長く儀礼的な、貴族たちの口上のあとに、たった一言、二言ばかり声をかけて、型通り、騎士としてエレオノールの手にキスをしたくらいだ。

むろん、アイマスクは外したが、彼女は既にディルムッドの魔貌を見たこともあって、彼の虜（とりこ）になっているし、人払いをしたうえでのことなので、問題はない。

『以前より、お痩せになったような……？

いや、失礼。どうぞ、ご自愛ください』

七季からの指示は、いたって簡単で、「彼女を案じる言葉をかけてやれ」というだけ。

ディルムッドは、それに従ったまでのことだ。

しかし、想いを寄せる美貌の騎士から、自分を気にかけるようなセリフを向けられ、なおかつ「痩せた」と言われれば、エレオノールが舞い上がらないはずがない。

「太った」と言われて怒る女性はいても、「痩せた」と言われて怒る女性は、圧倒的に少ないだろう。

＜恋する乙女ってのは、好きな人にかまわれただけで、ごはん三倍はいけるイキモノなんだよワトソン君＞

＜はあ……＞

そんなわけで、ディルムッドという「エサ」を目の前にちらつかされた挙句、そういう「ご褒美」までもらった恋する乙女――もとい、エレオノールの口は、非常に軽かった。

「ルイズ嬢は屋敷にいない、か……」

エレオノールは、領地の別荘で療養中、と説明したのだが、ヴァリエール本家の屋敷にいないことには変わりない。

そして、「ルイズ嬢をお見舞いに来た」という名目で訪問した七季一行は、目標のルイズを見失ったことになるかと思いきや。

＜ナナキ！　デルフリンガーから連絡が来たわ！

いま彼は、ワルドとルイズに拉致された女の子と一緒にいるそうよ！＞

プレシアからの念話が、黒髪の少女の意識をさっと引っ張り上げた。

新しく飛び込んできた情報に、急ぎ、彼女たちは――ディルムッドとの別れを惜しんで――引き止めるエレオノールを振り切り、ラ・ロシェールへと、真言の「ジッパー」で急行したのだった。

「ほぇ！？」

ぼろぼろの室内。

その虚空に、やおら開いた二メートル大のジッパーから、飛び出してきた人影に、なのはは反射的にデルフリンガーを握り締めて身構えた。

が。

「なのはっ！」

「ケガはないかっ？」

「もう大丈夫だ」

兄、父、そして赤毛の男の子。

身近な人たちに駆け寄られて、幼い彼女の涙腺は、あっけなく崩

壊した。
「うわあああぁぁんっ！」
たまたまサイズ的にしがみつきやすかった、ちびっこ士郎に抱きつき、赤子さながら声を上げて泣き出す、栗毛の幼女。
「こわ、こわかったよう……あいたかったよぉ……」
えぐえぐすすり泣きながら、彼女を抱きとめた、ちびっこ士郎ごと、父親に抱きしめられるなのはに、七季たちも胸を詰まらせる。
デルフもついでにもらい泣きだ。
「ううん、ええ話や……良かったなあ、相棒」
「見つかって良かった……」
「デルフもお疲れさま」
「報告書、どうやってまとめっかなあ……」
ぐしゃぐしゃ黒髪をかき回しつつも、満足そうに目を細めるのは、中身は大人の才人少年である。
「なのはーっ！」
そこに、ててててっ、と友人へ駆け寄る金髪ツインテール幼女――フェイトの姿があった。
「ふぇ、フェイトちゃん!?」
「心配したんだよ！　もう大丈夫だからね？　私がなのはを守るから！」
フェイトの手には、なのはのロッドと同じピンク色をした、こちらも魔女っ子ステッキさながらのロッド。
ただしヘッド部分は、白い双翼のついた、ピンクのサークルの中に、金色の星が浮いているというデザイン。
既にバリアジャケット装備済みのあたり、彼女は本気だ。
ちなみに、フェイトが握っているのは、もちろん彼女じしんのデバイスである。
一部のオタな方々にはお分かりだろうが――このデザイン、カードをとっ捕まえる魔法少女の魔杖バージョン2「星の杖」であることをつけ加えておこう。

元ネタは当然リドルなら、このデバイスに「バルディッシュ」と名づけたのも彼である。

闇の帝王、そろそろ自重しろ。

「さーて。それじゃあ、そろそろ誘拐犯を捕まえましょーか」

のんびりとした響きのはずの、七季のソプラノに、ぎんっ、と戦士たちの目が鋭くかがやいていた。

#２４７　始まらない物語ー星の光ー（後書き）

あとがき

＞あっさり合流。短くてすみません。

いろいろ考えた（そしてボツった）のですが、ここはさっさと再会させてあげた方が良いかなと。

エレオノール姉さんの登場部分も、だいぶはしょりました。

夕方更新と予告したのに、遅くなって申し訳ない。

#２４８　始まらない物語ー闇の力ー（前書き）

まえがき

＞今回、ちょっとだけ津波を思わせるような表現があります。
読むと不愉快に思われる方がいらっしゃるかもしれません。

#２４８　始まらない物語ー闇の力ー

「どっせい」
だぱん。
「あ」
「え？」
「い？」
「おう？」
どこかのんきな、七季のかけ声と共に放たれた、闇色の波が、いきなりワルドとルイズの姿を飲み込んだ。

「ふう。さっぱり」
ようやく肩の荷を下ろした、という態で、こきこき首をひねる少女の眼下では、どんよりとした黒いタールのごとき液体が、キングスライムのようにゼリー状に固まっており、ワルドと戦っていた追手たちも呆然としている。
「いやあの」
「マスター……アレは、何だね？」
出鼻をくじかれた高町親子が、ワルドたちを飲み込んだはずの、正体不明の物体Ｘと、それを放ったであろう黒髪の少女を、交互に見比べ。
何かツッコもうとして、言葉を捜しあぐねた、ちびっこ士郎が途中で黙り込み。
アーチャーが全員を代表してツッコミを兼ねた疑問を投げた。
「ん。マガツヒさま。

八十禍津日神（やそまがつひのかみ）とも言うね。
レコンキスタをＳＬＢ（スターライトブレイカー）でふっ飛ばすときに降ろしてから、ずーっと『中』にいらっしゃったんだけど。
こっち来る前から、なのはちゃんのご家族たちの怒りとか不安とか、その他もろもろ悪感情にテンション上がっちゃって、はしゃいで（？）いらしたもんだから、なだめるのに一苦労でさー」
さらっとしれっと、とんでもないことをのたまう、黒髪のトリップ巫女娘。
「私が『祟る』ほど怒った相手なら、ってんで、ご自分もついでに『祟って』くる、おつもりらしいよ」
たぶん現在進行形で「穢れ」を染み込ませてる最中なんじゃないかな。
こてん、と首をかしげる七季は、あどけない顔で何でもないように呟いたけれど。
「えーと……ナナちゃん。この十年、マガツヒさん、入れっぱなし？」
「はい」
おそるおそる尋ねたあたり、真言もさっぱり知らなかったらしい。
けろりとした答えに、ちょっと琥珀の目が呆然としている。
「お仕事も、問題ないっておっしゃってましたし。寝心地良いから、ってくつろいでらっしゃいましたよ。
神様を慰め鎮めるのも、巫女のお役目ですから、お休みいただいてましたけど。何かまずかったですか？」
きょとん。
不思議そうな黒い瞳で、栗毛の少女に問いかける七季に、チートな巫女さんも頭を抱えた。
「さ……災厄の神様、十年も受け入れてるって……だいじょぶなの？　いや、大丈夫なんだろーな、ナナちゃんだし……」
「……えげつねえな、オイ」
うげ、とうめいているのは、妖怪であるが故に、目の前の光景が

バッチリと理解できてしまう、とらだ。
「なので、いまはちょっと触らないほうが良いですよ。厄しょっちゃいますから。もうちょっとで終わるみたいですし」
彼女の言葉がきっかけとなったのか。
すうっ……。
黒いゼラチンじみた物質は、じょじょに大気へと溶け消えていく。
「このままお帰りになるんですか――いえ、どういたしまして。こちらこそ、お世話になりました。ありがとうございます。これからも、よろしくお願いします」
ぺこりぺこり、ぱんぱん、ぺこり。
二礼、二拍手、一礼。
拝礼の作法そのままに、黒い物質へと頭を下げた七季に、「八十禍津日神（やそまがつひのかみ）」という存在は答えたのか、最後にぶるんと震えて、そのくろぐろとした存在を、この世界から還した。
あとに残ったのは、傷ひとつない――けれども、圧倒的に気分の悪そうな、長髪の騎士と、ピンクブロンドの少女。
「な……何だったの、あれ……」
「ぐ……頭が……いや、まだ戦えるっ」
闇色の波に飲み込まれたときと、同じ姿で立っている、ワルドとルイズ。その顔色は、ずいぶんと悪い。
「ちょっと！　あんた私の使い魔でしょう！　早く来なさい！」
上半身のボディラインが、ほぼ、なのはと変わらない「虚無」候補の少女に呼びつけられた、栗毛の幼女は、びくりと士郎たちの腕の中で震え――赤毛の男の子の声で、我に返った。
「大丈夫だ、なのは」
光の具合によっては、黄金（きん）にも見える、琥珀の瞳。
力強いそれが、少女の怯えを拭い去る。
「俺たちがついてる。行かなくて良い」
きゅっと握りこまれた手のひらから伝わる頼もしさに、なのはは、ふたたび目が潤んでくるのを止められない。

「そうだよ、なのは」
そして、もう片方の手は、金髪の友達が。
「ぜったい、大丈夫」
きゅう。
ルビーの瞳で、励ますフェイトに、こくんと栗色の頭が頷く。
「ああ、もう触っても大丈夫ですよ。攻撃したからって、向こうの厄が伝染(うつ)るわけじゃありませんから」
にっこり笑って言い切るのは、いまのいままで、その災厄を司る神を受け入れていたという、器の娘。
「まあ、あれだけの『穢れ』をしょって戦うんじゃ、実力の十分の一も発揮できないでしょうけどね？」
明るい口調の宣告は、どこまでも罪人たちに非情な内容でしかなった。

そして高町親子と、ちびっこ士郎が、宿の部屋から飛び出すのと同時。
今度は結界を張るために、金髪の幼女と、黒髪の青年が、それぞれのデバイスを起動する。
「星の力を秘めし鍵よ。汝の真の姿を我の前に示せ。
――契約のもと、フェイトが命じる」
「闇の力を秘めし鍵よ。真の姿を我の前に示せ。
――契約のもと、ディルムッドが命じる」
『封印解除(レ・リーズ)』

#２４８　始まらない物語ー闇の力ー（後書き）

あとがき

＞引き続き、短いですが。

正直、最後のオチはやらかした（笑）。

「星」の呪文はフェイト。

そして、タイトルだけは決めていたので、ノリで「闇」の呪文をディルムッドにしたりましたイエア！（自重しない書き手）

うん、ネタ元は闇の帝王ですよ。たぶん先輩もノリノリ。ついでにオリ主もウケたので許可。オタばっか（こら）。

フェイトの「バルディッシュ」は、ロッドが待機状態で、ちゃんと鎌にもなります。

ディルムッドのデバイスは……正直、考えてな（ｒｙ

#２４９　始まらない物語ー闇と光ー

ディルムッドの首にかかる、チェーンが消える。
槍のように先の尖った、漆黒の石をはめこんだペンダントヘッドは、チェーンと同じ銀の台座に、剣十字が金で象嵌された細工。
そして現れたデバイスも――同じ、金色の剣十字を中央に配された、まっくろな本だった。

その真実の名を、知っているものが、どれほどいるだろう。
夜天の書。
ロストロギア指定された融合型デバイスは、歴代の持ち主の何人かがプログラムを改変したためか、自律思考を持たない防御プログラムが破損したことにより、幾度も暴走を起こしていた。
何故ならば、他者のリンカーコア蒐集によって、魔導書を完成させた後に管制プログラム・防御プログラム双方の認証を受けなければ、管理者権限を得られず、機能の全てを使用することはできない。
しかし、防御プログラムの破損によって、この認証が正常になされず、このデバイスが完成されたのちに引き起こした惨事から、長い間、「闇の書」と呼ばれて、恐れられてきた。
本来は、主と共に旅をして、各地の偉大な魔導師の技術を収集し、研究するために作られた収集蓄積型の巨大ストレージである。
それがどうして、この場にあるのか。
深緑と銀、そして黒に彩られたバリアジャケットを身にまとうディルムッド。
腰のホルダーへと漆黒の本は納められ、代わりに、彼の傍らに現

れたのは、白銀のロングヘアに闇色の翼をそなえた、黒衣の美女だった。

「リイン」

開いた、まがまがしいほどの紅い目は、主の呼び声にうっとりと細まる。

「イエス、マイロード」

とたんに放たれたのは、薄い闇色の羽根を持つ、無数の鍵。

まるでトンボが何かのように縦横無尽に飛び交うそれらは、フェイトが展開した結界を補強するものである。

内部にもう一層の強力な結界を張るための基点、といえば、わかりやすいだろうか。

そこへ、高く澄んだ歌声が流れてくる。

『かーごめ　かごめ
かーごの　なーかの　とーりーは
いーつ　いーつ　でーやーる
よーあーけーのーばーんに
つーるとかーめが　すーべったー
うしろのしょうめん　だーあれ？』

歌い手は黒髪の少女。

この修羅の場に、あまりにも場違いに、清らかに、それでいて妖しく、美しく響く魔歌（まがうた）。

霊力による籠の網目が、さらに彼らの結界を補強する。

いまや、この場は、決して逃れえぬ魔の籠と成り果てた。

もはやワルドとルイズに逃げ場はない。

そして御神の剣士と、剣製の魔術師に襲いかかられた男の剣が、あっけなく切り落とされたところで。

「スリープクラウド」

キンダイチの唱えた呪文によって、かくん、となのはの意識は眠

りに沈んだ。
「おじい……ちゃん」
ついでフェイトも、つられたように眠り込む。優しい白髪の老翁に抱きとめられて。
「おやすみ」
ふ、と叡智を宿す深いまなざしが、幼子たちの眠りを見守る。
「デルフリンガー」も――なのはを守ると宣言した彼も、キンダイチのふるまいを妨げはしなかった。何故なら、それは幼い彼女を――その心を、守るためには必要だと思ったからだ。
「子供には……きついことになるだろうからね」
「感謝する、キンダイチ殿」
「俺っちからも礼を言うぜ」
「いえいえ」
いかに優しいキンダイチといえども、長くトリステイン貴族をやっている以上、国家を裏切る罪の重さはじゅうぶん承知していた。
彼のやったことは、ただでさえ小国で不安定なトリステインの、国民を否応なく戦争に巻き込むことだった。しかもレコンキスタによる蹂躙という形で。
礼を述べるディルムッドの視線の先で、剣を斬り飛ばす延長のような動きで、ワルドの片腕もまた、虚空に飛んでいた。
「つまんねえなア、オイ」
とらの低い呟きに、爆音が重なった――。

――何なのよ。
いきなり覆いかぶさってきた暗黒は、彼女の理解を超えていた。
遮断される感覚。
重く、重く、重く。
重ねられていくナニカ。

――何なのよ！
熱のない重さが、少女の短躯に覆いかぶさってきて、息苦しい。
――おぞましい。
「っどきなさいよ！　離れなさいよ！」
音のない闇の中。
いくらルイズが叫んでも、その重さは消えない。振りほどけもしない。
その闇も解けない。
しかし反応はあった。
低く、悲しげで、いとわしく、鬱陶しく、卑しく、尊大で、嘲りを含んでいて――厳(おごそ)かな。
――否。
――ガラスの娘。
――贄にもなれぬ、娘。
声が、聞こえる。
――お前は無価値(ゼロ)。
――いとし子にとって無価値。
――ただのガラスのかけら。
――砕け、ひび割れ、尖るだけの。
――役立(ゼロ)たず。
声は続ける。
聞きたくもない、ルイズにとっての真実を。
――お前は道端のガラス。
――ただ跨いで通り過ぎるだけの。
――ただ、他のものが踏みつけることを。
――傷つくことだけを、いとし子は気にかける。
闇が「いとし子」と呼ぶ、その存在を、ルイズは直感的に悟った
――否、悟らずとも伝わってきた。
夜色の髪と瞳。
白い面輪に、暗黒の色彩を身にまとう異邦人。

底知れぬ、妖しげな、七季という名の少女。
闇が、彼女を思い浮かべるたびに、その姿がルイズに知らしめられた。
あどけない笑顔。無邪気な感謝。畏れと崇敬。伸ばされる白い腕。
まるで夜に降る月の光のごとく、まばゆい、それは。
すべて――すべて、この闇に向けられたもの。
こんな恐ろしいものを、重苦しく、おぞましいものを慈しめる、
その神経が、ルイズには信じられなかった。
誰彼かまわず厭われた、憎まれた、忌避された、汚らわしい、こんなモノを受け入れられる少女を。
ルイズは、しんそこバケモノだと思った。
――たた……う。
闇が嗤(わら)った。
ルイズが嗅いだこともないはずの、饐(す)えた死臭がする吐息だった。
――たたろう
――たたろう。
――たちあらわれて、ここにしるしを。
それは静かな繰り返しに過ぎないのに、ルイズの脳裏には、げらげらと不愉快なまでの哄笑のイメージが流し込まれた。
闇から向けられた、憤りに限りなく近い嘲弄。
何も知らない、理解できない、彼女の無知を苛立たしく思いながらも、それを当然と知って嘲笑う振動(ヴァイブ)。
水のようなナニカが張りつき、染みとおる。
痛みはなかった。ただ衣のごとく、皮膚のごとく、ルイズにまといつき同化する、闇の印(しるし)。
彼女の存在に貼りつく「祟り」の証は、決して目に見えることなく――ただルイズという存在へ侵食した。
そして闇が晴れる。

それは、彼女にとっての「救い」だった。
壊れた鳥篭。
取り込むマスターを殺す罠を仕込まれたデバイス。
自分では取り外しようもないそれを、助けてくれたのは、彼らだった。
転生機能を持つユニゾンデバイス「夜天の書」は、真の持ち主以外によるシステムへのアクセスを認めない。それでも無理に外部から操作をしようとすると、持ち主を呑み込んで転生してしまう。
だが、プログラムの一部が改変・破損されたことによって、マスター認証に不具合が起きた。
管制プログラム・防御プログラム双方の認証を受けなければ、管理者権限を得られず、機能の全てを使用することはできないというのに、それがなしえない。ゆえにプログラムの停止や改変ができないので、完成前の封印も不可能。
これでは、ただの欠陥デバイスである。
それなのに、凄まじい破壊を振りまく機能がそなわっている。
げんざい「リイン」と呼ばれる彼女が、こうして正常な機能を取り戻し、デバイスとして役立っているのは、先代のマスターであった七季という少女と、その家族たちのおかげだ。
転生した先のマスターとなるべき赤子から、「夜天の書」との契約を切り離し、用意された新たなマスター。
「夜天の書」の侵食を受けつけない、強靭なリンカーコアと、凄まじい魔力を併せ持つ、黒髪の少女。
そして天才と呼ばれるにふさわしい頭脳を持った魔導師・プレシアとアリシアの親子。
先代マスターとラインのつながる人外の男――アーチャーの解析能力をはじめ、いまは「リイン」と呼ばれる「闇の書」の管制人格を抜き出し、またプレシアの意識――魂を内部に取り込める、七季じしんの異能。

一年という短い時間で、完全に「夜天の書」を修復、改良までやってのけた一行の、チートっぷりは、はっきり言って、人外のリインですらも呆れ返るほどだ。

プレシアからすれば「一年もかかったことの方が心外だわ」ということだけれど。

彼女に言わせれば、しょせんプログラム。

人の造ったものは、人に倒されるもの、ということらしい。

いまとなっては、素晴らしい言葉だとリインは思う。

一言で言うのは簡単だが、プレシアが身を削るほどに心魂打ち込んでくれたことを、誰より、リインじしんが知っているから。

そして救われたのち、リインが紹介された新しいマスター。

それは、先代マスターである七季に仕える、これまた人外の青年・ディルムッドだった。

「良かったら、ディルを助けてやってくれないかな。彼にはまだ、相棒になるデバイスがいないんだ」

そう告げられたとき、ちょっとリインは呆然としてしまった。

けれど、考えてみれば、もっともな話だったのだ。七季には既に、「黎明」「ノア」「ガニュメデス」と彼女の特性に合わせて鍛造された、ワンオフ品のデバイスが三機もついていた。

やっぱり自分はいらないのか、と思って涙ぐむリインに、白い小さな手は、優しく彼女を抱きしめてささやいた。

夜色の少女は、夜天を思わせる藍色に、月光のような金をちりばめる魔力光でリインを包む。そのあどけない面輪じたいが、満月のようにしろくやわらかで。

「いままで通り、家族であることには変わりないんだぞ？

ディルだって、私の家族だ。もちろん、リインも」

その言葉に、リインはとうとう泣き出して、しばらくずっと少女の胸にすがっていたことを思い出す。

――離れがたかった。

まともに仕えられたことすら思い出せないほど永(なが)い時の果て、よ

うやく自分が殺さずにいられたマスター。彼女の――心の、救い手。
そして次に仕えることになったマスター、ディルムッドも、七季に救われたのだ、と話を聞いたとき、リインはとても嬉しく思ったのだ。
――ああ、何て似たもの同士。
同じ人を、大事に想ってくれるマスター。彼の守りたいものは、リインも守りたいものだった。
破邪の力を秘めた槍の担い手。
近接・中距離戦を得意とする彼に、遠距離のフォローがついたなら？
――これも巡り合わせというものか。
魔法的な素養が低いディルムッドに代わって、ユニゾンデバイスであるリインが、魔法を行使する。魔力ならば、ラインを通して、青年のマスターである七季から、潤沢に送られてくる。
こんな人外の使い魔を、三人も従えている少女の、何と凄まじいことか。
何と誇らしいことか！
彼女もまた、ベルカの騎士。
ディルムッドの騎士道を好ましく思う。その不器用さ、健気さも、七季に向ける想いさえも。
よってリインは、彼と同じく――異邦の少女を害する敵に、容赦する気など、さらさらなかった。

#２４９　始まらない物語－闇と光－（後書き）

あとがき

＞寝不足のアタマで沸いたネタがコレでした。正直すまんです（全力でダイビング土下座）。

うん……闇の力を秘めた鍵……どんなデバイス？……とグルグルした結果が、この有様です。

さすがにエリオルの杖はナイワーと思ったんで。

「闇→闇の書」キタコレ！みたいな。

かっとしてやった。いまは公開している（猛省せよ）。

そして久しぶりにオリ主の愛され傾向な話を書いた気がする。

いや、マガツヒさんとリインの描写を入れたら、うっかりこうなっただけなんですが。

今回はオリ主、歌っただけの出番なのに、えらい本人の影がちらついてますね。くどかったら申し訳ない。

ヴォルケンリッター？　別途プログラムとして、プレシアに保管されてます。

正直これ以上メンバー増えるの、勘弁な！（号泣）

「夜天の書」のマスターでもない、はやてに不老不死のヴォルケンズつけても、その後がアレなので、八神さんちへ里子に出したりはしません。

ディルムッドのデバイス考えるのが面倒くさくなったとか、そんなんじゃないんだからね！（ダダ洩れとる）

そんなわけで、「A's」完（始まらない／またか）。

#２５０　始まらない物語ー異邦の掟ー

「このバケモノっ……ファイアー・ボール！」

きゅごんっ！

ルイズから放たれた爆発魔法は、七季の手前に浮かぶ――少女の身の丈を覆うほどのピンクの花びら――「熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）」によって防がれていた。

しううぅ……。

アーチャーがサイズ調整した宝具を投影するのと同時、少女のデバイスである「黎明」も指輪姿のままで八枚の多重シールドを展開していたのは、蛇足だろうか。

とにもかくにも、ルイズの爆発魔法は、アイアスの羽一枚を突破することもなく、まったくといっていいほど、黒髪の少女には害をなせず、届きもしなかったが――それは、次なる起爆剤としては十分だった。

プレシアが生み出す雷撃のつぶてよりも速く、深緑のバリアジャケットをまとう人外の青年が飛び出し、サーヴァント中でも最速とされるスピードでもって、宿の部屋から放たれた弾丸さながら、空を裂いて襲いかかる。

その間にも、銀髪のユニゾンデバイス――リインによる詠唱は紡がれていた。

そして彼女とディムッドの声が重なる。

『遠き地にて、闇に沈め』

深紅と金の双眸が睨み据えるのは、七季の敵である――ルイズ。

未遂に終わったとはいえ、攻撃力の高い爆発魔法を向けた以上、ピンクブロンドの少女は敵でしかない。

『デアボリック・エミッション』

本来ならば、バリア発生阻害能力のある、球形の純粋魔力攻撃で、スフィアを中心として、広範囲に渡り魔力攻撃を充満させるという、空間作用型の広域殲滅魔法なのだが。

プレシアの魔改造――もとい、改良を受け入れたリインは、さらに高度な演算や応用が可能。

そして彼女は、ディルムッドの要望通り、ルイズだけを取り込むサイズで、――「デアボリック・エミッション」――日本語に訳すなら「魔性の放出」とでもいうべき、その魔法を発動した。

黒に近い、深緑の魔力球の中に、ピンクブロンドの少女が飲み込まれる。

「デアボリック・エミッション」は、自身を中心として発動させる魔法だが、ランサーのサーヴァントのスピードで懐に入り込まれて、逃げられる人間は、そうそういない。

ましてや、首をディルムッドの片手でつかまれ、捕えられたルイズに、抗う術などなく。

非殺傷設定の広域殲滅魔法を、集中砲火で浴びるという、世にも稀(まれ)な体験をした「虚無」候補の少女は、あっけなく意識を失い、くずおれた。

「たわけが」

その光景を、荒れはてた宿の部屋から見下ろしながら、アーチャーは苦い顔で呟いていた。

「キジも鳴かずば、撃たれまい」

なのはを召喚したのは、間違いなくルイズだが、ちびっこ士郎をはじめ、高町家の面々はワルドに戦力を集中していた。

呆然としていて、武器も持っていないように見えた、華奢な少女を敵とは見なしにくかったのだろう。そもそも彼らは、七季たち一行とは違って、ルイズの顔も知らなかったわけだし。

けっきょくルイズは、自分で墓穴を掘り、引き金を引いてしまったわけだ。

マスター大事、七季大事のディルムッドとリインが即効でぶちキレてしまったのは、当然といえば当然だが、ルイズには不幸だったともいえる。

アーチャーが苦い顔をしているのは、そのルイズを案じているからではなく――背後の面々のプレッシャーの凄まじさを感じているからだ。

チラリと鋼色の双眸が一瞥した先には、

「……非殺傷設定って、素敵よね？」

ばちばち紫電のつぶてやスフィアを生み出している、ダークヘアの美人ママさん魔導師と。

「デルフぅ……久しぶりに、ＳＬＢ（スターライトブレイカー）いってみよーかあ」

ルビー色の目からハイライトが消えている、いまは妹そっくりの金髪ツインテールな幼女アリシアと。

「マコト……治療すれば、斬っても大丈夫ですよ、ね？」

ふわふわカフェオレ色のしっぽを、さらにぼわぼわにしながら、優しげな癒し系笑顔でもって、隣のチート巫女さんをそそのかす山猫娘と。

「そういえばリニス、治癒魔法が得意だもんね……ヤッちゃうか☆」

ちきりと真剣の鯉口を切っていらっしゃる、栗毛の巨乳美少女が、まっくろな笑顔で居並んでらっしゃった。

いうまでもないが、アーチャーとて、大事なマスターを「バケモノ」呼ばわりされてムカムカしている。

しかし、とっくにブチキレモード発動中の面々を見ていると、逆に冷めてしまうのが、常識人である彼の悲しいところだ。

――このぶんでは、ミンチがマシ、というレベルになりかねんな。

ちなみにこのメンツの中では、比較的、一般人寄りのキンダイチと才人が、七季を取り巻く人々のキレっぷりに恐れおののいて壁に貼りついていた。

ひとり姿の見えないと思っていたりドルは、いつのまにやら転移魔法で、気絶しているルイズの元に抜け駆けし、恭也にしてのけたのと同じ、爪とぎの刑を少女の顔面にざりざり敢行中だ。

「♪」

楽しそうですね、闇の帝王さま（プレ）。

「バケモノねぇ」

と、罵倒され、攻撃された少女本人――七季のソプラノが、殺気の満ちた中に、場違いにものんきに響いて、彼らの緊張をぽんと緩めた。

「別に、かまいませんよ。私は、大事な人といっしょにいられるのなら」

きゅっと七季の小さな手が、あまりサイズの変わらない、真言の手を握り締めて、ふんわりと微笑みかけた。

春のようなそれは、ほころんだばかりの花のように、いくばくか誇らしげで、匂やかで、明るさとみずみずしさをふりまいている。

「バケモノにだって、悪魔にだって、仏にだってなってやります」

にぱ。

今度は、まるでいたずらっ子のように、笑い方を替えた少女は、こきり、と首をかしげて指をさした。

「さぁて――いきましょうか」

ルイズの爆発とは別に、結界の外側からであろう爆音が、何度も何度も繰り返されていた。

いっぽう「何なのあのメイジ殺し！？」と、ワルドを無造作にザクザク刻んでいる、御神の剣士と赤毛のちびっこを、信じられない思いで眺めていた、トリステインの追手ご一行は、外から聞こえる正体不明の異音にも怯えていた。

ひそかに回収――もとい、救出するようにと言いつけられた、ヴ

ァリエール家の三女は、これまたわけのわからない魔法で、あっというまに倒され気絶してしまうし、はっきり言って、展開についていけていない。

しかし、下手に介入すれば、とばっちりが自分たちにやってくることは自明の理。

ワルドと戦っている剣士たちも凄まじい使い手なのは理解できたが、ルイズを打ち倒した、銀髪の美女を従えた黒髪の槍騎士は、それにもまして静かな怒りを孕んで、その美貌を凍りつかせていた。

そこに、ふわりと舞い降りる、夜色の花びら。

否、おなじみ羽織りデザインのバリアジャケットをまとった、七季がようやっと戦場に降り立ったのだ。その背後に、アーチャーやプレシア主従たちが続き、キンダイチに抱えられた才人も、宿から降りてくる。

そんな小柄な少女へ気づくと同時、「マスター！」と声を上げて、駆け寄ってくるディルムッドとリイン。どこかの忠犬もかくやというほど、きらきら目がかがやいていたりする。

「こんにちはー。トリステインの、追手の方で合ってますかー？」

ほわほわしたソプラノに、意表を衝かれた一人の男が、うっかりと素直に「あ、ああ」と頷きを返す。

「えーと。ワルド子爵の捕縛と、ルイズ嬢の回収が目的。これも、合ってますかー？」

のんきな響きの声に、これまた流されて頷きかけた男と、その仲間が、はっと目をみはって身構えるも。

「あのですねー。邪魔する気はないんですよ。ちょっとお話と、取引がしたいんです」

結界の外にいる、ヴァリエール公爵夫人に、バレないように。

続いて呟かれた言葉に、トリステインに仕える隠密たちは「え」と額に汗を浮かべた。

「不満ですか？」
　ようやく妹を取り戻せたというのに、険しい顔をしている恭也に向かって、あどけないけれど無愛想な面持ちで問いかけるのは、黒髪の少女。
「ああ。何で、どうしてあいつらに引き渡した！？」
　なのはを攫った――召喚したのは、ルイズ。彼女をそそのかしたのは、ワルド。
　どちらも、トリステインからの追手と、そして彼らを追跡して、ルイズを迎えに来た、ヴァリエール公爵夫人、カリーヌに引き渡された。
　なかんずく、ルイズはリドルのつけた傷を、跡形もなく薬で治療しての引渡しである。
　なのはを無理やりさらい、そのうえ「使い魔のルーンを刻む」という理由で、凄まじい苦痛を与えた相手に施すべきような所業ではない。
「そうですね。あれが、いちばん穏便、かつ手早く、なのはちゃんを取り戻せる方法だったからです」
　七季が、トリステインの隠密たちに持ちかけた取引。
　それは――なのはがルイズの使い魔である、という事実を「なかったことにする」という内容だったのだ。
　フェイトとディルムッド――じっさいに張ったのはリインになるが――の結界に重ねて、七季がさらに強化した結界は、いかな烈風カリンでも突破できず、その内部で行われたことは、わからない。
　だから、ルイズが気絶しているうちに、彼女に細工するのは簡単なこと。
　真言が不思議空間にしまいこみ、匿っていたティファニアを引っ張り出し、彼女が使う「忘却魔法」でルイズの記憶を一部改ざん。
　なのはの存在を、ルイズの記憶から抹消する。
　これで、ルイズの罪が、使い魔である、なのはまで連座適用され

ることはなくなる。
　ルイズのとばっちりを、なのはが受けることになったら、たまったものではない。
　だから七季は、トリステインの隠密たちに、そのことを口止めしたうえで、取引したのだ。半死半生のワルドなど、くれてやっても痛くもかゆくもない。
　もっとも、なのはに刻まれた「ガンダールヴ」のルーンは、ルイズが八十禍津日神（やそまがつひのかみ）に飲み込まれた時点で消えていた。
　どうやらあの神様、ルイズに祟るついでに、その呪力をかき消し、なのはとのラインを断ち切ってくれたようなのだ。
　さすがは「穢れ」を司る神様である。
　それでも念のため、アーチャーが投影した宝具「破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）」で、なのはにまつわる魔術的な初期化を行った。
「なのはちゃんとルイズ嬢を、二度と関わらせないためには、必要なことです。
　それに――無傷で引き渡したからといって、彼女の今後が、明るくなる余地は、おそらく一切ないでしょうからね」
　淡々と、しかし裏に毒を孕んだ七季の物言いに、反応したのは、恭也ではなく、彼となのはの父親――高町士郎だった。
「彼女は、貴族……そういうことか」
「そういうことです」
　短いやりとりの間に挟まれた理解も、まだ謀略に慣れていない青年には、読み取れない事柄でしかない。
「どういうことだ？」
「あとで説明しよう。いまは……なのはを、安全なところで休ませてやりたい」
「あ……」
　そうだな、と頷く恭也は、その意見には否やもない。
　彼らはそろって、プレシアの紡ぐ、紫暗の転移魔法の魔法陣の中に滑り込んだ。

もうここに、用はなかった。
それはちょうど、レコンキスタが、ガリア軍に蹂躙されている最中のことだった。

#２５０　始まらない物語ー異邦の掟ー（後書き）

あとがき

＞あっけない幕切れかもしれませんが、これくらいに留めました。

ルイズを溺愛のカリーヌなので、こっそり迎えに来るぐらいはすると思うんですよね。

ワルドは死んでませんが、これからガリアに引き渡されて、えんえん情報を絞られることを前提とした、専門家による、活かさず殺さずの拷問が待ってます。

何の情報かって？ガリアにいるかもしれないレコンキスタと、トリステインの内部情報ですよ。

なのはとルイズの契約カット。

ルイズの末路は……まだもうちょっと続きます。

◆登場人物&デバイス設定ー追加ー

◆リインフォース　：　基本方針「忠誠を貴方に」
（出典：リリカルなのはA's）
「魔法少女リリカルなのはA's」で、物語の中核をなすロストロギア（指定遺失物）として登場する融合型デバイス（ユニゾン）「夜天の書」。
本来は、主と共に旅をして、各地の偉大な魔導師の技術を収集し、研究するために作られた収集蓄積型の巨大ストレージだったが、歴代の持ち主の何人かがプログラムを改変したために、破壊の力を使う「闇の書」へと変化した。
八神はやての元から、チートな先輩の横槍によって、契約を解除。その後、オリ主との暫定的な契約や、プレシアたちによるプログラムの修復、デバイスの改造など紆余曲折を経て、正常な姿を取り戻し、ディルムッドのデバイスとなった。

主殺しのデバイス「闇の書」として長い間、自分ではどうにもできない境遇に苦悩し続けていた。
そのため、バグを取り除いたプレシアたちに深い感謝を懐いている。
中でも、殺さずにいられたマスターとして、かつ家族としてあつかうことを望んだオリ主を敬愛すること山のごとし。
また、そんなオリ主に忠実な、現マスター・ディルムッドとは気が合いすぎて、ときどき暴走ぎみ。

改造後のデバイスとしての待機状態は、槍のように先の尖った、漆黒の石をはめこんだペンダントヘッド。チェーンと同じ銀の台座に、金で象嵌された剣十字の細工が施されている。

セットアップ時は、金色の剣十字を中央に配された、まっくろな本。腰のホルダーに納める形。

騎士として実体化した場合は、ルビーアイに銀髪の美女。

▼起動パスは、リドルが悪ノリしてつけたもの。

「闇の力を秘めし鍵よ。真の姿を我の前に示せ。
――契約のもと、ディルムッドが命じる」
「封印解除（レ・リーズ）」

◆バルディッシュ

＞インテリジェントデバイス。無口なので、あまりセリフがない。

リドルの悪ノリにプレシアの本気とリニスの愛情が混入されて生み出された魔改造デバイス。

モデルは当然、どっかのカードをとっ捕まえる魔法少女の魔杖バージョン2「星の杖」。

ただし、ファンシーな見ためは、戦闘形態によって変化する。斧、鎌、槍の3形態にフォームが変わる。近接武器の形態なのは、育ての親の一人であるアーチャーに影響を受けたとか、受けていないとか。

ちゃっかりベルカ式のカートリッジを採用しているため、かなり凶悪な破壊力を秘めている。

【基本フォーム】

＞杖形態。見た目は、なのはのロッドと同じピンク色をした、こちらも魔女っ子ステッキさながらのロッド。

ヘッド部分は、白い双翼のついた、ピンクのサークルの中に、金

色の星が浮いているというデザイン。

【アサルトフォーム】
＞斧形態。より白兵戦（アサルト）に特化した形態。強度と堅牢性に重点を置き、より純粋な近接武器となる。
フェイトの特性に合わせ、打撃・斬撃の打ち合いで破損することのないようにセッティングされている。また、リボルバーユニットを覆うコッキングカバーが、撃鉄の役目とともにユニット保護も兼ねている。

【ハーケンフォーム】
＞鎌形態。近接戦闘に特化した形態。
魔力刃のサイズアップと、魔力密度・切断力の強化とともに、後方に姿勢制御を行うフィンブレードを3枚増設。フェイトの体感重量を、より軽くすることで鋭い取り回しを可能にしている。
ハーケンとはドイツ語で「鉤」の意味。

いまのところザンバーフォームはつけていない。

▼起動パスは、やっぱりリドルが悪ノリしてつけたもの。

「星の力を秘めし鍵よ。汝の真の姿を我の前に示せ。
――契約のもと、フェイトが命じる」
「封印解除（レ・リーズ）」

◆アリシア
第一デバイス：マーチ
＞ストレージデバイス。

プレシアとリニスお手製のデバイス。主な素材はオリハルコン。もっぱら倉庫用。あと魔法開発のサポートとしても重宝されている。

チェーンはリドル、待機モードのデザインは七季の手によるもので、アリシアの宝物。アーチャーの手が入っていないのは、製作時期にアリシアの杖（ハリポタ式）を作っていたから。

待機状態および基本フォームは、ピンクコーラルのついたペンダント。

第二デバイス：デルフリンガー

＞ストレージデバイス。

素材はダマスカス鋼や金、ロッド部分のコーティングに薔薇水晶なども使われている。

前述の通り、蓄積した魔力によって、デルフリンガーが使い手の体を操ることができる。そのため戦闘に不慣れなアリシアのサポートにうってつけ。

待機状態は、ロッドをそのままミニチュア化したような、可愛らしい鍵のペンダント。

【基本フォーム】

＞鳥の頭を模したヘッドに白い双翼をつけたピンクのロッド。くちばし部分の杖先は赤く透明。

モデルは、どっかのカードをとっ捕まえる魔法少女の魔杖バージョン1「闇の杖」。

#２５１　始まらない物語ー運命はかく語りきー

「ごめん、アーチャー。あと任せた」
一行のハルケギニアにおけるセカンドハウス――通称「サロン」に着くなり、こつん、と従者の胸に額を預けた七季は、そのまま目を閉じて意識を失った。

「ふぁ……おはよーございますー」
意識を飛ばしてから、まる一日。
ようやっと目を覚ました黒髪の少女は、ちょっと着崩れた浴衣姿で、一同の前に姿を見せた。
「おはよ」
「ナナちゃん、おっはよー」
『おはようございます、マスター』
『おねーちゃんっ！』
「うおわっ！？」
とたんに幼女ふたりからタックルを受けて、ひっくり返りそうになる七季。
その背中を、そつなく褐色の肌の男が支えて、やれやれとためいきをこぼした。
「アリシア。フェイト。危ないから、そういうことは控えたまえ」
『ごめんなさーい……』
しゅん、とツインテールに結った金髪を、ウサミミのようにしょげかえらせて、アーチャーに注意を食らったテスタロッサ姉妹は、仲良く姉貴分の両隣に陣取って、その手を引っ張る。

「でもでも、心配したんだよっ」
「いきなり倒れるから……」
元気良く訴えるのがアリシアで、まだ心配そうにルビー色の目を潤ませるのがフェイトだ。
その二人に挟まれた七季へ、もう一人の女の子が、てて、と近寄り、勢い良く栗色の頭を下げた。
「あの、ありがとうございました！」
「あー……そっか、なのはちゃんだっけ。私よか、シロくんにお礼を言いなね。
彼がいなかったら、たぶん私たちは、なのはちゃんのことを知らずにいたし、助けられなかったと思うよ」
両手をツインテール姉妹に引っ張られたまま、困ったように彼女を見下ろす黒髪の少女へ、なのはは、ふるふるとかぶりを振った。
「士郎君は、アーチャーさんたちのおかげだって。アーチャーさんたちは、七季さんのおかげだって」
「えー……こらそこ、何バケツリレーみたく手渡しまくってるかな。まあ、お礼の気持ちをパスしまくっても失礼だし、私が代表ってことで、受け取っておくけど。
なのはちゃん、ケガとかない？　怖い思いはした？」
やんわりと妹分たちの手をほどいて、なのはへとかがみこんで問いかける七季へ、栗毛の子供は、目の前の黒い瞳をのぞき込んだ。
年齢は、なのはの兄姉よりも下に見えそうなのに、兄の恭也とも、姉の美由希とも似ていない――なのはには、とても読み取りきれない、深い深い瞳。
まっくろで静かで、けれど濡れた宝石のように綺麗な目だ。
「い、いまはないです。恐かった、けど……デルちゃんが、いてくれたから」
「ぷは」
やおら、その言葉に七季が噴き出した。
あどけない童顔が、真面目な顔から一転、さらに無邪気さを増し

て破顔する。
「いやごめん。で、デルちゃんね……デルフったら……そうか、良かった。うん」
わしゃわしゃと、親しみのこもった手つきで七季に撫でられて、なのはは気持ち良さそうに目を細めた。
――優しい手だな。
やわらかく、それでいて美由希や恭也よりも遠慮のない、近さが問答無用である、どこか力強いしぐさ。
――良いなあ、フェイトちゃん。
たぶん、まいにち彼女は、こうして撫でられているんだろう。七季の遠慮のなさは、慣れから来るもののそれだ。
ちょっと強めの力加減も、それでいて優しいまなざしも手つきも、愛情のこもったものだと、すぐになのはもわかるくらい。
高町家は、仲の良い家族だけれど、自営業で忙しい両親と、学校のある兄と姉に甘えにくく「良い子」であることを自ら選択したなのはにとって、ちょっと友人を羨ましく思ってしまう瞬間だった。

一所懸命、どこかの小動物並みに、はむはむ、もぐもぐ朝食を頬張りまくった少女が、ようやく一息ついたころ。
高町家と、テスタロッサ家――もとい、七季一行の話し合いが始まった。
そこには事件を穏便にまとめて報告するための才人が、テーブルの中央席に座っている。
「……それでは、失踪届けは、高町家から取り下げてもらい、表向きは、なのはちゃん……子供の家出だった、ということでよろしいですか？」
いちばん角の立たない案に落ち着いたのを幸い、いまだ少年姿の才人が、高町家の家長である士郎に、確認を取る。

「ああ。ついでだから、一週間ほど『翠屋』も休むことにするよ。なのはには恐い思いをさせたし……いちばん割りを食わせた形だからね。しばらく家族でついていてやりたい。ちょっと旅行にでも行って気分転換させようと思う」
「お父さん……」
なのはの向けるまなざしに、父親はそっと娘の頭を撫でて「すまなかったな、なのは」と呟いた。
「それが良いと思いますわ」
テスタロッサ家では家長にも当たるプレシアも頷いてみせる。
「私たちは、その間に引越しね。ちょっと忙しくなるかしら」
「え？」
ぱちくりと目を瞬いたのは、栗毛の女の子と赤毛の男の子だ。
「ど、どうしてですかっ」
とりわけ、なのははフェイトの友人だから、いきなりの話題に驚いて、身を乗り出す。その上半身を、あわててちびっこ士郎が、支え、押し止めた。
「なのはっ」
もともと魔術師である士郎は、何となく、その理由がわかったからだ。
「秘匿のため……ですか？」
「まあ、それに近いものがあるわね」
「ひとく、って？」
「内緒にする、って意味だよ、なのは」
「待ってください。我々は、恩人の秘密をしゃべるような気は」
「そうだ、俺たちは」
御神の剣士ふたりは、そんな不誠実なことはしない、と言い募るが、そういう問題だけでもないのだ。じつのところ。
耳慣れない言葉に、首をかしげる青い目の女の子に、困ったような面持ちで答える士郎は、自分と似て非なる存在である男――アーチャーへと視線を向ける。

そのアーチャーはというと、ちょうど紅茶をカップに注ぎ終わったところで、片眉を上げて補足した。
「どちらにしろ、我々は、違う世界のものだからな。あの町に長居はできん」
そしてプレシアたちは、またまた首を捻る高町家の面々と、ちびっこ士郎に、ちょっとややこしい人間関係（および立ち位置）を説明することになる。

「――というわけだ。
もともとマスター……七季が『修行』のために、この世界……次元世界に放り込まれたのだからな。『修行』が終われば、元の世界に戻ることになる。
真言、彼女の『修行』期間は、あとどれくらいだね？」
白い髪をいただく偉丈夫から問われた、緋袴姿の少女は、少しだけむくれた面持ちで、それでもきちんと答えを返した。
「ぶっちゃけ、もう海鳴にいる理由はないんだよね。フェイトも、物心はつくようになったし。
あとは、ナナちゃんたちが魔法を習いつつ、こっちの世界の騒動を一通り、まとめるまで終わったら、あっちに帰ろうかと思うんだけど……プレシアも、こっち来るって言うし」
「え？」
「じゃあ、引越し先って」
きょとんとするフェイトの向こう隣、アリシアが、きらきらルビーアイをかがやかせて問いを重ねると。
「もしかして、私たちの世界に来るんですか？」
七季がその推測を口にした。
「そーよー。やっと真言に許可をもらったの」
うふふふふ♪

と、ご機嫌な笑顔でリニスと「ねー」と言い合うママさん魔導士は、とても二人の子持ちには見えない。特に、アリシアなんて、本当は二十歳過ぎなのに。

「アーチャーやお姉ちゃんと、ずっと一緒なのは嬉しいけど……」

いきなり目の前に迫る、友人との別れに、フェイトが困惑の面持ちで、なのはを見つめる。

「フェイトちゃん……」

いっぽう、高町家の面々も、真言のジッパーや、異世界への移動を目の当たりにしているから、いまさら否定するも何もない。

問答無用の現実に納得するしかないのだ。

いっぽう、そのころ。

ワルドのもとから「救出」されたルイズは、一夜明けて、母親であるカリーヌそのひとによって、処女であるかどうかを調べられるはめになっていた。

#２５１　始まらない物語ー運命はかく語りきー（後書き）

あとがき

＞全体的にパッとしない話で申し訳ない。

オリ主は過労です。英霊二人にリドルとデバイス、偏在つかいっぱで、さらにマガツヒさま抱え込んでたら、さすがに疲れないはずはない。

テスタロッサ家の移住フラグ立ててみる（待て）。

ネギま編にも出すよ！

あと、なるべくルイズについての描写を減らした結果、こうなりました。

いやー。未婚の娘が、男と駆け落ち（逃避行）したら、その貞操を疑われるのは当たり前ですよ。

なるべく、えぐくない記述でまとめたつもりです。

#２５２　ツバメと烏とキセキレイ（前書き）

まえがき

＞今回は番外編です。我慢できませんでした（猛省せよ）。

#252　ツバメと烏とキセキレイ

「こんばんはー」
「やあ。久しぶり」
「ふむ、時間通りだな」
眼鏡をかけた法衣姿の男が、片手を上げ、その隣に立っていた黒いカソックの男が腕時計を一瞥する。
どちらも三十路か、それに近いくらいの年ごろで、いましがた合流した十代の少女とは、ゆうに一回りほど年の差があると思われるのだが。
ひょいと長身の男ふたりに加わった七季は、ごくしぜんにそこへ溶け込んでいた。
かたや、どこか胡散臭さを感じさせる、シニカルな笑顔を貼りつけた有髪（うはつ）の僧侶。
かたや、目に光のない、妙に威圧感のある、鍛え抜かれた体とくせっ毛が特徴的な神父。
女子高生を挟むのに、これほど違和感はなはだしいコンビもないものだが――あどけない顔に朗らかな笑みを浮かべた少女は、するりと彼らの手を取って歩き出した。

「あ、注文お願いしまーす」
ボタンで呼ばれて、その先にオーダーを取りに向かった店員は、そのグループ客の異様さに気圧されて、思わず硬直していた。
白い法衣を違和感なく――それでいて、着崩した男と、その引き締まったマッシヴな体躯を、禁欲的な黒いカソックで包んだ男が、

口論――否、議論していたからだ。
しかも仏教と、十字教の専門用語で。
並の人間ならドン引いて当たり前である。
「すみませーん。店員さーん？」
「は、はいっ、ご注文をどうぞ！」
そこに、ひとり違和感ばりばりの――否、違和感はないのだ。妙にしっくり馴染んでいるが、客観的に見れば、どうしてこの場にいるのかわからない――女子中学生が、女子高生くらいの少女が、メニューを開いて声をかけてくる。
「えーと。豆腐サラダと厚焼き玉子、鯛のカルパッチョと焼きおにぎり……言峰さーん、ワイン、どうします？」
「ああ。ではボトルで。赤のこれにしよう」
「らじゃ。
あ、烏哭（うこく）さんは、飲み物」
「ボクはコレ。『魔王』で」
「あいあい。んで、私はジャスミンティーをポットでお願いします。まずはこんなところかなぁ」
またあとで追加すれば良いし。
そう言いながら、少女が指差すメニューを確認した店員は、オーダー用の端末に、あわてて入力していく。
「んじゃ、以上で」
「かしこまりました――」
オーダー内容を、店の規定通り復唱しながら、このテーブルにやってきた店員は「いったいどんな関係なんだろう？」と、ないしんしきりに首をかしげていた。
「だから、その解釈は――」
「――だろう。しかしマタイの福音書いわく――」

運ばれてきた料理を、適当に取り分けながら、七季はアツい宗教討論を右から左へ聞き流して、むぐむぐと居酒屋メニューを堪能する。

酒に合うようなツマミ類は、総じて米にも合うようにできているから、人気店のここのフードメニューは、総じて美味しい。

監獄を模した居酒屋は、個室の入り口に鉄格子のはまった引き戸があるという凝った造りで、店員はモノクロ横縞の囚人服や、ミニスカポリスだったりとコスプレしているのがトレードマークだ。

「♪」

ポットからジャスミン茶を注いで、エアコンのきいた店内で乾燥しがちな水分を補いつつ、黒髪の少女は、はたとテーブルの上を眺めやる。

言峰や烏哭（うこく）に、それぞれ取り分けていた料理は、ほとんど食べつくされ、まだ大皿に乗っていたはずのサラダも、いつのまにやら消えている。

生野菜のサラダは、嫌いでもないが、それほど好きでもない七季が、そんなに食べたわけはないから、おおかた僧侶である烏哭（うこく）が食べつくしたのだろう。

酒も煙草もやるうえに、本当に僧侶と思えないほど、人をコケにするのも弄ぶのも得意な男だが、意外と肉食はしないことを知っている。

七季はメニューを広げて、彼でも食べられそうなもの、それから言峰が好みそうなフードメニューを物色した。

彼女は、辛いもの意外なら、わりと何でもいけるクチだが、性格破綻ぎみの神父は、逆に、激辛料理が大好物ときている。

「んー……そろそろ追加注文入れましょうか。

烏哭さん、この、『とろとろレンコンと湯葉のスープ』とか、どうですか？」

「お、良いね。ついでに、こっちの『湯葉と揚げナスの枝豆あんかけ』もヨロシク」

「あ、これ美味しそうですね。良いなぁ……豆乳プリン、いきます？」
「くずきりもあるじゃない。あと、かき揚げ追加してよ」
後ろからメニューをのぞき込む、無精ひげの男と、あどけない顔の少女は、そこだけ見れば親戚のおじさんと子供のようだ。
「言峰さんは、何か追加します？　この『囚人も火を噴く！激辛スパイシーチキン』とか」
「ふむ。では試してみるとしよう」
ぴんぽーん。
ふたたびボタンが押された。

「あー、美味しかった。ごちそうさまでーす」
「ああ、なかなか悪くない時間だった」
「いやー、叩き潰しがいのある討論相手って良いよねェ」
けぷ、と満足げに、にっぱり天然スマイルで笑っている黒髪の少女と。
彼女を挟んで、わずかに頬を上気させている――ワインの酔いで――人格破綻神父と。
同じく七季を挟んだ向こうで、へらへらと笑いながら、偽装でない上機嫌な破戒僧と。
そんなすっとんきょうな組み合わせに、うっかり見くびって絡んだごろつきが、神や仏にチョクで会いそうになったかどうかは――また、別の話。

「それじゃあ、また」
「ああ。次を楽しみにしている」

「まったねェ」
きっちり車で――ただし言峰は飲んでいるので、運転代行サービスを頼んだ――自宅前まで送り届けられた七季は、言峰と烏哭（うこく）を見送り。
「本当に、良い友達だよなぁ」
とにっこり微笑んで、帰宅した。

のちに、その月一回、開催される会合の存在を知った真言が、
「何その暗黒パーティー！」
と珍しく全身全霊をもってツッコんだのは、彼女だけが知る事実である。
どっとはらい。

#252　ツバメと烏とキセキレイ（後書き）

あとがき

＞みんな大好き、外道麻婆！（笑顔）

まっくろ飲み会イェア。

外道神父のオトモダチは、腹黒マッドサイエンティスト……もとい、破戒僧ですよと。

オリ主は未成年なので、お茶オンリー。二人を引き合わせたのは、もちろんオリ主です。

烏哭（うこく）もコトミーも、自分から連絡取るのは、何となく癪なので、いつも間にオリ主を挟んでの飲み会になってます。

居酒屋のモデルは某「Ｌ●ｃｋ　ｕｐ」。

メニューの料理名がいちいちおもろかしいです。

タイトルの「キセキレイ」は実在の鳥の名前です。

「奇跡・例」「綺礼」と引っかけました。

何があれって、たまたま「キセキレイ」の説明欄に添えられていた、

「　鶺鴒（せきれい）の　なぶり出しけり　山の雨／一茶」

に噴いたからです。

ハマりすぎ。偶然だけどハマりすぎ。大事なことなので二度言いました。

「キセキレイ」って　意外と黒いんですな。色が。

オリ主＝ツバメ。烏哭（うこく）＝烏（カラス）。コトミー＝キセキレイ。

で、並べてみた。烏哭が誰かって？　ニィ健一（ジェンイー）です（最遊記）。

烏哭三蔵法師が、彼の法名。

ここ最近の展開の遅さにイラッっとしてたのは、書き手もです。

かっとしてやった。ついでにノクタも更新してみた。反省はしていない（待てい）。

あと飲酒運転はまずいので、代行サービスの記述を追加しました。

読み手さまのツッコミ感謝。

※キセキレイ

：全長２０ｃｍ。細身で尾の長い鳥。九州以北のほぼ全国で繁殖。

セキレイの仲間の鳥で、胸から腹にかけて黄色いところからキセキレイの名がある。渓流・河原・水田のあたりに多く、いつも尾を上下に動かす習性があるので、石たたき・庭たたきなどの異名を持つ。

#２５３　始まらない物語ー はかー

目覚めたとたん、ルイズの目の前で、彼女の杖はボキリとあっけない音をたてて、まっぷたつに折られた。

「え……？」

最初は、何が起こったのか、ピンクブロンドの少女は、まったく理解できず、そのツリ目がちなピンクトルマリンの瞳をしばたいた。

やがて、その、がらくたになり下がった木の棒が――「ゼロ」の二つ名がついているとはいえ――まがりなりにも、魔法使い（メイジ）である自分が相棒としてきた杖であると気づくと、その相手に猛然と食ってかかった。

「私の杖！　何するのよ！？」

落ちこぼれでも、爆発だけの失敗魔法でも、それでも魔法には違いなかった。

それを使うには、杖が必要だったし、ずっとルイズは、あの杖を使ってきたのだ。両親が素材を厳選して、ヴァリエール家の娘にふさわしいものであるよう、職人に命じて作らせた杖。

「ルイズ、あなたはもう、魔法を使うことはありません」

しかし頭上から降るように響いた声は、硬く、冷たく、それでいて裏に悲しみを秘めた、母親の声だった。

「っ母さま……っ！？」

どうして、何で、私の。

信じられない思いで、カリーヌを見上げるルイズの目に、彼女と同じピンクブロンドにふちどられた、鉄面皮の美貌が映りこむ。

巌を思わせるほど強張った表情は、まるで人間味がなく、空恐ろしさだけを少女に感じさせた。

生まれてこの方、失敗魔法ばかりのルイズは、杖の契約にもずいぶん時間がかかった子供だった。

姉たちに比べて遅いだの、早いだの、比べられた記憶は、いまでも彼女の中に残っている。

――それを母さまも知っているはずなのに。

ベッドに横たわったまま、カリーヌの向こうに見える置時計で、ここがヴァリエール家にある自分の部屋ではないことに、ぼんやりと気づきながら、ルイズは母の返答を待っていた。

「何故、と」

カリーヌの唇は、苦い苦い声を吐き出し、きりりと歪んだ。

「何故と、問うのですか――ルイズ」

あなたが。

そのとき、カリーヌの胸に広がったのは、言い知れぬ敗北感だった。

こんな風に娘を育ててしまった。親として至らなかった、自分じしんへの悔しさと、情けなさ。

泣きたくなるようなやりきれなさを、無理やりに飲み下して、カリーヌは娘へ――ルイズへと告げるべき言葉を紡ぎあげる。

「未婚の娘が――しかも公爵令嬢ともあろうものが――男性と二人きりで出奔するということが、どういうことかもわからないのですか、ルイズ！」

雷よりも苛烈な一喝が、ピンクブロンドの少女を直撃した。

「訊きたいのは私の方です。ルイズ、何故このような愚かなことをしたのですか！」

殺気に近い怒気をビリビリと放つ母、カリーヌの前に横たわった

ままの少女は、その小さな体を、さらに縮こめるしか術がない。
容赦なくぶつけられる叱責に、思わず恐怖から目を硬く閉じたルイズは、気づけば仰向けに転がされたうえ、両腕を頭上に上げる形で拘束され、カリーヌに押さえ込まれていた。
「か、母さま!?」
「大人しくしていらっしゃい。まさかとは思いますが、これは必要なことなのです」
細く白いルイズの脚は、同じ年ごろの少女のそれに比べて、肉付きが乏しいものの、そのぶん幼さを残した危うさがある。
その両脚は、母であるカリーヌによって、膝裏を抱え上げられ、付け根を覆うショーツを剥ぎ取られた挙句、そこをのぞき込まれていた。
「いやああ――っ?!」
ルイズが羞恥に身をよじるも、元軍人である「烈風カリン」の腕力に敵うはずもない。
カリーヌの腕は、びくともせず、あさましい格好を取らせた娘の秘所を指でこじ開け、さらにその奥をジロジロと丹念に検分した。
「……純潔は無事のようですね」
――不幸中の幸いだ。
ふ、と短いためいきが、カリーヌの唇から、ついこぼれ落ちた。
これでルイズがワルドの種でも孕んでいたなら、事はもっと複雑に、しかも大きな問題になったことだろう。
トリステインにとっての国家反逆罪と、ガリア、アルビオンの後継となるウェールズ王子暗殺未遂罪の容疑者であるワルドは、もはや始祖を裏切る大罪人だ。
その子供を、まさかヴァリエールの娘に産ませるわけにはいかない。
だからといって、娘のルイズに堕胎を命じるのは、同じ女として、いたましくてしょうがない。
こうしてカリーヌみずからが、ルイズの処女を確認したからには、

万が一にも、少女が妊娠しているはずはない、と公爵夫人は、ようやく安堵に胸を撫で下ろしたのだ。

だが、そんな親心は知る由もない箱入り娘は、カリーヌの仕打ちはとんでもない「仕置き」としか映らず、あまつさえ、自分の貞操観念を疑われた、と強い反抗心を生み出したのは――ある意味、当然のことだったのかもしれない。

「母さま、あんまりです！　こんな……酷い！」

そこに反省の色は見出せない。

いっぽうのカリーヌも、もはや娘に失望を隠せなかった。

反逆者、大罪人であるワルドと、娘であるルイズが駆け落ち――はためには、そうとしか見えない――したことによって、どれだけヴァリエール家が危機に陥ることか。

「お黙りなさい、ルイズ。

あなたには、一刻も早く結婚して、ヴァリエールの世継ぎを生んでもらいます。

家から出ない以上、魔法も使う必要はありません。相手はこちらで用意しました。爵位は低いですが、風のスクウェアです」

いままで厳しいながらも、ルイズを慈しんできたカリーヌとは思えないセリフに、ピンクブロンドの少女は呆然とした。

――そんな。

ベッドに横たわっていたのは幸いだろう。もしも立っていたなら、尻からぺたんと座り込んでいただろうから。

彼女が呆けている間に、脱がされたショーツは、母の手によって元に戻され、矢継ぎ早にルイズの「相手」の情報が、つらつらと垂れ流される。

爵位、容貌、年齢、過去の女性関係まで。

ルイズの頭に残ったのは、かろうじて、相手の男が、風のスクウェアであるということと、ワルドよりも年上である、ということくらいのものだった。

「急なことですし、式はのちほど、内々にあげることになりますが

――さっそく、きょうから夫婦の勤めを果たしなさい、ルイズ」
そう宣告したカリーヌの言葉のあとに、雪崩れ込んできたメイドたちによって、ピンクブロンドの少女は、急ぎ迎える「初夜」のための身支度を、朝から夕方にかけてみっちりとすることになろうとは――思いも寄らないことであった。

かたや、そんなことになっているとは露知らず。
七季たち一行の集まる「サロン」のリビングでは、ふいに思い出した士郎――赤毛の男の子の方――が、懐から指輪をひとつ、取り出したところだった。
「そういえば、これ、きのう拾ったんだけど」
あざやかな青い石がはめこまれた指輪は、ワルドが斬られた際に、彼の懐から落ちたものだという。
「魔力を感じたから、拾っておいたんだ」
そう言って差し出された指輪に、リドルと真言が、それぞれの目をかがやかせる。
「もしかして……アクシオ、デルフ――来い！」
栗毛の少女が伸ばした手に、ぱしり、と六千年の歴史を秘めた意識の宿るデバイスが収まる。
「何でえ、姫さ……おう、こりゃ『水のルビー』じゃねえか」
『っしゃあ！　始祖の秘宝。コンプリート！』
あとはガリア経由で「祈祷書」ぶんどるだけ！
真言とリドルのはしゃぎっぷりに唖然とする高町家と、七季一行をよそに、チートな巫女さんは「シロくんグッジョブ！」と叫びながら、ちびっこ士郎をぎゅうぎゅう抱きしめて離さなかった。
のちに、真言の巨乳で窒息しかけるという、羨ましいんだか、情けないんだか、わからない瀕死状態に陥った男の子は、どうにかアーチャーと七季の主従に引っ張り出されて、命を取り留めたとか。

どこぞの公爵令嬢の悲運をよそに、異世界トリップご一行さまは、
きょうもほのぼのまっさかりの朝であったという。

#２５３　始まらない物語ー はかー（後書き）

あとがき

＞話が進みませんで。申し訳ない。

とりあえず、ルイズとカリーヌのやりとりを詳しく、と感想いただいたので、もう少しだけ詳しく。

いっぽうオリ主たちは、ようやく一息つきました。

ワルドが持っていた「水のルビー」は、ちびっこ士郎によって回収されておりましたよとフォローをば。

※アクシオ

：ハリポタの魔法。呼び寄せ呪文。

※はか【▽計／▽量／▽果／▽捗】

：１）仕事などの進みぐあい。やりおえた量。

２）田植え・稲刈りなどのとき、当てられた分担の区画。

３）目当て。あてど。

例「はかが行く」

：仕事の能率が上がる。はかどる。

※破瓜（はか）

：（「瓜」の字を縦に2分すると二つの八の字になるところから）

１）８の２倍で、女性の１６歳のこと。

２）性交によって処女膜が破れること。

※破瓜期（はかき）

：月経の始まる年ごろ。女性の思春期。

＃２５４　始まらない物語ー ある軍人の縁談ー（前書き）

まえがき

＞オリキャラが登場します。オリ主たちに直接かかわることはありません。

＃２５４　始まらない物語ー ある軍人の縁談 ー

猫の額ほどの領地しか持たない、デポルト男爵の仕事は、お定まりの軍人だ。

といっても、王宮の近衛のような、華々しい騎士さまなどではない。ヴァリエール領とツェルプストー領の境――ここは、ゲルマニアとトリステインの国境でもあるのだが――を警備する一軍人だ。

国境なので、密輸や越境者などによる小競り合いは、そこそこ多く、繰り返される戦闘によって、彼は風のスクウェアまで上り詰めた。

とはいえ、たかだか男爵。コネもツテもない彼は、スクウェアといえども、軍人であれば食うに困らないだけの生活。ただ、それだけだ。

子爵よりも格下の男爵に、喜んで嫁いで来ようなどという、酔狂なレディにはお目にかかったこともなかったし、可もなく不可もなく、といった容貌の彼は、言ってしまえば、ぱっとしない男だったのだ。

両親は他界しているから、気楽といえば気楽だが、人生の楽しみなど、たまに飲む酒、それから酒場の娘とちょっと他愛もない話ができれば、それだけで一日はいい気分、という、毒にも薬にもならない性格をしていた。

そんな彼が、三十路を過ぎてから、ようやく恋をした。

相手は、最近になって、酒場で働き始めた小柄な娘で、水商売にしては無口で大人しい子なのだが、いっぺん、荒くれ同士のケンカに巻き込まれかけたところ、あっというまに両方ぶちのめしたことで、メイジと判明した。

しかも、風のスクウェアであるデポルト男爵が見るに、彼女は最

低でも、風系統のトライアングルメイジである。
　酒場というのは、どちらかというとゲルマニア側の地域にあるのだが、国境を警備する兵士というのは、トリステインのものも、ゲルマニアのものも、お互いの遊び場については、わりと黙認するものだ。
　なにしろ場所は限られている。そのうえ、安くて美味い店、可愛い子がいる店、というのは、さらに少ないのだから。
　おそらくデポルト男爵とは、一回り以上も離れているだろうが、何故か彼は、そのもの静かな娘に心を惹かれて、やまなかった。
　思えば、家族のいないもの同士――否、「チェネレントーラ＝ラ＝ネージュ」と名乗った娘には、病気の母親がいるらしいのだが――その寂しげな空気というものが、彼らを引き寄せたのかもしれなかった。

　一度、ずいぶん酔っ払ったときに、「チェネレントーラ」は、デポルト男爵の話を聞いてくれたことがある。
「母さんはさ……儚げな人で……体も弱かったんだ。父さんは、そんな母さんにべた惚れで。子供に向かって『彼女が運命の人だ』って惚気るようなバカップルでさ。
　弟ができたときは、喜んだけど、家族みんなで話し合って悩んだんだよ。
　長男の俺を産んだときも、母さんは死にかけて……父さんが、公爵様に頭を下げて、借金して買い集めた水の秘薬と、メイジの治療で助かったんだから」
「そう……仲が、良かったのね」
　淡々とした、少し冷たく聞こえる、雪みたいなソプラノが、けれども彼の耳には心地よかった。
　下手な慰めはしない「チェネレントーラ」の態度は、そっと傷を

眺める医者のようだったから。
「ああ。貧乏だったけど、そのぶん家族仲は最高だった。だから礼儀作法の授業なんかは、おざなりで、うちの家庭は、平民のに近かったかもしれない」
まっかな顔で、酔っ払いのくせにろれつはしっかりと回る男のテーブルについて、緑のショートカットの少女は、相槌代わりにコクリと頷いた。
「けっきょく母さんは、弟を産むことに決めた。俺と、父さんに、新しい家族をプレゼントするんだって。年の瀬だったからな……」
でも。
「運が悪かったんだ。いや……あのひとたちらしいっちゃ、らしいかもな。
流行り病でさ。寒い季節だった。生まれるはずの弟と、母さんと、父さんまで、仲良く三人連れ立って、ブリミルの元に逝っちまってさ」
すんっ。
青い目に張った涙をこぼすのは、意地でこらえて、デポルト男爵は、洟をすすった。
「俺だけ忘れてくなんて……酷いよな。
それからは、狭い領地のやりくりと、借金と、食っていけるようになるための軍人生活で……気がついたら、三十路だっていうのに独り身なんだから」
はは。
力なく笑う男の、突っ伏した茶色い頭を、風の使い手である少女は、黙って撫でた。
「あなたは、よくやってる」
「……ありがとな」

それ以来、「チェネレントーラ」――「トーラ」とデポルト男爵は呼ぶようになった――と彼は、少しだけ酒場で言葉を交わすようになった。

上司から借りた本、流行の菓子や、ゲルマニア、トリステインの噂話まで、ときどきによって話題は変わるけれど。

そんな、散歩道での歩み寄りのような、ゆるやかな変化が、いつまでも続くような気がしていた折。

「縁談――いや、結婚が、決まったんだ」

泣きそうな顔をして告げた男に、ショートカットの娘は、大きな目を開いて、デポルト男爵を凝視した。

「どうして」

どうして、そんな顔をしてるの。

きゅっとフェイスチェンジの魔法具であるペンダントが隠れた胸元を握り締め、閉店まぎわにやってきた三十路男を、かつて「タバサ」と名乗っていた少女はじっと見つめた。

「上司の命令さ。お嬢さんを娶れと――」

トリステインでは、王家に告ぐ権力を持った公爵家の命令。

たかだか男爵である彼が拒むこともできない「決定した」縁談。

「信じられるかい？

相手は、十六歳のお嬢さんなんだぜ。君より、ちょっと年上くらいか。お嬢さんが望んでの結婚じゃないことは、まるわかりなのに」

カウンターに荒く腰かけたデポルト男爵は、ふだん優しげな、ちょっとぼんやりした青い目を険しくゆがめて、吐き捨てた。

相思相愛の、貴族にしては珍しい夫婦だった両親を持つ彼には、理解できない――否、納得できない縁談だった。

「上手くいきっこない。お偉いさんが、俺みたいなのに声をかけることじたい、問題ありって言っているようなもんだ。それも相手は、ろくに知らない女の子！

甘やかされっぱなしの箱入りお嬢なんて――せめて」

せめて、君だったら。

言葉には乗せずに、男の青い目が、「チェネレントーラ」を振り向いた。

いつもはぼんやりとした、春の空みたいな青が、夏の苛烈さを帯びて少女を映した。

「……っ」

息を呑む「チェネレントーラ」に、ふっとデポルト男爵の青が冷めた。告白すらしていない相手に、これ以上、何を言うべきかわからず、彼じしんも目を伏せた。

「すまない。トーラには、関係のないことだった」

くしゃり、と彼の手が、少女の短い髪を撫でた。優しいその手つきが、いまは亡い父親を思わせるようで、「チェネレントーラ」は好きだった。ただ、好きだった。男とか女とか、そういうもの以前に。好きで。

オーダーした酒をあおった男は、青い双眸を酔いとあきらめに煙らせると、短い間でも顔なじみだった少女へ、振り向かずに別れの言葉を告げる。

「そういうわけだ。

俺は、近いうちに国境から呼び戻される。もう……この店に来ることもない。つまらない男の話に付き合ってくれて、嬉しかった」

さよなら。

最後にのぞいた、寂しげな青。それが、少女の中の種を芽吹かせた。

「トー……」

「待ってる」

グラスを空にしたデポルト男爵の背中に、小さなぬくもりがしがみつく。

「待ってる。ずっと」

男の厚い胸板に、少女の細い腕が回って、すがるように絡みついた。

「ここは、ゲルマニア。トリステインじゃない――だから」

もしものときには、逃げてくればいい、と。
「チェネレントーラ」として働く少女の囁きは、黄金よりも清らかな、溶けない雪の矢となって、男の胸に突き刺さった。

その後。
ヴァリエール公爵の三女が婿を取ったという噂が、一時期、領内に流れたが。
その婿の姿は、ついぞ領民の前に現れることなく――また、ヴァリエール家に、新しい家族が増えることもなく。
ルイズの醜聞を、ガリアに引き渡されたワルド子爵によって撒き散らされたヴァリエール家は、宮廷から身を引くよりも先に、王家の信頼を失い、その領地の大部分を没収され、しだいに没落していくことになる。

#２５４　始まらない物語ー ある軍人の縁談ー（後書き）

あとがき

＞タバサの偽名というか、新しい名前は、お寄せいただいた読み手さまのアイデアから採用させていただきました。

ご意見、ありがとうございました（拝跪）。

ルイズの結婚相手は、地味ながらも、マトモな軍人でしたが、駐在先でタバサと初々しい恋におち、あげく、ルイズがどうしようもないワガママ非常識娘だったので、手をつけずに逃亡。

のちにタバサの元へ戻り、所帯を持つことになります。

ルイズの不幸は、まだ終わりません。

※チェネレントーラ

：シンデレラと同系統の作品「灰かぶり猫」の読み。

※ラ・ネージュ

：フランス語で雪。

#255　始まらない物語ー モラトリアムー

「タ……トーラ、お土産持ってきたわよー！」

かつて「タバサ」と呼ばれていた少女――いまはフェイスチェンジの魔法具で顔を変えている――「チェネレントーラ」の住まいで、燃える炎さながらの赤毛を背中に流した少女がドアを叩いた。

あの日。

青い風韻竜――シルフィードから、親友の伝言を聞いたキュルケは、かるく荷物をまとめて、故郷であるゲルマニアはツェルプストー領へと旅立った。

帰省の届けは、たまたま通りがかった黒髪のメイド少女にことづけての行動である。のちのち咎められることも考えたが、キュルケは自分を案じてくれた親友の言葉を信じた。

あとで知ったことだが、「タバサ」が自分の使い魔をよこしたその日、トリステインの上空では、レコンキスタ軍とガリア軍が衝突したのだ。

それを考えれば、キュルケの判断は――そして「タバサ」の心配は――間違っていなかった、といえるだろう。

遅まきながら、その翌日、ツェルプストー家は、トリステインに留学させた娘を案じて、迎えを出そうとしたのだが、彼らよりも先に、風竜に乗ったキュルケが実家に到着したことを述べておく。

そしてツェルプストー家の判断で、キュルケは改めて「休学」となり、トリステイン魔法学院へは、その旨が伝えられた。

幸いにも、かつてキュルケが、無理やり実家から結婚させられそ

うになった、ある老公爵との縁談は流れていた。そのおかげで、彼女はいちおう安心して家でくつろぐことができた。

そして、ツェルプストー家が治める領地に、こっそりと隠れ住む、親友の下へ通うことも。

キュルケの両親は、彼女が訪ねる相手が、娘をトリステインから逃がすために風竜を貸してくれた相手だと知ると、それを黙認する形で許していた。

ゲルマニアのヴィンドボナ魔法学校でトラブルを起こし中退した以上、ふたたびキュルケをそこに通わせるわけにはいかないのだが、トリステインの世情が落ち着くまでは、おいそれと娘を隣国にやるわけにはいかない。

そう考えたツェルプストー家の当主は、キュルケの外出も気晴らしとして頷くに留まったのである。

実力主義のゲルマニアでは、爵位もちのツェルプストー家は裕福と言えるだろう。

それを幸い、キュルケは実家住まいということもあいまって、しばしば「チェネレントーラ」の住まいに、手土産を携えてやって来ることが習慣になっていた。

母と娘の二人暮らしでは、やはりどうしたって稼ぐのは大変なのである。

「チェネレントーラ」は時給の良い、酒場での給仕を勤めることで、親子二人――否、良く食べる使い魔を含めると三人分以上――の食い扶持を稼ぐことには、どうにか成功していたが、母親の薬代までは、とうてい手が回らない。

だが、以前よりも、格段に女性らしく、また表情の明るくなった親友を嬉しく思いながら、キュルケは何くれとなく彼女の世話を焼き、ささやかな援助をしながら友達づきあいを続けていた。

少し未来にフライングした話はさておき。
ちびっこ士郎によって「水のルビー」を回収することができた七季一行と、なのはを誘拐犯から取り戻した、高町家一行は、これからの行動について話し合った。
「とりあえず先輩、私らこれから授業があるんですけど……」
辞職したキンダイチはともかく、トリステイン魔法学院は、いまのところ通常運営中だ。
レコンキスタは、ガリアの艦隊に蹂躙されて背走したらしいし、勘違いぎみの戦勝ムード（あくまで勝ったのはガリアなのだが）で危機感も見当たらないのだろう。
そして生徒である七季たちは、学校が授業をする以上、そこに通う義務がある。
キンダイチの回収とか、なのはの奪回とかに授業サボったのは別である。あれには人命がかかっていたのだから。
「んじゃ、高町さんだっけ？　そっちと平賀君は、先に帰っとく？　まあ、そうなると……たぶん、このままお別れになると思うけど」
ジッパーを開けて、世界観の時軸調節ができるチート巫女さんの言葉に、なのはが青い瞳を、うるりと濡らして、金髪ルビーアイの友人を見つめた。
「あ――」
「フェイトちゃん……」
このまま、お別れなの？
ふだん、わがままを言わない高町家の末っ子の、世にも悲しげな声を聞いて、シスコン兄と、なのはに負い目を持っている父親が眉尻を下げて悩み始める。
「その……しばらく、ここに滞在できるような、ホテルみたいなところはありますか？」

高町士郎が、その端正な面輪に憂いの色をにじませて、誰ともなく問いかけた。
根本的な解決にはならないが、それでも、ひとりで傷ついて寂しい思いをさせた、愛娘の願いを、少しでも叶えてやりたいがゆえの言葉だ。
「こっちの通貨もないのに？」
ざっくりそれを斬ったのは、闇の帝王――もとい、まっくろにゃんこのリドルだ。さすが七季以外には、基本容赦ないドS属性である。
「うぐ」
「んー。泊めるくらいならかまいませんけど。基本、ギブアンドテイクですよ？」
黒髪の少女も、こてりと首をかしげて言い放った。

そんなわけで。
高町家ご一行は、しばらくハルケギニアに滞在する間、七季たちが世話する温室や畑の管理、家事の手伝いなどをすることで話がついた。
「いやー、薬草を植える畑、拡張したかったんですよねぇ」
ほくほく顔でのたまう黒髪の少女は、やはり根がちゃっかりしている。
「エイプリル。このひとたちに、雑草と薬草の違いを教えてあげてね」
いまは「若返り薬」で、フェイトと同じくらいの幼女になっているアリシアが、彼女の使い魔である白ウサギに言いつけて、畑仕事は素人だと思われる、高町家の面々についてのサポートを任せる。
「はい、ご主人様！」
ぴょこん、と手を上げて返事をするエイプリルに、なのはが「ウ

サギさんがしゃべった！」と目を丸くしている。
「どれ。僕も手伝おう。どうせ暇だしね。アドバイスくらいならかまわないだろう？」
優しげな黒い目を、にっこり細めて、そう申し出たのは、「表向き」魔法が使えなくなったことになっているキンダイチだ。
「助かります、キンダイチ先生。
ああ、ディルはアイマスク装備してな。アーチャー」
「了解した」
ふっ。
白い髪の偉丈夫が、手品よろしく投影した宝具「自己封印・暗黒神殿（ブレーカー・ゴルゴーン）」を「ほら」と手渡された美青年が、ひとつ頷いてそれを装備する。
そのさまに、恭也となのはの兄妹がちょっぴり引いていたりしたが、これは余談というものだろう。
「先輩は――」
「んー。ちょっくらジョゼフのとこに顔出してくるわ」
「らじゃ。えーっと、あとは……あ、シロくんはこっちね」
「え」
きゅ、と七季に手を握られた、赤毛の男の子は、やわらかな手に、あわあわしながら黒髪の少女を見上げた。
「違う世界の授業、興味あるだろ？」
魔法の。
そう小さく呟いた唇に、ちびっこ士郎の琥珀色した目が、まん丸くなり――こくん、と頷いた。
「よ、よろしく……」
「よし、決まり！」
若干、不機嫌そうな赤い外套の騎士や、士郎だけが自分から離れることに、ちょっともの言いたげな栗毛の幼女を華麗にスルーして、七季一行と、プラス一名は、トリステイン魔法学院の校舎へと向かったのだった。

「てっきり……レコンキスタを食い散らかしたあとで、そのままトリステインを攻めるものかと思ってましたけど……」

トリステインの王城――その片隅。

ガリア軍の動向を知った「オルタンシア」が、ぽつりとこぼした独白を、幸か不幸か、聞くものはいなかった。

#255　始まらない物語ー モラトリアム ー（後書き）

あとがき
＞ほとんど閑話ですね。
キュルケのその後と、高町家のその後。
ちょっと学院関係者たちも書きたいので、ゆるーい内容になりました（話が進んでいないともいう）。

サブタイトルの「モラトリアム」は「猶予期間」のことです。
ええまあ、ガリア無双までのとか、ルイズさらに転落までとか、まあ色々な意味で。

#２５６　始まらない物語ー自鳴琴ー

きときと、きりりと歯車が回る。
ぽろぽろ、ぱたんと櫛歯が弾ける。
円筒は回る。
ピンが弾く。
ねじを巻かれて――メロディが流れた。

「うわぁ……！」
初めて目にする土の魔法――「錬金」に、琥珀の瞳をきらきらさせながら見入る、ちびっこ士郎を、黒髪の少女は、ほんわりと優しげなまなざしで見つめていた。
朝食の前に、学院長であるオールド・オスマンへ、例によって高町ファミリーとミニマム士郎の面通しをしておいた際、七季は戦争のことを匂わせて「警備を固めるために」で押し通した。
もっとも、魔法使いではない高町親子は、通常「サロン」の警備を任せること、アーチャーの「弟」である士郎には、魔法の素質があるため、授業に加えることなどが打ち合わせされた。
――やっぱり話つけといて良かったなぁ。
ぱちぱちと物珍しげに大きな目を瞬く、赤毛の男の子の表情に和みまくっている七季は「可愛いなぁ」とほわほわ笑いながら、ちびっこ士郎の頭をそっと撫でた。
「はいはい、落ち着いて、な？」
「あ、うん」
かるくたしなめられた赤毛のちびっこは、照れたように肩をすく

め、ほんの少し目尻を赤くして少女に頷く。
異邦の魔法に、夢中になっている士郎を見守る、七季の面輪は、やっぱりとても甘かった。

時間が流れていく。

キュルケの休学は、水が砂地に広がるように静かに、速やかにクラスメイトたちへと伝わった。
「まあ……」
「仕方ない、か……」
彼女に思いを寄せていた少年たちは肩を落とし、恋敵の不在に、少女たちは胸を撫で下ろし、あるいはどこか物足りなさそうな顔をした。
クルデンホルフ大公国が、実質、トリステインの庇護を離れ、ガリアの租借地になったことは、あまり口に出されることなく、生徒たちの暮らしにも、表立った関係はなかった。
そもそもクルデンホルフ家がトリステイン貴族の債権を持っていることは変わらなかったし、クルデンホルフ大公国の姫殿下であるベアトリスを粗略に扱うものは、元々あまりいなかったからだ。
借金のないヴァリエール家のものであるルイズは、はなからベアトリスに興味はなくて近寄らなかったし、もうひとつ、クルデンホルフにとって目の上のたんこぶであったトリステインの王族は、ふだん学院に顔を出すことはないのだから。
「お姉さま、お姉さま、夏の休暇になったら、是非うちにいらしてくださいな！」
むしろガリアの庇護の下、貿易や商業をますます発展させたクルデンホルフは、豊かさを増したらしく、いっそう羽振りのよくなったクルデンホルフ家は、新しい別荘を建てたとかで、金髪碧眼の少

女は、そんな誘いをかけてきたりした。
「そうだね。でも、うちはけっこう大所帯だよ？　ご迷惑じゃないかな」
　ことりと首をかしげる黒髪の少女に、きらきらしい金髪をツインテールに結った少女は、スレンダーな胸を張って請け合った。
「そんな。どんと来いですわ！」

　ガリアに新しく建設された、アルビオンのものたちが住まう街は「アルビオール」と名づけられ、黎明期の街に特有の活気で満ちあふれていた。
「気ィつけーい！」
「おーう！」
「こっち一列完成だ！　持ってけー！」
　積み上げられる城壁のレンガを作る、土魔法使い（メイジ）の姿や、それを運ぶ人足の力瘤が、街の境界には目立ち、馬車と人が行きかうメインロードには、板でできた屋台や露天が軒（のき）を連ねて市場を作っている。
「らっしゃーい、らっしゃい！」
「きょう入ったばかりの新鮮野菜！」
　まだ作りかけの施設も多く、母国を失った旧アルビオン国民の悲嘆は拭いきれていないものの、彼らには、ガリアの継嗣となった、アルビオン国の王子、ウェールズという希望がある。
　レコンキスタの残党は、ガリア軍に敗走したあと、いまだ天空のアルビオンに、うずくまるようにして引っ込んでいたが、それも孤立無援の状態では袋のネズミ。
　遠い浮島であるアルビオンへ、じきじきに出兵するよりも、ガリア軍は遠巻きに隔離することで、レコンキスタを兵糧攻めにしていた。おそらく早晩には、レコンキスタ軍は霧散するだろう。

首魁であるクロムウェルは、とうにガリア王、ジョゼフそのひとによって討ち取られているのだから。

そんな市場の中ほど。

広場にも程近い場所に、その孤児院は建っていた。

まだ真新しい建物の壁は白く、初夏の暑さも漆喰のひんやりとした厚い壁に遮られて涼しげだ。

にぎやかな子供たちの声に混じって、澄んだ高い声が響いている。

「お昼ごはんよー！」

「やたっ」

「きょうのメニュー何ー？」

「ちゃんと手を洗ってこなくちゃダメよー？」

「はーい、テファ姉ちゃん！」

「はあい！」

ぱたぱたと水場へ駆けていく子供たちの、小さな背中を見守りながら、瞳の色と同じ、明るい青のペンダントをつけた金髪の少女が呟いていた。

「マチルダ姉さん、元気かなぁ……」

姉代わりである緑の髪の女性へ思いを馳せる、ティファニアの耳は、まるで人間と同じに見えて、彼女がハーフエルフと気づくものは、誰ひとりアルビオールの街にはいない。

その代わり、バストレヴォリューションとでもいうべき爆乳の魅力に参った男たちが、連日、何かしらの貢ぎ物を引っさげて孤児院を訪れる、という現象を引き起こしていたりするとか。

いっぽう、そのマチルダはというと。

いまだにトリステイン魔法学院では、ミス・ロングビルとして働きつつも、手の空いた時間には、七季たち一行に、土の魔法を教授するというライフサイクルを送っていた。

アーチャーやリドル、それから七季や、新しく加わった士郎、ときどきやってくる真言にも魔法を教えるのは、意外と彼女にとっても楽しいことだったのだ。

「というわけで、きょうはおマチさんとフラム（メンヌヴィル）さん交えて、デバイスのフレームやアクセなんかを作りたいと思いまーす♪」

にっこりのたまう七季の主導で、錬鉄の英霊や、それと根源を同じくする第三魔法の体現者、闇の帝王の前身に、元「土くれ」のフーケと、元「白炎」のメンヌヴィルというカオスな顔ぶれでのモノづくりが始まる。

「とりあえず、素材の元を錬金することから始めるよ」

緑の髪の美女が、ノースリーブのブラウスという涼しげないでたちに、巨乳を押し込んで、タイトなミニスカートで錬金の指導を始める。

火を熾（おこ）している火事場の近くなので、暑いのだ。

「砂鉄の純度は高いんだけど、量がねえ……」

マチルダにダメ出しされているのは、なかなかハルケギニアの理不尽魔法に慣れない、赤毛の男の子だ。

ちびっこ士郎は、うなだれつつも、黒いシャツを肩までまくりあげている、白い髪の偉丈夫を、恨みがましげに横目で見やる。

「……どうやってやってるんだよ」

魔術の才能のなさは、エミヤシロウなら同じはずなのに。

「何。私はマスターから潤沢に魔力が供給されているからな」

ようするに、流し込む魔力量の違いだ、と示唆されて、ちびっこ士郎は改めてトライする。

「む。そーかよっ」

アーチャーの、一見皮肉じみた遠まわしな助言も、しばらくこちらで暮らすうちに、だいぶ慣れてきた士郎である。

「……ナナキ。どうして金と銀を『錬金』してるんだい？」

金の「錬金」は、土のスクウェアクラスでないと不可能なレベル

なのだが、黒髪の異邦人娘は、さっくりそれをやってのけていることに、ちょっと脱力ぎみなマチルダである。

「んー。『青金』を造ろうと思って」

青みがかった美しい色の金属は、銀と金からなる合金である。それを「青金（あおきん）」または「琥珀金」と呼ぶのだ。

他にも、銅と金を混ぜた「赤金」というものもある。

色みを帯びた金は華やかで、装飾品を作るにはもってこいだ。

「よし、詳しく話を聞こうじゃないか」

「火は魔力で熾せるのに、炭を用意するのかよ？」

「炭素還元……まあ、不純物を落とすために必要なものだと思えばいい」

ハルケギニアでは、何でも「錬金」で解決するという、わりとムチャな方法がまかり通っているので、科学的な解説は難しい。

妙な顔をするフラムへ、アーチャーは苦笑顔を向けながら、鍛錬用の材料を錬金していく。

「木炭用の木、追加っすー！」

どすんっ。

すっかり使用人根性を復活させた才人は、元気にパシリ……もとい、切ってきた木材を運んできた。

「ところで七季ちゃんの胸はマジ凶器だと思うんですけど。

……しばらく見ないうちに、また大きくなってませんかと（以下略）」

こそっとアーチャーへ小声で耳打ちし、ツッコミを入れた黒髪の少年は、そんな話題の少女のバストをガン見中である。

暑いのは七季も同じらしく、空調効果のあるバリアジャケットを身につけてはいるのだが、そのデザインは、胸元が大きく開いたミニ丈官服もどきだ。

本来あるはずの腿丈ストッキングとガーターもキャストオフ。

その代わり、足元を飾る、まっしろな足袋と生足が、初夏の陽射しに、これでもかと眩しくかがやいている。むちむちの太股やふく

らはぎが、以前よりもいっそう艶(なまめ)かしく見えるような。
「――」
「そりゃー僕らが寄ってたかってもみ倒したから」
絶句するアーチャーに代わり、うけけ、とカマボコ目で笑うのは黒髪にルビーアイの美少年――リドル。
「アーチャーだけじゃないよ？
アリシアもプレシアもリニスも……ついでに、育児中にはフェイトだってナナキのおっぱいが気に入っちゃって」
罪作りだよねえ。
にやにやしながら暴露する美少年のドヤ顔に、才人が「ちょ、そこ代われ！」と本音をダダ洩らす。
「いまじゃHカップに――」
かこーん！
やおら、離れた場所から、才人の運んできた薪サイズの木材が、リドルへ向かって飛んできた。
アーチャーもびっくりの精度で命中した軌跡を追えば、そこにはまっかな顔で涙目になった黒髪の巨乳少女がひとり。
「じゃ、ないもん……」
きゅっと赤い唇を噛んだ七季の表情は悔しげで――えらく悩ましげに見える。
「Hカップじゃないもん――っ！　Hなカップなんかじゃないんだからあああぁ」
うわあああん！
羞恥に頬を染めた少女は、その罪作りなバストを、たゆんたゆん揺らしながら、ダッシュでどこかへ逃げていった。
「……どうもマスターは、自分の胸が、これ以上サイズアップするのが、お気に召さないらしくてな」
最低でも、子供を産めば、あと一回りは大きくなるというのに。
ぼそ、と小声で呟くアーチャーの顔を、才人とフラムが凝視した。
リドルは薪を後頭部に食らったまま撃沈している。

「きちんとサイズの合ったブラジャー（したぎ）をつけなければ、体にも良くないと思うのだが……」

困った表情で嘆息する、精悍な顔の弓兵に、「惚気か」「よし、惚気だな」と顔を見合わせたフラムと才人が、「リア充もげろー！」と拳を振るったかどうかは――さだかではない。

グラモン領やモンモランシ領では。

トリステイン魔法学院の、畑仕事で培った経験や知識を、実家に持ち帰った子供たちが、それを少しずつ、当主たちと話し合って、領民に反映させていき、わずかずつながら収穫を上げていく。

その際に、作物を育てる農民と、協力する魔法使い（メイジ）の信頼関係が重要であることを説き、領内において彼らの融和に努める、新たな次代へと成長していくことになる。

火竜山脈の地下深く。

そこに眠る風石の巨大鉱脈では、白銀色の小さなモンスターが飛び回り、その鉱石をコリコリと貪っていた。

加えて、そこには、シェフィールドの生み出したガーゴイルたちが列を成し、彼ら――プラタ（分体）たちが砕いた、風石のかけらを黙々と猫車で運搬している。

時折ぴかぴか光るのは、プラタたちがレベルアップした証だろう。

人知れず運ばれていく魔力を秘めた石たちは、ガリアの収入源として、あるいは異邦人である真言たちの懐へと入っていくことになる。

「おおおお……」
「ううううう……」
「くぉおお……」
ひときわ深く、隔離されたガリアの地下牢にて。
げっそりとやつれた美貌の、元教皇や、かつてトリステインの子爵であった重罪人が、いまにも死にそうなうめきを上げながら、身悶えていた。
それというのも。
「し、尻が死ぬ……！」
泰山麻婆という激辛料理を三度の食事に出されていた彼らは、ついに地主――もとい、痔主となってしまい、用を足すごとにそれはそれはしんどい苦痛に悩まされる身の上となっていたのだ。
香辛料は、消化しないでそのまま排泄されるため、その際に肛門の粘膜（皮膚）を刺激し、炎症をおこしやすくなるのである。
ちなみに、これには個人差があるので、たくさん食べても平気な人もいれば、少量でも肛門周辺に激しく堪えてしまう人もいるという。
蛇足ではあるが、弱いとわかってる人は、刺激物を控えた方が身のため、ということを述べておこう。また、アルコールなども「刺激物」に該当するため、痔主には優しくない。
そしてきょうも、王みずからが腕をふるった料理が、罪人たちへと運ばれていく――。

「よォ、ジョゼフ」
「シルバか。早かったな」
ガリア王の執務室に、銀の色彩が音もなく現れる。
青い髪の美丈夫は、友人の姿に海色の目を細めて、その端正な顔を上げた。

「お前が迎えをよこしてくれたからな。ドラゴンに乗れるとは、なかなか良い経験だ」
強い獣が好きな異邦の暗殺者は、巨大な幻獣に騎乗できたことが、思いのほか嬉しいらしく、上機嫌だ。
「それは何より。で、首尾は？」
「愚問だな。しっかり仕事はしてきたぞ。病死に見せかけた不審死――ゲルマニアの皇帝の死を巡って、また王宮が荒れるように、だろう？」
くつくつと猛獣のような笑みを浮かべるシルバに、依頼主であるガリア王は、きゅっと口端を上げる。
「ああ。そしてめぼしい連中があらかた自滅したあとで――俺の選んだ傀儡が、ゲルマニアの玉座に座る、という寸法だ」
この場にいない黒髪の美女は、その細工のために、主の側を離れている。シルバの迎えは、シェフィールドを送り届けるためのものでもあったのだ。
「ともあれ、ご苦労だった。あとは客間でくつろいでくれ」
「それも良いが、お前の義息子を見てやろうと思ってな」
ニヤリとしながら言い出す銀髪の偉丈夫のセリフに、珍しくジョゼフが目をみはる。
「ウェールズをか？」
「何でも、『念』に目覚めたそうだな。ちょっと鍛えてやろう」
「……ありがたい話だが……壊すなよ？」
眉をひそめる、青い髪のガリア王に、ゾルディックの当主は楽しげに笑んだ。
「程度は心得ているとも」

そして婚約者だった男爵にすら逃げられたルイズは。
見目うるわしくこそあるものの、財産目当て、地位目当てという

伯爵の次男坊を三人目の婚約者として迎え。

遊び人と名高かった男に、さんざんいいように弄ばれた挙句、ヴァリエール家が没落するにつれて、彼女のあつかいは悪くなり、夫婦仲は冷え切り――ついには結婚わずか一年にして、夫となった青年は、なじみの娼婦と駆け落ちした。

その際に、残っていた財産の大半を持ち逃げする、というおまけつきで。

彼らはゲルマニアで爵位を買って、ふたたび貴族に返り咲いたとかいう噂を、ルイズが知ることになったのは、新たな婚約者として引き合わされた貴族の口からであった。

いっぽうで、不幸続きのヴァリエール家に、数少ない朗報もあった。

経済的な理由から、次女・カトレアの養っていた、あまたの動物たちを手放したとたん――じょじょに彼女の体調は快方へ向かっていったのだ。

「カトレア……お前が健康になっただけでも、良かった……！」

ヴァリエール夫妻は、それをことのほか喜んだが、もしも、現代日本人が、この場にいたなら「病気の原因が、アレルギーとか動物由来の病気だったんじゃないか？」と一言ツッコむくらいはしたかもしれない。

人獣共通感染症（じんじゅうきょうつうかんせんしょう）という言葉がある。

ヒトと、それ以外の脊椎動物――たとえば犬、猫をはじめ、鳥や魚など――の、両方に、感染したり、寄生する病原体によって、発症する病気のことだ。

必要以上に動物を警戒するのは良くないが、動物の糞や、垢、ノミなどの虫によって運ばれる病原体もあることは、ちょっと知識のある現代人なら、たやすく思い当たることだろう。

鳥インフルエンザ、豚インフルエンザなどの被害は、記憶に新しいのではないだろうか。

むろん、かつて豊かだった公爵家においては、動物も手入れされ、

清潔にされていたのかもしれないが――ひっきりなしに入れ替わり、また増える動物すべてに対応できたとは思えない。

中には、熊などのあからさまな猛獣もいたのだから。

ともあれ、ヴァリエール家では、ようやく次女・カトレアが健康になったというわけで、これまでに何度も縁談に失敗しているエレオノールや、夫に逃げられた醜聞も新しいルイズに代わって、次女に期待がかけられるのは当然の話だった。

ほどなくカトレアは、彼女の美しさと気立ての良さに引かれた青年貴族と結婚し、双子の男子と、一人の娘をもうけることになる。

彼女の産んだ男の子が、ヴァリエールの正当な跡継ぎとみなされたため、ルイズの結婚を重要視されなくなったのは――客観的に見れば、仕方のないことだったといえるだろう。

ヴァリエール夫妻は、娘を愛してはいたけれども、三女が引き起こす醜聞の後始末に奔走して、へとへとに疲れきっていたし、ようやく誕生した初孫――ヴァリエール家の後継者――に、夢中になっていたのだから。

しかしいっぽうで、カリーヌ夫人は夫からそれとなく距離を置き始め、長女・エレオノールと一緒に外出することが多くなっていった。

表向きは、アカデミーでエレオノールの身につけた魔法を、領地で実践するため、またルイズの醜聞を打ち消すためなどの理由であったが――彼女たち母娘の目的は、異邦の青年騎士に会いに行くために他ならなかった。

#２５６　始まらない物語ー自鳴琴ー（後書き）

あとがき

＞マンガみたいに、次々に時間とシーンが流れていくような展開にしたかったのですが。

文章では、冗長になってしまうきらいがありますね。どうも筆力不足が悲しいです。

新しくガリアに建設された街「アルビオール」は、某アビスの飛空挺から名前を取りました。

風石に関しては、プラタのごはん。そしてチートな先輩たちのお土産と、ガリアの特産品として採掘。大丈夫だ、問題ない（待て）。

ロマリア主従とワルドは……まあ、こんなもんでどうでしょう？

きょうのごはんも美味しい麻婆☆

友情出演のシルバパパン。先輩がハンター世界に遊びに行ったときに連れて来た。

依頼料は、通貨が違うので黄金と宝石の現物支給です。しれっとゲルマニア攻略しとる王様。これは酷い（笑）。

あとウェールズがんばれ。超がんばれ。

ルイズ。

一人目の婚約者は重罪人（ワルド）。二人目は逃げた男爵。三人目は遊び人で、財産持ち逃げ＋他に本命がいた。

四人目とは婚約中に、カトレアが結婚＋妊娠。のち出産で用済みフラグ。

ヴァリエール家は、カトレア回復＋跡取り誕生。かなり目減りした財産は、カトレアの子供を育てるために費やす。

とりあえず、ざっとまとめてみました。

※自鳴琴
：オルゴールの和名。オルゴールは、機械仕掛けにより自動的に楽曲を演奏する楽器の一つ。

※青金（あおきん）
：金と銀との合金で、銀を二十パーセント程度含むもの。青色を帯び、美術品・装身具などに使用する。

※人獣共通感染症（じんじゅうきょうつうかんせんしょう）
：「ズーノーシス（ｚｏｏｎｏｓｉｓ）」ともいう。ヒトとそれ以外の脊椎動物の両方に感染または寄生する病原体により生じる感染症のこと。感染している動物との直接接触やその糞や毛垢などを介して再感染が起きる。

#257　IF～リスタート　その1（前書き）

まえがき

＞感想でいただいた、ルイズ逆行ネタ。

六歳からリスタート（再起動）。

#257　IF～リスタート　その1

さあ、もう一度ねじを巻こう。
きりきりと回して。
ばねじかけが動くよ。
黒い歯車。銀の円筒（シリンダー）。
落としこまれたトルマリンがきしんで。
自鳴琴（オルゴール）は夜、奏鳴曲（ソナタ）を紡ぐ。

「……泣いているのかい、小さなルイズ」
その声に、彼女は顔を上げた。
聞き覚えのある声は、記憶にあるよりもずいぶん若く、そして思わず振り返れば、ルイズは小船に乗っていて、そこに砂色の髪の少年が話しかけているところだった。
端正な顔立ちの貴公子に、まだひげはなく、その面輪を見たとたん、強烈な苛立ちが湧き上がってくるのを、ルイズは睨み据えることで噛み殺した。
「泣いてなんか……いませんわ……！」
状況が、理解できなかったのだ。
それでも、頬を触れば、滑らかな肌は濡れていた。
もう二度目の結婚を済ませたはずの手は、小さくて、まるで子供のようで。
あたりを見回したルイズは、そこが自宅の――ヴァリエール家の、広大な敷地の中にある、湖の中だと、唐突に気づいた。
よくよく記憶を振り返れば、六歳の彼女の中には、さっき母親に

叱られて、大泣きしながらここへ走ってきた一連の流れが記録されている。
悲しいできごとがあると、いつもこの湖にやってきては小船の中で泣き明かすのが、幼いルイズの習慣だったのだ。

「どういうことなの……？」
いぶかしがるワルドを「気分が悪い」と追い返し――本当に、あの裏切り者の顔を見るだけで気持ち悪くなるのは本当のことだった――ルイズは、ピンクブロンドの髪を風になびかせながら、ドレスのすそをつまんで自宅へと戻ってきた。
「あらルイズ。おかえりなさい」
そこには、優しいカトレアと。
「ルーねえさま。大丈夫？」
可愛らしい妹――「ナナキ」が待っていた。

記憶にある、かつてのルイズの人生において、妹がいたことはない。
ルイズはヴァリエール家の末っ子であり、そのためにいっそう溺愛されていたのだ――かつては。
数々の不運なできごとが重なり、ワルドにそそのかされて家を出奔することになったルイズは、それから一気にヴァリエール家の厄介者になってしまった。
二人目の婚約者には逃げられ。
三人目の婚約者――最初に結婚した夫は、汚らわしい娼婦と駆け落ちする際に、財産まで持ち逃げし。
四人目の婚約者――二番目の夫も、彼女に隠れて、卑しいメイド風情と関係を持ったのを、ルイズが発見したので、いっそ殺してや

ろうと、屋敷にあった剣で斬りかかって――

――あら？

それからルイズの記憶は途切れている。

それに、彼女の中には、もう一つの記憶があるのだ。

それによれば、ルイズは六歳にして、風の魔法を得意とするドットメイジで、次女のカトレアは病弱で魔法を使うことを禁じられている。

そして四女のナナキは、ひいおばあさまにそっくりの、黒に限りなく近い、藍色の髪と瞳を持つ、ルイズよりも二つ下の女の子だった。

「ルーねえさま、いたい？　いたい？」

ルイズよりもさらに小さな手のひらを伸ばしてくる、小さな妹は、涙で目を潤ませて、賢明に姉を見上げてくる。

心配そうな、そのしぐさがいとしくて、ルイズはナナキを抱きしめた。

「……だいじょうぶ、よ」

幼いくせに、ずいぶん聡明な四歳児は、ともすれば姉よりも理解力や包容力を見せることがある。

妹の、藍色の髪に顔を埋めたルイズは、そのやわらかな感触に、苛立った心のささくれがなだめられていくのを感じていた。

――「ナナキ」なんて……名前は、気に食わないけど、この子は、本当に良い子だわ。

もはや、ルイズが時間をさかのぼったのは、明白なことだった。

けれども彼女は、もう「ゼロ」ではない。六歳にして風の魔法をドットクラスまで使いこなせる才能は、母・カリーヌをして大喜びさせ「烈風カリン」の再来も夢ではない、と思わせるほどの才能を見せていた。

代わりに、とでも言うかのように、末っ子のナナキには、長ずるにつれても、まったく魔法の適性は現れず、ヴァリエール家の面々は、小さな四女の将来を心配して、その胸を痛めるようになった。

しかし、当のナナキはというと、いたってあっさりとしていて、彼女が六歳になるころには、少々こまっしゃくれたセリフをのたまうようになったくらいだ。

「でも父さま？

お嫁さんになるのなら、魔法よりも、ダンスやお勉強を頑張れば大丈夫じゃないかと思います。

小さいころから仲良しのひとなら、きっと魔法が苦手でも、私と仲良くしてくださるひとも一人くらい、いらっしゃると思いますわ」

にっこり笑って家族を元気づけるナナキの愛らしさは、絶句もので、しかも彼女の言葉を裏つけるように、ナナキには仲の良い男の子がたくさんいたのだ。

「烈風カリン」を気取って、攻撃的な風の魔法の習得に熱を入れるルイズとは違い、ヴァリエール家の末っ子は、いたってのんびりと、穏やかな性格をしていた。

どちらかというと、次女のカトレアに似たのかもしれない。

魔法が上手く使えないことを補うかのように、たくさんの本を読み、ダンスや刺繍、礼儀作法のけいこもきちんとこなし。

そのいっぽう、魔法が使えないから、必然的に体を動かしたナナキは、元気な男の子たちの遊びにもついていけるだけの体力が育っていた。

本を読んだ知識や、もともとの聡明さからか、遊びをいっそう面白くできる機転にも恵まれていた。

何より――ナナキは、とても愛らしい女の子だったのだ。

「すごい！　小石が浮いたよ！」

「ま……まあ、こんなことくらい、かるいよ」

魔法ができない彼女は、そのかわり、ちょっと魔法を覚え始めた「お友達」のことを、うんと持ち上げて褒めた。

「これなら、そのうち大人のひとみたいに、空を飛べるね。良いなぁ……私は魔法が苦手だから……」

しょんぼり眉を下げる、藍色の瞳の女の子に、

「なら、飛べるようになったら僕が連れてってあげるよ！」

と言った「お友達」が何人いたことか。

「ありがとう！

楽しみにしてるね。がんばって！」

「何故かしら……あの子を見ていると、言い知れない敗北感が……」

その光景を目にする長女・エレオノールが、胸を押さえてうなだれることもしばしばだったとか。

もちろんルイズなどはその筆頭で、いつでも「凄い！」と自分をキラキラかがやく瞳で褒めてくれる妹を、守る騎士になるのだと息巻いていたことは蛇足である。

#257　IF～リスタート　その1（後書き）

あとがき

＞長くなったので、二つに分けます。

まあ、名前からオチは見え見えだと思いますが、せっかくのネタなので。

#258　IF～リスタート　その2

調べは優しく、刻(とき)を運んで。
心とかして、扉を招くよ。
誓いの下に。
眠る運命(さだめ)は、誰のもの？

ナナキ＝ネージュ＝ル＝ブラン＝ド＝ラ＝ヴァリエール。
それが私の名前。
三人の姉さまと、母さま、父さま、それから、おうちに仕えている、執事のおじさんやメイドのお姉さんたちみんなが、私の家族です。
一番上の姉さまは、エレ姉さま。頭が良くて、ちょっと不器用だけれど、父さま譲りの金髪がとてもきれいな姉さまです。
二番目の姉さまは、カティ姉さま。動物の「お友達」がたくさんいらっしゃる、おとぎ話のお姫様みたいなお姉さま。髪の色はかわいい薔薇みたいなピンク色だけれど、雰囲気は私と良く似ているって、家族みんながおっしゃいます。
三番目の姉さまは、ルー姉さま。とっても風の魔法が得意で、母さまの若いころにそっくりなんですって。髪も目も、ロゼワインみたいな色だし、私はルー姉さまの方が、カティ姉さまに似ていると思うのだけど。
姉さまたちは、みんな、母さまか、父さまから受け継いだ色を、髪や瞳に持っているのに、ヴァリエールの中では、私だけがどちらも藍色。

父さまは、ひいおばあさまが、同じ色をしていらっしゃったって慰めてくださいます。

夜空みたいな色だから、明るい色のドレスが、逆にきれいに映えるんだって。

そうおっしゃって、青い光がぼんやり浮かぶ、まっしろな石――ムーンストーンをかざった銀のティアラを贈ってくださいました。

たしかに、お日さまみたいなエレ姉さまの金髪や、ロゼワイン色の姉さまや母さまたちの髪では、この白い光は、お昼の月みたいにぼやけてしまうでしょう。

それに、私の暗い髪色なら、銀でも金でもよけいに光って見えるのです。

これはこれで得なのかな、と私は前向きに考えることにしました。

前向きに考える、といえば、もうひとつ。

私は、魔法が使えません。

杖との契約はできているのですが、どんなに先生が丁寧に教えてくださっても、思うような結果になりません。

なので、わりとあっさりあきらめました。

だって、できないことに時間を割くより、ご本を読んだり、お稽古をしたり、お友達と遊ぶ方が楽しいですから。

母さまは、厳しい方ですけれど、いっぺんだけ私に魔法を教えてくださったとき――ここだけの話、殺されかけたのですが――私が死にかけてしまってからは、無理に魔法を使わせるようなことはありません。

才能のあるなしは、言ってしまえば生まれつきなので、私に、ルー姉さまのような天性を期待されても、困ってしまいます。

あのときは、さすがに「私が嫌いなら、よそのおうちへやってください。死にたくありません」とベッドの上で、泣きながら父さまに訴えてしまいました。私は、戦いとか、そういうことには向いて

いないのです。
けっきょく母さまは、そのとき父さまにこっぴどく怒られたようです。私も、あれ以来、ちょっと母さまが恐いので、距離を置いています。
いくら愛情があるとはいえ、幼児を殺しかけてしまうくらい、やりすぎてしまうというのは、問題だと思います。基本的に、私は自分に害のあるひとには近づきたくありません。
私が逃げると、母さまは涙目になって謝ってくるので、ちょっと可愛いなとは思いますけれど。
でも、ぜんぶ許すわけにはいかないのです。こういうことは、きちんとケジメが必要なのだと、執事のジェロームも言っていました。
使わない杖は、いまでも大事に持っています。お守りのようなものです。私の、最初の「お友達」ですから。

「杖さん、杖さん。どうか私と契約してください」
五歳の誕生日――ルー姉さまが、それくらいに魔法を習い始めたので――私も、杖をいただきました。
契約は、ずっと杖を身につける、と教えられたのですけれど、私は、素直にお願いしてみることにしました。
「どうか、私とお友達になってください。私はナナキ。きっとこれから、ずっと、あなたといっしょです」
――そういえば、「杖さん」ではおかしいかな？　ちゃんとお名前があるんでしょうか？
首をかしげた私は、お願いしながら、尋ねてみました。
「杖さんには、お名前がありますか？」
思いつきでしたけれど、何となく訊いてみると、これまた何となく、話しかけられているような気分になりました。
「わからないので、ない、ということで良いんでしょうか……。

じゃあ、私が杖さんの、お名前をつけても良いですか？」
何となく、うなずかれたような気がしました。
「んー……きれいなもの、好きなもの……そういえば、この前見た、夜明けの空は、とてもきれいでした！」
お部屋のソファに座って、話しかけていると、さっきよりもずっと、杖の言っていることがわかるようになりました。
「れいめい？　夜明けを黎明というんですね？　じゃあ、杖さんは、これから『黎明』です」
金と赤と紫と、藍色が混じる、とてもきれいな空の色。私の好きな色でした。
そんな名前をつけてから、私はずっと「黎明」とおしゃべりができるようになりました。
みんなには内緒です。姉さまも父さまも母さまも、杖とおしゃべりはできないみたいなので。
ちなみに「黎明」との契約は、杖をいただいたその日のうちのことでした。
さっそく魔法を使えるか、と思っていた母さまたちには申し訳ないのですけれど、私に魔法の才能はないようです。
「黎明」は、そんなことはないと慰めてくれるのですけれど。
――嫌ですね、「黎明」。魔法が使えなくたって、私とあなたは「お友達」です。ずっと一緒なので、心配しないでください。

そういえば、この前、モンモランシ領へお出かけしてきました。
父さまのお仕事のついでに、私と、ルー姉さまも連れて行ってもらったんです。
カティ姉さまはお体の具合が悪く、母さまは、姉さまの看病に残ったので、私たち二人だけがついていくことになりました。
カティ姉さまに「私の分まで楽しんで、お土産話をしてちょうだ

い」と言われたら、残れなくなってしまうのです。まだまだ、姉さまには敵いません。

エレ姉さまは学院があるので、お留守です。

そこで、新しいお友達と出会いました。

「初めまして、モンモランシーです」

ハチミツ色の金髪を、縦ロールにセットしたお姉さん。大きな赤いリボンがお似合いです。

ルー姉さまと同い年だというそのひとは、モンモランシ家の娘で、父さまたちが、お仕事の話をしている間、おうちの側にある湖を案内してくれました。

えーと……ラグドリアン湖……？

だぶん、そんな名前だったと思います。

トリステイン王家と、水の精霊との「盟約」の交渉役を、長い間ずっと務めているおうちだとかで、その湖には、水の精霊さまが住んでいる、とのことでした。

モンモランシーお姉さんは、妹がいらっしゃらないのか、年下の私を、かなり可愛がってくださいました。

「こんな可愛い妹がいるなんて……羨ましいわ！」

「な、ナナキが可愛いのは当たり前よっ。あげないからね！」

にぎやかに話す、ルー姉さまとモンモランシーお姉さんに挟まれつつ、ボートに乗っていたときでした。

「いたっ」

船のささくれに、指を引っかけてしまった私は、傷口を洗おうと、きれいな湖に、赤い血の浮いた指をつけたのです。

すると。

「いとしごよ」

ざばあああっ。

湖の水が盛り上がり、透き通った水でできた、人形みたいなものが浮かび上がったのです。

「ひゃんっ！？」

その水人形は、ひんやりした手で、私の手を取ると、小さな傷口を撫でて、あっというまに治してしまいました。

びっくりしたのは、それだけではありません。

「み、水の精霊さまっ！」

「あ、あのっ？」

モンモランシーお姉さんに「水の精霊さま」と呼ばれたひとは、ボートから私を抱き上げると、水の上をするする移動していき――まるで姉さまや父さまたちが、私を可愛がるように撫で始めたのでした。

困ったのは、モンモランシ家の護衛さんたちです。

私たちがボートから落ちても、すぐ助けられるように、乗っていたボートはおろか、周りのボートにも護衛のひとたちが五、六隻ほども同行していたのですけれど、「水の精霊さま」の行動に、ぽかんとするばかり。

相手は人間ではありませんから、どうしたものかと手を出しあぐねている、といった感じです。

「単なるものの中に生まれし、いとしごよ」

すりすり、まるで猫みたいに懐かれて困っていると、「水の精霊さま」は上機嫌に言い放ちました。

「これからの交渉役は、このものにする」

――意味がわかりませんでした。

子供の私に、いったいどんな「交渉」ができるというのでしょう？

あわてるモンモランシ家の家臣さんたちが、とっても困っていることだけはわかります。

勝手に、ひとのお仕事を取ることは、良くないことです。

父さまの仕事を、執事のジェロームが交代できないのと、たぶん同じです。

それに、子供の私には、そういうお仕事は、まだまだ早いと思うのです。

「精霊さま、精霊さま」

私は、なるべくそっと、ご機嫌を損ねないように話しかけてみました。

「精霊さまは、どうして私を、そのお仕事につけようとするのですか？」

「む？……いとしごは、ここには住んでおらぬだろう。それを仕事にすれば、我に会いに来るだろう？」

ものすごくストレートな理由でした。

会いたいから、なのですね。

「私はナナキと申します、精霊さま。それでは、お友達になりましょう？

私は、お友達の精霊さまに、ときどき会いに参りますから、ここのおうちの方から、お仕事を取り上げないでください。

私たち、モンモランシ家の方と、お友達なのです。お友達が困るのは、私、とっても困るし、悲しいです」

モンモランシーお姉さんは、きょう出会ったばかりですが、私たちに、とても良くしてくださいました。そんな優しい人たちが、「路頭に迷う」のは嫌なのです。

一生懸命に、そう「水の精霊さま」に訴えると、水でできたひとは、首をかしげつつも、ぐにんとうなずいてくださいました。

「わかった。では、約束の証だ。我の力が込められた指輪を、いとしごに贈ろう」

そう言うと、「水の精霊さま」は、私の指に、青い石のはまった、銀色の指輪をつけたのです。サイズは大きいようでしたが、私の指が通ったとたん、それはピッタリのサイズに縮みました。

思わず、ぱちぱちと瞬きながら、あわててお礼を言いました。

「ありがとうございます！」

でも、私から差し上げるものがありません。困りました。

「いとしごよ。心配にはおよばぬ」

もう汝の血を、証として受け取っておるからな。

どうやら、傷口からあふれた血のことを、おっしゃっているよう

でした。
あと、「水の精霊さま」は、心が読めるようです。便利ですね。
「恐れぬものは珍しい」
くすくすと笑う「水の精霊さま」と、それからちょっとおしゃべりして、私はボートへ戻してもらいました。
再会をお約束してから、岸へ戻ったあと――ずいぶんモンモランシのおじさまに泣かれてしまったのには、びっくりしましたけど。
「父さま。そういうわけなので、ときどきモンモランシのおうちに遊びに行っても良いですか？」
「ああ。水の精霊がらみでは、許可するほかないだろう？
まったく……ナナキは本当に、私たちを驚かせるのが得意だな」
こつんとかるく頭を小突かれましたが、そのあとの父さまは優しい目で、私を抱きしめるだけでした。
あとで「水の精霊さま」から聞いた話だと、いただいた指輪――「アンドバリの指輪」があれば、魔法の苦手な私でも、水の魔法くらいは、かるいのだそうです。
――良いんでしょうか？　そんな貴重なもの、いただいてしまって。
とりあえず、もっとうんと勉強して、たくさん知識をつけたら、カティ姉さまを直せるくらいになるでしょうか？

それから、モンモランシ領からの帰りがけ。
馬車が壊れて困っている、貴族らしい方を見つけました。
いえ、見つけたのは御者のひとなのですが、貴族を無視するのもまずいかと、父さまに声をかけて知らせたのです。
「あなたは……！」
馬車の外にお出になった父さまは、たいそう驚いていらっしゃいました。

青い髪がきれいな、男の方だったのですけど。
「ふむ。トリステインは、ヴァリエール公爵とお見受けする。悪いが、手近な街まで乗せてもらえないか？
見ての通り、襲われてな……護衛は生き残ったのだが、馬車は大破だ。他の手勢は、いま残党を追撃している最中でな」
「それは……しかし……」
父さまは悩んでいらっしゃるようでしたけれど、横からルー姉さまが声を上げました。
「父さま！　困っている人を見過ごすのは良くないわ！」
「ルイズ……」
たぶん、いろいろ理由はあるのでしょうけれど、私も、この男の人を早く馬車で連れて行った方が良いと思いました。
「父さま。他の恐いひとたちが来ないうちに、街まで急ぎましょう？
一人か二人くらい増えても、馬車の速さは変わらないと思います」
青い髪の男のひとの側には、護衛の騎士らしきひとがいました。
伝言もできるでしょうし、馬も一頭残っていましたから、大丈夫だと思います。
「……そうだな。どうせ急いでも、変わらんな」
ためいきをつく父さまに、青い髪の男のひとは、ぱっと表情を明るくして、こちらに笑いかけました。
「やれ、ありがたい。小さな女神に感謝しなくてはな」
そして、馬車に乗り合わせる間、「ジョゼフ」と名乗った、その男のひとは、同じく小さなころから魔法が使えない私に、とても興味を持ってくれたらしく、気がついたらたくさんのことを話していました。
別れ際、ジョゼフさんは手紙を書くように約束すると、街で別の馬車に乗って、行ってしまいましたが――。
いまでは楽しい文通相手です。
――そういえば、どうしてあのとき、父さまは頭を抱えていらっしゃったのでしょう？

そうそう、私は魔法が使えないこともあって、護衛のひとをつけてもらっています。

父さまは私を外に出したくないとおっしゃるのですが、魔法の使えない私だからこそ、いまのうちにたくさんお友達を作っておいて、大きくなっても仲良くできるひとを増やしておきたいのです。

「ナナキお嬢さん、きょうはどちらへ？」

見上げるほど高い場所から、低い声が降ってきます。

浅黒い肌に、白い髪。ちょっといかつい顔つきも、その笑顔は優しいことを、私は知っているので恐くありません。

「グラモン家に、錬金の魔法を見せてもらいに参ります。遠出になりますけど、よろしくお願いします、メンヌヴィルさん」

ぺこり、と私が頭を下げると、少しいかつい顔に、困ったように苦笑を浮かべながら、白い髪のお兄さんは、私を抱き上げて馬車に乗せてくれました。

「ナナキお嬢さんは軽いな」

「ありがとうございます」

お礼に、頬へキスを送ると、ごっつく見える顔が、ますます優しげに見えてきました。

「まったく。こんなお嬢さんなら、公爵さまが心配するのも無理はねえ」

炎の魔法が得意な、このメンヌヴィルさんは、私が頼んで、護衛になっていただいたひとだったりします。

初めて見たとき、そのまっしろな髪が、雪よりも鋭いナイフみたいに思えて――目が離せなかったのです。

私の中の心は、何かが「違う」を首をかしげているのですが、何が「違う」のかは、さっぱりわからないまま、このお兄さんのお世話になっています。

メンヌヴィルさんの操る炎に、白い髪が映えるさまはとてもきれいで、そのことを話すと、このひとはとても嬉しそうに笑います。

メンヌヴィルさんは、中流貴族の三男か四男あたるのだそうですけれど、私のお願いで、軍から父さまが引き抜いてきてしまったので、ずっとヴァリエールで雇うつもりです。

跡取りでない貴族の男性は、食べていくのはなかなか大変なのだと、何かの折に、メンヌヴィルさんが話してくれたことがありますから。

メンヌヴィルさんは、人目のないところでなら、父さまや母さまも教えてくれない、危ないことや、気をつけた方が良いことを、きちんと教えてくれる、貴重なひとでもあります。

このひともまた、私の「お友達」の一人でありました。

――それにしても……私は、いったい「誰」を探しているんでしょう？

私は、物心ついたときからずっと、寝ても覚めても、「誰か」を探している気がするのです。

メンヌヴィルさんの、白い髪を見つけたときは、本当にどきりとしたんですけど。

「お友達」もたくさんいて、優しい家族に囲まれて、何不自由なく暮らしているはずなのに――きょうもやっぱり、私の心臓は、どこかへ引っ張られている気がするのです。

#２５８　ＩＦ～リスタート　その２（後書き）

あとがき
＞長くなったので、またもや分割。
ただのネタなのに、何故にこんなに長いのか（汗）。

とりあえず、ルイズが魔法の才能に恵まれている代わりに、じつは妹・ナナキが「虚無」。
でも魔法を使えないのに、水の精霊とかジョゼフ王とか、あちこちにコネを作るチートぶりを発揮。
この話のメンヌヴィルは、アカデミー小隊に入る前に引き抜かれたので、コルベールと出会うことも、ダングルテールに出征することもありません。

#259　IF～リスタート　その3

その日は、こっそりルー姉さまに呼ばれて、裏庭へ来ていました。
「使い魔を召喚しようと思うの」
ロゼカラーの目をかがやかせる姉さまは、そんなことを言い出しました。
めきめきと魔法の才能を伸ばしていくルー姉さまは、ご自分で使える範囲の風魔法は、一通りさらってしまったので、改めてコモン・マジックに興味がわいたのでしょう。
私も、ときどきは先生がついている状態で、義務的に魔法の練習をすることもあるのですが、例によってさっぱりです。ちょっと拗ねてなんかいません。いませんったら。
――知識だけなら、あるんですけどね。
その知識によれば、呼ばれる使い魔は、危険な幻獣などの可能性もあるので、子供だけで呼び出すことは避けなければならない、と本に書かれていたように思います。
ですが、そう訴えても、勝気なルー姉さまは「大丈夫よ！」の一点張り。
「魔法学院に入学する前に、使い魔を召喚しておきたいの！」
学院に通うようになれば、差はあれど、周りはみんな魔法を使えるようになるでしょう。
これまで、魔法を使いこなせば褒められてきた姉さまにとっては、周りに差をつけておきたい、といったところでしょうか。
「どうして、母さまと一緒になさらないのですか？」
尋ねてみると、ある意味、もっともな答えが返ってきました。
「失敗したら……お仕置きが恐いもの」
顔色を青くして言うルー姉さまに、私も大いに同情しました。

一度は死にかけたことのある身の上です。あの母さまのしごきに耐えていられる、ルー姉さまでも、お辛いのです。

だから、失敗しないように――もっと言ってしまえば、私たちだけなら失敗しても大丈夫だと――こんなところで練習しようとしているのでしょう。

――でも、うっかり成功してしまったら、やっぱりバレてしまうんじゃないでしょうか？

こっそり首をかしげながらも、ルー姉さまの熱意と迫力に圧されて、私はお付き合いすることになってしまいました。

執事のジェラールに相談しようにも、姉さまは、しっかり私の手首をつかまえていて、離してくれなかったのです。

困りました……。

――黎明、どうしましょう？

ないしん話しかけると、意外にも、私の杖である「黎明」は、乗り気です。むしろ、ルー姉さまのついでに、使い魔を召喚してしまえば良い、とゴーサインを出してきました。

どっちにしろ、私ではルー姉さまを止めるのは難しいです。私の最終兵器は、泣き落としくらいのものなのですから。

あとは、お友達のドラゴンに「お願い」とか、「水の精霊さま」に「お願い」とか。

……基本、他力本願です。無力な幼児に期待しないでください。

さて。

あれこれ考えているうちに、ルー姉さまは呪文を唱えていました。

「我が名はルイズ＝フランソワーズ＝ル＝ブラン＝ド＝ラ＝ヴァリエール。

五つの力を司るペンタゴン。我の運命に従いし？使い魔？を召喚せよ――」

――初めて試す魔法だから、上手くいかないかもしれない、。
そうルイズは思っていた。
でも成功したら――使い魔を呼んだのに、誰も褒めてくれないのは、何だか悲しい気がして。
叱られるのは嫌だけど、褒めて欲しい。
それは子供にありがちの思考だ。十歳になったばかりの彼女なら、当たり前のこと。
だからルイズは、いちばん可愛がっている妹のナナキを、この場に連れて来たのだ。
きっと彼女なら、ルイズが使い魔を召喚できたら、夜色の目をかがやかせて驚くに違いない、と思ったから。
そして呪文を唱えたピンクブロンドの女の子の前には。
「きゅいー？」
まっさおな鱗に覆われた、小屋サイズのドラゴンの姿があった。
「風竜……かな？」
ルイズの後ろにいたナナキが、さらりと藍色の髪を揺らして呟けば、「きゅい！」とドラゴンはそちらへ首をもたげた。
「そうなのね！　ちっちゃいのは賢いのね！」
「ドラゴンがしゃべった！」
まさかの事態に、ルイズが目を丸くするも、いつのまにか青いドラゴンに捕まっていた妹の方は、べろべろ幻獣に舐められている。
いや、あれは懐かれているのだろうか。
「かわいいのね！　イルククゥの妹にしてあげるのね！」
「ふぇ、うぷ。ねえさま、たすけてー！」
ちたぱた白い小さな手が振られるのに、はっと正気を取り戻したルイズは、手近にあった木材で、ゴン、とドラゴンの後頭部をしばき倒した。
「ったい！　何するのね！　おちびのくせに生意気なのね！」
「あんた、私の使い魔でしょうが！」
ぎゃんぎゃんがなり始めた主従未満をよそに、ようやくドラゴン

――風韻竜から解放されたナナキは、指にはめていた「アンドバリの指輪」の力を、少しだけ使って空気中の水分を集めると、ぱしゃぱしゃ顔を洗ってから、水分を飛ばした。

せっかくの貴重なマジックアイテムだが、こういうときに使えるのは助かる、とナナキは、さっぱりした面持ちで、振り返る。

ピンクブロンドの姉と、青い風韻竜は、まだ口げんかをしていた。

――やれやれ。

「我が名はナナキ＝ネージュ＝ル＝ブラン＝ド＝ラ＝ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。我の運命に従いし？使い魔？を召喚せよ」

藍色の髪と瞳を持つ六歳児が、身につけていた群青色の杖――それは、細く削り出した菫青石（アイオライト）に象牙の台座で造られたものだったが――を、くるりとふるうと。

ほわん、と青い鏡のような「扉」が現出し。

そこから、赤い影が何かと先を争うように飛び出してきたのを、ナナキは見ていた。

「あ――」

白い髪。

焦げた褐色の肌。

藤色がかった灰のような、鋼色の双眸。

見上げるほどの背丈と。

大きな手のひら。

それを目にするたびに、彼女の小さな胸の中で、何かがぱちりぱちりと弾けていく。

水の中の泡のように。降り積もる雪が溶けるように。

「――マスター」

万感の想いがこもった低い声で、眠っていた記憶が、解き放たれた。

体をさらう腕の逞しさも。
低く、それでいてあまく響く声の懐かしさも。
触れ合う「彼」の要素すべてが、ナナキの――七季の小さな胸をかき鳴らし、その琴線を歓喜でむせび泣かせた。
探していた。
捜していた。
――アーチャー。
抱き上げたとたん、すがりついてぼろぼろと泣き出した幼い主へ、褐色の肌の男は、宝物のようにそっと頬を寄せた。
そして、腕に「七季」の記憶を取り戻したマスターを抱いたまま、飛びすさる。
「何の真似だね？」
「その子は私の妹よ！　離れなさい！」
覚えたばかりの真空の刃で、赤い外套の男を攻撃したピンクブロンドの幼女は、そのロゼワインカラーの目を吊り上げて叫んだ。
「お断りだな。私は、彼女と契約するために呼ばれたのだから」
マスターに当たったらどうするつもりだ。
かつての――いったん巡った人生での――憎悪すらもって、睨みつけてくるルイズを鼻であしらい、人外の従者は、おのが腕に取り戻した――抱きしめたマスターの名前を呼んだ。
「七季。
これより我が弓は君と共にあり、君の命運は私と共にある。――ここに、契約は完了した」
主の小さな手に、令呪などはない。もちろん、彼の大きな手に、ルーンなど刻まれてもいない。
けれどたしかにこのとき、二人の間には、ふたたび主従の絆が繋がれたのだ。
ほろほろと、いとけない頬に流れる涙が、男の唇で拭われる。

「マスター。アーチャーと、君の声で呼んではくれないかね？」
「……ちゃ……」
嫉妬と苛立ちに燃え滾る、ルイズの魔法をひょいひょいかわしながら、赤い外套をはためかせる男は、あくまでも穏やかに七季へと語りかける。
「あーちゃあ……っ」
「ああ。どのような状況でも、私は君の幸せのために、最善を尽くそう」
頼りない、細すぎるほど細い腕で、きゅうっと首を抱かれた従者は、ピンクブロンドの魔女っ子など、どこ吹く風で幸せそうに微笑んだ。
七季の存在こそが、彼の幸せの証である、とでもいうかのように。
「こンのーっ！　当たりなさいよオオォォ！」

「……一番手は抜け駆けされたけど、そろそろ出ても良いよね？」
「霊体化は便利だな」
「主ランサーに同意する」
どさまぎでゲートをくぐったまっくろにゃんこと、同じく霊体化で滑り込んだ魔貌の槍兵、そのユニゾンデバイスが、こっそり交わした会話を知るものは、この時点では、まだいない。

＜＜　ＮＧシーン（またの名を没ネタ）

テイク＃１　先輩の場合

「ナナちゃん見っけー！」
おっ持ち帰りいいぃい！
「……あれ？」
主従逆のうえにパターンも逆で（召喚者がさらわれるという意味で）、拉致られエンド。

テイク＃２　＊＊士郎の場合

「しっかりして！
ルー姉さま！　すぐに水メイジと秘薬の手配を！」
「わ、わかったわ！」
「きゅいーっ！」
第四次聖杯戦争に巻き込まれ、瀕死のちびっこ士郎。衛宮切嗣に助けられる前に召喚されて、恩人となったナナキの従者として仕えることに。
「何だか……士郎といっしょにいると、懐かしいような、不思議な気分になる……」
ぎゅう。
「な、ナナキお嬢、さまっ！」
フラグ建築士の卵と、主従エンド？

テイク＃３　弓兵の場合

「やあ、こんにちは。君が、俺のマスターかな？」

爽やかな笑顔は、まるで夏空のよう。
「ええと……はい。お兄さんを召喚したのは、私です。ナナキって言います」
藍色の髪の幼女の前に現れたのは、白い外套に、青い革鎧を身にまとう、赤毛の青年騎士。
「ナナキちゃんか。こんな小さいのに、英霊を呼ぶなんて……遠坂もビックリの素質だなあ」
くすくす。
「あの。それで、私の使い魔になってもらえますか……？」
「ああ」
おずおずとナナキが見上げれば、すっと青年は、その長身を折り曲げて跪く。
「サーヴァント・アーチャー、召喚に従い参上した。これより我が弓は君と共にあり、君の命運は俺と共にある。――ここに、契約は完了した」
接吻けられた手の甲の向こう。
まぢかに見えるあかがね色の髪に、穏やかな笑顔が、とても力強い。
優しさの中に、折れない芯を秘めたものの笑みは、見るものを惹きつける。
差し出される手は、白く、大きかった。
「よろしく、マスター」
弓違いエンド。

テイク＃４　アンリの場合

「……どゆこと？」
浅黒い肌いちめんに広がる、落書きじみた、まがまがしい刺青。

短い黒髪に巻かれた赤いバンダナと、そろいの腰布。
そして金の瞳だけがあざやかで。
その体から放つ、まがまがしさとは裏腹に、きょとん、と目を丸くしている少年へ向かって、彼女は白く小さな手を伸ばした。
「使い魔さん？」
「使い魔？……てことは、アレか。アンタが俺のマスターってわけ？」
物好きにも程があるだろ、オイ。
げらげら笑いながら、それでも彼は、どこか困ったように目を細めると、赤い布を巻きつけた腰に手を当てて、言い放った。
「まあ良いか。そんじゃあ、可愛いマスターさん。ひとつよろしく」
「うん。
我が名はナナキ＝ネージュ＝ル＝ブラン＝ド＝ラ＝ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」
ちゅっ。
「……まさか、出会ってすぐにキスがくるとはな。なかなか大胆なご主人様だこと」
どこかの「正義の味方」の殻をかぶった反英雄は、小さな白い手のマスターを抱き上げて「こりゃあ将来有望だわ」と、うそぶいた。
せっかくだからエミヤ派生、アンリ主従エンド。

＃２５９　ＩＦ～リスタート　その３（後書き）

あとがき

＞まあ、記憶なし（？）でルイズの妹に転生した、オリ主が呼ぶ使い魔は、やっぱりアチャでしたという。

しれっと使い魔ズ滑りこんでますけど（笑）。

あと、オリ主も生前（？）の記憶を取り戻してますけど。

この場合、ヴァリエール家全体にチート補正がかかる可能性大。

特に、オリ主に何かあった場合、二代目「烈風」ルイズと、初代「烈風」カリンの親子が、大暴れするというトンデモ人災が発生。

アンリエッタ王女が、やっかいごと押し付けようもんなら、むしろヴァリエール王朝が起こるという。

以下、オリ主が召喚する使い魔がどんなのか、ワクテカされた読み手さまもいらっしゃるようなので、おまけとして没ネタをサルベージしてみた。

テイク＃１

＞順当にいくと、まず真っ先に呼ばれてもおかしくないのは、このひと。

ただ、この場合、オリ主がヴァリエール家から消えると、ルイズが真っ先に責められるわ、あとのヴァリエール家は末っ子をさらった人物を血眼で捜すようになるでしょうな。

テイク＃２

＞衛宮士郎になる前の、ちびっこ士郎を召喚という、色んな意味で原作ブレイク（笑）。

とりあえずＦａｔｅが始まらない。が、ヴァリエール家は平和。

執事見習いがひとり増えるのと、家庭内カップルが誕生して、公爵とエレ姉さんが血の涙を流すくらいか（待て）。

テイク＃３

＞弓は弓でも、一部の同人で見かけられる、白弓さんの召喚。

正英霊エミヤ。世界との契約ではなく、寿命を全うした死後に、まともな英霊として祭り上げられた「衛宮士郎」。

「幸運値ＥＸ」とか「聖剣の鞘」あったりとか、サーヴァントなら「セイバー」適性もあったりとか、とにかくフルスペック＆チート無双な「正義の味方」。

これ固有結界に「剣」としてセイバー・アルトリアが入ってたりして、この話のアーチャーでも、ちょっと涙目な正英霊エミヤさま。

子守りだって全力投球。

みため白いのに腹は黒いよ！　自重なにそれ美味しいの？

＞テイク＃４

以前に「アンリ救済希望」と感想をもらったので、ついでに書いてみたり。

見た目は、衛宮士郎（少年）そっくりのアンリ。オリ主、ニアピンと言えないこともない。

書き手はエミヤシロウに夢を見すぎ（猛省せよ）。

士郎と嫁ズ（イリヤとか桜とか凛とか）を召喚した場合、契約はないだろうし、バッサリ切りました。

幼女オリ主ににちゅーされて、嫁ズにフルボッコにされる士郎とか、誰得？

筆力がなくてすまんです。

#２６０　始まらない物語ー星のオルゴールー

――夢を見た。

その夢の中では、ルイズの使い魔は、最初に召喚した平民で。

スケベで生意気で向こう見ずで、ちょっと目を離すと騒動を起こす、とんでもなく手のかかる犬で。

それでも、ご主人様を守るために、命を投げ捨てて、七万の軍勢に突っ込んでいくようなバカで。

ルイズも、そんな平民を、記憶を消したくなるほど胸を痛めるくらい好きな、バカで。

たくさんの冒険と、苦しみとを、わかちあう――そんな物語。

――そして、もうひとつは。

六歳から人生をやり直して、可愛い妹と、風韻竜の使い魔と、魔法の才能に恵まれた道を歩く、夢。

どちらを選ぶかと、問われたなら。

「妹……欲しかったな……」

石で組まれた灰色の天井から逃げるように目を閉じる。

――男なんてもう、こりごりだ。

ルイズを利用し、ルイズを貶め（おとし）、ルイズを蔑んだ男なんか。

あげくのはてに、彼女がこんな場所――牢獄に押し込められる原因なった、男なんか。

「夫殺し」として、旧王都・トリステインの、高い塔に幽閉されているルイズには、知る由もない。

もはやトリステイン王国という国はなく。

その王家は取り潰され、王女アンリエッタと、その母である大后・マリアンヌは、旧トリステイン貴族の反抗を防ぐための人質として、ガリアで幽閉されていること。

皇帝アルブレヒト三世を失った帝政ゲルマニアは、権力闘争の末に、上層部が潰し合い――その結果、据えられた皇帝は、傀儡であるために、アルビオンを占領、併合したガリア王国が実質、ハルケギニアを統一したこと。

他のトリステイン貴族のほとんどが、そのまま爵位を据え置かれいている中、トリステイン王族の血を引く、ヴァリエール家は、ガリアから危険因子と目され、爵位を取り上げられたうえで監視されていること。

その真相は、ルイズという「虚無」を産んだ家系であるが故に、ふたたび「虚無」を生み出すかもしれない、という可能性を考慮された結果だということ。

トリステインが、国として滅ぼされる前に、この塔に閉じ込められたルイズは、ただの囚人だ。誰も教えてくれはしない。

それすらも、かつて幼なじみであった少女に、アンリエッタがかけた、せめてもの情けだったのだとは、知らないまま。

ヒマを持てあます彼女は、きょうも夢見る。

優しい、眩しい、ルイズが歩いたかもしれない物語を。

最後の王女が差し入れた、星を象る(かたど)オルゴールが、きらきらと澄んだ音色を奏でていた。

いっぽう、ところ変わってガリアでは。

「ジョゼフ陛下、ばんざーい！」

「ガリア王国、ばんざーい！」

「ウェールズ殿下、ばんざーい！」

「イザベラ殿下、ばんざーい！」

歓呼の声が満ちみちる中、パレードは進む。

まっしろな礼服を着た金髪碧眼の美青年と、きょうの空にも負けない、青い髪があざやかに映える、純白のウェディングドレスをま

とった花嫁を、馬車に乗せて。
　既に王宮で式を挙げた、このロイヤルカップルは、ガリアとアルビオンの国民の、希望の象徴として、ぐるりと王都をお披露目に回るのである。
「いやー、盛況だねー」
「イザベラ殿下、アーチャーの縫ったドレスがお似合いです」
　そんな光景を、上空からデバガメ――もとい、見守っているのは、ドラゴンに乗っけてもらっている、異世界トリップご一行さまである。
「食うか？」
「食うかっ！」
　べむち。
　――訂正。
　どざまぎで、ガリアの王様も便乗していらっしゃる。
　まっかな麻婆が煮えたぎる皿を抱え込み、おのが娘の晴れ姿を見物しているジョゼフは、麻婆入りレンゲを差し出したところ、にゃんこリドルに肉球パンチを食らって、いかにも残念そうに眉尻を下げた。
　ちなみに、泰山麻婆の臭気と熱気は、おのおのバリアジャケットでガードしているので、このメンバーにとっては問題ない。
　いやバリアジャケットが必要な料理って何だ、というツッコミはあるかもしれないが。
「あんたパレードに加わってなきゃいけない立場じゃないのかよ、王様！」
　才人も横からツッコミを入れるが、ハルケギニアの頂点に君臨するはずの、青い髪の美丈夫は、からから笑ってまっかな麻婆をかき込んだ。
　どちらも、さっきまで結婚式に列席していたので、きちんとした正装だ。はたから見ると、男前率が高いため、独身貴族の多い、竜騎士たちがひそかに「おのれリア充（びけい）爆発しろ！」と叫んでいるとか、

いないとか。
「何。どうせ肝心なのは、花嫁の方だ。新郎ですら添え物だというのに、いい年の親父がしゃしゃり出ても面白くあるまい」
あんた親父には見えませんけどね。
七季や真言、リドルや才人までが胸のうちでシンクロ率四百パーセントのツッコミを入れた。
「とかなんとか言いつつ、次代の顔を印象付けるのが狙いなのだろう？」
アーチャーが冷静な指摘を挟んでから、その鷹の目で、あらためてドレスの出来を検分する。「千里眼」は、なかなか便利なスキルだ。
「ふむ……いい仕事をした。素晴らしい花嫁だ」
「そうだろう、そうだろう！」
やけにはしゃいでいるジョゼフを、才人が心配そうに黒い目で見やる。
「ワインの飲みすぎじゃねーの？」
「まあ花嫁の父というやつだ。大目に見てやりたまえ」
「そんなもんかねえ……？」

「次は、ジョゼットの番だな」
感慨深そうな面持ちで呟いたジョゼフに、七季たちはこぞって、ぱちぱちと目を瞬いた。
「え？」
「あー……ゲルマニア皇帝との縁組、ですか？」
思い当たるふしのあった七季が、ぽつりとジョゼフへ相槌を打った。
体面上は、ジョゼフの庶子であるとして発表されているジョゼット。

本来はシャルルの娘として生まれた彼女は、イザベラにとってはイトコに当たる。

しかし、修道院に預けられていた彼女は、貴族として、また王族として教育を受けるために、最初は王宮で暮らしたのち、ガリアでも大公の位を与えられた、クルデンホルフ家へと養子に出された。

あくまで、紙の上でのことである。

シャルルの娘・シャルロットたちの屋敷が炎上したことをもって、ジョゼフはオルレアン大公家を廃絶し、その代わりにクルデンホルフ大公家を、ガリアに据えた。

新参者の大公家に、ガリア貴族の反発は必至だったが、そこにジョゼフは、自分の庶子と発表したジョゼットを入れたのだ。

これによって、クルデンホルフは王家の血筋を、紙の上だけでも入れたことになる。

そして、ガリア王家の血を引くジョゼットは、いずれゲルマニアに嫁がせる――新興国のゲルマニアに、喉から手が出るほど欲しかった、始祖の血が入るのだ。

もっとも、そう遠くないうちに、ブリミル教の勢力は、一部のマトモな聖職者を残して、根こそぎ狩られるのであるが。

「あれは意外と頭の良い娘でな。ジョゼットなら、上手くゲルマニアも転がせるであろうよ」

「そりゃあ……」

――ジョゼットちゃん、ジョゼフさんのこと好きだからなぁ……。

七季も真言も、えらく微妙な表情を浮かべて、言葉を濁した。

勉強すればするだけ、ジョゼフが褒めてくれるので、ジョゼットの、魔法が使えないながらに発揮する多才ぶりは、もはやチートの域にある。

とりあえず泰山麻婆に耐性を見せた時点で、「乙女心、パねぇ」と七季が呟いたのは、間違っていないはずだ。

かいがいしくジョゼットの面倒を見ていたイザベラからして、「この子、マジで父上の隠し子なんじゃ……？」と疑いをかけたくら

いだ。
馬に蹴られたくない彼女たちは、そ知らぬふりで、お口にチャックをした。
――ジョゼットちゃん頑張れ。超頑張れ。
ひごろからシェフィールドとジョゼフのイチャラブを目の当たりにしてくじけない恋心は、チャレンジャーというしかない。
ともあれ、ガリアを挙げた祝典は、国中に明るい希望をふりまきながら、進むのであった。
一部の悲嘆を置き去りにして。

ガリアのとある尖塔。
王都が沸き返るさまを、高い場所から、陰鬱な目で眺める姿があった。
トリステインの元王女・アンリエッタそのひとである。
「ウェールズさま……」
政略結婚のために婚約したはずの、ゲルマニア皇帝・アルブレヒト三世が変死を遂げ、後ろ盾を失った小国・トリステインに、時勢は容赦しなかった。
ウェールズ暗殺未遂に対する賠償金を、捻出するのにも苦労していたトリステインは、あっけなくガリアに征服されたのである。
それからは、あれよあれよというまに、アンリエッタは虜囚のひとと成り果てた。
王座に就いていないのが幸いしたか、首を取られることこそなかったが、人材としてはトリステインを支配するに足る能力なし、とジョゼフからみなされた彼女は、王女の座からも引きずり下ろされた。
ジョゼフに言わせれば、属国としておくにも、マザリーニの方が、よほど使える、という話だったのだ。

物語のように、他国の王子に恋したアンリエッタは、恋々とその未練を断てず、いまだ幽閉された塔の中で、自分とウェールズが結婚する、幸せな「もしも」を夢に見る。
けれどそれは、やはり夢でしかなく、ぬくもりもくれない。
ただ彼女は、きょうの夜も、流れる星に願いをかけるだけ。
「ウェールズさま、ウェールズさま、ウェールズさま……！」
そこに滅びた国のことなどなく、残した民のこともなく。
失くした恋ばかりを口にする娘に、マリアンヌが「どこで育て方を間違ったのでしょう……」と重いため息をついていることにも、気づかずに。

そして。
「じゃ、また」
ひらりと手を振る栗毛の巫女さん。
「お世話になりましたー」
ぺこりと頭を下げる、ポニーテールの黒髪娘。
「うむ。ところでジョゼットのドレスも頼みたいのだが」
頷く青い髪の王様に、呆れ顔の青年。
「……これからも付き合う気、まんまんッスね」
「かまわんが。きちんと畑の世話もするように」
小言めいたセリフを残す、赤い外套の弓兵と。
「えっとえっと。ごちそうさまでした！」
くりっとした青い目で、お礼を言う高町家の末っ子。
そのたもろもろ、別れを告げて。
『お幸せに！』
見送りに加わった、ウェールズとイザベラへ、思いっきりの祝福を込めた言葉を贈る。
「あんたらもね！」

「ありがとう！」

そして星が流れる夜に、異邦人たちは、虚空に開いたジッパーへと消える。

これからまた、始まる新たな物語に向かって。

#２６０　始まらない物語ー星のオルゴールー（後書き）

あとがき

＞ちょっと駆け足ぎみでしたが、これにてゼロ魔編「始まらない物語」は終了です。

長い話に、お付き合いありがとうございました！

てか「ダンディＪＯＺＥＨＵ」だけで五十話以上って何さ……（汗）。

そして勝手ながら、七月中は、更新をお休みさせていただこうと思います。

さすがにちょっと息切れが。

そのあいだに、追加しそこねた登場人物などの説明などを加えて、新しい話を始める前に、整理したいのです。

次はネギま編……と思いきや、番外で、聖杯戦争やらかします！

気がついたら、ユニーク４０万とかいってたんですよ。お気に入りも９００件突破してたんです。

重ねて御礼申し上げます（平伏）。

これは祭りっ！

というわけで、８月には帰ってきます（・∀・）ノシ

しばらくお待ちくださいませ。

#261　テスト

「は？」

引き締まった褐色の肌の相貌が、けげんそうに眉根を寄せる。

ここは神門（みかど）神社の居間――ではなく、社殿の中である。

いましがた、意外な申し出を黒髪の青年から聞かされたアーチャーは、手元の鏡を磨くのを止めて、あらためて相手の端正な顔を見つめた。

鏡は社殿に飾られているもので、百年単位の古さがある、この神社の祭具のひとつである。

「テストを受けないかと言われてもな……いったい、何のメリットがあるのかね？」

そっと金属製の鏡を桐箱に戻したアーチャーは、板張りの床に胡坐をかいたままで、腕を組んだ。その膝には、鏡を入れた桐箱が載っているので、具合が良いのだ。

いっぽう、後輩の従者に雑用――もとい、仕事を任せていた神門（みかど）青年は、同じく胡坐をかいた状態で、白い髪の男にグラスを勧める。

冷たい麦茶の入っているガラス容器は、煙るように汗をかいて、朝方とはいえども涼しげに見える。

「それはだな――」

朝の涼やかな空気の中に、青年の低い声が流れていった。

七季が課外授業に出ているあいだ、暇をもてあましているアーチャーが、こうして神社の手伝いをすることは珍しくもない。

まがりなりにも受験生である少女は「夏休み？なにそれ美味しい

の？」というスケジュールで、登校している。

朝は六時起き。七時には登校。

英語・数学・国語のほかに、理科や社会科の選択教科が日替わりで一教科プラスされる。一教科あたりの時間は、休暇前と変わらず、およそ九十分。

基本的に、月曜から金曜までは昼過ぎまで授業。だいたい一時過ぎで課外授業は終わる。それから帰宅できる――と思うなかれ。

七季の学校は、夏休み明けの九月に、課外テスト――課外授業の成果を確認するという、何とも生徒にとってアレなテストだ――文化祭、体育祭、とイベントがめじろおしなのである。

県下でも進学校と呼ばれる部類の公立高校は、受験生がせっぱつまらないうちに、十月ではなく、早めの九月に済ませてしまう、という腹積もりらしいのだが。

何の冗談か（冗談でも何でもなくリアルなのでタチが悪いのだが）、文化祭の三日後に体育祭、という死亡フラグまっしぐらのスケジュールが組まれていたりする。

七季が真顔で「何なの？　バカなの？死ぬの？」と、かつて同じ高校に通っていた先輩――真言――と顔を合わせて、グチっていたのも無理はない。

当然ながら、それは生徒にしわ寄せが来る。

そりゃもう、これでもかってくらいに。

おかげで、七季たちの高校に通う生徒たちは、夏休みのあいだ、課外授業のあとに、体育祭の準備と、平行して文化祭の準備をやるはめになる。

文化祭は合唱コンクールなんてものもあるので、もちろん合唱の練習は必須。

不真面目なクラスはサボっているところもあるのだが、クラスの担任は、生徒に任せっきりのくせして、賞を取れと口だけは出してくる。

音楽室は、クラス持ち回りでしか使えないから、ＣＤを流しての

教室練習。

指揮者、ピアノ奏者の割り当てはあるし、それとは別に、体育祭のリーダーを決めたり、そのリーダー自体の集まりもあり、クラス発表の企画も立てて、制作に取りかからなければならない。

三年生である受験生は、建前上は「辞退できる」のだが、これまた自主性に任せるとは名ばかりの、仕事はしないクラス担任が、「特別クラスだから賞を目指せ！」とうるさい。

もちろんクラスメートの殺意は、常にクラス担任に向かって、心はひとつ。しかし彼らは基本、真面目な人間の集まりだ。成績が高いというのは、ある程度は似通った方向性があるものだ。

打算もきっちりあるだろう。いわく「こんなところでこんなやつのために人生を棒に振ることはない」。あと一年たらずの辛抱である。

体育委員は、もちろん体育祭の準備に駆けずり回るから、クラス発表の制作については、ある程度の容赦がされる。だからといって、まったく関わらないわけには、もちろんいかない。

体育祭に向けての合同練習、クラス発表を制作するための買出し、作業班のグループ分け、そんな過密スケジュールを、クーラーもない暑い中を駆け回る生徒たちの群れが、学校ひとつ分あるわけだ。

一言で表せば、カオスである。

かてて加えて、七季のクラスというのは、いわゆる特別クラス。文系と理系に分かれてはいるものの、特クラという場所には、できるやつ――あるいは責任を押し付けられやすいやつ――各部活の部長や副部長、委員会の委員長や副委員長が集中しており。

これまた部活や委員会で、もしくはその部長などのポスト引継ぎで忙しかったりする。

早いものは、これを期に部活を引退するものもいるのだが、運動部などは夏の大会などが終わるまでは、という期限があやふやなものも多いし、文化部もまた、やすやすと引退できるとは限らない。

七季も七季で、いちおう文芸部の部長を務めていたりするから、

文化祭に向けて発行する部誌の、原稿集めや、自分の作品の執筆、編集やらデータ起こしをしなければならない。

委員会の方も、彼女は図書委員なので、持ち回りで放課後の（夏休み中でも）貸し出し・返却業務、平行して、夏休みのあいだだからという理由で、蔵書の整理が待っている。

かように、七季の高校生ライフは、忙しいことときわまりない。

そのうえ、夏休みの課題とは別に、課外授業の宿題が、ほぼ毎日出されるのである。

もう一度言おう。

夏休み？　なにそれ美味しいの？

「まあ、私はまだマシな方なんだけどねー。体育祭のリーダーにもならずに済んだし、いまはピアノやってないから、合唱も歌うだけだし。

通ってる塾も個人のので、宿題を教えてもらうのがメインだから、そこまで塾の課題も多くないし」

神門（みかど）神社のバイトが終わり。

夕食を食べていけ、と誘われるままに、ちゃっかり神門（みかど）家の食卓に加わっている黒髪の少女は、そんなことをのほほんとした口調でアーチャーにのたまった。

「マシなのか……」

げっそりとした響きの声でうめくのは、褐色の肌の男だ。

ちなみに、日ごろ七季の就寝時間は、午前二時前後。下手をすると三時にまでずれ込む。起床時間が朝の六時だから――睡眠時間は、推して知るべし。

自分の高校生時代など、とんと磨耗の彼方だが、ここまで忙しかっただろうかと、つい振り返ってしまう錬鉄の英霊である。

彼は「衛宮士郎」時代、それは雑用で駆け回っていたものだが、

ここまで勉強には追われていなかったような気もする。
ただし、遠坂凛とロンドンに行くために、彼女と知り合ってからは、詰め込み式で頭がパンクしても強制再起動されてのスパルタ教育だったけれど。
魔術の鍛錬は、魔力の高まる時間に合わせてやるのがセオリーだったから、宵っ張りだったのは、さておくにしても。
「他の子は、普通の塾に通ってる子も多いだろうしね。このうえ塾の課題まで増えたら発狂する」
はぁ。
やれやれとかぶりを振る七季は「ねー」と同じバイト仲間であり、幼なじみでもある少年たちに話を振る。
「そうですね。あのころに比べたら……ずいぶんマシかと」
栗毛にふちどられた秀麗な面輪に苦笑を浮かべるのは、伯言だ。
「ああ。付属中の受験科目は、八教科だったもんな」
同じ中学を受験したことのある霜夏も、若白髪の頭をこくこく振って頷いてみせる。
その隣に座る、少女の黒い瞳が、ふと遠くをさまよった。
「小学生のころ行ってた塾はさ、いちおうSクラス……特別クラスだったんだけど、凄い子がいてさ。
よそのガッコの子で、塾を二件かけもちしてたんだ。そのうえバレエもやってて。ご飯食べる暇がないからってんで、塾の事務所で角砂糖もらってゴリゴリかじってたし」
ああまでしないと、トップにはなれないもんかと、ぶっちゃけ戦慄を覚えたものです。
「可愛い女の子だったんだけどねぇ」
元気かなぁ。
しみじみ頷きながら、七季が話す内容に、受験戦争の恐ろしさを改めて知るアーチャーである。
生き死にのかかった聖杯戦争こそくぐりぬけた猛者だが、彼は、そういう一般的な競争においては、あまり覚えがない。

高校の終わりからは、ほぼ裏家業に近い、魔術師としての世界にどっぷり浸かっていたからだ。

もちろん、魔術師の専門学校である時計塔では、死に物狂いで勉強することになったが、それはいわば大学に相当する。

「……マスター。せめて一日に読む本を減らせば」

アーチャーの知る限り、この少女は、日に三冊は本を読んでいる。最低でも、だ。

高校の図書館から借りる本が三冊。それに加えて、近所の県立図書館から借りる本や、先輩や友人から借りる本、自分で買ったものなども日によって加わる。

その中にはマンガも入っているが、それにしても多いのではないだろうか。

「あー……それな。無理」

きぱ。

「私の得意科目が国語で、それを支えてるのは読書量ってのもあるんだけどさ。

アーチャーが来る前に、本断ちしたことがあるんだ。一週間で禁断症状が出て、体がおかしくなった」

「は」

まっくろな少女の瞳はマジだった。黒髪にふちどられた面輪は、無表情で真顔だ。

「私のストレス解消って、もう本か食べ物か、このバイトしかないからな。

ひとつ減らしてみたんだけど、ただでさえ持病の偏頭痛が、痛み止め飲んでも起き上がれないレベルに悪化してなー……あれは酷かったわー……」

あははは。

夜色の瞳は、神門（みかど）家の居間をさまよって、虚ろに瞬く。

「もしかして、学校で倒れたのって、それが原因？」

霜夏の問いかけに、こてり、と少女が首をかしげて、考え考え答

えやる。
「やー。担任が嫌いなのもあると思うけど、たぶん半分くらいはそれが原因かも？」
言われてみれば、ちょうどその時期だったなぁ。
七季は、ストレスがもろに体に出るタイプらしい。
「体の方が、先にブレーカー落とす感じだから、まだ対応は楽っちゃ楽だよなぁ。本当にヤバくなる前に、体がギブアップするから。あれ以来、担任もうるさく絡まなくなったし。まあ目の前でぶっ倒れて、後頭部打って、気絶したからね！」
私のこと殺したかと思ったらしいよ。
はっはっは、と朗らかに笑う少女に、アーチャーはしんそこツッコみたい気持ちでいっぱいだった。
――そこは笑うところじゃないっ！
男の眉間に、ふかいふかいシワが刻まれたのは、いうまでもないだろう。
叫ばなかったのは、口の中におかずが入っていたからである。
「や。私はマシな方だって。ずっと前の先輩……あ、ガッコの、って意味だぞ？
みためはまったく変わらないのに、ある日ばったり倒れて、病院で調べたら、肝臓だったかな？
ほら、人間の栄養を糖に変えて蓄積するじゃん。あれがすっからかん――まあ比ゆ的にだと思うけど――とにかく、体が栄養失調みたいな状態で入院するはめになったってひとも出たそうだし」
ちなみに教師から聞いた実話だ。
「あと私の友達でも、何人か一年のときとは別人みたく、がりっがりにやせちゃった子とかいるし。自律神経失調症か何かの病気じゃないかな。ストレス性の」
二年までは私と変わらない体格だったのに、一年とたたないうちに、あのやせ方は異常だと思う。
「うちの学校、ことに特クラは、そんなの珍しくも何ともないから

なー。いまさらいまさら」
ぱたぱた手を振る七季と、「そうですねえ」と頷く伯言、「うちも似たようなもんだなあ」と、理系の特別クラスに在籍する霜夏もぼやいて、もくもくと食事を取る姿に、改めてアーチャーは戦慄した。
――良いのかそれで！
「病院には行ったのか？」
その子は。
「行っただろうけど、無理じゃない？
だって受験生って環境じたいがストレス源なんだからさ。それを取り除かない限り、解決はしないと思う」
私も話を聞くぐらいが関の山だしなぁ。
そう言う七季も、へにょんと眉尻を下げて、残念そうに、心配そうに呟いているところを見ると「同病相哀れむ」という感じなのだろうか。
それにしても、壮絶な話である。
「ついでに言うと、うちの高校、自称『進学校』でプライドだけは高いから、『塾に行かなくても大学に進学できる』が持論なのね。
阿呆ほど宿題出してくんの。他の教科の担当なんかとは、絶対話し合ったりしてないね、ありゃ」
真言も、同じ高校の卒業生だからか、怨念じみた黒い笑みを浮かべつつ話に加わってくる。
「ですよねー！
都会のガッコだと、受験勉強は各自に任せて、って感じで、最低限の宿題しか出さないところも多いみたいなんだけど」
塾の方が、テストのノウハウとか絶対わかってるのになぁ。
そんな世間話をしながらの食事は、きょうもなごやかに（？）終わろうとしていたのだが。

「え。アーチャー、帝都心霊庁の使い魔テスト、受けるの？」

従者の話を聞いて、あどけない七季の顔が、見るからに引きつったのを、けげんそうに瞬く鋼色の双眸が映していた。

「ああ。神門から聞いたのだが、使い魔の、資格試験のようなものらしいな。何でも、それに合格すれば、認定されるランクに応じた手当てが、マスターに出るのだとか」

一般的に、使い魔というのは、主の力量に関するバロメーターになるとみなされている。

その量や質を見るだけでも、ある程度の予測はつくとされる。

例を挙げるなら、チート巫女さんこと、真言は、自立思考を持つ式神を多数従えている。そのジャンルは雑多だが、妖怪や精霊、中には神格を有するものさえいることからして、彼女が尋常ならざる使い手なのは明らかである。

実力者には、それ相応の手当てをつけることで、職員の向上心を煽るシステムのひとつといえるだろう。

使い魔の種類は、人によって千差万別で、獣を使うものも少なくないことから、たいていはその維持費などに当てられる。

なお、余談ではあるが、七季たち――霜夏と伯言を含むバイトーズ――は、書類上は真言の「眷属」として登録されている。

ゆえに、いまだ高校生ではあるものの、彼女たちは暫定的に「臨時職員」として帝都心霊庁からあつかわれているのだ。こちらは真言経由で「神使手当て」なるものが支給されている。神社のバイト代とは別に。

アーチャーが「使い魔」としての資格を取ったなら、同じく真言経由で、「臨時職員」である主・七季に手当てが支給されることになる、と神門は説明した。

ようするに「資格手当て」である。ただし、いくら職員が使い魔を持っていても、あくまで「手当て」の対象となるのは、「資格」持ちの使い魔だけであることを明記しておく。

「主ランサー、これは我々も受けるべきではないだろうか？」
「ああリイン。俺もそう考えていた」
「ちょ、待て待て待て――っ！」
銀髪紅眼の美女と、黒髪金睛眼の美丈夫の参加表明に、あわてた少女のソプラノが上がったことは、いうまでもない。

で。
「どこからどう見ても『取って来い』ですよね、わかります」
七季の肩口に乗っかっている、まっくろにゃんこ――リドルのツッコミに、彼女はふかぶかと嘆息し、ちょっぴり眉間にシワが凄いことになっている従者の、精悍の横顔を眺めていた。
場所は、帝都心霊庁の地下にある体育館である。
いましがた、七季は持っていたソフトボールを投擲し、傍らの男に「えと……取って来て？」とお願いしたばかり。その身長差から、彼を見上げて首をかしげることになったのは余談だろうか。
「だからさ……こういうの、アーチャーにさせるのもどうかと思ったんだよ……」
はうぅ。
ふつう使い魔と言えば、日本では「式神」もしくは「式紙」が一般的だろう。
最低ランクの「使い魔」資格テストは、まず「主人の指示に従うこと」「目的を忠実にこなすこと」の二点が合格要素なのだ。
つまりは、いちばんありがちな「あれ取って来い」「これ探して来い」がテスト内容になる。
警察犬のテストと似たり寄ったり、というか。
「七季殿」
「取ってきました！」
いっぽう、きらきらした目で駆け寄ってきたのは、黒髪の美丈夫

――ディルムッドと、長い銀髪を三つ編みにまとめたリインフォースである。二人の手には、それぞれ七季が投げたソフトボールが握られていた。

こちらは、あまり疑問に思わなかったらしい。

――あー。ディルとリインがわんこに見えるわー。

自重せよ！

七季が自分に言い聞かせながら、ふるふるかぶりを振った。その動きに合わせて、ポニーテールの黒髪がひょこひょこしっぽみたいに揺れているのが、猫みたいに見える、というのは、使い魔たち共通の感想である。

ついでにリドルはというと。

「アクシオ、ボール――来い」

呼び寄せ呪文で、ちゃっかりボールを両前脚でキャッチ。

「はい、ナナキ」

――ちょ、可愛い！

ルビーアイの黒猫が、たし、と両手（？）で捧げ持つソフトボールを差し出した。

「はいリドル。ありがとーv」

ちゅ。

まっくろにゃんこの可愛さに、思わず七季が、蕩けるような笑顔を浮かべて――ついでにキスしてしまったのは、少女のうっかりというか、もふもふ好きが災いしたというか。

そのあとすぐに、七季の周りが騒がしくなったのは、また別の話。

けっきょく。

「アーチャーもリドルも、ディルもリインも、みんなそろって資格取ったのか……」

それも大学卒業相当の教養を認められた、「上級一種」の資格で

ある。ぶっちゃけ、ここまで来るとペーパーテストになり、公務員試験レベルの内容だったはずだ。

明らかに、使い魔の方が、マスターよりもハイスペックである。

リインはデバイスなのだが、そのへんはどうやらスルーされた模様。

とりあえず帝都心霊庁としては「自立思考があって、独立して術が使える時点で使い魔に相当する」という見解らしい。

まあ、ドクター・カオスの連れているマリアも、ここでは「使い魔」として認定されているから、それで良いのだろう。

――神門（みかど）さんの高笑いが聞こえるよーだ……。

悪役ばりに「フハハ」笑いを垂れ流す、守銭奴神主を思い浮かべ、七季は「人手足りないからなぁ」と一課の課長である黒髪の青年のたくらみに思いを馳せた。

いきなり、この時期に即行で資格を取らせたからには、まず間違いなく「使い魔を使う」狙いがあるのだろう。

でもまあ、いまは。

「合格おめでとう！」

むぎゅっ。

「なっ」

「ありがとうございますっ」

「祝ってくれるのは嬉しいが……少しは自重したまえ、マスター」

「ナナキ、どうして僕だけのけものなのさっ！」

ぺむち。

「だってリドル、肩の上に乗ってるし」

まとめて使い魔を抱きしめる、少女の細腕に包まれた人ならぬものたちは、どこか誇らしげに目元を緩めていた。

黒猫姿の闇の帝王だけが、肉球パンチで抗議したとか、しないとか。

ある夏の日の、午後の話である。

1962

#261　テスト（後書き）

あとがき
＞あい、しゃる、りたーん！
というわけで、帰ってまいりました。前回は息切れしたので、今回からは二日に一回の更新で続けたいと思います。

いきなり聖杯戦争に突入、ではなく、ちょいとオリ主たちが帰還してからの小話を挟んでワンクッションにしてみたり。
オリ主の、夏休みやら冬休みがしょっぱいのは仕様です（笑）。
異世界では無双っぷりでも、リアルではそれなりに苦労してます。そんなもんです。
まあ受験生ですから。ちょっと死ぬほど忙しいよ！
そんなオリ主を「修行」に突っ込むのは、先輩の優しさなのか厳しさなのかは永遠の謎。

きっと世間様にも、ライフがりがり削られている学生の方々がいらっしゃることを鑑みて。
一部、実話ネタでお送りしました☆

章タイトル「夜の運命（さだめ）を背負うもの」は、某神坂作品の「闇の運命（さだめ）を背負うもの」が元ネタです。

#262　クーリングオフ

「じゃ、クーリングオフってことで、ファイナルアンサー？」
「へ？」

話は、十分ほど前にさかのぼる。
冬木市内の遠坂邸にて。
「聖杯戦争」にそなえるべく、サーヴァントを召喚した少女――遠坂凛は、注ぎ込んだ宝石と魔力にもかかわらず、いっこうに英霊が現れないことに、すわ、まさかの召喚失敗か、と地に伏すいきおいでうなだれていた。
しかし。
ド――オォン！
まるで隕石が降ってきたかのような、凄まじい衝突音が聞こえてくるや否や、彼女はつややかなツインテールの黒髪を振り乱し、召喚の陣を敷いた部屋から飛び出した。
「あぁもう、こんっのぉ……！」
どかっ。
すらりとしたおみ足――黒いニーハイソックスに包まれた――で蹴り開けたドアの向こう。
遠坂家の、古きよき調度品たちが残骸になっているリビングに、黒衣の少女と、赤い外套の男がいた。
――え？
否、もう一度、彼女が青い双眸で確認すれば、そこにいるのは、けほけほと咳き込んでいる少女が一人きり。

――見間違いかしら……？
「ふぇえ……酷い目に遭った……」
じっくり眺めれば、黒髪をポニーテールに結った少女の周りには、うっすらと藍色の結界が見て取れる。
中の人物が透き通るほどの透明度だが、その藍色の壁には、ちらちらとラピスラズリのような金が散り、きらきらしく灯火を弾いて凛の目を楽しませた。
「ねえ」
少女魔術師の、細い喉から鋭い問いかけが搾り出される。
「あなた――何？」

いっぽう七季はというと、例によってチートな巫女さんこと、栗毛の美少女にポイ投げされて、ジッパーから「修行」先に放り投げられたのであるが。
いきなり夜空から自由落下、というのは、いままでにない状況だった。いつもなら、さすがに真言も着地できる場所くらいは考慮してくれるはずなのだ。
いきおい、七季はあわてて「黎明」――幸いにも、彼女はデバイスを身につけていた――に命じて、ラウンドシールドを展開。
同時に、アーチャーが万が一にそなえて着地体勢を保持するべく、小柄なマスターの体を抱え込み、どうにかよそさまの屋根をぶち抜きつつも、無傷で着地したところだった。
七季を支えていた従者は、「まさか」「なぜ彼女が召喚を」とうわごとのように呟きつつも、きっちり少女の無事を確かめていたのだが。
ミニスカートに赤いハイネックを着た少女が現れるなり、アーチャーはあわてて霊体化して、いまに至る。
ぶっちゃけ、七季には何が何だか、良くわかっていなかった。

それもいつものことである。

「ええと……こんばんは、お邪魔してます」

ぺこり、と頭を下げる黒衣の少女に、凛は面食らいつつも、さりげなく身構えた。

いまだ彼女を包み込む結界は消え去っていない。すなわち、目の前の相手は、凛を警戒する魔術師だと判断したのだが。

「ええ。こんばんは。それで？　質問に答えてくれないかしら？」

「んと……アーチャー？」

こてん、と小首をかしげた少女は、そう告げた。少なくとも、凛にはそう思えた。

「アー……チャー……？」

セイバーではなく？

――って、この子がサーヴァント！？

しかもアーチャー。

サーヴァント中、「最優」と名高い「セイバー」の召喚を狙っていたミニスカートの魔術師は、今度こそ、がっくりと床に手をついた。

「あれだけ……あれだけ宝石をつぎ込んだっていうのに……ッ！」

ああ時間を間違った私が悪いんだけど！

白魚のような手で、にぎりこぶしを作りつつ、失望に打ちひしがれる凛を、けげんそうに見やる七季。

ポニーテールの少女は、何やらふみふみと頷いていた。それはまるで、誰かの話に相槌を打っているかのようだったけれど。残念ながら、凛は気づけない。

「よーするに、お嬢さんは『弓兵（アーチャー）』がご不満と」

「だって私は『剣士（セイバー）』狙いだったのよ！」

きっと涙目で少女を振り仰ぐ、凛の美貌には、恨みがましげなが

らも凄みがにじみ出ていた。
「とっておきの宝石だって使ったのに！」
「じゃ、クーリングオフってことで、ファイナルアンサー？」
「へ？」
だから、へろっと向けられた言葉に、思わず遠坂家の少女魔術師がポカンとしてしまったのは――無理もない、といえるだろう。

クーリングオフとは。
一定期間、説明不要、無条件で、申込みの撤回または契約を解除できるという法制度のことを指す。
消費者――いわゆる「お客」が、自宅などに不意の訪問を受けて勧誘されるなど、自らの意思がはっきりしないままに、契約の申し込みをしてしまうことがあるため、消費者が頭を冷やして再考する機会を与えるために導入された。
一定の期間内であれば、違約金などの請求・説明要求を受けることなく、一方的な意思表示のみで申し込みの撤回や契約の解除ができるというものだ。
「え……だって、そんなこと、できるの……？」
思わず、凛は青い目をぱちぱちしばたいた。
サーヴァントに「返品」がきくなんて、そんなことはついぞ聞いたことがない。
なのに、目の前の――自称「アーチャー」の少女は、ひどく庶民的な単語でもって、契約のキャンセルを申し出たのだ。
「まー望まれてもいないのに、居座るのもアレですし」
淡々としたソプラノで応じる七季の態度に、いまさらながら凛は、自分がかなり失礼なことを言ったことに気づいて固まった。
相手は暫定「サーヴァント」である。英霊は、本来、人間を超えた存在。いうなれば「人間以上」なのだ。いきなり呼びつけておい

てこれでは、いくら見ため少女といえども、相手が機嫌を損ねるのは当然である。

そっけなく、無表情かつ事務的に告げる七季を前に、凛は、「見限られた」のかと背筋を寒くした。

見る限り、彼女と凛の間に絶望的な格差は感じられないが、人外の存在と、たかだか人間の魔術師を比べることは、愚かのきわみである。

「私は刃物使うの苦手なんで――先輩と契約してください」

「へ？」

さくっと、またしても妙なことを言われた凛は、黒衣――あらためて観察すれば、それは色こそ黒いが、れっきとした巫女服だった――の少女が呼ばわる声に、頭のねじが何本か抜けそうになる脱力感を覚えることになる。

「せんぱーい。私じゃダメだそうですー」

いままで「修行」先でダメ出しされたことがなかった七季は、少しだけ申し訳ない気分で、真言へと電波――もとい、念話を飛ばした。

＜え？　どしたのナナちゃん＞

＜なんか拒否られました。「剣士（セイバー）」が良いそうなので、先輩お願いできませんか？＞

＜んー……しゃーないなー＞

そして。

じーっ。

凛は、またしても理不尽な現象にぶち当たることになる。

虚空に現れた「ジッパー」――そうとしか言いようがない――が開き。

そこから現れた、巫女服の美少女が、「よっ」と片手を上げて挨拶するさまを、彼女は呆然と青い目に映すのみ。

「んじゃ先輩。あとよろしくお願いします」

「ん、わかった。じゃナナちゃんは、いったん帰って良いよー」

「あいさー」

ひらひらと手を振り合った巫女さん少女ふたり。

そのうち、まっくろずくめな方は、開いたジッパーの向こうにひょいと消えていった。

「つーわけで、ナナちゃんの代わりに、サーヴァントになる漣真言でーす。

あ、クラスは『弓兵（アーチャー）』だから。何か『剣士（セイバー）』は先に召喚されてて塞がってるらしいよ。知らなかった？」

「な……」

何ですってえええぇ！？

その夜。

遠坂邸に上がった絶叫を聞くものは、幸か不幸か「神妻」の少女ただひとりだったという。

#262　クーリングオフ（後書き）

あとがき

＞いきなりサーヴァント交代劇からの開始です。
遠慮はもはや投げ捨てるもの！（待て）
のっけから原作ブレイクでサーセン。サーヴァントの召喚順番も、とっくにおかしくなってます。

アーチャーつながりで、いまのマスターであるオリ主が召喚されましたが、文句言われたので先輩とバトンタッチ（をい）。
いや後でちゃんと出張りますので。
ちなみに、オリ主も先輩も弓を使えます。

#263　イベント

一般に、学生たちの夏休み期間は、社会人にとって何の関係もないと思われがちだ。

さて。

ここ――帝都心霊庁では、というと。

社会人にとっての夏休みといえるお盆は、彼らにとって修羅場に他ならない。

お盆前進行、もとい、いちばんの繁忙期となるお盆に向けての「デス・マーチ」まっさいちゅうだったりする。

盆休み？何それ美味しいの？

受験生である七季たちと同様、この帝都心霊庁の職員も、ひっきりなしに押し寄せる書類仕事と戦っていた。

霊的事件が増える夏場だが、除霊しただけ報告書という名の書類が増えるのは当たり前なのである。

そのオフィスには。

「お仕事お疲れ様でーす」

「ここにコーヒーを置いておくから、こぼさないようにな」

金髪と銀髪の美女ふたりが、書類の積み重なるデスクの合間を縫って、スポーツドリンクやコーヒー、緑茶などを配って回っている。

まるで姉妹のようにも見えるルビーアイ。アリシアとリインフォースのコンビであった。

「期限間近の書類はこちら、余裕のあるものはこちらへどうぞ。期限オーバーしたものは、ご自分で届けてくださいね」

一課オフィスの空いたスペースに、新たに運び込まれたデスクの一つには、カフェオレ色のネコミミもそのままのリニスが、にっこり癒し系スマイルで、提出書類の分類をしている。

さらにその隣では、カタカタとキーボードを叩いているプレシア。ダークヘアをアップに結い上げたママさん魔導師は、消耗品の出し入れが激しい一課の、経理と事務の担当者をサポートする役目を担っている。

眼鏡をかけた美貌は、まるで最初からこの課にいたようにビジネスウーマン然としているが、彼女たちはいずれも、七季の「眷属」というくくりでの臨時職員だ。

しかし、彼女たちのサポートは、例年よりもずっと、この一課における忙しさを緩和していた。

だからして。

「なかなか余裕じゃねーかテメーら」

ひょっこりと顔を出した、ウェービーヘアの美女――観音が、段ボール箱を抱えて現れた姿に、ほとんどの一課職員は「ああ」とさも当然な顔をして頷いた。

どさ、と大きめの段ボール箱が、デスクに下ろされる。とたん、隠れていたナイスバディと、その身を包むワインレッドのスーツが見るものの目をあざやかに刺した。深く入ったスカートのスリットは、公務員が着るものとは思えない。

「もうそんな時期ですか」

「オイ、手の空いたやつから作業しろ」

わらわらとダンボールに群がる職員たち。

クールビズの建前で、スーツではなく私服姿のものも多いオフィスには、浴衣姿や、出先から戻ってきたばかりで、法衣や狩衣姿のものもいたりする。

めいめいが、段ボール箱の中から、座金やワイヤー、9ピンやペンチ、一連になった天然石のビーズなどを取り出して持っていく。

そして、書類仕事に区切りのついた職員から、ちまちまと何やら作り始めた。

その中の一人、三蔵の手元をよく見れば。

ウッドビーズと水晶、紫水晶を透明なゴムに通している。十分ほ

どたつと、それは、どこからどう見ても数珠になった。
周りでも、似たようなことをしている。梵字の刻まれたビーズを使ったブレスレットや、中にはお札を自作しているものまで、多種多様だ。
あちこちで霊力を込める、あわい光が灯ったり、キーボードを叩く音が聞こえたり、不思議な光景が繰り広げられている。
「あの……あれは？」
お仕事中じゃないんですか？
けげんそうにルビーアイを瞬いたアリシアが、トレイを抱えたまま黒髪の美女へ話しかけると、観音は「あれか」とかるく応じた。
「仕事の一環だ。うちで作った、数珠や護符、他にも力の込められたアイテムなんかを、売りさばいて予算の足しにするんでな」
観音いわく、夏と冬の年中行事だという。
「はあ……」
「イベントでもダントツの売り上げを誇るサークルだぞ」
――ん？
ここにリドルがいたなら、即座にツッコんだだろうが――残念ながら、アリシアはまだ「イベント」に参加したことはなかった。よって、それ何を指すのかもわからずじまいである。
「さて。オレも作業にかかるか」
そう言って、開いているデスクに陣取り、水晶やオニキスなどの天然石を磨いた、ラウンドビーズをワイヤーに通し始めた観音の姿を、金髪の美女は不思議そうな面持ちで見つめるのだった。

「こんちわー。先輩ちょっと異世界にお出かけしたんで、報告に来ましたー」
ひょっこり。
『何イイイィィ！！』

「あ、大丈夫ですよ。夏コミまでには帰ってくるはずですから」
一課に顔を出した、まっくろ巫女さんこと七季の言葉に、グラマラスな美女だけが安堵する。
「良し。お前らがいるのといないのとじゃ、売り上げが違うからな」
「良くねえええぇ！」
ひとり例によって神門（みかど）青年が血の涙を流しているが、それはこぞって同僚にスルーされた。ちょうど、きょうの分の書類が片付き、いましがたブレスレット作りに取りかかったところだったからだ。
「あ、今年のイベントは、ちーちゃん……友達も手伝ってくれるそうです、売り子」
「おう。そりゃ朗報だ」
ほのぼのと平和に会話する、黒髪の美女と、あどけない少女の取り合わせは長閑だ。ＢＧＭに青年の低い呼び声されなければ。
「真言ぉ……オオォ……」
「七季殿っ」
そして、職員の注文した弁当を受け取りに行っていたディルムッドが、主の姿を見つけて喜色満面に駆け寄り――きょうもきょうとて、にぎやかに帝都心霊庁の一日が過ぎていくのである。
――大丈夫なのだろうか……。
ひとり、霊体化したままで考え込むアーチャーは、あの聖杯戦争に投下されたチート巫女さんと、そのマスターになってしまった遠坂凛の組み合わせに、凄まじい不安を抱いていた。

そして。
真言を名目上「サーヴァント」にした遠坂凛の世界ではというと。
「起っきろ――！」
「ふわぶっ！？」
ごちんっ。

冬の朝、尋常じゃなく寒い空気の中、温かい布団を引っ剥がされて叩き起こされた、黒髪の少女が、いきおいあまってベッドから転落しかけたところだった。幸いにも、転がったのが壁際だったために、ぶつかるだけで済んだのだが。

「ったたた……」

いくら寝起きが悪いとはいえ、これにはさすがに目を覚ました凛は、眼前に仁王立ちする、ふわふわ栗毛の美少女を見上げて、ひとすじ汗をたらした。

ずももももん。

不機嫌きわまりない美貌が醸し出す、プレッシャーが凄まじい。

「あ……あの……？」

「足んない」

「え？」

「魔力が足らない！　とっととよこせ――！」

「うっきゃあああああ！」

がばちょ。

緋袴の巫女さんに押し倒された凛は、どうにかこうにか正気に――なれたかどうかは怪しいが――返ると、まだ気怠い体に鞭を打って、魔術回路を励起させた。

魔術師の名門、遠坂家の魔術師としてふさわしい資質を持つ、彼女の潤沢な魔力にも、しかし真言は物足りない、と眉間のしわを崩さない。

いちおうは聖杯戦争のシステムにのっとっている真言は、制限がかけられている。供給される魔力が足りないと、十全に実力を発揮できないのだ。

たとえるなら、ワインのコルクが聖杯のシステムで、それを開ける力が魔力、といったところだろうか。

ただしそれは、あくまで「サーヴァント」としてのこと。
いったん「令呪」の支配下から解き放たれてしまえば――その限りではない。
「……まだ足らない」
ぶちぶち不満そうにぶーたれながらも、乱れたパジャマ姿の凛に乗っかったままで、上半身を起こす「アーチャー」の少女。
はたから見れば――見るだけなら――なかなか耽美な光景である。
「しゃーない。自分で準備するか」
言いながら。
じーっ。ずぽんっ！
「ふにゃっ？」
またもや開いた虚空のジッパーから、凛にとってどこか見覚えのある少女が引っ張り出された。
まっくろなロングヘアを赤い組み紐でポニーテールに結った、夜色の瞳の少女。
ぷらーん、と猫の子よろしく、襟首引っつかまれて、真言にぶら下げられている小柄な黒巫女は、ちょこん、とベッド上に膝で座り込んだ。ぎしん、と新たな重みを受けてベッドがきしむ。
器用にも、七季が履いていた草履はベッドの下に脱ぎ落としたらしい。
「ええと……お邪魔します。ちょっとぶりです、先輩」
黒髪にふちどられた、あまり緊張感のない面輪は、のんきなソプラノとあいまって、どこか小動物じみた印象を凛に与える。
「ん。さっそくだけどナナちゃん魔力よこして」
「あいあい」
簡単なやりとりで、これといった変化は見えない。けれども、「神妻」と「神使」という主従関係にある巫女ふたりには、もともとパスが通っている。そこから真言に向かって、七季の魔力が流し込まれていく。
ふわん。

あたたかい力に満たされていく感覚を覚えて、ほうっと栗毛の少女がためいきをついた。
「……こんなもんですか？」
「おーらい。ありがとね」
「どういたしましてー。私は先輩の『神使（もの）』ですから」
にっぱり笑う七季と、「アーチャー」の少女との関係が理解できずに、ぐるぐると混乱する凛。
「あぁもう……どうなってるのよ――！」
魔術師の少女が吼える声が、昼の遠坂邸に響き渡る。
どこぞの霊体化している弓兵が、こっそりついたためいきは、誰にも聞かれることなく、朝の大気に溶けていった。

#263　イベント（後書き）

あとがき

＞社会人も夏は修羅場だよね！という。

帝都心霊庁、夏の陣、でお送りしました（待て）。

あと彼らは、夏の即売会で、自作のお守りとか数珠とか霊符とか販売しています。即売会ですから（をい）。

じっさいの創作系サークルでは自作アクセを販売しているところもありますしな。

夏コミには、オタクに混じって、それ目当ての霊能力者もやってきます（笑）。

オリ主とチートな先輩たちはコスプレで客寄せしながら売り子。お仕事の一環です。

あと凛様のっけから涙目の展開。

英霊どころか神霊クラスのチートな巫女さん。従えるのは並のことではありません。

先輩は、可愛がっている自分の「神使（しんし）」がクーリングオフされたことに、地味にお怒りです。

「うちの子の何が不満なの？」的な。

そしてオリ主は、予備の魔力タンクとして引っ張られました。

この場合、先輩という「瓶」の中に、魔力というワインが詰まっていても、外からコルクを開けるための魔力が必要、と考えていただければ少しはわかりやすいでしょうか。

従者？もちろんついてきますが何か？

#２６４　ＩＦ～まじょあねっ！？その１

ぽてっ。

キャスターのサーヴァント――神代の魔女・メディア――によってなされた、完璧に近い召喚の儀式。

あえて瑕疵を挙げるなら、それはサーヴァントによるサーヴァントの召喚という、本来許されない「反則」である、という点だ。

しかしそれは、虚空に開いたジッパーから相手が落っこちてくるという、何ともツッコミどころ満載の結果を引き起こしていた。

「う？　お？」

きょときょとあたりを見回すたび、結い上げられたポニーテールの黒髪が、しっぽよろしくぴこぴこと揺れる。

キャスターよりも十センチちかく背の低い肢体は、それでいて起伏に富んでおり、オリエンタルなデザインの黒衣に包まれている。

髪の色から目の色、服まで黒ずくめという徹底っぷりだが、それだけに、肌の白さがきわだって見えた。

ひどく怪しげな機材が並ぶ、魔女の部屋で、彼女だけが浮き上がるように清らで。

「……えーと。こ、こんにちは？」

こてん、と首をかしげる少女は、見知らぬ相手へと挨拶した。ぺたんと座り込んだ七季の、まっくろでくりくりした大きな瞳に、フードをかぶり紫の衣をまとう女性が映りこんで。

「――ッ」

まろやかな曲線を描く華奢な撫で肩に、あどけない面輪。きょとんと不思議そうな大ぶりの瞳が、いかにも小動物を連想させる娘。

「これで勝てる……っ！

いいえ、勝ってみせるわ！」

ぷるぷるスレンダーなボディを震わせ、歓喜にむせぶキャスターのサーヴァントを、いつまでも不思議そうに眺めていた。

あのあと。

ぼんやりとロウソクの明かりが照らし出す部屋――キャスターの工房から、場所を移したふたりは、げんざい別の部屋で話し込んでいた。

「というわけで。

あらためまして、徳を積む『修行』のために、こちらに放り込まれた、七地七季です」

ぺこん。

場所は柳洞寺の一室。

宿坊として使われるその部屋は、いわば寺の客室であり、とりあえず七季に割り当てられた居住スペースである。

「あ、名前が七季です。お姉さんは……外国の方ですよね？」

「ええ、そうよ。でも聖杯からの知識があるから、この国の言葉もわかるわ」

向かい合って座るのは、キャスターのサーヴァントと、新たに召喚された（？）――異邦の少女。

「おお、それはよござんした」

ぱちん。

手を打ち合わせる少女は、ぱっと表情を明るくする。幼い顔立ちが、そうするとさらに無邪気に映って見えた。

「聖杯戦争については、ぶっちゃけ初耳ですけど、こちらに召喚という形でお世話になる以上は、お姉さんのお手伝いをするつもりです」

よろしくお願いします。

ぺこん、と頭を下げる黒髪の少女に、キャスターは座布団に座っ

たままで、考え込んでいた。
「にわかには信じがたい話だけれど……でも、そうね。信じるものが違えば、国や文化によって、魔術的なシステムも違ってくるもの。それにしても――」
この小さな少女が「神の使い」だなんて、どういう皮肉だろう。
かつて女神に愛された英雄、イアソンによって破滅した人生を持つ英霊は、灯火を紫色に弾く唇から、思わしげなためいきをこぼして、七季をフードの下から見つめた。
板間――西洋風にいうなら、フローリングに敷いた、座布団の上。ちょこんと正座して、行儀よくキャスターと会話する黒髪の少女は、まるでしつけのいい子犬か子猫を連想させる。
既に別の存在に仕えている、というのは気に食わないが、それでも七季は従順そうで、かなりキャスターの好みに敵っていた。
筋肉ダルマ――いわゆる脳筋が嫌いな彼女だからして、落ち着いて文化的な会話ができる、愛らしい少女というのは貴重な存在である。それが、自分のサーヴァントであるなら、なおのこと。
――戦力は期待できそうにないけれど……。
正直、キャスターはサーヴァント中において「最弱」と言われる。たいていのサーヴァント――特に三騎士のクラスに召喚されたものは、対魔力を備えているため、魔術が主な攻撃手段となるキャスターには、不利なことときわまりないためだ。
彼女は、神代の、魔法に近いレベルの超高等魔術を平然とあつかえるほど、魔術師としての能力は超一流。魔法使いと同等、もしくは上回るというレベルなのにも関わらず。
だからこそ、自分の弱さを補える、戦闘力の高い手駒を期待していたのだが。
――こうなってしまっては、仕方がないわね。
ふう。
「……私の手伝いをすることは、あなたにとっても利害が一致するってことね？」

振り切るように嘆息し、神代の魔女が念を押すと、白い卵形の顔がこくんと上下した。
「はい。できれば、私はまだ人の身（ナマモノ）なので、衣食住も保証していただけると嬉しいです」
困ったような表情で、じっと夜色の瞳が紫のローブ姿を見つめる。
――うん。やっぱり可愛いわ。
ないしんの落胆とは別のところで、やたらめったら和んでいたりするキャスター。
彼女としては、戦闘要員の増加を見込んでの召喚だったのだが――それを水に流すくらいには、七季を気に入った神代の魔女だ。
ちょっと控えめな態度といい、小動物じみたたたずまいといい、小柄でやわらかそうな肢体も、かなりキャスターの好みである。
なまじっか、出会ったばかりで忠誠を誓われるよりも、利害を挟んだ関係の方が、まだしも彼女にとっては理解がたやすい。
「も、もちろんよ！
マスターとして満たすべき義務は、きっちり果たすつもりよ」
それに少女の要求の中には、キャスターを満足させるポイントもひそんでいる。
――さっそく、この子に似合いそうな服を見繕わなくちゃ。加護のアイテムをつけるにしても、なるべくアクセサリータイプにして……。
ないしんワクテカ状態のキャスター。ニヤける目元がフードに隠れていて幸いだ。
彼女の中では、どうやら七季は愛玩用・癒しグッズに認定されたらしい。
「ふぁ……」
「あら」
思わず七季が口元をぱふっと押さえた手から洩れた、小さなあくび。それに目ざとく気づいたキャスターは、苦笑ぎみに告げる。
「そうね、もう夜も遅いし。詳しい話は明日にしましょう。聖杯戦

争を知らないとなると、長い話になるでしょうから」
——人間だということだし。
「すみません……」
とろん、と夜色の双眸を眠たげに瞬く少女は、大きくて切れ長の目も、いまは半分くらい目蓋に覆われかけて、ちょっと間抜けだ。寝ぼけた子猫をつつき倒したくなる人間の気持ちが良くわかる。
こしこし、と目元をこする手をやんわり止めたキャスターは、
「世話の焼ける子ねえ」
言いながら指先をかるく振る、すると、僧房の押入れから飛び出した布団が、みるみる延べられてフローリングへと着地した。
「ここは山の上だし、いっそう夜は冷えるから、温かくして寝るのよ？」
「あい。ありがとうございましゅ……」
ぺこ、と頭を下げる七季のしぐさは、まるでオモチャみたいな動きで、相当な眠気に囚われているらしい。
舌足らずな返答が子供っぽく、ふとキャスターは、かつて失った我が子を思い出した。つと、心臓を締めつけられるような切なさが、彼女を襲う。
「……もう寝なさい。明日の朝は早いわよ」
「はいですー」
ローブからのぞく手がめくる布団に、そのままごそごそもぐりこむ黒衣の少女。
——明日は夜着も用意した方が良いかしら？
そんなことを考え込むキャスター。七季にかけた布団の上から、ぽんぽんとなだめるようにかるく叩いて、「おやすみなさい」と短く告げた。
「うい。おやすみなさい……」
ほわほわしたソプラノが、夢の中から返ってくる。
パチリと電灯を消した部屋。開いた障子から差し込む月明かりに、くすりと笑う魔女の笑みがこぼれて見えた。

「おはようございますー」
ひょこん、と頭を下げた七季に、この寺の子息であるという黒髪の少年は、かけていた眼鏡をずり下ろすほどに驚いたが、キャスターが「私の妹ですの」と紹介すると、その場は綺麗に収まった。
というのも。

七季が召喚されてから翌朝、さっそく交わされた会話が、ことの原因だったりする。
「あ、いまさらですけど、呼び方『お姉さん』でいいですか？」
「私はキャスターなのだけれど……」
ちょっと困惑げにツッコミを入れる魔術師のサーヴァント。
名目上、この柳洞寺に間借りする葛木という男性教諭のフィアンセとして居座っているキャスターは、既にローブ姿ではなく、品の良いスカート姿で七季と相対していた。
「うーん。でもそれってクラス名なんですよね？
どうも『看護婦』とか『学生』とか呼んでいる気になっちゃって……」
ぽりぽり頬をかく七季は、良くも悪くも日本人の言語センスが抜け切れないらしい。
「ようするに『キャスターさん』って『魔術師さん』って呼んでいるのと同じでしょう？
それに『キャスター』って、どうもほら、あのコロコロ転がる車輪のパーツを連想しちゃうもんで……さすがに違和感が」
ごめんなさい。
ひょこりと頭を下げる少女の、黒いポニーテールがぴこんと揺れ

た。
　こちらも、あのまっくろ巫女服はあまりに目立つというので、彼女の私服――黒いスラックスに白のハイネックと、いささかマニッシュないでたちだったが――に着替えている。
　日常生活に直結するような話には、さすがのキャスターも侮辱とは取らず、苦笑ぎみに「困ったわね」と応じるだけだ。目の前の少女に悪気がないのは、簡単に見て取れる。
「お姉さん……いちおうマスターだから、もうちょっと敬った方が良いですか？　お姉さま？」
　ずぎゃん。
　いま、確実にキャスターの胸が目に見えない兵器か、大魔法で貫かれた。
　対城レベルの衝撃だったと、のちに彼女は語る（誰に）。
「『お姉さま』だと『マリ見て』みたいで、あんまりお嬢様っぽいから……『姉さま』？とかどうですか」
　ぱっちりした黒瑪瑙の、大きな瞳で見上げられた神代の魔女は――こてん、と小首をかしげた、仮サーヴァントの少女に萌えたぎり、イイ笑顔で反射的にサムズアップしていた。
　グッジョブ！
　どうやら聖杯は、こんな知識までフォローしてくれるらしい。
――「まりみて」って何かしら……？
　閑話休題。

　ふたたび現在。
「そうですかー。やっぱり進学は仏教系の大学ですか？」
「ええ。それも視野に入れているのですが……」
　朝食の後。
　開いた時間の雑談で、柳洞一成と七季は、受験ネタで会話を弾ま

せていた。
「あ、時間は大丈夫ですか？」
「時間は……まだ余裕がありますが。そろそろ出ます。いや、つい話し込んでしまった」
そこに、「メディア」と呼ばれているキャスターが、葛木教諭と共にやってくる。
「宗一郎さま。お弁当です」
「うむ。柳洞、出るか」
無表情、仏頂面がデフォルトの男性を、「宗兄」と慕う一成は顔を上げて頷く。
「はい。では七地さん。失礼する」
ベージュで詰襟風デザインの制服を、きっちりと着こなし、眼鏡をかけた少年は、いかにも生徒会長といった風情だ。
「お互い受験生は辛いですよね。柳洞君も、頑張ってください」
「ありがとう。七地さんも。では行ってまいります」
「いってらっしゃーい」
いっぽうキャスターも玄関先まで出てきて、ダークスーツの葛木を見送る。
「宗一郎さま、お気をつけて」
「ああ。きょうは早めに帰る」
「お義兄さんもいってらっしゃーい」
「……ああ」
そんな柳洞寺、朝の風景だった。

#２６４　ＩＦ～まじょあねっ！？その１（後書き）

あとがき

＞いただいた感想から、没ネタサルベージ。

キャスターにオリ主が召喚された場合。

出来心でやらかした。

が、オチなかったので、もうちょっと書いてみる。本編をお待ちの方は申し訳ないですが、しばしお付き合いの程を。

たぶん次あたりで終わります。

読み手さまのご指摘をいただき、一部修正しました。

#２６５　ＩＦ～まじょあねっ！？その２（前書き）

まえがき
＞ほぼ単語のみですが、地盤沈下の描写があります。

#２６５　ＩＦ～まじょあねっ！？その２

「ところで七季。あなた、何のサーヴァントなの？　自分のクラスはわかるかしら？」

エルフ耳が特徴的な、藤色の髪の美女――キャスターに、結界を張った一室で問われた黒髪ポニーテールの少女は、服のサイズを採寸されながら言葉を返す。

「んー……ん？」

冬の陽射しとはいえ、それなりに明るい光が、ぼんやり障子越しに照らす部屋は、ほのぼのと平和な光景だ。

そんな中、あどけない面輪の眉間に、しわを寄せて首をひねると、七季はおずおず自己申告する。

「たぶん『プレイヤー』……『祈り手』？みたいです」

「プレイヤー……？」

耳慣れない単語に、しばしキャスターも考え込む。

「そう。通常はセイバー、アーチャー、ランサー、バーサーカー、ライダー、アサシン、そして私のキャスターがレギュラークラスだから、あなたのそれはイレギュラークラスね」

すとん。

ひとしきり七季のサイズを測り終えた美女は、いったん腰を下ろした。数値をメモ帳に書き込みながら少女の傍らに座って、「何ができるのかわかる？」と問いかける。

「できることは、あんまりないです。

神様を降ろしたり、悪霊や穢れを祓ったり、魔法をレジストしたり……そのへんは、いつもと変わらないですし。

あ、でも梓弓が使えます！

それから霊脈との契約ができるのと、スキルに「対魔ＥＸ」と「

誘魔」、「黄金率」があります」
――ちょっと待って。
いま何か、物凄く、聞き捨てならないことを聞いたような。
くらり、と覚えた目眩を、根性でねじ伏せるエルフ耳サーヴァント。
「『対魔ＥＸ』……？
それに神を降ろせるですって……？」
他の点についても、かなりツッコミどころが満載だが、それをさて置いても非常識きわまりない単語に重点を絞る。
「はいです。私、もともと巫女ですから。『神降ろし』が数少ない特技なんです」
てへ。
ちょっとだけ誇らしげに、にっこり笑ってのたまう少女に、さっぱり悪気は皆無だ。
何そのキャスター涙目なスキル。
「スキルに分類されている『誘魔』は、魔性、人外さんへの好感度が高いみたいですね。仲良くなりやすいとか、お願いしやすいとか、そんな感じじゃないでしょうか」
頭痛がしてきたキャスターだが、無理やり前向きに考えることにした。
――逆に発想するのよ！　この子が敵に回らなくて良かったと！
そうでもなければ、やってられない。
ちょっとフローリングに両手をついて、必死にセルフフォローに走るキャスター。涙ぐましい努力である。エルフ耳が、心なしかヘタっているさまが可愛らしい。
目の前の紫髪美人に、ほのぼの和んでいる七季は、彼女がヘコんでいる原因が自分とも知らず、続きを口にする。
「ん？……あ、これもスキルなんですね。『神使（しんし）』と『あくまのささやき』ってのの」
それは、ふだん七季にとって言われ慣れている単語だ。ゆえに、

それがスキルに該当するのだとは、いままで気づかなかったのである。

「……どういうものか……訊いても良いかしら……？」

――聞かない方が精神衛生のためには良いかもしれないけど、戦力把握のためには聞いておかないと……っ。

基本、キャスターは性根がマメなひとである。人外だけど。

「えーと『神使（しんし）』は『高い霊的防御力、対魔能力を有する。また、神霊や他の神使、霊地の協力が得やすく、霊力を魔力に変換することもできる』で。

『あくまのささやき』は『対人スキル。舌先三寸で、相手を丸め込み、そそのかす能力。絶好のタイミングも付随する』だそうです」

話だけなら、とても地味だが、戦う相手からすれば、それはかなり嫌なスキルではないだろうか。

「そうは言っても、けっきょく戦うのには向かないんですよね。非力ですし。だから基本は、使い魔さんたちに頼ることになると思います」

「あなたの――使い、魔？」

そしてキャスターは、自分の召喚した少女――サーヴァント「プレイヤー」が、とんでもない隠し玉を有していたことに仰天するはめになる。

「■■■■■■――！？」

キャスターにスキル「狂化」が付与されました。

「狂化」：理性や一部の技術を失う代償に、能力が引き上げられる。

しばらくお待ちください。

「姉さま大丈夫ですかー？」
「これでも飲んで、落ち着きたまえ」
「まあ気持ちはわからないでもないけど」
心配そうにのぞきこむ少女の黒い瞳と。
褐色の肌の男が差し出す、薫り高い紅茶のカップと。
長いしっぽを振りつつ、ルビーのような眼を向けてくる、つややかな毛並みの、しゃべる黒猫と。
「布団を敷きましょうか？」
「いや、主ランサー。あれは七季の廃スペックぶりに取り乱しているだけだから、鎮静剤でも打った方が」
泣きボクロが特徴的な黒髪の美青年と。
銀髪ルビーアイの美女が一堂に会する部屋は、決して狭くないはずなのに、いきなり人口密度が上がって、ついでにキャスターの頭の中をいっぱいいっぱいにしていた。
いつのまにか、フローリングの床には温かそうなカーペットが敷かれている。七季が呼び出した使い魔たちによるものである。
「……いただくわ」
元王女の威厳にかけて、どうにか持ち直したキャスターは、受け取った紅茶を口にして驚く。
「！」
砂糖ではない、ほのかな甘みは、茶葉本来のもの。ふわりと鼻腔をくすぐる果物の香りといい、冬の寒さをやわらげる温かさといい、サーヴァントである身にとっても、五感を楽しませてくれる味わいに満ちていた。
眉間のしわを緩める美女の面輪を見て取って、七季もほわんと目元を緩めた。
「アーチャーは、とっても紅茶を入れるのが上手なんですよ。私も好きなので、姉さまに気に入ってもらえたら嬉しいです」
「ま……悪くはない、わね……アーチャーですって？」
ぴん、とキャスターがその柳眉を跳ね上げるも。

鋭い視線を向けられた男は、泰然として受け答えした。
「警戒には及ばんよ。私の通り名でね。この聖杯戦争に召喚されるサーヴァントのそれではない。
それに『アーチャー』という名前は、実際にないわけではないのだよ。
アン＝アーチャー（アメリカの俳優）。
ヴァイオレット＝アーチャー（カナダの作曲家）。
フレッド＝アーチャー（イギリスの騎手）。
ジェフリー＝アーチャー（イギリスの作家、政治家）。
アーチャー＝マーティン（イギリスの化学者）。
ゲム＝アーチャー（イギリスのミュージシャン）。
こういった、ファミリーネームやファーストネームに『アーチャー』の名を持つものは現世にもいる。
あくまで『アーチャー』という名前として認識してもらえれば良い。まあ、弓の腕には多少の覚えがあるがね」
「……そう」
えらく口の回る、いけすかない男だが、紅茶の腕は認めても良い、とそっぽを向くキャスター。
「さて。それではキャスターも落ち着いたようだし」
「作戦会議といきますか♪」
そして、第五次聖杯戦争中、最も謀略に長けたチームが動き出す――？

「キャスター。君には残念なお知らせがあるんだ」
黒猫姿の闇の魔法使いは、そのルビーアイを細めて重々しく告げる。
「君の願いは、聖杯なんかなくても……ナナキさえいれば、叶えられるものなんだよ……」

「な……何ですって――！？」
ズギャアアアアン。

「魔力供給？
はあ。私、霊脈と契約しましたから、そんな魔力切れの心配なんてありませんけど。
あ、パスありますから、姉さまにも回しますね。ついでに、余剰の魔力を貯めといたらどうですか？」
魔力がなくては始まらない、とばかりに、その算段についての相談に、さっくり予想外な答えを返されて、いきなり突っ伏すキャスター。
「……もうツッコまないわよ。
ありがとうナナキ。そうさせてもらうわ。あ、リドル。貯蔵用の宝石、錬金お願いね」
ひらひらとエルフ耳美女が手を振れば、まっくろにゃんこから人型に転じていた黒髪の少年が、革装丁のハードカバーを手に、背後の弓兵へ丸投げする。
「えー。この魔術書、いま良いところなんだけど。ちょっとー、アチャ男パス。錬金よろしくー」
「誰がアチャ男か。まったく……ああ、スコーンが焼けたから、お茶にしないかね、マスター」
キャスターが買い込んだ覚えのない、白磁に緑と金で彩られた、品良いティーセットを運んできた、褐色の肌の偉丈夫が七季へと声をかけて。
「やたっ。アーチャーのお菓子、美味しいから好きｖ　姉さまも如何ですか？」
漂ってくる芳ばしい香りと、低く落ち着いた従者の声に、少女は膝上で懐いているガルーダ――東風（こち）を撫でる手を止めた。

キャスターの趣味で、ふわふわな白いファーが映える、黒を基調としたワンピースが、冬の陽射しに照らされて優雅な影を落としている。

「じゃあご相伴に預かるわ。それにしても……あなた生前執事でもやってたの？　それとも料理人？」

いっぽう、黒髪の少女の、無邪気なお誘いに頬を緩めたキャスターは、妹を愛でるように七季を撫でくりながら、家事スキルぶっちぎりのアーチャーへ皮肉げな問いを投げる。

「褒め言葉として受け取っておこう。

さて。きょうの紅茶はストレートでもいけるが、少々くせがある。ミルクと砂糖は好みで入れてくれ」

「ブランデーはないの？」

「リドルは少し自重したまえ」

そこに黒い前髪を上げた青年が戻ってくる。

「ただいま戻りました」

「入って良いよー。境内の掃除、お疲れさま。ディルもお茶飲む？」

「いただきます」

障子を開けたディルムッドが、いそいそと団らんの輪に加わる。

＜七季、主ランサー、いまのところ、葛木氏に異常ありません。ただし校舎に、妙な結界が……＞

「葛木さんについてるリインから定期連絡きたよ。ケガやトラブルはないけど、どうも学校に結界があるって」

＜見える？＞

「……どこの三流かしら。こんな、内包する人間を、丸ごと溶かして滋養にする結界をしかけるなんて」

七季のパスを経由して、学校へこっそり忍び込んだ黒猫ばーじょんリドルの、視界を共有したキャスターは、苦々しげに吐き捨てた。

葛木の護衛であるリンフォースはそのままに、穂群原高校へ、リドルを転移魔法で送り込んだのだ。

「何てことをっ」

ディルムッドがその美貌を憤らせれば、仏頂面のアーチャーも無言で憤りを噛みしめる。この聖杯戦争でも、ライダーの宝具は変わらなかったと見える。

ひとり淡々としたソプラノを紡ぐのは七季で、黒髪の少女は魔術師の英霊へと問いかけた。

「姉さまなら、これをどうにかできますか？」

「いいえ……これはたぶん、宝具だと思うわ。私の奥の手でも、無効化はできないでしょう。発動を遅らせることはできてもね」

忌々しげな口調で返す、藤色の髪の美女は、おそらくサーヴァントの魔力が足りないゆえの凶行だろうと一言添える。

――人食いの結界……いったい、どんな英霊だというの。

キャスターであれば。

もしも、彼女が魔力不足で――七季という存在がなく――打つ手がなかったのなら、この柳洞寺にある堕ちた霊脈を利用して、冬木という町の人間たちから、少しずつ手広く、魔力をくみ上げるという技も使っただろう。

だが、それは最低限、一般人にはバレない程度にという注釈はついたはずだ。

葛木宗一郎は、なりゆきからキャスターのマスターになった男だが、彼は本来、魔術師ではない。

だから七季を召喚（？）する前の彼女は、魔力不足に悩んでいた。

結果として、とんでもないサーヴァントを引き当てたおかげで、いまでは魔力たっぷりでピンシャンしているわけだが。

そのうえアーチャーからの入れ知恵というか、情報提供で、日本にいるという人形師に連絡が取れた。もうしばらくすると、受肉できる器も確保できるというトントン拍子っぷりに、我ながら驚愕モノのキャスターである。

――七季……恐ろしい子ッ！

そんな対霊特化の、トンデモスキル持ちまっくろ巫女さんは、というと。

さっきから、はむはむ美味しそうに焼きたてのスコーンを頬張っていて、キャスターの脱力を誘うこと著しい。

つい無意識に、かいぐり七季を撫で倒してしまうおのが手と、従者というより妹か娘然としてきた異邦人娘に、なごみっぱなしのエルフ耳の美女である。

――癒されるわ……。

「ふむ」

そして、キャスターの傍らに座る、異邦の少女は「では、罠をしかけましょう」と、やおら不敵な笑みを浮かべた。

その口元には、スコーンのかけらがくっついていたので、どうにも締まらないことになっていたのだけれど。

その翌日。

校舎がすっぽり埋まってしまった穂群原学園は、地盤沈下によるものと夕刊に掲載された。

専門家の地質調査によれば、暫定的な見解だが、かなり地下の地盤が緩んでいたとか。

その原因が、深夜、こっそり忍び込んだ黒猫――に擬態した闇の魔法使い――リドルの錬金魔法によるものだとは、誰も知らない。

いっぽう冬木市の街中では。

「姉さま～。もう帰りましょうよ～」

冬晴れの空の下。

服を買うため、とショッピングに連れまわされ、へとへとに疲れきっている黒髪の少女の姿があった。

あちこちの店で着せ替え人形にされた七季は、なりゆきから漆黒

の執事姿になったアーチャーと、同じく色違いの執事服――深緑のスーツをまとったディルムッドに挟まれて、涙目になっていた。

キャスターの趣味全開の、ふわふわゴスロリ服はまだしも、慣れない、ファッション性重視の靴が辛い。

どういうわけか、アーチャーもディルムッドも、キャスターの暴走を止めるどころか、一緒になって盛り上がっているだけに、ストッパーがいないという事態に陥っている。

「とてもお似合いです」

「たまには良いだろう？」

器用なアーチャーによって、いつもはポニーテールの黒髪が、レースのリボンで乙女ちっくに編みこまれてヘットドレスまでつけられている七季は、目の幅涙を流したい気分でいっぱいだ。

「……うう。援軍はまだかー……」

うなだれる七季の黒い頭に、ヘタれたネコミミを幻視する、少女の従者と、キャスターのサーヴァント。

ちなみに、この場にいないリインフォースは、校舎埋没の後処理で忙しい、葛木教諭の護衛にこっそり張りついている。

いきなり校舎が使えなくなってしまったために、学園関係者は、大わらわなのだ。

もっとも、あの物騒な結界が作用する部分の大半は、校舎であった。それが使えない以上、犯人の狙いは、ほとんど潰れたと言える。もちろん生徒は現状、自宅待機だ。

――あとは、無駄になった結界が解除されるのを待つも良し。現場に戻ってくるかもしれない犯人を、こっそり見張るのもよし。

結界の宝具は、遠隔で解除されるものかもしれないが、仮に、何がしかの媒体を直接回収しなければならない場合、宝具の持ち主――犯人は、沈んだ校舎を掘り返すはめになるだろう。

――そうなったら闇討ちだよなー。

昨夜の時点で、リドルにはバインドを山ほどしかけてもらっている。彼のデバイスに合図ひとつ送るだけで起動できるという具合だ。

サーチャーもこっそりしかけている。
――仮に、サーヴァントの対魔力で無効化、あるいは引きちぎられるほど弱まったとしても、マスターには効くだろうし。
極悪な結界を張る以上、自分も食い物にされる覚悟は、あってしかるべきである。
ただ、受肉のめどが立った以上、キャスターは聖杯戦争に勝利することには固執せず、もっぱら守りの体制に入っている。彼女は最低限、生き残りさえすれば、願いが叶うのだ。
七季を連れまわしてショッピングに浮かれているようだが――守りに入ってるんだったら。信じてぷりーず。
まあ、英霊ふたりを護衛にしているというのは、十分に豪華といえよう。
いつもは七季に乗っかるのが定位置のまっくろにゃんこ――もとい、リドルはというと。
こちらは本拠地である柳洞寺での留守番をしつつ、魔法薬の調合や、暇つぶしがてら、ミッド式魔法の開発をしている最中。
ついでに七季の使い魔であるシームルグ――東風（こち）は、認識阻害でカムフラージュしつつ、冬木市を覆う結界を張るため、触媒を設置しながら飛び回っているという次第。
こちらは襲撃者の動きを知るための、情報収集の意味が強い。
アーチャーの使い魔である、はぐれメタル――プラタ（分体）――は、彼ら主従のテリトリーである柳洞寺を探索し、怪しいものがないか警戒中だ。
たとえ攻勢には出なくとも、最低限の備えは、しておくに越したことがない、というのがキャスターをはじめ、七季主従の一致した見解だ。
「そろそろ帰らないと晩御飯に間に合いませんよう～……」
みいみい泣き言を洩らしつつ訴える、あどけない面差しのゴスロリ娘に、キャスターはイイ笑顔で即座に振り返った。
「あら大丈夫よ。きょうは宗一郎さまと待ち合わせて、新都で食事

することになっているのv」
お花満開の、恋する乙女スマイルである。
「さいですか……」
乙女からは逃げられない！
脳裏にそんなテロップが流れた気のする七季は、おとなしくキャスターの暇つぶしに付き合うのだった。

そしてライダーとの邂逅。
まっしろな天馬に跨る、黒衣のボディコン美女。そうそうに追い詰められたライダーのサーヴァントは、ここで切り札を切った――のだが。
それを見上げるキャスター一行の中。
「……アーチャー。ペガサスって美味しいかなぁ？」
じゅるり。
「ヒヒンッ！？」
びっくう！
夜空に向ける闇色の目は、捕食者のそれである。
見るからに小柄な、黒髪の少女に見上げられただけ。にも関わらず、翼を持った幻想種の天馬は、あからさまに腰が引けて、いまにも逃げ出そうとしていた。
白と黒を貴重にしたゴスロリ服に、ファーつきのケープをまとった七季は、なかなか愛らしいたたずまいだというのに――そのまなざしのみが肉食獣だ。
「え？　お、落ち着きなさい！」
宝具「騎英の手綱（ベルレフォーン）」で、どうにか召喚した天馬を押し止めようとするライダー。
確かに天馬は大人しい種族だが、彼女が召喚したこの幻想種は、古い来歴と神秘を秘める存在。騎乗できるものなら幻想種をも御し、

更に能力を向上させるライダーの宝具と合わせれば、凄まじい突進で破壊力を生み出すというのに。

「馬刺し……食べたいな……」

じいぃ。

幻想種をも怯えさせる、七季の眼力、いやさ食欲。

切り札を召喚したにもかかわらず、その切り札が怯える事態に困り果てるライダー。

「お、おいライダー！　何やってんだよ！」

一緒に騎乗しているマスター、間桐慎二が、眼帯を着けたボディコン美女を叱咤するも、天馬の怯えは収まらない。捕食者を恐れるのは、幻想種といえども獣の本能だ。それは正しい。

何しろ相手は、ドラゴンにだって食指を動かす少女なのだ。

「さばくのは私なんだろうな……」

双剣を手にしたまま、ちょっぴり遠い目をする、白い髪の偉丈夫と、

「七季殿がお望みなら狩って参りましょう！」

と金の双眸をきらめかせ、槍をしごくディルムッド。

「えーっと七季は本気なのかしら……？」

思わず控えめにツッコミを入れてしまうファーコート姿のキャスター。

「おそらくは空腹がマスターの本能を刺激してしまったのだろう」

真面目に頷くアーチャーの答えに、「そんなにお腹がすいていたのかしら……」と考えてしまう彼女は、たぶんとっくに七季に毒されている。

そして、ふわん、と夢見るように――ご馳走を前にして蕩けるように――黒い瞳の少女が笑った。

「食われるか（デッドオアアライブ）、降るか？」

キャスター一行は、天馬を手に入れた。

その後、仕事が遅くなり、ようやく合流した葛木教諭を伴って、彼らが入ったダイニングバーでは、七季が希望通り「馬刺し」を注文し。

「……あら、美味しい」

初めて食べた、その珍味に、キャスターもハマったというのは余談である。

#265　IF～まじょあねっ！？その2（後書き）

あとがき

＞思いのほか長くなったので、ここでエンドです。

まあ没ネタですから。馬刺しオチで勘弁してください（何）。

いいかげん本編に戻らんと。

このあとキャスター一行は、ケンカ売られるのが面倒なので、プラタが見つけた大元の大聖杯をぶっ壊しにいったりとか色々するんですが、あくまでキャスター側なので、肝心の主人公・士郎の影が薄いったらない（苦笑）。

士郎と関わらなければ、桜との接点もなく、ただキャスターハッピーエンド、という結末になるので、没ったものです。

他にもイベントはあったのですが、これから書く本編とかぶる内容になるのでカットしました。

オマケ程度に、サーヴァントオリ主のスキルを書いておきます。

「対魔ＥＸ」は「対魔Ａ＋＋」でも良かったんですが、ＩＦなので、読み手さまのアイデアをそのまま踏襲しました。どうか大目に見たってください。

▼神使（しんし）

：高い霊的防御力、対魔能力を有する。また、神霊や他の神使、霊地の協力が得やすく、霊力を魔力に変換することもできる。

あくまのささやき

：対人スキル。舌先三寸で、相手を丸め込み、そそのかす能力。絶好のタイミングも付随する。

神降ろし

：対霊スキル。霊的・高次存在を降ろすことができる能力。神霊や悪魔、精霊さえも降霊可能。当然ながら人間霊も対応。

誘魔

：人外、とりわけ魔性のものを惹き付ける体質。トラブルも引き寄せやすいが、魔の協力を得やすい。ほとんど猫にマタタビレベル。

対魔ＥＸ

：魔術は全てキャンセル。事実上、現代の魔術師はおろか、キャスターでも傷をつけられない。

黄金率Ｃ～Ａ＋＋

：人生において金銭がどれほどついて回るかの宿命。ただしオリ主の場合は人脈に金銭がついて回る。エンカウント率の高さに比例する貢がれ体質。

これは酷い（笑）。

#266　アーチャー

「それで『アーチャー』。この子いったい何なの？」
パジャマ姿でベッドに腰かけた青い目の美少女――凛は、栗毛の少女へ向かって問いを投げた。
が、それは彼女にとって爆弾もいいところで。
「……ッ、誰がアチャ男か――っ！」
この屋敷の持ち主である少女の叫びから五分後。
別のソプラノによって遠坂邸はびりびりと震えることになった。

「先輩、もちつけ。たぶんそれサーヴァントのクラスのことですから。それに先輩は女の子ですから、仮に呼ばれるとしてもアチャ子です」
「誰がアチャ子かっ！」
ふしゃーっ！
「仮の話ですってば。
あと、ここで話すのもなんですから、いったん身支度を整えてからにしませんか？」
ふーっ、ふーっ。
まるで毛を逆立てた猫のように興奮ぎみの、真言を羽交い絞めにして、彼女と凛のふたりに取り成す七季。
そんな黒髪の少女の言い分に、琥珀の目を吊り上げる姫巫女も、ちょっぴり気圧されている少女魔術師も、どうにかこうにか頷いた。
「……そうね。その方が良いみたい」
「ご理解ありがとうございます。私は七地七季。先輩の友人で……

まあ、部下みたいなもんですかね。お嬢さんの名前をうかがっても？」

黒髪の映える、白くあどけない面輪。その中で理知的な光を宿して、炯々とかがやく七季の瞳に、凛は一瞬だけでも魔眼の疑いを抱いた。それほどに強く、印象的なまなざしだったからだ。

囚われないように、ぐっとサファイアの瞳に力を込めて、見つめ返すパジャマ姿の少女。

「助かるわ。私は……遠坂。遠坂凛よ。

アー……彼女の部下ってことは、私にとってはどういう位置づけになるのかしら？」

「アーチャー」と言いかけて、ふたたび近くから殺気じみた怒気が吹き上がったので、あわてて凛は言い直す。

「それはお話にもよりますね。ともあれ先輩、ここひとさまの寝室ですから。ちょっと出ましょう」

「むー。わかった。じゃ、また後でね」

赤い袴と黒い袴。色違いの巫女ふたりは、さっきまでの騒動が嘘のように、静かに部屋を退室していった。

「……で」

身支度を整えた凛が、リビングに顔を出せば、そこに待ち受けていたのは、赤い外套をまとった白い髪の偉丈夫と、眼鏡をかけた緑衣の美青年。

銀髪に映える赤い目が魔性じみて美しい黒衣の女性と、テーブルに載った温かそうな洋風の朝食。

そしてさっき顔を合わせたばかりの「アーチャー」の少女に、どこから連れて来たのか、黒猫を腕に抱いた七季が勢ぞろいしていた。

「これは何なの？」

「あらためて、おはようございます」

ぺこり。
まず、凛に頭を下げたのは、黒髪をポニーテールに結った少女。
さっき身にまとっていたはずの黒い巫女服ではなく、深紅の柘榴石（ガーネット）をはめたチョーカーが映える、まっくろなハイネックと、黒に近い濃紺のスラックスといういでたちだ。
耳にはシルバーのイヤーカフ。小さな紫水晶（アメジスト）が邪魔にならない程度に品良く彩を添えている。
猫を抱く手にも、良く見れば指輪。おそらく群青色の色合いから見て、タンザナイトか菫青石（アイオライト）。
なかなか渋いセレクトなのだが、シックにまとめた七季の姿にはマッチしていて、まったく違和感を感じない。
『おはようございます』
ざっ。
その背後にいる、多国籍な美男美女については違和感しか覚えないが。
「……おはよう。それで後ろの人たちは？」
「だいたい私の従者ですね。先輩の使い魔は、別にいるんですけど、そちらは二十からいるんで……とりあえず、良く顔をあわせる予定のメンバーだけ呼びました」
落ち着き払ったソプラノで返された答えに、またもや頭を抱えたくなる凛。
恐ろしいほどの存在感は、エーテルで編まれた肉体なのだろうか。隙のない物腰や、人外じみた美貌を見るだに、彼らもサーヴァントのような「使い魔」だと思われた。
それが事実なのだとしたら、目の前の少女は尋常ではない力量ということになる。ふつう使い魔の維持は、その術者の力量を反映したものだからだ。
「あ、台所お借りしました。食材は持ち込みなんで、ご心配なく。まずはお食事をどうぞ。お腹がへっていては、回る頭も回らなくなりますから」

「私、朝食は食べない主義なんだけど……」
「朝食って……もうお昼ですよ？」
「え」
けっきょく凛は、用意されたブランチ――それも絶品の――を食べたあとで、ようやっと、このすっとんきょうな顔ぶれについての説明と、話し合いを設けることになる。

「つまり……そこの彼が『アーチャー』という名前で、まぎらわしいから彼女は怒ったってこと？」
「大ざっぱにまとめれば、そうなります」
従者たちの紹介を済ませ、七季は真言に代わって、凛と話を進めていた。
「通例として、聖杯戦争ではサーヴァントをクラス名で呼ぶ、というお話でしたね。
しかしこの場合、先輩の真名を呼んでも、おそらく支障はないと思われます。何故なら、この世界、この時代において、彼女を『英霊』として知るものなど、いるはずがありませんから」
私服である、赤いセーターを着込んだ少女は、シーズーを連想させる、黒髪ゆたかなツインテールを揺らして頷いた。
「そうね。じゃあ、真言、で良いかしら？」
「おけ。こっちも凛って呼ぶし」
「良いわ。
漣真言なんて名前は、私も知らない……。それに彼女は肉体持ちだし、名前を普通に呼んでいる方が、他のマスターをごまかしやすいか……」
「まあ、その代わり霊体化はできないんですけど。だから、遠坂さんの護衛は、そちらのアーチャー……彼にやってもらおうと思っています」

その言葉に、凛はおろか、当の男さえも、ぽちんと目を瞬いて、黒髪ポニーテールの少女を凝視した。

『え？』

＜どういうつもりだね、マスター＞

＜あのな、アーチャー。初対面のこの子に、先輩を止められると思うのか？＞

飛んできた念話に、七季がすかさずツッコミ返す。すると白い髪の弓兵は、褐色の眉間にしわを寄せつつ、うめくように愁いを帯びた念話をよこした。

＜無理だな……了解した。それは、もっともな心配だ＞

磨耗した記憶の彼方でも、どうにか「遠坂凛」に関する情報を持ち合わせている錬鉄の英霊は、かつての魔術の師匠では、真言の手綱を取るのは無理だろうと思い至った。

凛は、かなり大胆な性格をしている少女だが、わりと常識人な彼女は、自分のキャパを超える非常識および理不尽に出くわすと、とたんにパニクることも多い。

言ってはなんだが、真言は「神妻」であり、天災レベルの存在だ。アーチャーの知る中では、「宝石翁」がわりと近い位置に来るだろうか。

――いいとこ振り回されるのがオチで、ひょっとすると一緒になって暴れる可能性すらある。付き合いが多少深くなったとしても、たぶん無理だな。

七季はろくに凛について知らないはずだが、その直感と人を見る目から、その程度の予測はたやすく立ったらしい。

＜念のため、ディルも遠坂さんにつけようと思う。この中でいちばん狙われるのは、マスターの遠坂さんのはずだし、バディを組んでの行動を基本にした方が、何かあったときに融通がきくから＞

「過剰戦力かもしれないけど、ディル……ランサーも遠坂さんについてくれ。この場合、聖杯戦争においてマスターの立場にある彼女が、いちばん狙われやすい。ここに戦力の要を置くのが妥当だと思う」

七季の命を受けて、金の目の青年が生真面目に頷く。

「承知。しかし、そうなると七季殿の護衛は？」

主と仰ぐ少女の言葉に異を唱えることはないものの、心配そうに「神使（しんし）」の少女を見つめるディルムッド。

「私は、リドルと東風（こち）をつれて町の探索をする。ついでに、買い物がてら、周辺の動きを感知するためのしかけに良さそうなポイント探しも。

方向音痴の先輩には、ちょっとな」

くすりと笑う七季に、栗毛の美少女がむーっと唇を尖らせる。

ちなみに名前が出たシームルグはというと、げんざい遠坂邸の屋根に停まって警戒中だ。ただし見ためが派手なので、認識阻害の魔法をかけている。

「拗ねないでください。先輩には頼みたいことが、別にあります」

なだめるような響きのソプラノで、やんわり真言に声をかけたあと、柘榴石（ガーネット）のチョーカーをつけた少女は、銀髪の美女へと振り返った。

「リイン」

「はいっ」

ぴん、と見えない犬耳を立てたかのように、ルビー色の双眸をかがやかせて、傾注するリインフォース。

「先輩と組んで『聖杯』についての調査を頼む。はっきり言って『聖杯』の情報が漠然としすぎている。

どうも、それが気になるんだ。聖杯戦争は、これで五回目だとい

うけれど、前回の結果がどうなったのか、遠坂さんは詳しいことを知らないみたいだし……。
　できれば、前回だけでなく、その前の聖杯戦争の結果、過程についても情報が欲しい。
　戦いました、徒労でした、じゃお話にならないからな。
　無理はしなくて良いが、公的機関にも何がしか記録が残っているかもしれないし、監視カメラなんかの画像データなら、コンピューターに残されている可能性も捨てきれない。
　口はつぐんでいても、残すだけ残している、ってな物好きがいる場合もあるからな。
　それに先輩なら、たぶん『聖杯』という漠然としたイメージでも移動できるはずだから、どこにもぐりこむにしても不自由はないはずだ」
「わかりました。七季のご期待に応えましょう」
　重大な任務だ、と感じたリインフォースは、誇らしげに黒髪の少女へと視線を返し、優美な笑みを見せる。
　その仕切りっぷりに、肝心のマスターである凛は、この油断のならない少女へと、幾分か好戦的な色を乗せながら、そのサファイアを連想させる大きな目を向けた。
「ずいぶん手馴れているのね？」
「そうですね。仕事で指揮や作戦を立てることが多かったですから」
　ふっとにじむように控えめな笑みをこぼして、七季は魔術師の少女へさらりと応じる。
「私は先輩の従者ですから。彼女が戦いやすいようにサポートするのが仕事です。
　窮屈かもしれませんが、遠坂さんがお出かけの際は、必ずアーチャーとディル……ランサーを連れて行ってください」
「……わかったわ。ところで、あなたのことは何て呼べば？
　七地さん？　それとも七季？」
「お好きなように」

七季の、薄いアルカイックスマイルに、真意を悟らせぬ、どこか底知れなさを感じる凛だった。

「それにしても……」

護衛がいるとはいえ、マスターを置いて行ってしまったサーヴァント――真言に、呆れ半分の嘆息をこぼした凛は、するともなしに、リビングに残って男――アーチャーの淹れた紅茶を飲んでいた。

凛を置き去りなプランは気に食わないものの、論理的に考えれば、七季の述べたことにも一理ある。むしろ、聖杯戦争の初手としては、それほど間違っていないだろう。

情報収集と敵の探索は、基本とも言える。

いずれにしろ、サーヴァント召喚の儀式に費やした凛の魔力は、まだ完全には戻ってきていない。

「あなたが私のサーヴァントだったら良かったのに」

――同じ「アーチャー」であるのなら。

ぽつりと少女の唇から洩れた呟きは、しんそこからの本音だ。

「は」

目の前の偉丈夫は、見るからに戦士然とした体躯で、とても頼もしげだ。彼ならば、サーヴァントである英霊だといわれても疑わなかっただろう。

自分がどうして最初に、彼ではなく、その主である七季を召喚（？）したのか、凛には納得がいかない。

彼女の目には、とても七季がアーチャーより強いようには思えないからだ。

――でも、それを言ってしまえば、聖杯戦争中にサーヴァントを従える魔術師たちはみんなおかしい、ってことになるんだけど。

しかし彼らサーヴァントは、自分の目的を果たすため、その手段である聖杯を手にするために、魔術師と組むのである。その主従関

係は、基本的に利害の一致でくくられただけの冷えた関係だ。
令呪という強権がなければ、「人間以上」の力量を持ったサーヴァントを、マスターが御する統べはなく、サーヴァントが反逆する可能性は高い。
「それは……光栄なお言葉だがね」
錬鉄の英霊は、どこか困ったように、面映ゆそうに、精悍な顔に苦笑を浮かべる。ふ、と優しい光を宿した灰藤色の双眸が、凛に向いたままで、かぶりを振った。
「私は七季の従者だ。これからも違える気はない」
「そっか……まあ、そうよね。残念」
凛もかるく目元だけで笑うと、カップの紅茶を口にして、その香気と味わいを楽しんだ。
目の前の男は、朝食だけでなくこの紅茶すらも絶品に仕上げる腕前ときている。料理が得意な凛としては、競争心をかき立てられもするのだが、アーチャーのレベルは、彼女からしても、はるか彼方だ。ただ美味しいと素直に思う。
「ねえ、アーチャー」
「何かね？」
庭先で哨戒に当たっているディルムッドとは、タイプの違う男前――そう言って差しつかえないだろう――の、精悍な相貌を前に、魔術師の少女は、ふと興味に駆られて問いかけた。
「あなた、どういう経緯で彼女と……七季と、主従関係になったの？」
わくわくした顔つきの凛に、面食らったように瞬いたアーチャーが、口元を緩める。
「そうだな……」
黒髪の少女と、白い髪の偉丈夫の間に、穏やかな時間が流れていく。

#266　アーチャー（後書き）

あとがき

＞長さのわりに、話が進みません。とりあえず顔合わせです。

凛様、たぶんまだ先輩のスペック確認してない（笑）↑うっかり「アーチャー」呼ばわりにご立腹の先輩。そうそうに名前呼びに変更しました。

だって紛らわしいし（待て）。

凛様への対応が、わりと事務的なオリ主。

彼女の心情は次回あたりに。凛様に悪感情は持ってません。

2014

#267　メモリー

＜ねえ、ナナキ＞
「んー？」
少女の影にひそんだまま、念話で問いかけてくるリドルに、七季は本屋で地図を見繕いながら、生返事をした。
＜どうして、あいつをあの女の護衛に回したのさ＞
けげんそうな、それ以上に苛立たしそうな念話の響きに、少女は笑みに良く似た穏やかな面持ちでページを繰る。
そうしていると、ふだんはあどけない童顔が、おとなびた静けさと母性を含んだ慈愛を帯びて、妙齢の尼僧さながらの清らかさを醸し出した。まるで風雪に耐えて咲く、梅のような風情が黒いコートに引き立てられて艶（あで）やかだ。
＜守りたいんじゃないかと思ったから＞
それはリドルにとって、理解できないけれど――つい受け入れてしまいそうな。
ふわふわとたよりのない、それだけにかろやかに胸へと収まる響きだった。

彼女の名前は知らない。
ただ、ときどき流し込まれる彼の記憶・記録のかけらは、血しぶきと硝煙と土と泥だけではなくて。
きらきらしく、美しい、それでいて切なくなるようなものも、あったのだ。
それと良く似たものを、七季も持っている。

彼女のお日さま。
いまでも思い出すだけで、ほんのりと胸を温めてくれる、綺麗なきれいな思い出。宝石箱にしまいこんだ、宝物のような。
まだ幼かった、雛の時代。
七季にとって、そのひとは太陽だった。
――もういないけれど。
それでも違う世界で、彼がいたなら、七季は一目でも会いたいと思うだろう。元気で、幸せでいて欲しいと願うだろう。
困っているなら、助けたくなるだろうし、ましてや、命を狙われているなら困難を蹴倒してでも、自分にできうる限り、彼を守ろうとするかもしれない。
だからアーチャーも、そう思うのではないだろうかと考えたのだ。
挙動不審だった彼の灰藤色の目は、それでもまっすぐ少女を――遠坂凛を見ていたし、そのまなざしは懐かしげで、優しかった。
それなら、最初から守りたいものを守らせるのが、最善だろうと。

2016

「はあぁ……」
そんなことを、念話を通して伝えたところ、影に潜んでいるリドルから、ふかーい呆れ混じりの嘆息が、念話ではなく肉声で返ってきたのを、たしかに七季は聞いた。
――いや良いけどさ。ここ人けっこういるし、誰かのためいきだと思われるだろうけど。
＜アチャ男に同情すべきなのか、殴るべきなのか……まあ良いや。どうせアチャ男だし＞
かなり酷いコメントをつけると、リドルは黒のロングコートを着ている少女の行き先を問うた。
＜そうだな。地図買ってから、ちょっと行くところがあるから、まずはそこかな？＞

冬木という街に来るのは、初めてのはずだ。七季の言葉に、闇の魔法使いはないしん首をかしげる。

＜だからどこなのさ？＞

＜いや、感覚で方向はわかるんだけど、あとで迷子はいただけないから、地図を買おうと思って＞

＜……神様絡みか＞

＜まあそれに近いかな＞

そうして、冬木市の新都にある、駅ビルで地図を購入した少女は、その黒髪を冬の風になびかせながら、しっかりとした足取りで公園へ向かっていた。

＜ところでナナキ。何でクーリングオフなんて？＞

＜ん。ぶっちゃけ先輩以外を主と仰ぐ契約なんて論外だし。ロクに知らないひとに仕えるのもゴメンだったし＞

そんな、これでもかと本音ダダ洩れな返事が、七季から飛び出した。

正直すぎるセリフに、思わず「うわぁ」と呆れるリドル。少女の影の中にひそんでいるため、顔は見えないが、もし実体化していたら、その美貌は引きつっていただろう。

＜……君、たしか乱世に落とされた折に、ソウソウとやらに仕えていたんじゃなかったっけ？＞

ディルムッドを連れ帰ったときの話である。

＜ソソさまに仕えてたのは、あくまで給料もらった「お仕事」で、ディルのオマケだったからね。魔術的な契約なんか介在してないもんよ＞

つまり彼女は、真言以外に縛られる気はない、ということなのだろう。

七季が主としていただくのは、あくまで漣真言、ただひとりと。

＜つーわけで、相手の言動をこれ幸い、契約なしにしてぶっちぎっちゃいましたー♪＞

凛のうっかりを、ここぞと利用する、七季の幸運とちゃっかりっぷりに、影の中で生温く笑う闇の帝王の前身（プレ）。

――まあ、あの女がナナキをあつかいきれるわけないよね。マコトを使うのも無理ゲーだけどさ。

タチの悪さでいうなら、真言よりも七季の方が厄介なのは間違いない。その半生において、確固とした力を持たないできた少女は、そのぶん知恵や小細工、ときには幸運すら味方につけて、盤面をひっくり返すのが常だからだ。

＜うん……君、やっぱり僕のマスターだよ……＞

――その腹黒さに乾杯。

こっそり、そんなことをリドルが考えたのが、異邦の地での一日目だった。

2018

#267　メモリー（後書き）

あとがき

＞今回は短いです。

まだ一日が終わるわけではないのですが、区切りが良いので、ここでカット。

あてつけとかではなく、純然たるオリ主の善意でした。

というわけで弓兵、黙ってるけど凛様と縁があるってバレてます（笑）。

2019

#268　マヒルノツキ

「んー……」

ほわ、と少女の吐息が、冬の大気に白くけぶる。空には、彼女の呼気と似た、薄く白い真昼の月が、いまにも青に溶けそうな儚さで浮かんでいる。

――ちぎっちゃまずいか、これ。

新都と呼ばれる土地の、街中を歩いていた七季は、目に映る糸――それは霊的な視界においてのが、あちこちから空へ伸びているのを確認していた。

霊的なものを見るための機能をオンにした、黒瑪瑙の瞳は、淡い藤色の燐光を帯びて瞬く白い糸を見つめている。

空へ伸びているといっても、まっすぐ垂直に上を目指す、樹木のようではない。傾斜をもって一点へと向かっている風に見えるそれは、ロープウェイにも似て。糸をたどれば、たやすく行き先が読めた。

――山だな。

この時点で、彼女が知りうるはずもないが、それは円蔵山の中腹に立つ山寺、柳洞寺を指していた。

七季は、この情報を胸に書き留める。

――街から山へ向かう糸。そこから伝わる生気の流れ。

彼女であれば、それを断ち切ることも容易だった。しかし、霊的な事件に慣れた七季からすれば、こういうしかけに手を出した場合、相手が襲ってくることも想定するべきだと反射的に思考する。

――どうせおびき出すなら、戦力を用意した方が、とっとと片づけられるかな。

この糸が、いったいどれほどの期間、街や土地から、そこに住む

命から、生気を搾取しているのかは、わからない。
サーヴァントの召喚が、いつから許されるのか、異邦の少女は知らないからだ。
七季は「聖杯戦争」について習熟しているわけではないし、彼女が「召喚」という体裁をとって（じっさいには真言に放り込まれて）、この土地に降り立ったのは、つい昨日である。
しかも、いったんは元の世界に帰還したあとで、その翌朝、ふたたび栗毛の少女に引っ張り込まれてという滞在時間の短さだ。
それを差し引いても「聖杯戦争」においての参加者――マスターであるはずの凛からもたらされた情報は、大したものではなかった。
前回（今回に五回目だというから、第四次の「聖杯戦争」）で、凛は魔術師であった父親を亡くしたらしく、口が重い。
しかし、それ以上に、「聖杯戦争」について、魔術師の少女が知っていることは少なかった。
亡くなったという父親が、勝利を確信していたために、わざわざ書き残すまでもないと思ったのか。
それとも、幼い子供への口伝は無理だと秘したのか。
いずれにせよ、親から子へ、受け継がれるべきだった情報は、散逸したのだろう。
凛から語られる、この戦いの目的――「万能の願望器」もしくは「聖杯と思われる何か」という――「聖杯」の姿すらも、あいまいだ。
――願いを叶える。
その物体、その機能に、七季は根深い疑惑を抱く。
多くの場合――それは伝説や民話などの例だが――願いを叶えるには、代償が必要だ。
魔術的な儀式なら、なおのこと。
――それにしては、安すぎる。
七季からすれば「何でも願いが叶う」という「大きな結果」に、「人間六人」という支払いは「小さい」と考えざるを得ない。

酷い話だが、仮に「世界制服」という願いを叶えるにあたって「六人の血肉、あるいは魂を捧げること」が条件であるのなら、血迷う人間は、おそらく腐るほど出てくるだろう。

陳腐な想像だが、わかりやすい構図である。

もっとも、凛に言わせると、参加できるのは基本的に魔術師だけで、その魔術師というのは、たいていが「根源の渦」に至ることを目的としているらしい。

世界の外側。ありとあらゆるものの「起源」。

そして「英霊の座」――アーチャーのいたところに、限りなく近い場所。

七季は真言によって、「座」に放り込まれたりしたわけだが、その彼女は「神妻」。おそらくは、とっくに「人間以上」どころか「英霊以上」。

身近な例として比べても、六人を殺して「神」に近づくことができるのなら、世話はない。

――願いを叶えるというのなら、むしろ悪魔の領分だと思うんだけど。

だから七季は、余計に疑いたくなるのだ。

争いに勝つ為の条件は、大まかに二つ。

1）マスターかサーヴァントを倒す。

2）マスターの令呪を無効化して強制的にマスターとしての資格を失わせる。

しかし、マスターを狙えば、相手のサーヴァントが邪魔をするのは当たり前で、けっきょくはサーヴァント同士の対決になることが多いという。

そうであるのなら。

――蠱毒（こどく）、みたいだ。

「蠱毒（こどく）」とは、物語だけでなく、歴史にも登場する呪術で「器の

中に多数の虫を入れて互いに食い合わせ、最後に生き残った最も生命力の強い一匹を用いて呪いをする」という術式のことだ。

時代によっては、この日本でも、詔勅によって禁じられたほどの有名さだから、ちょっとオカルト系の読み物を読んだことのある人間なら知っているだろう。

昆虫だけでなく、猫や犬といった動物を使うこともあり、それらは猫蠱、犬蠱と呼ばれる。

――さしづめ「霊蠱」とでも称するべきか。

いわば、サーヴァントという高次存在――「英霊」を食い合わせる、この儀式に、少女は人間の欲望の、痛烈な臭気を感じ取った気がした。

そもそも、虫を使う「蠱毒（こどく）」からして、呪詛に用いられる目的で作られるものだ。

狙った相手から才能や財産、異性など奪い取る、呪殺するなどの使い方が「一般的」で、なおかつ、きちんとした後始末なり、管理なりをしないと、完成させた「蠱毒（こどく）」を、あつかう術者じしんがもてあますはめになる。

その末に、「蠱毒（こどく）」に食い殺されたり、破滅させられたりする術者の数は多く――生半可な知識で手を出したものらしいが――まさに、「人を呪わば、穴二つ」を地でいく話なのだ。

――それを、仮に「サーヴァント」なんて高次存在でやったらどうなるか。

考えるだけでも、身の毛のよだつ話である。

七季はぶるりと震えて、黒いコートに包まれた、小柄なおのが身を抱きしめた。

この儀式を始めたものが、蠱毒を作る目的で始めたとは思いたくないが、可能性は頭の隅に置いておかねばならないだろう。

下手をすれば、七季たちがそんな相手と戦うはめになるのである。

――先輩は「穢れ」に弱いから……。

巫女である彼女と真言は、呪物に対しても耐性があり、そのうえ

浄化もできる。
だが万が一、隙を見せて真言が毒されるようなことは避けなくてはならない。蠱毒には、その毒素はもちろんだが、悲嘆、憤り、飢え……その他もろもろの怨念がつきものときている。
肉体だけでなく、霊性をも毒するのが蠱毒なのだ。
さておき。
「ここだな」
桜色の唇からこぼれる呟きは、ふたたび月色にけぶってわだかまる。
思考を切り替えた七季は、夜色のポニーテールを風になぶらせながら、その公園へと踏み込んだ。
凛が、もしくはアーチャーがいたのなら、さながら「固有結界のよう」だと評するだろう、そこ。
第四次聖杯戦争における終焉の地は、声なき叫びを湛えて、あどけない黒衣の少女を迎え入れるのだった。

「ん……？」
その公園へ、ひとりの少女が踏み込む姿を、深紅の目が見つめていることに、誰も気づかなかった。
外国人なのだろうか。
きらきらしい金糸の髪に、漆黒のライダースーツをまとった青年は、いましがたの視界を一瞥だけすると——ふたたび足を動かした。
彼が向かう先は、深山町「マウント深山商店街」。男と縁のある神父からの呼び出しに、渋々と足を運んでいる途中のできごとだった。
彼らは近く、印象的な出会いをすることになる。

#２６８　マヒルノツキ（後書き）

あとがき

＞英雄王ニアミス。エンカウントまでたどり着けませんでした。無念。

短くまとめてしまったので、余裕があったら明日も更新します。

2025

#269　フラガ

「バゼットさん、具合はどうだ？」
入室の許可を得てから、その部屋に踏み込んだ少年――士郎は、客間のベッドに横たわる女性へと声をかけた。
「ええ。先日に比べれば、ずいぶん回復しました」
君のおかげです。
少し眉根を寄せて、それでも淡く微笑もうとする赤毛の女性。
バゼット＝フラガ＝マクレミッツと名乗った彼女は、先日、路地裏に倒れているところを、通りすがりの士郎に拾われて、一命を取り留めた「魔術師」だった。
半身を起こした膝上には、右手と、包帯に包まれた先のない左腕が、アンバランスに置かれている。
それは彼女の油断。
聖杯戦争開始前に、旧知の仲だった言峰に会いに行ったところ――彼による騙し討ちに合い、みずからのサーヴァントであったランサーと、令呪の刻まれていた左腕とを奪われたのだった。
必死の抵抗で、からくも言峰の魔手を逃れたバゼットだったが、切り落とされた左腕からの出血多量で朦朧としていたところを、士郎に発見されたというわけだ。
「片手がないと、こうもバランスが崩れるものだとは……ようやく慣れることができました」
当初は、士郎が一般人であると思い込んでいた彼女だったが、お人よしで「正義の味方」を目指す少年が、重症のケガ人を放っておくはずもなく。
救急車を拒むバゼットに折れた彼が、それならばとケガ人を衛宮邸に運び込んだところ。

「セイバー」のサーヴァントである少女と遭遇したことで、士郎を聖杯戦争のマスター、すなわち魔術師であると知ったのだった。

「そっか……痛み止めは？」

心配そうに見つめてくる少年の、琥珀の瞳を力づけるかのように、きっぱりとかぶりを振るショートカットの麗人。

その美貌を見ても、西洋の血筋なのは明らかだが、赤毛といい、パジャマ代わりの浴衣を着ていることといい、士郎と並べば「姉弟」と言っても通るかもしれない。

「いえ、いまは必要ありません」

いっぽうで、士郎の向こうには、金髪碧眼の美少女が控えている。雪のような白い頬に、エメラルドの双眸が燦然と燃えて、セイバーはじっと赤毛の女を見据えていた。

サーヴァントである彼女は、魔術師のバゼットを警戒して、マスターである少年から離れないのだ。

「封印指定」――いわゆるとびきりレアな魔術師――を狩る立場にある、「執行者」のバゼットから見れば、士郎は、この冬木の地に住んでいながら「聖杯戦争」を知らずにいた、へっぽこ魔術師である。

しかし彼は、利己的、排他的な傾向が強い魔術師にあるまじき善良さで、傷ついたバゼットを親身に世話してくれた。

病院を嫌がるバゼットのため、ツテを頼って――それはお隣に住む、藤村雷画のものだったが――表ざたにならない医者を手配し、そのあとも、自分のテリトリーである衛宮邸に、彼女を匿ってくれたのだ。

もともと魔術師にしては武闘派で、生真面目なバゼットは、この善良な――ともすれば危なっかしいほどに――少年に、感謝せずにはいられなかった。

――士郎君の支払ったリスクは、相当なものだ。

魔術師を警戒して斬り捨てようとするセイバーをなだめ続け、バゼットの容態が安定するまで、ずっと看病を続けていた。

そのため学校を休んだのは、他のマスターを警戒するセイバーからすれば、不幸中の幸いではあったが、だからといって彼女がバゼットを歓迎する理由はない。

この赤毛の少年は、重症のバゼットを助けるための治療費はもちろん、いま持ってきた、彼女のための食事にいたるまで負担しているのだから。

だからバゼットは、たまたま召喚されたとはいえ、士郎のサーヴァントが、このセイバーだったことに安堵する。

――士郎君に世話を焼かれているうちに、彼の甘さがうつったのでしょうか……。

文句を言いつつも、セイバーは、士郎を心配し、守ろうとし、常に側にいる。

――彼には、それが必要でしょう。

この、お人よし過ぎる未熟な魔術師の少年を、つい気にかけてしまうバゼットは、もはや姉のような心持ちにすらなっていた。

よちよち歩きを始めたばかりの子供から目を離せない母親――そう言ってしまっては、あまりにもあまりだが、バゼットから見れば「弱い」士郎は、ついかまいたくなってしまう。

――このケガでも、君ひとりを殺すことくらい、わけはないのですよ？

目の前に食事を差し出す少年の首を眺め、ためいきをつくバゼットの、ないしんを知ったらセイバーが目をむくのは間違いない。

しかし「鉄の女」もいいところのバゼットから母性を引き出すという、封印指定もびっくりの偉業を成し遂げた少年はというと、何も知らぬげに、かいがいしくリゾットを給仕している。

――魔術師の基本は、等価交換。

口元に運ばれるそれを飲み込みながら、赤毛の「執行者」は、緩みそうになる白い頬を引き締めた。

――それならば。

命を救われた、バゼット＝フラガ＝マクレミッツは、いかにも危

なっかしい、このへっぽこ魔術の少年をサポートし、その命を拾うのが、道理というものだろう。

――このままだと、彼はすぐに死んでしまいそうだ。

そうなれば、まだ傷の癒えないバゼットにだって不利なことになるのだし。

目の前の少年は、頼りがいのある男というには幼すぎたが、それでも――何故だか、支えたくなるような危うさ、一途さ、どこか消えうせてしまいそうな、奇妙な魅力が秘められていた。

おそらく、近くで関わる人間しか気づかないほどの、ひそやかなもの。

けれどそれは、赫く灼熱する鍛打中の剣のように――いったん触れてしまえば、焼けた指が張りついてしまうような、二律背反の耐えがたさを呼び込む。

「士郎君」

凛、と板張りの洋室に、バゼットのアルトが良く通った。

「ん。ああ、お茶かな」

給仕の手を止めた少年は、レンゲを置いて、湯飲みを彼女の口に運ぼうとする。

「いえ」

視界の中で、金髪の少女がそれとなく身構えるさまが、バゼットに見えた。

「私は……命を救われました。その借りを返すため、この聖杯戦争における間、君に助力しようと思います」

#269　フラガ（後書き）

あとがき

＞ダメットさ……もとい、バゼットさん登場。

てか、やっと出せたよ、Ｆａｔｅ主人公！

そんなわけで、槍の兄貴が原作通りコトミー陣営に持ってかれたかわりに、士郎にバゼットさんというアドバイザーをつけてみた。

書いておいてなんだが、何この体育会系メンバー。

英雄王を期待した読み手さまにはすまんです。

あと士郎によるバゼットさん看病は素です。

彼女が三割り増しくらいでデレてますが、フラグ建築士はダテじゃない、ってことで。

死にかけたところで、士郎レベルの親身な看病を受けたら、たいていのひとはオチるんじゃないかと思う。

2030

#270　ハピネス

「……ちょっと待って」

カップをテーブルに置いた黒髪ツインテールの少女は、テーブルに突っ伏していた。ふんわりとボリュームのあるツインテールが、へちゃりと顔の横でわだかまっているのが、いかにも元気ない。

頭痛を堪えるように、頭を抱えてうめく凛を、男は灰藤色の双眸で、気の毒そうに眺めやる。

「その話が本当だとしたら、あの『アーチャー』――じゃない、真言は、世界の外側にあるはずの『英霊の座』に乗り込んだうえに、しかも、その『座』から英霊本体を連れ出せるような力の持ち主ってこと!?」

発狂したくなるような、しっちゃかめっちゃかな気分を抱えた魔術師の少女は、「しゃぎゃー!」と叫んだ。

おのがサーヴァントとなった、異邦の巫女――「神妻」の持つエピソードは、それだけに留まらない。

「そのうえ異世界――おそらくは平行世界の移動や、時間旅行もできて!?

真言の『神使』――下位存在にあたる七季ですら、死者蘇生ができるって、どういうことよ!!」

魔術師涙目の存在である。

英霊すっとばして、もはや「神霊」レベルだと思われる。

このあたりのクラスになると、七季など、一部の例外を除いて、めったなことでは人間が呼び寄せることなど夢のまた夢。

青い目の少女に食ってかかられたアーチャーは、幾分か身を引きながら、フォローにならないフォローを入れた。

「死者蘇生といっても……七季の場合は『反魂(はんごん)』だがな。

彼女は、任意の魂を『神降ろし』によって降ろすことができる。その魂を、器に移すことができるだけ――と、本人は言っていたが」

こうして語るアーチャーとて、それがどれだけ非常識なことかは知っている。

優秀な魔術師であるならば、入念な下準備の元で、別の器に自分の魂を移すことができることは、ごく一部のものの間では知られていることだ。

だが、七季の場合は、その下準備すらもすっ飛ばし、ただ彼女の呼び寄せるままに、任意の魂をおのが肉体に迎え入れ、それを通路にすることで、器となる肉体に魂を流し込む、というざっくばらんにもほどがある手段なのだ。

それは天性のものであるらしい。

何故なら、かつての七季は、ひとりでは封印によって霊視ができず、その状態でも「神降ろし」はふつうにできたというのだから、ふるっている。

つけ加えるなら。

その「神降ろし」の応用か、それすらも「神降ろし」の範疇なのかは不明だが。

――斬魄刀（ざんぱくとう）という、霊的なものすらも、彼女が「降ろ」せば実体化するというのだから……。

魂の物質化、と呼んでもさしさわりないような、その現象は、どのような条件で可能となるのか、アーチャーにはわからないが、それをなせるだけで、第三魔法を目指すアインツベルン家が知ったら、これまた発狂しそうな内容だ。

「だいたい『神降ろし』？　何なのよそれ――！」

ぎゃーす！

彼は、凛の精神的平安のために、そっと口をつぐんで嘆息した。

――いまさらながら……とんでもない環境にあるのだな……。

「神使（しんし）」の七季。その主でもある「神妻」の真言。

そういうアーチャーも、いつのまにか鍛冶神の弟子に取られ、「神様見習い」になっていたりするのだから。

しかしながら、波乱万丈な生活だというのに、毎日を楽しんでいることに、彼は気がついた。いきなり突拍子もないことに放り込まれても、その先には誰かの笑顔が、ぬくもりが、未来があった。

あまりに幸せで、眩しくて、殺し続けてきた自分の罪深さを思い出すたび、ふいに恐怖じみた息苦しさで、うずくまりたくなることすら。

そういうときは決まって、彼女が傍にいた。

小さな白い手が、男の無骨な手を握り、あるいは褪せた白い髪の頭をかき抱き。

『ばーか』

慈愛のこもったまなざしと、やわらかなソプラノでアーチャーを罵ってくれた。

『ばーかばーか。ばかアーチャー』

幸せに怯える、愚かな男を、七季は優しく責めて引っ張り上げるのだ。

エミヤシロウという存在は、自分が幸せになる、ということに対して慣れない。

人の幸せを望むことはできても、自分の幸せ、というものへの欲求に、非積極的なのだ。その価値すらない、と思い込みがちなのだ。

そういう、いびつで不器用すぎる性格の男を、わがままで欲張りな主は許さない。

罪悪感でぐだぐだになる従者を、責めてなじって蹴っ飛ばして引っ張って、振り回したあげく抱きしめるのが、彼女のやり口。

――ああ、まったく酷いマスターだ。

苦しむなら苦しむで、好きにすれば良いという。それでも、どうせ同じ苦しむのなら、自分の傍らでやれと。

『楽しいことも、苦しいことも、わかちあってこそだろ？』

それが、主として添うことだと、きっぱり言い切る七季の黒い瞳は、いとしげに彼を映していた。いつもたよりなく見える、しなやかな腕の力強さを思い出し、男はその胸に灯るあたたかい何かに微笑んだ。

「――」

「どうかしたかね？」

ふと黙り込んだ、赤いセーターの似合う少女にアーチャーが声をかければ、彼女は見惚れていた男の顔から、ふいっと無理やり視線を逸らした。なめらかな凛の頬が、ほんのり赤く染まっている。

――こいつ、あんな顔して笑うんだ。

眉間にシワがデフォルトの偉丈夫が、ふいに見せた笑顔。

褐色の精悍な相貌とあいまって、ちょっと皮肉っぽい嫌味な笑みが、腹の立つほど似合う――と思っていた凛は、彼が見せた、照れくさそうな少年じみた表情にどぎまぎしていた。

ひそかに胸に抱える憧れに、ちょっと似ている気がして。

「別に……あんたも、そんな顔するんだなって」

「そんな顔？」

少女の言葉に、けげんそうな色を浮かべる灰藤色の双眸を瞬かせた男は、しんそこ自覚がないらしい。

「幸せそうな顔してた」

そう。

思わず凛もつられて、笑みを誘われるほどの。

「っ……そんな顔を、していたかね」

ふたたび眉間にしわを寄せて――しかし、わずかに困ったように眉尻を下げて、口元を覆うアーチャーに、魔術師の少女はくすくすと声を洩らす。いたずらっ子みたいなチャーミングな笑顔だ。

――照れちゃって。かーわいい。

「眉間のシワがないと、案外若く見えるのね、あなた」

生前は、童顔を気にしていたころもあり、前髪を上げるようになった男は「む」と口をへの字に曲げるが。

「やれやれ……それはそうと、君のサーヴァントのステータスは確認したのかね？」

彼女たちがこの場にいない以上、わからないことがあれば、相談に乗ることもやぶさかではないが」

「う……」

アーチャーの切り返しに、うっかり図星を突かれた少女は、紅茶のお代わりを要求しながらも、いまは離れている「アーチャー」のサーヴァント、真言をライン越しに確認し――。

「ちょっと何よこれ――！」

案の定、ツッコミどころ満載のステータス値に、ふたたび雄たけぶことになったとか、ならないとか。

「よし娘、好きなだけ食べるが良い！」

「ごちになりまーす♪」

そのころ、とあるケーキバイキング店では、金髪ルビーアイの美青年と、黒髪ポニーテールの小柄な少女が、ほのぼのとした空気をまき散らしつつ、スイーツ攻略に励んでいた。

#270　ハピネス（後書き）

あとがき

＞若干アーチャーがヘタレ成分をのぞかせていますが、「エミヤシロウ」は、自分が幸せになることには尻込みすると思うんですよ。

そして幸せすぎる日常に、ある日いきなり不安を覚えて落ち着かなくなったりする（薄幸体質だから……）。

オリ主は、それがわかっていますし、いきなり本人の性質が改造できるとも思っていないので、少しずつ慣らしていくつもりです。

「でも連れて行くから。よろしく！」ってなノリで引きずっていきますが（苦笑）。

凛様が弓兵にときめくのはしゃーない。ほんのり衛宮士郎ラブで、アチャはその未来形なんですから。

この話では、凛様にとっての弓兵は「からかいがいのある憧れのお兄さん」的なポジションに……なると良いなぁ（あくまで希望）。

あとツッコミの相方（待て）。

ようやく最後にちょっとだけギル登場！

早くギャグパートに進みたい今日この頃。

#271　エンカウント

時間は少し前にさかのぼる。
ちりん、と来客を告げるドアベルの音色と共に、まっくろずくめの少女はその店へと入った。
ほどなく、七季と同じくらい小柄な女性が、空席へと彼女を案内してくれる。
「注文が決まったら呼んでくださいアル」
きょうび、ちょっとうさんくさいほどの語尾は、キャラ付けなのだろうか。
ないしん首をかしげつつ、七季は黒いコートを脱ぐと、空いた方のイスにそれをかけてメニューを開いた。
「どうも」
――お粥あるかな？
中華粥は、彼女の好物のひとつだが、七地家の食卓には上がらないメニューでもある。だから七季は、外食で中華料理店に入ると、二回に一回は中華粥を頼むのだ。
「あ」
――あった♪
一通りメニューを眺めて、そこで視界の端に映った、近くのテーブル。
金髪の人物が、突っ伏している姿に、七季は思わずギョッとした。
食中毒だろうか。
「あ……あの、このひと、大丈夫なんですか！？」
救急車とか呼んだ方が。
店員を呼び止めるものの、チャイナドレス姿の女性は、にっこり笑って取り合わない。

「問題ないネ」
「え……ええー？」
――通報しなくて良いの？
おたおたする黒髪の少女に、お団子ヘアーの女性店員は「いつものことヨ」とフォローらしきものを入れるが、それきりだ。
――本当に良いのかこれ？
ちらちら。
黒瑪瑙の瞳は、なおも近くのテーブルをうかがうが、昼を過ぎているからか、七季と突っ伏している人物以外に、他の客はおらず、たった一人の店員は、金髪の人間を放置の方向らしい。
そうこうしているうちに、七季の注文した、海鮮粥がやってきた。
「ハイ、お待ちどうアルね」
それは、少女の懸念をよそに、海老やアサリ、貝柱など、海の幸の滋味があふれる中華粥だった。
「あ、おいし……」
一口、二口運んだ七季もつい、ほんわりと表情を緩めて粥を味わう。冬木は温暖な土地とはいえ、それでもやはり寒い。冬風に当たりながら歩いてきた少女の、冷え切った体を、海鮮粥は、内側からじんわりと温めてくれた。
しかし、まだ視界の向こうで突っ伏している青年は動かない。
七季はしばらく、こくこくと優しい味の粥を口にしていたが、とうとう気になって、その青年が突っ伏すテーブルをのぞきこんでみた。
朱塗りのテーブルは、ほとんど片づけられていたが、それでも、まだ食べかけの皿が一皿と、そこに投げ出されたレンゲが一つ、それから青年の突っ伏した位置からは遠くに置かれた、水入りのグラスが一つ、ぽつんとたたずんでいる。
彼女はふいに、その皿に残っている料理の赤さと、見覚えのある光景に戦慄した。
――まさか。

テーブルの上には、わかりにくいものの、おそらくこぼれた料理で「麻婆」とダイイングメッセージ（死んでない）が残されていた。

「あの……き、聞こえてますか？

声が出ないなら、えと、これどうぞ！」

少女が差し出したのは、小鉢一杯の粥。大きめの丼から取り分けられて、少したつそれは、熱すぎず冷たすぎず、食べるのにちょうど良い温かさで、ほっこり優しげな湯気を立ち上らせていた。

とたん、ぷるぷると小刻みに震える手が――七季の差し出した、レンゲと小鉢をがしりと受け取る。

がっ。

おそらくは香辛料で腫れきった、タラコみたいな唇を除けば、たいそう端正な面輪をした青年は、砂漠で水を手にした遭難者のごとく、その粥へと食らいついた。

けっきょく、七季の注文した中華粥は、最初の二口から先は、すべて金髪の青年に食べつくされてしまったわけだが。

「あ……あの泰山麻婆を五杯も……！？

あんた勇者や……ほんまもんの勇者や――！」

どこぞの外道神父にノセられて、この店の激辛麻婆を五杯も――正確には四杯と半分、食べたところで意識を失ったという、青年の武勇伝に、甘党の七季はもらい泣きしていた。

自分だったら、きっと生きて帰れはしないだろうと。

「我（オレ）の偉業を理解するか、娘」

青年は、感心した声音とルビー色の双眸でもって、目の前の少女を見つめる。

泰山麻婆の辛さに、うっかりと水を飲んでしまい、口の中じゅうに辛さを広げる二次災害にのたうちまわっていたところに、あっさり風味の粥を差し出したのが七季だった。

その声は、いまだかすれがちだが、それでも耳ざわりの良い響きで、きちんと言葉をなしている。
「私も食べたことがあるんですよっ。一口食べて気絶しました。意識を取り戻してからも……声は出なくなるし、それで事件に巻き込まれるしで、そりゃあ大変で……」
それ以来、麻婆豆腐がトラウマなんです。
真剣な表情で打ち明ける、少女と青年の間に、そのとき確かな連帯感が芽生えた。
「さもあらん。ふむ……我に粥を献上した功績に褒美を遣わす。望みを言え」
「ほぇ？……あ、じゃあケーキの美味しい店を教えてください。知ってたらで良いですけど。私、この町に来たばかりで」
いきなりの申し出に、きょとんと目を丸くした七季だったが、すぐに思考を切り替えると、好物のリサーチにかかった。
金髪の青年は、すぐに答えた少女に満足してか、機嫌を損ねることもなく、尊大に頷く。
「良かろう。ついて来い」
そして似ても似つかない黒と金の二人は、深山町でも評判の、ケーキバイキング店に出向いたのだった。

「ん――！」
感に堪えない、といった風に、ぷるぷるしてから、ほにゃあっとあどけない頬が緩む。
まるで小動物じみた七季の様子を、金髪の青年は、何やらなごみながら見つめていた。
甘い物好きな少女は、生クリームや果物、ゼラチンやリキュールで作られた洋菓子の数々を、それはそれは幸せそうに味わいながら、はむはむこくこくと、頷くように食べている。そのたびにくるくる

表情が変わるさまは、万華鏡のようだ。
時折、それに付き合ってテーブルに就いている青年にも、少女は軽食や飲み物を取り分けてくるので、彼は泰山麻婆の口直しにと、それらを聞こし召していた。
「満足か、娘」
「はいっ！」
返ってきた、元気いっぱいの返事と笑顔が、あまりにも無邪気なものだから、青年は、手にしていたサンドイッチを、ふと気まぐれに駆られて七季へと差し出してみた。
「？」
はむっ。
ちょうどケーキを食べ終わったところだった黒髪の少女は、反射的にそれを口にする。幼なじみや過保護な従者に、餌付けされまくっている結果ともいえる。
そのまま、まぐもぐと青年の手からサンドイッチを食べ終わると、ごくんと飲み込んだあとに「ごちそうさまです」と添えて、自分の分の紅茶を飲んだ。
「ふむ」
それがきっかけで、興が乗ったのか。
そのあとしばらく、七季はどういうわけか、サンドイッチやケーキを、目の前の青年から、雛鳥よろしく口に運ばれることになった。

「ごちそうさまでしたー！」
おなかいっぱい、とそのふっくらした白い頬に大書されているような、ほわほわした笑顔で店を出た七季に、黒いライダースーツ姿の青年も、尊大ながら、機嫌が良さそうな面持ちで「大儀である」と告げた。
彼女の食事は、そのひとつひとつを味わい、噛みしめ、感謝と喜

びに満ちていた。
　生きるために楽しむ、そのありようは眺めているだけで人に何かを与える。
　青年――ギルガメッシュは、その手を持ち上げると、少女の黒髪を、わしわしと撫でた。形の良い頭は納まり良く、絹糸を思わせる手触りの黒髪とあいまって、たいそう愛でやすい。
　気持ち良さそうに、大きな目を細めるさまも、愛玩動物のようで、非常に愛くるしかった。
「ではな、娘」
「はい、お兄さん」
　互いに名乗らず、けれどもなごやかに訪れる別れは、小春日のよう。
　「神使（しんし）」の少女と、黄金の英霊の一度目の邂逅は、こうして幕を閉じたのであるが。
　その翌日、ふたたび出会うことになるのだとは、神ならぬ身では、知るはずもないことであった。

「たっだいまー！」
　転移魔法で戻ってきた少女に、またぞろ頭を抱える凛をよそに、七季は手提げ袋を差し出した。
「何かねマスター」
「ん、おみやげ。きょう美味しいケーキ屋さん見つけた……ってーか、教えてもらったから」
　箱を受け取るアーチャーが眉が、ぴくんと跳ねた。
「ほう。教えてもらったとは、誰にかね？」
「通りすがりのお兄さん。アリシアたちみたいな、パツキンルビーアイで俳優並の美形だったけど、たぶん人外さん」
　ぴしっ。

七季の即答に、遠坂家のリビングの空気が凍りつく。
「マスター……それは……」
魔術師の館に、特大の雷が落ちるまで、あと五秒。

#271　エンカウント（後書き）

あとがき

＞やっぱり麻婆はお約束（待て）。

英雄王に麻婆を食わせるコトミー、まじ外道麻婆。

そして凛様の護衛でアーチャーが目を離した隙に、やっぱり人外が釣れましたオリ主。

だってそういう体質だもの。

#272　サプライ

ところ変わって、衛宮家。
セイバーのサーヴァントを擁するこちらでは、ただいま議論の真っ最中。
バゼットを味方として迎え入れるべきかどうか、というセイバーの疑念から始まり、魔術師にとっての等価交換や、バゼットが魔術師協会から派遣された経緯に至る説明などなど、紆余曲折、喧々囂々のやりとりがあったのだが。
けっきょく、お人よしの士郎というマスターに逆らいにくいセイバーが、ふしょうぶしょうながら、バゼットを聖杯戦争におけるパートナーとして受け入れた。
では、げんざい何故もめているのかというと。
「士郎君の魔力供給が上手くいかないのならば、外部から持ってくればいいのです！」
「ちょ、ちょっと待った！　だからって……」
「魔術師の精には、魔力が含まれているのは常識です。血液よりも効率良く魔力が摂取できます」
士郎よりも年上のバゼットは、魔術師としての年季も上で、さらに「協会」の「執行者」としてのキャリアから、魔術的な知識の量も、比べるのがおこがましいほどだ。
その彼女の主張によれば、魔術師は「なければ、あるところから持ってくる」ものである、という。
すなわち。
「士郎君が、精液によってセイバーに魔力を補給する。
さらに私が、性交によって、士郎君に魔力を供給する方法を、実地で教えれば良いのです！」

そんなわけで、げんざいお年ごろの青少年は、ベッドへと引っ張り込まれ、武闘派の美人魔術師に押し倒されていたりする。

「せ……！？

待て待て待てっ！　早まらないでくれ！

そ、そういうことは、もっとちゃんと、好きな相手と、するものでっ。バゼットさん、もっと自分を大切にっ」

少年がもがくたびにベッドがぎしぎし言うのだが、つい昨日まで重態だったケガ人をはねのけられるほど、士郎が非道になれるわけもない。

優秀な魔術回路のおかげで、バゼットは常人よりもはるかに早く回復しているのだが、それを彼が知る由もなく。

「何を甘いことを。君も魔術師の端くれなら、覚悟しなさい！

そんなことでは聖杯戦争を勝ち抜けませんよ！　せっかく『最優』のセイバーを召喚したのですから、万全のコンディションで臨むべきです」

まだ浴衣姿の麗人は、片手にもかかわらず、たいそうな怪力で、上手く士郎を押さえ込んで抵抗を無力化している。

「せ、セイバーも何とか言ってくれ！」

顔を真っ赤にして焦りまくる童顔少年は、頼みの綱である金髪碧眼の美少女へと助けを求めるが。

「そ……それしか方法がないのなら……勝利するためには……私も、覚悟を」

硬い表情ながら、雪白の頬をほんのり染めるセイバーの美貌は、生唾ものの愛らしさで、つい見惚れてしまった士郎は、しばし抵抗を忘れた。

その間に、バゼットは手際よく、少年の下穿きを剥いでしまう。

「ぅわっ！　い、いつのまにっ」

「大丈夫です、士郎君。何も心配はありません。痛いことはしませんから」

私に任せて。

真面目な顔でのぞきこむバゼットの、茜色の眸が少年の琥珀に重なる。

その凛々しい美貌が、すぐ側まで来ていたセイバーのサーヴァントを誘って振り返った。

「セイバーも、よろしいですね？」

「……殿方の喜ばせ方は、知っています」

剣精の少女も、決意を秘めたエメラルドの目でこくりと頷き、同意を返す。

「――っ！？」

そして、衛宮邸には絹を裂くような少年の悲鳴が上がったのだが――封印指定の「執行者」として腕利きの女性魔術師による結界は、お隣の藤村家にすら音を洩らさず、のどかな午後は過ぎていったのであった。

#272　サプライ（後書き）

あとがき

＞短いですが。バゼットさん投入した時点で、これは書くつもりだった話です（待て）。

戦いに生真面目な、体育会系二人がそろうと合理的手段に走るんじゃね？ということで。

この陣営、基本的にストッパーがいない。

この程度ならＲ１５で大丈夫だと思うんですが。

女性陣のイメージ壊したらすまんです。

バゼットさんは「仕事上で経験がある」らしいので……魔術師の「手段」としての選択肢に入れているんじゃないか、と想定して書いてます。

タイトルのサプライは「供給」の意。

基本的に、書き手はレアルタベースで話を書いていますが、えちいな魔力供給ネタはＰＣ版の設定ですな。混ぜてます。

#273　ガーディアン

冬の日暮れは早い。

「……置いてきちゃって良かったの？」

静かな夜道に、赤いコートをまとう少女の声が、いやに響いて聞こえる。

凛が話しかけている相手は、隣を歩く栗毛の少女ではない。

「これ以上、妙なものを引っかけられては困る。そもそも彼女は戦闘に不向きだ。前線に出す必要がないだろう」

苦い声の持ち主は、げんざい霊体化しているアーチャー――ここにはいない七季の従者だ。

そしてまた別の声が夜風に紛れてこぼれ落ちる。

「アーチャーの懸念も理解できる。理解できるのだが……あのあつかいは、正直どうかと」

かろやかな青年の美声はしかし、思わしげに響き、後ろ髪を引かれているのが丸わかり。これはディルムッドの言葉である。

「まあナナちゃんの人外ホイホイっぷりは、いまに始まったことじゃないけどね～」

あれは正直ヒくわー。

凛と並んで歩く、栗毛の美少女――白いファーが襟首を飾る、桜色のロングコートをまとった真言からも、呆れ半分の非難がましいセリフが飛び出す。

もっとも真言が責めているのは後輩の少女ではなく、その従者である人外の男だが。

「ナナキを拘束して部屋に軟禁とか、ナイワー」

どこのエロゲかと。

にゃんこ姿で真言の懐に抱かれているリドルのツッコミにも、頑

固で過保護な錬鉄の英霊は、むっつりと口を閉じたまま、それらの抗議を黙殺した。

彼らが夜の探索に繰り出すよりも、三十分ほど前の話である。

昼間、どうやらサーヴァントらしき人外青年と接触し、あまつさえ食事を奢られて帰ってきたという七季に、心配性の従者は、当然のごとく雷を落とした。

黒いハイネックを着た少女は、小柄な体躯をさらに縮めて丸くなる。

「そもそもリドル！　君も何故止めん！？　何のための護衛だと思っている！」

「げ。こっちに来た」

いっぽう、黒猫姿でソファに転がって、そ知らぬふりをしていたリドルは、アーチャーの剣幕に少しだけ耳を伏せるが（うるさいから）、そのしっぽでぺしぺしとソファを叩きつつ反論する。

「人目のある街中で、ナナキの影に潜んでた僕に何をしろって？　そもそもアイツ、泰山麻婆で死にかけてた（？）ところを、ナナキのあげたリゾット――粥で復活して、そのままケーキ食べに行っただけだし。

そのあとはそのあとで、ケーキ食べてるナナキの顔に、やたらめったらなごんでたけどね」

「何よそれ。ナンパじゃない」

人外まっくろにゃんこの話を聞いた凛は、即座にツッコんだ。

「だよねー？」

それはそれで、人外にナンパされたという問題が残るわけだが。

頭痛を堪えるように、こめかみを抑えるアーチャーの横顔に、ソファの上で小さく丸くなっていた黒髪の少女が、クッションを抱きしめたままで話しかけた。

「サーヴァントかどうか知らないけど、あのお兄さん、肉体持ちだったぞ？」

まあ人外なのは、霊格でわかったけど。だからいざとなったら中身の魂、引っこ抜けばいいと思ってたし……」

ぴきこん。

おずおずとした反論に、またもや凛とアーチャーが固まる。ついでにリドルも。

「引っこ抜く、って……？」

「――できるのか？」

「い……意外とムチャなこと考えてたんだねナナキ……」

青い目を瞬きもせずに、七季を凝視するスレンダーな少女と、マスターのトンデモ発言に、思わず真言を振り返ってしまうアーチャー。

当時リアルタイムで彼女に付き従っていた闇の帝王（プレ）は、あんなに無邪気にケーキを食べていたにもかかわらず、七季が思いがけなく物騒な（？）考えを持っていたことに、おののいている。

――ナナキ……恐ろしい子ッ！

「あー……うん。相手が肉体持ちならやれるだろーね、ナナちゃんなら。

てか、サーヴァントでもできんじゃない？　霊体なんだし、たぶんナナちゃんの中に突っ込めるはず」

アーチャーの問いかけに、あっさり真言が答えを返す。

ぱーんっ。

何かが魔術師の少女の中で弾けた。色々と。

おのがサーヴァントのステータスを確認した時点で、もう驚くことはないだろうと思っていた凛は、この期に及んでさらなる理不尽な事実が判明し、ツッコミ疲れてテーブルに突っ伏す。

――やってられないわ……。

サーヴァントを召喚してから、まだ一日。

いったい何度、テーブルと仲良くなったことだろうと、ちょっぴ

り現実逃避に走る、穂群原のミス・パーフェクトである。
「ところでサーヴァントって、霊体でしょ？　そんなに簡単に受肉できるの？」
ぐったりしたまま視線だけ上げて、アーチャーを見上げるツインテールの少女に、褐色の肌の偉丈夫は、腕組みをしながら首を振る。
このメンバーで、いちばん魔術的にまっとうな答えをくれそうなのが、彼だと判断しての問いかけである。
真言や七季は、魔術どころか、もはやその内容がぶっ飛びすぎていて、訊くだけ疲れるような気がしてきたともいう。
「いや……。現界――ようするにこうして実体化することだが――は、エーテルを編んだ、あくまでかりそめの肉体だ。
私や、そこのランサーなどがそうだな。リドルも同じようなものだ。我々は、霊体化できることからもわかるだろうが、生身ではない。
そちらの真言は、逆に生身だからこそ、霊体化はできない。
もちろんマスターは、そんな我々のことを先刻承知だ。にもかかわらず、出会った男は肉体持ちだと判断した。我々とは違うと考えて良いだろう。
そうなると、考えられる可能性は、大まかに二つだが――」
推測を挙げるアーチャーの顔は渋面である。
「膨大な魔力――たとえば聖杯とかな――で、強引に受肉したか。その固有能力――マスターみたいな特殊性とか――で受肉したか、といったところだろう。
他に派生する可能性としては、人形師の作った人形を器として、存在を安定させている可能性もある」
その男が、サーヴァントの場合、だが。
情報が少なすぎて、そんな推測しかできないと述べるアーチャーに、しかし魔術師の少女は真剣な面持ちで考え込んだ。
「もしかすると、そのサーヴァントは、聖杯戦争の勝者の可能性があるってこと？」

「決め付けるのは尚早だ。あくまで、推測でしかない」
「金の髪に、紅い目……」
ディルムッドも、何かが引っかかるのか、真面目に思い悩んでいるのだが――凛のサーヴァントであるはずの真言はというと、七季が買ってきたケーキを、うまうまと味わっている最中だ。
自分も聖杯戦争の当事者だというのに、緊張感ないことおびただしい。良いのだろうか。
「あ、先輩。紅茶どうぞ」
「ありがとー」
「そういえば、新都に部屋とってきたんですよ。転移魔法使うのにも人目につかないし、拠点にも使えますし」
「あー。ジッパー使うのにも便利だね、それ。幾らくらい？」
「ウィークリーで借りたから、一日あたりはそんなにしませんよー。どうせ二週間くらいでしょ？」
トンデモ巫女ンビの周りだけ、やたらめったらほのぼのした空気が流れているのが理不尽である。
「サーヴァントや魔術師については、まだ私も理解が習熟していないが……夜の見回りはどうするのだ？」
銀の三つ編みを揺らしながら、首をかしげるリインフォースの言葉に、アーチャーたちの思考は断ち切られた。
「そうだな、とりあえず」
「ん？」
鋼色の瞳が、ソファのうえでちんまり丸くなっていた、ポニーテールの少女を映して鋭く光った。
「マスターは留守番だな」
いつのまにか、あかがね色の魔力光を帯びたバインドが、七季の両手を拘束していた。
「みにょおおお！？」

そうしてげんざい、七季は、新都のウィークリーマンションに、リインフォースの監視つきで放り込まれている。
「トイレとかどうすんにゃー！」
という少女の抗議に、いちおうユニゾンデバイスながら、女性であるリインフォースをつけたあたりは親切なのかもしれないが、それにしても問答無用の対応である。
「てか、何で僕もこっちなのさ。ナナキの護衛に……」
「マスターに不審人物を近づけておきながら何を言う。昼間サボっていた分、きっちり仕事をしたまえ」
ぶーぶー文句しきりのリドルに、アーチャーの声は地を這っていた。
彼とて七季の面倒を見たい――もとい、見張りたいのは山々だが、いかんせん、その彼女じしんから凛の護衛を申しつけられている。七季を残して出かける以上、この顔ぶれの中で、真言の暴走を止められそうなのが、アーチャーくらいなのだから是非もない。
実直だが融通のきかなさそうなディルムッドにも荷が重いだろうし、だからと言ってリドルなどは一緒になって暴れそうだから、いっそうタチが悪い。
「それに護衛の心配はない。東風のほかに、プラタを八匹、すべてあちらにつけてきた」
そう告げるアーチャーの使い魔は、もともとキングメタルなのだが、分離するとはぐれメタル八匹になる。
対物、対魔、どちらの攻撃にも耐性のあるチートモンスターが八匹と、ロストロギア「夜天の書」であるリインフォース、シームルグの東風が、本気でガードに回った場合、突破するのは並大抵のことではない。
「……それ、どんな無理ゲー？」
状況を理解したリドルは、男の過保護っぷりに「うわあ」と呆れながら嘆息した。

ちなみに、七季の対魔力であれば、打ち消すこともできそうな従者のバインドだが、アーチャーはきっちり主たる少女に釘を刺しておいた。

「無理にバインド（それ）を引きちぎったら、一週間おやつ抜き」

食い意地の張った黒髪の少女は、涙目になってこくこく頷いたという。

「何、見回りが終わったら、きちんと拘束は外すさ」

――だいたい一日目で、既に怪しいのを引っかけているんだぞ？

他のサーヴァントもそうだが、これで死徒や真祖なぞ引き当てられた日には……！

元いた世界でピート――齢七百年を超えるヴァンピール――を友人にしている七季のこと。決してないとは言い切れず、本気でシャレにならないと、ないしんピリピリしているアーチャーなのだった。

ともあれ。

「新都の方は、たぶんキャスター（魔術師）の手が伸びてる、か……」

ふ、と凛の吐息がけぶる。

七季の報告にあった「糸」。

街から山の方に向かって伸びていたという、生命力を吸い上げるそれは、「魔術師（キャスター）」のサーヴァントであろうというのが、凛やアーチャー、ディルムッドの見解だった。

とすれば、必然的にキャスターの拠点は山の方、と予想される。

七季によると、その「糸」は彼女や真言なら、あっさりちぎれるレベルのしかけらしく、その報告を聞いたときも、凛が脱力しきりでテーブルに突っ伏したものだ。

おびきだすなら戦力を集めて迎え撃った方がいい、という「神使（しんし）」の少女の提案に、しかしアーチャーや凛は、まず敵となるサーヴァントの情報を集めることを優先した。

キャスターは比較的、倒しやすい――特にアーチャー、ランサー、セイバーの三騎士は対魔力が高いため――クラスなので、それを打ち倒すのはかまわないのだが、戦っている間に、横合いから漁夫の利よろしく奇襲されたりすると業腹だ。

新都は、七季たちが一通り見て回ったということなので、ならばと凛たちは今夜、深山町周辺の探索に出かけたのである。

そして。

異変は、ほどなく彼女のサーヴァント――真言によって発見された。

「この学校、結界が張られてる」

「何ですって!?」

月下にしんとそびえる建物は、穂群原学園。

凛たちの通う学び舎であり、学生のほとんどは一般人のはずである。

こっそりとサーヴァントたち人外を引きつれ――そのうち真言は人間のはずだが――学園の敷地内に入り込んだ凛は、愕然とした。

壮絶な違和感が彼女を包み込む。

隣を歩く真言も、あまりの空気の悪さに、その秀麗な顔をしかめていた。

――きのうまではこんなもの、確かになかったはず。

となれば、きょう彼女が欠席した間に設置されたものだろう。

「ふざけた真似、してくれるじゃない……ッ！」

よりにもよって、冬木のセカンドオーナーたる遠坂凛の通う学校。

そのテリトリーに、こんなあからさまな結界を張るなんて、ケンカを打っているとしか思えない。

そのうえ。

「――ッ」

アーチャーによって、屋上へと運ばれた魔術師の少女は、そこで見つけた結界の基点から、この異界のおぞましき性質を知らされた。

張られていた結界は、生命活動を圧迫する類（たぐい）のもの。ただし、通

常は魔術師に通じるものではない。
　とどのつまり――この結界は、一般人を標的にしたものなのだ。
「これ、内部にいる人間を溶解するものだわ……！」
　常人には見えざる、まがまがしい刻印から構成されるそれは、肉を溶かし、剥き出しにした魂を、強引に集める人食い結界。
「……サーヴァントは基本的に霊体だからな」
　アーチャーが低い声で説明を挟む。
　霊体であるサーヴァントの食事は、第二ないし第三要素。ようするに、精神と魂を栄養とする。
「非道な！」
　騎士道精神に富んだディルムッドが、まっさきに吐き捨てた。
　いっぽう、「神妻（しんさい）」の少女は、こちらの魔術的な知識には明るくない。波打つ栗毛にふちどられた美貌をしかめながらも、純粋な疑問を抱いたのだろう。最初に説明を挟んだ弓の騎士へと、問いかける。
「栄養って言ったけど、アチャ男。そーゆーのをサーヴァントが摂取すると、具体的には、どう変わるわけ？」
「誰がアチャ男か。
　……そうだな。栄養を取ったところで、基本的な能力が上がるわけではないが。取り入れただけ、タフになる」
「よーするにＭＰやＨＰの上限値が上がるってわけか」
　リドルも少女の腕に抱かれたままで「なるほど」と頷く。
「シュミ悪う……」
　かたや、うえぇ、としかめっつらで不愉快さを隠さない真言の声は、嫌悪感に満ちている。
「ンなもん、消しちゃっても良いよね？」
「ほう、こいつはにぎやかだな。そろって夜の散歩とは趣味が良い」
　月光に照らされた夜の屋上――そこに新たな男の声が響き渡った。

#273　ガーディアン（後書き）

あとがき

＞そんなわけで、昼間ギルを引っかけたもんで、お仕置き食らったオリ主は、留守番とあいなりました。

ディルは引っかかってはいますが、英雄王を思い出すまでは至ってません。

リリなの世界で過ごしている間に十年ばかりたっているもんですから。

アーチャーも生前の記憶は、ほとんど磨耗してるっぽいので、うっかり慢心王を憶えているかどうかは謎。

なかなか話が進まない（汗）。

※タイトルのガーディアンは「保護者」の意。

#274　ジャンクション

「それじゃあセイバー、よろしくな」
衛宮家の玄関。
振り返る赤毛の少年に向かって、たたずむサーヴァントの少女は、湖水を思わせるエメラルドの目を細めた。髪と同じ金の柳眉が、懸念のためにきゅっと寄っている。
「士郎……危険です。やはり私も」
「ちょっと忘れ物を取ってくるだけだからさ」
あと夕飯の買い出し。
彼が「藤ねえ」と呼ぶ、お隣の英語教諭と、数年前からこの家に通うようになった後輩の少女、桜には、インフルエンザにかかったから、しばらく家に来ないようにと電話で言い含めてある。
ただ、学校を二週間近くも欠席する予定の士郎としては、せめて自宅学習するために、学校に置き忘れた英和辞典を取りに行きたいのだ。
お隣さんの藤村大河なら、英和辞典を借りることもできるかもしれないが、この聖杯戦争の間は、極力近づけたくない。
辞書を新しく買うというのも、わざわざあるものを買い直すことにはためらいがあった。新品だと三千円はするし、正直、古本でもかまわないのだが――古本屋だと、顔見知りに出くわす可能性がある。
それなら、きょうだけ、と決めて、人気のない学校に出かけてから、ついでに食料品のまとめ買いをする方が効率的だ。食費も増えるのだし。
最近は物騒な事件が立て続けに起きていて、士郎の通う穂群原学園でも、早めに下校するようにとの注意が繰り返されていた。

――藤ねえには悪いけど、見つからないよう、こっそり辞書だけ取ってこよう。

「ですが」

言い募るセイバーを、頑固な少年は、いささか強引に遮って片手を上げた。

「それに、その。バゼットさんのこともあるし」

仏頂面がトレードマークの士郎が、ほんのりと目尻を赤くして目を逸らせば、きりりとした表情が多い剣精の少女も、彼の言葉に思い当たり、つられて頬を染めた。

魔術的な儀式とわかってはいるものの、そこに何も思わない、というわけではない。必然である、というおのが決定に嘘はないけれど。

「……ええ、それは、そうですが」

昼間から少年を押し倒して始まった魔力供給の儀式――それは、ついさきほどまで続いており、げんざい赤毛の麗人は、疲労から眠っている最中だ。気絶しているともいう。しばらく身動きはとれないだろう。

セイバーが、こうして動き回れるのは、ひとえに彼女が魔力を受け取る側だからであり、サーヴァントという頑丈な器の持ち主であるからこそだ。

未経験であった魔術師の少年は、しかしながら、こちら方面に関しての素質は、それなりにあったらしい。疲れてはいるものの、少し休憩をすれば、問題なく動けるほどには元気だ。

いっぽうのバゼットは、経験者とはいえ、魔力を渡す側である。いわば「搾取される側」の疲労は、いかな歴戦の戦士でもそれなりの負担だったようで――そもそも彼女はケガをしているのだし――士郎がまめまめしく後始末をしている間も、目を覚ますことはなかった。

――意外と逞しいのですね。

この年ごろの少年にしては、綺麗に筋肉のついた体といい、この

回復力といい、ないしんセイバーは士郎に感心していた。
そうはいっても、人外のサーヴァントに襲われれば、ひとたまりもないのだが。
「なるべく早く帰るよ」
「本当に？」
この場に第三者がいたら、どこの新婚さんだ、とツッコみたくなるような会話である。
心配そうに見上げる、金髪碧眼の美少女へ、赤毛の少年は安心させるように言い添える。
「ああ。自転車を使うからすぐだ」
インフルエンザと称して学校を休んでいるのだ。なるべく士郎も人目につきたくない。
――こんな美少女がついてきたら……どうしたって目立つよなぁ……。
冬木は外国人も珍しくはない土地だが、やはり人種が違えばわかるし、セイバーほどの美少女なら、よけいに目を引くだろう。
「……危なくなったら、迷わず令呪で私を呼んでください。必ずです」
「わかった。約束する」
念を押す剣精の少女に、こっくり頷くことで、ようやくセイバーは士郎を送り出す気になってくれたようだ。
「シロウ、お気をつけて」
「うん。行ってくる」
いつものトレーナーの上に、ジャンパーを羽織った少年の背中を、翠の眸はじっと見つめていた。

「……士郎君は」
「起きたのですか、バゼット」

ところ変わって、衛宮家の和室。
畳敷きの部屋で目を覚ました、赤毛の麗人は、上から降ってくる澄んだソプラノに目をやった。
そこには月の光で編まれたかのような、金紗の髪に、雪白の頬、邪を祓うと言われるエメラルドさながらの眸が、神々しいほどの造詣でもって少女の形に磨き上げられている。
妖精だと紹介されたなら、大半の人間は思わず頷いてしまうだろう。
「シロウなら、買い出しと、そのついでに学校へ出かけました。英語の辞書を置き忘れたとか」
「なっ……一人でですか！？」
思わずがばりと飛び起きかけて――失った片手のためにバランスを崩すバゼット。
その体を、華奢な体躯にふさわしい細腕で、しかし危なげなくセイバーは支えてみせた。
「シロウは私に、ケガを負っているあなたを守るようにと。……その、無理をさせたから、我々にも休んでほしいとも」
その言葉を聞いて、バゼットの頬は一気に血の気を帯びた。
「無理をさせた」。
さもあらん。さいぜんまでバゼットが休息を余儀なくされるくらい、あの少年は、彼女を攻め立てたのだから。
――か、可愛いとか、可愛いとか、可愛いとかっ！
最中に、幾度となくささやかれた言葉が、堅く鎧ったバゼットの中身をかき乱す。
最初こそ、彼女たちに翻弄されていた初々しい少年だったが、やがて士郎は回を重ねるごとに、その観察眼の鋭さと、生来の細やかな気質でもって、反撃を開始した。

士郎の性格からすれば、「反撃」というより、自分が与えられたものを返したい、という気持ちだったのかもしれないが。

とにかく、熱心かつ丹念な愛撫と、大人が赤面するほどのストレートな称賛を、惜しげもなく繰り出す少年に、バゼットは鎧を剥ぎ取られ、身も世もなく乱されて――最終的には気を失うまで追い込まれた。

どれだけ、そのテの素質があるのだ、とちょっぴりツッコみたいバゼットである。

あれが世に言う絶倫か、と。

――若さに任せているにしろ、あの回復力は驚異以外の何者でもありません！

いやまあ魔術刻印もないにしては、あそこまで体力があるのは、魔力供給的には良いことかもしれないのだが。

――強化魔術も残念な成功率だということですが……意外と、性魔術の素質があったりするのでは？

そんなことを考えてしまう、封印指定の「執行者」。微妙に頭の中が桃色がかっているような、いないような。

残念ながら、彼女にツッコミを入れるものは、この場にいない。

いっぽう、セイバーはセイバーで、彼女なりの感慨に耽っていた。

「あなたが……私の鞘だったのですね」

そう。

出会って間もない少年の体には、彼女が持つ聖剣の鞘――「全て遠き理想郷（アヴァロン）」が隠されていたのだ。

肌を重ねてしまえば、さすがにわかる。

セイバーである彼女と、切っても切れないその宝具は、しかし生前、永遠に失われたはずのもの。

第四次聖杯戦争において、セイバーたる彼女の触媒として、アイ

ンツベルン家が用意したもの。
それがセイバーに返されることはなく、マスターであった切嗣が持ったままになっていたのだが、けっきょくこの宝具は、諸事情あって士郎の体に埋め込まれることとなったのだ。
その事情を、まだ彼女は知る由もないが。
――可愛かった。
そう思わなかったといえば、嘘になる。
奥手らしく、彼女たちに押し倒された後も、まっかになっていた赤毛の少年は、急所を押さえられると、あっけないほど大人しくなった。
従順な性格なのか、それとも優しいからか。あるいは手負いのバゼットを気遣ったのかもしれない。
とにかく、まだあどけなさを残す横顔には「未経験です」と大書してあるようなもので。
ハチミツ色の瞳に涙を浮かべて、快楽を堪える少年は、子犬じみた鳴き声を漏らして身悶えるさまが初々しく、セイバーは女性だというのに、処女を手折るような後ろめたさを感じたものだ。
王であるために、男性として装い、男たちに囲まれて生きてきたものだから、少しばかりそっち方面に考えが引っぱられているのかもしれない。
だからというのもおかしい話だが、彼へ唇を許すことにも抵抗はなかった。
できるだけ接触を増やした方が良いという、バゼットのアドバイス以前に。
――見つけた。
目の前の少年は、彼女の鞘。聖剣の対。
それは彼女のものだ。
ならば、主が接吻(くちづ)けて、何の不都合があるだろう。
彼の魔力は、聖剣の鞘が長い間埋まっているせいか、とてもセイバーになじみやすかった。

懐かしく、慕わしく、それは戦いの中にある安らぎを思い出す。
士郎の琥珀色の目は、かつて可愛がっていた獅子の子のようだった。まっすぐで、幼くて、嘘のない純粋な。
セイバーよりも弱く、未熟で、けれども懸命に彼女と向き合おうとする、そのひたむきさは、アーサー王という立場ではなく、アルトリア――否、いまはセイバーとして召喚された彼女じしんを見つめていて。
罪悪感、焦燥、人と深く触れ合うことへの怯え。
溶け落ちそうな琥珀の瞳は、悦楽の淵にあってなお、雄弁だった。
強引に満たして、満たされて、融け合って――解放される。
姉モルガンとのそれとは、まったく違う交わり。
戦いに明け暮れ、長い間「王」でなければならなかった彼女が、遠ざけていた人の熱、その温かさがそこにはあった。
まだ彼女たちは出会ったばかり。それでも必要に駆られての、義務からの交わりだったとしても――そこは、かすかな何かが芽生えようとしていた。

セイバーは、じしんの中に生まれた不可思議な感覚を、いったん棚に上げ、紅くなって挙動不審な女性魔術師へと言葉を続けた。
「その代わり、いざというときは令呪を使用して私を呼ぶと約束しました。
聖杯戦争の間、学校を休むことも了承してくれましたし……ただ、自主学習に使う辞書だけは、取りに行きたいと言うので」
頑固でまじめな士郎だが、バゼットの世話もある。そのため、短いとは言えない欠席も承諾したのだ。
士郎の話から、彼が望んでマスターになったわけでないことは明らかだった。
けれども、辞退するにしても、監督役の言峰が信用できない以上、

あの男に士郎を近づけるわけにもいかない。
そのことは、既にバゼットの口からセイバーにも伝えられている。
「今回の聖杯戦争は、荒れそうですね……」
布団に横たわったまま、赤毛の美女は思わしげにためいきをつく。
魔術師らしくない、あの少年が生き抜くのは、いっそう難しいことになるだろう。
「ええ。前回以上に気を引き締めなければ」
「セイバー？」
そして剣精の少女の口ぶりから、バゼットは、彼女が前回の――第四次聖杯戦争の記憶があるという、前代未聞の異例を耳にすることとなる。

「ところで七季」
「んー？」
手首を縛られているため、寝にくい、とのたまった七季は、げんざい空中にぷかぷか浮きながら、リインフォースたちの集めてきた資料を見ている最中だった。
銀髪の美女姿であるユニゾンデバイス――リインフォースは、ベッドの少し上くらいで、ふわふわころころ横になっている黒髪ポニーテールの少女を眺めつつ、ふと覚えた疑問を口にする。
「真言は、七季以上に魔力があるのだろう？
無理にあなたが供給する必要はないのでは……？」
「そりゃダメだよ。うちの国、沈んじゃうもの」
へろり。
暖房のきいたウィークリーマンションの一室、桜色の唇から何でもないような口調のソプラノは、人外の美女を、もののみごとに凍らせた。切れ長のルビーアイが、まんまるになっている。
「……は？」

「先輩、うちの国の根っこ――『柱』を、ひとりで支えてるの。あ、リインには言ってなかったっけ？

だから、変に能力抑えられちゃうと、そっちを支える余裕なくなっちゃうからさ。負担ぜんぜんなくて戦闘できるんなら、心配ないんだけど」

いまさらながら、チートな巫女さんの規格外っぷりに呆然としつつ――リインフォースは、そんな「神妻」を支える少女へ「魔力を供給する側の、七季の体調は大丈夫なのですか？」と、心配そうに声をかけるのだった。

#274　ジャンクション（後書き）

あとがき

＞タイトルの「ジャンクション」は「接合点」の意味。道路同士が交差するところ「交差点」を指す。

原作と違って、まだ士郎の男らしさ、無謀っぷりに触れていないセイバーたちは、それぞれに、別の見方から彼に興味を持ち始めます。

さすがに接続すれば「全て遠き理想郷（アヴァロン）」にも気づくでしょう、ということで。

あと、どうしてあんなに先輩が、魔力の確保にやっきになっていたかという補足をば。

ずっと前に、さらっと書いていますが、白面の抜けた「穴」を、チートな先輩は一人で支えています。

だからこそ、能力を発揮できないのは困るのです。

#275　ランサー

神速の踏み込みは、夜闇の中で緋色の影を生んだ。それはまるで炎が奔(はし)るよう。
抜刀された神剣が九つの星を創(つく)る。

壱の太刀、唐竹(からたけ)。
弐の太刀、袈裟(けさ)斬り。
参の太刀、右薙ぎ。
肆の太刀、右斬上げ。
伍の太刀、股下からの逆風(さかかぜ)。
陸の太刀、左斬上げ。
漆の太刀、左薙ぎ。
捌の太刀、逆袈裟(さかげさ)。
玖の太刀、心臓狙いの刺突(つき)。

それらが一斉に青い槍兵へと襲いかかった。
その技の名は。
「九頭龍閃(くずりゅうせん)！」
「ちょ、オオォォイ！！」
リドルの魂からのツッコミも何のその。
九つの斬撃を、同時に繰り出す乱撃術にして突進術。
斬撃それぞれが、一撃必殺の威力を持っており、神速の突進を持って繰り出されるため、防御・回避ともに不可能とされている恐ろしい技だ。
この技を攻略するには、発生よりも前に切り込む必要がある。
だが「神妻」の娘は、ただでさえデタラメな身体能力を、さらに

強化系念能力者としてブーストしている。
単純きわまりないが、最も戦闘に特化できる異能は、神魔、怪異を問わない修羅場をくぐり抜けてきた凄まじい剣筋と合わさり、伝説級のそれへと昇華され。
「ぐ……っ！」
朱槍を持った男の、ぴったりと肌に張りつく青い武装が、朱に染まる。
いかにサーヴァント中、最速を誇るランサーでも、やおら出会いがしらに繰り出された、全力全開（フルスロットル）の九乱撃を避けることはできなかった。
彼は、げんざいのマスターによって「すべてのサーヴァントと戦って引き分けろ」というムチャな命令を強制されている。
そのためにランサーは、全力で戦うことができずにいたのだ。
――が、全力だったとしても……無傷じゃ済まねぇな、こりゃ。
懐に踏み込まれたのは、彼の感覚ですら、一瞬。
それが「瞬歩（しゅんぽ）」と呼ばれる歩法であることを、ランサーが知ることはない。
だが、九つの斬撃を受けたあとでようやく、彼が深紅の目に映した敵の姿は、月夜にもやわらかな栗色の波打つ髪と、小柄な美少女の姿で。
伸ばした男の手は、けれども柳のごときしなやかさでもって逸らされた。
白き繊手は男の腕をそっといなし、鞘で顎を打ち上げた挙句、翼ある鳥もかくやといわんばかりの、かろやかな跳躍を見せ――離れ際に、ランサーの後頭部を蹴り飛ばしていった。
一片の容赦もない仕打ちである。
ずしゃ、と槍兵がくずおれ、月光に照らされてしらじらと明るい、屋上のコンクリートに、男の血潮が彩りを添えた。
――鬼だ。
ディルムッドやアーチャーはおろか、リドル、凛までそろって考

えたことは同じだった。

「てかアレ、一子相伝の流派じゃなかったっけ……？」

子孫ではなく、正確には弟子に受け継がせていくものだが。

「ちょっと緋村君とこでね。技は教わるものじゃなく、盗むものよ！」

リドルのツッコミに胸を張って答えるチート巫女。自重しない。

「まさかの飛天御剣流（ひてんみつるぎりゅう）で見稽古!?　君ホントにどこで何やってるのさ!」

「ッ、まさかっ……セイバーともあろうものが……不意打ちたぁ……はっ」

――いや、そのひとクラス「弓兵（アーチャー）」ですから。

不憫な青いランサーに対する、真言を除いた全員の、内なるツッコミ、シンクロ率四百パーセント突破。

出会いがしらに必殺技。それも相手がしゃべっているところへ問答無用の攻撃。

さすがの錬鉄の英霊さえも、憐れみを覚えてしまいそうな、不憫なあつかいである。

だが、戦巫女の所業は、これで終わらない。

「アチャ男、例のものを、これへ」

ひらり、と差し出された手に、いつのまにか現界していた赤い外套の偉丈夫は、無言で短剣を手渡した。その鋼色の目は、ちょっぴり不憫そうに朱槍のランサーを眺めている。だからといって真言を止めたりはしないが。

玉虫色にかがやく、いびつな刀身は魔女メディアの宝具――「破ルールブレイカー

戒すべき全ての符」。
さく。
それを手に取った栗毛の巫女は、すかさずランサーの腕にナイフ状の刃を突き刺すと、返す手で彼の首をがっちり握って琥珀の双眸をかがやかせた。
「――汝の身は我の下に、我が命運は汝の槍に。聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うのなら――我に従え！　ならばこの命運、汝が槍に預ける！」
ぶわり。
月光にエーテルが蒼く乱舞する。
意思持つ風のごときその勢いに、濡れ羽色のツインテールを乱されながら、凛は、はためく赤い外套をまとうアーチャーのうしろから、その光景を凝視した。
「――ッ！？」
いっぽう、いきなり言峰とのラインを切られたことにも驚いた青の槍兵だったが、続けざまに、新たな契約を結ばれることに絶句する。
そう、これは少女による、強引な力ずくの契約に他ならない。
そこに別の要素が絡んで、契約を助けたのだとは、誰知ろう。
言峰の令呪――バゼットから彼を奪った際の「主替えに同意しろ」というもの――が、いまふたたび、今度は言峰からランサーを奪う手助けをしたのだ。
これも因果応報というものだろうか。
――セイバーが俺と契約だと！？
繰り返すようだが、真言は「アーチャー」のクラスである。ついでに生身だ。いまのところ。
そして――大方の予想通り、契約はなされた。
栗毛の姫巫女の手には、三画のうち、二つが欠けた令呪が刻まれ。
新たにつながれたラインから流れ込む豊富な魔力で、みるみる青い槍兵の傷が癒えていく。

本気ではなかったとはいえ、ランサーを圧倒する神速の斬撃。
突然の契約切り。
そしてランサーを斬った相手との再契約。
すべてが尋常ではなく――当然のように、第五次聖杯戦争に召喚されたサーヴァント「ランサー」、ことクー＝フーリンは、そのルビーアイを夜の下で鋭くきらめかせた。
「オイ。こりゃいったい……どういうことだ？」

「いきなり夜の屋上で、獲物握って女の子に声かけてくる全身タイツ（しかも人外）な変質者を敵性認識して何が悪い！」
どーん。
あれだけ容赦ない攻撃をブチかましておきながら、まったく悪びれたところのない真言のセリフは――けれども悲しいかな、青いランサー以外の全員が頷かざるを得なかった。
――正論だ……！
アーチャーやディルムッドは霊体化。リドルは黒猫姿で抱かれていて、実質的には真言と凛という、女の子ふたり連れにしか見えなかったに違いない。
経緯は不明だが、既に聖杯からポイ投げされているディルムッドと、座から直接引っこ抜かれたアーチャーは、今回の聖杯戦争のシステムには組み込まれていない。
すなわち、サーヴァント同士がお互いを感知するという、特殊ルールには当てはまらないはずなのだ。
そして今回の聖杯戦争で配られた令呪で繋がれている主従と言うのは、凛と真言。
この二人だけだと思って声をかけたのなら、まあ責められても仕方ない。
この場に「これ聖杯戦争ですから！」と常識的なツッコミを入れ

てくれるものは皆無だったのが、この青いランサーの不幸である。
合掌。
余談だが、真言がいきなりランサーへ斬りつけたことがわかってからは、ディルムッドもアーチャーも現界している。
というか、この二人は自分たちがランサーと戦うつもりだったのだが、しょっぱなからいきなり真言が暴走してくれたものだから、正直なところ手持ち無沙汰である。
「可愛い女の子狙いだと思って当然！
せめて全身タイツじゃなければ、もうちょっと考えたものを」
ふん。
小柄な体躯に似合わない、豊かなバストをたぷるんと誇示するように胸を張る少女の、ミもフタもない言い分に、思わずうなだれる青い装束の男。
スピード特化のクラス「ランサー」は軽装が当然なのだが、それを変質者呼ばわりされては、さすがにヘコむ。
同じくサーヴァント「ランサー」のクラスであるディルムッドも、いたたまれずに目を逸らした。
彼もケルト系の英雄だからか、似通ったデザインの概念武装なのだが、それでもマスターから与えられた緑の外套をまとっているおかげで、そこまで真言にツッコまれたことはない。
「……すまんランサー。さすがにフォローができん」
かたや、思わず不憫すぎる槍兵に向かって言葉をかけるアーチャー。片手で作った手刀を掲げているあたりが、合掌をしそこねたようでわびしく見える。
「あと彼女は『アーチャー』のクラスだ。それと生身の人間だぞ。いちおう言っておくが」
「はぁ！？
何で『アーチャー』が剣使ってやがるんだよ！　つか人間がサーヴァントだぁ？
しかも本領の弓を使わないでランサーの俺を圧倒するとか、ふざ

けてんのか！？」
　がばりと顔を上げて食ってかかる朱槍のランサーだが、事実なのだからしょうがない。
「私に言われてもな」
　腰に手を当てて、憮然と答えるアーチャー。夜闇に映える白い髪が、降り注ぐ月光に雪のようだ。
「剣にやたら詳しい『アーチャー』なら、ここにも一匹いるけどねー」
　いっぽう、真言がランサーに切りかかったときに、コンクリートの床へと着地していたリドルが、黒猫姿のままで、しっぽをふりふり赤い外套の男を見上げる。
　褐色の精悍な横顔は、まっくろにゃんこのツッコミには答えずに、他のサーヴァントがいないかと周囲の気配を探っていた。
　――いまのところ、キャスターや他の魔術師の使い魔はいないようだな……。
　しかし念のため、アーチャーはミッドチルダ式の魔法によるサーチャーを飛ばして、それとなくあたりの警戒を続けた。紅いピンポン玉のような球体が生み出され、音もなく闇夜に散っていく。
「ええい、男がいつまでもグダグダと！
　敗者は勝者に従うべし！
　すなわちアンタは私の下僕！　どぅーゆーあんだすたん？」
　そして男らしすぎる――もとい、雄々しくもわかりやすい真言のセリフは、どうやら体育会系な思考のランサーには、合点がいったらしい。
　ずびしを指差される無礼を気にするわけでもなく、青い髪の男は、片膝を立てて、栗毛にふちどられた少女の美貌を仰ぐ。
「……ま、そりゃそうだ。俺を負かしたくらいだ。アンタが強いのは事実だしな。魔力も十分で文句のつけようがねえ。
　ったく。とんでもねえのとぶつかったもんだ……」
　まあ、あの外道マスターと縁を切れたのには感謝するがな。

ぐるりと首をめぐらせて、改めて周りを見やるランサーの、紅い眸は呆れに染まっている。

「しかしまた、ずいぶんと豪勢な顔ぶれだな。マスターらしき嬢ちゃんはさておき、規格外のセイバー……じゃ、なかった、『アーチャー』と他にサーヴァントが二人……？」

そこで青い髪のランサーは、血のように紅い目を、けげんそうに細めた。

――他のマスターと共闘してんのか？

依然として戸惑いぎみのランサーを置き去りに、緋袴の巫女は、どこからともなく弓を取り出した。

自分が「アーチャー」呼ばわりされたのには見るからに不満そうだが。

樹皮や材観がサクラに似ていることから、「水目桜（ミズメザクラ）」とも呼ばれる、梓の木で作られた「梓弓（あずさゆみ）」。

「梓」は、曲げ弾性係数や、吸収エネルギーが大きいことから、イチイガシとともに豪弓用といえる木材である。

「さて」

ビイイィィ……ン。

矢をつがえずに引かれた弦は、低い響きを持って夜風を震わせていく。

それは、少女の白い指によって数回ほど繰り返されたのち――ぱきん、とガラスが砕けるような、あっけない音を伴って、この校舎に巣食っていた、禍々しい人食いの結界を破壊した。

いままでの息苦しさが、水から上がったように、ふっとかき消え、冷たく身を引き締める夜風が、すがすがしいほどに吹き抜けていく。

「嘘……！」

あまりの驚きに、凛は青い目をみはって、おのがサーヴァントたる「神妻」の巫女を凝視した。

あの結界は、いかな五大元素（アベレージ・ワン）の資質をそなえる凛とて、打ち破ることのできないレベル。おそらくは敵サーヴァントの宝具級であろ

うシロモノである。
だが、真言はそれを、もののみごとに破壊して見せた。
鳴弦（めいげん）の儀。
弓に矢をつがえずに、弦を引き音を鳴らす事により、魔気・邪気といった、悪気を祓う退魔儀礼。真言が行ったのはそれである。
弓を引くという行為だけならば、誰にでもできるだろうが、それをもって実際に結果を引き出せる――あまつさえ、こんな大規模な結界を打ち破ることができるほどの威力を持たせるのは、尋常なことではない。
――というか、非常識よ。
だが琥珀の目の少女は、それを誇るでもなく、月の光に白くかがやく秀麗な面輪をくるりと振り向かせると、
「んで、どーする？」
などと、何でもないように言ってのけた。

「ともかく、結界を破壊できたのは良いことだわ。だからといって、問題が解決したと言えないのが、困ったところだけど……」
真言がランサーを下し、ひとまず戦闘が終結したので、屋上から校舎へと入り込んでいた。真言が（リドルもだが）「鍵開け（アロホモラ）の魔法」を使えたおかげでである。
理由はというと、単純に寒かったのだ。
時刻は、七時を少し回ったくらいだろうか。さすがにこの時間になると、校舎に人気はほとんどなくなる。
かろうじて明かりがついているのは職員室くらいのものだ。
それも、屋上には認識阻害の結界を張っていたので、さっきまでの戦闘のあれこれは気づかれないはずである。
さておき。
こうして凛たちが歩いているのは、あんなにあからさまな結界を

張るくらいに馬鹿だったら、他に証拠を残しているかもしれない、という儚い希望に基づく行動だったりする。

「屋上といい、敷地に入ってすぐの弓道場にも基点が残されていたことといい……結界をしかけたマスターは、学校の関係者である可能性が、高いと思うの」

黒猫ばーじょんのリドルを抱いた真言と、並んで歩くツインテールの少女は、思わしげな声を廊下に落としながら歩いていた。

二人のランサーと、一人のアーチャーは、念のため霊体化させている。

「まったくのよそものが入り込むよりは、そっちのが目立たないだろーね」

黒猫を懐に抱いた、桜色のコートをまとう真言は、ふみふみ頷きつつも、「でも阿呆だよねー」と毒を吐くことを忘れない。

「自分のテリトリーで事件起こしたら、疑ってくれって言ってるようなもんなのにね」

「キャスターが、こんな不味いテを使うとも思えないから……アサシンか、ライダーあたりかしらね。

狂化してるサーヴァントが結界をあつかうなんて無理でしょうし。バーサーカーは除外しても良いんじゃないかな。ランサーでもないんでしょ？」

凛が青い目で、いましがた槍兵のサーヴァントを従えた真言を振り向けば、少女の視線を受けた男の声が、不愉快そうな響きを隠しもせずに返答した。

「俺があんな結界で、魂喰（たまぐ）いするように見えるってのか？」

「……ごめんなさい。そうよね」

「凛、声をひそめ――」

アーチャーの低い声がかかると同時、ぢりっとした痛みが少女の令呪に走った。

同じ感覚を覚えた真言がすかさず凛の前に出ようとしたところで――彼らは出会った。

出会ってしまった。
「遠坂……？」
琥珀の瞳に、夕焼け色の赤毛。
教室から洩れる明かりに照らされた、年ごろの少年にしては、いささか小柄な男子生徒。
「衛宮君……っ」

#２７５　ランサー（後書き）

あとがき

＞全兄貴ファンに土下座で謝る準備は万端です！（待て）

すまんです。チートな先輩が暴走しました……。

彼女のモットーは「先手必勝」ですから。念能力は強化系。自重しないとああなります。

青い槍の人、脱落はしませんでしたが……うん。強く生きろ。

何に泣かされたって、九頭龍閃の描写をどうしたもんかとギリギリリ（歯軋り）。

戦闘シーン苦手な書き手に何の拷問（悪いのは自分だ）。

※飛天御剣流（ひてんみつるぎりゅう）

：「るろうに剣心」に登場する、剣術の流派。主人公の緋村剣心と師・比古清十郎が、その担い手。

#276　セイバー

まずい、と思ったのは、士郎が先だった。

学園のアイドル的存在である遠坂凛が、しがない一般生徒である彼を知っているとは思えないが、士郎はインフルエンザと偽って欠席している身である。

人目につかないよう辞書を取りに来た少年からすれば、後ろめたさを感じるのは当然で、仏頂面がデフォルトのわりに、感情が顔に出やすい士郎は、あどけなさを残した面（おもて）に、緊張の色を浮かべた。

いっぽうの凛は、もっと切実だった。

さっきの会話を聞かれていたかもしれない点。

そして衛宮士郎という少年から、魔力を感じる点。

さらにダメ押ししたのが、こうして士郎と相対したとたんに、聖杯戦争の参加者である、マスターの証「令呪」が反応したという点。

赤いコートをまとう少女魔術師は、一瞬、その脳裏に妹を――花の名前を持つ少女を――思い浮かべ、振り切るように鋭い動作で指先を向けた。

ガンド。

それは北欧のルーン魔術に含まれる物で、指差した相手を呪う呪術だ。

人差し指で差された相手は、身体活動を低下させて体調を崩させる――という、間接的な呪いである。本来は。

ただし、凛の場合は、魔力の密度が高いため、対象を視界におさめて狙い撃てば、銃弾並みの威力を持つことになる。

「ぐっ！」

ドドドドドッ！

やおら、学園のアイドルである美少女から機銃掃射もかくやとい

う「ガンド撃ち」をぶち込まれ、士郎は廊下へともんどりうった。
来ていたジャンパーには穴が空いている。呪いの弾丸は、凛ほどの才能ある使い手にかかれば、もはやフィンの一撃にも近い、物理的破壊力をもそなえるのだ。
士郎にとって不運だったのは、バゼットたちとの交わりによって、いつになく魔力が満たされていたことだ。
ふだんから魔術回路がろくに開いていないため、魔力も少なく、外部に漏らすことはほとんどない士郎は、魔術師の証とも言える魔力の痕跡を、いっさい残さずにいた。
それゆえに、同じ学校に通っている魔術師の、凛にも気づかれることなく生活できたのだ。
けれど、さいぜん――学校に来る前まで――セイバーへと魔力を供給するために、バゼットから性交を通して魔力を受け取っていた少年には、それなりの魔力が満たされていた。
あくまでそれなりだ。大部分は、おのがサーヴァントである美しい少女へと受け渡したのだから。
だが、それが災いした。
未熟な魔術師である士郎には、ろくに身を守る術（すべ）もない。
こう言ってはなんだが、魔力があっても使えないし、一般人を装うこともできないのだから邪魔なだけである。
いっぽうで、士郎を助けた幸運もあった。
たしかに凄まじい威力を誇る、凛のガンドではあるが――それは、もともと「相手の身体活動を低下させて体調を崩させる」ことを目的とした呪いである、ということ。
いま少年の体内には、所有者の病や傷を癒し、老化をも停滞させる宝具「全て遠き理想郷（アヴァロン）」が埋められている。
あくまでセイバーの宝具であるが故に、彼女が現界し、魔力を注いでやらなければ機能しないが、げんざい士郎は、そのセイバーと契約中のマスターである。
それなりの魔力もある。「全て遠き理想郷（アヴァロン）」の持ち主を治癒させ

る力は、セイバーとの距離に比例するが、彼の受けたガンドの威力は瀕死になるほどではない。
つまり。
士郎は、凛からのガンドを受けても、意識を保ち、令呪を行使できる程度には回復できた、ということだ。

かたや凛の不運――否、それは不覚と言っても良かっただろう。
――どうして、アンタが。
遠坂凛は、衛宮士郎を知っていた。
遠い日の思い出。
他家に送られた妹の、心を寄せる少年。
そりの合わない生徒会長の、頼りにしている友人。
ほんの少しだけ、猫をかぶらなくて済む友人、美綴綾子がちょっかいをかけ続ける相手。
とっくに魔術師の家系としては「終わっている」間桐家の長男の、おそらくは、たった一人の男の友人。
ストロボのように弾ける、誰かを通した、誰かと一緒の衛宮士郎。
それは凛にとって、フィルターを通したような「日常」の光景。
そっと眺めておきたい、でも触れられはしない写真のような。
苦い思いを噛みしめる少女の青い目が、いつもよりも水気を帯びていることに、誰が気づいただろうか。
倒れ伏す赤毛の少年を、凛が見つめた時間は、わずか数秒。
けれど。
それは、彼が彼女を呼ぶには、十分すぎる時間だった。

『危なくなったら――令呪で――必ず――』

鈴を振るような声が、士郎の脳裏にこだまする。
使い方は、バゼットに説明されて知っていた。それは念じるだけで可能だという。
――来てくれ。セイバ――！
サーヴァントには不可能な行動であろうと、それが、マスターとサーヴァントの魔力で届く範囲内であるならば、実現可能となる「令呪」。
その神秘によって、神々しいほどに美しい、剣精の少女は舞い降りた。
「ぼーっとしない！」
がきんっ。
「と」
「マスター！」
「な！」
ずしゃりと少女の足元を覆う、銀の具足が廊下にこすれて、金属的な音を立てた。
現れた金髪の少女剣士から、凛を庇って飛び出す真言。後ろに突き飛ばされると同時、既に現界していたアーチャーの、褐色の手のひらが赤いコートの少女を支える。
がしゃあん。
対するセイバーは、桜色のコートをまとう少女が繰り出した刃を、不可視の武器でもって弾いてのける。そして即座に状況を判断するなり士郎をかっさらうと、窓を叩き割って廊下から外へと飛び出した。
人外の男が三人と、サーヴァントだとわかる少女が一人。
――複数のマスターが共闘しているのだろう。
セイバーはそう単純に思った。
その敵陣営の中に、見覚えのある顔を見つけた気がしたが、彼女はマスターである士郎を優先した。
――もしも今回の聖杯戦争に、かの槍の英霊がふたたび召喚され

たのだとしても。
その英霊は、第四次聖杯戦争で、彼女と戦った記憶を持つことはない。
なぜなら、聖杯戦争に召喚されるのは、あくまで「座」の英霊のコピーでしかないからだ。死してのちの情報は、たんなる「記録」と成り果て、「記憶」となることはない。
例外は、セイバーのように、死んではいない状態で、一人きりの己が経験する場合くらいのもの。
だからセイバーは、あの美貌の槍兵が、彼女のことを覚えているなどとは、考えてもいなかった。

遠坂凛をマスターとする、「アーチャー」陣営では、血の気の多い青の槍兵が、さっそく後を追うべく目を輝かせていた。
元より、彼は死闘を望んで現界した身。なればこそ、「今度こそは」と戦いに血気をはやらせている。
「あれがセイバーか。おい、片づけても――」
しかし。
「セイバアアアァァァ！！」
喉も裂けよと吼えたのは、ふだん磊落ながらも礼儀正しく、騎士の模範のようであった、緑の槍兵。
すなわち、第四次聖杯戦争において、剣の主従に弄ばれる形となったディルムッド＝オディナだった。
タレがちな眦（まなじり）を吊り上げ、飢えた狼のごとく疾駆するスピードは、ランサーのサーヴァントにふさわしき迅雷のごとく。
逆上したディルムッドの豹変に、あっけに取られた凛たち一行は、あわててその後を追いかけるため、強化魔術や飛行魔法を行使した。

#276　セイバー（後書き）

あとがき

＞たしか、士郎の、外部に漏らす魔力量は「きわめて微弱で、魔術師の証とも言える、魔力の痕跡をいっさい残していない」。

ゆえに学校でも凛に気づかれなかった、という話だった気がします。

なのでまあ、魔力供給が仇になった、という形で魔術師バレです。

バゼットさんが事後に起きてれば、気づいて処置をしてくれたでしょうが、いかんせん彼女は気絶していましたので。

で、そのまま外出した士郎は、墓穴掘りという状況になりました。

へっぽこ魔術師だからしょーがない。

セイバーに魔術的なフォローを頼むのは、たぶん無理だろうと。

士郎の令呪、残り二画。

ディルムッドが何でセイバーに逆上するのか？

それは次回にて説明をば。

まあ「Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏ」ご存知の方はわかりますよな。ものっそい呪詛吐いてたし。

この二人が再会しちまったら、まずこうなると思うんだ。

#277　アナテマ

第四次聖杯戦争において、ランサーたるディルムッド＝オディナがマスターとしたのは、ケイネス＝エルメロイ＝アーチボルト。時計塔において、ロード＝エルメロイの名で知られる、降霊科の一級講師であった。

彼は、魔術師としては、このうえなく「魔術師らしい」魔術師だといえただろう。

魔術師の学府たる「時計塔」にて、教鞭をとる立場にあったことからもわかるように、様々な功績を作り上げた天才であり、九代続く魔術の名門・アーチボルト家の嫡男として、同じ「時計塔」降霊科学部長の娘・ソラウと婚約していた。

卓越した魔術師であることが、他人への優越であると信じて疑わない――魔術師たる己を誇りに思い、ゆえに魔術によらない戦い方を軽蔑する人間。ケイネスは、そういう「魔術師」だった。

ゆえに彼は、衛宮切嗣に敗北したのだ。

魔術を、尊ぶべき目的ではなく、ただの手段としてしか見なさない「魔術使い」。

それが、同じ魔術師からは外道と見なされ、「魔術師殺し」と徒名された男のゆえんである。

ケイネスの参戦した、第四次聖杯戦争において、アインツベルン家が切り札とするべく婿養子に迎えられた切嗣の手腕は、その異名に恥じない、凄まじいものだった。

その彼の手によって、ケイネスは討たれた。

しかし、ただ敗れただけなら、勝敗は戦場の常。

戦士たるディルムッドが憤るのは、マスターに仕える自分の、力及ばなさであったはずだ。

だが、彼の敗北は――ディルムッドを踏みにじった謀略は――男の騎士道を、絶望の汚泥に突き落とす類のものであった。

ディルムッドが望んだのは、ただ、おのが忠節を全うすること。主に仕え、その主のために働き、「聖杯戦争」という戦場で武功を立てて、主の誉れを勝ち取ること。生前は果たせなかった忠節の道を歩くこと。ただそれのみ。

だが、現実は、非情なまでの舞台を彼に設えた。

マスターであるケイネス。彼の婚約者である、ソラウの向けた、ディルムッドへの恋情。

一目惚れした婚約者を、美貌のサーヴァントに奪われる嫉妬と疑念に駆られた、ケイネスの勘気。

マスターの信頼を勝ち得たかったディルムッドの望みは、最初からくじかれていた。

ぎすぎすとした主従関係は、もののみごとに隙を衝かれ、衛宮切嗣の罠にはまり。

ケイネスは、その魔術回路をメチャクチャにされて、魔術師たる道を断たれた。立って歩くこともできないほど、肉体にも深刻なダメージを負った。

いっぽう彼の婚約者であるソラウは、ディルムッドが戦っている隙に誘拐された。

結果――掌中の珠であるソラウを、人質に取られたマスター・ケイネスは、残った令呪で、ディルムッドに自害を命じたのだ。

生前と同じ、主君による謀殺である。

それが、どれほど彼の心を切り裂いたことか！

しかし、それだけであるならば、彼はセイバーを恨んだりはしなかったであろう。

つけ加えよう。

ディルムッドが自害を命じられる直前まで、彼は、マスターの勝利のために、セイバーのサーヴァントと――アルトリア＝ペンドラゴンと戦っていたのだ。正々堂々たる、一騎打ちで！

その前に、ディルムッドは、彼女に問うていた。

『我が主の許婚がいまどこにいるか、知らないか？』

と。

セイバーは答えたのだ。「知らない」と。

彼らは騎士として、戦っているはずだった。

しかし結果はどうだ。

行方不明となったソラウは、セイバーのマスターの手に落ち、ディルムッドのマスターは、おのがサーヴァントを見限り、自害を命じた。

ディルムッドが、すぐ近くの廃工場の闇の中で交わされた盟約を知ることはない。

だが、そこには、残り一画となったケイネスの令呪をもって、サーヴァントの自害を命じること。すなわちケイネスたちの命と引き換えにした、聖杯戦争からの完全なる撤退を要求されていた。

ディルムッドのマスターは、おのがサーヴァントよりも、敵マスターとの盟約を信じたのである。

しかし槍の英霊が自害してのち、ケイネスたちは、切嗣ではなく、その配下である久宇舞弥の狙撃とセイバーの介錯よって命を落としたのだが――これもまた、ディルムッドの関知するところではない。

そしてセイバーのサーヴァントが、おのがマスターから、どんな裏切りを受けたのかも。

ディルムッドは知ることなく――彼女に騙されたのだと、そのマスターに陥れられたのだと、くろぐろとした憎悪を燃やして、剣精の少女へ双槍をふるう。

その憎悪を拭い去ることのできる、癒しの泉の持ち主は、いまだ

彼の側から離れて、夜の下にいた。

「む――」

神の家としては、あまりに禍々しく、寒々しい空気に満たされた教会の中。

くせのある黒髪と、漆黒のカソックが特徴的な男は、静かにおのが手を見下ろした。

そこにあったはずの令呪は、もはや聖痕の名残を残すだけで、消え失せている。もっとも、彼にはもう一つ、別種の令呪が残されているのだが。

「ランサーは……契約を奪われたか……」

霊器盤を見れば、まだランサーを示す部分は、落ちていないことがわかる。

手駒を失ったのは残念だが、遠坂凛のサーヴァントが「セイバー」ということがわかっただけでも、収穫だろう。

まさか彼女が、他のマスターと共闘しているとは思わなかったが。ラインが途切れる前に伝わった、複数のサーヴァント。それが、言峰にそんな判断をさせた。

残るサーヴァント――英雄王・ギルガメッシュは、偵察などには向かない、尊大で気まぐれな性格をしているため、少々使い勝手の難しい相手だ。

――まあ、間の抜けた魔術師が、のこのこ教会にやって来ないとも限らない。

言峰綺礼は、この「聖杯戦争」の監督役なのだから。

そのときチャンスがあれば、また新たなサーヴァントを手に入れるのも一興だ、などと考えつつ、のっぺりとした墨色の目を、礼拝堂の十字架に向けて、男は口端を吊り上げる。

胸に呪いを懐く男は、今宵も獲物を待ち受けて、遅くまで眠らな

い――。

これから教会を訪れるものなど、いないとも知らず。

「うぷふっ!?」

ぼてっ。

ぷこぷこベッドの十数センチ上に浮かんでいた少女は、やおらスプリングのきいたそれに受け止められた。

「七季、どうしました？」

深紅の目を丸くしたリインフォースが、あわててぱたぱた近寄ってくる。

「うや……えと、何か凄い、魔力が持ってかれて、びっくりしただけ」

七季もまた、大きく黒めがちな瞳を、きょとんと丸くしながら、ベッドに転がったままで、両手首を拘束されている手で、胸元をさする。

そこにあるのは――目には見えずとも――真言の眷属である印。

霊なる視界で捉えれば、龍鱗が青びた光を帯びているとわかるだろう。そこが熱を持っているのは、七季だからこそ、わかることだが。

「ふ、うっ……！」

やおら、少女は堪らず身悶えた。あどけない顔は、くっきりと濃い眉がひそめられて悩ましげだ。

体の奥底から、ぐいぐいぎゅんぎゅん引っ張られるような感覚で、七季の霊力が――そこから変換される魔力が――奪われていく。

従者たちに供給する分もそうだし、彼女の主たる真言と繋がっているラインからも、大量の魔力が引きずり出されていく。

「な、何してんの先輩たち……っ!?」

昼間、公園の浄化をするため、「八十禍津日神（やそまがつひのかみ）」を降ろしていな

ければ、さすがに霊力切れを起こしてひっくり返っているところだ。
飛行魔法が解けて、ベッドに落下したのも、いきなり予想外の供給量を持っていかれて、自分が使う分に回す魔力のコントロールをミスったからである。
そもそも七季は、アーチャーやリドル、ディルムッドという、規格外の使い魔たち――ついでにリインも――に、魔力供給しているうえ、げんざいはサーヴァントとしての真言の分まで支えているのだ。
それだけならまだしも、彼らはどういうわけか、さらに膨大な魔力を消費している。
これでは、いくら「神使（しんし）」として霊力・魔力に余裕のある少女とはいえ、以前に契約を交わした、ハルケギニアの霊脈だけでは、まかないきれない。
が、七季と比べれば、段違いに霊格の高い「神」を降ろしている限り、彼女の身に「霊力切れ」は起こり得ない。
格の高い神霊を、おのが身に受け入れている間は、彼女の「格」も一時的に底上げされる。
言い方は悪いが、電池のようなものだ。
いわば霊力の塊、通力の塊のような、「意思ある力」である「神様」――「八十禍津日神（やそまがつひのかみ）」は、例によって七季の器が居心地良いらしく、しばらく「戻る」つもりはなさそうだが。
「……明日は、きょう浄化したとこの霊脈と、契約しに行こう……」
――あと、他にも何人か降ろしておこう。
「備えあれば憂いなし、って言うもんな」
そんな七季の呟きを聞くものは、銀髪美女の姿をしたユニゾンデバイスと、たゆたゆ周りでうろついている（警戒しているらしい）はぐれメタル八匹、そしてマンションの屋上に陣取っているシールグだけであった。

#277　アナテマ（後書き）

あとがき

＞前半は、「Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏ」未読の方もいるでしょうし、補足説明ということで。

タイトルの「アナテマ」は、「聖絶」「奉納」「滅ぼす」「捧げる」「殺す」「呪われる」「呪われたものとなる」などと訳されるギリシア語の言葉。

カトリック教会を含む古代教会においては、共同体からの除名、すなわち「破門」を意味する語。のちに「永久の追放を含む最も過酷な罰」とされた。

ディルは「滅ぼす」、オリ主は「捧げる」（魔力を）、コトミーは「呪われたものとなる」が似合うなー、ということで。

どっちかというと、「ブックカース」の例文の方が強烈で、そちらがディルムッドの心境に近いかもしれませんが。

▼蛇足的豆知識

「アナテマ」は「ブックカース」に含まれる呪いの中の災難としても登場する。

※ブックカース

：中世に書物の盗難を避けるために使用された、本に記載される呪いの言葉のこと。その当時は、効果的な方法だった。

中世、これらの呪いは、本を盗んだり、傷つけた人間に重大な社会的かつ宗教的制裁を与えるものだった。この理由として、本は、印刷機が発展する以前は、全て貴重な作品であると考えられていたため。

例えば、バルセロナのサン・ペドロ修道院のブック・カースの一例は、次の様な文章。

「この本を盗んだ者、あるいは、借りて返さない者、その手を蛇に変え、引き裂いてしまえ。麻痺になり、関わったものは呪われろ。助けを請うくらい痛みで泣き叫び苦しめ。

死んでしまうまで、苦しみが続け。本の虫よ、彼が最後の罰を受ける時、その体を食ってしまえ、地獄の炎よ彼を燃やし尽くせ。」

※アナテマ

：聖書で、ヘブライ語「ヘーレム」の訳として七十人訳聖書から使われた。アナフェマとも。

「教会と神の保護下からの永久の追放を含む最も過酷な罰」とされる。

#278　クラッシュ

月光の降る薄闇に、夜風がびょうびょうと耳元を吹き過ぎていく。
少年と少女が吐き出す呼気も、雲のようにたなびき流れて、もう見えない。
セイバーは焦っていた。
迅雷の速さをもって、猟犬のごとく追いかけてくる双槍の騎士には、見覚えがあったからだ。
第四次聖杯戦争において、彼女と戦った魔貌の英雄――ディルムッド＝オディナ。
誇り高く、美しく、雄々しく、義理堅い好漢。
アルトリア＝ペンドラゴンがセイバーである以上、かの英雄はランサーか、もしくはライダーだろう。
アサシンやキャスターではあるまいし、アーチャーやアサシンの可能性も低い。怒り狂う形相からすると、まさかバーサーカーかとの疑いも浮かび上がってくるが、かの英霊に、そのような逸話はあっただろうか。
「シロウ、指示を！　このまま家には戻れません！」
衛宮邸にまっすぐ戻るのも考え物だった。そこには傷つき、いまだ不調のバゼットが休んでいる。いきなりセイバーが令呪で転移したものだから、彼女も驚いているだろう。
少女サーヴァントの問いかけに、横抱きにされたままの、いささか情けない格好で、赤毛の少年が切れ切れに叫んだ。
「学校の、裏手に、雑木、林が……あるっ」
とにかく、ただでさえ、速度ではランサーやライダーを振り切れるとは思えないのだ。
このうえ士郎を抱えていては、追い詰められるのがオチである。

――その前に先手を打って、仕留めてしまわなければ。

「シロウ、ことによったら宝具を使うかもしれません。よろしいですかっ！」

これが、ディルムッドだけが相手であれば、セイバーもこのようには考えなかっただろう。

しかし美貌の騎士には連れがいた。サーヴァントとおぼしきものが複数――いずれも、一対一であれば、そうそう負ける気などしない。

だが、相手のマスターが、正々堂々の一騎打ちを許してくれる、などとは、セイバーは決して思っていなかった。

前回、衛宮切嗣をマスターとした彼女は、身のうちに刻まれた陰惨な戦いの記憶を顧(かえり)みて、歯を食いしばる。

ディルムッドは罠にはまり、おのがマスターから令呪によって自害を強制された。その一端を担っていたのは、衛宮切嗣――すなわちセイバーのマスター。

彼女が感知しなかったとはいえ、負い目を感じないわけがない。

たとえ、いまの彼が、第四次聖杯戦争にて戦った「彼」ではないとしても――刃が曇るのは当然といえる。

古の騎士王(いにしえ)は、そのあまりの清廉さ故に、おのが身を滅ぼしたのだから。

けれど。

いまの彼女の手には、故国の命運だけではない。もちろんそれも重要だが――あまりに未熟で、優しくて、放っておけない――ひとりの少年魔術師の命が、抱えられていた。

「セイバーに任せるっ！」

力強い応答――それは、戦い方も知らない、少年の開き直りかもしれなかったが、それでも少女の胸には、温かい何かが注ぎ込まれていく。

前回のマスター・切嗣からは、ついぞもらえなかった信頼。寸分の疑いもないまなざしと声。パスは細すぎるくらいにささやかでも

――感じられる絆のほどは、段違いだ。
「我が剣に誓って！」
月光に白く玲瓏な面輪が照り映える。
セイバーの小さな胸に宿るそれは、紛うことなき「歓喜」であった。

まるで茨が林立しているかのような、冬枯れの木立が、月の光を浴びて影を落とす雑木林。
そこでいま、神話の再現のごとき剣戟が交わされていた。
白銀（しろがね）の具足をまとう、小柄な騎士王。
夜に溶けそうな深い緑の外套を翻す、長身の槍兵。
たとえ刃先は見えずとも、鋼の打ち合う甲高い音が、高らかに鳴り響き、少年少女の耳を楽曲のように通り過ぎていく。
凛のような、優秀な魔術師ですら、それは手出しできる領域を超えていた。
しかし、憤激のままに膂力をふるうディルムッドに対して、一歩も引かない碧眼の少女には、焦りがにじんでいる。
凛、アーチャー、真言、ランサーまでもが駆けつけたいま、ますます士郎たちの不利は高まるばかりだ。
セイバーの背後には、赤毛の少年がかばわれている。
最初から出し惜しみはなしとばかり、ディルムッドのシンボルともいえる、「破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）」「必滅の黄薔薇（ゲイ・ボウ）」の双槍が、ふるわれているいま、刀身を隠していた風王結界（インビジブルエア）は解除されてしまい、金髪の少女の手には、黄金の剣が握られていた。
ぎしり、と銀の篭手が鳴く。
――四騎のサーヴァントを相手に、白兵戦は無謀すぎる。
ディルムッドを除けば、他の三騎――ひとりは少女だが、サーヴァントと感じられる。あるいはアルトリアのように、死ぬ前に世界

と契約したのかもしれない――は、まだ駆けつけたばかりだ。
――ここしかない。
この好機を逃せば、彼女たちに逃げ場はないだろう。
だからこそ、セイバーは切り札を――彼女の宝具「約束された勝利の剣（エクスカリバー）」を解放する決意を固めた。
それは、星が鍛えた神造兵装であり、使用者の魔力を「光」に変換し、究極の斬撃として放つことのできる聖剣。
その破壊力は、対城宝具にふさわしい、おそるべきものであるが――セイバーの眼前――凛たちの背後には、城と比べてもそれほど遜色ない、穂群原学園の校舎がそびえている。
これを緩衝材にすれば、周囲には、それほど被害はいかないだろうと思われた。
彼女の直感――未来予知に近いレベルの――は、校舎に人気がないと言っていた。少なくとも、セイバーが放とうとしている部分に、人間はいないだろう。
――何より、サーヴァント四騎を屠ることができるのなら、初戦とはいえ、宝具の解放も無駄にはならないはず。
金髪の少女は、背にかばう命の気配に、己を奮い立たせた。
その甲冑に包まれた胸には、滅びに向かうおのが国の姿と、カムランの丘。
彼女の望みは、あんな惨劇を回避するために、王の選定をやり直すこと――そのためには、この聖杯戦争に勝ち抜き、願望器を手にする必要がある。
「約束された（エクス）――――」
セイバーの手にした剣が、いっそう強く黄金色のかがやきを帯び、ブリテンに名を馳せた騎士王は、その宝具を真名解放した。
「勝利の剣（カリバー）――――！？」
闇夜を照らす、まばゆき光の柱が林の中から立ちのぼった。

いっぽうこちらは「アーチャー」陣営。
荒れ狂う怒涛のような勢いと、悪鬼さながらの形相でセイバーに襲いかかるディルムッドを見守りつつも、彼らは決して手をこまねいているわけではなかった。
「ド素人だな」
アーチャーの鋼色の目は、赤毛の少年――衛宮士郎を捉えていた。
「だな。やっちまうか？」
ランサーも、マスターになったばかりの真言へと、ルビー色の目を向ける。
「ねーあれもらって良い？」
白い指が差すのは衛宮士郎。英霊になるかもしれない可能性を秘めた少年である。
「え？」
ふいに、栗毛の美少女から投げられた声に、思わず素で振り向いてしまう凛。
「とっ捕まえた方が早いじゃない。敵なんでしょ？」
「え、えーと」
「それにアチャ男と違って素直そーだし。あれなら私もナナちゃんも好みだしねー」
「ちょっと待て真言」
何を考えているんだ。
こめかみを引きつらせる、赤い外套の偉丈夫をよそに、
「ま、とっとと片付けるのは賛成だね」
と頷いたリドルは、黒猫姿のまま、デバイスを使ってハルケギニア式の錬金魔法を操る。
「錬金！」
そして闇の魔法使いがふるう地の魔法は、赤毛の少年の足元と、セイバーの足元を崩して深い竪穴を作り上げたのであった。

結果として、どうなったかというと。
モグラのトンネルよろしく掘られた穴から、浮遊魔法を使われて、まんまと真言たちの手に落ちた、へっぽこ魔術師がひとり。
「ぐっ、はーなーせっ！」
「離したらタダのバカだろ？」
そして、「約束された勝利の剣（エクスカリバー）」の真名解放中に、落とし穴に落とされかけて、体制を崩したセイバーが、雑木林の地中に宝具を打ち込むことになり。
まるで隕石が落ちたかのような、巨大なクレーターを校舎裏に作るという残念なありさまに落ち着いた。
「あ、校舎にヒビ入ってる」
少年形態になって、士郎を羽交い絞めにしているリドルが目ざとく気づけば。
「かなり大きいな……さすがにすべての衝撃は殺しきれなかったか……」
真面目な顔で「我々で修復するべきか？」と凛を振り返るアーチャー。
「そのへんは、監督役がどーにかするでしょ」
凛は、ツインテールを揺らしつつも肩をすくめ。
「で、まだ続ける気？」
「くっ……！」
不敵な青いまなざしを向けられたセイバーは、その美貌を悔しげに歪めて剣を置いた。
彼女の聖剣は――白い髪の偉丈夫が作り出した、七枚羽の盾と、栗毛の姫巫女が繰り出した、「約束された勝利の剣（エクスカリバー）」とほぼ同規模の斬撃によって相殺されてしまったのだ。
剣じたいは無事だが、こんな非常識を可能とする相手に、マスターである士郎を捕われては、彼の奪回すらも難しかった。

ちなみに、校舎にヒビを入れたのは、真言の正面から逸れた部分を、さらに防いだアーチャーの「熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）」から、さらに逸れたというか洩れた衝撃であった。

これだけでも聖剣の威力は推し量ることができるだろう。

残念ながら、体勢を崩され、インパクトをずらされた上での結果であるからして――そこにはセイバーの斬撃の後から、攻撃を放って間に合わせた真言の人外っぷりが必要になるのだが――是非もない。

「つーか、どーすんだ、こいつ」

まだセイバーを睨みつけて殺気立っているディルムッドを、こちらも羽交い絞めにして押さえつけている青い槍兵――クー＝フーリンの、ちょっと疲れた声が、夜のしじまに力なく溶けたのだった。

#278　クラッシュ（後書き）

あとがき

＞タイトルは「激突」の意。ありきたりですが。

ランサー兄貴に引き続き、セイバースマソ。

というわけで、せっかくのフルチャージは、そうそうの真名解放のための仕込みでした（をい）。

それでも、この理不尽チームには勝てないという。

先輩の攻撃は、ご自由に想像してください（待て）。

そしてオリ主の魔力をギュンギュン消費していたのは、主に二人の「アーチャー」でした。

#279　ライムライト

ましろき月の光に青びて、黒がふわりと翻る。
瞬く破魔の黒瑪瑙（オニキス）。
紅梅の唇。
爪先までも黒をまとう足は、宙を踏んで、夜に舞う。
「……ええと、何このカオス」
念話で呼びつけられて、先輩のジッパーから現れた七季は、出くわした光景に、思わず回れ右したくなった。

時間は、少し前にさかのぼる。
＜ナナちゃーん。こっち来てー＞
「？」
＜せんぱい？＞
念話が届くなり、ぱ、とあどけない顔が持ち上がる。拍子に、ぴこん、とポニーテールがはね揺れる。
エアコンで温かく調整された、ウィークリーマンションの部屋。黒髪の少女は、それまで転がっていたベッドの上で、もぞもぞと体を起こした。
いまだ両手首は、アーチャーによるバインドで拘束されている。おかげで身動きが思い通りにならない七季を、銀髪の美女が、かいがしく支えて座るのを手伝う。
「ありがと、リイン」
「お役に立てて何よりです」
＜お前んとこのわんこが、テンション上がりすぎててなー。ちょっ

と抑えに来てくんない？＞
　わんこて。
＜はぁ……＞
　真言の物言いに、「神使（しんし）」の少女は苦笑を浮かべつつ「まあリドルじゃないだろうなぁ」と、思いを巡らせる。
　アーチャーでもないだろう。弓兵の場合、真言は「アチャ男」とか「イヤミ執事」とか「ガングロ主夫」とか、色々なあだ名で呼んでいるので。
　――ディルかなー。
　悲しいかな、れっきとした大人の男なのに、どうにもふだんの行動から、周囲に「忠犬」あつかいされているディルムッドである。
　これに関しては、リインフォースも同様だが。その彼女はげんざい、七季の傍らに控えているので、必然、残りは一人となる。
　彼らマスターである七季も、「わんこ」イメージを気分的に否定できないので、あえて触れずに流しているのは、ご愛嬌だ。
　さっきの魔力大量消費といい、ディルムッドの様子といい、真言にツッコミたいことは他にもあったのだが、それは行けばわかるだろう、と黒髪の少女は、リインフォースに声をかけた。
「リイン、行くよ。先輩がお呼びだ」
　短く告げて、彼女はついと指先を伸ばす。
　手首をまとめられているので、どうしても前に伸ばすしかないのだが。
「はい、七季」
「黎明、セットアップ」
　黒いハイネック姿の少女は、このままでは上着を身につけられないため、バリアジャケットを生成する。
　――うん、便利だ。
「イエス、ユアハイネス」
　指にはめられた銀のリングが、菫青石（アイオライト）を淡くかがやかせる。夜明けの名を持つインテリジェントデバイスは、みずからは変形するこ

となく、魔力による黒衣だけを生み出した。
胸元には、二連に重ねられている首飾り。丸く磨かれた白と薄緑の翡翠に、差し色として、一回り小さな赤い玉髄を、黒い紐で連ねた古風なデザインだ。
たっぷりとした黒い袖からのぞく腕は、白銀（しろがね）の篭手と黒い手甲に覆われて、白い指先だけが象牙細工のよう。
宙を踏む足には、黒足袋と、同じ色の草履。
デバイスや、加護のかかった装飾品を除けば、頭のてっぺんから足の先まで、徹底したまっくろずくめである。
柘榴石（ガーネット）のチョーカーを模していたストレージデバイス「ノア」は、「黎明」と連動して変形したらしく、打神鞭――もとい、短い銀のロッドになっていて、懐にきちんと収まっていた。
コートではなく、退魔業で使う巫女服と同じデザインのバリアジャケットに、七季は夜色の目を瞬かせる。
着慣れたものではあるが、「仕事」ならともかく、町中では目立って仕方ないのだが。
「……向こうは、結界ちゃんと張ってるんだよな？」
「はいマスター。ご心配なく」
問いかけにそつなく答えるテノールは、彼女のデバイス「黎明」のもの。
「なら良いか」
両手首を拘束されていては、どうも歩きにくい。黒髪の少女は、ふわりと飛行魔法で宙に浮かぶと、虚空に開いたジッパーへ、銀髪に美少女と共に飛び込んだのだった。

そして。
ふわん、と虚空の裂け目から、黒衣をまとう少女が舞い降りるなり、マスターの気配を感じた青年の金睛眼が、そちらを向いた。

とたんにランサーの腕の中でもがいていた、ディルムッドの動きがピタリと止まる。彼の視線の先に、一人の少女を認めたランサーも、短く声を上げた。

「お」

「……ええと、何このカオス」

うっわぁ。

七季の眼前には、巨大なクレーターが広がっていた。月光に照らされる荒れ果てた地形は、遺跡のように見えないこともない。

木々がなぎ倒され、へこんだ部分の土は、ところどころがガラス質になっているため、キラキラと光を弾いたりしている。よっぽどの熱量がぶつかったのだろう。

――隕石かミサイルでも激突したんだろうか。

そのクレーターの中ほどにたたずむ、金髪を結い上げた美少女。ライムライトさながら月光を浴びている彼女は、青いドレスに銀色の甲冑をまとうという、現代でもあまり見ないいでたちが、コスプレか役者のようだ。

しかし、あまりにも浮世離れした、妖精か女神を思わせる美しさのおかげで、そんな俗っぽい存在とは一線を画しているのだと感じられる。

彼女の足元には、瀟洒な細工の柄が目立つ西洋剣。アーチャーたちと向かい合っている立ち位置的に、おそらく敵対勢力と思われる。

しかし武器を捨てているところを見るに、何がしかの理由があるらしい。

きりりと表情を引き締めたままの、甲冑少女のまなざしを、七季が追いかけて視線を転じれば、少年姿のリドルが、羽交い絞めにしている人物が一人。

――あ、あれ？

赤毛の少年は、どういうわけか彼女にとって見覚えがある。

容姿は、かつて異世界で出くわした男の子に。

そして魂も――その男の子と、もう一人、七季の従者に、そっく

りというかピッタリで。
――ええええ？
ぱちぱちと、黒衣の少女が、大きな目を瞬くのも無理はない。
「アーチャー……あとで説明してくれるか？」
思わず白い髪の従者に、開口一番で話を振ってしまったのも、むべなるかな。
――先輩に聞いても、話がかっとぶ可能性があるしなー。
「了解した」
即答が返ってくるあたり、彼は七季よりも事態を把握しているのかもしれない。
魔術師の少女は、隣に真言、前にはアーチャーが立ちふさがっているから、まず危険はないだろう。
問題は、髪から武装まで青ずくめの男に羽交い絞めにされているディルムッドだが、こちらは味方が黙認しているため、少なくとも敵ではないと思われる。
――あ。
よくよく見れば、青い髪に紅い目があざやかな男は、その胸に神字で「ペット」と書き込まれていた。七季の幼なじみたちと同じあつかいに、真言の仕業だと一目でわかる。
――先輩、また捕まえたんですか……。
何ともいえない微妙な心持ちで、まっくろ巫女服の少女は、青い髪のランサーと、栗毛の美少女とを見比べる。
さておき。
ひとまず七季は、ふよふよと宙に浮いたままで、赤い外套をまとう従者へと近寄っていくのだった。

「アーチャー。大人しくしてたぞ。これ取って」
ん。

男へと差し出されるのは、淡く光る、あかがね色の魔力で拘束された手首。

その様子を、セイバーと士郎少年が、「こいつ女の子に何してんだ」とでも言いたげな、ちょっぴり白い目で見つめていたりするのは、ご愛嬌である。

「ああ」

ともあれ、アーチャーの褐色の指先が触れるなり、彼の施したバインドは、あっけなく砕けた。

ぱきん。

そこでようやく、とん、と少女の爪先が、地面を踏むも、その細腰をすぐに従者の腕にさらわれる。七季をしっかりと支えるのは、赤い聖骸布に包まれた逞しい腕だ。

「……いなくて良かったというか、いてくれた方が良かったというか……我ながら複雑な気分だ」

ふと嘆息ぎみに降ってくる、低い声と、男の大きな手のひらさえも、少女にとっては懐かしい。

きょうは、一日のほとんどをかれと別行動で過ごしていたからだろう。アーチャーは凛の側で護衛をしていたし、それを命じた七季は、リドルや東風（こち）、リインフォースと一緒だったのだから。

物足りなかったのは、彼も同じらしく、白い髪の偉丈夫は、そっと確かめるような手つきで、黒髪の少女を撫でている。

そのさまはまるで、主人に撫でられるのが好きな、人懐っこい猫と、愛猫家の飼い主、といった風情だ。

アーチャーの手に、すりりと懐く黒衣の娘の表情が、嬉しげなのはいうまでもないが、男の灰藤色の双眸も、優しげな光を湛えて細くなっていた。

いっぽう。

――いたたまれないのですが……。

新たに現れた少女と、アーチャーのやりとりを、少し離れた距離から見ているセイバーは、目を逸らしたい気分でいっぱいになる。

すわ、新たな敵かと思いきや、のっけから敵――のはずのセイバー主従――そっちのけでイチャらぶするのだから、居心地が悪いったらない。

言葉少なく、ただ頭を撫でて、撫でられて、ほわほわ和んでいるだけなのだが、ふたりの間に醸し出される空気がダダ甘いのは、セイバーとて気づかずにはいられない。

かつて王様であろうとも、色恋沙汰に疎い彼女は「シロウ、指示を！」と言いたくなってしまう。

「何故かしら。すっごいやりきれないんだけど……」

冬まっただなかにも関わらず、そこだけ二人の固有結界とばかりに、春めいた空気をこれでもかと育んでいる、七季主従に、青いジト目を向ける凛。

その横に立っている真言も、「アチャ男のくせに生意気な」と口走っている。

「君、どこのジャ●アン？」

すかさずツッコむリドルは、ルビーアイに黒髪の少年姿で、いまなお士郎を拘束中だ。

彼がバインドを使わない理由はというと、もしもセイバーが襲いかかってきたら、躊躇なく盾にするためである。さすが闇の魔法使い。考えることが酷い。

もしもリドルが黒猫姿だったなら、そのしっぽは嫉妬で、びたびた地面を叩いていただろうが。

「おーい、あそこだけ何か花咲いてんぞ」

さいぜんまで敵だったランサーも、ディルムッドを羽交い絞めにしたまま、つい軽口を叩く。

そして緑衣のランサーも、目の前の主従ふたりを穴が開くほど見つめている。

リインフォースは、その怜悧にも見える美貌に似合わない、おたおたした様子で、ルビー色の視線を、げんざいのマスターである黒髪の人外青年と、アーチャーに撫でられて嬉しそうな七季の間を、行ったり来たりさせた。

大事な黒髪の少女が喜ぶのなら、それはリインフォースにとっても嬉しいことだが、彼女の主たるディルムッドのフォローもしてあげたい。そんな気持ちに振り回されている銀髪美女は、眺めるぶんには可愛らしい。

「な、仲が良いのは、良いことなんじゃないか？」

捕まっているというのに、空気の不穏さを感じて、こちらも何とかフォローに走るお人よし――もとい士郎は、ないしん長身の偉丈夫に届かないはずの電波を送った。

見ているだけでも気に食わない、赤い装束の男だったが、彼が周りによってたかってボコられる光景を幻視すると、何故か士郎までいたたまれない気分になってくるのだ。

――そろそろ離れた方が良いぞ！

はたして、同じ「エミヤシロウ」の電波を受信したのかどうか、それは定かではないが。

小柄な少女をかいぐり撫でていた手のひらが、ぽん、と肩を叩いて、七季の行動を促した。アーチャーの、細められた灰藤色の目が、少しばかり名残惜しげに映るのは気のせいだろうか。

けれど、大した言葉を交わさずとも、主従の間には何となく理解の空気が流れ。

――ん。

七季が、こきりと首をかしげてから振り向くや、黒瑪瑙の瞳は、黒髪の槍兵を捉えた。

その背後に立つ、見慣れない青い髪の男――ランサーへ、少女は

目配せを飛ばす。そして今度こそ、七季は彼の名を呼んだ。
「ディル」

夜の中で鳴り響く、金鈴のごとき澄んだソプラノ。
戦いで荒れ果てた大地にたたずみ、夜の中で白い腕が花のように開く。
踏み出したのは、どちらが先か。
気がつけば、ディルムッドは主と戴く少女の腕の中にいた。
少女の足は地を離れ、しなやかな腕とやわらかな胸が、赤子を抱く慈母のごとく、青年の頭を包み込む。
それは雛を翼下にかばう母鳥に似て。
「落ち着いたか？」
「……は、い」
ゆったりと広い袖に隠れて、ディルムッドの表情は誰にもわからなかったが、息を詰めたような返事が、細腕に囲まれただけの、狭く温かな空間に吐き出されて熱を散らした。
冬の大気ですら醒めることのなかった、男の頭に上っていた狂熱の血が、清水のような声に冷やされていく。
「中に入るか？」
男の頭上から降るソプラノは、落ち着いたやわらかさを伴って、胸へと染み込む。
「いえ。
我が失態を、許していただけるのであれば……傍で、御身を守らせていただきたい」
ふと、七季の目が、腕の中の男へと落ちた。
のぞきこんだ、タレ目がちな金睛眼には、もはや狂おしいまでの憤怒はない。戦場を見渡すだけの分別は取り戻している。
――ん。これなら大丈夫か。

黒瑪瑙の瞳に、ちかりと硬質な光が瞬き、「仕事」においては司令塔の役割を担う少女の思考が、そう判断する。

「許す。先輩もケガないみたいだしね」

桜花を思わせるコートの裾から、緋色の袴をのぞかせる美少女を、ちらりと一瞥する七季。彼女のまなざしを追いかけた男の声が、通り良く響いた。

「そこの嬢ちゃんなら、出会いがしらに、思い切り良く九連撃と顎狙い、果ては俺の後頭部まで蹴り飛ばすくらい元気だったぜ」

ランサーのツッコミが入ったので、はたとディルムッドの首を抱いたまま振り返る、異邦の少女。

「……先輩、ものっそい不機嫌ですもんね。ご愁傷様です」

かるくひょこりと頭を下げる七季に「それだけ!?」と、赤いコートをまとった凛の声が上がる。

屋上での（一方的な）戦いを知らない剣主従も、話の内容を聞いたとたん、思わずお互いの顔を見合わせた。

「まーイラついてたのは知ってるけど」

彼が少年姿になったため、「私のカイロが……」とぶんむくれている真言へ、リドルが、ルビー色の双眸で流し見る。

アーチャーもまた「確かに虫の居所は悪そうだったが」と言いながら、さりげなくセイバーを警戒して、金髪少女と士郎の間に立ち位置を変えた。

あまりにほのぼのとした――七季たち一行にとっては、いつものことなのだが――空気が流れているため、これを隙と取られては面倒だからだ。

――彼女（セイバー）は対魔力が高いだろうが、真言とぶつかると、校舎も吹っ飛ぶかもしれんからな……。

さいぜんまではディルムッド以外で唯一、セイバーの正体を知っていた男は、そこまで気を回して、金髪の少女サーヴァントに牽制の視線を飛ばす。

――この様子だと、まだ凛はセイバーの正体には気づいていない

か。
　騎士王の開放した聖剣よりも、それを防いでのけた真言へのショックの方が大きいのだろう。
「って、不機嫌？　何で？」
　きょとんと不思議そうな、ふんわり黒髪ツインテールの少女は、アーチャーの気持ちも露知らず、小首をかしげて反駁する。
　そんな凛のセリフに、しかし真言じしんからの、恨みがましげとも言えるソプラノが、低く低く夜の底を這った。
「どっかの誰かさんがね～。うちのナナちゃんをクーリングオフなんて、ナメたことしてくれたからねえええ～」
　ふふふふふふ。
　不穏な笑い声が、月光さやかな冬の夜に、おどろ線を醸し出す。
　――いっ！？
　ひくん、とツインテール美少女の、細い肩がはねて揺れた。
「わ、私のせいなわけ？」
「先輩、まだ根に持ってたんですか……」
　七季の呆れを含んだためいきが、冬の夜風に紛れて消えていった。

#279　ライムライト（後書き）

あとがき

＞とりあえず狂犬もーどディルに特効薬を投下。

しかし何故か弓兵がくっつく不思議。しばらく離して書いていたら、筆が滑りました。

タイトルの「ライムライト」は舞台照明の一種。または、「名声、評判」もしくは「花形」。

ようやく主役が合流したということで。

ランサー兄貴フルボッコが、先輩の八つ当たりだと、ようやく判明。

チートな先輩、地味に怒ってました。

※ライムライト

：１）ライム（石灰）片を酸水素炎で熱し、強い白色光を生じさせる装置。また、その光。１９世紀後半、欧米の劇場で舞台照明に使われた。石灰光。

：２）名声。評判。また、花形。

#280　フリーズ

「まあ、先輩たちが魔力を消費した理由はわかりました。こんだけ大暴れしたんじゃ、そりゃいっぱい必要ですよね」

ほわりと少女が生み出した魔力光の中。

照らし出されるクレーターの様相は凄まじく、手当たり次第にショベルカーか何かで掘り返された工事現場もかくやというありさま。

ちりりりり、ちりりりり、と聞こえる虫の声が、妙にわびしい。

それだけならまだしも、きらきらと魔力光や月光を弾くガラス片が点在し、なぎ倒された木の中には、炭化しているものもあったりする。

――うん、戦場跡だな、これは。

それも大砲をぶっ放すようなレベルの戦場である。

ぐるりとあたりを見回して、合点がいったと頷く七季の声に、青ずくめのランサーと少年姿のリドルの声が重なった。

「暴れたのは、どっちかつーと、そこのセイバーなんだがな」

「僕らは防いだ側だしね」

「防いだのは、そっちの女の子と、赤い外套のやつだろ。あんたは俺のこと捕まえてたじゃないか」

黒髪の少年に羽交い絞めされているのはそのままだが、口を塞がれてない士郎も、ついでに背後のリドルへツッコミを入れる。

「なるほど。それで、あっちとこっちに穴が開いてるわけか」

とすん。

黒足袋と草履に包まれた七季の爪先が、ふたたび荒地を踏んだ。

しぜん、黒い袖に包まれた腕が解けて、ディルムッドから離れる。

――もしや彼女が、ディルムッドのマスターか？

いっぽうセイバーは、自分とあまり身長の変わらない少女を、い

かにも名残惜しそうに見つめている、魔貌の男にないしん驚愕していた。

――あと、敵に囲まれているのに和みすぎです、シロウ！

ついでに、のんきな自分のマスターに内なるツッコミを入れることも忘れない。

その緊張感のなさを作り上げたのは、銀髪の美女と共に現れた、黒衣の少女であることは間違いないが。

ともかく、セイバーからすれば、ふつうの少女に見える彼女は、荒ぶるディルムッドを鎮めると、ちゃきちゃきと、それでいてマイペースに場を仕切り始めたのである。

アクの強い円卓の騎士を従えていたアルトリア――セイバーから見ても、このカオスきわまりない顔ぶれを。

「とりあえず」

くりん、と七季が振り返る拍子に、まっくろなポニーテールが、なめらかな曲線を描いて翻った。

その視線の先にはツインテールの少女。七季の黒と、凛の青がかちあって瞬く。

「彼女――セイバーだっけ？――と、そっちの少年。

討つにしろ、残すにしろ、ちょっと抑えててもらえますかね？」

――先輩の機嫌、まだ治ってないし。あれは「ガチバトル所望でござる！」って顔だよもう……。

くい、と親指で士郎とセイバーを指す七季。

ディルムッドは、さいぜんの宣言通り、その傍らに寄り添ってセイバーの警戒に当たる。

凛はアーチャーと真言に挟まれているし、少年姿のリドルも士郎を掌中にしている。リインフォースも元よりデバイスという人外なので、金髪の少女は、なかなか七季一行に隙を見出せない。

それでも、月光にきらめくエメラルドの目からは戦意が消えていないことを、この場の誰もがわかっていた。

――あっちのセイバーが攻撃してきたら、間違いなくバトるよ先輩！

そんなことになったら、ただでさえ遅い夕食が、もっと遅くなってしまう。

七季としては、とっととやることを片づけてしまいたいところなのだ。

いっぽう凛は、七季の目に見つめられると、どういうわけか、落ち着かない気分になっていた。

聞くものの耳を打つソプラノと、星を孕んだ夜を思わせる瞳が、どういうわけか、いちいち凛の注意を引く。

――魔眼ではないという話なのに。

一説には、遠坂家には吸血鬼の血が混じっているとも言われている。もしかしたら、その血にひそむ「魔」の性が、「誘魔」と謳われる少女に惹きつけられるのかもしれないが……真実は、闇の中だ。

「それは良いけど。何をする気なの？」

はっきり言って、魔術師ではない七季や真言のやることは、凛の理解を超えていることが多い。

それでも結果が気になるのはもっともだし、何が起こるのか把握しておくのは、この聖杯戦争におけるマスターとして当然の務めだ。

「このままじゃ、魔力が足りなくなるかもしませんから、先に一柱だけでも降ろしておきたいんです。さすがに、もう一人増えたら、私の分まで回す量が保障できないし」

良いですか先輩？

もしも真言がセイバーまで奪う気でいるのなら、そのぶん魔力の消費は大きくなるだろう。だからこその選択だ。

――幸い、いまならここに結界が張ってあるしね。

よそに気づかれることもないはずだ。

「ん、任せるわー」

ちゃっと手を上げて栗毛の美少女が応じる。
その横で、凛も思い当たったのだろう。既にランサーを他のマスターから奪っている真言のことだ。セイバーも、同じようにできないとは限らない。
――頭が痛いわ……。
ちょっぴり自分のサーヴァントの規格外っぷりが、ありがたいのか迷惑なのか、わからなくなってくる凛である。
「気分でも悪いのか？」
赤いコートを着たツインテールの少女に、様子をうかがっていたリインフォースが、気を回して声をかける。
「おそらく、真言やマスターの規格外っぷりに思考がオーバーフローぎみなのだと思うがな。
凛、酷なようだが、まだ序の口だぞ。気を確かに持ちたまえ。あと真言には、早めに謝っておいた方が良い。さっきのランサーばりの八つ当たりが続くとなると、シャレにならん」
青い目の少女と同じ色の外套をまとう、褐色の肌の男は、ぽんと励ますように凛の背中を叩いた。その刺激に、はたと彼女は気を取り直す。
「え、ええ……。何かもう、一部、認めたくないような言葉があったけど、私は大丈夫よ、アーチャー。
衛宮君の方は、私が何とかするわ。セイバーの方は……真言、お願いしても良いかしら？」
「おっけー」
きがるに飛んできた返事に、しかし少女魔術師は自分でふっておきながら、
――『アーチャー』なのよね？……これ。
きょう何度目になるかわからない、彼女のサーヴァントへの疑問を抱いたという。
そのツリ目ぎみの双眸が、いくぶんジト目になっていたのを、アーチャーとリインフォースだけが、「ああ……」と生温かい面持ち

で見守っていたとか、いないとか。

桜色のコートを身にまとう栗毛の少女は、手早く刀印で九字を切り、内縛印を結びつつ、続いて不動明王の中呪を唱えた。

「ノウマク　サンマンダ　バサラダン　センダンマカロシャダヤ　ソハタヤ　ウンタラタ　カンマン」

少女の指が剣印、刀印と矢つぎばやに切り替わりながら、タントラが繰り返される。

「オン　キリキリ　オン　キリキリ」

それは物的な攻撃ではないというのに、向けられたセイバーの背筋にぞくりと悪寒が走った。

士郎を人質に取られていた彼女は、それまで相手を警戒しながらも、動かずに隙を探していたのだが――反射的に、飛びのく剣のサーヴァント。

だが神妻の巫女は、逃げることを許さない。

「オン　キリウン　キャクウン」

青と銀を身にまとう少女騎士に、ぴったりと影のごとく張りつく桜色の影。

魔力放出しての移動に追いつくなど、恐るべき身体能力である。

真言は霊縛法を駆使しながら、おのが足にオーラをまとわせるや、銀の具足をまとうセイバーの足を、蹴り潰す勢いでしたたかに蹴撃する。人外のサーヴァントにも引けを取らない動きは、眺めるランサーも目をみはるほどだ。

がいんっ。

「ぐっ！」

予想外の威力を脚部に受けた金髪の少女は、当然ながら体勢を崩した。

「セイバー！」

悲鳴じみた少年の声が、夜に響く。
「ノウマク　サンマンダ　バサラダン　センダンマカロシャダヤ
ソハタヤ　ウンタラタ　カンマン！」
がちり、と動けなくなった体に、剣精の少女は今度こそ戦慄した。

「で、マコト。何したのさ？」
少年のルビーアイが、地面に転がる金髪の美少女を見下ろしている。
セイバーはというと、真言の蹴りを受けたままの、片膝を折って斜めに飛びのいたままの体勢で硬直しているのだ。
「わりとポピュラーな不動金縛り。悪霊なんかの動きを止めて、捕まえるのに便利なんだよね。人間相手でも、やろうと思えばできるし。
『孤月』とかでも良かったけど、私が使うと、威力がシャレになんないから。こっちなら手加減きくし」
ちなみに「孤月」というのは、七季たちの世界に存在する「光覇明宗」の僧たちがあつかう、対象捕縛の結界「朏の陣（みかづき）」と同じものだ。
これは、複数の僧が連携を組み、法力を三日月状に練り上げて同時に放つことで、初めて成立する強力な法術である。
真言が引き合いに出した「孤月」は、その「朏の陣（みかづき）」を、たった一人で張る荒業を指す。
「ただ、『孤月』ってのは『光覇明宗』の僧の中でも、天性の才があるひとしか使えないって法術だったりするんだけどな」
先輩、いつのまに覚えたんですか。
補足するのは、少し離れた場所で、ディルムッドの傍らに立っている七季だ。
夜色の髪をポニーテールに結い上げた黒巫女が、ちょっぴりジト

目で桜色をまとう巫女姫を見つめれば。
「見よう見まねで」
「こんなとき、どうツッコめば良いのか、わからないんだけど」
リドルの嘆息に、七季のデバイスである菫青石（アイオライト）の指輪――「黎明」から、タイミングよく相槌が飛んできた。
「笑えばいいと思いますよ」
さすがオタな巫女さんたちに教育されたデバイスである。
「……君は巫女ではなかったのかね？」
あいかわらずのチートっぷりに、アーチャーも褐色のこめかみを揉みつつ、さらに追撃をかける。
「法術を使えないなんて一言も言ってないけど？」
けろりとした口ぶりでのたまう真言に、「神使（しんし）」の少女が、相槌を打ちながら指折り数えた。
「三蔵、光明さま、烏哭さんに紫暮（しぐれ）さん、孔雀さん……お坊さんの知り合いもけっこういますしねぇ」
「ちなみにアレは魔力じゃなくて、霊力だから、対魔力はあんまり関係ない。そもそもは霊体を縛るもんだし」
「鬼だねマコト」
霊的災害（オカルトハザード）に対処するための、対霊特化スキルは、帝都心霊庁において働くものにとって当たり前のことなのだが、こと英霊であるサーヴァントにとっては、わりあいシャレにならない話であった。
ちなみに、そのころ士郎は、天賦の才を持つ魔術師――もとい、規格外なサーヴァントのマスターである凛から、魔眼による暗示をかけられて、これまたセイバーと同じく、身動きの取れない状態で立ち尽くしていたという。

「ところでナナちゃん、誰『降ろす』の？」
「きょうは月読（つくよみ）さまで行こうかと」

ぱきーん。

そして七季のセリフを聞いた一部の人間が、月の下で青白くフリーズした。

#２８０　フリーズ（後書き）

あとがき

＞ここんとこ長かったので、ちょっと閑話的に、ぼーさんネタを挟んでみました。

オリ主が知り合いに挙げたのは、「最遊記」のぼーさんズに「うしとら」の潮パパンと、「孔雀王」の主人公です。

はたして最後の「孔雀王」を知っている人はどれだけいるんだろーか。

「神降ろし」シーンは冗長になりがちなので、さくっと省略してみたんですが、読みたい方はいらっしゃいますかね？

人数が多いせいか、なかなか話が進まない……。

#281　ブラックメーラー

んっく、んっく、んっく、んっく。
「ぷはぁ」
湯飲みの甘酒を飲み干した黒髪の少女は、それはそれは幸せそうな表情で、にっぱーっと笑って言ってのけた。
「よーするに遠坂さんは、ばっくれてたショバ代ぶんどるまでは、シロくん見逃してやるってことじゃない？」
ミもフタもないまとめかたをした七季に、魔術師の少女はおろか、丹前を羽織った赤毛の麗人、金髪の少女や赤毛の少年までもが、物凄い顔でまっくろ娘を凝視していた。

場所は衛宮邸である。
衛宮士郎、もしくは家人の招きなくしては、部外者が入ることのできない――正確には警報がなるだけなのだが――その家は、変わり果てたとはいえども、英霊エミヤを拒むことなく、彼に率いられた一行を迎え入れた。
当然、この武家屋敷で留守番をしていたバゼットが、気配に勘づいて玄関先まで出てきたが、それも囚われの身となったセイバーと士郎を見れば、下手な行動は取れず。
結果として、勝手知ったる、とばかりに、こまごまと動くアーチャーの案内で、一同は畳敷きの居間に集められたのであった。
そして、いましがた凛から、衛宮士郎に関する処遇が通達されたところである。
この霊地である冬木の「管理者（セカンドオーナー）」たる遠坂家の当主（つまり凛）

の決定はこうである。
　魔術師である衛宮士郎は、長年、滞納してきた「管理者（セカンドオーナー）」に支払うべき上納金を納めるまでは、彼女の管理下に入ること、と。
「だってそれ、『家賃払い終わるまでは、あんた私のパシリね』って意味だろ？」
　こてん、と首をかしげてのたまう黒ずくめの少女は、次いで、からっぽになってしまった湯飲みを残念そうに見つめて嘆息した。
　さきほど飲んでいた甘酒は、アーチャーが空腹の彼女をなだめるために作ってくれたものなので、たぶんおかわりはないだろう。
　寒い中を帰ってきたのは、留守番をしていたバゼット以外は、みんな同じだ。何だかんだ言いつつ、セイバーも士郎も口をつけている。
　あどけない面輪の中、へにょんと眉尻を下げながら、七季は手短に話をまとめるべく、改めて口を挟んだ。
「シロくんは、きりちゃん……じゃない、お義父さんのぶんも含めて、魔術師としての家賃みたいなのを払う義務がある。
　その借りを返すまでは、魔術師としての自由を制限する。ようするに、この聖杯戦争においての勝手な戦闘も許可しない、ってことじゃないのかな」
「……その通りよ」
　むう、とせっかくの愛らしい顔をしかめっつらにして、凛は腕を組んだまま頷いた。
「それは横暴だ……！」
　器用なことに、上半身だけ金縛りを解かれたセイバーが、金糸の髪を振り乱して抗議するが、士郎を挟んで座るバゼットは、難しい表情で考え込んでいる。
「そーは言うけどさ」
　七季は、ディルムッドの膝の上に陣取ったまま、まだ気が立っている青年の手を握ってなだめつつ、さらに言を継いだ。
「じっさい問題、セイバー嬢は先輩にぶっとばされて金縛り中だし、

シロくんは人質にとられて、そっちの美人さんは、まだケガ人みたいだし。

　これを人死に出さずに丸く治めるために、遠坂さんは『聖杯戦争中は遠坂凛を手伝え』って言ってるんじゃないかと思うんだけど」

　だって聖杯戦争って、基本的に魔術師同士の殺し合いなんでしょう？

　まるで小鳥か何かのように、邪気のない、澄んだ黒い目でぶつけられた言葉に、セイバーも士郎もバゼットさえも息を飲んだ。

「このたった一本の命綱をつかむのかどうか、とっとと決めろと言ってるんですけど」

　黒をまとう異邦の巫女は、あえてはっきりと口にした。

　リドルは黒猫形態に戻って、真言の懐でカイロがわりになっているし、凛はその隣で七季の通訳にぷいとそっぽを向いている。

　ディルムッドは、まだ憤りが消えてはいないため、抑えを兼ねて七季が膝の上に座っていて、リインフォースはそんな二人の隣に座って、口出しする気配はない。

　アーチャーとランサーは、長方形であるちゃぶ台の一辺にそれぞれ陣取っている。

　青い槍兵だけが、そこにツッコんだ。

「それ脅迫って言わねーか」

「何言ってるんですか、当たり前でしょう。脅迫以外の何に聞こえるっていうんですか」

　きっぱり。

　間髪入れずの切り返しに、ランサーの精悍な顔立ちが、わずかに引きつったように見えた。

「桜……お前の令呪はほれ、この『偽臣の書』に」

　間桐家の地下深くに存在する、暗い部屋。無数の蟲が蠢くその中

で、陰鬱なしわがれ声が、花の名を持つ少女へと語りかけた。
横たわる彼女の傍らには、紫の眼帯をつけたグラマラスな女性が、姉妹のように寄り添っている。
「しかし良いのか？
桜よ……お前の姉――遠坂の娘もまた、サーヴァントを召喚し……衛宮の倅とぶつかったようじゃが……」
「そ、んなっ！　姉さんが、まさか先輩を！？」
うぞうぞと蠢く闇の中で、しかし少女の菫色の瞳には光が灯る。
それはみずからは気づくことのない、苛烈なほどの意思だ。
「残念ながら、儂の蟲は気取られたようでな、勝負を見届けることはできなんだが……」
蟲を使う、間桐家の当主、臓硯は、脳裏に閃いた眩しさに、ぶるりと一度だけ震えてさいぜんの恐怖を振り切った。
毒蛇、毒虫を食らい尽くす孔雀明王の呪は、彼が煩わしく思う遠坂のものではなく――臓硯が根を張っている、この冬木の地でも見たことのない少女が繰り出したものだった。
穂群原学園の裏手に降臨した、孔雀明王の光は、学園の敷地一帯をあまさず浄化していった。監視のために放っていた、臓硯の蟲も、全滅である。
――また差し向けねばなるまいが……このところ、蟲の減りが早いのう……。
忌々しい。
妖怪あつかいされる間桐の当主は、孫娘へとささやく。
「慎二に任せておいても良いものかのう？
あれは、やる気だけはあるようじゃが、いかんせん、ただのヒト。魔術回路も持たぬ、できそこないよ……のう、桜」
この蟲蔵の主である老爺は、少女を焦らすように言葉を切る。
生臭い、蟲の臭いが染みつく闇の中で、ぎょろりと間桐臓硯の目が、ライダーを召喚した少女を見下ろした。
「聖杯は万能の願望器。お前の望み……ないわけではあるまい？」

#２８１　ブラックメーラー（後書き）

あとがき

＞タイトルの「ブラックメーラー」は「脅迫者」の意。

取り急ぎ、残りのヒロインを出しておきたくて更新です。

校舎裏の雑木林で鳴いていた虫が、臓硯の蟲でした、という。

冬に虫は鳴きませんて。地味な伏線でサーセン。まあ先輩だかオリ主だかに勘づかれて、跡形もなく消されましたが。

月読さまの出番は、また後日。

#282　ある戦いにまつわる記録（前書き）

まえがき

＞そういえば書こう書こうと思いつつ、気がついたら日が過ぎていた夏コミネタをサルベージ。

聖杯戦争にまったく関係のない、オリ主世界での番外編です。

#282　ある戦いにまつわる記録

▼長谷川千雨との打ち合わせ

「ナナ姉……」
「ん？」
ここは、例によって神門家の一室。
正確には、真言用に設（しつら）えられた来客用の部屋――ようするに樹海ではない方の――だ。
黒髪の少女は、背後から呼びかけてくる少女の声に、こてんと顔だけで振り向いた。
ただいま夏コミ本番に向けての、衣装合わせ（コスプレ）の最中である。
千雨は、赤みがかった栗毛を結って、まっくろなスリーブレスのセーラー服に生足姿。本番では、黒の三角ツノにコウモリ羽を背負い、ガーターで吊った黒の腿丈ストッキングを穿くのだが、きょうのところはスルーである。
いっぽうの七季はというと、漆黒のメイド服に着替えている最中なのだが、さっきからどうにも上手くいっていない。
「……カップサイズ、上がってる、よな？　胸囲じたいも」
ぎくんっ。
華奢な撫で肩をはねさせて、ぎぎぎっとぎこちなく振り返る七季の目に、逆光で光る千雨のメガネが映った。
「この乳か、この乳か、えええい、まだ成長期だとおおお！」
もにゅんもにゅんもにゅん。
「ふにゃあああ！？」
少女の指がすっかり埋まってしまいそうな、それはそれはやわらかい、発酵したパン生地のようなHカップバストが、年下の千雨に

よってもみ倒された。
「ふ――……けしからん」
ひとしきり、八つ当たりコミのスキンシップをこなした千雨は、満足げな嘆息と共に、賢者タイムに移行したらしい。
まっかな顔で、弄り倒された胸をかばうように抱えて座り込んでいる黒髪の少女を見下ろし、
「サイズが変わってるなら、しょーがねーな。手直しだ。ナナ姉、いったん脱いでくれ」
ぷりーず。
手を差し出す栗毛の少女を、ちょっぴり恨みがましげな目つきで見上げつつも、もともと半裸に近かった七季は、ごそごそと黒いメイド服を脱ぎ捨てる。
諸事情あって、せっかく千雨が作ってくれたメイド服が着られなくなってしまった責任の一端は、たしかに自分にもあるので、七季は強く逆らえない。
「ううー、メンゴ、ちーちゃん。せっかく作ってくれたのに」
「いやいーけどな。まだ間に合うから。むしろ、きょうわかって良かったよ」
ちくちくちく。
手渡されたメイド服を、その場に用意された裁縫道具で、ちまちまと弄り始める千雨。その手つきは、むしろ職人に近いものがある。
「しかし胸のサイズって、一ヶ月で変わるもんなのかね……」
ぶちぶち言いつつも、手は止めない千雨、マジ真面目。
「ご、ごめんね……ちーちゃん」
へにょん。
もう一度、今度は、にじにじ四つん這いで近寄りながら、涙目で下から見上げられる形で、年上の少女から謝られた千雨は、「ぐぷっ！？」と変な声を上げて顔を押さえた。
――な、ななななナナ姉が涙目で上目遣いで下着姿で、ちょっと赤い顔で「ちーちゃん」って、「ちーちゃん」って鼻から愛情、自

重せよ――ッ！

コスプレが趣味の人間不信ぎみ少女は、もののみごとにテンパっていた。

ちなみに真言の衣装は、神門のお手製で、七季のものとは色違いのメイド服であることを追記しておく。

夏コミに向けた衣装作りは、冬コミあとの時点から始まっているので、今回、アーチャーの出る幕はなかったのだ。

「いやー、眼福、眼福」

ちゃっかりこの楽園（エデン）に、まっくろにゃんこ姿でもぐりこんでいるリドルに、殺意つきの念話が飛んできた。

＜リドル、あとで是非この神社裏に来てくれたまえ。ＯＨＡＮＡＳＨＩをしよう＞

弓兵、アップ始めたようです。

▼黒崎一護の初体験

「……ッ、冗談だろ？」

目の前の駐車場を埋め尽くす人の群れ。

いまだ真夏の炎天下には遠く、午前八時の時点で、このありさまである。

「一般参加者は、始発で来る人もいるしなぁ。今年は、まだ少ない方じゃないかな？」

「マジでか」

スラックスにキャミソール、夏用カーディガンといういでたちの七季に、オレンジ頭の少年は信じられないような心持ちでツッコミ返した。

夏コミにおいて、サークル参加者たちの入場時間は、およそ午前七時から九時。比べて、一般参加者の開場時間は午前十時からだと

いうのに、見渡す限りの人、人、人の海。
彼らは多くが経験者か、その助言を受けたものらしく、腰を下ろすためのシートや折りたたみ式のイスに座り、携帯ゲームや暇つぶし用の何かをいじっている。あるいは、友人なのか、近くのものと話す姿も見受けられた。
「ほら、いっちー。はぐれるとこまるから」
きゅっ。
小さなひんやりした手が、一護の大きな手を握って引っ張っていく。
「帝都心霊庁（うち）に入ったら、どうせ来るはめになるんだから、今年から連れてっちゃえば良いじゃない」
という、ありがたい（？）真言のお達しのもと。
げんざい尸魂界（ソウルソサエティ）で研修中の霊感少年は、夏コミで霊符などを販売する、「帝都心霊庁」のサークル参加に売り子として借り出されたのであるが。
ちょっぴり幸せな気分の後に、一護は、想像もしなかった一般人たちの戦いを目にすることになる。
開戦（かいじょう）まで、あと二時間。

#２８２　ある戦いにまつわる記録（後書き）

あとがき

＞息抜きを兼ねた小ネタです。

聖杯戦争にかまけていて、すっかり夏コミネタの投下を忘れていたので、いまのうちに。

オリ主のおっぱいサイズの変化についてはノーコメントで（笑）。

待ち人で駐車場ひとつ埋まるくらいじゃ、まだ序の口。

全体的にオタクねたでサーセン。

#283　ドラゴン

敗者を支配下に置くのであれば、最初に上下関係をキッチリと叩き込んで、線引きしておくのが肝要である。

この場合、宣言するのは誰でも良い――わけではない。

相手の陣営における、最大戦力のセイバーを、じかに打ち破った真言であれば、その威は説得力に満ちているだろうが、そのぶん余計に警戒を招くだろう。

この冬木の「管理者（セカンドオーナー）」たる凛ならば、最もふさわしいことはいうまでもないけれど、これからも同じ土地に住む魔術師として、凛と彼らが付き合っていく以上、あまり悪印象を抱かせるのは良策ではない。

――それならば。

げんざいディルムッドという英霊を、その膝に乗ることで「抑えている」という視覚的な情報を、相手に焼きつけている七季ならば。

彼を従えているという威を見せ、それでいて、この地に長居することはないから、あとの人間関係は度外視できる自分が、憎まれ役を買って出るべきだろう、と彼女は判断したのである。

――戦力としては、あまり役に立たないだろうしな。先輩みたいに直接戦闘に向かない私なら、セイバー陣営との共同作戦に加わることもないだろうから。

故に彼女は容赦しない。

いまは、ただただ時間が惜しい。

「ちなみにお断りした場合は、こちらも相応の対応をさせていただきますけどね？

端的に表すなら……生命維持装置、点滴、二週間、ってとこですか」

にっこり、ぺっかり。
それはそれは曇りのない、かがやかんばかりの笑顔で、あえて三つのキーワードに絞って提示する黒髪の少女。
相手の想像力を、わざと刺激する手管がいやらしい。
「科学の進歩って素晴らしいですよね？」
魔術師の戦いである聖杯戦争で、あえて科学技術――もっと言うならば医療技術――の賛美に走る、黒衣の巫女に、ランサーだけでなく、士郎とバゼットの表情も引きつる。
セイバーでさえも感じることのできる、得体の知れない威圧感は、黒髪の少女から放たれる霊的なプレッシャーだ。
そして七季を膝に乗せているディルムッドも、その秀麗な魔貌に、だらだらと冷や汗を流し始めたところで。
くきゅるるる～。
イルカの鳴き声に似た、何とも言えない脱力を誘う響きが流れていった。

「わ、私ではありませんよっ！」
穴だらけのジャンパーを着た赤毛の少年と、丹前に浴衣を羽織った美女、ついでに白い髪の偉丈夫からも視線を注がれたセイバーが、白皙の美貌を羞恥に染めて、ぶんぶんと首を振る。
「うん私」
はーい。
ひらん、と白く小さな手が振られる。
黒髪の美青年の膝上から自己申告した七季は、こて、と少しだけ前よりもディルムッドへと寄りかかった。
緊張感ぶち壊しになったため、これ以上の脅迫は意味を成さないだろうと、あっさり切り替えて話題をポイ投げする。
「胃袋が切ない……」

はうぅ。

黒い睫毛にふちどられた大きな目を伏せ、思わしげな声でためいきをつく少女は、見るからに物憂げなのだが、その唇からこぼれるセリフで台無しである。

「な、七季殿っ」

いっぽう、膝の上に主を乗せた緑衣の槍兵は、わたわたしながらも彼女を抱きしめ、隣に座る銀髪の美女――リインフォースを振り返る。

「しょ、食材なら格納しているのですが……」

何でだ、とここに第三者がいたなら間違いなくツッコんでいるだろう、ロストロギアなユニゾンデバイス。

「アチャ男！　大至急、いますぐ、ごはんを作る！　ナナちゃんが暴走する前に！」

わけがわからないなりに「何かヤバい」と直感したアーチャーは、概念武装から赤いエプロンへと武装を切り替えてキッチンへ走る。

「了解した！　リインも手伝ってくれ！」

「は、はいっ？」

チートきわまりない美少女巫女まであわてているのを、ひとり凛は、不思議そうに眺めている。

「何でそんなにあわててるの？」

「……りゅうのニオイがする」

舌足らずなソプラノと共に、やけに底光りする闇色の瞳が、金髪碧眼の少女を映していた。

「ひうっ！？」

彼女にはとても珍しく――すっとんきょうな声を上げて、びくっとするセイバー。

アーサー王たる彼女は、魔術師・マーリンの計らいによって、人の身ながら竜の因子を持って生まれた身。それゆえに本来、彼女は魔術回路を用いず、ただ生きているだけで魔力を生成できるという特異な体質だ。

しかしいっぽうで、竜殺しの逸話を持つ英雄・宝具とは相性が悪いという側面を持っている。

がち、がち、がち。

黒髪にふちどられた、あどけない面輪の少女が、そのおとがいを噛み合わせる度に、硬質な音が響き立つ。

「かむよ？　がちがち噛むよ？」

白い歯の奥からこぼれるソプラノは、子供のように無垢だ。

それが、いっそう違和感を生む。

何故なら、七季の瞳に浮かんでいるのは「食欲」だからだ。

既に真言は、部屋の際――台所と居間の境まで退避していた。

彼女の守護者であり、「旦那」である龍神の気配が、心なしかビチビチ震えている。

かかかかかっ。

衛宮家のキッチンでは、銀の刃がひらめき、食材を切り刻み、火にかけられた鍋がくつくつと湯の沸いた音を知らせ始めたところだ。

ふわん、と。

まるで億劫そうな、ゆったりした動きで、黒衣の少女が腰を上げる。

ゆらゆらと泳ぐ魚さながらのスピードは、決して速くないのに、気づいたら七季はセイバーの前にいた。距離がそれほど離れていなかったのは確かだが。

がぷ。

真珠を思わせる白い歯が、剣精の少女の首筋に噛みついたところで、ぎりぎりアーチャーの鍋が食卓に到着した。

「間に合った……！」

「いや、ちょっとかじられてる」

リドルのツッコミが、ふたたび衛宮家の居間に空しく落ちた。

「ナナちゃんなー。お腹が空き過ぎると、どーも野生に返るというか、本能に駆られるというか――まーよーするに竜の因子があるものに、食欲を示すみたいなんだわ」

ほかほかと温かな湯気をたちのぼらせる食卓で、ふわふわ波打つ栗毛の少女が、渋面でぶっとんだ内容をぶちまけた。

ちなみに美味しい夕餉を目の前にした七季は、あっさり理性（？）を取り戻し、一心不乱に鍋の具をぱくついている。

彼女に歯を立てられて涙目になっていたセイバーも、いまは黒衣の少女と同じく、出汁の香りたつ鍋から煮えた具を取り分けては夢中で味わっている。

「……は？」

目が点になったのは、魔術師だけではなかった。

というより、夕食に夢中な七季とセイバーを除いて、ほぼ全員が真言の話にポカーンとしている。

「霊基ゲノムの解析データによると、龍を喰う霊鳥の因子が、ナナちゃんに入ってるとか、入ってないとか。

うちの龍神様を見たときも、ちょっと目がコワかったからなー。てか、ときどき隙あらば狙ってる気もするし。やっぱ前に白沢（はくたく）の肉を食べちゃってから味を占めたんだな」

「ああ。アーサー王は、竜の因子を持っているからな。それでか……」

「なっ！」

――何故あなたが知っているのです！

納得の声を上げる、白い髪の男に、きついまなざしを向けつつも――セイバーの白い頬は、小動物のように膨らんで、もくもくもくと食材を噛みしめていた。

「やっぱり冬はお鍋だよねぇ。牡蠣うまー」

ほやーん、とひとり平和このうえない面持ちで、まぐまぐ小鉢に取り分けた海老のすり身や白菜を頬張っている七季の頬も、ハムスターみたいになっている。

「七季殿、こちらもどうぞ」
「ん、ディルありがとー」
ようやく落ち着いた黒髪の少女に、ほっと胸を撫で下ろして、いそいそと世話を焼く黒髪の人外青年。
その姿を見るアーチャーの目が「それは私の役目なんだが」と物言いたげだったりする。
ちなみに銀髪の美女は、アーチャーが切ってきた具材を、さっきからせっせと鍋に継ぎ足して、この大人数でも七季や他のものが飢えないように努めている。
「てゆーか、ハクタクって何さ？」
まっくろにゃんこから、またもや少年姿になったリドルが、耳慣れない単語にツッコミを入れた。
「妖怪、ってーか霊獣？
ちょっと牡蠣どこよー」
お玉で鍋底をかき回す真言に、アーチャーが嘆息しつつ別のお玉で取り分けてやる。
「ほら。
……『白沢（はくたく）』というのは、中国に伝わる、人語を解し万物に精通するとされる聖獣の名前だったと思うが」
「え。ナナキ食べたの？」
その聖獣。
リドルもルビー色のまなざしを向けてツッコむと、黒髪の少女はいたってのんきな口ぶりでそのトンデモ内容を肯定する。
「んー？
マガツヒさまんとこに、お手伝いに行ったときにねー。
出してもらったご飯が、白沢（はくたく）のお肉を使った、会席料理だったんだよ。
すっごい美味しかったから、『何の肉ですか？』って訊いたら、白沢（はくたく）だって教えてもらったの」
「神様が嘘つく道理もないからマジだろうしね……」

うっとりとした表情で、回想する七季に比べ、珍しく真言が引きつった笑みを浮かべている。
「たまたま近所で白沢（はくたく）が死んでたらしくて。お肉が手に入ったからって使ったんだって。
やわらかくてさっぱりしてるのに、うまみが濃くてね……牛と鴨と鯨を足して、何か別のもので割った感じ？……あれ、いままで食べた中でもいちばん美味しいお肉だった」
はぅ。
「まあ、あっちもナナちゃんの霊格、手っ取り早く上げようとしたんだろうけど……いや、じっさい霊格は、それのおかげもあって上がったんだけどね！？
それからは、まだ人間でいたかったら、ヤバげなものを食べてくるなと、言い聞かせるはめになったのよ……！」
どいつもこいつも、ひとんちの「神使（しんし）」を食べ物で釣ろうとしおってからに。
「ああうん。ナナキなら、いちばんそれが手っ取り早いもんね」
それにしても、ナナキの胃袋って人外も対応してるのか。

「ごめん遠坂。俺、話についていけないんだけど」
「良いのよ衛宮君。私もついていけないから」
「ところでシロウ。ハクタクの肉というのは、どのような味なのでしょうか？」
「うちの食卓じゃ用意できないからな！？」
「このナベってやつ、うめーな」
「む……たしかに」
「しかしランサー、貴方が何故ここに……？」

#２８３　ドラゴン（後書き）

あとがき

＞シリアス（？）が続いたので、ほのぼのが書きたくなる発作が…

…！（をい）

オリ主の胃袋が、我慢の限界でした（言いたいことはそれだけか）

。

#284　コントラクト

「つーわけで、言峰との契約は切られて、げんざい俺はそこの嬢ちゃんがマスターってわけだ」
「……サーヴァントとの契約を初期化する宝具って……」
わりときがるな口調で明かされた、青い髪の男による説明に、当初、このサーヴァントのマスターであったバゼットは、片手で頭を抱えていた。
そんな赤毛ショートカットの美女を、凛が「そうよねー。ツッコみたくなるわよねー」ってな面持ちで眺めていたり。
いっぽうバゼットは、目の前の「アーチャー」陣営が、とんでもない戦力ぞろいで、おそらくは聖杯戦争における勝利者候補の筆頭であることも理解する。
――確かにこれでは、士郎君の勝ち目は薄い。
相手は、ランサーのサーヴァントをも従え、「契約切りの宝具（仮定）」を持ちうる勢力。そのうえ凛のサーヴァントは、不意打ちとはいえ、白兵戦に長けた槍の英霊を切り裂くほどの腕前を持った「アーチャー」。
見ためは可憐な美少女にしか見えないけれど、「アーチャー」である以上、真言の真骨頂は、よっぽどの例外でもない限り、射出系の武器であるはずだ。ようするに彼女は、まったく手の内を見せていないことになる。
――いや、結界を打ち破ったという「弓」が宝具の可能性もありますが……。
宝具は、サーヴァントという型に押し込められた英霊のシンボルでもある。ただし、それが一つとは限らない。
珍しくはあるけれども、宝具を複数持っている可能性もあるには

あるし、たとえば「石化の魔眼」など宝具並みに厄介なスキルを持っている場合も考えられる。

――それに、向こうは「アーチャー」だけではない……。

ちらり、とバゼットは茜色の目を向かいに走らせた。

いまは黒いシャツ姿になっている白い髪の偉丈夫。そしてこちらも薄手の概念武装から、いつのまにかモスグリーンのセーターという現代的ないでたちになっている、黒髪の青年。こちらはもう一人の「ランサー」だという。

いずれも、「クランの猛犬」と謳われたクー＝フーリンと並んで遜色ない、人外の戦士たちである。

「しかしセイバー。あちらの戦力が大きかったのはわかりますが、いったいどうなったのですか？」

いきなり拘束された金髪美少女と、士郎の姿に、否応なく凛たちを受け入れ、相対するしかなかったバゼットにとって、セイバーが敗北した経緯はまだ説明されていない。

「……それが……宝具を解放したのですが、結果として相殺され、シロウを囚われてしまいまして……」

しゅん。

しんそこ申し訳なさそうにうなだれる白人少女の手には、箸と茶碗がしっかりホールドされているあたり、どうにも緊張感がない。

「――それは。

士郎君、あなたはどうしたいですか？」

セイバーの宝具が相殺されたと言う事実に、数瞬、バゼットは絶句したものの、恩人である赤毛の少年の意向を問うた。

「その前に、だ」

「衛宮士郎に決定をさせる前に、話しておかなければならないことがある」

低い男の声が、団らん中の居間に良く響いた。
しぜんと一同の視線は、灰藤色の瞳――アーチャーの顔に集中する。
「何だよ」
どうしても男に反発心を抱いてしまう士郎が、琥珀の双眸に力を込める。
「衛宮士郎。貴様の父親――否、ここは、あえて『養父』と限定しよう。養父である切嗣は、孤児となった貴様を引き取った。これに相違ないな？」
「……ないけど。何だよ？」
こいつ、何でそんなこと知ってるんだ？
まだ幼さが抜け切れない童顔を、むっとへの字口にする少年へ、アーチャーはさらに言を継ぐ。
「それでは貴様が孤児になった原因が、冬木の大火災――ようするに、十年ほど前の第四次聖杯戦争であることも、間違いないか？」
『――ッ！？』
この言葉に驚愕したのは、士郎だけではなかった。
セイバーが、バゼットが、そして遠坂凛までもが、一様に目をみはって言葉を失う。
「何で、そのこと……いや、十年前の火事が、聖杯戦争によるものだって……！」
「え……衛宮君が……？」
「まさか、シロウが……そんな……！？」
「あなたは何を知っているのですか？」

嘆息がこぼれた。
「衛宮士郎。貴様は、疑問に思わなかったのか？
何故、結界が反応しなかったのか。

この衛宮家には、衛宮切嗣による結界が張られていたはずだ。大したものではないが、害意があるものが侵入すると、警報が鳴る程度の。

そして、それは家人が――この場合は、貴様だが――相手を招くことによって、その結界は反応しなくなる。おそらく、こういうものだったはずだ」

「そ、うだけど……あんたたちが、結界を破ったんじゃないのか？」

けげんな面持ちと、戸惑いを多く含んだ声で、少年はアーチャーに答える。

「では、重ねて尋ねるが。

バゼットといったか？　魔術師とお見受けする。君は、この屋敷に張られている結界が破られたと感じたかね？」

「……いいえ」

こちらも、不思議そうに眉をひそめて、茜色の目をアーチャーに向ける丹前姿の美女。

魔術には詳しくないセイバーもまた、けげんそうに聖緑の目をしばたたいている。

「話を進めるぞ。ようするに、結界は反応しなかった。何故か？

私もまた、この屋敷の家人と同じであったからだ」

「まさか――っ」

はっと士郎がぐりぐりと大きな目を、いっそう大きくみはる。

「あんた切嗣なのか！？　死んだはずだと思ってたのに、そんな変わり果てた姿に……！」

「こんなときに特大のボケをかますなたわけがあああああっ！！」

ぼぐしゃあっ。

わりと遠慮のない英霊の拳は、ちからいっぱいのツッコミと共に、赤毛の少年へと突き刺さった。

「ああっ、シロウ――っ！」

「だ、だってあんた、どっかじーさんと似てたから……」
あいたたた。
幸い、畳の上だったからか、ひっくり返ってもさほど頭をぶつけることもなく（ただしアーチャーの鉄拳によってたんこぶはできていたが）、ほどなく士郎はむっくりと起き上がった。
赤毛の少年を、彼の従者であるセイバーが寄り添い支えるさまが、仲睦まじい。
「意外と丈夫なのね、衛宮君」
それを見つめる凛は、呆れたようにツインテールの頭を振りつつ、青い目を瞬いた。
「……たわけ。馬鹿は死んでも治らんというが、生前からこれでは……ああ、衛宮士郎は馬鹿だったな」
磨耗してなお――その「正義の味方」という夢の、根幹にあった養父に、似ていると言われて、ほんの少し言葉に詰まる錬鉄の英霊。
「馬鹿馬鹿連呼するなっ！」
「馬鹿に馬鹿と言って何が悪い」
子犬のようにキャンキャン噛みつく士郎と、それをあしらう大型犬のように意に介さない褐色の偉丈夫とのやりとりに、やんわりとした響きのソプラノでツッコミが入る。
「おーい。話を進めなくて良いのかー？」
ひらひらと白い手を振るのは、くりっとした黒い目が小動物的な、ポニーテールの少女である。
「失礼、マスター。馬鹿があまりにも馬鹿なので、つい手が滑ってしまってな」
はあ。
「こんの野郎」
いっぽう、これ見よがしに嫌味ったらしく嘆息する褐色の肌の男に、あどけなさを残す士郎の、眉間のしわがますます深くなった。
「少年ー。眉間のしわがアーチャーみたいだぞー？」

のんきな口調で声をかける七季へと、赤毛の少年は振り向いて「誰がっ」と噛みつきかける。けれども、それが校舎裏で妙な現象を起こした少女だとわかると、ぱちぱち琥珀の目を瞬いて、彼女へと問いかけた。

「あのさ、さっき学校で……君がやったの。あれ、何だったんだ……？」

「んー」

答えても良いんだけど。

ちらん、と七季は、白い髪をいただく従者を振り向いてうかがう。

「マスター、こいつは放っておいてかまわん。どうせすぐにわかる」

「ん。りょーかい。て、ことでごめんな？

あと、ちょっとまぎらわしいから、シロくんって呼んでも良い？」

小鳥のように首をかしげる黒衣の少女に問われて、士郎はしぶしぶと引き下がった。アーチャーの物言いは、いちいち少年の癇に障るが、見知らぬ少女に八つ当たりするような士郎ではない。

「あ、ああ。好きに呼んでくれてかまわない」

「ありがと」

にぱ、と邪気なく微笑まれて、つられた士郎もへら、と笑う。愛想笑いのようなものだが、ふだん学校では仏頂面しか見せない少年の、珍しい表情に、ちょっとだけ凛の表情が拗ねたものに変わった。

「へーえ、ほー」

黒髪の少年が、その端正な面輪をニタニタとした笑みに変えながら魔術師の少女の横顔を観察する。ルビーのような紅い眸がニンマリ弧を描いて細くなった。

「なるほどねえ」

「ちょっと、何よリドル」

「べっつにー」

かたや黒髪に金の双眸がうるわしい槍兵は、手が空くとセイバーを睨み始めるので、こちらは「ごはんは美味しく食べるもの」をモ

ットーにした七季が、
「はい、ディル。あーん」
と、従者の気をそらしたりしている。
「な、七季殿っ」
「あーん？」
「おーおー。見せつけてくれるねえ、色男」
他にもランサーの軽口もからかいを含んた口調で茶々を入れ、さらに場をなごやかにしたり、と、今宵、衛宮邸の夕餉は人外入り乱れるカオスである。
「あ、リイン、ポン酢取ってー」
「ああ。ほら真言」

「結論から言うぞ。私の名はエミヤシロウ。
そこの馬鹿の可能性の一つであり、世界と契約した男のなれの果てだ」

#２８４　コントラクト（後書き）

あとがき

＞タイトルの「コントラクト」は「契約」の意。

ランサー兄貴のかるい現状説明と、アーチャーの事情説明（ネタバレ）。

あとダメット、もといバゼットさんもいるのに真名バラして大丈夫か、というツッコミもあるでしょうが、記憶操作やセルフギアス・スクロールの一つや二つ、このメンツなら用意できるでしょう。めいびー。

何か色々めんどくさくなったので弓兵ぶっちゃけた（待て）。

メリットというか目的は、衛宮士郎の異常性にツッコミ入れつつ、かるくボコって監禁して、聖杯戦争に参加させないため。

さすがに殺すまでは行かないけれど、またぞろ突っ走って英霊になられたらイラッとするからという超私情。いちおう善意（ぇ）。

凛ではなく、オリ主がマスターのため、事情さえ話せば、彼女は賛成してくれるだろうという信頼の下に行動している弓兵です。

腹黒主従……。

#285　レクチャー

『……え？』

ふたたび凍りつく、士郎、セイバー、バゼット、そして凛。

青い髪と武装が、蛍光灯の下ではやけに目につくランサーも、士郎とアーチャーを見比べたっきり、首をかしげて動かない。

「あー、やっぱりかー」

かたや、ナチュラルに受け入れたらしく、うんうん頷く黒髪の少女をはじめ、異世界トリップご一行は、きわめて朗らかな会話を続けている。

「だねー。似てる似てるとは思ったけど……どーやったらこれが、こんなにイヤミったらしく可愛くなくなっちゃうのよー？」

「悪かったな。可愛くなくてけっこうだ」

ふわふわ波打つ栗毛を結った美少女巫女の物言いに、半眼でアーチャーが返せば。

「しかしまあ、豆柴がドーベルマンに変わるくらいの変化だよねえ。ここまでくると進化？」

「褒めているのかね、それは」

「そっちの判断に任せるよ。ドーベルマンが気に食わないなら、シベリアンハスキーでも良いけど？」

切れ長のルビーアイでニヤニヤと笑うリドルが、軽口を叩きながら「ねえ？」とリインに話を振る。

「そう……だな。まあ面影は……髪を降ろしたアーチャーなら、あるのではないだろうか」

闇の帝王と同じ深紅の目が、あかがね色の髪の童顔少年と、白い髪をいただく精悍な相貌の偉丈夫を見比べて、おずおずと返す。

口元に片手を当てた銀髪の美女は、しかし右手でお玉を操り、七

季の取り皿に、新たな具をよそってやるのに忙しそうだ。
「どうぞ、七季」
「ありがとー。リイン」
わあい、と顔をほころばせつつ、なおも食事に勤しむ黒髪の少女。
七季が、むぐむぐと小さな口を一所懸命に動かして食べているさまに、微笑ましげな面持ちのディルムッドが、その美貌を蕩けんばかりに緩めている。
「未来の英霊とは珍しい。これも奇縁というものか」
「って納得!?
そこあっさり納得できるのかよ?!」
まっさきに正気を取り戻し――たかどうかは、定かではないが――ツッコんだのは、赤毛の少年であった。
「俺とコイツ似てないし!
それに豆柴って何だよ!? 俺のこと!?」
「豆柴が不満ならポメラニアンでも良いけど。毛色的に。
まさか自分がドーベルマンだとは思ってないよね?」
叫ぶ士郎をおちょくるリドルは、直情な少年をにこやかに転がして弄んでいる。
「魂見れば、そっくりだしねぇ。シロくんとアーチャー。見間違えようがないよー」
リインに取り分けてもらった分を飲み込み終わった七季は、黒髪にふちどられた面輪を、ほやほやと和ませたままでトンデモ発言をぶちかまし。
「だよねー?
ポメラニアン可愛いよポメラニアン。帰ってもふもふしたいわー。
でもシロちゃんは、豆柴か柴犬じゃない? こう……ちょっと凛々しくも抜けてるところが」
あ、ナナちゃんお茶ちょーだい。
何気にド失礼なセリフを口走っているのは、天下無敵のチート巫女こと、真言である。

「豆柴も柴犬も可愛いですよねぇ。私、好きですよ」
はいどうぞー。
「マスター。豆柴とは、「犬種」として認められていないのが現状だ。登録上は「柴犬」として登録される。
まあ、普通の柴犬よりも小型の柴犬を掛け合わせての繁殖を試みているブリーダーもいるようだがな」
そして律儀に、いらんツッコミというか、世間話的なフォローを入れてくれる、黒いシャツの偉丈夫。
「ナナちゃんさんくすー。アチャ男こまかい」
「あ、俺も茶ぁくれ」
ペースを取り戻したランサーも、空になった湯飲みを七季へと差し出した。
「って説明しろよ元凶！」
すかさずアーチャーへ噛みつく士郎。
赤毛の少年魔術師は、大きな琥珀の目をせいいっぱい吊り上げているのだが、彼を挟んでいるバゼットとセイバーが、七季の差し出した携帯電話の豆柴画像に、もののみごとに注意を持っていかれているため、悲しいかな、援軍はいない。
「ほらこれ、悟空んとこの豆柴」
「あらやだ可愛い」
ついでにのぞき込んだ凛も、青い目を丸くしている。
「確かに……毛色はシロウに似ています」
「ちょっとわかりますね」
「話が……話が進まない……ッ」
「強く生きろ、坊主」
ランサーの励ましに、思わず目頭が熱くなった士郎だった。
だって涙が出ちゃう。男の子なんだもん（何）。

「えーっと、よーするにアーチャーは、紆余曲折を経て、戦地を点々としながら人助けの旅をしてたんだけど、その途中で『世界』にだまくらかされて契約しちゃって、英霊になったひとなんだ」

で、働いてみたらブラック企業だった、みたいな？

いろいろはしょった七季の説明に、またしても頭を抱える、凛と士郎。

それとは別に、何やら心当たりがあるのか、玲瓏な面輪を真剣に引き締め、考え込んでいるセイバー。

当人であるはずのアーチャーは、少女が口にした説明に関して、特に異論はないらしい。

「ほー。そういうなり方もあるのかね」

かたや、何やら興味深げに、黒髪の少女の言葉を聞いているのは、青い髪の槍兵である。

「って、あんたは違うのか？」

ランサーの反応に、けげんそうな目を向ける士郎。ぱちぱちと琥珀の目を瞬く少年に、俊足の英霊は「まあな」と応じて気さくに付け足した。

「俺は、気づいたら『座』にいたクチだからよ。初耳っちゃあ、初耳だな。

他の『俺』は、どっかで聞いたことがあるのかもしれねえが」

「……？

それだと、あんた……ランサーが何人もいるみたいに聞こえるんだけど」

少年の疑問に、隣り合っていたバゼットが噛み砕いたフォローを入れる。

「士郎君。『英霊』というのは、生前において偉大な功績を上げた英雄が、その死後、信仰の対象となったものです。分類としては、精霊に近い。これは覚えていますか？」

「あ……うん。サーヴァントは死者だって」

――あれ？

「でも確か、セイバーは生身だって言ってなかったか？」
だから彼女は、サーヴァントであるなら当然の霊体化ができないのだと。
「シロウ……私は、死の寸前で『聖杯を手にすること』を求めて、世界と契約しました。
生きている状態のままで、さまざまな時空間に呼び出されています。願い通りに聖杯を手にした暁には、世界との契約が達成されたことになる。
聖杯を手にしたところで本来の時間に戻り、その聖杯によって願いを叶えた後、ようやく死を迎えることができる。そこで初めて、正式に英霊となるのです」
マスターの問いかけに、ためらいがちではあるが、自分の事情を説明する、金髪の少女。
そこに黒髪の少女がふたたび口を開く。
「アーチャーもそんな感じだったって。
ただし、アーチャーが望んだのは聖杯じゃないし、死後なったのも、『抑止の守護者（カウンターガーディアン）』だったんだけど」

抑止の守護者（カウンターガーディアン）。
それは人類の守護精霊であり、最高位の「人を守る力」であるという。
しかし、その実態はというと、「滅びの要因」を排除する――殲滅兵器に他ならない。
これに該当するのは、英霊の中でも信仰の薄い者だとか、あるいは、「世界」と契約したことで力を得る代償として、己の死後を売り渡した元英雄だと言われている。
彼らの本体は、「英霊の座」と呼ばれる、高きところにある無色の力である。それらは人の世の滅亡の可能性が生じた、あらゆる時

代・場所に応じて、その分身が世に下る。
ただし。
彼らが動くという事は――既に悲劇が起きてしまった後であることを意味する。
しかるに、決まって地獄と化した地に呼び出されることとなるのが必定といえる。
そして、「霊長」という全体を救うためには、その惨状が、それ以上広がらぬよう、その場にいた者達を切り捨てる――つまり、善悪を問わず、すべて抹殺せねばならない。
「守護者」になったが最後、その個人の意思を剥奪され、永遠に人間の為に働き続けることになる。いわば「世界」の奴隷であり、不都合があれば呼び出され、えんえんと後始末という虐殺を課されるだけのもの。
人々を虐殺することで、人類全体を破滅から救うという「守護者」。
それは、人を救いたくて「世界」と契約した男を、魂すらすり潰すような絶望に叩き込むものだったのだ。

「ッ何故そんなものがここに――っ！」
「うわ！」
魔術師であるバゼットは片手で跳ね、士郎を抱き込んで飛びすさるも、もう一人の魔術師である凛は、既に彼から話を聞いて知っているため、ためいきじみた声をかけた。
「大丈夫よ。アーチャーはとっくに『守護者』から降りてるから。ところで衛宮君て、ほんとへっぽこなのね。せめて英霊くらいは知っておきなさいよ。聖杯戦争の参加者（マスター）でしょ？」
「う。わ、悪かったな」
赤毛の美女に抱きしめられたまま、憧れの少女にへっぽこ呼ばわ

りされて、地味に落ち込む少年。青春である。
この場に、横島忠夫少年がいたら「もげろ」と呪詛を込めて呟いたかもしれないが。
「ともかく。英霊っていうのはね、基本的に、生前は英雄だったものなの。
まあ中には、本人からしてみれば、ふつうに一生を終えたつもりでも、周囲の人間が、その生き様を神格化して、英霊となったのとかもいるらしいけど。
英霊は、死亡した時点で「完成」しているから、それ以上の成長は有り得ないわ。
で、さっきランサーについて衛宮君がした質問の答えは、ここからね。
英霊の『本体』は、時間軸からは外されて、英霊の『座』にいるの。「こちら側」の世界で活動しているのは、その触覚たる分身のような物。ふつう、用が済んだらそのまま消滅するって言われてる。
ただし聖杯なら……サーヴァントの受肉もできるかもしれないわ」

#285　レクチャー（後書き）

あとがき

＞タイトルの「レクチャー」は「講義」の意。

まあ、Ｆａｔｅ原作知識がある読み手さまには蛇足かもしれませんが、かるく説明会。

主に主人公（士郎）のための。

抑止の守護者のヤバさを説明せんことには、たぶん話が進まないので。

#286　キャリーオン

「死者である英霊だけど、受肉すれば現界はできる。だから、聖杯を望むサーヴァントの中には、新たな生を望むものもいるって話よ」
凛の言葉に、栗毛の美少女が青い髪の男を振り向いた。
「ちなみにランサーの望みは？」
「俺は、強い奴との死合いができればそれで満足だ」
「気持ち良いくらいに脳筋な答えだね」
リドルの毒舌も華麗にスルーしてのける兄貴、男前である。
そこに七季が、手のひらを向けて隣に座る美男子を指し示す。
「こっちのディルは、第四次聖杯戦争に召喚されたサーヴァントだったんだけどな。
彼の望みは『忠節を全うすること』であって、聖杯じたいに用はない。
聖杯戦争においては、あくまで参加したマスターの望みである、聖杯を『主君に献上すること』だった。
ただしそれは――ディルのマスターだった魔術師が、他のマスターに殺されたことで、けっきょく全うできなかったわけだけど」
ディルムッドの金睛眼が、ぎりりとした歯噛みの音と共に、きつく金髪の少女を睨みつける。
かつて彼のマスターであったケイネスと、その婚約者・ソラウを陥れ、ついにはディルムッドじしんをも絶望の罠にはめた、衛宮切嗣のサーヴァント――セイバーを。
「ま、さか……あなたは、あのランサーじしん、なのですか……！？」
あまたの兵士を率い、数々の戦場を駆け抜けたはずの騎士王。その背中に、名状しがたい戦慄が走った。

「ディル」
二騎のサーヴァント――否、もはやディルムッドは、その枷から解き放たれているのだが――の間に張り詰める空気へ、穏やかで慈しみのこもったソプラノが、ぽんと割って入る。
「悪いけど、そうなったからこそ、いまこうしてディルがここに……私の従者になってるんだから、私はそれを悪く言えないんだ。ごめんな？」
小さな白い指が、きゅうと男の手を引いて、そのまま心臓までも持っていくように錯覚させた。
「――七季殿」
とたんに青年の目から憎悪も殺気もかき消える。ただ、困ったような、それでいて喜びと苦さがないまぜになった顔つきで、腕の中に小柄な少女を抱きしめる魔貌の騎士。
彼女が苦しくないように、それでいてすがりつくように抱擁してくる従者の長身を受け止めながら、七季はぽんぽんと子供をなだめるようなしぐさで、ディルムッドの背中を叩いて、ちらりともう一人の従者へ目配せした。
自分が彼をなだめているから、話を進めてくれ。
そういう視線だ。
――了解した。
こちらも灰藤色の目で応じるアーチャーは、さらに言葉を綴る。ちくちくと胸に芽生えた苛立ちには見ないふりをして。
「まあ、私が『抑止の守護者（カウンターガーディアン）』から足を洗った経緯は、省略させてもらう。凛には惚気るな、と言われてしまったしな。
それでだ。
英霊と、『抑止の守護者（カウンターガーディアン）』――いわゆる『守護者』に関しての最低限の知識は理解したか？　衛宮士郎」
「え、と……何とか。
つまり『守護者』ってのは、人を守るために人を殺し続けなきゃならない、ってことか？」

「それだけ理解しておけば、まあ良い。ろくでもないものだ、ということをな」

ろくに知識のない少年へと、アーチャーは刻みつけるがごとく、言葉を重ねた。

「そして『守護者』は、どんなに後悔しようと、辞めることはできない。ふつうはな。私の場合は偶然も偶然、万どころか那由他に一つ、あるかどうかの奇跡だ」

だから。

「衛宮士郎。貴様は、決して『世界』と契約するな。これはエミヤシロウとしての忠告だ」

士郎は、そのあまりの真剣さに息を呑んだ。

鷹のように鋭い、鋼色の目。褪せた白い髪に、鍛え抜かれたとわかる、逞しい体躯。焦げたように色の黒い総身は、少年の理想のごとく長身で覇気に満ちていた。

かくありたい、と士郎が望むような力強い姿は、性格こそ気に入らないけれど、ないしん憧れなかったといったら、嘘になる。

「何で……あんたは、そんなことを言うんだ？」

――まるで俺の理想みたいなのに。

悔しげな声音で問いかける赤毛の少年に、アーチャー――英霊エミヤは、きっぱりと言ってのけた。

「貴様と私は別物だ。もはや私は、成り果てた存在として固定されている。

だが。

貴様は別なのだ。たとえ私が、『守護者』から解き放たれても、貴様が、私とは違う『英霊エミヤ』になるかもしれん。そうなったら、目も当てられんだろうが。

『エミヤシロウ』は、自分の幸福を望めない。考えられない。い

や、考えられなかった、というべきか。
しかし、私とお前は別人だ。私はとっくに死んでいる。お前はまだ、生きている。ならば――他人の幸福を願って、何が悪いのだ？
少なくとも、不幸になれ、とは思えんよ」
凝るほどの濃さであるが故に、かえって透き通るまでになった苦さを含んだ、それでも根底に優しさのある低い声が、士郎だけでなくセイバーや凛、バゼットたちの耳へ染み込んでいく。
座からすくい上げた少女たちの、温かさと慈しみと優しさを溺れるほどに注ぎ込まれて、ひび割れた心の渇きを少しずつ癒してきた、元「守護者」の言葉は、静かだけれど胸に響くほど重かった。
「……ねえ」
しぜんと静寂に満ちた居間に、小さなはずの少女の声が、やけに響いて聞こえた。
「自分の幸福を望めない、って……どういうこと？」
ずいぶんためらったのだろう。それでも凛は、青い目を士郎と、そして別物ではあるが根源を同じくする英霊へと向けた。
「冬木の大火災――衛宮士郎は、あれの生き残りだ。あのとき、心が一度死んだ。あらゆるものを見捨てて、なのに自分だけが助かった。
トラウマ、ＰＴＳＤ、サバイバーズ・ギルト……該当しそうな単語は色々とあるがな。けっきょく『エミヤシロウ』は、他人の不幸が我慢できないのだよ。
お前も冬木の、あの火災を生き残ったというのなら、思い当たることがあるだろう？」
「――っ」
士郎はとっさに反論できなかった。
――だって、そうだ。

自分は生き残ってしまったのだから。
命を粗末にはできない。償わなければいけない。みんなが幸せになれば良い。幸せにしたい。その手助けを。
彼を助けてくれた切嗣のように、誰かを助けて。
――自分が救われたような、笑顔を。
脳裏に浮かんだものに、ぎくりとする。どうしてこの男は、こんなに士郎のことを知っているのか。まさか本当に、彼は自分と同じような経験の持ち主だというのか。

「だからな凛。この馬鹿は、放っておけば、すぐサーヴァントに向かっていって殺されるぞ。
たとえば、自分のサーヴァントを庇うために飛び出したり、敵マスターの命を助けようとしてな。私が言うのだから間違いない。
『エミヤシロウ』は、そういう馬鹿なイキモノなのだよ。嘆かわしいことにな」
嘆息するように吐き捨てる偉丈夫は、「やれやれ」と言いたげな面持ちで、さっきからずっと目を逸らさない。
士郎もまた、目を逸らさなかった。
「好き勝手言うな！
俺だって身の程くらい――」
「わきまえていたら、こうはならん。馬鹿は死んでも治らない。わきまえず、運命すら捻じ曲げて、そして外道に落ちた――私は良く知っている」

――そんなのは、ずるい。
少年の胸に、どうしようもない苛立ちが湧いた。

自分の知らないことを、暴き立てる男は「エミヤシロウ」のことなどお見通しとばかりに言い当ててくる。

一方的に言われっぱなしなのは、腹立たしかったし、それにアーチャーの物言いは、遠まわしな彼じしんへの卑下に聞こえたからだ。

それは、とても何だかムカついた。

「お前は！」

ぎっと士郎は琥珀の目をきつく吊り上げて、未来の英霊を見据えた。

「お前は後悔してるのかよ！　頑張ったんだろう！？」

まだ大人になりきれない少年から見ても、驚くほどの違いを生むくらい。

老人でもないのに白く褪せた髪。本来の人種とはかけ離れてしまった褐色の肌。まるで一振りの剣のように芯の通った、揺るぎない体躯。

英霊となるほどに――険しい道を歩き続けてきたに違いない男。

そして学校の裏手にある、雑木林で見た、雨あられと降る石つぶてや土砂の弾丸を――それはセイバーの放った斬撃による余波だったのだが――防ぎきってみせた、幻想のような七枚羽の盾。

そこに込められた魔力と神秘に、あれが投影魔術によるものであることを、他ならぬ「エミヤシロウ」である少年は、見るだけで理解していたのだ。

何故なら、解析の魔眼は、投影を得意とする――ひいては、あまたの剣を内包できる固有結界「無限の剣製」を孕む可能性を抱いている――彼にとって、必須なのだから。

宝具すらも投影可能とする、その精度。そこには想像を絶するような鍛錬の影がうかがえた。

――いまの俺には、からっぽのガラクタしか投影できないのに。

目の前の男は、その境地にたどり着くまでに、どれだけの修練を必要としたのだろう。

「頑張った奴が、頑張ったぶんだけ報われないなんて、嘘だ。そん

なのは納得がいかない！
頑張ったやつは、そのぶんだけ幸せにならなくちゃ嘘だろう！？」

「エミヤシロウ」以外には、ずいぶんな論の飛躍に聞こえるだろう、その叫びは、どこか産声のように感じられた。
赤子のように無垢で、懸命だからだったのか。それとも、少年の、泣きたくなるような訴えが込められていたからなのか。
「衛宮士郎」
低い声が、男とは違う、あかがね色の髪を持つ少年を呼ばわった。
「私はな、救われたのだ」
「え……？」
ぱちん、と大きな琥珀の目が瞬いた。
同時に灰藤色のまなざしは、ちらりと横に滑る。それに合わせて、従者の腕から抜け出していた少女が、ちょこんと改めてアーチャーの隣に陣取った。
大きな手のひらと褐色の指が、七季の華奢な肩を抱き寄せた。
「私は、彼女に――七季に救われた。世界の奴隷として、囚われていた『座』から。
そして従者となり、新たな道を踏み出し、さまざまな出会いをふたたび重ねている。分不相応なほどに、幸せだと、言ってしまおう」
男もまた、どこか泣きたいような響きを言葉の裏に隠していた。
――ああ、こいつも。
それは「エミヤシロウ」だけがわかる共感だった。
自分の幸せが、申し訳ないような、そんな感じ。それを男も感じているのだと、何故か少年には理解できた。できてしまった。
そのとたん士郎の中では、すとん、と何かが収まったのだ。腑に落ちた、とでも言おうか。
――そうか、幸せなのか。

申し訳ないと、思うほどに。
――それなら良い。
衛宮士郎は目の前の男が気に食わないし、絶対に似ていないと主張する。けれども。
他人である以上――自分ではない以上――士郎は、この男の幸福を、喜べる。
「良かった」
そのとき少年は、心からの笑みを浮かべていた。
頑張り続けた男が、幸せを見つけたことが、単純に嬉しかったからだ。
「話はまだ終わっていないぞ」
「え？」
きょとん、と首をかしげる士郎に、錬鉄の英霊はふてぶてしいまでの笑みを向けて、こうのたまった。

「そんなわけで、私は彼女を手放す気はないのでな。お前がうっかり英霊の座に捕まっても、私のように救いの手があるとは考えるなよ。わかったら『世界』との契約などというヤクザなものに手を出すな」
お前にやる七季（マスター）はない。
「って惚気かよ！」

#２８６　キャリーオン（後書き）

あとがき

＞「キャリーオン」は「（中断したあと、または困難にもめげずに）〈～を〉続けていく、進める」「（～し）続ける」の意。

また口語では「泣いたりわめいたりする、取り乱す」という意味もあります。

エミヤーズ独壇場。殺し合いさせるわけにもいかんので、いちおうの落としどころというか収まるところを目指して書いたらこうなった。

違和感あったら申し訳ない（土下座）。

原作でもアーチャーは士郎にアドバイスしているお人よしですから、忠告ぐらいはしてもおかしくないかなと。

でも士郎がアドバイス聞かずに参戦しようとしたら、ボコって監禁コース（待て）。

シリアスを書こうとすると、頭が疲れます……（へたれ書き手）。

※サバイバーズ・ギルト

：戦争や災害、事故、事件、虐待などに遭いながら、奇跡の生還を遂げた人が、周りの人々が亡くなったのに、自分が助かったことに対して、しばしば感じる罪悪感のこと。

「サバイバー」（ｓｕｒｖｉｖｏｒ）は「生き残り・生存者・遺族」を、「ギルト」（ｇｕｉｌｔ）は「罪悪感」を意味する英語。

ナチスによるホロコーストを生き延びた人々などに見られたケースが有名。

また、広島や長崎の原爆投下で生き残った高齢者が、当時を回想するとき「あの状況で見殺しにするしかなかった」「助けられた命を見捨てた」など証言する場合も、このサバイバーズ・ギルトに当

たる部分がある。

心的外傷後ストレス障害（ＰＴＳＤ）をおこして心理的な援助を必要とする場合もある。

（参考／ウィキペディアより）

#287　ウィル

間桐桜。

この名を眺めるとき、少女は何ともいえない気持ちになる。

かつて彼女が「遠坂桜」だったことを知るものは、どれほどいるだろうか？

多くとも、片手で足りる数なのは間違いない。

つまり、かつて桜は遠坂凛の妹だった。

しかし、いまの桜は間桐慎二の義妹――否、間桐の「胎盤」なのである。

間桐の――魔術師の「マキリ」に養子として迎えられながら、彼女はろくな魔術を使えない。

間桐家へ次女をやった遠坂時臣が、そうと望んだような、かがやかしい魔術師としての栄達など、どこにもない。

桜に施されたのは、魔術師となるための教育ではなく、その体から間桐に、「マキリ」になじませるための調教であり、肉体的な改造であった。

ただ、次の「マキリ」を産むための体――それを望まれたのである。

しかし、それだけであったなら――まだ桜は救われたかもしれない。

じつは魔術師たちの政略結婚は、さして珍しいものでもない。

幼い桜が知る由もないことではあったが、仲睦まじい時臣と葵は魔術師の家庭としては上等の部類だっただけなのだ。

多くの女性魔術師は、第四次聖杯戦争に参加した、ソラウのように、恋も知らないまま、他家に嫁ぐ――あるいは婿を迎える。

だが、そこで円満な関係を築くことができるのは一握り。

魔術師の家は、一代ではたどり着けない「根源の渦」に到達すべく、より優秀な後継者を残すことが、おのが研究の次に急務なのだから。

だが、げんざい桜の体は、間桐の当主――慎二でも、その父親でもない――彼女いわく「お爺様」の「エサ」となっていた。

その身に淫虫を棲まわせ、彼女の生み出す魔力は、死なない程度に喰われ続けている。

誇張でも何でもなく「エサ」であった。

桜の伴侶となるべく定められた慎二には、魔術回路がない。

聖杯を作り上げた魔術師の家系である「御三家」――「マキリ」、もとい間桐の第一子に生まれようとも、どれほど書斎にこもって魔術書を読み漁ろうとも。

どんなに狂おしく望もうとも、桜が生まれたときから持っている魔術回路を、彼は持たないし、魔力を行使することもできない。

桜が望むことすら考えなかった、間桐の後継者となることも。

できないが故に――慎二は狂乱した。

間桐の魔術属性は、「吸収」である。

そして、魔術師ではなくとも、魔術師の血を引く慎二には――行使できなくとも――常人よりは魔力があるはずなのだ。

「兄、さん……」

魔術師は、バゼットが士郎にそうしたように、体の交わりと、そ

の快感によって魔力の受け渡しを可能とする。
「そういや桜」
ぎしっ。
「衛宮のヤツ、さあ」
ぎしぎしっ。
「インフルエンザ、なんだって」
ぐしゅ。
「笑えるよ、なあ」
はあっ。
「あんな、バカが、風邪、引く、なんてっ」
ぎしっ。
「――っ！」
どく、ぶる、どぷっ。
「っ……でも」
きょう何度目かの、身のうちに放たれたものを、受け止めた衝撃に意識を遠く飛ばした少女は、少年の言葉を聞くことはない。
「二週間くらい寝込んでりゃいいんだ、あんなバカ」
ぱたり、とシーツに落ちた滴は、汗か、涙か。
「本当なら、良いのに」

イリヤスフィールは、待っていた。
誰をと言われれば、衛宮士郎をだ。
自分の父親である衛宮切嗣を横取りした少年のことを、銀髪の幼女は、詳細に調べさせていた。
彼のことなら、身長から体重、スリーサイズだって知っている。
学校もクラスも出席番号も、穂群原学園で「ブラウニー」なんてあだ名をもらうくらい、お節介で、色々なものを直すのが得意だってことも。

ここ一年くらいのことに限られるけれど、イリヤスフィールは、その調査結果を何度も何度も読み返したものだ。

何故ならば。

あの冬の――アインツベルンの城には、魔術書以外の娯楽なんて、これっぽっちもなくて、ほとんどそれが唯一の「外」の情報で、楽しみだったから。

もちろん「外」に出てからは、自分の手の者や使い魔によって、じかに監視した。

だからイリヤスフィールは、彼がセイバーを召喚したことも（偶然だけれど、前もって忠告がてら促した甲斐があったというものだ）、魔力不足だったことも、拾った女魔術師に押し倒されたことも知っている。

衛宮家の結界は、かつてその場所を拠点として使ったアイリスフィールを覚えていたのだろう。

母である彼女と、ある意味「同じ」であるイリヤスフィールも、アイリスフィールと認識したのか、彼女の使い魔に反応することはなかった。

ともあれ。

いつまでたっても、監督役がいる「教会」に行かないことにもヤキモキしたし（正直、あんな神父は潰してしまってもかまわないと彼女は思っている）、一人で外出したときも、よっぽどイリヤスフィールは注意しようかと思ったくらいだ。

でも、彼が出かけたのは夕方だったし――夜とカウントしても良いんじゃないかとイリヤスフィールは思ったが――いきなりの襲撃というのは、淑女にはふさわしくない。

彼女は、アインツベルンのマスターであるのだから、堂々と、おのが最強であるバーサーカーを伴って宣戦布告するべきだろう。

いかんせん、バーサーカーは目立ちすぎるし、結界を張るにしろ、もう少し夜遅い方が、魔術師たちの戦いにはふさわしい。

だが、そうこうしているうちに、士郎は学校でうっかり別のマス

ターと遭遇。セイバーを令呪で召喚した。
イリヤスフィールは、もちろん凛についても調べさせていた。
そもそも聖杯を作った「御三家」――アインツベルン、マキリ（間桐）、そして遠坂。この三つの家系の血を引くものは、優先的に、令呪を割り当てられる。聖杯戦争のマスターとしての参加権を得られるのだ。
誰が選ばれるかは未定だが、候補者がわかっている以上、それを真っ先に調査するのは当然の戦略である。
ちなみにイリヤスフィールが士郎を調査したのは、衛宮切嗣の感情絡みの他に、彼の側には、必ずや、聖剣の鞘――かつてアインツベルンがアーサー王の触媒として用意した――「全て遠き理想郷（アヴァロン）」があるに違いない、と目されていたからである。
閑話休題。

ともかく、イリヤスフィールは、凛に士郎は殺せないと踏んでいた。
遠坂家の関係者を洗ったイリヤスフィールから見れば、他家にやられた妹――桜に、いまも恋々と心を残しているような、甘さを持った少女である。
そして衛宮士郎は、その桜の心のよりどころ。
それだけでも「甘い」凛からしたら、手にかけづらい存在なのに――士郎は、ここ数日の監視と、一年分の調査結果という書類だけしか知らないイリヤスフィールでも、思わず脱力するようなお人よし（カ）で、へっぽこ魔術師（バ）なのだ。
正直イリヤスフィールは、士郎の修行風景を見て――淑女にあるまじきことだが――怒鳴りつけたくなったものだ。
あれを実践する士郎も士郎だが、教えていたのだろう切嗣には、何を考えていたのかと、がくがく揺さぶって問い質してやりたい。

彼女の腕力では心もとないから、バーサーカーで。
それくらい、少年の修行は、命の危険を伴うものだった。
魔術回路を一から作るなんてこと、ふつうの魔術師ならやらないのだ。最初だけならまだしも。
それをバカ正直に続ける士郎の愚直さは、切嗣への盲目的な信頼がうかがえて、イリヤスフィールはちょっと切なくなったのだけれど。
ふたたび話がずれたので、元に戻そう。

案の定、凛はサーヴァントに「士郎を殺せ」とは命じなかった。
凛のガンドは、少年の手足を狙っていたし、士郎がセイバーを喚んだ以上、彼が死ぬ確率は低くなった。セイバーの性格上、たやすくマスターに見切りをつけたり裏切ることもないだろう。
だが、そこでイリヤスフィールの使い魔は、いったん破壊されてしまった。
最後に見えたのは、赤い球体だったから、誰かの魔術か使い魔だろう。不覚だった。
少しあわてて、彼女が近くに待機させていた予備の使い魔を差し向けると、結界が張られていた。
士郎にそんな芸当はできないから、凛たち一行によるものだろう。
ここで乱入すべきかどうか、彼女は悩んだ。
士郎の命はイリヤスフィールのものだ。
父である切嗣を、少年は彼女から奪ったのだから。償いをさせなければならないし、その権利があるとイリヤスフィールは信じている。
――バーサーカーなら。
彼女が恃みとする、最強のサーヴァントなら、令呪であの場に送り込むことができるかもしれない。

だが、つかのまイリヤスフィールが迷っている間に、事態は激しい変化を見せた。

差し向けた使い魔から感じ取るのは、結界を隔ててなお、圧倒的な魔力の奔流。

それは、アーサー王の宝具「約束された勝利の剣（エクスカリバー）」の解放を知らしめていた。

気がつけば、セイバーと士郎は凛たちに捕われ、イリヤスフィールは令呪による移動ではなく、車に乗って城から出た。

凛が、わざわざ捕えた以上は、士郎を殺す気はないと見て良いだろう。

セイバーの令呪が刻まれている腕を切り落とすことさえしていないのだから。

あるいは命を助ける代わりに、セイバーの令呪を円満に譲渡させるつもりかもしれない。

ある程度、心霊医術に造詣のあるものならば、持ち主の同意があれば、令呪の移植も可能だという。

――まあ、そんなことはどうでも良いわ。

イリヤスフィールにとって用があるのは、聖杯戦争のマスターと、衛宮士郎である。

彼がセイバーを、アーサー王を召喚したからには、間違いなく「全て遠き理想郷（アヴァロン）」は士郎の手の中にあるはずだ。

アインツベルンのマスターとして、彼女はそれを取り戻さなければならない。

もちろん他のマスターは打倒する。

衛宮士郎がマスターでなくなったとしても、どちらにしろ彼には用事があるのだから、イリヤスフィールは少年を城に連れて行く気まんまんである。

そんなことを考えながら。

「もー、まだ着かないの！？」

銀髪の幼女は、紅玉の目を吊り上げて、白いメイド服の従者に八

つ当たった。
「申し訳ありません、イリヤさま」
「ごめん、イリヤ」
最新式のカーナビを搭載された車は、さっきから冬木の市中をうろうろしている。ふだん機械と縁の薄い生活をしている魔術師の城の住人は、やっぱりカーナビという文明の利器のあつかいにも戸惑っていた。
訂正しよう。
イリヤスフィールは、待っていた――ではなく、彼女たちは迷っていた。

そして話は、ふたたび衛宮邸へと戻る。
「さて。これで必要な話は半分ほど終わった」
白い髪の偉丈夫は、そう切り出すと、傍らにちょこんと座ったままの少女を見下ろす。
「マスター。頼めるかね？」
「うん」
こくんと頷いた七季は、前もって頼まれていたことを、自らの口から宣言した。
「七地七季、これより衛宮切嗣の『神降ろし』を執り行います」

#287　ウィル（後書き）

あとがき

＞タイトルの「ウィル」は「意思、意志力」「願望」「（～する）意地、固執」「遺言」などの意。

あちこちに捏造を混ぜ込んでいます。いつものことですが（こら）。

イリヤが使い魔で監視していたとか、調査していたとか。

まあ、やっていてもおかしくないとは思います。少なくとも間桐と遠坂のことくらいは調べるんじゃないかと。

ちなみにイリヤの使い魔を破壊したのは、アーチャーの放っていたサーチャーだったり。

オウフ。まじめに書くとタマシイが出そうに（待て）。

いちおう桜たちはシリアスに書いてみましたが。いちおうな。

#288　チャンネル

「ん――？」

あ、チャンネル違った。

――ただの霊魂じゃなくて、神様の階層だった。

ちょっと首をかしげつつも、無事に「神降ろし」を終えた七季は、降臨し実体化した黒髪の男を見上げて、ぺこりと頭を下げた。

「こんばんは。おいでいただき、ありがとうございます。ええと、こちらは『ジゴロの神様』になった衛宮切嗣命（のみこと）です」

ちなみに「命（みこと）」は尊称である。

そして黒衣の少女から紹介された言葉に、ぴきこんとその場の半数が固まる。

――ジゴロ？

――え？

――神様？

――マジで？

青い目や金の目、茜色の目に琥珀の目と、色とりどりのまなざしが、白黒しながら、死者復活にも近い奇跡を目の当たりにしている間。

「いやいや、こちらこそ。巷で評判の子から、お呼びがかかるとは思わなかったよ。お招きに預かり、ありがとう」

なごやかに、朗らかに、人外たちのやりとりは進んでいく。

「いやあ、士郎も久しぶり」

無精ひげのまばらに生えている顔に、へらんと胡散臭いほどにこやかな笑みを浮かべた男。

切嗣は、生前、ついぞ着ているのを見たことがない、白い狩衣を身にまとって立っていた。

「じいさ……」

パワーボム（※1）からの不知火（※2）、その後、モルモン・シクル・バックブリーカー（※3）という肉体言語的なプロレスなOHANASHIを経て、第四次聖杯戦争の顛末は、当事者であった切嗣じしんの口から語られた。

「じーさん丈夫だな。ケガしないのかよ？」

「これでも神様だからねえ」

ちなみにディルムッドは当初、セイバーとにわかタッグを組んで切嗣にプロレス技をかけるほどハッスルしていたので、七季が強制的に彼女の「中」へ「ハウス」させた。

そういうわけで、霊体にとっては、落ち着く環境に他ならない「器の巫女」の中で、槍の英霊は話を聞かせることになっている。

閑話休題。

「そんな……！」

切嗣の話を聞いて誰より落ち込んだのは、「聖杯」という願望機に、故国の救済を望んでいたセイバーだ。

すべての願いを「破壊」という形でしか叶えることのできない欠陥。

そして一度、確かに衛宮切嗣は、他でもない「聖杯」に選ばれたのだということ。

それでもなお――彼は、それを拒んだのだ。

二度と争いのない、誰も傷つくことのない、完成された理想郷として「聖杯」が提示したのは、切嗣と、愛娘と、妻だけを残してすべてを滅ぼすという結果。

彼はそれを拒んだ。

世界を救うために望んだ聖杯は、世界を滅ぼす可能性を秘めたモノだった。故に切嗣は、それを許すことはできずに破壊を選択した。

彼は世界を救うために、「この世全ての悪（アンリマユ）」を孕む、穢された聖杯を打ち砕かなければならなかったのだ。

けれど。

アインツベルンの駒として、真相を――聖杯戦争の、真の目的とシステムを知らされていなかった切嗣は、そこでさらなる犠牲を目の当たりにする。

「願望機」たる「聖杯」は、魔術師たちの願う「根源への渦」への足がかり――世界の「外」への突破口を開くためのもの。

しかし本来、無色の力であるはずの魔力は、内包される「この世全ての悪（アンリマユ）」によって汚染され、すべての生命を焼き裁く破滅の力としてあふれ出し。

幼い士郎たちの住んでいた町を、焼いた。

「だからセイバー。僕は君に『聖杯』を渡すわけにはいかなかった。否、誰であってもだ」

キリッ。

さっきまで金髪の少女と、黒髪の美青年に、二人がかりでボコられたとは思えないシリアス顔で告げる切嗣の面差しは、鋭かった。

そうしていると、なるほど確かに、士郎の言葉通り、どこかアーチャーと似通っている面がある。

「じーさん……」

養父のそんな顔は、数えるほどしか見たことのなかった少年は、何かを堪えるような面持ちで、それでも人外と成り果てた切嗣の顔を見上げている。

「まさか、たった十年で、ふたたび『聖杯』が起動するなんて思っていなかったよ……。

ごめんよ、士郎。僕の考えは甘かったようだ。あと二十年か三十年すれば、『大聖杯』を封印できたんだけど、ほとんど『使われ』なかったぶん、『聖杯』の魔力が早く満ちてしまったらしい」

切嗣は、数年をかけて地脈に手を加え、レイラインの一部にコブが生まれるように細工をしたのだ。

いずれ地脈から集まるマナが、長い時間をかけて、切嗣がいなくとも溜まってくれる。そうすれば、限界を超えたときに破裂して、『大聖杯』を葬ってくれるように。

「あの、『大聖杯』って？」

魔術師である凛が、おずおずとした口調で問いを投げる。

さすがの凛でも、熾烈を極めた聖杯戦争の勝利者――それに限りなく近い――を相手にするには、色々と足りない。ために、気後れするのだろう。

「君は……確か遠坂の子だったね」

切嗣の烏色をしたまなざしが、観察するようにツンテールの少女を撫でた。

「御三家の君が知らないというのは意外だが……遠坂時臣は、残さなかったのかな。あるいは彼も知らされなかったのか」

しばし考え込むような呟きが落ちる。

「――ああ失礼。

冬木の『聖杯』には、二種類あってね。術式を担当する『大聖杯』と、それを制御する『小聖杯』。

残念ながら、あのとき僕が壊したのは『小聖杯』の方なんだよ。たとえるなら、『小聖杯』が『リモコン』で、『大聖杯』が『テレビ』といったところかな。

リモコンだけあっても、テレビは見られないよね？　でも、テレビ本体があるのなら、型に合った替えのリモコンを用意すれば、テレビは見ることができる。そういうものさ。

本体といえる『大聖杯』を壊さなければ、何度でも聖杯戦争は繰り返されただろう」

だから。

「僕は『大聖杯』を破壊するための細工をしたんだ。なのに、時が満ちる前に、ふたたび聖杯戦争が起こるとはね。僕もつくづく、運のない」

やれやれと、おどけたように肩をすくめてみせる男の目は、けれ

ども深い自責に塗り潰されていた。
「士郎――そちらの大きい士郎にも、頼みたいことがある」
切嗣が顔を上げる。
「じーさん。わかってるって。その『大聖杯』を壊せば良いんだろ？」
「それもだけれど実は――」
ぴんぽーん。
夜の衛宮邸に、訪問者を告げるインターホンが鳴り響いた。

#288　チャンネル（後書き）

あとがき

＞オウシット。予告した部分まで書けなんだ。続きは明日にでも！

タイトルの「チャンネル」は「水路、海峡」「テレビ放送におけるチャンネル　」の意。

また、「外交、政治、経営などにおける交渉窓口、交渉パイプ」なども指す。（例：交渉チャンネル、外交チャンネル）

ふつうの霊だと思って探したら、切嗣は神様になってましたよ、という。

「ジゴロの神様」はネタです。比較的新しく、本人はそのつもりではなくとも、周りの信仰によってなったクチ（笑）。

※1）パワーボム：プロレス技の一種。相手の頭を自分の股に差し込み、相手の胴に両腕を回してクラッチする。

そこから背中を大きく反らせる反動を使って、一気に相手をリフトアップ。そのままクラッチを切らずに、マットに後頭部から叩きつけフォールを奪う。

※2）不知火：プロレス技の一種。相手の首を肩口に抱え込んだまま、対角線上のコーナーポストに走り、体を反転させた反動で相手の後頭部をマットに打ち付ける技。

主な使い手は、丸藤正道、ブライアン・ケンドリック。アメリカでは「スライスブレッドＮＯ．２」と呼ばれる。

※3）モルモン・シクル・バックブリーカー。

：プロレス技の一種。うつぶせに倒れた相手の腰に側面から自らの両脛を押し付け、手で相手のあごと右足首をつかんだうえで後方に倒れ、相手を弓なりの状態に持ち上げ、腰を痛めつけるという大技。ドンレオ・ジョナサンの得意技で、弓矢固めの超変形型。

書き手はプロレス技については詳しくありませんので、ネットの情報サイトを参考まで。

#289　フィギュア

「何だ、生きていたのか衛宮切嗣」
それにしても似合わない格好だな。
夜間の訪問者は、橙に近い、くすんだ赤毛をポニーテールに結った美女だった。
まだカセットコンロに載ったままの鍋が鎮座する居間に、煙草の煙がゆるりと立ちのぼる。彼女いわく「台湾の職人が作ったまずい煙草」だというそれは、けれどもけだるげな面持ちの美女には似つかわしい小道具だった。
「君は元気そうで何よりだよ、橙子君」
苦笑を浮かべる切嗣は、「それで」と美女の携えてきたトランクへ目をやる。
「依頼を果たしに来てくれたのかな」

蒼崎橙子。
最高位の人形師として、魔術師協会の「封印指定」を受けているため、逃亡中の魔術師である彼女の顔を、「封印指定」の「執行者」であるバゼットが知らないはずはない。
だが、さすがの彼女も、今宵、立て続けに起きるハプニングに、すぐには行動を起こせない。
「魔法使い」である妹・青子とは犬猿の仲である橙子だが、魔術師としての実力は、「破壊」に特化した妹を、はるかにしのぐトップランクに位置する彼女のことだ。
その実力を認めた魔術協会から、最高位の魔術師の称号として「

赤」を授けられているほど、と言えば、わかるだろうか。
――はたして、衛宮切嗣は、そんな彼女に何を……？
ないしん首をかしげるバゼットの前で、とびっきりの人形師は、この場に並ぶメンバーをためつすがめつ観察していた。
「ああ。依頼がてら、聖杯戦争を見物――としゃれ込みに来たんだが、それにしてもまあ、面白そうなのがそろっているな」
上着を脱いでくつろいだ橙子は、パンツルックと、白い開襟ブラウスの胸元に、小さなペンダントがのぞいている。
「え、と……もしかして、じーさん……いや、親父の葬儀のときに、来てくれたお姉さんじゃないですか？」
違っていたら、すみません。
そう言いながら、新たな赤毛の美女を見上げる士郎に、橙子は「ほう」とその目を向けた。
「覚えていたとはな。よしよし」
「うわぷ」
白い手を伸ばし、ぐりぐり少年の赤毛頭を撫でくり回す人形師へ、金髪の美少女や、「執行者」たる手負いの美女、他にもツインテールの美少女が、何ともいえない表情を浮かべていたりする。
「ホムンクルスは短命だと聞くからな。妥協はしないが、これでもできる限り急いだんだ」
「ああ……じゃあ、やっぱり届けに来てくれたんだね」
「引き受けた依頼だからな。最後まで面倒はみるさ」
どうやら切嗣と橙子は旧知の間柄のようで、その口調は気心の知れたものだった。
ぴんぽーん。
そして、待ち人が来る。

#289　フィギュア（後書き）

あとがき

＞イッツ捏造。

橙子さんが切嗣と知り合いで、イリヤのボディを依頼。

短いですが。閑話あつかいとして見たってください。

橙子さんの容姿は、原作と文庫版で違うので迷いましたが、文庫版の赤毛ポニテを採用しました。

水色ショートヘアはＥＸＴＲＡにも登場するので、ならばと聖杯戦争編では赤毛の方にしてみた次第。

Ｆａｔｅ／ＥＸＴＲＡキャラがいるオリ主の世界には、水色ショートな橙子さんが出てくるかもしれません（待て）。

タイトルの「フィギュア」は「人の形を模したもの」の意。

読み手さまからいただいたコメントの、各種パターンが面白かったので、悪ノリしてみたともいう（をい）。

目指せ予想のナナメ上ッ！（自重せよ）

#２９０　シャイニングウィザード

「ごめんくださーい」
「？　誰だろ」
「ああ士郎。僕が出るよ」

そして再会は両者にとって衝撃的だった。
「やあ、イリヤ」
「キリツグ……っ！？」
幼い銀髪の妖精の、ルビー色に瞬く眼（まなこ）が見開かれる。
踏み出す足音はダンスのステップさながら、どこまでも優雅かつ、かろやかで。
門構えから、まっすぐ駆け寄ってくる愛娘に向かって、かがんだ男の両手が開かれるの目がけて。
父の膝を踏んだイリヤスフィールは、みごとな膝蹴りを繰り出したのだった。
「シャイニングウィザードっ（※１）！？」
ごめし。

きらきらと、かがやくような銀髪を長く伸ばしたイリヤスフィールの、身長は百三十三センチ。
百五十四センチと、高校生にしては小柄な七季よりも、さらに華奢なため、どこからどう見ても幼女である。

そのイリヤスフィールは、げんざいバーサーカにフルボッコにされたというのに、けろっとした顔で復活してのけた父親を、憎々しげに睨みつけていた。

「キリツグの裏切り者っ！」

団らんの場であった衛宮邸の居間に、鋭い童女の糾弾が響き渡る。

「じーさん、この子はいったい……？」

「イリヤ……」

士郎が戸惑いがちに養父へと琥珀の目を向けると、白い狩衣が似合わない男は、あれだけ殴りかかられても（バーサーカをけしかけたのはイリヤスフィールだが）、幼い娘に向ける表情は、あくまで優しくいとおしげだった。

「お母様とイリヤを裏切って、男の子に走った変態だってお爺様が言ってたもの！」

どんがらがっしゃんっ。

その場に居合わせた全員の、はるかナナメ上を行くイリヤスフィールの叫びに、こけるもの、食器をひっくり返すものが続出したため、話し合いは一時、ブレイクタイムを挟むことになったのだった。

「アハト翁……あの野郎……人の娘に何てことを吹き込みやがった……」

「そっか。じーさん、娘がいたんだ……奥さんも？」

「シロウは知らなかったの？」

海の向こうにいるだろう、アインツベルンの当主に向かって、呪いと祟りを差し向けんとする「ジゴロの神様」をよそに、その実の娘と義理の息子は、いつのまにか親睦を深めていたりした。

「うん。てっきり切嗣は独身だとばっかり……聞いたこともなかったし」

「そうだったんだ。じゃあシロウはキリツグに騙されて結婚したの

ね？」
　何やら誤解が深まっている不穏な会話に気づいて、切嗣は、あわてて二人の間に割って入る。
「結婚って何！？
　士郎は僕の養子であってだね！」
「お爺様は、同性愛の夫婦は、法律で認められていないから、多くの場合、養子縁組して家族になるんだって言ってたわよ？」
「ピンポイントに正しい知識だな」
　はたで聞いていた七季は、思わずツッコミを入れていた。ちなみに彼女の従者であるアーチャーは、とんでもない誤解の内容に、頭を抱えてそのへんでうずくまっている。
　そんな彼に代わって、凛とリインフォース、それからセイバーや七季たち女性陣が、ぱたぱたとあとかたづけに追われていた。
　ちなみにバゼットも片づけに参加しようとしたのだが、片手の彼女を、みんなが押し止めて座らせたことをつけ加えておこう。
「それにシロウは、お掃除も料理も得意で、まるで庶民のお嫁さんみたいだって聞いたわよ？」
「え、と。そりゃ家事は得意な方だけどさ。じーさん、そーゆーの苦手でだらしなかったし、俺がやるしかないっていうか……って、どっから聞いたんだ？」
「えーと。ショウテンガイの人たちからの情報だったはず」
「あー……子供のころは言われたな、そういえば。
　違うからな？　冗談だぞ？　じーさんの嫁じゃないからな？」
「もっと言ってやって士郎！」
　ちょっと泣きが入った声で、お願いする父親へ、イリヤスフィールは白い目を向ける。
「シロウは年端もいかないころに引き取られたんだもの。キリツグに丸め込まれて騙されているかもしれないわ。
　正直に言ってちょうだいシロウ。私はシロウの味方よ？
　誰にも言っちゃダメって言われて、教えられたこととか、された

こととかない？」
「え」
ちょっと口ごもる士郎の脳裏には、養父から教えてもらった魔術の修行が頭を過ぎる。
「ほらご覧なさい。訴えたら勝てるわ！」
「誤解だからあああああっ！！」

「ナナちゃん、ナナちゃんっ！　ホンダムだよ！　あれ欲しいっ！」
栗毛の美少女が指さす先には、巌のような筋肉を誇る、灰色の巨人。イリヤスフィールのサーヴァント、バーサーカーである。
「先輩違いますから！　落ち着いてください！」
いっぽうのオタな巫女さんコンビ――略して巫女ンビは、阿呆な会話にかまけていた。
「鎧ないですから。むしろむき出しですから。ホンダムじゃありません！」
黒髪の少女のセリフに、側で聞いていた凛が首をかしげて「ホンダム」について尋ねる。
「『ほんだむ』ってなによ？」
本ダム？
機械に疎い魔術師の少女は、当然ながらゲームにも疎い。「ホンダム」をダムの一種かと、けげんな顔をしている。
「本田忠勝のことです。詳しくは戦国ＢＡＳＡＲＡを参照のこと」
本田忠勝自体は、鹿の角をあしらった兜と、「天下三名槍」の一つ「蜻蛉切（とんぼきり）」がトレードマークとされる、古今無双と謳われた戦国武将である。
が。
某格闘ゲームにおいては、モビルスーツを髣髴とさせる全身鎧と、オプションの「プラズマ発生装置」、武器のドリル、あげくに上司

である家康の、「忠勝、発進」というセリフといった、もろもろの要素から、ガンダムあつかいされる。
故に――プレイヤーの間でついたあだ名が「ホンダム」なのである。
閑話休題。

けっきょく、離れ離れになっていた――というか死別していた――親子の間に横たわる溝は深く、まともな会話がなりたつまでに、三十分ほどの時間を要したことだけ、述べておこう。

「にゃ？　にゃにゃ？　にゃんにゃんにゃん」
「■■■■■■■■――」
「にゃーにゃーにゃ。にゃんにゃん」
「■■……■■■……」
そのあいだに、にゃんにゃん鳴く七季と、人語にはならないバーサーカーの間で、何やら意思の疎通が交わされていたことは蛇足である。
「それは大変でしたねぇ……親心というものですか」
「話通じてるッ！？」

#２９０　シャイニングウィザード（後書き）

あとがき

＞タイトルの「シャイニングウィザード」は、もちろんプロレス技の名前です。

きらっきらしている魔術師のイリヤも、それっぽいなーと。

イリヤに植えつけられていた誤解に切嗣涙目。

「ショタコン疑惑」は例によって捏造ですが、裏切り者のことをアインツベルンのじい様が、良く言うはずがない（笑）。

※１）シャイニングウィザード

：武藤敬司の、相手の片膝に飛び乗っての膝蹴り。片膝立ちになっている状態の相手に仕掛ける。

相手に向かって走り込み、自分の左足で相手の立ってる方の右足に飛び乗り、自分の右足で横から薙ぎ払うように相手の頭に膝蹴りを見舞う。

この相手の足を踏み台にする通常の形以外にも、色々なものを踏み台にして（この場合、相手の状態は膝立ちとは限らない）この技を見舞う場合もある。

▼踏み台の例

・レフェリーの背中
・自分のタッグパートナー
・相手のタッグパートナー
・コーナーにもたれかかっている相手
・トップコーナー上から飛ぼうとしている相手

など。

#291　ハニードワーズ

かくかくしかじか。まるまるうまうま。
「……キリツグの事情はわかったわ」
イリヤスフィールはぐったりと突っ伏し、かつての凛と同じように、テーブルと仲良くなっていた。
「でも、本当は迎えに来ててくれたっていうの、嬉しかったな」
ようやく誤解が解けたことに、切嗣も嬉しそうに相好を崩して愛娘を見つめる。
「イリヤ……」
男の黒い目と、イリヤスフィールの紅い目が、心を通わせるようにぶつかった。
「キリツグは『聖杯』を――『大聖杯』を破壊するのね？
『この世全ての悪（アンリマユ）』が実体化するかもしれないし、穴が開いてしまえば『抑止』が降臨するから」
愛娘の言葉に、真剣な面持ちで切嗣が頷く。まっしろな狩衣が、いまいち似合っていないものの、そのさまは十分な威厳に満ちていた。
そこに、けげんな顔をした士郎が、疑問の声を上げる。
「あの、『抑止』って？」
「さっき説明した『守護者』のことだ」
それに答えたのは、かつて「守護者」であった錬鉄の英霊である。
「『守護者』が降臨すれば、最低でも町ひとつ皆殺しだ。『冬木』という土地ごと抹消されかねん。
『この世全ての悪（アンリマユ）』が実体化すると人類が滅亡するからな。より多くの被害を防ぐために、効率の良い犠牲を選ぶ。『守護者』とは――『抑止』とはそういうモノだ」

「なっ！？」
アーチャーの低い声で紡がれた内容に、驚きと憤りをない交ぜにした声で、赤毛の少年が目をみはると同時。
「冗談じゃないわよ！」
凛が、青い目を炎のごとく燃え上がらせて息巻いた。
「私の冬木でそんなことさせるもんですか。衛宮君、あなたにも手伝ってもらうわよ！」
「ああ！　もちろんだ遠坂！」
少女の勢いに釣られて、こちらも力強く頷く士郎。
「というわけで、衛宮君は私の保護下・監督下ね！」
「あれ？」
「衛宮君がへっぽこではいえ、『最優』のサーヴァント、セイバーは十分に戦力になるわ！」
よっしゃあ！
穂群原のミス・パーフェクトのしたたかさと雄々しさに、憧れを打ち砕かれた少年が、ちょっぴり「そりゃへっぽこだけどさ……」とうなだれていると。
「ちょっとリン！
シロウは私の義弟よ。勝手なこと言わないで！」
イリヤスフィールが、銀の眉を吊り上げて異議を挟んでいた。
「何よ。衛宮君は、そっちのお父さんの分も含めて、ずいぶん上納金を滞納してるのよ。きちんと返済するまでは、当然でしょ？」
つんとそっぽを向きつつ、ツインテールの黒髪を片方、しゃらりとかき上げて優雅に言ってのける青い目の少女。
「……良いわ。義弟のものは姉のもの。シロウのそれは、私が負うわ！」
「シロくん、シロくん。お風呂借りても良いですか？」

あれ、長引きそうですし。
「ん？　ああ」
ヒートアップする魔術師少女ふたりを尻目に、にじにじ近寄ってきたのは、しっぽのように黒髪ポニーテールを揺らした七季だった。
「けど、まだ沸かしてないぞ？」
いまから沸かして来ようか？
「それは大丈夫です。アーチャーいるし、こっちで何とかしますから」
「……ああ、なるほど」
姿は違えど、元は同じ「エミヤシロウ」である彼がいれば、衛宮邸の設備を使うのに、何ら支障はないらしい。
「良いですか？」
ことんと首をかしげて見上げてくる、小動物じみた黒めがちな瞳に、士郎はあっさり許可を出した。
ツッコミどころは多々あるが、よそのうちで風呂を借りる七季に警戒をしろと言うのも何だか馬鹿馬鹿しくて、セイバーとバゼットは沈黙を選んだ。
「それならかまわないぞ」
「ありがとうございます」
ひょこりと頭を下げた少女は、てこてこと居間を出て行く。
そのあとを、銀髪の美女と白い髪の偉丈夫、そしてまっくろにゃんこがついていった。
居間に残された「アーチャー」組は凛と真言、ランサーだけだが、こちらは戦力的にも十分だろう。
「セイバー」陣営のバゼットとセイバーは居心地が悪そうだし、士郎も少女たちの争いには口を挟みかねている。
「バーサーカー」陣営のイリヤスフィールは、ただいま絶賛口論中だ。バーサーカーも動きを見せる様子はない。
ひとり聖杯戦争に直接は参加していない（今回の、と注釈はつくが）切嗣は、のんびりとお茶をすすって「士郎も僕の息子だなあ」

などとのたまっている。

それから三十分後。

「お風呂いただいてきましたー」

ほわほわした面持ちで、ひょっこり居間に七季が顔を出したとき、まだ少女たちの口論は続いていた。

「ああ、お帰り」

背後からの声に、ひょいと士郎が振り返る。その先には、丁寧に乾かされてはいるものの、潤いの残る洗い髪にふちどられた、あどけない面輪の少女が、くつろいだチャイナ風パジャマを身にまとった姿だった。

肩が冷えないようにか、彼女は温かそうなショールを羽織っている。足元も、ふわふわもこもこのスリッパ。衛宮邸にあるはずのないそれは、いったいどこから出したのだろうか。

胸に黒猫を抱いている七季は、まるで最初から親戚の家に泊まりに来たかのように、違和感がない。

――ずいぶん準備がいいなあ。

呆れるよりも感心するところが、お人よしの士郎である。

「シロくんも入ってきたらどうですか？」

彼のすぐ後ろに、ひょいと少女が膝をついて話しかけたため、ふわんとボディソープの香りがほのかに士郎の鼻をくすぐった。

「でもなあ……俺が原因みたいだし、あれをほっといて、ってのも……」

困り顔で答える少年は、「そうだ」と傍らの少女たちを見やる。

「セイバーとバゼットさん、先に入ってきたらどうだ？」

バゼットさんも片手じゃ不便だしさ。

「シロウ！　貴方を置いては行けません！」

「そうですよ士郎君！」

サーヴァントがいるのに危ない！
女性二人は、目を吊り上げて少年ののんきさを叱る。それが彼を案じるからだということは、さすがに士郎でもわかるので、首をすくめつつも少年は言い分を引っ込めた。
「うーん……でも、そろそろ九時だぞ？」
「んー……じゃあ、せんぱーい、遠坂さんとアインツベルン嬢も、お風呂に入ってきたらどうですかー？」
口論でヒートアップ中の魔術師たちに、恐れ気もなく声をかける七季。猛者である。
『は！？』
「話すだけなら明日でもできます。でも……若さとお肌に関わる睡眠時間は、有限なのですよ？」
「うっ！」
いくら魔術師でも乙女心は持っている凛が、あからさまに反応する。
「わ、私は気にしな……」
「アインツベルン嬢。汗を流さないまま、お父上と一緒にお休みするつもりですか？
気にしないなら、それはそれでかまいませんけど」
「あぅっ！？」
ピンポイントに痛いところを突いてくる黒髪の少女に、イリヤスフィールも口ごもる。
「そうだねー。久しぶりだし、一緒に寝ようかイリヤ」
「うー……」
赤くなって、ちらちらと切嗣をうかがう童女の様子は、どこからどう見ても、父親に甘えたいけれど照れている娘にしか見えない。
「それに留守番だった私と違って、先輩や遠坂さんはバトってきた後でしょう？
いくら冬で、夏よりは臭わないとはいえ、さっぱりしたいんじゃないかと思うんですけど」

「そだね。あったまりたいなー」
寒いの嫌い。
「ぐむむむ……」
あっさり同意する、栗毛の巫女さんと、そんな真言をサーヴァントに持つ凛が、低くうめいて拳を握る。
「セイバーさんも霊体化できないんなら、お風呂は入ったほうが良いですよ。気持ち良いですし」
そこで、きょう宝具を使ったことを思い出した剣精の少女は、はたと「魔力供給」の手段について思い至る。
戦闘をこなしたのは、真言たちだけではない。現界を保てる程度には魔力があるとはいえ、宝具を使ったセイバーにとっては、戦闘には心もとない量しか残っていないのだ。
ちらちらと、こちらは少年を気にした金髪の少女が、
「……一理あります」
と生真面目な表情で呟いた。
いくらサーヴァントとはいえ、セイバーも女性。肌を重ねる前には、身奇麗にしたいと言う気持ちくらい、きちんとある。
「私は、いちおう遠坂さんとこの陣営ですしね。いまのところシロくんをどうこうするつもりはないですから。
シロくんを心配するなら、四人で入ってきたらどうですか？　お互いの監視ってことで」
『む』
こうして、「あくまのささやき」を得意とする七季に、まんまと丸め込まれた女性たちは、そろって衛宮邸で入浴することになったのである。
「凄いなあ……」
そんな黒髪の少女を、感心したように士郎が眺めていたというのは、また別の話。

#２９１　ハニードワーズ（後書き）

あとがき

＞タイトルの「ハニードワーズ（ｈｏｎｅｙｅｄ　ｗｏｒｄｓ）」は「口車」「甘言」の意。

オリ主の「あくまのささやき」スキルは、こんなときにも発揮されます。

てかオリ主、このまま泊まる気ですよな（笑）。パジャマ着とる。

更新が遅れたのは、いっぺん書いた下書きが、ミスって消去されたからです。すみません（泣）。

てか、ここまでで聖杯戦争二日目ェ……。九月中に終わるのかコレ（汗）。

#292　リプレイ

それは、七季が入浴するより少し前の話。

「アーチャー」

「何かね？」

お互いの身長差から、見上げる形になった少女と、顔をのぞき込む形になった男が板張りの廊下で見つめ合う。

「はいこれ。渡しそこねてたから」

ぽす、と胸板を叩くようにアーチャーへと押し付けられたのは、小ぶりな青いケースだ。ちょうどカフスやタイピンが入るくらいのジュエリーケース、と表現すればわかりやすいだろうか。

「開けても？」

白い髪の従者に問われて、七季はこくんと頷いた。

「前にさ。ディルにチョーカーあげただろ。霊体化しても、つけていられるやつ。

そういえば、アーチャーにデバイス以外で、何か役に立つもの、あげたことがなかったと思って」

海鳴に住んでいたころは、もっぱらフェイトの育児に明け暮れていた七季である。クリスマスなどの行事になると、プレゼントするものは、もっぱら食べ物や茶葉などの消え物が多かった。

それは七季の性格上、人にあげるなら「邪魔にならないもの」ということを念頭においていたせいもあるし、当のアーチャーが物欲に乏しく、装飾品などを好むタチではなかったこともある。

「そんなことはないが……気持ちの問題だろう？

もっとも、これも君の心遣いだというのなら、ありがたく受け取らせてもらおう」

いつだって自分のことは二の次、三の次だった男も、「座」から

解放されて以来、ずいぶん七季に振り回され、慣らされたせいか、人からの感謝を受け取ることができるようになってきた。
それでも面映そうに、灰藤色の目を細めるアーチャーの、手元で開かれたケースには、シンプルなピンブローチが一つだけ。
しっとりと艶を帯びた黒い台座に、豆粒ほどの紅い石がはめ込まれた簡素な作りのそれは、校章か社章のようでもある。
「それなら、外套の襟にでも留められるだろ？
バングルもカフスも、デバイスで塞がるから、邪魔にならないデザイン選ぶのに苦労したよ」
「しかしこれは――」
ぱちり、と解析の魔眼が瞬いて、そのピンブローチと、少女のあどけない面輪とを見比べた。
「台座の黒玉（ジェット）はともかく、こちらの石は……」
「うん。私の血を封じてある」
さらっと七季は言ってのけた。
「だからいざというときは、敵にぶつけてくれ。割れたら私の血が魔物寄せになるから、隙を作るとか、目くらまし位にはなると思う」
ちゃんと霊体化しても、つけていられるやつだから。
にっこり笑って告げる少女には、かけらも悪気はない。むしろ善意にあふれている。
所有欲とか、絆の証とか、そういうものではなく、とっても実用的な贈り物をしてくれるマスターに、アーチャーはちょっとだけ悲しくなったとか、ならないとか。

そして入浴前。
「ディル、ちょっとは落ち着いたか？」
「……お見苦しいところを」
七季の「中」から出された、美貌の槍兵は、しょんぼりと少女の

前に跪いていた。
　脱衣所の前の廊下なので、七季は寒いだろうと立ち上がるように言うのだが、本日何度目かの乱心に、ディルムッドとしても思うところがあるらしい。
　イリヤスフィールのことがあるし、そうまで彼が切嗣を苦手とするのなら、ディルムッドと切嗣が、じかに出会わないように配慮をしようかと考えていると。
「マスター。ここは私にお任せください」
「黎明？」
　手元から上がった声に、黒髪の少女はけげんな面持ちで、淡く光る菫青石（アイオライト）の指輪を見つめた。
「これからマスターは入浴されるのですし、その間、彼に私を預けてください。入浴中の護衛は、リインたちに任せます」
　かつて、ハンター世界において七季はデバイスを外した隙に行方不明というか、誘拐された前科がある。
　そのためデバイスには当然のように防水機能がつけられているし、あれ以来、七季がデバイスをつけたまま入浴することがほとんどだ。
が。
　他にも見張り――もとい、護衛がいるのなら、必ずしもデバイスが必要不可欠ではない。
「彼を浮上させるお手伝いくらいは可能です。私は、マスターのお役に立つのが本意なのですから」
「う、ん……？」
　――いったい何をするつもりなんだろ？
　ないしん首をかしげつつも、「黎明」がそこまで言うのなら、と異邦の少女は了承した。
「わかった。じゃあ、よろしく。ディル、私のデバイス、預かってくれるか？」
「はっ、しかと承りました！」
「ん」

ひらりと手を振って、少女と黒猫、銀髪の美女と白い髪の偉丈夫は脱衣所へと消えた。

その後。

彼が「中」にこもっている間、にゃーにゃー鳴きながらバーサーカーとコミュニケーションを取っていた、七季の映像を「黎明」から見せられた青年が、すっかりマスターの愛らしさにやられて、落ち込むどころではなくなり。

他の従者たちが、ちゃっかり黒髪の少女と一緒に入浴していたことなど、華麗にスルーしていたことを、医療用の魔杖と、付喪神を目指すインテリジェントデバイスだけが知っていた。

「お待たせー……って、凄いな、黎明」

おお、ディルがすっかり復活してる。

――顔赤いけど。酒でも飲ませたのか？

「お褒めに預かり光栄です、マスター」

「ディルは風呂、どうする？　いったん霊体化してるから、汚れとかはないだろうけど」

「はっ！？　いえそのお気遣いなく！！」

「そ、そっか？」

#292　リプレイ（後書き）

あとがき

＞タイトルの「リプレイ」は「再び行うこと」「再試合」「再演奏」「（録音・録画テープを）再生する」の意。

ここんとこ、オリ主の影が薄かったので、ちょっと閑話的に突っ込んでみました。

にゃーにゃー鳴いてた彼女の映像を、しっかり「黎明」が保存してた小ネタとか、「中」に突っ込まれてて出番のなかったディルムッドとか。

#293　ドリーム

『ぴきゃあああ!?』
「な、何だっ!?」
いきなり風呂場の方から聞こえてきた、絹を裂くような少女たちの悲鳴に、ざっと士郎たちが腰を上げかけたのだが。
「あ、大丈夫です。たぶん先輩がジャレてるだけですから。いまごろ女の子たちの乳、かたっぱしから揉んでるんじゃないですかね?」
きっと、そのせいだと。
ほえほえのたまう七季の朗らかなソプラノを聞いて、赤毛の少年は中腰でフリーズする。
「ほー。あの嬢ちゃん……マスターは、そっちのケがあるのかね」
ちょっと楽しそうに紅い目をかがやかせ、首を伸ばすのは青い装束のランサーだ。
「のぞきに行くなよ」
アーチャーが眉根を寄せて律儀に釘を刺す。クー＝フーリンは、ディルムッドほどではないにしろ、それなりに浮名を流した英霊だからだ。
「……はい?」
いっぽう、キングオブ朴念仁な士郎は、ぎぎぎ、とブリキのオモチャみたく、ぎこちない動きで黒髪の少女を振り返る。
「先輩じしんは、ノーマルですけどね。おっぱいは好きなんですよ。良くジャレてますし。やっぱり先に入っておいて正解でしたねぇ」
『ふにゃあああああ――』
どこか猫みたいな、色っぽいものを含んだ悲鳴が途切れて、五分ほど経過するまで、士郎の硬直は解けることはなかったという。

「ところで、蒼崎さんでしたっけ。お泊りはどちらに？
新都の方なら、あまり遅くなるとバスの時間もあるでしょうし。
大丈夫ですか？」
士郎のうしろから、ちょこんと元の位置に座った黒髪の少女は、
赤毛にふちどられた美貌の魔術師へと話しかけた。
「ああ。宿はいちおう新都にな。歩いて戻れる距離だから、さほど
気にはならないが……」
きがるな口調で答えた橙子の、茜色の目と、切嗣の黒い目、そし
て士郎の琥珀の目と――従者たちのまなざしが、七季の抱いている
黒猫へと集中した。
「それは、どこから連れて来たんだ？」

闇のような毛並みは、しっとりつややか。腹回りだけが雪のよう。
光彩の良くわからない、つぶらな眸。
短い手足は愛らしく。
何より特徴的なのは――バスケットボールをそのまま大きくした
かのごとき、まんまるボディ。
あえて別の言い方をするとしたら、黒ゴマ風生地のまんじゅうシ
ルエットか。
「さっき抱いてたのと違うよな？」
でかいし。
ようやく悲鳴が途切れて落ち着いたのか、座りなおした士郎が、
まじまじと黒い巨大毛玉を眺めやる。
「僕はここだよ」
首をかしげる赤毛の少年の声に、にょっとテーブルに懸垂よろし

く手をかけて、七季の傍らから顔を出す、こちらはまんま猫ボディなリドル。

並べてみると、サイズがあからさまに違うのが、いっそ笑えるほどだ。

ぬいぐるみでないのは、時折ふさふさのしっぽや三角ネコミミが動くことからも明らかだが。

「ヒアー」

あげく、ピンクの舌がのぞく口内から、高い鳴き声まで上げるのだから、とりあえずオモチャ……では、なさそうである。

その中で、切嗣だけが顔を引きつらせていたりする。

「うん。マガツヒさまだし」

ずざっ！

あっさり告げられた事実に、彼女の従者たちだけが、ドン引きして後ずさった。

「私の中で、好感度の高い見ためを選んだんだって。だからポヨそっくりなのな」

よいしょと腕の中のまんまる毛玉に顔を埋める七季は、にへらん、といかにも幸せそうだ。ケダモノ万歳。

ちなみに「ポヨ」とは、どこぞの金魚娘ではなく――某四コママンガの、主人公に位置する球体猫の名前である。

初めて見た人からは、極端にデフォルメされた猫クッションだとしか思われない不思議キャットだが、デブ猫ではなく、丸い巨体の中身は、ほぼ全て筋肉。

つまり骨格筋率は最大値。ちなみに、レントゲン撮影にかけようとすると、例外なくブレーカーが落ちるため、正確な骨格は不明という設定のビックリにゃんこだ。

「で……そちらが、どうして？」

あからさまに格上の神様を、ぬいぐるみよろしく抱っこしている少女に、笑顔を引きつらせたままの「ジゴロの神様」が問いかける。
「何か最近、物騒だから、こっちの方が虫除けになるだろうって」
――あんたが言いますかッ！
そのとき人外ズの心はひとつになった。
災いを司る神が八十禍津日神（やそまがつひのかみ）である。
ないしん彼らは総ツッコミだ。
リドルなどは、マスターたる少女の膝を取られたのが悔しいらしく、びたびたしっぽで畳を叩いている。さすがに災厄を司る神に、正面からケンカを売る気はないらしいが。
それをよそに、まんまる黒猫にもふもふしているまっくろ巫女さん。猛者である。
魔術師の橙子は、神話にも登場する、物騒な神霊と、目の前のもふもふを結びつける気はないのか、興味深そうにそのさまを眺めている。
その表情は「使い魔にしたら良さげだなー」と言っているような、いないような。
「あ、寝るときにはちゃんと『中』に入ってもらうし。手出ししなければ、ご機嫌損ねるわけじゃないから大丈夫だよー」
「ふーん。撫でても良いのか？」
「はいどうぞー」
「お。ふわふわだ」
たぶん間違いなく、相手のことをわかっていない赤毛の少年だけが、のんきに手を伸ばして、災厄の神様が変じたというまんまる黒猫を撫でていた。
「それじゃあ、本人にも会ったことだし、きょうはこれで失礼する。微調整があるしな」

風呂上りのイリヤを診察した橙子は、そう告げると、コートを身につけて衛宮邸を辞した。

別れる前に、イリヤスフィールにスペックの説明や、意思の確認、下準備についても話していたから、実際の施術までには、もうしばらくかけるのだろう。

「よろしく頼むよ」

銀髪の童女は、生前に再会できなかったとはいえ、そんな準備をしていた切嗣の、心遣いが嬉しくて、橙子を見送る父親の腰に抱きついている。

イリヤスフィールは、アインツベルンの魔術師だ。そして今回の「聖杯」の器。

けれども。

父である切嗣は、彼女に生きて欲しいと、幸せになって欲しいと望んでいた。

母であるアイリスフィールが、おのが身を賭して「聖杯」に成ったのも、切嗣の願いがかなえられたなら、もう「聖杯」はいらない――愛する娘が、次の「聖杯」に成る必要はない――そう考えたからだということを。

知ってしまったイリヤスフィールは、両親が望んだ、生きる術(すべ)を放棄することはできなかった。

そして第四次聖杯戦争の生き残りでもある義弟・士郎もまた、彼女に生きて欲しいと願っている。

「姉さん」

そう呼んでも、良いかな。

そう呼ばれたとき、イリヤスフィールは泣きたくなったのだ。

ここには家族が残っていた。

切嗣が残してくれたものがあった。

それは絆で。新しい人生で。

彼女が永遠に失ったと思っていた、ひとの温かさだった。

「おやすみなさーい」
「ん、おやすみー」
いつのまにか、当然のように「アーチャー」一行は、衛宮邸に泊まる運びとなっていた。
その前には「女の子が夜に出歩くのは危ない」という士郎の言い分や、「同盟を組んだ（ことに、いつのまにかなっている）んだから、まとまった方が効率がいいじゃない」という凛の主張が絡んでいたことを述べておこう。
その結果、真言と凛が、同じ洋室にまとまり、ランサーはドアの外で見張り。七季たち主従は和室で布団。まんまる黒猫な災厄の神様は、お気に入りの寝床である、黒髪の巫女の中でおやすみ。
イリヤスフィールと切嗣親子も和室で仲良く布団を並べ、士郎たち主従とバゼットは、やはり彼の自室で魔力供給に勤しむこととなった。

その夜。
『みかちゃん』
愛らしい顔立ちの、栗毛の女の子は、大事そうにその名前を呼んでいた。
『みかちゃん』
いつだってあとをついて回っていた。
『みかちゃん』
大好きだったから。
きらきらした目は、いつだって彼を映していた。
『まこと』
ぶっきらぼうでも優しい幼なじみ。ずっと未来も一緒だと疑わな

かった幼い心。
『みかちゃん、あのね。わたし――』

『どうして？』
泣きじゃくる声が聞こえる。
大事な、大好きな幼なじみの意識はない。
『だめだったの？』
高熱にうなされる男の子の頬に、ぱたぱたと滴が散る。
悲しげな、痛々しいソプラノが降る。
『わたしのせい？　たおれちゃうほど、きらいだったの？』

一週間の意識不明のあとに、リセットされてしまった彼の記憶。
『……誰？』
傷ついた彼女は逃げ出した。
『まこと』
追いかける彼。
――待って。
『まこと』
何度も、何度も。
――なんで逃げるんだ。
『まこと！』
――会いたい。
『もう、怒ってないか？』
『……うん』
握り締められた手が、泣きたくなるほど嬉しくて。
――最初から、怒ってなんか、いなかった。

『きおくを　けした』

彼の記憶を消したのは、神様で。
すごくすごく強くてわがままだったひとに、抗えなかったのは、
彼が悪いわけじゃなかった。
――つよくなりたいと、ねがった。
大切なものを、護れるくらい、つよく。

『わるかった　まつから　あれがおわるまで』

神様も、そう言ってくれた。
でも。

『ミカちゃん！　ミカちゃん！』
戦いの最中にへまをした。かばった彼は、ほとんど腹ごともっていかれた。
血まみれの体を抱きしめる。果物のように花びらのようにばらけようとする臓器を、かき集めて抱きしめる。
その濡れた感触に吐き気がした。
『――まこと、あのな』
こぼれ落ちた声は、欲しくて欲しくてたまらなかった言葉。自分も告げたかったけれど押し込めていた言葉。
――お願い。
でも、こんなときに聞きたかったわけじゃない。
――お願い。
そんな遺言みたいな告白。

――お願い。
『いやあああああああ！！』
かえして。
――何だって捧げるから。
たすけて。
――にどとうしないたくない！

『では　けいやくを』

そうして彼女は「神妻」になった。龍神の妻。人ならぬものの伴侶。
契約を結ぶことのできた神様は、思いのほか寛容で。

『あれが　おわるまでのあいだ　そうことも　ゆるすのに』

いずれ終わる命だと、わかっているから待てる、と告げたそのひとに、けれど彼女は首を振る。けじめだと。
――だって、ずっと一緒にいたい。
言えない真実。
終わるのを待つということは、彼を人の身のまま死なせるということ。
龍神に連なる身となった、彼女と契約さえすれば、彼も主に引かれて長い刻（とき）を歩くだろう。
でも。
――拒まれたら。
人間としての人生をまっとうさせるのが、彼にとって幸せなので

はないかという、迷い。
——うしないたくない。
たったひとりの前例は、ためらいなく考えた様子もなく即答してくれただけに、いっそう彼には慎重になる。
でも、本当は。
——傍にいたい。

そんな夢を、凛は見た。
「あー……」
寝起きの悪いはずの少女は、隣でくーくー寝こけている、おのがサーヴァントの寝顔を見下ろして嘆息した。
夢の中の、幼い女の子の面影が、そこにはある。
サーヴァントとマスターの間には、パスが通じており、そこから稀に、サーヴァントの記憶をマスターが垣間見ることがあるのだとは、のちにアーチャーから聞いて、凛が知ることである。

「……あのさ」
「ん？」
「応援してるから」
「何が？」
そんな会話が、少女たちの間で交わされたとか、交わされないとか。

#２９３　ドリーム（後書き）

あとがき

＞思いのほか長引いたので、更新が遅くなりました（土下座）。

タイトルの「ドリーム」は「夢；夢を見ている状態、夢路；夢で見たもの」「夢うつつ（の状態）」「（めざす）理想、目的、目標」「夢のようにすてきなもの」の意。

凛様が見たのは、お約束、先輩の過去でした。

日ごろの彼女からは想像もつかないほど乙女です。まっとうに乙女です。オリ主よかよっぽど。大事なことなので二度言いました（キリッ）。

マガツヒさまの黒猫ばーじょんは、「ポヨポヨ観察日記」の主人（猫）公・ポヨをモデルにしております。

ポヨは虎猫ですが、マガツヒさまは黒猫で色違いです。

読み手さまからいただいたコメントから、某フェルナンデス大帝の画像を見たとき、連鎖的にイメージしたのが、彼だったもので……。

ご存じない方は、「ポヨ」「画像」で検索してみると吉。ぬいぐるみが、めたんこ可愛いです。

#２９４　スカウト

さて、七季が遠坂家に召喚されてから、三日目の朝である。
魔力供給で撃沈している、セイバー主従とバゼット組はもちろん、寝起きの悪い「アーチャー」組――もとい、凛と真言も、いまだ部屋から出てこない。
宵っ張りの――というより、積もる親子の話に、昨夜は遅くまで起きていたのだろう――切嗣とイリヤスフィールの親子も、夢の中。
よって、朝食を作るため、キッチンに陣取っている白い髪の偉丈夫と、そして彼らのマスターである黒髪の少女が、げんざい訪問者に応対できるメンバーだった。
ぴんぽーん。
「誰だろ？」
ひょいと七季が顔を上げる。その傍らには、二匹に増えた、まっくろにゃんこが鎮座しているのが、いかにも微笑ましい。ただし、どちらも中身とい外見といい、まっくろであるが。
「マスター」
私が出ようか。
キッチンから顔を出すアーチャーへ、少女はひらりと小さな手を振って留める。赤いエプロンが違和感皆無でなじんでいるあたり、筋金入りの主夫である。
「いーよいーよ。私が出るから。アーチャーは朝ごはん、お願いな」
いちおう、ランサーやディルムッド、リインフォースも意識あるメンバーのうちに入っているが、いかんせん彼らは、どう見ても日本人には見えない。
眉根を寄せて心配そうな目を向ける従者を、七季は苦笑でいなす。間違いなく日本出身であるはずのアーチャーも、見ためは多国籍風

で、アジア系、としかわからないためだ。
とりあえず七季は、どこからどう見ても日本人の彼女が応対することにした。
＜シロくん。人が来たから、私が出とくな。知り合いだったら適当にごまかしておくから＞
少女は、いちおう念話を飛ばして、この家の家主に一言ことわっておく。
そして七季は、半纏を羽織ると、居間を通り抜けて板張りの廊下へと出て行くのだった。

「はーい？」
少年の目の前に出てきたのは、二匹の黒猫を足元に従えた、ポニーテールの少女だった。
全体的にふんわりとした印象なのは、小柄な身長の割りに盛り上がった胸元と、まろやかで華奢な撫で肩が作るシルエットのせいだろう。
加えて、いまは綿の入った半纏を羽織っているため、余計にやわらかそうに見えるのだ。
あどけない少女なのに、何故か成熟した女性の色気を兼ね備える存在。
それが間桐慎二にとっての、七地七季の印象だった。
「どちらさんでしょう？」
がららと開いた引き戸に手をかけて、首をかしげるように見上げてくる黒い瞳に、一瞬、慎二は気圧される。
見るからに不思議そうに、知らないものを映す双眸が、あまりに無垢に見えたからだ。
それは色こそ違えど、彼の友人である馬鹿正直な少年を、どこか連想させた。

「こ……ここは、衛宮の家のはずだけど」
女慣れしているはずの慎二は、朴念仁きわまりない士郎の家で、初めて目にする、妹以外の少女に戸惑っていた。
「はい。衛宮さんのおうちですねぇ」
ほんわり、はんなりした七季の口調は、どこか雅やかで京風のなまりを思わせる。
「そ、そう。僕は、衛宮の友人でね。間桐慎二っていうんだ。君は？」
「はあ。ご丁寧にどうも」
いったんぺこり、と頭を下げた小柄な少女は、ポニーテールに結った黒髪を、ひょこんと揺らして微笑み返した。その拍子に、半纏を羽織ってなお目立つ、浴衣の胸元からこぼれそうなバストも揺れる。
＜シロくん。間桐慎二、ってお友達に心当たりは？＞
さりげなく念話を飛ばして確認する七季。
＜確かに慎二は友達だけど……＞
途切れた念話からは、困惑が伝わってきた。こんな風に見舞いに来たことはない、ということなのか、それとも会うわけにはいかない、という意味か。
――どちらにしろ、追い返すのが得策だな。
なにしろ士郎は、もう学校には「インフルエンザで欠席」と届けてあるのだから。ここでバレる方がまずいだろう。
「うちは、きりちゃんの姪っ子で、七地七季いいます。こちらには、受験のついでにお邪魔したんですけど、何や、訪ねてみたら、シロくんはインフルエンザとかで、寝込まはらって……。難儀なことですわぁ。うちは高校三年ですし、もう試験の心配はあらへんのです。学校も自由登校ですし。やから、ちょっとの間、シロくんのお世話することにしたんですえ」
にっこり、ほわほわしたソプラノで告げる少女には、隙などなか

った。
春めいた空気の中に、黒曜石の鋭さと硬さを隠した「神使（しんし）」の少女は、何気ない口調で問いかける。
「お見舞いに来てくれはったんですか？」
じい、と見上げてくる七季に、後ろめたい様子の慎二は、上手く口が回らない。
日ごろ相手にしている年ごろの少女たちと違って、「衛宮士郎の親戚」には名状しがたい威厳のようなものが感じられた。とても彼の口先で丸め込まれてくれるような軽さはない。
落ち着きのある空気は、そこに知性を感じさせ、慎二の付け込む隙を与えなかった。
「あ、ああ」
そのわりに、制服姿で鞄しか持っていない、ワカメ頭の少年へ、七季はふうっと、いかにも思わしげにためいきをついた。
「堪忍え。
インフルエンザが伝染（うつ）ると、申し訳ないよって、藤村さんいう人にも遠慮していただいてるんです。
お友達とはいえ……ううん、お友達やからこそ、伝染（うつ）したら、シロくんは余計に気にしはる思うんです」
あどけない面輪の、くっきりした眉をへにょんと残念そうに下げる少女は、その雰囲気と裏腹にきっぱりと言ってのけた。
「ですから、間桐はんに会わせるわけにはいきません。申し訳ないですけど」
お引取りを。
はんなり、しんなりしつつも凛然と引かない小柄な少女に、慎二は、這う這うの態で引き下がらざるを得なかった。

「ナナキ。さっきの話し方、あれ何さ？」

ふだんとは似ても似つかない口調で慎二少年を追い返した「神使（しんし）」少女へ、リドルは黒猫姿のまま、けげんそうに問いかけた。
「ん？
このへんは関西方面だし、どうせだから京都風のアクセントにした方が、相手が勝手に怯んでくれるだろうと思って」
さらっとミもフタもないセリフを吐く七季。
確かに京都府民の印象は「笑顔でノー」という偏見が、ないこともない。
「ただ礼儀正しく応対したんじゃ、上がり込んできそうだったからさ」
「まあ……慎二なら、ありえるかな」
友人の訪問を念話で知らされた士郎も、遅ればせながら着替えて居間に出てきたところだ。
「けど……うちに女の子が泊まってる、なんて知ったら、慎二がうるさいだろうなぁ……」
赤毛の少年は困り顔で相槌を打つと、七季が淹れたお茶をすすって嘆息する。
「んじゃあ見るからに外国人っぽいディルとか、ランサー氏とか、アーチャーが対応に出た方が良かった？
下手するとゲイ疑惑が立つけど」
「勘弁してください！」
少女の言葉に、士郎は、土下座する勢いで赤毛頭を下げた。
「俺はノーマルだ！」
ちょっと珍しく必死な形相で主張する少年に、おっとり口調で他の例を挙げる七季。
「でしょー。それに、セイバー嬢やバゼットさん、先輩や遠坂さんが出ても、マズいだろ？」
「……うん。マズいな。そりゃマズい。イリヤはさらにアウトだ」
「ロリコン疑惑が浮上しちゃうもんなー」
ころころと笑う少女に、ぐったりうなだれる士郎は、ちらりとキ

ッチンで朝食を作っている男の、逞しい後姿を振り返った。
「あのさ――あいつと七地さん、年の差っていくつ？」
まさか、自分の未来の理想形がロリコンではあるまいか、と疑惑を懐いた少年の頭に、弓の英霊から放たれた、神速のお玉が直撃するのは、まもなくのことである。

「お帰りなさい、兄さ……」
ふらふらした足取りで、偵察に出かけた衛宮邸から帰ってくるなり、
「ワカメエエエエェェェ！」
と取り乱した慎二に、義妹である桜は絶句した。
「兄さん！　どうか、どうか怒りを鎮めて下さい……！」
荒ぶる少年の感情に合わせて、慎二の青みがかった髪は、ワカメのように波うち、異常な速度で伸び始めた。
「ああっ！」
まるで水を得たワカメのごとき少年の髪は、触手よろしく少女の体を絡め取り、捕食するように締め上げる。
「兄さん、いったいどうして……っ」
菫色のロングヘアにふちどられた優しげな面輪を苦痛にゆがめる桜は、兄の異変に戸惑うばかりだ。
ちなみに異変とは、あくまで激昂に関してであって、慎二の感情が高ぶると、異常に髪が伸びて暴れだすのは珍しいことではない。
「……みやが」
「えっ？」
聞き覚えのある単語に、桜は耳をそばだてる。
「衛宮が、巨乳の女の子を家に泊めていやがったアアアァァ！」
ぴきん。
一つ年上の士郎に想いを寄せる桜は、そのセリフに凍りついた。

――まさか。そんな。
「せ……先輩に限って……」
「しかも良く見たら、首筋にキスマークがついてたんだ！　やりやがったあの野郎！」
ぱきぱきぱきぱき……ぱりぃぃん。
そのとき、桜のなけなしのプライドに――致命的なヒビが入った。
「インフルエンザ！？　インフルエンザね！？　やりすぎで寝込んでるんじゃないの？！」

衛宮士郎と間桐慎二は友人である。
ただし。
衛宮士郎は、慎二に対して――妹の桜のあつかい以外に――何ら含むところはないが、慎二は、友人であるお人よしの少年に、表立って言えないまでも、コンプレックスに近いものを抱いていた。
何故ならば。
彼が気にかけた女性すべてが、衛宮士郎に気があるのだ。
弓道部部長の美綴綾子しかり、遠坂凛しかり、陸上部の三人娘しかり、義妹で肉体関係を持った桜ですら！
キングオブ朴念仁な、穂群原のブラウニー少年と違って、女心には、それとなく敏感な慎二である。
彼女たちが――もはや桜はあからさまだが――いずれも、それぞれに何らかの形で、衛宮士郎を気にかけているのは、一目瞭然だった。
だいたい、弓道部に桜を見に来ているはずの凛が、三回に一回くらいの割合で、雑用をこなしていた士郎をうかがっていたのを、慎二は知っている。彼は彼で、遠坂凛を気にしていたからだ。
相手を良く見ていれば、相手が見ているものも良くわかるというもの。

それに慎二は、素直になれないだけで、自分の友人の長所を良く知っていた。

馬鹿馬鹿しいほどのお人よし加減は、裏を返せば、それはとても自分など真似できない美点であり、そのまっすぐさは、間桐の家で生まれてから、魔術師になれないコンプレックスまみれで育ってきた少年には、望むべくもないものだった。

馬鹿だ馬鹿だとけなしながら、嫌いではない。

ある意味で、間桐慎二は、誰より衛宮士郎を認めていたし、気にしていた。

そうでなければ、わざわざ彼から近づくことなどしないだろう。

士郎は、誰にでも親切だが、だからといって、誰かに深くかかわるような性格ではなかったのだから。

だから。

ないしん「士郎には勝てない」と、心のどこかで思っている慎二の、数少ない勝ち誇ることのできる優越の一つが、女性経験だった。

朴念仁きわまりない士郎の性格では、女性に声をかけるなど、慎二が合コンにでも誘わなければ、ありえない。

否、機会を設けても、自分から誘うことなど無理だろう。

よっぽど女性が積極的なら、押し倒されることはあるかもしれないが（当たっていたりする）。

「ちくしょオオオオォ！！」

「そんな……あれだけ、家に通っていた……私の胸を気にしてても……手出し一つ、してくれなかったのに……」

がっくりとうなだれる桜の、顔には影が落ちて表情がわからない。

「先輩イイイィィ！！」

間桐家で上がった叫びを、武家屋敷に住む少年が知ることはない。

＋おまけ＋

「そういえば七地さん、きのうパジャマ着てなかったっけ？」
「えっと。昨夜は汗かいちゃって、着替えたんだ」
何して汗をかいたかは、彼女の従者たちだけが知っている。

#２９４　スカウト（後書き）

あとがき

＞タイトルの「スカウト」は「偵察する」の意。

あと間桐兄妹についてはやらかした。かっとしてやった。カットはしていない（待て）。

もちろん慎二のワカメ髪暴走は捏造です。この話の慎二は、魔術の才能はなかったけれど、かわりにワカメに魂を売ったかもしれません（さらに待て）。

しっとマスク降臨は、もうちょい先。

あと関係ないですが、ワカメは英語だと「ｗａｋａｍｅ」もしくは「ａ　ｋｉｎｄ　ｏｆ　ｓｅａｗｅｅｄ.」というそうで。ワカメェ……。

#295　ジェラシー

そのころ、言峰教会では。

「朝か……」

窓から差し込む光が、冷えた聖堂をしらじらと照らし出す中に、漆黒のカソックを身にまとう男がたたずんでいた。

バゼットから奪ったランサーは、奪われ。

気まぐれなアーチャー――ギルガメッシュは、どこを歩き回っているのか、戻ってこない。

けっきょく昨夜は、誰ひとり魔術師が訪れることもなく。

ぽつーん。

とどのつまり、言峰綺礼は一人ぼっちだった。

「……仮眠を取るか……」

夜は魔術師たちの時間だが、ここが聖堂である以上、祈り悩める信者が訪れてくることもある。

よって、やはり昼間も教会は開かれている。

朝の祈りと掃除をこなしてから、死んだ魚のような目をした黒髪モジャ毛の神父は、心なしかヨロヨロと自室へ引き上げていったのだった。

エイメン。

ふたたび間桐家。

そのリビングでは、何かに覚醒した桜が、赤と黒のツートンカラーなリボンそっくりの触手を繰り出し、あまつさえ、それで「メイクアップ！」的な変身を完了させていたりした。

義兄たる慎二のワカメヘアーな触手と、おそろい、といえないこともない。似たもの兄妹なのだろうか。血はつながっていないが。

「ふ……ふふふ……。

兄さん……私、センパイがシンパイですから、やっぱりオミマイに行ってきマス」

顔には紅い刺青。菫色のロングヘアは、結ぶリボンこそ変わっていないものの、色は白く抜け落ち、瞳の色も紅く変じている。

「シンジ！　桜が不良にッ！？」

「ずいぶんなイメチェンだな桜ッ！」

現界するが早いか、あわあわしている長身のボディコン美女と、ワカメ触手ヘアーをうねらせながらも、ちょっぴりズレたツッコミを入れる間桐家の長男。

「イイコね……さあ、イキましょう……？」

ゴオッ！

影から生えたストライプ触手と共に、花の名を持つ少女は、目にも止まらぬスピードで、間桐の屋敷から飛び出していった。

「おはようございます」

「おや、良い匂いですね」

そう言いながら衛宮家の居間に入ってきたのは、さっきまで、庭で英霊たちと鍛錬をしていた金髪の美少女と、赤毛の麗人である。

汗を流してきたのか、二人が現れるなり、かすかにボディソープの香りが朝の空気に混じっていた。

「おはようございます、セイバー嬢、バゼットさん」

まだケガ人のバゼットは、例によって浴衣に半纏だ。この男所帯だった衛宮家にサイズの合う服があるはずもない。

「おや、シロウが作っているのではないのですか？」

しかしセイバーは、鎧の下に着込んでいた、あの青いドレスではなく、ふつうの白いブラウスに青いスカートを身につけていた。

「ああ、起きたときには、もうあいつが台所に……って、セイバー、その服どうしたんだ？」
ぱちくりと琥珀の目を丸くするのは、赤毛の少年である。
「これはリンにいただいたものです」
「遠坂が？　へえ、でもピッタリだな。セイバーに良く似合ってる」
士郎の隣に腰を下ろした金髪の美少女は、ほんのりと頬を染めつつも小さな声で、褒め言葉に礼を呟いた。
「あ、ありがとうございます……」
「アーチャーのご飯は美味しいですよーＶ」
「それはとても喜ばしいですね」
きりっ。
しかし照れたのもつかのま、卓の向かいに座る七季の言葉に、剣精の少女はいつもの凛々しい面持ちに戻っていた。
さながら戦場に向かう騎士のごとくである。
「ふぁ……おはよう、衛宮君」
そこに、話題の人であった魔術師の少女も、ややおぼつかない足取りで居間へとやってきた。
こちらは赤地に十字のワンポイントが入ったハイネックと、黒いミニスカートである。
「ああ遠坂。おはよう。セイバーの服、ありがとな」
「良いわよ、それくらいは。もらいものだけど、私は着ないもの。それにしても、アイツもマメねぇ」
キッチンでちゃきちゃきと朝食作りに勤しんでいる男の背中を、少年少女たちが、こぞって眺める。
頼もしすぎるその背中は、戦士のものに違いないのに、やけに料理をする姿が生き生きとしているのが、えらいギャップを生んでいる。
「遠坂さん、先輩は？」
「もうすぐ来るわよ」
さっきまで凛と一緒になってセイバーの着せ替えをしていたのは、

その栗毛の少女である。
七季の言葉に、ツインテールをリボンで結った少女が答えたところで、新たな少女――否、幼女が現れた。
「シローウ！　おはよーっ！」
それも、赤毛の少年に向かってダイブするというおまけつきである。
ぼす。むぎゅっ。
「うわ、イリヤ！？」
「もう！　キリツグったら、いくら起こしても起きないんだもの！　キリツグには朝の挨拶したから、次はシロウにしてあげるね！」
ちゅっ。
言うが早いか、銀髪ロリータ娘は、かるいリップノイズを響かせて、シロウの頬へ唇を押しつけた。
『ああ――ッ！』
セイバーとバゼット、そして凛の声にもう一つ、重なる声があった。
ずしゃあっ。
「センパイ……これは、どういう、ことですか……？」
ディルムッドとランサーが鍛錬という名の手合わせをしている庭から、人知を超える猛スピードで居間に飛び込んできたのは、赤黒ストライプのワンピース（？）を来た白髪の少女だった。
それは、よくよく見れば、士郎の後輩である。
「さ、桜……？」
――え？　髪の色とか、目の色が違う……？
「何ですか、このハーレムはあああああッ！！」
怒りの咆哮と共に、ワンピースを構成しているのと同じ、赤と黒のリボン――というか触手――が、士郎へと襲いかかる。
が。
キッチンからアーチャーが飛び出すよりも、庭のディルムッドとランサーが乱入するよりも早く、動いたものがいた。

がぷ。ぱしっ。ずるっ、ぽん！
まんまる黒猫姿の八十禍津日神（やそまがつひのかみ）が、モノホンの猫よろしく口と手足で触手をキャッチ。
その後、ジャレるように引っ張ったかと思うと、桜の影と体から触手の本体――「この世全ての悪（アンリマユ）」――を引っこ抜いたのだ。
びっくりするほどの早業だった。
びたんと畳に押さえつけられた、黒と赤のストライプくらげみたいなもの。
その上に乗っかった、まっくろ球体にゃんこが、ドヤ顔で七季を見つめている。
あとには、体を覆っていたリボン触手が消えうせて、この寒い季節に――屋内とはいえ――まっぱだかになった少女が、一人。
「きゃあああああ！？」
しっとの炎はどこへやら。
想い人の目の前でマッパにされるという羞恥に、全身を染めた桜は、みずからの体を抱きしめるようにして座り込んだのだった。
不可抗力にもほどがあるにもかかわらず、その場に居合わせた男性陣が、女性陣から殴られたのは、いうまでもない。

#２９５　ジェラシー（後書き）

あとがき
＞ぼっちなコトミー。
英雄王は麻婆の被害を避けるために、日ごろ出歩いてます。
パシリなランサーも出て行きました。結果的に、教会にはコトミーだけという。
魔術師もなー。
イリヤ&バサカ主従、士郎&セイバー主従、凛様&チートな先輩（アーチャー）ご一行とランサーまでが衛宮邸にたむろってて、コトミーの本性を知っているわけですし。
葛木&キャス子、ついでにアサシン主従は基本、出歩かないし、そもそも聖杯戦争のルールは知らんだろうし。
慎二と桜&ライダー主従は、やっぱり教会にホイホイ行かないでしょう。臓硯の仕込みなんだから（臓硯の天敵→コトミー）。
……本格的にコトミーが蚊帳の外な罠。これは酷い（笑）。

あと「この世全ての悪（アンリマユ）」に関しては、スピード解決してみた。
このためにマガツヒさまを、にゃんこにしたといっても過言ではない（キリッ）。

タイトルの「ジェラシー」は「嫉妬、やきもち、妬み」の意。
「ジェラシー」は「エンヴィー」より個人的な感情で優越者をねたみ憎悪する感情。
「エンヴィー」は「他人の持っているものを、自分も持ちたいとうらやむ気持ち」だそうな。
しっと爆発な桜でお送りしました（待て）。

#296　インスタント

「それは……通い妻じゃないですか？」
「どこからどう見ても通い妻だと思うけど」
「ノーコメントで中立を保っておこう」
桜に関する、さっくばらんな説明を聞いた後の、七季たちのコメントは、一様にこんなものだった。
上から、七季、リドル、アーチャーの順番である。
「私、七地さんたちとは仲良くなれそうな気がします……！」
間に合わせに、ひとまず七季の服を借りたロングヘアの少女は、きらきらとした瞳で黒髪の少女を見つめ、その手をきゅっと握り締めた。
――あ。
ちなみに「この世全ての悪（アンリマユ）」がすっぽ抜けたため、げんざい桜の髪と目は、元の菫色に戻っている。
七季と真言の間に交わされた目配せは一瞬。
ぱちん、と少女の、黒瑪瑙の瞳が瞬きすると同時に、間桐の少女の胸で息づくそれは、あっさり終わりを告げていた。
間桐桜の心臓に寄生していたはずの蟲。
それは、元の肉体をとうに捨て、仮初の不死を実現するため、人の肉を喰らわせた蟲たちで自分の体を形成している男の、魂を宿らせた本体だったのだが。
誰に知られることもなく、間桐臓硯は、この世から消え失せたことになる。残るは、間桐家に残った残骸の蟲たちだけ。
気分ひとつで悪霊を浄化できるレベルの、異邦の巫女は、きょうも絶好調であった。

「桜、あなたが何で――」
「姉さんこそ――！」
そして始まったのは、壮絶な姉妹ゲンカであった。
きょうもきょうとて、にぎやかすぎる衛宮家の居間は、違う魔術師の家門に分かたれてしまった実の姉妹の繰り広げる修羅場に、他の人物たちは遠巻きぎみだ。
そりゃまあ、よその家庭の事情に口を出すのは憚られるというか。
「間桐臓硯が彼女に仕込んだのは、おそらく第四次聖杯戦争においての、聖杯のかけらだろうね」
「どういうことです？」
いっぽう居間の端っこで、真面目な話をしているのは、無精ひげの目立つ面差しに狩衣姿の男と、ミスマッチな赤毛の麗人である。
「彼女から引っ張り出されたのは『この世全ての悪（アンリマユ）』の、その一部だ」
「そもそも『この世全ての悪（アンリマユ）』は、最弱の英霊なの。その触媒を用意したのは、第三次聖杯戦争に臨んだアインツベルンですもの。マキリがわざわざ『この世全ての悪（アンリマユ）』を自ら召喚するとは考えにくいし、その触媒を用意するのも難しいわ」
切嗣の膝の上に座っている銀髪の童女は、もはや「聖杯の器」たる役目を果たす気はないのか、アインツベルンの極秘事項を口にしている。
「なるほど……つまり、間桐家は」
「マキリの『聖杯』……アインツベルンの複製品を造ろうとした、ということでしょうね」
バゼットの相槌に、ルビー色の双眸をきらめかせて、イリヤスフィールは深く頷いた。
その妖精じみた秀麗な面輪に、これでもかと憤りがにじんでいるのは、その「聖杯のかけら」が、本を質せば彼女の母――アイリス

フィールのものだからである。
　愛する母の遺骸をいじくられたとあっては、イリヤスフィースが怒らないはずはない。むろん、それは妻を愛していた切嗣にもいえることだった。
　だが二人は、あくまで魔術師と、元魔術使い。
　必要な話を進めることができるだけの冷静さは保てる。
「その際に、『聖杯』の『泥』によって汚染された、『聖杯のかけら』を埋め込まれたサクラは、『この世全ての悪（アンリマユ）』とパスがつながってしまったんじゃないかしら」
「しかしこれで、この冬木の地の『聖杯』が危険である、という裏づけが取れたことになります」
　ちらりとバゼットは、茜色の目で、まんまる黒猫によって押さえ込まれている、赤と黒のストライプくらげを一瞥する。
「マガツヒさま。それ美味しいんですか？」
　反対の壁際では、がじがじ赤黒くらげの触手をかじっている――たんに噛んでいるだけで飲み込んではいないようだが――まっくろ球体にゃんこに、七季が不思議そうに首をかしげつつ話しかけている。
「ヒアー」
「？　他にも分体がいるって？
　そんなことまでわかるんですか……。あ、本体は、あっちの山の下？　ふむふむ」
　何やら人外とナチュラルに意思疎通している少女はさておき。
　まるっきり気配を洩らしていない八十禍津日神（やそまがつひのかみ）と違って、その妙ちくりんなシルエットからは、寒気がするほどの禍々しさを感じ取ることができる。
　――あれを目にすれば、理解せずにはいられない。
「まあ、それでも心配はいらないと思うよ」
　表情の硬いバゼットに対して「ジゴロの神様」こと、衛宮切嗣はへらりと気の抜けるような笑顔を向けた。

「本当に運が良いというか、彼女たちがいるからね。あの子たちなら、大丈夫だ」

男の視線の先には、仲良く並んでいる、まっくろポニーテールな少女と、ふわふわ栗毛を一つにくくった少女たち。

「『聖杯』から『この世全ての悪（アンリマユ）』をすくい上げることもできるだろう」

それは信仰の薄い時代に、細心の注意を払って育て上げられた、生粋の巫女。

柔軟な心と、強靭な器を兼ね備えた少女たちは、数少ない、高次存在と交流のできる存在だ。

「だから……バゼット君と言ったかな」

かつて「魔術師殺し」と呼ばれたころの鋭さそのままに、切嗣の視線が、赤毛の女魔術師を射抜いていた。

「君にも協力してもらうよ？　色々とね」

#２９６　インスタント（後書き）

あとがき

＞タイトルの「インスタント」は「瞬間」の意味。

ぷちっとな。

とりあえず、桜の心臓に埋まっている臓硯の本体（魂）は、悪霊と判断されて、オリ主に除霊されました（早）。

スピード退場どころか、見せ場すらなくてサーセンｗ

短いですが、いったん切ります。

明日あたり、また更新する予定です。

#297　アムネスティ

「とりあえず、ちょっと出かけてきますね」
遠坂姉妹の――そのうち一方は間桐姓だが――ケンカを横目に、そんなことをのたまう七季を、過保護な従者がやすやすと許すはずもなく。
「では、きょうは私が護衛につこう」
本日の外出には、何度かの押し問答の末、アーチャーが彼女のお供になることで話がついたのだった。

七季の目的地である新都までは、いささか距離がある。
だからといって、アーチャーが抱えて運ぶわけにもいかない。時間は、まだ午前中。明るいうちなのだ。そのため主従ふたりは、無難にバスでの移動を選んだ。
「いったい何の用があるというのだね？」
まだ通勤中の会社員も動いている時間だ。小声で尋ねる男は、起毛ファーがワイルドな赤のレザージャケットに、ダークブラウンのハイネックを合わせたいでたちのため、かなり目立っている。
もともと長身で精悍な顔立ちのうえ、白い髪に褐色の肌という風貌なのだから、日本人の平均的な容姿からかけ離れているせいもあるだろうが、それを差し引いても、英霊の風格が消えていないため、飛びぬけて見える。
「ん。契約にね。遠坂さんには許可もらったから」
いっぽう、わざと端的に答える少女は、シンプルだが品の良い黒のコートに、オフホワイトのハイネックと柘榴石（ガーネット）のチョーカーがの

ぞくパンツルックだ。
この寒い季節に、長い黒髪をわざわざポニーテールに結っているのが、少し寒々しく見えるものの、それによって、あどけない顔立ちが凛々しく映るのも真実だった。
＜霊脈かね＞
＜そゆこと。念のため、霊力と魔力の確保はしとかないとね＞
似ても似つかない男女は一見すると家族とも思えず、周りからチラチラと視線が流れてくる。
だが、アーチャーと七季の手が、仲良く繋がれていることに気づくと、それらは幾ばくかの安堵を含んで離れていった。

「ここは――」
その公園は、かつて「聖杯」の「泥」が焼き尽くした土地。
「エミヤシロウ」の前に存在した、＊＊士郎の終焉の地でもあった。
しかし先日まで満ちみちていた怨嗟の穢れは、ことごとくうち祓われ、だだっ広いだけの土地は、ただ無造作に冬枯れの木立と共に彼らを迎え入れる。
黒衣をまとう少女は、簡単な認識阻害の結界で、人がこの公園に入ってこないようにすると、アーチャーの前で、この地の霊脈との契約に入った。

「器に水を満たしましょう。水にかけらを溶かしましょう。私は容(い)れる。私は肯(うべな)う。この身は揺れる。この身は満ちる。海を抱える宮殿と、血潮を棄(す)てる径(みち)を持つ」

歌うようにソプラノが流れていく。せせらぎのように淀みなく、澄み切った声が、七季の喉からあふれだす。

紅梅の唇は、春を迎えた花のごとく、咲きほころんで高らかに唱える。

「御統(みすまる)を綴れ。しろしめす担い手。盟約もなく、制約も告げず、私は呼び慕う。名を持つ君よ。私は此処に。牙なき夜の散歩者が誘(いざな)う」

冬の弱い陽射しを浴びて響く音は、波紋を紡ぎ、円(まる)く、円(まる)く、幾重にも拡(ひろ)がっていく。

りりん。

長身の男は、七季の声が大気を震わせていくのを、総身で感じ取った。

同時に、音にならない鈴の音も。

「我が背なに永久(とわ)の翼。我が胞衣(えな)は異邦の条理。たゆまぬ弦(いと)もちて哀歌と凱歌を奏でる賛人(にえびと)」

たたずむ彼女の小さな体から放たれる響きが、力を帯びて、その場を揺らしていく。

――疼(うず)くようだ。

体を包む高揚感に、アーチャーはわずかに顔をしかめる。

りりん。

それは霊なるものを呼び起こす声であるが故に。

「天地(あめつち)の狭間(はざま)。婚星(よばいぼし)を導(しるべ)に」

金鈴のようなソプラノは耳ざわりよく。

りりん。

ごう、と荒(すさ)ぶ風に、少女の黒髪が舞い踊り、翻る。

それは七季の居場所を示す旗印のようだ。しんと静まり返る静寂の中にあって、凛然と存在を示す軍旗さながら。

「縁(えにし)の杯を交わさん」

詞(ことば)は風に混じり、天(あめ)に昇り、こぼれ落ちては、地(つち)に交じる。

やがて。

――来た。

からんからん、からん。

からららん、かからん、からん、りりん。

しゃりんしゃりん、しゃららら……。

音が振る。

音が降る。

彼女の中の魂振りの鈴と、別の鈴が響き合って、重なり合う。

清らかな響きは、頭の先から下りていき、首を伝って背筋を滑り、肩を超えて指先へと走る。

腰を撫でて、ふくらはぎを通り、くるぶしをたどり、つま先を抜けて、地面へと繋がる。

ぅをぉん……。

足裏に感じる、霊脈が震えた。

びりっ。

彼女の霊体がいま、霊脈と接続される。

あちらから、こちらの求めに応じて繋がれたのだ。

じんわりと足から這い上がってくる熱は、この土地の息吹。

それを七季は、満遍なく、ゆっくりと経絡に沿って総身に流し巡らせていく。

爪先からわき腹を駆け上がり、心臓をくるくると回りこんで、肩から腕をなぞり、指をさかのぼって額を目指す。

冬木の土地――この一帯の霊脈は、きのう穢れを祓った巫女を、きちんと認識し、覚えていたらしい。

七季の体を駆け巡る霊力には、わずかながらに感じられる「歓喜」の色。

心地よく、跳ね回るようなリズムで少女の中を踊り始める力が、それを体現している。
みずみずしいばかりの霊力は、重くのしかかっていたものを――怨嗟と呪詛を――取り払われたためか、とびきり活発で、勢い良く流れ込んでくる。
まるで怒涛のようだ。
「我が名は七地七季。贄（にえ）の巫女にして、竜に連なるもの。この天地（あめつち）の加護に、心からの感謝を――」

「マスター」
ぽすん。
ふらふらとした足取りで近寄ってきた七季を、危なげなく支えた白い髪の偉丈夫は、彼女の顔をのぞきこんで眉をひそめた。
「ごめ……」
ぽうっと上気した頬と潤んだ大ぶりの瞳は、どこからどう見ても熱っぽく、加えて、ためいきまでもけだるげなので、何というか、非常に危ない。
――人前には出せんな。
こっそり胸のうちで嘆息すると、アーチャーは、近くにあったベンチへと少女を誘導した。
「あまり具合が良くなさそうだが？」
言外に、「転移魔法でもって衛宮邸にUターンしては？」と匂わせる従者に、くてっと彼へもたれたまま、七季はゆるくかぶりを振った。
たっぷりと身のうちに流し込まれた霊力を、いませっせと真言や、ディルムッドたち従者へのパスへ振り分け流し込んでいる最中なのだ。
見た目にはわかりにくいが、外から強制的に流し込まれたものを、

意識して処理するとなると、それ相応の負荷はかかる。
「んーん。ちょっと、いきなりたくさん流し込まれただけだから…ちょっと待ってくれれば……なおるから……」
しゃべるのも億劫で、舌足らずに途切れ途切れ話す七季は、男になついたまま動かない。
それでも気になって、アーチャーがぺたりと額に手を当てると、少女は気持ち良さそうに目を細めて、その大きな手のひらへと、ますますなついた。
「ひんやりしてて気持ちいー……」
「平熱より、少し高いくらいか……」
大人しく寄り添っているだけの状態で、しばらく主従の間に静かな時間が流れていく。
この街が温暖な気候だといっても、冬の風は冷たく、霊的な昂ぶりに火照る少女の頬を、ゆっくりと冷ましていった。
「っ！」
やおら、身構えるアーチャーと、対峙するのは黄金の影。
「何だ、きのうの娘ではないか」
英雄王ギルガメッシュが、黒いライダースーツ姿で、そこにいた。

「ぶはははははッ！」
いきなり白い髪の偉丈夫を目にするなり笑い出したルビーアイの青年は、「久しぶりに笑えるものを見た」と、ご機嫌だった。
どうやら真言によって、アーチャーに印された「けんぞくのよめ」の神字に大ウケしたらしい。
「そうか、貴様の『嫁』か、娘」
「はいですー」
何故だか、七季を挟んで、ギルガメッシュの持ってきたランチボックス（滞在しているホテルで作らせたもの）のご相伴に預かって

いるのが、アーチャーの現状である。
きのう彼女が出くわしたのが、よりによって、英雄王だと知ったときは頭を抱えたくなったアーチャーだが、そのギルガメッシュが、七季を気に入ったらしいというのが、もっと頭痛のする点だった。
人外ホイホイにもほどがある。
というか、さっきからギルガメッシュは、持ってきた食事に手をつけていない。このぶんだと、彼は最初から七季を餌付けするつもりで食事を用意してきたのではないか、とアーチャーが疑ったとしても、おかしくはないだろう。
少女がどこからともなく取り出したテーブルセットが、お気に召さなかったらしい古代バビロニアの王は、みずからの蔵からテーブルとイスを引っ張り出して席を設けている。
「ふ。『嫁』ならば仕方あるまい。『嫁』ならばな！」
ふはははは。
そして七季はというと、金髪ルビーアイの人外青年が持ってきたクラブハウスサンドを、げんざい一所懸命にむぐむぐ頬張っている最中である。
アーチャーは止めようとしたのだが、「我の昼餐が食べられると抜かすか！？」と酔っ払いさながら、くだを巻いて暴れだしそうな英雄王に、忍耐強さには定評のある錬鉄の英霊が、いったん引いた形だ。
認識阻害の結界は張っているが、こんな街中で宝具の打ち合いなど、考えたくもない。
「この時代に、『本物』の巫女は珍しい。しかも貴様、複数の神を降ろしているな？」
「……んぐ。良くわかりますねぇ」
「わからいでか」
ぐりぐりぐり。
少女の黒髪を手荒に撫でくり倒しながら、聞き分けのない子供をたしなめるようなまなざしで、ギルガメッシュは異邦の巫女を眺め

やる。
「人の身で、神に添おうというつもりか？」
嘲るように問われ、ぱちぱちと七季は、黒瑪瑙の瞳を瞬く。
「いけるところまでいくつもりですけど」
にっこり。ふんわり。
愛想笑いではない、心からの笑みを、彼女がギルガメッシュへと向けていることに、アーチャの胸がわずかにささくれ立つ。
金髪の青年は、それを見抜いているかのように、ふふんと鼻で笑って見せた。
「私（みこ）の役目は、神様を慰めることですし。大事で大好きだから、傍にいたいだけですよ」
「ふん……愚か者め。ヒトの領分を越えた悲願は、いずれその身を滅ばすぞ」
どこまでも不遜な口ぶりで言いながらも、英雄王の紅い目は、いつかの朋友（とも）を懐かしみ、つかのま懐古の色に染まった。
そのとき。
ぱたり、と。
何の前触れもなく――電池が切れたオモチャのように、七季が倒れ伏した。
白い小さな手から、食べかけのサンドイッチがこぼれ落ち、金と銀で象嵌された象牙のテーブルを汚す。
「七季！？」
あわててアーチャーが黒衣の少女を抱き起こす。呼吸はしているし、体温も平熱。ただ、いきなり意識を失ったようだ。幸い、口の中のものは飲み込んだようで、喉に詰めていないのを、彼は解析と、主のデバイスからの報告で確認した。
あまりに不自然で、しかも唐突な気絶に、他に異常はないかと、取り急ぎ、七季を揺り起こす白い髪の偉丈夫。
ほどなく彼女は、ぱち、と黒い瞳を開けて、視界にアーチャーを映すなり、思いがけないことを言い放った。

「お兄さん、誰ですか？」
「……貴様、彼女に何をした！」
「黙れ！」
とたんに錬鉄の英霊から、鬼の形相で食ってかかられた、ギルガメッシュの美貌が、金糸の髪にふちどられて凄惨に歪む。
その真紅の目は、じっと何かを見透かすかのごとく、「神使（しんし）」の少女を観察し――こう呟いた。
「増えているな……」

#297　アムネスティ（後書き）

あとがき

＞思ったより長くなりまして、更新が遅くなりました（平伏）。

タイトルの「アムネスティ」は「恩赦」の意。

「記憶喪失」の「アムネジア」と同じく、語源的にギリシャ語やラテン語の「忘れる」という意味の言葉に関係しているそうな。

そんな、とんでもランチタイム。ちなみにアーチャーは一応、「神様見習い」なので、そこまでギルは目くじら立ててません。

そしてオリ主の記憶喪失。

言っておきますが、犯人はギルではありません。アーチャーでもなし。

あと三話で３００話……だと……？

嘘だと言ってよバーニィ。

何か記念に書いた方が良いでしょうか。

本編の時軸では、フライングぎみな

１）体育祭

２）文化祭

３）ハロウィン

な番外ネタくらいしかないんですが。

#298　メディテーション

「うわちゃー……」

そのころの衛宮邸では。

桜の中に巣食っていた、間桐臓硯が無事に除霊されたことで、とりあえず秘密の漏洩もあるまいと出てきた「ジゴロの神様」こと、衛宮切嗣が、茶の間で額を押さえていた。

「じーさん？」

「どうしたの、キリツグ？」

きょん、とした面持ちとルビーアイで父親を見上げるイリヤスフィールと、童顔の中で琥珀の双眸を丸くしている士郎の二人に、白い狩衣の袖を引かれた無精ひげの男は、ちょっぴり強張りぎみの苦笑で答えを返す。

「いやー、うん。七季ちゃんがね、記憶飛ばしちゃってね」

これは酷い。

『は？』

胡坐をかいた膝に、銀髪の童女を乗せた父親へ、その場の人間・人外の視線がのきなみ集まった。

赤、青、琥珀に金色と、色あざやかな宝石のようなまなざしが突き刺さる。

「ちょっとマコト。どういうことさ？」

その中でも黒猫姿のリドルが、七季の主たる栗毛の美少女を、鋭い声で問い詰める。

とたんに、ディルムッドやリインフォースなど、およそ半数の視線が「アーチャー」のサーヴァントであり、天下御免のチート巫女へと移動する。

「うー……私だって、四六時中、ナナちゃんの中を監視してるわけ

じゃないんだってば。
あのジゴロの神様は、いまナナちゃんを依代（よりしろ）にしてるから、いちおう『中』に異変があれば気づきやすいの！
――ああもう、面倒なことしてくれちゃってぇ！」
遅ればせながら、おのが「神使（しんし）」の状況を確認した真言も、まなじりを吊り上げて怒り始める。
「話が見えないんだけど。真言、ちゃんと説明してくれない？」
それまで桜と口論していたツインテールの少女魔術師が、いったん向き直って、緋袴姿の巫女姫へと声を投げた。
同じく、菫色につやめくロングヘアの少女も、凛から目を離して腰を下ろす。
「七地さんが、どうかしたんですか？」
「思兼神（おもいかねのかみ）、いきなりナナちゃんの中に押しかけてきちゃったのよ！
ナナちゃんじゃ、まだ霊格が足りないっていうのに……おかげで、かかった負荷に耐えかねた中身が、しっちゃかめっちゃか！
魂魄と精神は無事だけど、ショックで記憶のピースがバラバラになっちゃってる」
それだって、いままでに手間ひまかけて育ててなけりゃ、危なかったかもしれないのに！
あちこちの異世界や神域に「おつかい」に出しては「修行」をさせて「徳」を積ませたのは、伊達や酔狂では決してない。
七季の「修行」は、わざわざ、他の世界に出してまで歳月を重ねることで――魔術的にいうならば――「魂魄の重さ」をつけるための、促成栽培のようなものだったのだ。
いくら彼女の「器」が丈夫とはいっても、高次存在を受け入れるにあたって、同じ器の中には、本人の魂魄も入っているのだ。
受け入れた存在の霊格に負けないだけの強度が必要なのは当然である。
それは「降ろされる」側の神なら、誰しもが了解していることで、ふだんなら「格」の合わない「器」に呼ばれても、神が「降りる」

ことはない。
「降りる」ことは可能だが、その後の「器」の方がまともに動けなくなるからだ。乗っ取るなら別だが。
「うん。いま『本体』の方で吊るし上げが始まってるね。いくらお偉いさんだからって、あれはないよ。下の連中だって抗議するし、仕事が回らなくなるよね」
そう付け加えたのは、まがりなりにも「ジゴロの神様」である切嗣だ。
ちなみに彼らのいう「思兼神（おもいかねのかみ）」は、「国産み」神話で有名な、伊邪那岐命（いざなぎのみこと）伊邪那美命（いざなみのみこと）よりも七代以上前に誕生した、高御産巣日神（タカミムスビノカミ）の子とされる。
ようするに、七季が昨夜、降ろしていた月読命（つくよみのみこと）よりも、さらに上の世代ということで。
「吊るし上げ……？」
ぶっちゃけ専門外な、神様たちの内輪話に、目を白黒させつつ、凛が切嗣を見つめると。
「そうだね。オモイカネさまのやったことを例えるなら。
景色よし、空気よし、小ぢんまりしているけど、居心地のいい、みんなが共用で使っているお気に入りの別荘に、いきなりアポもなく4トントラックで突っ込んで、入り口をぶち壊した、ってところかな？」
いくら偉いからって、許されることと、そうでないことがあるよね？
「それもこの先、ちまちま改装を続けて、偉い人も泊まれる予定にするはずだったところ」
「うん。そりゃ吊るし上げられるわね」
ようするに共用財産を荒らされ、ぶち壊されたようなものだ。立派な犯罪である。
この場合、その「別荘」が、七季に当たるのだが。
そう考えると、経済観念の発達している遠坂家の若き当主は、真

顔でしみじみと頷いたのだった。

「ふぇ？」

いっぽう、こちらはその本人。

公園の一角で深紅の瞳に見つめられた少女は、パツキン美形の青年と、白い髪の偉丈夫に挟まれた、わけのわからない状態で言い放たれ、当然のごとく小首をかしげた。

「さっきよりも、降ろした神が増えている……とはいえ、この娘が意図して『降ろした』わけではないな。大方、どこぞの神が、無理やり押し入ったのであろう」

ふん、と気に入らない様子で話を鳴らす姿さえも、どこか華やかなバビロニアの王は、柳眉を寄せた面持ちで、じろじろと黒髪の少女を眺め回した。

「娘。自分の中に、何が入っているか、理解しているか？」

「ぶっちゃけ、お話が理解できません、サー」

げんざい記憶喪失の七季は、目の前の相手が誰かもわからないままに、持ち前の順応性で、ちゃっと敬礼なぞしつつ、ギルガメッシュへと応答する。

「一度で理解しろ。

目を閉じて瞑想しろ。石、水、風、火。そのうち、何でも良いから、暗闇に落ちていくものを想像して、それを追いかけろ。意識の底を感じ取れ」

この傲慢な王には珍しく、金髪の美青年は七季にアドバイスを与えた。

――まあ、考えるだけならタダだし。

それに、何かされるなら、とっくにされているだろう、と少女は従順に目を閉じた。依るべき記憶がない現在、彼女は急いでやることもないのだ。

冬の陽射しに透ける目蓋の、薄赤い闇が七季を覆う。
落ちるならば滴。
それが薄闇から、もっと深い場所へ落ちていくところをイメージする。
瞑想は静かに深く、ただ奥底へとこもって、何かないかと探す少女の意識は、内なる世界でさまよい沈む。思い当たるものは、記憶のかけらでも何でも良いのだ。
と。

「いやでござる。拙者、もう書類仕事は見たくないでござるーっ！」
そのへんの木――彼らがいるのは、泉のほとりのような場所だった――にしがみついて、職場放棄したサラリーマンのようなセリフを口走っている、紫暗の髪を結い上げた青年が一人と。
「いきなり押しかけておいてそれですか！？」
白い狩衣が、あまり似合っていない、黒髪と無精ひげが目立つ壮年の男性が一人。
「フシャーッ！」
こちらは、思わず七季も抱きしめたくなるような、まんまる球体もふもふ黒毛玉――三角の耳から察するに、おそらく猫だと思われる――が、太いしっぽを、さらにボワボワに膨らませ。
「……姉上方には通報しましたから。もうバレてますよ。いまごろ『本体』も吊るし上げられていることでしょう……」
月色の睛と、ゆるく結った銀の髪が、黒い衣に映える青年の、低い声が夜風のごとく、かすかだけれどしっかり七季の耳まで聞こえてきたところだった。

――なんじゃらほい。
そんな思いを抱いた少女が、黒衣の青年と目を合わせたところで、ふいに意識が急浮上する。
気がつけば、まだ目の前には青年のルビーアイが、彼女の顔をの

ぞきこんでいた。
「で？」
「……何か、『書類仕事は見たくないでござるー！』って叫んでる、武士みたいなカッコした紫髪にーちゃんと、まんまる黒猫と、狩衣が似合わないおっちゃんと、あと年齢不詳で銀髪なのに官服姿が似合う美青年がモメとりました」
何あれ。妄想？
聞くだに、とってもシュールな光景を、想像してしまったらしく、錬鉄の英霊と最古の英雄は、そろって、とっても微妙な面持ちで、深い深いためいきをついたという。
「神などろくなものではない……」
「この件に関しては同感だ……」

#298　メディテーション（後書き）

あとがき

＞「メディテーション」は「物思い」「瞑想」「沈思」「思索」「瞑想曲」の意。

格上すぎる神様に、むりやり押し入られたショックで、記憶ばらけたオリ主です。

「思兼神（おもいかねのかみ）」のビジュアルは、がくぽ（ボーカロイド）をモデルにしてみました。一人称は拙者。

この話では、ふだん他の神様に仕事を割り振っている役割をこなしてます。

※思兼神（おもいかねのかみ）

：思金神、常世思金神、八意思兼命（やごころおもいかねのみこと）などと呼ばれる。

高皇産霊尊の子とされるが、常世（とこよ）の神とする記述もある。名前の「おもひ」は「思慮」、「かね」は「兼ね備える」の意味で、「数多の人々の持つ思慮を一柱で兼ね備える神」の意。

思想や思考、知恵を神格化したものと考えられている。「八意（やごころ）」は多くの知恵という意味であり、また立場を変えて思い考えることを意味する。高天原の知恵袋といっても良い存在である。

有名なエピソードは、「岩戸隠れ」の際に、天の安原に集まった八百万の神に、天照大神を岩戸の外に出すための知恵を授けたこと。

知恵の神、学問・受験の神として信仰されており、天気に関する唯一の神社、気象神社にも祀られている。

※常世

：永久に変わらない神域。死後の世界という解釈もされるが「永久」を意味し、古くは「常夜」とも表記した。

日本神話や古神道や神道の重要な二律する世界観の一方であり、

対峙して「現世（うつしよ）」がある。
　変化の無い世界であり、例えるなら因果律がないような定常的であり、ある部分では時間軸が無いともいえる様な世界。

#299　ブライド

「とりあえず……私の家、どこだかご存知ですか？」

まずそこからでしょう。

小首をかしげて、ひょこんとポニーテールの黒髪を揺らす少女に、アーチャーが「あー」と灰藤色の目をさまよわせた。

「……その、何だ。君は、所用があって、この近辺に、一時的に滞在している状態でね。自宅は、ずいぶん遠い場所になる」

「？　そうなんですか。んーと、受験か何かで来たんですかね。それとも旅行？」

けげんそうな面持ちで、それでも七季は、とりあえず帰る場所を知っている人物がいるのだと、少しだけ安心した。

「私は……いくつくらいなんですっけ。十代ですよね、たぶん。中学生か、高校生くらいかな。

あ、学校のことも気になります。冬だから、年末か年始――冬休み中なら問題ないかもですけど、学校が始まってるなら、記憶喪失だと困りますよね……」

まず現実的な情報から埋めていこうとする少女に、白い髪の偉丈夫は、どう答えたものかと言葉を探しあぐねる。

なにしろ違う世界へ来ている最中なのだ。それをまさか、ギルガメッシュの前で説明するわけにもいかないし、アーチャーが口で言ったところで信じられはしないだろう。

「とにかく、いったん帰って――」

困ったときの神頼み――とは言いたくないのだが、衛宮邸に戻れば、チートきわまりない「神妻」であるところの真言と、いちおう「ジゴロの神様」と化した切嗣がいる。何がしかの解決策があるかもしれない。

七季の背中へと腕を回し、さりげなく帰還を促そうとする従者を見上げる、小柄な少女。
「そういえば、お二人って、私とどういう関係なんですか？」
ぎしり。
まるきり悪気のないまなざしで、きょとんと問いかけてくる黒瑪瑙の瞳に、今度こそ錬鉄の英霊は固まった。

「我はきのう、共に茶を飲んだ程度の関わりだな。あとはきょうの昼餉を饗したくらいか」
そら。そこに貴様が倒れてこぼした食べ残しがあるだろう。
言われて、テーブルへと目を落とした七季は、ぱちりと瞬いて、金髪の青年へと頭を下げた。
「ご飯中に失礼しました。うう、もったいない……」
「そう言うのなら、残りは片づけていけ。我の昼餐が食えぬなどと抜かすなよ？」
「あう。あらためて、いただきます……」
あっさりギルガメッシュの話に乗って、ふたたびサンドイッチを頬張る少女は、むぐむぐ言いながら幸せそうだ。
記憶喪失にもかかわらず、しっかり胃袋は通常運営するあたり、さすが食い意地の張った七季である。
「そういえば、それとお前の関係だったか？
そこのは、お前の『嫁』らしいぞ、娘」
「んっくん」
いたずらっけたっぷりの、人の悪い笑みを浮かべた金髪の青年は、その優美な指先で銃を突きつけるように、アーチャーを指差していた。
「……よめ？」
「そう、嫁だ」

きっちり口の中のものを飲み込んでから、反駁した七季は、あどけない顔を、自分の隣へと振り向けた。
固まった仏頂面の中で、灰藤色の瞳だけが、感情あざやかに動揺しまくっているのを、少女は見て取る。
じい。
「……ほんとだ。おにーさんに書いてある」
『けんぞくのよめ』
そんな、神字で書かれた――彼女には、それが何故だか神字だとわかるのだ――そこから読み取れる情報は、目の前の彼が、自分のものであり、自分もまた、誰かのものである、ということ。
流れ込んでくるイメージは「こいつ、うちの子のだから！」「よめ！」「手出し無用っ！」なんて、にぎやかなメッセージも伝わってくる。そして桜を思わせる、華やかな笑顔と。
動くに動けない、そんな様子に見える、精悍な横顔をおっとりと仰ぎつつ、七季はふたたび目をしばたいた。
相手の――白く褪せた髪が映える、褐色の肌の男の挙動が、あまりにも不審だったからだ。どうしてそんなにぎこちないのか、と考えたとき、少女の中で、ぱたぱたとドミノ倒しのように思考が連鎖していった。
「え。嫁？　嫁って……ふうふ？
あ、あの私、結婚してたりするんですかっ！？」
少なすぎる情報から、もともと想像力の豊かな少女は、みるみるうちに考えを発展させて推測を立てていく。
それなら、男の――アーチャーの――動揺っぷりが、尋常でないのにも説明がつく。
まがりなりにも、伴侶が記憶喪失になって、すっかり自分のことを忘れていたら、それはショックが著しいだろう。
「私が高校生なら……法律的には問題ない、よな？
あ、私、いま気づいたけど指輪してる。けどこれ、ファッションとか……でも、私の性格で、わざわざ日常から指輪なんてするか？

おにーさんは指輪してたっけ？　人外さんだし関係ない？
えーとえーと、そもそも何で二人で出歩いてたんだ？　デートとか？
けど、さっきおにーさんは『所要がある』とか『一時的に滞在』とか『自宅は遠い場所』とか言ってたし……」
――まさか、婚前旅行とかなのか？
ぶつぶつ考えをダダ洩らしながら、ぐるぐる考え込む七季の様子に、英雄王は「してやったり」な笑顔を隠さない。
いっぽう、大事な大事なマスターから、衝撃の発言をぶつけられたアーチャーはというと、冬の冷たい空気に頭をクールダウンするどころではなく、こちらもけっこう頭が煮えていた。
ギルガメッシュの発言が、誤解を招くためなのはわかっていたが、「七季の結婚」という単語には、さまざまな連想が過ぎったせいでもある。
もちろん戸籍のない、人間どころか人外のアーチャーが、彼女と結婚することはない。
ないのだが――そこらの男と、七季が結婚する、というシーンに「イラッ」としたのは否定できなかった。
だいたい、とっくにやることはやっているのだし、かつて「どうせ一生ずっと一緒だろ？」と言ったのは彼女の方なのだ。
それでも誤解は解かねばならないだろう、と考えたアーチャーが口を開くより先に。
「え、えっちとかも、して、ますか……？」
もしかして。
――だって、おにーさんの方は、大人だし。
めったに見せない、羞恥に燃えたまっかな頬で、へにょんと眉尻を下げて見上げてくる七季の、潤んだ瞳と、好奇と不安の入り混じった表情が、男の思考を完全に停止させたのだった。
アーチャーの脳裏には、昨夜の記憶がリプレイされていたりした。

そのころ衛宮邸では。

＜あのー。こちらがちょっと収集つかないので、そちらにマスターとアーチャーさんを転送してもよろしいですか？＞

「は？　どしたのよ？」

そんな念話を、七季のデバイスである「黎明」から受け取った栗毛の巫女姫は、けげんな面持ちで、衛宮家の庭を転移先へと指定したのだった。

「……何であんたら、付き合い始めのカップルみたいな、よそよそしい雰囲気なわけ？」

やがて現れた黒髪の少女と、長身の男へ、凛がそんな言葉をかけたとか、かけないとか。

#２９９　ブライド（後書き）

あとがき

＞タイトルは「嫁」「花嫁」の意。

オリ主、かるくパニック中。

記憶喪失なのに、いきなりイケメン人外ふたりに挟まれて、あげく英雄王にからかわれたら、さすがにこうなる。

時間がかかったわりに短いのは、当初、もっとしゃべる予定だったギルが、オリ主を持っていこうとしたので、アーチャーと宝具のぶっ放しあいになったのを没ったからです。

珍しく大人気ない弓兵が、固有結界で英雄王をソロ狩りしそうになってました……（汗）。

#３００　ジグソーパズル

「そういうわけで、オモイカネさまには、二百四十万ピースのジグソーパズルを三日で完成させてもらいます。がんばｖ」

メチャクチャな要求を笑顔でごり押しする、波打つ栗毛の巫女さんは、それはそれはかがやかんばかりに美しかった、とのちに七季は述懐する。

ここで簡単ではあるが、記憶についての説明を挟むことにしよう。

人間が情報を思い出すには、二種類の方法があるという。

直接の手がかりによって思い出す「再認」。

連想によって情報を思い出す「再生」。

さらにわかりやすく例を挙げると、音楽を思い出す場合、もう一度その音楽を聴く。これが「再認」である。

「再生」の場合は、曲のタイトルや、歌手の名前から音楽を連想して、その音楽を思い出すというパターンになる。

このことを踏まえれば、「再認」は「再生」の答えそのものを持ってくるのだから、どうしたって「再認」の方が思い出しやすい。

ようするに「脳内には、『再生』では思い出せない記憶がたくさん存在している」ことになる。

そして記憶に関しても、思い出しやすいもの、思い出しにくいものに自然とわけられる。

「再生」で思い出しやすい記憶は、「意識下の記憶」――すなわち、記憶の階層では、上の方にあたる。

いっぽう「再認」によって始めて思い出せる記憶」は「潜在下の

記憶」――記憶の階層では、下の方に沈んでいる、ということである。

このように、記憶ごとに思い出しやすさが異なることを「記憶の階層性」という。

「ようするに、その記憶のフロアどころか、ビルごと、階段ごと、拙者が突っ込んだ余波で、ぐちゃぐちゃになったので……拙者が元通りにすることに……」

黒髪の少女が、アーチャーと共に衛宮邸へ戻るなり、真言はおのが「神使（しんし）」の胸へと手を突っ込んで、ずっぽんと無造作に「中」にいた一柱を引きずり出した。

彼女の第一要求は、当然ながら、七季の記憶の回復である。

ぶっちゃけた話、無理やり思兼神（おもいかねのかみ）が降りたおかげで、彼女の霊格は上がってしまった。

いったん「降ろす」ことができたのだから、これからは受け入れ可能……にはなったのだが。

いきなり押しかけたうえ、記憶を吹っ飛ばすような無茶をした神を、七季が呼ぶ気になるかどうかは、まったくの別問題である。

げんざいの彼女は、「あったはずの記憶」が認識できていないために、「記憶がない」ということを、それほど気にしていないのだが、元に戻った七季がどう思うかは、それこそ神様でもわからない。

――元に戻すって、どうやるんだろ？

記憶喪失にはなったものの、知識はそこそこ残っている黒髪の少女は、「記憶喪失の薬」なんてものは聞いたことがない、と首をひねりっぱなしである。

記憶「喪失」とはよく言うが、じっさいには、何らかの不具合や、記憶のラベル付けの不備によって、その記憶が再生できない、というパターンがほとんどだ。

外傷によるものでもない七季の場合、記憶は中にあり、それが霊的なショックでバラけてしまい、上手く結び付けられないのだろう、と思兼神（おもいかねのかみ）じしんも述べた。

頭上で結い上げてなお、背中に流れる紫暗の髪があざやかな青年は、さっきから正座したままうなだれている。その膝には、一抱えもあるサイズに変化した、黒猫まんまる災厄神が、石抱きよろしく乗っかっていた。

いくら格上でも、穢れを司る神に乗っかられるのは嫌なようで、思兼神（おもいかねのかみ）は、地味に顔が引きつっている。

「まあ、戻るのなら……」

どん。

助かりますけど、と言いかけた七季の言葉を、まなじり吊り上げた形相で、琥珀の目を据わらせている巨乳巫女さんが、仁王立ちして遮った。

「それじゃ、特・急・で！　すぐに取りかかってもらいましょー？　期限は三日ね」

腰に手を当てて宣言する、真言の背中を見つめた黒髪の少女は「そんなんで戻せるんだ。神様凄いなー」と感心しているが、その向こう――七季には遮られて見えない――では、人形めいた美貌の青い目がしっかり涙目になっていた。

「む……！」

「神々ぜんぶに代わって考えることができるほど賢い神様が、まさか無理とは言いませんよね？」

いまさらだが、七季は肉体年齢よりも、はるかに年を重ねている。フェイトの子育てを十年ほどやっていた、というだけでも、それは推し量れるだろう。

「だ、だいたい二百四十万ピースのジグソーパズルくらいあるのだが……」

蛇足ではあるが、世界最大のジグソーパズルを完成させた、とある外国人の話だと二万四千個ものピースを組み立てるのに、およそ

百七十九日。

毎日、二〜三時間ずつ、こつこつと続けて、総製作時間は、五百三十七時間にもおよんだという記録を残している。

二百四十万ピースは、その百倍。

ようするに、五万三千七百時間かかる計算になる。人間であれば。二十四時間フルで続けたとしても数年かかるなど、もはや苦行というレベルを通り越している。「神様だから」と言われれば、それまでなのだが。

「……いちおう、あっちのが偉いんじゃないの？」

他に訊く相手もいないので、イリヤスフィールが「ジゴロの神様」なる父親へと、膝の上からこしょこしょ問いかければ。

「オモイカネさまは、神たちの取りまとめ役というか……仕事を割り振る地位にいてね。ようするにインドア派なんだ。

書類仕事っていうのも、まあ、数多いる神々へ、あちこちに眷族や神じしんを派遣するための、スケジュール調整やバランスを、一手に引き受けているひとだからね。

年がら年中、二十四時間、オールウェイズ常に仕事中。神には、試験も学校もないけど、休みもないからね、基本的に。神降ろしで呼ばれて遊びにいくこともあるんだけど……あのひとは霊格が高くて、降ろせる器が限られてるから。

思考能力と事務能力は図抜けていらっしゃるんだが……戦闘には向かないから、神剣振り回すような真言ちゃん相手だと、さすがに苦手意識があるんじゃないかな」

とりわけ、日本に住む神々は、一点特化の権能に偏っているからして。

「ちなみに、いまここにいるのは、英霊と同じく、分霊体ね。本体は、いまも現在進行形で仕事中だと思う。

僕も分霊でここに降りてるからね。英霊と違うのは、分霊体の記憶や経験は、ちゃんと本体にフィードバックされるところ」

銀髪の童女は、ぱちぱちとルビー色の目を瞬いて「ずっと一緒に

は……いられないのかしら」としょんぼりした表情でうつむくのだった。

いっぽう。

――このひとだ。

桜花を思わせる唇に、爛漫と咲き誇る花のような華やかさを持った栗毛の少女。

そのひとを視界に納めたとたん、七季は、隣に並んでいた男に、あの神字を記したのが彼女であると、はっきりわかった。

そこにいるだけで、花吹雪がちらちらと降りかかるように訴えかけてくるような存在感。

美しい、けれども儚さを孕んだその少女から、七季は目を離せずにいた。

――きれいなひとだなぁ。

彼女の――漣真言の――織手が、おのが胸に吸い込まれたのも、ただじっと眺めて受け入れるほどに。

「そんなわけだからナナちゃん。しばらく、『中』にオモイカネさま入れてもらうけど、大丈夫？」

「あ、はい。作業をするためでしょうし、これといって異常もありませんから」

心配そうにのぞきこんでくる、琥珀の双眸にこくりと頷いて、七季はじっと栗毛の巫女を見つめ返した。

「あなたのことは、何と呼んだら良いですか？」

ぴしゃーん。

とたん、衛宮邸の居間に沈黙が落ちた。その背後には、雷も。

「そ……そーだよね。ナナちゃんにとっては初対面だよね？」
常とは違う、他人行儀なまなざしと態度が、真言には地味にショックだったらしい。
ふだん不遜なほどに自信たっぷりで、やる気に満ちあふれたチートな巫女さんには珍しく、頭を殴られたような目眩を覚えている。
くわんくわんと頭の芯が揺れる。それに伴う、少しの吐き気と。
かつて記憶を龍神に消された、真言の幼なじみが、つかのま脳裏に過ぎって消えた。
「漣……漣真言っていうんだけど……できれば、『先輩』って呼んで欲しいかなっ」
「はい、先輩」
七季は素直に頷く。
――年上なのかな？
空元気の明るさで、声を弾ませる真言とは対照的に、黒髪の少女のソプラノは落ち着いている。
「あの、できればおにーさんの名前も教えてもらえませんか？」
申し訳なさを感じつつも、ちょっぴりこわばった栗毛の少女の表情を、見ないようにして、七季は傍らの長身を振り仰いだ。
「アーチャーと」
低い声が、灰藤色のまなざしと共に降ってくる。
「アーチャーさん、ですね」
どこか確かめるように、噛みしめるように名前を繰り返す少女。
該当する記憶がないかと探してみるものの、再構成される情報は見つからない。
「いや……『さん』は、つけなくて良い」
「あの、でも」
年上ですし。
白い髪の偉丈夫に続かんとばかりに、畳の上へ腰を下ろした黒髪の少女へ、他の従者がにじり寄る。
「リインですっ」

「ディルと呼んでください！」
「リドルだよ」
「あ、にゃんこ」
詰め寄ってくる美貌に、若干、引きぎみだった七季は、しゃべる黒猫にほわんと頬を緩めると、そのつややかな毛並みの獣を抱き上げる。ふわふわした毛皮をまとうリドルは、その獣姿のままで顔をすり寄せ少女へとなついた。
「リドル、も……人外さんか。何でこんなに、いっぱい？」
しかも美人ばっかだし。
それがとっさにわかるあたりは、記憶を飛ばしていても「神使（しんし）」ということなのか。霊格じたいは変わりないのだから、霊視もふつうにできるのだろう。
「君が引っかけたから」
「ンなアホな」
『いや、そこは合ってる（ます）』
ほぼノータイムで、黒髪のタレ目青年と銀髪ルビーアイ美女、白い髪の偉丈夫からの総ツッコミが入った。
「マジですか」
真顔でツッコミ返す少女の、真面目な面持ちもそこまで。
「あと、マスターのデバイスで『黎明』と申します」
「ぴゃっ！？」
指輪から聞こえてくる声に、びっくりした七季が奇声を上げるも。
「ボクは医療用デバイス『ガニュメデス』です、マスター！」
「みみぃっ？！」
シルバーに紫水晶を一粒だけはめ込んだイヤーカフから聞こえた声に、またしても飛び上がる記憶喪失まっくろ巫女。
「他にデバイス『ノア』もいます」
「ハロー、マスター」
「ほわぁ！」
首元のチョーカーまでしゃべったので、驚きすぎて挙動不審な七

季に、笑いを噛み殺した魔術師たちと剣精の少女が、生温かい目を送っていたりするのだった。

けっきょくその日は、記憶を飛ばした七季への自己紹介と、簡単な状況説明で一日が過ぎたのだが。

落ち着かないからと、渋る従者たちを説き伏せた少女は、どうにか一人で眠ることのできる環境を手に入れて――夜の闇を銀幕に、流れ去った、過去の夢を映し出す。

葬儀の間、身じろぎひとつせず、淡々とした様子で来客に応対していた伯言――まだ六歳の子供がだ――は、ようやくと七季の腕の中で、涙をこぼし始めていた。

「ちちうえ……はは、うえ……」

ひとりだけ。ぼくを置いて。

「はくげん」

事故だった。

陸家の夫妻は、たまたま風邪を引き込んだ息子を、隣家の七地家に預けて、危篤だと連絡を受けた親族――伯言の曽祖父に当たる――の元へ出かけたのだ。

その帰り、居眠り運転のトラックによって、交通事故に巻き込まれたという。

「はくげん」

かたかたと震える体を抱きしめる、七季の手もまた小さい。

それでも、まるで血の気を奪われたように、まっしろで冷え切った男の子の頬に、黒髪の女の子は桜色の唇を繰り返し落とした。

否、額に、目蓋に、目尻に、こめかみに。

「さむい……」
「はくげん」
彼女は、届くだけキスの花びらを散らす。優しく、優しく、伯言の背中を撫でる手と、同じように。
「はくげん。はくげん。だいじょうぶ。さむくないよ」
あっためてあげる。
きゅう、と抱きしめることで、取り残された寒さに怯える幼馴染の体に、自分の体温が移れば良い、と七季は思いながら、一緒の毛布に包まって、何度も彼の名前を呼ぶ。
「ここにいるよ。わたしがいるよ」
ひとりじゃないよ。
呼びかけるのと同じ数だけ。もしかしたら、それよりも多く。
「はくげん。ずっと、いっしょにいるから」
黒髪の女の子は、唇に慈しみを込めて降らせる。
それを、「慈愛」などと呼ぶとは知らない幼さで、それでも両親を亡くした幼なじみを抱きしめる。
小さな、けれども温かい手のひらと体は、その健気さをもって、幼子を見舞った死の影を打ち払おうとしていた。
その甲斐あってか、同じ毛布に包まって、それでも震えていた男の子の、栗毛の間からのぞく虚ろな暗い目が、ようやく少しだけ光を取り戻す。
「……ほんとう、ですか？」
ななき。
涙に潤んだ声が、喉の奥から搾り出される。
「置いてったり、しない？　ぼくのちちうえみたいに。ははうえみたいに」
寂しさに震えていた子供は、目の前の温かな女の子にすがりついた。
七季はやわらかく、温かく、葬儀の抹香ではない、あまい果物じみた香りがした。

「どこにもいかない？」
オレンジ色にぼやける明かりの中、伯言の紅茶色に潤む瞳は、優しい夜色に受け止められた。静かだけれど深いまなざしだった。少し赤みを帯びている白い部分が、彼女も悲しんでいたことを教えている。
「ここにいるよ」
ちゅ、とふたたび女の子の唇が降った。
優しく、温かく、やわらかい感触だった。
眠る前に、伯言の母がくれるキスに似ていた。

――まだ、ななきがいる。
唐突に、ふわりと温かな安堵が、子供の胸のうちに広がったのは――気づける余裕があったのは――むしろ彼が、同い年の子供よりも大人びていたからだろう。
独りだと思っていた。けれども残されたものがあった。傍にいてくれる人がいた。
――それは何て幸せな、素晴らしいことなんだろう！
父と母はいないけれど。もう会えなくなってしまったけれど。
悲しくて悲しくて悲しくて。
張り詰めすぎた幼子の胸は、いきなり詰め込まれ過ぎた悲しみに、ぱちんと破裂してしまった。
それを逃避というものもいるかもしれない。
すり替えだと、指摘するものもいるだろう。
けれど、幼い伯言の世界に、ぽっかり開いた大きすぎる穴を――そのとき埋めることができたのは、傍にいた幼なじみの女の子、ただひとりきりだったのだ。
痛みすぎた胸を、優しくあまい何かが包み込む。
父母を喪ったばかりの子供は、その夜、七季のぬくもりに溺れて

眠った。

うたた寝から目を覚ました少年は、懐かしい記憶の余韻を噛みしめて、それはそれは幸せそうに微笑んだ。白皙の美貌が、花のごとくほころぶ。

あの日から、彼は――伯言は、少女を守ると決めたのだ。

たとえ「神妻」となった真言に、その手が握られようと。

――ずっと、その傍らを歩くと。

「だから、ねえ」

つややかな栗毛にふちどられた、秀麗な美貌の少年は、その薄暗い待合――という通称で呼ばれてはいるが、実質そこは尋問室の控えの間だ――で、紅茶色の目を細めて剣呑な笑みを刻んだ。

「あなたたちみたいな、身の程知らずは、お呼びじゃないんですよ」

伯言が見下ろした先の床には、白いポリプロピレン製テープ――いわゆる荷造り用のビニール紐で念入りに縛られた、屈強な男が数人、転がっている。

どろりとした目なのは、薬物でも使われているのだろう。一見、色の濃い袴姿なので、剣道場の門下生にもみえそうないでたちである。

そこへ、控えめなノックが割り込み、少年はついと視線を向けると「どうぞ」と短く応じた。

「きょうは君かね」

良く通るバリトンが、サマーセーターを着ている伯言の耳を打った。

「ええ。お忙しいところを、手間を取らせて申し訳ありません」

七地家の近くをうろついていたので。

口ぶりだけは殊勝だが、伯言の目に瞬く光は猟犬のように獰猛だ。

それを見て取った、カソック姿の男――言峰は、その渋い面(おもて)にゆ

るく笑みを浮かべた。
「何、かまわんよ。これも仕事のうちだ」
「見てわかると思いますが、七季を狙った、関西呪術協会の手のものと推測されます。装っているのかもしれませんが……」
「既に、体には訊いた、というところかな？」
言いながら、言峰の死んだ魚のような濁った黒い目が、「獲物」を見下ろす。
白いビニール紐の食い込む、むさくるしい男たちの肌には、ヤケドのあとがまざまざと残っていた。
それは少年の仕業である。
「関西呪術協会のものかどうか、ということだけですよ。詳しいことは専門家に任せます」
あっさりと切り返して、栗毛の少年は、その怪我人たちを、何のためらいもなく蹴りつける。どず、と爪先が肉に埋まる、鈍い音がした。
「ぐうっ！」
「七季の巫女（みこけ）気のつよさと、魔力・霊力の高さを狙ったものでしょうが……あのひとは、あなた方の手が触れて良いような存在じゃないんですよ」
夏場にもかかわらず、芯から凍てつくような、冷え切ったテノールが侮蔑を隠さずに少年の唇から吐き捨てられる。
「それぐらいにしておきたまえ。あまり残ってもまずい」
「……どうせ治すんでしょうに。言峰さんはオヤサシイですねえ」
皮肉を含んだ、ぞっとするほど蠱惑的な少年の笑みは、悪魔を連想させる。
「私は『精神（なかみ）』の切開専門でね。肉体的な痛みに逃げられても困るのだよ。患者だからな、彼らは」
「それはそれは」
くすくすと邪気たっぷりな——朗らか過ぎる笑い声が、薄暗い部屋にこぼれた。

「では是非とも、じっくり、丁寧に、たっぷりと時間をかけて診察してさしあげてくださいね。神父様」

「もちろんだとも」

薄暗い部屋では、少年の着たサマーセーターの、オレンジと茶色、白のボーダー模様も、乾いた血のように褪せて映る。

いわずもがな、神父のまとう漆黒のカソックは死神の衣さながらで、苦痛に目を覚ましていた男たちは、背筋を這う不吉な予感に、おののかずにはいられなかった。

#３００　ジグソーパズル（後書き）

あとがき

＞「ジグソーパズル」は「ジグソーパズル　（切り抜きはめ絵）」の意。

語源は「ｊｉｇｓａｗ　＋　ｐｕｚｚｌｅ」で「ｊｉｇｓａｗ」は「細帯鋸」「糸鋸」のこと。

また、ジグソーパズルは「固い土台に描かれ、連結するように断片に切り取られた絵を組み立て直すことを必要とするパズル」だそうな。

まあ、元の一枚板に書かれた絵を、ざっくざくに切っていったものなんでしょうが。

世界最大のジグソーパズルって何ピースぐらいだろうと調べて、出てきたのが、「二万四千ピース」でした。

ちなみに全長は十二フィート（三メートル六十センチ）気が遠くなりそうです（汗）。

ちょっとオリ主の記憶を取り戻しがてら、過去をチラ見させたら、長らく出番のない幼なじみが、まっくろ全開だった件。

どうしてこうなった……（汗）。

まあネギま編の伏線というか、ネタ程度に。

長の娘を狙うよりも、まずは外部の有望なの狙うでしょう、ということで。

巫女の資質持ちとしては、わりと有名な部類のオリ主でした。チートな先輩があちこち連れまわしているので、それなりに目立ってます。

ちなみにチートな先輩は、既に神様のお手つきなので除外。

記念すべき３００話がこれってどうなんだ。
次回は、３００話突破記念の番外編です。

＃３０１　白昼のナイトメア（前書き）

まえがき

＞３００話突破記念の番外編です。

聖杯戦争には関係ありません。ほのぼの……かどうかは怪しいです。

#３０１　白昼のナイトメア

「文化祭？　いや来なくていーから」
すげなくきっぱり言ってのけたのは、夏の課題テストが明けたばかりで、いくぶんやつれぎみの七季だった。
学校から帰宅した少女は、セーラー服もそのままに、不服げな人外の従者たちへと困り顔を向ける。
「とりあえず着替えても良いか？」
あどけない面輪の中で、眉根を寄せてためいきをつく様子に、あわててアーチャーとディルムッドが顔をそらしたのは余談である。

「しかし、連日こんなにマスターが頑張っているのだから、その成果を見たいと思うのも当然だろう？」
使い魔を代表して発言したのは、やっぱり過保護かつ面倒見の良いアーチャーだった。
「あのなぁ……」
ぎし、と少女の腰かけたベッドがわずかにきしむ。後ろへと倒れこみそうな様子の少女は、いったん両の手を体側について、ぐてっと上半身をそらすと、のけぞらせたおとがいを持ち上げて、うんざりと呟いた。
「うちは公立高校だぞ？
面白みも何もないっての。毎日やってるクラス展示の制作だって、うちの学校の歴史の発表とかいう、お茶濁し品。
そりゃあミニチュアとか、ある程度、手間はかけてるけどな。あれは、はっきり言って担任の見栄のためだ。もうホントに勘弁して

欲しいって思いながら、みんな呪詛りそうな面持ちでやってるもんだぞ？」

高校三年生の受験の夏にやらせることじゃねえ。

いつもは表情ゆたかな顔を向ける、従者に甘い七季も、顔の筋肉を動かすことさえおっくうとばかりに、無表情で言葉を崩す。

何しろ、八月は「夏休み」とは名ばかりの、課外授業漬け。

加えて、体育祭と文化祭の準備に追われながら、「夏休みの宿題」と、それとは別に、毎日の課外授業の宿題が出るのである。たまったものではなかった。

それが終わったと思ったら、今度は夏課外の成果を確かめるという名目の「課外テスト」が九月の頭に組まれている。

――もうイジメかと。

そのあとに、文化祭と体育祭が連チャンでやってくるのだ。追い込みも追い込みで、中には学校に泊まる生徒もいるほど（もちろん禁止されているが）というせっぱつまり具合。

この時期の、七季の通う高校は、学校全体に満ちみちる気配が「異様」の一言である。

「喫茶店とか演劇なんて、華やかさは皆無だ。

いちおう演劇部と軽音部は、体育館のステージ使ってやるらしいから、まあ見所はそのへんだけかな。美術部も絵の展示するって言ってたな。

他のクラス発表の内容は知らんから、フォローのしようがないけど、飲食系だけはない。衛生管理が面倒だし、そんな予算はないだろ」

公立高校は、せちがらいのである。

「よっ」と声を上げた小柄な少女は、ハーフパンツからのぞく足を何度かばたつかせながら、腹筋で起き上がった。拍子に、Tシャツに包まれたバストが、たゆん、と重たげに揺れる。

「あ。いちおう家庭科部がカップケーキの販売と、茶道部が、お茶を立てるって話は、どっかで聞いたっけか。まあそんなもん。買い

たいなら、食券取っとくけど？
あとは武道場の方でやるバザーくらいだな。もっとも、こっちはＰＴＡと生徒からの持ち寄り品だし、期待はしない方が良い」
ざっくざくに文化祭への夢を斬って捨てる七季が、いちばん残念そうな面持ちなのは、このところ嫌というほど現実に振り回された当人だからである。
「何とか、文化祭で配布するための部誌は間に合ったんだ……あーもう。しんどかったー！」
ぼふんっ。
今度こそ、後ろのベッドへと倒れこんで、黒髪の少女はポニーテールをサイドへとずらした。単純に寝にくかったのだ。
いちおう文芸部の部長だった七季は、文化祭に間に合わせるべく、部員に原稿の催促をしたり、その原稿をワープロで入力したり、表紙用のイラストを書いたりと、編集作業を一手に引き受けていた。
もともと部員が少ないこともあるし、「文芸」の範囲であれば、エッセイだろうが、短歌だろうが、俳句だろうが、作品のジャンルは問わない、というフリーダムな傾向なので、まとめる方も大変だ。
けっきょくページ数をかせぐために、七季はペンネームを変えて、いくつかの作品をそこに寄稿した。
短編小説を二本と、短歌をいくつか。それと自由詩を書いたのだが、友人いわく「詐欺だろう」と思うほど、小説の作風が違うので、まず本人から聞かなければわからない。
「まあ、どうしても来たいって言うなら、うちの文化祭は一般公開されてるから、止めようがないけど……絶対に学校では他人のふりしてくれよ。それだけは約束」
念を押すマスターに、遠まわしながら、お許しをもらった、と気分が上向きな使い魔一同は、二つ返事でその日を楽しみにするのだった。

そして文化祭当日。

学生である少女は、とっくに朝早く家を出たので、ふだん学校には着いていかない使い魔たちは、霊体化のまま、こっそりと家を出る。

そして、おもむろに物陰で現界すると、デバイスから取り出した私服をまとい、いそいそと解放されている学校へ踏み込んだのだが。

「あっちだね」

もちろん使い魔たちは、七季とラインが繋がっているため、近くであれば居所はすぐにわかる。

他人のふりをしろとは言われたが、見に来るなとは言われていない。そんな言い分である。

いつもは黒猫姿が多いリドルも、目立つルビーアイを薄茶のサングラスでごまかし、かつてホグワーツに通っていたころのような少年姿で、校内を歩いていた。

黒髪の彼と違って、髪の色が白やら銀やらで目立つアーチャーやリインフォースは、注目を集めはするものの、いっそう人目を――女性が圧倒的に多いが――惹くディルムッドがいるために、ふだんほどのインパクトはないようだ。

その代わり、魔貌封じのメガネをかけてなお、その美貌で、女性の誘いをひっきりなしに受けている黒髪の青年は、「連れがいるので」とすげなくあしらっている。

幸いにも、隣を歩くリインフォースも、整いすぎた人形のように浮世離れした美女なので、ほとんどの女性が道を譲ってくれる結果となっていた。

と。

たたたたーっと黒い疾風が、ひらりとポニーテールの軌跡を残して、薄い黄緑色をしたリノリウムの廊下を、かろやかに駆け抜けていく。

「あ」

その傍らには、彼女の幼なじみである、若白髪の少年がぴったりとついて、共に彼らとすれ違う。白い開襟シャツに黒いズボンの制服姿が、妙にしっくり似合っているところが、彼もれっきとした学生なのだと知らしめていた。

「霜夏、次、あっちの会議室で美術部の展示っ」

「オッケー！」

まるで鬼ごっこ中の子供が隠れ家を探しているような風情で、七季と霜夏は、文化祭中のごった返す校内をすり抜け、風のごとく走っていった。

いったいどうして――と二人を目で追ったアーチャーたちは、ほどなくその理由を理解する。

「早っ、早いよ、七地君！」

「せっかく休み時間に一緒に回ろうと思って、教室まで行ったのに……」

「やっぱり七地さんと一緒だったし！」

「付き合ってるのかな？」

「ってことは、もしかして陸遜君はフリー？」

『マジで！？』

ざわめきの中でも、きゃいきゃいと響く高い声は、数人の少女たちから放たれるもの。

「じゃ陸遜君ねらお！」

きゃーっ。

校則の規定よりも、だいぶ短いスカート丈のセーラー服が、ひらひらと翻って通り過ぎる。

「……もしかしなくても」

「アレから逃げてたんだろーね」

やけに人工っぽい、茶色がかった髪が特徴的な、女生徒のグループを、灰藤色の目だけで追いかけたアーチャーは、低い声でポツリと呟いた。

その言を継いだリドルも、乾いた笑みを浮かべつつ、見なかった

ことにする気まんまんで前を向く。
聞き覚えのある名前が飛び出した気もするが、そんなものは気のせいだと。
「あの、私たちと一緒に回りませ、ん……」
別のグループが、またしてもディルムッドに声をかけたが、こちらはリインフォースを見て白旗を揚げたらしく、すごすごと立ち去っていった。

「ああ、見てたのか」
ようやっと、昼食時に人目を避けて――具体的には結界を張って――合流した従者たちと七季たち（幼なじみ連れだった）は、穴場だという図書館の二階にある、空き教室で売店のサンドイッチを食べていた。
七季が図書委員なので、こういう場所には詳しいのが幸いしたといえる。
「毎年のことだからさ。霜夏たちが女子に追っかけられるの。クラス展示で当番に割り当てられた時間以外は、伯言と霜夏に付き合って逃げ回ってるんだ。展示見ながら」
モテるイケメンは大変だよなぁ。
けろっとした顔で言ってのける黒髪の少女に、その伯言と霜夏が苦笑いを浮かべてコーヒー牛乳を飲んだ。少年たちの端正な面輪には、肉体的な疲労を上回る、気疲れがにじんで影を作る。
「親しくもない相手と回っても、気疲れするだけですしね」
「右に同じ。ふつうに恐いよね。殺気だった女子の集団って」
食べ終わったパンの袋を、ビニール袋に突っ込みながら、若白髪の少年が続ければ。
「一人で来るならまだしもなぁ」
大きな目をぱちんと瞬いて相槌を打つ七季に、栗毛の少年が、か

ぶりを振る。
「けっきょく他の人ともめるんですから。グループだと、また別のグループ同士でもめるんで、きりがないですよ」
だから、最初から逃げているのだという。
「あさっての体育祭も、似たようなことになるし」
『え？』
少女の言葉に、リドルとディルムッド、アーチャーは耳を疑い、リインフォースは「走り回っていては競技に差しつかえるのでは……」とズレた思考に走る。
「体育祭の場合は、私が追っかけられる立場だけどな。校舎裏とか、人気のない場所に呼び出されたり、連れてかれそうになるから、その前に逃げるんだ」
ぴきん。
しれっとのたまう七季から、不穏きわまりない内容を聞いて、硬直する従者たち。いっぽう黒髪の少女は、隣で顔をこわばらせている少年たちの腕を、軽くなだめるように叩いて続けた。
「体育祭なら、ちょっとくらいケガしても不審に思われないからなー。女の嫉妬って恐いよな」
イケメンの幼なじみ舐めんな。
七季のスクールライフは戦場であるらしい。

#３０１　白昼のナイトメア（後書き）

あとがき

＞そんなわけで３００話突破記念は、しばらく出番のない幼なじみズとオリ主世界の日常を突っ込んでみました。

文化祭と体育祭。体育祭は、名前だけですが。さすがにハロウィンとはいっしょくたにできませんでした。申し訳ない。

オリ主たちにとっては、悪夢のような文化祭と体育祭でございます。苦行だろこれ。

ちなみにスケジュールは、

＊一日目：文化祭

＊二日目：文化祭

＊三日目：体育祭

の流れ。一部実話というか、書き手のリアル学生時代のスケジュール。殺す気か。

この物語のオリ主は、何でこうしょっぱい青春時代なのだろう（待て書き手）。

異世界で、どんなに好き勝手やってるように見えても、帰ってくれば人並みの苦労が待っているという。

イジメられたりはしていませんが、お祭り騒ぎだと、良くも悪くも、羽目を外す人間はいるものです。

気がつけば、総ＰＶ５００万、総ユニーク５０万を超えていました。

これも読み手さまに支えられてのことです。この場を借りて、御礼申し上げます！

ノリとネタで進む、無法地帯まっしぐらの作品ですが、よろしければ、どうぞこれからもお付き合いください。

#302　ドリームキャッチャー

「昼間は中座してしまって、申し訳ありませんでしたー」
ぺこり、と烏衣（＝黒衣）をまとう黒髪の少女が頭を下げるのは、ひとときの庭。
夢の通い路。
高く結い上げた黒髪が、さらりと揺れて風を呼んだ。
ざあっ。
「ほう。夢をして我を招くとは……いまどき珍しい真似をするな、娘」
相対するのは、黄金（きん）の王。

「いきなり飛ばされたもんで、お礼もあいさつもできずに失礼しました」
そこは緑と花の色あざやかな庭園に囲まれた、東屋の下だった。
開放的な造りは、ウルクのそれに似ているが、景色を彩る花たちは、少女の生国のものである。
とりわけみごとなのが、明るい陽射しの中、うす紅（くれない）の花びらを千々に散らす桜の木だ。
彼女の国で「花」といえば、まずこれを指す。それくらい身分を問わず愛されたもの。
「まったくだ。……が、礼は知っていたようだな。血肉を伴わずとも、みずから侘びに来たその心意気は買ってやろう。良い、許す。」
鷹揚に手を振る古代ウルクの王は、木製のベンチに片足を投げ出し、深紅の双眸でちらりと七季を一瞥した。

象牙の肌に、夜色の髪と瞳を持つ少女は、その身にまとう装束もまた黒である。

あどけない頬に落ちる、長い睫毛の影が、水に落ちる虚像のように静かで透明だった。そこに憂いの暗さはない。

「あれからどうした」

「はい。私の主――だと思います――が、神様に話をつけてくれました。まだ、記憶の方は戻ってませんが、じきに何とかなるんじゃないかと思います」

「そうか」

かつてウルクでそうあったように、腰周りを金の鎧で固めるいっぽう、たくましく均整の取れた胸板も露(あらわ)なギルガメッシュは、短く応じる。

対照的に、少女がまとう漆黒の巫女服は、彼からしても見慣れない、異装ではあったが、淡い色の花が舞い散る光景に、その黒は良く映えていた。

卓を挟んで相対するさまは、あまりにも違うために、かえって奇妙な調和を生んでいた。

そして石造りのテーブルの上には、大理石の白にもあざやかな、紅い漆塗りの酒器が一そろい。

金糸の神の青年から見れば、宝玉で飾られた自前のそれよりも貧相には映ったものの、それでも桜の下で見る漆の赤さには風情を感じた。

「悪くない……が、肝心の酒がないな」

酒器を用意したのが少女である以上、酒を用意するのも彼女のはずである。

けげんな面持ちで、催促の色を見せるでもなく、ただ単純な疑問を口にするギルガメッシュに、黒衣の巫女は穏やかなソプラノで答えた。

神の無体を受けた少女は、ただゆるやかに春の庭で笑む。

「ここに現(うつつ)は持ち込めませんから……ですから、いまからご用意し

ます」

たとえ記憶を打ち砕かれても。
知識は残る。
本能は悟る。
その身に受け入れたものが教える。彼女は「器の巫女」なのだと。

「器に水を満たしましょう。水にかけらを溶かしましょう。私は容(い)れる。私は肯(うべな)う。この名は揺れる。この名は満ちる」

ざざあっ。
花びらに似た唇が、かろやかに歌う。
黒衣の巫女は、ベンチに腰かけたまま、涼やかなソプラノを紡ぎあげて風に乗せる。

「委ねます。君臨者よ。私を選び、私を注ぎ、私を熱し、私を醸(かも)し、私を満たし、私を掬(すく)う」

風が踊り、枝を揺らし、花吹雪を散らす。

「私が変わる」

それは水のようにとうとうと流れる旋律。

「干したまへ。酔(ゑ)ひたまへ。笑みたまへ。
私に怯えることはない。私を拒むことはない。
御灯(みあかし)の元、御名は薫(くゆ)り、御霊(みたま)はたゆたい、御社(みやしろ)に遊ばす。御饗(みあへ)聞こし召したまへ」

少女の声は誘い水となって、このつかのまの庭園に甘露を呼ぶ。

「八つの頭（かしら）。鬼灯（ほおずき）の目。八つ峰の体。剣（つるぎ）は砕け、垣根は閉じた」

集う霊気は滴へと変じる。芳ばしいあまやかな香りを湛える美酒が、夢の通い路で実を結ぶ。

「八塩折之酒（やしおおりのさけ）」

「うちの国では、大蛇（おろち）退治に使われた酒です」

八塩折之酒（やしおおりのさけ）。

それは、日本神話で最も有名な幻想種――八俣遠呂智（ヤマタノオロチ）が、正体を失うほどに酩酊したという伝説の名前だ。

直訳するに、「八度にわたって醸す酒」という意を持つそれは、貴醸酒（きじょうしゅ）に近いものではないかという説もある。

どんな大酒のみをも酔わしめる、美酒――それを彼女は「降ろした」のだ。

神代の昔、須佐之男命が八岐の大蛇を退治する時、脚名槌、手名槌の夫婦に作らせた酒。その「八塩折之酒（やしおおりのさけ）」を入れた酒壷を祀った神社が、日本にはある。

幻想と信仰を集める、その伝説は、さまざまなものに神が宿るとされた、この国では、さもあらんといったところか。

ちなみに、島根県にあるその八口（やぐち）神社は、「印瀬（いんぜ）の壷神（つぼがみ）さま」と地元では呼ばれている。祭神は須佐之男命（すさのおのみこと）だが、ご神体はその酒壷であるからだ。

閑話休題。

「何。大蛇（おろち）退治だと？」

知っているものは知っているが、かつて英雄ギルガメッシュは、

蛇に騙されて、不死を得る機会を失った。

それから彼の蛇を嫌うことといったら、甚だしいものである。それだから――この英霊は、いっきに上機嫌になった。「蛇殺しの酒」。ぜひとも飲んでみたいものである、と考えたのだ。

朱塗りの杯に注がれた酒は、白くあまやかな香りを立ちのぼらせる濁り酒。

「毒の酒ではありません。美味しすぎて飲みすぎたのでしょうから」

そして酔い潰れたところを、神話の八頭八尾の大蛇（おろち）は討たれたのだと。

「ふ。大蛇（おろち）ごときに負ける我ではないわ」

飲み干してくれよう。

フハハハハハ、と高笑いをしながら、ギルガメッシュは黒衣の巫女の酌を受ける。

七季から紡がれる、問わず語りを聞きながら、杯を重ねる黄金の青年は、その味わいに酔いしれる。彼の「蔵」にも美酒は数知れず蓄えられているが、いま「降ろされた」ばかりの霊酒は、また格別の味だった。

水の代わりに酒をもって醸した酒は、果実の甘さを孕んだ、相当に口当たりの良いもの。

そのうちに、ふたたび七季が「降ろし」た塩を酒の肴につまみつつ、最古の英雄はゆるやかな子守唄のような、その昔話に耳を傾ける。

彼は神が嫌いだが、天上を追い出された須佐之男命（すさのおのみこと）の物語には面白そうに目を細めていた。

それはゆるやかな、まどろみにも似た時間。

花の降る音と、昔語りの声と、ときたま響く鳥の声が、夢の庭に折り重なる。

「……ああ。ここで店じまいのようです」
用意された八つの酒壷は、いつのまにか綺麗に空になっていて、あどけない少女の面（おもて）には、苦笑がにじんでいた。
「良くお飲みになられましたねぇ」
「ふ、我を酔わせたくば――この三倍は持って来いというのだ！」
どこか少年じみた稚気を匂わせて、腕を組むギルガメッシュに、黒衣の巫女はてらいのない笑い声を上げた。
「おみごとです。お粗末さまでした」
「何。悪くはなかった」
世にも珍しい英雄王の褒め言葉に、その貴重さを知らない異邦の娘は、ほにゃりと頬を緩める。まるで無邪気な子供のように。
「それではごきげんよう。また――縁がありましたら」
「娘よ、貴様の名は？」
別れ際、男は少女の名を問うた。
「七地七季と申します」
ごはん、ごちそうさまでした。

そしてそれぞれの夜は明ける。
「何だギルガメッシュ。やけに機嫌が良いな」
ふだんあまり教会によりつかない、気まぐれな英霊の姿を見とめて、言峰は物珍しげにその墨色の双眸を細めた。
「ああ。昨夜は思いがけず美酒にありついたのでな」
黒いライダースーツを着こなした美貌の青年は、ふとカソック姿の神父を一瞥して、呆れたような声を洩らした。
「何だ綺礼、狗（いぬ）の令呪を失ったのか」

#３０２　ドリームキャッチャー（後書き）

あとがき

＞タイトルの「ドリームキャッチャー」はお守りの一種。

「悪夢は網目に引っかかったまま夜明けと共に消え去り、良い夢だけが網目から羽を伝わって降りてきて眠っている人のもとに入る」という装飾品です。

クモの巣状の、目の粗い網が組み込まれ、羽やビーズなど、独特の神聖な小道具で飾られている。伝統的には柳から作られるそうな。

記憶というストッパーがないぶん、フリーダムに動きすぎるオリ主。夢の中で英雄王と飲み会（待て）。

ちょっと本能で生きてる。

いや中座を謝っておかないと、機嫌を損ねたギルは暇つぶしに殴りこみに来るかもしれないかなと。

ちなみに夢というのは、忘れているだけで一晩に何度も見ていたりするものらしいですので、伯言との過去を思い出したのと同じ夜のことです。

：八塩折之酒（やしおおりのさけ）

：須佐之男命（すさのおのみこと）が、八岐大蛇（やまたのおろち）を退治するために造らせたという、「八度にわたって醸（くゆ）す酒」。

：薫る

：炎を出さずに燃えて、煙が立つ。ふすぼる。くすぶる。

：御灯（みあかし）

：神仏の前に供える灯火。おとうみょう。

：御饗（みあえ）

：　飲食のおもてなし。

聞こし召す（きこしめす）

：「飲む」「食う」「治める」「行う」などの尊敬語。「お飲みになる。お食べになる。」「お治めになる。政治をなさる。」「催しなさる」の意。

貴醸酒（きじょうしゅ）

：水の代わりに酒で仕込んだ酒。

#303　ステイ

「……伯言はいないんですね」
ぽつり、と呟かれた言葉に、衛宮邸における朝食の場が、一部、騒然となったことを記しておこう。

「いや、ちっちゃいころの記憶しか戻ってないんですけど、ほぼ毎日うちに来てご飯食べてたもんで」
不用意に爆弾を放り込んでしまった黒髪の少女と、そのユカイな仲間たちに拳を落として鎮圧したツインテールの魔女――もとい、凛は、疲れきった嘆息をこぼして、朝食の咀嚼に戻った。
どうやら思兼神（おもいかねのかみ）は、バラバラになった記憶を、見当のついたものからまとめているようで、取り戻した部分は印象的なエピソードが散在しているらしい。
「たぶん、パズルでいうなら、似た色合いのピースを集めたり、端っこの、わかりやすい部分をちまちま整頓して、はめ込んでる感じ？」
『ああー……』
こてん、と小首をかしげる七季に、一同は脱力したような納得顔を浮かべて頷いた。
「だから昔の、土台にある部分とか、前後の関連がはっきりわかるようなエピソードからまとめてるんじゃないですかね」
ホントに三日で終わるのかわかんないけど。
きょうは、ゆったりした黒のシャツチュニックと、白地に青と緑でつる草模様のステッチが入ったコットンパンツを着ているポニー

テールの少女は、おそらく行動の指針を左右するだろう青い目の魔術師へと水を向けた。
「それで、きょうはどうするんですか？」
あ、このオムレツおいし。
赤いハイネックに黒のミニスカートとニーハイが似合う少女は、「そうね」と紅茶のカップを置いて考え込んだ。
イリヤスフィールやバゼット、それにセイバーといった欧州勢が多いことから、本日の朝食はプレーンオムレツに温野菜のサラダと、焼きたてのパンが数種類。
どうやら料理上手な錬鉄の英霊が、八つ当たりぎみに鬱憤を料理へとぶつけていたようだ。良くこねられたパンは、もちもちとした弾力で、味わうものをますます笑顔にする。
「思い出したっ。新都の方にキャスターが伸ばしてるっていう魔術の糸！」
七季から受けた報告だったのだが、その当人は、きのう記憶をすっ飛ばしていたし、その騒動と桜の魔術師バレから、昨夜はほとんど仕事にならなかったのだ。
主に情緒不安定になった真言と、まっくろ巫女の従者たちのテンションの急落で。
士郎と凛も、かたや身近な後輩が、かたや聖杯戦争には無関係でいると思っていたかった実妹が、サーヴァントを従えたマスターだと知って。
「じゃ、それぶっちぎりに行くかー」
もむもむパンを頬張ってから、何でもないように提案するのは、ふわふわと波打つ栗毛も可憐な美貌の「神妻」だ。
寒がりな彼女は、いちおう起き抜けということもあって、淡い桜色の起毛素材で作られたパーカーに、ブラウンのスキニーパンツというカジュアルないでたちだった。
「ぶっちぎりって……夜にはまだ早いわよ」
半眼で呆れた声を向ける凛に、チートな巫女さんはあっさりきっ

ぱり言ってのけた。
「バレなきゃ良いんでしょ？
ナナちゃんにもできるって言ってたんだから、認識阻害かけて、素手でぶっちぎるだけなら人目気にする必要なんかないよ」
シンプルきわまりない解決策を突き出されて、ふたたび凛が、テーブルに突っ伏しかけたのは、いうまでもない。

「まあ、そんなわけだから――」
出かける身支度を終えた黒髪ツインテールの美少女と、栗毛の巨乳巫女、そして黒髪の美青年と銀髪の美女、白い髪の偉丈夫を前に、赤毛の少年はいかにも不服げな面持ちで相対していた。
「衛宮君は留守番ね」
ずびし。
「俺も手伝……」
「学校を休んでるんでしょ」
見つかったら面倒よ。
真正面から正論と人差し指をを向けられて、ぐうの音も出ない士郎。
ちなみに凛も欠席を届けているのだが、そのへんは臨機応変に棚上げしている彼女である。
「正直、キャスターのしかけを破るだけなら、真言だけで十分だもの。衛宮君に手伝ってもらうことはないわ。
イリヤスフィールが衛宮君たちの上納金を支払うとは言ったけれど、まだ支払いは済んでないもの。ちゃんと従ってもらうわよ？」
「う」
冷静な凛の指摘に、へっぽこ魔術師であるところの少年は、それでももの言いたげに少女の青い目を見つめる。
「……そんな顔したって駄目なものは駄目よ」

ぷい、とそっぽを向く少女の動きに合わせて、シーズーの犬耳のようなツインテールがふわりと揺れる。
「それにね。拠点の防衛だって、大事な仕事よ。ケガ人だっているんだし、七地さんも……あんな状態だしね」
凛のまなざしが、片手を失った赤毛の麗人と、記憶すっとばし＆取り戻し中の異邦の巫女へと注がれる。
「その話だけど」
黒猫から少年姿になっていたリドルが、紅い双眸を細めて、いたずらっぽい笑みを作った。
「バゼットだっけ？
彼女の腕、治すつもりならどうにかなるけど？」

リドルのいた世界の魔法薬には、「骨を生やす薬」というものがある。
それを使えば、芯となる骨はできるし、なくなった骨を生やせる薬があるくらいだから、周りの血肉や神経を再生する薬だって工面できるのだ。
「ほんとかっ！？」
当人を差し置いてその話に食いついたのは、やはりというか何というか、衛宮士郎少年である。
「まあ薬代はしっかりいただくけど。欲しいなら売るよ？」
「お願いします！」
そしてもちろん――おのが不覚からとはいえ――失った腕を取り戻せるとあって、バゼットじしんも即座に反応した。
「ただし、まる一日は寝込むことになるけどね」
けっきょくそれを聞いては、お人よしの士郎が、苦しむバゼットを放置できるはずもないのだ。
「イリヤスフィールは……」

遠坂の少女が、銀髪の童女を振り向けば、凛とした宣言が返ってくる。
「シロウを守るために残るわ。私のバーサーカーは強いもの。他のサーヴァントが来たって返り討ちよ」
死したはずの父と、新たにできた義弟の家族に囲まれた童女は、そのルビーアイをきらきらと力強くかがやかせて胸を張った。
「私も、おとなしく留守番しときますよ」
真言やディルムッド、リインフォースにアーチャーと、順繰りに心配そうな視線を受けた七季は、困ったような面持ちで、それでも安心させるように頬を緩めた。
「できることは少ないですしね。どうせなら、記憶が戻るまで、点滴つないで寝っぱなしだってかまわないんですが」
だって入力される情報が少ない方が、整頓作業もはかどるでしょう？
そんな、悪気のない少女のセリフに、またしてもひと悶着あったりしたのだが――それはまた、別の話である。
ともあれ。
「セイバー、衛宮君と桜、それからバゼットたちのことも頼んだわよ」
「はい、凛。シロウは私のマスターです。彼が守りたいと思う以上、私もまた、全力を尽くしましょう」
金糸の髪の少女は、その白皙の面輪にきまじめな表情を刻んで、こくりと頷く。
「マスター。山の方に動きはないみたいだぜ。山門には、サーヴァントの気配があったけどな」
さすがに昼間だったんで、戻ってきた。
青い髪の槍兵が、キャスターの拠点と思しき柳洞寺についての報

告をもたらしたところで、凛たち「アーチャー」組は、新都へと出かけたのであった。

一部のメンツが、ひどく後ろ髪を惹かれている面持ちではあったけれど。

#303　ステイ（後書き）

あとがき

＞旅行中ということもあって、短めです。

タイトルの「ステイ」は「留まる」「耐える」「降りないで賭けの場に残る」「待つ」「鎮圧する」などの意。

遅まきながら、キャスターのしかけを破壊に。うっかり素で忘れるところでした（待て）。

リドルが提供した「骨を生やす薬」は、ロックハートの魔法で骨をなくされてしまったハリーに、マダム・ポンフリーが使用したものです。

まあ、一晩じゅう眠れなくなるくらいに、骨を生やすのは痛いらしいですが。

#３０４　ギグル

「それでは、いってらっしゃいませ、宗一郎さま」
温暖な冬木の地とはいえども、山の中腹に位置する柳洞寺の朝は、冷え込んでいる。
二人の吐息が白くけぶり、つかのま朝の大気の中で日の光を浴びると、儚く解けて散っていった。
「ああ。行ってくる」
紫苑色のロングヘアを一つにまとめた、白いセーターに淡いピンク色をしたエプロン姿の美女に見送られて、きょうも男は山を降りる。
柳洞寺に間借りしている彼の名は、葛木宗一郎。ついきのう、校舎に大きなヒビが入ったことで、一時的な休校を余儀なくされている穂群原学園の教師だった。
木立に挟まれた長い階段を降(くだ)っていく、ダークスーツに包まれた背中。それが見えなくなるまで、山門にたたずんでいた細身の美女――キャスターのサーヴァントは、そうしてようやっと背後を振り返る。
「くくっ……」
風の渡る音に混じった、喉を鳴らすような笑い声。
「……何がおかしいのかしら」
それは問いかけの形ではあったものの、声色は長身の男を咎めていた。
葛木に向けていた、情け深い温かみを持った声ではない。命じることに慣れた冷ややかな響きは、この男を召喚したマスターとしてのもの。
「いや。けなげなことだと思ってな。悪女の深情けとは、良く言っ

たもの――」
キュバッ！
とたん、紫苑の髪の美女から、魔力の弾丸が放たれた。
エプロン姿から、ローブを深く着込んだ姿へと変じた美女は、キャスター――「魔術師」のサーヴァント。これくらいは無詠唱でも造作ない。
「ムダ口は結構よ。この山から――いいえ、寺院から動けない役立たずの『アサシン』が。口のきき方に気をつけなさい」
魔力弾をついと見切って避けてみせた「アサシン」は、その口端に刻んだ笑みを崩さない。
ただ、わざとらしく慇懃に
「了解した」
と一礼して、ふたたびその姿を霊体化した。
――まあ、魔力を確保するまでの辛抱だ。
男は、山門をくぐるキャスターの背中を黙って見送る。
彼の能力を疑問視している神代の魔女は、いまのところ最低限の魔力しか送ってこない。
魔術師ではないマスターと契約したがために、キャスターは自分を養う魔力を、新都に張った糸から吸い上げているのだ。
ただし、通常キャスターは、バーサーカー、セイバー、ランサー、アーチャー、ライダー、アサシンと、自らを含めた七騎の中では「最弱」と言われるクラス。
策謀に長ける彼女は、その戦力不足を補うために、無茶は承知でサーヴァントの召喚を試みた。
そして召喚されたのが男――「アサシン」というわけだ。
だが、やはり反則は反則。当然というか、不具合が出た。
気配遮断スキルを持ち、暗殺に長けるはずの「アサシン」は、この柳洞寺から離れられない制約がある。
だからキャスターは、魔力をできるだけかき集め、「陣地作成」スキルによって彼女に有利な「神殿」を形成し、敵を待ち受けるし

かないのだ。
だが、キャスターに「聖杯」へかける望みがあるように、この「アサシン」にもまた望みがあった。
この寺院に縛られていては、ろくに期待もかけられない望みではあるが。
山門の屋根へと飛び上がった男は、弱い冬の日差しに目を細めて、見るともなしに空を仰ぐのだった。
まだ天へ昇りかけている太陽は、ベールのように薄い雲の向こうにあるため、まるでぼんやりと白い月のようにも見えていた。

ところ変わって、こちらは赤いコートの魔術師と、ユカイな異世界トリップご一行さま。
「……はあ」
「……ふぅ」
「……む」
「……う～」
さっきから、黒髪メガネの美青年、銀髪ルビーアイのナイスバディ美女、仏頂面を隠さない白い髪の男前、ふわふわ栗毛に琥珀の瞳が潤みかけている美少女――という、そうそうたる顔ぶれを引き連れた凛は、彼らからこぼれる嘆息に、眉根を寄せて新都を歩いていた。
「いい加減、その辛気臭いためいきをどうにかしてくれない？」
――まあ、真言はトラウマ刺激するから仕方ないにしても。
ついきのう、おのがサーヴァントである「神妻」の巫女の過去を、パスを通じてのぞき見ることになった魔術師の少女は、ちょっとだけ真言に同情的だ。
かつて初恋の相手が、龍神によって記憶喪失になった少女にとって、今回のことはかなり堪える事件だろうから。

「それにしても……そんなにショックだったの？」
「いってらっしゃい」のキスがなかったのが？
凛が言っているのは、スキンシップ過多の少女――七季のことだった。
神様のちょっかいというか、無体から、記憶をすっとばしてしまった「神使（しんし）」の少女は、当然ながら、周りの人間にもよそよそしくなっていた。
従者たちに「おはよう」「いってらっしゃい」「おかえり」などなど、ちょっとした拍子に唇を寄せるのもスキンシップというキス魔である七季だったのだが。
それがきれいさっぱりなくなったあげく、親子か兄妹か、はたまたカップルか、という睦まじさも見せていたアーチャーに対する態度が、目に見えて挙動不審ときている。
きょうの食後も。
「あの」
キッチンで洗い物を片付けるアーチャーに、てまてまと近寄ってきた少女は、二、三歩前で足を止めた。いつもなら、そのまま背中にぺふりと懐いて朝食の感想を訴えるところなのにだ。
「何だね」
「きょうのご飯、アーチャーさんが作ったんですよね？」
「ああ」
何か嫌いなものでもあったかね？
手を止めて振り返った、偉丈夫の精悍な顔を見上げた七季は、彼を確かめるように、ぱちぱちと大ぶりな黒い目を瞬いたあと。
「美味しかったです。あの、ごちそうさまでした」
おずおずとした口調で感謝して、ぺこんと頭を下げた。
「なな……」

き、と呼びかけて、伸ばした手が、まだ泡まみれであることに気づいた男が、水でそれを洗い流したときには、既に彼女の小柄な体は、キッチンから消えていた。

「あれ。どうしたんだ？」

そこに、ひょっこりと赤毛の頭が顔を出す。

「？　さっき七地さん、洗い物をするって言ってたんだけど……こっち来なかったか？」

「……来たには来たが」

逃げられた、とは口に出せずに、アーチャーは言葉を濁した。仏頂面の男に、士郎は「ふうん」と首をかしげる。

「皿洗い、お前に先を越されたから、言い出しにくかったのかもな」

お人よしの彼らしい、善意的な解釈を口にして、琥珀の目の少年は、ふと高いところにあるアーチャーの顔を仰ぎ見た。

「お前、何拗ねてるんだ？」

「しっかし、アレねえ……前の七地さん、ずいぶん堂々とスキンシップ図ってたから、色恋とか羞恥とか思考の外だったけど……あれはあれで凄いことだったのね」

何しろ、一日そこらで知り合ったばかりの凛が、違和感を感じないくらい堂々とやるのである。

それがさも「常識」とばかり刷り込まれてしまったあとでは、いまの、世間的には常識的なふるまいのはずの七季の行動に違和感たっぷりなのだから、困ったものだ。

もっと困ったのは、ご覧の通り、短くない間、それに慣らされ、刷り込まれてきたアーチャーたちの方だろうけれど。

赤いコートをまとう少女が歩くたびに、頭の両脇で結われたツインテールが冬の風を受けて優雅に揺れる。

「いまの七地さん、人見知りの子猫みたいだものね」

気にはなるから見えるところに来るけれど、一定のラインからは近づかない。

しゃっきり伸びた背筋が美しい、穂群原のミス・パーフェクトは、男除けを兼ねている、ディルムッドやアーチャーを振り返り、その肩をべしんと叩いて励ました。

「口調はほとんど変わらないのに、行動がほぼ別人。別人というか……線引きが凄いのか。

まあ、美味しいものに目がないのは、前と同じみたいだし。帰りに、江戸前屋のどら焼きでも買ってってあげたら？」

ちなみに、この短期間で「七季の懐柔＝食べ物」と凛も刷り込まれているらしい。

「……ういやつっ！」

がばっ。

「ふにゃあっ！？」

やおら、凛を抱き込んだのは、胸部に立派な双子山を持つ、桜色のコートを着た美少女だった。

「ありがとっ！

ちゃっちゃと帰って、ナナちゃんかまい倒して、そんでオモイカネさまのケツ叩くことにする！

そうと決まったら、キリキリ作業しないとね！」

「すると綺礼。貴様、ランサーの令呪を失ったばかりか、誰ひとり教会には来なかったと……寂しいやつだな」

しんそこから哀れむような真紅のまなざしを、黄金の青年から受けて、ないしん言峰は少しだけヘコんだ。

十年前からそうだが、この英雄王は、人の心理をピンポイントに突いて来る。

「ふむ。狂言回しも、回す相手がいなければ意味がない。よかろう

綺礼。お前にもあれを紹介してやろう。神に翻弄されし巫女……お前とは、別の神だがな」

さて、どんな幕間劇となるのやら。

金糸の髪にふちどられた美貌のサーヴァントは、くつくつと笑う。

白く冷えた聖堂で、響くその笑い声は、内側から卵を砕こうとしている雛の孵化音にも似ていた。

「桜が帰ってこない……」

そしてまた、違う場所では。

波打つ青い髪の少年が、低い声で寂しげに呟いていたとか、いないとか。

#３０４　ギグル（後書き）

あとがき

＞タイトルの「ギグル」は「くすくす笑う」「含み笑いをする」「クックッ」の意。

しかしギルさま似合うな含み笑い。

ようやくキャスター組がお目見えです。

あとアーチャーが拗ねた件は、「自分が逃げられたのに、どうして貴様はふつうに話してるんだ」という大人気ない理由。

主人公が出てこない……ッ（汗）。

#３０５　エマージェンス

「シンジ。柳洞寺のキャスターに動きはないようです。学校の『他者封印・鮮血神殿（ブラッドフォート・アンドロメダ）』も確認しましたが、やはり何者かの手によって解除されていました」

ふっ。

午前中でも、どこか薄暗い印象のある洋館の中、足音もなく現れたのは「ライダー」のサーヴァント。

その長身にピッタリと張りつく、漆黒のボディコン服を着込んだ人外の美女は、優しげなラベンダー色の髪を、身の丈にも及ぶ長さに伸ばしている。

メリハリのきいたボディラインを、さらに妖しく飾っているのは、長い脚を太股半ばまで覆っているロングブーツと、白皙の美貌の半ばを覆う皮製のアイマスクだ。

偵察から戻ってきたライダーがもたらす報告に、慎二は小さく舌打ちを洩らす。

チッ。

「どこのどいつか知らないけど、余計なことを……これで遠坂と交渉する手札が減ったじゃないか。

お爺様も見当たらないし……おいライダー、桜の居場所は？」

校舎に巨大なヒビが見つかったため、彼の通う穂群原学園は、一時的に休校となっている。

そうでなくとも、この聖杯戦争中だ。祖父である臓硯の公認もあることだし、用がなければ、慎二は学校を欠席する気でいたのだから、この時間に在宅しているのは、おかしなことではない。

もっとも、教師である葛木の方は、校舎についての職員会議や、授業がなくとも減りはしない事務仕事があるため、きょうも出勤し

ているのだが。
それはさておき。
「おそらくは……衛宮邸にいるのではないかと……ただ」
「ただ？」
青みがかった髪の少年は、その端正な面輪の中で、神経質そうに眉を跳ね上げる。
いっぽうライダーはというと、形のいい唇を、きゅっと噛みしめて、いかにも無念そうな声音を搾り出した。
「衛宮邸には、複数のサーヴァントの気配が感じられました。少なくとも、四騎」
「なっ……！？」
――四騎だって！
彼の想像を超える事態に、慎二は絶句して、みるみる形相を険しくした。
「どういうことだ。衛宮がマスターだっていうのか？
いや――それにしたって、四騎はないな。魔力的にもおかしい。可能性としては……衛宮の家が、既にどこかのマスターに乗っ取られている、ってことか」
そこに桜が居合わせたのなら、捕獲されるのもありうる話である。
もっとも、げんざい擬似的にサーヴァントあつかいになっている真言と、その従者「ランサー」、そして英霊ふたりを支えているＵ（びっ）ＭＡ（くりナマモノ）がいるなどとは、魔術回路を持たない少年には、知るよしもないことである。
ついでに、彼ら孫たちの運命を手のひらで弄んでいた、間桐家の妖怪爺が、トリップ巫女さんご一行によって、とっくに除霊されていたり、桜に巣食っていたサーヴァント「この世全ての悪（アンリマユ）」のかけらが、引っこ抜かれていたりすることも。
「桜が他のサーヴァントを倒した、もしくは奪ったのなら、帰ってこないのはおかしいしな……。
おいライダー。お前、桜と連絡は取れなかったのかよ？」

慎二は、青く波打つ髪の下から、自分よりも長身の美女を、忌々しげに睨み上げる。
「残念ながら……あまり近づくと、あちらのサーヴァントに気取られる恐れがありましたから」
ですが。
「衛宮邸から、トオサカリンが、サーヴァントを連れて外出するところを確認しました。少なくとも……彼女が、自由の身であることは、疑いないかと」
は。
――えみやのいえから、とおさかが、でてきた。
ライダーの言葉に、一瞬フリーズした少年は。
「ワカメエエエエェェェ！！」
第二形態へとシフトチェンジした。
「衛宮の野郎、遠坂までえええぇぇ！」
――トオサカリンが、エミヤシロウを毒牙にかけたという選択肢はないのでしょうか。
ライダーの内なるツッコミは、彼女の豊満な胸の奥にしまいこまれたままである。

「はくしゅんっ！」
こちらは、その衛宮邸。
バゼットが横たわる布団の前で、思わずくしゃみをした赤毛の少年へ、紫暗の髪を長く伸ばした少女が、心配そうに声をかけた。
「先輩、大丈夫ですか？　上着を着た方が良いですよ」
「ああいや、大丈夫だ、桜。たぶん一成か慎二あたりが噂でもしてるんだろう。藤ねえかもしれないけど」
それよりバゼットさんの方が。
口元を手で覆っていた士郎は、もう片方の手で少女を押し止める

と、げんざい目の前でのたうちまわって苦鳴を洩らしている、赤毛の麗人へと視線を落とした。

「く、おおおぉ……ぐぬぬぬっ……うぐぐぐ……」

女性らしからぬ低いうめきは、それだけ苦痛が勝っているのだろう。

闇の帝王の前身が渡した「骨を生やす薬」というのは、その効果の高さと引き換えに、「良薬、口に苦し」――どころではない痛みを伴うものらしい。

バゼットが、無事な方の手で握り締めている枕は、それはそれは哀れなほどにしっかりと握りつぶされて変形している。

もっとも、彼女の場合は「骨を生やす薬」と併用して、効果を殺さないように、失われた神経などの血肉を補う薬も投与されているのだから、ただ骨を生やすよりも変化のための痛みが激しいのは、無理からぬことである。

「痛み止め……は、もう薬を飲んでるんだから、余計なものを入れない方が良いよなあ……」

士郎は、目の前の女性の苦しみようを、痛ましげな面持ちで見つめ、琥珀の双眸に「何とかしてやりたい」と願う光を宿す。

「申し訳ありません、シロウ。私は魔術には造詣が深くありませんので……」

助けを求めるように、少年から振り向かれたセイバーは、その湖水のようなエメラルドの目を伏せると、力なくかぶりを振って金糸の髪を散らした。

「いや。気にしないでくれ、セイバー。俺も、ろくな魔術は使えないんだ。見てるしかないっていうのは、辛いな……」

せめてもと、心遣いからバゼットの手を重ねて握った士郎が、その指の骨を折られてしまうのは、ほどなくのことである。

「ナナキ。これ何て読むの？」
いっぽう、同じ衛宮邸でも、記憶喪失の少女に割り当てられた和室には、銀髪の童女と、無精ひげ男の父娘コンビ、まんまる黒猫に、ふつうのスレンダー黒猫の人外けもけもセット、そして黒髪のトリップ娘がごろごろしていた。
留守番を仰せつかったものの、さしてバゼットと親しくもない七季は、暇をもてあましていた。あちらの看病は、彼女が申し出るまでもなく、士郎たちが枕元に付き添っている。お呼びではないだろう。
そのため七季は、袖や懐の不思議空間から引っ張り出した本を、暇つぶしに読むことにしたのである。
「ナナキーっ！」
だが、そこに乱入したのが、イリヤスフィールと切嗣だった。
記憶を失う前の七季は、自分の世界にも切嗣がいることや、彼が自分の叔父であることなどを世間話程度に話していたのだ。
その折にぽろっと
「世界が世界なら、イリヤスフィール嬢は、私のイトコだったのかもしれないねぇ」
などと言ったものだから、家族に飢えていたホムンクルス娘は、いっきに七季への親近感を増したらしかった。
そして、目下イリヤスフィールの最大の関心ごとである士郎が、「骨を生やす薬」その他のためにのたうちまわる、バゼットの看病についてしまったため、こちらも暇をもてあましていたのだ。
この屋敷の、げんざいの主は衛宮士郎であるから、娯楽に乏しいこともある。
父親である切嗣と一緒なのは嬉しいが、留守番かつ護衛である以上、どこかにお出かけ――というわけにもいかず、銀髪の童女は、残る暇つぶしの可能性に突貫してきたのだった。
「ああ、これは」
『御前を離れず、詔命に背かず、忠誠を誓うと誓約申し上げる』

そうして、七季は自分の蔵書の中から「面白いもの」という基準で、中華風ファンタジーを選んだのだが。

「『ショウメイ』って？」

外国人であるイリヤスフィールには、少々ハードルが高かったようで、気がつけば、絵本を読む母親か姉のように、七季が傍らで読み上げたり、解説をすることになっていた。

「えーと。『詔命』というのは、日本では『天皇の命令』もしくは『勅令』のこと。ようするに王様の命令のことだね」

「ふーん。じゃあこれは、誓いの言葉なのね」

「そうそう」

切嗣は、新聞を読む程度には不自由しないが、どちらかといえば洋書の方が向いていて、漢字や当て字に癖のある、日本の小説――しかもファンタジー系統ときては、なじみが薄い。

それよりは、姉妹のように仲良く並んで本を読む、愛娘と少女を見守っている方が楽しい。そんな理由もあって、切嗣はイリヤスフィールの隣に寝転んだまま、ふたりの会話を聞くともなく聞いていた。

ちなみに、人外にゃんこセットはというと。

イリヤスフィールがくっついているのとは、逆の七季の傍らには、まんまる黒猫――八十禍津日神（やそまがつひのかみ）がでんと陣取り、にゃんこ姿のリドルは、意地とばかりに少女の背中に乗っかって丸くなっていたりする。

思わず霊体化のバーサーカーも、うむうむ頷くほど、完全無欠な、ほのぼの光景であった。

そこへ、セイバーが飛び込んでくるまで、あと五分。

#３０５　エマージェンス（後書き）

あとがき

＞ワカメ、覚醒（言いたいことはそれだけか）。

タイトルの「エマージェンス」は「覚醒」「出現」「離水」「毛状体」「出芽」「羽化」「発生」「突起体」などの意。

「アウェイクニング」と迷いましたが、学術用語がピンポイントにネタだったので、こちらをチョイス（笑）。

ワカメの鳴き声は、これで定着（待て）。

ライダーは偵察であちこち飛び回っていました。

ダメットさんの腕力からしたら当然かと。

ものの話では、出産時に奥さんの手を握っていた旦那が、手を骨折する羽目になったという話をどこぞで聞いたので、鉄腕女史ならナチュラルにこうなりますよな。

イリヤとオリ主が読んでいる本は、麒麟が王様を選ぶ世界の話です。

#306　メソッド

「あ、そーれ。ぶっちぶちー♪　ぶっちぶちー♪」

凛によって機嫌を直した栗毛の美少女は、げんざいミッド式の封時結界があるのを良いことに、張り切って神剣を振り回していた。

桜色のコートが、舞うように動くたび、うす曇りの向こうから、わずかに差し込む冬の陽射しで、きらきらと白刃がかがやく。

キャスターが張った魔力吸収の糸は、さくさくと真言によって切り払われて、紫の粒子にほどけながら散っていった。

すぱぱぱぱっ。

そして、少し離れた場所でも、真紅の槍――「破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）」をふるう、黒髪の青年と、同じく紅の魔槍で、あたりをなぎ払う白い髪の男が動いていた。

二人とも、街中を歩いてきたために、カーキ色のミリタリー風テーラードジャケットや、赤いライダーズジャケットを着こなしている。

いっぽう、オリジナルと遜色ない投影品の宝具を生み出すという、アーチャーの反則技に、もはや声もなく、その光景を見守る凛。

赤いコートをまとう彼女の傍らには、いちおうの警戒役として、結界を維持しているリインフォースがたたずんでいた。こちらは、銀髪の映える黒いトレンチコートに、ウェストをベルトで締めた品のいいスタイルだ。

すると、また別の一角で――自分の槍とは違う――紅い槍をふるっていたランサーが、かるい足取りでやってくる。

「こっちは終わったぜ」

「あら、お疲れさま」

現れた青い影に、サファイア色の凛の目が、そちらをくるりと振

り返る。
「……しかしよぉ。自分の宝具を、他人に使われることに抵抗はないのかね、あの色男」
呆れがにじみ出た声を洩らすのは、私服がないため霊体化でついてきた、青い髪の槍兵だ。現界した姿は、いつものピッタリと体のラインに張りつく、青い戦装束である。
己も槍の宝具「刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルク）」を持つランサーからすると、アーチャーが複製した投影品といえど、自分や、皮肉屋の偉丈夫に「破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）」を使わせるディルムッドに疑問を抱いたらしい。
「誰でも、というわけでは。
槍の使い手として誉れある『光の御子』や、同じ主のために役立てるアーチャーならばこそ。早く終われば、七季殿の下に戻れますし」
振り向いた、美貌の槍兵は、真紅の槍を操る手は止めることなく、はにかんだ笑みを浮かべる。
仮に、そこらの女性が目にしたなら、一発でノックアウトされるレベルの王子様スマイルである。
きょうもディルムッドは魔貌封じのメガネをかけているのだが、耐性のある凛も、さりげなく顔をそらして威力を殺した。天然がいちばん恐ろしいのだ。
「最後が本音かオイ」
目の錯覚か、ディルムッドの背後に、ぶんぶか振られる犬のしっぽが見えたような気がするランサーである。
真紅の双眸をジト目にした男は、赤枝の騎士団の後輩へ「やれやれ」とためいきをつきつつも、ふたたび残った糸を切り払い始める。
「君の割り当て場所は終わったはずだが？」
ちらりと、鋼色のまなざしをよこす赤衣の弓兵に、クー＝フーリンはヒラリと手を振って磊落に答えた。
「こんな辛気臭ぇ作業は、とっとと終わらすに限る。ったくよォ、古今の兵（つわもの）が並んでるってぇのに、どうしてこうも戦う機会がないの

かね」
あー、つまんねぇ。
いかんせん、七騎いるサーヴァントのうち、敵対しているのはキャスターとアサシン、そしてライダーだけだ。
そのうち戦闘能力が低いキャスターや、気配遮断で暗殺特化のアサシンでは、白兵戦が得意なランサーには物足りなさ過ぎる。
「何、そのうち機会は、嫌というほど回ってくるさ」
――真言が連れて帰る気だからな。
軽口を叩くアーチャーの、ないしんで呟いたセリフを知るものは、幸か不幸か、まだいない。
「そう願いたいがな」
「さ、この区画は終わりっ！　次、いっくよー！」

ところ変わって柳洞寺の、ある一室。
キャスターの「陣地作成スキル」によって「神殿」と化した寺院の中でも、ひときわ厳重な防備を敷いたその部屋には、水晶をのぞき込んで頭を抱えるフード姿の人物がいた。
誰あろう、この部屋の主である。
「ど、どうなっているのよ……！」
キャスターでも見通すことのできない結界が張られた、新都の一角。そこにつながっていた「糸」が次々に寸断されて、魔力の供給がみるみる減っていくのだ。
あわてて使い魔を送っても、その見たことがない術式の結界を突破することはできず、立ち往生するだけ。
キャスターじしんがその場に行けば、まだ解析できるのかもしれなかったが、この真っ昼間に、しかも敵の可能性が高い現場に行くことはためらわれた。彼女の力を十全に発揮するには、この「神殿」こそが最高の舞台なのだから。

これまでにストックした魔力はあるが、これからの供給が止まるとなると、死活問題になってくる。
とりあえずキャスターは、新都へと送った使い魔に、その原因を追跡させることで、異変の正体を探るしかなかった。
「私は、絶対に宗一郎さまを守ってみせるんだから……！」
悲劇の王女の、切なる願いを知るものは、まだいない。

「これで大丈夫だと思いますよ」
双蛇の絡んだ魔杖を膝に乗せ、ちょこんと座っていた黒髪の少女の言葉に、士郎とセイバーの主従は安堵のためいきをついた。
バゼットによって折れた士郎の手は、幸いにも、その身に埋まる「全て遠き理想郷（アヴァロン）」によって回復したので、「喉元過ぎれば――」な赤毛の少年は、琥珀の目元を緩めて七季へと礼を言う。
「ありがとう、七地さん。助かった」
布団に横たわる片手の美女は、さっきまでの苦痛が嘘のように、安らかな表情で眠っている。
再生中の手に、異物が入らないよう、特殊なギプス――バリアジャケットを応用したものである――で覆われた手だけは、布団の上に置かれているが。
「どういたしまして。ナノマシンと鎮痛・睡眠の魔法を併用しただけですし、術式は『ガニュメデス』が担当してくれましたから」
褒めるなら、この子を。
そっと撫でたデバイス「ガニュメデス」に視線を落とす七季。
「マスターのお役に立てて嬉しいですっ」
黄金の双翼に抱かれた、青い宝珠がほわほわと明滅しながらアルトの声を上げる。
慣れない士郎とセイバーは、少しビクッとしたが、物珍しそうに、異世界で作られたという、その魔杖をのぞき込んでいた。

「これが……魔術の触媒、いえ礼装なのですか？」
「杖がしゃべるのか……」
しげしげと向けられる、琥珀とエメラルドのまなざしに、「インテリジェントデバイスですから！」と元気な声が返ってくる。
「ＡＩとはいえ、ボクたち『インテリジェントデバイス』は意思を持っています。
それはマスターを支えるため。みずからも考え、より良い道を目指すためのパートナーとなるべく造られたからなのです！
記憶喪失だろうが何だろうが、ご主人さまは、マスター・七季ただひとりっ。むしろ記憶がなくて、ふだん以上に不自由してらっしゃるマスターを、支えてこその真骨頂だと思うのです！」
可愛らしい、少女めいたアルトの声が誇らしげに響く。
もしも彼に――こんな口調なのだが、「ガニュメデス」の人格設定は男である。「男の娘」とういうべきか――体があったのなら、めいっぱい胸を張っていることだろう。
「こら『ガニュメデス』。ケガ人が寝てるんだから、静かにしないと」
しー。
そっとたしなめる七季の表情は、けれどもやわらかい。
「ごめんなさい、マスター」
「でも、ありがとな」
その大ぶりな黒瑪瑙の瞳が潤んでいるのは、近くに座っている少年と、剣精の少女からも見て取れた。七季のあどけない横顔ににじんでいるのは、まぎれもなく安堵であると。

記憶を散らしてしまった少女を心配する、真言や従者たちの目は切望を帯びていた。
それは当然のことだろう。家族や友人や――大事なものに、自分

を忘れられて、嬉しいはずがない。早く思い出して欲しいだろう。
彼らが、そんな目を向けるのも、七季を想うからこそだというのが、理解できない少女ではない。
――わかるから、何も言えない。
私は、私だと。
いまの七季は、記憶がない自分しか知らないのだ。
ないものを、見つけられないものを、求められることは、彼女の胸に重石を乗せる。
――人の想いは、重い。
人から向けられる感情を背負うのは、好悪によらず、重さを伴うのだ。
忘れられた方も、目の前に「忘れられた」事実を引きずり出されて、傷つくだろう。
真言が、アーチャーが、リドルが、リインフォースが、ディルムッドが。
――大事なものを見つめる目だと思う。
向けられるまなざしに、感情に、気づかないほど、七季は鈍くない。何せ、あんなにあからさまなのだ。ダダ洩れなのだ。
栗毛の少女が、ショックを受けたときの表情が、忘れられない。
――傷つけたくなんか、なかったのに。
慰めたい、と反射的に思って手を伸ばしかけたけれど、できることはなかった。何よりも必要なものを、彼女は持っていなかった。
だから、いっそのこと眠っていたかった。優しい人たちを、たぶん大事だった人たちを悲しませることはしたくなかったから。
自分を偽ることは無理だ。できるかどうかという以前に、おそらく彼らは気づくだろう。
それに偽る意味がない。
ないものをあるように見せかけても、それは互いの心を侮辱するだけだと七季は思う。
側にいたい、慰めたいと願う心と。

側にいても、傷つけるだけだから離れたいと叫ぶ理性が。
満たされない少女の胸で、ぶつかりあって揺れていた。

「そういえば、間桐さんは？」
「う」
「その」
ふと、この場にいない少女を思い出した七季が、その名を口にすると。
赤毛の少年と、金糸の髪の少女は、そろって視線をあさっての方向へとそらした。
「……どした？」
夜色の目が、けげんそうな色を帯びて首をかしげる。
「桜は、だな……俺の骨が折られたことに、ちょっと逆上しちまって……」
ぼそぼそと小声で説明する士郎が、ちらりと隣に座っていたセイバーを見やる。
「バゼットを亡き者にしようと――いえ、あれは暴れる彼女を取り押さえるためだったかもしれませんが――したので」
金髪の少女が、さりげなく視線を走らせたのは、不自然に転がっている電気スタンドのコードだ。何故かスタンドから外れている。
「仕方なく、私が桜をオトしました」
きゅっ、と片手で何かをつかむセイバーの動作を見て、黒髪の少女が合点したように頷く。
――ああ。首の血管絞めて落としたわけか。
「いまは別室で寝かせています。できたらで良いのですが、あとで彼女も診てもらえませんか」
「何というか……お疲れさまでした」
思わず手をついてねぎらった七季に、セイバーが困ったように嘆

息して、部屋に沈黙が落ちたのだった。

#306　メソッド（後書き）

あとがき

＞タイトルの「メソッド」は「方法、方式」「順序」「筋道」「秩序」の意。

士郎の骨折は、オリ主に治療させようかと思ったんですが、良く考えたら「全て遠き理想郷（アヴァロン）」あったんですよね。

セイバーもいるし、回復するわ、と思い直しまして。

桜のはっちゃけは、大目に見たってください。

オリ主は、憶えてないなりに、大事にしてくれる相手を大事にしたいと思ってます。だから挙動不審というのもある。

#307　リコレクション

「――」
「ナナキ？」
何か、異常でも？
ベッドに横たわる桜を前に、無表情で黙り込んだ黒髪の少女へ、セイバーはけげんそうに声をかけた。
幻想めいた白皙の美貌の中で、エメラルドの目が不安をはらんで細くなる。
襟のついた、黒いシャツチュニックが覆う膝上に乗せられた、あかがねいろの柄を持つ魔杖も、静かな声で黒衣の少女へと呼びかけた。
「マスター」
「……ああ、うん。腫瘍のようなものを、見つけてね……。
セイバー嬢が原因となるものではないから、そこは気にしないでくれ。あと、これについては、あとで本人と詳しい話をするつもりだから」
かるく片手を上げて、これ以上の会話を制した七季の、あどけないのに硬く引き締まった表情が、剣精の少女には、しこりのような違和感を生んで、引っかかりを残した。

あれからバゼットの看病――といっても、異常がないか、部屋で経過観察をする程度なのだが――は、切嗣とリドルが交代した。
留守番メンバーの中で、バゼットに飲ませた薬に最も詳しいのはリドルだったし、切嗣は切嗣で、彼女に話があるから、とその目覚

めを待つことにしたらしい。
そして桜の診察が終わったげんざい、何故だか七季の部屋には、士郎とセイバー、イリヤスフィールとバーサーカー主従がひしめいていた。
ちなみに、クッションみたいにまんまるな、黒猫ばーじょん八十禍津日神はというと、まだ気絶している桜の部屋に残って、見張りという名の護衛である。
そもそものきっかけは、赤毛の少年が「訊きたいことがあるんだけど」と切り出した話にあった。
「アーチャーがさ、皿洗いのあとで拗ねてたんだ。その……何かあったのか？」
七地さん、あいつによそよそしいし。
――記憶がないにしても、俺たちにはふつうなのになぁ。
とっさに答えられなかった七季は、「あー」「うー」と言葉を濁し、しばらく困ったように士郎を見つめたあと、観念して彼を部屋に招いたのだが。
当然のように、従者であるセイバーと、自称「妹」な実質・姉のイリヤスフィールもついてきたというわけだ。もちろんバーサーカーは、彼女の従者なのだから当然といえる。
で。
七季が淹れた、水色が金に透き通る中国茶――蛇足ではあるが凍頂烏龍――を、これまた彼女が懐の不思議空間から出した、ミニテーブルに置いての、プチ座談会が開かれた。
不思議空間の方は、勘で使い方を思い出したという、けっこういい加減な使い方なのだが、使えるのだから問題ない、と大ざっぱな異邦人娘は、そのへん深く考えていない。
さておき。

「なかったことにされるのは、しんどいな、って」
黒髪の少女の、第一声がそれだった。
「なかったこと」
金髪の少女が、記憶を散らした七季の言葉を反芻する。その内容が、あまりに端的だったからだろう。
「その人が、ひとつひとつ積み重ねてきた、時間とか。感情（おもい）とか。努力とか。そういう、色々なもののこと」
だから七季は、噛み砕くように、その例をひとつひとつ挙げてみせた。
「知り合ったきっかけとか、交わした言葉とか、ケンカした理由とか、助けたこととか、助けられたこととか、そういう思い出と、そこに生まれたはずの感情とか」
『ああ』
「いきなり『そんなものはありませんでしたよ』って言われたらさ。そりゃ傷つくだろ？」
重くもないけれど、軽くもない。そんな不思議な響きのソプラノに問われて、イリヤスフィールも士郎も頷いた。
いっぽうは、かつて積み重ねた相手であった父親（きりつぐ）が消えた経験から。
またいっぽうは、彼女と同じように、それまであった記憶を、一度ぜんぶなくしてしまった過去を持つが故に。
――なかったことにされるのは、辛い。
そこにいるはずだった人の、戻ってくると思っていた返事が、ないことが寂しい。
あるはずだったものを見失って、心にぽっかりと開いた穴が空しい。
どこか歪な幼さを残した姉弟は、素直にこくんと頷いた。
「傷つけたくなかったんだ」
どっちも。
ぽつんと落ちた七季の一言が、水面（みなも）に波紋を広げる滴のように、

部屋に沈んだ。
「あの人たちも、私も」
だから、近づけない。

「いまの……『何もない私』から見ても、あのひとたちが、『私』を大切に思ってたか――思ってるのかは、わかる。
『目は口ほどにものを言う』ってのは、本当だよな。
思い出ひとつ引っ張り出せない私が、上っ面だけみても、そう感じられるくらい……悲しいことなのに。
当の本人、忘れられた側――『なかったことにされた側』――は、どれだけ酷い気持ちだろうと、思うとさ」
しんどいよ。
ほう、と少女がこぼすためいきも、そのあどけない横顔も、憂いに満ちて、セイバーに後ろめたさを感じさせた。白いブラウスに包まれた胸が、じくりと嫌な疼きを抱いた。
何故なら彼女は、「なかったことにする」ために「聖杯」を求めたのだ。
自分ではなく、もっとブリテンにふさわしい王を、ふたたび選定するため――その願いをかなえるために、願望機である「聖杯」を求めて、「世界」との契約に応じたアーサー王。
――こんなはずではなかった。
誰もが笑顔でいられる国を作りたくて。
その願いを守りたくて。
その手に剣を握って戦った王。
戦って。
戦って。
戦って。
傷つけたく、なくて。

背負った民を、国を、失いたくなかったから。
なのに国は、内乱によって分かたれた。
たくさんの民が、死んだ。
――王は、人の心がわからない――
ささやかれた言葉を、真に受けてしまった、純粋すぎる湖の乙女。
――ならば、自分でなければ。
もっと救われた人がいるのではと。
もっと優れた王がいるのではと。
ありえぬ「IF（もしも）」にアルトリアは焦がれ、惑ってしまった。
そんな素晴らしい理想郷が、あるのではと。
――夢を見たのだ。
遠い未来の異郷に召喚された騎士の王は、きつく胸元を握り締めて、記憶を散らした巫女の声を聞く。
「自分の存在じたいが、大事にしたいひとを蔑ろ（ないがし）にしてるってのは……凄く嫌な気分だよ」
――ああ。
それは酷い。
――それは確かに酷いことだ。惨（むご）いことだ。
セイバーの中に思い出されるのは、報われぬと知りながら、妻に迎えた一人の姫。
憎かったわけではない。自分の手では叶わぬと思っていたからこそ、友と認めた騎士との恋を、ひそかに祝福さえしたかった。
――蔑ろ（ないがし）にするしかなかった、自分の代わりに、幸せになって欲しかった。
「だってさ」
セイバーの葛藤を知らない少女は、ただ自分の罪深さを告白する。
それが、他の誰かを責めることとは、知らないままに。
「過ごした日々を。重ねてきた努力も。築き上げた絆も。私が『知らない』って言うだけで」
すべてを押し潰すどころか――風に吹き払われた灰のように、影

も形もなくかき消してしまう。
「絆」というものは、お互いの間に渡される架け橋であるからだ。いっぽうが落ちれば、それは役割を果たせないものに成り下がってしまう。
いつしか、淡々と紡がれていたソプラノには、たしかな水気が宿っていた。
イリヤスフィールも、士郎も、ただ黙って七季の言葉に耳を傾けている。
――けれど。
剣精の少女の中で、彼女の悩みとはまったく違った疑問が渦を巻く。
――あの民の、命を少しでも救いたいと思うのは、いけないことなのだろうか。
「なかったこと」にされる彼らを、蔑ろにして、傷つけてしまうのが辛い、と七季は言うけれど。
――私よりも優れた王を、選べば。
生きている方が、それでも命ある道の方が、尊いのではないだろうか。
――生きてさえ、いれば。
国を救うためという願いを抱えた少女は、しかし、ぽたりと一筋だけ落ちた、滴のあとを追うようにこぼれた、七季のささやきで、止めを刺される。
「私があのひとたちのことを『知らない』って言うたびに、私は『私』の中にあるはずの、あのひとたちを殺してることになる」
それまでの日々を。生きてきた足跡を。共に見つめたものすらも。
――ああ、駄目だ。
そこで彼女は、とうとう振り向いてしまった。
まっすぐに前だけを向いて走ってきた、その道行きを。

率いてきた民がいた。
剣を捧げてくれた兄がいた。
忠告してくれた、師がいた。
見守ってくれた、父がいた。
友誼を結んだ、友がいた。
――彼らは何のために、その血を流したのだ？
それを「なかったこと」にするのか。
――彼の信頼は、誰に捧げられたのだ？
それを「なかったこと」にするのか。
――彼の心配を振り切ったくせに。
それを「なかったこと」にするのか。
――彼の誇りでいられたか？
それを「なかったこと」にするのか。
――彼と交わした刃の意味は？
それを「なかったこと」にするのか。
そして。

『王よ――わたくし、貴方のことが嫌いではありませんでしたわ』

彼女の、最期に残した想いすら。
この報われぬ身を生み、葬るというのなら、せめて真の「王」たれと。
誇り高き烈花のように咲いて散った、后の言葉。
――それを「なかったことにする」というのなら――嗚呼、たしかに、ふたたび彼らを殺すことに他ならない！

「セイ、バー？」

はたと金糸の髪の少女が、マスターの声に顔を上げれば。
「あ……」
その湖水のように碧い双眸から、ぱたぱたと涙がこぼれ、青いスカートに時ならぬ雨を降らせているところだった。
「私は……間違っていた、のか……」
琥珀とルビー、そして黒瑪瑙の瞳に見守られて、異邦人の部屋には、しばし茶葉の香気が冷めるまで静寂がわだかまっていた。

#３０７　リコレクション（後書き）

あとがき

＞タイトルの「リコレクション」は「記憶（力）」「回想」「回顧」「想起」「再採取」「述懐」の意。

セイバーの回想に登場したギネヴィア妃は、もちろん書き手の捏造です。

いや美人なだけで、ランスロットが惚れたとも考えにくいので、中身もカッコよかったんじゃないかなぁと。

この聖杯戦争で士郎が死にかけたり、活躍しない以上（ぉ）、あの教会での名シーンもなくなるわけで。

セイバーが「答え」を得る機会もまるっと吹っ飛ぶんですよね。

そんなわけで、多少、無理やりとは思いますが、みずから悟ってもらうことにしました。

違和感があったら申し訳ない。

Ｚｅｒｏの小説で、王様の問答やってるときに、征服王と英雄王が白けた気持ちも良くわかるんだ……。

王様が自分の運営してきた国家ごと全否定、ってやっちゃいかんことだと思うんだ。傀儡国家ならともかく、臣下の立つ瀬がないだろそれ、とか。

ちなみに書き手はセイバーが好きです。念のため。

士郎の嫁だと思ってます（真顔）。頼むから幸せになってくれ、と思うＣＰナンバーワン。

凛様は、がんばって士郎を幸せに引きずっていくタイプだと思ってる（待て）。

#308　クルー

セイバーの願いを、士郎は打ち明けられていなかった。
けれど。

――戦うと、決めた。

青みがかった黄金の曙光を浴びて、戦場にたたずむ彼女を知っていた。

――それでも、戦うと決めたのだ。

鎧に身を固めた兵(つわもの)どもを、背に率い。
理想を夢見て、戦い続けた。
その顔を上げて、剣をふるい続けた。
あの刃の折り重なる丘で、絶望の慟哭を上げながら、契約に応じた彼女を見た。

それは、魔力を与えるため、主従の間に通じたパスから流れ込んだ記憶(ユメ)。
望んでいたのは、人の笑顔。
「人」から「王」へ成ったが故に、「人」として見なされなくなった孤高の剣。

――選定を。
――ふたたびの選定を。
――やりなおしを！

彼女が「聖杯」を求めた理由は、伝わってしまった。

――命は、取り戻せないのに。

かつて煉獄の中に突き落とされた少年は、自分が見捨てた命を思う。償いは、残されたものの務めだが、命をあがなう術（すべ）はないのだ。

気がつけば、士郎は少女を抱きしめていた。

いかんせん、ハンカチを持ち合わせない部屋の中なので、その服にセイバーの涙を吸わせるという不器用きわまりないやり方でだ。

「シロ――」

少年の硬い手のひらが、壊れ物をあつかうように、彼女の金糸の髪を撫でる。

ついで。

「うりゃっ」

「えいっ」

むぎゅっ。

「ぅむっ！？」

とたん、少女の鼻先が士郎の胸板に埋まる。

セイバーの背中側から七季が、その隣から、同じようにイリヤスフィールが、それぞれ抱きついてきて、トライアングル包囲網を完成させたのである。

「うん。我慢は良くない」

「セイバーばっかりシロウとくっついてズルいから、私もぎゅってするー！」

ついでにナナキともぎゅってするー！

何やらとってものんきで、ほのぼのとしたソプラノが二種類、大

小そろって剣精の少女を包み込む。
「えと七地さん？　俺も抱きしめるのはどうかと」
背中に回っている少女の腕に、ちょっと困惑ぎみな士郎へ、へろっとした答えを返す七季のポニーテールが、しっぽよろしくひょっこり揺れる。
「いんじゃないか？　いっそのこと、ひと塊になった方が。人の体温って落ち着くし。私もこーゆーの、嫌いじゃないし」
「ふふふ、シロウってば照れてるー！」
ナナキのふかふかね。ちょっと分けて！」
いっぽう、隣り合う黒髪の少女のバストが、いい感じにぽよぽよ当たるので、銀髪の童女がジェラシーも込めつつ紅い双眸で見上げれば。
「分けられるもんならな」
本気で困った顔の七季が、少年の背中に回したのとは、別の手で、イリヤスフィールの銀髪を撫でる。
「ナナキ、イリヤスフィール！　あなたたちまで――シロウ、何とか言ってください！」
「えーと」
光景だけ見ると、おしくらまんじゅう（ただし向かい合わせ）に見えなくもない。
「やだにゃー」
「私、猫は嫌いだけど、ナナキなら飼っても良いわよ？」
「こらイリヤ。人を飼うとか言わない。でも七地さんは、確かに猫っぽい……」
「にゃ、にゃーとか可愛く鳴いても、誤魔化されません……っ」
きゃいきゃい、わいわい。
けっきょく四人は、ぎゅうぎゅうゴロゴロむきゅむきゅむきゅと、さんざっぱら押し合いへしあいして、最終的には畳の上へ折り重なる、亀の子みたいになったとか、ならないとか。
それを眺める、霊体化中のバーサーカの目が、とても狂戦士とは

思えないほど和やかだったことは――誰も知らないことである。

いっぽう新都では。

「そこの嫁。きょうは巫女と一緒ではないのか？」

傲岸不遜な古代バビロニアの王様と、「アーチャー」組が、偶然がっつりエンカウントしていた。

「……嫁？」

胡乱な表情で振り返った凛の、サファイアのような目と、違和感バリバリなのに、聞き捨てならないような気がしたディルムッドの金の双眸が、ぐりんと赤い弓兵へ突き刺さる。

ちなみに、（霊体化しているのに）腹筋の限界に挑戦しているクランの猛犬こと、クー＝フーリンは、苦労しながらも、マスターである真言に「戦闘するのか」とパス越しに尋ねている。

＜アイツが「嫁」って柄かよ。いいトコ「姑」だろ？＞

＜全力で同意。ランサー、けっこう上手いこと言うねー＞

ド失礼な会話が、主従の間で交わされているのを、アーチャーが知るよしもないはずだが、赤いジャケットを着た男の眉間には、しわが深く刻まれている。

「先日の非礼は、詫びておこう。……マスターに何か用かね？」

「それには及ばぬ。既に謝罪は、あの娘から受けた。……ふむ。ここにも『本物』の巫女がいたか。まったく珍しいものよ」

切れ長のルビーアイが、ちりっと真言をひと舐めしていくも、両者の間に張り詰めた緊張は、一瞬のもの。

きょうは先日の黒いライダースーツではなく、ファーつきのコートを羽織っていた金髪の青年は、ポケットから上質そうな封筒を取り出した。

金に光る封蝋で閉じられたそれに、思わず警戒する白い髪の男を、

ギルガメッシュは鼻先で笑い飛ばした。
「案ずるな。仕掛けなどない。それは、先日の美酒の礼だと、七季に伝えておけ」
――ん？
そのとき、ギルガメッシュをのぞく一同の心が一つになった。
何でコイツ、彼女の名前を知ってるんだ？
「そうよな。あれの同伴者であるなら、雑種の同席も許そう。王の施しだ」
ははははは、と高らかに笑って、金髪ルビーアイの人外美青年は、颯爽と立ち去った。
「何故、第四次聖杯戦争の『アーチャー』が、ここに……？」
「何ですって？」
ディルムッドの、困惑と警戒に満ちた呟きを、耳ざとく聞きつけたツインテールの少女が振り返るも。
ぎっくん。
「そうか……あれから私が知らない間に、マスターが、アレと会っていたとはな……」
これはじっくり、みっちり、話を聞かねば。
それはそれはひくーい声で、「フフフフ……」と地獄の使者を思わせるような含み笑いを紡ぐ、白い髪の偉丈夫に、チートな巫女さんも、天才少女魔術師も、二人の槍兵すら、それとなく距離を取った。
――あ。これヤバい。
その頼もしく見える広い背中から、何やら黒い怨念じみたオーラが見えるのは、気のせいだと思いたい一行である。

ところ変わって、ふたたび衛宮邸。
その一室では、目を覚ました赤毛の麗人へ、無精ひげの男が厳か

な、有無を言わせぬ声を突きつけていた。
「ウェイバー・ベルベット――否(いや)、ロード・エルメロイⅡ世と言った方が、わかりやすいかな？
彼と繋ぎを取ってもらいたい。あの聖杯を解体するためにね」
「な……！？」
「こう伝えれば、彼は飛んでくるはずさ。『君の主を知るものより』とね」

そして。
「ちょっといまから寝るからー」
じゃれ倒してお腹が減ったらしい少年少女たちは、居間でお茶を飲んでいたのだが。
ひらひらと手を振る黒髪の少女が、ポニーテールを解く様子に、すっかり落ち着きを取り戻したセイバーが、けげんな表情でエメラルドの目を向けた。
「ここで寝るのですか？」
ころん、と横になった七季を、銀髪の童女も首を伸ばして眺めやる。
「部屋に戻らないの？」
「なるべく固まってた方が良いだろ？」
ここなら、セイバーとバーサーカーがいる。桜には、八十禍津日神(やそまがつひのかみ)が、バゼットの側には、「ジゴロの神様」こと切嗣と、闇の帝王の前身たるリドルがついているのだ。
「それもそうね」
「じつは、寝るっていうより、『中』で作業してる神様に、進捗状況を聞いてみようと思って。まあ意識飛ばすから、寝てるのと変わんないってだけなんだけど」
「なるほどなー」

「トランス状態になるわけね。わかったわ」
というわけで。
無造作に寝転がった黒髪の少女は、ほどなく、すよすよと寝息を立て始めた。

闇の中を降りていく滴。
その一滴が、ついに奥底へ到達したところで――
「ＳＡ・ＭＵ・ＲＡＩ☆」
へアッ！
やたらめったらノリノリな曲を、やけっぱちぎみに歌いながら、細密なピースで構成された立体パズルを組み立てている、紫の髪の武士――ではなく、思兼神（おもいかねのかみ）を目にした七季は、ぐったりとその場に脱力した。
「……こんにちは」
「いひょうっ！？
み、見てたでござるか……？」
こわごわと、黒髪の少女を振り返る、美貌の青年。
「けっこう好きな曲かもです」
「拙者、腹を切るでござるーっ！」

とりあえず、七季のコメントに、羞恥で錯乱した紫暗の髪の青年を取り押さえたのは、黒い馬頭を持つ魔性――「ナイトメア」だった。
泉の中に沈んでいる、記憶のピースをバケツですくって拾い集めていたのだという。ツッコミどこ行った。
少女の記憶であるところの、巨大な立体パズルは、透き通った水

晶でできた地球儀に似ているだろうか。泉の上にふわふわと浮かんで、その透明な未完成の球体の表面を、陽射しを受けるたび、プリズムのように色を変える。

夜明けのような紫や藍色、金の混じった赫（あか）や薄紅。

見ているだけなら、魔法のかかった美しいオブジェのようだ。

「えと、ありがとうございます」

ぺこん。

「どういたしましテ。ボクのことは『ナイトメア』で良いヨ。記憶が飛んだ経緯は解ってるし、気にしなくて平気だからサ」

ドクター・メフィストに封印された、精神寄生体の悪魔は、彼女の許しなくして外に出ることは叶わない。

けれども、七季にその存在を許され、ふだんは器の中で彼女を見守っているだけのナイトメアは、こと、精神や記憶に関してはスペシャリスト。

少女の記憶がバラバラにされるという、この災難時に応じて、記憶のパズルを組み立てる知恵の神のサポートを、みずから務めることにしたのだった。

それでも量は膨大で、何より――ふつうのパズルにはあるはずの「お手本」がないときている。

だから知恵の神と、記憶のピースが正しい順番なのか、この少女を良く知る悪魔・ナイトメアに確認している、という手間をかけていた。

七季の成長を見守ってきたナイトメアは、記憶のかけらに記されている少女の姿が、いくつのときのものなのか、おおよその判別がついたからだ。

ただし、いまは七季が申し出た、「休憩中」。

「ぶっ続けの作業は、いくら人外さんでも疲れるでしょう?」

そんな言い分の元、この世界の主である少女は、温かく薫り高いお茶と、サンドイッチなどの軽食、クッキーなどのピクニックメニューを提供して、一緒にティータイムを過ごしている。

「ううっ……拙者、こんなに優しくねぎらってもらったのは、久しぶりでござるよ～……」

きらきらと青く澄んだ水を湛える、泉のほとりの、若草の上。ぐすぐす嬉し泣きをしながら、サンドイッチをぱくつく知恵の神に、馬頭の悪魔が呆れた視線を向けていた。

「誰のせいでこうなったと思ってるのサ？」

「まあ、三日はさすがにムチャでしょうしねぇ……」

自分のことのはずなのに、どこか悟ったような声音で、聞くともなしに思兼神（おもいかねのかみ）のグチを聞きながら、なだめるように、慰めるように背中を撫でる黒髪の少女。

はたからみると、黒い馬頭の悪魔、黒髪の巫女さん、紫頭のポニテ侍と、かなりシュールな三人組である。ツッコミが不在って恐ろしい。

あえていうなら、この場合ツッコミ役は悪魔である。どうなんだこれ。

「それなんだけどサ、七季」

「はい」

体は人間で、頭部だけ馬という、いささかシュールな悪魔にも、記憶がないというのに、ナチュラルに会話を交わす「神使（しんし）」の順応力は、ないしんナイトメアもビックリであるが。

こてん、と首をかしげる少女に、絆されきっているこの悪魔は、彼女が記憶を取り戻すための、重大な手がかりを口にした。

「キミの使い魔――アーチャーって男が持ってる、黒い台座に、赤い石のピンブローチ。アレを手に入れてくれなイ？」

血液は、魂の銀板だからサ。

#３０８　クルー（後書き）

あとがき

＞家出したほのぼのを連れ戻してみた（キリッ）。

タイトルの「クルー」は「縁」「因」「手がかり」「糸口」「捕えどころ」の意。

王様からの招待状。なじょしてか、穏便に邂逅が済んだことに、書き手がいちばん驚いた件。えー？

まあ、昼間だったからというのもあるんですが。

兄貴は霊体化していたので神字を目撃されずにすみました。セーフ（待て）。

作中の「銀板」は「銀板写真」の意。たぶん。

オモイカネさまが歌ってたのは「ダンシング☆サムライ」をイメージ。イメージですから。

#309　キープセイク

引き続き、衛宮邸の居間である。
畳に転がって、横向きのまま眠る黒髪の少女を、しげしげとルビーの双眸がのぞきこんでいた。
「やだ、ナナキの顔に畳のあとがついてるわ」
「おや」
「あー。じゃあこれ枕にするか」
イリヤスフィールの呟きに、どれどれと釣られてのぞき込んだ金髪の少女と、世話焼きが性分の童顔少年が、苦笑を浮かべながら、七季の頭を持ち上げて、その下に二つ折りの座布団を差し込んだ。
「……ふに」
うりうりと、枕になった座布団に、懐くかのように頭を馴染ませる七季。どこか動物じみた、そのしぐさを目にして、セイバーが白い面(おもて)に微笑みを浮かべた。
「枕はお気に召したようですよ、シロウ」
「そりゃ良かった。と、お湯がないな」
ふたたびお茶を淹れるため、赤毛の少年はポットを手に取る。けれども、その重さは軽い。中身が残り少ないのを悟った士郎は、腰を上げるとキッチンへ去った。
いっぽうイリヤスフィールは、暇つぶしに、さっき異邦の少女から借りた小説を開く。
「イリヤスフィール、それは？」
「ナナキから借りた物語の本よ。架空の国を舞台に、一人の少女が王になるまでを描いた話みたい。でも、けっこう言葉が難しくて」
さっきまでは、ナナキに教えてもらいながら読んでたの。
「それは……興味深いですね」

少女が王となる。
その言葉に、自分を少し重ねたセイバーは、「見せてもらっても良いですか？」と銀髪の童女に声をかけた。
「良いわよ」
白い指が、ぱらぱらと文庫本のページをめくる。
「ふむ……よろしければ、私が読む手伝いをしましょうか？
これでも聖杯から現代知識のフォローがあるので、読むのに不自由はありませんが」
その申し出に、イリヤスフィールは、パチパチとルビーの瞳を瞬いた。士郎のサーヴァントである彼女が、そんなことを言い出すとは思っていなかったのだ。
「……良いの？」
聖杯戦争は、魔術師たちの殺し合いだ。
しかしげんざい、大半のサーヴァントは味方だし、肝心の奪い合う「聖杯」すらも欠陥品とわかった以上、セイバーには過剰な気負いが失せていた。
彼女じしんが望んでいた「やりなおし」についての執着を、自分の中で解決してしまったから、ということも大きい。つまり少女騎士には、余裕ができたのだ。
「これくらいであれば、護衛の邪魔にはならないでしょう。迷惑でしたか？」
わずかに憂いを眉根に刻むセイバーへ、あわてて童女はかぶりを振った。
「ううん。ありがとう、セイバー」
お礼を言う銀髪の童女。そこに剣士のサーヴァントは、かつて騎士の誓いを立てた、アイリスフィールの面影を重ねて見た。
イリヤスフィールは、彼女の忘れ形見だ。士郎と共に、この子も守り抜きたい、とセイバーはひそかにおのが胸に誓った。
「どういたしまして」

「セイバーは、途中から読むことになるから、簡単に説明しておくね。

主人公は、ある日、学校で見知らぬ金髪の男性に出会うの。それから屋上で、見たこともない化け物に襲われた後、気がついたら、知らない世界に飛ばされていた。

その世界はね、十二の国それぞれに、『王』と『麒麟』がいるところ。『麒麟』っていう聖獣が、国の『王』を選ぶ、不思議なシステムが敷かれている。そういう世界だったの――」

イリヤスフィールから、大まかなあらすじを聞いた剣精の少女は、そのまま寄り添って一緒に本を読み始めた。

キッチンから戻ってきた士郎は、その光景を微笑ましげな表情で眺めている。そうしていると、どちらも外国人で色素が薄いせいか、仲睦まじい姉妹のようにも見えた。

しばらくすると、そこに目を覚ましたらしい菫色の髪の少女がやってくる。足元には、まんまるボディの黒猫が一匹。

「ご、ご迷惑をおかけしました……あの、先輩のケガは？」

頭を下げる後輩に、士郎は優しい声をかけて座るよう促す。

「ああ桜。俺のは、もう治療が済んだから。心配かけてごめんな。ほら、もう大丈夫だ。良かったらお茶飲むか？」

「はい！

でも先輩……本当に痛くないんですか？」

腰を下ろした桜に、向かいから湯飲みを渡す少年は、安心させるように手を振る。

「この通り。ほら、七地さん――そこでいま寝てるけど――彼女、治癒魔術が使えるんだ。バゼットさんの方も、それで抑えてもらったんだ」

じっさいに士郎の怪我を治したのは、セイバーの宝具である「鞘」だったのだが――あれに関しては、むやみに明かすなと、切嗣とセ

イバーから、口をそろえて言い聞かされていた少年は、素直に言いつけを守った。

彼も正直、限定的にでも「不死」を与える宝具が、自分の中に埋め込まれているなど、信じられなかった、ということもあるが。

「そう、ですか……」

少年が琥珀の目を向ける先に、花の名を持つ少女は、いささか複雑そうな目を向けつつ、想いを寄せる相手が淹れてくれたお茶を一口含んだ。

桜の見張りについていた、まんまる黒猫――もとい、八十禍津日神（やそまがつひのかみ）は、ちょっと短めの太い四足で、てまてまと寝転ぶ七季へ近寄っていく。

わりと目立つ存在感に釣られて、士郎をはじめ、イリヤスフィールやセイバーまでが、ついつい視線でそれを追いかけると、シャツチュニックを着た少女が、まるで猫さながら、丸くなっていることに気づいて噴き出した。

「さっきまで、まっすぐ寝てたのに」

「寒いんでしょう。屋内とはいえ、シャツ一枚とズボンに靴下だけでは」

「だな。毛布取ってくる」

くすくす笑う、銀髪の童女に、「鍛え方が違うでしょうし、サーヴァントと一緒にするのは気の毒です」とフォローを挟む剣精の少女。

フットワークの軽い、穂群原学園のブラウニーは、さっさと腰を上げて居間を出て行く。

「あ、先輩、私が――」

「良いって。桜はゆっくりしててくれ」

それからしばらく時間が過ぎた。

ガラガラガラ、と玄関から引き戸を開ける音が聞こえる。
「お、遠坂たちかな」
もっとも、この家の合鍵を預けている人間は限られているから、しばらく立ち入り禁止を言い渡している大河でもなければ、相手は知れている。
案の定。
「ただいまー」
と聞こえてきたのは、凛のサーヴァントである真言の声だった。
だが、気のせいだろうか。どこか少女の声が遠慮がちで震えているような。
首をかしげる士郎が、そう思っている間にも、居間には複数の足音が近づく。
――あれ。何か寒気が。
一緒に不穏な空気が近づいてきた気がする、少年の勘は間違っていなかった。
ずん。
――魔王だ。魔王がいる。
焦げた褐色の肌。強面（こわもて）の顔には深い眉間のしわ。その鍛え抜かれた長身の、威圧感が何よりハンパない。
居間の入り口近くに座っていた桜が、無言で後ずさるほどだ。察して欲しい。
不機嫌きわまりないアーチャーは、その体躯からにじみでる威圧感とは裏腹に、足音もなく動く。
そこに主従の絆があるからだろう。二つ折りの座布団を枕に、毛布に包まって、ぬくぬくと平和そうに眠っている（ように見える）少女へと、まっすぐ歩み寄った。
「ちょ、待てアーチャー！　無理に起こすな！」
「……何だ、衛宮士郎。私はマスターに用があるのだがね」
きわめて、重要な。
地の底から響くようなドスのきいた低音に、ちょっとのけぞりつ

つも、正義の味方志望の少年は、ぐっと琥珀の目で、錬鉄の英霊を見返した。
「七地さんは、いまトランス状態なんだよ。ナカの神様に、記憶の進捗――たぶん組み立て状況がどうなってるか――ってのを、訊いてくるって言ってた。
そういうの邪魔するのは、良くないんじゃないのか？」
苦虫を噛み潰したような形相を深めつつも、白い髪の偉丈夫は、ひとつ深呼吸するように大きなためいきをついて、どかりと少女の傍らに座りこんだ。
「……仕方あるまい。未熟者にしては、正論だ」
「お前な」
男のかるい毒吐きに、ちょっと眉間を引きつらせた少年は、アーチャーの背後から、おそるおそるのぞき込んでいた少女たちへと目を移す。
「お帰り、遠坂。漣さんも」
「ええ……ただいま」
「ただいまー。あ、これお土産」
桜色のコートを着た少女が差し出したのは、まだ温かい紙袋である。
「お、江戸前屋のたい焼きと、どら焼きだ。ありがとな。いま新しいお茶淹れるから……ランサーたちはどうしたんだ？」
ぴくん、とそれに反応したセイバーが、エメラルドの目に期待を浮かべて振り返る。
「ああ、それなら」
「あたりを見回ってきましたが、監視や、他のサーヴァントの気配は、いまのところないようです」
「ちーっす。同じく。てか、赤いのの爆発は……まだか」
黒髪の美青年と、こちらは屋内に入ってから現界した、青い髪の男前が、それぞれあとから顔を出す。家に入る前に、一通り、あたりを見回ってきたらしい。

ディルムッドの手には、ブランドのロゴが入ったビニールバッグが幾つか提げられていた。新都回りのついでに買い物もしてきたのだろう。

「その、我が主は大丈夫だろうか……」

アーチャーの不機嫌と、その原因を知っているディルムッドは、心配そうに横たわる七季を見つめている。

マスターを心配するからこその、弓兵の怒りもわかる青年は、けれども少女を庇いたい気持ちもあって、複雑な表情を浮かべている。

そのときだった。

ふ、と七季の白い目蓋が震えて持ち上がる。

あまりに間近でガン見されて、起きる気になったのか。それともたんなる偶然か。

ともかく、毛布に包まっていた少女は、おっくうそうとはいえ目を開くなり、まんまる黒毛玉から離した腕をゆっくり伸ばし。

「――」

ぎゅう。

間近で凶悪面をしているアーチャーの首を、それはそれは無防備な笑みで抱きしめた。

相手が思わず憤りをすっ飛ばしてフリーズするくらい、へにゃりと幸せそうな表情で。

「すげーカウンターだな」

寝ぼけている。間違いなく寝ぼけている。

それは、はたから見ていれば、良くわかるのだが、抱きしめられている側は、たぶん、それどころではないだろう。

「おーおー」と物見高く見物しているランサーに呆れつつ、朝食のあとに拗ねていた男を知る士郎は、ちょっとフォローを入れてやる。

「アーチャー。七地さんは、記憶がない自分が、お前らのこと傷つけるんじゃないかって避けてただけだ。あんまり怒るなよ」
「え」
「そうなの？」
少年の言葉を聞きつけた凛と真言は、その整った面輪を明るくする。
「良かったじゃない、真言」
「ん。ナナちゃんに嫌われたら、私ちょっと泣く」
こちらはこちらで、「アーチャー」主従が、仲良くハグして喜んでいた。

そして七季が正気に返り。
「ね、寝ぼけてすみません……」
はうぅ。
まだ膝から下は毛布をかけたまま、まんまる黒毛玉と化している災厄の神を抱きしめて、黒髪の少女は従者へと詫びる。
「……いや」
「それで、あのですね」
まだ仏頂面ではあるが、幾分か機嫌は上向きになったアーチャーの耳に、七季のソプラノが容赦なく突き刺さった。
「アーチャーさんの持ってる、赤い石のピンブローチをいただけないでしょうか？」

#309　キープセイク（後書き）

あとがき

＞タイトルの「キープセイク」は「形見」「記念品」「忘れ形見」「思い出の品」の意。

セイバーにとって、イリヤはアイリの忘れ形見でしょうし、アーチャーにとってピンブローチは「記憶のあるマスター」の思い出の品であり、形見みたいなものということで。

話がなかなか進まなくて申し訳ない。

書き手も早く、ワカメとか英雄王とか書きたいです。

#３１０　レッドストリング

「術式展開、立体陣を形成します」

宣言は低く厳粛に。

場所は衛宮邸。その夜の庭に、黒衣をまとう銀髪の佳人と、束帯姿の文人、そして紫暗の髪を結った青年が三方に立ち、互いの視線が交わる中央へと片手を差し伸べる。

月読命（つくよみのみこと）、道真公、そして思兼神（おもいかねのかみ）の三柱が見つめる先に、火炎の玉と見まがう、球体――否、それは陣である――が芽吹くように育ち、膨らんでいく。

白い月光の下、絶えず蠢く朱色の文字は、ちりちりと明滅しながら円を描くように軌道に沿って走り、その数を増やして密度を増していく。

遠目には、まるで朱色のリボンか糸が、くるくると動きながら玉になっていくようにも見えるだろうか。

その不可思議な光景を、縁側に並んで眺める、聖杯戦争の参加者に混じって――品のいいセーターを着た栗毛の少年が座っている。

「ありがとな、伯言」

黒髪の少女が、そう彼を呼ぶのを、アーチャーは何とも言いがたい気持ちで聞いていた。

話は、数時間前にさかのぼる。

記憶のパズルを効率よく組み立てるための「お手本」を作るため、「記憶を失う前の七季」の「魂魄情報」が保存されている血液――ようするに、アーチャーが七季から贈られたピンブローチの中身―

―を、ナイトメアの助言によって七季は求めたのだったが、思いのほか彼の反応が芳しくないので、少女は次善の案を思いついたのだ。
すなわち、「七地七季」の過去を良く知る人物の記憶との、照らし合わせである。
記憶そのものではないけれども、違う角度から見ても、情報は得られるだろうと、七季は少しだけ取り戻した記憶の中から、幼なじみを選んだのだ。
真言に、伯言を呼ぶことは可能かと尋ね、それが可能だとわかると、今度は思兼神（おもいかねのかみ）に、他者の記憶を参考にすることは可能かと問い合わせる。
それで良いのかと、アーチャーが少女に問えば、七季は苦笑に似た表情で「人の心を無視してまで無理強いすることじゃない」と返すだけだった。
少年を引っ張り込むことじたいは、すぐにできた。
おなじみ、真言の「ジッパー」によるものである。
「七季っ！」
そして登場するなり、幼なじみの少女に抱きつく伯言。
「わぁ。てか成長してもブレないなお前」
さすがというか、何と言うか。
呆れぎみに呟く七季に、すかさず栗毛の少年が、膝立ちの姿勢で確認する。
「記憶を一部だけ取り戻して、あとは絶賛喪失中とは聞きましたけど……その様子だと、十歳くらいですか？」
「うん。良くわかるな」
「ちょうど小学校五年生のあたりでしょう？
高校に上がる前までの記憶が残ってるなら、霜夏も一緒に呼ぶかもしれませんが、僕だけということは、霜夏は別の学校だった小学生のころというのが、可能性としては高いでしょう。
六年のときの、せっぱつまった感じもないですし、ちょっとまだ子供っぽい無防備さが残ってますから、中学生じゃないですね」

が、その的確すぎる内容に、聞いているものは、しだいに顔を引きつらせていく。

「七季が望むなら、全力で協力しますけど、僕はそのままでもいっこうにかまいませんよ？

いまなら、子供のときよりも不手際なく、より長く、七季と一緒に思い出を埋めて行けますし。

忘れたのなら、また新しく憶えればいいんですよ。他の人の分まで、僕が割り込めるキャパができたと考えればオーケーです。勉強だって料理だって、わからない道に出たって、僕と一緒なら教えるから大丈夫！」

にっこりと、天使のような悪魔の笑顔で微笑む美少年は、いっこうに七季の体を離そうとしない。

「オイ大丈夫なのかアレ」

ランサーが肘でこっそり白い髪の偉丈夫をつつけば、アーチャーは仏頂面がさらに険しくなっている。

凛も他人事ながら、伯言を連れて来た真言に話しかけて「あれ野放しにしてて良いの？」などと言っている。

「おーらい。良くわかった。てか、成長した伯言の病状が悪化してるのも良くわかった。止められなかったんだな、私……隠さずにオープンなあたり、もう慣れたのか。慣らされたのか。ドンマイ私。

――とりあえず、中学と高校は、伯言と一緒だったってことで良いのか？」

片手を上げて「小学五年生」までの記憶しかない七季は、「どうどう」と栗毛の幼なじみをなだめやる。

「中学一年と、二年の半ばまでは、七季の親御さんが転勤で県外にいましたから、そこのフォローはさすがにできませんね。せいぜい電話でしゃべった内容くらいしか」

「憶えてるのか？」

夜色の瞳が、驚きにみはられる。栗毛の少年は、けろっとした口調で即答して、七季を脱力させた。

「もちろん。日記もつけてますけど？」
「……うん。ここは素直に感謝しとこーか……」
このまま膝にかけた毛布に包まって、もう一眠りしてしまいたくなった少女は、額を伯言の肩口に預けて、少しだけ現実逃避する。
はぁ。
そして嘆息した七季は、ぴこんとポニーテールが跳ねるように、体を起こすと、ふたたび幼なじみと向かい合った。
「で、だ。伯言に頼みたいのは、私の記憶がジグソーパズル（未完成）なんで、その『お手本』にするべく、私のことを良く憶えてるだろう伯言の記憶を、抽出・コピーしたいんだ、けど……協力してくれるか？」
おずおずと見上げられて、幼なじみの少女にダダ甘&依存ぎみの伯言が、ノーと言うはずがない。
「あ、言っておくけど、私は見ないぞ。確認するのは、神様だけだから！」
参考にする以上、彼の記憶は見られることが前提になる。
それはプライバシーにかかわることであるし、幼なじみが同意するかどうかは、いくら七季でもわからなかった。
「そうですね。七季が見ないのなら、かまいません。僕も男ですし、女性には知られたくないことだってありますから。それだけ約束してもらえれば」
ぱちん、と少女の黒い目が、幼なじみの紅茶色の目を見つめた。
「や、約束するっ」
ぶんぶんと首を縦に振る七季を、栗毛の少年はやんわりと取り押さえて、その髪を撫でくりまわす。愛でるように、確かめるように。
そんな伯言の美貌にやわらかい笑みが浮かぶのを、しかし周りの人外および人間は、一筋の汗を流しながら見守っていた。
――え？　良いの？　それで良いの？
それぞれツッコミたい気持ちは山のように積み重なっているのだが、本人たちが口にしないので、ここは沈黙の一手である。

「提供するのは、血の一滴だけで良いんだって。そこから魂魄情報を抜き出して、記憶配列を情報化。さらにそこから『七地七季』に関する要素を、検索かけて分析・抽出して、マップ化みたいなことをするらしい」

ふむふむと説明に頷く幼なじみと向かい合ったまま、七季は抱いていた迷いそのままに、うろうろと視線をさまよわせたあと――少女は、こそり、と彼へ耳打ちした。

あのな。

「私、その――アーチャーさんとえっちした、みたいだ」

記憶はないんだけど。

「わかりました。ちょっとＯＨＡＮＡＳＨＩさせてもらいますね☆」

困惑と羞恥のにじむ黒髪の少女の声は、小さく。ようやっと伯言にだけ聞こえる程度のものだったが、少年の浮かべたまがまがしい笑顔は、七季のささやきを知らないものにも、新たな魔王の降臨を予感させた。

「バカですか？

僕が怒っているのは、記憶をなくして不安このうえない七季に、気を使わせて心配かけて苦しませたことであって、あなた方に先越されたからじゃありません」

別室に引っ張られた真言とアーチャー、そしてリドルたち七季の従者らは、そこでねちねちねちねちと、腹黒さＭＡＸの精神攻撃を食らったあとで、仁王立ちする少年にそう言い放たれた。

「そりゃ腹立たしいですけどね。いろいろ収まらないものもありますけどね。

あのひとが処女でなくなったくらいで、僕が七季をあきらめるわけないでしょうが」

ふん、と鼻で笑われて、今度こそ異世界トリップ一行は、あんぐ

りを口を開けたまま伯言を見上げた。ちなみにランサーは締め出された。伯言と面識がなかったからだろう。

『あ』

言われてみれば。

「体だけで良いなら、とっくに襲ってます。どれだけ時間があったと思ってるんですか。やる気なら、中学上がる前にやってます」

どきっぱり。

――ちょっと待て。

さらっと吐かれた暴言というか爆弾発言に、おののいた真言たちが、いっせいに内なるツッコミを入れる。そのシンクロ率、四百パーセント。

「気持ちがないなら意味がないんですよ。

七季が身を任せるほど信頼したのが、僕よりもアーチャーさんが先だった、ということでしょう。業腹ですが。ええまったくもって業腹ですが！」

そっちも怒っているというか、きっちり嫉妬はある模様。

紅茶色に燃える伯言の目は鋭いが、それでも、理性的に話せるだけの冷静さは残っているらしい。

「目の前で知らないって言われてないからっ……ナナちゃん、最初はアンタのことだって忘れてたんだからね！」

それでも言われっぱなしは癪に障ったのか、栗毛の少女が思わず声を張り上げた。

「ああ。僕なら首をくくるかもしれませんね」

つややかな栗毛にふちどられた、秀麗な容貌に何でもないような表情を浮かべて、伯言はあっさり言ってのけた。しかし少年のセリフには裏がある。「あなた方はそこまでやらないでしょう？」と。

――死にたくなるほど彼女を想っていないでしょう？

「でも、一瞬あとには思い直しますよ。僕が死んだら、七季を守る人間が一人減る。それに、僕ではない相手に持っていかれるなんて、冗談じゃありません。何より七季が泣くじゃないですか」

清々しいまでに、一貫した七季至上主義だった。
病気もここまでくれば、あっぱれと言うべきだろうか。
「目の前の七季をないがしろにしてまで、過去に固執する方が呆れます。あのひとは、それほど弱くもありませんが、強くもありませんよ」
――僕を見捨てられないくらいですから。
くすり、ととろける蜜のように甘く、したたかに少年は笑う。
「もっとも、そういう弱さも好きなんですけど」
かわいいひと。
恋に病んだ、一人の男を前に、使い魔たちと「神妻」の巫女は立ち上がる。
――落ち込んでいる場合なんかじゃない。
それぞれの胸に、苦いものは残るけれど。
――これに七季を独占させたらえらいことになる！
くしくも、一同の考えは、もののみごとに一致していた。

そして伯言による、一方的なＯＨＡＮＡＳＨＩが済むと、あわただしく儀式の準備が進められる。
月読命、道真公、そして思兼神の三柱が、七季によって顕現し、血液から記憶の抽出とコピーをするための術式を組み上げ。
月読命の加護が満ちる月夜に、その儀式を執り行うことになった。
そして話は冒頭に戻るのであるが――
カランカランカラン！
衛宮邸の警報が鳴り響くと同時。
「衛宮アアアァァ！！」
目の周りに炎の縁取りが施された白マスク、真っ赤なパンツとリングシューズ姿の人物が、颯爽と塀を飛び越えて登場したのだった。

#３１０　レッドストリング（後書き）

あとがき

＞タイトルの「レッドストリング」は「赤い糸」。

気分で英語を乗っけてみる。

「ｒｅｄ　ｓｔｒｉｎｇ（ｔｒａｄｉｔｉｏｎａｌｌｙ　ｆａｔｅｄ　ｌｏｖｅｒｓ　ａｒｅ　ｊｏｉｎｅｄ　ｂｙ　ｔｈｉｓ　ｕｎｓｅｅｎ　ｓｔｒｉｎｇ）」

うん。「ｆａｔｅ」が単語で入ってたからというだけの話なんだが（こら）。

せっかくなので、爆弾を二、三投げ込んで爆発させてみたでござる。

これが真のヤンデレよ！（待て）

ついでに記憶のないオリ主がさっくりとＨバレしたがために、流血沙汰を回避。

そして最後にやらかした（笑）。

書き手が、我慢できませんでした。

#311　ワカメ

「その声はッ！」
そう叫んだのは、いったい誰だっただろう。
だが、突如として庭にあふれた青い触手――否、それはワカメであった――によって、三柱の神が展開していた術式は中断。
ざっ。
「何だ。野生のワカメか」
襲いかかるワカメの波に、しかし栗毛の巫女は神剣を一閃、他の英霊たちも、おのおのの武器をふるって、そのくねりのたうつ潮の香ゆたかな海藻類を切り払い、あるいはぶっちぎる。
ざ、ざざざざ、ざ、ざっ。ざざあっ。
「野生のワカメって……先輩、ワカメは陸には生えませんよ！」
ひぃキショいっ！
いつもはボケ担当が多い黒髪の少女も、これにはさすがにツッコミを入れた。たとえ記憶がなくとも、ツッコミスキルは健在のようだ。
押し寄せようとする青い触手にのけぞり後ずさる七季のポニーテールが、おびえたしっぽのように忙しなく揺れる。
「七季、武器を！」
「えっ……と」
そんな幼なじみを背に庇いながら、武器を求める伯言の、さらに前へと立ちふさがるアーチャー。男は、手にした双剣で危なげもなくワカメを切り捨てる。
ざんっ！
「面妖な……！」
「あ、ありがとうございますっ」

赤い外套をまとう背中に、七季は感謝の言葉をかける。
男の胸が、少しだけ震えた。
日ごろ、踊るジャガイモや空飛ぶニンジンを調理している戦う主夫――もとい、錬鉄の英雄でも、これほどのワカメに襲われた経験は、さすがにない。
というか、このワカメ、微妙に女性ばかりを狙ってくるのである。うねうねとした動きも、けったいだ。
アーチャーの鷹の目は、鋭くこの奇怪なワカメを睥睨する。何であろうと、主を害するものは通さない。もう不覚を取るのはうんざりである。
――どうにも、このワカメには邪念が感じられるしな……。
ちなみに、さっきまで儀式を執り行っていた神々は、既に七季の「中」へと収められ、退避は完了。
儀式は中断したが、いまは外敵を排除するのが先決である。まっかな外套を翻し、白い髪の偉丈夫は、ざくざくと青い触手を切り捨て続ける。
いっぽう、凛に向かう青みがかったワカメは、彼女のガンドにはあまりダメージを受けない様子で（なにしろ海草だ）、もっぱら真言が神剣をふるって切り払っている。
かたや、イリヤスフィールに向かうワカメは、バーサーカーにちぎり捨てられ、接近を許されることはない。そして、ツインテールの少女魔術師を守る、真言の隙を狙うワカメは、二人のランサーが見逃さない。
しかしワカメの大群は斬っても斬ってもきりがなく、波のように庭先から押し寄せてくる。
「まさか……兄さん……」
桜だけが、覚えのある現象におののきながら、赤毛の少年の背に庇われている。しかし、その菫色の目は、月を背負って浮かび上がる、新たな影に気づいてしまった。
――ライダー！

声にならない少女の叫びを知ってか知らずか、雪のように白い天馬を乗りこなす、アイマスクの美女は、苦悩のにじむ声で訴えていた。

「シンジ、いけません！　そこにはサクラが……！」

しかし、目の周りに炎の縁取りが施された白マスクをかぶった人物――「シンジ」と呼ばれた少年は、借り物の従者の声を聞き入れはしない。

彼の手にした、その姿には不似合いすぎる重厚そうな書物が、いかにも妖しい燐光を帯びて、「偽臣の書」は、サーヴァントの令呪としての効果を発動した。

「ワカメエエエエエェェ！」

すなわち、宝具の発動である。

「ッ……騎英の手綱（ベルレフォーン）！」

神秘の秘匿はどこいった、とツッコミどころ満載の展開に、その場の大半が頭痛を覚えつつも、士郎と桜を守って戦っていたセイバーが、もはや再びの宝具発動か、と「風王結界（インビジブル・エア）」を振り払ったとき。

「エクスペリアームス！（――武器よ去れ！）」

天馬の進行方向にいる栗毛の少女から、紅の閃光が迸った。

「なッ！？」

どぼふぁっ！

とたん、ライダーの跨っていた天馬はおろか、彼女の身につけていたアイマスクも釘剣も、のきなみまとめて吹っ飛んだ。

彼女じしんすらも、赤光（しゃっこう）の勢いに負けたかのごとく、中空に放り出されるが――かろうじて体勢を立て直し、衛宮邸の庭へと四肢をついて着地した。

「な……な……！？」

武装解除術。

いましがた、真言が杖先より放ったのは――いつのまにか、彼女はタクトのような杖を片手で握っていた――ハリポタ式の魔法であ

った。
それは対象の持つ武器を吹き飛ばす効果を示すものであるが、術者の力量次第では、武器を持つ人間をも同時に吹き飛ばし、気絶させることが可能というものだ。
加えて、吹き飛ばした武器をおのが手元に引き寄せ、それを自分のものにする事ができるときている。
ライダーには対魔力があるとはいえ、今回の使い手は「神妻」の真言である。相手が悪い。
戦闘用の魔法に、特に造詣が深いチートな巫女さんは、いうまでもないが、この魔法が大の得意であった。
本人いわく「抜刀術の抜き打ちと似てる」とのこと。そりゃまあ彼女の腕前で、なおかつ抜刀術のスピードでやられたら、たいがいの相手は追いつけないだろう。
そしてライダーの宝具は、理不神――もとい、理不尽なチートっぽい強さを持つ美少女によって、不発に終わった。宝具「騎英の手綱（ベルレフォーン）」も、いまや真言の手の中である。
それだけならまだしも。
「ワカメエエエェェ――！」
炎で目元をふちどられた、白いマスクの少年が化生（けしょう）のごとく吼える。
いまや、ライダーが着地した衛宮邸の庭には、青いワカメが足の踏み場もないほどヌメヌメと氾濫していた。
月光が降り注ぐ庭は、しかし、いまやワカメ波打つ奇怪な海と化しており、逃げ場は唯一、衛宮邸に集い、結託するサーヴァントらが防衛線を築いている、縁側付近のみ。
もはや理性など見当たらない「しっとマスク」と化した、荒ぶる慎二が操るワカメは、敵味方の区別なく、長身の美女サーヴァントにも襲いかかった。
どっぱあぁぁん。
押し寄せるのは、怒涛のワカメ。

「仲間じゃなかったのか？　あいつ」
けげんそうな目を向けるのは、朱色の魔槍をふるう、青い髪のランサーだ。その視線をよそに、ライダーはラベンダー色の長い髪を振り乱して、その海草から逃れようと抗う。
「くっ！　離しなさい、この――！」
だが、いかに「怪力」スキル持ちとはいえ、人型のサーヴァントには、力の入りきらない部分があった。
膝や肘、手首や足の付け根などの間接部分が、それにあたる。
武器である釘剣を奪われ、そこに巻きつかれてしまったライダーは、しゃにむに手足を振り回すが、見渡す限りのワカメという物量を敵に回すのは、相手が悪かった。
彼女の豊満な肢体に、生臭くヌメる海草が食い込みピチピチと巻きつく。一枚では脆くとも、幾重にも数を増やせば、それは粘り気を持つ拘束具として、人外の美女を締め上げるまでになる。
かたや、真言の魔法で露（あらわ）になったライダーの、「石化の魔眼」のために、大半のサーヴァントの動きも鈍いものになってしまっている。
と。
じゃっ！
蠢く闇のようなワカメの海に、あざやかに火炎の花が咲き乱れた。
回転する双棍によって断ち切られたワカメが再生することはなく、焼け焦げた場所から残り火が移り、他のワカメを侵食する。
少年の握る双棍は、気がつけば一つに連結され、地面へとついたその片方を支点に、体操の大車輪を横にしたような回転蹴りが始まった。
「紅蓮脚！」
ギュルルルル……
そこには夜を照らす炎が伴う。火炎をまとった台風のような襲撃に、次々とワカメがしおれ焦げていく。
「……なるほど。火で焼けば、再生は止まるわけか。ヒュドラの故

事にならうとしよう！」
　思わずあっけに取られる一同の中で、いち早くアーチャーが炎をまとう剣を生み出しふるう。ただし、その背中は黒髪の少女の前から動くことなく、妖しげに彼女を絡み取ろうとするワカメを端から切り捨てた。
　そこに、ようやく出てきた少年姿のリドルが、伯言の回転蹴りを目にするなり。
「あ、戦国ベイブレード」
　などとのたまった。
　なるほど見ためは燃えるコマそっくり。
　とはいえ、いま伯言が使っている「紅蓮脚」は、格闘ゲーム戦国ＢＡＳＡＲＡの技である。
　槍を地面に突き刺し、槍を支点に周囲を巻き込みながら、回転蹴りを放つ。雑魚に囲まれた際に放つと非常に爽快という、この状況にはうってつけの技なのだが――
「危ねっ」
　士郎がきなくさい臭いに振り向くと。
「コンデンセイション」
　ばしゃ。
　縁側に舞った火の粉が引火するのを、杖――といってもデバイスの方だが――を手にしたリドルが水をかけて消火する。
　このように、じっさいの戦闘では引火する危険があるので、場所を選ぶ技なのが玉に瑕だったりする。
「ど、どこで何してたんだ？」
　前を向いたまま、声だけで問う赤毛の少年に、ルビーアイの少年は肩をすくめて返してやった。
「バゼットの寝てる部屋に結界を張ってきたんだよ。キリツグ？だっけ？
　あの『ジゴロの神様』を、念のため残してきたから、まず心配はいらないと思うけど」

「……『ジゴロの神様』はやめてくれ。地味に落ち込むから」
かつて養父の笑顔に「正義の味方」を志した士郎は、手近にあった物干し竿を強化してかまえている。ただし彼へワカメが届く前に、セイバーがすべて切り伏せているが。
「シロウ……これは食材には……」
「しないから！　いくら何でも！　安心してくれ！」
ちょっとだけ、ほのぼのしくも所帯じみた会話が飛び交っていたり。
「ところで、何でバサラの技？」
黒髪の少年姿で、象牙のタクトに見えるデバイス「エキドナ」をふるうリドルは、ちらりと棍をふるう少年へ、ルビー色のまなざしを投げる。
防御結界を構築しつつ、散発的に「物理設定」した魔力弾を放つ彼の問いは、一部の人間にしかわからない類（たぐい）のものだろう。
問われた真言はというと、こちらも神剣から霊符に攻撃を切り替えて、炎属性の術を繰り、ワカメの再生を妨げている。
「修行でＢＡＳＡＲＡ世界に放り込んだから。
腹黒だから、てっきり闇属性だと思ったのに……目覚めたバサラ属性が炎でさー。使えないったら」
あ、伯言のね。
ひゅぼぼぼっ。
月光降り散る冬の夜に、ぱぱぱぱっと紅蓮が舞う。
白い指先で符を弾きながら唇を尖らせる少女は、しんそこ不本意という口調だ。
非常に余談だが、彼女のバサラ属性「光」でも、悪霊退治には役に立つ。
「闇なら、生命力吸収も、霊体への攻撃も通るんだよ？
それを狙ってたっていうのに……火事の心配があるから、ふだんは仕事でも使わせてないの！」
リドルやアーチャーたちは知らなかったことだが、彼らが七季の

使い魔となる以前は、こうしてちょくちょく、真言は霜夏や伯言を鍛えていたのだ。
それは、おのが「神使（しんし）」の守り手となるように。
「あれなら、まーだハガレン世界で錬金術覚えてきた霜夏の方が役に立つってもんよ」
主に修理にだけど。
「うん……わりと、とんでもないこと聞いた気がするけど……いまさらといえば、いまさらかもね……」
あさっての方向を向きたい気持ちでいっぱいのリドルの横で、ツインテールの少女が苦虫を噛み潰したような面持ちで、
「慎二……あんた、とうとう人間止めたのね……」
と、こちらもやりきれない口調で呟いていた。
「兄さん……」

「ワカメエエエエェェェ！」
だが、ワカメの宴はまだ終わらない。
「あれ？　『しっとの心は父心！』って聞こえる」
「マスター、そんなものは聞かなくてよろしい！」
記憶は飛んでも、やっぱりＵＭＡなスキルは変わらない七季がいたとか、いないとか。

#３１１　ワカメ（後書き）

あとがき

＞タイトルは「ワカメ」。そのままなので、補足はしない（キリッ）。

馬刺しネタはＩＦでやったので、ライダー戦は、新たなネタを混入。

「武装解除魔法でライダー涙目」はいかがだったでしょうか。天馬はあの場合、どう考えても武装に相当すると思うんだ。

いちおう相手は天馬で向かってくるわけだから、突撃してくるライダーに、武装解除呪文を当てるのは、それほど難しいことじゃないかなと。

一瞬だけライダー脱がそうかと思ったのは、ここだけの話。それじゃネギまだし、と思い直しました。

個人的には「野生のワカメ」が書けたので満足（待て）。

※エクスペリアームス（武器よ去れ）

‥ハリポタ世界の武装解除術。ネギま方式と違って、服は脱げない。暗器を仕込んでいれば別かもしれないが。

#３１２　神無月に事寄せて（前書き）

まえがき

＞ちょっと未来の番外編です。そういえば十月だなぁと思いまして。

後半、ほぼ会話ばかりなのは、ご容赦ください。

聖杯戦争の息抜きに書いてみました。こんなんでも頭が煮えるほど悩んで書いてたりするもんで。

丸く治めるために書き手、超必死。聖杯戦争編、５０話突破ェ…

…（泣）。

#３１２　神無月に事寄せて

「めっきり寒くなったねぇ」
そう幼なじみに声をかけたのは、まっくろな巫女服をまとう黒髪の少女。ポニーテールを飾る赤い結い紐が、秋を彩る紅葉かアキアカネのようだ。
本来は白いこよりのようなもので飾るのだが、結いなおす最中なので、仕方ない。
さておき、境内の木々も、緑から黄色や赤へと、じょじょに色づき、趣深い景色を作り出している。自然の絵筆は、まことに偉大という他ない。
「本当に」
いっぽう栗毛の少年も、竹箒を手にしたまま、白い衣に覆われた肩をすくめる。
十月のある日、神門（みかど）神社でのことだった。

「しかし真言たちの姿が見当たらないが」
ふっと割って入る低い声は、しかし彼らにとっては慣れたもの。
アーチャーは、人気がないのをいいことに、赤い外套をまとった武装姿で、授与所の中――ようするに、主の傍らへと現れた。
雪のごとく白い髪をいただく、人外の男が投げかけた問いに、マスターである七季は、彼を振り仰ぐように首をかしげて答えを返す。
「先輩なら、いまは神門（みかど）さんと一緒に、出雲まで出張中だよ」
「……そういえば、神無月か」
体育祭や文化祭が終わり、受験勉強も、本格的な追い込みを見せ

る頃合。

七季は表向き、アルバイトを辞めた形になってはいるが、それは保護者に対する建前上だ。

いまも麻帆良に派遣されて、監査の補助として動いている。そのため、自宅には偏在魔法による分身を置き、本体の彼女は、退魔の仕事や、麻帆良での学生として動くという、あわただしい日々を送っていた。

きょうから数日は、真言が不在で――というよりは、旦那である龍神の付き添いなのだが――神門青年もそこについていくため、眷属である七季たちが留守を守る形になっている。

ちなみに、チートな巫女さんが動く用件は、出雲大社で行われるという、神々の集まりに出席するためだ。

「そういうこと」

少女の肯定に、しかしアーチャーは、いつぞやの会話を思い出して、呆れのにじんだ嘆息をこぼす。

「フラグクラッシャーが、縁結びの会議に出席とは、シュールな気もするが」

「いまごろ文句つけられてたりするんじゃないですか？」

あはは、とアレげな会話にもナチュラルに相槌を打つ伯言は、やっぱり神門神社のバイトであり、こんな人外めいた会話も日常の範囲なのであった。

ところ変わって、こちらは出雲。

几帳に囲まれた、瀟洒な社殿は、しかし神々の集う高次的な場である。

「縁結びの組み合わせは、だいたいこれでひと段落……っと」

本来であれば大国主神が仕切るところを、この場で議長役というか進行役になっているのは、紫暗の長髪を結った思兼神である。

彼は、ちょっと前に、神々から吊るし上げられる不祥事を起こしたために、八百万（やおよろず）の神が集まる、カオスな会議をまとめる仕事を押しつけられている。

いくら偉くとも、下で支える存在なくしては、上の仕事が立ち行かないのだから、むべなるかな。

それに、彼じしん、サボるわけにもいかない理由があったりした。

「えー、それではー……次は、フリーの巫（かんなぎ）の使用年間スケジュールについてーー」

次の議題が上がったとたん、いっきに会場が騒がしくなる。

「はいはいはいっ！

真言ちゃんとこの子、希望っ！」

「ちょっと待て。お主は前に呼ばれただろう！」

「加護を望まれているものが優先的に降りるのがスジだと思うが……」

「尊公（そんこう）は頻繁すぎる、マガツヒの！」

「せ、拙者も……」

『何したか胸に手を当てて考えてみましょうか、オモイカネさま』

「ううー、ぐすっ……」

「あー、龍神の。貴公の嫁の、眷属にな、たしか鍛冶神の見習いができたろう」

「何だ？」

「うちの神宝をな、ちょいと修繕してもらえんかと……天目一箇神（あめのまひとつのかみ）んとこは、順番待ちが長くてな」

「それなら妾（わらわ）の勾玉も」

「神剣を研ぎに出したいんだがのう」

「領巾（ひれ）は範囲外でしょうか？」

「手合わせーっ！」

わいわい、がやがやと、新たな変化に神様たちの会合は終わらない。

「せ、拙者も……」

『オモイカネさま？』
「ナナちゃんが呼んだら、降りても良いですけどー？」
「まことでござるかっ！？」
「とりあえず、通常のスケジュールは希望者が多くていっぱいなんで、呼ばれない限りは無理ぽ？」
「えぐえぐえぐ……」
「順番はくじ引きねー。そのあとで祭りのスケジュールなんかを鑑みて、微調整ってことで」
『異議なーし』
出雲の神在月（かみありづき）は、にぎにぎしくも過ぎていく。

#３１２　神無月に事寄せて（後書き）

あとがき

＞チートな先輩、久しぶりに神様たちと顔合わせたら、順調に成長中の眷族が引っ張りだこの件。

オリ主たちの本編が十月に進んだときには、とっくに麻帆良に通っているはずなので。

ちょいとフライング番外ですが、まあ説明程度に。

アーチャーは、これ以降、ちょくちょく他の神様から、神宝だの宝具だのの修繕や打ち直しを頼まれることになります。先の話ですが。

※事寄せる／言寄せる（ことよせる）

：１）ほかの事に託して事をなす。かこつける。口実にする。２）言葉で助力する。

※尊公（そんこう）

：二人称の人代名詞。男性が、相手の男性を敬っていう。貴公。貴君。尊君。

#３１３　ある日の彼女ー魔女のお茶会ー（前書き）

まえがき

＞ちょっと未来の番外編です。たぶんハロウィンネタ。

#３１３　ある日の彼女ー魔女のお茶会ー

それは、とある十月末の週末のこと。

「んー……」

衣装ケースから引っ張り出した、秋物の服を眺めていた少女は、ちょっと迷った末に、ターコイズグリーンのセーターと、白地のストライプブラウスがセットになったものを手に取った。

「出かけるのかね？」

休日の昼間である。ごそごそと動いていた七季に、ひょいと灰藤色の目を上げた男が、何とはなしに声をかけると、くるりと円を描く白い指を向けられた。

「ん。着替えるから、ちょっとあっち向いて」

回れ右、ということらしい。

「ああ」

それまで、主の蔵書から料理本を開いていたアーチャーは、腰かけていたアースカラーのクッションソファーから素直に降りる。

少女に背を向けていると、かすかに聞こえてくる衣擦れをごまかすように、背中越しに問いかけた。

「同行しても？」

「ん？　ん～……そだな。あの店、アーチャーも連れて行こうと思ってたし……年とか趣味もアレだし。ちょっと向こうに訊いてみる」

ぱさぱさ。ごそごそ。かちかちかち。

布地の落ちたり、擦れたりする、やわらかな音と、携帯電話のボタンを押す、硬い音が聞こえるのは、元より広くない部屋のせいだ。

そうでなくとも、英霊たる男にとって、五感は人間以上に鋭いものなのだから。

「あんまりうっとうしい男は、嫌われるよ？」

そこにからかいを多分に含んだテノールが割り込むのも、いつものこと。
黒猫姿のリドルが、すっかり定位置になった、籐バスケットの中で丸くなっている。長くて黒いしっぽだけを垂らして、ひこひこ揺らしているさまは、獲物をおちょくるようだ。
「ナナキ、僕も行こうか？」
バスケットのふちから、しっぽに続いて顔ものぞかせてルビーアイをかがやかせるのは、すっかり日本文化（サブカル）を満喫しまくっている、闇の帝王の前身（プレ）。
「自分のことは全力で棚上げかね」
この野郎、と言いたげなアーチャーが、それでも言い返さないのは、彼とて七季に対する過保護には自覚があるからだ。すぐにでも霊体化できるように、概念武装の赤い外套姿なのが、女子高生の部屋には、ややシュールだが。
「この姿なら、ついていくのは不自然じゃないしね。悔しかったら変身してみれば？」
いっぽう、ふふん、と鼻で笑う黒猫に、思いがけない少女の答えが飛んでくる。
「んー。アーチャーはオーケーだけど、リドルは、ちょっと留守番な。連れてって、取られたら困るし」
それに、いちおう食べ物屋さんにも行く予定だからさ。
「ちぇー」
それほど拗ねてはいない獣形の使い魔は、けれども、するりとバスケットから抜け出すや、アーチャーが背中を向けている少女に向かって、堂々と近寄ると、その胸にちゃっかりすり寄った。
そのまま、かぷかぷと七季の白い指を甘噛みする。
血ぷり（ごはん）ーず。
「はいはい」
くすくす笑う声がこぼれて、少女が机の引き出しにしまってある、ピンクッションから針を引き抜いた。

数秒後に、ほんのわずかに立ちのぼる、血の香り。
ぺちゃぺちゃと聞こえる水音のようなそれに、背を向けたままの男の眉間は、少しだけしわが寄っていた。

魔法料理店「魔鈴」。
そこで七季との待ち合わせに現れたのは、三人の童女だった。
「七季ねーちゃん！　待っ、た……？」
ぴきこん。
元気良く駆け寄ってきたものの、途中でエンストの車よろしく失速したのは、くせのある赤毛をショートカットにした薫。
「あら……もしかして、七地さんの恋人？」
おっとりと、しかし子供にしては油断ないまなざしを向けてくる、紫穂。色素の薄い、ほんのり紫がかった白い髪を、ふんわりと肩に届かない長さでカールさせた容姿は、儚げなのだが、そこには棘が隠されている。
光線によっては、濃い紫を帯びたように見える、紫穂の目が、年上の少女の傍らに――その手を握って――立つ、国籍不明の偉丈夫へと注がれた。
「マジ？　……ごっついイケメンやけど、ちょい年の差が……」
恋愛話にレンズの奥の目をかがやかせるのは、メガネをかけた関西弁の葵だ。つややかな黒髪は、三人の中でいちばん長く、結ぶでもなく、背中に流されている。
褐色の肌に、精悍な容貌。そのうえ白く褪せた髪というのは、色素の薄い、紫穂よりも目立つ風采だ。
思わず、しげしげと三対の目がアーチャーを凝視してしまうのも、無理はない。
「マス……七季」
いっぽう、彼女たちでなくとも、見上げるほどの長身に、シック

なグレーのセーターと赤いライダージャケット、黒のパンツを合わせた男は、周囲をひとしきり警戒したあとに、マスターへと念話を飛ばした。

＜周囲に、彼女たちを追跡している人間が、複数いるようだが＞

「こんにちは。薫ちゃん、野上さん、三宮（さんのみや）さん。こっちは、私の連れで、アーチャー。詳しい話は、中に入ってからにしようか」

＜わかってる。大丈夫だから＞

ふと従者を見上げて、目配せだけで会話する七季とアーチャーの姿に、童女トリオが「ほへー」とぐりぐり大きな目をみはっていたのは、余談である。

ちりりん。

可愛らしいベルの音に導かれて、彼女たちが踏み込んだのは、何とも家庭的な雰囲気に満ちたインテリアだった。

布製のテーブルクロスに、ガラス製の一輪挿しを彩る野花。ほんのりと漂うハーブの香りは、決して邪魔にならない爽やかさ。

それにもまして少女たちを誘うのは、この時期に乗った、パンプキンパイやかぼちゃプリンの甘く香ばしい匂いだ。

「あら、七地さん」

すると、ちょうどレジ前にいた黒衣の女性が、少女の名を呼んだ。古き魔女のイメージ然とした、まっくろなロングスカート姿なのだが、白く清潔なエプロンをかけているために、それほど違和感を感じない。

ただし、三つ編みの赤毛にかぶっている、とんがり帽子は、店内ではどうかと思うのだが。これもイメージ作りなのかもしれない。

「お久しぶりです、魔鈴さん。五名ですけど、席、空いてます？」

「ええ。ちょうど空いたばかりで。奥の個室へどうぞ」

ひょこりと会釈をする七季に、魔鈴と呼ばれた女性は、手を伸ば

して奥へと案内した。

「では、改めまして。
　こちらは内務省特務機関超能力支援研究局・通称「B（バ）・A・B・E（ベル）・L・」に所属する、日本国内でも最高ランク・超度7の、特務エスパーチーム「ザ・チルドレン」の、明石薫さん、野上葵さん、三宮紫穂さん」
　げふごふっ！
「こ、こんにちはー」
「よろしゅうー」
「……初めまして」
　薫、葵、紫穂の順に、ぺこんと頭を下げる「ザ・チルドレン」。
「で。こっちのおにーさんは、私の使い魔さんでアーチャー。人外さんだから、ふつーの人よりは丈夫だけど、私のだから、手を出したら泣かすよ？」
　咳き込む偉丈夫の横で、にっこり微笑む黒髪の少女に向かい、ちびっこトリオは一糸乱れぬ動きで、
『サー、イエス・サー！』
　と敬礼した。
　過去に何があったのだろうか。
「まーそんなわけだから、表に張りついてた監視ってのは、彼女たちを守るための警備要員だと思って。ただ、あんまり過保護なんで、この子たちも盗聴とかは嫌だろうから、魔鈴さんの店を選んだんだけど」
「……なるほど」
　七季の説明に、ようやく納得の色を見せた人外の男は、黙って警戒を二段階ほど引き下げた。幼女狙いの変態や、マスターである少女を狙った拉致犯ではないらしい。

「高レベルエスパーは、狙われることも多いから。とりわけ低年齢層のこの子たちは、上が……ってーか、桐壺さんが大事にしててねー。ちょっとやりすぎと思わなくもないけど、な」

ウィッチクラフトを専門とする魔鈴の店に、光学迷彩の武装などで侵入しようとしても、霊的な気配から探知されて追い出されるのが関の山である。

なにしろここには、いわゆる魔法の品であふれている。だからこそ七季は、「ザ・チルドレン」の相談に、この場所を選んだのだ。

「いらっしゃいませニャー。メニューをどうぞニャー」

ぽんっ☆

と、言ってる側から、メニューを提げた黒猫が現れた。魔鈴の使い魔である。

「ねっ、猫がしゃべった!?」

「かわええー!」

薫と葵があっというまに盛り上がり、捕獲した黒猫をもみくちゃにする。

「あらあら……どういうしかけなのかしら……?」

ちょっぴりマッドサイエンティスト風味な視線を、ひとりだけ向ける紫穂。

もっとも、初めて魔鈴の店を訪れた客には、通過儀礼と言っても良いだろう。

「お、お客さん、困りますニャー!」

「……ほらな。だからリドルは連れてこなかったんだ」

「賢明だな」

呟く七季の隣で、ためいきをついた男は、ひょいと長い腕を伸ばして、童女たちの間から、魔女の使い魔である黒猫をすくい上げた。

「それくらいにしたまえ。彼にも、仕事があるだろう。すまなかったな」

「ウニャー……ありがとうございますニャ。それでは、あとで注文をうかがいに参りますニャ。お決まりになったら、テーブルのボタ

ンを押してくださいニャー」
首に赤いリボンを巻いた黒猫は、くすぐるように撫でてくる、アーチャーの指にうっとりしたあと、はっと我に返って、仕事を思い出したらしい。
ぺこぺこ彼に頭を下げると、ふたたび「ぽんっ」とかるい爆発音のあとに煙を生んで、その場からいなくなった。
「あー……」
残念そうに、黒猫の消えたテーブルを見つめる童女ふたりの、気分を切り替えるため――そして、本題に入るために、七季は口を開く。
「で、相談ごとってのは、あれかな。クリスマスに、皆本さんに何をプレゼントするかってこと？」
とたんに、図星を突かれた薫、葵、そして一見クールに見える紫穂までもが「あうっ」と絶句して、頬を染めたのだった。

「やー。プレゼント決まって良かったなー。それに、魔鈴さんとこのハロウィン限定スイーツも食べられたし♪」
美味しかったv
薫たちは、日ごろ世話になっている、「ザ・チルドレン」の現場運用主任――皆本青年のために贈る、プレゼント探しに迷って、付き合いのある少女へと連絡してきたのだった。
もともと彼女たちと仲が良いのは、チートな巫女さんこと、真言の方なのだが、七季の先輩は、「B.（バベル）A.B.E.L.」と仲の悪い、帝都心霊庁の看板である。
あまり真言と接触を持ちすぎると、監視の人員が多くなるし、薫たちじしんにも制限がかかりかねないため、今回は七季の方にお鉢が回ってきた、というわけだ。
「ああ。それにしても、ウィッチクラフトを実生活に取り入れた料

理というのは、面白かった。知らないもものもあったしな」
ちびっこエスパー三人娘と別れたあと、せっかく外出したのだからと、七季たちはのんびり街中をぶらついていた。
「だろ？
アーチャーなら興味あるだろうと思って」
また行こうな。
週末ということもあって、行きかう人は多い。はぐれないようにと、ナチュラルに手を繋いで歩く二人は、共通点が皆無なのだが、あまりに睦まじそうなので、通報されるのは免れている。
「しかしマ……七季」
街中なので、マスターではなく、名前を呼ぶアーチャーは、きわめて不本意そうなしかめっ面を作って抗議した。
「私はロリコンではないので、彼女たちに手を出されるというのは心外なのだが」
「ああ」
違うって。
きょとんと大きな黒い目を瞬いた少女は、きゅっと握る手を強くすると、そのあたりの適当な物陰に入って、男の耳を引き寄せた。
「あの子たち、機嫌を損ねると、ＥＳＰで八つ当たりすることがあるんだよ。腹を立てたときに、大人を壁にめり込ませるくらいのことは、やってのけるんで、先に釘を刺したんだ」
つまり、暴力的な意味での「手を出すな」ということで。
自分の勘違いに、落ち込むべきなのか、それとも彼女の愛情と安堵すべきなのか、しばらくアーチャーが迷ったことは、神様だけが知っている。

#３１３　ある日の彼女ー魔女のお茶会ー（後書き）

あとがき

＞遅くなったわりに、ハロウィン要素が、ほぼ季節とメニューだけというアレな結果で申し訳ない。

しいていうなら、モチーフ「魔女」がハロウィン要素。

魔鈴めぐみはＧＳに登場する魔女、エスパー三人娘は「絶対可憐チルドレン」の三人でした。

友達の相談に乗るというのは、日常生活にありがちな内容なのに、オリ主の場合、そのメンツがやたら濃いのがオリ主クオリティ。

ちなみにチートな先輩は、よくチルドレンを捕獲して引っ張りまわして遊んでいます。

#３１４　スクラメイジ　その１

「何なんですか、この超展開……」

潤んだように艶めく、ルージュを塗られた唇から、疲れきった響きのソプラノがこぼれ落ちる。

肩口にかかる横髪はふんわりとカールし、左こめかみから頭頂にかけて差し込まれたコームは、黒髪に映える白玉がランダムなサイズで連なり。

身にまとうのは、黒は黒でも、チャイナドレスをぶった切ったように、きわどいカッティングと、ふわふわしたシフォン生地の白いパニエを組み合わせたワンピース。

下着が見えそうで見えない下半身は、黒に近い紺のストッキングと、セットなのだろうガーターベルトが、これまた白のレースにふちどられて、夜目にもあざやかに少女を引き立てていた。

「何故に、こんな格好？」

ようやく記憶を取り戻せたと思ったら、あれよあれよと流れ流されて、気がつけば、剥かれ、いぢられ、もみくちゃにされて、飾られまくった七季をよそに、周囲の女性陣たちは、やり遂げた観でいっぱいの表情を浮かべていた。

話は、数時間前にさかのぼる。

荒ぶる野生のワカメ――もとい、慎二の襲撃を受けた衛宮邸では、おのがマスターを守らんとするサーヴァントたちが、押し寄せるワカメの波を切り裂き防衛するという、一進一退の形が続いていた。

セイバーの宝具たる聖剣のような、大火力の宝具もないではない

が、住宅街に位置するこの屋敷では、火力が強すぎて使えない、という欠点がある。
もっとも、慎二はそんなことなどおかまいなしに、ライダーの宝具を使おうとしたのだが。
「埒があかねぇな」
チッ、と舌打ちしたのは、青い髪のランサーだ。命の危険を感じるほどではないものの、うっとうしいことには変わりない。
生臭く、ぺったりとした海草の触手は、うねり押し寄せてくるたびに、決まって女性たちを狙うところが、いっそういやらしい。
いっそ宝具で仕留めるか？と因果律さえ狂わせる、みずからの切り札に思いを馳せた槍の英霊は、しかし、ふいに感じた大気の変化に、ばっと顔を上げた。
それは他の使い魔たちも同じだったようで、彼らの視線は、ワカメを切り裂きつつも、衛宮邸を囲む塀の上に集まる。
「あ――！」
セイバーが叫ぶよりも、金の鎧をまとった美丈夫が飛び降りる方が早かった。
ぶぎゅる。
『あ』
今度重なった声は、たいそう間抜けな響きだった。
金髪の青年――ギルガメッシュが着地と同時に踏み潰したのは、白いマスクをかぶった赤いパンツの少年。
すなわち「しっとマスク」と化した慎二だったのだから。
無限と思われるほどのワカメを生み出し操っていた慎二だったが、背後はがら空きだったようだ。ギルガメッシュに踏み潰されたまま、もごもごジタバタしていたが、金ぴか青年にげすげす踏まれると、そのうち大人しくなった。ワカメが。
衛宮邸の庭に氾濫していた、青っぽい海草が、その動きをしんなりと止める。
「ふむ。我が鎧が汚れたな」

生臭くてかなわん。
そう言いながら、ずかずか海草の上を歩く英雄王。
いっぽう彼に踏まれた慎二は、しばらくピクピクしていたが、やおらガバリと起き上がり――
「ワカメエェ！　ワカメェ衛宮アアァ！」
と捨てゼリフっぽい鳴き声を残して、去っていった。ワカメを踏み台に、衛宮邸の塀を飛び越えて。
『あっ』
あまりに予想外というか、アホな展開に、うっかり見逃してしまったことに気づく英霊一同。
ちなみにライダーは、まだワカメに絡めとられたまま、もだもだしている。いったん巻きついたワカメは、なかなか解きにくいようだ。
「んと。『ちくしょー！　覚えてろ衛宮アアァ！』って言ってましたね」
「何故わかる!?」
思わず通訳した七季に、間髪入れず、ツッコんだアーチャーは、それでも少女を保護しつつ、騎兵の英霊へと歩み寄った。
さくり。
「破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）」。
裏切りの魔女、メディアの象徴たる宝具によって、ライダーの契約は断ち切られた。
断たれたつながりに、驚く彼女が魔眼を行使するより先に、アーチャーの投影した「自己封印・暗黒神殿（ブレーカー・ゴルゴーン）」によって、ライダーの目が封じられる。
さりげなく、ライダーを戒めるべく、栗毛の少女からバインドが飛んできたが、それくらいは当然のことだろう。
「アーチャー……何故あなたが、ここに」
セイバーの張り詰めた声が、冬の大気を震わせる。しかし向けられた先は、赤き聖骸布をまとう白い髪の偉丈夫ではない。

金髪火眼の、不遜なる王――ギルガメッシュに向けたものだ。
「久しいなセイバー。よもや、貴様がふたたび召喚されていたとは」
ニイッ、と好色をにじませた青年の笑みに、怖気を走らせる金髪の少女騎士は、エメラルドの目を険しくする。
「だが、貴様との語らいはまたの機会にしよう。今宵は――娘。いや七季。迎えに来たぞ。疾く支度せよ」
「ほぇ？」
すっとんきょうな声を上げて、首をかしげるポニーテールの少女に、すぐさまギルガメッシュもけげんな面持ちになる。
「そこの『嫁』に招待状を渡したはずだが」
指差されたアーチャーに、そろって何人かが噴き出した。
「えと」
くりんと少女が男を振り向けば、
「申し訳ない、マスター。説教にかまけていて、渡し損ねていた」
苦虫を噛み潰したような表情の偉丈夫に、ちょっと首をすくめる七季。それでも彼女は、差し出された封筒をおずおずと受け取る。
渡す男も、律儀といえば律儀だ。
次いでアーチャーから差し出されたペーパーナイフで、さりさりと少女は封筒を開封した。
「あー……お招きありがとうございます。わざわざ迎えに来てくださって、光栄です」
「うむ。許してやろう」
ぺこんと頭を下げる黒髪の少女に、「ウオオオォイ！」と複数人からなる、異口同音のツッコミが入った。むべなるかな。
「受ける気なのナナちゃん！？」
「だっておなかすきましたし。ご飯おごってくださるそうです」
いつでも本能――というか胃袋に忠実なイキモノである。
「駄目だろ！　コイツについてくなんざ正気か！」
ランサーと真言の、にわか主従が仲良く叫べば。
「ふはははははは！」

今度はギルガメッシュが、青い槍兵を指差して笑い出す。
「貴様、それは何だ？　我を笑い死にさせる気か！？」
とうとうランサーに書かれた「ぺっと」の神字を目にしてしまった英雄王は、ケルトの英雄を見て大爆笑。
「んだと！？」
いきり立つランサーと、なおも笑いまくるギルガメッシュ。
その間に、今度は魔術師陣営が、こそこそと七季に寄ってきて、彼女の手にした招待状をのぞき込む。
「あら、本当にディナーの招待状だわ」
イリヤスフィールがルビーアイを丸くすると、士郎が童顔をしかめっ面にして、金髪の少女の腕を引く。
「あれってセイバーの知り合いなのか？」
「アーチャー」って、ただの同名？
「彼は、第四次聖杯戦争……つまり、十年前に召喚された、『アーチャー』のサーヴァントです」
「ちょっと待って。何でそんなのが現界してるのよ！？」
赤毛の少年に問われて、かぶりを振るセイバーに、今度は黒髪をツインテールに結ったブルーアイの少女が噛みつく。
「凛。彼は受肉している。おそらくは十年前に、何らかの形で聖杯の中身を浴びたのではないかと」
そこに推測ながら、フォローを挟むのは、もう一人の「アーチャー」だ。
「サクラ……」
「ライダー。ごめんなさいね。でも、無事でよかった……」
かたや、こっそり寄り添い、再会している主従もいたりする。
「まさか七季をナンパしに来たんですか、あの男」
「我が主に手を出す気なら……この槍の頑固な汚れにしても、かまわんのだろう？」
伯言が、いまだ炎を灯したままの棍に、白皙の面輪を照らし出される横で、魔貌の忠臣も、なにやらコワいセリフを吐いている。

ディルムッド、どこでそんなセリフを覚えてきたのやら。
「うっわあ。すっごいカオス」
そして衛宮邸の闇鍋状態を、面白半分に見物する、少年ばーじょんリドル。
「どこぞの痴れ者が、神秘の秘匿も無視して好き勝手しおったのでな。
綺礼が映画の撮影ということで隠蔽に奔走したのだ。まあ、我はそのついでに、我が船を出して迎えに来たわけだが」
『あ』
ギルガメッシュの指差す先には、天に浮かぶ黄金の船――ヴィマーナが、燦然と月光を浴びてかがやいていた。

#３１４　スクラメイジ　その１（後書き）

あとがき

＞タイトルの「スクラメイジ」は、「スクラム（ラグビー用語）を組む」「無秩序な群衆」の意。

読み手さまからいただいたアイデアです。ありがとうございました（拝跪）。

短いですが、まずは上げられる分だけ上げてみました。続きます。当たり前のように。

しっとマスクは、原作によれば、いつもあっさり主役によってぶっ飛ばされたり倒されるのがオチですから。死なないけど。

あと英雄王は良いとこどり（待て）。

慎二の暴挙にコトミー涙目ですよ。あわてて報道規制敷いて、警察・消防関係にも根回しして、看板とか置いて回ってたり。

ちなみに王様は、どうせならめいっぱい派手にした方が、かえってごまかしやすいだろう、と迎えに行くついでにヴィマーナ出しました。

#315　スクラメイジ　その2

そして、すったもんだの挙句、ギルガメッシュを信用ならないと警戒するセイバー主従と、バーサーカー主従が衛宮邸に居残ることを決定した。もちろんそこには、失った片手を回復中のバゼットも含まれる。

五次ランサーたるクー＝フーリンを含む、「アーチャー」主従が、古代バビロニアの王の晩餐にお呼ばれすることになったのだが――ここには、ちょっとした一幕もあったことを記しておこう。

「ランサーさんも一緒にどうですか？　晩御飯」

何かお知り合いみたいですし。

「う」

ケルトの英雄である「光の御子」にまつわるゲッシュ――目下のものから誘われた食事を断れない――を知らない少女が、うっかりランサーを誘ってしまったり。

「ただいま戻りました」

一時的に凛たちから離れ、柳洞寺地下の大聖杯について、調査をしていたリインフォースが、七季の使い魔たるシームルグ・東風（こち）と帰ってきたり。

「我のことを忘れた上に連絡もないとは！」

つんつくつん！　つんつくつん！　つんつくつくつく、つんつくつん！

思兼神（おもいかねのかみ）が原因とはいえ、マスターに忘れられた神鳥が拗ねたくって、鷲に似た猛禽類のくちばしで（加減しているとはいえ）少女をつつき倒したり。

「ご、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい～！」

ふえええぇ。

「良し、許す。その代わり、忘れた分も我をかまえ」

しまいには、黒髪もつんつん引っ張りまわされて、ひたすら謝り倒す七季に、あっさり手のひら（この場合、翼というべきか？）を返して切り替えた東風（こち）が、色あざやかな翼を広げて、彼女に懐きまくったり。

「じゃあ、また。早めに戻ってくださいよ？」

真言の開いたジッパーから、（ゴネたけれども最終的に押し込まれた）伯言が元の世界へと戻ったり。

色々あったわけだが。

「美味しかった～！」

「ふむ。さすがに手の込んだ、細部にまで心配りのきいた料理だったな」

「また食べに来たいかも」

「何ていうか……剛毅ね。いや美味しかったけど。一晩で使う金額じゃないでしょ、これ」

贅を凝らした、英雄王の饗応に、記憶は欠けても食い意地は健在のトリップ娘をはじめ、作り手として料理の造詣の深いアーチャーや、舌の肥えた真言、物の価値についてシビアな凛といったメンツも、一様に満足顔ではあった。

この中では、もっともギルガメッシュに警戒しているランサーふたりはというと。

美味い食事と酒に罪はない、とばかり堪能するクー＝フーリン。
「現世の酒も悪くねえな」
「我が主におかれましては、ご満足いただけたようで何より」
そして、英雄王のプライドにかけて、毒殺がないと保障された以上、主たる七季が喜ぶのであれば、自分の遺恨そっちのけで、彼女への給仕に勤しむディルムッドの姿があったりした。
リインフォースは、対応がほぼディルムッドと同じ行動パターンだし、闇の帝王の前身たるリドルは、少年姿で堂々とワインを堪能するちゃっかりっぷり。
そろいもそろって図太い連中である。
これに対して、ギルガメッシュは「七季の連れ」というひとくくりで片づける、王様スタイルを発揮してくれた。良いのかそれで。
さて、帰りである。
行きは、ギルガメッシュ操る黄金の船、ヴィマーナが空を往き、彼の持ち物たるホテルの屋上へと停めたのだが。
七季たち「アーチャー」一行の帰りはというと、これまた金髪の青年が呼びつけた、黒塗りの車で送迎するらしかった。
「至れり尽くせりね……」
今宵、貸切のレストランに入るにあたって、緋色のドレスをまとったツインテールの少女が、呆れたように呟きを洩らす。座るシートの乗り心地さえ、エンジンの振動が響きにくい快適さを提供しているのだから、言いたくもなるのだろう。
――何でサーヴァントがこんなにお金持ってるわけ？
「うに……」
いっぽう、ギルガメッシュの主賓あつかいであった黒髪の少女は、ロングヘアをシニヨンに結い上げた頭を、こっくりこっくりさせている。お腹がくちくなったので、眠気が襲ってきたのだろう。
「まったく……のんきなんだから」
言いつつ、思わず隣に座った七季の頬をつつきがてら、彼女の胸元をのぞきこんでしまう凛。

たわわなバストをふちどる、黒レースと青のドレスは、前面が大胆に開くよう計算されたデザインで、ややもすると妖艶なほどだが、七季のあどけない面輪は、いまだ少女のものだった。

その隣に座るアーチャーは、ピタリとその身に馴染んでさえ見えるグレイの燕尾服を着こなした姿だが、傍らのマスターを支えるように抱き、決して警戒は怠っていない。

「どういうわけか、彼女はあの男に対して、警戒心を持っていないらしいからな……そのぶん、こちらが気をつけるしかあるまい」

苦笑になりきれない従者の表情は、夜の車内にまぎれて、目撃されることはなかった。

いまだ七季の記憶は戻りきっていない。

「負ける気はしないけどね」

いっぽう、凛の逆隣に座っているのは、やわらかそうな栗毛を、華やかな夜会巻きに結った真言だ。じつはちょっぴり傷心ぎみなチートな巫女さんは、腿丈ドレスから伸びるおみ足を、優雅に組んでいる。

こちらはザックリと背中の開いた、アシンメトリーなデザインで、色は緋寒桜を思わせる、濃い桃色。肩口を飾るとも布の造花が愛らしいアクセントを添えていた。

――ヤーな予感はするんだけどね。

「神妻」の巫女は、背筋をちりちりと逆撫でする感覚に、真言は琥珀色の目を眇めて、車窓を流れる景色を眺めた。民家の明かりが、残像となって尾を引き彗星のごとく不吉な予感を増長させる。

方向音痴の彼女がわかるわけもなかったが、英霊たちを乗せた車は一路、言峰教会へと向かっていた。

そしてたどりついた白壁の教会。

「喜ぶが良い、綺礼。客を連れてきてやったぞ！」

「な――」
息を呑むのは、現れた男の妹弟子。
「ようこそ、凛。そして、そのサーヴァントたちよ」
ギルガメッシュの言葉に、歓喜すら帯びて、光のない目を向ける神父が腕を上げる。それは黒い翼を広げる悪魔のごとく。
が。
言峰の放った投擲剣――黒鍵は、同じものによって迎撃される。
がききききんっ。
「何――？」
今度は金髪の青年と、黒衣の神父が驚きの声を上げる番だった。
「目には目を。歯には歯を――毒をもって毒を制す！」
レンガを敷き詰めた、言峰教会前の広場で、季節はずれの花が咲いたようにドレスを翻し、栗毛の少女が高らかに言い放つ。
その傍らには、もう一人、カソック姿の男がたたずんでいた。

「き、綺礼が……二人……？」
「ふむ」
青い目をみはる凛をよそに、いきなり現れた男は、手の中で十字架にも見える剣を弄ぶ。
真言のジッパーから引っ張り出された彼は、ギルガメッシュを従える神父よりも、少し若いようだ。
彼――仮に若言峰とでも呼ぼう――は、己とそっくりに見える神父を眺め、ついで、近くに感じ取った、黒髪の少女をちらりと一瞥する。
言峰綺礼。
それは、かつて七季が、おのが世界で出会い、新たな道を示した帝都心霊庁の職員だ。
「良くわかった」

ひとつ頷いた若言峰は、自分と良く似た男――おそらくは平行世界の己――に対して、何のためらいもなく、黒鍵を投擲した。

「消え去れ私の黒歴史ッ！」

そんな叫びと共に。

#315　スクラメイジ　その2（後書き）

あとがき

＞引き続き短いですが、申し訳ありません。

サーバー障害でしたねー。読み手さまは大丈夫だったでしょうか？

作品の閲覧はできるのに、ユーザーページと感想欄が使えないという、摩訶不思議な仕様でしたが。

そして最後のセリフを書きたくて、こんな対戦カードを組んでみた（待て）。

#３１６　スクラメイジ　その３

ごがんっ！

徹甲作用によって、黒鍵と呼ばれる剣の突き立ったレンガが砕け散るも、本来のターゲットであった神父は、既に身を低くして駆けている。

「とんだあいさつだな、『私』よ」

下からのすくい上げるような言峰神父の拳が、若言峰の顎を狙うも、彼がその腕を肘打ちで潰しにかかるのを悟った男は、そこに逆手に持った黒鍵の柄をを割り込ませて盾代わりとする。

「は、その体たらくでは当然だろう！」

そのまま剣を突き刺そうとする言峰に対し、行きがけの駄賃とばかりに鋭い蹴りを見舞い、ひと飛びで後方へと距離を取った若言峰は、見比べると髪が短めの頭をふるい、吐き捨てた。

「子供たちの霊をそれほど張りつけているのだ。わからぬ方がおかしい！」

若きＧＳ（ゴーストスイーパー）・言峰綺礼の目には、青白い子供たちの生霊が、ぞろりと群れを成して、自分そっくりの男の背中に折り重なっている光景が映っていた。

それは、この教会の地下で、生きながら殺されていたも同然の――士郎を除いた――冬木の大火災の生き残りであったことを知るものは、この場にはいなかったけれども。

霊能者である彼らには、霊視というものができる。

それは若言峰だけでなく、黒髪の少女や、栗毛の少女にも同じこ

とが言えた。
「水子にしては、ちょっと大きいですよね。十歳前後、くらいかな。ペド趣味の連続殺人犯？」
ん？　まだ生きてる？
外野である七季から、遠慮会釈もない、ざっくりとしたツッコミが入る。
突きつけられたセリフに、がっつり心当たりのある言峰は、その渋い面（おもて）には出さないまでも、ないしん背中に汗をかいていた。
ドレス姿とはいえ、見ためはどう考えても平凡そうな――魔術師には見えないという意味で――少女が、彼らの秘密を言い当てる理由が理解できない。
通常、彼らにとって霊体とは捉えがたくあつかいにくい存在であるからだ。
霊なるものというのは、幾つかの例外を除いて、ほとんどは霊媒を介して認識されるのが常である。
だが、ギルガメッシュが連れて来た少女たちのうち、七季に続いて、栗毛の少女もまた、黒鍵をかまえる言峰の背後を嫌そうに眺めていた。
まるでそこに、何かがいるかのように。
「あー……うっわ、いるいる。てか、あれで平然としてるって、神経疑うわー」
青いドレスをまとう「神使（しんし）」の少女にも、若言峰と同じ、子供の生霊らしき霊体が見えている。
いわずもがな、彼女よりもいっそうスペックの高い、ハイパー霊能者である真言にも見えてしかるべきなのだが、真言の場合は、必要がなければ霊視するチャンネルに合わせることはない。
おのが「神使（しんし）」に次いで、ようやくチャンネルを合わせた真言は、見えた光景にうんざりとした顔つきで眉をひそめた。
「地下に男の子や女の子を監禁ってモノホンじゃん。さすがドS神父の平行存在……」

こっちもド変態かー……。

どうやら真言には、霊を通して、ある程度のビジョンも見えてしまったらしい。

そこに憤慨したバリトンを張り上げるのは、若い方の神父である。

「あいにく、私にそのような趣味はないッ！」

背後に控える七季たちの声を聞きながら、若言峰は、自分には身に覚えのないことだと訴える。

一見、のんきに会話しているように見えるのだが、一行は、じりじりとした動きで言峰主従を囲んでいた。

「だいたい――」

とっ。

二人の言峰の間には、約三メートルほどの距離が開いている。

「死体のくせに、邪悪な呪詛の力で恥ずかしげもなく動き回る、神の意に背きまくってトモダチのいない、ペド趣味の中年男と一緒にされるのは心外だ」

歯に衣着せないどころか、ナイフで確実にえぐりにいくような、ピンポイントかつ蔑みの混じったセリフに、ちょっとだけ、モジャ毛の豊かな方の言峰が、言葉を失った。

「……その様子だと、まだ己の本性を認められずに生きているようだが？」

――さて。ギルガメッシュはどこまで動くものやら。

気まぐれで傲慢なサーヴァントは、男の背後にたたずんだまま、動く気配はない。可能性としては低いものの、後ろから刺されることも、ないではないだろう。

それだけに言峰は、全身で警戒していた。その側を、するりと黒猫が走っていったことに、何故か彼は気づかない。

死んだ魚のような、光のない目で言峰が見つめるのは、まだひたすらに神を信じようとしていたころの自分と、そっくりの男。言峰も、言葉の刃を繰り出すものの。

「あいにく私には、この性癖を生かすことのできる職場も、新たな

道を示してくれた年若い恩人にして友人も、ついでに叩き潰しがいのある、異教のものだが気の合う知人もいるのでね。

何と言ったか……そう、いわゆる『りあじゅー』というやつだ」

ふむっ。

言い慣れていない様子の言葉を、ちょっと誇らしげに使う若言峰の姿が、いまの七季には何だか可愛らしく思えたらしい。

手招かれた黒髪の少女は、てこてこ若い神父に近寄りかけて――がっちりと従者の大きな手に、その腰を捕獲されて引き止められた。

「マスター」

何でそう、危険人物に近づくのかね。

「え、えと」

灰藤色の目はお怒りである。

従者に咎められて、おぶおぶと、それ以上近づけないでいる七季に、今度は若言峰の方から歩み寄る。ギルガメッシュを背後にした方の言峰は、動かない。

アーチャーと違い、彼の黒鍵には限りがある。言峰の体術は、全盛期であればサーヴァントを相手取ってすら戦えるほどのもの。

だが、「この世全ての悪（アンリマユ）」のかけらを心臓代わりに宿した身とあっては、深い呪詛に汚染されたも同然。とても絶好調とはいかなかった。

――戦えないとは言わないが、さすがに分が悪い。

ギルガメッシュの宝具は、数の不利をたやすくひっくり返すだけの威力があるものの、安易に助けを求めたとして、この英雄王が素直に従うかは疑問だろう。

どちらかといえば、金髪の青年は、コトミネキレイ同士という、この不可思議かつ、けったいな対決を、興味深そうに眺めている。手を出す様子もなく、好奇心に満ちた真紅の双眸が、わくわくと見守っていた。

――ここは「私」を打ち倒すのが上策か。

望む楽しみ――コトミネキレイ対決という――を与えれば、ギル

ガメッシュは、外野の手出しを許すまい。
彼としても、平行世界の「自分」である存在に興味があった。
ここは少しでも観察して、「自分」の弱みがないか観察するのが急務だろう。

いっぽう。
もちろんのこと、真言やランサーたちサーヴァントは、いつでも動けるように警戒態勢だった。少女の腰を捕まえているアーチャーも、いざとなれば七季を抱いたまま回避すべく、油断ない。
「うむ。良く似合っている」
「あ、ありがとうございます」
青いドレス姿の少女を見下ろし褒める、若い神父に、七季はおずおずと夜色の目で仰ぐ。
胸元を飾るガーネットのチョーカーや、耳をふちどる銀と紫水晶の（アメジスト）のイヤーカフ。そして薬指をかざす菫青石（アイオライト）の指輪はすべて、彼女を守るためのデバイスだが、はためにはアクセサリーにしか見えない。
しかし、インテリジェントデバイスである「黎明」と「ガニュメデス」は、いつでも防御魔法が起動できるようにスタンバっているし、それは真言のデバイス「ミカド」も同じことだった。
「ちょっと。ナナちゃんいまは記憶ないの。あんたのことなんか知らないんだからね！　近づくな！　ナナちゃんが汚染される！」
がるるるるっ。
いまにも鯉口を切らんとして、若言峰に噛みつく栗毛の美少女が、七季を庇うように前へ出る。その真言も、帝都心霊庁の顔見知りに噛みつきながら、警戒心は教会を背にした神父へと向けている。
かたや真言のマスターとなっている凛はというと、こちらは青い槍兵の背中に庇われた状況だ。

ただし、その心境たるや、穏やかではない。
闘争以前に、兄弟子であり、父母ををなくしてからは、後見人でもあった言峰の裏切りが露見し、やはり若い心にショックを受けていた。
「綺礼がマスター……？
しかも、十年前からのサーヴァントを……？」
では、もう一人の槍兵、ディルムッドはというと――彼のデバイスたるリインフォースの入れ知恵によって「破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）」で、言峰が持つ令呪を狙っていたりする。
デバイスであるが故に、ことさら魔力にも敏感なリインフォースであれば、魔術の粋たる令呪や、魔術回路の場所も、おおよその位置が感じ取れた。
そんな混沌としたるつぼの中で、耳に残るバリトンがこぼれる。
「ならば君のために祈るとしよう」
ぽん、と若い神父の低い声と、無骨な手のひらが七季の頭を撫でた。
若言峰は――彼にとってはひどく珍しい――悪意なしに慈しむ、穏やかで優しげなまなざしを向けている。まるで慈父のような。
その表情を目撃したギルガメッシュが、思わずポカンとするほどに、それは人間らしい表情だった。
「あ、う。ありがとうございます……」
まだ傍らのアーチャーを気にして、少女は首をすくめつつも、借りてきた猫のように、おとなしく黒髪を撫でられている。
もともと七季は、自分に害意を向けない存在には――人間に限らず――無防備な一面がある。そのうえ彼女は、年上の男性に弱かった。
デバイスからの念話によって、リドルが教会地下へと進入したこと、また、この一帯に結界を張るための基点となる、黒い蝶を配置し終えたことなどを把握しつつ、目を細める。
そして。

「何。気にすることはない。我々は友人だからな。
また君と休日に――タチの悪い自己啓発セミナー潰しに出かけたいものだ」
「あんたら何やってんのオオオォォ！？」
凛と真言――「アーチャー」主従の、全身全霊かけたツッコミが、夜の広場に響き渡ったのは、いうまでもない。

「たんなる趣味だが。あと、最初に誘ってくれたのは、彼女の方でね」
しれっとのたまう若言峰の声に、「ウオオオォォイ！」と乙女らしからぬ叫びが上がるのは、ご愛嬌。
「何してんの！？　ナナちゃんマジで何してんの！？」
がっくんがっくん揺さぶられる黒髪の少女は、しかし残念ながら記憶がまだ戻っていないため、ろくに答えることもできない。
「落ち着きたまえ真言！
いま彼女にその記憶はないだろう！？」
「あ」
「あぎゅうぅ～」
白い髪の偉丈夫にすかさず引き剥がされたものの、ちょっぴり手遅れだったようで、七季はもののみごとに目を回していた。

同じころ。
「これは……酷いね」
教会の地下で発見した惨状を、黒猫姿のリドルが、ルビーの目に映して呟く姿があった。

#３１６　スクラメイジ　その３（後書き）

あとがき

＞遅くなったうえ、コトミー対決なのに、緊張感ないことおびただしくて申し訳ない。

戦闘シーンを書きたくないでござる（をい）。

ところで、教会地下の例のアレって、ギル受肉ルートだと、いらないんでしたっけ？

友人にソフト貸しているので、そこんとこの記憶がウロで……（待て）。

いらないんだとしても、魔力貯蔵用とかに使っていたということにしておいてください。

#３１７　スクラメイジ　その４（前書き）

まえがき

＞前回あとがきに関するフォローありがとうございました（拝跪）。

とにかく、教会地下の生贄ズは、どのルートでもあるということで。

#３１７　スクラメイジ　その４

ところ変わって柳洞寺。

「ああもうどういうことなのよっ！」

使い魔の目から伝達された情報が映る水晶玉をのぞきこんでいたキャスターは、おのが工房でヒステリックな声を上げていた。

マスターの中でも、最も対魔力が低く、セイバーの主である少年・衛宮士郎に白羽の矢を立てたまでは良かったが、それからが問題だった。

彼の本拠地である衛宮邸には、いつのまにか、きちんとした結界が張りなおされており、なおかつターゲットである士郎も、そこから出てこない。

挙句、その衛宮邸を襲撃しようにも、セイバーとバーサーカーがそろって詰めているときては、白兵戦能力に不安のあるキャスターでは、出向くだけ自殺行為だ。

せっかく目障りな「アーチャー」組がそろって外出して、戦力が減ったというのに、これでは不意を衝くどころの話ではない。

結界の隙間を縫って、魔力糸で少年を操り、ひとり連れ出そうとしたキャスターの計画は、そうそうに頓挫していた。

彼女が従える「アサシン」は、今夜も律儀に門番の務めを果たしているが、彼はじつにヒマそうであったことをつけ加えておく。

その衛宮邸ではというと。

「大丈夫よ、セラ。私は無事で、バーサーカーも健在。心配はいらないわ。私を疑うの？」

『――』
「ええ。まだしばらくはかかるけど。良い子で待っていらっしゃい。準備ができたら、迎えに行くわ。リズにも代わってくれる？」
『イリヤ、げんき？』
「元気よ。ご飯もちゃんと食べてるし、私たちは負けないわ。セラも元気？」
『……イリヤが側にいないから、セラもわたしも、ちょっとさびしい』
『リーズリット！』
電話口から聞こえてくるメイドの怒声に、くすりと銀髪の童女の笑い声が、板張りの廊下に落ちる。
「わかったわ。私も早く二人に会えるように頑張るから。城のことは、よろしくね？」
『うん。まかせて』
『はい、お嬢様！』
心配性のメイドと、どこか自分よりもあどけないような気もするメイドの声が、受話器を置いたイリヤスフィールの耳に残る。
彼女の小さな胸に生まれた懐かしさと、本来の負うべきだった使命を振り返ったとき――銀髪の童女は、真紅のまなざしで、おのが父親の顔を見上げた。
「キリツグ。セラとリズを助けることはできないかしら？」
自分と同じ、ホムンクルスとして生まれたメイドたちの行く末を思い、イリヤスフィールの双眸は、アインツベルンを裏切る決意を浮かべていた。

げんざい衛宮邸には、イリヤスフィールの新しい体となる「人形」を持ってきた人形師が再訪していた。
蒼崎橙子である。

「トウコ。貴方に人形を……人間の体と同じ機能を持つ、そんな人形を作ってもらうには、どうしたら良いのかしら？」

イリヤスフィールに割り当てられた一室――こちらは切嗣もいるため和室である――で、銀髪の妖精めいた童女が問いかけている。

「ん？」

ちょっとくせの入った赤毛をポニーテールに結った美女は、けげんな面持ちでホムンクルスの童女を見つめた。

「これが気に入らない、ってことじゃないな……何だ、私に『仕事』をさせたいのか？」

「そうよ。私は……私の家族を、助けたいの。リズもセラも、私と同じホムンクルス。寿命は長くないわ」

「は、ん。なるほどね」

童女のルビーアイを見つめ返す、凄腕の人形師は、その心の奥底を覗き込むように、強く鋭い視線を向けていた。

「……それなりの報酬と、気が向いたら作っても良いが……二体となると、けっこうな額になる。時間もかかるぞ。素材の吟味もしなきゃならん」

ただし。

「お嬢さんと同じタイプのホムンクルスだというのなら、だいぶ手間は省けるだろうな。『量産』というのは、まったくもって気が乗らないが、ベースが同じなら」

とん、と長く形の良い指が、くわえていた煙草を、灰皿に持っていき、その灰を落とした。

「お願い！」

アインツベルンの「聖杯」として、淑女の礼をもってふるまうよう叩き込まれたイリヤスフィールは、封印指定の人形師へと、日本人風の礼――いわゆる畳に額をつける「土下座」という形をもって、橙子へと訴えたのだった。

「ところで橙子君は、宝石翁に興味はあるかい？」
「何？」
「いやね、ちょっと捕まえてみようと思って」
朗らかにとんでもないことを言ってのける、「ジゴロの神様」――切嗣の、生前と変わらぬ、無精ひげを生やした面輪を、橙子は茜色の目で凝視するより術を失くした。

そして、蒼崎橙子がイリヤスフィールの父親を締め上げているころ――ふたたび舞台は、言峰教会前へと戻る。
「何。珍しくもない話だ。
自己啓発セミナーという場所には、悩みを抱える子羊が集まるもの。しかし、それを逆手にとって、霊能力を悪用し、相談者を食い物にするような、悪徳セミナーもあるのだよ。
そういったものは、ねずみ講などと一緒で、あとからあとから湧いてくる。我々は、霊的な事件を相手にするのが仕事だが、そういうものすべてに対処できるほどの人員はなくてな。
被害報告が上がってきても、よっぽどの規模でなければ、即座に対処することは難しい」
帝都心霊庁の職員である、若言峰の説明に、整った面輪をしかめる凛。
「異能が認められている世界（ところ）でも、悪党はいるってことか……」
「しかり。故に――職務として片付けることは難しい」
だが。
くつ、と若き神父は喉を鳴らす。
「そういった悪徳セミナーのリストじたいは存在するのだよ。なかなか手は回らなくともな。
ならば、職務のない、プライベートの休日に、たまたま霊能者で

ある人間が、通りすがりに見かけた自己啓発セミナーに入ってみて、みずからの悩みを打ち明けようとするのは、罪ではあるまい？」

霊能者とて、人間だからな。

ようするに、若言峰と七季は、悪徳セミナーに相談者の顔でもぐりこみ、その手口を看破したり、セミナーの主催者が使役している使い魔や悪霊を除霊してみたり、若言峰の精神攻撃で、主催者をズタボロにしていたわけだ。

人の役にも立つし、若言峰はかるく遊べるし、七季は付き合うついでにご飯を奢ってもらえるしで、利害の一致を見ているのである。

ちなみに、日によっては、ここにドSな性悪破戒僧・烏哭（うこく）が加わることもある。

「何そのまっくろ聖者の行進」

イヤンな聖者の行進である。

ちなみに真言が引き合いに出した「聖者の行進」じたいは、黒人霊歌の一つで、「聖者が街にやってくる」という邦題でも知られている曲だったりする。

「平行世界でも綺礼は綺礼なのね……」

自分の兄弟子の裏切りにショックを受けていた魔術師の少女は、しかし平行世界に存在する彼の話で、いくぶんか気を取り直したらしい。

凛が、そうかからずに悲嘆から抜け出したことを、ギルガメッシュをサーヴァントとする言峰の方が、いかにも残念そうに見つめている。

その間に。

「マスター」

くい。

先ほどから七季に寄り添っていた従者の腕が、さらに彼女を引き寄せ、ささやいた。

「これを君に託そう。早く記憶を取り戻してくれ」

そっと男が握らせたのは、黒い台座に紅い血潮を封じ込めたピン

ブローチ。
「アーチャーさん」
「記憶のない君に非はないし、叱ってもしょうがない。ああ――記憶を取り戻してから、みっちりと話し合いたいものでね」
――みにゃあああ！？
それはそれは凶暴そうな、猛獣のごとく凄みのある笑顔を見上げてしまい、黒髪の少女は声にならない悲鳴を押し殺して、しばらくブローチを握ったまま固まっていたという。
彼女がちょっとだけ「記憶を取り戻さない方が安全なんじゃ……？」と思ってしまったことは、秘密である。

#３１７　スクラメイジ　その４（後書き）

あとがき

＞やっぱり日付越えました（汗）。

サブタイ考える余力がなかったので、ここまで「スクラメイジ」で引っ張ることに。

メイド抑えるために、イリヤが連絡したり、橙子さんに人形制作フラグ立ててみたり、ゼル爺の登場フラグも突っ込んでみたり、まあ色々と閑話まとめみたいな、そうでないような。

フォロー回ですね。セラリズも生存で良いかなと。ご都合ですが。

あと、アーチャーが思い切ってピンブローチを譲渡。これでようやくオリ主の記憶が戻ります。めいびー。

#318　キリエ・エレイソン　その1

あの日。

彼が、死にながらにして再生された燔祭（はんさい）の日。

崩れゆくものを美しいと認め、苦しみ悶えるものを愛おしいと受け止めた、甘美な絶望を、綺礼は胸のうちで再生（リピート）する。

神の愛という鋳型（いがた）にはめ込まれていた、暗澹たる日々は終わりを告げ、邪悪な荒野に解き放たれた喜びが、彼を塗り潰した、あの日。

みずからの心をえぐり砕き、その崩壊さえもが快い音色として響いた法悦は、死してなお忘れ得ぬ、ひとつの絶頂ですらあった。

神の道において正しいとされる道徳の教えに背いた、邪悪と鬼畜こそが、綺礼の歓喜だった。

それは矛盾だ。

万物の創造主たるべき神が与える真理。すべての魂にとって、「快なるもの」を求める知恵が、道徳であったはず。

だが、綺礼の歓喜は、その道徳とは真逆の位置にあったのだ。

それは神の教えに背くことではないのか。満たされる綺礼のありようが、神に作られたものであるのなら、どうしてそれは神の教えに背くものとして生まれたのか。

その矛盾を説明する、方程式が、綺礼は欲しかった。

求めていたものは見つかった。けれど、新たに求めるものも見つけてしまった。

彼は知らない。

そこに、限りなく近い、解（かい）を得たものが、綺礼の戦い抜いた第四次聖杯戦争の、マスターの中にいたことを。

どうしようもなく罪深い殺人鬼が、いっそ無邪気なほどの感性で、その答えにたどり着いていたことを。

『――ではリュウノスケ、はたして神は、人間を愛していると思いますか？』
『そりゃあもう、ぞっこんに』
かつて魔道に堕ちた、ジルの問いに、殺人鬼は答えた。
『神様は勇気とか希望とかいった人間賛歌が大好きだし、それと同じぐらいに血飛沫やら悲鳴やら絶望だって大好きなのさ』
それは、彼の答えであって、綺礼の答えではないけれど。
それでも神様を信じる殺人鬼の言葉は、もしかしたら綺礼の求める答えに、いちばん近いものであったかもしれなかった。
綺礼が、知るはずもないことだけれど。

だからこそ、いまだその理（ことわり）を見つけないままに、言峰は歩まなければならない。立ち止まってはならない。いまだ求道は半ばなのだから。
その彼の目の前に立つ男を凝視する。
馬鹿馬鹿しいまでの苦悩を背負わされたころの己に良く似た若い男は、しかし満たされた笑みを浮かべて彼の前へと立ちふさがる。
答えは得たといわんばかりの、その表情が気に食わない。
――そうすると、私はアレを妬んでいるのか。
ふと言峰は、カソック姿の若い神父を眺めやった。
するとどうだろう。
目の前の神父と比べても年下の、小柄な少女を見下ろした、ロザリオをかけた若い男は、まるで邪気のない慈父のごとき笑みを浮かべていた。

――ああ。

自分に、あんな表情はできない。

できるはずもない。まるで愛しいといわんばかりの、ふつうの人間のような顔は。

――アレは「私」ではないのか？

邪悪で。人の嘆きが快くて。人の悶え苦しくさまを愛おしいと思う。

――私と「同じ」ではないのか？

似すぎている。あまりにも似すぎているのに、決定的な違いが、さらに言峰を苛立たせた。

問いかけたとしても、きっと答えは返ってこない。

奪い取ることも難しいだろうと自答しながら、けれど前へと進むために、男はふたたび地を蹴り走り出した。

言峰綺礼。

それは、凛にとっては父の弟子であった魔術師だった。

そして父亡き後は、彼女の後見であり、魔術の師ともなった男。

「凛、アレは滅(ころ)すよ」

琥珀の目が射抜くのは、漆黒の僧衣をまとう、くせっ毛が少し長めの男。

いつのまにか、傍らに来ていた真言から、冷たい響きの声を突きつけられて、ツインテールの少女はそっと唇を噛んだ。

言峰綺礼は聖杯戦争のマスターだ。

バゼットからランサーを奪い、その前――第四次聖杯戦争から、サーヴァントを温存していた人物。

どこからどう見ても敵だ。それ以外の何者でもない。

――真言の言葉は正しい。

わかりきったことを、あえて口にしたのは、きっと彼女の優しさ

だ。
心のどこかで思い切れないでいた、凛の背中を後押しするためのもの。
魔術師の道は、血塗られたもの。それが他者であれ、己であれ、平穏など望むべくもない孤高の道行き。
――私は、魔術師だ。
少女の心を封殺し、兄弟子だった男との決別を受け止めるため、凛は、その青い目を逸らすことなく、勝負の行く末を見定める。

「やあ、セイバー」
生前の彼とは似ても似つかない――少なくとも、彼女には向けられたことがない――ふやけた表情で声をかけられて、縁側に座り込んでいる金髪の少女は、玲瓏な面差しに、困惑の色を浮かべていた。
「何の用ですか、キリツグ」
ここは衛宮邸の庭に面した廊下――縁側である。
現在、彼の娘・イリヤスフィールは、メイドであるホムンクルスを生かすため、人形師である蒼崎橙子と別室で話し込んでいる最中だ。
もちろんそこには、サーヴァントであるバーサーカーも霊体化で控えているが、その場にはもう一人、士郎が同席しているはずだった。
養父・切嗣以外の魔術師が珍しいらしく、赤毛の少年は橙子の話を聞きに行ったのだ。それはイリヤスフィールも了承していることだし、蹴り出されていないところを見ると、話は弾んでいるのだろう。
げんざい桜は入浴中。その護衛はというと、慎二の支配下から解き放たれて、ふたたび彼女を契約したライダーが担っていた。
本来なら、士郎の側についているはずのセイバーが、ここにいる

理由は――かつてのマスターであった男に、呼び出されたからに他ならない。

生真面目な性格は、十年前と代わらない少女に、切嗣は困ったような笑みを浮かべて、白い狩衣姿のまま、腰を下ろした。

「よいしょっと」

縁側からは、冴え凍るような冬の月が、夜空に浮かんでいるさまが良く見える。

「キリツグ」

急かす響きの少女の声に、切嗣は黒い目で空を見上げたまま、ぽつりと呟いた。

「君の願いは、何だい？」

十年前には、ついぞ訊かれることのなかった問いかけ。

セイバーは碧い目をみはり、神となった男の横顔を見つめて絶句した。

「――っ」

どれほどの時間が流れただろう。

「私は」

短かったのか、長かったのか。

彼女の見上げる、空に瞬く星の配置が、変わりないように見えるからには、それほどかかりはしなかったのかもしれない。

けれど。

少女の胸に生まれたばかりの、淡い願いを言葉にするには、必要な時間であったことには違いない。

「できることなら……イリヤスフィールの成長を見守りたい。私は、アイリスフィールを守れませんでした。

イリヤスフィールは彼女の忘れ形見です。あの子には、幸せになって欲しい。それが、アイリスフィールの願いでしょうから。今度こそ守りぬきたい」

それと。

「大それた願いかもしれませんが……私は、シロウに償いたい。彼

は心の優しい人です。
ですが十年前、私が令呪に抗い、聖杯の破壊に失敗しなければ、彼は家族を失わずに済んだ。生き残ったことに、あんな罪悪感を抱かずに済んだはずなのです……！」
――私の願いが、シロウを、彼らの町を焼いた。
士郎の優しさは、どこか歪だ。それは数日を共にしただけの少女にもわかるほどに。下手をすると、魔術師としては一流のイリヤスフィールよりも危なっかしい。
もうセイバーの中に、「やり直し」を望む気持ちはない。
彼女は気づいているだろうか？
イリヤスフィールを見守りたい、幸せになって欲しいと願うそれは、未来へ目を向けた言葉であるということを。
アルトリアは気づいているだろうか？
士郎の心を慮り、その行く先を案じる気持ちが、ただの同情にしては、切実に過ぎることを。
「セイバー」
切嗣の声は、冬の夜に優しく流れる、落ち着いた声音で少女を呼んだ。
「僕は十年前のことは謝らない。
それは正しいとか、正しくないとかじゃなくて、謝っても、取り返しのつかないことだから。君も困るだけだろう。
士郎には謝ったことがあるんだけど……受け取ってもらえなかったよ。あべこべに感謝されちゃってね。とてもいたたまれなかった」
『それでも、俺を助けてくれたのは、じいさんだから』
彼の脳裏にかがやくのは、長い年月を経て凝ったような、琥珀の瞳。そこに切嗣は、命の神秘を思う。
あの日、たったひとり見つけ出した、子供の命の重さこそが、彼を救ったのだ。

「シロウならば……そうかもしれませんね」
少女は金糸の髪に月光を受けて、神々しいような面輪を、何ともいいがたい表情に歪める。
彼を思うとき、セイバーの胸は、不可思議な痛みと疼きを伴うのだ。冬の夜風に晒されていても、どこか灯火（ともしび）のような、小さな温かさを感じるようで。
黒髪の男は、月を見上げたままでしゃべる。
「士郎は、君に償いを求めはしないだろう。逆に、それはあの子を心苦しくさせるかもしれない。
アイリについては、僕は何かを言う資格はないと思っている。彼女を犠牲にしてなお、残されたイリヤを助け出すこともできずに、死んでしまった身だからね」
「それは――」
切嗣の口調に、自嘲を感じ取って、剣精の少女はとっさに振り向いた。
だが、男の目は、自分に対する卑下ではなく――ひどく真摯な光を浮かべて、セイバーを見据えていた。
「セイバー。君、本当にあの子たちと生きたいと、願ってくれるかい？」
王の座より、ブリテンという国よりも、彼らと歩きたいと、本当に願ってくれるかい？
「キリツグ？……しかし、私は」
世界との契約につながれている。
聖剣を湖の乙女に返さなければ。
アーサー王のしがらみが、少女の唇の中で繰り返される。
「もし、君が本当に心から願うのなら」
無精ひげを生やした男は、頼りなくみえる、ふやけた笑みを浮かべて告げる。
セイバーは、そこに何故だか、自分が振り回されてばかりいた、あの魔術師（マーリン）の面影を見た気がした。

「何とかしてみせるよ。女の子の涙は苦手だし、僕は魔法使いだって、士郎（あのこ）に言ったからね」

#３１８　キリエ・エレイソン　その１（後書き）

あとがき

＞思ったより長引いたので、またもや二つに分けました。
　コトミーの思考に違和感があったら申し訳ない。

　セイバーと切嗣は、いっぺんは必ず話してもらおうと思っていた組み合わせです。
　多少強引かもしれませんが、セイバーの残留フラグを突っ込みたかった。

※キリエ
：「キリエ」は「主よ」を意味する。
　ミサ典礼における聖歌の一つで「キリエ・エレイソンＫｙｒｉｅ　ｅｌｅｉｓｏｎ（主よあわれみたまえ）」の意。
　また、五つの通常文聖歌からなる多声ミサ曲の第一章をいう。他の四章がラテン語で歌われるのに対し、この章のみギリシア語。レクイエムの一章としても用いられる。

※燔祭（はんさい）
：古代ユダヤ教で、犠牲の動物を祭壇で焼き、神に捧げた儀式。
（古代中国で、柴を焼き煙を上げて天をまつることを燔柴（はんさい）という）

#319　キリエ・エレイソン　その2

少女ふたりの「アーチャー」主従が、人外と成り果てた神父の討滅を心に決めていたころ。

また別の主従が、念話にて別の思惑をめぐらせていた。

＜主ランサー＞

素晴らしいボディラインを誇る肢体に、夜色のドレスをまとった銀髪の美女――リインフォースが、振り向きもせずに呼びかける。

＜機会があれば、是非とも敵の『令呪』を主の紅い槍で穿っていただきたい＞

＜あの『アーチャー』が黙っていないとは思うが……何が狙いだ？＞

ディルムッドもまた、金髪火眼のサーヴァントから目をそらすことはない。黒髪金睛眼の美丈夫は、おのがデバイスへと念話のみで問い返した。

彼の紅槍――「破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）」は、「刃が触れた対象物の、魔力の循環を遮断する事で、魔術的効果を強制的にキャンセルする、宝具殺しの宝具」である。

ただし「既に交わされた契約を打ち破る事はできない」ため、サーヴァントとの契約を断つことはできないはずだ。

既にタキシードから概念武装へといでたちを変えている、美貌の槍兵は、リインフォースの言葉に、面（おもて）には出さないまでも、疑念を投げる。彼女の狙いがわからないためだ。

＜既にセイバー、アーチャー、ランサー……主ではなく、青い髪の彼ですが……の令呪は、それとなく解析させていただきました＞

人型を取るが故に、忘れられがちなのだが、本来リインフォースは収集蓄積型のストレージデバイスなのである。

魔法の術式を調べ、その情報をストックすることが本分の彼女に

とって、異世界の魔術――その粋でもある「令呪」は、正直、このうえない興味の対象である。

セイバーのマスターである士郎は、魔術師としては未熟で、いちばん警戒心が薄い。「令呪」は彼に刻まれているのだから、少し側にいれば観察することは容易だ。

「アーチャー」たる真言のマスターは、いうまでもなく凛である。彼女には、正直に「令呪」を研究するため、と説明したところ、神秘の粋たる先人の大魔術に、少なからず興味を惹かれた少女魔術師は、その情報を説明することを条件として、リインフォースの求めを飲んだ。

今回――第五次聖杯戦争のランサー、クー＝フーリンのマスターは、いわずもがな真言である。

こちらは凛の望みと、真言の好奇心もあいまって、あっさり調査できた。力押しな印象の強い真言だが、彼女もれっきとしたホグワーツの卒業生だ。未知の術に対する好奇心は大きい。

余談ではあるが、元サーヴァントであるディルムッドのマスター、七季の体に「令呪」は印されていない。

彼女と契約したきっかけは当初、魔力供給のための暫定的な関係であったことから、少女のキスによって眷属化されたことが原因である。

もっとも、いまではしっかり主従関係ができあがっているのだし、「令呪」がなくともディルムッドの忠心に曇りはないから、彼にとっては「令呪？なにそれ美味しいの？」状態であるが。

＜こちらの「魔術」は、ミッドチルダ式やベルカ式のそれよりも難解な分、繊細な効果や秘匿に優れています＞

ようするに、ねちっこかったり、陰険だったりするわけだが。

そこはあえて指摘せず、学術的な興味と、大事な少女に誓う忠誠に心をたぎらせたリインフォースの情熱は、とどまるところを知らない。

＜いままで見たことのない魔道技術ですから、是非とも研究して七

季のお役に立てたいのです＞

ディルムッドの「破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）」であれば、「令呪」の破壊までは無理でも、魔術である「令呪」を一時的に打ち消すくらいは可能だろう。

リインフォースは、いったん打ち消されても復元する「令呪」の過程を観察したかったのだ。

彼女の知る限り「令呪」には、たった三度きりとはいえ、サーヴァントを縛るほどの、制約の力がある。そこには「大聖杯」との連動、「令呪」を刻まれたマスターに与える情報付与など、じつに密度の高い効果が込められている。

「大聖杯」という「本体」があるとはいえ、外部装置である「令呪」は、たった三画だというのに！

＜なるほど。了解した。いまのところ一騎打ちのようだが……マスターが危うくなれば、あちらのサーヴァントも介入するだろう。機会があれば、必ず＞

ひごろ従順な相棒の、珍しい頼みに、ディルムッドは快くその願いを聞き入れた。

彼の金にかがやく目が、いっそう猟犬の鋭さを増したのは、いうまでもない。

いっぽう、もう一人のランサー――青い髪の、後ろ髪をしっぽのようにくくった武人はというと。

――くっそ。うずうずしやがるぜ。

目の前で繰り広げられる、ふたりの神父の激突に、戦士の血をこれでもかとたぎらせていた。

なにしろ言峰綺礼は、八極拳の達人。

白兵戦を得意とするランサーの目を、楽しませるほどの使い手である。

血反吐を吐くほどの修練の果てに研ぎ澄まされた、武術の技は、理を孕みながら、夜闇の中で獣のごとき瞬きを見せる。
おぞましい呪いに侵食されているが故に、いささか精彩を欠いた言峰と。
彼よりも若いが故に、老練さが足りない、平行世界の若き神父と。
それぞれに長短があり、だからこそ拮抗する戦い。
自分の不覚もあって、マスターたるバゼットから奪われたランサーは、当然ながら言峰に意趣返しをしたくもあったが――目の前の対決を邪魔するほど無粋ではない。
ランサーにとっては、いけすかないことこのうえない、金髪のサーヴァントなどは、見るからに嬉々として、この「言峰綺礼」の対決を観戦している。
――あのツラにも、一発入れてやりたいもんだが。
死闘を望む槍の英霊は、うずく血潮を冬の大気で冷ましながら、それでも油断なく凛を守るための警戒は怠らずにいた。

そして教会の地下では。
「……そう」
死体のようになって生かされているだけの、子供たちの声にならない嘆きを聞き取る黒猫は、腐臭に満ちた薄暗い地下室の中で「秘密の部屋を思い出すな」と思っていた。
バジリスクを操っていた経験もあるリドルだが、この惨状から見るに、自分以上に悪辣な趣向の持ち主だと、言峰を評価する。
闇の魔法使いであったリドルは、こんな光景に傷つくほど初心ではないが、さりとて手放しに喜ぶような趣味ではなかった。
「それで君たちは生きたいかい？　手段がないわけではないけれど」
いま地上で戦っている言峰が背負っている以外にも、子供の霊は存在している。

生きているとはいっても、口をきけるような状態ではないが、ジャンル的に、悪霊や怨霊に等しいリドルであれば、彼らの声をきくのはたやすい。

＜もう、つかれたの＞

＜こんなじょうたいで＞

＜いきるのは＞

＜らくになりたい＞

苦痛を搾り取るために生かされていた子供たちの精神は、もはや磨り減り、疲れきっていた。

死にたくても死ねない地獄というのは、たしかにあるのだ。

その中で。

＜いきたい＞

たったひとつ、そう願った声があった。

＜いきたいよ＞

それは、かぼそい女の子の声。

「ふうん？」

黒猫のルビーアイが、火星のごとく紅く光る。

「まあ、お金があれば何とかなるんじゃない？」

なにしろ冬木にはげんざい、幸か不幸か、凄腕の人形師が滞在している。

――さて、どうなることやら。

夜天の下に、ふたりの言峰綺礼が、教会前の広場でぶつかり合う中。

弓の騎士からキーアイテムを手に入れた黒髪の少女は、ドレス姿からまっくろな巫女服へといでたちを変えていた。

術の起動と進行を担当する神は、七季の身のうちに鎮座ましましている。あいもかわらず白い月は天空にかがやき、月読命（つくよみのみこと）の加護を

得るにも不足ない。
そもそも、衛宮邸の庭でわざわざ儀式を行っていた理由は、「神」と名のつく高次存在の使う術を、一目見てみたいという、魔術師たちの好奇心からきたものだった。
いまは、七季の魂魄情報を含んだ血液という、より細密な触媒があるし、神々を顕在化させなくとも、彼女がうちに宿る彼らの力を放出さえすれば、術は使えるのだ。
故に。
月光を浴びる黒衣の少女は、ほのかに黄金（きん）の光を帯びて神々しくたたずみ、開いた手のひらの上に黒い台座のピンブローチを浮かべる。
白い手にぽつりと落ちる小さな影は、けれどもすぐさま「ぱきん」という音を残して砕け散り――そこに封じ込められていた、七季の血潮を解き放った。
月下に散った真紅のそれは、やがて少女の足元に落ちたかと思うと、陣を印すインクと化す。
「マスターッ！？」
ざっ。
七季の手のひら二つを並べたほどの直径で描かれた円陣は、次に、彼女が新しく流した血潮によって刻まれた円陣に囲まれる。
アーチャーの手につかまれた少女の腕は、しかしぴくりともしない。
これは幼なじみの血をもって「お手本」を作るための術式ではなく、かつて七季が保持していた記憶を「手本」として、現在の彼女の中にたゆたう記憶情報をトレースさせるためのもの。
だからこそ、過去の血と、現在の血が必要だった。
月光を満遍なく浴びた陣が、ぶわりと立ち上がり、中心を重ねて交差する。
そこから平面だった円は、みるみる本のページのごとくパラララ、と層を成し、立体化し、朱金の燐光を帯びて明滅する。

やがて球となった陣は、毛糸のように小さな線へと解けたかと思うと、ちらちら点滅を繰り返しながら、七季の小柄な体を取り囲み、螺旋を描いてくるくると回りだした。

その様を、金髪の人外青年が興味を引かれたように、ルビー色の視線を投げたが――クロスカウンターのように拳を繰り出す言峰たちの気配を感じ取ると、ふたたびそちらへ紅い目を戻した。

「アーチャー」

ぽつりと七季の唇が告げる。

「手を離して」

心配そうに灰藤色の双眸を向ける男は、けれども術の邪魔になると悟ったのだろう。

そっと少女の細腕から手を離して、無防備に近い彼女を狙うものがいないか、あたりの警戒に務めた。

そして、とうとう男が打ち倒される。

#319　キリエ・エレイソン　その2（後書き）

あとがき

＞思ったより長引いたので、またもや続きます（をい）。

人数が多いせいか、あちこち描写が飛んで申し訳ありませんが、もうしばらくシリアスにお付き合いください。

リインの狙いは「令呪」の解析。さすがにリンカーコアみたく、魔術回路ぶち抜くわけにもいかんので。やれるかどうかは、さておいて。

リドルは分類的に「悪霊・怨霊」なんで、その気になれば、霊の声くらい聞こえるという。

やっとオリ主の記憶が回復します。ここまで長かったなホント。

で、次回、コトミー対決が決着。

#320　キリエ・エレイソン　その3

「……何故だ」

血を吐く男が、よどんだ声を搾り出す。

「何故、私が貴様に負ける？」

この身に宿るは最悪の呪い。「この世全ての悪（アンリマユ）」。

最後には、己に巣食う穢れの力すら用いて戦った言峰は、しかしレンガ敷きの地に伏していた。

その心臓には黒鍵が突き刺さっている。それは彼のものとは違い、平行世界の神父のものであって、聖別された投擲剣だ。その力が、じわじわと言峰の心臓部を支えていた「この世全ての悪（アンリマユ）」の一部を浄化していく。

同時に、男の体からは急速に力が失われつつあった。

「私が人間だからだ」

月を背負い、たたずむ若い男の面輪を照らすのは――その拳に宿る、白く淡い光。祈りの力を込めた拳だ。

「いつだって、化け物を斃（たお）すのは人間だろう？」

生きるために。明日のために。ちっぽけなヒトは神に祈るのだ。

「化け物、か――嗚呼、ならば『主（しゅ）』は、この身を、如何なる理由で生み出し給われたのか！」

消える寸前のろうそくが、ひときわ明るくかがやくように、言峰の叫びは、夜の中で良く響いた。

悪徳を甘美と感じる、他者の苦悶を美酒のように味わい酔いしれる、こんな罪深いものをどうして作られたのか！

その意味を！　答えを！

手にするまでは死に切れぬ、と男は恨めしそうに身を絞る。

それはまるで子供のようだ。

得られぬ答えに、「何故」と繰り返す幼子に似て。
「それでも貴様は――否、貴様も『主』の存在を疑ってはいないのだな」
何故なら彼の叫びは、神がいることが前提だ。
男と同じ顔をした、年若い神父は、そこに憐れみのまなざしを向けた。黒い眼に光はない。けれどそこには、服喪用のジュエリーとして使われる黒玉のごとき、しめやかさがある。
「――」
思いがけないことを言われて、口元と僧衣を血に汚していた言峰が絶句する。
かたや、水中で長い年月を経て化石化した樹木を思わせる、厳粛な黒が、男の終焉を見守っていた。
「つまるところ、貴様は『主』を愛しているのだろう。捨てられず、離れられず、そんなざまになっても求め続けた――『主』からの答えを」
もたらされると信じていた。
淡々としたバリトンが、子守唄のように夜を流れていく。
「この世のすべてが『主』に作られたものであるのなら、あらゆる悪徳すらも『主』の知るところ。
悪魔でさえ『主』の被造物であるのだから――貴様の好んだその罪科すら、所詮は『主』の一部ということだ」
平行世界の「コトミネキレイ」から提示された「答え」に――それは、あくまで若い言峰の答えでしかなかったが――血染めの僧衣をまとう男は、横たわったまま、喉を鳴らす。
「嗚呼、何ということだ……何という……なるほど、道化だ。だが……」
悪くない。
そう、唇だけで刻んだ男は、何を思ったのだろう。
みずからの愛した、倫ならぬ悪徳さえも、神のものだと思い至り、安堵したのか。

そして、黄金（きん）の王の哄笑が満ちる。

「ははははははは！
うむ、大儀であったぞ綺礼！　貴様は見事な道化であった。褒めて遣わす！」

十年前から今日に至るまで、その苦悩と求道を間近で眺め、暇つぶしにしていたギルガメッシュにとって、この幕切れは――なかなか面白いものであった。

ようやく動いた金の弓兵に、すかさずディルムッドが動き、横たわる言峰の令呪に「破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）」を突き立てる。

「人質のつもりか？」

真紅の瞳で、緑の槍兵を見下すギルガメッシュは、ささやかすぎる彼らの狙いに気づかない。

それはディルムッドじしんの目的ではなく、彼のデバイスたるリインフォースの目的であるからだ。

「さあて――今度こそ、勝負といくか？」

ちらりと血色の双眼をすがめるのは、「クランの猛犬」たる英霊。

獰猛な笑みを浮かべる戦士は、鍛え抜かれた無駄のない体躯を、低くかまえていまにも走り出さんとする。

だが。

その場に闖入者が現れた。

いつのまに、そこにいたのだろうか。

月光を弾く、純白の毛並み。吻の突き出した頭部には、ピンと立った三角の耳と、縦の瞳孔。左右に揺れる毛足の長い尾を持った――

「もっふもふ――！」

毛足の長い、まっしろな中型犬は、あっというまに黒衣をまとう少女の懐へと抱きこまれた。
「わうっ！？」
「こっちでわんこ系の人外さん見たのは初めてだけど、何これ可愛いっ」
＜ごめんこのままだとアーチャーにガチで説教食らうんで、誤魔化しに協力してください！＞
念話で副音声を伝える七季に、人外わんこ――もとい、プライミッツ・マーダーは「きゅうん？」と困ったような鳴き声を上げた。
たまたま主がこの町の近くまで来たので、夜の散歩にうろついていたのだが、美味しそうな血のニオイに惹かれて、ついふらふらと立ち寄ったら、いきなり少女に抱きつかれてしまったのである。
そもそも彼は、この星の抑止力のひとつであり、真祖と死徒の混血たる吸血姫・アルトルージュ＝ブリュンスタッドに従っている。
死徒ではないが、主であるアルトルージュの真似をして、人間の血を吸うようになったので二十七祖に数えられるという、人外の中の人外だ。
主食は人肉か麺類だとか、「ヒトに対する絶対的な殺害権利を持っている」ために最強の一に数えられるだとか、ヤバさＭＡＸな特徴の持ち主なのだが、いきなり抱き疲れての、もふもふ攻撃には気持ち良いやら、困ったやら。
しかも、こんな物騒な化け物に抱きつく理由が「お説教の回避」とか、どうなんだ、という。
食っちゃろか、とも思うプライミッツ・マーダーだったが、ふんふんと鼻を鳴らす魔犬に、先に気づいた七季は、「ああ」と顔を上げて、いったん離れた。
「なるほど。私の血に惹かれて来たわけか」
さっき儀式に使った少女の血は、いまだ傷口から流れている。
七季は、ハルケギニア式の水と風の魔法を使うと、あふれていた血を一つにまとめ、取り出した浅めのスープ皿に注ぎ入れた。

＜これ差し上げるんで、とりあえず暴れないでください＞
ことん、と置かれた皿に、いそいそと白の魔犬は、顔を突っ込んで血を舐めだす。その間に、七季は腕の傷を魔法で癒す。
もとより、吸血種でなくとも、魔性の類には絶大な効果を持つ七季の血液だ。夢中になって食事をするプライミッツ・マーダーの、邪魔をしない程度に、黒髪の少女は彼の背中を撫でる。
そんな後輩を、しんそこ羨ましげに見つめる栗毛の美少女と、怪し過ぎるまっしろな犬に、本能的な恐怖を感じて震えている凛。その傍らで、いつでも戦えるように、臨戦態勢で目をかがかせるランサー。
元アラヤの「抑止力」であったアーチャーは、ガイアの「抑止力」たる白の魔犬の登場に、めいっぱい頭を抱えていた。
これが「霊長の殺人者」であるのなら、これを御するには、七騎の守護者が必要とされている。
――何でこんな物騒なものが、こんなときに！
いまさらながら、七季の人外ホイホイっぷりに、頭痛がしてくる従者である。
いっぽう、饗された血潮の美味さに、皿を舐め尽くしたまっしろな犬は、次いで、近くの敷きレンガに記された、円陣へと目を転じた。
そこには、記憶を取り戻すため、いましがた円陣を描くため使われた、少女の血が残っていたからだ。
いかにガイアの化け物とはいえ、犬の形態を取っているからか――彼の行動は早かった。
そこに染みついた七季の血を、ぺろぺろと舐めだしたのだ。ふさふさしたしっぽは、ぶんぶか振られている。
どこからどう見ても、完全に犬の行動だった。
その間に、若言峰が、息を引き取った平行世界の「自分」に、黙祷を捧げ、「死体の始末はどうしたものか」と事務的な考えに移っていたりする。

そのあたりは、さすがに葬儀に関わる同業者といおうか。
さておき。
「ええい我を無視するとは！」
ガン無視されたことがお気に召さなかったらしい英雄王は、おのが背後から宝具の射出を行うも。
「投影開始（トレース・オン）」
ガガガガガガッ。
その攻撃は、赤い外套をまとう褐色の肌の偉丈夫によって相殺された。
「王の裁きを妨げるとは――」
万死に値する、とギルガメッシュが言いかけたところで。
新たに闖入者が現れた。

「あら……こんなところにいたのね」
血色の眸。漆黒のドレス。そしてドレスと同じ色の長い髪。
年の頃は十四、五歳くらいに見えるだろうか。人形のごとく恐ろしく整った容貌の少女は、夜の中で目立つ白い毛並みの獣を、優雅な物腰で手招き、呼び寄せた。
「わふっ」
すたたたた。
白い尾っぽをふりふり、プライミッツ・マーダーが駆け寄る相手。
それは彼の主――アルトルージュ＝ブリュンスタッドに他ならない。真祖と死徒の混血である、吸血姫の登場に、さしものギルガメッシュすらも、緊張の色を面輪に刷いたが。
「わうわうわう、わっふわふ！」
「あらそう。あちらにケンカを売られたの」
すうっと、黒の吸血姫のルビーアイが、背後の空間をゆがめたままの、ギルガメッシュを射抜いて止まった。

「わおん！」
その通りでさー、と元気に返事をするプライミッツ・マーダー。
「ガイアの怪物」とも思えない、とても良い忠犬っぷりである。
黒いヒール靴に包まれた足は、つかつかとギルガメッシュめがけて歩き始める。
いっぽう、まっしろわんこ――プライミッツ・マーダーはというと、さっき血をご馳走になった少女の元へ、てってこ寄っていき、ちょこんとお座りをして、わふわふ訴えた。
てし、と「お手」のように、七季の膝に乗せられた前脚がなんとも可愛らしい。
「んーと。行っていいの？　えと、ご主人様にもご馳走したいって？」
だから何故、話が通じる。
その場の聖杯戦争の参加者による、内なるツッコミが炸裂していた。
げんざい絶賛ド修羅場の道を突き進んでいる、言峰教会前で、しかし「神使（しんし）」の少女は、けもけも姿の「霊長の殺人者」と仲良く話していた。というより、交渉だろうか。
「じゃあこれ。私の血で割った、ちょっとイイ値段のワインと、私から抜いたばっかりの、四百ミリリットル血液パック。かごに入れて首にかけるから、ご主人様によろしくなー」
「わおん！」
ごちになりまーす。
美味しい血液（自前）と引き換えに、この場の安全を買った七季は、アーチャーたち従者と、凛たちマスターを集めて説明した。
「てなわけで、わんこのご主人様が、いまからお兄さんと肉体言語なＯＨＡＮＡＳＨＩをするので、勝手に帰って良いそうです」
『何でさ！』
若言峰、真言、凛、ランサーふたりにリインフォース、アーチャーはおろか、地下室にいるはずのリドルまでもが総ツッコミの、シ

ンクロ率四百パーセント。
「あ、そうですね。教会が崩れないうちに、地下の子供たちの浄化と、そっちのお亡くなりの言峰さんも含めた、遺体の始末もしてしまいましょう」
『そっち!?』

そして、薄暗い教会の地下で、弔いはひそやかに行われる。
苦痛を絞られるだけの生に擦り切れてしまった、幼い魂は、祈りと共に天上へと送られ。
魂に捨て去られた肉体も、ようやく安息の死を受け入れる。
彼らを苦しめた男の遺体と共に、その身が土へ返されようとする前に――ひとり、生きることを選んだ魂を、リドルが紹介した。
「この子は、生きたいって言ったんだ」
死臭に満ちた、苦痛の地獄の中で、それでも生きる意思を捨てなかった女の子。
「イリヤスフィールのように、人形を作れば、その体で生きることはできる。ただし、お金はかかるけどね」
黒猫の言葉に、凛が苦い顔をする。ツインテールの少女は、長い間、彼の悪行に気づくこともなく、この残虐を許していた――冬木の管理者（セカンドオーナー）としての、自分の至らなさに歯噛みする。
――償いになるかなんて、わからない。
でも。
「まだ、名前は覚えてるかい？」
＜さつき――弓塚、さつき＞
リドルの問いかけに答える彼女の名前を、魔術師の少女は、深く胸へと焼きつけた。

＋おまけ＋

「ところで、綺礼を倒した――いや、あなたも綺礼なんだけど――その光る拳って何なの？」

「ああ。これは彼女にヒントをもらった技でね。拳に祈りの力を込め、霊なるものへの攻撃として、拳法で対処するためのものだ。蹴りでも同様に効果がある」

そう、何と言ったか――

「平和主義者クラッシュ、だったかな？」

「ちょっとナナちゃあああぁん！　あんたホントに何仕込んでんのおおおぉぉ！？」

そしてどこが平和主義者だ！

「てへ。人畜無害キックもありますよ？」

「やるねナナキ」

#320　キリエ・エレイソン　その3（後書き）

あとがき

＞やりたかったネタを詰め込みました。異論は認めます（キリッ）。

悪魔さえも神の被造物、というのは何かで読んだ話です。

プライミッツ・マーダー、オリ主に懐く。

久しぶりに人外ホイホイネタを突っ込みました。やりたかったんだ。

ついでにご主人様が友情出演しているのは、もののはずみ。かっとしてやった。

ギル様との戦闘回避するために、どえらいものを突っ込んだ気がしますが、そこはそれ。

さらに月姫ネタの原作ブレイクをかましてみました。サーセンｗ

原作「月姫」で不憫なさっちんですから、こっち引っ張ってきて、どうせだから吸血鬼を回避、というのもアリじゃないかなと。

おまけの「平和主義者クラッシュ」「人畜無害キック」はスレイヤーズのネタです。

魔族を素手でドつく王族の技、まじパない。

#３２１　アダージョ

藤蔓で編んだゆりかごに。
ふっかりやわらかな羽根枕。
ひなたの匂い、いっぱいの干草。
丈夫で厚めのまっしろシーツと。
ガーゼのケットにくるまって。
木洩れ日の下で休みましょう。

自分の「中」に、さつきの魂を迎え入れた七季は、痛めつけられた幼い魂が安らげるようにと祈りを抱く。
この暗い地下室を思い出さないように、あたたかく、穏やかで、心地よいものに包まれるように、イメージを編んだ。
「それじゃ、戻りましょうか」
外から何だかヤバげな音が聞こえてくるし。
異を唱えるものはない。
少女の言う通り、ここは地下室だというのに、何故か地鳴りのように揺れる振動が、この部屋の天井にまでも伝わってくるのだ。
一刻も早く退散した方がみのために違いなかった。
「……もしかしなくても、アレよね。綺礼の代わりの監督役が来るまで、事後処理って、管理人（セカンドオーナー）の私の仕事よね……？」
自分で言っておきながら、信じたくない、という声音のツインテール少女は、「はあああぁぁ……」とでっかいためいきをつきつつ、ここ数日で、何度もお世話になった転移魔法のサークルへと入った。

ほぼ全員が、デバイスを持っている七季主従と、彼女の世界の言峰神父は、銀髪ルビーアイの美女――リインフォースの転移魔法陣に固まり。

デバイスを持っているのが真言だけという、「アーチャー」主従は、ランサー、凛が、栗毛の少女の展開する、桜色の魔力で印された、転移魔法のサークルにまとまる。

少女たちを包み込む淡い魔力光が、つかのま薄闇を照らしはするが、それはまもなくかき消える。

フッ。

かくして一行は、主を失った教会を後にした。

どがーん。

「……教会が潰れたら、やっぱり私がごまかすのよね……？」

ぽそりと落ちた、凛の呟きが、やけに黄昏れていたことは、蛇足である。

ぴんぽーん。

インターホンのチャイムに、家主の少年が出迎えに行けば。

「ただいまー」

「あー、えらい目に遭った」

いまだ緋色のドレス姿の黒髪ツインテール美少女と、うんざりした声を洩らす、ふわふわ栗毛に桃色ドレスのチートな巫女さんが視界に飛び込んできた。

「お、おかえり……」

暫定ハーレムのようになっている衛宮邸だが、士郎はというと、いまだ女性のあつかいに慣れない健全な青少年だ。どぎまぎしながら言葉を返す。

ぐりぐりと目が大きな童顔少年は、その頬を電灯の下でわかる程度に染めていた。

その後ろからは、めんどくさかったらしい異邦の少女が、黒髪だけはシニヨンに結い上げたままで、まっくろ巫女服を模したバリアジャケット姿のまま、ひょっこり顔を見せる。
「あ、記憶戻りましたー。ご迷惑をおかけしました」
ぺこん、と頭を下げる七季に、赤毛の少年は、琥珀の目をきょとんと見開いた。
「そっか。良かったな」
「おかげさまで」
へにゃん、と少年少女が気の抜けた笑みを交わしあう。
「何か、ずいぶん私たちと反応が違うわね……」
ちょっと拗ねた面持ちで、猫っぽく切れ上がったブルーアイを半眼にする少女魔術師。唇も、むうっと尖って見える。
どうも士郎、穂群原学園のアイドル、憧れの少女であり、魔術師としても、自分とは天地の差がある凛には、引け目を感じるらしい。ようするに、照れや恥ずかしさが先に立つのだ。
それは、セイバーともガチバトル可能であり、なおかつ浮世離れしたレベルの美少女である真言にも、同じような態度になってしまう。
もっとも、これにが続きがあって、ふたりとも士郎をからかい、かまい倒すのが好き、という共通点があることも事実だったりする。
いっぽう七季の方は、天性のフェロモンを抑えれば、まだしもふつうの少女の範疇である。
そのうえ、生来のぐーたらな性格とあいまって、ここ数日のあいだは、部屋や居間でごろごろしているのがデフォルトになっていた。
士郎からすれば、「異性」として意識するより先に、世話の焼ける相手、もしくは気楽な同年代、というポジションに落ち着いている。
初めて出会った夜には、ケンカ売るような口調（七季が）だったとはとうてい思えない、恐ろしいなじみ具合だといえよう。
きょうの午後とて、イリヤスフィールと三人で、ごろごろジャレ

ていたことからも、それは明らかである。
「青春の甘酸っぱい感情もけっこうだが、後ろが詰まっているのでな。早く上がってくれないかね」
ビミョーな乙女心に水を差したのは、良く通るバリトン。
「えっ……と。お客さんか？」
少年の問いに、記憶を取り戻した七季が、かるく手を上げて応じた。
「んーと、そんなところ。協力者かな。衛宮君、言峰さんを上げても良い？」
「ああ。七地さんの知り合いなら……けど、大丈夫なのか？」
いちおう、まだ聖杯戦争中なのだ。
それを暗ににじませる士郎に、少女はあどけない面輪のまま、苦笑を浮かべてみせた。
「ところがぎっちょん。さっきまで、この言峰さんが、ガチで戦ってたんだ」
「えええっ！？」

「えーまあ何だ。
ご迷惑とご心配をおかけして申し訳ありませんでした。特に、アーチャーたちと先輩、悪かった」
温かな空気に満ちた、衛宮邸の居間にて。
まっくろ巫女服姿のまま、手をついて、額が畳につくほどに、深々と頭を下げる七季の姿があった。
「あ、あのっ、七季っ！？」
おたおたしながら、ルビー色の目をさまよわせるリインフォースに、「顔を上げてくださいっ！」と悲痛なほどに必死な声で言い募るディルムッド。
「……不可抗力だろう、マスター」

深いためいきと共に、それでもいたわりの響きを込めてとりなすアーチャー。

記憶というストッパーのない主の、タチの悪さを知ることにもなったが、それはそれで一つの収穫と思うことにする。

「悪いのは、オモイカネさまだし」

ねー。

いまだドレス姿のまま――ミニ丈なので、ふとももが電灯に眩しいが――腕組みして眉尻を下げる真言。

リドルと東風（こち）だけは、体を伏せる少女の背中に乗っかって丸くなり、あるいは、彼女の背後に回って、正座中の足裏を、くちばしでつんつくつつき倒している。

裏を返せば、その行動で許してやる、という無言の許容の表れでもあった。

時折、まだ土下座中の七季の口から「みぎゃっ」とか「ふぎゃっ」とか動物じみた鳴き声が聞こえてくるのは、ご愛嬌である。

少女の背中に、丸くなった黒猫が陣取っているその様子に、外野がやたらめったら微笑ましげなまなざしを向けているのも。

「私たちは、これといって迷惑をかけられた覚えはありませんし……」

セイバーが歯切れ悪く呟けば、士郎も頷いて、隣に座るイリヤと顔を見合わせる。

「むしろ気にならなかった……って言ったらマズいか？　気にしてるのは、もっぱらアーチャーだったしな」

「シロウ、睨まれてるわよ？」

やがて正座でしびれた足をつつき倒された七季が、猫のように伸びて動かなくなったころ――転がったままの少女は、今度はころりと仰向けになった。

「でもまあ、迷惑かけたのはホントだから、私にできることなら、一人ずつお願いを一つきこうと思って」

おわびの気持ちってやつ。

寝転がったままなので、何ともだらしない「おわび」だが、さっきまで少女が正座した足をいぢめられて、にぎゃにぎゃ鳴いていたことを知っている一同は、そろって生温かい目で七季を眺めている。
「お願い、ねぇ……」
聖杯戦争中にのんきな話ではある。
だが、この場にちゃっかり居座っている、若言峰は「ふむ」と頷いて切り出した。
「では、今度の休日、久しぶりに付き合ってもらおうか」
「あいさー。良いんですか？　そんなんで」
「君の忙しさは知っているつもりでな。受験生の希少な休日を邪魔するのは、少々気が引けていたところなのだ」
気が引ける？　アンタが？
この世のものとも思われぬものを見る目つきで、「ジゴロの神様」と魔術師の少女と、ついでに「神妻」の巫女さんが、カソック姿の男を凝視する。
バゼットは幸か不幸か、いまだ部屋で寝込んでいる最中だから、平行世界の彼を見る機会はなかったが。
ちなみに、記憶が磨耗しているはずのアーチャーはというと、胸につかえる違和感に、渋面で首をかしげていたりする。
「良いですよー。あ、残りの人も、なけりゃないで、無理に考える必要もないですから。私がいなくなるまでに、できる範囲のことでお願いします。
金塊欲しいとかダイヤ欲しいとかなら簡単なんですけど、まあ味気ないでしょうし。誠意としても、どうかなと思っただけなんで」
そこにギラン！と少女が青い目をかがやかせたことを追記しておく。誰とは言わないが。
「えーと、それじゃあ、きょうはこのへんで。きょうの顛末は、あすバゼットさんが回復してから説明しましょう。二度手間ですし、そんなに特筆することもなかった気がしますし。てゆーか、眠いです」

いやいやいや、ものごっついことがあったよ!?
きょう外出した「アーチャー」組は、声にならない声で総ツッコミを入れたが、本音をダダ洩らす少女と同様、ぶっちゃけ彼らも疲れていた。
展開とハプニングがめまぐるしすぎて、気持ちを整理する時間が欲しいというのが、正直なところだ。
「ガイアの抑止」が現れたり、聖杯戦争の裏ボスっぽい神父がログアウトしたり。
金髪の少女や、赤毛の少年など、待機組みは、後ろ髪を引かれた様子だったが、そろそろ夜も遅い時間だ。もちろん彼らは彼らで、きちんと夕食を済ませている。
あとは入浴して寝るだけだが、全員が就寝するには、もうしばらく時間がかかるだろう。
ぞろぞろと居間から出て行くマスターやサーヴァントたちの中。
「あ、間桐さんときりちゃ……切嗣さん、言峰さんとライダーさんにはお話があるので、私の部屋に来てください」

防音のための結界を張った七季の部屋。そこで交わされた、桜の体についての密談は、あっさりケリがついた。
気を失っている間に、（記憶のなかったころの）七季が、彼女の体を診察したことには過剰反応したが、それがセイバーの頼みであったことや、たんに桜の身を心配しただけという理由から、ほどなく落ち着きを取り戻した。
桜がそれを許容した、いちばんの理由は、幼い頃から間桐の蟲によって調教されてきたという自分の「秘密」が、士郎には知られていなかったこと、これに尽きるだろう。
そして七季は、医者の守秘義務と同じように、決して彼女の「秘密」を他言しないと約束した。

そのうえで、淫虫に蝕まれる桜の治療について、二つの案を提示したのだ。

「この言峰さんなら、心霊治療で、間桐さんの体を傷つけることなく、『蟲』の摘出ができます。『蟲』じたいは、前もって、私が魔法とナノマシンを併用して殺しておけるけど」

もう一つは。

「まったく新しい体――人間とまったく同じ、ものを食べて、泣いて、笑って、妊娠だってできる、『人形』の体に、魂を移すこと。でもこれは、『人形師』である蒼崎さんが依頼を受けるかどうかによるから、かなりの賭けだと思う。お金も、尋常じゃなくかかるらしいし、人間と同然とはいっても、人間ではなくなるわけだから」

しかし少女は、刻淫虫に蝕まれた体を厭い、まっさらな穢れない人形の体に魂を移すことを選んだのだ。

もはや臓硯亡き、間桐家の財産は、いずれ慎二と桜のものになる。士郎を慕い、それ故に、凄惨な秘密を知られたくないと望む少女の決意は固かった。このあと桜は、みずから人形師・蒼崎橙子との直談判に赴くことになる。

恋する乙女は、ときに何よりもしたたかだ。考えてみれば、その間桐の魔術にさらされ、刻み付けられておきながら、正気を保てた強さ――それは、彼女じしんが持つ、したたかさだったのだろう。

間桐の淫虫と魔術に食い荒らされた、みずからの肉体を「取引材料」に差し出した少女は、おのが賭けに勝った、ということだけ記しておく。

桜としては、忌まわしい記憶が刻み込まれた、「捨てる肉体（うつわ）」に、何の未練もなかったのだ。

菫色の髪と目の少女が、長身の美女に付き添われつつ退室してから、しばらく。

「……その。七地さん、いる？」
訪れた少女の問いに、七季はへろりと返して、お茶を用意した。
「いますよー。どうぞ、遠坂さん」
のんきなソプラノに緊張感をいくらか解された凛は、それでも決意を秘めた青い目に、力を込めている。
「私は、冬木の管理者（セカンドオーナー）として、綺礼の所業と、その被害への責任があるわ。
彼女が……さつきちゃんが、『生きたい』と望むのなら、私は最大限、それを支えるべきなの」
でも。
そこから凛はぶっちゃけた。
遠坂のお家芸である、宝石魔術には、とってもとってもお金がかかるのである。
蒼崎製の「人形」に支払う代価を考えるだに、宝石を買うお金なんか、逆さに振っても残らないだろう。
不動産はあるが、それを手放してしまっては、「管理者（セカンドオーナー）」の資格を失ううえ、その賃料で、魔術の研究費を稼いでいるのだ。
だからまず、遠坂の家に生まれた魔術師が、魔術の研究と同じくらい励まなければならないのが、財テクであった。
しかし、十年前の聖杯戦争で、当主だった遠坂時臣は他界。
幼い凛が、遺産をどうこうできるはずもなく、後見人となった言峰綺礼が、その財産管理を任されたのだが――あの男は、たいがい適当にやっていたらしい。
凛がどうにか経済観念を身につけるころには、遠坂の財産は、目に見えて減っていた。
これに関しては、株や財産運用が趣味の、臓硯によって運営されていた間桐家の方が、遠坂家より、よっぽど資産家だったくらいである。
このままでは、高校卒業後に視野に入れていた「時計塔」への入学すらも、ままならない。

「だからっ！」
「よーするに、遠坂さんの『お願い』は、『お金になるものぷりーず』ってことでファイナルアンサー？」
「その通りよっ！」
うがあっ。
恥も外聞もなく、きっぱり言い切った天才美少女魔術師は、いっそのこと潔かった。
「えーと。それじゃあ金とかダイヤとかプラチナとか、価値の高いものを錬金すれば良いんですかね。最近の質屋って、それ以外の宝石は、換金目的だと受け付けてくれないみたいですし」
妙な豆知識を知っている七季である。
即座に対応する少女に、思わず本音を洩らしてしまう凛。
「で……できれば、ルビーとかサファイアとかも錬金してくれると嬉しいなー……なんて」
「コランダム系統なら、アルミを用意してもらえると、錬金しやすいですよ。あとでいっぺん、実物を見せましょうか。他のも、近い素材があれば、そのぶん錬金の労力が減るわけですし」
少女の夜は、まだ終わらない。

＋おまけ＋

「やれやれっと……お風呂空いてるかなー……？」
「七季っ」
「どした、リイン？」
「お、お願いが……」
ごにょごにょごにょ。
「……そりゃ私は良いけど。こればっかりは訊いてみないと」
「それで良いですから！」

「……どうしたのだね」
「あ、アーチャー」
と、リドル。
「さっきの『お願い』ってやつ？」
「うんまあ」
『で？』
「混ぜて欲しいんだって、リイン」
『……は？』

#321　アダージョ（後書き）

あとがき

＞タイトルの「アダージョ」は音楽の速度記号の一種で「ゆるやかに」の意。

更新が遅かったにもかかわらず、短くて申し訳ない。

閑話的な内容なので、まとまりにくくて。一日が長い……（しくしくしく）。

大したネタもなかったので、おまけを無理やり突っ込んでみる。

リインの「お願い」が何の話が分からない人は、そのままでいてください（待て）。

頑張って明日も上げてみます。

#322　レディ

そして「いまのアルミの相場っていくらだっけ」と尋ねる凛に、「地金でトン五十万もいかないはずですよ」と、七季ではなく、彼女のデバイス「黎明」が答えたりする中。

「ところで、さつきちゃんの魂を入れるための、人形代なんですけど……それに関しては、私が出すつもりなんです。

彼女への『お願い』と、引き換えに」

ぱちくり、と凛の青い双眸が瞬きして、まっくろな巫女服娘をその目に映した。

「本気？　冗談でも何でもなく、けっこうな額なのよ？　宝石魔術をあつかってる私が言うんだから、間違いないわよ？」

繰り返し、念を押すツインテールの美少女に、七季はシニヨンに結っていた黒髪を下ろし、あどけない面輪に苦笑を浮かべて「金額は聞きましたから」と頷く。

「まあ、現金ではなくて、それこそ錬金した貴金属類での支払いをお願いすることになるでしょうけど」

本気らしいと分かる答えに、凛が、整った顔をしかめて異邦の少女を見つめる。

「理由を訊いてもいいかしら？」

いったい何が目的なの。

――それだけの金額をなげうつ価値のある「お願い」。

不審を隠さない、少女魔術師の声音に、七季は祈るような表情で目を閉じた。

「エミヤシロウ」の幸せを、彼女が願わないはずがない。

「ある男の子にかけられた、呪いの傷を癒すためですよ」

霊なるものの、声が聞けないツインテールの少女は、さつきの素

性をいまだ知らない。地下室の子供たちが、かつての聖杯戦争の生き残りであることも。いわば士郎の「同胞」であったことも。

ただ、幼い子供が、言峰綺礼の「道具」にされたのだと思っている。

おとぎ話めいた答えを聞いて、いまいち得心のいかない面持ちをしている凛に、「神使（しんし）」の少女は、そっと目を開くと、あいまいな笑みをにじませたまま、困ったように首をかしげた。

凛も立ち去り、いい加減、眠りたいと思った七季は、その前に風呂を使うため、割り当てられた和室を出た。

手には着替え一式を抱えて、ひんやり冷たい、板張りの廊下をほてほて歩いていると、そこで私服姿のリイン、アーチャー、黒猫姿のリドルと遭遇して二、三、言葉を交わす。

幸いにも、いまは誰も入浴していないようで、もともとリインは、七季を呼ぶためにやってきたらしかった。

「じゃあリインも一緒に入ろっか」

「え？　え？」

「んじゃ僕も」

「自重したまえ、リドル」

いそいそ少女たちについて行こうとする、まっくろルビーアイにゃんこ（ただし中身は闇の魔法使い）の首ねっこを、ひょいとつかみ上げるのは、褐色の指。

白い髪の偉丈夫は、じろりと灰藤色の眼光でリドルにひと睨みくれると、少女と美女ふたりを促した。

「真言たちは先に入ったそうだ。君たちも早く温まりたまえ」

「んー。わかったー」

「で、では、お先に……」

ひらひら手を振る小柄な少女の頭は、微妙にふらふらしている。

眠いのだろう。言峰教会に行く前から、既に七季が、車内で舟をこいでいたことを思い出した男は、短く「リイン、君に任せた」と銀髪美女に声をかける。

アーチャーの言葉を幸いと、リインフォースは隣に並ぶ少女の、小柄な肢体を支え、一転、いそいそした足取りで浴室へと向かう。

「当然のように猫あつかいで、プライドというものはないのかね？」

邪魔されたリドルは、恨みがましげなジト目でアーチャーの仏頂面を睨み上げていたが、ぷいっと身を翻し、その手を振りほどく。

「うっさいよ、アチャ男」

おっぱいは正義！

したん、と黒い毛並みの猫は華麗に着地を決めると、そんな捨てゼリフとともに、したたたたっと走っていった。ちょうど七季が歩いてきた方向である。

浴室とは逆方向なので、アーチャーはそれ以上、何も言わなかったが――ふと、マスターの言葉を思い出して、考え込んだ。

「『お願い』、か……」

――さて、どうしようか。

いっぽう、同じ衛宮邸にて、七季がリインフォースとのんびり入浴しながら――うっかり寝かけたりして、危ういところを銀髪美女に助けられているころ。

とある一室では、ふわふわした栗毛の髪をゆるくまとめた美少女が、机に広げたタロットカードを、真剣な目で見つめているところだった。

「うーん……そうかあ……そんなことが……」

「いったい何なの？」

ふみふみ頷く真言の、ひとりだけ納得しているような様子に、パジャマ姿の凛がうろんなまなざしを投げている。さっき、七季を訪

れるために結っていたツインテールを解き、ブラシで黒髪を梳いているのだ。
いちおう警戒のためという名目で、同室の主従なのだが、フリーダムな真言に、魔術師の少女がわりと振り回されているのは、わざわざ述べるまでもないことだろうか。
「よし、決ーめたっ！」
びくっ！
手を打ち合わせる、チートな巫女さんの行動に、思わず肩を震わせる凛。
何をする気なのかと、自分のサーヴァントであるはずの「神妻」の少女を見つめて繰り返した。
「だから何なの！？」

「ふぃ～」
温まった体に、チャイナ風のパジャマと、ボタン留めでショール風になるブランケットを肩からかけた少女は、ほってこほってこ廊下を歩いていた。
足元には、デバイスから出した、もふもふのスリッパを履いている。
少女と並んで歩くリインも、デバイスではあるが、七季と同じように、ほんのり桜色に上気した顔で、彼女と色違いのパジャマに身を包んでいた。
そこに。
「よーしナナちゃん確保おおぉ！」
げっとだぜ！
どこかのモンスターを捕獲して回る少年のように、叫んだ真言が、がっちり七季の腰周りを抱え込む。
「ふゃっ！？」

あとは寝るだけ、と思っていた少女は、チートな巫女さんの、ふだん神剣をぶん回す膂力に、あっさり持ち上げられてしまう。

そのままサクッとお持ち帰り――もとい、連れ去られた七季を、つい呆然と見送ってしまった銀髪の美女は、はたと我に返るや、あわてて少女たちのあとを追いかけたのだった。

そして話は、真言たちをはじめ――バゼットをのぞく――この衛宮邸の女性陣に、これでもかと着せ替えされまくって疲れ果てた、七季のセリフへと戻るわけである。

「何なんですか、この超展開……」

#３２２　レディ（後書き）

あとがき

＞タイトルの「レディ」は「準備ができて」「覚悟がついて」「現金、現ナマ」もしくは「淑女、貴婦人」の意。

オリ主の呟きは、「＃３１４」の冒頭部分のものです。長いよ！

当初は、あれからこれまでのくだりを一話でまとめようとしていたという。無謀にもほどがある（汗）。

余談ですが、初めてアルミの価格なんか調べました（をい）。いちおう調べて出てきたデータが「一トンあたり十九万八千円」でしたが、あまり突っ込まないでやってください。

#323　ララバイ

「何故に、こんな格好？」

首をかしげれば、ポニーテールの黒いしっぽと、こめかみから頬にかけて流れる横髪が、さらりと揺れる。

どちらも、ストレートの黒髪のさきっぽだけ、くるりとカールしたままなのを見れば、どれだけ七季がいじり倒されたかがわかるだろう。

衣装はバリアジャケットを、デバイスである「黎明」が悪ノリしていじっただけにしても、湯上がりなのをこれ幸いと、髪型まで、あーでもない、こーでもないと色々やられたのだ。

ちなみに七季、ふだんからつややかでまっすぐな髪質なのだが、あまりにもさらさらしているため、半端な編み方では、あっというまに滑ってほどける、という短所がある。

そのうえプロにしかわからないような、微妙なクセというか、コシの強さがあって、ハードワックスをつけても半日保てば良い方、という、ある意味であつかいにくい髪だったりする。質が良すぎるというのも、問題である。

そんな、本来ストレートの少女の髪が、微妙にカールしているのは、あちこち結われた名残なのだった。

「ん。占いで、出たからね。ナナちゃんは、次の戦いで囮役やってもらうから！」

ぺっかりと、かがやかんばかりの美麗な笑顔で言い切ったチートな巫女さんを前に、オモチャにされまくった黒髪の少女は、

――何が？

「そーですか……もう好きにしてください……」

真言から「じゃあ私の『お願い』は、ナナちゃんの着せ替えね！」

と言い放たれたときと、同じセリフを吐いたのだった。
その黒髪に差し込まれた、サイズがバラバラの白玉を連ねたコームが、部屋の電灯にけぶるような、つややかな光を孕んで、七季の髪を飾っていた。

たっぷり着せ替え人形としてオモチャにされたその後、黒髪の少女はのたのたと――というより、ふわふわと――衛宮邸の廊下を、浮遊しながら部屋へと向かっていた。
足元がおぼつかない彼女の、デバイスである「黎明」の気遣いで、飛行魔法を使っているのである。
「ねむい……ねる」
呟く七季の唇は、ふだんのソプラノから、不機嫌そうなアルトへと変わり、やる気のない声帯が、ハスキーな響きをかけている。
とろんと落ちかけた目蓋の下から見える黒瑪瑙の瞳は――これ以上の視覚情報はいらないと、脳がシャットダウンしかかっているのだと思われる――涙に濡れて休息を求め。
だらりと提げた両腕に挟まれた、Hカップの乳肉が、窮屈そうに盛り上がる。
白玉を連ねた髪飾りが、夜色の髪を夜露のごとく彩り、首を覆うほどに襟の高いチャイナドレス風のトップは、胸元がダイヤ形にくり抜かれ、少女のバストの谷間をのぞかせていた。

「どうした、嬢ちゃん」
そこに歩いてきたのは、青い装束をまとう英霊ランサー。
さっきまで、固辞するディルムッドを捕まえて、酒を飲んでいた男は、いまにも意識がオチそうな七季の、わきの下に手を差し込ん

で、ひょいと持ち上げてみた。
　とはいえ、飛行魔法は継続中なので、それほど重さはかからない。ぷらーんと手足を伸ばしている少女を、青い髪の戦士が抱えているさまは、はたから見たら、猫でも持ち上げているかのような光景である。
「にゃー」
「こりゃまた、ずいぶん可愛らしい格好だな」
　ランサーの紅い目が、ためつすがめつ、七季を検分して、感嘆の口笛でも吹きそうな面持ちを浮かべた。
　それというのも。
　七季の肩口にかかる横髪は、ふんわりとカールし、彼女の左こめかみから頭頂にかけて差し込まれたコームは、大小の白玉が優しく光る。
　小柄な少女の肢体に、不似合いなほどのたわわなバストに、首からウエストにかけて、ぴったりと張りつく上半身の衣装は、いっそのこと窮屈そうだ。
　それに反して、下半身は、申し訳程度の四方に咲いた花びらのような黒の布地。金のレースにふちどられた様と、その花びらの頂点に縫い付けられた、ドロップ型のガーネットが、何とも華やいだアクセントを添えている。
　その下からのぞくのは、これが本命なのだといわんばかりに、ふんわりとボリュームを持たせる、シフォン生地の白いパニエ。
　ふわふわと幾重にも重なるヴェールのようなそれは、まっしろな太股を見えるか見えないかといった、ギリギリの隠し方をしている。
　黒に近い、紺のストッキングは、少女の太股の半ばで留まり、白のレースにふちどられた、黒のガーターベルトで釣られて、下着が見えそうで見えない、その先を妖しく引き立てていた。
　この場にはいない、シスコンのアリシアが目にしたなら、絶賛しそうなエロ可愛さである。
　もっとも、げんざい眠気で死にそうな脳の、トリップ娘は、もは

や羞恥も何もかも、夢の架け橋の向こう側にぶん投げていたが。
「どぉも……はなしてください。わたしは、ねるんです……」
まるで大人に捕まった子供のように、したぱたと、力なく腕を振る七季。つやつやしたリップを塗られた唇が、不機嫌そうに尖る。
子猫の方が、まだましだと思うような抵抗に、ランサーが苦笑しながら手放すより先に――違う腕が、七季を横からかっさらった。
「ぉわっ」
「七季殿っ!?」
それは、さっきまでランサーの酒に付き合っていたディルムッドだった。
「でぃる……ねむい、はこんで」
もはや七季は、本能でしゃべっている。セリフが、ほぼ単語のみになってきた。
「御意!
では光の御子、失礼する!」
「おー……う」
同じ「ランサー」のクラスであった英霊の、あっという間に見えなくなった姿を見送り、ランサーは「やれやれ」と後頭部をかいた。
名目上、彼のマスターである真言と、その主である凛は、さっきまで、あの少女で遊んでいたはずだ。
いちばん邪魔しそうなディルムッドの相手をしていてくれと、笑顔で言い放たれたときは、何事かと思ったが……蓋を開けてみれば、女性同士のジャレあいである。
――ま、久しぶりに赤枝の騎士と飲めたのは、楽しかったがな。
士郎が気をきかせて、簡単な酒のつまみを用意してくれたことも幸いだった。
彼が言峰からマスターを鞍替えして以降、これほど現世の料理が美味いとは、驚くことしきりのランサーである。
――戦いが少ないのが、難点と言えば、難点だが……。
厚遇されて、悪い気はしない。

「しかし、あれを『囮』にねぇ……？」
サーヴァントの聴力で、しっかりばっちり真言のセリフが聞こえていたランサーは、その端正な面輪に、けげんな色を刷いて、マスターたちを迎えに行くのだった。

「何事かね」
きらきら、ふわふわ、ひらんひらんに飾られたバリアジャケット――というよりも魔法少女っぽい――姿の七季を、ひとめ見るなり、眉間にしわを寄せたアーチャーが、ディルムッドを出迎えた。
場所は、もちろん七季の割り当てられた和室である。
少し遅れて、そこにリインフォースが、ぱたぱたとやってきた。
「ちょっと衣装合わせに、熱が入ってしまって……」
真言たちと一緒になって、七季を飾ることに盛り上がってしまった、銀髪美女姿のユニゾンデバイスが、あわてぎみに説明を挟む。
いっぽうディルムッドはというと、敷かれた布団に突っ伏した少女の、背中がぱっくり開いている、思いがけないデザインに少々うろたえて、その美貌を赤らめていた。
たかだか背中ではあるが、ふだんほとんど見せることのない部分というのは、それだけで刺激的なのである。
さんざん女性にモテたはずの、美丈夫の英霊は、敬愛するマスターの、思いがけない隙を目にして、こちらも若干あわてていた。
「いや～、眼福、眼福♪」
いつのまにか、黒猫姿のリドルも、ちょこんと布団の上に「お座り」している。
「そういえば、いたな、リドルも」
ちゃっかりケダモノ姿で紛れ込んでいた闇の帝王の前身（プレ）、歪みない。
「おいこら淫獣」

「誰がユーノだっ！」
「誰だそれは」
何も知らないアーチャーのツッコミに、ネタ返答するリドル。そこに、さらにツッコむリインフォースと、従者間のかるいコミュニケーションが展開されるも。
「うっさぁい」
にゃごにゃご寝ぼけぎみな、少女のソプラノが、布団の上から抗議を上げる。
「……すまない。だがマスター。せめて着替えてから――」
「やだ。ねむい。ねる」
物凄くシンプルな断言が返ってきた。
がっちり枕にしがみつく七季は、てこでも離れない、とばかりに横になっている。仰向けではなく、微妙に横向きのため、重なる太股がずれて、それがいっそう艶（なまめ）かしい影を生んでいる。
そもそもスカート部分じたいが、かなり短いのだ。
「マスター」
「いーからもう……すきにして……」
脱がせるなら脱がせるで。
そういう意味で、微睡（まどろ）みの中にたゆたう少女は口走ったのだろう。ふだんから、世話を焼かれまくっている人間ならではの、ぐーたら加減ともいう。
だが。
銀髪火眼の美女と、まっくろルビーアイの猫と、白い髪の偉丈夫は、一様にぴきこんと固まっていた。
ある意味、ド天然なディルムッドだけが、七季の意図を正しく理解し――「任せた、リイン」と言い残して、マスターの眠る部屋の警備をするべく、閉めたふすまの前に陣取ったという。
それからどうなったかは、神様だけが知っているかもしれない。

――あったかい。
頬を撫でる風は、どこか青く甘い、緑の薫り。
覆い越しのような、ちらちらと優しく弱められた光が、目蓋の向こうに明るく感じる。
こぽこぽ、ぱしゃぱしゃ、澄んだ水音が遠くで弾けて。
近くからは、優しい子守唄が聞こえてくる。
――ああ。あの地下室じゃないんだ。

つめたくて。
くらくて。
はながまがるよりも、きもちわるかった。
てあしのかんかくが、なくなるくらい、おかしかった。
なきごえさえも、だんだんきこえなくなった。
あのこわいばしょじゃ、ない。

聞いたことのない、子守唄。
それでも、声は、澄んで、優しく。穏やかに眠る子供の耳を、くすぐって流れていく。

おやすみなさい。
おやすみなさい。

やわらかな手のひらに撫でられる心地よさに、うっとりと唇を緩めながら、さつきは藤蔓で編まれたゆりかごの中、その疲れきった魂を休めていた。

#323　ララバイ（後書き）

あとがき

＞タイトルの「ララバイ」は「子守唄」の意。

「眠いわッ！」というのは、誰でも経験したことのある、魂の叫びだと信じています（をい）。

まあアレだよね。眠いととんでもないこと口走るよね。

バリアジャケットだから「黎明」が解除すればいい？

「黎明」　は　くうき　を　よんだ！

黎明「ご褒美ですよね、わかります」

……駄目だこのデバイス。早く何とかしないと。

さっちんはオリ主の中でお休み中です。霊体にとっては、神様も推薦の極上ベッド。そんなオリ主。

#324　カデンツァ

いっぽう、さいぜんまで黒髪の少女を囲んで、着せ替えが行われていた和室では。

「記憶が戻って良かったじゃない」

赤い座布団に座ったツインテールの少女が、あらためて真言へと声をかけていた。形のいい指が、衣装のデザイン画を書くために使われた、簡素なスケッチブックや色鉛筆を拾い上げては、まとめている。

「まあそうなんだけど。できれば、きょうくらいは一緒に寝たかったのに……」

ナナちゃん持ってかれた。

栗毛の少女が、つんと薔薇色の唇を尖らせる。こちらは冷えを防止する、短いソックスを履いた足で立ち、柱に立てかけていた姿見を、どこへともなくしまっているところだ。

何気なく眺めていた、赤毛の美女――蒼崎橙子が、茜色の目を見開いて、そのおかしな光景に、何度もぱちぱちと瞬きを繰り返している。

自分が持っているトランクもたいがいだが、真言の場合は、どう見ても袖や懐などに姿見が吸い込まれているとしか思えない。

「おんのれアチャ男め」

チートな巫女さんの横顔は雪のように白く、ぶーたれてなお秀麗である。そんな、おのがサーヴァントを眺めつつ、凛は、微妙に引っかかったことを口にした。猫柄パジャマが可愛らしいのは余談である。

「ねえ真言。あなたアーチャーと仲が良くないみたいだけど……どうして？」

人を食ったような皮肉げな口調の男だが、七季の従者は、決して悪い男ではない。

あれが「エミヤシロウ」の成れの果てかと思うと、どうにも納得いかない部分はあるのだが。

それでも、この衛宮邸において、料理の腕をふるう様子や、かいがいしく「神使（しんし）」の少女の世話を焼くアーチャーの姿を見れば、なるほど、世話焼きで、さりげない気遣いや、優しさなどが、赤毛の少年と良く似ていた。

凛も、ときたまアーチャーにからかわれはしたものの、真言ほど目くじらを立てるようなことは起きてない――いまのところ。

「だってあいつ、ナナちゃんのおっぱい奪（と）ったんだもん！」

ゑ。

その場の人間――ホムンクルス含む――が、一様に真言を凝視する。

「ナナちゃんのおっぱい、私のだったのにっ」

そのわりに、着せ替え中にさんざっぱら揉みしだいていらっしゃいましたが。

一同の視線が、さりげなく栗毛の巫女さんの顔から下――ようするにバストへと――下がって止まる。

七季ほどではないにしろ、Ｆカップの巨乳が、淡い桜色のネグリジェの下、いまはブラジャーの支えもなく、ちょっと重たげに丘陵を形作っていた。

そして、その場に居合わせた淑女たちの思考が、あちらこちらに突っ走っては錯綜する。

「……衛宮君……大きい方が好きなのかしら……」

――アーチャーが彼の成れの果てなんだとしたら。

ぴぴくんっ。

ぽつりと呟かれた凛の言葉に、銀髪の童女と、花の名を持つ少女が耳ざとく反応する。ひそかに少年と肌を合わせている、金髪碧眼の、少女騎士も。

そんな方向に思考が流れたのは、やはり深夜の魔力かもしれない。
「やっぱり大きい方が良いんじゃないかしら？」
だって、ナナキのはふかふかで、とっても気持ちよかったもの」
誰だって、気持ち良いのが好きでしょう？
口火を切ったのは、ほのかな紫に染まった裾と、金色の刺繍が可憐な、白いネグリジェに身を包む童女。
イリヤスフィールは、昼間、いっしょになってセイバーと士郎に抱きついたときのことを思い出した。
そのセイバーも、同じように、黒髪の少女に抱きつかれた感触を想起して、「うぅ……」とちょっぴり敗北感を覚える。
――たしかに、やわらかくて気持ちの良いものでした。
そんな剣精の少女のないしんを知るよしもなく。
イリヤスフィールはルビーアイを優美に細めたかと思うと、ちろん、と挑戦的なまなざしを、凛の青い目に叩きつける。
「それに母性を感じるというのは、大きいと思うわ。私もお母様を思い出したもの。安らぎを与えるのも女性の役割よね？」
『！？』
「せ、先輩は……」
それでは自分が有利かもしれない、と小花柄のパジャマに包まれた豊かな胸に、期待を抱く桜。ちょっとタレ気味かつ菫色の目が、ほのかに喜びでかがやいている。
いっぽう猫っぽいツリ目に、サファイア色の炎を燃やすのは、黒髪ツインテールの少女。あえてゆっくりとした口調で優雅さを装ってはいるが、その視線は臨戦態勢の戦士もかくやと苛烈だ。
「ちょっとイリヤスフィール。何が言いたいのかしら？」
恋する少年を想い、どきまぎする菫色のロングヘアの少女と、毛を逆立てた猫のように青い目を燃やす黒髪の少女を見比べて――。
「サクラとリンって、似てないのね？」
こてん。
イリヤスフィールは、わざと純粋を装った表情で、愛らしく首を

かしげてみせた。ルビーの視線は、胸部で固定だ。
「イィリヤスフィールウゥゥ！」
ずごごごっ。
暗黒色の闘気を背負う魔術師の少女は、いかにも「魔女」を連想させた。
「アンタひとのことが言えると思ってるの！？
だいたいアンタと衛宮君は、きょうだいなのよ、きょ・う・だ・い！」
それまでの「優雅さ」をかなぐり捨てた凛の主張に、悠然と言ってのけるイリヤスフィールは揺るがない。
「あら。シロウと私、血は繋がっていないもの。家名だって違うし、戸籍の上でも問題ないわ。それに、私のお母様は、けっこう大きかったのよ？
トウコにも、そのへんの話はつけてあるもの」
つんと胸をそらすイリヤスフィールのしぐさは、おしゃまというより危うい妖精じみた色香を漂わせている。
「まあ仕事だし、本人の要望だからな」
フォローというわけではないが、話を振られたので、かるく頷く赤毛の美女は、その茜色の目をさりげなく自分の胸元に向けた。
正直、自分よりも若い少女に、バストサイズで負けるとは思っていなかったので、ちょっとばかりプライドが刺激されたというか、何というか。
――私も、もう少し、盛るべきか……？
人形の体で生きる人形師は、そんな思いを過ぎらせる。
「シ、シロウは、そんなことにこだわるほど、狭量な男ではありませんっ！」
とうとうたまらなくなったのか、赤毛の少年への故ない疑いを晴らそうとしたサーヴァントの少女が、凛と声を張り上げるも。
「――どういうことかしら、セイバー？」
「ぁうっ！？」

フシュウウウウゥゥ。
底光りする青い目と、黒焔でも吐きそうなツインテールの少女魔術師に射すくめられて、セイバーは自分が墓穴を掘ったことに気づいた。。
「セイバーさん？」
桜の菫色した双眸も、心なしか光を失って見える。彼女の傍らに控えていた長身の美女――ライダーは、既に霊体化していた。
姿だけでも消して、会話からの戦線離脱を図ったのだ。霊体化できないセイバーには無理な芸当である。
――ず、ずるいですよ、ライダー！
「無粋なのね、リン。それともニブいのかしら。
へっぽこ魔術師のシロウが、セイバーを自力で賄えるほどの魔力が、用意できるはずないじゃないの」
しゃらっと長い銀糸の髪をかき上げて、あくまで典雅に口を挟むのは、アインツベルンの魔術師、イリヤスフィール。
銀髪の童女に指摘された内容を、実直なセイバーはとっさに否定することもできず、彼女の名前を呼ぶに留まった。
「イ、イリヤスフィール……」
「イリヤで良いわよ、セイバー。私、夫の従者（もの）に目くじらを立てるほど、狭量ではないもの。
シロウはマスターとして、当然の務めを果たしているだけだし、セイバーが本気で望むのなら――私たちの家族にしてあげても良いわ。シロウの第二夫人として」
ぴきこん。
この場のペースを掌握する、銀の小悪魔に、桜と凛がみごとに固まる。金髪の美少女だけは、頭から湯気を出さんばかりに赤面していたが。
「は、反対ですっ！
結婚って、本人の意思でするもので――」
しばらくあとに、ようやく憤りを露にした、ロングヘアの少女が

声を上げるものの。
「サクラ。私たち、魔術師なのよ」
ぐっ。
桜よりもずいぶんと年下に見えるはずの童女に、言い負かされた。
かつて桜は、魔術師の家の取引として、遠坂家から、間桐家へと養女に出された身の上だった。魔術師というものが、どんなに自分勝手な都合で、血を繋ごうとしているのかは、思い知っている。
「シロウは、魔術師としては異端だわ。あんなに優しくて、いびつだけど綺麗な心をしてるもの。他の魔術師に見つかったら、あっというまに食い物にされちゃうわ」
だから、私が守るの。
ぴんと背筋を伸ばして、真紅の目をかがやかせるイリヤスフィールは、魔術師というよりも、一人の女として力と決意にあふれていた。それは家族を守ろうとする「母性」の表出だ。
「セイバーなら、許してあげる。あなたは綺麗で強いもの。私のバーサーカーほどじゃないけれど。
でも、シロウを守りたいと思う気持ちが同じなら、私たちは手を組めると思う。きっと、戦友になれるわ。キリツグから、話を聞いてるもの」
剣精の少女に、そう持ちかけるイリヤスフィールの行動は、その母に似ていた。
かつてアイリスフィールは、愛する夫を守るために、切嗣の愛人だった久宇舞弥と手を組み、戦友として心を交わし——今は亡き、若き日の言峰綺礼に対して戦ったのだ。
「イリヤ……」
セイバーが、その顛末を知ることはなかったが、愛する家族を守ろうとする童女の姿に、セイバーはアイリスフィールの面影を重ねた。
導かれるように、うるわしき騎士王は、イリヤスフィールの小さな手を握る。

銀のこあくま、自力でイリヤルート、絶賛開拓中。
「こ、このロリっ子……！
あんたね、桜のセリフじゃないけど、肝心なこと忘れてない！？
衛宮君は、悲しくなるほど朴念仁の、キングオブど天然な鈍感なのよっ！
あんたみたいな、体格差のあるロリータに手を出すような、非常識でもロリコンでもないんですからね！」
その口ぶりに、今度は桜が、姉へと疑いのまなざしを向ける。
よもや、彼女も士郎に気があるのではないかと。
「姉さん……？」
ところがどっこい、姉妹の絆に、本格的なヒビが入る前に。
「あら。リンこそ忘れてない？
シロウは女の子を乱暴にあつかえるような性格じゃないし、押しに弱いんだからｖ」
一転、パチンとウィンクをかまし、いたずらっぽく微笑んだ銀髪の童女に、思わず頷くセイバー。
――たしかに。
魔力供給のための関係だったとはいえ、士郎はバゼットやセイバーに押し倒されてことに及んだのである。まあ、ケガ人であったバゼットを慮って、抵抗が弱かったのだろうが。
「あー……そういえば、アチャ男も、ナナちゃんにおねだりされて、負けたんだっけ……」
ふと思い出したように真言が口走る。
『そこんとこくわしく』
ずずいっ。
そこに食いつく乙女が二人。家名は違えど、流れる血が同じならば、行動も似てくるものなのだろうか。
＜成長することが……必ずしも良いことばかりとは、限らないのですけどね……＞
ぽそり。

「ライダー？」
パスを通じたサーヴァントの呟きを、つい拾い上げて顔を上げる少女がひとり。
「どうしたの、桜」
「いえライダーが」
じつは可愛くなりたいけれど、自分の背の高さにコンプレックスを抱いている、長身美女のサーヴァントの言葉を聞いて、チートな巫女さんは、懐を探るそぶりを見せた。
「ちなみに『若返り薬』とかあるけど」
にゅっ。
「そこんとこくわしく」
真言の言葉を聞くなり、現界したライダーも、しっかり乙女心の持ち主であった。

そして柳洞寺では。
三条の剣が、白銀の化生を攻撃するも。
ガカッ！
「面妖な……ッ」
傷を負った様子もなく、するすると退却していく、液状金属――メタルスライムに、門番である「アサシン」は、月の照らす夜闇の中、渋面を浮かべていた。

また衛宮邸では。
「良いのかい？」
「ま、これも巡り合わせってもんでしょ？」
白い狩衣姿で、縁側に座る男と。

「最初は、ナナちゃんだけで、ここに送るつもりだったんだけど……こうなったのは、かえって良かったのかもね」

人間万事、塞翁が馬ってね。

「面倒みてやろうじゃないの、フィナーレまで」

月光を浴びる栗毛の「神妻」が、その白い面（おもて）に、不敵な笑みをかがやかせていた。

そして翌日。

「おはよーございまーす……」

「もう昼なんだけど」

「あはー……ええまあ、ちょっと疲れてたみたいで」

墓穴を掘ったなぁ。

ちょうど居間へ、昼食を運んできた士郎は、何とも言いがたい表情を浮かべている七季を見て、不思議そうに首をかしげるのだった。

#３２４　カデンツァ（後書き）

あとがき

＞タイトルの「カデンツァ」は「独奏協奏曲にあって、独奏楽器がオーケストラの伴奏を伴わずに、自由に即興的な演奏をする部分のこと」。

着せ替えあとの女性陣に、わちゃわちゃしゃべってもらいました。

フリーダム。

※人間万事塞翁が馬（じんかんばんじさいおうがうま）

：幸福や不幸は、予想のしようがないことのたとえ。

#325　ウォーク

七季が聖杯戦争に召喚されてから、五日目の朝である。
「ああそうだ。パン、ありがとうな」
ひょこん。
木製のトレイを卓に置いて、膝を畳につけた士郎は、ほてほてと居間に入ってくる黒髪の少女へ、穏やかに礼を述べた。
朝、彼が起きると、居間のテーブルの上には、何故だかパンの入った紙袋が置かれていたのだ。
しかも焼き立てとおぼしき、まだぬくもりを十分に保ったままで。添えられていたメモには「散歩のついでに買ってきました。みんなで食べてください。七地」と書かれていた。
元・弓道部である少年の、起床時間はけっこう早い。家を訪れる後輩の少女・桜がいまだ弓道部に在籍しているから、ということもある。
そのことを鑑みても、七季の起きた時間は、士郎たちよりもさらに前だったのだろう。
「どういたしましてー。んで、よければ感想なんぞ聞きたいんだけど」
言いながら、居間の入り口に近い場所へと、白いブラウスに黒いベスト姿の少女が腰を下ろす。
「ああ。セイバーも喜んでたよ。あのカレーパン」
金髪の少女の、パンを食べながらハムハムこくこく頷くさまを思い出して、ほんわりと琥珀の目を細める士郎の面持ちは優しい。
セイバーが喜んだとことも嬉しいし、彼女の様子は、とても可愛らしかったのだ。
「たまたま目についたんで、買ってみたんだけど。そっか……良か

った」

一日限定、百個という人気商品だと書かれていたので、ためしに買ってみた七季である。もちろんそれだけではなく、ふつうのパンも買い込んだのだが。

「他のパンも美味かったしな。どこの店なんだ？」

――セイバーも気に入ったみたいだけど……知らない店だったしな。

この町にある店――ことに食料品店――には詳しい士郎だけれど、紙袋のロゴに見覚えはなかった。

「最近できたところみたいだよ」

黒髪をポニーテールにくくった少女は、口元を手で覆うと「くぁあ」と小さくあくびして、今朝のできごとを思い出していた。

「マスター」

「ナナキ」

「んぅ……？」

ゆすゆすと、誰かの手で体が揺さぶられる感覚に、七季はぼんやりと微睡（まどろ）みの中をたゆたう。

適度な揺れはゆりかごのようで、眠りの海をさまようにも不自由はなかったが、いかんせん、寒さがちりちりと彼女の肌を刺し始めていた。どうやら布団が剥がれたらしい。

「にゃに？」

寒さから身を守るように、小柄な体を丸めながら、手近なぬくもりに抱きつく七季。

あさっての方向に突っ走りつつある、彼女のデバイスは、バリアジャケットのデザインはそのままに、温度設定だけをいじったらしかった。

あどけない寝顔の少女を取り囲む使い魔たちに、「空気読んだ！」

とドヤ顔せんばかりの雰囲気をかもし出す「黎明」は、本当に芸が細かい。

細かすぎて、当初の開発者であるアーチャーやリドルさえも「これはどうなんだ」と、ないしんツッコむレベル。

さておき。

「起きてください」

低い男の声と、少年のテノール。そしてじれったそうな響きを帯びたアルトが、七季の上に降ってくる。

少女は、うにゃうにゃと寝ぼけた声を上げていたが、かけ布団を剥がれたことで、体感温度が下がったせいか、体機能の一部も起きたようだ。

「んー。ちょっとお手洗いー」

下ろしていたまっくろなロングヘアを、どうにか自力でくくって、七季はごそごそと起きだした。

「おはよ、ディル」

ちょうど、部屋を出たすぐのところで、まだ暗い廊下にも、きらきらしいほどの美貌が、耳ざわりの良い声とともにあいさつしてくる。跪くのはデフォルトなのか。

「おはようございます！」

曙光のような金色の目と、緑の黒髪の青年は、しかし軽装の概念武装姿だ。ここは魔術師だらけの衛宮邸であるので、人間のふりをする必要は、あまりないと思っているのだろう。

ディルムッドも、七季たちの休む部屋を警備していたわけだし。

――寒そうだなぁ。

だが、まだ寝ぼけぎみの少女は、まるきり彼を人間あつかいしていた。

「え。まさかそのままで一晩？」

せめて霊体化とか。

「はい！」

――えーと。

フェロモンたっぷり、男の色気を身にまとう美丈夫は、しかし爽やかな忠犬スマイルで元気に返事をしてくれた。
――きのうは寝ぼけてたからなぁ。そのまま気にせんと寝ちゃったか……。
いかな七季も、動かない頭で、思わず考え込もうというものだ。
そういう少女は、アレな思考のインテリジェントデバイスの陰謀によって、まだチャイナドレスっぽい魔法少女衣装のままである。激しく眠いせいか、あまり七季は気にしていないが。
――だからといって、この格好のディルに半纏着せるのもどうかと思うし。
「ちょっと待っててな」
ステイ。
とりあえず彼女は、用を足すことにした。七季も人間であるからして、生理現象には逆らえない。
「はい」
ほてほて裸足で――眠くてスリッパを取り出すのは忘れたのだ――遠ざかる背中を、追いかけたい気持ちを抑えて、ディルムッドはその場に正座して待機したのだった。

「へぷちっ」
トイレから出た後、くしゃみをひとつかました七季は、改めて冬の朝の寒さを実感する。場所は洗面所である。
――寒い。
できるなら、早く布団に戻って二度寝としゃれ込みたいところだ。
黒髪の少女は、イヤーカフの待機状態であるデバイス「ガニュメデス」をほんの少し意識すると、ハルケギニア式の魔法を使用した。
「ん」
ひねった蛇口から出る水分を操り、温度を調節した湯を、ぴたり

と顔に張りつかせる。
しばらく息を止めて、お湯でかるく顔をすすいでから、水分は洗面台へ排水。
ぷは。
タオルで余分な水分をふき取って、洗濯機の中へ。
ちなみに七季は、指輪の形状である「黎明」と、チョーカー形状である「ノア」は、どちらも眠るときには外すようにしている。どこかに引っかけてもまずいし、寝ている間に首が絞まっても困るからだ。
そのまま彼女は、キッチンへと足を向ける。
冷蔵庫から牛乳を取り出すと、やはりハルケギニア式の魔法で温め、ホットミルクを作った。カップは食器棚から、適当に借りたものだが、あとで洗って戻せば問題ないだろう。

で、ふたたび部屋の前へ戻ってきた黒髪の少女は、ディルムッドへとマグカップを差し出していた。屋内とはいえ、冷え込む冬の廊下に、ホットミルクの湯気が温かそうにけぶっている。
「ほい、ディル」
ぱちぱちと金の目を瞬いていた青年は、はたと我に返ると、マスターから差し出されたカップを受け取った。
「あ、ありがとうございます」
「どういたしまして」
まだ眠たげな少女の目蓋が、大きな目をとろんと半ばまで覆っているところへ、ディルムッドがおずおずと声をかける。
「あの、七季殿」
「ん？」
どこからともなく「神使（しんし）」の少女が取り出した、ビーズクッションに、それぞれ腰かけた二人が廊下に並んでいる様は、ちょっぴり

シュールかもしれない。
「きのうの『お願い』なのですが……」
――ああ、言ったっけ。
七季は、マグカップを持っていたおかげで温かくなった手のひらを、ぺたりと頬に当てて暖を取っている。
が、まだまだ頭は寝ぼけていて、ぽやーん、と微睡(まどろみ)の海を浮かんだり沈んだりしていた。
睡魔。それは七季が勝てない、数少ない魔性である。
「うん？」
「その、二人で朝の散歩など」
身長差から、どうしても七季が見上げる形になる、高い場所にあるディルムッドの美貌は、それはそれは魅力的だった。
そこらの女性が見れば、十人中、十二人くらい何でも言うことを聞いてしまいそうな、凛々しいのに、少年のような可愛らしさがにじむという、期待を孕んだ面持ちだ。
が。
「――うん」
七季にも、彼のセリフが、とても慎ましやかな「お願い」なのはわかるのだが。
――どうしてだろう。私の目には、自分からリード持ってきて「さんぽ行こ？」っておねだりするわんこにしか見えない……ッ！
何で散歩なの。せめて散策とか。
――あ、同じ意味か。
寝起きで、半分動いていない少女の頭は、いろいろ正直だった。
あとやっぱり、ディルムッドの色気そのたは、七季には通じないらしい。
そのまま、ぐりぐりと従者の頭を撫でくりまわしたくなる欲求をこらえて、少女はいまだ半覚醒状態の思考で、どうにか最低限の判断をすることができた。
「じゃ、着替えような。さすがにそのカッコじゃ、コスプレになっ

ちゃうから」
——このまま寝てたのか私。解除しようよ、黎明。
「はいっ」
帰ってくるのは良い子のお返事——もとい、良い従者のお返事である。
ディルムッドが飲んだあとのカップを受け取ると、七季は、その場で洗って熱湯消毒、乾燥後に転移魔法で片付けまで、すべて魔法でやってのけた。
眠たかったので、ちょっとだけ横着したともいう。
「私も着替えてくる。すぐ済むから」
「お待ちしております！」
青年の返事を背中に受けて、七季は同室で休んでいたはずの従者——アーチャー、リドル、リインフォース——に
「ディルの『お願い』で一緒に散歩してくる」
と伝えると、まっくろなコートを着込んで、朝の五時半くらいに衛宮邸を出かけたのだった。

そうして、散歩ついでに、たまたま見つけたパン屋で買い込んできたのが、あのカレーパンその他、というわけだ。
「あのあと眠くなって、また二度寝したんだよなぁ……」
朝五時か六時くらいだったから。
「そりゃまあ、無理ないか」
相槌を打ちながら、赤毛の少年が、運んできた白いスープカップを食卓へと並べる。
「美味しそー」
ほんわか湯気を上げる中身は、赤い色に緑や黄色といった野菜のカラフルな彩りがあざやかな、コンソメベースのスープである。
他にも、テーブル中央に置かれた大皿には、さまざまな具材を挟

み込んだ、ホットサンドが並んでいる。
「七地さんが買ってきた、朝のパンの残りで作ったサンドイッチと、ミネストローネ。スープなら食べやすいだろ？」
「うん」
温かそうなメニューに、ほくほく顔の少女を眺めて、士郎の仏頂面も思わずくすりと緩んだ。
美味しいものが好きな七季を見ていると、そこで彼はセイバーを思い出すからだ。ふたりが並んで食事をするさまは、小動物じみていて、眺めているだけでも微笑ましい。

やおら、そこに。
「ナナちゃん、おっそよー！」
どーん。
「うわぱっ」
元気なソプラノと波打つ栗毛の理不尽チート、もとい美貌の巫女さんこと真言が現れて、七季に抱きつきながら押し倒していった。
「うわ！？」
向かいに座っていた少女がひっくり返り、一時的に視界から消えたものだから、思わず士郎も驚いて声を上げる。
ひょこり。
「さすがに昼まで寝るのはどうかと思うわよ……？」
そこに顔を出したのは、黒髪をツインテールに結った少女魔術師。いかに低血圧な凛でも、七季と違って、朝食の席には加わっていた。しかし、それから士郎は、しばらく彼女の姿を見ていなかった。
理由は、衛宮邸の庭に――正確には、その地下に――突貫工事で作られた、蒼崎橙子の臨時工房のためである。
真言と凛の「アーチャー」主従と、そこにチートな巫女さん配下のランサーが加わって、あれこれ工事や内装を整えていたのだった。

「あ、遠坂。お疲れ。
七地さん、朝方ちょっと散歩に出てたらしいぞ。朝に出したパンは、そのとき買ったやつだってさ。帰ってきたのが六時くらいだから、そのあと二度寝に突入したらしい」
「うげ。何でそんな時間に散歩なんか……」
朝に弱い少女魔術師は、整った顔を引きつらせて、物好きな異邦の巫女さん——げんざい栗毛の美少女に押し倒されている——を眺めやるも。
「青くない方のランサーさんに『お願い』されたんだと」
「そ」
赤毛の少年の言葉を聞いて、あっさり納得した。きのう彼女も、七季に「お願い」を聞いてもらったクチだからである。
「もー、ナナキったらおっそーい！」
「ふぎゅっ」
そこに、新たなメンツが現れた。銀髪が、冬の陽射しを浴びて、雪のごとくきらきらしい、アインツベルンの銀のこあくま——もとい、イリヤスフィールだ。
小さな童女とはいえ、腹に乗っかられた七季が、妙な鳴き声ともつかない呼吸音を上げて、じたばたしている。
「不規則な生活習慣は、感心しませんよ、ナナキ」
きゅ。
次いで、イリヤスフィールと共に現れた金髪の少女——セイバーに、七季は上に伸ばした手首を、そのまま、まとめて押さえられた。
「あ、あれ？　何故にセイバー嬢にまで怒られてるのでせう？」
てゆーか、ぷりーず、へるぷみー。
午後の陽射しに燦々と燃えるエメラルドの目は、イリヤスフィールが乗っかっている腹部よりも上——黒髪の少女の、高くそびえる山嶺を見つめている。
「リンー！　ナナキ捕まえたわよー！」
「あ、いまいくわ！」

ぱたぱたぱた。
雪の妖精のごとき、アインツベルンの童女に呼ばれた、スレンダーな美少女魔術師も、かろやかな足音を立てて、組み敷かれている七季へと寄って行った。
一人けげんな顔をするのは、赤毛の少年である。
「何やってるんだ？」
「はい、先輩は見ちゃダメですＶ」
きゅ。
いつのまにか、士郎の背後に忍び寄っていた後輩の少女が、そのたおやかに見えて、弓を引く力強い手で、少年の視界をきっちりと塞いでしまう。
「さ、桜っ？」
うろたえる士郎の、少し離れた前方で、猫のような悲鳴が高く上がっていた。
「ふみゃあああああぁぁ！？」
「……私も、良いですか？」
そこに重なるのは、ライダーの大人っぽいアルトである。
「ん。ほら」
それまで七季のおっぱいをわしづかんで、「どうなったらここまで育つのよ……」とためつすがめつ検分していた凛が、体をずらして、スペースを譲った。
いつのまにか、七季同様に、朝は布団の住人だったバゼットも起きだしてきて、しげしげと少女たちを興味津々の面持ちのぞきこんでいる。
彼女の失われた手は、無事に再生が済み、あとは七季の回復魔法と、一日そこらのリハビリとで完治するという話だ。
「ちょっとー。ナナちゃんのおっぱい、私のなのにー」
所有権を主張するのは、ふわふわと波打つ栗毛を背中で揺らすチートな巫女さん。口を尖らせる子供っぽさと、その美貌の秀麗さが、絶妙にマッチする巨乳美少女である。

「良いじゃない、ちょっとくらい」
そんな口ぶりで、ライダーの長い指にこね回される、七季のバストを凝視する凛。目が口ほどにものを言っている。「ちょっといぢめてやりたいなあ」と。
「ライダー、終わったら交代してね」
そこに、やんわりとしたソプラノが、サーヴァントたる美女に飛んできた。
「はい、桜」

「……私のより、おっきい……」
ちょっぴり妬ましげな響きの呟きをこぼした桜は、探り当てた少女の肉ぽっちを、きゅ、っと指の腹で摘み上げてみる。
「みゃあぁぁぁぁん！」
上がる七季の声に、涙が混じっているのは、おそらく痛みを覚えたからだろう。
「ららららライダー？！　みんなして何やってんだ！？」
「それは、秘密です」
ライダーの怪力で羽交い絞めにされ、そのうえたゆんたゆんな乳肉を背中に押し当てられながら、長身の美女に目隠しされている士郎は、いっそ泣きそうになりながら、少女を助けられない、己の未熟を悔いたという。

いっぽう。
「いやー、眼福だねえ」
いつのまに、こちらも湧いて出たのか。
白い狩衣をまとう切嗣と、壁際にもたれながら腕を組むランサー

が、親父臭い笑みを浮かべて、少女と美女が戯れる光景を見物していた。
ただいま衛宮邸は、この世の天国である。
「まったくまったく」
ごごん！
『ぁだっ』
「何をやっているのかと思えば……！」
人外の男二人の後頭部を、まとめて殴った拳を震わせるのは、おなじみアーチャー。
「よし混ざろうリイン」
「えっ」
ブレない淫獣――もとい、まっくろにゃんこなリドルの誘いに、わたわたしながら踏み出そうとする銀髪ルビーアイの美女と、ショッキングな光景に、一瞬フリーズするディルムッド。
「！？」
例によってカオスである。
「いったい何を！」
フリーズから再起動した、緑の槍兵は、あわてておのがマスターを救出した。
七季の小柄な体を抱え込んで、半ば背中へと庇いこむ。
「乙女のスキンシップよ」
ねえ？
対するは、アインツベルンの銀のこあくま。
「そ、そうね。現代の女の子のジャレあいよ」
しゃあしゃあと言ってのけるイリヤスフィールの可憐な声かけに、黒髪をツインテールに結った、ミニスカートの少女もあわててコクンと頷く。
「……十年あまり現世での経験がある俺にも、そのような知識はないように思われるんだが」
なおも女性陣に疑いのまなざしを向けつつ、じりじりと迫ってく

る彼女たちに圧されるように、後ずさる魔貌の騎士。
「男性と女性では、やはり知識の種類に隔たりがあるのではないでしょうか？」
ちょっぴり獲物を狙うまなざし――とはいえ眼帯越しではあるのだが――を向ける、ライダー。
「しゃあしゃあと嘘をつかないでもらいたいな君たち。淑女ともあろうものが、はしたない」
ひょい。
そして、ディルムッドよりもさらに上手の保護者――白い髪の偉丈夫が、あっさりと七季を取り上げ、その場から逃がした。
「にぅ……」
てててててっ。
といっても、居間の入り口に押しやられていた少女を、反対側に運んだだけなのだが。
『あ』
テーブルを回り込んだ七季は、ちゃっかりと、士郎の隣の席に陣取って、彼に想いを寄せる少女たちへの意趣返しとした。
「食べて良い？」
「あ、ああ。どうぞ」
トマトの風味が食欲を誘う、ミネストローネの湯気が、さいぜんよりも減っている。冷えないうちに、と他にも勧める、赤毛の少年の声に、一同はそそくさと昼食の席へついたのだった。
「いただきまーす」
『いただきます』

「んで、きょうはどうするんだ？」
少女たちが衛宮邸に居座ってから、すっかり家主の威厳など吹き飛ばされぎみの少年が、琥珀のまなざしを凛へと向ける。

ちなみに蒼崎橙子はというと、イリヤスフィールと桜、そして七季による依頼は受けるつもりらしく、げんざいこの屋敷の庭（地下）に作られた、臨時の工房にこもっている。

「んー」

残るサーヴァントは、「アサシン」「キャスター」のみである。ある意味、どうしようもないといえば、どうしようもない組み合わせだ。

「あ、真言ちゃん。七季ちゃんを借りても良いかな？」

そこに声を上げたのは、意外なことに「ジゴロの神様」。すなわち衛宮切嗣である

「んお？」

「何でしょか」

仲良く顔を上げるや、こてんと首をかしげる巫女さんコンビ。

黒のセーターと、桜色のワンピースシャツが並んでいる様子は、お互いを引き立ててあざやかだ。

「ちょっと宝石翁を釣りにね」

「んげふっ！？」

思いがけず飛び出した、とんでもない単語に、ちょっと乙女としてあるまじき音を出した凛。

「だ、大丈夫か遠坂！」

そのまま咳き込み続ける少女の背中を、親身になってさするのは、穂群原のブラウニーこと士郎だ。

もう一人のブラウニー――もとい、ブラウニーっぽい色みの肌の偉丈夫が、精悍な面輪をこれでもかとしかめているところを見ると、何か嫌な記憶でも思い出したのだろうか。

磨耗しているはずのものを思い出すからには、それはそれは強烈なものに違いない。

「ほら七季ちゃん、人外ホイホイというか、『誘魔』の性（さが）があるから」

「生餌ですか、わたしゃ」

否定はしませんが。
一言ツッコミを入れてから、また大人しく、むぐむぐとサンドイッチを頬張り始める、黒髪の少女。
ちなみに士郎を挟んだ隣では、金髪の少女が、ほぼ同じような行動を取っているのが、はためにも良くわかって、少年の向かいに座っている、イリヤスフィールの笑みを誘っている。
「協力してもらえないかな？」
大聖杯を解体するには、立ち会ってもらった方が楽なんだよね。
立て続けに、聞き捨てならないことを言われている、遠坂家の魔術師はというと――ただいま絶賛、咳き込み中。がんばれ凛。
「そりゃ仕事が楽な方が良いでしょうけど……釣れるとは限りませんよ？」
どんなお爺さんか知りませんが。
『……』
こてん、と小鳥のように首をかしげる七季の言葉に、思わず一同が黙り込む。なにしろ、きのうの顛末を話した後なのだ。
「ガイアの怪物」プライミッツ＝マーダーさえ吊り上げたナマモノが何を言う。
しかも友釣りで吸血姫・アルトルージュまで一本釣りという非常識。
こいつなら釣れるんじゃねーかな、と思った一同は、たぶん悪くない。
「そこはそれ、僕の腕の見せ所というか」
無精ひげの男は、ゆるく笑う。
「？　きりちゃ……切嗣さんですか？」
何故に？
ぱちくりと大きな黒い目を瞬かせる少女へ、かつて「魔術師殺し」として名を馳せた男は、穏やかに語る。
「『きりちゃん』で良いよ。君には、色々お世話になってるしね。僕にできることは少ないから。せいぜい、この士郎と、大きな士

郎に『ジゴロの神様』としての加護を授けるぐらいがせいいっぱいかな」

あれ。いま何かえらいこと聞いた気がするよ？

「一級フラグ建築士に『ジゴロの神様』の加護とか、それ何てチート？」

二人の「エミヤシロウ」をのぞく、その場の全員が思ったことを代弁しての、リドルのツッコミが炸裂する。

が、みずからも「一級フラグ建築士」である「ジゴロの神様」は、そんなツッコミを意に介さない。

「どうせだから君にも加護を授けておこうか。

平行世界の『衛宮切嗣』が、七季ちゃんの叔父って話だし、いっそのこと君を『ジゴロの神様』の姪っ子としてあつかうことにしよう」

へろっと告げられた言葉は――天地にあまねく知らしめる、言霊が込められていたりした。

ぴろーん。

その直後である。

「マスター。メールが一件、携帯電話に届いております」

七季の形態を預かっている「黎明」から、そんな告知がなされる。

『ななき　は　くらす

「ジゴロ　の　かみさま　の　めい」

を　てに　いれた！』

取り出された少女の形態の、メール画面には、そんな文章が記されており。

「激しく待てっ！」

「あ、先輩がツッコむなんて珍しい」

琥珀の目を吊り上げながら、叫ぶ栗毛の巫女さんを、「ジゴロの神様」の姪っ子あつかいになった七季が、おっとりした口調でなだ

めつつ、スープを一口すすっていた。
「ツッコミもするわっ！　神様の身内認定されると霊格が上がるんだってば！　あとで届出、出しておかなきゃ……よし、オモイカネさまに丸投げしよう」
「あ、ひでぇ」
途中から本音がダダ洩れた真言に、思わず素で呟く青い髪の戦士。
「ひどくないっ！」
「あるのか届出」
次いで性分からか、ツッコミを入れたのは、赤毛の少年。
「霊格とか神格が上がると、書類で報告しなきゃならないんだよ。仕事の影響が出るから」
いろいろと神様もややこしいようである。まあ偉くなるほどめんどくさいというのは、人間社会では良くあることだが。
「あーでも、これでナナちゃん、女神系の神様のウケが良くなるね、考えてみたら」
ずずずずず、っとミネストローネを飲みきった真言は、カップをたすん、とテーブルに置いて、ひとりごちた。
「そうなの？」
ぱちんと銀髪の童女が、ルビーアイを瞬けば。
「ジゴロの神様の身内だから。女たらしだけあって、女神様にウケが良いのよ」
えー。
チートな巫女さんのセリフに、ゆるい笑みを浮かべる無精ひげの男の顔を、思わずしげしげ眺めてしまう一同であった。
「あ、ちなみに昨夜、七季ちゃんたちの側に、吸血姫のお嬢さんを誘導したのは僕だったり」
女性とのエンカウント率なら、ある程度、上げることはできるんだよね。
「ちょっと待てエエエェェ！」
魂のツッコミを入れる凛をよそに、吸血鬼であろうと女性ならば

守備範囲（？）の切嗣に、ひっそり戦慄したアーチャーがいたとか、いないとか。

なお、余談ではあるが、七季の母方の家は、異世界といえども「衛宮家」であることをつけ加えておく。

この場に七季の幼なじみがいたならば「やっぱり血筋なんじゃ？」とツッコんだに違いなかった。

＋おまけ・使い魔たちの顛末＋

夜。

「寝込みを襲うのは、さすがにどうかと思うのだが……」

「えー」

「では、いったん七季には休んでもらって、朝、早めに起きてもらうというのは？」

「そうだな」

「ぶーぶー」

魔力の足りているサーヴァントに睡眠は必要ない。

怨霊にも、もちろん睡眠は必要ない。

プログラム生命体であるユニゾンデバイス（以下略）。

『夜が長いな……』

朝。

「マスター」

「ナナキ」
「起きてください」
「んぅ……？
んー。ちょっとお手洗いー」
ごそごそごそ。

「ただいまー。ちょっとディルと散歩してくるなー」
『え』
ぱたむ。

『……』
ディルムッドには事情を話していないだけに、文句も言いづらい使い魔たちであった。
どっとはらい。

#325　ウォーク（後書き）

あとがき

＞タイトルの「ウォーク」は「歩く、散歩する」「〈幽霊が〉出る」「身を処する」「〈犬などを〉散歩させる、散歩に連れていく」「〈人を〉（一緒に歩いて）送る、案内する、引っぱっていく」の意。

会話でネームきってたら、ムダに長くなった罠。

女の子を書くのが楽しくて、つい。

そして、あえて読み手さまの期待を裏切ってみた（をい）。

そしてオリ主、どう見てもノリが飼い犬の散歩です。ディルすまん。全般的に書き手のイメージのせいです（笑）。

でも考えたら、この組み合わせで二人きりの行動って、恋姫時代を除くと、ほぼないんだよな。たいていデバイスのリインが相棒としてついてくるし。

ついでに、おまけの「おあずけ」シーン。

クリスマスには、二度寝のあとに「いただきます」な例のアレを書く予定です（こら）。

それにしても、書いている自分が、いま聖杯戦争、何日目なのか忘れそうになる件。

確認がてら読み返したら時間を食いすぎて戦慄した（汗）。一日が長すぎだろうと（以下略）。

#326　ハウリング

淡く青い、冬の空。
その天蓋に、雪を孕まぬ白い雲をかけつつ、大地を照らす化日（かじつ）が昇ろうとも、「彼」は、朝なお暗き地の底で、「天の杯」に抱かれたまま、夢を見る。
そこは岩屋。
異邦の少女がもしも踏み入れば、かつて女神が隠れたという、天岩戸（あまのいわと）を連想したかもしれない。
けれども。
「円蔵山」と、この地に住まう人に呼ばれる山の中。
その奥深くに巣食いし「彼」は、かがやかしい太陽などではありえない。
それは暗黒。
否、どす黒く染められるほどに、あらゆる人の罪科と業とを背負わされた、魂のかけら。
その身どころか、魂の芯まで染みつくほどに同化してしまった呪詛は、もはや「彼」の存在意義ですらある。
ただ「悪」たれと。
このうえない「悪」として彼があるが故に、他のものの善性を保証するものとして、鎖（とざ）された世界（ムラ）の中で、在（あ）ることを望まれた存在。
それはやがて象徴となり、信仰となった。
「彼」は人間ではなく、「悪」となることを望まれた。
人間として生まれたはずなのに、「悪」であることを望まれた。
――誰が悪かったのだろう？
そう自問すれば。
――嗚呼、俺が悪いのか。

そう自答してしまうほどに。
「彼」の世界は狭く、「彼」の声は小さく、「彼」の望みは儚かった。
生きたいと願うことは罪だっただろうか。
望まれたいと思うことは業だっただろうか。
そして「彼」は、「聖杯戦争」に召喚(よ)ばれた。
「彼」の降臨を願うものによって。
「彼」の願いを満たす杯を掲げて。
「彼」は降りた。
アインツベルンという魔術師の下へ。
しかし「彼」は贄(にえ)でしかなかった。
かつて「彼」は贄(にえ)であり、此度もまた、贄(にえ)としてあつかわれた。
皮肉な繰り返しだった。
だが「彼」は、杯の中へとくべられる。無色の魔力が満ちる、「天の杯」は、とても――とても居心地の良い、「彼」の胎盤となった。
そこには膨大な力が満たされていた。
「彼」の実体化を可能とするほどの。
それは世界の外へと穴を開けるための力。
英霊たちの、人知を超える力を利用するためのダムでもある。
しかし、なみなみとマナに満たされたそれは、何とも素晴らしい魂のゆりかご(ようすい)に他ならない。
他の英霊たちは討たれ、あるいは朽ち果て、彼のように杯へとくべられた。
だが、「聖杯」の降霊は成らなかった。
鍵となる「小聖杯」が失われたからだ。
――これでは産道が開かない。
「彼」が望まれたように、「悪」として産まれ出でることも叶わない。
だから「彼」は、そのまま微睡(まどろ)んでいた。

杯に満たされたマナの中でたゆたい、胎児のごとく世界と出会う日を夢見て。

そして「彼」にとっては、二度目の機会。
産道は――開こうとした。
今度の「小聖杯」は、「母」としての記憶を持つ女で、だから「彼」はちょっと興味を持ったのだ。
何故なら「彼」は「母」の記憶を知らない。
磨耗したのか、それとも物心がつく前に、「悪神」たることを望まれて、引き離されたのか。
だから「彼」は、その女――アイリスフィールの記憶をのぞきこんだ。

愛した男。
その男との間に儲(もう)けた娘。
愛した男の抱いた理想(ユメ)。

――嗚呼。
美しいな、と「彼」は素直に思った。
温かいな、と「彼」は率直に羨んだ。
叶えてやっても良いな、と「彼」は望んだ。
「悪」たることを望まれた「彼」が、平穏を与えるには、たったひとつの手段しかないけれど。
こんな綺麗なものなら、自分も見てみたいな、と無邪気な子供のように考えた。
そして「彼」は、手を伸ばした。
嫌われ者の自分でも、手伝えるかもしれないと。
杯に身を捧げた女の、母たる願いを助けてやりたいと。

しかし、「彼」の手は払われたのだ。

妻と娘、男を残して、すべてを滅ぼすという「平和」――その悪逆を、衛宮切嗣は望まなかったが故に。

そしてふたたび「彼」は微睡(まどろ)む。

「天の杯」の中。

月のようにまばゆく見えた、アイリスフィールの記憶を抱いて。

暗い洞窟の中で。

夢を見る。

また「大聖杯」の胎動が聞こえる。

英霊が召喚(よ)ばれたと「彼」に伝える。

「彼」は夢見る。

産まれ落ちる日を。

今度こそ産道は開くのだろうかと。

――嗚呼、近づいてくる。

その魂は、何故か、暗黒の太陽と、小さな星の光を夢見ていた。

「彼」の夢が繰り返される。

冬に咲く花の色を――「彼」が知る日は、そこまで来ていた。

「胎児よ、胎児よ、なぜ躍る――母親の心がわかって、おそろしいのか――」

「マスター？」

温かな居間でこぼされた、少女の呟きに、彼女の従者が、灰藤色

の目をけげんそうに向けていた。

#326　ハウリング（後書き）

あとがき

＞タイトルの「ハウリング」は「ほえる、わめく」「途方もない、非常な」「長く大きい感情的な発声」「遠吠え」「ハウリング」の意。

ちょっと短めですが、ここしばらくゆるゆるだったので、ここらでちょっと締めてみました（そうか？）。

「大聖杯」の描写は、書き手の完全な想像と捏造です。

オリ主のつぶやきは夢野久作の「ドグラ・マグラ」より。

※化日（かじつ）

：日。太陽。万物を化生する日の意。

※ハウリング

：音に関する現象のひとつ。

音響再生の際、スピーカーから出た音をマイクが拾い、それをまたスピーカーが再生するということを繰り返し、大きな騒音が連続して発生する現象。鳴音。

#326　コネクト　その1

ごんっ。
「あだっ！」
男の硬い拳が、「ジゴロの神様」の後頭部に制裁を加えるのと。
「うちの大師父を釣り上げるってどういうことよっ！」
「うちのマスターをダシに使うのは止めてもらいたい！」
赤い服の似合う少女と、黒いシャツを来た弓兵が、声をかぶらせるのとは同時だった。

「だいたい君は次から次へと……危険人物や物騒なものばかり引っかけて……聞いているのかね！？」
「ぁうっ」
おのが従者から、こんこんと説教を食らう黒髪の少女は、まるきり立場が逆転している。
語気を強めて叱る、渋面の男を前にうなだれている七季は、まるで飼い主に叱られている子猫か子犬のようだ。
ふたりを見ているものは、少女の黒い頭に、ぺたんと寝ているケモミミを幻視した。
つけ加えると、もういっぽうでは「ジゴロの神様」こと衛宮切嗣が、身にまとう白い狩衣の襟首を引っつかまれて、まばらに無精ひげの生えた顔を、がっくんがっくん上下に揺さぶられていたりする。
「り、りりりり凛ちゃん、落ち着いてっ、くれない、かなっ」
「誰が凛ちゃんよ電話のベルみたいに言うなーっ！」
誰にって、もちろんサファイアのような青い目が美しい、遠坂家

の若き当主にである。
「あんな怪しげな神父と知り合いというだけでも心配なのに、わざわざ危険な場所へ首を突っ込むとは……！」
眉間を寄せて、いつ絶えるともなく小言を続けるアーチャーを眺め、ランサーがぽつりと呟いた。
「まあ、あんな外道神父そっくりな知り合いがいるってのは、確かにアレだと思うけどよ。あいつ過保護だなー」
お前は嬢ちゃんの父親かと。
『ぶふっ』
居間に居合わせた中から、何人かの噴き出す音が洩れた。
「アチャ男のえろ親父ー」
ぶはっ。
ついでに栗毛の美少女からも野次が飛ばされた。さらに噴き出す音が増える。
具体的には、赤毛の美女や、金髪の美少女や、さっきまで切嗣を揺さぶっていた、黒髪の美少女などである。青い髪のランサーなどは、既に腹を抱えて腹筋と格闘中だ。声も出ないほど笑っているらしい。
ただし士郎だけは、アーチャーの正体を知っているため、白い髪の偉丈夫と、まっくろな髪の小柄な少女を、複雑な面持ちで見つめては、かける言葉を捜しあぐねている。
「誰がだ！」
当然、鋼色の眼光が、いわれない誹謗中傷にぎらつき、チートな巫女さんを睨みつけるも。
「だってナナちゃん取った」
「――」
日ごろは良く回る男の口が、珍しく止まる。
ゆうべ、けっきょく真言そっちのけで、彼らが七季と一緒に寝たのは事実である。
悪いとは思ったものの、彼女が記憶を飛ばしている間、遠ざけら

れていたために――七季の存在に――飢えていたものだから、つい自分に正直になったことは否定できない。
「だってナナちゃんのおっぱい取った」
「そういうことを公衆の面前で口走るのは淑女としてどうかと思うが！」
褐色の肌を、わかりにくく染めるアーチャーの、精悍な面貌を生温かく見守る面々は、
「否定はしないところが、やっぱりシロウなのね」
とイリヤスフィールのセリフに（衛宮士郎を除いて）、全力で同意したとか、しないとか。

アーチャーが黙り込んだところで、それまで大人しくうなだれていた七季が顔を上げ。
「ところで吸血鬼って、夜型じゃないんですか？」
そう切嗣にツッコミを入れたとたん。
『あ』
言いだしっぺの「ジゴロの神様」はおろか、彼の提案に、さしたる違和感を覚えなかった面々も、思わずポカンと口を開けたのは、余談である。

ともあれ。
「えー、それでは、ここらでちょっと、状況をまとめてみたいと思います。意見のある人は、挙手してくださいね」
場所は、ミネストローネとサンドイッチの昼食が終わり、いまはめいめいが、紅茶のカップを配られた衛宮邸の居間。
どこからか出した、ホワイトボードの側に陣取り、座布団に座る

七季が、なりゆきで司会を進めている。
「げんざい、この衛宮邸を拠点とする、私たちの陣営には、『アーチャー』、『セイバー』、『ランサー』、『バーサーカー』、『ライダー』の五騎が集結しています」
ホワイトボードにきゅきゅっと書き込まれるのは、「弓」「剣」「槍」「狂」「騎」の文字。
そこから少し離れた場所に、「暗」「魔」と二つの文字が書き加えられた。
「まー、よくぞ集めたっつーか」
「これでまだ、一騎も脱落していないとは……」
ランサーとバゼットが、呆れた声を洩らして、カップの紅茶をめいめいすする。
「残るは、『アサシン』と『キャスター』。これに関しては、山の中腹にある柳洞寺というお寺に、それらしいのがいる、と、プラタから報告が上がっています」
プラタは、アーチャーの使い魔である。あまりに目立つため、ふだんはメタルスライム八匹に分離しているのだが、液状に近い体を活かし、今回の聖杯戦争では、偵察役に回っていた。
「なっ！？」
がたっ。
そこで立ち上がりかけるのは、赤毛の少年だ。
柳洞寺に住む柳洞一成は、士郎の友人の一人なのである。
「衛宮君」
静かだけれど張りのある声で、少年をピシリと制した凛も、そのことは知っていた。
彼女が通う穂群原学園の、生徒会長である柳洞一成は、「ミス・パーフェクト」と名高い遠坂凛を、何故か目の敵にしている、珍しい少年だからだ。
決して素を見せない凛の、かぶっている猫を看破しているあたり、なかなか見る目はあると思うのだが、いっぽうで厄介なことには違

いない。
「……悪い」
腰を下ろした赤毛の少年は、そのあどけない童顔の、眉間にしわを寄せている。隣に座るセイバーが、心配そうにその横顔を見つめつつ、七季の進める話に耳を傾けた。
進行役の少女は、さざなみ立たない黒瑪瑙の瞳で、ふたたびホワイトボードに「円蔵山＝柳洞寺」と書き込む。
「続けます。
新都に張られた『糸』が――これは、新都の人間から生気を吸い上げる類のものですが――つながっていたのは、円蔵山と呼ばれる山でした。
正確には、その中腹にあるお寺……つまり、柳洞寺です。このことから、キャスターが柳洞寺を根城にしているのは、まず間違いないでしょう」
ホワイトボードに書き込まれた「新都」から伸びるライン。「円蔵山＝柳洞寺」とを結ぶ、その線の間にある空白に、七季は「糸」と書き加えた。
黒髪にふちどられた、あどけない少女の横顔を見つめつつ、士郎がぎりりと歯噛みする。
周囲の人間を巻き込まないために、聖杯戦争中は、学校を休むことにした少年だったが、もしも登校していれば、友人の変化がわかったのではないか、と考えてしまったが故だ。
「そして、柳洞寺の門前には、人外が一人――おそらくサーヴァントと思われる男が――門番のように立っているそうです。これは、偵察に出た、プラタからの報告でわかりました。
おそらくは、これが『アサシン』。見つかったプラタに直接攻撃したようですが、魔法……魔術を使う様子はなく、一定の距離を置くと、追いかけては来なかったそうです。
よっぽどマスターが臆病なのか、それとも行動範囲に制限でもあるのか……『アサシン』が、わざわざ門前で立ち尽くしているとい

うのも、おかしな話です」
何故なら「セイバー」「アーチャー」「ランサー」の三騎士に比べて、「アサシン」のステータス値は、かなり劣る。
スキル「気配遮断」を持つクラス「アサシン」の真骨頂は、その気配隠しを活かした、マスターの暗殺にこそあるのだから。
それが門前で立ちっぱなしなどとは――奇妙に過ぎる。
「あくまで推測ですが、行動範囲が、『令呪』か何かで縛られている可能性があります」
七季の指が、マジックペンで「アサシンに制限？」と新たに書き込んだ。
そこに、桜の隣から、長身のアイマスク美女が手を上げる。ラベンダー色の長い髪を持つライダーだ。
「以前、シンジの命で柳洞寺を偵察したことがあります。霊体化してのことですが……柳洞寺を出る男を見送る、見慣れない女性を確認しました。あれがおそらく『キャスター』ではないかと。
そのときには、まだ山門には、『アサシン』らしき影はありませんでした」
「ありがとうございます。つまり『アサシン』は、あとから連れてこられた……『キャスター』のマスターが、令呪を奪ったのか、それともマスターごと移動してきたのか、というところでしょうか」
「おそらくは」
ホワイトボードに「アサシンはあとから」と書き込む七季の言葉を受けて、ライダーが言葉少なに頷いた。
「綺礼の件がありますからね……」
かつて腕ごとランサーの令呪を奪われたバゼットが、苦い呟きをそこに落とした。
「教会には連絡したけど、新しい監督役が来るまでには、しばらくかかるわ。その間の隠蔽工作は、私がしなきゃならないんだけど」
そこに、兄弟子を失ったばかりの凛が、言葉を挟む。
「朝方、嬢ちゃんに頼まれて、あの胸クソ悪い教会に出向いちゃあ

みたが、金ぴかが暴れたにしちゃ、荒れてなかったぜ。
あれなら、学校とかいったか？あそこで、マコトやセイバーが暴れたあとの方が凄かったくらいだ」
「私としては助かったんだだけどね……いちおう」
偵察に出された、ランサーたるクー＝フーリンは、真紅の目をすがめて言い添える。そこに、頼んだツインテールの少女が、深い嘆息をこぼした。
つまり、槍兵と少女魔術師が抱いた懸念は。
「イリヤ？」
七季が「小聖杯」たる、銀髪の童女へと、確認のまなざしを投げかける。イリヤスフィールは、長い銀糸を払うように、優雅にかぶりを振った。
「来てないわ。つまり――アレはまだ、健在よ」
敗北し、討たれたサーヴァントの魂は、「小聖杯」へと集められる。この場合は、イリヤスフィールだ。
彼女がギルガメッシュの魂を受け取っていないという以上、あの尊大な英雄王の存在は、いまだ消えていないということだった。
「対策は……早めにしておくべきでしょうね」
つまり、「キャスター」と「アサシン」がギルガメッシュに討たれないうちに、確保するということだ。
「吸血姫にケンカ売って、生き延びてるっていうだけでも規格外よ。ああもう、厄介ね」
凛が、いささかうんざりした響きの声を洩らす。
「見つからないものを気にしてもしょうがないので、あのお兄さんのことは、いったん脇におきます」
そう、さっくり片づけた七季は、ホワイトボードに新しく書き込んだ。
『大聖杯の解体』

「差しあたって、当面の目的はコレです」
トン、と少女が握る指示棒――もとい、ストレージデバイス「ノア」が、大きく書かれた文字を指し示す。
「そのためには、時計塔の講師であるロード・エルメロイ二世――もとい、ウェイバー＝ベルベット。
そして冬木の大聖杯降臨儀式に関わった宝石翁――キシュア＝ゼルレッチ＝シュバインオーグ。
この二人を立ち合わせ、態のいい弾除けになってもらおうかなって」
にへらん。
続けて「ジゴロの神様」がのたまった、とんでもないセリフに、（魔術師としては世間知らずな）士郎を除く、魔術師たちが絶叫したのは、いうまでもない。
昼下がりの衛宮邸は、まだまだ静かになりそうもなかった。

#326　コネクト　その1（後書き）

あとがき

＞タイトルの「コネクト」は「つなぐ、結合する、接続する」「連絡する」「関係を持つ、関連する」の意。

思ったより長引いたので、いったん切ります。話がなかなか進まなくて申し訳ない（汗）。

#327　コネクト　その2

「簡単な政治工作ってところだよ。
ウェイバー＝ベルベットは、前回――ようするに第四次聖杯戦争の参加者だ。時計塔の関係者の中でも、聖杯戦争への興味は一段と強いはずだし、上手くすれば、取り引きで味方に引き込める。
何より――『時計塔』の講師である彼の立場は、小さくない。彼の弟子になって『王冠（グランド）』階位を得なかった者はいないし、彼が教え子たちを集めれば『時計塔』の勢力図が変わるとまで言われている。
それなのに、権力欲は薄い人間のようでね。さしあたっては、凛ちゃんが『時計塔』の関係者と顔を繋ぐにも、彼はうってつけの人材だよ。君ならいずれ、あそこで学ぶつもりだろうし。
ま、日本も日本人も大嫌いって話だから、本人が気に入るかどうかは、賭けだけど」
とっくに死んだはずの切嗣が、何故ここまで詳しいのかと、凛をはじめ、魔術師たちはそろって唖然とする。
「……『時計塔』の内情については……私から、キリツグに少し説明はしたわ」
通称を「協会」と呼ばれる「魔術協会」の総本部。それが「時計塔」である。
「魔術協会」は、魔術を管理し、隠匿し、その発展を使命とする。そのため、彼らは研究機関を持ち、魔術犯罪の防止する為の法律も敷いている。
ただし、あくまで魔術の露呈を防ぐ為の物であるため、魔術の研究過程で、人間社会に多大な被害をもたらしても処罰はされないとされる。魔術の露呈をした場合のみ処罰されるということで、一般人からしたら迷惑このうえない話だ。

切嗣が、かつて「魔術協会と関わるな」と士郎に言い残した理由のひとつとしては、この点が、正義感の強い養い子にとって、反発しか生まないだろうという懸念を抱いたからでもある。

さておき。

「アインツベルンは、『時計塔』とは距離を取っているけど、そのぶん警戒するために、末端の縁者をもぐりこませてはいるから。現に、この聖杯戦争にだって、『時計塔』から人員は派遣されたでしょ？」

ちらり、とルビーのまなざしが、赤毛の麗人を向いた。

イリヤスフィール言われて、赤毛の散りかかるシャープな美貌を、わずかにしかめたバゼットこそ、「魔術協会」の「封印指定の執行者」。その内情を知らないはずがなかった。

魔術師たちの多くは、神秘を独占したがる傾向にある。

冬木の聖杯戦争は、マスターとなる条件が「冬木の大聖杯に選ばれること」というあいまいな要素のため、時計塔および魔術師協会は、あまり表立って手出しをする気配はない。

ただしそれは、前例があるからだ。

ケイネス＝エルメロイ＝アーチボルト――天才と誉れ高い、時計塔の一級講師であった男が、第四次聖杯戦争において、無様に敗退。さらには婚約者ともども死亡という、無残な結果に終わった。

しかも、街ひとつを飲み込む火災を引き起こし、あわや神秘を漏洩するかという、忌むべき事態に陥ったことが、最大の理由といえるだろう。

それでも、英霊の降臨という、現代でも大きな神秘は、魔術師たちの目を惹かずに入られない。

万能の願望機。

それが、いかなる神秘を引き起こすのか。

「根源の渦」に至るための手がかりを、少しでも得ようとする魔術師であれば、無視することはできないだろう。

魔術師の中には「たかが極東（イナカ）の魔術儀式」と憎まれ口をたたくものもいる。

だが、それは自分にはなしえない神秘への嫉妬も含まれているのだ。

冬木の「大聖杯」は、地脈に設置された、わりあい大がかりな術式である。複数の堕ちた霊脈を擁する霊地を必要とし、この地に根を下ろした三つの魔術師の家門が、優先して参加者（マスター）の権利を得る。

そして「冬木の聖杯」は、魔法使いの一人――「宝石翁」キシュア＝ゼルレッチ＝シュバインオーグも、かつて手を加えたという、貴重なもの。

そのことも手伝って、この神秘を実現する「聖杯」を、おいそれと移動することは難しい。

解析も、またいっそう困難だ。

なにしろ、自分たちでその神秘を、ほぼ独占してきた魔術師の御三家がいるのに、むざむざと奪わせるようなことがあるだろうか？

答えは「否」である。

そのうえ、その三つの家門それぞれに、他家には隠した秘密やら、ルールの抜け穴やらがあったりするものだから、いっそうややこしい。

そんなわけだから、冬木の「聖杯」が、まともに起動したのは、つい十年前だけ――という次第なのだった。

「共同研究って……ほんっとに難しいんですねぇ……」

ホワイトボードの側に座ったまま、切嗣の説明を聞いて、しみじみとした声を洩らす黒髪の少女。そんな七季の横で、赤毛の少年が、琥珀の目を白黒させている。

まっすぐで正義感の強い「魔術使い」――もとい、「正義の味方」見習いである士郎に、どろどろとした魔術師たちの権謀術数など、知るよしもないことである。

「ま、ね」

そしてトリップ巫女さんがこぼす呟きに、いまさらながら狩衣姿の男が、その優しげな面（おもて）に苦笑をにじませた。

――士郎が理解できなくとも良い……むしろ、理解する必要がない環境のままで暮らせるのなら……安心できるんだけどなあ。

現状、イリヤスフィールを託すことができるのは、士郎とセイバーくらい。

そしてイリヤスフィールをも含め、三人ともが、知られてはまずい魔術的な秘密を抱えて暮らさなければならないときている。

――けど、大きな士郎から聞いた話だと……士郎を魔術師として大成させてはいけないね。

「エミヤシロウ」が抱える、唯一の魔術「固有結界」。ひそかにその内容を打ち明けられた衛宮切嗣は、魔術師として絶句するしかなかった。

同時に、養い子のたどるだろう、茨の道すらも想像できてしまう。

そのために彼は――士郎とイリヤスフィールの保護者として、打てる限りの手を打たなければならないのだ。

管理者（セカンドオーナー）に恩を売り、つけ込む隙を与えず、なおかつ士郎を、「協会」の餌食にしないための手段を。

「宝石翁だけど、仮にも現存する『魔法使い』の一人だ。彼が出張るなら、おいそれと魔術協会も文句は言えないと思う。なにしろ、『冬木の聖杯』を設置した本人なんだからね」

ゼルレッチじしんが、「聖杯」の解体に関わったのであれば、彼が自分のものを解体した、という大義名分ができるわけだ。

「それと、これは僕の手札でもあるんだ」

切嗣の黒い双眸が、穏やかだけれど揺らぎない光を湛えて、少女の青い目を見据える。

「凛ちゃん。ゼルレッチ翁と会わせる代わりに、僕たち衛宮家のものが滞納してきた『上納金』をチャラにしてもらえないかな？」

「んなっ！？」

切嗣の申し出に、思わずツインテールの少女が眉を跳ね上げた。ツリ目ぎみの、凛の青い双眸が、まんまるくなって無精ひげの男を映していた。

「あら」

かたや、父親の言葉にルビー色の目をぱちりと瞬かせるのは、銀髪の童女だ。

士郎の自由を確保するために、その借金の肩代わりをすると申し出たイリヤスフィール。けれども、まだ凛への――遠坂家に対する支払いは済んでいない。

何故なら、彼女は箱入りのお嬢様である。イリヤスフィールじしんが、現金やカードを持ち歩いているわけではなく、そういった支払いは、ほとんどメイドのセラの仕事であるからだ。

イリヤスフィールは、お金に不自由するような身の上ではなかったが、自分で自由に使えるかというと、それはまた別の話であった。

もっとも、その手の算段は、世間の荒波をくぐってきた切嗣に相談して、おおよその見通しはついている。

傭兵として、「魔術使い」として、かなり世間ずれしていた男は、愛娘たちの未来のために、その知識を出し惜しみしなかった。

『いまはまだ、彼女たちを側に置かない方が良い』

セラとリズを衛宮邸に呼び寄せていないのも、父のアドバイスによるものだ。

ホムンクルスである以上、彼女たちを「造った側」が、何か仕込んでいないとは限らない。イリヤスフィールが知らなくとも、アインツベルンに不都合が起こる事態であれば、通報することは考えられる。

この時点で説明してしまえば、アインツベルンの本家に情報が洩れるかもしれないと、切嗣が懸念したためだった。

そんな彼の言葉に、イリヤスフィールは頷いた。
アインツベルンの魔術師であるが故に、その家を知る童女には、父の仮定が、否定できなかったのだ。
――セラたちには、聖杯を解体するまで――ギリギリまで伏せておく方が無難だわ。
どんなにいとけなく見えたとしても、冷静に計算のできるイリヤスフィールは魔術師であり、また「魔術師殺し」として名を馳せた、父親に似たのかもしれなかった。

「遠坂は『宝石』の系譜――でも、大師父と仰ぐ魔法使いに、君は直接、会ったことはないはずだ。あの人は、平行世界を旅していて、めったに魔術師の前には姿を現さないというしね」
聞くものの耳に染み入るような、切開の穏やかな声は、けれども、にこやかな見ためとは裏腹に、相手の弱点にもぐりこもうと、かま首をもたげる蛇のようだ。
「策士は、一つの策で、複数の効果を狙うっていうけど……」
ありゃりゃ。
七季がまっくろな目をちらりと向ければ。
「……だ、大師父が、必ず来るとは限らないじゃない！」
そこには、現存する魔法使いの一人に会うチャンスと、宝石魔術を支える収入との間で揺れ動いている、少女魔術師の姿があった。
「まあ、そのときは仕方ないけど……可能性は高いんじゃないかな？」
ちらり。
男の黒いまなざしが撫でるのは、人外ホイホイな異邦の巫女――もとい、七季と。
「真言ちゃん、たしかあのひとと知り合いだろ？」
もうひとりの巫女、ふわふわ栗毛をひとつにくくった真言である。

「ゼル爺？　うん。何度か顔を合わせたことあるよ。飲み友だし」
けろりん。
おのが「神使（しんし）」たる後輩を、よその世界に「修行」に出すだけでは飽き足らず、みずからも異世界にあちこち顔を出す、チートな巫女さんの発言に、今度こそ、凛の口がぽかんと開いた。
「飲み友って……」
バゼットも絶句する単語である。
魔術師でもなく、異世界の「神妻」である真言が、どうしてゼルレッチと知己なのか。
そりゃあ驚きもしよう。
「だよね」
「よその世界を渡ってると、ときどき顔合わせたりするんだよねー」
「ああ、ジッパーで移動してますもんね、先輩」
無精ひげを生やした「ジゴロの神様」と、琥珀の目を遠くに向ける龍神の「神妻」、そして彼女の「神使（しんし）」である黒髪ポニテの巫女さん少女が、そろって、ほのぼのとしゃべりあう。
「もうマコトは『理不神（りふじん）』で良いんじゃね？」
「誰が上手いこと言えと」
呟くまっくろにゃんこに、七季のデバイスである「黎明」が、指輪の菫青石（アイオライト）を明滅させながらツッコミを入れる。
「……そろそろ凛が気の毒だから、いったん止めてやってくれないか」
ためいきをつきつつ、そう口を挟むのは、まだしも魔術師の感性に理解がある、白い髪の偉丈夫だ。
頭を抱えるツインテール少女を、大きな手のひらでポンポンとなだめ、アーチャーはチートな巫女さんへと言及する。
「あと真言。どうせなら、七季ではなく、君じしんが宝石翁を引っ張ってくれれば良いだろう？
うちのマスターをエサにするのは止めてくれ。下手に気に入られて弟子にでもされたらかなわんからな」

何しろ「彼の弟子になる」＝「ほぼ確実に廃人になる」という公式が、魔術師たちの間では、まことしやかにささやかれるレベルの人物なのだ。おまけに死徒だし。

人外ホイホイな体質を持つ少女を、マスターとする男は、少しでも七季に近づける危険を下げたいらしい。

「マコトが宝石翁を連れて来ることができるって前提のあたり、アーチャーもしっかりマコトたちに染まってると思うわよ？」

銀髪の童女から、こちらもきっちりツッコミを入れられていたことは余談である。

「なあイリヤ。『宝石翁』って誰なんだ？」

「……シロウにもわかりやすく説明すると、冬木における最初の『大聖杯』降臨の見届け人を勤めた、現存する『魔法使い』の一人で、第二魔法の使い手。

平行世界をのんきに旅行しながら、トラブルに顔を出して、関わった人間を破滅させたりしているっていうのが、通説ね」

「それって凄くヤバいひとなんじゃ……なあ、イリヤ」

「いちおう言っておくと、『魔法』っていうのは、その時代の文明の力では、いかに資金や時間を注ぎ込もうとも、絶対に実現不可能な「結果」をもたらすもののことよ。

私の家――アインツベルンも、第三魔法『魂の物質化』を目指しているわ。かつて、アインツベルンが到達したけど、現在は失われたとされているモノで、これも『魔法』の一つよ。

これに対して『魔術』は、一見ありえない奇跡に見えても、「結果」という一点においては、別の方法で代用ができるモノ。

『火を燃やす』という現象は、いまならライターでも代用できるでしょう？　そういうモノよ」

「なるほど」

「あと、『宝石翁』についてだけど、『魔法使い』にしてはやたらとアクティブで、魔術師としてちょくちょく弟子をとったりしているらしいの。

でも正直、彼の弟子になるってことは、成功か、破滅か、その二択のみ。だからシロウは、近づいちゃ駄目よ？」

「なにそれこわい」

などと、仲良し衛宮姉弟の「簡単☆魔術講座」がつつがなく終わったころ。

#327　コネクト　その2（後書き）

あとがき

＞引き続き「コネクト」。てか伸びすぎだ、コレ……（汗）。

長くなったので、もっぺんぶった切りです。あすも更新します！

現在進行形で書いておりまする。おーわーらーなーいーぃ。

「理不神」は、読み手さまからいただいたコメントをネタにしました（待て）。

#328　コネクト　その3

「ここまでで質問がある人ー？」
手を上げてくださいねー。
のんびりとした七季のソプラノに、ちらほらと大小の手が上がる。
「はい、まずはバゼットさん」
「仮に……仮に、ですよ？
宝石翁や、ロード・エルメロイ二世を、冬木まで招くことができたとして――彼らが協力してくれるとは、限らないのでは？」
赤毛の麗人は、その美しい顔を引き締めて、ひどくもっともな疑問を投げかけた。
一筋縄ではいかないのが、魔術師という人種だ。その異能者の中でも、最高峰に位置する『魔法使い』――そんな存在が、はたしてやすやすと手をかしてくれるだろうか。
――こちらの思惑通りに動くとは、とても楽観できない。
「たしかに。その点については、きりちゃん、どうですか？」
くりんと七季が、黒いしっぽのようなポニーテールを翻して話を振れば。
「うん。ウェイバー＝ベルベット――面倒だからウェイバーで良いか――についての切り札は、伏せさせてもらうけど、取り引きできる可能性は高い、とだけ言っておこうかな。
あと宝石翁については……気まぐれなひとだけど、わりあい上手くいくと思うよ。飲み友の真言ちゃんいるし、サーヴァントが七騎いる状態での聖杯戦争終結、なんて、面白がりそうじゃないか」
答えになっていないような切嗣の返答に、しかしバゼットはそれ以上ツッコめなかった。
「あとまあ、これは個人的なことなんだけど……僕もいちおう、知

り合いなんだよね、宝石翁」
　へろん、とこぼれた、かつての「魔術師殺し」のセリフに、その場のほとんどが口をそろえて訊き返す。
『はいぃ！？』
「女性を紹介したことがあるんだ」
「これが『ジゴロの神様』の実力ということか……！」
　何やら黒猫姿のまんまで、リドルが阿呆な感心の仕方をしている。
いっぽうアーチャーは、まがりなりにも自分が憧れ、その背中を追いかけた養父のアレな姿に、凛と仲良く頭を抱え始めた。
　いっぽう、赤毛の少年の方も、銀髪の義姉と顔を突き合わせて話している。わりと真顔だ。
「イリヤ、俺ちょっとじいさん殴りたくなってきた」
「安心してシロウ。私もだから。あとでバーサーカーにやってもらいましょ」
「酷いよイリヤ！？」
「シロウ、マスターの代わりに私も殴ってきます」
「セイバーまで！？」
「えー、親子漫才はほっといて、次の質問ー。はいランサーさん」
　銀色の指示棒そっくりなデバイス「ノア」をマイク代わりにかまえ、黒髪の少女が、まっすぐ手を伸ばした青い髪の槍兵へと、さくっと話を移す。
「まー『聖杯』の解体は良いんだよ。そっちは魔術師の領分だしな。好きにすりゃ良いだろうさ。
　俺が聞きたいのは、何でサーヴァントをこんなに残してるのか、ってことなんだが」
　本来であれば、英霊たるサーヴァントと、魔術師とが組んで、殺しあうのが「聖杯戦争」である。ランサーの疑問は、当たり前といえば当たり前だ。
　胡坐をかいていた姿勢から、片膝を立てた格好のクー＝フーリンは、けだるげに真紅の目を細めて問いかける。

「んーと。イリヤー。話しても良ーい？」
「良いわよー」
あとキャスター&アサシン戦だけだし。
ひらひらと振られる、小さな白い手。それに「らじゃ」と黒髪の少女も手を上げてみせる。
バーサーカーから制裁決定の、ちょっぴり悲惨な切嗣そっちのけで、のどかなやりとりを交わす七季とイリヤスフィール。まったく似ていないが、姉妹か友人のようである。
「イリヤは今回、『聖杯戦争』の『小聖杯（うつわ）』として調整されてるんで、下手にサーヴァントお亡くなりだと、イリヤの中に魂が入ってきちゃうから。
そうなると、もちろんイリヤに不具合が出てくるんで、どっちかってーとイリヤのためです。まあ、仮に突っ込まれても、引っこ抜いて私の中に移しちゃえばいいんですけど」
「いまさらっと物凄いこと言いましたよね！？」
今度ツッコんだのはバゼットである。
まだ浴衣に丹前姿の西洋美女は、茜色の目を見開くと、めいっぱい声を張り上げた。
「あ、協会にはオフレコでお願いしまーす」
「ノリかるっ！？」
「じゃ、暗示とセルフギアス・スクロールの二択で」
「いきなり重い！」
いや当たり前なんですけど！
そこに、いったん席を外していたディルムッドとリインフォースがキッチンから戻ってきた。
「お茶をどうぞ」
「新しく沸かしてきましたので」
アーチャーほどではないにしろ、ちゃきちゃきとかいがいしく動く、わんこっぽい主従である。
「あ、どうも」

「すみません……」
「ありがとー。ディル、リインー」
『どういたしまして』
顔を上げるバゼット、つい頭を下げる家主の士郎、そして紅茶を新しく注がれたカップを受け取る七季と、反応はさまざまだ。
「凛、紅茶でも飲んで、落ち着きたまえ」
「……そうするわ」
わりとマトモな魔術師の部類に入る、剣製の魔術師と、宝石の魔術師が、湯気の立つ紅茶を黙ってすすった。
そうしていると、こちらもこちらで、年の離れた兄妹に見えないこともない。ためいきのタイミングまで同じである。
『ハァ……』
紅茶で喉を潤した、ポニテールの少女は、ふたたび説明に戻った。
「さて、ランサーさんの質問に対する答えの、続きです。
人外だし、強いし、わりと応用ききそうなんで、先輩はサーヴァントを使い魔に加えて、お持ち帰りする予定だそうです。けど……現時点で、ここに残留希望者って、どれくらいいますかー？」
ぶぴ。
噴いた。
その場に居合わせたサーヴァントのほとんどが紅茶を噴き出した。ついでに常識のある魔術師の少女も紅茶でむせた。
かろうじて、それを免れたのは、味覚もないからと、紅茶を遠慮していたバーサーカーくらいのものである。
「けひゅんけひゅん……はぁ、びっくりした。真言ですもんね、しょうがないわよね！」
そろそろ慣らされてきたのか、凛がやけっぱちぎみに笑っている。
「だ、大丈夫か、遠坂？」
「ええまあ何とかね！
私だって欲しいもの、使い魔にサーヴァント！」
――でも。

「真言は……無理よ、ねえ」
チートっぷりはサーヴァントも超えそうだけど。
真言が、ただの英霊の分霊（コピー）であれば、手元に置けただろうが――
彼女は、「神妻」といえども、生身の人間である。
じーっと、色々な意味で規格外のサーヴァント「アーチャー」である栗毛の美少女を見つめる凛だったが、さすがにこれは自分では御せないだろうと判断できた。
「先輩は無理ですよー」
あげません。
にっこり、ぺっかり、一分の隙もない笑顔でのたまう七季のソプラノに、凛の青い目が、あさっての方向をさまよう。
てらいも邪気もない、いってしまえば「天使の微笑み」なのに、圧迫感（プレッシャー）がハンパない。
「よ、ねー」
はいはい、わかってるわよ。
凛もわかってはいるのだ。理性では。
けれどもサーヴァント、英霊というのは、使い魔の中でも最上級。本来であれば、たかだか人間の魔術師が、お目にかかることすら望外のことなのだ。
それが「聖杯戦争」という大魔術の儀式で、とはいえ、七騎も転がっていれば――欲しくなるのは人情というものである。
だが、凛は魔術師である。相手が自分の敵う存在かどうかくらいは、冷静に判断できる。
真言や七季から従者を奪うことは――生身でセイバーを倒すくらい、無理なことだった。
「あ、あの……私は、ここに残りたい、です」
かたや、小さく手を上げた、金糸の髪の少女。
「最優」と名高いクラス「セイバー」のサーヴァントは、その白い頬を染めながらも、おずおずと声を上げた。
「え」

可憐な騎士王の申し出に、そのマスターである士郎が、琥珀の目を丸くするも、応じる少女の黒い目は、ほんわりと微笑ましげに細くなった。

「はい。ではセイバー嬢は残留希望、と。他ないですかー？」

「バーサーカーはうちの執事にするわっ」

元気に声を上げてくれたのは、アインツベルンのロリータ魔術師、もとい、イリヤスフィールである。

「バーサーカーを執事ってオイ。チャレンジャーにもほどがあるだろ」

いちおうルーンも使える、魔術師の顔も持っているケルトの英雄が、思わず銀髪の童女にツッコミを入れると。

「あ、ランサーさんはたぶん強制連行です。先輩に負けたんで」

そんなセリフが七季から飛んできた。

「いや良いけど。連行ってどこに」

「異世界です」

きぱっ。

「まあ異世界といっても、この現代社会と似た世界だ」

ランサーに向けられた、七季からの即答に、銀髪の美女――リインフォースがフォローを挟む。

「ただし、国家資格を持つ霊能者が、『ＧＳ（ゴーストスイーパー）』として活躍し、日の当たる場所で、わりと堂々と商売をしている世界だがな」

ついでに紅茶を飲み終えたアーチャーも言葉を添えた。

「うちのマスターや真言は、その中でも霊的災害をあつかう役所で、除霊を担当している霊能者だ。故に、そのテの戦闘が多い。戦いに長けたサーヴァントは、役に立つと見越してのスカウトだな」

「ほお」

「へえ……異能者にずいぶん優しいのね？」

秘匿が基本の魔術師である凛は、口元をティッシュでぬぐってから、相槌を打つ。

「そうでもないですよー。こっちの世界は、霊能者とは別にエスパ

ーもいますし。異能で犯罪を引き起こす人間だって、あとを絶ちません。

だからこそ、反社会的な行動を起こす異能者を捕えるための法律があるし、専門の異能者を集めた役所が存在するんです。そうでないと、けっきょく爪弾きにされて、狩られるのがオチですからねー。

まあ霊能者は、昔から権力者の側と協力してきたんで、それなりに歴史もツテもコネもあるんですけど。

逆に、近年になって台頭してきたエスパーを敵視する、非能力者のテロ組織なんかもあって、問題は尽きませんよ」

何でもない口調で、へろりと七季がのたまった言葉に、士郎も凛も、ぎょっと大きな目を開いて我が耳を疑うように呟いた。

「え……エスパーまでいるのか……？」

「エスパーを狙うテロ組織、ですか……映画のストーリーみたいですねえ……」

話を聞いていた桜も、あっけに取られた面持ちで声を洩らす。

「いますよ。ただまあ、一部の霊能者と、エスパーの能力分類的にかぶるところもあって、そのへんも折り合いが難しいんですけどね。ま、これは完全に余談です」

「なーんか面白そうな世界だな、オイ」

ランサーが、その野性味のある端正な顔を、きらきらとかがやかせて身を乗り出す。

もっとも、英霊が五人――アーチャーとディルムッドを含めれば、実質、七人――までそろっている衛宮邸も、じゅうぶんにとんでもない空間であることは、いうまでもない。

「それは着いてのお楽しみ、ってことで」

はい、ライダーさん。

七季に促された、その長身にも匹敵するロングヘアの美女は片手を上げたまま、不安そうな声音で、おのが希望を口にした。

「私は……できれば、桜の側にいたいです。ですが、私の存在で、桜が狙われることになったりはしませんか？」

「ライダー……！」
堕とされ、怪物にされた、かつての女神は、神の眷属をたやすく信じることはできない。
何故ならメドゥーサにとって、神は身勝手なものであるからだ。
そして魔性である自分は、じゅうぶん狙われる存在であることも知っている。だから彼女は、自分よりもまず、マスターである桜を案じて問いかけたのだった。
「それはもちろん」

「人生設計しだいですねぇ」
「え？」
英霊には聞きなれない単語を持ち出されて、こきり、とライダーは首をかしげた。
――じんせいせっけい？
「人生の、設計、ですか？」
よくわかりません。
本気で不思議そうな声音を紡ぐ、神話の美女は、まるで学校に通う女生徒のように、手を中途半端に上げたまま、黒髪の少女へと気配で問いかけた。
いっぽう七季は、あどけない面輪に、大人びた色の落ち着きを乗せる。
それは、ディルムッドの歌声を広めたときのような、ちょっとイタズラっけの混じった、それでいて真摯な表情だ。
「いうなれば、人生の目的と選択肢。
そうですね……ライダーさんの人生の目的を聞いてみましょうか」
「目的……桜の、人生を見守りたい、です」
「ライダー」
ためらいがちに願いを口にする人外の美女に、菫色の髪の少女が、

頬を緩めて寄り添っている。
兄との絆が破綻して以来、たとえ人ならぬものだとしても、ライダーは、士郎以外に始めて桜を案じてくれた存在なのだ。
そんな主従の様子を見て、かるく頷いた七季は、まるで教師のように淡々とした口調で説明していく。
「では、具体的な選択肢を挙げてみましょうか。
霊体化したまま、ただ本当にずっと見守るだけなのか。
それとも、人間のふりをして、家族のように過ごすのか。
人外の力すらも駆使して、ありとあらゆる危険を、間桐さんから遠ざけるのか。
そもそも、間桐さんが結婚した場合に、その伴侶に秘密を打ち明けるのか、隠すのか。
簡単に思いつくだけで、けっこうな選択肢があるとは思いませんか？」
「――」
考え込むライダーと、心配そうに彼女を見つめる桜に、黒髪の少女は、さらに声をかける。
「必ずしも、間桐さんが結婚するとは限りません。
ですが、あなたが間桐さんの人生に寄り添って生きるなら、間桐さんの人生は、彼女だけでなく、ライダーさんも含めた、ふたりのものになるはずです。
そして、間桐さんが人生の伴侶を得るのなら――三人分の人生を、共有し、考えるということになります」
七季が持ち出した「結婚」という単語に、花の名を持つ少女は、ぱあっと桜色にその頬を染める。
「け、結婚、ですか」
「ただし……間桐さんがこの先、魔術師として生きるのか、魔術と完全に決別して、表の人間として生きるのかで、ライダーさんのあつかいは、かなり違うことになるでしょう」
その言葉に、ハッと桜じしんはおろか、家名こそ違えど、血を同

じくする凛も、その端正な顔を厳しく引き締める。
「そうね」
「魔術師が、使い魔を持っていることは、大して珍しいことではないでしょう。
サーヴァントという、規格外のランクにしても、それを維持する魔力があれば、魔術師としてのステイタスにこそなるはずです。ですが」
そこから先を、「管理者（セカンドオーナー）」である生粋の魔術師――ツインテールの少女が引き取る。
「表の人間として生きるのなら、サーヴァントの保持は容認できないわ。一般人が、サーヴァントという『神秘』を保持するのは、危険なことだし、『協会』にも目をつけられる」
――あくまで見つかれば、の話ではあるけれど。
「でしょうね。それを隠蔽するには、魔術の力が必要でしょうし。それに老化しないサーヴァントは目立つはずです。メイクや幻術でごまかすなり何なり、細工をしなければ、周囲に怪しまれる。基本的なことですけどね」
ふたたび七季が口を開き、さりげなくつけ加えた。
だが、逆に言えば、異能を使わず、目立たず、外見に気を配れば、さほど問題は起きないはずなのだ。
凛という、桜の身内である「管理者（セカンドオーナー）」がいる限りは。
七季の視線に、遠坂の後継者である少女は、難しい顔を崩さなかった。
問題はそこなのだ。
――私が共犯になるのは、良い。
凛はけっきょく、妹を見捨てられないのだから。
でも。
卒業後、凛はロンドンにある「時計塔」――魔術師たちの、最高学府に進学するつもりなのだ。
つまりその間、彼女は冬木を空けることになる。

凛の縄張りであることに間違いはないのだが――まかり間違って、隠したライダーの存在が、部外者に見つかったりすると、いっきに彼女の立場が悪くなることもありえる。

ようするに、桜が魔術師か否かで、ずいぶんと対応が変わることになるのだが。

「桜――魔術師として訊くわ。あなた、魔術師になるつもりなの？」

「え？」

思いがけないことを言われた、といわんばかりの、面食らった表情になる、ロングヘアの少女は、一つ上の少女と、ライダーの美貌を見比べては、きょときょととしている。

――駄目だろうな。

ふと凛は、しぜんに思いを巡らせる。

――桜は、優しい子だから。

魔術師とは、業の深い道だ。我が子を苦しめると知りながら、おのが魔術を継承させ、遠く果てない「根源への渦」へと到達することを目指すもの。

受け継ぐ魔術刻印の、拒否反応を抑えるために、毒に近い抑制薬を調合し、飲み続け、家門の魔術を少しでも進めようとあがき続ける、求道の徒。

かつて幼い士郎の住んでいた地を焼いたのは、遠坂も携わっていた「聖杯」による呪詛の泥。

その罪すらも糧とする――魔術師の業の深さときたら。

犠牲にしてきたものがあるからこそ、それを無駄にすることは許されない。逃げる自分は、もっと許せない。

――だって私は、「遠坂凛」だもの。

「間桐の当主、臓硯は、もういないの。七地さんが――桜（あなた）の中にひそんでいた、臓硯の魂を除霊したから。もう、あなたは自由なのよ」

間桐の魔術は、ここで絶えるのだ。

#328　コネクト　その3（後書き）

あとがき

＞そういえば、臓硯の成仏バレ、やってなかったなと思い出して（をい）。

ホロウだと、桜も魔術をマトモに使ってましたけど、この話では、彼女じしんが魔術師になる必要性は薄いかなー、とも思うんですよね。

体も人形のものに挿げ替える予定ですし。魔術の品との関わりは断ち切れないとしても。

彼女は、士郎が側にいるのなら、時計塔を目指すようなこともないんじゃないかと。

虚数魔術を学習しなければ、影の触手も使えないので、わりと一般人よりになるんですが。

桜を魔術師よりにするのか、そうでないのか、よろしければご意見をいただけるとありがたいです。

ちなみに、桜が魔術の道に進む場合、はっちゃけ爺さんか、封印指定の人形師の弟子になるルートしか考えつきません（笑）。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5416o/

にわか巫女さん異世界道中記

2011年11月28日02時47分発行